

魔法少女&仮面ライダー育成計画 ～Episode of Mirror Rider～

スターダストライダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女の子に大人気と評される『魔法少女育成計画』

反対に、男の子から絶大な人気を博している『仮面ライダー育成計画』

1年ほど前に同じメーカーから配信された、それらのゲームアプリが若い年齢層で大流行する中、大合併により港湾都市と化したN市では奇妙な噂が広まっていた。

『魔法少女育成計画』で遊び続けると本物の魔法少女に、『仮面ライダー育成計画』で遊び続けると本物の仮面ライダーに、何万人に1人の確率でなれる」

それを証明するかのように、各地で頻繁に目撃されるようになった、魔法少女や仮面ライダー。

そしてある日、魔法少女に憧れ続けた少女と、毎日を退屈に思いながら過ごしていた少年が、新たな戦士として覚醒する。

人助けやモンスター退治を進めるうちに、やがて2人は出会い、様々な同胞と交流を深めていくが、そんな平穏な日々は、無慈悲なゲームの開始とともに、突如として崩れ去る。

生き残りをかけた、16人の魔法少女と、16人の仮面ライダー。

今、愛と信頼が試される、過酷なゲームが始まる！

「戦わなければ生き残れない！」

※この小説は「仮面ライダー龍騎」と「魔法少女育成計画」のクロスオーバー作品です。魔法少女育成計画に関しては最近読み始めたばかりなので、原作知識はあまりない方です。誤字脱字も多いかと思われると思いますが、何卒温かい目で見てください。ご意見、ご感想もドシドシお待ちしております！

目次

設定集	く仮面ライダーサイドく	(オリキャラも含む)	1
設定集	く魔法少女サイドく		14
設定集	くSURVIVEく		23
プロローグ			30
1.	大地の退屈な日常		37
2.	変身！ その名は「九尾」		50
3.	白き魔法少女		64
4.	再会は反転世界にて		75
5.	16人目のライダー誕生		88
6.	戦う意志		101
7.	幼馴染みの秘密!?!?		112
8.	変わらないモノ		126
9.	チャット会に参加しよう!		138
10.	親睦 そしてチーム結成		145
11.	N市の狂者		157
12.	恩師との再会		174
13.	メカニツクな奴ら		187
14.	お祭り騒ぎ		202
15.	女騎士は悩む (前編)		223
16.	女騎士は悩む (後編)		239
17.	重大発表		252
18.	パートナーシステム		260
19.	人気を得る方法		271
20.	夢の中での奮闘		288

21.	最初の脱落者	297
22.	永遠の眠りへ	306
23.	生死をかけたゲーム	314
24.	バージョンアツプ	326
25.	強奪作戦	334
26.	大乱闘勃発	344
27.	脅威の絶対服従	355
28.	援軍の登場	365
29.	奪われたキャンデー	378
30.	生きるという事は……	387
31.	新たな同盟	403
32.	信頼関係は大事	415
33.	バレた裏切り	428
34.	叶えなかった願いは儚く散る……	437
35.	思わぬ再会……?	449
36.	交渉決裂	463
37.	アンティークショップの怪	482
38.	深まる謎	494
39.	シザースの正体	505
40.	偽りの正義	516
41.	金儲けにも色々事情がある	538
42.	騎士道の誇りにかけて	557
43.	黄金のライダー	571
44.	ラ・ピュセル、死す……!??	586
45.	砕かれかける夢	597

46.	暗躍の陰	606
47.	悲劇の襲来	613
48.	慟哭の雨	629
49.	悲しみと憎しみと懐かしき思い出	642
50.	激レアアイテム	652
51.	白と黒	671
52.	ゾンビvsガンマン	684
53.	黒き魔法少女	696
54.	届かぬ手	707
55.	介入者	720
56.	白鳥の想い	735
57.	悲恋の愛	749
58.	閑話休題	769
59.	龍騎、決断する	779
60.	龍騎、迷う	786
61.	龍騎、パートナーの過去を知る	797
62.	次に脱落するのは……	813
63.	受け継がれたライア	821
64.	新たなるレアアイテム	834
65.	嘆きと決意	839
66.	運命が変わる瞬間(とき)	847
67.	姉の復讐 サバイブの力	866
68.	女騎士、復活	878
69.	ゲームを盛り上げよう!	888
70.	情報収集	898

71.	危険なお誘い	909
72.	白狐ペアと黒龍ペア	922
73.	ライダー&魔法少女集結	933
74.	憎しみを力に	955
75.	自分の為に戦うと決めたら強くなる	962
76.	ゲリライベント	970
77.	烈火の覚醒	994
78.	復讐の闇	1014
79.	激化の果てに……	1030
80.	戦いは終わらない	1057
81.	人殺しの目	1068
82.	僕が英雄になる為に	1084
83.	私の逃げ場所	1106
84.	ゾルダ危機一髪	1181
85.	迷える狐	1291
86.	1人じゃ怖くても	1371
87.	孤高の英雄	1541
88.	snow”red”	1621
89.	散り際の花	1761
90.	秋山 蓮二の過去	1841
91.	憧れの魔法少女	1991
92.	戦う理由は十人十色	2091
93.	漢の勝負 龍騎vsゾルダ	2241
94.	獣帝ジエノサイダー	2341
95.	きつかけ探し	2491

96.	夢の中でのアドバイス	
97.	ツーマンセルバトル(前編)	
98.	ツーマンセルバトル(後編)	
99.	息抜きと遊園地と大地の頼み	
100.	叫べこの決意 九尾vsスノーホワイト	
101.	愛ある戦い	
102.	お泊まり会	
103.	最恐vs最凶	
104.	タイガの苦悩	
105.	夢を目指す者 支える者	
106.	異変の兆候	
107.	英雄になる為の条件	
108.	小さな英雄	
109.	因縁の再会	
110.	お前が信じるもんだよ	
111.	愛する者を守る為に	
112.	ご主人様を求めて	
113.	スイムスイムの正体	
114.	勇気を選択	
115.	たまには必要とされたい	
116.	タイムリミット	
117.	喰うか喰われるか	
118.	引退宣言	
119.	進化する脅威	
120.	決断	

1 2 1.	人間であり続けたい	1854
1 2 2.	人質救出作戦	1840
1 2 3.	母親としての、真の強さ	1816
1 2 4.	雨中の決闘	1804
1 2 5.	友を守る為に 驚愕の結末	1795
1 2 6.	竜狩りの騎士 vs 狂獣の音楽家	1785
1 2 7.	勝利を求めて	1774
1 2 8.	最後の平穩	1765
1 2 9.	最後の戦いへ	1755
1 3 0.	モンスターが選ぶ道	1741
1 3 1.	Destinyを覆せ 九尾 vs オーデイン	1728
1 3 2.	榊原大地は仮面ライダーである	1717
1 3 3.	叫べ	1707
1 3 4.	退屈な事なんて、なかったんだ	1697
1 3 5.	彼らはなぜ戦い続けたのか	1679
1 3 6.	培ってきた繋がり	1665
1 3 7.	魔法少女とは 仮面ライダーとは	1647
EX.	スノーホワイト& amp ; 九尾育成計画 (前編)	1626
EX.	スノーホワイト& amp ; 九尾育成計画 (後編)	1610
エピソード.	俺達は戦い続ける	1592

設定集 く仮面ライダーサイドく (オリキャラも含む)

・『とてかきぼら榊原 だいち大地 (14)』

「N神社」の神主の息子。1年ほど前に、兄の律木が行方不明になって以来、後継者に任命されて神社の手伝いで忙しくなり、友達と遊ぶ機会が減った。

毎日似たような事の繰り返しで、退屈だと思っ日々を過ごしていたが、暇潰しにプレイしていた『仮面ライダー育成計画』を経て、シローからのスカウトで仮面ライダーの力を手に入れてから、彼の日常は一変。人助けやモンスター退治を可能な範囲でこなすようになる。数日後にはスノーホワイトと知り合って以降、共に行動するようになる。

ラ・ピュセルの変身者である岸边 颯太とは同じ小中学校の同級生で、自他共に「最高の友」と認め合う仲。因みに颯太の幼馴染みで、スノーホワイトの変身者である姫河 小雪とは接点はなかった。キャンディーの競い合いが始まってからは、特に2人を気にかける様子を見せる。

・『仮面ライダー九尾』

大地が変身するライダー。狐をモチーフとしており、狐の顔の面で、袴のような上半身で、腰からは毛皮で出来た裾で覆われている。召喚機は狐の顔の形をした「フォクスバイザー」で、左腕についている。口を開けてカードを入れてから閉じる事でカードの能力を発動する。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……2刀のフォクセイバーを出す。

『GUARD VENT』……腰から9つの尾が生えて、全身を包む。

『ACCEL VENT』……一時的に高速で移動する。

『TRICK VENT』……シャドーイリジョンで分身を作り出す。

『MIND VENT』……パートナーカードで、心の声が一定時間聞こえる。

『FINAL VENT』……気合いを入れてから、直立歩行する狐の契約モンスター『フォクスロード』と共に飛び上がり、1回転してから突き出した右足にフォクスロードが絡みつき、尾が槍のように鋭くなり、炎に包まれて強烈な蹴りを叩き込む『ブレイズキック』。

・『城戸 正史 (23)』

OREジャーナルで駆け出しの見習い新聞記者として働いている。大地の家の近所に住んでおり、幼少期の大地の遊び相手となっていた。(律木や颯太の事も知っている)高校時代には、OREジャーナルの編集長で正史の先輩にあたる大久保からの紹介で、ファムの変身者である美華と交際するが、お金のやり取りが原因で破局。

魔法少女や仮面ライダー、そしてN市を中心に起きている行方不明事件について調べているうちに、興味本位でプレイしていた『仮面ライダー育成計画』で、ライダーに選ばれ、人助けやモンスター退治をする事に。初戦でナイトやリップルと共闘し、翌日には九尾、ラ・ピュセルに加えて、室田 つばめが変身するトップスピードと出会う。トップスピードと意気投合した事がきっかけとなり、性格の似ている彼女から指導を受ける事に。周囲からは「バカ」と評されるが、常に正義感を持って行動しており、ライダーや魔法少女同士が戦う事否定的。

餃子を作る腕前はプロ並。

・『仮面ライダー龍騎』

正史が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……ドラグセイバーを出す。

『GUARD VENT』……ドラグシールドを出す。

『STRIKE VENT』……右腕にドラググローを装着して、ドラ

グクローファイヤーを放つ。

『BROOM VENT』……パートナーカードで、魔法の箒「ラピッドスワロー」の、ドラグレッタダーを模したバージョンで空を飛ぶ。

『FINAL VENT』……気合いを入れて飛び、体を捻らせながら右足を突き出し、ドラグレッタダーの口から出た炎に押されて強烈なキックを繰り出す『ドラゴンライダーキック』。

・『秋山^{あきやま}蓮二^{れんじ}（24）』

喫茶「ATORII」で働くウェイター。学生時代から喧嘩三昧だったり、本心を表に出さないなどと生き方は不器用だが、手先は器用で仕事は真面目にこなす。後にパートナーとなるリップルの変身者、細波 華乃とは勤務時間がほぼ同じで、共に行動する事が多い。

唯一の肉親で妹の恵里奈から誘われた『仮面ライダー育成計画』をプレイしていくうちに、シローからスカウトされてライダーになる。当初はライアが教育係になっていたが、面倒になって会わなくなった。しばらくして、新人だったリップルを助太刀して以来、互いに正体を明かして彼女と行動を共にするようになる。

半年前から行方不明となっている恵里奈を見つけるため、人助けやモンスター退治をしていく傍ら、リップルと共に情報を集めている。

正史と出会った当初はソリが合わずにいがみ合っていたが、戦いが進むにつれて他人を傷つける事に躊躇うようになる。

・『仮面ライダーナイト』

蓮二が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……ウイングランサーを出す。

『GUARD VENT』……ウイングウォールと呼ばれるマントの盾を出す。

『TRICK VENT』……シャドローリュージュンで分身を作り出す。

『NASTY VENT』……ソニックブレイカーという超音波で、敵を攪乱する。

『HIT VENT』……パートナーカードで、一定時間、手に持った
コウモリ型の手裏剣か、武器を投げると必中する。

『FINAL VENT』……ダークウイングと合体して空中に飛び、
自らをドリル状に包んで、急降下で敵を貫く『飛翔斬』。

・『手塚 海森 (24)』

的中率ほぼ100%の占い師で、「俺の占いは当たる」が口癖。心理
学を学んでいた事もあって、観察・洞察力は凄まじい。亡き親友の斎
藤 雄一の件もあって、他人の運命を変えようと、助言を送り続けて
いる。『仮面ライダー育成計画』においては雄一のデータを引き継ぐ
形でプレイし続け、しばらくして仮面ライダーとなった。ナイトが離
れてからは、新人だったラ・ピュセルの教育係となった。2人の仲は
良い。

また、情報通で、仮面ライダーや魔法少女の中では一番コネがある。
九尾やスノーホワイトとも仲良くなり、チームを組んだ。

ライダーや魔法少女同士の戦いに関しては龍騎と同様に否定的で、
他のメンバーと協力しようと奮起している。自分を犠牲にしても
他人の運命を変えようと、献身的に動いている。

・『仮面ライダーライア』

海森が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWING VENT』……エビルウィップを出す。

『COPY VENT』……目の前の相手の武器をコピーする、

『STRIKE VENT』……エビルバイザーのヒレの部分が光り、
横に振るってソニックブームを放つ。

『ALTER VENT』……パートナーカードで、武器の大きさを変
える。

『FINAL VENT』……エビルダイバーの背に乗り、波乗りのよ
うに体当たりする『ハイドベノン』。

・『須藤 充 (28)』

若手の刑事。正義の味方に憧れて、刑事として奮闘していたが、社会の闇を覗きすぎたが故に心は歪み、いつしか裏で悪人を裁くという名目で殺人を犯すようになる。アンティークショップの店長だった加賀と口論になった拳句に彼を殺害してからしばらくして、それまで暇潰しにプレイしていた『仮面ライダー育成計画』で、シローからライダーの力を受け取る。

パートナーになったねむりん程ではないが、チャットには時々参加し、情報を得て身の安全を確保しようとしている。戦いにおいてはパートナーカードを悪用して自分の都合の良いように記憶操作をしている。

・『仮面ライダーシザース』

充が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『STRIKE VENT』……シザースピンチを出す。

『GUARD VENT』……シエルデイフェンスを出す。

『BUBBLE VENT』……2つの銃口がついた『バブルショット』を出して、ボルキヤンサーと共に泡状の光線『バブルシユート』を放つ。契約モンスター無しでも撃つことは可能。

『DREAM VENT』……パートナーカードで、寝ている人の夢に入ったリ、夢に出てきたものを現実呼び出す。

『FINAL VENT』……ボルキヤンサーが持ち上げて、シザースがジャンプしながら高速で動く空中回転を加えて体当たりする『シザースアタック』。

・『北岡 賢治 (30)』

自称「スーパードクター」の凄腕の持ち主。大手企業からは悪徳弁護士と揶揄されている。かなりのナルシストで利己的な性格だが根っからの悪人ではなく優しい一面もあるので、秘書の由良 吾郎やバイトの安藤 真琴からは慕われている。とある一件で知り合った正史の上司である令子に毎回猛アプローチをかけているが、悉く失敗している。以前弁護をしていた浅倉 陸から強く恨まれている。

仕事の合間に『仮面ライダー育成計画』をプレイしているとシロからスカウトされて、仮面ライダーとなった。真琴が変身するマジカロイド44とはウマが合い、常に2人で行動する。

不治の病に侵されており、寿命は長くないと知ってからは、余生を樂しむ事になっている。

・『仮面ライダーゾルダ』

賢治が変身したライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SHOOT VENT』×2……ギガランチャーもしくはギガキヤノンを出す。

『STRIKE VENT』……頭部にギガホーンを出す。

『GUARD VENT』……ギガアーマーを出す。

『FUTURE VENT』……パートナーカードで、未来の道具を1つ出せる。

『FINAL VENT』……マグナバイザーをマグナギガの背中に接続し、トリガーを引いて一斉射撃を行う『エンドオブワールド』。

・『浅倉 陸 (25)』

「イライラしたから」という理由で多くの人間を痛めつけ、時には殺人を犯してきた、全国で指名手配されている男。事実、魔法少女やライダーの中にも、関係者が彼によって手をかけられたケースも。

一度は刑務所に入っていたのだが、事前に知り合っていたカラミティ・メアリの手助けもあって脱獄した。その際、弁護を依頼したにも関わらず無罪にしてくれなかった北岡に強い恨みを持っている。イライラを抑えるために始めた『仮面ライダー育成計画』を経てライダーの力を手にし、思うがままに暴れている。

強い闘争心、憎悪を持ち、暴力的な言動で皆から恐れられている。戦う事に悦を感じている、常人の域を越えた存在である。

・『仮面ライダー王蛇』

陸が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……ベノサーベルを出す。
『STEAL VENT』……相手の装備を奪う。
『UNITE VENT』……モンスターを合体させる。
『STRENGTH VENT』……パートナーカードで、持っている武器をパワーアップする。
『FINAL VENT』……空中からベノスネーカーの毒液の勢いを乗せて連続蹴りを叩き込む『ベノクラッシュ』。

・『たかみざわだいすけ高見沢大介（38）』

巨大企業の高見沢グループの総帥で実業家。現在の地位は幼少期に父の惨めな姿を見続けており、社会の負け犬にならないように努力を続けてきた結果が身を結んだもの。

横の会社繋がりでプレイを勧められた『仮面ライダー育成計画』を経て、シローからライダーにスカウトされた。

新人秘書の木王 早苗が変身するルーラと共に他の魔法少女や仮面ライダーを従えている。頭も良く回り、カリスマ性も高いので、ガイ達からの信頼は厚い。普段は紳士的で誰からも慕われているが、本性は過激で、目的の為なら手段を選ばない。時折格下の人間に気を配っているルーラをパートナーであるにも関わらず、「気に入らない」と思っている所もある。

・『仮面ライダーベルデ』

大介が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『HOLD VENT』……バイトワインダーを出す。

『CLEAR VENT』……自身を透明化する。

『COPY VENT』……相手の姿や武器をコピーする。

『OBEY VENT』……パートナーカードで、王笏を持って相手に命令し、実行させる。

『FINAL VENT』……バイオグリーザが、逆立ちしたベルデの足に舌を巻きつけ、振り子の要領で相手を捕らえ、パイルドライバのように相手の頭を地面に激突させる『デスバニッシュ』。

・『東野 智 (25)』

光希の兄で、大学院生。普段からやや寡黙な性格。光希の推しで『仮面ライダー育成計画』をプレイし、ほんの偶然から光希と共にライダーの力を手に入れる。

ピーキーエンジェルズの変身者である天里姉妹とはオフで会った事もあり、特に美奈から気に入られている。ルーラやベルデの下で行動するようになり、2人の命令に忠実に従いながら、『英雄』になる事を目指し、2人を理想としている。その一方で情緒不安定が故に奇行に走る事もしばしば。戦いが進むにつれてそれがエスカレートし、英雄になる為ならどんな事でもする短絡的思考と、邪魔者や恩人は全て排除しようという自己中心的思考に墮落していく。

・『仮面ライダータイガ』

智が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『STRIKE VENT』……デストクローを出す。

『FREEZE VENT』……モンスターを瞬間凍結させる。

『RETURN VENT』……一度使ったカードを再利用する。

『TRANS VENT』……パートナーカードで、生き物以外になれる。

『FINAL VENT』……デストワイルダーが捕らえた相手をタイガのいる方向へ引きずり、デストクローで突き刺す『クリスタルブレイク』。

・『東野 光希 (21)』

智の弟で、フリーター。父の横暴ぶりに嫌気がさして、兄を実家から連れ出して2人で生活を始めた。兄の智とは正反対にお調子者で、気の弱い智を励ましている。多数のアルバイトで地道にお金を稼いでいるが、将来は巨額の富を得て、兄弟で楽な暮らしをする事。興味本位でやっていた『仮面ライダー育成計画』を経て、仮面ライダーに選ばれた。お金がらみになると目の色を変えてまで、汚い仕事でも関

わろうとするが、根は優しく、困っている人は放っておけない性格。その性格もあって、キャンディーの競い合いではルーラ達のやり方に迷いが生じている面も。

ひったくり犯を捕まえた際に知り合った天里姉妹の、妹にあたる優奈に、一方的ではあるが好意を抱いている。

・『仮面ライダーインペラー』

光希が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SPIN VENT』……ガゼルスタッフを出す。

『KICK VENT』……脚力を強化して、ガゼルブレイクと呼ばれる蹴りを入れる。

『TRANS VENT』……パートナーカードで、タイガが持つカードと違って生き物全般に変身する。

『FINAL VENT』……多数のレイヨウ型モンスターが一齐に攻撃した後、それらに混じってインペラー自身が左足で膝蹴りを決める『ドライブバイバイダー』。

・『芝浦 淳一郎 (21)』

経済学部の2年で、ゲームサークルに所属。大手ゲーム会社の息子であり、その影響もあって『仮面ライダー育成計画』に手を出し、後にシローからのスカウトで仮面ライダーになる。その後、尊敬している高見沢 大介がライダーである事を知り、二つ返事でルーラチームの傘下へ。我が儘且つ自信家で、人生をゲーム感覚で楽しんでいる。ルールに従う者にはとことん優しく、そうでない者には厳しく接して、やる気にさせようと動いている。

ルールに対して忠実な性格なので、気が弱いが故に常に言われた通りに行動する、たまを個人的に気に入っており、彼女の助太刀をしたりと独特な美学を持っている。キャンディーの競い合いが始まってから、そのゲームの真意を真っ先に理解し、受け入れた人物でもあり、迷いなく戦えて人を傷つける事もある。

・『仮面ライダーガイ』

淳一郎が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『STRIKE VENT』……メタルホーンを出す。

『CONFINE VENT』×2……カードの能力や魔法を打ち消し、制限する。

『HOLE VENT』……パートナーカードで、穴を作り出す。

『FINAL VENT』……メタルホーンを装備した状態でメタルガラスの肩に乗り、高速で突進する『ヘビープレッシャー』。

・『鎌田 春水 (30)』

とある会社の副編集長で、人望も厚く、普段は気さくな性格だが、本性は残忍な思想の持ち主。その実力は未知数。

ルーラの仲間になった当初からスイムスイムと共に行動するようになり、忠誠を誓いつつも裏では隠密に行動しつつ、戦いを過激なもの、すなわち殺し合いへと移していこうとする。

ライダーに選ばれた経緯は不明だが、『ピティ・フレデリカ』と呼ばれる人物と裏で繋がっており、彼女の命で試験に参加した事が明らかとなっている。

・『仮面ライダーアビス』

春水が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……2刀のアビスセイバーを出す。

『STRIKE VENT』……アビスクロウを装着し、アビススマッシュを放つ。

『FREEZE VENT』……モンスターを瞬間凍結させる。

『LIQUID VENT』……パートナーカードで、体を液化化させて地面に潜ったりする。

・『霧島 美華 (21)』

N市で誕生したライダーの中では唯一の女性。魔法少女である亜柊 雫や羽二重 奈々とは大学の友人であり、同じゼミ、同じサーク

ルに所属している。

姉がいるが、浅倉に殺されており、彼に対して強い憎しみを抱いている。高校時代に正史と付き合っていたが、その前は別の男性と付き合っていた模様。

プライドは高く、ライダーを通じて再開した正史とも当初はいがみ合っていたが、戦いが進むにつれて、再び彼に好意を抱く事に。悩み事等の相談相手として、ゼミの担当である香川を尊敬し、雫や奈々にも恩義を感じている。

「魔法少女をやるよりも、カッコいいライダーの方が良い」という理由で『仮面ライダー育成計画』をやるようになり、やがて本物に選ばれる事に。

・『仮面ライダーフナム』

美華が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……ウイングスラッシャーを出す。

『GUARD VENT』……ウイングシールドを出す。

『BLAST VENT』……ブランクウイングが翼を勢いよく動かして、敵を吹き飛ばす。

『WALL VENT』……パートナーカードで、壁を作り出す。

『FINAL VENT』……ブランクウイングが突風を起こし、吹き飛ばされた敵をウイングスラッシャーで両断する『ミステイラスラッシュ』。

・『香川 俊行 (37)』

小雪、大地、颯太にとって小学生時代の恩師であり、現在は雫、奈々、美華の通う大学でゼミの担当をしている教員。妻の典子、息子の裕太との3人家族で、典子に対して深い愛情を抱く。「瞬間記憶能力」の持ち主で多方面から注目されている天才。

『仮面ライダー育成計画』を通じてライダーに選ばれてからも一目置かれる存在となり、ライア同様、他の面々との関わりも多い。常に正しく生徒を導こうとして、シスターナナ、ヴェス・ウインタープリズ

ン、ファムを始め、正体が判明したスノーホワイト、九尾、ラ・ピュセル、龍騎を陰ながら見守っている。

・『仮面ライダーオルタナティブ』

俊行が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……スラッシュダガーを出す。

『ACCEL VENT』……一時的に高速で移動する。

『WHEEL VENT』……サイコログをバイク化したサイコロダーにする。

『IMPROVE VENT』……パートナーカードで、対象の能力を向上させる。

『FINAL VENT』……サイコロダーに搭乗し、コマのように回転させながら相手に高速で突撃する『デッドエンド』。

・『???』

龍騎を黒く塗り潰したような容姿の仮面ライダー、リュウガの変身者で、素性は現時点で不明。ファムと龍騎に強い恨みを抱いている。パートナーのハードゴア・アリスと共に隠れながら行動しており、普段からチャットにすら顔を出さない。が、オーデイン曰く、戦闘能力はオーデインに次いで最強クラスらしい。

・『仮面ライダーリュウガ』

謎の男性が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……黒いドラグセイバーを出す。

『GUARD VENT』……黒いドラグシールドを出す。

『STRIKE VENT』……黒いドラグクロウを装着して、ドラグクローファイヤーを出す。

『RECOVER VENT』……パートナーカードで、体力を回復させる。

『FINAL VENT』……自らの体を空中に浮かせ、ドラグブラッカードが出す黒炎が相手を硬化させ、押し出されたまま跳び蹴りを放つ

『ドラゴンライダーキック』。

・『???'』

本名は誰も知らない、仮面ライダーオーデインの変身者。仲間のクラムベリー、ファヴ、シローと共に試験と称してゲームを行い、戦いを激化させていく。あらゆるライダーの中でも最強クラスの強さで圧倒していく。

・『仮面ライダーオーデイン』

謎の男性が変身するライダー。スペック等は原作と同じ。

【アドベントカード】

『SWORD VENT』……2刀のゴルトセイバーを出す。

『TIME VENT』……時間を少し前に巻き戻せる。

『FINAL VENT』……ゴルトフェニックスを背中に合体させ、浮かび上がったから炎を纏って相手に突撃する『エターナルカオス』。

・『シロー』

『仮面ライダー育成計画』のマスコットキャラクター。手のひらサイズの茶色い鳥の姿をしている。特にオーデインには忠実に従えている。監査部門所属。

設定集 魔法少女サイド

・『姫河 小雪（14）』

岸辺 颯太の幼馴染みで、幼少期に観た、『キューティーヒーロー』を初めとした魔法少女アニメの影響で、魔法少女になる事を望み、その願いが叶った少女。優しい性格で、困っている人の悩みを解決する事に喜びを感じ、争い事は好まない。

魔法少女に成り立ての頃に、同じく新人だった榊原 大地もとい九尾と出会い、行動を共にするようになる。やがて彼とはパートナーとなり、サバイバルゲームが始まってからも争い合う事を否定する中で、大地の事を考えると顔を赤くする様子が度々見受けられる。

・『スノーホワイト』

小雪が変身する魔法少女。アバターは『白い学生服の少女』。

【使用武器】

・フォクセイバー（SWORD VENT）

・フォクステール（GUARD VENT）

【魔法】

・『困っている人の心の声が聞こえるよ』

・『細波 華乃（17）』

幼い頃から母親が再婚を繰り返すという複雑な環境下で育っており、故に両親（特に義父）と不仲で、単身生活をしている現役高校生。感情を素直に表現出来ず、人付き合いは苦手な方だが、バイト先の喫茶『ATORI』で出会った秋山 蓮二には、苦手意識は何故か無い。（ケチだったり、器用だったりする点で共通している事が要因とみられる）

トップスピードとはなんだかんだで相棒となり、ナイトだけでなく、トップスピードのパートナーとなった龍騎と絡む事もある。陰ではスノーホワイトや九尾をこっそりチェックしている面も。

・『リップル』

華乃が変身する魔法少女。アバターは『忍者』。

【使用武器】

- ・ウイングランサー (SWORD VENT)
- ・ウイングウォール (GUARD VENT)
- ・その他、手裏剣やクナイ、短刀など

【魔法】

- ・『手裏剣を投げれば百発百中だよ』

- ・『岸边 颯太 (14)』

小雪の幼馴染みで、大地とは小学生時代からの大親友。サッカーの腕前は素晴らしく、実力もそこそこ。将来は海外でプロのサッカー選手になる事。実は小雪同様、魔法少女が大好きで、大地や他の男子にバレないように陰で努力していた。

『変身前が男』という、世界的にも稀なケースで魔法少女に選ばれ、女性になる事に当初はコンプレックスを感じていた。最初にライアの占いで露見した時は落ち込んでいたが、彼の助言もあって立ち直り、それがきっかけでコンビを組み、ゲームではパートナーを組む事に。スノーホワイトの教育係として名乗りを挙げ、九尾を含めた4人でチームを組む。

正義感がとても強く、親友想いな性格で、九尾とは息の合った戦いを見せる。

- ・『ラ・ピュセル』

颯太が変身する魔法少女。アバターは『竜騎士』。

【使用武器】

- ・エビルウィップ (SWING VENT)
- ・エビルバイザー (STRIKE VENT)
- ・大剣

【魔法】

- ・『剣の大きさを自由に換えられるよ』

- ・『室田 つばめ (19)』

19歳ではあるが、主婦で妊娠中。その昔は『エンブレス』と呼ばれる暴走族のリーダーを務めていた。幼馴染みであつた昇一が親身になって小言を言ってくれたお陰で更生し、丸くなった。が、彼女が魔法少女になってからしばらくして、彼女の身勝手な行動が原因で昇一が浅倉に殺されてしまい、しばらく失意に暮れていた。それ故に『ご飯を毎日食べて生きる事』においては、誰よりもその意味を理解しており、『最低でも後半年は死ねない』という理由で、サバイバルゲームに生き残る事を決意した。首からかけてあるお守りは、亡き昇一がくれたもの。

おせっかい焼きで声が大きく、とにかく元気が取り柄。龍騎と共闘した際に意気投合し、彼の教育係になり、後にパートナーとなる。正史の正義感溢れる行動に目を惹いている。

・『トップスピード』

つばめが変身する魔法少女。アバターは『魔女』。

【使用武器】

・ドラグセイバー (SWORD VENT)

・ドラグクロー (STRIKE VENT)

・ドラグシールド (GUARD VENT)

・魔法の箒『ラピッドスワロー』

【魔法】

・『猛スピードで空を飛ぶ魔法の箒を使うよ』

・『二条 合歓 (24)』

幼少期に患った持病もあって、外に出られない日々。そしてお金持ちの家の3人目の妹として育った事で働く事が苦手になった、典型的なニート。

魔法少女として、ほとんどは夢の中で活動しているが、唯一須藤充とだけは現実世界で出会い、親しくなった。(実際は隠れ蓑にする為に充が利用しようとしているのだが、本人は気づいていない)

・『ねむりん』

合歓が変身する魔法少女。アバターは『パジャマ姿の少女』。

【使用武器】

- ・シザースピンチ (STRIKE VENT)
- ・バブルショット (BUBBLE VENT)

【魔法】

- ・『他人の夢の中に入る事が出来るよ』

- ・『安藤 真琴 (15)』

何事も損得を優先的に考えて、やりたくない事はやらない、現実主義者。お金儲けの為なら何でもやるようにしており、現在は北岡法律事務所バイトしている、中卒のフリーター。実家にはあまり帰らずに事務所や知人の家を転々として泊めてもらって生活している。北岡 賢治の秘書である由良 吾郎とはライバル意識を燃やしつつ、仕事を共にする。お金の勘定は吾郎以上に得意。

北岡の病の事も知っており、体の事を気遣っている。

- ・『マジカロイド44』

真琴が変身する魔法少女。アバターは『ロボット』。

【使用武器】

- ・ギガランチャー (SHOOT VENT)
- ・ギガキャノン (SHOOT VENT)

【魔法】

- ・『未来の便利な道具を毎日1つ使う事が出来るよ』

- ・『山元 奈緒子 (39)』

夫と娘を虐待して離婚している元主婦。現在はとあるきつかけで知り合った王蛇改め浅倉と共に、N市の暴力団『鉄輪会』に雇われている。凶暴且つ好戦的な性格も似ている所からか、王蛇との連携はピカイチ。

武器等は暴力団に調達してもらっており、それらを用いて相手をねじ伏せる。その危険性は他の魔法少女や仮面ライダーにも知られており、特に龍騎とリップルに因縁を持っている。『カラミティ・メアリに逆らうな。煩わせるな。ムカつかせるな』が口癖。

・『カラミティ・メアリ』

奈緒子の変身する魔法少女。アバターは『西部のガンマン』。

【使用武器】

- ・ベノサーベル (SWORD VENT)
- ・様々な銃火器

※この他に、『CONTRACT』で手に入れたエビルウィップ、メタルホーンも使える。

【魔法】

- ・『持っている武器をパワーアップ出来るよ』

・『木王 早苗 (24)』

プライドが高く、有能な人間ではあるが、自分よりも劣っていると思った会社とはすぐに縁を切る。高見沢グループの方針は気に入っており、総帥の高見沢 大介から一目置かれた事もあって、現在はその会社で秘書として働いている。

N市の廃寺「王結寺」を拠点として、ベルデと共にリーダーとして君臨する。過去にカラミティ・メアリに敗れており、強い復讐心を抱いている。常に仕切りたがるが、面倒見は良い。

・『ルーラ』

早苗が変身する魔法少女。アバターは『お姫様』。

【使用武器】

- ・バイオワインダー (HOLD VENT)
- ・王笏

【魔法】

- ・『目の前の相手に何でも命令出来るよ』

・『天里 美奈 (24)』

『ピーキーエンジェルス』の姉。変身前でも後でも、姿や性格といった全てが優奈とそっくりで、母親やルーラ達もよく間違える程。(ただし、タイガやインペラーは判別出来ている)

ユナエルと同様にルーラの事を嫌っており、陰では彼女の悪口を

言ってどう懲らしめようか、頭を回転させている。タイガの変身者である智を気に入っている。

・『ミナエル』

美奈が変身する魔法少女。アバターは『双子の天使（姉）』

【使用武器】

・デストクロー（STRIKE VENT）

【魔法】

・『生き物以外の好きなものに変身出来るよ』

・『天里 優奈（24）』

『ピーキーエンジェルズ』の妹。こちらも姉の美奈とそっくり。基本的に姉をおだてる立ち回り。インペラーの変身者である光希からのアプローチを気にしつつも、美奈と一緒にいられる事を優先にしている。

・『ユナエル』

優奈が変身する魔法少女。アバターは『双子の天使（妹）』。

【使用武器】

・ガゼルスタップ（SPIN VENT）

【魔法】

・『好きな生き物に変身出来るよ』

・『犬吠埼 珠（15）』

とにかく気弱で、強く出ると逆らえない性格であり、ルーラやベルデに従えている。勉強にもスポーツにも、得意分野と呼べるものはない。母親や妹、弟からは敬遠されており、唯一彼女の事を理解してくれたのは、今は亡き祖母だけだった。ルーラの傘下に入ろうとしたのも、常に誰かがいて、役に立ちたいと思っていたから。が、失敗ばかりでよくルーラに叱られている。

何かと気にかけてくれるガイに感謝しており、彼と行動する事が楽しみになっている。

・『たま』

珠の変身する魔法少女。アバターは『犬娘』。

【使用武器】

・メタルホーン (STRIKE VENT)

【魔法】

・『いろんなものに素早く穴を開けられるよ』

・『坂風 綾名 (7)』

メンバー最年少。その幼さ故に、教えられた事は何でも吸収する性格。特にルーラと出会ってから、彼女のようなお姫様に仕える事を夢見ている。

が、ゲーム序盤での出来事をきっかけに態度を豹変させ、更にパートナーであるアビスからの助言もあって、ゲームを思わぬ形へと変える事に……。

・『スィムスィム』

綾名が変身する魔法少女。アバターは『白スク水少女』。

【使用武器】

・アビスセイバー (SWORD VENT)

・アビスクロー (STRIKE VENT)

【魔法】

・『どんなものでも水みたいに潜れるよ』

・『亜終 雫 (21)』

ボーイッシュな容姿で、男女問わず、大学内では人気者。美華と奈々の同級生で、同じゼミに所属。スキーサークルに入部する際、奈々と一緒にいれる機会が増えた事で、彼女を愛するようになる。(婚約指輪を渡そうとするほどに)

パートナーとなる美華とも仲が良く、ゼミ担当の香川を含めた4人で常に行動している。3人の、特にシスターナナの為なら自分の身を惜しまず前が出る。

・『ヴェス・ウィンタープリズン』

雫が変身する魔法少女。アバターは『公子』。

【使用武器】

- ・ウイングスラッシャー (SWORD VENT)
- ・ウイングシールド (GUARD VENT)

【魔法】

- ・『何も無い所に壁を作り出せるよ』

- ・『羽二重 奈々 (21)』

雫と美華の同級生。特に美華とは中学時代からの古い友人である。当初は雫からの熱烈なアプローチに戸惑い、魔法少女に選ばれた後は特に困っていたが、香川や美華のアドバイスやマジカロイド44とのやりとりを経て、雫もといヴェス・ウインタープリズンと愛し合う事を決意。

優しくおっとりした性格で、スノーホワイトらと仲を深め合っている。その一方で、ナイトとリップル、そしてカラミティ・メアリからはかなり嫌われている。ゲームに関してはかなり否定的。

- ・『シスターナナ』

奈々が変身する魔法少女。アバターは『修道女』。

【使用武器】

スラッシュダガー (SWORD VENT)

【魔法】

- ・『他人の力を目一杯引き出せるよ』

- ・『鳩田 亜子 (13)』

父が母を刺し殺し、捕まった事で、母方の弟の家に引き取られる事になった、16人目の魔法少女。当初は周りに迷惑をかけてばかりだと思ひ込み、自殺も考えていたが、とある一件でスノーホワイトと九尾に助けってもらった事をきっかけに、魔法少女になって2人に会いたいと思うようになった。

2人に関する事以外はさほど自発的に動かない為、パートナーとなったりリユウガと共に行動している。

- ・『ハードゴア・アリス』

亜子が変身する魔法少女。アバターは『黒い「不思議の国のアリス」』。

【使用武器】

- ・『黒い』ドラグセイバー（SWORD VENT）
- ・『黒い』ドラグクロウ（STRIKE VENT）
- ・『黒い』ドラグシールド（GUARD VENT）

【魔法】

- ・『どんなケガでもすぐに治るよ』

・『???』

オーデイン同様、正体不明の、クラムベリーの変身者。とある事故にオーデインと共に巻き込まれ、その事が原因で人間としての感覚を失い、魔法少女として戦う事に悦を感じている。試験官として、オーデインと共にゲームに参加する。その実力は未知数。

- ・『森の音楽家クラムベリー』

謎の女性が変身する魔法少女。アバターは『花に包まれたエルフの音楽家』。

【使用武器】

- ・ゴルトセイバー（SWORD VENT）

【魔法】

- ・『音を自由自在に操る事が出来るよ』

- ・『ファヴ』

「魔法少女育成計画」のマスコットキャラクター。手のひらサイズの球体で、黒と白の二色で左右に分かれている。白い方には翼が生えており、語尾に『ほん』と付ける。常に刺激ある展開を求めている。人事部門所属。

設定集　　〈SURVIVE〉

・『九尾サバイブ』

100話にて、戦う理由、生きる理由を見い出す為に、同じく悩みを抱えていたスノーホワイトと戦い、その最中に「命を散らせた者達の想いを背負い、最後まで生き抜く」事を決意し、同時に覚醒した姿。

白い毛並みの袴と、前の開いた裾、背中には荒縄のような太い腰帯（金色）、仮面の頬に限取りが描かれている。

・武器

『フォクスバイザーツバイ』……狐の頭部を模した鍰があり、その口から刀身が出ている片刃型。鍰にあるトリガーを引くと、上部の装填口が開いて、そこにカードを入れて押し込み、ベントインする。

『SURVIVE　〈魂魄〉』……九尾が手に入れたカード。文字通り、死者が紡いだ想いを受け継ぐという決意が込められている。フォクスバイザーツバイの狐の頭部に装填してサバイブになる。

・アドベントカード

『SWORD　VENT』……炎を宿したフォクスバイザーツバイで攻撃する。

『GUARD　VENT』……フォクステールで広範囲を包み込む。

『TRICK　VENT』……シャドローイリジョンで最大8体まで分身が作り出せる。

『ACCEL　VENT』……高速で移動する。

『BLAZE　VENT』……「ブレイズ・ウィルオ・ザ・ウィスプ」という火球を放つ。

『MIND　VENT』……パートナーカードで、相手の心の声を聞いて、次の行動を予測する。

※この他にも、これまで脱落した魔法少女の魔法や、仮面ライダーの能力の一部を使用できる。（誰かが死ぬ度に新たにカードも追加される）

※『FINAL　VENT』

・フォクスローダー・バイクモードに乗り、前足と後ろ足で2対ずつくっついて車輪が出て、目から放たれた閃光で、敵の視界を遮り、体当たりする『ブレイズシャイニング』

・従来のブレイズキックに威力を増した『ブレイズキック・ブレイク』

・『スノーホワイトサバイブ』

100話にて、魔法少女としての自分の在り方に悩んでいた時に、同じく悩みを抱えていた九尾と戦う事になり、その最中に『生きる為に、守る為に戦う』と決意して、覚醒する。

右腕は黒、左腕は白いアーマーをつけており、その他も白と黒で配色されて、学生服から『キューティーヒーラー』を意識した魔法少女姿となる。頭の蕾も白黒で開花している。黒（強さを象徴）と白（優しさを象徴）を強調し、戦闘力も飛躍的に上がっている。（マジカルフォンの色は白黒のまま）

マジカルフォンをタップして、胸の中心に現れたホルダーにはめ込むと変身可能。

・武器

『フォクスバイザーツバイ』……デザインは九尾サバイブのものと同じだが、装填口はない。

『フォクステール』……巨大な尾で広範囲に渡って防ぐ。

『ブレイズ・ウィルオ・ザ・ウイスポ』……火球で相手に攻撃する。

・魔法

『困っている人の声を聞けるよ』

・『龍騎サバイブ』

77話にて、トップスピードを庇い、スイムスイムとアビスの強襲を凌いだ後、2人で生き抜くという覚悟を決めて、共に覚醒。炎を表すかのような肩の鎧部分、仮面には龍の髭を表すかのような触角がある。

・武器

『ドラグバイザーツバイ』……龍の頭部を模したハンドガン状。ビームや火炎弾を放てたり、短剣『ドラグブレード』としても使用可能。
『SURVIVE 〽烈火〽』……龍騎が手に入れたカード。ドラグバイザーツバイの口の部分に装填してサバイブになる。

・アドベントカード

『SWORD VENT』……バーニングセイバーで、ドラグブレードから炎の刃を飛ばす。

『GUARD VENT』……ファイヤーウォールでドラグランザーを守る。

『SHOOT VENT』……メテオバレットで、ドラグバイザーツバイのレーザー光線とドラグランザーの吐く炎を浴びせる。

『STRANGE VENT』……何が起ころかわからない。

『BROOM VENT』……パートナーカードで、従来より強化された魔法の箒、ラピッドスワローを出す。

※『FINAL VENT』

・ドラグランザー・バイクモードに乗り、ウイリー走行し、火炎弾を連射しながら車体で敵を踏み潰す「ドラゴンファイヤーストーム」

・従来のドラゴンライダーキックに威力を増した「ネオ・ドラゴンライダーキック」

・『トップスピードサバイブ』

77話にて、龍騎と共に覚醒。

全体的にワンピースから、上半身は焦げ茶色のメッシュが入った服、下半身はカボチャパンツ姿となっている。胸元のリボンにピンク色の球体がデコレーションされ、首からは、今は亡き昇一が渡してくれたお守り袋が提げられている。とんがり帽子には新たに星のマークがついている。以前は左腕だけだった箒手が両腕につけられており、上腕と腹に銀色のアーマーがつき、ブーツには膝当てがつけられた。耳のピアスも星からハート型に変わっている。

全体的に防御面に特化した姿であり、「守る（パートナーや仲間、お腹の胎児など）」事を意識している。（マジカルフォンも薄紫から赤

へ)

マジカルフオンをタップして、左手の籠手に現れたホルダーにはめ込むと変身可能。

・武器

『ドラグバイザーツバイ』……レーザー光線を放てたり、短剣「ドラグブレード」としても使用可能。装填口はない。

『ファイヤーウォール』……ドラグランザーが守ってくれる。

『ストレンジベント』……何が起こるか分からない。

・魔法

『猛スピードで空を飛ぶ魔法の箒を使うよ』

・『ナイトサバイブ』

66話にて、ライア達を逃した後、王蛇とカラミティ・メアリに対抗する為に、リップルと共に覚醒。

紺色から青と金が目立つようなラインとなっており、西洋の鎧のようなものを纏い、背中にマントを靡かせている。

・武器

『ダークバイザーツバイ』……盾状。本体にダークブレードが収納されており、引き抜くと、ダークシールドとして使える。

『SURVIVE』〜疾風〜……ナイトが手にしたカード。ダークバイザーツバイの上部の装填口に入れてサバイブに。

・アドベントカード

『SWORD VENT』……ダークブレードにオーラが宿り、パワーアップする。

『GUARD VENT』……マントが強化され、守りを固める。

『SHOOT VENT』……「ダークアロー」という、ダークバイザーツバイの両端の弓が開いて、ボウガンとなり光の矢を放つ。

『TRICK VENT』……シャドローイリユージョンで最大8体の分身が作り出せる。

『BLUST VENT』……「ダークトルネード」という、ダークレイダーの両翼のホイールから突風を放つ。

『NASTY VENT』……「ソニックブレイカー」という超音波を放つ。

『HIT VENT』……パートナーカードで、投げた武器が追尾して必中。自由に自分の意志で操れる。

※『FINAL VENT』

・ダークレイダー・バイクモードに乗り、機首からビームを放って拘束し、マント状の翼で車体を包んで突撃する「疾風斬」。

・従来の飛翔斬に威力を増した「飛翔斬・改」。

・『リップルサバイブ』

66話にて、ナイトと共に覚醒。

腕と脚は忍び装束で覆われており、口元はマスクで包まれている。胸部につけられていたビキニはホルターネックに変わっている。膝からは鉄で守られており、下駄から草履に変わっている。髪留めの手裏剣ヘアアクセも、左側から後頭部に移動している。(マジカルフォンもピンクから藍色へ)

マジカルフォンをタップして、左の上腕に現れたホルダーにはめ込むと、変身可能。

・武器

『ダークブレード』……ナイトサバイブの召喚機とデザインは同じだが、カードの装填口はない。

『ダークシールド』……盾としても使えるが、ダークブレードと合体させてダークアローを放てる。

『シャドレイリュージュオン』……分身体を作り出せる。

・魔法

『手裏剣を投げれば百発百中だよ』

・『ライアサバイブ』

68話にて、プロバジェルと交戦中に、九尾とラ・ピュセルに助けられた事を思い出し、「運命は自分の力で変えられるもの」と確信した彼は、ラ・ピュセルと共に覚醒。

仮面や弁髪が金色になり、頭部にはマンタの口鰭を模した銀色の角が2対。腕や膝には金色のエイの装飾品があり、装甲も金のラインが目立つ。

・武器

『エビルバイザーツバイ』……巨大な弓の形に模したものの。弓の部分が長いので、ロッドとしても、遠距離で矢を放つたりも出来る。

『SURVIVE 〰️雷電〰️』……ライアが手に入れたカード。エビルバイザーツバイの口の部分に差し込んでサバイブに。

・アドベントカード

『SWING VENT』……トゲがついて、威力が高まっている「エクスウィップ」を出す。

『COPY VENT』……対象の武器をコピーする。

『SHOOT VENT』……「ライトニングアロー」という、エビルバイザーツバイの先端に電気を溜め込み、チャージ完了後に強化された矢を放つ。

『THUNDER VENT』……「ヴェイパースパーク」という、エクスダイバーが現れて、空を飛びまわりながら、腹の車輪が勢いよく回転し、真下にいる敵に雷が落ちて、相手を痺れさせる。

『ALTER VENT』……パートナーカードで、触れたものの大きさを変える。

※『FINAL VENT』

・エクソダイバー・バイクモードに乗り、周囲に放電して逃げ場を無くさせた後、掠めとるように体当たりして吹き飛ばす『ハイドバースト』。

・従来のハイドベノンに威力を増した「スーパーハイドベノン」。

・『ラ・ピュセルサバイブ』

68話にて、ライアと共に覚醒。

両手首にガントレットがつけられ、手の方もアーマーがつけられている。両腰の鎧も強化し、新たに腹の方にも鎧がある。動きやすさだけでなく、防御性にも特化している。角も竜を彷彿とさせるものへと

進化。後ろ足には龍の爪がついている。胸元は水着から布状へ。首まわりにも鎧がある。(マジカルフォンも青からピンクへ)

マジカルフォンをタップして、左腰に現れたホルダーにはめ込むと、変身可能。

・武器

『エクソウィップ』……トゲがついた鞭状の武器。

『エビルバイザーツバイ』……巨大な弓矢。チャージすると威力が増す。装填口はない。

『ヴェイパースパーク』……剣を敵に向けて、先端から電撃を放つ。

・魔法

『剣の大きさを自由に換えられるよ』

プロローグ

榊原さかきばら 大地だいちは、とにかく毎日が退屈で仕方なかった。

「……行つてきまゝす」

両親に聞こえてるかも分からないぐらい低い声で、実家兼N市の観光スポットでもある「N神社」を後にした大地は、誰ともなしにため息をついてからいつものように石段を降り始めた。

石段を降りて、一本道路を渡った先にバス停があり、大地はいつものように時間に余裕を持って列に並んだ。そしていつもの時間に大量の人が乗ったバスが来て、それに乗り、いつものように席に座れず、吊り革に掴まって揺れるバスの車内で立ちながら窓の外に広がるいつも通りの景色を眺めていた。

大地が住んでいるN市は、4年ほど前に大合併した事で、近辺では最大規模の港湾都市に生まれ変わった。それに伴い、市役所を筆頭に何とも奇抜なデザインの建物が乱立するビル群や、寂れたままの山間部の村落、最新の医療機器を完備している病院、倒産して放置されたままの工場などが同居する事になり、他方からも注目の目が集まった。

しかしそれも過去の話。今となっては、大地にとっては何ら変わりのようなない、歪な都市としか思えなかった。

……いつも通り過ぎる。

大地は外の景色に見飽きて、スマホを取り出した。起動しようとした時、すぐ近くからこんな会話が聞こえてきた。

「これさ、ホントにあった話だと思う？」

「何々……。……魔法少女？」

「何となく、帽子被った人に見えない？」

何となく耳に入ったその言葉につられて、声のした方を振り返ると、3人の女子中学生が会話しており、そのうちの真ん中に立っていた1人がスマホの画面を他の2人に見せていた。偶然にも大地が立っている位置からもその画像が確認出来た。

そこに写っていたのは、長いつばのついた帽子を被り、箒にまたがって空を飛んでいるという、何ともファンタジー感溢れる画像だった。魔法少女というよりかは、西洋の魔女にも見えなくない。

「小雪はどう思う？」

「えっ？」

不意にスマホを見せていた少女が、その隣にいた、大人しそうな少女に質問した。小雪と呼ばれた、前髪にリボンをつけた少女は少し画像を凝視した後、苦笑いしながら首を横に振った。

「う〜ん……。魔法少女じゃないと思うよ。どっちかっていうと魔法みたいだし」

偶然にも、小雪と呼ばれた少女も大地と同じ考えをしていたらしい。何となく大地は3人から目が離せなくなった。そんな視線に気づくことなく、今度は中央にいた少女が別の画像を見せた。

「ほら、見てみて。まとめサイトまであるよ。魔法少女だけじゃなくて、仮面ライダーも」

「えっ？ 仮面ライダーって、あの……？」

2人だけでなく、大地も気になって覗き込んだ。そこにはこんな記事が掲載されていた。

『箒に乗った少女が高速道路でスピードの出し過ぎを注意していた』

『トラックに轢かれそうになった子供を、突然現れた女騎士が素手でトラックを押し止めた』

『犬耳の少女がナンパされていた女性を助けた』

『エイミみたいな武器をつけた仮面の戦士が、溝に引っかかっていたボールを取ってくれた』

『黒いマントの騎士が、ひったくり犯を捕まえてくれた』

『ガンマンスタイルの女性と紫色の仮面の戦士が、大陸系マフィアを壊滅させた』

「……何これ？ 怪物と戦うならまだしも、何で魔法少女や仮面ライダーがマフィアと戦うのよ？ それだったらこっちの方がまだ信憑性あるっぽくない？」

そう言つて別の少女が指さした記事は、『鏡から出てきた化け物に襲われそうになったところを、緑色のメカニクな戦士が追い払ってくれた』という内容のものだった。

「まあね。でもどつちにしたつて目撃情報がこんなにあるつて凄くない？」

「現場にいた人が投稿したなら、臨場感あり過ぎつしよ？ 第一マフィアが投稿なんてする？」

全くもつてその通りだ、と大地は心の中で同情した。いわゆる外道集団と呼ばれる奴らが、自ら恥を晒すとは思えない。

「よっちゃん、いっつもそうやってあたしの話否定して……。でも本当にいたら面白いじゃん、魔法少女に仮面ライダー！」

スマホを持つ少女が興奮気味に呟いているのを呆れながら聞いていた大地だが、そこにこんな言葉が聞こえてきた。

「よっちゃんもスマイレちゃんも違うよ。本当に魔法少女や仮面ライダーがいても、そんな事する訳ないんだつてば」

「……は？」

「……は？」

2人だけでなく、大地もポカーンとしていた。小雪と呼ばれた少女は目をキラキラさせながら語り始めた。

「魔法少女や仮面ライダーは正義の味方で、どんな時でも困ってる人を助けてくれるんだから！」

しばらく3人……もとい4人だけの空間で沈黙が流れていたが、スマイレと呼ばれた少女が先に合掌しながら口を開いた。

「夢のあるご意見をいただき大変ありがとうございます」

「……ふえっ？」

「小雪はさあ。何ていうか、夢見るよね。妄想ギリギリぐらいの」

「(夢の見過ぎだろ……)」

大地は心の中でそうツツコンだ。すると、よっちゃんと呼ばれた少女が納得した表情を浮かべた。

「あそつか。あんたこういうの好きだったんだ？」

「まあ、嫌いじゃないけどね……」

小雪と呼ばれた少女は照れ笑いを浮かべながらそう言った。どうやら本当に魔法少女が大好きみたいだ。

すると、よっちゃんとと呼ばれた少女が思い出したかのように自分のスマホを取り出してあるサイトを見せた。

「あ、そうそう。これだけどき。さっき言ってたアレじゃない？」

そう言っただけで見た画面には2つのリンクサイトがある。1つは『魔法少女育成計画』で、もう1つは『仮面ライダー育成計画』というタイトルのアプリだった。それを見た大地は、特に『仮面ライダー育成計画』の文字を見た瞬間、ドキツとしてしまった。彼にとってそのアプリは無関係では無かったからだ。因みに小雪と呼ばれた少女も『魔法少女育成計画』の文字を見て、顔が紅くなっていたが、誰もそれに気づかない。

スマイレと呼ばれた少女は訝しげにそのサイトを見つめた。

「魔法少女育成計画に、仮面ライダー育成計画？」

「聞いた事ない？ 結構流行ってるよ。この2つのゲームって、同じスポンサーがついてるって事で、しよっちゅうコラボしてるみたいだよ。」

「へえ……」

「この宣伝で、ゲームの会社がでっち上げてるとかさ」

「なら、小雪もやってるんじゃないの？」

スマイレと呼ばれた少女は小雪と呼ばれた少女に問いかけた。対する小雪と呼ばれた少女は恥ずかしがりながら言った。

「まあ、偶には……」

「……やってるんだ」

スマイレと呼ばれた少女は若干ドン引きしているようだ。

「課金も無いし、絵も綺麗だし、遊ぶと結構面白くて……」

「あ、もしかして小雪。あの噂信じてるんじゃない?」
「噂?」

スマイレと呼ばれた少女だけでなく、大地も気になって耳に意識を集中した。

「マホ育で遊んでると、何万人かに1人、魔法少女になれるんだって」
「ええ!?? 何それ、おかしいよね色々」

「……何だよそれ。魔法少女になれるって……」

大地も思わず耳を疑うような話を聞いて、驚きを通り越して呆れていた。

「だからさ。仮面ライダーの方はあたしも疎いから分かんないけど、目撃情報にある魔法少女って、その噂と連動してる、みたいなの」

「そつかく。大人の世界は汚いなあ。……で、小雪は信じてるの?」
スマイレと呼ばれた少女がやれやれといった表情を浮かべながら、小雪と呼ばれた少女に再び問いかけた。

「! し、信じてる訳無いじゃ……!」

ビクツとしながら否定したのを見て、大地は今までの言動から見て、彼女の言葉が嘘であると悟った。とその時、バスが大きく揺れて、小雪と呼ばれた少女がバランスを崩して後ろに倒れかけた。

「わわっ!??」

「小雪!??」

が、彼女が倒れるよりも先に、大地が片手で背中に手をやって支えた。

そこでようやく大地と、小雪と呼ばれた少女が初めて目を合わせる事となった。小雪と呼ばれた少女が驚いたような表情を見せているのに対し、大地は無表情で見つめている。

「あ、あの! ありがとう、ごさいます……!」

「……魔法少女が好きなのは良いけどよ。自分の事も気をつけろよ」
「……!??」

会話を聞かれていた事を知った彼女は、恥ずかしさが頂点に達したのか、顔をこれでもかというほど紅くして、背を向けた。それからもう一度振り返って小さく頭を下げた。大地は特にリアクションを取

る事は無く、それ以上介入しない事にした。

やがてバス停にたどり着き、3人の少女はそこが目的地だったらしく、会話しながら降車した。それからバスが発進すると、小雪と呼ばれた少女が顔を上げて大地と目を合わせた。大地も不思議と目が離せず、遠く離れるまで互いに見つめ合っていた。

「……変な奴」

小雪と呼ばれた少女が見えなくなった事で、大地はそう思いながら再び外の景色に視線を上げた。

「……けど、何でだろうな。あいつ、どっかで見た事あるような……」

大地の心の中でそんな疑問が解けぬまま、バスは一定速度で道路を走っていた。

一方、小雪と呼ばれた少女も先ほどまで自分が乗っていたバスを、しばらくの間見つめていた。思い起こされるのは、先ほど転倒しそうになった自分を助けてくれた少年の顔。

「……何でかな？ そうちゃん以外、仲良しだった男の子はいなかったはずだけど、初めて会った気がしない……」

「小雪……？ 急がないと遅れるよ」

「あ、うん！ 今行く！」

小雪と呼ばれた少女は、解けぬ疑問をそのままにして、2人の後を

追いかけていった。

だが、彼らはまだ知らない。この何気ない出会いが、その後の2人の運命を大きく左右するきっかけになる事を。

そして、次に彼らが出会うのは、異端の世界で繰り広げられていた戦場である事も。

1. 大地の退屈な日常

教室に入ると、騒がしさは一段と増した。教室という狭い空間ではクラスメイトが固まって談笑しており、大地にとって、鬱陶しい事この上なかった。

窓際の席に、なるべく気配を殺しながら着席して、愛読書を取り出そうとしたが、そうは問屋が卸さないと言わんばかりに、何人かの男子が一斉に大地のいる席に集まってきた。

「よう、大地！」

「おはよう！」

「……おはよう」

大地は素っ気なく挨拶をした。朝からテンション高く話しかけてくるのは、大地にとって好ましくなかった。

そんな彼の心情を知る由もなく、話題は昨夜のテレビ番組の内容や、近所でのおかしなエピソードだったり、大地にとってどうでも良いと思うものへと移っていった。

基本的に相槌を打つだけで、軽く聞き流していた大地だったが、この日は最後までそれが続く事はなかった。

「あ、そうそう！ この記事見たか？！」

「ん？ それって、仮面ライダーとか、魔法少女の事？」

1人の少年がスマホの画面から、今朝出会った女子中学生達が見ていたものと同じサイトの画像を大地を含む皆に見せた。

仮面ライダーに魔法少女。今朝のバスに引き続き、再び話題になり、そろそろ聞き飽きたな、と思いつつもまた軽く聞き流そうと思っただが、少年が見せた記事のタイトルに思わず目が惹かれた。

『N市に出没する謎の戦士と少女、通称「仮面ライダー」及び「魔法少女」のコスチュームが、某人気ソーシャルゲームに登場するアイテムと酷似？』

「某人気ソーシャルゲームって、『仮面ライダー育成計画』とか、『魔法少女育成計画』の事だろ？ まあ、言われてみりやそうかもしれないけど……」

「ただの偶然だろ？」

「それがそうでもないらしいぜ」

と、ここで少年が目を光らせながら、得意げにこんな話をし始めた。「実はさ。別の学校に通ってるいところから聞いた事あるんだけど。この『仮面ライダー育成計画』で遊んでたら、何万人かに1人が、本物の仮面ライダーになれるらしいぜ！」

「……え」

大地は短く呟いた。今朝の話を総合すると、『魔法少女育成計画』と『仮面ライダー育成計画』。その両ゲームで遊んでいたら、ごく稀にそのゲーム内のキャラクターである、本物のヒーロー、ヒロインになれるらしい。

「あ、それなら俺も噂だけ聞いた事ある！」

「何だよそれ。都市伝説だけの話だろ？ 本物なんて、いるわけねえじゃん。俺結構やってるけど、そんな人知らねえぞ？」

「でも、この記事に書かれてるみたいに、このゲームと噂って何か関係してると思うんだよな」

「ふくん……。で、大地はどう思う？」

「あつ？」

「さっきの話だよ。お前もやってんだろ？」

「へえ、そうなのか？」

「う……」

不意に声をかけられた大地はどう答えようか迷い、少し黙り込んでいると、チャイムが鳴り渡り、担任が教室に入ってきた。

それにより討論は中断。この時ばかりは、タイミングよく入ってきてくれた担任に心の片隅で感謝する大地であった。

そんな大地でも、元から人付き合いが苦手な方ではない。友達や知人に対してはちゃんと挨拶を交わしている。ただ、ここ最近になってから様々な都合が出来始めて、段々と面倒になってきているだけなのだ。

例えば放課後。

「よう、大地！」

校門前で元気よく声をかけてきたのは、5人ほどのグループの中心にいた、学生カバンと土のこびりついた部活用のバツグを肩から担いだ、見るからに元気モリモリな少年だった。大地はキョトンとした顔つきで返事をした。

「颯太か。部活は？」

「顧問の先生が職員会議に出てて、今日は朝練だけ」

大地に話しかけてきた少年の名は、岸辺きしべ 颯太そうた。小1の時に始めて出来た親友であり、小学生の頃は毎日といって良いほど遊ぶ事が多かった、大地にとって数少ない、大親友と呼べた1人であった。

同じ学区だった為、中学も同じ場所になったのだが、その頃から2人の仲は激変してしまった。中1の頃はクラスも一緒だったが、大地の家庭でとある事情が出来て、段々と遊ぶ機会が減っていつてしまった。加えて颯太も部活動のサッカーで活躍するようになって、一目置かれる存在になり、教室以外で話す事は無くなった。学年が1つ繰り上がり、クラスが別々になってからは、いよいよ会う事さえ難しくなってしまう。

だからこそ、大地と颯太の2人がこうして面と向き合うのは、本当に久しぶりでもあった。

「なあ。これからみんなで、近くの美味しいバーガーがある店に寄ってこうとしてるんだけど、お前も来ないか？ 久しぶりだからさ」

向こうもそれを気にしていたらしく、快く大地を歓迎しようとした。が、肝心の大地は苦笑しながら首を横に振った。

「……悪い。今日も神社でやる事あって、すぐに戻らなきゃならないんだ。ほら……」

「……あ、そつか。もうすぐ祭りがあるんだっけ」
颯太も何かを察したように呟いた。

「ホントにゴメンな。また祭りの時に時間を見つけて会おうぜ。んじゃあ」

「あ、ああ。またな！ 祭り、ちゃんと観に行くから！」

大地は手を振りながら、バス停に向かって歩き去った。その後ろ姿を見ながら、他の男子達も口々に呟いていた。

「……なんか、付き合い悪くね？ 家の手伝いなんて面倒なだけじゃん。俺だったら絶対サボるし」

「あいつの家って、N神社だっけ？ 親が神主だからって、中学生から手伝わせるか？ 普通」

「あれ？ お前知らないのか？ あいつの所の兄貴ってさ……」

そんな会話を耳にしながら、彼が去っていった方を見つめていた颯太は親友の力になってやれない虚しさを、風に吹かれながら感じていた。

学校からバス停まではそこそこ距離があり、歩いている間に知人と出会うのも珍しくない。

「あー！ 大地君！」

「城戸さん。こんにちは」

1人で歩いていた大地に、原付バイクで走行していた青年がすぐ近

くで停めて、ヘルメットを取ってから声をかけてきた。

彼も大地の知人であり、名を城戸 正史まさしという。N神社の近くに住んでおり、幼少期の大地の遊び相手にもなっていた。現在は都内の一角にある新聞社『OREジャーナル』で、記者見習いとして日夜社会の動向を追っているのだ。

「今日も神社の手伝い？」

「ええ、まあ……。もうすぐ祭りですし、バイトの人ばかりに任せてちや悪いかなど思っ……」

「そつかく。偉いなあ」

「そういう城戸さんも、仕事ですか？」

「うん！ 最近は、例の噂を調査してるんだけど……」

「噂？」

「ほら、この街で目撃されてる、魔法少女とか、仮面ライダーの事とかだよー！」

「ああ……」

「いやあ、スツゲエよな！ 令子さんとかは全然信じないけどさ。俺はやっぱいるって信じてるんだ！ だってさ……！」

もう何度目か分からないが、その単語を聞いて、いよいよようざりしている大地であった。それから、熱心に語る正史とのやりとりが面倒になったのか、声をかけた。

「そういうえば、こんなところで道草食ってて良いんですか？ 仕事中でしょ？」

「……あ、ヤツベエ！ 編集長にすぐ戻って来いって言われてたんだ！」

正史は慌てたようにエンジンを吹かせて、ヘルメットをかぶる前に大地に言った。

「じゃあまた！ もしそれらしい人達を見かけたら、連絡して！ 後、祭りの時はちゃんと取材するから！」

「はーい」

そして正史は、足早にその場を去っていった。相変わらず落ち着きがない人だな……と、苦笑いしながら再び歩き始めた。

しばらく誰とも出会う事なく、バス停の近くの道路に差し掛かった時、道端でシートを広げて、その上に設置された椅子に座る、1人の青年がいた。始めて見かける顔だが、見たところ正史と同一年ぐらいのようだ。

彼の目の前には小型のテーブルがあり、小さめのテーブルクロスの上には、3枚の銀貨が転がっており、側には『コイン占い』と書かれた手作りの看板が置かれている。

一度チラリと見ただけで、関わる必要も無いだろうと思って通り過ぎようとした。

「随分と退屈そうな顔をしてるな」

だが、そういつた時に限って嫌な予感的中してしまう。青年は大地の顔を見て、心情を察したようだ。それから青年は3枚の銀貨を手を持った。勝手に占うつもりなのだろうか。

「あの、お金を払う気は……」

「そんなつもりはない。これは俺の気まぐれだ」

そう言つて、青年は銀貨を一枚ずつ親指で弾いてテーブルに落としました。大地が何となく気になってしまい、目が離せずにいる中、青年はその動作を3回行った後、大地の目を見つめて、こう告げた。

「近いうちに、退屈だと思える日常は終わりを告げる。……ただ、その事が、お前の運命を大きく変える。それも、決して良い事ばかりとは言えない」

「……それって、俺の運勢が悪いつて事？」

「そうとも捉えられる」

だが……、とここで青年はハッキリとした口調で呟いた。「運命は変えられる。君がそれを望むなら、きつと君なりに良い運勢だと思える時が来る」

そう言つてから、店じまいをするらしく、道具を片付け始めた。大地も用は済んだとばかりに立ち去ろうとした。すると、青年が大地の背中を見つめながら言った。

「1つ言い忘れてたが、俺の占いは当たる。絶対だ」

「……」

大地は返事をする事なくバス停に向かって歩いていった。

青年は荷物を全てカバンの中に仕舞うと、周りに気付かれないようにポケットからある物を取り出した。

「……何れまた、俺と会う時が来るかもな。今度は、異能の力を手にして、な」

彼が見つめていたのは、中心にエイの紋章が刻まれている、ピンク色のケースらしきものだった。

家路につき、玄関で靴を脱いでいると、巫女の衣装に身を包んだ、母親が廊下を忙しそうに通り過ぎようとしているのが見えた。母親も息子が帰ってきた事に気付いて呼びかけた。

「大地、おかえり」

「……ただいま」

「早速で悪いけど、着替えて境内の方を手伝ってきて。バイトの子だけじゃ追いつかなくなってるみたいだから」

「分かった」

大地はそう返事してから、2階の自室に入って荷物を置き、境内の控え室に入って、袴に着替えた後、バイト仲間と共に売り場を手伝ったり、境内を掃除してたりと、忙しく働いていた。市内で有名な観光スポットという事もあるが、間も無く年に2回ある祭りが迫っているので、いつも以上に参拝に訪れる人は多い。

休憩用の紙コップやポットを運んでいる大地の姿を見ていた参拝客は、小さな声で口々に呟いていた。

「大変だねえ……。まだ中学2年生なのに、あんなに忙しく働いてて……」

「それに引き換え、あの子のお兄さんは……」

「もう1年になるんだっけ？ 彼のお兄さんが急にいなくなったのって……」

「噂じゃ、経営に嫌気がさして家出したかもしれないって」

「それであの子が仕方なしに後を継ぐ事になったって訳か」

「昔はそんな悪い子には見えなかったけどね……」

この日も全ての行事が終了し、時刻が9時を回った頃、ようやく一家揃って食事が始まった。両親がクタクタになりながらも互いに労いながら食卓に並ぶ料理に箸を伸ばす中、大地は黙々とご飯を口に運んでいた。視線は誰もいない空間が広がっている。

正方形のテーブルを囲んでいるわけだが、彼の対面には、伏せられた状態の茶碗や湯のみ、箸が置かれている。

それらは約1年前まで、大地の兄である律木りつきが使用していたものであった。

今では恥ずかしくて口には出せないが、大地にとって律木は自慢の兄であった。おやつを半分に分けてくれたり、一緒に遊んでくれたり、怪我した時もすぐに応急処置をしてくれたりと、優しくしてくれた。喧嘩も時々したが、最後にはちゃんと仲直りできるほどに、誰の目から見ても中の良い兄弟だった。

そんな兄が忽然と姿を消したのは、1年ほど前だった。兄が本格的に将来の進路を考え始めた矢先の事だった。行き先も告げずにフラリと出かけてから、神社に姿を現す事なく現在に至る。警察と協力して捜索してもらったが、手がかりは掴めず。半年ほど経ってから、遂に両親の方から心が折れて、捜索を打ち切る事となった。その結果、次男である大地が神社の経営に携わる事になり、次期神主として、日々手伝いに駆り出される事になったのだ。毎日似たような仕事が続く、退屈に思い始めたのも、思えばその頃からだった。

皆は口々に、兄は逃げ出した、兄は両親や弟を置いて勝手にどこかへ行ってしまった、などと律木を批難するような言葉を呟いていたが、大地だけは違うと感じていた。

あんなに優しかった兄が、何の理由も無しに自分達の前から姿を消すとは思えなかった。

「(きつと、どこかで大きな事件に巻き込まれたんだ。そうじゃなかったら、絶対におかしい……!)」

大地は常に自分にそう言い聞かせて納得させた。

ご飯を食べ終えた後、自室にこもった大地は、宿題を済ませた後、ベッドに寝転がってスマホの電源を入れて、あるアプリを起動させた。画面には鳥のような姿のマスケットキャラクター……シローが誠実そうな男性の声で叫んだ。

『仮面ライダー育成計画へようこそ!』

大地は途中で思い出して、机の上に置かれていたペットボトルを持ってくるために、スマホをベッドに置いた。スマホからはシローの元気そうな声が響いていた。

『あなただけの理想のヒーローになるためのRPG、それが仮面ライダー育成計画なのです! いつの時代も勇気が必要です! さあ、みんなも一緒に、最高のか』

前置きを聞くのが面倒になったのは今に始まった事ではない。さっさとタップする事で飛ばして、クエストを始める事にした。

毎日を退屈に過ごしていた大地であったが、ここ最近になって、そんな暇を持て余す為に始めたのが、この『仮面ライダー育成計画』で

あつた。

『仮面ライダー育成計画』

それは「魔法の国」から、世界中で悪さをしている怪物をやっつける為に送り出された「使者」……すなわち仮面ライダーという設定のもと、様々な特殊能力やアイテムを駆使して、「モンスター」と呼ばれる怪物を退治し、世界の平和を守るという、クエスト系のゲームにはありがちな設定のソーシャルゲームだった。このアプリは基本的にヒーロー系が好きな男子から人気を博しており、その反対に女子に人気なのが、今朝も話題になっていた『魔法少女育成計画』なのである。

『魔法少女育成計画』は、いわば『仮面ライダー育成計画』の女性向けバージョンのようなもので、どちらも同じ会社、スポンサーによって配信されている。そのためか、しよっちゆうと言っていていほど合同イベントが行われたりしており、どちらもゲームを進行していくにあたって重要なアイテムとなる「マジカルキャンディー」が使われている。

大地がこのゲームをやるようになった理由は簡単だった。律木が空いた時間にプレイしていたからだ。本人もこれは面白いと太鼓判を押しており、失踪する直前まで会話の話題にしていた。

当初はまだ携帯という電子媒体を所持していなかった大地には、どこがそんなに面白いのか、理解出来なかった。が、1ヶ月ほど前によく買ってくれたスマホで、途中で飽きたら止めればいいと思いつながらダウンロードしてやり始めたのだが、これが意外にも退屈だった日常を少しばかり払拭させる、暇つぶし方法となった。

周りの人達のコメントや最初にあったシローの説明通り、初心者でも簡単に入り込めるし、マジカルキャンディーを集める事でたくさんアイテムを手にして、自分が設定したアバター……もとい仮面ライ

ダーを強化して、自分の理想とする戦術やコンボが構築出来た。何よりも、いくらプレイしても完全非課金である事が、大地にとつて大助かりだった。この辺りが、人気の秘訣である事は間違いないかった。

大地自身もゲームは苦手ではない為、時間が空いた時には決まって『仮面ライダー育成計画』をプレイしていた。こういった方面には決して弱くなかったのが功を奏したのか、着々と強化は進んでいた。「ええつと……。こいつは確か無駄に硬いから、このカードを使って先にダメージを与えておいて、と……。よし、後はこの必殺技で……。……よし！」

順調にモンスターを倒し、マジカルキャンディーやアイテムをゲットした大地は小さくガッツポーズをした。そんなこんなでスマホをいじっていると、気がつけば、日付が変わろうとしていた。

「……今日はここまでだな」

時計の針の位置を確認した大地は、ログアウトしてから充電器につかないだ。

それから明かりを消して、ベッドに横になった時、不意に今日1日の出来事を思い出した。

『マホ育で遊んでると、何万人かに1人、魔法少女になれるんだって』『この「仮面ライダー育成計画」で遊んでたら、何万人かに1人が、本物の仮面ライダーになれるらしいぜ！』

『俺はやっぱいるって信じてるんだ！』

『運命は変えられる。君がそれを望むなら、きっと君なりに良い運勢だと思える時が来る』

「あの占い師の言ってた事も気になるけど、魔法少女に仮面ライダーか……。んな話、デタラメに決まってるのにさ……。」

大地はやれやれと思いつつ、占い師の言葉を気にしつつ、眠りについていた。

……だが、あの青年が言っていた占いが本当に的中する事態が起こってしまった。

「……ん。今度は複数で攻めてくるモンスターか。なら、このカードで分裂させて、一斉攻撃、と。……ふう、楽勝だな」

それは、占い師と出会って3日後の夕方。この日は珍しく参拝客が少なかった為か、帰宅してすぐに母親から呼び出される事はなかった。そして暇を持て余す為に『仮面ライダー育成計画』をプレイし、幾度となく戦ってきた事のあるモンスターを難なく退治し、マジカルキャンディーやアイテムをゲットした。

喉が渴いたので、一旦ゲームを中断しようとして、終了ボタンを押しそうとした。が、突如その画面が消えて、シローがフワフワと横に動きながら、画面いっぱいに映った。

『おめでどうー！ 私はシロー。このゲームのマスコットキャラクターを務めている！』

「今更だな……。つてか何だこれ？ また合同イベントでも始まるのか？」

『さて、君にとって嬉しいお知らせだ！』

大地が、見た事のないコマンドに戸惑っていると、シローがある事を告げた。

それを聞いた瞬間、大地の目は大きく見開かれた。

それは彼にとって信じがたいものであり、その内容とは、次のようなものであった。

『君は、本物の仮面ライダーに選ばれたのだ！』

2. 変身！ その名は「九尾」

『君は、本物の仮面ライダーに選ばれたのだ！』

突然シローから告げられたのは、本物の仮面ライダーに選ばされたという、にわかには信じがたい通達だった。

「……なあに、これ」

大地は思わず間延びした口調でそう呟いた。

『そうやって驚くのも無理はない。君の事は、このアプリを通じて、常にチェックさせてもらっていた』

「!?？」

突然返ってきた返事は、元々設定されていたセリフというよりは、まるでリアルタイムで会話しているような雰囲気だった。

『榊原 大地。君は行動や性格、知力。これらの要素において、全てが基準を満たしている。よって君には、仮面ライダーになる資格があると判断した』

すると画面は切り替わり、狐のような形の紋章が出てきた。『今すぐ仮面ライダーになる』と、『タップ』という表示が出ている事から、今の画面をタップする事で、仮面ライダーになれるという事らしい。

『さあ、全ての準備は整った。後はその画面に触れるだけだ』

「ちよ、ちよつと待てよ!?？」 急にそんな事言われたって……!! 大体これって、何の冗談だよ!?？」 仮面ライダーになれって、そんなのなれる訳……!!」

『なれるさ。現にこうして私がスカウトしに来たのだから』

「でも……」

未だに納得がいかず、タップする事にためらっていた大地だが、そんな彼に、シローはこう呼びかけた。

『君は、今の日常に退屈してたのだろう?』

「! どうしてそんな事……」

『さっきも言ってた通り、私は常に君を観察していた。君の考えてる事など、すぐに分かった』

「(監視されてたのか……)」

何となく薄気味悪く感じていた大地だが、シローは御構い無しに話しかけてきた。

『仮面ライダーの力があれば、君の悩みなどすぐに解消される。君なりの満足した生活が待っているんだ』

「……」

一見甘い誘惑にも聞こえるが、大地は深く真剣に考えさせられる言葉だった。

『君自身が変わるんだ。今の自分を。今の日常を』

正直なところ、嘘くさく聞こえる勧誘だったが、今の日常を変えたいと思う気持ちは本物だった。

「……変わり、たい」

思わずそう呟いてしまうほど、今の大地の心情は揺れ動いていた。

「……！」

そして意を決した大地は、狐の紋章をタップした。

刹那、画面から光が溢れ出て、大地を包み込んだ。

「……！」

光が晴れると、そこは真つ暗な空間だった。スマホを持った大地の目の前には、大地よりも背の高い、人の形をした狐が立ったままジッと睨みつけていた。まるでゲームに出てくるモンスターのような雰

困気が出ていたが、不思議と大地には恐怖心が生まれなかった。むしろ安心感があるように思える。

狐のモンスターは足を動かして、品定めをするかのように大地の周りを一周していた。やがて再び目の前で立ち止まると、手を突き出して、大地の胸の辺りに当てた。すると、狐のモンスターは吸い込まれるように大地の体内に入り込み、驚いていた大地は再び光に包まれた。

「……はっ！」

不意に目を開けると、そこは元の自室だった。

夢でも見てたのかとしばらくぼんやりしていたが、そこで奇妙な違和感を感じた。体中を覆うように、何かを着込んでいるような気がしたのだ。気になった大地は、スマホを確認してみた。その時、全身に鳥肌が立った。

スマホの画面は、狐の紋章が消えて白く光っているだけなのだが、問題はそのスマホを持つ手にあった。

そこにあつたのは肌色の素手ではなく、純白にコーティングされたガントレットだった。思わずスマホを落としそうになるが、まさかと思つた大地は、すぐ側に置かれている姿見に駆け寄って全身を確認した。

そこに映っていたのは……。

上半身は袴をイメージした、普段大地が着慣れているような仕事着に酷似したアーマー。下半身は、腰から足元にかけて、毛皮で出来た、動きやすさを重視したかのように前が開いている袴のような姿。左腕には先ほど触れてきた狐のモンスターの顔に似た機械が装備されている。腰にはベルトが巻かれてあり、中心には狐の紋章が刻まれているケースのようなものがある。そして何より特徴的な、狐のお面のような形の仮面が、鏡に映っていた。

一瞬目の前に映る者が誰だか分からなかった大地だが、見覚えのあるシルエツトだと思った時には、シローが話しかけていた。

『おめでとうー。君は今日から、仮面ライダー『九尾』として活躍出来るようになったんだ』

「九尾って、ええ……!?？」

大地……もとい九尾は思わず顔の部分でもある仮面をペタペタと触り始めた。そして理解した。今自分がなっているその姿は、先ほどまでプレイしていた『仮面ライダー育成計画』において、自身のアバターとして設定していた仮面ライダー……九尾そのものだという事に。

「……本当、だったのか……？ 仮面ライダーになれるって」

『もちろんだ。その姿は、君が今日までゲーム内で積み上げてきた努力の結晶。ステータスもゲームの時とほぼ同じだ』

シローの言葉を聞きながら、九尾は鏡に映った自分の姿を凝視していた。

夢ではない。そして噂は本当だった。間違いなく本物の仮面ライダーに、榊原 大地は変身したのだ。そして思い起こされるのは、3日ほど前に占い師が告げた事。

「退屈だと思える日常は終わる……。それってこの力を手にした事と関係でもあるのか……?？」

『どうかしたのかい?』

「いや、何でも……。でも、この姿になって、俺にどうしろって言うんだ？ 何か目的でもあるのか?？」

『仮面ライダーの役目は、魔法少女と同じだ。ある2つの目的を持って活動する訳だが、説明する前に、私からプレゼントを差し上げよう。手を出してくれ』

九尾は言われるがままに右手を出した。すると手のひらに見た事のない謎の端末が出現した。

『それは仮面ライダーや魔法少女に共通して支給される魔法の端末「マジカルフォン」だ。基本的なチュートリアルはマジカルフォンか

ら学ぶと良い。能力のステータスチェックやマジカルキャンディーの所持数や通信機能といった、これからの君をサポートしてくれる便利アイテムさ』

「通信機能……？」

『仮面ライダーや魔法少女との連絡さ。この街には他にも大勢の同胞がいるからね』

「ふうん……。で、役目って具体的に何？」

『先ほども述べたように、仮面ライダーも魔法少女も役目は同じだ。1つは、困っている人達に対する人助け。そしてもう1つは……』

シローが2つ目を説明しようとした時、マジカルフォンからキイイイイイン！ という耳鳴りに近い音が鳴り響いた。

「!?？ 何だよこれ!?？」

『どうやら説明するよりも早くその時が来たようだ』

「だから何が!?？」

『君達のもう1つの役目は、モンスターを退治し、人々を脅かす脅威を退ける事だ』

「モンスター……!?？」

シローから告げられた内容に、九尾は食い入るように叫んだ。

『君もゲームの中で様々なモンスターを退治していただろ？ そのモンスター達は、現実世界でも実体化して、人々に対し悪さを働いている』

「なっ……!?？」

『人間の力では、到底彼らに太刀打ち出来ない。でも、人知を超えた力を持つ君達なら』

「そいつらを倒せるって事か……」

どうにかして理解した九尾は、シローの案内に従い、モンスターが出現するであろう場所に案内された。

ただでさえ今の大地の格好は目立つ上に、都市伝説でもある仮面ライダーを見かけたら、騒ぎが大きくなってモンスターを見つけたころではなくなる。九尾は身を隠し、細心の注意を払いながら境内を駆け抜けていた。

「けど、モンスターなんてどっから来るか分かるもんなのか？」

『この街に出没するモンスターの特徴の1つとして、鏡が関係している。奴らは鏡の中で息を潜め、隙を見て人間を襲う。特に危険な奴は、そのまま人間を捕食してしまう事だ。十分危険な存在だ』

「鏡……」

『今は私が反応を辿っているが、慣れてくれば、私やマジカルフォンに頼るだけでなく、自分から察知する事も可能だ』

シローからの説明を受けながらしばらく進んでいると、シローが呼び止めた。

『反応が強くなってる。すぐ近くにいる証拠だ』

九尾は立ち止まり、物陰に隠れてモンスターを探し始めた。

九尾のいる長い廊下には、巫女装束を来たバイトの子が荷物を運んでいる。彼女の後ろ姿から少し視線を外した時、九尾は気づいてしまった。

廊下に置かれた、化粧直し用の丸い鏡の中に、ありえないはずの光景が広がっていた。巨大な牙を上下に動かし、今にも女性に襲いかかろうとしているのは、『仮面ライダー育成計画』内で何度も見かけた事のあるモンスターだ。

女性が鏡のある所を通り過ぎると、モンスターは鏡の中から抜け出して、背後から襲いかかろうとする。だが、あと少しというところで横から人影が飛び出して、その人影もろとも、鏡の中に吸い込まれてしまった。

不意に何かの気配を感じた女性は、立ち止まって振り返ったが、そこには誰もいない。気のせいかと思った女性は何事も無かったかのようにそのまま奥へと進んでいった。すぐ近くにあった鏡に、2つの影が対峙しているのが映っているとも気づかず。

一方、九尾は女性に襲いかかろうとしたジグモ型のモンスター……
ミスパイダーにタックルして、そのまま廊下を転がっていた。

「くっ……！ 何とか間に合ったか……？」

九尾が辺りを見渡すと、ある異変に気付いた。

廊下には女性の姿はなく、外を覗き込んでも、先ほどまでちらほら
といた参拝客が消えていた。人の気配がないのだ。

さらに驚くべき事に、すぐ側に建てられていた看板の文字が、まるで鏡に映した時のように反転しているのだ。

「なっ……！！？ へっ、どこだよ！！？」

『ここはモンスター達が生息する、鏡の中の世界。通称「ミラーワールド」だ。現実世界と表裏一体で存在している、反転した世界。ここでなら、人目につかずにモンスターと戦う事も可能だ』

「ミラー、ワールド……」

『さあ、説明はこれ位にして、後は実践あるのみだ。敵が攻めてくるぞ
！』

「！」

ハッと振り返ると、ミスパイダーが飛びかかってきたので、慌てて
身を翻して回避する。身体能力が向上しているらしく、軽く飛び上
がっただけでも高く舞い上がった。

「おっと……！」

『言い忘れてたが、仮面ライダーになった事で、あらゆるスペックは並
の人間を超越している。現実世界で動く時は十分注意しておいてく
れたまえ。違和感はあるかもしれないが、これも慣れてくれば気にな

らなくなるだろう』

「なるほどね……」

バランスよく着地した後、変化した自分の両手を見回した。

これこそが、都市伝説として魔法少女と肩を並べる、もう1つの力の象徴。それが、『仮面ライダー』。

そういえば、子供の頃は律木と共にテレビの特撮ヒーローに憧れて、いつか同じ姿になりたいと願っていた時もあったな、と思い返していた。

あの頃は夢物語に過ぎないと自分に言い聞かせ、何時しか心の片隅に置き去ったはずの感情が、時を経て、今度は本物のヒーローとしてぶり返しているように思えた。

「さすがに幼稚な子供じゃねえから、もうそこまで興奮したりはしないけど、こうしてなった以上、俺が代わりにこいつらを倒さないと……！」

「挿入歌：果てなき希望」

『その心意気だ。君の戦い方は、ゲームの時と同じだ。アドベントカードを駆使して、敵を倒すんだ！』

「それなら先ずは……」

九尾は左腕についていた、狐の顔のような召喚機『フォクスバイザー』の口の部分を開いて、カードデッキから1枚のカードを取り出して差し込んでから口を閉じてベントインした。フォクスバイザーから音声が聞こえてくる。

『SWORD VENT』

すると上空から、刀身が長い刀型の武器……フォクセイバーが2本現れて、それらをそれぞれの手でキャッチする。

「はあっー」

一声気合いを入れてから、九尾はミスパイダーに突撃した。ミスパイダーも向かってくる気迫に負けじと襲いかかる。

ミスパイダーが噛みつきこうと飛び出してくるのに対し、九尾はヒラリとかわしつつ、フォクセイバーで難なく斬り裂いている。剣舞の如く、華麗に敵の攻撃を捌き、軽い身のこなしで攻撃しているその姿は

まさに圧巻の一言に尽きるものがあつた。

「グルルルル……！」

業を煮やしたミスパイダーは突進してくるが、九尾はフォクセイバーをクロスして受け止めた。両足で踏ん張りながら押し留めて、逆に押し返してミスパイダーを地に伏せた。

九尾は一旦下がって距離を置くと、新たにカードを取り出してベントインした。

『FINAL VENT』

「はあああああつ……！」

九尾が両腕をクロスして神経を集中していると、彼の隣に狐のモンスターが並び立った。そして両者は飛び上がり、九尾が前に1回転して右足を突き出すと、狐のモンスターは右足に覆い被さるようになりみついた。すると、9つの尾が足先に向かって絡みつき、鋭利な形に変形した。

「ウオオオオオオッ！」

そのまま勢いに乗って、強烈な蹴りがミスパイダーに直撃。ミスパイダーは爆散し、九尾の必殺技『ブレイズキック』が決まった証拠でもあつた。

「……よし！」

着地と同時に狐のモンスターは足から離れ、九尾の隣に降り立った。

「……そういえば、こいつの名前って何だっけ？」

『このモンスターは、さつき君が戦ったモンスターと違って、君をサポートしてくれる「契約モンスター」だ。名前は「フォクスロード」だ』
「そうか。じゃあよろしくな、フォクスロード」

九尾がフォクスロードの頭を撫でると、気持ち良さそうに喉を鳴らした。

すると、マジカルフォンが鳴り響いたので確認してみると、『マジカルキャンディー』という文字が浮かび上がり、その下に表示された数字が上昇した。

「これは……？」

『これが俗に言う報酬というやつさ。モンスターを倒せば、その強さに応じた数のマジカルキャンディーをゲットできる。無論、人助けをする事で同じようにマジカルキャンディーは手に入る。モンスター退治も人助けの一環だからね』

「こんなの持ってて何の意味があるんだ？ アイテム交換出来る所なんて無いし」

『そうとも限らない。今はまだ使い所が無いとはいえ、何れ必要になる時が来るかもしれない。所持しておいて損は無いとだけ言っておくよ』

「ふくん……」

すると、マジカルフォンから再び音が鳴り始めた。

『おっと。そろそろ時間切れか。ミラーワールドでの活動時間には制限がある。人間はもちろん、ライダーや魔法少女も本来ならこの世界では長くいられない。体が粒子化して消滅してしまうからね』

「ゲツ!?? 先に言えよー」

『心配いらぬ。そうならないように、一定時間を過ぎたら今のよう
に警報が鳴り、強制退出させるように、私が設定してある』

「そ、そっか……」

『もちろん早く出るに越した事は無い。近くに鏡さえあれば、仮面ライダーや魔法少女なら行き来は自由だ』

シローの言葉を聞いた九尾は、先ほど使用した鏡から元の世界に戻った。

現実世界に戻れた九尾は、人目につかない所に避難してから、ベルトについたカードデッキを外した。瞬時に九尾の姿は、普段着を着た大地の姿に戻った。

「これが、仮面ライダーの力……」

『初めてにしては上出来だったよ、榊原 大地。君は中々の素質を秘めていると見た。これなら教育係も困る事は無いだろう』

「教育係……?」

『さつきも言った通り、この街には多くの同胞がいる。現時点で仮面ライダーと魔法少女は共に14人ずつ。計28人となっている』

「そ、そんなにいるのか!?」

大地は同胞達の多さにたじろいでいた。

『そして今日、君は15人目の仮面ライダーとなった。新人には必ず教育係が必要となる。お互い助け合っていく事が、人助けやモンスター退治の秘訣だからね』

「そうなのか……」

『誰が担当するかはまだ検討中だ。なるべく近場の者に頼むようにするが、少なくとも1週間はかかると思ってくれ。その間はもうしばらく個人で人助けやモンスター退治を続けて欲しい。困った時や誰かがピンチに陥っていたら、その時は構わず援護してくれ。私に相談してくれても構わない』

「あ、ああ……」

『それでは、今日はこの辺で失礼させてもらう。明日から本格的に活動を始める事になるだろうけど、今の君なら問題無いと踏んでいる。この街の平和の為に、その変身アイテムを活用してこれからも頑張ってくれたまえ』

それだけ告げると、シローは画面から消えて、辺りに静けさが戻った。

ホッと一息ついた大地は、マジカルフォンとカードデッキを交互に見つめていた。

「(これ、全部夢じゃ無いんだよな。本当にあのモンスターを倒したんだ。この力があれば、毎日退屈しなくても済むかもな……)」

そう思った大地は少しばかり上機嫌になって、2つのアイテムをポケットにしまい、その場を離れた。

丁度そのタイミングで母親とバツタリ遭遇した。

「あら大地。そんな所にいたの？」

「あ、まあ……。ちよつと気分転換にブラついてただけ」

「そう……。ならついでに買い物に行ってきたよ。お金も渡すし、リストはここに書いてあるから」

「良いよ」

「……？ 今日機嫌良さそうね？ 何かあったの？」

「ん？ 何て事ないよ」

大地は久しぶりに、にやけながら買い物袋やサイフ、食品の書かれたリストを受け取って神社を後にした。きつとこれも人助けの内に入り、またマジカルキャンディーが集まるかもな、と思いながら、明日から始まる、退屈しない日常をどう過ごすか検討しつつ、石段を降りていった。

『……あれがこの街に誕生した15人目のライダーか』

『中々に強そうですね。これからが楽しみです』

林の中から、花に包まれた魔法少女と、黄金の不死鳥をイメージした仮面ライダーが見ている事に気付かずに……。

3. 白き魔法少女

姫河^{ひめかわ} 小雪^{こゆき}は、魔法少女に憧れる、妄想癖がちよつと強めな中学2年生であつた。

幼少期から休日の朝に放送されている、奇跡の力を得た魔法少女が悪と戦うようなテレビアニメに魅了され、常にテレビの前で、買ってもらつた変身アイテムやら武器等の玩具を持って少女達の真似をしたりしていた。

魔法少女は人々の幸せを守る為にどんな危機にも挫けず、時には1人で、またある時は仲間と共に力を合わせて悪に立ち向かう姿に、小雪は感銘していた。

将来は魔法少女になる事を、女友達や幼なじみの男子にも堂々と宣言していた時期もあつた。

とはいえ、時と共に周りの同級生達は、そんなものはもう幼稚だと切り捨てて、誰も口に出すような事はしなくなる。単純に恥ずかしいからだ。そんな中でも、小雪は魔法少女に固執し続けた。ただ、周りに語るのはやはり恥ずかしかつた為、心の内に秘め続けるだけにしておいたが……。

唯一口に出して語れる相手は、幼なじみの男子だけだつた。彼もまた、魔法少女が好きであり、親戚から昔の魔法少女系アニメを借りて、小雪に貸していた。そんな彼も中学に上がる頃には学区の違いを理由に別々の道を進む事になり、疎遠になりつつあつた。

周りで魔法少女について語り合う相手がいなくなつて、何とも言い難い寂しさを覚えつつも、魔法少女を崇め続けた。

くそれでも私は、夢見てるく

という言葉自分を言い聞かせて。

そんな彼女が『魔法少女育成計画』の事を知らないはずも無く、先日やつと親からの許可を得てスマホを手にした時には、真つ先にダウンロードして、プレイし続けた。当然『魔法少女育成計画』や、その男子版として人気の『仮面ライダー育成計画』に関する都市伝説も耳にした。

もつとも小雪自身は最初からその噂を信じて『魔法少女育成計画』を始めた訳ではない。極端に言えば、信じてさえいなかった。なれたらなりたいし、なれなくても魔法少女のゲームはやってて楽しいし、非課金だから続けていきたい。そんな気持ちで毎日欠かさずプレイしていた。

『おめでどうぼん！あなたは本物の魔法少女に選ばれたぼん！』

右半身が黒、左半身が白で、蝶のように片羽をはためかしている『魔法少女育成計画』のマスコットキャラクター……ファヴが小雪にそう告げたのは、ゲームを始めてから28日目。モンスターを倒し、下の

階から母親が夕飯の準備が出来た事を告げられて、ゲームを中断しようとした矢先の事だった。

最初はまた『仮面ライダー育成計画』との合同イベントの類かと思っていたが、事前に通知も無かった事に訝しんでいると、ファヴはフルフルと横に揺れながら呟いた。

『違うぽん。君は真正正銘、本物の魔法少女に選ばれたんだぽん』
「へ、返事した!?？」

『姫河 小雪。ファヴは君の事をずっとチェックしてたぽん。あなたは魔法少女における行動、性格、知力が全て適正であると判断したぽん』

「嘘、でしょ……? 私……!?？」

突然告げられた内容に、小雪は整理が追いついていなかった。

そうこうしている内に画面は切り替わり、魔法陣と『魔法少女になる』と『画面をタップするぽん』という表示が出た。ここまで本格的に表示されているところから見て、魔法少女になれるというそれが事実であると判断した。

『魔法少女になりたくないのかぽん?』

中々タップしない小雪に痺れを切らしているように急かすファヴだが、小雪は胸の高鳴りが抑えきれないほどに強くなっていた。

「(魔法少女に……! 本物の……!)」

次の瞬間、小雪は迷うことなくタップする。すると画面から光が溢れて、小雪を包んだかと思うと、その姿は一変した。

まずは自分で腕や足などを確認し、その後鏡に映る全身を見つめた。学生服をモデルにして、全体的に白く、スカートはフリルで縁取られている。プリーツスカートには白い花飾りを散らしてあり、白いブーツを履いている。オリジナルの腕章が左腕についており、プラチナブロンドはリボンと白い花飾りで彩られている。

その姿に、小雪は見覚えがあった。幼い頃に流行っていた漫画の主人公が通う中学校の制服を基調とした、彼女が画用紙にわざわざ描いたり、常に理想の魔法少女として思い描いていて、それをそのままゲーム内でアバターとして作り上げた姿そのものである。

「え、ええっ!?? これ、本当に……!??」

目を見開きながら全身を見回している小雪に対し、ファヴは得意げに話しかけた。

『おめでとうぽん！ 君は魔法少女『スノーホワイト』になれたんだぽん！』

「……！ やったああああああ！」

夢ではない。自分が諦める事なく憧れ続けた魔法少女に、14歳の自分がなれたのだ。歓喜のあまり、小ジャンプのつもりで飛び上がったのだが、気づいた時には自室の天井に頭を打っていた。そして床に叩き落とされて痛めた箇所を手をやっていると、母親が近くに駆け寄ってくるのが分かった。いつになっても来ないし、突然大きな音が娘の部屋から聞こえてきたので、母親としては何事かと思い、階段を上ってきたのだ。スノーホワイトは母親が部屋に入る前に慌てて小雪の姿に戻り、転んだだけだと若干無理のありそうな言い訳で追い返して、気配がなくなったところで再びスノーホワイトに変身した。

ホッと一息ついていると、再びファヴが話しかけた。

『魔法少女になれば、あらゆる身体能力は非常識なまでに向上するぽん。だから気をつけるぽん』

「は、は……」

『じゃあ、手を出すぽん』

スノーホワイトが言われた通りに手を出すと、見た事のない端末が光と共に現れた。

『魔法の端末「マジカルフォン」だぽん！ 基本的なチュートリアルはもちろん、マジカルキャンディーの数のチェックや、自分のデータも確認できるぽん。マジカルフォンは仮面ライダーにも支給されるから、仲間の魔法少女だけでなく、仮面ライダーとの連絡も取れる、優れものだぽん！』

「仲間……? それに、仮面ライダーって、本物の……?」

『もちろんだぽん。君と同じく、「仮面ライダー育成計画」を通じて、シローが厳しくチェックして選ばれた、魔法少女と同じ力を得た戦士だぽん。この街には、つい先ほど、シローからの報告で15人目の仮面

ライダーが誕生したと聞いてるぼん。そして君も今日から15人目の魔法少女。これでこの街にいる魔法少女と仮面ライダーは全部で30人になったぼん』

「さ、30人!?？」

スノーホワイトは同胞の多さに驚く他なかった。

夕飯を食べ終え、両親が寝静まったところで小雪はスノーホワイトに変身し、外に出て誰もいない校庭で密かに自身のステータスを、跳んだり跳ねたり、パンチしたりキックしたり、宙返りしたりと、体を動かしながら確認した。

フアヴから告げられた、魔法少女としての役割は主に2つ。1つは困っている人達の手助けをする事。もう1つはこの街に出没するモンスターを退治する事。

後者に関してはあまり実感が湧かなかったスノーホワイトだが、現場に立ち会った時に対処しようと考えた。基本的に写真や動画に撮られても、正体が判明しないようにフアヴやシローが設定しているらしく、堂々と活動してくれても構わないと言う。

憧れ続けた魔法少女になったと実感し、喜びと興奮が押し寄せる中、スノーホワイト……もとい小雪は魔法少女にしてくれた、魔法の国に感謝した。

次の日の夕方から、スノーホワイトは本格的に活動を開始し、瞬く間にブログでは人気を博す事となった。その事に関しては特に気にしてないスノーホワイトだが、唯一気になったのは、スノーホワイトと同日に仮面ライダーになったとされる者の事だった。どこことなく縁を感じるので、近いうちにどこかで会ってみたい。そんな事を思いつつも、今宵も人助けの為に夜の街を駆け巡る新人魔法少女、スノーホワイトであった。

無論、N市で活躍しているのはスノーホワイトや、同日仮面ライダーになった九尾だけではない。各所で魔法少女や仮面ライダーは目的こそ違えど活動している。

N市に出来た、鏡を隔てた先にあるもう一つの世界『ミラーワールド』の一角では2つの人影が、巨大な蜘蛛のモンスター……デイスパライダーにトドメを刺そうとしていた。

「ふっ……い！」

着物をモチーフにしつつ水着のような露出度の高い服装……もといコスチューム。高下駄に手裏剣型の髪留め。赤い襟巻きと鉄色の髪留め以外は黒系一色でまとめられたその魔法少女の姿は、一言で例えるなら『忍者』。そんな魔法少女は俊敏に駆け回りながら、手持ちの手裏剣を地面に向かって投げつけて、デイスパライダーの行動範囲を狭めている。一寸も狂わず正確に円形に投擲出来るその技術は、ただの人間はもちろん、本物の忍者でも上級者でなければ出来なさそうな芸当を、難なくその魔法少女はやれている。それもそのはず。その技こそが彼女の魔法なのだから。

「ナイト……い！」

ある程度投げ終えた魔法少女は、少し離れた所にいたもう一人に合図を送った。

月明かりに照らされ、兜のフェイスシールドの奥から青い複眼が見える、コウモリをモチーフとした西洋の騎士らしきその姿は、正しく仮面ライダー。魔法少女に促された仮面ライダー『ナイト』は頷くと、カードデッキから1枚のカードを引き出し、手に持っていた剣状の召喚機『ダークバイザー』の、ナックルガード部の翼を広げるように展

開し、カードをベントインする。

『FINAL VENT』

直後、ナイトは飛び上がり、どこからか現れたコウモリ型の契約モンスター『ダークウイング』がナイトの背中に張り付く事で合体し、マントのようになる、ドリル状に全身が包まれ、急降下。

「はあっ！」

ナイトの必殺技『飛翔斬』が抵抗する間もないデイスパイダーを貫き、デイスパイダーは爆散。辺りが炎に包まれる中、ナイトは静かに立ち尽くしていた。そしてゆっくりと炎から抜け出て魔法少女の側に寄った。直後、マジカルフォンからミラーワールドでの活動時間のタイムリミットが迫っている事を知らせる音が鳴り響いた。

「……行くぞ、リップル」

「ええ」

リップルと呼ばれた魔法少女はそれだけ眩き、2人は近くの鏡からミラーワールドを後にした。

先ほどまでデイスパイダーがいた場所に、黒い瘴気が集まっている事に気づく事なく。

現実世界に戻ったナイトとリップルは、人目のつかないビルの上で近くの手すりにもたれかかり、今回の戦闘で獲得したマジカルキャンデーを確認した後、まとめサイトの該当記事をチェックしていた。

「随分と派手にやってるようだな」

「これ、本当……?」

2人が見ているのは、N市城南地区を『縄張り』としているガンマンスマイルの魔法少女『カラミティ・メアリ』と、暴君としてカラミティ・メアリと共に行動している、野蠻な噂が絶えない仮面ライダー『王蛇』がマフィアを壊滅させたという情報だった。

リップルの疑問に答えたのは、彼女のマジカルフォンから飛び出してきたファヴだった。

『ガセかもしれないぼん。マジかもしれないぼん』

「曖昧だな」

ファヴが宙返りする度に、体から舞い散る鱗粉の眩しさを鬱陶しそうにしながら、ナイトが冷ややかなツツコミを入れる。

『あの2人ならそれくらいやってのけるぼん。特に王蛇はカラミティ・メアリ以上に、手当たり次第力を振るってるから、結構無茶やらかす事があるぼん』

「という事は本当……?」

『そんなのファヴもそうだし、シローの口からだって言えるわけないぼん。他の魔法少女や仮面ライダーが何かしましたーなんて事、いちいち報告してたらチクリ屋扱いされて他の妖精から嫌われるぼん』

「……ふん」

ナイトはファヴに聞こえない程度で、鼻で笑った。

すると、リップルが不意にマジカルフォンから目を離し、腰掛けていた手すりから飛び降りた。ナイトも最初は分からなかったが、飛び降りようとする彼女を見て何かを察し、同じように飛び降りて、2人は地上に着地した。ファヴは首を傾げるような動作をした。

『急にどうしたぼん?』

「鬱陶しいのが来たから、目につかない場所に行こうとしただけ……」
『鬱陶しいぼん?』

「もつとも、気付かれたみたいだけどな」

ナイトがビルの谷間から見上げながら呟いていたのでファヴもそれに付られて顔を上げる。そこでファヴもようやく2人が隠れようとした理由が判明した。

月明かりに照らされる夜空に、飛行機とは思えないスピードで動く黒い点が見えた。やがてそれは人型だと分かるほどに近づいてきて、30メートルほどになってファヴは声をあげた。

『あつー！ トップスピードだぼん!』

「ヤッホー。2人とも元気してたかい?」

ナイト達の前に姿を見せたのは、とんがり帽子に、その下から見える二房の三つ編みにまとめた金髪と、大きくてクリクリと動いている青い瞳に、首から提げたお守り袋。丈の長い紫地のコートと黒いワンピース姿の、典型的な魔法の格好をした魔法少女だった。何よりも特徴的な、様々な装置が取り付けられた魔法の箒にまたがりながら、トップスピードと呼ばれた魔法少女はハイテンションで話しかけてきた。

「相変わらずしつこいな」

嫌味を含んで呟くナイトに対し、リップルは挨拶代わりに大きな舌打ちをする。トップスピードは慣れているのか、苦笑いしながらリップルの顔を覗き込んだ。

「リップルも相変わらずツンデレだね」

「……早く隠れればよかった」

「まあまあ。魔法少女も仮面ライダーも、同じ目的を持って活動する者同士、仲良くしないとダメっしょ」

「うぎっ……」

「リップルは訳あって別だが、他の奴らと馴れ合うつもりはない」

「そんな事よりもさあ」

リップルの舌打ちと、ナイトの言葉が聞こえていないのか、トップスピードは咎める事なく話を勝手に進めた。度を超えたマイペース

な点が、トップスピードらしいのだが、それが2人だけでなく、他の魔法少女や仮面ライダーを困らせている一因なのだ。が、もちろん本人は気づいていない。流星のファヴも呆れるほどである。

「今日の記事、見てみなよ！ ほらー！」

そう言つてトップスピードが見せたのは、今日投稿された特設サイトだった。内容は魔法少女や仮面ライダーに関する事が全てなのだが、この日は2人の魔法少女と仮面ライダーについての事が一面を占めていた。

2人も気になつて覗き込むと、そこには、

『自転車を盗まれた際、白い魔法少女が取り返してくれた』

『カツアゲにあつているサラリーマンの所に、白い魔法少女が現れてその人を抱えて逃がした』

『木の上に登つて降りれなくなった飼い猫を、白い魔法少女が救助してくれた』

『溝にはまつていたタイヤを、狐のような騎士が車を持ち上げる事で助けてくれた』

『鏡から出てきた怪物を、狐の戦士が鏡の中に引きずり戻した』

などと、特定の人物に関する目撃情報が掲載されていた。全体的には白い魔法少女の方が多数を占めていたが、ナイト達の興味を惹くには充分だった。

「こいつらは……?」

「俺も初めて見る奴らだから、新人だと思ふけど。どうなんだ、ファヴ?」

『トップスピードの想像通りだぼん。この子達は昨日新しく誕生した、魔法少女『スノーホワイト』と、仮面ライダー『九尾』だぼん! シローの話だと、九尾は中々に強いらしいぼん。それにスノーホワイトは、魔法少女になれた事をとても喜んでたぼん。昨日なつたばかりなのにこれだけ働ける魔法少女は、ファヴも初めて見るぼん!』

「へえー! 新人なのに頑張るねえ〜!」

得意げに語るファヴと、感心したように大きく頷くトップスピードに挟まれて、ナイトもリップルも居心地が悪くなるのを感じた。

「んでさー！ こないだ北区の方でガイがさ……」

ファヴが帰ってからも、一度話し出すと止まらないのがトップスピードなので、気がつけば彼女がやって来てから長時間経っており、流石にこれ以上は我慢出来ないと思ったナイトは強制的に遮った。

「その辺にしておけ、トップスピード」

「え、何で？ 今からが良いところなのに……」

「大体その話、こないだもしてたはずだろ。俺はともかく、リップルは明日も早い。そろそろ帰って寝させてもらおうか」

「……！」

リップルが、ナイトの言葉に反応を示すと、トップスピードも納得したように頷いた。

「や、こいつは失敬したな。んじやあ今日はこの辺で。またな！」

口早にそう叫んだトップスピードは、あっという間にビルの谷間から上空に飛んでいった。ナイトはやれやれと言いたげな動作を見せ、リップルに顔を向けた。

「そういう事だ。もう帰って良いぞ」

「……ありがとう」

リップルは背を向けながら、恥ずかしそうにそう呟いて、高く跳躍してその場を去った。ナイトもそれを見送りながら、周りに誰もいない事を確認して、カードデツキをVバツクルから外して、変身を解除した。

キリツとした顔つきのその青年は、首から下げていた、写真入れのついたペンダントを開いて中を見つめた。

「……」

しばらく眺め続けた後、青年は夜風に吹かれながら、明日に備えて、家に帰っていった。

4. 再会は反転世界にて

「ねえねえ。どっか食べに行かない？」

「良いね。バーガーにしようか。行きつけの店知ってるし」

翌日の夕方。バスを降りた小雪とその友人はこの後の予定を立てていた。

「小雪はどうする？」

「あ、ごめん。ちよつと用事があるから、先に帰るね」

「う、うん。じゃあまた」

「またね」

唯一、小雪だけは誘いを断り、早々とその場を去った。その足の速さに、2人は目を丸くしていた。

時折周りに誰もいない事を確認しながら、小雪は路地裏に入り込んだ後、再度周りを確認してからマジカルフォンを取り出し、タップした。

「変身！」

気合いを入れてそう叫ぶと、小雪の全身は光に包まれ、スノーホワイトとなった。そして高く跳躍して、ビルの屋上を転々と渡りながら、人助けの為に辺りを見渡した。

後で分かった事だが、魔法少女には1人1つずつ魔法が授けられるらしく、スノーホワイトの場合は『困っている人の心の声が聞こえる』と言う魔法だった。世のため人のために魔法を使う魔法少女を目指していた小雪にとって、正にうってつけの能力だった。

唯一の難点は、浮気がバレないか心配だ、片想いの子にどうやって告白しようか迷っている、など、スノーホワイトではどうしようもない悩みも大体の範囲ではあるが、漏らさず聴いてしまう事だった。流石にそういった事に手助けする事は出来ず、強化された身体で地道にコツコツと小さな事から解決する事にした。そういった方面の仕事は尽きる事が無かった為か、多忙を極める事になったが、元々人助けは可能な範囲でやって来た小雪にとって、多少バリエーションや活動範囲が増えただけで、さほど苦にはなっていなかった。

「♪」

この日も魔法によって困っている人の声を聞き、既に2件も解決したスノーホワイトは、鼻歌まじりにとあるビルの屋上で足を止め、次なる仕事を探していた。

「どこかにいないかな。困ってる人」

スノーホワイトは夕日に照らされながら、下界を覗き込んでいたその時だった。

『助けてえ！』

スノーホワイトの耳に、女性の叫び声が聞こえてきた。と同時に、手に持っていたマジカルフォンから耳鳴りのような音が響いてきた。

「えっ!? これってもしかして……!」

スノーホワイトは不意に、チュートリアルで確認した事を思い返した。

「確か、鏡の中にいるモンスターが現れるとマジカルフォンが知らせてくるって聞いてたけど、本当だったんだ……!」

魔法少女になって初めての仕事であるモンスター退治。不安はあるが、困っている人を見捨てるわけにはいかない。スノーホワイトは迷う事なく声の聞こえた場所に飛んでいった。

その頃、帰宅途中だった大地も、マジカルフォンを通じてモンスターが近場に現れた事を知った。

「早速お出ましか……!」

大地は周りに人がいない事を確認すると、近くに停められていた無人の車の前に立ち、フロントガラスに向かって左手に持ったカードデッキをかざした。すると、鏡に映る大地の腰にVバックルが装着され、現実世界の大地にも同じようにVバックルがつけられた。大地は空いた右腕を後ろに曲げて引き、握り拳を作ると、気合いを入れて叫んだ。

「変身ー！」

大地がカードデッキをVバックルに差し込むと、いくつもの九尾のシルエツトが重なり、大地の姿は完全に九尾となった。

元々変身ポーズまでは考えて無かったが、折角ならと言うシローの助言もあって、一晩中考えた結果が先ほどの変身方法である。

変身し終えたのを確認した九尾は学生カバンを持って跳躍し、反応を辿った。

「た、助けて……！」

一方、住宅街の一角では犬の散歩途中でモンスターに襲われている主婦が腰を抜かして後ずさっていた。

主婦の首には蜘蛛の糸が巻きついており、それを辿った先には、顔面の中心にドーム状の器官がついた、ジヨロウグモ型のモンスター

……レスパイダーが迫ってきていた。

口からは糸が伸びており、そばにいた犬も吠え立てて主人を守る為にモンスターを追い払おうとしていたが、レスパイダーは全く物怖じする事なく主婦に手を伸ばした。

「やあつー！」

だが、それを遮るように横手から現れたのは、スノーホワイトだった。体当たりしてレスパイダーを転ばせた後、主婦に駆け寄って蜘蛛の糸を引きちぎった。心の声が聞こえる魔法しか使えないスノーホワイトでも、蜘蛛の糸を千切るなど造作もなかった。

「早く逃げてくださいー！」

「あ、ありがとう……！」

スノーホワイトにそう言われて、主婦は犬を抱いて遠くに逃げていった。

スノーホワイトはそれを確認した後、起き上がるレスパイダーを見据えて、先制攻撃を仕掛けた。

ゲーム内では何度か戦った事のあるモンスターではあったが、スノーホワイトは不安に駆られていた。何せゲーム内でモンスターと戦う時は、遠距離系の魔法を使って戦っており、今現在1つしか魔法が使えないスノーホワイトにとって、不利な仕事ではあった。

それでも戦うしかない。スノーホワイトは肉弾戦に持ち込む為に、接近してパンチやキックをかました。ところが、レスパイダーには全然効いていないのか、ビクともしなかった。

「このお……！」

試しにもう一度飛び上がって蹴りを入れるも、結果は同じ。荒事に不向きな今のスノーホワイトにとって、モンスターは天敵だった。

「そ、そんな……！」

動揺を隠せないスノーホワイトに対し、レスパイダーは反撃とばかりに蜘蛛の糸を吐いて、スノーホワイトの体を拘束した。

「……やあー！」

スノーホワイトは短く悲鳴をあげ、振り解こうとしたが、手足の自由がきかない上に、粘り気の強い蜘蛛の糸は、その程度ではどうにも

ならない。レスパイダーは蜘蛛の糸を掴み、スノーホワイトを引きずりながらカーブミラーの鏡の中に入り、スノーホワイトも引つ張られてそのまま鏡の中に入ってしまった。

「わっ!?」

鏡を抜けたその先は、先ほどの住宅街と全く同じ風景……のように見えたが、実際には人の気配が無く、標識の文字や形は反転していた。「ここって……」

周りの風景に戸惑うスノーホワイトだが、レスパイダーはそんな彼女を叩き倒した。

「きゃあー!」

スノーホワイトは頬に痛みを感じながら地面を転がり、起き上がるうとするが、芋虫のように這いずり回る事しか叶わない。レスパイダーは尚も追撃とばかりに蹴りを入れて、スノーホワイトをいたぶっていた。

「うっ……。痛い、よお……」

甘かった。人の心の声を聞いて、何かしらの手助けが出来るだけで、魔法少女としては十分だと思っていたが、よもやこんな形で大ピンチに陥るとは。戦闘に特化していないスノーホワイトは、惨めな気持ちになつて、涙が頬を伝っているのを感じた。このままでは、なぶり殺しにされる。

「助、けて……!」

スノーホワイトが誰に呼びかけた訳でもなくそう叫ぶと、それに応える者が現れた。

「はあっ!」

「グギヤアツ!?」

すぐ側にある家の屋根の上から何者かが飛び降りて、後方からレスパイダーを斬り裂いたのだ。レスパイダーが前のめりに倒れた事に困惑していると、スノーホワイトもようやくその全体像を確認できた。

それはフォクセイバーを両手に持った九尾だった。彼がここにやってこれた理由は簡単だった。モンスターの反応を辿って探して

いると、カーブミラーの鏡の中でスノーホワイトがレスパイダーに攻撃されているのを目撃し、助太刀に入ったのである。

「……おい、生きてるか？」

「は、はい……」

九尾はスノーホワイトに近寄って、巻きついている糸を解いた。そこで初めて互いに顔を確認した。

「この人。昨日からまとめサイトに載ってた人だ……。ひよつとしてこの人が……！」

「（白い魔法少女……。なるほど、こいつが俺と同じ日に誕生した奴か）」

糸を引きちぎり、自由の身となったスノーホワイトは服にこびりついた蜘蛛の糸を払いながら、九尾にお礼を言った。

「あ、ありがとうございます！ 確か、九尾……ですよね」

「ああ。お前はスノーホワイトだったな。んでよ。お前、まだ戦えるか？」

「あ、いやその……。実は私、モンスターと戦うの、これが初めてで、まだ慣れてないと言うか……」

「そっか……」

そこで九尾はスノーホワイトの顔を見て、頬から血が一筋垂れているのに気づいた。先ほどまでの攻撃で引つかかれた際に出来た傷らしい。本人はそれに気づいていないらしく、それを見た九尾は背を向けて静かに言った。

「とりあえず、お前そこにいとけよ。後は俺がやる」

「え、でも……」

「俺はお前と違って、こういうのは3日連続だからな」

「挿入歌：果てなき希望」

そう呟くと、九尾は手に持っていたフォクセイバーを地面に突き刺し、直接レスパイダーと接近戦を始めた。

「ふっ！ はあっ！」

軽い身のこなしでレスパイダーにパンチやキックを入れて、レスパイダーを翻弄させるその姿を、スノーホワイトは呆然と魅入っている。

た。

「(あの人……。とつても強くて、カッコいい……!)」

『つたくよお』

「(！)」

『女を泣かせる奴には容赦するなつて言われてるし、タダで済むと思
うなよ！』

それはスノーホワイトにだけ聞こえる、九尾の心の声だった。彼は
スノーホワイトの顔に傷がついた事に、少しばかり腹を立てているの
だ。スノーホワイトは自然と祈るように手を合わせていた。

「はあっ！」

「グウウウウッ！」

レスパイダーは雄叫びとともに両手の鋭い鉤爪を振り回して、九尾
を寄せ付けないようにした。

「そつちがそうくるなら」

九尾はカードデッキから1枚のカードを取り出し、ベントインし
た。

『ACCEL VENT』

カードが読み込まれると同時に、九尾は前に駆け出した。すると、
一気に加速してレスパイダーに直接拳を叩き込んだ。レスパイダー
がよろけていると、別方向から追撃が。あまりの速さに、レスパイ
ダーだけでなくスノーホワイトも驚きを隠せない。レスパイダーは
反撃する間もなく、ひたすらに九尾の高速打撃を受け続けるしかな
かった。

ようやく九尾が停止した時には、レスパイダーは虫の息だった。

「そろそろ終わらせるか」

『FINAL VENT』

九尾が新たにカードをベントインすると、九尾は腕をクロスして気
合いを入れ、隣には契約モンスターのフォクスロードが降り立った。

スノーホワイトがその後ろ姿に見惚れていると、九尾とフォクス
ロードは飛び上がり、一回転した九尾の突き出した右足にフォクス
ロードが絡みつき、先端の尖った状態になり、そのままレスパイダー

に向かって『ブレイズキック』を放った。

「うおおおおおっ！」

「ギエアアアアアア!?」

逃げようとするレスパイダーだが、ブレイズキックに貫かれて爆散。フォクスロードが消えると、九尾は何事もなかったかのようにスノーホワイトに近寄った。

「か、勝ったの……?」

「おうよ」

マジカルフォンが鳴り、2人がチェックすると、マジカルキャンディーをゲットしたという情報が入った。ただし、獲得した量は九尾の方が少し多かった。

「……あれ? 私も?」

「どうやら関わった度合いに応じて貰える数も変わるって事だな」

九尾がそう納得すると、スノーホワイトに声をかけた。

「さあ、戻るぞ。ミラーワールドに入られる時間も限られてるからな」

「は、はい」

スノーホワイトは未だに興奮冷め止まぬまま、九尾と共に、カーブミラーから現実世界に戻っていった。

現実世界に戻ると、辺りは夕日が沈みかけて、真っ暗な夜が間もなく訪れようとしていた。

スノーホワイトは真っ先にお礼を言った。

「あ、改めて、ありがとうございます！ あなたが助けに来てくれなかったら、私、多分ダメだったかも……」

「ま、初めてじゃ仕方ないし、見た感じこういうのは苦手っぽいよな？」

「ううん……。苦手って程では……。子供の頃からそういうのに憧れてたから……」

「？ 憧れてた……？」

「い、いいえ！ 何でも……！」

スノーホワイトは慌てて首を横に振ると、先ほど自分達が出てきたカーブミラーに目をやった。

「チュートリアルで名前だけなら聞いてたんですけど、あの鏡の中に広がるもう一つの世界が、ミラーワールドだったんですね……」

「ああ。信じたがいけど、こうして間近で体験してるからな」

九尾がそう呟くと、不意に思い出したように、スノーホワイトに言った。

「そーいやお前、大丈夫なのか？」

「え、何が……」

「その傷」

「えっ？ あ、ホントだ。いつの間に……」

九尾に指摘されて、スノーホワイトも手で触れる事で、ようやく頬についた傷に気づき、ビックリした。

頬の傷をどうしようか悩んでいるスノーホワイトを見て、九尾は周りに人がいない事を確認してから、こう告げた。

「一応元の姿に戻ってみろよ。それでも傷が残ってたなら、親とか心配するだろ」

「えっ？ でも……」

「同じ力を持った同士なら問題ないって話だろ？ 俺も解くからさ。ちよつと見せてみるよ」

九尾の言うように、ファヴやシローによると、魔法少女や仮面ライダーには守らなくてはならないルールがあり、『一般人には正体を明かしたり、知られてはいけない』という、バトル系アニメによくある、お約束に近いものだった。これを犯せば魔法少女や仮面ライダーとしての資格を剥奪されるそうだが、逆に言えば、魔法少女や仮面ライダーの間でなら、任意で互いの承諾を得て正体を明かしても良いらしい。

その事を思い出したスノーホワイトは早速変身を解除し、小雪の姿に戻る。対する九尾もカードデッキをVバックルから外して、大地の姿に戻った。

「……………あ」

そこで2人は初めて互いの素顔を確認する訳だが、それは決して知らない顔ではなかった。何を隠そう、2人はつい先日、バスの中で偶然出くわした関係なのだから。

「お前、あの時の……………。小雪……………だったか？」

「あ、はい！ 姫河 小雪です……………！ ええつと、あなたは……………」

「榊原 大地」

「榊原君……………だね。まさかあなたが仮面ライダーだったなんて……………」

「お前も……………。いや、お前の場合は魔法少女に憧れてただけっか」

「そ、それは恥ずかしいから言わないでください……………！」

小雪はバスの中でのやり取りを大地に聞かれていた事を思い出して顔を赤くした。多少脱線したものの、大地は改めて小雪の顔を確認した。その頬には、変身してた時よりかは浅いが、流石に目立つほどには切れている傷があった。

「あ、やっぱり切れてる……………。でもこれ位なら」

小雪が鏡を見ながらそう呟いていると、大地は胸ポケットから箱を取り出し、絆創膏を手につつと、小雪の頬に貼ろうとした。

「わっ!?? どうしたんですか!??」

「見りゃわかるだろ。こいつを貼っとけば」

「いい、良いですよそこまですなくても！」

「良いから、ジツとしてろ」

大地にそう言われて、小雪は何も言い返せぬまま、傷を覆うように絆創膏が貼られた。

「明日までには治るだろうな。魔法少女とか仮面ライダーだったら、怪我の治りも普通の人よりは早いからいいから」

「あ、ありがとうございます……」

小雪は再び頬を紅く染めて、お礼を言った。あまり面には出さないようだが、本当に優しい性格の男の子だ。スノーホワイトは直感的にそう思った。

それから大地は側に置いてあつた学生カバンを手に取り、その場を立ち去ろうとした。が、その前に小雪が彼を呼び止めた。

「あ、あの……い……」

「？」

「こ、こんな事頼み込むのも変だと思うんですが……。もしよろしかったら、これからも私と一緒に活動していきませんか？」

「お前と……？」

小雪からの提案に、大地は彼女の顔を見つめた。自分でも何故こんな提案をしたのか分からない小雪だったが、幼なじみの男子となかなか会えない今、異性の彼ともっと一緒にいれる機会が欲しい。そう思った時には既に口に出していた。

「私、人の心の声が聞こえるっていう魔法しか持っていないから、今日みたいにモンスターと戦うにはまだ1人じゃどうしようもなく……。だから、もう少しだけでも良いから、戦える仲間がいて欲しいんです。それに、私の魔法があれば、榊原君もマジカルキャンディーをたくさんゲットできるようになるから、どうかなって……」

「ギブ&テイクってやつか……」

大地はしばらく唸りながら考え込んでいた。確かに、彼女には1人でこれからもモンスターと戦えるという保証はない。むしろまた大怪我するかもしれない。反対に小雪の心情としては、きつと断られるだろうなという思いでいっぱいだった。先日出会い、同じ力を持った者同士とはいえ、ほとんど赤の他人である彼が承諾してくれる根拠がない。

……と思っていた矢先、小雪の予想に反して、大地は目を逸らしながら呟いた。

「……まあ、断る理由も無いし、お前がそうしたいってんなら、別に良いけど……」

「！ 本当!?？」

小雪は驚きながらも、共闘してくれる事に喜びを隠せなかった。

「じ、じゃあ！ また明日この場所に集合するって事でも良いかな!?!」

「ああ。良いよ。この辺なら家も近いし」

「ありがとう、榊原君！」

「大地で良いよ。俺も小雪って呼んでも良いか？ どうせならその方が良いし」

「もちろん！ これからもよろしくお願いします！ 大地君！」

「ああ。こちらこそ。それじゃまたな、小雪」

「うん！ また明日会おうね、大地君！」

互いに手を振ると、2人は背を向けてその場から歩いて離れた。

「(そういえば、大地君の制服って、そうちやんと同じ学校のものだよね？)もしかしたら知ってるかもしれないし、明日聞いてみようかな?」

小雪はそう思いながら、夕飯を食べる為に一旦活動を中断して家路に着いた。

一方、大地も目の前に見える、N神社の鳥居に目をやりながら、先ほど出会った小雪の事を考えていた。

「(……何でだろうな。これから先、誰かとつるむなんて考えた事なかったのに。何であいつをほっとけなかったんだ……?)」

自分でも解明できない疑問を抱きながらも、彼は石段を登りきり、早速神社の手伝いに励んでいた。

因みに、2人は互いの事を考えながら夕食を食べていた際、いつの間にか顔が赤くなっていたらしく、両親達からその事を指摘されて恥ずかしい想いをしたのだが、それはここだけの話にしておく。

5. 16人目のライダー誕生

「うおい正史い！ お前どこほつつき歩いてんだよお！」

『うお……！ 声デカいですよ編集長！』

N市の一角にある建物の2階。その一室に入居しているモバイルネットニュース配信会社『OREジャーナル』で、社長兼編集長の大久保 大介の怒声が響き渡った。

「んなこたあどうでも良いんだよ。一体どこにいるんだよ！ 全然連絡よこさねえし……」

『あ、すみません！ 実はまだ取材中で……』

「本当かあ？ ひよつとしてお前、まだあの件を追ってんのか？」

『ええ。まあそんなところです』

「本当だろうな？ 嘘だったらタダじゃ……」

『ほ、ホントですって！ 信じてくださいよ！』

大久保は電話相手の話を聞いて、しばらく唸っていたが、やがてため息混じりにこう告げた。

「……つたく。そんなに言うんならちゃんやれよ。もしシヨボいネタばつかだつたらそんな時はもちろん俺特製の青汁を……」

『ギャアアアアアア？ 分かりました！ 絶対持つてきますから！

それじゃあ』

「おう。ま、とりあえず一回は戻ってこいよ」

それだけ告げると電話を切り、椅子に深く腰掛ける大久保であった。そんな彼に、パソコンと睨み合っていた1人の女性が話しかけた。

「正史君、何て言っていました？」

「相変わらずだよ。ちったあマトモな事件の取材にも今見たいに力入れて欲しいもんよ」

「……寂しい」

不貞腐れた表情で再びパソコンと向き合う、エンジニアの島田菜々子。どう反応すれば良いか分からず、気まずい表情になる大久保だったが、扉を開けて入ってきた1人の女性の登場で、大久保も表情

を和らげた。

「ただいま戻りました」

「おお、令子か。お疲れ。どうだった？」

「あまり成果無しですね。誰に聞いても分からないの一点張りです……」

苦々しい表情で呟いたのは、ベテラン記者の桃井 令子。

「ちよつと休憩したら、また取材に向かおうと思います」

「おう。頼りにしてるぜ令子。正史はしばらくあてにならないしな」

「……そう言えば、正史君は？」

「アレだよアレ。この街で噂になってるアレ」

その一言で、令子は大きく頷いて理解した。

「ああ。例の、魔法少女や仮面ライダーの事ですね」

「そうなんだよ。ここ最近になって目撃情報が多発してるってやつだ」

「私も一応家とかで暇を見つけてやってるんですけど、特におかしな兆候は見られませんし、やっぱりただの都市伝説だと思えますよ」

「俺もやってるけど、もうさっぱりだな。無課金とはよく言うけど、頭が回らねえんだよ。もう歳なのかなあ、俺」

大久保はげんなりとした様子で手鏡に目をやった。

「……で、正史君は未だにそれを追いつけてる、と？」

「ああ。あいつ大学の頃からこういうのにやたらと敏感だからな。この事を聞いた途端、目の色を変えてガキみたいにはしゃいで受けてたし」

「子供っぽい……ですか。心中お察します」

令子も彼の事を思い浮かべ、ため息と共に椅子に座った。

「……って事は、彼もやってるって事ですよね？『仮面ライダー育成計画』」

「だろうな……。あいつは昔っから、祭りの取材行ったらいつの間にか神輿担いでるタイプだし。案外、戻った時には、本物の仮面ライダーになってるとか？」

「まさか……」

大久保の冗談に、令子はあり得ない、と言わんばかりに首を横に振った。

「正史君が、仮面ライダー……。良い……。！」

不気味ににやけながら呟く島田に、大久保と令子は若干引いた。

「……。ああ。ビツクリした。急に電話してくるとは思わなかった……。データが飛ばなくて良かった……。！」

都内のベンチに腰掛けていた城戸 正史は、耳鳴りが残る事に違和感を感じながら、再び手に持ったスマホに目をやった。

そこには、龍のような仮面をつけたアバターが、蜘蛛のような怪物と対峙している画面があった。

「よおし。そんならこは……。！」

正史は画面をタップすると、アバターは必殺技を放ち、怪物は消滅し、クエストクリアを知らせる音楽が流れた。

「ツシヤア！」

思わずガッツポーズと共に叫び声をあげたので、周りの通行人は迷惑そうに目を向けた。

「……。あ、すいません」

正史は一言謝ると、受け取ったマジカルキャンディーとアイテムを確認した後、スマホをポケットにしまい、立ち上がって背伸びした。

「……。よおし。気分も良くなったし、編集長の罰ゲーム回避のために、もういっちょ働か！」

正史は気分爽快と言わんばかりに元気良く原付バイクにまたがり、ヘルメットを被ってその場を後にした。

彼が未だに記者見習いから抜け出せないのは、こういった事ばかりに時間を割いてしまい、本業を忘れがちになっているからなのだが、本人がそれに気づく日は、まだまだ遠い。

「お待たせしました」

夕暮れ近くの喫茶店『A T O R I』にて、店のロゴが入ったエプロンを着用している女子高生らしき少女が、注文されたドリンクを唯一残っている客に差し出すと、そそくさとその席を離れた。その表情に笑顔は微塵もない。ネームプレートには『細波^{さざなみ} 華乃^{かの}』と刻まれている。

「ああ、華乃ちゃん。悪いけどそのテーブル拭いといて」「はい」

華乃と呼ばれた少女は間髪入れずに、店主のお婆ちゃんに言われた通りにテキパキと仕事をこなしていた。

そんな中、彼女の目の前で謎の口論が繰り広げられていた。気になった彼女の目線の先では、この店の店員である20代の男性とスーツを着た女性が対面しており、女性の方は手帳やペンを構えていると

ころから、どうやら新聞記者として何かしらの聞き込みを行っているようだが、店員の反応は冷たかった。

「何度も言わせるな。俺はそんな奴とこれっぽっちも深い関わりを持っていない」

「でも、今回行方不明になったこの男性は、この店の常連だったわけですよ。何か心当たりは無いんですか？　例えば誰かに追われていたとか」

「それで、俺やこの店の店員を疑っているってわけか」

「そ、そういう訳じゃ……」

女性が弁解しようとしていると、男性は冷徹な表情になり、手に持っていた布巾をテーブルに放って女性を睨みつけた。

「ここは喫茶店だ。飲む気が無いなら帰れ」

あまりにも冷たい一言に、女性はムツとした表情になったが、そこは大人の対応を見せ、観念したかのように言った。

「……分かりました。何か思い出した事があれば、こちらに連絡を」
そう言つて名刺を渡した後、店を後にした。その後ろ姿からは苛立ったオーラが溢れている。

男性は肩を竦めて、名刺をカウンターの隅に置いた。そこへ、皿を洗っていた店主が声をかけた。

「あんた。やっぱり素直じゃないねえ。あたしは知ってるんだよ。あんたは、本当は誰よりも優しい子だって」

「そんな訳……」

「あるわよ。それより、さつき何話してたの？」

店主が男性に質問した。対する男性は素っ気ない態度で答えた。
「大した事じゃ無いですよ。最近この辺で行方不明事件が起きてるから、それでこっちまで調査の手が伸びただけです」

「あらそう。そういえばこの街じゃ、奇妙な化け物がうろついているって話じゃないか。華乃ちゃんも聞いた事あるだろう？」

「……まあ、噂程度には」

華乃は曖昧そうに答えた。

「どうせ変質者とかの見間違いだと思うけど。あんた達も気をつけ

るんだよ。最近は何騒だし、あんた達が怪我でもしたら、おばさんシヨックで倒れちゃうわ。あ、蓮二君はそんなに心配しなくても大丈夫よね」

「心配してくれてどうも」

蓮二と呼ばれた男性は、苦笑いしながら受け答えた。やがて残っていた客も去り、店主も店の奥に向かって、珍しく誰もいなくなった店内に、掃除をしている華乃と、男性……秋山^{あきやま} 蓮二^{れんじ}の会話が響き渡った。

「蓮二さん。さっきの話……」

「だろうな。本物の事件に巻き込まれたか、凶暴なモンスターに喰われたか。俺達からすれば、後者に納得がいく」

「モンスターの出現が頻発化してるなら、活動範囲を広げる必要がある」

「……シローに掛け合って、システムのアップグレードをしてもらった方が早いかもな」

蓮二がそう呟いたその時、耳鳴りに近い音が聞こえてきた2人は同時にバツと窓の外に目をやり、一目散に店の外に出た。

「フア〜……。結局めばしいものは無しか……」

その頃、正史は先ほどまでのテンションは何処へやら、項垂れながら路地裏の壁にもたれていた。大久保の言ってた通り、彼が目下全力で調査しているのは、N市で度々目撃されている『魔法少女』と、『仮面ライダー』の存在だった。彼らは人助けをモットーにしているらしく、常にネットに載る情報は、彼らが街の平和に貢献しているものばかりだった。異能の力を持つヒーローに憧れていた正史にとって、これほどの特ダネを逃すまいと、日々取材等に明け暮れていたが、結果はご覧の通り。ほぼ収穫ゼロという状態にあった。

「このままじゃ編集長や令子さんにどやされるし……。やっぱこの記事から追いかけたほうが良いかな……?」

そう呟いて正史が開いている、魔法少女や仮面ライダーに関するまとめサイトには『昨日、白い魔法少女が、蜘蛛のような怪物から近所の知人を助けてくれたらしい』という内容があった。距離的にも住んでいる家から近いため、そちらから調査を進めようと考えた。

「……でもその前に、疲れたからちよつと休憩つと」

そう言って正史が開いたのは、またしても『仮面ライダー育成計画』。彼らの噂を聞くようになってから、実態調査の為に始めたという理由もあるのだが、単純に興味があったので、すぐにハマってしまった、仕事が若干疎かになってしまっているのだが、元々サボり気味体質な彼である為、周りにはまさかアプリゲームのやり過ぎが原因で怠けているとは思ってもいないのである。

「……よっしやあ! またまた倒したぜ!」

普段は機械操作が苦手な彼でも、操作方法が初心者でも分かりやすいのが売りの『仮面ライダー育成計画』は順調にこなせていた。

「よし、じゃあこれで最後に……」

そう言って正史が最後にクエストに挑もうとしたその時、画面が突然切り替わった。

「うお!?? もしかして編集長から……!??」

だがそこに映ったのは、『仮面ライダー育成計画』のマスクットキャ

ラクターであるシローだった。

『おめでとう！ 私はシロー。君に嬉しいお知らせだ。君は、本物の仮面ライダーに選ばれたのだ！』

「……………」

告げられた内容を頭の中で整理するのに、多少時間がかかった正史だが、すぐに声をあげた。

「……………あ、あれ？ もしかしてやり過ぎて壊れちゃった？ まだ機種変更したばつかなの……………」

『何を言っているのか分からないが、私から君に伝えたい事はただ一つ。仮面ライダーになって、この街の平和を守ってほしい。それだけだ』

「……………はあ!?？」

それは、仮面ライダーへの勧誘。てつきり夢でも見ているのかと思っただけだが、シローはそれに構わず言い放った。

『君には仮面ライダーとしての適性があると判断した。今からタップするだけで、君は本物の仮面ライダーになれる！』

すると画面は切り替わり、龍のような紋章と、『仮面ライダーになる』と、『タップする』という表示が出てきた。

「こ、これ。本当、か……………」

正史は半信半疑で画面をタップした。すると画面から光が溢れ出て、その光は正史を包み込んだ。

「えっ!?？」

正史が目を開けると、そこは真っ暗な空間だった。が、その空間にいたのは正史だけではない。赤い龍が正史の周りを旋回しているのだ。

「……………」

正史は驚いているが、不思議と逃げ出すという選択肢はなかった。やがて龍は正史の体の中に吸い込まれるように入り込み、彼の体は光に包まれた。

「……………ん!?」

不意に顔をあげた正史は、混乱したように辺りを見渡した。そこは先ほどまで正史がいた路地裏だった。

「夢……………か」

正史がそう呟いたその時、シローの声が響き渡った。

『おめでどう！ 君は仮面ライダー「龍騎」となったんだ！』

「……………龍騎？ それって、俺がゲームのキャラにつけた名前じゃ……………」

そう呟いて正史がスマホに目を向けた瞬間、自分の手を見て腰を抜かした。

「おわっ!?」

よく見ると、その両手はガントレットに覆われており、左腕には龍の頭部を模した器具が装備されている。慌てて後ずさっていると、落ちていたガラスの破片に手が当たり、そこに目をやると、更に正史を驚愕させた。

そこに映っていたのは額の部分に龍のマークがついた、フェンシングのマスクに似た仮面の奥に光る赤い複眼。そして身体中を覆うように真紅のアーマーが装着されている。正史はその姿が、自分がプレイしていた『仮面ライダー育成計画』においてアバターとして設定していた仮面ライダーにそっくりだと気づくのに時間がかかった。

「う、嘘だろ……………!?」

『本当さ。その姿は君が積み上げてきた努力の結晶。スペックもゲームとほぼ同じだ』

「……うわあ。俺、仮面ライダーになれたんだ!」

驚き半分、喜び半分という状態で興奮冷め止まぬまま、正史……もとい龍騎はしばらく自分の体を眺めていた。

続いてシローが、龍騎にマジカルフォンを提供した。

「何だこれ?」

『ここに載っている情報は今後の君をサポートしてくれるから、しっかり読んでおいてくれ。さて、仮面ライダーとなった君に頼みたい事は2つあるんだが……』

シローが要件を伝えようとしたその時、マジカルフォンから耳鳴りのような音が鳴り響いた。

「うわっ!?? 今度は何だよ!??」

『モンスターが近くに現れたという知らせだ』

「モンスター?」

『ゲームで散々相手にしてきただろう? そのモンスター達が実体化して人々に対し、悪さを働いている』

「人々に……? あれ? じゃあもしかして、その実体化するっていうモンスターが、令子さんが調べてる行方不明事件と関係あるって事なのか!??」

『その通りだ。そのモンスターと戦い、倒す事こそが仮面ライダーとなった君達の使命の1つだ。場所は私がナビゲートする。罪なき人々を守るんだ、龍騎!』

「……よく分かんないけど、なんか燃えてきた!」

人助けは得意な方である正史は、俄然やる気になって、シローの案内で、モンスターの出現場所にやってきた。

そこで彼は、目の前の光景に驚愕した。人気のない路地に駐車してある乗用車のボンネットに、巨大な蜘蛛のモンスターが映っており、明らかに運転手を狙っているのが確認出来た。そして龍騎には、その車に見覚えがあった。

「あれって、令子さんの……!」

そう。龍騎の言うように、その車の持ち主は先輩でもある令子のものであった。令子は先ほどの取材で蓮二に軽くあしらわれていた事に腹を立てながらキーを回してした。が、一向にエンジンがかかる気配がない。それもそのはず。龍騎には、蜘蛛のモンスターから吐かれた糸が車を縛り上げているのが見えているからだ。

「令子さんが危ない……!」

直感的にそう感じた龍騎は、彼女を助けに行こうとした。が、ボンネットにしか映らない相手にどうやって対抗するのか、はたと困ってしまった。

「けど、どうやってあいつを……!」

『そのままボンネットに向かって飛び込めば良い』

「はあっ!? そんな事したって車にぶつかるだけじゃないか! それでもし傷ついたら弁償する事になって生活に困っちゃう……!」

『何を危惧しているのか知らないが、大丈夫だ。仮面ライダーになった事で、君はミラーワールドに入る事が可能になった。それはつまり、あのモンスターのいる空間で戦える事を意味する』

「ミラーワールド……? もう分かんない事だらけだけど、今は令子さんを助けられるのなら!」

龍騎は疑問を抱きながらも、後方から車に向かって体当たりした。すると龍騎の姿は車の中に文字通り吸い込まれていった。それからしばらくして、エンジンがかかったのを確認した令子は、ホッと一息ついてから、何事も無かったかのようにその場を後にした。

そしてその様子を、華乃と蓮二は別の路地から目撃していた。

「今のは、九尾……?」

「いや、違うな。見た目が違いすぎる。また新たな仮面ライダーが出てきたのかもな」

「16人目の、ライダー……」

「とにかく今は、俺達であのモンスターを叩き潰すだけだ。行くぞ」

華乃は頷くと、近くのビルのショーウィンドウの前に立ち、周りに誰もいない事を確認してから、華乃はマジカルフォンを、蓮二はコウモリの紋章が刻まれたカードデッキを取り出した。蓮二がカード

デツキをかざすと、Vバックルが腰に装着され、右手の拳を握り、腕を内側に向けて曲げ、振りかぶってから叫んだ。

「変身！」

カードデツキをVバックルにセットすると、いくつもの鏡像が重なり、その姿を仮面ライダー『ナイト』へと変えた。

「……変身」

一方、華乃は落ち着いたようにマジカルフォンをタップし、光に包まれた。そして華乃は忍者の格好をした魔法少女『リップル』に変貌を遂げた。2人は龍騎を追うためにミラーワールドへと入っていた。

「挿入歌：果てなき希望」

「うおおおおおっ!?!」

その頃、龍騎は全力で蜘蛛型のモンスター……デイスパイダーから逃走していた。

このような状態になったのには訳がある。ミラーワールドに入り込んだ龍騎は後先考えずにデイスパイダーに体当たりし、車についた糸を引きちぎり、令子を逃した。が、そこからが問題だった。捕食の邪魔をされたと思ったデイスパイダーが、標的を龍騎に変えたのだ。

龍騎はデイスパイダーのデカさに恐れ慄き、逃げる事だけに必死になつていた。いくらゲームで倒す事に慣れている正史でも、実物を見

て焦りを隠せなかった。シローがマジカルフォンから声をかけた。

『どうしたんだ？ 戦わないのかい？』

「い、いざ目の前に出てくるとなると、怖くて……！」

そう叫んでいる龍騎に追いついたデイスパイダーは、長い足で龍騎を弾き飛ばし、建設途中の建物に体を打ち付けた。様々な機材が降り注ぎ、龍騎は逃げ回る事だけに精一杯だった。

「くそっ……！！ どうやったらいつを倒せるんだ……？」

龍騎がはたと困っていたその時、向かってくるデイスパイダーを何者かが弾き飛ばした。よく見るとそれは人ではなく、コウモリのモンスターだった。

『！ あれはもしや……！』

「えっ？ どういう事？」

シローがコウモリのモンスターを見て何かに気づいたように叫んだ。

龍騎が、コウモリのモンスターがあらわれた方に目をやると、そこには彼が初めて直に目撃する、まとめサイトに載っていた西洋騎士風の仮面ライダー、そして忍者のような格好をした魔法少女が静かに歩み寄っていた。

6. 戦う意志

「……えっ!? あれってまさか……!」

龍騎に変身した正史の窮地を救ったのは、西洋騎士風の仮面ライダー『ナイト』と、忍者風の魔法少女『リップル』だった。2人は静かに歩み寄り、龍騎の前に背を向けて立つと、龍騎は慌てて2人に問いかけた。

「ね、ねえ! ひよつとしてあんた達も仮面ライダーに魔法少女なのか!? なあ、ここって何処なんだ!? 俺は何したら……」

だが龍騎の叫び声を鬱陶しく思ったナイトは振り返って咎めた。

「はしやぐな! 気が散る!」

「はしやぐなつて……! 俺はただ……」

「あなたはそこで黙って大人しくしていればいい。あれは私とナイトでやる」

「そういう事だ。邪魔だけはするなよ」

そう言つてナイトはダークバイザーを、リップルは懐から刀を手に取り、同時にデイスパイダーに立ち向かった。

迫り来るデイスパイダーの鋭い脚をもろともせず、ダークバイザーや刀での確に弾き返し、隙あらば突きを入れてダメージを与えている。

「す、スゲエ……」

龍騎はしばらく呆然と立ち尽くしたまま、戦闘を眺めていたが、ふと我に返つて、どうにかしなければという焦りが生じた。2人とも強者であるのは見たところ間違いないようだが、敵も一筋縄ではいかない。それに、仮面ライダーの方はともかく、魔法少女は見た目からして、龍騎より年下の女の子だ。そんな子を最前線で戦わせるのは正史としても良心が傷む。ましてや今の正史は、戦える身だ。ならば彼のとる選択肢は1つしかない。

「俺も、やらなきゃ……!」

足元には、鉄パイプが転がっている。先ほどデイスパイダーに吹き飛ばされた際にぶつかって破損した部品のようなのだ。

「よおし、行くぞおおおお！」

龍騎は雄叫びと共に鉄パイプを握りしめながらデイスパイダーに突撃した。

ナイトとリップルは一旦距離を置いたために一歩下がったが、その2人を追い抜くように龍騎は駆け抜けた。

「！」

「ダアアアアアア！」

龍騎が鉄パイプを振り下ろし、デイスパイダーの脚に直撃……したのは良いが、実際にダメージを受けたのは鉄パイプの方で、直撃と同時に鉄パイプはポツキリと折れた。

「お、折れたあ？？」

戸惑う龍騎をあざ笑うかのようにデイスパイダーは脚で思いつきり弾き飛ばした。

大きく吹き飛ばされた龍騎の向かう先にはナイトが。ナイトはウイングバイザーを構えて、別方向に弾き返し、龍騎は壁にぶつかってようやく勢いが止まった。

「邪魔をするなど言っただはずだ！」

「イテテ……。で、でも放っておける訳……」

すると、そんな龍騎の姿を見て、リップルは鼻を鳴らして折れた鉄パイプを握る龍騎に言った。

「あいつらにそんな武器で敵う訳も無いのに。あんた、バカなの？」

「なっ？？ ば、バカって……！ そんなストレートに言わなくても……」

年下のリップルにバカにされて若干へこむ龍騎を見て、ますます呆れたようにナイトは呟いた。

「もういい。仮面ライダーの戦い方ぐらいは見せてやる」

そう言っただけでナイトはカードデッキから1枚のカードを取り出して、ダークバイザーの翼の部分を開いてベントインした。

『SWORD VENT』

ナイトがダークバイザーを腰に差し戻すと、上空からダークバイザーより一回り大きな剣『ウイングランサー』を手に持つと、デイス

パイダーと再び交戦を始めた。武器がパワーアップしている事もあって、勢いはナイトの方が上手だった。加えて彼の後方からはリップルが手裏剣を投擲し、様々な角度からデイスパイダーに命中させていた。

デイスパイダーがグラつき、ダメージが蓄積されていると判断したナイトは、新たなカードを取り出し、ベントインした。

『FINAL VENT』

「はあっ！」

ナイトが飛び上がると、上空から飛来してきたコウモリ型の契約モンスター『ダークウイング』が彼の背中に張り付いて、マントのようになつた。そしてナイトがウイングランサーを下方のデイスパイダーに向けると、マントがナイトの体を包み、ドリル状になつて、一気に急降下した。ナイトの必殺技『飛翔斬』はデイスパイダーを貫き、デイスパイダーは爆散。

「おお……！」

龍騎は炎の中に佇むナイトに目が惹かれていた。

そしてナイトは歩き出し、鏡のある方へ向かった。リップルも龍騎の近くから離れてナイトの後を追うように歩き出す。当然龍騎も黙って見送るはずが無く、2人の進路を塞ぐように立った。

「な、なあ。ちよつと待つてくれよ！ 色々聞きたい事があるんだよ！あんた達もひよつとしてあのゲームで……」

「俺達に構うな。後はシローやマジカルフォンで確認しろ」

「で、でも……！」

「私達はあるに用はない」

そう言つてリップルが龍騎を退けようとした時、龍騎の持つマジカルフォンからシローが飛び出し、焦つたように叫んだ。

『モンスターの反応がまだ消えていないぞ！ 近くにいるはずだ！』

「……」

「キシヤアアアアアッ！」

「な、何だ!?？」

龍騎が音のした方を振り向くと、ビルの屋上から、先ほど戦ってい

たデイスパイダーのような容姿に加えて人型の上半身が突き出て、底知れぬ邪気を漂わせているモンスター『デイスパイダー・リボーン』が壁を伝って降りてきているのが見えた。

「あいつ、昨日倒したはず……」

「また復活したのか。しかも手札が悪いな」

2人は冷静そうに呟くが、内心では驚きを隠せないはずだ。特にナイトの方は切り札を使用してしまっているのです、この状況は不都合だ。しかしナイトも足掻きを見せようとして、1枚のカードを取り出す。

『ADVENT』

現れたのはダークウイング。鳴き声と共にナイトのそばに寄り、再び背中に張り付いた。翼を広げたような姿になったナイトは飛び上がり、上空を旋回した。どうやら注意を惹きつけて反撃の糸口を見つけてるのが狙いらしい。が、デイスパイダー・リボーンもそれを待っていたかのように、口から針を飛ばした。

「くっ……」

ナイトも、必死でそれら全てをかわしている。だが、デイスパイダー・リボーンの目的は別にあった。ダークバイザーを構えて攻撃しようとしたナイトに向かって糸を吐き、ナイトの全身に巻きついた。

「うおおっ……」

降り注ぐ針の雨によって逃げ道を失っていたナイトは抵抗出来ぬまま翼と共に拘束され、そのまま地面に落下。全身をコンクリートの地面に打ち付けた。幸いにも身体能力が向上されている事もあって、命に別状は無さそうだが、未だに糸が解けず、満足に動けない状態にあった。

動けないナイトを後回しにしたのか、デイスパイダー・リボーンは標的を龍騎とリップルに向けた。

「……」

「うわっ！」

針が発射されて、リップルは咄嗟に龍騎を突き飛ばした。そのおかげで2人に直撃する事はなかった。龍騎が地面を転がっている間に、

リップルは動き回り、デイスパイダー・リボーンを攪乱する作戦に出た。タイミングを見計らって手裏剣を投げようとしたが、それよりも早くデイスパイダー・リボーンが針を連射し、リップルを寄せ付けないうようにした。

「危ない！」

「大丈夫……！」

龍騎の心配をよそに、リップルは集中して回避に専念していた。

リップルは器用に攻撃をかわしていたが、体力の限界がきたのか、動きの衰えたリップルの右足を針が掠めた。

「……ッ！」

刹那、リップルは地面を転がり、血が垂れている右足に手をやった。よく見ると震えているようにも見える。どうやらデイスパイダー・リボーンの放つ針には神経を麻痺させる毒が仕込まれていたようだ。デイスパイダー・リボーンは歓喜の雄叫びをあげると、動けないリップルに向かって針を発射した。

「！・リップル……！」

ナイトはもう少しで糸を解けるところまで来ていたが、このままでは先に針がリップルを貫いてしまう為、間に合わない。

「……！」

リップルは抵抗する事も出来ず、思わず目を閉じて身構えた。

だが、そんな無防備な彼女とデイスパイダー・リボーンの間で割り込んで入り込んできた者がいた。

「はあっ！ ダアッ！」

それは先ほどまで離れたところの地面に転がっていた龍騎だった。リップルの危機に対し、龍騎は自分でも信じられないほどに駆け出して、パンチやキックで針を全て弾いた。

「！ あなた……！」

「大丈夫？ 間に合ってよかったよ」

龍騎はリップルの無事を確認し、ホツとした。それから拳を握ってデイスパイダー・リボーンを見据える龍騎を見て、戦おうとしているのだと察したナイトは叫んだ。

「よせ！ お前が敵う相手じゃない！ ここは俺が……！」

が、ナイトの言葉を遮るように、龍騎は首を横に振った。

「俺、正直まだよく分かんないよ。さっき仮面ライダーになったばかりだから、自分に何が出来るか、全部分かった訳じゃない」

でも、これだけは言える。そう呟くと、龍騎はナイトに顔を向けた。その複眼からは強い意志が感じられた。

「今の俺は、仮面ライダーだ。戦える力があるのに逃げ出したら、それ

こそ本当のバカだよ。俺は、人を守るライダーになる。もちろん、仮面ライダーも、魔法少女もな！」

「挿入歌：果てなき希望」

そう叫んだ龍騎は、左腕についていた召喚機『ドラグバイザー』の上部カバーをスライドしてから、カードデツキに手を当てた。脳裏にはナイトが戦っていた時の情景が。

「さつきはここからカードを出して読み込んだから、俺も……！」
カードを引き抜いて、ドラグバイザーにカードを装填すると、音声が響き渡った。

『SWORD VENT』

直後、上空から龍の尾を模した剣『ドラグセイバー』が降ってきて、龍騎はそれをキャッチした後、勢いよく飛び出していった。

「うおおおおおっ！」

デイスパイダー・リボーンは向かってくる龍騎に対して針を発射したが、龍騎はそれを全てキックやドラグセイバーで弾き、そのまま飛びかかり、脚の上に乗つかると、何度も斬りつけてダメージを与えた。デイスパイダー・リボーンが後退すると、龍騎は地面に降り立ち、ドラグセイバーを持ち替えた後、新たにカードを取り出してベントインした。

『FINAL VENT』

「ハアアアアアア……！」

両方の拳を突き出して、横に移動させて力を込めたポーズをとっている間に、龍騎の契約モンスター『ドラグレッダー』が龍騎の周りを旋回しだした。そして地面を蹴り、空高く飛び上がると、ドラグレッダーもそれに続いて上昇。空中で一回転してから右足を突き出すと、後方からドラグレッダーが口から炎を噴き出して、龍騎は押し出される形で炎に包まれながら蹴りを放った。

「ダアアアアアアッ！」

放たれた龍騎の必殺技『ドラゴンライダーキック』がデイスパイダー・リボーンに直撃し、デイスパイダー・リボーンは耐えきれずに大きく吹き飛ばされて爆散した。

「ツシヤア！」

「……」

ガッツポーズを取っている龍騎を、ナイトとリップルはしばらく見つめていた。すると、マジカルフォンから音が鳴り、3人が確認してみると、マジカルキャンディーをゲットしたという情報が入った。と同時にシローがマジカルフォンから姿を見せた。

『少々危ういところはあったが、初陣としては中々のものだったぞ、龍騎』

「なあ、シロー？ これって何だ？ マジカルキャンディーって、よくゲームで使われてたやつだよな？」

『そう。モンスターを倒せば、報酬としてマジカルキャンディーが手に入る。手に入れられる数はモンスターの強さによって変わるから、よく覚えておくと良い。無論、何かしらの人助けを行うと、同様の事が起きる』

「人助け、か……。よっしゃ！ それなら俺でも何とかかなりそうだな！ いや、やっぱり仮面ライダーってスゲエんだなあ」

龍騎が自分の体を見回している様子を見て、ナイトは呆れたように呟く。

「この程度の事でガキみたいにはしゃいでどうする。龍騎……だったな。お前、本当のバカだな」

「ちよつと！ 何度もバカバカ言つて……！」

龍騎が抗議しようとした時、マジカルフォンから先ほどとは別の音が鳴り響いた。

「!?？ 今度は何だ？」

「時間切れか……。ここを出るぞ」

「時間切れって……？」

「ミラーワールドでの活動時間には制限がある」

リップルは端的にそう呟き、ナイトと共に近くの鏡に向かった。龍騎も慌てて2人の後を追いかけ、3人は無事にミラーワールドから脱出した。

現実世界に戻った龍騎は、カードデッキをVバックルから外して、変身を解除した。

「これが、仮面ライダーの……」

正史はしばらくカードデッキを見つめていたが、不意に顔を上げて、目線の先にいたナイトとリップルに声をかけた。

「あ、あの……。ありがとな！ さっきは助けてくれて。俺、城戸 正史！ 『OREジャーナル』で新聞記者やってんだ。そういうわけだからさ……」

そう言つて正史は右手を差し出すが、2人は無反応だった。

「……何のつもりだ？」

「何って、握手に決まってるんだろ？ これからも協力して、人助けやモンスターをやっつけたりする事になるんだぞ？」

「勝手に決めるな。それから、俺達はお前と今後一切つるむ気は無い」「えっ?。」

ナイトからの拒絶に、正史は困惑した。

「今回はたまたま居合わせたから、手を貸してやっただけに過ぎない。そんなに仲間が欲しかったら、自分から他に当たれ」

それから……。と、ナイトは正史に詰め寄り、睨みつけるように正史の顔を見た。

「今は周りに人がいないから良いが、不用意に人前で変身は解くな。」

正体がバレたら、その時点で仮面ライダーの資格は剥奪だ。仮面ライダーを辞めたくなければ、肝に銘じておく事だ」

「あ、ああ……」

正史は慄きながら頷き、ナイトはリップルと共に正史から離れようとした。が、正史には確認したい事があった。

「あ、ちよつと待って！」

「今度は何だ」

「名前だけでも教えてくれよ。その姿の名前」

正史にそう言われて、少し悩む素振りを見せたナイトとリップルだが、やがてナイトの方から口が開いた。

「仮面ライダー『ナイト』だ。それからこいつが」

「……リップル」

それだけ告げた後、2人は跳躍して、遠くへ去っていった。

「ナイトに、リップルか……」

正史はそう呟いた後、2人の後ろ姿から、夕日に目を向けた。間もなく1日が終わりを迎える。今までは何とも思っていなかった日々だが、これからは違う。城戸 正史としてだけでなく、仮面ライダー龍騎として、人々の日常を守る事に尽力を尽くす使命を全うするのだ。

男心をくすぐられるようなシチュエーションに、正史は俄然とやる気が出ていた。

「……ツシヤア！ 明日から張り切ってやるぞ！」

正史は夕日に向かってそう叫んだ。

因みに、『OREジャーナル』に戻った正史は、調査に何ら進展がなかった罰として、大久保から特製の青汁をたっぷりと飲まされて、三途の川を渡り掛けるような目に遭ったのだが、それは別の話。

7. 幼馴染みの秘密!?!?

その少女は大変困り果てていた。

「……無い、無い……!」

玄関の前でカバンをあさりながら、少女は必死に鍵を探していた。とある事情からバイトをするようになり、ようやく終わってバス停一本分くらいの道のりを徒歩で帰宅し、家の前に辿り着いたところで、初めて鍵を紛失していた事に気付いた。

道中で落とした可能性が高いが、探しているその鍵は小さく、秋という事もあって日の入りが早く、街灯と月明かりでは1人で探すのも困難だ。

いくら探しても見つからず、遂には目からぼろぼろと涙を零しながら、門の前でしゃがみ込んだ。

「何か困ってる事があるの?」

不意に、少女の耳に入ってきたのは可愛らしげな別の少女の声だった。声は後ろから聞こえているが、少女はキョトンとしたまま振り向けなかった。

「困ってる事があったら教えてほしいの。例えば……どこかで鍵を落としてしまったせいで家に入れない、とか」

「……!」

なぜそれが分かったのか。少女は驚き半分で顔を上げて振り返った。目の前にいたのは、学生服のようではあるが、どことなく華やかさが強く、ただ者では無い雰囲気を漂わせた美少女だった。よく見ると、奥にも別の人物が佇んでいた。そしてその人物もまた美少女同様、普通の人間とは一線を越えていた。狐のような仮面をつけ、鎧の身に纏うその姿は、まさしく仮面の戦士。

少女が目丸くしていると、美少女が仮面の戦士に目配せをした。戦士は頷くと、飛び上がって、家の屋根を転々としながら、少女が歩いてきた道のりに沿って駆け抜けた。

「大丈夫だよ。きっと彼が見つけてくれるから」

美少女は安心させるようにそう告げた。

魔法少女。そして仮面ライダー。

少女の脳裏には、以前学内で噂されていた都市伝説がよぎった。最初は少女もその存在を信じていなかったが、こうして間近で目撃してみると、何となくそのイメージがつく。

噂は本当だったんだ。少女はそう確信した。

それから5分後。仮面ライダーは2人のもとに戻ってきた。が、仮面ライダーの傍らには、先ほどまでいなかったはずの、人型の狐みたいな姿の異形の何かがついてきていた。少女はビックリして息を詰まらせたが、

「怖くないよ。あのモンスターも、私達の仲間だよ」

美魔法少女は肩を叩いてニツコリと微笑んだ。仮面ライダーは地面に降り立つと、右手を差し出した。その手のひらには、家の鍵が乗っている。

「これか……う？」

仮面ライダーは初めて声を発して確認した。少女は無言で頷いた。

「もうなくしちゃダメだよ」

仮面ライダーから鍵を受け取り、狐のモンスターを撫でていた魔法少女が笑みを浮かべながらそう呟くと、自然と少女にも笑みがこぼれた。我ながら久しぶりに笑ったものだ。そう思いながら、頭を下げながら感謝の言葉を伝えた。

が、顔を上げた次の瞬間には、2人の姿は消えていた。夢でも見ているような気分だった。だが、鍵が手元にある以上、夢ではない。魔法少女と仮面ライダーによって、自分は確かに救われたのだ。誰からも必要とされないと思っていた少女にとって、これほど胸が高鳴る瞬間は早々ないだろう。

鳩田はとだ 亜子あこ。

とある事情で、死を選ぼうとしていたその少女の心には、生き続けたという希望と共に、こんな自分でも必要としてくれる人がいるのではという探究心が芽生えていた。

「……………ふう」

夜も更け、辺りが静まり返った頃。スノーホワイトと集合場所で解散した後、九尾は人知れずN神社に帰り着き、すぐそばにある自宅の屋根の上に立った。しばらく夜風に当たった後、予め鍵を開けておいた自室の窓から音を立てずに、滑り込むように入り込み、一息ついてからカードデッキをVバックルから外した。そして九尾の姿は大地に戻り、大地は寝巻きに着替える為に服を脱ぎ始めた。

すると、マジカルフォンからシローの立体映像が出てきて、大地に

劳いの言葉をかけた。

『まだ教育係からのレクチャーも受けていないのに数日でここまでマジカルキャンディーを稼げるとは、私も驚きだ。特にスノーホワイトと行動を共にするようになってからは、ますます磨きがかかっていると見える』

「……まあ、あいつがどうしてもって言うから付き合ってるだけなんだけどな。断る理由も無いし」

大地は肩のコリを気にしながら、腕を回していた。

シローの言う通り、スノーホワイトの頼みにより、2人で行動するようになってからは、九尾の仕事や行動範囲も大幅に増えた。スノーホワイトの魔法を駆使して困っている人の所へ行って手助けをし、モンスターが現れた際は九尾が前に出て戦う。互いの利害が一致している事もあって、九尾の1日は多忙になった。面倒ではあるが、それまで退屈な日常を送っていた大地にとって、さほど苦になるものでは無かった。

『さて。君に伝えたい事がある。以前に話していた教育係の件だが、ようやく話がついて、明後日からレクチャーしてくれる者が決まった』

「ふくん。で、誰？」

『それは私の口から直接答えても良いのだが、折角なら、他の魔法少女や仮面ライダーとの交流も兼ねて聞き出すと良い』

「交流……？」

『以前にも語ったように、他の魔法少女や仮面ライダーとの連絡はマジカルフォンを通して行える。それに加えて、週に1回の頻度でチャットが行われるんだ』

「チャット……？ 集会みたいなもんか？」

着替え終わった大地はベッドに転がった。

『普段からチャットルームは開放してあるから、何時でも交流は可能なんだが、ここ最近は参加人数が少なくなっている一方だ。ただ、チャットでは業務連絡をする事もあって、ある程度人数は増える。因みに明後日が開催日だ』

つまり、その機会を狙って自己紹介をするのがベストだ。シローの言いたい事が分かった大地は唸りながら天井を見上げ、考え込んだ後に呟いた。

「……面倒だけど、最初ぐらいは挨拶しとくか」

翌日。大地は理科室の掃除を終え、担当の教師に報告し終えた後、部屋を出て教室に向かっていた。廊下を歩きながら、大地は昨晚シローから告げられたチャットの事を思い出していた。

「(シローの話じゃ、小雪の方にもファヴを通じて同じ事が伝えられるんだよな。今日会ったら時間を合わせてみるか)」

「おっ。大地」

と、そこへちようど通りかかった者がいた。大地の親友である颯太だった。

「颯太か。どうしたんだそのプリント?」

大地は颯太が持っているプリントの束を指差した。

「ああ。さつき近藤先生に頼まれて、手伝わされちゃってさ。ホント、面倒だよなあ」

「そいつはご苦労。んじゃあまた」

「……なあ、大地?」

「？」

「なんか良い事あったのか？ こないだからやけに気分良さそうだけど」

「ま、まあ、な」

大地はしどろもどろに答えた。まさか、仮面ライダーになれて毎日が退屈しなくなったから、とは言える訳もなく、どうにかして誤魔化す事にした。颯太もそれ以上追求せず、プリントを職員室へ運ぶ為に大地と別れた。

大地も途中までその背中を見送って、教室に足を向けた。つきあたりまで辿り着き、階段を登ろうとした時、ポケットに入っていたマジカルフォンが耳鳴りのような音を鳴らした。

「！……こいつは……！」

幸い、マジカルフォンは普通の人間には見えないらしく、音も同じように、周りには気づかれていないようだ。だがそれ以上に気がかりだったのは、マジカルフォンから鳴り響いた音だった。

モンスターが出現する事を知らせるものであり、それも校内で鳴ったという事は、十中八九すぐ近くに潜んでいる。

「……こんな時にも出るのかよー！」

大地は心の中で舌打ちした。面倒ではあるが、仮面ライダーである自分が気づいてしまった以上、見過ごす訳にもいかない。

すぐに変身しようかと思ったが、まだ周りには掃除を済ませていない者や、サボって談話している者がチラホラという。大地は仕方なくその場から離れて、人がいなさそうな場所を見つける為に走った。

程なくして、普段から人の立ち寄らない特別教室に繋がる廊下に辿り着いた。近くに職員室もある為、急いで変身しなければ見つかってしまうかもしれない。そう思った大地はポケットからカードデッキを取り出し、窓ガラスに向かって突き出した。窓ガラスに映る自分と現実にいる自分の腰にVバックルが装着され、大地は右腕を後ろに引いてから、勢いよく叫んだ。

「変身！」

カードデッキを差し込んだ瞬間、大地は違和感を感じた。今、自分以外に別の声が重なっていたような……？

「んっ？」

カードデッキを差し込むと同時に声のした方に顔を向けた時、大地の思考は停止した。

そこにいたのは、あろう事か、先ほどバツタリ出会ったばかりの岸辺。颯太ではないか。プリントを渡し終えた後らしく、その手にはプリントは無かったが、代わりに見覚えのある物が握られていた。

颯太もまた、振り向いた先に大地がいる事に驚いているのか、目を見開いていた。2人は互いに、目の前に見えた親友に声をかけようと

分が仮面ライダーになったという事実が常に頭をよぎっていた。

「(結局あのナイトやリップルって子とは最後まで話せなかったし、やっぱチャットでも使って他のライダーや魔法少女に会って話しかけてみるか……)」

そう思っている、マジカルフォンから耳鳴りに近い音が鳴り響いた。正史は道路脇に停車してからマジカルフォンを取り出す。モンスターの出現を知らせる音である。

「！ モンスターか……！」

正史は反応に従って、方向転換して現場に向かった。

やがて辿り着いたのは、近くにあった中学校。その場所に正史は見覚えがあった。

「！ っ……って、大地君の……！」

正史はヘルメットを外すと、校門をくぐって中に入っていた。本来なら不法侵入として後々厄介な事になりそうだが、今の正史にそこまで気にかける余裕は無かった。モンスターが誰かを狙っている以上、戦って守らなければならない。その事だけが正史を突き動かしていた。

反応が強くなっているのを確認しながら走り回っていると、正史の目に、それは飛び込んだ。きた。

目の前には1人の女生徒が両手にゴミ袋を持って歩いていた。目の前にあるゴミ捨てに向かう途中のようだ。そんな女生徒を狙うかのように、レイヨウ型のモンスター『ギガゼール』が近くの窓ガラスから見ていた。

そして、女生徒がゴミ置場に投げ捨て終えたタイミングを見計らって、ギガゼールが窓ガラスから飛び出し、女生徒に飛びかかろうとした。が、正史がそれを見逃すはずもなく、すんでの所で体当たりして、ギガゼールを弾き飛ばした。ギガゼールはそのまま窓ガラスを通じてミラーワールドに逃げ込んだ。

「早く逃げてー！」

正史がそう示唆すると、女生徒も慌ててその場から逃げ出した。周りに誰もいなくなったのを確認してから、正史はギガゼールが逃げ込

んだ窓ガラスにカードデッキをかざした。Vバックルが装着された後、正史は右腕を左斜め上に伸ばして叫んだ。

「変身ー！」

子供の頃に観ていた、憧れの特撮ヒーローの変身ポーズをオマージュしたポーズをとった正史はカードデッキを差し込むと、鏡像が重なり、龍騎へと変身した。

「ツシャアー！」

一声気合いを入れた龍騎はそのままミラーワールドへと向かい、ギガゼールを追いかけた。

一方、龍騎が到着するよりも早く、ミラーワールドに突入したのは、変身した大地と颯太だった。片や仮面ライダー、片や魔法少女……もとい魔法騎士となった2人は気まずい感じになってしばらく動けなかった。特に颯太からしてみれば、魔法少女という異性に変貌した所を、よりにもよって友人に目撃されてしまったので、こうしている今も気が気でない。が、モンスターを放っておくわけにもいかない為、諸々の話は後回しにして、ミラーワールドに飛び込んだ。

2人の前には、ギガゼールと同種の『メガゼール』、『オメガゼール』、『ネガゼール』が待ち構えていた。

「複数いるな」

「気をつけて。あのタイプのモンスターは素早く動き回るし、一気に詰め寄って攻撃してくるんだ」

「前に戦った事があるのか？」

「ま、まあ……」

「どうやら思っていた以上に長く魔法少女を務めていたようだ。そう思った九尾は、顔を赤らめている彼女(?)を戦いに集中させる為に声をかけた。」

「と、とにかくこいつらを倒すぞ。時間がかかるとまずいしな」

「あ、ああ！」

「あ、後さ。その姿の名前って……」

「ら、ラ・ピュセルだ。それで、君は……」

「九尾だ。仮面ライダー九尾」

「分かった。九尾、行くよ！」

「ああ！」

『SWORD VENT』

九尾がカードをフォクスバイザーにベントインし、両手にフォクセイバーを構え、ラ・ピュセルは背中に背負っていた剣を抜き取った。すると、ラ・ピュセルの持つ剣が肥大化した。

「！ それってもしかして、お前の」

「ああ。これが僕の魔法だ。ハアッ！」

ラ・ピュセルが大剣を構えると、メガゼール達に向かって飛びかかった。九尾もそれに続いて立ち向かった。

メガゼール達は素早く飛び上がり、手に持つ刀や両腕から生える鋭いカッターで応戦し始めた。

「ふっ！ ハアッ！」

「ダアッ！」

九尾は軽いステップでひらりとかわしつつも、隙についてフォクセイバーを振るい、ネガゼールにダメージを与えていた。一方でラ・ピュセルもフルスイングで大剣を振り回して、メガゼールやオメガゼールを吹き飛ばした。しかし敵も素早い為、なかなか決定打を与える事が出来ない。2人は背中合わせになって息を整えた。

「くっ……。確かに速くて厄介な奴らだな」

「どうにかして動きを封じないと……」

それから再び駆け出して剣を振るっていると、九尾の視界に別の人影が入った。

「おわっ!?」

それは、ギガゼールから距離をとろうとして必死に避けている龍騎だった。奥からはノコギリ状の刀を持ったギガゼールが迫ってきており、突き出して攻撃していた。

「くっそ……!」

龍騎もどうにかしてアドベントカードを取り出そうとしているが、敵はそんな暇さえ与えずに向かってくる為、戦況が変わっていない。

「あれは……、ライダー……!?」

「もしかして、あれが新しい16人目の……」

「ラ・ピュセル!」

「ああ!」

ラ・ピュセルも龍騎の存在に気付き、九尾に相づちを打ってから大剣を振り回してメガゼール達を引き離した。

「うわっ!」

遂に突きをくらって倒れ込む龍騎。メガゼールが串刺しにしようと、飛び上がって刀を突きつけた。

「ハアッ!」

そこへ割り込むように九尾とラ・ピュセルが龍騎の前に出て、2人の飛び蹴りが決まり、メガゼールは吹き飛ばされた。

「えっ!? 仮面ライダーに、魔法少女……!」

「大丈夫か?」

「あ、ああ。ありがとう」

突然目の前に現れた、初めて目撃する2人を見て驚きつつも、九尾が差し伸べた手を掴んで立ち上がった。そこへラ・ピュセルが話しかけてきた。

「君が、ファヴの言っていた新しいライダーだね。僕はラ・ピュセルだ」

「俺は九尾。あんたは?」

「お、俺は龍騎だ。たまたま近くにいたから変身してここに来たんだ」

「分かった。それなら協力して、あいつらを倒そう！」

「分かった！ ツシヤア！ やるぞー！」

仲間が増えた事で俄然やる気になった龍騎は、カードデッキから1枚のカードを取り出し、ドラグバイザーにベントインする。

『SWORD VENT』

ドラグセイバーを持ち、龍騎が走り出すと、後の2人もついていた。

まだ不慣れな龍騎と違い、ある程度モンスターとの戦いに馴染んできた九尾と、3人の中ではベテランでもあるラ・ピュセルは変身前が知り合いという事もあってか、互いに息を合わせてギガゼール達を翻弄している。

しかし、いくら斬り倒しても一向に手を緩めてくる様子が見られない。ふと気づくと、周りにはいつの間にか大勢のモンスターに囲まれていた。それも、同種タイプの者達ばかりである。

「あ、あれ!?? なんぞ増えてない!?!?」

「仲間を呼ばれてたか……!」

ラ・ピュセルが苦々しげに呟いた。

数に圧倒されていく内に、3人はジリジリと中心に集まろうとしていた。そこへ3体のメガゼールが一斉に龍騎に向かって襲いかかってきた。周りが敵だらけで動ける範囲が狭くなっている為、龍騎は回避する術がない。思わず身構えたその時だった。

「ピヤツホオオオオオッー！」

不意に上空から何かがメガゼール達のすぐそばを横切り、メガゼール達は地面に倒れた。

「!?? 今度は何だ?」

「もしかして今のは……!」

ラ・ピュセルが何かを察したように上空を見上げた。九尾もその視線を追いかけるように見上げると、先ほど横切ったものが徐々に下降してきた。よく見ると、それは箒に乗った人だった。ラ・ピュセルには心当たりがあった。箒に乗ってミラーワールドを駆け回れる者は1人しかいない。

「トップスピード！」

「よう！　なんか張り切ってるみたいだな！　俺も混ぜてくれよ！」

戦地であるにもかかわらず、声高らかに笑いながら地面スレスレで停止して、箒から降り立ったのは、ラ・ピュセルの先輩でもあり、とんがり帽子を被った、一人称が俺の魔法少女、トップスピードだった。

8. 変わらないモノ

「いや〜。にしてもこんなにモンスターがわんさか湧くなんて、今日はバーゲンセールか何かあんのか？」

魔法の箒を片手に、トップスピードは遠くを見るように額に手を当てながら、ギガゼール達を見ていた。

彼女がこの場にやって来た理由は単純だ。

何やら騒がしかったから、気になって来てみた。ただそれだけの理由だった。

九尾にとっては初めてみる魔法少女であり、龍騎からしてみれば、SNSでボンヤリとではあるが、目の前の魔法少女と同じシルエットを見た事がある程度だった。そんな中、ラ・ピュセルだけが突然現れたトップスピードに臆する事なく話しかけた。

「丁度良かった。トップスピード、君にも協力してほしいんだ。この数は僕達では捌ききれない」

「ん？ もちろん良いけど、俺は基本、こういう荒事には向いてないぞ？ せいぜい動き回って攪乱するぐらいしか、取り柄が無いぞ？」

「十分だよ。トドメは僕達3人でも可能だ」

「そーいや忘れてたけど、その2人って新入りだったよな？ 確か……」

「九尾だ。仮面ライダー九尾」

「俺、龍騎です！ よろしくお願いします！」

「そんなに硬くしなくて良いって。お互い仲良くいこうぜ！ ハハッ！」

「そ、そっか……。じゃあ、よろしくな、トップスピード！」

「おうよ！」

まだ会って数分しか経っていないはずなのに、この2人はすっかり意気投合しているようだ。戦場に響く呑気な会話を前に、九尾はため息をつき、ラ・ピュセルは苦笑する他なかった。

だが、敵も黙っているはずもなく、飛び回りながら4人を囲んだ。

「挿入歌：果てなき希望」

「そんじやま、ひと暴れすつか！ 行くぜえ、ラピッドスワロー！」
そう言つてトップスピードは愛用の箒『ラピッドスワロー』に跨ると、あつという間に飛び出して、ギガゼール達の注意を向けた。

「ハアツ！」

その隙を逃す事なく九尾とラ・ピュセルは駆け出して斬りつけた。

「うおつと……い！ お、俺も！」

出遅れた龍騎も、飛びかかってくるメガゼールに対抗していた。

「キキイ！」

「うおりやああああ！」

オメガゼールやネガゼールは跳躍してトップスピードを狙っているが、トップスピードはそれを上回る高さにまで上昇して、モンスター達を翻弄していた。そして隙あらば急降下して、箒の柄の先端を突いて、オメガゼールを吹き飛ばした。

「ハアツ！」

一方、龍騎もドラグセイバーを片手に持ち、メガゼールと激しい戦闘を繰り広げていた。メガゼールの持つ武器とぶつかって火花を散らす中、拮抗しあっている隙をついて、メガゼールが武器を振り回し、ひつついていたドラグセイバーを上空に放った。

「ああ！ 俺の武器！」

龍騎が手を伸ばそうとするが、メガゼールの猛攻により、慌てて手を引っ込めて回避に専念した。すると、空中を舞っていたドラグセイバーを偶然通りかかったトップスピードがキャッチした。そしてドラグセイバーをまじまじと眺めてから、地上にいる龍騎に言った。

「これ凄そうだな！ ちょっと借りるよ！」

「あ！ だからそれ俺の武器……い！」

龍騎が返してほしいという前に、メガゼールが龍騎を吹き飛ばした。再び攻撃を仕掛けてくる前に、龍騎はカードデッキからカードを取り出し、ベントインした。

『GUARD VENT』

両肩にドラグシールドが装備され、それを手に持ってメガゼールの攻撃を凌いだ。しかし、いつまでも守りに徹する訳にはいかない。上

空を見上げると、トップスピードがまるでおもちゃを手に入れた子供のようにはしやぎながらドラグセイバーを振り回し、迫ってくるモンスター達を一掃していた。

「… そうだ！ あれに乗れば……！」

龍騎は何を閃いたのか、ドラグシールドを捨て、メガゼールによる武器の突きをジャンプしてかわすと、その上に乗っかって、高く飛び上がった。そして真上にいたトップスピードが乗るラピッドスワローにしがみついた。

「うわっちよっ!?? 何してんだ!??»

「こ、これに乗せてくれよ！ 重くて落ちたりしないよな!??»

「ま、まあ2人乗り用だから問題無いけどさ。こいつに乗ってるだけじゃ、あいつらにダメージなんて……」

「大丈夫！ 俺に任せて！」

龍騎は自信に満ちた声で叫んだので、トップスピードはそれ以上理由を聞く事なく減速して、龍騎をちゃんとラピッドスワローに乗せた。

「で、どうすんだ？」

「まあ見てなっつて」

そう言っつて龍騎は新たに1枚のカードをベントインした。

『STRIKE VENT』

すると、上空から龍の頭を模した『ドラグクロー』が右手に装備された。

「そのまま一気に進んで！ ハアアアアアアッ！」

「あいよー！」

龍騎が右腕を後ろに引くと、トップスピードは少し降下して、スピードを上げた。同時に2人の周辺をドラグレッダーが旋回し始めた。

「ハアアアアアアア！」

龍騎が地上に向けて右腕を突き出すと、ドラグレッダーやドラグクローの口から炎が吹き荒れた。そしてその炎は、トップスピードが繰り出すスピードに乗っかって、地上にいたり、飛び上ろうとしていた

メガゼールやマガゼール、オメガゼールらに降り注ぎ、回避する間もなく『ドラグクローファイヤー』の直撃を受けて爆散した。

「ツシヤア！」

「おおー。カッコいいじゃんかよ！」

トップスピードは龍騎の姿やドラグクローを見て、目の色を変えた。

龍騎も、初めて使用したドラグクローを興味深げに観察していると、ふと思いついたかのように、別方向を向いた。

「！ そうだ、あの2人のところに行かなきゃ！ トップスピード！」
「分かってるって！」

そう言つて2人は遠くに離れた九尾やラ・ピユセルのいる方向に向かった。

一方、九尾とラ・ピユセルのコンビの方は、ほぼ順調と言つていいほどにモンスターを圧倒していた。

「うおおっ！」

ラ・ピユセルが振るう大剣の風圧を受けて、ギガゼール達は地面を転がっていた。そして九尾も最小限の動きでギガゼール達の合間を潜って斬りつけていた。だが、一向に数が減る様子がない。

「ならんこは……」

九尾は1枚のカードを取り出し、フォクスバイザーにベントインし

た。

『TRICK VENT』

そして駆け出す九尾に向かって、ギガゼールが正面から飛びかかった。その瞬間、九尾の隣にもう一人の九尾が現れて、ギガゼールの一振りは空を切った。

「えっ!?? 双子!??」

「ん!??」

後から駆け付けた龍騎とトップスピードが、九尾が増えている事に驚いていた。それだけに留まらず、もう一体が出現してギガゼールに攻撃した。

「三つ子!??」

「また増えやがった!??」

その後も九尾は分裂し続け、最終的に8体の九尾がギガゼールに斬りかかっている光景が広がった。

「ど、どんだけいるんだよ!??」

「分身の術って訳か……。そういやこれってリップルにも真似出来るのか?」

トップスピードは龍騎に聞こえない音でそう呟いた。

そうこうしている間に、ギガゼール達を一ヶ所に集めたのを確認した九尾は、ラ・ピュセルに合図を送った。

「ラ・ピュセル!」

「!」

九尾の次なる行動を理解したラ・ピュセルは、大剣を横にして、肩に担いだ。

『FINAL VENT』

その間に、九尾はカードをベントインし、気合いを入れた。

「はあああああああつ!」

フォクスロードと共に飛び上がり、前転して右足を突き出し、フォクスロードと合体した。それを見たラ・ピュセルは、一気に大剣を下から振り上げるようにフルスイングした。

「ウオオオオオオオツ!」

バッターのように振り抜いた大剣は倒れていたギガゼール達に直撃し、全員まとめて上空に吹き飛ばされる。そこに向かつて九尾が『ブレイズキック』を叩き込み、ギガゼール達は身動きが取れぬまま、炎に包まれて爆散した。まさに親友だからこそ出来るコンビネーションプレイと呼ぶに相応しい戦いぶりだったと言えるだろう。

九尾とフォクスロードが着地すると、モンスターを全て倒した事を証明するかのようにはマジカルフォンが鳴り、マジカルキャンディーの数が上昇した。

「おお！ モンスター退治でゲットするの初めてだけど、こんなに貰えんのか！ ボロ儲けたなあ！」

マジカルフォンを見て興奮しているトップスピードをよそに、ラ・ピュセルはホッと一息ついた。

「あんなにも大群のモンスターと戦うのは初めてだったけど、勝てて良かった……。これもあの龍騎ってライダーや、九尾……。いや、大地が……」

「ラ・ピュセル」
「！」

九尾が歩み寄って来るのを見て、ラ・ピュセルは身構えた。もしかしたら、男友達である自分が魔法少女に変身していた事に言及するつもりなのか。確かに不用意に確認もせずに変身してしまったのは事実だし、いきなり異性に変貌してしまったのを見て、気持ち悪がられてしまうのも無理ないのかもしれない。そう思ったラ・ピュセルは、ある種の覚悟を決めていた。

が、そんなラ・ピュセルの期待を裏切るかのように、九尾は手を出して、ハイタッチしようとしてきた。

「やったな」
「……！ あ、ああ」

ラ・ピュセルは戸惑いながらも九尾とハイタッチをした。それから九尾に話しかけようとしたラ・ピュセルだったが、龍騎とトップスピードが割り込んできて、それを遮った。

「いやあ、凄かったな今の！ 2人とも息が合ってたっていうか……」

「俺も遠くから見ただけど、ラ・ピユセルもそうだし、九尾も最高だったぜ！ もちろん龍騎もな！」

「お、おう！ まあな！」

龍騎は照れたように頭を掻く仕草を見せた。

それからトップスピードはラピッドスワローに跨り、3人に手を振った。

「んじやあまた明日のチャットで会おうな！ 今度はちゃんとリップルとナイトも連れてくるからさ！」

それを聞いて真っ先に反応したのは龍騎だった。

「ん？ ちょっと待って！ 今リップルとナイトって言わなかった？！」

「言っただけど？ チームを組んでる仲だからな」

「俺、昨日そいつらと一緒に戦ってたんだ！ あいつら、他の奴らとはつるむ気がないって言ってたけど……」

それを聞いて、トップスピードは爆笑した。

「アツハツハ！ それはあいつらがツンデレなだけさ。なんだかんだで俺とも長い付き合いだからな。……あ、そうだ。もしあれだったら、俺があんたの教育係になってやるよ。そしたらあの2人とも一緒にいられるからさ。お互い仲を深め合っさいこうぜ」

「いや、俺は別にそこまで頼んで……」

「んじやあまたな！」

トップスピードは龍騎の話を聞く事なく、あつという間に発進し、ミラーワールドから出て行った。

「行っちゃった……」

「トップスピードは普段からああいう感じだからね……」

トップスピードの事をこの中ではよく知っているラ・ピユセルは、もう慣れたと言わんばかりに苦笑した。やがてマジカルフォンから活動時間に限界が近づいている事を知らせる音が鳴り響いたので、3人は退散する事にした。

「それじゃあ、俺はあっちの鏡から出るよ。近くに停めてあったから」
「そうか」

「今日はありがとう。また明日、チャットで会おう。今日の活躍もあるし、みんな大歓迎してくれると思うよ」

「へえ。じゃあなー」

龍騎は手を振りながら、彼がやって来た方向に走り去った。

残された2人も、最初に入ってきた鏡から現実世界に戻ってきた。変身が解かれ、大地が背伸びをしてリラックスしていると、颯太が話しかけてきた。

「あ、あのさ……」

「？」

「えっと、その……」

先ほどまで悩んでいた事をどう伝えようか迷ってしまい、うまく呂律が回らない颯太。大地が首を傾げていると、チャイムが鳴り響いた。そういえば、まだ昼休みだった事を思い出して、2人は顔を合わせた。

「わ、悪い！ 今夜場所を設けてまた話そう！」

「あ、ああ。良いけど」

「それじゃあ場所は……」

そう言っただけで颯太が待ち合わせ場所や時間を指定すると、一目散に教室に向かって背を向けて駆け出した。大地は颯太の言動に訝しんでいたが、授業に遅れる訳にもいかないため、急いで教室に戻っていた。

その晩、大地は自室でマジカルフォンを通じてスノーホワイトにメッセージを送った。用事が出来た為、今日は一緒に行動出来ないご連絡し、了承を得た後、九尾に変身してから窓を開けて外に飛び出し、颯太が指定した場所に向かった。

やって来たのは、丘の上に佇む、一際大きな鉄塔。近くに俱辺ヶ浜と呼ばれる夏の観光スポットがあるが、秋という事もあり人通りがほとんどない為、確かに魔法少女や仮面ライダー同士の密会には最適なのかも知れない。

時計に目をやって、時間通りになったのを確認した九尾は飛び上がった、鉄塔の上を目指した。

鉄塔の上には、既に誰かの人影が見えていた。言わずと知れたラ・ピュセルである。

「来たぜ。ラ・ピュセル」

「……やあ」

九尾にそう短く返事をしたラ・ピュセルは、隣に座るように示唆した。九尾もそれに従って、ラ・ピュセルの隣に座り、夜の街を一望した。人気はなかったが、海水浴場に広がる海が静かに波の音を立てていた。

しばらくの沈黙の後、最初に口を開いたのはラ・ピュセルだった。「き、今日はありがとう。まさか君が変身して戦ってくれるとは思ってなかったよ」

「俺だってお前が変身するなんて思ってなかったさ。それも魔法少女に」

「……」

魔法少女に。その言葉を聞いて、ラ・ピュセルは俯いた。

「(……やっぱり、気持ち悪がられてるかな)」

これから先、親友としてこのままやっていけるのかが不安で胸が張り裂けそうになる中、九尾が質問をしてきた。

「……で、いつからなんだ？」

「えっ……」

「いつから魔法少女になってたんだよ」

「そ、それは……」

「てつきり仮面ライダーに憧れてると思つてたんだけどな。だって子供の頃とか、一緒に特撮見てたし」

「ち、違うんだ……!」

「？」

「ほ、本当は、もつと好きだったんだ。その……、魔法少女の方が……」

観念した罪人のように、ラ・ピュセル……もとい颯太は白状した。

幼少期に偶々見ていた魔法少女系のアニメにはまって、それがキツカケで魔法少女に憧れていた事。

幼馴染みとその事でよく語り合つて、人生を満喫していた事。

その想いは大地と共に遊んでいる時でも、一瞬たりとも忘れた事がない事。

中学生になつた今でも、魔法少女が好きである故に、人目につかないように隣のレンタルショップまで出向いて、魔法少女系のDVDを借りたり、そういった類の漫画やライトノベルを自宅の隅に隠し持っていた事。

当然『魔法少女育成計画』にも手を出し、何度かプレイしている内にファヴにスカウトされ、魔法少女『ラ・ピュセル』となり、人助けやモンスター退治に勤しんできた事。

「だ、だから。正直憧れの魔法少女になれた事は嬉しかったし、同時に怖くもあつた。もし僕の正体が他の魔法少女や仮面ライダーに知られたら、どんな目で見られるのか、とにかくその事だけが、頭によぎつてた……」

言いながら、ラ・ピュセルは顔を俯かせた。その表情は昼間とうつて変わつて暗く、本気で悩んでいる様子だった。九尾はしばらく黙つて見つめていたが、不意にラ・ピュセルの方から九尾に視線を合わせた。

「……ねえ。今更かもしれないけど。やっぱり僕って気持ち悪いと思

う？ サツカー一筋だつて言つてた僕が、こんな格好でこの街を彷徨
いてるって思うと、変だよね……。嫌いになつたつてしょうがないよ
ね……」

自虐的にそう確認してくるラ・ピュセル。このまま縁を切る事になつても、構わないという姿勢を見せる為にも、ラ・ピュセルはなるべく堂々とする事にした。

対する九尾の反応は……。

「……らしくない事言いやがつて」

不貞腐れた口調でそう返した。ただ、その口ぶりはラ・ピュセルが想像していたものとはまた違う感じがした。ラ・ピュセルが困惑していると、九尾は淡々と語り始めた。

「俺とお前は知らない仲じゃ無いんだから言わせてもらうけどよ。んな事でお前を嫌うわけないだろ。ここで忌み嫌うぐらいだったら、最初から友達になつてないし。これぐらいで関係を変える必要なんてこれっぽっちもないだろ」

九尾は少し歯切れが悪そうに呟くが、ラ・ピュセルは驚きのあまり、目を見開き続けている。

「お前が魔法少女好きだったのはよく分かった。なら、それで良いじゃねえか。俺は別に否定しないし、それがなりたかった自分だったんなら、それを自分の中で誇ればいいんだよ。それに……」

「それに？」

「け、結構カッコいいじゃねえかよ、その格好……」

九尾はそっぽを向くように視線を逸らした。自分の姿を初めて褒めてくれた親友の言葉を聞き、ラ・ピュセルは思わず涙ぐんだ。が、どうにかしてそれを堪え、真っ直ぐと九尾を見据えた。

「だから、その……。自分の事、そんなに嫌いにならなくてもいいんじゃないねえの？ 他の奴らには黙っておくからさ。もつと騎士らしく堂々としてろよ。その方が颯太っぽくて似合うし」

「……あり、がとう。……大地」

思わず変身前の姿の名前を呟いてしまったラ・ピュセルだが、それだけ感極まつて、精一杯親友に感謝している証拠でもある。

それからラ・ピュセルは立ち上がり、背中に背負っていた剣を抜いて肥大化させ、高く掲げた。

「なら僕は、ここに誓おう！ 魔法騎士ラ・ピュセルは、我が生涯の友である仮面ライダー九尾と共に、恥じる事なくこの街で戦う事を！」
「お、おお……」

大胆な行動に困惑する九尾だったが、ラ・ピュセルが手を差し出した事で、彼も立ち上がって手を伸ばし、誓いを立てるように互いの手を握った。

「これからもよろしく、九尾」

「あ、ああ。まあその、よろしくな、ラ・ピュセル」

彼が親友で本当に良かった。ラ・ピュセルは今以上に大地の存在に感謝する事はなかっただろう。

ただ、彼にはまだ残っている課題があった。

「あ、それから一つ頼みたい事があるんだけど……」

「？ 何だ？」

「こないだの書き込みで何度か目撃してたんだけど、君はいつも、新人のスノーホワイトと行動を共にしてたよね？」

「あ、ああ。ほんのちよつと前からの話だけど」

「じゃあ、彼女の正体も……？」

「ま、まあな」

「そうか……。なら、明日……うん、明後日までスノーホワイトには僕の正体を明かさなideくれないか？」

「良いけど、何でだ？」

「こ、こういう事は僕の口からちゃんと言えないといけないし……。それに、直に会って確かめてみたいから」

理由は分からないが、スノーホワイトとは何かしらの接点があるのかもしれない。何れにせよ、明後日までには解決する事だろうと思つた九尾はそれ以上追求しない事にした。

親友が互いの正体を知り、共に戦うというハプニングこそあったが、改めて友情を確認し合った大地と颯太であった。

9. チャット会に参加しよう！

「ふう〜……」

長く感じた宿題を終え、腕を伸ばす大地。時計に目をやると、間もなく小雪と約束していた時間を迎えようとしていた。

「そろそろか」

大地は勉強机から離れ、ベッドに横になってからマジカルフォンを起動し、チャットルームへと入室した。

画面には、ゲーム内で設定されていたアバターがそっくりそのまま映っており、入り口と思わしき門の前に立っていた。そんな九尾を歓迎するかのように、周辺には様々な魔法少女や仮面ライダーがいた。

トップスピード：『お、きたきた！』

ねむりん：『こんばんはあ〜』

シザース：『噂をすれば、ですね』

「結構いるな……」

大地が画面を見てそう呟いていると、九尾の隣に、スノーホワイトが出現し、遅れて20秒後に龍騎のアバターが並び立った。どうやらたった今入室したようだ。

ファム：『あら。丁度3人揃ったわね』

シスターナナ：『この方々が、噂の新人さん達ですね』

龍騎：『良かった。遅れちゃったかと思った』

トップスピード：『大丈夫だって！ あたしら最初からもう少しここに
いるつもりだったし』

ナイト：『……帰ってもいいか？』

トップスピード：『ダメに決まってるだろ!? 折角新人が挨拶に
来たんだから、それに応えるのが先輩ってもんだろ』

ライア：『そうだぞ、ナイト』

ライアと呼ばれるアバターがコメントしてから、しばらくナイトか
らのメッセージは無かった。頃合いとみたのか、スノーホワイトが挨拶
をした。

スノーホワイト：『あ、あの！ 初めまして！ スノーホワイトと言
います！ その、よろしくお願いします！』

トップスピード：『そんなに緊張しなくて平気平気！』

龍騎：『俺、龍騎です！』

スノーホワイトと龍騎が自己紹介したので、大地も仮面ライダーと
しての名前を入力する。

九尾：『九尾です。よろしくお願いします』

トップスピード：『んじゃあこっちからも自己紹介だな。龍騎と九
尾はもう知ってるだろうけど、俺はトップスピード！ よろしくな
！』

スノーホワイト：『あれ？ 2人はもう会ってるんですか？』

スノーホワイトから疑問の声があがるのも無理はない。昨日、大地
や颯太の通う学校に現れたモンスターの襲撃を2人や龍騎に加えて、
トップスピードが乱入して解決してくれたのだ。その事を龍騎は説
明した。

龍騎『うん。昨日一緒に戦ってたから』

スノーホワイト：『そうだったんですか』

トップスピード：『それから、この2人が昨日話してたナイトとリッ
プルだ！』

リップル：『……どうも』

ナイト：『……どうも』

忍者風の魔法少女リップルと、コウモリをモチーフにした仮面ライダーナイトの2人は全く同じコメントを返した。どうやら人と関わるのは苦手なタイプのようだ。大地がそう解釈している間にも自己紹介が続いた。次にコメントしたのはパジャマ姿の魔法少女だった。

ねむりん：『ねむりんです』

シザース：『私はシザースです。どうぞよろしく』

ねむりんの次は、蟹をモチーフにした黄色い仮面ライダー『シザース』がそうコメントした。

シスターナナ：『私は、シスターナナと申します』

ウインタープリズン：『ヴェス・ウインタープリズンだ』

その名の通り、背徳感の強いシスター姿の魔法少女『シスターナナ』と、長いマフラーやコートを着込んだボーイッシュな魔法少女『ヴェス・ウインタープリズン』が挨拶をすると、すぐ近くにいた、コオロギをモチーフにした黒いライダーと白鳥をモチーフにした白いライダーの2人がそれに続いて挨拶した。

オルタナティブ：『オルタナティブです。以後お見知り置きを』

ファム：『ファムよ。よろしくね』

「このファムってライダー。ひよつとして女か……？」

表示されたコメントの口調を見て、大地はそう感じた。考えても見れば、颯太のように男が魔法少女になっているのだから、女が仮面ライダーになるのも不思議ではない。もともと、女が仮面ライダーになるのはまだしっくりくるが、男が魔法少女になるというのは、いざ真剣に考えてみると、若干違和感がある……。

とはいえ親友がそのような姿になっていたところで関係を改める必要は無いと大地は考え直し、再び画面に目を向けた。

ラ・ピュセル：『ラ・ピュセルだ！ 歓迎するよ！』

騎士らしく堂々としているラ・ピュセルのその挨拶は、スノーホワイトトに向けたものだろう。

ライア：『俺はライアだ。よろしく』

その次に、ラ・ピュセルの隣にいた、エイをモチーフにしたピンク色の仮面ライダー『ライア』だった。

アビス：『私はアビス。よろしく』

鯨をモチーフにした青いライダーの『アビス』がそう紹介すると、高い丘の上でバイオリンを弾いている、エルフのような魔法少女が挨拶した。

クラムベリー：『私は、森の音楽家クラムベリー。そしてこちらが』
クラムベリーに続いて、不死鳥をモチーフにした、黄金色の仮面ライダーが腕組みをしながら律儀に答えた。

オーデイン：『オーデインだ。ようこそチャットルームへ』

龍騎『結構いるんだなく。でも、これで全員なの？ シローの話じゃ、もつといっぱいいるって聞いてたけど』

シスターナナ：『そうですね。少し前まではそれなりにいたんですけど、ちやうどあなた方と入れ替わりになったんです』

オルタナティブ：『とは言っても、普段はこれほど集まる事はありませんからね』

ラ・ピュセル：『さっきまでは、君達の話をしてたからね』

九尾：『俺達の？』

大地は気になってそうコメントした。すると早速返事が返ってきた。

ねむりん：『そうだよ。3人とも凄いもんね』

トップスピード：『魔法少女とか仮面ライダーになって、まだ1週間も経ってないのにな』

ファム：『今週の成績の上位は、あなた達3人が占めてるものね』

シザース：『そうですね。私になった当初でもここまでマジカルキャンディーが手に入る事はありませんでした』

スノーホワイト：『成績……？ トップ……？』

スノーホワイト同様、大地もファムの言葉が気になっていた。すると、そんな疑問を解決するように、クラムベリーが解説した。

クラムベリー：『成績順位は、マジカルフォンで確認できます』

オーデイン：『因みに、一位はスノーホワイト、二位は九尾、三位は龍騎という順になっている』

龍騎：『へえ〜！ 凄いなスノーホワイト！』

スノーホワイト：『そんな。恐縮です。私、人助けぐらいしか取り柄が無いから』

スノーホワイトが照れたように呟いた。思えばスノーホワイトは、九尾と出会う前からかなりの数の人助けをし、その度にマジカルキャンディーをゲットしていた。九尾が二位になれたのも、彼女のサポートがあつての事だった。

シスターナナ：『まだ分からない事だらけでしょうけど、先輩方に色々教えていただくと良いですよ』

九尾：『ありがとうございます』

スノーホワイト：『ありがとうございます！』

龍騎：『ありがとう！』

そこからは、主にトップスピードによる面白おかしい体験談の語りだけが続いた。シスターナナはそれに相槌を打ちながら時折自身の体験談を語り、そこにウィンタープリズンやオルタナティブ、ファミがちよくちよくコメントを入れたりしていた。ねむりんは単に聞いている方が面白いからなのか、聞き役に徹しており、シザーズやアビス、そしてオーデインも偶にコメントするだけで、彼らもねむりん同様聞き役に徹していた。クラムベリーは部屋の隅でバイオリンを使ってBGMを流している。

「話し、長……」

その一方で、大地は段々とトップスピードの長話に飽きてきていた。適当にコメントを書き込むのも面倒になり、そろそろ退室しようかと思っていると、スノーホワイトが突破口(?)を開いてくれた。スノーホワイト：『あ、あの。もう夜遅いですから、そろそろ退室しても良いですか?』

ライア：『そうだな。明日も色々忙しいだろうから、もう寝た方が良い』

スノーホワイトのコメントを見て、大地はふと、壁に掛けてある時計に目をやった。確かに両方の針は頂点を指そうとしていた。いつの間にか数時間経っていたようだ。

ラ・ピュセル：『あ、ちよつと待って。退室する前に伝えたい事がある』

る。スノーホワイト、担当地域が隣という事もあるんだけど、君の教育係を引き受ける事になったんだ。改めてよろしく」

スノーホワイト：『はい。よろしくお願いします！』

トップスピード：『おっと！俺からも伝えておかなきゃな。龍騎。昨日シローやファヴと相談して、俺が教育係になったから、よろしくな！』

龍騎『ああ。よろしく！』

スノーホワイト、龍騎の担当が決まったという事は、必然的に九尾の担当も決まっているはずだ。そう思った九尾に話しかけてきたのはライアだった。どうやら彼が教育係になるようだ。

ライア：『九尾。君の教育係は俺が担当する事になる。これからも長い付き合いになるから、よろしく』

九尾：『はい』

スノーホワイト：『それじゃあ、お休みなさい』

龍騎：『それじゃあまた！』

シスターナナ：『はい。お休みなさい』

ウインタープリズン：『良い夢を』

ねむりん：『お休み〜』

トップスピード：『じゃあな！』

チャットルームを退室した後、大地は一息ついて天井を見上げた。随分個性的なメンバーばかりだったな、と、チャットでのやり取りを思い返していた。シローの話によれば、仮面ライダーと魔法少女は合わせて31人いる事になる。つまり、今回のチャットでは会わなかった者達もいるのだ。あまり多いと窮屈だなど思いつつも、その後、脳裏に浮かんだのは、2人の人物の事だった。

「あのナイトとリップルって奴は、結局あれから一言もコメントしてなかったな」

大地の思う通り、最初の挨拶以降、ナイトとリップルは自発的に喋る事は無かった。雰囲気も似ているが、かなり前から知り合っているようにも感じられた。

そう思っていると、マジカルフォンから音が鳴った。メッセージを

受信したようだ。開いてみると、相手はライアだった。

「明日の22:00に、俱辺ヶ浜海水浴場近くの大きな鉄塔で待ち合わせしよう。ラ・ピュセルもそこで待っている」

ライアが待ち合わせ場所に選んだのは、昨晚ラ・ピュセルと話合った鉄塔だった。ラ・ピュセルも来るという事は、彼女に指導してもらおう事になっているスノーホワイトも当然現れる。

明日の晩に集まるメンバーの中で、ライアと直に会うのは初めてになる。チャットではそれほど悪い印象は見られなかったが、どんな人物なのだろうか。そんな疑問を抱きながら、大地は眠りについた。

10. 親睦　そしてチーム結成

「あ、こんばんは」

「よう」

チャット会に参加した次の日の晩。スノーホワイトはラ・ピュセルから、九尾はライアから連絡を受けて、顔合わせをする為に指定された場所にやってきた。予定していた時間より少し早めにたどり着いたスノーホワイトと九尾が鉢合わせた先には、2人が待ち合わせ場所に指定した鉄塔が堂々と佇んでいる。

「九尾も、ライアに呼ばれてこっちに来るって、メールにあったけど、どうして同じ場所に……？」

「さあな」

九尾がそつげなく答えた後、鉄塔に向かって跳躍した。スノーホワイトもそれに続いて飛び上がる。

「(仮面ライダーはともかく、他の魔法少女と会うなんて、緊張するな……)」

九尾以外の同胞と会った事のないスノーホワイトは、緊張の面持ちで鉄塔の頂上に足をついた。スノーホワイトと九尾の目線の先には、腰から生えた尻尾を地面まで垂らしている騎士姿の魔法少女『ラ・ピュセル』と、後頭部に弁髪を持ち、エイに似た形の召喚機『エビルバイザー』を左腕につけた仮面ライダー『ライア』が背中を向けた状態で立っていた。

「(やつぱり、チャットと同じ格好なんだ)」

2人の教育係を目の前にして、スノーホワイトはそう思った。

「来たみたいだな」

「やあ、スノーホワイト。九尾も久しぶり」

2人の気配を察知したのか、ライアが振り向いた。それに続いてラ・ピュセルも振り向き、手を振る。

それから、スノーホワイトは2人に向かって挨拶をする。

「は、初めまして、……で、良いのかな？」

「ああ。呼び出してすまない。教育係を申し出た以上、早めに始めた

方が良いと思つてね。ライアと相談して決めたんだ」

「……所で、スノーホワイトだったな。随分そわそわしてるようだが、大丈夫なのか？」

ライアが気になった事を呟くと、スノーホワイトは慌てて首を横に振った。

「だ、大丈夫です。九尾以外に他の方々と会うの、初めてで緊張しちゃつて」

「まあ、それぞれ担当地区があるから、そんなに会う事もないだろうしな」

「それじゃあ、みんな揃つたみたいだから、行こうか」

そう言つてラ・ピュセルとライアは、スノーホワイトと九尾をある場所へと案内した。

やってきたのは、これまでスノーホワイトと九尾が活動していた所から大分離れた地区の、人気のないビルの屋上だった。さすがに気になつた九尾は質問をした。

「なあ、ここって他の担当地区になるんじゃないのか？」

「お互いの仕事の邪魔をしなければ、問題ないさ」

ラ・ピュセルがそう説明すると、ライアが補足説明をした。

「だからといって、無闇に他のテリトリーに足を踏み入れるような事は慎んだ方が良い事もある。特に、城南地区……」

ライアが指差した先には、遠くからでも分かるぐらいに出店が密集する繁華街を照らすネオンが見えた。

「あそこにも、魔法少女や仮面ライダーがいるんですか？」

「ああ。あの地区は、カラムיתי・メアリと、王蛇が担当している。だが奴らはかなり野蛮で無法者だ。縄張りと呼称して、あの地区を中心に荒事を行っている。近づいただけでも撃たれる可能性もある。現に、昨日チャットに参加していたシスターナナも被害に遭っている」

「縄張り……か」

「だから、あまり近寄らない方が良いんだ。みんなも避けてるからね」
ラ・ピュセルとライアの説明を聞いて、頬を膨らませて不満を口にしたのはスノーホワイトだった。

「無法者って……。魔法少女も仮面ライダーも、清く正しく、美しくな
きやいけないのに」

「……フフツ」

スノーホワイトの意見を聞き、ラ・ピュセルはクスクスと笑い始めた。九尾とライアも声には出さなかったが、仮面の下で笑みを浮かべている。

「あれ？ 私、変な事言いました？」

「いや、ごめん。何でもない」

ラ・ピュセルは謝ると、尻尾を揺らしながらこう言った。

「何が正しいのかは本人次第さ。魔法少女も仮面ライダーも、人間社会の法律には、縛られないからね」

「ま、人知を超えているのは間違いないからね」

「そういう事」

「それからもう一ヶ所、門前町の方の事も教えておこう」

そう言っただけでライアが指を差した場所は、山の近くに広がる住宅

街だった。そこは寺の数が多く、目を凝らしてもどこを指しているのか、スノーホワイトと九尾は見当もつかなかった。

「あの辺りには、計10人の魔法少女と仮面ライダーがつるんで活動している」

「10人も!?!?」

「その人達って、チームで活動してるって事ですか?」

「ああ。ただ、そのチームのリーダーとして君臨しているルーラは、かなり面倒な性格だ。それに、あのチームの1人でもある仮面ライダーベルデにも注意しておいた方が良い。腹の底で何を企んでいるかも分からない」

「因みに、昨日参加してたアビスも、ルーラチームのメンバーの1人だ。多分、情報収集の役割を務めているんだろう」

「なるほど……」

どうやら魔法少女や仮面ライダーだけの社会の中でも、それなりに複雑な構成があるのだろう。

「ルーラ達みたいにチームを組む事もあるし、単独で活動している者達も少なくない。ただ、ほとんどの場合がコンビを組んだりして活動している。カラミティ・メアリと王蛇もその1つさ。それに、僕とライアもコンビを組む仲間なんだ」

「へえ。そうなんですか」

「そうそう、昨日チャットでも見た通り、トップスピードは……」

「お、やってるねえ」

ラ・ピュセルが説明していると、ちょうどそのタイミングでトップスピードの声が上空から聞こえてきた。一同が見上げると、ラピッドスワローに跨ったトップスピードと、その後ろに座っているリップル。その真上からは、ドラグレッダーに乗った龍騎と、ダークウイングを背中につけたナイトが降りてきた。

「あー! スノーホワイト、九尾! それにラ・ピュセルにライアも。こんばんは!」

「やあ、トップスピード、リップル、ナイト。それに龍騎も」

「こ、こんばんは!」

一通り挨拶を済ませた後、トップスピードは近況を確認した。

「そつちはどう？ 新人の教育は」

「これからさ。君達もそうかい？」

「おうよ。まずは高速道路の見回りから叩き込んでやるのさ。なっ」

「ああ！ ちゃんと勉強して一人前にならなきゃな！」

「お前が一人前に……？ 無理だな。お前の知能じゃ」

「ちよつと！ そんな風に言わなくても……！ リップルからも何とか言ってくれよ！ こいつさつきから俺の事バカにしててさ……」

「……」

どうやら現時点で龍騎とナイトの仲はそれほど良くないみたいだ。龍騎はリップルに助け舟を求めるが、当の本人は目線を逸らし、沈黙を貫いている。それを見たトップスピードは茶々を入れるようにリップルを指差して笑いながら言った。

「ああ、気にしないで。こいつ結構ツンデレなんですさ」

そう言われたツンデレ魔法少女(?)リップルはスノーホワイト達にも聞こえるぐらいに舌打ちして呟いた。

「……チツ。とつとと行けよ。夜が明ける」

「そっか？ んじゃあまたな！ 行かぜ、ナイト、龍騎！」

「おう！ それじゃあな！」

龍騎が手を振ってトップスピードの後を追うようにその場を去った。ナイトは一瞬だけ九尾とスノーホワイトの方を見てから、3人の後を追った。スノーホワイトと九尾が呆然とその姿を見つめていると、ライアがこんな事を話し出した。

「元々は俺がナイトの教育係を担当していたんだ」

「え、そうなんですか？」

意外そうに呟いたのはスノーホワイトだった。

「ただ、自然と向こうから遠ざかるようになって、しばらくしてコンピは自然解消された。まあ、物覚えも良いし、そこそこ強くなってはいたから大して不安はなかった。それからしばらくして、ナイトはリップルの教育係になった。それから後にトップスピードと共に行動するようになって、それがあのチームが出来たきっかけらしい」

「そこに今回、新たに龍騎が加わったって事か」

九尾が納得する中、スノーホワイトはトップスピードとリップルの衣装を思い返していた。

「(でもやっぱり、あの格好は魔法少女っていうより魔女だなあ……。もう1人は忍者だし)」

「疲れたかい？」

不意にラ・ピュセルがスノーホワイトの顔色を伺うように見つめてきた。スノーホワイトは慌てて意識を現実世界に戻した。

「い、いえ。全然……！」

スノーホワイトがそう言うも、ラ・ピュセルは一向に目線をスノーホワイトから離さない。気になったスノーホワイトは尋ねた。

「……何です？」

「私達31人の中で、君が一番魔法少女らしいよ。多分」

褒められたのか、スノーホワイトは顔を赤くしながらダンスを踊るように体をクネクネと動かし始めた。

「え？　そうですか？　私、子供の頃から魔法少女にずっと憧れてきて、やっとその夢が叶ったんです！　だから、理想の魔法少女を目指したいんです！」

「(そりゃあ、あんだだけ同級生に魔法少女の事を熱く語ってるぐらいだし……)」

九尾がバスの中での事を思い出しながらそう思っていると、ラ・ピュセルに異変が生じているのを感じた。何故かスノーホワイトの話が進むにつれて顔を紅潮させているのだ。スノーホワイトもそれに気付き、声をかけた。

「どうしたんですか？　顔が赤いですよ？」

「あ、いや、別に……。そ、それより、提案があるんだ」

ラ・ピュセルは無理やり話題を変えて、こんな提案をしてきた。

「ここにいる僕達4人で、チームを組まないか？」

「えっ？　私達と？」

「ああ。君達が魔法少女や仮面ライダーとして現れた時から、そう決めていたんだ。ライアもそう思わないかい？」

「うん。君達との相性は抜群だと、占いでも告げられたからね」

「占い……?」

聞き覚えのあるワードに、首を傾げる九尾。つい最近もそれに関わっていたような気がしたので。

すると、そんな九尾の思考を他所に、ラ・ピユセルがある事を呟いた。

「それにスノーホワイト」

「? はい」

「昔描いた絵のまんまだったし、すぐに分かったよ」

ラ・ピユセルの言い方に、今度はスノーホワイトが首を傾げる。

「(そういえば、ラ・ピユセルってやけにスノーホワイトの事に敏感だったよな……)」

一昨日の夜での会話を思い返していると、ラ・ピユセルは不意に男らしい口調に変えて、こう言った。

「お前、小雪だろ」

「えっ!?」

「何でお前が小雪の名前を……?」

九尾を思わずそう呟いた。突然本名を言われた事に動揺するスノーホワイトに対し、ラ・ピユセルは恥ずかしそうに目線を逸らし、自分の本名を告げた。

「……き、岸边 颯太だよ」

「……え」

「一昨年まで僕や大地と同じ小学校だっただろ? 忘れたなんて言わせねーぞ」

「え、ええ、ええええええええええええええええええええええええ!?」

ここでようやくラ・ピユセルの正体が颯太である事を知ったスノーホワイトの絶叫が鉄塔を中心にこだました。が、その直後に、九尾はある疑問を抱いた。

今、ラ・ピユセル……もとい颯太は自分だけでなく小雪も同じ小学校の出身だったと告げていた。つまり、大地と小雪はお互いに知らぬまま、同じ学校の同級生として過ごしてきた事になるのだ。

スノーホワイトも途中でその事に気付いてハッとして、九尾に向き直った。

「……あれ!?? でもちよつと待って! どうしてそうちゃんが九尾の本当の名前を知ってるの!??」

「当然だろ? 僕と大地は小学校に入学してからずっと遊んでた友達だぞ。小雪もどつかで見た事あるんじゃないのか?」

「ええっ!?? じゃあ、私達、あれが初対面じゃなかったって事!??」

「……って事に、なるよな」
道理でバスで見かけた時に初めてとは思えなかった訳だ。九尾はそう納得させた。

「あの……。話が見えてこないんだが、君達は知り合いなのか?」

唯一話の展開についていけないライアがそう呟くと、3人は順々に詳細を明かした。

「なるほど。すると君達は、小学生の頃からの友人、もしくは幼馴染みの関係だったのか」

「とは言っても、俺と小雪はほとんど接点が無いんですけどね」

狂乱していたスノーホワイトを落ち着かせ、説明が済んだところ

で、ようやく合点がいったライアが頷いた。

現在、4人は並んで腰を下ろしている。

「でも、びっくりしたよ。まさかそうちゃんが魔法少女になってたなんて」

「俺からしたら、お前がそうちゃんなんて呼ばれ方してるとは思わなかったけどな」

「は、恥ずかしいから、これからはあんまり人前ではそう呼ばないでくれよ……」

ラ・ピュセルが顔を赤くしてそう呟いた。

「でも、いつから魔法少女になってたの？」

「まだなつて1ヶ月ぐらい。小雪まで魔法少女になるなんてさ」

「私はずっと魔法少女が好きだったもん。そうちゃんの方が意外だったよ。仮面ライダーならまだ分かるけど」

「こないだ大地にも同じ事言ってたんだけど、僕だって魔法少女は好きだったよ。誰にも言わなかっただけで」

でも……、とラ・ピュセルは言葉を区切って、一度深呼吸をしてから再び口を開いた。

「中学でそんなのバレたら変態扱いされるからな。隣町でDVD借りに行ったり、魔法少女の漫画やラノベとかも、机の奥にこっそり隠したり、そりやあもう苦労してるんだ」

「まさに隠れキリシタン並みの苦労だな」

ライアがそう呟くと、次第に4人の口から笑い声が響き渡った。こんなに大勢で笑いあうのも、本当に久しぶりだな、と大地は感じていた。家の都合で誰かと付き合う事すら乏しくなった大地にとって、この時間は最高のものだった。

「学区がそうちゃんや大地君と違ってたから、中学は別々になっちゃったけど、朝からそうちゃんがサッカーやってるの、時々見かけてたよ。だから魔法少女なんて忘れちゃって、サッカーに夢中なんだと思ってた」

「サッカーも楽しいけど、魔法少女とは別腹だから」

「ハハッ。別腹って良いね」

それから、不意にある疑問を抱いたスノーホワイト。

「でも、魔法少女って男でもなれるものなんだね？」

「ファヴが言うには、正体が男っていうのは世界的にも珍しいそうだよ」

「もう君達も気付いているかもしれないが、あのファムというライダーは、女が変身している。そのパターンは、数えるほどしか無いが、ラ・ピュセルのパターンよりは多いらしい」

「そういえば……」

と、今度は九尾が質問をした。

「ライアは最初から知ってたんですか？ ラ・ピュセルの正体が男だって事に……」

「ああ。ラ・ピュセルと出会う前に、占った事がある。数奇な運命に選ばれた魔法少女と出会う時が近いってね」

「占い……ですか？」

「うん。趣味の一環でやっていて、それを基に人助けを続けている。その最中にラ・ピュセルと出会った。それですぐに分かったのさ。そのラ・ピュセルこそが、占いに出た少女であるよね」

「あの時はショックだったなあ。まだ魔法少女になって日が浅いの、早速その事がバレたから落ち込んだよ。でも、ライアはそんな僕を受け入れてくれた。そして、僕達はコンビを組むまでに信頼しあえる仲になったんだ」

「優しいんですね」

「男が夢にまでみた魔法少女になれた事は、決して悪い事じゃ無いと思っていたからな。それに、どこことなく親近感もあった」

そう呟くライアは、どこか寂しげに夜空を見上げていた。

「……それでそうちゃん。本当に女の子になってるの？」

「変身すれば、完全に女だ。……うん、間違いない。……多分」

おそらく相当イタイ所を突かれたであろうラ・ピュセルは、モジモジしながら小声で答えた。

「へえ。そうなんだ」

スノーホワイトは特にそれ以上追求する事なく関心した目つきで

ラ・ピュセルを見つめていた。すると、ラ・ピュセルがスノーホワイトと九尾の方に顔を向けた。

「そ、それより！　どうかな？」

「？」

「さっきの、チームの話……」

その問いに、2人は迷う事なく答えた。

「もちろん！　大地君やそうちゃんも一緒なら、私もすごい心強いもん！　もちろん、ライアもね！」

「ありがとう」

ライアがお礼を言うと、ラ・ピュセルは唐突に立ち上がった。

「まだ、僕の力を教えていなかったよな」

「？」

スノーホワイトが首を傾げていると、ラ・ピュセルは背中に背負っていた剣を引き抜いて、肥大化させると高く掲げて叫んだ。

「この剣に誓う！　魔法騎士ラ・ピュセルは、ライア、九尾、そしてスノーホワイトを守り、共に協力し合い、この街の平和を守る事を！」

なんてね。騎士^{ナイト}のキャラだしさ」

「危なくなっても、3人がいてくれれば安心だね」

「普通に生活している人々を脅かすのは、全部モンスターだからな」

九尾がそう呟いていると、ライアが手を挙げた。

「君達の正体がある程度このメンバーで共有出来ている以上、俺も正体を明かした方が良いだろう。それに、大地、だったな。俺の予想では、前に君と会っていると占いで出ている」

「えっ？　それじゃあもしかして……」

大地には心当たりがあった。

目の前にいるライアの正体。もしかすると、あの日大地の運命が大きく変わるきっかけを教えてくださいました人物では無いのか、と。

九尾とライア。2人のライダーはVバックルを外し、変身を解いた。互いの素顔が明らかになった途端、大地はアツと小さく叫んだ。

「やはり、あの時の彼だったか」

そう呟いた青年の顔に見覚えがあった。それは小雪とバスで出

会った日の帰り道、偶然すれ違った際に占いをして、退屈な日々が終わると告げた、あの占い師だったからだ。

「あんた、やっぱりあの時の……!」

「言っただろ? 俺の占いは絶対に当たるって」

「えっ? どういう事なの?」

全く会話についていけないスノーホワイトやラ・ピュセルに対し、大地は事の次第を話した。

「へえ。そんな事があったのか」

「まさかあんたもライダーだったなんぞな」

「^{てっか}手塚 ^{みもり}海森だ。改めて歓迎する」

「あ、ああ」

手塚が手を差し出してきて、大地も戸惑いながら同じように手を伸ばし、互いに握手した。

「どうだった? 退屈な日常から抜け出せた気分は」

「ええ。まあ、それなりに上手くやっていけるつもりです。こうして颯太や小雪ともまた会う機会が増えたぐらいですし」

「それなら良かった」

それから、大地と手塚は再度変身し、スノーホワイト、ラ・ピュセルを含めた4人は手を突き出した。

「それじゃあ改めてよろしく。スノーホワイト」

「よろしくお願いします。ラ・ピュセル、ライア」

「これから忙しくなるが、同じチームとして頑張っていこう」

「ああ」

こうして、ラ・ピュセル、ライアのコンビに、九尾、スノーホワイトの2人が加わった計4人のチームがここに誕生したのであった。

11. N市の狂者

「うっし！ 今日の活動はこんぐらいだな！」

「結構平和だったな〜」

トップスピードが集合場所になっていたビルの屋上に足をつける
と、龍騎もドラグレッダーから降りて腕を伸ばした。トップスピー
ド、ナイト、リップルのチームが主に拠点としているのは高速道路で
あり、時折スピードの出し過ぎを注意したり、その近辺で起こってい
る揉め事を解決したりするのが主だった仕事になる。もちろん、モン
スター退治も忘れずに。

この日初めてメンバーに加わった龍騎は、緊張しながらも3人の活
動についていった。とはいえ、この日はスピードの出し過ぎの忠告を
一件片付けただけで、比較的平和に活動を終えた。

「さてと。そんなじゃあ……」

そう言つてトップスピードはビルの隅に置かれていた風呂敷を
持つてきて、レジャーシートを広げた後、3人を手招きした。

「ほら、こっち来て座んなよ」

「？ 何があるんだ？」

「……おい。まさか」

「つたりめえだろ。飯だよめし！」

笑みを浮かべながら風呂敷を広げると、そこには赤飯のおにぎ
りや唐揚げ、ポテトサラダ、そしてデザートの杏仁豆腐がそれぞれ
タッパーに入れられていた。かなり豪華な料理の多さに、龍騎は
おお、と感嘆した。一方でそれらを見たリップルは舌打ちをした。

「……多過ぎるし、夜食は女の大敵」

「細かい事は気にすんなよ。偶には良いだろ？ それに今日は新人の
レクチャーとかで腹ごしらえする時間無かつたからさ。ほら、手をつ
けないのももったいないし、食ったくった」

リップルの言い方からして、この日は龍騎を歓迎する意味で、普段
より多く作ってきたらしい。ちょうど小腹もすいていた龍騎は目を
輝かせながらレジャーシートに腰を下ろした。

それからカードデッキを外して変身を解き、手を合わせた。

「んじゃあ、いっただつきまゝす！」

「おう！ たらふく食つてくれよ！ どれも自信作だしな！」

「うん！ 美味しい！」

「(また不用意に変身を……)」

ナイトは正史の行動にまた呆れつつも、このまま帰るのも癪にさわるので、リップルと共に2人の近くに座った。リップルとトップスプードは変身を解かなかつたが、仮面ライダーは文字通り常に仮面を付けている為、何かを口にするには一旦元の姿に戻る必要がある。

ナイトがカードデッキを外すと、露わになったのは黒いロングコートを羽織り、首からネックレスを提げている青年だった。正史は唐揚げに噛り付きながら、初めて見るナイトの本来の姿に目を丸くした。

「あんたがナイトの変身者……」

「……秋山 蓮二だ」

ぶつきらぼうにそう答えた後、赤飯のおにぎりを口にした。

中々に美味な料理を堪能した後、正史と蓮二は再び変身し、4人は解散する事となった。

「とまあ、こんな感じで俺らは活動を続けていく方針だから、しつかり覚えとけよ。後々龍騎もレクチャーする側になるかもしれないし」

「無理だな。こいつに任せるぐらいなら、面倒だが俺が引き受けた方がそいつの為になる」

「なっ……！ お前また俺の事をバカにして……！ 俺だってやれば出来るんだよ！ モンスターだって俺1人でも頑張つて倒せた事もあつただろ!!?」

「……モンスターだけならな」

「えっ？ それ、どういう……」

「いや、あんたら本当に仲良いな。やっぱチームに入れて正解だったわ」

「誰が!!?」

トップスプードがケタケタと笑いながらそう言うと、2人は同時に叫んだ。一方で蚊帳の外にいたリップルは3人を見て軽く舌打ちし

ている。

それから少しばかり唾み合った後、龍騎は自宅に戻る事にした。すると背中越しにトップスピードがこんな事を告げた。

「ちよつと待った。先に重要な事を教えとかないと」

「? 何?」

龍騎が振り返ると、いつになく真剣な眼差しを向けたトップスピードがいた。

「N市の城南地区には絶対に近寄るなよ。そこにいるテンガロンハットを被ったウエスタン風の魔法少女『カラムיתי・メアリ』と、紫色の蛇みたいな仮面ライダー『王蛇』とは、無闇に関わらない方が身の為だ」

「あ、ああ。分かった……」

翌日、正史はN城の付近で原付バイクを走らせていた。城の近くで行われていたイベントの取材を終えて、帰路につこうとしていた。すでに辺りは日が暮れて、街灯にチラホラと明かりが灯り始めてい

た。

「(トップスピードの魔法は『猛スピードで空を飛ぶ魔法の箒を使うよ』で、リップルの魔法は『手裏剣を投げれば百発百中だよ』か……。なんか俺が想像してた魔法とは全然違うものを使うんだなあ、今時の魔法少女って)」

そんな事を考えながら走行していると、突然マジカルフォンから耳鳴りのような音が鳴り響いた。

「！ モンスター……！」

正史は反応を追いながら、原付バイクを加速させた。しばらく進むと、正史の目に飛び込んできたのは、赤色のカミキリムシ型のモンスター『テラバイター』が、会社帰りらしき女性社員の体にしがみ付いて、ミラーワールドに引き込もうとしている光景だった。

「助けて〜！」

女性社員の悲鳴を聞いて我に返った正史はバイクから降りるとすぐさま飛び蹴りをしてテラバイターを引き離した。地面を転がっていたテラバイターは起き上がってすぐ近くの鏡からミラーワールドに逃げていった。

「早く逃げてくださいー！」

「は、はいー！」

正史は女性社員を遠くに逃がし、誰もいなくなった事を確認した後、テラバイターが逃げ込んだ鏡に向かってカードデッキをかざした。腰周りにVバックルがつけられると、正史は右腕を斜め上に突き出して叫んだ。

「変身ー！」

カードデッキをVバックルに差し込んだ正史に鏡像が重なり合い、仮面ライダー龍騎へと変身した。

「ツシャアー！」

一声気合いを入れた龍騎はミラーワールドに突入。遠くに見えたテラバイターを必死に追いかけた。

すぐ近くの看板に、反転してはいるが、『この先城南地区』と書かれた文字がある事に気づく事なく……。

「待て〜！」

ミラーワールドから出てもテラバイターを追いかけ続けている龍騎だが、思っていた以上にテラバイターの足が速い。

「だったら……！」

龍騎はカードデッキから一枚のカードを取り出し、ドラグバイザーにベントインした。

『ADVENT』

上空から咆哮と共にドラグレッダーが姿を現し、火球を放つと、先を行くテラバイターを近くにあった公園の中央に吹き飛ばし、ようやく追いかけてこは終わった。

「もう逃がさねえぞ〜！」

龍騎が新たにカードを取り出そうとしたその時、龍騎とテラバイターの間の地面が爆ぜた。

その衝撃で両者は吹き飛ばされて、地面を転がった。しばらく朦朧としていた龍騎だったが、先ほど爆ぜた地面は抉り取られており、直

撃していたら命に関わっていただろうと思えるほどだった。

「イツテツテ……！ な、何だよいきなり……！」

どこから攻撃されてのか。龍騎が慌てて周りを見渡すと、2人の人影が歩み寄ってくるのが見えた。土埃が晴れて、ようやくその全貌が明らかに。

1人は西部のガンマンよろしく、テンガロンハットを被り、上半身は豊富な胸を強調するかのよう際どい豹柄の紐ビキニと保安官バッジ、下半身は限界ギリギリな程までに短いスカート、耳には尖った歯車のようなピアスをつけた、若い女性。その手には、平和な日本では絶対見かける事のないピストルが握られている。

もう1人は紫色の蛇をモチーフにした、仮面の戦士。

「……！ もしかしてあいつら……！」

龍騎は不意に思い出してしまった。それは昨晚トップスピードが言っていた、危険な人物達の特徴と目の前の人物達は一寸変わらず一致していた。

魔法少女カラミティ・メアリ、そして仮面ライダー王蛇。

見るからに強者のオーラを放っているその2人はようやく地面に倒れている龍騎の方を見た。

「……アア？ 何だ、お前は」

「見かけないネズミが転がってるね。さしずめあんたが例の新人か」

「じ、じゃあやっぱり、あんたらも魔法少女に、仮面ライダー……」

龍騎が起き上がろうとすると、テラバイターが背中に背負っていたブーメランを投げてきた。カラミティ・メアリと王蛇は難なくそれを避け、龍騎は地面に伏せた。

「あ、あつぶないなあ……！」

「……イライラするぜ」

「えっ？」

突然そう呟いた王蛇の方を見ると、王蛇はコブラ型の召喚機『ベノバイザー』にカードをベントインした。

『SWORD VENT』

上空から牙のような剣『ベノサーベル』を掴み、王蛇はテラバイター

に襲いかかった。テラバイターは戻ってきたブーメランを盾代わりにして、王蛇の攻撃を防ごうとした。

「ハアッ！」

だが、王蛇から発せられるパワーの方が一枚上手だったのか、テラバイターは勢いに押されて後ずさった。王蛇は手を緩める事なくベノサーベルで攻撃していた。斬るといふよりかは叩きつけるという行為を繰り返して、執拗にテラバイターを痛めつけていた。

テラバイターは一旦距離を置いて再びブーメランを放ったが、王蛇に当たる前に、銃声が響くとブーメランが破裂して、宙を舞っていた破片は跡形もなく消滅した。

龍騎が振り返ると、カラミティ・メアリが銃口から煙が出ているピストルを構えていた。先ほどブーメランを破壊したのは、カラミティ・メアリが撃った弾らしい。だが普通に考えてみると、ガトリングやロケットランチャーならともかく、小型クラスのピストルを数発撃っただけで大きなブーメランを破壊するのは到底不可能だ。

「(もしかして、魔法が関係あるのか……)」

龍騎がそう推測していると、テラバイターは王蛇に向かって駆け出した。龍騎が前に出て動きを止めようとしたが、それよりも早く王蛇が拳を後ろに振るって龍騎を殴り、その勢いそのままテラバイターを殴り倒した。

「痛つてえ！ 何すんだよ！」

「……こいつらは俺らの獲物だ。邪魔するな」

「そういう事」

カラミティ・メアリは不敵な笑みを浮かべながら、テラバイターに向けて撃ち続けた。やはり火力が異常なまでに向上しており、テラバイターはなす術なく吹き飛ばされる。

龍騎が呆然としている間に、王蛇はベノサーベルをカラミティ・メアリに投げ渡し、新たにカードをベントインした。

『FINAL VENT』

すると、王蛇の後方から巨大な蛇型の契約モンスター『ベノスネーカー』が現れ、王蛇は地面を蹴って飛び上がった。空中で1回転した

後、ベノスネーカーは毒液を吐き、その勢いに乗って王蛇が足を突き出した。

「ハアアアアアアアッ！」

王蛇はテラバイターに連続蹴りを叩き込んだ。王蛇の必殺技『ベノクラツシュ』をくらったテラバイターは、絶叫と共に爆散。炎の中から、何事も無かったかのように王蛇は現れた。

「っ、強え……」

マジカルフォンから、マジカルキャンディーをゲットした事を知らせる音が鳴っても龍騎がたじろいでいたその時、カラミティ・メアリがベノサーベルを王蛇に返し、王蛇はそのまま龍騎に向かってベノサーベルを振り下ろした。

「おわっ!?? 何すんだよ!??」

龍騎はギリギリのところ回避し、王蛇から距離を置いた。と、今度は横手から銃弾が一直線に龍騎に向かい、地面が抉れた。カラミティ・メアリが龍騎を狙っているのだ。

「あ、危ねえだろ!?? 当たったらどうすんだよ!」

「そんなの知ったこっちゃあないね。大体あたしらの縄張りに踏み込んだのが運の尽きだね」

龍騎の怒声を無視して、なおもカラミティ・メアリは躊躇なく弾を撃ってくる。どうにかして説得しようとする龍騎が逃げ惑っている間にも、王蛇が別方向から攻撃してきた。

「ハハハッ!」

「グアッ……!」

龍騎は背中を痛めながらも、必死に逃げ続けた。

そんな中、カラミティ・メアリはこう呟いた。

「なあ、聞いた話じゃ、随分と人助けに勤しんでいるみたいだね。おまけにトップスピードのチームとつるんでるらしいな」

「そ、それがどうしたんだよ! そんなの当たり前だろ! 俺は仮面ライダーだ! 困ってる人達を助けるのが俺達の役目なんだろ!

あんた達だって……!」

龍騎は逃げ回りながらもカラミティ・メアリにそう言った。

だがカラミティ・メアリから返ってきた返事は、龍騎の想像を絶するものだった。

「……くっだらない」

「は!?」

「せつかく人並み外れた力を持つてるのにさあ。モンスターぶつ倒す為ならともかく、何の取り柄もない人助けに役立てるなんて、ホント馬鹿馬鹿しい」

「そんな訳あるかよ……!」

「どうだか」

カラミティ・メアリが鼻で笑っていると、王蛇が龍騎を捕まえて、そのまま殴り倒した。

「グハッ……!?」

「どうしたあ……。もつと楽しませろよ、俺を」

尋常でない程に狂気に満ちた王蛇の猛攻に、龍騎は震え上がった。武器を手にしようにも、同じ仮面ライダーに手を出す事に迷いが生じて、カードを手に取る事さえ躊躇ってしまう。

そんな龍騎とは対称的に、2人は攻撃を続けている。

「ほらほらどうした!? 逃げてるだけかい? 別にやり返してもいいんだよ。あたしらはハナっからそのつもりだしさあ!」

「(こいつら、マジかよ……!)」

話には聞いていたが、とんでもない奴らだ。龍騎はそう感じた。なおも続く銃弾の嵐とベノサーベルの突きを掻い潜って逃げる事に精一杯だった。

「……ふうん。思ってたよりすばしっこいドブネズミだね。(単にバカなだけって訳じゃなさそうか)」

カラミティ・メアリは新たに弾丸を装填しながらそう呟く。装填が完了したピストルに加え、ホルダーに差しておいたもう一丁のピストルを抜いて、両手に構えた。

「でもまあ、手を緩めるつもりなんてないけどさあ!」

カラミティ・メアリは笑った。それは、痛ぶりがいのある獲物を見つけたハンターの如く。ただひたすらに目の前の相手を狙い撃つ。

銃弾の数が倍加して、ますます恐れをなして逃げ回る龍騎に対し、カラミティ・メアリは笑いながら叫んだ。

「おいおい、そんなに他の誰かに力を振るうのが怖いかあ!?!?」
「くっ……………」

わざと撃つのを止めたカラミティ・メアリと、その場で止まっている王蛇を見て、龍騎も息を荒げながら立ち止まった。

「力を恐れるなよ…………」。『暴力はいけない』なんて口を揃えて教え込む奴らがこの世にはいるけどさあ。暴力がなくても生きていける奴らは結局、生まれや環境が恵まれてるクソつたれだけ」

カラミティ・メアリは目を細めて、憎悪を吐き散らすように呟く。

「あたしらみたいに、何も持たずに生まれた奴はさ。力のある奴に黙って従い、依存するしかない。それが今の社会さ」

けどな…………、と、瞬時にカラミティ・メアリは狂気に満ちた笑みを浮かべ、銃口を龍騎に向けた。

「あたしはそんなのぐめんだね。力こそが全てだってんなら、あたしはその力を手に入れる。そういう意味じゃ、この力は理に適ってる。王蛇だってそうだろ?」

「…………ハハッ。俺は戦えればそれで良い。まずは俺をイライラさせる奴。それから、ムカつくぐらいに俺にたてつく奴。そいつらをぶつ潰せるこの力は、本当に最高だア……………」

歓喜しているのか、王蛇は体を震わせてそう呟いた。

「あんたはどうなんだい? あんただって力を手にして、何でも出来るって考えたら、人助けなんてくだらなく思えてこないか?」

「思うかよ!」

反射的にそう叫び、2人に指を指す龍騎。カラミティ・メアリは眉をひそめた。

「今のはさすがに頭にきたぞ! あんたらがどんな苦労をしたのか知らないけど、やっとの思いで力を手にしたんなら、自分より弱い人達を助ける事に使えば良いじゃないか!」

そう叫び、龍騎はようやくカードデッキから1枚のカードを取り出し、ドラグバイザーにベントインした。

『GUARD VENT』

龍騎の両肩に、ドラグレッツダーの腹を模した盾『ドラグシールド』が2つ装着され、それらを両手に持った。

「へえ。やつとその気になったのか知らないけど、そんな盾じゃねえ」「何でも良い。俺を、楽しませろよお！」

王蛇は耐えきれなくなったのか、ベノサーベルを振り上げたまま突撃してきた。

対する龍騎はドラグシールドを突き出し、振り下ろしてくる王蛇の攻撃を受け止めた。地面に跡が出来る程に後ずさる龍騎だが、王蛇とカラミティ・メアリの顔色を変えるには十分だった。

「……アア？」

「うおおおおおっ！」

龍騎は反撃とばかりに王蛇を押し返し、よろめいている隙にベノサーベルを蹴り飛ばして、ドラグシールドを突き出して体当たりした。

「チッ！」

カラミティ・メアリは舌打ちして弾丸を放ったが、ドラグシールドの強度の方が高いのか、龍騎は吹き飛ばされる事なく、弾丸を弾き流すようにドラグシールドを振った。

「こいつ……！」

「アアッ！」

王蛇はイラついたようにベノサーベルを手に取り、龍騎に攻撃したが、龍騎は回避し、王蛇は勢い余って転倒し、地面を転がった。

それを見たカラミティ・メアリは笑みを浮かべて口を開いた。

「思ってたよりやるじゃないか。そんな力持つてるのに人助けなんてもったいない。今、存分に使いなよ！ その力をさ！ ほらほら、武器を出すぐらいの時間はくれてやるよ！」

挑発するように叫ぶカラミティ・メアリに対し、龍騎の答えは……。

「戦わないよ」

「……あ？」

「俺は、困ってる人達を助ける為に、それから、モンスターを倒す為だ

けに戦う」

ドラグシールドを強く握りしめて、龍騎は言い放った。

人助けの為に、そしてモンスター退治の為に、戦う。それはつまり……。

「誰かを守る為だけに、俺は変身するから」

ハッキリとそう宣言した龍騎を見て、カラミティ・メアリは心情が冷めていくのを感じた。

「イライラするぜ、お前……！」

「……随分と舐めた口をきくガキだなあ。あたしらを本気で殺す気がないんなら、さっさとその報いを受ける事だね」

「……！」

ハッキリとした殺意を感じた龍騎は身構えた。ここからが本気で殺しに来る。カラミティ・メアリは2丁のピストルを龍騎に向け、引き金に手をかけた。そして王蛇はベノサーベルを片手に、雄叫びを上げて向かってきた。両者に挟まれる形で迎え撃とうとしたその時だった。

王蛇の前に何者かが立ちはだかり、ベノサーベルを受け止めた。

「！ お前……！」

「……！」

「！ な、ナイト！」

ベノサーベルを受け止めたのは、ウィングランサーで押し留めているナイトだった。

「何のつもり……！」

「姐さん！」

更に、カラミティ・メアリを止めるように現れたのはトップスピードだった。その傍らにはリップルがおり、カラミティ・メアリを睨みつけている。

「トップスピード?!? それにリップルも……！」

「姐さんお願いです！ ここはどうか穏便に……！」

必死に懇願するトップスピードに対し、戸惑いの表情を浮かべるカラミティ・メアリ。ナイトと王蛇も、矛を収めるように離れた。トツ

プスピードは帽子を取って、頭を下げた。

「すみません。前もって縄張りに入らないように言っておいたんですが……。きつく言っておかなかった俺の責任です。ここはひとつ、どうか矛を収めてください」

「と、トップスピードが謝る必要ないって！ 元はといえば俺がモンスターを追いかけて、勝手に入り込んだのが悪いんだし……」

「バカの割には、悪い事をした自覚はあるんだな」

「だから一言余計だつづの！」

「バカをバカと呼んで何が悪い？」

「お前なあ……！」

「こんな所で喧嘩するなよ!?？」

龍騎とナイトの言い争いを止めようとするトップスピードと、それを黙って見届けながら舌打ちするリップル。

それを見ていた王蛇は、

「……フン。くだらん」

とだけ呟き、背を向けた。カラミティ・メアリもため息をついて背を向けた。

「全くだ。もうちよつとで楽しくなりそうだったけど、もういいや。さっさと行けよ。次からは気をつけるように、そのバカによく言っておくこつた」

「またバカって言われた……！」

「あくもう！ 一々口ごたえしない！」

龍騎を慰めるトップスピードを見てまた舌打ちしたリップルだが、彼女の耳にカラミティ・メアリの声が。

「そうだ。暇つぶしにリップル、こないだの続きでもやるか？」

「……！」

「……！ よせ！」

直後、リップルはクナイに手を伸ばそうとし、ナイトがそれを咎める。冗談だよ、とカラミティ・メアリは手をダラリと下げて笑いながら

眩き、リップルは彼女に聞こえない程度に舌打ちをした。見兼ねたトップスピードは3人に言った。

「ほら、行くぞ！ 龍騎、おぶってやろうか？」

「い、いいよ。そんなに怪我してないし」

「そつか。それならよかった。それじゃあ失礼します！」

龍騎はトップスピードと共にラピッドスワローに跨り、ナイトはリップルの手を掴んでダークウイングと合体して、カラミティ・メアリと王蛇に背を向け、その場を離れた。

王蛇はイライラが収まらないのか、すぐ近くの木を蹴り続けていたが、カラミティ・メアリはジツと4人の、特に龍騎の背中を見つめていた。

そして無言で銃口を龍騎に向ける。王蛇がそれに気づいて声をかけようとするが、それよりも早く引き金は引かれた。

が、ピストルから聞こえてくるのは、カチツという音だけ。

「……フフ」

カラミティ・メアリは不敵な笑みを浮かべ、ピストルを持つ両腕をダラリと下げた。

「弾切れ……か。あいつ、ツいてたな」

そう、龍騎の話を聞いてピストルを向けた時には、すでにカラミティ・メアリの手札は尽きていたのだ。その後の龍騎に戦う意志があったかどうかは別として、彼女には何もする事がなかった。

「ただの命知らずのバカかと思ってたけど、そうでもなさそうだな」

こうなると、龍騎の実力はまだ未知数という事になる。そう思ったカラミティ・メアリはこれまでに感じた事がない程に高揚していた。「ああいう奴ほど潰しがいがあるってもんだ。ますます気に入ったよ」

「……あいつは俺を一番イラつかせたな。何て名前だった？」

「確か……」

カラミティ・メアリはマジカルフォンを取り出し、チャットでの記録を閲覧し、2人にたてついたライダーの名前を探し当てた。

「……ああ、龍騎って奴だね。間違いない」

「……そうか、龍騎か……！」

王蛇は狂ったように意味もなく木を殴り続ける。

「あいつは一番ムカつくが、俺を楽しませてくれそうだなあ……！」

「少なくとも、リップルよりかはマシな戦いが出来るかもね」

カラミティ・メアリはそう呟いてから、空を見上げた。

「こんなにもあたしをゾクゾクさせたのは、あいつが初めてだ。次は弾切れなんてショボい終わらせ方にはさせないよ」

これが俗に言う、武者震いってやつか。

カラミティ・メアリはしばらくの間、その笑みを崩さなかった。

一方、城南地区から脱出した龍騎達は、いつもの集合場所に降り立った。

そして開口一番、トップスピードによる説教が始まった。

「昨日注意したばつかなのに、何で首突っ込んでんだよ……！」

「う、ご、ごめん……。モンスターに襲われてた人を放っておけなかったし、あそこで逃してたら、また人を襲うかもって思ったから……」

「だからといって節度も考えるべきだ。命知らずにも程がある」

「……ごめん。本当に」

素直に謝る龍騎を見て、ナイトは何も言わなかった。

「……でも俺、あの2人の考え方だけは納得いかない。俺は、この力を、人助けやモンスターを倒す為だけに使い続けたいんだ。それが、バカな俺なりに見つけた、変身して戦う理由だから」

「……！」

ここで今まで無表情だったリップルの顔に変化を見られた。

「お前、本当のバカだな……」

ナイトはそう呟くが、不思議と嫌味には聞こえなかった。その証拠に、龍騎は仮面の下で自然と笑みがこぼれている。

トツプスピードは鼻息を鳴らし、こう言った。

「ここだから言えるけどさ。あの2人はマジでダメだ。ネジが飛んでも、下手に逆らえば冗談抜きで命を持つてかれる。もし今度出会うても、絶対に挑発に乗るなよ」

そう呟くトツプスピードの顔からは、本気で龍騎を心配している雰囲気があった。

「同じ仮面ライダーや魔法少女の拳は、チンケな争いの為に振るうもんじゃない。あんたが本気で誰かを守りたいっていうヒーローを目指すなら、その拳はその時の為だけにとっておけ」

「ああ、分かっている」

龍騎がハッキリとそう呟くと、トツプスピードもようやく元の勝気な表情に戻った。

「うっしー！ んじゃあ細かい話はここまでにして、早いとこ腹ごしらえといくか！ ちょっとトラブルもあったけど、今日もパトロールするからな！」

「ツシャア！ 飯だ！」

「(本当に反省してるのか……？ 全然心が読めない奴)」

龍騎は変身を解き、上機嫌にトツプスピードが持ってきていた、タッパーに入った料理を手を取った。この日は五目おにぎりだった。同じく変身を解いた蓮二とリップルも、仕方なしにと五目おにぎりを頬張った。

「うん！ 美味しい！ ホントにトツプスピードは料理が上手い！」

「へへっ！ お前食いっぷりが最高だな！」

さも美味しそうに頬張る正史を見つめながら、トップスピードは自然と首から提げているお守り袋を握りしめた。

「誰かを守る為だけに変身する……か。龍騎だけじゃない。こいつらには、あの時のような事にならないように、俺がしつかりしてなきやな。もう、あの人のような目には遭わせない！」

その瞳からは、哀しみを連想させるものがあつた……。

12. 恩師との再会

その日、大地は手提げカバンを片手に、商店街を歩いていた。

先日、とある出来事をきっかけに出会った、実は同級生だった小雪ことスノーホワイト、親友である颯太ことラ・ピュセル、そして占い師の仕事をしている手塚ことライアの3人に加え、九尾に変身する大地の4人でチームを結成し、協力して人助けやモンスター退治を積極的に行う事を誓い合った。

この日は各々の用事があるという事で、本格的な活動は夜を迎えてからという事になった。その間、どう暇を持て余そうか悩みながら帰宅していた大地だったが、N神社の敷地に入った途端、そんな心配は解消された。母親から買い出しを頼まれたからだ。面倒に思ったが、断る理由も見つからなかったので、渋々商店街に足を運んだ。

「……こっただけ買えば大丈夫だろ」

大地が覗いている手提げカバンの中には、大量の和菓子や紙コップ等がぎっしりと詰まっていた。N神社恒例の秋祭りまで間もなく1週間を切り、本格的に準備が進められていた。今日買い出しリストに載っていたのでは、休憩用の備品や、市内から訪れるお偉いさんに差し入れとして提供するものの類だろう。

「こっちは夜に仕事を控えてる身なのに、人使いの荒い事で……」

もつとも夜に仕事が出来たのは単なる偶然である為、ボヤいても仕方がない。

商店街に立ち寄るのも久しぶりなので、もう少し見て回ろうとしてとある店に入ろうとした時、聞き覚えのある声が大地を呼び止めた。

「あ、大地君」

「? ……小雪?」

目線の先には、買い物袋を持って微笑みながら手を振っている小雪がいた。否、小雪だけではない。その隣には夫婦と思しき2人と、その子供であろう少年が母親と手を繋いでいた。

一瞬小雪の家族かと思ったが、大地は男性の顔を見てハツとした。その人物は大地にとって無関係とは言えなかった。

「やあ、久しぶりだね、榊原 大地君」

「香川先生……!」

微笑みながら大地の名を呼んだ、メガネをかけた男性の事を、大地が忘れてはいるはずもない。その男は、大地が小学生の頃の恩師、香川かがわ俊行としゆきだったのだ。小学校を卒業して以来、会う機会も無かった為、実に約2年ぶりの再会という事になる。

「あなた。ひよつとしてこの子も小雪ちゃんと同じ学校の?」

「ええ。2年生と6年生の時に、彼のクラスの担任にね」

よく覚えてるな、と大地は若干驚いた表情を浮かべた。香川に妻子がいる事は知っていたが、実際に会うのは初めてだ。なので、挨拶をする事にした。

「あ、俺、榊原 大地って言います。香川先生には、色々とお世話になってました」

「あら、良い返事ね。私は典子です。それから……、ほら、大地君にご挨拶」

「裕太でーす!」

「もうじき6歳になる、私達の息子ですよ」

「そうですね。よろしく、裕太君」

大地は裕太に目線を合わせて挨拶をした。

それから一同は立ち話もアレだという事で、少し歩いた先に広がる広場のベンチに腰掛けて、近況報告や世間話をしていった。

「けど、何で小雪がここに?」

「お母さんに買い物を頼まれたんだ。そしたら、偶々先生とそのご家族と会ったの。大地君もそんな感じ?」

「まあ、な」

「紙コップに和菓子……。なるほど、来週の祭りに関係あるようですね」

「さすがですね。その通りです」

「……祭り?」

手提げカバンの中を覗いた香川がそう推測し、大地は首を縦に振った。一方、首を傾げている小雪は、「祭り」というワードに引つかかっ

た。そんな彼女に、香川が説明した。

「大地君の家は、N神社で代々神事を務める家系なんですよ。それで毎年祭りの時は一家で仕事を手伝っている。そうですね?」

「ええ、まあ……」

「ええ!?!? 大地君ってそんなに凄い家の人だったんだ!」

「凄いって言えるもんか……?」

大地がそう呟くが、小雪は興奮のあまり、耳に入っていないようだ。「そういえば、そうちゃんがこないだから祭りの事を話してる時が多かったけど、そういう事だったんだ」

「そうちゃん……?」

典子の疑問に、香川が答えた。

「ああ。岸边 颯太君のあだ名ですよ。小雪君の幼馴染みであり、大地君の大親友の名前です」

「あれ? 先生、そうちゃ……じゃなくて颯太君のあだ名、知ってたんですか?」

「あなたが彼の事をよくそう呼んでたのを覚えていましたから」

「香川先生が担任だったのって、3年生と5年生の時だけだったけど、その時にそうちゃんって言ってたのを覚えてたって事ですか?」

「正確には、勝手に覚えてしまった、というのが事実ですけどね」「えっ?」

頭を指差してそう呟く香川を見てキョトンとする小雪と大地だったが、すぐにその意味を理解したのは大地だった。

「もしかして、瞬間記憶能力ってやつですか……?」

「瞬間、記憶能力?」

「一度見たら何でも覚えて、ずっと頭の中に残り続けるっていう、凄い才能の事だ。まあ、実際にそんなもの持つてる人を見たのは初めてだけど」

「結構厄介な癖ではあるんですけどね。特別覚えてなくても良いものまで勝手に覚えてしまいますから」

香川は苦笑混じりに答えるが、2人も今の今まで知らなかった恩師の特技に啞然としていた。

「さて、少し話を戻しますが、颯太君の方はどうですか？」

「そうちゃんは大地球と同じ学校だから、大地球の方がよく知ってると思います。ね？」

「ああ。お互い色々と忙しくなってるからはそんなに会話してなかったんですけど、最近は俺も小雪も会う機会が増えて、まあなんとかやってます。サッカーも気合い入れてやってるのを見かけますから」「そうですか。夢に向かって頑張っているようで何よりです」

香川がそう呟くには理由がある。小6の頃に颯太の、プロサッカー選手になるという夢を強く後押しし、応援してくれたのは他ならぬ彼であった。故に颯太にとって香川は大がつくほどの恩人でもあるのだ。

「しかし、私としてはあなた方2人がここまで仲良くなっているとは思っていませんでした。担任を持っていたとはいえ、2人はさほど接点が無かったはずですから……」

「え、ええまあ、ちよつと色々あつて……」

「そ、そうなんです。アハハ……」

まさか同系統のゲームを介して仮面ライダーや魔法少女として知り合った、とは口が裂けても言えるはずもなく、2人はどうにかして誤魔化す事にした。

と、その時。2人がポケットの中に入れておいたマジカルフォンが、近くに潜んでいるモンスターの出現を知らせる音が鳴り響いた。「……………」

2人は顔を見合わせて、緊張の面持ちになった。

「どうかしたの？」

2人の様子が変わったような気がした典子は2人に尋ねた。

「…………あ、ごめんなさい。私、そろそろ家に帰らないと。お母さんが心配しちゃうから」

「俺も同じく」

「あら、そう」

典子は納得したように頷くが、どういうわけか、香川の表情は陰しい。

それに気づく事なく2人は慌てて立ち上がり、買った品の入った袋を手に持った。

「それじゃあ、失礼します！」

「颯太にもよろしく伝えておきます！ それじゃあまた！」

「バイバイ！」

裕太が元気よく手を振り、2人も手を振り返すと、ダツシユして広場から去っていった。

「随分と急いでみたいだけど、大丈夫かしら？」

「……」

典子がそう呟いている間も、香川は表情を崩さない。そればかりか、時折自分の服のポケットに視線を向けている。

やがて香川は、膝の上に乗せていた裕太を典子に預けた。

「すまない。ちよつと買い忘れたものがあつたのを思い出したから、裕太と一緒に、ここで待っててください。すぐに戻りますから」

「え？ ええ」

「じゃあ裕太。少しだけ母さんと一緒に待っててね」

「うん！」

裕太は無邪気にそう返事すると、香川も笑ってその場を後にした。彼の向かう先は、先ほど小雪と大地が駆け抜けていった方向と同じだった。

「けど、よかったのか？ お前モンスターと戦えるわけでもないのに」
「でも、大地君一人に任せておけないよ。困った時に、すぐに助けられるようにしないと」

「ま、その気持ちは受け取っておくか」

マジカルフォンの反応に従い、2人は路地裏に入り、物陰に袋を置いた後、鏡を見つける為に辺りを見渡した。

「！ あそこー！」

「！」

小雪が指差した先には鏡があり、その中を何かが猛スピードで横切った。モンスターに違いない。

2人は鏡の前に立ち、小雪はマジカルフォンを手にし、大地はカードデッキを鏡にかざした。

「変身！」

カードデッキをVバックルにはめ込んだ大地の姿は、鏡像が重なって九尾となり、マジカルフォンをタップした小雪の姿は、光に包まれてスノーホワイトになる。2人は目配せした後、同時に鏡を通じてミラーワールドに突入した。

「……なるほど。彼らも……」

だがこの時、2人の後ろ姿を後から駆け付けた香川が見ていた事に気づく事は無かった。対する香川も、どこか納得した表情で、2人が入り込んだ鏡を見つめていた。

「……ならば私も手を貸してあげる必要がありますね」

そう呟きながら香川がポケットから取り出したのは、黒いカードデッキだった。右手に持ったそれを鏡にかざし、腰にVバックルが取り付いた。カードデッキを上空に放り投げ、香川は左足を一步突き出して叫んだ。

「変身！」

そして落下してきたカードデッキを左手でキャッチし、すぐさまVバックルにはめ込むと、鏡像が香川に重なり、コオロギをモチーフに

した右腕にカードリーダー状の召喚機『スラッシュバイザー』がついた黒い仮面ライダー『オルタナティブ』へと変身した。そしてオルタナティブもまた、2人の後を追うようにミラーワールドへと入っていった。

一足先にミラーワールドにやってきた九尾とスノーホワイトはモンスターを探していた。

「どこにいやがる……」

「！ 危ない！」

スノーホワイトが叫ぶと同時に何かが九尾に向かって突進してきた。九尾はギリギリの所で回避し、スノーホワイトを後方に下がらせた。敵もようやく立ち止まり、その姿を確認できた。両腕に盾を持ち、体から4本の角が突き出たイノシシ型のモンスター『ワイルドボーダー』である。

ワイルドボーダーは振り返るとすぐに2人に向かって再び突進してきた。

「わっ!?？」

「かなりスピードがあるな……!」

2人は飛び上がって回避し、九尾はカードを取り出してベントインする。

『SWORD VENT』

「はっ!」

フオクセイバーを持った九尾は、立ち止まった隙についてワイルドボーダーに振り下ろしたが、頑丈な体で出来ているのか、ビクともしていない。ワイルドボーダーは九尾を吹き飛ばすと、今度はスノーホワイトに向かって突進してきた。

スノーホワイトは怯えながらも真正面から受け止めようとしたが、戦闘に不向きな少女では当然抑えきれずはすもなく、吹き飛ばされてしまう。

「きゃあー！」

「スノーホワイトー！」

ワイルドボーダーは止まる事なく、目の前にあつたコンクリートの支柱を破壊して前進した。4本の角の先から噴き出た気孔弾が硬いコンクリートを破壊したのだ。

続いてワイルドボーダーはそばに停めてあつた車を動かし、2人に向かつて押し出した。

「！！」

2人は瞬時に飛び上がってボンネットの上を転がり轢かれずに済んだ。

ワイルドボーダーは雄叫びを上げて突進してくるが、今度は九尾も回避せずにカードをベントインした。

『GUARD VENT』

すると、九尾の腰から生えていた9つのフサフサな狐の尻尾が、意思を持ったかのように動き出し、九尾の全身を覆った。ワイルドボーダーと接触するも、後ずさりこそしたが、どうにかして受け止める事が出来た。だがワイルドボーダーも負けじと押し返してくる。

「くっ……いー！」

「私もー！」

スノーホワイトは苦悶の表情を浮かべながら九尾が吹き飛ばされないように、後方から押して踏みとどまっている。しばらく拮抗が続いたが、ワイルドボーダーの方がまだ余力があるようだ。

「(さすがにこれ以上は俺もスノーホワイトもキツイな……。どうにかして反撃のチャンスを……)」

九尾が打開策を考えていたその時だった。

『ACCEL VENT』

女性の声でベントインを知らせる音が鳴り響いた。一瞬九尾が自身の持つアクセルベントのカードを使ったのかと思ったスノーホワイトだが、当の本人も困惑している。

では、一体誰が……？

その疑問は突如として横から猛スピードで突っ込んできた人影の体当たりによってダメージを受けたワイルドボーダーと共に吹き飛ばされた。

九尾が尻尾を元に戻し、2人が同時にある一点に目を向けると、そこには仮面ライダーが佇んでいた。その手には大型の剣『スラツシユダガー』が握られている。

「挿入歌：果てなき希望」

「あれは……！」

「オルタナティブ!?？」

2人はチャットで見た事のあるアバターと同じ姿の仮面ライダーの登場に驚いていた。

「お二人とも、怪我は無いようですね」

「は、はい！ 助けてくれてありがとうございます！」

「困った時はお互い様ですよ」

3人が集まると、ワイルドボーダーが立ち上がり、九尾達に向かって突進してきた。

3人は横に飛んで回避するが、ワイルドボーダーは高速で動いて翻弄し、狙いを定めてオルタナティブの背後から突進した。オルタナティブは回避する間もなく正面から倒れこんだ。

「！ 大丈夫ですか!?？」

「この程度なら問題ありませんよ」

「ハアッ！」

スノーホワイトが駆け寄り介護している間に九尾は連続キックでワイルドボーダーを遠ざけた。

オルタナティブが体制を整えた所で再びワイルドボーダーが動き

出した。

九尾とスノーホワイトが壁や支柱を利用して飛び上がって回避する中、オルタナティブは全く動いていなかった。

「危ないですよ!?」

「あれじゃあ敵の的になるだけ……!」

2人の想像通り、案の定ワイルドボーダーは狙いをオルタナティブに定めて、突進してきた。寸前の所まで接近してきたその時、オルタナティブは振り返り、スラッシュダガーを振り上げた。不意の攻撃を受けたワイルドボーダーは吹き飛ばされて、地面を転がった。

その様子に2人は戸惑いを隠せない。まるで計ったような動きで、あれだけ苦戦していたワイルドボーダーを地に伏せたのだ。

すると、オルタナティブは頭に指を当ててこう呟いた。

「私は動き、速度といったものを一度見ると、覚えてしまうんですよ。当然、攻撃パターンも、ね」

「! このセリフって!」

「間違いない。こんな事が言えるのは……」

「香川先生!」

2人が同時にその名を叫ぶと、オルタナティブは振り返り、頷いた。「私の持つマジカルフォンの音が鳴ったタイミングとあなた方の行動がかなり一致してたものでね。あなた方の後を追わせてもらったら、案の定でしたね」

「まさか、先生が仮面ライダーオルタナティブだったなんてな……」

「こんな偶然ってあるんですね!」

「私も今ようやく合点がきましたよ。お二人の仲が良かった理由がね」

そうこうしているうちにワイルドボーダーは起き上がり、再び攻撃を仕掛けてきた。3人は距離を置いて広い場所に出ると、オルタナティブが前に出た。

「では、これで終わりです」

『FINAL VENT』

オルタナティブが取り出したカードをスラッシュバイザーのス

リット部分にスライドし、カードを消滅させると、2人の後方からオロギ型の契約モンスター『サイコログ』が走ってきた。そしてサイコログは徐々にバイクの形となり、『サイコロダー』として接近してきた。オルタナティブは飛び上がり、2人の間を通り抜けたサイコロダーに搭乗し、一気にアクセルを吹かせた。ワイルドボーダーが突撃してくるが、それよりも早くオルタナティブがサイコロダーを操作して、コマのように高速回転を加えてワイルドボーダーにぶつかった。

オルタナティブの必殺技『デッドエンド』の勢いに競り負けたワイルドボーダーはその場で爆散し、オルタナティブはブレーキをかけて停車した。

「凄い……」

「ああ」

2人はオルタナティブの強さに圧巻されていた。

「どうにか無事に解決しましたね。お疲れ様です」

オルタナティブは2人に歩み寄ると、2人を労った。マジカルキャンディーの獲得数を確認し、一言二言会話をした後、オルタナティブは背を向けた。

「それでは、先に失礼させていただきます。あまり妻子を待たせる訳にはいかないのでね。また機会を設けて会いましょう」

「はいー」

「今日はありがとうございました」

2人がお礼を言うと、オルタナティブは足早にミラーワールドから去った。

「先生が仮面ライダーか……。心強いな」

「後でそうちゃんにも教えてあげよっかな。きつとびつくりするよね」

「良いかもな。んじゃあ、俺達も出るか」

「うん」

そう言って2人もミラーワールドを後にした。

「まあ、そうでしたか！ あのお二人は先生の教え子だったのですね！」

「やっぱり先生は何かと他の魔法少女や仮面ライダーと縁が深いわね。ウィンタープリズンもそう思わない？」

「ああ。現に僕達とも変身前ではゼミ生と講師という関係だからね」
その晩、拠点として居る廃れたボウリング場の跡地ではオルタナティブに加え、彼の所属するグループのメンバーであるシスターナナ、ヴェス・ウィンタープリズン、ファムがタ方の件で会話を繰り広げていた。

因みにウィンタープリズンの会話にもあった通り、シスターナナ、ヴェス・ウィンタープリズン、ファムの変身者は皆、香川の現役の教え子でもある。香川は現在、大地達に通っていた小学校の担任ではなく、3人の通う大学の講師として、日々生徒を正しく導こうとしている。

「九尾もスノーホワイトも、先生に育てられたのですから、大変な人助けに勤しめるのも納得出来ますね」

「あの2人が感性豊かである事は知ってましたから、それが今も続けているのは喜ばしい事です。これからも私達で見守ってあげましょう」

「もちろんですわ！」

ニッコリと微笑んでシスターナナがそう返事すると、ヴェス・ウインタープリズンもファムも同情して頷いた。

オルタナティブも仮面の下で微笑み、空いた天井から僅かに見える夜空を見上げた。

今宵も煌めく月が眩しかった。

13. メカニツクな奴ら

「次は城西地区3丁目付近のアパートに住んでいた会社員の所に向かうわよ……って、城戸君、聞いてるの？」

「え？ あ、はい！ 大丈夫です！」

本当かと言わんばかりに顔をしかめる令子だが、運転に集中する為に前を向いた。

正史は現在、先輩の令子が運転する車に乗車している。この日正史は、令子が担当している行方不明事件の調査の手伝いをする事になっており、本日4件目となる行方不明者の自宅を搜索しに向かう途中である。

後部座席に座りながら、正史は考え事をしていた。思い起こされるのは、先日城南地区で遭遇した、カラミティ・メアリと王蛇の2人の事である。

「誰かを助ける事が間違ってるはずなんて無い。トップスピードにも言われちゃってるし、これ以上関わろうとは思わないけど、今度会った時は絶対……」

するとその時、車が急ブレーキと共に停車し、正史は勢い余って前の座席に顔面を打った。

「痛つてえ……！！？ ど、どうしたんですか令子さん！ 急にブレーキかけて……」

「あれ見てー！」

令子が指差した先を見ると、反対車線に2台の車が停まっており、そのすぐ近くで数人の屈強そうな男性陣に囲まれて、1人のスーツ姿の男性が狼狽えていた。

やがて1人の男性がスーツ姿の男性の胸倉を掴んで殴ったのを見て、令子はいてもたつてもいられずに車から降りて駆け寄った。正史も慌ててその後ろ姿を追いかけた。

「ちよつ、令子さんー！」

「ちよつとあなた達、そこで何してるの！」

令子の一喝を聞いて男性陣もようやく2人の存在に気づいた。

「何だお前ら。そっちに用は無いんだよ」

「こつちはありありです。集団で寄ってたかって、恥ずかしく無いんですか?」

「い、いいんだ……。君は関係ないからさ」

スーツ姿の男性が令子にそう言うと、令子は目を見開いた。

「あなた、まさか……!」

「えっ? 令子さん知り合い?」

正史がそう尋ねていると、男性陣の1人が再びスーツ姿の男性を捕まえた。

「話が早いじゃねえか。ならやった事のケジメぐらいつけてもらおうか!」

「! 止めろよ! 死んじやうだろ!」

危険を感じた正史は拳を振り下ろそうとした男性に飛びかかって、男性を引き離れた。と、今度は正史の方が殴られてしまった。

「! 城戸君!」

「おい!」

スーツ姿の男性も慌てて正史を引っ張って男性陣から引き離すと、近くに停めてあった車に無理やり乗せた。

「君も早く!」

「えっ!?? ちよつと!??」

男性は令子の背中に手をやって、後部座席に乗せた後、掴みかかってきた男性を退けて、運転席に乗り込み、急発進させた。男性陣も残っていた車に乗り込んで正史達を追いかけ始めた。

カーチェイスが繰り広げられる中、正史が喚いた。

「ちよ、ちよつとどうなってんだよ! あんたあいつらに何かしたのか……!」

「おい、シートベルト」

「あ、はい」

男性に注意されてシートベルトをする正史は、後部座席にいる令子に声をかけた。

「そ、そういえば令子さん。さっきこの人の事見て驚いてましたけど、

知り合いなんですか!?!」

「はっ? 城戸君知らないの? この人、北岡きたおか 賢治けんじよ。『黒を白に変える弁護士』って呼ばれてるわ。大体今朝のニュースでこの人が映ってたの見てなかったの?」

「……あ! そういえば……」

正史はOREジャーナルで大久保がつけていたテレビで報道されていたニュースの事を思い出した。その時の大まかな内容としては、大物弁護士が強引な手段を使い、とある裁判で無罪を勝ち取ったというものであった。大勢の記者団に囲まれながらコメントしていた弁護士と、すぐ側で運転している男性の顔は確かに一致していた。

「あ、あんた本物の……?」

「まあね」

「それより、何であんたが追われてんだよ? あいつら一体……?」

「っておわっ!?!」

「きやあ!」

正史と令子が悲鳴をあげるのも無理はない。追いかけてきた男性陣の車が体当たりしてきて、車が大きく揺れたからだ。北岡がどうかして距離を離れた後、ポケットの財布の中から新聞紙の一片を取り出して、正史に渡した。令子も後ろから覗き込んだ。

そこには北岡の顔写真が載っており、その下に書かれていた記事の内容を見て、正史は興奮したように叫んだ。

「あ! このT商事って、聞いた事ある! あちこちの不動産屋から金を巻き上げてるって悪い噂が流れてる会社だよな!」

「! まさか、あの人達は……」

令子が何かを察したようにハッとした。

「そ。あいつらこそが、そのT商事の回し者。裁判で注ぎ込んだ金を無断で使ってたのがバレちゃってね。それで金を返して貰おうってバカみたいに騒いで俺を追いかけてたってわけ」

「それって、あんたが無理やり悪い事してるあいつらを無罪にしたって事なのか!?!」

「そう。俺結構凄いでしょ?」

「けどあなた、無断で依頼相手の会社の金を使うなんて、ある意味犯罪よ!?? 分かっているの?」

令子が咎めるが、本人は清々しい表情で否定した。

「そうか? どうせ罪もない人々から騙し取られた金だろ? あのまほったらかしにしておくより、俺が効率よく使って裁判に勝てる方がよっぽど得すると思うけど?」

「そういう問題じゃ……!」

正史が反論しようとする前に、再び体当たりを受けて車が大きく揺れた。慌ててハンドルをきる北岡だが、スリップしてしまい、近くのゴミ置場に突っ込んでしまった。車は停車してしまい、衝撃でエンジンがイカれてしまったのか、キーを回してもかからなかった。

「早く出るぞー!」

「わっ!??」

「ちよ、ちよつと……!」

北岡が後部座席のドアを開けて、令子をエスコートするかのよう以降ろして、手を引っ張って逃げ出した。その後を正史は鼻を押さえながら追いかけた。

しばらく走った所で、T商事の回し者達に囲まれてしまった。

「さあ、もう逃げられないぞー!」

「お、おい。どうすんだよ……!」

正史が小声でそう尋ねると、北岡はため息混じりに令子から手を離し、前に出た。どうするつもりなのかという視線を向ける正史と令子の前で、北岡は唐突に土下座を始めた。

「ご、ごめん! 俺が悪かった! 金はちゃんと返す! だからこの

通りだ! 許してくれ!」

「ええええええええ!??」

「ちよつと! あなたそれでも男なの!??」

「いやでも、こうでもしておかないと……!」

まさかの行動に驚く正史と呆れる令子。当然回し者達も納得するはずが無く、罵声と共に北岡に詰め寄った。

「(クツソオ……! こんな時ライダーになれてたら、人助けって事で

「どうか出来るのに……!」

先輩の令子や弁護士の北岡、更にT商事の回し者に囲まれている今、下手に龍騎に変身する事は叶わない。

「先生から離れる!」

だがそこに、新たな人影が姿を現した。声のした方を振り返ると、ぱっと見はチンピラ風の男性が、こちらに歩み寄ってくるのが見えた。

「ゴロちゃん!」

「先生、間に合って良かったつす」

ゴロちゃんと呼ばれた男性は笑みを浮かべながら、ファイティングポーズを取り、北岡に襲いかかろうとしている回し者達に鋭い視線を向けた。回し者達がたじろいで少しずつ下がる中、男性は北岡に小声で話しかけた。

「先生。真琴から連絡です。次の仕事の合計費用の計算と部屋の掃除といった仕事は完了。現在待機中との事です」

「そっか。ならここは任せるよ」

「了解!」

回し者達も我慢の限界がきたのか、男性に殴りかかった。が、男性は軽く足払いしたり、逆に殴り返したりと、徹底的に回し者達に制裁を与えていた。

「っ、強え……」

「じゃあ後はよろしくねゴロちゃん! さあ、行きましょう」

「え、ちよつと!?」

「あ、待てよ!」

その場を男性に任せた北岡は令子の手を掴み、再び駆け出した。正史もその後を追いかけた。回し者達が追いかけてようとするが、男性による妨害によって、行く手を遮られた。

「ちよつと離しなさいよ！」

ようやく追つてから逃れたのを確認した令子は北岡の手を振りほどいた。

「つていうか、あの人が放っておいて良かったのかよ？」

「大丈夫だつて。ゴロちゃんはあんな奴らに負けるはず無いって」

「さっきの人、あなたの秘書なの？」

「そ。由良 吾郎って言つてね。俺が一番信頼出来る男」

それよりもさ……、とここで北岡が話題を変えてきた。

「なんか迷惑かけちゃつたみたいだし、良かったら詫びも兼ねて食事でもどう？ もちろん俺の奢りで」

北岡がそう呟く目線の先には正史はおらず、令子だけに向けられていた。何で自分は無視されているのかツツコもうとした正史だが、令子は冷たくあしらうように答えた。

「生憎まだ仕事がありますし、そういうのに興味無いんで。それじゃあ……」

「待て〜！」

不意に聞こえてきた怒声のした方を振り返ると、2人の男性が駆け寄ってくるのが見えた。回し者達の別働隊のようだ。

「やばっ！」

慌てて正史は北岡の腕を掴み、令子に言った。

「こいつは俺が何とかします！ 令子さんは先に車の方に戻つてて！」

「え、でも城戸君は……」

「後で連絡入れます！」

そう叫んで2人は路地裏に消えた。男性達は令子に目もくれずに2人を追いかけていった。

「城戸君、大丈夫なの……う？」

彼の事をよく知る令子は不安に思ったが、自分1人であるの屈強そうな男性達をどうにか出来るとは思えなかつたので、正史を信じて車のあつた所に戻る事にした。

正史は北岡と共に、入り組んだ路地を走り回っていた。何度も角を曲がったりして攪乱させようとしているのだ。

ある程度男性達から距離を離して、人気の無い店のショーウィンドウを通り越した辺りで、正史はポケットの中に入れてあるマジカルフォンから音が鳴っている事に気づいた。

「(！ これってモンスターが近くに……！)」

「おい！ 立ち止まるなよ！」

正史は立ち止まろうとしたが、回し者達に追いかけてられている事を思い出して、北岡と共に角を曲がった先にある物陰に隠れた。しばらくこの場で身を潜めようと考えていたその時だった。

「うわああああああつ!?？」

先ほどから追いかけていた男性達の悲鳴が聞こえたかと思うと、急に静けさが辺りを包んだ。

正史は目を見開き、慌てて来た道を覗いた。北岡もそれに続いて正史の目線を追った。見ると、ショーウィンドウの前には先ほど男性の1人が履いていた靴が片方だけ転がっているではないか。

「！まさか、モンスターに……！」

正史はショーウィンドウの前に立ち、中を覗き込むような動作を見せた。どうやら近くにいたモンスターが回し者達を捕食したようだ。

「なあ、お前何やって……」

北岡が、正史の奇行に目を細めていた時、不意にハツとした表情を見せた。

「ひよつとしてお前、ミラーワールドの事知ってるのか？」

「えっ!?? 何で北岡さんがその事……! ……ひよつとしてあんたも!??」

「そのまさかかって感じだな」

北岡は観念したように胸ポケットからあるモノを取り出した。それはスイギュウの紋章が刻まれた、緑色のカードデッキだった。それは正真正銘、北岡が正史と同じ仮面ライダーの1人である事を決定づける証拠であった。

「あんた、ライダーだったのか……! だったら協力しようぜ！」

「協力……?」

「この中にいるモンスターを倒すんだよ！」

正史がカードデッキを取り出して指差すが、北岡は呆れたように肩を竦めた。

「何で俺がそんな事しなきゃならないのさ。追いかけてきた奴らをやっつけてくれたんだし、こっちとしては大助かりだよ」

「んな事言ってる場合かよ! 人が襲われたんだぞ!?? あんたもライダーなら、モンスターと戦えよ！」

正史に咎められた北岡は、反論するのが面倒になったのか、ため息をついてから呟いた。

「しょうがないなあ……。今回だけだぞ」

それから正史の横に立って、カードデッキをショーウィンドウにかざした。正史もそれに続き、2人の腰にVバックルが装着された。

「変身！」

正史は右腕を左斜め上に突き出し、北岡は握り拳を立ててから、両者共にカードデッキをはめ込んだ。各々に鏡像が重なり、正史は龍騎に、北岡は全体的にメカニクな仮面ライダー『ゾルダ』に変身した。

2人がミラーワールドに入ると、前方に2体のモンスターがおり、どちらも同じ造りをしていた。一体はシマウマ型のモンスター『ゼブラスカル・アイアン』であり、もう一体は色違いで同型のモンスター『ゼブラスカル・ブロンズ』だった。

『SWORD VENT』

「ツシャア！」

龍騎がドラグセイバーを片手に、ゼブラスカル・アイアンに立ち向かい、ゾルダは腰に提げてある銃型の召喚機『マグナバイザー』を持って構えると、ゼブラスカル・ブロンズに連射した。

ゼブラスカル・ブロンズは連射を浴びて後ずさった。一方、ゼブラスカル・アイアンは龍騎の攻撃を器用にかわし、角状の武器を持つ両腕で龍騎に殴りかかった。

「このおー！」

龍騎は負けじとドラグセイバーを振るうが、ゼブラスカル・アイアンは体をバネのようにして高く飛び上がり、龍騎の背後をとった。

「何!??!」

ゼブラスカル・ブロンズも同様の手口でゾルダの背後に回り、強襲した。

「くっ……い……」

接近戦が苦手なゾルダは回避できずにダメージを受けて、味を占めたゼブラスカル・ブロンズが優位に立った。

ゼブラスカル・アイアンの猛ラッシュを受けて、龍騎も次第に焦りが見え始めた。

「おわっ!??! いっつ、すばしっ……い……」

遂にドラグセイバーが弾かれて、無防備になった龍騎に、ゼブラス

カル・アイアンが飛びつこうとした。

「トオツ！」

その時、横手から小さな人影がゼブラスカル・アイアンに両足飛び蹴りを入れて、ゼブラスカル・アイアンは倒れこんだ。

龍騎が助けてくれたその人物の方を見ると、思わず仮面の下で目を見開いた。

「大丈夫デスか？」

そう呟いたその人物は、確かに人型はしていたが、どこをどう見てもロボットにしか見えなかった。おまけに背中には何故か赤いランドセル型のブースターを背負っており、左右の腰には大きめの袋が取り付けられている。パツと見た感じは、小学校低学年にしか思えない。とにかくそんな容姿だった。

とりあえず龍騎は質問してみる事にした。

「えっと……。君も、魔法少女、だったりする……？」

「左様。こうして会うのも初めてデスね。マジカロイド44デス」

「ど、どうも……。俺、龍騎！ 最近仮面ライダーになったばかりなんだ」

「知ってマスよ。チャットも拝見させてもらいマシタ」

突然現れた魔法少女『マジカロイド44』は、律儀に挨拶をした。すると、ゼブラスカル・ブロンズを退けたゾルダがマジカロイドに駆け寄ってきた。

「お前、どうしてここに？」

「先生の帰りが遅かったので、ちょっと気になってこの辺りを探してただけデス。無事で何よりデス」

「先生……？ って事は、あんたら知り合いなの？」

「まあ、そういう感じデスね」

「へえ」

ゾルダとマジカロイドの関係性を知って納得したように頷く龍騎だが、そこに、無視されている事に怒っている2体のゼブラスカルが飛びかかってきた。

「どうやら相当怒ってるみたいデスね」

「やれやれ。面倒だから速攻で片付けるか」

「おう！」

「では、ワタシもお力添えを」

そう言つてマジカロイドは袋に手をやってゴソゴソと動かした。何かを取り出そうとしているようだ。龍騎が気になつて見ていると、やがてマジカロイドの右手に握られていたのは、どうやったらそんな大きさのものが入るのか分からないぐらいに、マジカロイドの身長よりやや大きめの筒型の大砲が握られており、唐突にマジカロイドの口から、BGMらしき音が流れた。

「じゃじゃじゃじゃーん！ 『無限トリモチバズーカ』デス」

「無限トリモチバズーカア？」

聞いた事の無い武器の名前に、龍騎は思わず聞き返した。

「その名の通り、トリモチをその日限りだけです、尽きる事なく発射出来る、万能な攻撃アイテムなのデース。いや〜。今日は中々にお誂え向きのアイテムが出マシタ。これもワタシの日頃の行いが良いからデスね」

「なんだそれ……」

龍騎は思わず力が抜けた。

後に聞いて判明したのだが、マジカロイド44の魔法は『未来の便利な道具を毎日ひとつ使う事ができるよ』であり、未来の便利アイテムを1日一回限り、使い捨てではあるが、ランダムで取り出し、使用する事が出来るのだそうだ。

ただ、未来の便利アイテムに何故トリモチが採用されているのか謎であるが、状況が状況なので、あまりツツコまない事にした。

「挿入歌：果てなき希望」

「デハ早速……。ファイヤー！」

バズーカ砲を担いだマジカロイドは筒口からトリモチを発射し、ゼブラスカル達の足元に命中。それにより、ゼブラスカル達はそこから一歩も動く事が出来なくなった。

「デハ、後はお任せシマス」

「任せて！ いくぞお！」

龍騎はサムズアップをマジカロイドに向けた後、カードデッキから1枚のカードを取り出し、ドラグバイザーにベントインした。ゾルダもスライド部のスロットルレバーを引き、1枚のカードをトリガー部分に差し込んでベントインした。

『STRIKE VENT』

『SHOOT VENT』

龍騎の右腕にドラグクロウが装着され、ドラグレッダーが上空から姿を現した。そしてゾルダのもとに現れたのは、自身の身長よりもはるかに長い大砲『ギガランチャー』。それを両手で持つと、ゼブラスカル・ブロンズに銃口を向けた。

「ハアアアアアアア！ ダアアアアアアア！」

「ふん！」

龍騎がゼブラスカル・アイアンに向かって右腕を突き出し、ドラグクロウファイヤーを放ち、ゾルダはギガランチャーから威力の高いエネルギー弾を発射した。すると、ゼブラスカル達は体をバネのように伸ばして、腹で受け止めた。が、ギガランチャーの威力は想像以上に強かったのか、ゼブラスカル・ブロンズの体を貫通し、爆散した。一方、ゼブラスカル・アイアンの方は威力を殺せたのか、倒される事なくトリモチのついていた足が地面から離れて吹き飛び、地面を転がった。

「どうやら効いてないようデスね」

「し、しぶてえな……。だったらこれで！」

龍騎も意地を見せるかのように新たにカードを取り出してベントインした。

『FINAL VENT』

「ハッ！ ハアアアアアアアッ！」

「オオ。諦めが悪いようデスね」

「よくやるよ」

2人が龍騎の前向きな姿勢を見守っていると、龍騎はドラグレッダーと共に上空に飛び上がった。そして1回転した後、右足を突き出し、ドラグレッダーの放った炎に押し出されて、龍騎の必殺技『ドラ

『ゴンライダーキック』がゼブラスカル・アイアンに向かった。ゼブラスカル・アイアンは先ほどのドラッグクロフアイヤーの衝撃、更には未だに足にこびりついているトリモチによって自由が利かず、真正面から攻撃を受けて、爆散した。

「ツシャアー！」

龍騎がガッツポーズをとっていると、マジカルフォンが鳴り響き、マジカルキャンディーの獲得数が明らかになった。

「まあまあの稼ぎデシタね。これで社会奉仕に貢献シタという事になったのデスね」

「社会奉仕ねえ……。ま、そこそ稼げたし、もう帰るか。小腹も空いたし、早いところゴロちゃんの手料理が食べたいよ」

そう呟いて、ゾルダはミラーワールドから出ようとした。その後ろをマジカロイドがについていった。

その後ろ姿を龍騎は呆然と見つめていたが、不意に思い出したかのようにゾルダが龍騎の方を向いた。

「あ、そうだ。令子さんに伝えといて。食事のお誘いは何時でも受け付けるから、気が向いたら事務所に連絡してってな」

「言うかよー！」

「そう言わずに、頼むよ。同じライダーだろ」

「それとこれとは関係ないだろ!!?」

龍騎のツツコミが聞こえているのか定かではないが、ゾルダとマジカロイドはそれ以上何も言わずに去っていった。

「ったく。何なんだよあのライダー……」

龍騎はそうぼやきながら、2人に背を向ける形で歩き始めた。

「(……けどまあ、マジカロイドもそうだけどそんなに悪い人じゃないみたいだし、まいつか)」

龍騎は自分にそう言い聞かせながら、令子が待っているであろう場所になるべく近づくと、別の場所から脱出する事にした。

ショーウインドウから出てきたゾルダとマジカロイド44は、その場で変身を解除した。北岡の隣には、ニット帽にアニメのキャラクタ―が刺繍されている長袖、ミニスカートといったラフな格好の少女が立っており、彼女こそが、マジカロイドの変身前の姿なのである。

少女……安藤^{あんどう} 真琴^{まこと}は側に置いてあったリュックサックを背負って、北岡と共に歩き出した。その道中、真琴は北岡に質問した。

「そういえば、さつき言ってた令子さんって……？」

「さつき知り合った女性だよ。新聞記者やってるらしいね。結構イケてる感じだし、是非ともおとしてみたいよ」

「……私というものがありながら」

「ん？ 何か言った？」

「イエ、ナンデモゴザイマセン……」

目線を逸らして片言でそう呟く真琴を見て首を傾げる北岡だが、それ以上気にする事はなかった。やがて広い大通りに出て、吾郎と出くわした。どうやら回し者達は全員追っ払ったらしい。

吾郎は真琴がいる事に驚いていた。

「何でこんな所に？ 事務所の番はどうした？」

「え、ええ。ちよつと先生の帰りが遅かったから探しに出かけてて……」

「それは俺の役目だって言ったでしょ。バイトの子がこなす事じゃないっすよ」

「でも……」

「まあまあ。こうして無事揃ったんだし、早いとこ事務所に戻って仕

事済ませたらご飯にしようよ」

北岡がそう言うのと、言い争っていた2人も会話を中断し、北岡の言う通りにする事にした。

「……で、先生。今日は何にします？ リクエストがあれば何でもOKです」

「そうだなく。久々にビーフシチューが食べたいな。真琴もどうだい？」

「良いですよ。口に運べるものなら何でもアリですし」

「それじゃあ、スーパーに寄つてきましようか。タイムセールの間時間に合いそうですし、ちょうど近いですから」

3人は吾郎の運転する車で食材を買い揃える為、商店街へと足を運んだ。

肌寒くなってきた今の季節には、もってこいの料理に違いなかった。

14. お祭り騒ぎ

榊原 大地は、N神社の神主を務めてきた家系の一族の男性と、当時同級生だった女性との間に生まれた、2番目の子供である。

そんな彼が神社の行事や運営に携わるのは必然だった。もつとも、仕事の大半は兄の律木が受け持ってくれており、大地はそのバックアップ程度の働きだけで充分だった。

ところが約1年前から環境が一変。律木の消息が途絶え、それまで律木が行っていた仕事を自然な流れで弟の大地に回ってきてしまい、以来、次期当主として、自由な生活から疎くなってしまう。

そして今、大地は年に数回しかない大掛かりな仕事を果たす為に、準備を進めていた。

「今年も成功すると良いですね」

「え、ええ。まあ……」

着付け担当の女性に対し、ぎこちなくそう答える大地は現在、N神社の家紋が入っている装束を身に纏っていた。

こんな事よりも、人助けやモンスター退治の方がよっぽど気楽かもな……、と思いつつも、何百年と続いている伝統を自分の代で絶つ訳にもいかない。

着付けが終わり、鏡を見ながら身なりを整えた後、深く息を吐いてから、気持ちを切り替えて、この後行われる行事の動きを頭の中でシミュレートした。

合併都市のN市が誇る観光スポット『N神社』は、連日参拝客が途絶える事なく祈願しに来ている。特に大晦日や元旦、そして年に夏と秋に行われる祭りには、普段の倍以上の人が訪れる。

そして今日、秋祭りが開催し、神社のみならず、その周辺に立ち並ぶ屋台や石段、道路には大勢の観光客でごった返していた。

「ウヒャ〜。やっぱり相変わらず凄い人集りだな」

石段の先にある鳥居まで人が並んでいる様子を見て、正史は自然と口を開けていた。伝統ある祭りという事もあるが、取材に出かけているのだが、この後行われる行事の主役として、知人にあたる大地が登場するとあって、是非ともその勇姿を間近で見たいという思惑もあるのだ。

「そろそろだな。遅れないように、今のうちに行くか」

正史は列に並んで本殿へと向かった。

ようやく石段を登り終え、人混みの間をぬって奥へと進んでいくと、目の前に中学生ぐらいの男子が6人ほど固まって歩いているのが見えた。その内の1人の顔に見覚えがあったので、正史は声をかけた。

「あ！ 颯太君！」

「この声……。城戸さん！」

男子グループの1人、大地の親友である颯太が正史の存在に気づいて手を振った。

「知り合いか？」

「ああ。大地の近所に住んでてさ。大地と遊んでる時によく見かけてたんだ」

「久しぶり。何か前見たときより大きくなったね」

「まあ、2年も経てばそれぐらい……」

颯太は照れ笑いしながら、ふと思いついたかのようにこう言った。

「そうだ、城戸さんもこれから本殿の方に行くんですよね。だったら一緒に行きませんか？ 僕達もこれから向かうところですよ」

「そっか。ならそうしよっか。……ところで、その子達は？」

「同じ部活の仲間です」

「へえ。あ、俺、城戸 正史。新聞記者やってるんだ。よろしく！」

『はい！ よろしく！』

正史は、颯太が連れてきた男子達に自己紹介した。

それから前に進もうとした時、前を見ていなかった正史は向かってきた人と肩がぶつかった。

「あ、ごめんなき……あ！」

「お前……」

正史はぶつかった人物の顔を見て驚きを隠せなかった。なんとその人物は、仮面ライダーナイトとして、日々正史と共に活動している秋山 蓮二だったのだ。よく見ると、その傍らにはリップルの変身者、細波 華乃もいた。

「お前、何でこんなところに？」

「店主が、今日は祭りがあるから暇になるだろうって言われてな。無理やり駄賃も渡されて、断るのも面倒だから、2人で来た。これならバカでも分かりやすい説明になっただろ？」

「一言余計なんだよいつも……！ っていうかその子は……」

「細波 華乃。バイト仲間だ」

「……どうも」

華乃は軽く会釈しただけで黙り込んだ。ヤンキー風な目つきをしており、颯太の部活仲間は軽く萎縮していたが、美的な黒い容姿は申し分なかった。正史は彼女を見てある事を察した。

「ひよっとして華乃ちゃん……だっけ？ 君ってまさかりッ」

正史が言い終わる前に、蓮二は襟を掴んで黙らせ、顔を近づけた。

「ちよ、何すんだ……」

「人前でその名前を出すな」

「あ、ごめん……」

危うく華乃の正体が颯太達にバレるところだった事に気付き、正史は素直に謝った。が、この時すぐ側で正史と蓮二の会話を聞いていた颯太は、華乃に目をやった。

「(リッ……？ リップルの事か？ ってかひよつとしてこの3人って……!)」

颯太は心臓をバクバクさせながら、なるべく平常心を貫いた。まだ確信を持った訳ではないが、もしかしたら正史を含むこの3人は、自分や大地、小雪、それに手塚と同じ力を持った者ではないかと推測した。

そんな颯太の様子に気づく事なく正史は話を進めていた。

「あ、そうだ！ 良かったらさ。このまま俺達と一緒に本殿に行こうぜ！ 知り合いが祭りに出てるからさ」

「何でお前達と行かなきゃならない」

「いいだろ？ どうせブラブラ歩いてるだけなら、暇だしさ。ほら、行くぞー！」

「おい、離せ城戸！」

無理やり腕を引っ張られて強引に連れていかれる蓮二と、先陣を切る正史を見て、舌打ちした華乃は一瞬だけ颯太の方を向いてから、2人の後を追った。

颯太はよく舌打ちをする魔法少女の顔を思い出して、やっぱりかと言わんばかりの表情を浮かべながら、なるべく平然を装って部活仲間を連れて正史達についていった。

さて、この時人が密集する本殿周辺に構えている屋台の所々で、一際目立つような事が起きていた。

例えば射的屋。

「お、おお……！ 全弾命中はあんたが初めてだぜ」

「マジ？ こんなの外すとかみんなシヨボすぎでしょ」

ヘラヘラと笑いながら、撃ち落とした商品を受け取ったのは、大学の男性だった。コルク銃の銃口を向ければ百発百中。その腕前を間近で目撃した観光客達は、彼の後ろ姿をマジマジと眺めていた。その視線を気にする事なく、男性は景品をぶら下げながら、さもつまらなさそうに呟いた。

「あああ。もっと面白いゲームがあれば良いのに、やっぱ屋台のもんじゃワンパターンだよなあ」

例えばたこ焼き屋。

「へいお待ち！ 出来立てだぜ」

「ありがとうございます」

店主から湯気の立ったたこ焼きをお礼を言いながら受け取ったのは、少し小太りな女性だった。その傍らには、縞々のスーツ姿で、誰振り構わず魅了されてしまうその美貌からはさながら『プリンス』と呼ぶに相応しい人物がいた。一見美を兼ね備えた男にも見えるが、その美貌の下には、特徴的な形の良い2つの塊があり、その人物が女である事を決定づけるものだった。

「先生や美華も来れたら良かったのに」

「仕方ないさ。2人とも今日は用事があるって言ってたから。今日は僕達だけの時間を楽しもう」

「そうね」

小太りな女性は1つのたこ焼きに竹串を刺して、息を吹きかけて冷

ましてから、ボーイツシユな女性に差し出した。

「はい、雫。あーん」

「うむ。いただきます」

雫と呼ばれた女性は顔を近づけて、直接たこ焼きを咀嚼した。互いに笑みを浮かべた後、今度は雫が竹串を受け取ってもう1つのたこ焼きに刺してから、小太りな女性に同じように冷ましてから差し出した。

「奈々。君も」

「ええ。いただきます」

奈々と呼ばれた女性は、もうそのまま唇同士がくつつくのではないかと思わさせるほどに顔を近づけて、たこ焼きを頬張った。おまけに雫は奈々の腰回りに手を伸ばしており、最早それはカップルと言われども不思議に思わないほどであった。

……見なかった事にしよう。誰しもがそう考えたのか、一斉に目線を逸らしていた事に、2人は気づいていない。

例えば金魚すくい。

「ああ！ 破けちゃった……。これほんと脆いってゆーか」

「だよねえ。やっぱ金魚すくいってこういう所があるからつままないよねえ。こんなんに金かけるならその焦げ焦げの焼き鳥とかの方にしとけば良かったし」

「わお、お姉ちゃんマジストレート発言」

金魚を溜めておくお椀を渡し、破れた網を見つめながら文句を呟いているのは、顔つきや体型だけでなく、首から提げているネックレスや服装まで、瓜二つな双子の女性だった。唯一の違いがあるとすれば、ヘアピンを付けてる位置が左右対称になっているぐらいか。

そんな2人の背後には、2人の男性が立っていた。背の低い、チャラチャラした男性が2人を呼んだ。

「なあなあ、美奈ちゃん、優奈ちゃん。あつちにバザーやってる所あるからさ。そっちに行かない？ ちよつと良さげなやつがあったから

さ」

「ええ〜？ 私そろそろ帰りたいんだけど。まあその前に、降りた所にあつた肉まん食べてからだけどね」

「そーそー。そうしようよ光希」

金魚の入った袋を受け取った双子は光希と呼ばれた男性の意見に反対していた。光希もやれやれと思いつつも、2人に従う事にした。

「ま、いいや。またどつかの店で見つけたら買うか。じゃあ行くぞ、智」

「……うん」

光希は横を向き、智と呼ばれた男性に話しかけると、智は頷いただけでそれ以上会話する事なく、4人で固まって石段を降りていった。

例えばベビーカステラ屋。

「はい。一袋300円ね。毎度あり」

店主から可愛いクマの形をしたベビーカステラの詰まった袋を受け取った男性は、隣にいた少女に渡した。どうやら娘のようだ。

「はい」

「……ありがとう」

「でも綾名1人でそんなに食べれるの？」

その隣にいた母親らしき女性は、綾名と呼ばれた少女に問いかけると、綾名はこう言った。

「これ、ルーラやみんなにあげるもの」

「ルーラ……？ 友達の名前かい？」

「……ううん。ルーラは私のお姫様」

ひよっとしたらアニメのキャラクターに一目惚れして、プレゼントを渡そうとしているのかもしれない。そう思った両親は微笑みながら娘を連れて別の屋台に足を運んだ。

本殿でのイベントが始まる頃になると、人集りは更に増して、境内で行われている儀式の様子を見物したり撮影したりと、団子状態となっていた。そんな中で大勢の注目の的となったのが、その儀式の主役でもある大地だった。普段着慣れない格好で鈴を鳴らし、祈りを捧げた後、木箱を献上するという動作を無駄なくこなした。表情は真剣そのものだが、内心では恥ずかしい事この上なかった。

大勢の視線を浴びながら、くると回って元の位置に戻ろうとした時、偶然視界にカメラを構えて連写している正史の姿があった。よく見るとその隣には颯太やその部活仲間もおり、傍らには大地が知らない男女がジッと見つめていた。正史の友人だろうか。そう思いながら視線を別方向に向けると、境内の隅で、覗き込むように見物している小雪の顔が見えた。

「(やっぱり来たのか……)」

先日再会した香川との会話で祭りの事を聞いて、小雪も見に来たのだろう。大地は恥ずかしさが最高潮に達しながらも無事に進行を進め、最後は大衆からの大きな拍手を受けながら、山場を越える事が出来た。

軽装に着替えた後、外の空気を吸う為に大地は本殿を後にした。後は大人が務める儀式だけなので、後片付けがあるまではフリーという事もあり、人気のなさそうな場所で休憩する為に腰を下ろした。と、そこへ1人の少女が歩み寄ってきた。

「こんばんは、大地君」

「小雪」

現れたのは、先ほど顔だけ覗かせていた小雪だった。秋という事もあって浴衣姿ではなかったが、可愛らしい服装に身が包まれており、オシヤレに時間をかけた感じが出ていた。普段見慣れない服装でやってきた小雪を見て、大地は思わず見惚れた。その視線に気づいた小雪は恥ずかしそうに身を縮ませて呟いた。

「へ、変かな……？　こんな風にお祭りとかに出かける事なんてなかったから、そんなにおかしな格好にはしてこないつもりで来たんだけど……」

「だ、大丈夫。似合ってる」

「な、なら良いんだけど……」

「ていうか、友達とかは来てないの？」

「よっちゃんもスミちゃんも、今日は用事で来れないんだって」

「ふうん」

「隣、良いかな？」

「ああ」

そう言っただけで小雪は大地の隣に座った。すると今度は颯太と正史、更には蓮二と華乃がやってきた。他のメンバーとは途中で別れたようだ。

「おつ、こんなところにいたのか」

「こんばんは」

「そうちゃん。……あれ？ その人は」

「ああ、紹介するよ。俺の近所で暮らしてる城戸 正史さん。OREジャーナルって会社で新聞記者やってる人で、今日のお祭りも取材しに来てくれたんだ」

「どうも！」

「……なあ颯太。その人達は？」

「秋山 蓮二さんと、細波 華乃さん。城戸さんの知り合いらしくてさ」

「知り合い……か。馴れ合ってるつもりはないが、まあ良い。それでそいつが、城戸の言ってた知り合いか」

「榊原 大地です」

大地が軽く挨拶すると、蓮二と華乃も軽く頭を下げた。

「小雪の事も紹介しとかないとな。こっちは姫河 小雪って言って、僕の幼馴染み」

「初めまして。姫河 小雪です」

「小雪ちゃんか。よろしく！」

「小雪……、スノー……？」

華乃が何故か小雪の名を呟いたが、誰も聞こえなかった。

それから話題は、祭りで主役を演じていた大地の事に移った。

「でも大地君、とつてもカッコ良かった。毎年ああやって頑張ってるんだね」

「いや、まあ本格的にああいう事やりだしたのは去年からだけどな。基本的には兄貴が全部やってたし」

「えっ？ 大地君、お兄さんがいたの？」

「ああ。5つ上のな」

「そうなんだ。でもそのお兄さんってどこにいたの？ 大地君がいた舞台の上にそんな人なんて……」

「！ 小雪……！」

不意に、大地の兄である律木の事を聞こうとした小雪に対し、事情

を知っている颯太は止めようとした。が、大地は首を横に振って颯太を落ち着かせた。

「良いんだ、颯太。別に隠す事でも無いし」
「でも……」

颯太だけでなく、正史もまた事情をよく知る人物であり、戸惑いの表情を浮かべていた。小雪が困惑する中、蓮二が後を引き継ぐように質問した。

「お前の兄に、何かあったのか……？」

「……去年の今頃なんだけど、突然兄貴が俺達の前からいなくなっただんだ」

「「……………」」

衝撃的な一言に、小雪は驚き、蓮二と華乃は驚きこそしなかったが、僅かに目を見開いた。

「警察も探してくれたんだけど、結局手がかり1つ見つからなくてさ。それで半年前から探すのを止める事になって、それで俺が兄貴の代わりに祭りに出てるんだ」

「そう、だったんだ……。ごめんね、大地君。嫌な事思い出させちゃって」

「別に謝らなくても良いって」

大地はしょんぼりした小雪を、慰めるように言った。

「それからなんだ。俺がこうやって祭りに出て仕事するようになったのは。毎日似たような事の繰り返しでさ。結構退屈だったんだ」

「なるほど。あの時の君の表情はそれが理由だったのか」

不意に別方向から声が聞こえてきたので、一同は一斉に振り返った。そこにいたのは仮面ライダーライアの変身者、手塚 海森だった。どうやら少し前から物陰に隠れていたようだ。

「手塚さん……」

「すまない。盗み聞きするつもりは無かったんだが、祭りの事もあつて見に来た時に偶然な」

「お前……」

「こうして会うのは久しぶりだな」

現れた手塚を見て、蓮二が複雑そうな表情を見せた。皆は知る由も無いが、かつてライアはナイトの教育係を務めており、その際に互いの素顔を目撃した事があったのだ。

「あれ？ 2人とも知り合い？」

その事を知らない正史が尋ねてみたが、蓮二は黙り込み、代わりに手塚が自己紹介した。

「まあ、色々とな。自己紹介が遅れたが、手塚 海森だ。出来るなら苗字で呼んでほしい」

「そっか。俺、城戸 正史。よろしく！」

「こちらこそ」

2人は互いに握手しあい、仲を深めた。

「そういえば手塚。さつき大地君の事で何か知ってたみたいだけど」

「ああ。前に一度見かけた時に、退屈そうな顔をしてたから、占って見たのさ」

「占い？」

「俺の趣味でな。結果的にその悩みは解消されたみたいだけどな」

「へえ……。大地君、そんなに深刻な事考えてたのか。俺にも相談してくれれば良かったのに」

「あまり心配かけさせるわけにはいきませんでしたから、つい……」

大地がそう呟いたその時だった。

不意に所持していたマジカルフォンが鳴り出したのだ。その音に、その場にいた全員が反応した。

「おわっ？？」

特に正史は驚きのあまり飛び上がって、ポケットからマジカルフォンがこぼれ落ちてしまうほどだった。

「！ バカ……！」

華乃が注意しようとしたが、大地、小雪、颯太、そして手塚は正史の服のポケットから落ちたマジカルフォンを見て、目を見開いた。

「そ、それって……！」

「あ、こ、これは、その……」

正史がごまかそうとしていると、大地が口を開いた。

「何で正史さんがマジカルフォンを……」

「えっ!?? みんな、これの事知ってるの!??」

「……なるほど、そういう事か」

手塚だけは何かを察して、落ちたマジカルフォンを正史に返した。「占い通りだな。今日、多くの出会いがこの地で訪れる。君もその1人だった訳だ」

「えっ、どういう事だよ?」

「ひよつとして手塚さんがここに来た理由って……」

「ああ。それを確かめる意味もあつてな。しかし、こうも関係者が集まるとは……」

「関係者って……、まさか!??」

「そのまさかだ」

手塚の言葉を聞き、正史は理解した。蓮二や華乃だけではない。他の4人もまた、自分と同様に特別なチカラを得た者である事に。

「嘘だろ……!?? 大地君達も、そうなの……?」

「じゃあ、城戸さんも……!」

「(やっぱりこいつらも……)」

真相が明らかになり、困惑する一同だが、モンスターの出現を知らせる警報は鳴り止まない。このままでは観光客が狙われてしまう。真っ先に手塚が口を開いた。

「とにかく今は、モンスターの殲滅が最優先だ。大地。近くに鏡がある所に案内してくれ」

「はい! こっちです」

大地が案内した先には、最初に大地が変身してモンスターと戦う際に飛び込んだ鏡があった。

先ず最初にアクションを起こしたのは手塚で、カードデッキを鏡にかざした。

「変身!」

右腕を突き出し、人差し指と中指を立ててからVバックルにはめ込むと、鏡像が重なり、ライアに変身した。

続いて、正史と蓮二がポーズをとって同時に叫んだ。

「変身！」

龍騎とナイトの姿を見て、大地はアツと叫んだ。

「城戸さんが、龍騎だったのか……！」

それに続いて、華乃がマジカルフォンを手に持ってタップした。

「変身」

そして彼女は光に包まれて、忍者姿の魔法少女『リップル』に変身した。それを初めて見た一同の反応は様々だった。

「やっぱり華乃ちゃんが……！」

「（この人が、リップルだったんだ……）」

「……カッコいい」

続いて変身しようとする大地や小雪だったが、颯太だけは躊躇っていた。それもそうだ。颯太が変身するという事は、ラ・ピュセルの正体が男だと他の4人にバレてしまう事になるのだ。

「？ 颯太君、カードデッキは？」

「……うう（ど、どうしよう……！ みんなの前で変身なんて、そんな事……！）」

「（マズいな……。関係者だと分かってしまっている以上、待機させるようには言えない……）」

ライアが颯太の心情を察していると、颯太の隣に大地と小雪が並び立ち、こう言った。

「そうちゃん、大丈夫だよ！ 私達と一緒に変身しよう！ ねっ！」

「で、でも……」

「心配すんな。俺も小雪もお前の味方だ。もちろん手塚さんもな」

「……！」

颯太はライアの方を見た。ライアが頷いたのを見て、颯太も覚悟を決めた。

「（……そうだ。今はモンスターを倒さなきゃいけないんだ。僕は魔法騎士として最前線で戦わなきゃならない……！ 恥ずかしかってなんかいられない！）ああ、いこう！」

大地と小雪は頷き、大地はカードデッキを鏡にかざし、小雪と颯太はマジカルフォンをタップした。

「変身！」

そして大地は九尾に、小雪と颯太はそれぞれスノーホワイト、ラ・ピュセルに変身した。

龍騎は知り合いが以前共闘したライダーに、リップルは今日出会った少女がチャットで気にかけていた魔法少女になった事に驚いていたが、それ以上に2人とナイトを驚かせたのは、颯太が魔法少女に変身した事だった。

「ええ!?? そ、颯太君が、ら、ラ・ピュセル……!??」

「!??」

「ライダーじゃ、なかったのか……?」

ラ・ピュセルの正体を知り、龍騎とナイトは思わずそう聞き返すほどに驚き、リップルは一瞬だけ嫌悪感を抱いたかのように一歩退いたが、すぐに事情を察知して平然を装った。

「えつと……。そういう、事さ。僕が、ラ・ピュセルなんだ……」

「あ、ごめん。別に変な意味で言ったわけじゃ……」

「とにかく話は後だ。急ごう」

「お、おお。分かった！」

「行くぞ、ラ・ピュセル」

「ああ！」

そして4人の仮面ライダーと3人の魔法少女は鏡を通じてミラーワールドに突入した。

現実世界では人がごった返していたが、ミラーワールドではシンと静まり返っていた。そんな空間内を飛び回る5つの影を、7人は見つけた。

「いたぞー！」

龍騎が指差した先には、剣を持ったジガバチ型のモンスター『バステインガー・ワスプ』と、両手にニードルを持つスズメバチ型のモンスター『バステインガー・ホーネット』、ホーネットと同じ武器を持つ銀色のツチバチ型のモンスター『バステインガー・フロスト』、弓を持つスズメバチ型のモンスター『バステインガー・ビー』、ビーと同じ武器を持つ金色のクマバチ型のモンスター『バステインガー・ブルーム』

がいた。

5体のバステインガーは7人に気づくと一齐に飛び上がって強襲した。

「ハアッ！」

ワспを迎え撃ったのはラ・ピュセルであり、互いに剣を駆使して激しい戦闘を繰り広げていた。

『SWING VENT』

ライアはカードをベントインし、エイの尾を模した鞭型の武器『エビルウィップ』を持つと、ホーネットに向かって振るった。ホーネットはニードルを盾代わりにして攻撃を防いでいた。

『SWORD VENT』

「ダアッ！」

「やあッ！」

一方、龍騎はフロストを相手にドラグセイバーで、九尾はブルームを相手にフォクセイバーで応戦し、互角の勝負をしていた。スノーホワイトも微力ながら、九尾と共にブルームに立ち向かい、パンチやキックを繰り返していた。

そしてリップルは手裏剣を用いてビーに投擲しつつ、短刀とクナイで接近戦を仕掛けていた。ナイトも同じくビーに接近戦を挑み、攻撃をしていた。途中でビーが矢を連続で発射してきたが、ナイトはそれら全てをウイングバイザーで弾いていた。

しかし、どの個体も戦闘力が高く、今までのように易々と倒せる相手ではなかった。

「くっそ……！ こいつら、強いぞ！」

「それでもやらなきゃ……！ このまま逃したら、祭りを楽しみにしていた人が怪我しちゃう……！ それだけは避けなきゃ……！」

「九尾……。うん、その通りだ！」

九尾の言葉を聞き、ラ・ピュセルも元通りの自信を取り戻していた。

龍騎がフロストを蹴飛ばし、フロストが起き上がって龍騎に反撃しようとした時、突然猛スピードで何かが体当たりして、フロストを吹き飛ばした。

「えっ!?？」

「ヤッホー! 張り切ってるねえ!」

「トップスピード!」

ラ・ピュセルが、現れた新参の名を叫んだ。どうやら偶然近くを飛んでいたらしい。

「にしても今日は随分と揃ってるな。ま、祭りがあつたし当然か」

「無駄口を叩いてる場合じゃないぞ。お前も来たなら少しは手伝え」

「わーってるよ。そんなに気張るなって」

ナイトに向かってそう言ったトップスピードは、笑いながら7人の側に降りた。

更に1人増えて戦力が増し、戦況は一気に傾いたと言っても過言ではない。

「よっし! そろそろ決めてやる!」

龍騎はそう叫んで、1枚のカードをベントインした。

『STRIKE VENT』

龍騎の右腕にドラグクローが装着され、ドラグクローファイヤーの発射態勢に入った。すると、それまで他のライダーや魔法少女を相手していた4体のバスターインガー達は一斉に後退し、攻撃されようとしているフロストのもとに集まった。

「あいつら何を……?」

すると、5体は一点に固まって、高速回転を始めた。その勢いは凄まじく、下手に触れば、触れた方が弾き飛ばされそうだった。そして龍騎のドラグクローファイヤーが5体に向かって放たれたが、攻撃が命中したにもかかわらず、5体とも健在だった。

「なっ!?？」

「嘘!?? 全然効いてない!?？」

「タフすぎねえか!?？」

「連携が取れてる……」

そして5体は再び分担して九尾達に襲いかかった。

「お、おい! どうすればいいんだ!?？」

「そ、そんな事言われてもよお……!」

龍騎とトップスピードが焦る中、九尾は軽い身のこなしでワスピの攻撃を回避しつつ叫んだ。

「落ち着いて！ きつと反撃の糸口はあるはず！」

「ここは、僕達も息を合わせて攻撃しよう！ それしかあいつらを倒せない！」

ラ・ピユセルも九尾の意見に賛同するかのように叫んだ。ライアもブルームの攻撃をかわしながら、攻撃手段を考えていた。

「奴らの連携は想像以上に硬い。1つの方向からの攻撃ではダメだ。他方向から攻撃するぞ」

「なら、もう一度同じ状況を作ろう！」

「だが、チャンスは一度きりだ。失敗すれば、逃してしまふ。確実に決めるようにするぞ」

ナイトの言葉に真っ先に反応したのはラ・ピユセルだった。

「なら、僕が先陣を切る！」

「私も、動き回るぐらいなら出来るから！」

「決まりだな！ 俺もスノーホワイトに続くぜ。リップルはラ・ピユセルと一緒に頼むぜ！」

「……ああ」

「挿入歌：果てなき希望」

先にラ・ピユセルが剣を肥大化させて特攻し、トップスピードがラピッドスワローに乗ってその後を追った。リップル、そしてスノーホワイトもそれに続いてバスターインガー達に向かった。

ラ・ピユセルが狙いに定めたのは、ブルームだった。その意図に気づいたリップルは手裏剣を投げ、魔法を駆使してブルームに先制攻撃を与えた。そして剣と弓がぶつかり合い、火花が散った。スノーホワイトとトップスピードは近くにいたフロストやワスピを遠ざけるように動き回った。ビーとホーネットの相手は他の4人のライダーが担当し、ラ・ピユセルやリップルへの妨害を阻止した。

「ハアッ！」

ブルームを押し倒し、ラ・ピユセルは飛び上がってトドメをさそうとして、更に剣を大きくさせた。より重い一撃が来ると予想したの

か、他の4体は一斉に起き上がろうとするブルームの周りに集まった。

「！ 今だー！」

それを待っていたかのように、九尾、龍騎、ナイト、ライアは一斉にカードをベントインした。

『『『FINAL VENT』』』』

「ハッ！ ハアアアアアアア！」

「ハアアアアアア！」

「ウオオオオオオオ！」

「ハアッ！」

龍騎と九尾は気合いを入れてから飛び上がり、ナイトは駆け抜けながらダークウイングと合体して飛び上がり、ライアは後方から現れた契約モンスター『エビルダイバー』の上に乗った。

加えてリップルも両手にクナイを計10本備えて、一斉に放った。

「ダアアアアアアッ！」

「ウオオオオオオオ！」

九尾の必殺技『ブレイズキック』と龍騎の必殺技『ドラゴンライダーキック』、ナイトの必殺技『飛翔斬』、そしてライアの必殺技『ハイドベノン』。更にラ・ピュセルとリップルの攻撃も加わり、他方向から向かってきた一斉攻撃に、さすがのバスターインガー達も防ぎきれず、5体とも同時に爆散した。

「ツシャア！」

「やった……！」

無事にモンスターを全て倒し、ようやく安堵の表情を浮かべた龍騎とスノーホワイト。マジカルキャンディーの獲得数もこれまでと比べて多く、万々歳となった。

一足先に帰還したトップスピードと別れ、一同は現実世界に戻ってきた。

「いや、なんとか祭りを守れたな、大地君！」

「ええ。ありがとう。みんなのおかげだ」

「……ふん。俺はただ、モンスターを倒すために協力しただけだ」

「なんだよ、もつと素直になれよ。トップスピードも言っただけだろ？」

「うるさい……！ あいつと同じ事を言うな……！」

「またまたあゝ」

「(ますますトップスピードに似てきたな。マジで鬱陶しい)」

蓮二がそっぽを向いてそう呟き、正史が肩をつついてしている様子を見て、華乃は心の中で舌打ちした。

その様子を苦笑しながら見つめていた大地達だったが、不意に颯太が顔を赤くしながら声をかけてきた。

「あ、あのさ……。僕の事なんだけど、ここだけの秘密にしておいてもらえると……」

「ああ、その事？ 別に気にしてないよ。カツコよかったしさ。俺は全然アリだと思っよう」

「……まあ、秘密にはしといてやる」

「……私もそれで構わない」

「ありがとう、みんな」

颯太が精一杯感謝すると、本殿の方で人々がざわつき始めた。どうやらまたイベントが始まるようだ。

「次は君の両親が出るってやつだな」

「ええ」

「おっしやあ！ みんなで観に行こうぜ！」

「はい！」

「おい！ また俺を引っ張るつもりか！ 離せ！」

「こうでもしなきゃこないだろ」

「このバカが……！」

文句を呟きながらも、蓮二はそれ以上抵抗する事なく正史と共に本殿に向かった。それに続いて、大地達も笑いながら（華乃だけは無表情で）2人の後を追った。

お祭り騒ぎの夜は、まだまだ終わらない。

15. 女騎士は悩む（前編）

「……………」

魔法少女ならぬ魔法騎士『ラ・ピュセル』は、待ち合わせ時間よりも早く、鉄塔の上で座禅を組み、深呼吸をした後、心を無にして自分の世界に没頭した。いわゆる精神統一というものである。

なぜ彼女がこのような事をするようになったのか。その原因は、1ヶ月ほど前にチームに加わった、幼馴染みの姫河 小雪が変身するスノーホワイトにあった。

改めて説明すると、スノーホワイトの魔法は『困っている人の心の声が聞こえるよ』というものであり、普通なら絶対に聴き取れないであろう音まで余さず拾ってしまうという、極めて扱いの難しいものであった。

もちろん魔法少女や仮面ライダーも例外ではない。

そして忘れてはいけないのが、ラ・ピュセルの正体が中学生男子の岸辺 颯太である事だ。中学の男子というものは人生の中で最も性的な事に触れて、関心を持つ機会が多い世代だ。つまり、どんな聖人君子でも、桃色の邪念が渦巻いていてもおかしくない。それは颯太自身もそうだし、親友の大地もそうに違いないと確信していた。

つまり、ラ・ピュセルが今現在抱えている悩みはただ1つ。スノーホワイトに、自分が疚しい事を考えている事がバレってしまったら、そこで自分の魔法少女人生はジ・エンド。それだけは是が非でも避けたいと思っているラ・ピュセルは、今宵も精神統一に励んでいた。

颯太自身、アニメを視聴していた時はそれほど気にしていなかったのだが、いざ自分がその立場になった時、大変困った事があった。

露出度の高さである。

一番身近な例を挙げるなら、スノーホワイトだ。張り切って活動しているのは喜ばしい事なのだが、跳んだり跳ねたりするのが主だっているにもかかわらず、スカートは短い。なのでブーツとスカートの間の肌色部分について目がいつてしまうのだ。同じチームメイトの九尾とライアも男なのに、よくその辺を気にしないなあ、と不思議に思うほどだった。

普通に考えれば、女子同士何でその事を気にする必要があるのか、と結論付けて終了、となるのだが、ラ・ピュセルの場合はそうはいかない。

しつこいようだが、ラ・ピュセルの正体は男だ。まさか魔法少女の中に男が混ざっているなど、誰が想像出来ようか。

スノーホワイト以外にも、警戒心が薄いのか、露出を気にしない魔法少女はそれなりにいる。

例えばトツプスピード。

彼女は魔法の箒『ラピッドスワロー』に跨って空を飛びながら行動するのが主流だ。空を飛ぶという事は必然的に下から見上げられる危険性が高くなる。おまけにスカートはスノーホワイト以上に短い。何をするにしてもスカートの中が見えてしまいそうで、常にドキドキさせられている。加えて本人はフレンドリー気質であり、やたらとハグしたり、肩を組んだりとボディタッチしてくる。背中や肩はもちろん、稀に尻を叩いてくるので密着状態になる事が多く、その度にラ・

ピュセルの頭の中は真っ白になる。

トップスピードは最近入った新人の龍騎と、ベテランのナイト、さらにナイトに指導してもらっていたリップルの3人と共に行動している。その中でリップルは元ネタが忍者であるにもかかわらず、肩や臍、太ももを大胆に露出している。いつも本人がピリピリした雰囲気、太ももを大胆に露出している。いつも本人がピリピリした雰囲気を漂わせているため、さすがにジロジロと眺めるような自殺行為には走ろうともしないし、そんな機会はない。ないのだが、つい先日ライアと会話していた際にトップスピードが3人を連れてやってきた時の事だった。偶然話題が『魔法少女のコスチューム』に及んだ際、トップスピードがラ・ピュセルの腰から生えていた尻尾を握ったのだ。単に感触があるのかを確認したかったのだろうが、その行為はラ・ピュセルを大変慌てさせて、後ろに転びかけた。思わず手を伸ばすと、近くにいたリップルの腹に手が当たってしまった。その時の感触を、ラ・ピュセルは未だに忘れていない。とにかく柔らかく、とにかく滑らかだった。それからすぐにリップルに謝罪したのは言うまでもない。その場ではトップスピードの方が悪いという事でリップルとナイトは、ラ・ピュセルではなくトップスピードを叱ったわけだが、ラ・ピュセルは心の中で色々とし訳ない気持ちでいっぱいになった。

その一方で、門前町の辺りで活動しているルーラチームは、割と安心出来る魔法少女が多かった。ルーラチームには、リーダーを含む5人の魔法少女が属しているが、ルーラ本人は全くといっていいほど露出していない。極端に言えば、シユツとし過ぎていて微笑まじさしか感じられない。もちろん本人の前で言えば説教待ったなしなので、口が裂けても言えないのだが……。

仲間であるミナエルとユナエル、2人合わせて『ピーキーエンジェルス』と呼ばれる双子の天使系魔法少女もまた露出とは程遠く、どち

らかとうとマスコットキャラクターに近いものが感じられた。もう一人、たまと呼ばれる魔法少女がいるのだが、名前からも察せる通り、チャットでの受け答えや挙動、アバターの容姿も犬にしか見えな
いものがある。

だからルーラチームはジツと見てても安心出来る。……かと思いきや、現実是非情だった。ルーラチームにも、露出度が極端に高すぎる魔法少女がいたのだ。

スイムスイムと呼ばれる、白のスク水系魔法少女である。

チャットで初めてアバターを見た時は何ら感慨も抱かなかった。せいぜい真夏の体育の授業で見かける衣装を着た少女ぐらいの評価だった。そんなスイムスイムの実態を知るきっかけになったのは、道に迷っていたお婆さんの手を引いて門前町まで案内した時の事だった。ルーラの事も知っていたので、お婆さんを案内し終えてからすぐに退散しようとしたのだが、そこで運悪くルーラに見つかってしまった。「私達の庭に無許可で足を踏み入れるとは何事だ」という理不尽な説教をくらっている最中、騒ぎを聞きつけてやってきたのは、ルーラチームに属する仮面ライダーの、ベルデとアビス、そして魔法少女のスイムスイムだった。そこでスイムスイムの全体像を初めて見た瞬間、悲鳴を押し殺した。

……とにかく大きかった。明らかにバランスが取れてないほどに。それが第一印象となり、ラ・ピュセルはルーラの小言がまるで耳に入らないほどに頭がクラクラしていた。気づいた時には後から駆け付けた、ラ・ピュセルの教育係であるライアがラ・ピュセルに代わって謝っている姿が見えた。

そんなルーラチームと敵対している危険な魔法少女、カラミティ・メアリの姿は1度だけ遠目で目撃した事がある。その時は港の方で用事があつたらしく、いかにも怪しげな男達を引き連れて歩いてい

た。その頃はまだラ・ピユセルも魔法少女になりたてだったのでカラミティ・メアリの危険性を知らず、何か悪い取引でもしようとしているように見えたので、同じ魔法少女として咎めるべきか、と思って覗いてみたのだが、その姿も異常だった。上半身はヒョウ柄を使った面積の狭いビキニ、下半身は薄く短いスカートであり、何よりも特徴的だったのは、その体型だった。スイムスイムと互角、あるいはそれ以上かもしれない。どちらが勝つか分からないな、と考え込んでいたせいで、気づいた時には見失っていた。(後にライアから注意され、2度とその近辺に近づかないようにした)

そんな中でもとりわけダークホースとも呼ぶべき存在だったのが、ねむりんだった。もつとも彼女とは現実ではなく、夢の中で会ったぐらいだ。夢の中でもねむりんは気持ちよさそうに寝ており、起こすのもかわいそうに思えたラ・ピユセルはそのまま見届ける事にした。しかし時間が経つにつれて、上半身パジャマに下半身靴下だけという服装はかなりの破壊力をもつ姿だと気づいた。時折寝返りを打つ度に艶かしい素足やその奥が見えそうになって、どうしよう起こした方がいいのかいやしかし、と考え込んでいる間に目が覚めた。汗びっしょりだった。

……そもそも、ラ・ピユセル自身も他人のコスチュームをとやかく言える立場ではないのだ。下半身の装甲が水着や下着に等しいレベルなので、鎧らしきところが皆無なのだ。こんな事ならゲーム内のアバターもちゃんと鎧でガッチガチに固めておくべきだったと後悔しているが、それももう後の祭り。

ライアの紹介で知り合ったシスターナナに会う時も、「あなたはずれ露出度がそんなにも高いのですか？」と指摘されないか心配だったが、それもすぐに解消された。なぜなら、シスターナナ自身も修道女をモチーフにしているにもかかわらず、ノーズリーブでスカートには長いスリット、豊満な胸をベルトで強調し、白いストッキングをガーターベルトで吊っているという、謎の露出をしていた。背徳感のあるその姿を見て、ラ・ピュセルはいつも心を悩ませていた。

それに比べ、彼女の相手とも言えるヴェス・ウインタープリズンは何ら露出していなかった。黒いロングコートやマフラーを身に纏ったその姿は、冬場なら一般人の中に混ざっても『綺麗な人だな』レベルで全く不自然なところはなかった。

だがこの露出度の少なさが、時として想像以上のギャップを生み出す事を、ラ・ピュセルは思い知らされる事になった。事の発端は、シスターナナやウインタープリズンに加え、女性ライダーのファムと、颯太にとって恩師にあたる香川が変身した（という事実を後日九尾とスノーホワイトから知らされた）仮面ライダーオルタナティブ、そしてライアとラ・ピュセルの6人がビルの上で雑談する機会があった時の事。急にわか雨が降ってきた際、ライダー達は装甲で覆われているので何ら問題なく、ラ・ピュセルも濡れる事をさほど気にしていないが、ウインタープリズンはその優しさ故に、隣にいたシスターナナの頭に自身のコートを脱いで、かけてあげた。その時、ラ・ピュセルは目撃してしまった。普段はコートに覆われて気づかなかったが、その体は薄手のセーターを通して均整の取れた肉付き、特に形の良い胸回りが見て取れたので、ラ・ピュセルは絶句とともに慌てて目を逸らした。

このように、ラ・ピュセルにとって魔法少女達は危険な存在であり、疚しい考えを抱かせてしまう事に繋がってしまうのだ。もつとも、そういう事は口に出さなければ何ら問題ない。ラ・ピュセルが最も危惧

しているのはスノーホワイトだ。前述でも述べた通り、スノーホワイトの魔法はかなり扱いが難しく、大雑把な範囲のところでは、心の声は把握できないらしい。が、何らかの拍子で邪な考えを読み取られてしまったら、スノーホワイトは確実に自分を軽蔑する。もつと最悪なのは、それが九尾やライアにも伝染してしまう事だ。それだけは是が非でも避けたいラ・ピュセルは、3人という時は心を無にする事を誓った。

今のままでは、胸に手を当てるだけでオオツと唸ってしまうし、立ち上がって尻を叩いた時に触れた感觸の柔らかさに驚き、思わず手のひらを当てて、沈み込んでいく肉の心地よさに浸ってしまい、誰かに声をかけてもらうまで我を忘れてしまう。

ラ・ピュセルの孤独な戦いは、人知れず続いていたのであった。

「……で、話って?」

「うん。大地君も気づいてるかもしれないけど……」

とある日の放課後。普段のように真っ直ぐ家に帰ろうとしていた大地に連絡を入れてきたのは小雪だった。尋ねたい事があると言われたのだ。なぜ夜にみんなが集まる時ではないのかが気になったが、断る理由もない為、家族に用事が出来たと連絡した後、待ち合わせ場所に指定してきたハンバーガーショップに足を運んだ。店の前で合

流した後、適当に料理を注文し、席に座って一口含んだところで本題に入った。

「実はそうちゃんの事で聞きたい事があったの」

「颯太の……？ あいつがどうかしたのか？」

「ほら、私の魔法って困ってる人の心の声が聞こえるってものでしょ？ ここ最近そうちゃんと会う度にね、スノーホワイトに自分の考えを読まれたら困るって心の中で呟いてるの」

「ほお……」

「ほら、覚えてる？ この間2人で早く鉄塔についた時に、そうちゃんが1人で怖い顔して座って待ってた時」

「ああ、あったなそれ。……そういや前も、変なポーズしてたり、剣をデカくしてやたらと振り回してたな」

「そ、そうなの……？ じゃあそれも知られたくない事と関係あるのかな？」

「さあな」

大地からの新情報に、ますます首を傾げる小雪。

「同じ魔法少女だし、力になってあげたいけど、悩んでる事が全然分かんないし、無理に理由を聞き出すのも気が引けちゃって……」

本気で心配している小雪を見て、颯太も罪な奴だな、と思ってしまう大地であった。それから顔を上げた小雪がこんな事を言った。

「それでね。昨日寝てたら、ねむりんが夢の中に出てきたの」

「ねむりんが……？」

ジューズを一口飲んだ後、大地は小雪の発言を聞いて目を丸くした。

パジャマ姿の魔法少女『ねむりん』の魔法は、『他人の夢の中に入る事ができるよ』であり、文字通り夢の中で人助けをしている事をチャットのやりとりで知っていた。

「ねむりんって夢の中でも気持ち良さそうに寝てたの。風邪ひくかもって思って起こしたらね、そうちゃんの事で悩んでたのがバレて、正直に話したの。そしたら……」

『ここでねむりんがお悩み解決してあげられたらカッコいいんだけど

ねえ……。対人関係のお悩み相談はねむりんの適用範囲外なので……。というわけで、他の誰かに相談してみたらいいと思うよ。1人じゃ解決出来ないものっぽいし、ねむりん以外の誰かならきつと良いアイデア出してくれるよ。あそうだ、先ずは一緒にいる九尾にでも聞いてみたら……。?』

「……で、そうちゃんがない時に相談しようって思ってた」

「完全に投げやりだなオイ」

ねむりんに対応に対してそうツッコむ大地。とはいえ、ねむりんの意見も一理ある。なにせ大地と颯太は小学一年生の頃からの付き合いなのだ。小雪は幼稚園までは颯太という時間が長かったが、小学校の分も計算に入れると、大地の方が今は多い。が、そんな大地をもつてしても、返答に大変困り果てた。

「ううくん……。俺も中学に入ってからそんなに会う機会なかったしな……。今でこそよく話すようになったけど、さすがに何を悩んでるのかまではサツパリ……。」「そっか……」

少し残念そうに俯く小雪を見て、さすがに放っておけないと思った大地は声をかけた。

「よし、分かった。俺も手伝う」

「本当!?? ありがとう!」

「とりあえず他の人に、こういう時どうすつか聞いてみるか。俺も正直、カウンセリングっていうの……。? そういうのやった事ないしな」

「うん。でも、誰に聞くの?」

「ライアはまだ夜まで忙しいみたいだから後回しにして……。龍騎がいるチームの所にコンタクトとってみるか」

2人が今後の方針を決めていたその時だった。

「あ! 小雪じゃん!」

「こんな所にいたんだ」

「! よっちゃん、スミちゃん」

小雪が寄ってきた2人の少女の顔を見てアツと声をあげた。大地

も2人を見て、いつも小雪と一緒にいる2人組だと悟った。

「ねえスミ。この人、こないだバスにいた子じゃない？」

「あ、ほんとか。小雪い、あんたいつの間にも彼氏作ってたのよお。おまけにデートまでしちゃってさ」

「か、彼氏?!? ち、違うよよつちゃん! そういう関係じゃ……!」

顔を最高潮に紅くした小雪は、慌てて食べかけのハンバーガーをカバンにしまって大地の手を引っ張った。

「ほ、ほら大地君、行こう!」

「あ、ああ」

大地は困惑しながらも、小雪と共に店を後にした。その後ろ姿を、2人は呆然と見つめていた。

「何気にむつちや良さげなムードだったね」

「あの大地って子。顔はまあまあイケてたけど、小雪のタイプって感じしなさそう。なんか向こうは全然その気じゃないっぽいし」

「ほおほお。他人に言えない悩みねえ……」

「はい。あと一緒にいない時の様子もおかしくて……。なんていう

か、良心の呵責に耐えてるような」

「ふーむ。魔法少女関係じゃなくて私生活の方か？」

「多分……。魔法少女に変身してる時は、大体4人で一緒にいますから」

店を出た2人はマジカルフォンで龍騎達に約束の取り付けをしたところ、今からでもOKと言われたので、即座に変身後、龍騎達が集合場所としているビルの屋上に向かった。そして現在、九尾とスノーホワイトは龍騎、そしてトップスピードに相談をしていた。その傍らではナイトとリップルが黙って聞いていた。

「家族の事とか、友人関係とかの線が濃さそうだけど……。お前らとラ・ピュセルって前から顔見知りだったんだろ？ 思い当たる節ないか？」

「それはあまり無いですね……」

「うーん。俺もラ・ピュセルの変身者の事はちょっとだけ知ってるけど、そんなに家族の仲って悪いって話は聞いてないよ。九尾もそうでしょう？」

正史……。もとい龍騎の問いに九尾も頷くしかなかった。

「最近はどういった事以外で付き合いがなかったからな。ただ、友人関係だと俺の知らないところでトラブってる可能性もなくは無いかもな……」

「じゃあアレだ。悪い友達がいるとか」

「えっ……？」

トップスピードの意見を聞いて、スノーホワイトの顔色が変わった。

「仲間の顔潰さない為に悪事付き合うってのはよくあるんだ。社会に出て揉まれればもうちょい変わるんだけど、中高生くらいのガキは、考え方にしてもやり方にしても、柔軟さがねえんだよな」

「そ、そんな……」

ますます想像を膨らませて、たじろぐスノーホワイト。

クラスメートの男子が仲間内で悪ぶってみせたりしているのを思い出し、もしかしたら同じ中学生男子である颯太にもその兆候がある

のではないかと考えた。

「あいつがそんなワルと付き合う姿は想像できないけど……」

九尾は腕組みしながらそう呟くが、あまり接点が少なくなっていた大地ではあてにならない。

そんな子と付き合っていたら、何れ魔法少女が幼稚に見えてバカらしく思い、魔法少女活動をやめてしまうんじゃないか。また1人だけ置いてかれる事を想像してしまったスノーホワイトは眉に力を入れた。

思えば、颯太と離れて以来、1人で魔法少女アニメを観るようになった時、真っ先に感じたのは孤独感だった。思い出すだけでも涙が零れそうになる。

「……そうちゃん。魔法少女、辞めちゃうのかな」

「！ そんな……！」

「おいおい。魔法少女を辞めるなんて一大事だな。そんなにヤバい事になってたのか」

「いや、まだそこまでは断定出来ないけど……」

龍騎とトップスピードが深刻そうに呟いたのに対し、九尾は落ち着かせるように言ったつもりだが、2人は勝手に話を進めた。

「うっし、大体分かった！ 俺もいざとなったら一肌脱ぐから、あんま心配すんな」

「俺もだ！ 同じ仲間だし、何か困ってたら、いつでも助け合うのがライダーや魔法少女だからな！ そうだろ、ナイト、リップル！」

「……チツ。私達に話を振るな」

突然龍騎に話しかけられたリップルは舌打ちしてそう呟き、ナイトも肩を竦めて言った。

「俺は降りるぞ。そういうのはおれの得意分野じゃないからな」

「つれないなあ。ま、そういう事だ。少なくとも俺や龍騎はちゃんとお前らの味方だから。せっかくだし、他の意見も聞いといた方がいいんじゃないか？ シスターナナとか、オルタナティブ辺りなら相談に乗ってくれるだろ」

トップスピードの意見を聞いて、2人も納得した。確かにシスター

ナナなら嫌な顔1つせず相談に乗ってくれるはずだ。加えてオルタナティブは、颯太の恩人でもある香川が変身したライダーだ。教え子が困ってるならきつと良いアドバイスがもらえるかもしれない。

2人は早速オルタナティブ達に連絡を入れた。今の時間ならまだ日も沈んでないので、ギリギリ間に合うはずだ。程なくして許可が出たので、2人は龍騎達にお礼を言い、オルタナティブ達が拠点としている場所へ直行した。

2人の後ろ姿を、手を振りながら見送っていた龍騎とトップスピードだが、不意にナイトは気になっていた事をトップスピードに質問した。

「トップスピード」

「ん？ 何だ？」

「さつき悪い友達がいるんじゃないかと言った後、やけにそっちの方面に詳しそうだったが、経験あるのか？」

「まあ、ね。こう見えて実はちよつとそういう非行に走ってた時期があつてさ」

「え、マジで!?!？」

トップスピードの意外な一面を知って、驚きを隠せない龍騎であった。ただ、リップルだけは普段の口調から、何となくトップスピードが以前から、バカ故に正しい道から逸れていただろうと察していた。

「なるほど。それで私達に相談を」

「はい」

「思春期の悩みって感じね」

辺りも暗くなった頃、2人はオルタナティブ達が拠点としている廃れたボウリング場で事情を説明した。

「不良と付き合いがあつて、悪い道に誘われてるかもしれない。魔法少女も辞めちゃうかも……」

「いやちよつと待てスノーホワイト。なんか話に変な方向に大きく膨らんでる気がするぞ?」

「えっ? そうかな?」

当初の本題に尾ひれがついていそうに思えた九尾はスノーホワイトにそう告げた。

そんなやりとりを気にする事なく、全ての事情を知ったシスターナは口元に手を当てて痛ましげな表情を浮かべ、隣のウィンタープリズンに目を向けた。

「ウィンタープリズンはどう思います?」

「え? 私?」

唐突に問われたウィンタープリズンはしばし目を細めた後、深く息を吐いてから話し始めた。

「良くない事を考えてしまう時は、体を動かした方がいい。汗だくに疲れてしまえば、良い悪い以前に何も考えなくなってしまうものだから。私も経験上、運動部に所属していたからそういう方法でどうにかしてた」

「ストレス発散も兼ねて、ですか……。でもそれならラ・ピュセルだつて剣を振り回したり激しいストレッチしてたりして、体を動かしてる方ですけど」

「そうか……。まあ、何だったら私が胸を貸してやってもいい」

「こういう感じで良いのか?」 と言いたげな表情をシスターナナに

向けると、当の本人は口元から手を外し、急に表情を引き締めた。それを見て思わず九尾とスノーホワイトも姿勢を正した。

「良いですか？ 人は誰しも悪魔のささやきを耳にする事があります」

「悪魔のささやき……ですか」

「ズルをすれば楽になる。暴力を振るえば気分が良い。……そんなささやきに耳を貸せば、人はどこまでも墮落していくでしょう」

「いや、そこまで壮大な話になつては……」

九尾は疑問を抱きながら口を開くが、シスターナナの話はそこで終わらない。

「事実、私もよく悪魔にささやかれてるのですよ。欲望の海に飛び込んでしまえと」

「え？ シスターナナが？」

「ダイエツトをしなければならぬのに、このお菓子は美味しいぞ、と悪魔がささやくのです」

「あ、そういう事ね。それなら何度か見かけた事あったわ」

それを聞いてスノーホワイトとファムは思わず笑い、シスターナナもおっとり微笑んだ。オルタナティブと九尾も仮面の下で笑みを浮かべていた。

若干空気が柔らかくなったところでシスターナナは話を進めた。

「悪魔とは自分、ささやきもまた自分自身の心の声なのです。きつとスノーホワイトならこの言葉の意味がよくお分かりになるでしょう」

「はい。ちよつと分かる気がします」

「心に悪が芽生えようとしている時は、大切な人の顔を思い浮かべるのです」

「大切な人の顔？」

「ええ。不善を為せば自分の事だけでなく、大切な人を間接的、直接的に巻き込んでしまうという事でもあります。例えば犯罪を犯した時、矢面に立たされるのは自分自身ではありません。家族や恋人が受ける傷は本人より大きなものになるでしょう」

「ははあ……」

中々に理解し難い箇所もあつたが、シスターナナの主張は正しそうに思えた。よく立てこもり犯を説得する為に親などの親類が呼ばれて拡声器を通じて声をかけたりするドラマのシーンがある事を考えると、間違つてはいなさそうだ。

ところが、九尾やスノーホワイトが颯太をどう説得しようか考えている間にも、シスターナナの話はヒートアップしてきた。

「私なら真つ先にウインタープリズンを思い浮かべますけどね」

「待ちたまえ。ナナは悪い事なんてしないだろ」

「例えばの話ですよ。では、ウインタープリズンは誰を思い浮かべますか？」

「そんなの言わなくても分かるだろ」

「うふふっ」

「あはは」

「(……あ、さすがにこれ以上は関わっちゃマズそうだな)」

九尾の心の声を聞いたスノーホワイトも苦笑いしながら頷き、オルタナティブとファムもシスターナナとウインタープリズンのいちやつきを放つておいて、4人は外へ退散した。

「ありがとうございます」

「こちらこそ。久しぶりに他の人と話せて楽しかったわ」

「じゃあ、俺達はこの辺で。一回家に戻らないと」

「そうですね。それじゃあ、私からもラ・ピュセルの説得に関して、1つやり方をお教えしましょう」

オルタナティブが提案した説得手段を聞いて、九尾とスノーホワイトは感心した。確かにそれなら颯太も心を開いてくれるかもしれない。ライアへの相談も控えながら、2人は一旦各々の自宅に戻り、いつものように鉄塔に集合し、活動に専念した。

16. 女騎士は悩む（後編）

「ハア〜……」

部活でクタクタになりながら、颯太は自宅までの道のりを歩いていた。颯太は大地と違ってバスで通っているわけではないので、疲労度は半端ではない。

いつそこかで変身して自宅まで跳躍すれば早いのでは……と思いい、ポケットの中のマジカルフォンに手を伸ばそうとする颯太だったが、そこで再び羞恥心がよぎって、颯太は躊躇ってしまふ。

すると、彼のもとに歩み寄る人影があった。

「やあ。部活で頑張ってるようだな」

「……あ、手塚さん」

それは、カバンを肩からかけている手塚だった。占いの仕事を終えて帰宅する途中だったのだろう。そんな彼は、挨拶をした颯太の顔を見てこんな事を言った。

「自分の今のあり方で悩んでるようだな」

「えっ……」

「隠さなくても良い。そういった悩みはその立場になれば誰だって抱えていそうなものだ」

「……何？」

手塚の言い方からすると、自分の考えがバレているに違いないと、内心焦りを隠せない。

「誰だって疚しい事はよぎるものさ。だからまあ、自分だけで解決出来ないような悩みは、周りからの言葉に耳を傾けるのもアリだ。俺がそうやって誰かの運命を変えようとしているようにな」

「……」

誰かに相談する。確かにそれが一番手っ取り早い方法かもしれないが、まだ心のどこかで躊躇う自分がいる。黙り込んで葛藤している颯太の様子を察した手塚は、ポケットからマッチを取り出し、火をつけると、颯太に向かって照らすようにかざして、その炎をジッと見つめた。颯太が目を丸くしていると、火を消した手塚はこう告げた。

「どうやら俺が心配するまでもなかつたな」

「？」

「このまま家に真っ直ぐ帰る事をお勧めする。そこでもう一度自分自身と向き合う事になる。でも、気をしっかり持つ事を忘れるな。そうしていれば、お前はこれから堂々としていられる」

「は、はい……」

言われた通りに、颯太は手塚に別れを告げて再び家に向かって歩を進めた。

そんな後ろ姿を微笑ましく見つめていた手塚だったが、不意に表情を険しくしてポケットの中のコインを見つめた。

「(それにしても、さつき占いで出た、『もう直ぐ俺達の運命が大きく変わる』という暗示……。颯太の件とは直接関係はなさそうだが、気になるな……)」

「ただいま」

玄関の扉を開けて靴を脱ごうとした時、颯太の母親が出迎えてくれる事に気付いた。何故か顔がニヤついているので、颯太は不審げに眉をひそめた。

「お友達、来てるよ」

「えっ？」

ふと足元を見ると、家族が履く靴に加えて、見た事のない靴が4足。つまり家族以外の誰かが2人来ている事になる。こんな時間に誰だろうと思いつきながら、階段を上がり、自分の部屋の扉を開けた先には、少女が座って待っていた。

ベッドの前に客用の座布団を敷いて待機していたのは、幼馴染みと親友だった。親友は2年ぶりに、幼馴染みは実に6年ぶりに迎え入れる事になるが、2人同時というパターンは初めてだ。

「よう、お疲れ」

「そうちゃん、お疲れ様」

「あ、ああ……じゃなくて！ 何でお前らがここに!?!?」

劳いの言葉をかけた、顔見知りの2人がいる事に驚いている颯太に対し、小雪は間髪入れずに本題に入った。

「最近さ、そうちゃんずっと同じ事考えてるでしょ、その事で」

「(ば、バレてる……!?!?)」

いつになく真剣な面持ちで語りかける小雪を見て、颯太は血の気が引くのを感じた。壁にもたれている大地がこの場にいるという事は、当然彼も小雪と同じ考えを抱いているとみて間違いない。

嗚呼、終わった。全てが終わった。扉を閉め、ベッドに荷物を投げると、倒れこむように2人の前に座り込み、軽蔑の眼差しを覚悟して項垂れた。

「(少しは効果あったかな……)」

大地は黙って颯太の動向をチェックしていた。

そう、これこそが昨晚香川改めオルタナティブから教えられた、颯太を説得する方法だった。変身せずにありのままの姿同士で語り合えば、多少は警戒心が薄れた状態から彼の心情を暴き出せる。ラ・ピュセルとこれからもずっと魔法少女を続けていくために、親友の悩みに少しでも応えられるように、最善を尽くす為に今日、2人は実行に移した。

しばらくの沈黙の後、口を開いたのはまたしても小雪だった。

「ねえそうちゃん。魔法少女を続けたって思ってる?」

その声色には、颯太が覚悟していたほど軽蔑感はなかった。寧ろ労

わりがあるように感じられる。無論その程度で警戒を解く颯太ではない。

「そうちゃんに何があつたのか、何となく私も大地君も分かっている。中学生くらいの男の子なら、そういうのはよくあるんでしょ？ トツプスピードがそう言ってたよ」

「(ち、ちよつと待って。まさかトツプスピードにも知られてるなんて……)」

彼女に知られてるという事は、必然的に龍騎やナイト、リップルも颯太の件が行き届いている事になる。特にこの3人は、ラ・ピュセルの正体が以前起きたN神社の祭りの最中現れたモンスター退治の際に知ってしまったので、内心ガタガタと震え上がった。

こうなるとどこまで知れ渡っているのか、不安に押し潰されそうになった。

「ねえ、そうちゃん。魔法少女、辞めたりしないよね……?」

表情だけでなく口調からも必死さがありふれている。この時颯太は自分が今、2人から何を問われているのかを察した。これは二者択一を迫られている。

つまり、疚しい考えを捨てるか、あるいは魔法少女を辞めるか。

もちろん颯太も決して好きで疚しい考えを抱いているわけではないのだ。これは男子中学生の本能でもあり、一種の生理現象だ。そういった意味では、何かを探るようにジツと見てくる親友だって同じ立場にある。ただ、問題はそれを小雪に対し、如何にして理解してもらえるか、だ。そもそも颯太自身も上手く説明できる訳ではない。

なので、颯太がとつた行動は、頭を抱え、声を絞り出す事だった。「そ、そりゃあ続けたいよ、魔法少女を。でもどうしようもないんだ」龍騎も、いつでも力になってあげるって言ってたし、トツプスピードもいざとなつたら一肌脱いでくれるって」

刹那、颯太の脳裏には服をはだけさせて、大きくてクリクリした目でジツとこちらを見つめてくるトツプスピードの姿が投影された。が、すぐに頭の中でそれを掻き消した。

「……あ、後ね。揉まれれば柔らかくなるって言ってたよ」

「も、揉まっ!?？」

「いや、何か勘違いしてる気がするから言っておくけど、社会に揉まれれば考え方が柔軟になるって言ってたんだぞ」

「あ、ああ、そういう意味ね……。ありがとう、大地」

大地からの補足説明を受けて、颯太はホッと一息ついた。……と思いきや、小雪は更にこんな事を言った。

「ウィンタープリズンも言ってたよ。悩み事がある時は、体を動かすと良いって」

「う、ウィンタープリズンにまで……。？」

「胸を貸してくれるって」

「(む、胸を……。!??)」

瞬時に思い浮かべたのは、シスターナナの頭にコートを被せた際に目撃した、ウィンタープリズンの形のとれた胸の膨らみ。セーター越しでもハッキリと存在感を放っていたそれを貸してくれるのか……。か……。

「(い、いやいや！ さすがに違うだろそれは！)」

颯太は心の中でそうツッコんだ。胸を貸すという言葉は何も直接的に使うだけが全てではない。そう、言い回しとして普通に使われる表現だ。何をどう勘違いする余地があるろうか。

心配そうに見ている小雪と、黙って顔色を伺っている大地を見て、ある結論に至った。この2人は、自分を試しているのだ。疚しい考えが頭に浮かばないかを確かめる為の試験。もしそれが当たっていたら、まず間違いない合格しているとは言い難い。

最早理性だけでは頭の中を抑えきれなくなった颯太は、苦しげにため息をつきながら口を開いた。

「…………ごめん、大地、小雪。でも、自分ではどうにもならないんだ」

「どうにもならないって、お前一体……」

「諦めちゃダメだよ！ シスターナナもね、悪魔にささやかれる事があるんだって」

もう頭の中で整理する余裕さえ失った颯太の脳裏には、シスターナナの耳元でいやらしげにささやく悪魔が彼女の服をはだけさせ、遂に

はその肢体に手を延ばし……。

『もう一度自分自身と向き合う時が来る。でも、気をしっかり持つ事を忘れるな。そうしていれば、お前はこれからも堂々としていられる』

「(!) そうだ! 僕は何を考えているんだ!」

手塚に占ってもらってアドバイスしてくれた事を思い出した颯太は、激しく首を横に振った。

「そうちゃん?」

「おい、大丈夫か?」

「う、うん。大丈夫だ、問題ない」

颯太が苦笑いしながらも、必死に自我を保ち続けた。それを見た小雪は大地に目を向け、大地は領いて上半身を前に突き出した。そろそろ仕上げの時だ。そう確信した大地はシスターナナに教えられた対処法を忠実に伝えた。

「シスターナナが教えてくれた。心に悪が芽生えそうになった時にどうしたらいいかをな」

そこでわざとらしく咳払いした後、こう言った。

「疚しい事が頭に浮かんだ時は、自分の母親の顔を思い浮かべてみるってな」

「(うつ……!)」

大地に言われた通りに母親の顔を思い浮かばせると、胸の内側であれだけ荒れ狂っていた嵐が瞬く間に静まっていくのを感じた。荒げていた呼吸も、跳ね返っていた鼓動も、全てが平常の数値を取り戻した。

「どう? 効果あった?」

小雪が表情を和らげて聞いてきた。

確かに効果はあった。……が。

「(こ、これはこれでキツイものも……!)」

そう思いながらも2人を少しでも安心させる為に弱々しい笑みを浮かべながら、颯太は2人に向かって頷き、「もう大丈夫だ」と告げた。実に冷めた気持ちで自分自身を客観視しながら。

「これからも一緒に魔法少女でできるね」

小雪は涙を浮かべながら、喜びを露わにした。颯太も作り笑いで喜んでいると、大地が小声で話しかけてきた。

「……中々大声では言いにくいけどさ」

「……はい？」

「お前アレだろ。何か絶対ヤラシイ事考えてただろ。自分の姿の事かもしれないけど」

何となく見てて分かったよ、と呟く大地の目の前で、颯太は卒倒しかけた。小雪以上に大地は分かっていたのか。颯太は目眩がしそうになったが、すぐさま大地がこう言った。

「もし当たってたら謝るけどさ……。つていうか、そんな事でお前を嫌うわけないだろ。俺だって時々目のやり場に困る事はあるけどさ。いちいち気にしてたら気が滅入っちゃうぞ。もつと堂々としてろよ。ま、何かあったらフォローぐらいはしてやるよ」

小雪は興奮しているため、2人の会話に気付いていない。

そんな中で大地は拳を握って軽く颯太の胸に当てた。それを受けて、颯太は憑き物が消えていくのを感じた。そしてようやく颯太にも笑みを浮かべるだけの余裕が戻ってきた。

「(そうだ。スノーホワイトに考えを悟られる前に、堂々としていればよかつただけなのか)」

何ともシンプルな解決策を見つけ、安堵の表情を浮かべる颯太。

が、悩みが解消して一件落着となったのもつかの間、マジカルフォンからモンスターの出現を知らせる警報が流れた。

「！ そうちゃん！ 大地君！」

「！」

3人は表情を引き締めた。

そして部屋を出てすぐ近くに置かれていた鏡に向かって、大地はカードデッキをかざし、小雪と颯太はマジカルフォンを手に持った。

「変身！」

「挿入歌：果てなき希望」

大地はカードデッキをVバックルにはめ込んで九尾に変身。小雪

と颯太はマジカルフォンをタップしてスノーホワイト、ラ・ピュセルに変身した。そして3人は鏡を通じてミラーワールドに突入し、現場へと向かった。

モンスターが出現した現場では、一足先にライアが到着して戦っていた。

「ふっ！ ハアッ！」

ライアが戦っているのは、サル型のモンスター『デッドリマー』だった。デッドリマーは取り外し可能な尻尾を手に持ち、銃としてライアに攻撃した。おまけにデッドリマーは額にある第3の眼からレーザーで照準を合わせて狙い撃っている。さすがのライアも1人では苦戦を強いられていた。

こちらも武器を使用して戦うしかない。そう思ったライアがカードを取り出そうとした時だった。

「ハアッ！」

突然デッドリマーの背後から飛び蹴りが炸裂し、デッドリマーは地面に伸びた。そしてライアの傍らに降り立ったのは九尾とスノーホワイトだった。どうやら2人が同時に飛び蹴りを入れたようだ。

「オオッ！」

更に上空からラ・ピュセルが降下してきて、デッドリマーに向かって剣が振るわれた。デッドリマーはギリギリのところまで回避して起き上がると、銃口を4人に向けた。

『SWORD VENT』

放たれた弾丸を器用にかわしつつ、九尾はフォクセイバーを出して、デッドリマーに斬りかかった。

その間に、ライアはラ・ピュセルの顔色を伺った。その姿からは、普段通りの凜々しさが感じられた。

「悩みは解決してみたいだな。良い顔をしている」

「やっぱり君の占いは本物だね、ライア」

「俺の占いは当たるからな」

ラ・ピュセルは笑みを浮かべると、大剣を持って九尾の援護に回った。ライアもそれに続いて駆け出し、スノーホワイトは3人を見守った。

「ラ・ピュセル、その武器使わせてもらう」

『COPY VENT』

ライアがカードをベントインすると、ラ・ピュセルの持つ大剣からシルエットが飛び出て、ライアの手にかく同じ大きさの大剣が握られた。どうやら対象の武器をコピーする能力のカードらしい。

「ハッ！」

「ふんっ！」

ラ・ピュセルとライアが息のあったコンビネーションでデッドリマーを斬りつけ、翻弄させた。いかに射撃が得意なデッドリマーでもここまで動き回られると、どうしようもない。一旦この場を退こうとして、素早く飛び上がった。

「逃がすか！」

『ADVENT』

だがそれを許すはずもなく、九尾はフォクスロードを召喚し、デッドリマーを羽交い締めにした。デッドリマーはなす術もなく落下し、地面を転げ回った。

それを見たラ・ピュセルはチャンスと捉え、ライアに頼んだ。

「ライア！ エビルダイバーを！」

「分かった」

『ADVENT』

ライアは言われた通りにエビルダイバーを召喚。トドメをラ・ピユセルに任せる事にした。ラ・ピユセルはエビルダイバーの上に乗っかり、指示を出した。

「エビルダイバー！ そのまま一気に進んで！」

エビルダイバーもそれに応えるかのように一旦上昇してから一気に急降下してデッドリマーに突進した。

ラ・ピユセルは向かい風に耐えながら、両手で大剣を力強く握った。
「ウオオオオオオオ！」

ラ・ピユセルは吠えながら大剣を横に構えて、エビルダイバーと共にすれ違いざまにデッドリマーを横一直線に斬り裂いた。その姿はまるでライアの必殺技『ハイドベノン』を彷彿とさせるものだった。

デッドリマーは奇声をあげながら爆散。ラ・ピユセルがエビルダイバーから降りたと同時にマジカルフォンが鳴り響き、マジカルキャンデーを獲得した事を告げた。

「やったあ！」

「やつと、らしくなったな」

「ありがとう、エビルダイバー！」

ラ・ピユセルがエビルダイバーにお礼を言うと、フォクスロードと共にそのままどこかに飛び去っていった。

その後、一同はハイタッチしてから、3人は颯太の家に戻る事にした。靴も置きっぱなしでいきなり帰ってしまったら颯太の家族をビックリさせてしまう。

「それじゃあ、また今夜！」

「……あ、そうだ」

「? どうかしたんですか？」

「……いや、何でもない。また会おう」

ライアは何かを言いかけたが、途中でやめてしまったので、3人はそのままその場を後にした。その後ろ姿をライアはジッと見つめていた。

「まあ、今はラ・ピユセルの件も解決できたんだ。気にする必要もないか」

それから3日後の夕方。

いつものように自宅に戻った大地は、神社の仕事を手伝う為に、仕事着に着替えようとした。

「……………そういや、今度新しい魔法少女が入るってシローが言ってたな。つつーか増えすぎじゃないか？ そんなに魔法少女とか仮面ライダーとか量産できるもんなのか、あのゲーム」

ぼんやりとそう考えていたその時、ベッドに置かれていたマジカルフォンからシローの立体映像が現れた。

「シロー……………」

『諸連絡だ。今夜開催されるチャット会に、魔法少女や仮面ライダーは全員参加してもらいたい』

「何でだ？」

大地が思わずそう聞き返すと、シローはいつになく真剣な雰囲気醸し出すように告げた。

『重大発表があるからだ。それも、今後の君達の活動に関わる、とても重要な内容だ』

「……………重大、発表？」

魔法の国の使いであるシローから告げられた、重大発表をするとう知らせ。

そしてそれは、N市で活動する全仮面ライダー及び魔法少女の運命

を大きく動かす事になろうとは、この時、一部を除いて誰しもが知る由も無かった……。

17. 重大発表

九尾がチャットルームに入った時には、既に何人かの魔法少女や仮面ライダーがそこにいた。

エルフ型の魔法少女、『クラムベリー』に不死鳥の仮面ライダー『オーデイン』、魔女風の魔法少女『トップスピード』、龍の仮面ライダー『龍騎』、忍者風の魔法少女『リップル』、コウモリの仮面ライダー『ナイト』、カニの仮面ライダー『シザース』、修道女姿の魔法少女『シスターナナ』、コオロギの仮面ライダー『オルタナティブ』、黒いコートの魔法少女『ヴェス・ウィンタープリズン』、白鳥の仮面ライダー『フアム』。

既に見知った者もいれば、中には九尾が初めてお目にかかる魔法少女や仮面ライダーもいる。

マジカロイド44：『コンバンハ、レアキャラデス』

ゾルダ：『どーも』

ロボット姿の魔法少女『マジカロイド44』とスイギユウの仮面ライダー『ゾルダ』である。

その後、遅れてスノーホワイト、ラ・ピュセル、ライアがやって来ると、スノーホワイトは真っ先に挨拶した。

スノーホワイト：『こんばんは！ よろしくね！』

トップスピード：『おっす！』

フアム：『ええ、よろしくね』

シスターナナ：『こちらこそよろしくお願ひします』

スノーホワイト：『ところで、フアヴが言ってた重大発表って、何なんでしょう？』

ウィンタープリズン：『さあ……。私も検討がつかない』

そんなやり取りをしているうちに、新たにチャットルームへ入ってくる者が。ガンマン風の魔法少女『カラミティ・メアリ』と、蛇の仮面ライダー『王蛇』である。

チャット内の空気が一変した。というのはい言ひ過ぎかもしれないが、とにかく2人の登場により、それまで賑やかだったチャットルー

ムでのやりとりがピタツと止んだ。特に龍騎は一度2人と対峙している為、警戒心をより強めている。

「(ライアの言ってた通り、みんなから敬遠されているのか)」

2人の良くない噂を既に耳にしている九尾はそう感じた。

その後チャットルームに入ってきたのは、何と総勢10人。中心に立って現れたのは、如何にも女王様の雰囲気醸し出している魔法少女『ルーラ』。その傍らにはカメレオンをモチーフにした緑の仮面ライダー『ベルデ』がいた。その2人の後ろには、瓜二つの天使系魔法少女『ミナエル』と『ユナエル』。犬の姿をした魔法少女『たま』。白いスク水を着ている魔法少女『スイムスイム』。サイをモチーフにした灰色の仮面ライダー『ガイ』。ガゼルをモチーフにした茶色の仮面ライダー『インペラー』。ホワイトタイガーをモチーフにした白と水色が混ざった仮面ライダー『タイガ』。そして以前チャットで出会った事のあるサメの仮面ライダー『アビス』の8名が、子分のようにくっついていた。

「(あれがルーラチーム……)」

そして数秒後にパジャマ姿の魔法少女『ねむりん』が、眠たそうに目をこすりながらチャットルームに入ってきた事で、チャットルーム内は総勢30人の魔法少女や仮面ライダーが密集する区域となった。現実的には全く影響はないのだが、見ていて暑苦しいものがある。

龍騎：『お、多すぎだよな……』

ミナエル：『だよねー』

ユナエル：『だよねー』

トップスピード：『ファヴもシローも何でまたこんな大掛かりな事を』

ラ・ピュセル：『最近チャットの参加者が少ないからって、さっきまで僕達の中では話してたんだけど』

インペラー：『なるほどな』

ゾルダ：『ま、俺は基本こういうのは面倒だからやろうとしないけどさ。シローがどうしてもっていうからな。……それより、肝心の呼び出し主はどうしたの?』

王蛇：『知るか』

アビス：『単に参加者の人数を増やそうとしてあのようにつてる可能性が高いな』

ラ・ピュセルやアビスの言うように、チャットへの参加は強制的ではない。いつの日か、ファヴもシローも、もつと情報交換をしたり、親睦を深めるべきだ、と主張していたが、ほとんど聞く耳を持つ者はいなかったらしい。

スノーホワイトやラ・ピュセル、そしてライアは高い頻度で参加していた。情報収集の為でもあるし、スノーホワイトとラ・ピュセルが魔法少女愛好家という事もある。触れ合う機会を逃すまいとした。当然九尾も半ば強引に参加させられていた。

そんなこんなで話が進むうちに、ようやくファヴとシローがチャットルームに入ってきた。

トップスピード：『おつ、来たきた。おせーぞ』

シロー：『それはすまなかった』

ファヴ：『あれ？ 1人足りない気がするぽん』

シロー：『全員に呼びかけたはずだが、仕方ない。また個別で連絡する事にしよう』

言われてみれば、今度入ってくる新人の魔法少女を除けば、現時点でN市で活動している魔法少女や仮面ライダーは総勢31人と伺っている。にもかかわらず、チャット内には30人しかいない。気にはなったが、今は2匹からの発表を聞く事にした。

ガイ：『でき。重大発表って何？』

ファム：『今度、新しい魔法少女が来るって聞いてたけど、その事と関係あるのかしら？』

シロー：『それもある』

ファヴ：『今回集まってもらったのは他でもないぽん。実はとつても困った事になったんだぽん』

龍騎：『困った事？ 何だよそれ』

ファヴ：『それを話す前に、先ずは要件を伝えるぽん』

そしてファヴが告げた事。それは……。

ファヴ：『この地域の魔法少女と仮面ライダーの人数を減らす事に
したぽん。半分の16人にするぽん』

「……は？」

思わず九尾はそう呟いた。

魔法少女や仮面ライダーの人数を減らす。いきなりそう言われても、理解出来るはずもない。そしてそれは他の魔法少女や仮面ライダー達も例外ではなかった。

ルーラ：『どういう事よ』

トツプスピード：『減らすって、何でまたそんな事に』

ファヴ：『この地域には現在31人存在するぽん』

ユナエル：『つかそんな状況なのに、また魔法少女増えるんでしょ？ 今更半分に減らすとか、何かおかしくね？』

ミナエル：『おかしくね？』

インペラー：『ああ。そうだよな。せめてその魔法少女だけでもどうにかならねえのか？ 辞めてもらうとかさ』

ファヴ：『もう契約して魔法少女になる事を承諾した後だから、今更変更は出来ないぽん』

ベルデ：『んな事よりも。何でそんな風になったのか説明してもらおうか』

ベルデの問いかけに対し、最初にコメントしたのはシローだった。シロー：『32人という大人数は、如何に広大な敷地を有するN市をもってしても、この人数は多すぎだ。武器や魔法の源となる魔力は、その土地に依存すると同時に、限りある資源でもある。人間世界で例えるなら、石油というエネルギー源も、いつかは枯渇する可能性があるという事と同じだ』

ファヴ：『これは今後のみんなの活動に大きく影響するぽん。魔力が吸い上げられて、全部無くなったら、魔法を使う事ももちろん、人助けやモンスター退治まで出来なくなってしまうぽん。それだけ危険に晒される人達も増えてしまうぽん』

スノーホワイト：『そんな……』

スノーホワイトからしてみれば、心が痛くなるような言い方。そん

な中、コメント欄を埋め尽くしたのは、疑念や質問、更には不満やブーイングの嵐だった。

龍騎：『ちよつとちよつと！　そもそもこんなに魔法少女とか仮面ライダーを増やしたのはお前らだろ!??』

トップスピード：『だよなー。んな事が有り得るって分かってんなら、最初からちゃんと調整しとけよって話だよ』

ファヴ：『それは、ファヴやシローの計算違いだぼん』

シスターナナ：『計算違いって、そんな……!』

インペラー：『いくら何でも無責任すぎるだろ!??』

シロー：『それに関しては謝罪する。すまなかった』

ファム：『そんな風に謝られてもなあ……』

ラ・ピュセル：『君達の言いたい事は分かったが、いくら何でもいきなり半分は無理だ!』

シザース：『同感ですね。せめて8人だけ剥奪されるという事にしてもらいたい』

ファヴ：『それを变えるのは難しいぼん。本当にごめんなさいぼん』
オルタナティブ：『他の街に拠点を移させるとい措置は出来ない

のですか?』

シロー：『無論、他の街を担当する者達にも掛け合ってみたが、それも不可能と分かった以上、こうするしか方法がないのだよ』

ウィンタープリズン：『そんな状況なのに、もう1人魔法少女を増やす事になるとは……』

ライア：『厄介な事になったな』

などと、様々なやりとりがチャット内で行われていたが、やがてその口論に歯止めをかけたのは、それまで黙っていたカラミティ・メアリだった。

カラミティ・メアリ：『で、どうやって半分にするんだい?』

ガイ：『そーそー。それ結構気になってたんだよね』

確かに、と誰もが共感する疑問だった。魔法少女や仮面ライダーを減らすとは言っていたが、一体どのような手段を用いて人数を減らすうというのか。まさかクジ引きで決まるとは思えない。

その方法を、ファヴとシローはこう説明した。

ファヴ：『このチャットは1週間に一度開かれているのはみんな知ってると思うぽん。週に一度、このチャットで脱落者を1人発表して、翌週また1人、というように、16週間で16人に魔法少女や仮面ライダーを引退してもらおうぽん』

たま：『16週間!?!?』

九尾：『かなりの長期間だな』

九尾がそうコメントするように、16週間という事は約4ヶ月に及んで生き残りをかける事になる。

シロー：『脱落者を選抜する方法としては、マジカルキャンディーの所有数で決定される。その週で最もマジカルキャンディーが少ない者が、脱落者となる。この方法を繰り返し、1人ずついなくなるのだ』

シローの説明を聞き、皆は黙り込んだ。

この場面で不満を口にして、自ら引退すると宣言する者は誰1人としていない。ここにいる者達は自分が魔法少女や仮面ライダーであるという事実を悦びとして享受していた者ばかりだからだ。一度、人間社会に縛られる事なく振るう事のできる力を得た者が、それを手放す事はまずない。

高みに達した者ほど、奈落へ落ちる絶望感は果てしなく大きい。

とにかく先ずは、マジカルキャンディーをより多く手にする為に、より積極的に行動しなければならぬ。それしか生き残れる方法がないからだ。

シロー：『改めてもう1度説明する。1週間に一度、マジカルキャンディーの少ない者から脱落していく。君達にはこれまで以上にキャンディー集めに励んでほしい』

ファヴ：『今回はみんなに迷惑かける事になって本当にごめんなさいぽん』

ゾルダ：『やるしかないって事か』

ファヴ：『あ、それともう1つ。連絡したい事があるぽん』

シスターナナ：『何でしょうか?』

ここで、ファヴの口からこんな知らせが入った。

ファヴ：『今回の件もあって、みんな一生懸命マジカルキャンディーを集める事になるぽん。そこで、ファヴとシローからお詫びも兼ねて、新しいシステムを導入する事にしたぽん！ これは双方にとっての特典だと思ってくれていいぽん』

ファム：『新システム？』

トップスピード：『何だそりゃあ？』

シロー：『詳しい内容は、ここにいないメンバーの1人にメツセージを送った後に、改めて発表する。先に言っておくと、このシステムの導入によって、マジカルキャンディーを獲得する機会が増えるのは間違いないだろう』

ファヴ：『というわけで、連絡は以上ぽん。それじゃあ、後でメツセージの方をよおく読んでおいてほしいぽん！』

その言葉を最後に、ファヴとシローはチャットルームから退出した。他の面々も、自然な流れで解散となつて、1人また1人と退出した。ある程度人数が減つたところで、九尾も退出する。

「「：……」」

その後、九尾は何気なく顔を上げ、そばにいたスノーホワイト、ラピュセル、ライアと目を合わせた。沈黙が辺りを包む中、一同からは困惑のオーラが滲み出ていた。

18. パートナーシステム

ファヴとシローから告げられた、魔法少女と仮面ライダーの人数の削減。チャットが終わり、真っ先に口を開いたのはスノーホワイトだった。

「ど、どうしよう……！ 人数を減らされるなんて聞いてないよ……！」

「お、落ち着いてスノーホワイト！ まだ君が魔法少女でなくなったわけじゃないんだから……」

「でも、半分も減らされちゃうんだよ!? やつとの思いで魔法少女になれたのに、このまま魔法少女を辞める事になっちゃったら、私……」

不安を隠しきれないスノーホワイトは、目尻に涙を浮かべた。そんな彼女を安心させるように、ライアは言った。

「スノーホワイト。君の気持ちはよく分かる。だが、底の見えない不安に怖気づいていたら、運命は変わらない。だからあまり思い詰めるのも良くないぞ」

「ライア……」

「それに、君やこの場にいる皆が脱落する可能性は、現時点では極めて低いと考えられる」

「えっ?」

スノーホワイトが首を傾げる中、ライアは説明した。

「覚えてるか? ファヴとシローは、週ごとにマジカルキャンディーが最も少ない者から脱落させていくと言っていた。そしてスノーホワイト、君の所持数は全メンバーの中でトップだ。つまり、よほどの事がなければ、上位に食い込んだまま、事を終わらせられるんだ」

「! そっか……!」

そこでスノーホワイトもようやく合点がいったようだ。

今回の選抜では、これまで獲得したマジカルキャンディーの個数もカウントされる。つまり、現時点で上位に入っているスノーホワイト、九尾、そして龍騎の3人はまず間違いなく、安全圏内にある。加

えてその内の上位2名とチームを組んでいるラ・ピュセルとライアも、脱走する可能性は低い。事実、チームを組んで以降、2人のマジカルキャンデーの所持数は飛躍的に上がった。

「だからと言って油断は禁物だ。これまで以上に気を引き締めていかない」と

「そうだな」

ラ・ピュセルと九尾が頷く中、ライアは疑問を口にした。

「それよりも気になるのは、シロー達が言っていた新システムだ。魔法少女と仮面ライダーの双方に得があるそうだが……」

「そろそろ連絡が来る頃だと思うけど」

九尾がそう呟いていると、ちょうどそのタイミングでマジカルフォオンが鳴り響いた。ファヴとシローからのメッセージだ。

ファヴ：『みんな、お待ちせぼん！』

シロー：『先ほど参加していなかったライダーに説明を終えたので、今から新システムについて発表する』

ファヴ：『でもその前に、何で新システムを追加するか説明するぼん』

ファヴ：『みんな、これまで色々な所で人助けの為に頑張っていたのはファヴもシローも知ってるぼん。でも、中にはこんな風に悩んでいた魔法少女がいると思うぼん。「自分の魔法はモンスター退治には向いてないから、モンスターに襲われてる人を助けられなかった」って。魔法少女の中には戦いに向いてない者もいるから、仕方ない事だったかもしれないぼん』

シロー：『逆もまた然り。仮面ライダーの中には、モンスターとの戦

闘ばかりで人助けがしたくても中々出来てない。もしくははもつとファンタジーな魔法を使ってみたい」と考えている者もいたはずだ』

ファヴン』というわけで、ファヴとシローは一生懸命考えたぼん。そこで今回、お詫びも兼ねてみんなのその要望を叶える為に、新たに導入するシステム、それが、『パートナーシステム』だぼん!』

シロー:『パートナーシステムの内容はいたってシンプルだ。現在、この街には仮面ライダーと魔法少女がそれぞれ16人ずつ存在している。それぞれ1人ずつがペアとなり、そのペア同士で武器や魔法が支給される』

ファヴ:『簡単に言えば、魔法少女はパートナーの武器が使えるようになって、モンスターを倒しやすくなったんだぼん。そして仮面ライダーはパートナーの魔法が使えるようになって、人助けがしやすくなったんだぼん。戦い方の幅も増えるし、活動範囲も広がるから、損はないはずぼん!』

シロー:『魔法少女は、マジカルフォンからパートナーの武器を選択してタップすれば、手元にその武器が現れる。ただし、一度使用すると一定時間が過ぎなければ再び出す事が出来ないから、そこだけは注意しておくように。仮面ライダーの場合は、パートナーの魔法の力を引き出せる『パートナーカード』が、カードデッキに1枚追加されている。それをベントインすれば、パートナーの魔法が使える。これも他のカード同様、一度使用すると再度使うのに時間が経たなければならぬ』

ファヴ:『というわけで、システムの詳細は以上だぼん。それでは、みんなが最も気になってる、ペアの発表をするぼん!』

シロー:『組み合わせは事前にこちらで決定してある。これまでの君達の動向をリサーチし、相性、信頼度等で厳選した結果で、ペアを組ませてもらった』

ファヴ:『ちなみに変更は一切受け付けないぼん。それじゃあ、下の方にペアの名前があるから、スライドして誰がパートナーになったのかチェックするぼん!』

- ・『九尾&スノーホワイト』ペア
- ・『龍騎&トップスピード』ペア
- ・『ナイト&リップル』ペア
- ・『シザース&ねむりん』ペア
- ・『ゾルダ&マジカロイド44』ペア
- ・『ライア&ラ・ピュセル』ペア
- ・『王蛇&カラミティ・メアリ』ペア
- ・『ベルデ&ルーラ』ペア
- ・『アビス&スィムスィム』ペア
- ・『ガイ&たま』ペア
- ・『タイガ&ミナエル』ペア
- ・『インペラー&ユナエル』ペア
- ・『オルタナティブ&シスターナナ』ペア
- ・『フアム&ヴェス・ウインタープリズン』ペア
- ・『オーデイン&クラムベリー』ペア

フアヴ：『以上、15組のパートナーの組み合わせだぼん！』
 シロー：『残りの1組については、後々入ってくる魔法少女が参加でき次第、現時点で記載されていない仮面ライダーとペアを組んでもらう』

フアヴ：『それからもう1つ、ペアで脱落する事なく残り続けていたら、どこかで良いことがあるぼん！ 何かあるのかはその時までのお楽しみぼん』

シロー：『こちらからのメッセージは以上だ。諸君らの健闘を祈る』

ファヴ：『パートナーと協力して、マジカルキャンディー集めを頑張ってほしいぽん！ ファヴもシローも応援してるぽん！ それじゃあ、また1週間後に！』

「パートナー、システム……?」

「これがファヴとシローの言っていた新システムなのか」

メッセージを確認した後も、4人は困惑していた。偶然なのか、狙ってなのかは定かではないが、4人でペアが2組できている状態であった。

「！ スノーホワイト、これを見て！」

不意に、マジカルフォンの画面を操作していたラ・ピユセルがスノーホワイトに呼びかけた。

スノーホワイトだけでなく、皆が画面を覗き込むと、ラ・ピユセルの持つマジカルフォンに新しいタグが追加されており、中を開いてみると、『エビルウィップ』、『エビルバイザー』と書かれた文の上に、それぞれの武器の画像が添付されていた。どちらもライアの所持武器だ。念のため、スノーホワイトも自身のマジカルフォンで確認してみると、九尾が使う剣である『フォクセイバー』、防御用の『フォクステール』が記載されていた。そこをタップする事で、武器を出す事ができるという事だろうか。

「私が九尾の武器を、そうちゃんがライアの武器をいつでも使えるって事なんだね」

「だからそうちゃんはやめてくれ……。でも、そういう認識で間違いないね。僕は戦闘向きの魔法少女だから、恩恵を受けてる実感はないけど、スノーホワイトやシスターナナにはおあつらえ向きのシステムかも」

「そつか。これならモンスターに襲われて困ってる人をいつでも助けられるね」

魔法少女側の恩恵を確認した後、今度は仮面ライダー側の方をチエックした。カードを引き抜いてみると、今まで見た事のないカードを見つけた。

「? こんなカード、今まで見た事ないな……」

九尾が取り出したカードには、スノーホワイトのアバター姿が描かれており、『MIND VENT』と表記されていた。

「マインド……心か。確かにスノーホワイトの魔法は心の声を聞けるものだから、間違っではないいな」

「一度試してみたらどうだ? このカードは使い所が難しそうだから、この場で効果を確認しておいても良いと思う」

「そうですね」

そこで一同は場所を鉄塔から近場のビルの屋上に移し替え、九尾はフォクスバイザーの口の部分を開いて、啜えさせるように新しいカードを入れ、口を閉じてベントインした。

『MIND VENT』

すると程なくして、九尾の耳にこんな声が聞こえてきた。

『確かこの辺に入れておいたはずなのに……。さっきの店に置いてっちやっただのかな……。』

「! これは……」

「九尾にも聞こえた?」

「ああ。何か忘れ物をした男っぽい声だった」

「じゃあ九尾も私と同じ魔法が使えるんだ!」

スノーホワイトも同じように男性の困っている声を聞いたようだ。そこで一同は声のした方に向かい、書類の入ったクリアファイルを無くして困っていた男性と接触した。そして男性が少し前に立ち寄っ

た店の近くの道路脇に落ちていたクリアファイルを発見し、男性に届けた。

男性にお礼を言われながら、騒ぎが大きくならないうちにその場を後にし、一同はビルの屋上に足をつけた。途端にマジカルフォンが鳴り出し、モンスターが近くにいる事を知らせた。

「今度はモンスターか」

「なら今度は、武器を試しに使ってみよう」

4人はそのまま近くにかけられていた鏡を通じて、ミラーワールドに突入した。

反応のあった付近にたどり着き、しばらく辺りを見渡していると、不意にブーメランが4人にめがけて迫ってきた。

「！ 危ない！」

ライアの叫び声で、一同は地面に伏せて回避した。回転しながら弧を描くように動いていたブーメランをキャッチしたのは、カミキリムシ型のモンスター『ゼノバイター』だった。ゼノバイターはブーメランを持ったまま4人に飛びかかった。

「くっ！」

いち早くラ・ピユセルは起き上がって剣を抜いて肥大化させ、攻撃を防いだ。ゼノバイターはブーメランを刀のようにふるって、ラ・ピユセルと互角の勝負を繰り広げていた。

『SWORD VENT』

九尾はフォクセイバーでラ・ピユセルを援護しようとし、カードをベントインした。が、ゼノバイターがそれに気づいて、ラ・ピユセルを蹴り飛ばすと、持っていたブーメランを投げて、空から降ってきたフォクセイバーを弾き飛ばした。

「何!?!?」

手元にフォクセイバーが来なくなった事で九尾は無防備となり、その隙についてブーメランを再びキャッチしたゼノバイターは九尾に襲いかかった。九尾は軽い身のこなしで、的確にゼノバイターの攻撃を避けていた。

「九尾！」

ライアとラ・ピュセルが背後から攻撃を仕掛けようとするが、ゼノバイターもそれを読み切って、ブーメランで防いでいた。

そんな中、遠くからスノーホワイトが見つめていたが、もどかしい気持ちに溢れていた。

「（みんなが頑張ってるのに、やっぱり何もしないなんて、魔法少女らしくない！ 私だって、戦えるようになったんだから！」

スノーホワイトは決心してマジカルフォンの画面から、フォクセイバーの画像をタップした。すると、手元に2本のフォクセイバーが現れて、スノーホワイトはそれらを両手に持った。

「本当に武器が出た……！ これなら！」

スノーホワイトは前に飛び出し、ゼノバイターに立ち向かった。

「やあああああつー！」

「スノーホワイト！」

スノーホワイトはがむしゃらにフォクセイバーを振り回してゼノバイターに攻撃した。ところがゼノバイターは少しよけた程度で、全く効いていないのか、狙いを九尾からスノーホワイトに向けた。パワーが足りていないようだ。

「スノーホワイト！ なら僕も……！」

「挿入歌：果てなき希望」

ラ・ピュセルは素早くマジカルフォンからエビルウィップの画像をタップして、手元にエビルウィップを呼び寄せた。

「はあつー！」

エビルウィップはゼノバイターの持つブーメランに巻きついて、ゼノバイターは無理やり引っ張ろうとした。負けじとラ・ピュセルが足を踏ん張る中、ライアもカードをベントインした。

『SWING VENT』

エビルウィップを左手に持ったライアは続けざまに新たなカードをベントインした。

『ALTER VENT』

変化の意味を持つ『アルターベント』の力を受け、手に持っていたエビルウィップは、ラ・ピュセルの持つ剣同様肥大化した。

「わっ!?? 大っきくなっちゃった!??」

「なるほど、ラ・ピュセルの魔法は剣の大きさを変えるものだから、俺が使うと武器も大きくなるのか」

大きさは変わっても、重量はさほど変化してないので、楽々と巨大化したエビルウィップを振り回し、ゼノバイターを吹き飛ばした。

その隙に九尾は地面に転がっていたフォクセイバーを拾って、ゼノバイターに斬りかかった。そしてライアは追撃するためにカードをベントインした。

『STRIKE VENT』

「ふっ! はあっ!」

エビルバイザーのヒレの部分が光り、左腕を横に振るうと、ヒレの部分からソニックブームが放たれて、ゼノバイターに強烈な一撃を与えた。

一気に形勢が傾き、九尾はトドメの一撃を放った。

『FINAL VENT』

「はっ! ハアアアアアア!」

九尾は気合いを入れ、フォクスロードと共に飛び上がった。

「ウオオオオオオオ!」

前転した後、右足を突き出してフォクスロードと合体すると、足の先端が鋭く尖り、炎に押し出されてゼノバイターを貫通した。

「ギエアアアアア!?!」

『ブレイズキック』を受けてゼノバイターは爆散。静けさが戻ると、マジカルフォンからマジカルキャンディーをゲットしたという情報が入った。

ミラーワールドから脱出した一同は、改めて先ほどの戦闘を振り返った。

「武器を強化できるのはありがたいかもしれないな。これならある程度巨大なモンスターにも対抗できる」

「あまり馴染みがない武器だったから、使い方をもう少し覚えておいた方がいいな。うん、今度練習しよう」

「うくん。やっぱり難しいなあ。刀なんて握った事ないし」

「スノーホワイトはこういう荒事には向いてないからね。戦える要員が3人もいるんだ。あまり使用する必要もないかもしれないし、やっぱりスノーホワイトは戦う事を専門にしない方が……」
「かもな」

できる事なら、スノーホワイトには戦ってほしくない。ラ・ピュセルの言葉に九尾は同意を示すが、スノーホワイトは首を横に振った。「今はまだ慣れてないだけだよ。私もラ・ピュセルと一緒に練習する。だから、九尾とライアにも、協力してほしいの」

「そうか。なら、実践経験も積みながら、空いた時間に試しているか」

「はい!」

「まあ、スノーホワイトがそれで良いってんなら……」

「分かった。でも無茶だけはしないで。危ないと思ったら、僕達が出て必ず守るから」

「ありがとう」

そんな中、ライアは1人、考え事をしていた。

「(しかし、このタイミングで武器や魔法の支給……。個々の戦力が強化されたとはいえ、何か良からぬ事に繋がらなければ良いのだが……)」

「ライア? どうかしたのかい?」

「いや、何でもない。それじゃあ、まだ時間があるから別の所に向かう」

そう言っただけでライア達は、スノーホワイトの魔法を頼りに困っている人達を探しに、ビルの上を転々としながら駆け抜けた。

その頃、とある山の廃屋にて……。

『上々の滑り出しぽん。みんな、与えられた武器や魔法を有効活用してるぽん』

「今はまだそれで十分でしょう。……今は、ね」

『後は、誰がトリガーを引くか、だが』

「これまで以上に美味しい餌に食いついて、思惑通りに動くのは王蛇か、カラミティ・メアリか、はたまた別の誰かか……。何れにせよ、我々はその時が来るまで高みの見物としておこう。時期が来たら様子を見て、我々からきっかけを作れば、後は勝手にやってくれるさ」
「今回の試験は、いつにも増して、九尾のような逸材が多数揃っています。これほど楽しみな事はありませんよ。だからこそ、誰にも邪魔はさせない」

『でも別に誰が生き残ろうが関係ないぽん。刺激的な展開なら、何でもOKだぽん』

『愚かな人間共が、如何に善を気取って力を振るおうと、何れ奴らも落ちるさ。これは、そういうゲームなのだからな』

19. 人気を得る方法

「半分も減らされるのは、やっぱりなあ〜……」

そうボヤきながら、いつもの待ち合わせ場所に向かっているのは龍騎だった。一昨日ファヴとシローから告げられた、N市で活動する魔法少女や仮面ライダーの数の削減。それに伴ってパートナーシステムが適用され、龍騎の教育係を受け持っていたトップスピードとペアを組む事となった。個人的にはウマが合うという事もあって、パートナーになれてよかったと思っている。

ただ、一方で見ていて危なっかしい所があるので、そこは困り果てた。というのも、パートナーシステムによってトップスピードに龍騎の所持武器が支給されたのは良いが、それによって本人のテンションはMaxとなり、昨日のモンスター退治では持ち前のスピードを活かして、ドラグセイバーを持ってはしゃぎながら素早く攻撃していた。あまりにも無鉄砲な攻め方は、龍騎をハラハラドキドキさせ、共に行動しているナイトとリップルのペアを普段以上に呆れさせた。ナイトに至っては『奴らはトップスピードに危険なおもちゃをあげた』とボヤいていたほどだった。

「……ん？ あれってトップスピードか？」

仕事を早めに終えた龍騎はビルの屋上を転々とするうちに、待ち合わせ場所にトップスピードがいるのを確認した。周りにナイトとリップルがいないところを見るに、どうやら彼女が一番乗りのようだ。その彼女は、誰かとマジカルフォンの電話機能で会話しているようだ。

「……おう、分かった！ んじゃあ先ずはそっちに行くわ。どこいるの？ ……あー、あそこかな。じゃあかつ飛んで行くわ。ちよい待ってろ」

そう言って電話を切ると、そこでようやくトップスピードは龍騎の存在に気づいた。

「おっ、龍騎か。悪いけどよ、たった今野暮用が出来ちまった」

「やっっきの電話と関係あるの？」

「ああ。スイムスイムからのSOSだ。ほら、ルーラチームの1人」
「ああ。確か、アビスとペアを組んでる魔法少女だっけ？」

「そ。助けてほしいんだってさ。リアルで会った事無いのに何で俺に連絡してきたのかは知らねえけど」

「頼れるぐらい信用できるからじゃない？」

「ハハハッ！なるほどな！」

トップスピードは笑いながら、ラピッドスワローに跨がろうとした。が、不意に龍騎の方を向いて言った。

「あそうだ。どうせなら龍騎もついてこいよ。後の2人はまだ来ないみたいだしさ。俺も久しぶりにルーラと会いたいし、お前の事もみんなに紹介しとかないとな」

「えっ、俺も？ まあ、良いけどさ」

「よっしや！ じゃあ早く乗りなよ」

そして龍騎はトップスピードの後ろに座り、2人を乗せたラピッドスワローは難なく飛び上がった。

しばらく夜風に当たりながら空の旅をしていると、スイムスイムが待っているコンビニの屋上が見えてきたので降下した。近づくにつれて、普段は絶対にいるはずのない屋上に誰かが呆然と立ち尽くしている人影が見えた。あれがスイムスイムに違いない。

ようやくその全貌が見え始めた時、龍騎はギョツとして思わず仰け反って落ちそうになり、トップスピードは内心唸った。その待ち人はこの季節にはまずお目にかからないであろう、白いスクール水着に身を包んでおり、特に2人の目を惹いたのは、発育の良さだった。胸や尻の量感、迫力、ムチムチ感。何れもトップスピードを遥かに上回っており、良くてリップルと良い勝負といったところか。2人は知る由も無いが、かつてラ・ピュセルも初めてスイムスイムの姿を目撃した際、自我が崩壊しそうになったぐらい、スイムスイムの体型は男性陣を魅了し、尚且つファッションセンスに拘りがあった。

一応ファッションセンスに拘りを持つトップスピードは、臆する事なく降下し、屋上に着地した。

「ういっす！ リアルで会うのは初めてだな。俺、トップスピード！

「そんでもってこいつが新人で相棒の龍騎だ。よろしくな！」

「よろしく。君がスイムスイム？」

「スイムスイムはコクリと頷いた。それからトップスピードは単刀直入に質問した。」

「んで、今日は何かルーラ達と用があるっつー事で呼び出してくれたんだろ？」

「……私を、明将山まで連れて行ってほしい」

「明将山？ 何でそんな所に？」

「ルーラとそこで待ち合わせてる。でも、日時を間違えた。みんな凄く心配してた。ルーラの命令は絶対」

「なるほどねえ。そいつは逆らえねえよな」

トップスピードが納得して相槌をうっている、スイムスイムは唐突にこんな事を言い出した。

「ルーラが言ってた。利用できるものは、何でも利用しろって」

「え、ええ……」

ルーラの格言を聞いて、龍騎は困惑した。自分にとって好ましくない言葉だったからだ。が、それとは正反対にトップスピードは高笑いしながらスイムスイムと肩を組んだ。

「はっはっは！ そいつを、利用しようとしてる俺達に言うかよ。お友達になれそうじゃねえか、おい」

「ルーラが言ってた。手下とリーダーの関係はあっても友達なんていい加減な関係はない」

「……」

何となくルーラとはナイトみたいに、そりが合わないかもしれない。龍騎は直感的にそう感じた。

その一方で、トップスピードはスイムスイムの真っ正直さが気に入ったのか、快くその依頼を受けた。

「オッケー。その依頼受けてやる。直接明将山でいいんだな」

「うん」

「というわけだ。俺がこいつを乗せるから、龍騎は自分の箒についてこいよ」

「あ、ああ」

龍騎は一枚のカードを取り出した。そこにはトップスピードのバター姿が描かれており、パートナーカードであるそれをドラグバイザーにベントインした。

『BROOM VENT』

すると、上空からドラグレッダーを模した、ラピッドスワローと同じ大きさの箒が降ってきて、龍騎はそれをキャッチした。箒の先端部分は龍の頭が取り付けられている。龍騎のパートナーカードは、パートナーの魔法である、魔法の箒を出せるというものだった。当然ラピッドスワローと同等の性能を持ち、これまでドラグレッダーに頼りっぱなしだったパトロールが、魔法の箒でどうにかなった。ゴツイ装甲に覆われたライダーが、魔女のように箒で空を飛び回る姿は、かなりシニールではあるが、龍騎はさほど気にしていなかった。

龍騎が箒に跨ったのを確認したトップスピードは、スイムスイムと龍騎に合図を送り、一気に明将山までの道のりを最短ルートで突き抜けた。

トップスピードは常にスイムスイムに話しかけるが、当の本人は人形のように、微動だにせず、口を開く事なく、トップスピードの腰にしがみついたまま、ただジツと前だけを見つめていた。

ようやく目的地の明将山の山肌が見え始めた頃、今度は龍騎が質問をした。

「ねえねえ、スイムスイム。明将山でルーラ達と待ち合わせてるって言うってたけど、あそこで何をするつもりなんだ？」

その質問に、スイムスイムは空を飛んでから初めて口を開いた。

「紅葉狩り」

「は？」

「紅葉狩り」

「こんな時に？」

「うん」

それ以上は答えるつもりがないのか、スイムスイムは再び黙り込んだ。

「そろそろ目的地だから、誰か見えてくるはずだけど……ビンゴ！」
トップスピーードの目線の先を見ると、開けた場所に何人もの人影があった。あれがルーラチームの全メンバーのようだ。

「あ、来た」

「てか送迎付き？」

スイムスイムの到着を待つ中、いち早く発見したのはミナエルとユナエルだった。

「おーい！ こっちだぞー！」

すぐそばにいたインペラーが手を大きく振って、スイムスイム達に合図を送った。隣にいたタイガはジツと降りてくる3人を見ていた。

「はい、到着」

「良かったな。みんな待っていてくれたみたいだし」

「……ありがとう」

「スイムちゃん、どうしたの？」

「遅れるとは思っていたが、まさか他の奴の手を借りるとはな」

「それが……」

スイムスイムが何かを言いかけた時、それを遮るように女性の甲高

い喝が響き渡った。

「遅い！ 遅刻するな大バカ！ ……しかも何でこいつが一緒に来る！」

チームのリーダーであるルーラは、額に青筋を浮かべながら、隣でいつの間にか肩を組んでいるトップスピードを指差した。

「まあまあ、俺とルーラの仲だろお？」

「気安く触るな」

ルーラはトップスピードのフレンドリーさを鬱陶しく思い、トップスピードの手を抓って無理やり引き離した。

「つれねえなあ、友達じゃんか」

「誰と誰が」

「俺とルーラが」

とうとう返事をするのも面倒になったのか、ルーラはそっぽを向いて無視した。

「おっとそうだ。紹介したい奴がいるんだ。リアルで会わせる機会もそうそう無いしな。こいつが俺の相棒だ。新人だから、手厚く頼むぜ」

「俺、龍騎！ こんな状況だけど、とりあえずよろしく！」

「おう！ よろしく！ 俺はインペラーだ！」

真っ先に挨拶してきたインペラーが次に紹介したのは、隣にいたタイガだった。

「それから、こいつがタイガ。俺の兄貴なんだ」

「って事は、2人は兄弟って事!?!？」

「……うん」

タイガは静かに頷いた。

「ミナエルです！」

「ユナエルです！」

「ミナエル、と、ユナエル……。……どっちがどっち？」

龍騎は双子の魔法少女『ピーキーエンジェルズ』を凝視していたが、どちらがミナエルで、どちらがユナエルか、見当がつかなかった。

「あ、あの……。たま、です。よろしく、お願いします」

「俺、ガイって言うんだ」

次に声をかけたのは、ペアを組んでいるたまとガイだった。後は一度チャットで会っているスイムスイムのパートナー、アビスと、木にもたれながら興味なさげに腕を組んでいるベルデと、そのパートナーであるルーラだけであり、形だけではあるが、龍騎の紹介は済んだ。「けどさ」

「どうかした?」

「さっきスイムスイムから聞いて、紅葉狩りをするって言ってたけど、この時期に紅葉なんてあるの?」

「あ、それ俺も思った。ちよつと早過ぎんじゃねえの?」

「……紅葉狩り?」

アビスが怪訝な声を出し、ルーラとベルデは、スイムスイムの方を見た。スイムスイムは黙り込んでいる。どこか認識の違いがあつたのだろうか。龍騎とトップスピードはそれ以上追求しない事にした。

「あ、そうそう。これ」

続いて、トップスピードが持参していたバッグから取り出したのは、中身の入ったコンビニの袋だった。それを受け取ったルーラは首を傾げた。

「何?」

「紅葉狩りの差し入れって事で」

「差し入れ?」

「友情の証って事。さあ、もう行こうぜ龍騎」

「ああ、そうだな」

そう言つて龍騎はラピッドスワローに跨った。パートナーカードの効力が切れて、しばらく魔法の箒を呼び出せなくなってしまったので、帰りはトップスピードに乗せてもらう事になった。

「本当は俺達も参加したいところだけど、生憎ナイトとリップルを待たせるわけにはいかないんでね。最後まで残れたら、時間見つけて楽しくやろうぜ! そんなじゃあ、お互いキャンディー集め、頑張っついでこうぜ!」

「ふ、ふざけるな!」

「わっ!?？」

一方的に話が進みすぎて、堪忍袋の緒が切れたルーラは怒鳴りながら袋を放り投げ、それをたまが慌ててキャッチした。

「ハハハッ！ ルーラもリップルみたいにツンデレキャラだな」

「あ。あれツンデレなの？」

「やかましい！ 全部聞こえてるぞ！」

「じゃあな！ 仲良くやれよ！」

「それじゃあ、またチャットで会おうぜ！」

その言葉を最後に、龍騎とトップスピードは明将山から去っていった。

ようやく辺りが静かになったところで、ルーラはスイムスイムを問い詰めた。

「……で、どういう事、スイムスイム」

「……遅刻しそうで、あれが一番早そうだった。……理由を聞かれて、ルーラに秘密だって言われてたから」

「龍騎と一緒にいた理由は」

「トップスピードが勝手に連れてきた。ルーラやみんなに紹介したいからって」

「あいつらしい、バカの発想だな」

ベルデは呆れながら肩を竦めた。ルーラもため息混じりにボヤいた。

「もう少しマシな言い訳を考えろ、バカ……」

すると、近くで歓声が上がった。ルーラが何かかと思いながら振り返ると、ミナエル、ユナエル、インペラー、タイガ、ガイが、たまの持つ袋の中を見つめていた。よく見ると、中に入っていたのは二段に積まれたタッパードだった。それぞれにはおにぎりや唐揚げなど、手作り感満載の料理が詰まっていた。

「お弁当だ！」

「美味しそう！」

「これ全部トップスピードが作ったものなのか!?？ すげえなあの人！」

「へえ……」

「こんな時なのに、余裕あり過ぎっしょ」

「出来立てっぽそうだし、みんなで食べようぜ！」

「あ、あの……」

たまがおずおずと呟くと、5人は背後で恐ろしい気配を感じた。振り返ると、先ほどに増して怒りのオーラを宿しているルーラの姿が。

「……あなた達だけ、本当に紅葉狩りする気？」

「い、いえ……」

「……しません」

「うっ……」

「……」

「なわけないって」

「バカやってないで、さっさと行くぞ。こっちは待ちくたびれちまった」

ベルデがそう呟いてから歩き出し、他のメンバーも後を追うように、奥にある目的地まで向かった。

紅く染まった葉など一枚も付いていない森を抜けた先に広がっていたのは、辺り一面を覆い尽くす、粗大ゴミの山だった。いわゆる不法投棄というやつである。

「うわっ？？？これマジか？？」

「……つたく。お似合いの仕事を探してやったのよ。ありがたく思いなさい」

「う、うん。ありがとう……」

「じゃあまずはたま。やつちやつて」

「は、はいー」

ガイの指示を受けて、たまが先陣を切つて崖を降りたところの地面を、爪のついた犬の両手で引つ掻いた。すると、少し引つ掻いただけの地面に、巨大な穴が空いた。たまの魔法『いろんなものに素早く穴を開けられるよ』が作動し、僅かな傷が穴となったのだ。が、自分の魔法の範囲がよく分かっていなかったのか、足元に感触が無くなったと思った時には、自分で空けた穴に、吸い込まれるように落下していった。

「ひやつ……!?」

『HOLD VENT』

すると、たまの頭上からヨーヨー型の武器『バイオワインダー』が迫ってきて、たまの体を縛り付けるとその場で宙吊りになった。たまが見上げると、ベルデがたまを釣り上げているのが見えた。

「……ふん。世話の焼ける奴だ」

「あ、ありがとう、ございます……」

「本当に役立たずね。穴を掘るしか能がないなんて」

ルーラが酷評をしている中、他の面々は粗大ゴミの山を眺めていた。

「うくん。しかし多いな」

「このゴミ全部埋めたら、キャンディーどのくらいになるかなあ」

「100個、いや、200個ぐらいいっちゃうかなあ」

「こらー！ あんた達も早く取りかかりなさい！ 夜が明けるまでに、全部落として埋めるのよー！」

「はーい」

ミナエルとユナエルは飛び上がって軽そうなものから持ち上げた。その一方で、

「じゃ、俺達もやろっか」

ガイがカードデッキからカードを1枚取り出した。それに続いてタイガとインペラーもカードを取り出し、ガイは左肩についた召喚機『メタルバイザー』に、タイガは斧型の召喚機『デストバイザー』に、インペラーは右足の脛についた召喚機『ガゼルバイザー』にベントインした。

『『ADVENT』』

咆哮と共に現れたのは、各々の契約モンスターであるメタルゲラス、デストワイルダー、メガゼール、ネガゼール、マガゼール、オメガゼールだった。特にインペラーが呼び出した契約モンスターは、数十体もいた。

「へへ。こういう時に契約モンスターが役に立つんだもんな」

「さっさと終わらせよっか」

「……うん」

そして3人のライダーとその契約モンスター、さらにアビスも粗大ゴミを穴に落とす作業を始めた。その間、インペラーがモンスターばかりに仕事を任せて自分はサボっていたり、たまがオロオロしている皆の邪魔になっている度に、ルーラの怒声が鳴り響き、全ての粗大ゴミが穴に埋まったのは、それから30分後の事だった。その間、ベルデとスイムスイムはジッとその場で皆の様子を眺めていた。

「やっと終わった……」

「おっ！ キャンディー結構増えてる！ 山奥まで来た甲斐あったね！」

「あったね！」

「ま、こんなもんだな」

「じゃあ、後は頼んだから」

「後……？」

タイガが首を傾げていると、ルーラはイラついたように口を開いた。

「このままじゃ不自然だろバカ。木とか草とかで目立たなくしておくのよ」

なるほど、と思ったたまは早速近場から草や木を集め始めた。

「行きましょう、ベルデ」

「ああ」

そしてベルデと共にその場を去ろうとした時、スイムスイムが呟いた。

「……ありがとう、仕事を探してくれて」

すると、ルーラはそっぽを向いて叫んだ。

「……あんた達グズ共がちゃんとキャンディーを集めてれば、こんな事しなくても済むのよ！」

それから再び歩き出し、小言で呟いた。

「誰かが脱落するなんて、リーダーとして、絶対に許せない……！」

「……」

その様子を、ベルデは黙って見ていた。やがて2人の姿が見えなくなったところでピーキーエンジェルズは口を開いた。

「ルーラには逆らえないしね」

「ルーラの魔法、最強だしね」

「しようがないよな……。好感度上げとくにはこうするしかないし」

インペラーも肩を竦めて呟いた。それから、たまに続いてスイムスイム、アビス、タイガ、インペラーは草木を集め始めた。その間、ピーキーエンジェルズとガイはレジャーシートを広げて、くつろいでい

た。ガイが寝転んでいる間、ピーキーエンジェルズはマジカルフォンからあるサイトを見ていた。

「あ、そろそろ人気投票始まる時間だ」

「マジ？　でもあいつがいるし」

「あいつって？」

ガイが気になって尋ねると、ユナエルが不満げに答えた。

「スノーホワイトだよ。ほら、今キャンディー獲得数トップの」

「スノーホワイト、マジウザいし」

「うん、マジウザいよね」

「このままじゃまた一位とれないしー」

どうやら週末に開かれる人気投票のトップをスノーホワイトが占めている事に、不服のようだ。

「一位を取るための素晴らしいスキームが欲しいよー」

「コンセンサスやね」

「なんかさ、私らだけじゃアイデア思いつかなくない？」

「あー、そこに気づくか。お姉ちゃんマジクール」

「いやクールだったら何か思いついてるんじゃないかな」

「お姉ちゃんマジ謙虚」

2人が言いたい放題している間に、粗大ゴミを覆い隠し終えたらしく、アビスとスイムスイムはトップスピードが持ってきた弁当箱からおにぎりを1つずつラップに包んで拝借してから、皆に背を向けた。

「終わったから帰る」

「それじゃあまた」

「「お疲れ様〜」」

「じゃあね」

ピーキーエンジェルズが手を振っていると、たまは首を傾げた。

「……みんなは帰らないの？」

「あ、そうそう。たまにも残ってもらいたいんだ」

「……え？」

たまはインペラーに言われた通りに、残る事にして、レジヤーシートに腰を下ろした。それから、トップスピードが持ってきた弁当を食

べ始めた。残った3人のライダーも変身を解いて食事を始めた。ガ
イの変身者は大学生であり、名を芝浦^{しばうら} 淳一郎^{じゆんいちろう}と言う。タイガの変
身者は、大人しそうな青年で、東野^{とうの} 智^{さとし}であり、その隣にいるのはイ
ンペラーの変身者で、智の弟である光希^{みつぎ}が、兄とは対称的にハキハキ
していた。

6人での食事が始まると、双子の魔法少女が中心となり、喚き立
てた。

「だから人気よ人気。人気が欲しいの」

「そうそう」

「ほら、まとめサイトあるじゃん」

「あれってスノーホワイトの記事ばかりなんだよね」

「白い魔法少女が何々してましたって、そればかり」

「あれ何なの？ 複数いるの？」

「私達なんて2人いるのに十分の一くらいしかないんだよ」

「それって2位の九尾ってライダーもそうだし、さっき来た龍騎って
ライダーよりもずっと少ないんだよ。まあ、あいつらもあいつらでお
かしいんだけどさ。やっぱスノーホワイトなのよ」

「ああ。確かに多いね、この3人」

光希がマジカルフォンから、ピーキーエンジェルズが閲覧している
ものと同じサイトを見ていた。

「せっかく魔法少女になったからには人気欲しいし」

「当然だよね」

「だから何とか人気稼ごうとして色々やったんだけど」

「お姉ちゃんマジクール」

「……で、どうだったの」

智が唐揚げにかじりつきながら尋ねると、2人はこう言った。

当初、ミナエルとユナエルは、サイトで自作自演をする事で人気を
アップさせようとしていた。今ある2つの端末を駆使してサイト内
の自分達の株価を上げようとした。ところがこの作戦は失敗に終
わった。なんと、異なる端末を使用していたにもかかわらず、掲示板
で表示されるIDは同一だったのだ。

「何で端末違うのにID同じなんだっつーの！」

「私ら2人でセットかつつーの！」

「いやまあ、双子だし……」

「そういう問題じゃないの！ ファヴに文句言ったらしれつと『え？

そうなの？』とか言ってるし！」

「ふざけんなし！」

「……で、見え見えの自作自演がバレて、世間からは鼻摘まみにされ
たっつわけね」

芝浦が納得したように頷いた。

「でさー。このままじゃマズいと思ったわけよ」

「そうそう。このままだとまたスノーホワイトがダントツでぶつち
ぎつちやうよ。それよくないよね」

「というわけで、みんなから何かいいアイデア出てこないかなあつて。
どう、ある？」

「ある？」

「うーん……」

たまと光希は唸り、真剣に考えていた。一方で智と芝浦は興味ない
のか、黙々と弁当を食べていた。

そんな中、たまはこれまでに働かせた事もないぐらいに案を練つ
た。実を言うと、同じ魔法少女から頼りにされたのはこれが初めて
だった。変身前の彼女はとにかく鈍臭く、家族を含めて誰1人として
頼ってこなかった。せいぜいパシられる程度だった。家族の中でも
唯一頼りにしてくれたのは、今は亡き祖母ぐらいだった。魔法少女に
なつて人助けをするようになってからは、感謝してくれる人が増え
て、なれて良かったと思える自分がいた。

眉間に皺を寄せながら考えていると、やがてたまはこう言った。

「えーと、うーん……。一生懸命人助けする、とか？」

「もうしてるっつうの！」

「不法投棄されたガラクタを片付けたばかりだっつうの！」

お気に召す答えでないと分かり、たまは次なる案を出した。

「ルーラとか、ベルデとか、スイムちゃんとか、アビスに相談してみた

り……」

「あんなヒスババアはやだ！ ベルデに言っても聞いてくれなさそうだし、スイムスイムもアビスもルーラの腰巾着になってるし！」

「そうそう。ルーラマジウザいし」

2人はいつものようにルーラの悪口を言っていた。

「けどなあ。そんな簡単に人気なんて集まる方法あるのかな？ 無理なもんは無理って割り切った方が……」

「何言ってるのよ！ 人気が欲しいのよ！」

「そーだそーだ！」

「ううくん……」

すると、たまの脳裏に人生初のひらめきが浮かんだ。

「ぶ、プロモーションビデオを作ろう！」

「……え」

「プロモーション？」

「……ビデオ？」

「……ははくん」

これには、さほど興味の湧かなかった芝浦も思わず身を乗り出した。

その2日後、たまはピーキーエンジェルズから感謝された。翌日の晩にたまがPVと称して家庭用ビデオカメラで撮影し、画像や動画をミナエルとユナエルがパソコンで編集したものを投稿した結果、スノーホワイトのものとギリギリまでデッドヒートを繰り広げた。惜しくも2位という形で幕を閉じたが、双子からしてみれば喜ばしい結果だった。ファヴも『あれは反則ギリギリぽん』と、2人を咎めていたが、「あの球体の裏をかいてやった」と言っつて、クスクス笑っていた。とはいえ、たまも初めてカメラマンをやらされた結果、撮影中に転んだり、バッテリーを切らしたり、操作を間違えたりと、失敗ばかり続いていたが、そこを補助役のタイガとインペラーが少なからずフォローした。

中でも最もたまを手助けしてくれたのは、機械系に強いガイだった。操作を間違える度に、懇切丁寧にやり方を教え、問題点を指摘したり、手振れ補正を利用して、たまに合った撮影の仕方を説明してくれたのだ。

そして現在、祝勝会と称してルーラ達も知らない、双子の隠れ家に案内してもらい、桃鉄を6人でプレイしている。最下位は明日の晩御飯を奢るといふ罰ゲームもつけて。隠れ家まで向かう際、たまは双子に持ち上げられて、空を旋回していたので未だに心臓がバクバクしていたが、隠れ家に入ってようやく落ち着きを取り戻した。

双子が設定している間、たまは隣にいたガイに声をかけた。

「あ、あの……」

「ん？」

「その……。ありがとう。手伝ってくれて……。私1人じゃ、どうにもならなかった……。ガイがパートナーで、本当に良かった……」

「ま、俺はただお前の案が面白そうだったから、乗っただけだし」

「……でも、嬉しい」

たまは頬を紅くしながら、自然とガイに寄り添った。できる事なら、このまま2人で最後まで残り続けたい。そんな願望を胸のうちに秘めて、10年トリアル、ハンディ無しของเกมが始まった。

20. 夢の中で奮闘

チャットでの重大発表以降、N市での魔法少女及び仮面ライダーの目撃情報は増大し、まとめサイトは大いに盛り上がりを見せた。

『お姫様が怖い犬を追い払ってくれた』

『鮫のような人が、不良に絡まれた自分を助けてくれた』

『双子の天使が、うっかり手放してしまった風船を取ってきてくれた』

『ロボットみたいな小学生が自販機の下に落としてしまった硬貨を拾ってくれた』

『龍みたいな人が、箒に乗った魔女と共に、鏡から出てきた化け物を退治していた』

『白い学生服の少女が、落とし物を届けてくれた』

『狐みたいな人が、木の上に引っかかったボールを取ってくれた』

……などなど、目撃情報が後を絶たない。

彼らが活動の幅を広げようとする分、人の目に触れる機会が増える。既にテレビ番組でも一部ではあるが、魔法少女や仮面ライダーを『謎の救世主』としてとりあげているぐらいだ。意図せぬ露出を増やした事でまとめサイトを盛り上げ、注目度を上げていたのだ。

しかし、魔法少女や仮面ライダーの活動出来る場所は、なにも現実世界に限った話ではない。彼らの中には、人目にはまづつかない、というよりも、一般人なら誰もその存在を覚えているはずもない者が、人知れず人助けをしているのだ。

少年の目の前に広がる光景。それは、辺り一面が火の海と化している、普段から見慣れたはずの街中。そんな夜の街中を臆することなく堂々と進撃し、ありとあらゆる建造物を破壊しているのは、自分よりも何千万倍もの大きさを誇る、怪獣。

黒色の尖った鱗や、先の鋭い手足の爪、威圧感溢れる尻尾、そして激越な思いがこもっている赤い瞳。そんな特徴を持つ怪獣は、口から熱光線を放ちながら、周りを地獄絵図へと変えていた。

「あ、ああ……！」

少年は恐怖のあまり、膝がこれでもかと言わんばかりに震え、尻餅をついたまま、口を大きく開けて唾然としていた。

怪獣が喜びを表すかのように咆哮し、窓ガラスを鳴動させる。それから周囲を見渡し、そして見つけた。赤い瞳の先に、恐怖に慄いている少年がいるのを。怪獣は思わず口元を歪めて牙を見せつけた。

ズシン、ズシンと道路に足型をこさえながら、怪獣はゆっくりと、しかし確実に少年に迫っていた。少年は一刻も早く逃げようと思ったが、足が動かない。このままでは踏み潰されるか、光線を当てられて死ぬ。そう感じた少年は無駄と分かりながらも叫んだ。

「た、助けてえええ！」

「まあかせなさあ〜い！」

不意に返ってきたのは、身に覚えのない声。怪獣にもその声が聞こえたのか、辺りをキョロキョロし始めたが、その人物は猛スピードで怪獣の腹めがけて体当たりしてきた。怪獣も不意の攻撃に対処できずに倒れた。

一体誰が助けてくれたのか。少年は驚きつつも正体を確かめようとした。その人物は、まだ倒壊してないビルの屋上に降り立った。あれだけのパワーを秘めているのだ。アメリカンヒーローか、もしくは最近噂になっている仮面ライダーか。そう予想していた少年だったが、ようやくその姿を確認できたところで、少年は思わず目を疑った。ビルの屋上に立っていたのは、ウサギの柄が入ったパジャマ姿の少女だった。右脇には枕を抱き、身長より長い髪はビル風になびいていた。

「街を壊し、人を傷つける悪い怪獣めえ！ この魔法少女『ねむりん』が、やっつけてやるう！」

そう叫んだ後、少女は屋上から跳び、「とうっ！」という掛け声と共に起き上がりとした怪獣の眉間に飛び蹴りを入れた。怪獣は泣き声をあげた。尚も暴れようとする怪獣に対し、少女はその容姿からは信じられないほどに蹴ったり殴ったり、枕で叩きつけたりと、怪獣を圧倒している。

だが、怪獣もやられてばかりではいられないと思ったのか、反撃とばかりに少女を踏み潰そうと前進した。少年が、危ないと叫んだが、少女は冷静だった。

「よおし。せつかくだからこれを使っちゃおう！」

何をする気だと思っていると、少女はポケットから端末のような何かを取り出し、タップした。すると、少女の右腕に、カニのハサミのような黄色い武器が装着された。

「(何でカニ……?)」

少年が困惑する中、少女はオオツ、と呟きながら自身の右腕につけられたパートナーの武器『シザースピンチ』を眺めていた。

怪獣は警戒する事なく右足を振り上げた。それで少女を踏み潰そうというのだろう。だが少女の方が一手早く、再び飛び上がって逆にシザースピンチで怪獣の足を挟み込んだ。

「どっ！いしょおおおおお！」

少女は見た目からは想像もつかないほどの豪腕で、怪獣をあっさりと持ち上げてひっくり返した。

怪獣は転倒して、頭を強く打った衝撃で目が回っているようだ。動きが止まってチャンスと見た少女は眉間に両方の人差し指を当てて、ポーズを決めた。

「ひっさあっ！・ねむりんビーム！・びびびびっ！」

稲妻状にギザギザに折れ曲がっているビームが眉間から放たれて、巨大な怪獣に命中。怪獣を雄叫びと共に金色の光に包み込まれ、段々と小さくなった。

やがて光が途切れた頃には、黒かった皮膚は薄い緑色に、角や牙はすっかり無くなり、稀によく見かけるトカゲぐらゐのサイズになっていた。少女はトカゲと少年の前に降り立って、にこやかに呟いた。

「あなたを操っていた悪い心を浄化しました。さあ、南の島にお帰り」トカゲはお礼を言うようにペこりと頭を下げ、陽気な動きでどこかへと去っていった。少女はしばしの間トカゲの後ろ姿を見つめていたが、しばらくして、とうっと飛び上がって空の彼方に消えた。

少年は啞然とした表情でその光景を見つめていたが、やがて辺りは光に包まれて、気がついた時には、ベッドの上で寝転んでいた。

夢……だったのか。頭の中でそう整理していると、下の階から母親の声が聞こえてきたので、少年は慌ててベッドから飛び降りた。

綿あめのように真つ白な雲が果てしなく続くそこは、夢と現実の狭間にある世界。そんな世界で魔法少女『ねむりん』はフワフワな雲の上に寝転び、マジカルフォンを操作していた。画面からは立体映像として、マスコットキャラクターのフアヴが浮かび上がっている。

マジカルフォンには、現在ねむりんが貯めてあるマジカルキャンデーの数が表示されているが、その数なんと、7兆5036億8568万9921個。

「今日の怪獣退治でいよいよ凄い数になっちゃったねえ」

『あれだけ世界だの宇宙だの救っていればそうなるぽん』

「ねえねえ。これってカンストあるの？」

『カウンターストップの事ぽん？ 数字の上限は設定上あるかもしれないけど、実際そこまで貯めた魔法少女や仮面ライダーはいないぽん』

「ふうん。じゃあもつと頑張つて貯めて、初めてキャンディーをカンストさせた魔法少女になろうかな」

『どうせなら現実で頑張ればいいぽん。シローも呆れてたぽん』

「現実で頑張つたら疲れるもーん」

ねむりんがあくびを1つすると、ねむりんの髪の毛の先を飾る、雲のような生き物、通称『ねむりんアンテナ』が反応を示した。

『パートナーガ来ルヨー！』
「ん」

それに反応してねむりんが体を起こすと同時に、ねむりんとフアヴの前に光が現れ、そこから左腕にハサミ型の召喚機『シザースバイザー』を装備しているカニのようなライダーが現れた。ねむりんのパートナーである仮面ライダー『シザース』だ。

本来夢と現実を行き来できるのはねむりん以外ないのだが、シザースは特別だ。その理由は、パートナーシステムにあった。ねむりんとペアを組んだ事で、シザースにねむりんの魔法を使える新たな

カードが付与された。そのカードは、『ドリームベント』。文字どおり夢に関する事なら何でも実現するのだ。夢の中に入る事はもちろん、誰かの夢の中で起きている事を現実世界に具現化させる事も可能なのだ。

「こんばんは。また夢の中でマジカルキャンディー集めですか」

「うん。そーだよ」

『ちようどいいところに来てくれたぽん。シザースからも言ってほしいぽん。ねむりん、現実世界で全然キャンディーを集めようとしてないぽん。パートナーとして、何とか説得してほしいぽん』

「ねむりんさん。分かっているとは思いますが、キャンディーの総数は確かにあなたがトップです。ですがそれはあくまでこの世界だけの話。現実世界には全く反映されていません」

シザースの言う通り、夢の中で稼いだマジカルキャンディーは夢の世界でしか通用しない。夢の中ならどんな敵であっても簡単にやっつけてしまう彼女がいくら荒稼ぎしようと、現実世界にはカウントされない。そして、ねむりんはこれまで現実世界で活動した事はない。つまり、現実世界においてはねむりんのキャンディー数は0なのだ。当然ファヴやシローが決めたルールが適用されるのは、現実世界でのキャンディーの総数である事は言うまでもない。つまり……。

「このままいけば、あなたの脱落は確定です」

『そうだぽん。現実でキャンディーを稼ぐべきぽん』

対するねむりんは再び雲の上に寝転がり、目をこすりながら微笑んだ。

「現実世界は、あなたや他の子に任せようと思ってるんだ。だってシザースって、普段はみんなの事を守ってるお仕事してるんでしょ？ 現実世界で会ったの、シザースだけだもん」

「……そういえばそうでしたね。あなたの素顔を知ってるのは私だけかもしれません」

「確か、道を教えてもらおうって思った時にバツタリ会ったよね」

「ええ。結局現実で会ったのはその時限りでしたけど」

2人が当時の思い出に浸っていると、ファヴが声をかけた。

『本当にねむりんはやる気ゼロぽん』

「だから、夢の世界はねむりんが頑張ってるから……」

「ですが、発表は明日です。そこであなたの名前が呼ばれたらあなたは脱落し、魔法少女ではいられなくなる。夢の世界で活躍できなくなりますよ」

「まあ、そうなるよねえ。楽しかった魔法少女生活もおしまいかあ」

ねむりんはそう呟いた後、起き上がって背伸びしてこう言った。

「でも、これを機に魔法少女を辞めるのもアリだと思っただあ。いつまでもグータラやつてるのも、それはそれでつまらなさそうだし」

「……魔法少女を辞めて、あなたは何をするつもりですか？」

「そうだねえ」

ねむりんは少し考えた後、自らの今後を話し始めた。

「ニート卒業して、就職活動しよっかな」

「……そうですか。分かりました。あなたがそう言うなら、私も無理に引き止めたりはしません。出来るならもう少しペアで残って、その時の特典をゲットしてみたかったです」

「それはちよつと無理そうだね。ごめんね」

「お気になさらず。私は生き残ってみせますよ。必ずね」

「うん。頑張つてね」

「それじゃあ、私はこれで失礼します。良い夢を」

「お休みなさい」

ねむりんは力の抜けた手の振りで、現実世界に戻るシザースを見送った後、眠りにつく事にした。

今宵もねむりんは良い夢が見れそうだった。

現実世界である路地裏に戻ったシザースは、夜空を見上げた。

「……とんだ貧乏くじを引いたかと思いましたが、まあ、彼女との縁も潮時だと思えば問題ないでしょうね」

それからシザースは、カードデッキから1枚のカードを取り出した。パートナーカードである。先ほどシザースが使用したそのカードは色が失われており、ベントインできない事を指し示していた。

「パートナーがいなくなっても、このカードの効力が消える訳ではないとシローは言っていましたし、今後も有効活用させてもらいますよ。私が生き残るためにね……」

それからシザースはカードをデッキに戻し、Vバックルからカードデッキを取り外した。シザースは黒いコートを着た青年となり、その場を静かに去った。

魔法少女として、仮面ライダーとして残る16人の枠に入ろうと、少しでも多くのマジカルキャンデーを手に入れようと、奮闘する者達が後を絶たない1週間。

そして、長く思えたその7日間が経過し、遂に1人目の脱落者が発表される、その時を迎えようとしていた……。

2.1. 最初の脱落者

「こいつは酷いな……」

「……なあ、ここの家つておじいさんとおばあさんの2人暮らしだったよな」

「ああ。まだ中に取り残されてるって話だぜ」

「でも、こんなに燃え上がってちゃあ……」

野次馬がそう口々に呟いている目先では、民家が炎に包まれており、何台もの消防車から一斉に放水されていた。が、予想以上に火の回りが強く、中に突入しようにもそれが出来ない。まだ家の中には老夫婦が救出されておらず、このままでは2人の安否も絶望的だった。

もはやこれまでか。誰もがそう思っていたその時、野次馬の1人がアツと叫びながら上空を指差した。側にいた何人かが見上げると、4つの人影が、遠くの民家の屋根から空高く飛び上がり、火事の現場に颯爽と突入していった。その道のプロである消防隊員でさえ突入を躊躇せざるをえないこの状況で、何者かが介入してきたのだ。

魔法少女や仮面ライダーだ。誰かがそう喚くと、野次馬達は思わず隣同士で目を合わせた。最近噂になっていく謎の人物達の事か。火事の事はそちのけで、そう口々に語り出していると、女性の声が聞こえてきた。誰かが倒れているらしい。慌てて何人かが声のした方へ向かうと、火事の現場から少し離れた路上に、老夫婦が倒れているのが発見された。気を失っているようだが、命に別状はなさそうだ。すぐに救急車を呼んで、2人を病院に運び込ませた。が、不思議な事に、いくら探しても声の主であろう女性の姿を確認する事は出来なかった。

ここで少しばかり時間を巻き戻し、火事が起きた直後の頃。屋根の上を転々としながら、スノーホワイト、九尾、ラ・ピュセル、ライアは現場へと急行していた。偶然近場で炎が上がっているのを目撃し、駆けつけたのだ。

4人は炎に包まれた家が視界に入った辺りで立ち止まり、スノーホワイトは魔法を駆使して耳を澄ませた。

『た、たす……け、て……』

「！ 聞こえる……」

「場所は分かるか」

「2階の右奥の部屋だよ！ そうちゃん！」

「任せて！」

中に取り残された人の居場所を特定し、情報を伝えた後、ラ・ピュセルが真っ先に飛び上がり、剣を抜いて肥大化させ、人がいるという地点から少し外れた所に向かってぶん投げた。剣は易々と屋根を貫き、4人は一斉に中へ突入した。

しばらく進んだ先に、老夫婦が倒れているのが見え、九尾は指差した。

「あそこだ！」

「よし」

スノーホワイトとライアが2人に駆け寄ろうとした時、老夫婦の近くにあった木柱が2人めがけて落下してきた。炎に焼かれて脆くなっていたのだろう。

「！ させるか！」

『SWORD VENT』

これを見た九尾は走りながら素早くベントインし、フォクセイバーで老夫婦の前に立ちはだかり、木柱を細かく斬り裂いて弾き飛ばした。おかげで老夫婦に怪我はなく、すぐに他の3人が老夫婦に駆け寄った。

「すぐに脱出するぞ」

「はいー！」

「ああー！」

老夫婦を担いだライアとラ・ピユセルを先頭に、スノーホワイト、九尾も続いて民家から脱出し、近くの路地に足をつけた。老夫婦を降ろした後、ライアは2人の安否を確かめた。

「煙を吸い込んではいませんが、まだ意識ははっきりしている方だ。すぐに病院に運べば、後は彼らが何とかしてくれるだろう」

「なら、後は近くの人に任せるか。ラ・ピユセル」

「うん。……誰か来てください！ 怪我人がここにいます！」

ラ・ピユセルが大声で叫び、人が来る気配を察知した後、4人は何事もなかったかのようにその場を去った。

サイレンの音も小さくなり、炎が小さくなった頃、4人はいつものように鉄塔で腰を下ろした。

「あの人達、大丈夫だったかな……？」

「多分大丈夫だ。さっき確認してみたら、マジカルキャンディーの数が一気に400個以上増えていた。あの2人が無事じゃなかったら、ここまでキャンディーは増えないさ」

ラ・ピユセルはマジカルフォンでキャンディーの数を確認し、2人が無事である事を知らせた。それを聞いて、スノーホワイトはようやく安堵の表情を浮かべた。

「良かった……」

「……それからさ」

と、ここでラ・ピユセルが少し口調を尖らせながらスノーホワイトに言った。

「この姿の時はそうちゃんって呼ばないでくれないか？ 調子狂うつ

ていうか……」

「ご、ごめんね。あの時は必死だったから、つい……」

スノーホワイトが申し訳なきように呟いていると、九尾が口を開いた。

「さっきの分も含めて、ここまでかなりマジカルキャンディーを集めたよな、俺達」

「ああ。特にスノーホワイトはね。何せ僕達と行動してる時以外でもキャンディーを集めてるし」

「私は、キャンディーを集めるために頑張ってるわけじゃないよ。人助けがしたくて、頑張ってるんだ。そういう魔法少女にずっと憧れたんだもん。だから、魔法少女を辞めたくないのも事実だけど、こんなに頑張れるんだ」

「キャンディーの数に関してはおそらく順位に変動はないはずだ。スノーホワイト、九尾が1、2位を占めている。2人の協力もあるから、俺とラ・ピュセルの脱落もないだろう。2人には改めて感謝しなければな」

「うん。僕からも礼を言わせてくれ。本当にありがとう」

「別に大した事はしてませんけどね」

「そうそう。私達が頑張れたのも、ライアやそうちゃ……ラ・ピュセルがいてくれたからだよ」

またそうちゃんと言いかけたのを聞いて、九尾とライアは仮面の下で笑いを堪えられなかった。

それから話題はとある魔法少女に関する事に移った。

「ねむりん？」

「うん。最近チャットでよく話すようになったんだ」

スノーホワイトがそう語るように、ここ最近になって、彼女はねむりんとチャットで世間話をするようになった。きっかけは、以前ラ・ピュセルが抱えている悩みが何なのかを探ろうとしている中で、夢の中に現れて九尾らに相談してみても、とアドバイスをもらってからだ。以来スノーホワイトはねむりんを気に入って、キャンディー集めに必死になっている間も欠かさずチャットルームに向かい、そこ

でねむりんと日付が変わる頃まで話していた。

「私はあの子が好きだなあ。話したい事が全部話せるから」

「そういう人は多いよ。いつもチャットルームにいて、楽しそうに人の話を聞いてくれるしね」

「どんな人なんだろう？ 一度直に会って話したいなあ」

「それは……、難しいかもな」

「えっ？」

ライアの眩きに反応したスノーホワイトだが、尋ねる前に九尾から声をかけられた。

「そろそろ時間だな。チャットルームに入るぞ」

それを聞いてスノーホワイトは表情を強張らせた。

今宵は成績発表の日。この後行われるチャット会で、ファヴとシローから最もキャンディーの少ない人物、すなわち脱落者が発表される。チャットルームにログインしてから、スノーホワイトはポツリと眩いた。

「脱落したら、永遠にその人とお別れになっちゃうんだよね。どんな人だったのかも分からないまま」

「ああ。私達の半分がこれからそうなるわけだからね」

「長い闘いになるが、そうならないように、今は頑張るしかない」

スノーホワイトが頷くと、ファヴとシローがチャットルームに入ってきた。すでにほとんどの魔法少女や仮面ライダーがそこにいた。

チャット内に、余裕そうなクラムベリーが奏でるバイオリンの音色が、BGMの如く鳴り響く中、最初にファヴが労いの言葉をかけた。ファヴ『みんな、お待たせぼん！　まずはみんな、この1週間お疲れ様ぼん！』

シロー『では、今週の脱落者を発表する前に、成績が最も良かったトップ3を発表する』

ファヴ『今週のトップは、スノーホワイトだぼん！　そして2位は九尾、3位は龍騎だぼん！』

予想通りといえば予想通りの結果となり、様々なコメントが出てきた。

龍騎：『ツシヤア！』

トップスピード：『おお！　やったな新人共！』

クラムベリー：『おめでどう』

オルタナティブ：『素晴らしいですね』

スノーホワイト：『みんなありがとう！』

九尾：『ありがとうございます』

ミナエル：『やつぱりねー！』

ユナエル：『本命だもんねー』

インペラー：『やつぱかなわねえなあ』

ルーラ：『……ふん。新人のくせに』

アビス：『まあまあ。ここは素直に3人を讃えましょう』

そして話題は、皆が最も気にしている最下位の発表へと移った。

シロー『では、今週最もマジカルキャンディーが少なかった者を発表する』

一同が緊迫していると、ファヴからその人物の名が出てきた。

ファヴ：『今週の最下位は、「ねむりん」だったぼん！』

「ええ？？」

スノーホワイトが結果を聞いて、驚きの声をあげた。あまり接点の

なかった九尾は特にリアクションを取る事はなかった。ただ、ラ・ピュセルとライアはさも予想通りと言わんばかりの表情と雰囲気だった。

一方でチャット内では他のメンバーによる別れの挨拶が始まった。

シスターナナ：『あなたとお別れだなんて寂しいです、ねむりん』

ねむりん：『今まで楽しかったよ、シスターナナ』

ウインタープリズン：『どうか、お元気で』

ねむりん：『あなたもね、ウインタープリズン』

ファム：『もつと話とかしたかったけど、もう無理なのね』

ねむりん：『そうだね、ファム。でも、ファムの話も面白かったよ』

トップスピード：『俺の話とかもちゃんと聞いててくれたしな！』

マジで感謝してるわ！』

ねむりん：『ありがとう、トップスピード』

皆のコメントから視線を外した九尾は、そこでラ・ピュセルとライアの方を向いて尋ねた。

「……なあ。ひよつとして知ってたのか？ 真っ先にねむりんが脱落するって事」

「知ってた……というより」

ルーラ：『まあ、当然よね』

九尾の問いに答えるかのように、ルーラがコメントすると、ピーキーエンジェルズがこうコメントした。

ミナエル：『いっつもチャットルームに入り浸ってちゃあね』

ユナエル：『ねー』

ゾルダ：『そりゃあ仕方ないよな』

ねむりん：『てへへ』

ねむりんが照れたようにコメントしていると、ライアが口を開いた。

「大方予想はついていた。彼女は基本的に夢の中でしか活動しない。夢の中のマジカルキャンディーの獲得数はダントツで彼女がトップだが、現実世界ではおそらく0なのだろう。それに」

「それに？」

「彼女もこうなる事を望んでいたように思える。いつまでも魔法少女ばかりを務めているわけにはいかないと考えて、脱落を選んだ」

それを聞いたスノーホワイトはいてもたってもいられずに、コメントを書き込んだ。

スノーホワイト：『ねむりん！ ゴメンね、私、ねむりんの気持ちに気付けなくて……』

ねむりん：『へーきへーき。ちよつとしか絡めなかったけど、楽しかったよ、スノーホワイト』

スノーホワイト：『うん、私も』

そして最後に、パートナーのシザースが別れの挨拶を交わした。

シザース：『こうも早くパートナーがいなくなると寂しいものがありますね。ですが、後の事は心配せずとも、私は生き残ってみせますよ。それが、街のみんなの平和を守る私の役目でもありますから』

ねむりん：『うんうん。これからはまとめサイトで、シザースやみんなの活躍、観てるからね』

シロー：『別れの言葉は済ませたか？』

ねむりん：『うん。もう大丈夫』

ファヴ：『じゃあ、さよならぼん！』

ファヴがそう言ったその瞬間、チャット内からねむりんのアバターが唐突に消え去り、『ねむりんさんを削除しました』というメッセージが写った。

「↓」

これにはスノーホワイトら4人だけでなく、何人かのメンバーも目を見開いた。

ラ・ピュセル：『おいおい、そりゃあないだろ!!?』

龍騎：『ちよつといくら何でも今のは……』

ファヴ：『仕方ないぼん。これは厳密たるルールだぼん』

インペラー：『ルールって……』

シロー：』とにかく、今週のチャット会はこれでお開きとする。次週もマジカルキャンディーの少ない者を脱落とする』

ファヴ：『みんなもトップのスノーホワイトを目指して頑張ろうば

ん！』

それが締めという言葉だと捉えた魔法少女や仮面ライダーは、1人2人とチャットから退出していった。気がついた時にはスノーホワイト、九尾、ラ・ピュセル、ライア、そしてクラムベリー、オーデイン、ファヴ、シロー以外誰もいなくなっていた。

「みんな、俺達も出よう」

「そう、ですね」

ライアという言葉に九尾は頷き、スノーホワイトとラ・ピュセルもねむりんがいなくなった寂しさを感じつつ、ログアウトのボタンをタップした。

スノーホワイトにとって、つい最近知り合った魔法少女がいなくなってしまうのは残念だったが、くよくよしていても仕方がない。4人は次週以降も脱落する事がないように誓った後、その日は解散となった。

ただ1つ、メンバーの中でクラムベリーとオーデインだけがなぜ最後までチャットルームに残り続けているのかだけが疑問に思う九尾であった。

2.2. 永遠の眠りへ

「……ふう。魔法少女としての時間もお終いかあ」

マジカルフオンから自身のアバターが消されたのを確認した、ジャージ姿の三条合歡はベッドの上で息を吐いた。

合歡は幼い頃に喘息を患い、それが原因で外に出歩く事が少なく、幼少期は兄や姉の体験談を心の底から楽しく聞く事が日課となっていた。

喘息そのものは小学校に上がるまでには完治していたが、その頃には彼女の性情は確立していた。自分で動くよりも他人が動いたり話したりしている様子を見たり聞いたりするのが好きになり、一生懸命な事や争い事は苦手になった。

大学を卒業した後も家事手伝いと称して読書とゲームに勤しむ、通称『ニート』と呼ばれる位置に落ち着いたが、家族は誰一人として咎めるような事はしなかった。元々三条家が大地主という事もあり、経済的に余裕があったからだ。だからこそ、のんびり屋の合歡を家族は愛し、甘やかしていた。

『魔法少女育成計画』をプレイするようになったのは、単に家での時間を持て余す為であった。もちろん何万人かに一人が本物の魔法少女になれるという噂も耳にしていた。そして何日かプレイしているうちに、彼女は魔法少女『ねむりん』となった。

奇跡の力を手にしたとはいえ、彼女のライフスタイルが変動する事はなかった。面倒事も争い事も嫌いなので、自身の魔法である、夢の世界を自由に行き来できるというものを利用して、様々な人達の夢に入り込み、困っていたら手助けする。夢の中では無敵な彼女は、そうやって魔法少女としての生活を楽しんでいた。

当然、魔法少女や仮面ライダーの夢の中に入る事も可能であり、週に一度のチャット会に参加し、皆の話を聞くだけでなく、夢の中に参加もしていた。直接見た事のある相手ならば誰の夢かは一目瞭然だ。ねむりんは特に魔法少女や仮面ライダーが見る夢を好んでいた。

スノーホワイトは歌って踊れるアイドル魔法少女になっていた。シスターナナはお城の塔に閉じ込められているところに王子様が助けに来てくれるというものだった。

トップスピードは箒のレースで優勝していた。

龍騎は様々な場所に忙しく取材していて、一人前になろうとしていた。

ピーキーエンジェルズは新幹線やSLに乗って、某すごろくゲームをしていた。

ガイは対戦型の格闘ゲームで連戦連勝だった。

ルーラはどこかの国の女王様になっていた。

ウインタープリズンはマンシヨンの一室でシスターナナとイチヤイチャしており、見るに耐えないと思つて、途中で退散した。

ライアはコイン占いで人々を笑顔にさせていた。

ラ・ピュセルはドラゴン退治をしていた。途中でピンチになったので、ねむりんは助太刀とばかりに石を投げた。ラ・ピュセルを援護するはずだったそれはドラゴンに向かわず、狙い誤つてラ・ピュセルの後頭部に直撃。慌てて逃げ帰った。翌日のチャットでラ・ピュセルが「朝起きたら何故か後頭部に大きなたんこぶが出来ていた」と、首を傾げながらボヤいており、ねむりんは心の中で謝った。思えばあれもいい思い出だったと、合歓は思った。

が、そんな楽しい日々もこれで終了。現実世界でのキャンデーの数が最も少なかった為、魔法少女としての資格は剥奪された。

「……まあ、これを機に働くのもアリだよねえ」

合歓がそう呟いていると、電源を切ったはずのマジカルフォンからファヴが飛び出してきた。

『まだ魔法少女ではなくなったわけじゃないぽん。日付が変わるまで、ねむりんに変身できるぽん。最後は悔いのないように仕事をするのもアリぽん』

「そうなの……？」

合歓は時計に目をやった。時刻は午後11時40分。つまりあと

20分はねむりんでいられる。ファヴのアドバイスを聞いて、合歓は頷いた。

「それじゃあ、もうちょっと頑張ろっかな」

そう言って合歓はマジカルフォンの電源を入れて、のんびりとした口調で言った。

「へ〜んし〜ん！」

マジカルフォンをタップして、ねむりんに変身すると、早速魔法を使って夢の世界へダイブ。ねむりんアンテナが、反応のあった場所へとねむりんを案内した。どうやら魔法少女が夢を見ているようだ。

そういえば、パートナーであるシザースの夢は結局一度も見なかったな。現実世界では会った事があるのに、と、ねむりんは思った。

やって来たのは、中世のヨーロッパ風の街中。街は興奮する人々で溢れかえっており、お祭り騒ぎとなっていた。そんな人々の上空をねむりんは飛び回り、宿屋らしき看板を掲げた建物の屋根に腰を下ろした。

ねむりんの目線の先には、騎士や兵士に守られながら移動している馬車があり、その窓からお姫様らしき人が覗いていた。見た事のある

シチュエーションだと思ったねむりんは、ルーラが見ている夢なのかと思っていたが、どうも様子がおかしい。お姫様の輪郭は僅かにボヤけている。つまり、この夢はルーラのものではないという事だ。

「誰の夢なのかなあ？」

ねむりんが疑問を口にしながら辺りを見渡していると、群衆から1人離れ、周囲の熱狂とは一味違う雰囲気を感じ出している少女が目が留まった。小学1年生ぐらいだろうか。可憐さが目立つ少女を見つめて、ねむりんは察した。この夢は、彼女が見ているものなのだ、と。そしてその幼い少女は魔法少女である事も推測できた。

「(でも、あんなに小っちゃい子も魔法少女だったんだ。誰の変身前かな……?)」

時間も時間なので、ねむりんはフワフワと飛び上がって、少女の隣に着地した。少女は突然降ってきたねむりんを完全にスルーしており、お姫様に見惚れていた。

ねむりんは気にかけてくれなかった事に少しショックを覚えつつも、顔を見て話しかける事にした。どこかで見た事のあるような顔つきだったが、あまり覚えがなかった。

「あなた、お姫様が好きなの？」

そこでようやく少女もねむりんも反応を見せ、ねむりに顔を向ける事なくコクリと頷いた。

「可愛いし、格好いいし、お姫様だから」

「うんうん。やっぱりお姫様はいいよねえ」

「大きくなったら、お姫様に仕える人になるの」

「へえ。仕えるなんて難しい言葉知ってるんだねえ」

「うん」

今時の子供は奥が深い。そう思ったねむりんは、少しばかり子ども心をくすぐらせようとして、こんな事を言った。

「そうだねえ……。でも、お姫様に仕えるんじゃないやなくて、あなたがお姫様になるのはダメかな？」

「……え」

そこで初めて少女が目線をねむりんに向けた。その瞳からは驚愕

の色に染まっているのが分かる。ねむりんは少女の視線に合わせるように、腰を屈めた。

「きつとなれるよ。女の子は誰でもお姫様候補なのさ」

「私が、お姫様に……、なる……」

どうやら思った以上に効果てきめんだっただらしい。そう思ったねむりんは満足げに、呆然とする少女の頭を撫でてから、別れを告げるように手を振った。

「カッコよくて、可愛いお姫様になれるといいねえ」

そう呟いたその直後、脳内にファヴの声が響き渡った。

『それじゃあ、時間だぼん！』

刹那、ねむりんの視界は暗く塗り潰された。

ここで少し時間を遡り、チャット会がお開きになった頃。

一気に静まりかえったチャットルーム内では、クラムベリーとオーデインが、ファヴとシローにある事を確認していた。

クラムベリー：『ファヴ、シロー。お聞きしたい事があるのですが、

よろしいですか？』

シロー：『何だ？』

クラムベリー：『魔法少女や仮面ライダーの資格を剥奪されると、具体的にどのような事が起きるのでしょう？』

シロー：『ああ。その事か』

クラムベリーの質問にいけしやあしやあと述べたのは、ファヴだった。

ファヴ：『資格を奪われた魔法少女や仮面ライダーは死んじゃうぽん』

オーデイン：『随分と簡単に言っただけではいるが、それは魔法少女や仮面ライダーとして死ぬ、という比喩的な意味なのか？』

ファヴ：『違うぽん。生物として、息の根が止まるって事ぽん』

シロー：『力の権利を失う事、それはすなわち生き物としての本質がなくなる事だからな。これは確定事項だ』

オーデイン：『……そうか』

オーデインはいつものように腕を組み、静かに呟く。

時刻は午前0時を少し過ぎた頃。

次女の部屋の明かりが未だについているのに気づいた合歓の母親が、ノックしても返事がないので、なるべく音をたてないように扉を開けた。

視線の先のベッドの上では、愛おしき次女の合歓がうつ伏せになっていた。右腕がベッドからダラリと垂れ下がっているが、いつものように寝ているようだ。が、布団も何も被っていないのに気づいた母親は、彼女に近づいた。

明日は合歓にとつて大事な、会社の面接がある。社会人としての一歩を踏み出す為の大切な日だ。冬も近いこの時期に風邪をひかれては本人も困るだろうと思った母親は、布団をかけてあげる事にした。しかし布団は微動だにしない合歓の下にあり、引っ張ろうにも、合歓の全体重がのしかかっている状態では難しい。

かわいそうに思ったが、合歓を起こすしかない。母親は合歓の体を揺すった。が、どういうわけか合歓は一向に目を覚ます気配がない。熟睡しているのだろうか。母親はふと何気なく彼女の手に触れた。

途端に、母親の口から悲鳴が漏れた。

次女の手は恐ろしいほどに硬直しており、今までに感じた事がないほどに、冷たくなっていた。

そう。

三条 合歓は、永遠の眠りに誘われたかのように倒れていた。

そして、その瞳が開く事は2度となかった……。

《中間報告　その1》

【ねむりん（三条 合歓）、死亡】

【残り、魔法少女15名、仮面ライダー16名、計31名】

※ただし、現時点で参加が認められていない魔法少女も含む。

23. 生死をかけたゲーム

翌朝、仮面ライダー龍騎こと、城戸 正史はいつものようにOREジャーナルへ出勤した。

生き残りをかけて、他の魔法少女や仮面ライダー達とキャンデーの数の多さで競い合う状況が続いてはいるものの、仕事の方を疎かにするわけにもいかない。昨晩はねむりんが脱落し、残された脱落枠は15個。特別仮面ライダーを続けたい理由はないが、人助けに役立つこの力を手放すのも気がひけるので、出来るなら生き残りたい。

「……ッシヤア！ 今日もやるぞ！」

気持ちを切り替えようと、正史はビルの手前で気合いを入れてから、社内に繋がる扉を開けた。室内には大久保編集長が居座っていた。

「おはようございます！」

「おう、正史。随分張り切ってるな」

「ういっす！」

「ま、元気なのはいいこった。そんなテンションを下げるようで悪いが、早速働いてもらおうぞ」

「？ どういう事っすか？」

正史が首を傾げていると、大久保が一枚のメモを渡した。そこには住所が記載されていた。キョトンとする正史に大久保は説明した。

「昨晩、この街に住む若い女性の変死体が自宅で見つかった。詳細はまだ分かってない。てなわけで、お前にはそこに書いてある住所の所に向かってもらおう。令子もすでに向かってるそうだから、現地集合って事だ」

「は、はい。分かりました……」

せっかくテンションを上げたばかりなのに、よもや転がり込んできたのは、死人が出た事件の調査。正史は言われた通りにしつつも、少し沈んだ気持ちで、現場に向かった。

メモに記された住所に従って現場に到着すると、一軒の民家の前にパトカーが停まっていた。野次馬の数はそれほどではないが、近所の

住民らしき人々がヒソヒソと会話していた。

その野次馬から少し離れた所に、令子が見えたので、正史は声をかけた。

「令子さんー!」

「来たわね。それじゃあ早速始めるわよ」

「ちよ、待っててください令子さん!」

正史と合流した令子は野次馬を押し退けて、被害者の自宅に入っていく、正史もそれを追いかけた。

玄関から入って早速、目の前に刑事らしき男性と、被害者の身内らしき両親と兄弟姉妹と出くわした。コートを着込んだ刑事は、近づいてくる令子と正史に訝しんだ。

「何ですかあなた達は。勝手に入ってきては困るんですが」

「突然失礼します。OREジャーナルの者です」

彼女の強みである、強気な姿勢を全面に出し、それを聞いて、男性は少しばかり反応を示した。

「ああ、あなた達がそうですか。いつもおたくの記事は拝見させてもらっていますよ」

「あ、ありがとうございます! あ、これ名刺です」

目の前の刑事が好青年だと判断した正史は、名刺を刑事に渡した。

「これはどうも。私は今回の事件を担当する事になりました、須藤すどう充みつるです」

そう言って須藤は警察手帳を見せて自己紹介した。

「それで、早速この事件に関する調査を行おうと思っておりますが」

「構いませんが、捜査の邪魔になったり、被害者のご家族の方を侵害するような事だけは避けてくださいね」

「承知します。では確認しますが、今回の事件の被害者は、この家に住む女性、三条 合歓さん24歳、という事でよろしいですか」

「はい……! 私達の娘です……!」

すすり泣きとともにそう答えたのは、被害者の母親らしき人物だった。続いて令子は正史が来る前に聞き込み調査をした結果を確認した。

「こちらの調べでは、昨晚被害者の息が止まっているのを確認した、第一発見者の母親が警察に通報した、との事ですが」

「ええ。死亡推定時刻は午前0時。死因は心臓発作、との見解です」
須藤と令子の会話が続く中、正史は脳裏に引っかかる事があった。

「(三条、合歓……。合歓……。ねむ……。……。ねむりん!?)」

不意に思い浮かんだのは、昨晚脱落した魔法少女の名前。その名前と今回の被害者の名前が噛み合っている。おまけに死んだと思われる日時も、ちょうど彼女が魔法少女でなくなった時とほぼ同じ。単なる偶然とは思えない。取材ころではないと思った正史は、慌てて家の外へ飛び出した。

「ちよつと、城戸君!? どこに行くのよ!?!」

令子の叫び声も無視して、正史は走り去った。

その後聞きたい事を全て聞き終えた令子は、正史を探す為に退散し、須藤と合歓の家族は遺体発見現場へと足を運び、事情聴取をした。「すると、あなたがこの部屋に入って合歓さんを起こそうとした時には、すでに息を引き取っていた、という事ですね」

「……はい。今日は合歓にとつて大事な日だったので、風邪をひかないようにしようとしたのですが、まさかこんな事になるなんて……!」

泣き崩れる母親を、沈痛な面持ちで支える家族。それを見た須藤は優しく声をかけた。

「失礼ですが、娘さんに恨みを持つような方に心当たりはありませんか?」

「それは、ないはずです。合歓はほとんど外出する事なんてありませんでしたし、誰かと接点を持つような事は……」

「なるほど……」

合歓の父親がそう答えると、須藤は頷き、それからこういった。

「荒らされた形跡がないところから見て、殺人事件の線は低そうですね。自殺……にしては遺書らしきものも見つかってませんし、凶器らしきものも近辺に無かったと報告されています。やはり、娘さんが過去に患っていた持病が再発して死に至った……と考えるのが妥当かと

……」

「そう、ですか……」

「とにかく、引き続き捜査を進めて、もう少し詳しい事が分かり次第またご連絡いたします。後は我々が全力で捜査しますので、皆さんは別室で待機しておいてください」

そう言われて、合歓の家族は辛い気持ちを互いに支え合いながら、リビングへと戻っていった。

すでに合歓の遺体は外に運び出されており、彼女の自室には現在、須藤以外誰もいない。静まり返った室内を見渡しながら、須藤は口を開いた。

「……なるほど。これが彼らのやり方、という事ですか」

それから膝を曲げて、合歓の遺体があつたであろう場所に手を置いた。

「まさか本当にお別れする事になるとは。……ですが、私は生き延びてみせますよ。あなたの魔法を受け継いだ私に任せて、あなたはゆっくりとお休みなさい。三条 合歓さん……いや、魔法少女、ねむりん」

そう呟く須藤が着込んでいるポケットから、黒いケースのようなものがはみ出ていた。

時間は少し遡り、正史は三条家を後にすると、路地裏に入り込み、ポケットから急いでマジカルフォンを取り出してシローに連絡を入れた。

「頼む……、出てくれ……！」

正史は周りに人がいないのを確認しながら懇願していると、ようやくシローと連絡が繋がり、立体映像として現れた。

『どうした。こんな朝早くから』

『どうしたじゃねえよ！ シロー、お前に聞きたい事がある』

正史は表情をいつも以上に厳しくしながら、シローに尋ねた。

『ほう。何が聞きたい』

「昨日脱落したねむりんの事だ。ねむりんの正体って、もしかしてこの家で亡くなった三条 合歓なのか!? もしそうなら、昨日の一件とこれって関係あるのか!?？」

焦る気持ちになりながら正史が問い詰めると、シローから返ってきた返事はこうだった。

『ああ。その通りだ。ねむりんの正体は三条 合歓だとファヴから聞いている。魔法少女に関する担当は彼が務めているからな。そして今回の脱落により、彼女の死は確立した』

「なっ……！」

告げられた真実に、正史は愕然とした。魔法少女の資格が剥奪された事で、合歓は死んだ。その事実が、正史に重くのしかかったが、同時に疑問が湧いた。

「何で……！ 何で魔法少女じゃなくなったからって死ななきゃならないんだよ!?？」

『それが今回の決まりだからだ。魔法少女や仮面ライダーとしての力を失う事は、すなわち生物としての本質を失い、それこそが『死』というものだ』

「意味わかんねえよ……！ 大体、何でそんな大事な事教えてくれなかったんだよ！」

『聞かれなかっただけだ。我々は君達が今回の事態を、隅々まで認識

したものと判断してここまで進行を進めていたにすぎない』

「な、お前ら……!」

不意に湧き上がったのは、理不尽にも合歓……もといねむりんを資格の剥奪と称して命を奪った事に対する怒り。そんな感情を読み取っていないのか、あるいは分かかって無視しているのか、シローは淡々と呟いた。

『聞きたい事はそれだけか? なら私はここで失礼させてもらう。私もファヴも個人にいつまでも付き合っていられるほど暇じゃないのでね』

「お、おい待てよ、お前……!」

「城戸くくん?」

正史が呼び止めようとした時、令子が路地から顔だけ覗かせてきたのを見て、慌ててマジカルフォンをポケットにしまった。令子は苛立ったように正史に詰め寄った。

「ちよつと城戸君。取材を放って勝手にどこかに行くなんて、ジャーナリストである以前に社会人としてどうかと思うわよ」

「す、すみません……。知り合いから急に連絡が来まして……」

どうにかしてその場を誤魔化した正史は令子と共に、OREジャーナルに戻った。後でマジカルフォンを確認してみたが、すでにシローはいなくなっていた。

これはもはや自分一人で抱える問題ではない。そう結論づけた正史は令子から詳しい事件の詳細を取りこぼす事なく聞き出し、空いた時間を使ってまとめ上げた後、夕方近くで仕事を早めに切り上げて、退社した後マジカルフォンを通じて、チームの一員であるトップスプード、ナイト、リップルを筆頭に、何度か交流のあるメンバーにチャットルームへの召集をかけた。

その後時間がかかり、時刻は午後7時を周った頃。チャットルーム内には、トップスピード、ナイト、リップル、九尾、スノーホワイト、ライア、ラ・ピュセル、シスターナナ、オルタナティブ、ヴェス・ウィンタープリズン、ファム、更には偶然ログインしていたマジカロイド44とゾルダ、そしてシザースが龍騎の話を聞こうと集まった。

トップスピード：『んでよ。俺らに話って何だよ？ 今までお前から呼びかけるなんてなかったはずじゃ』

ライア：『確かにそうだな。何があった？』

龍騎：『……みんな、信じられないかもしれないけど、落ち着いて聞いてほしいんだ』

龍騎は皆に念を押すと、チャット内にあるデータを表示した。それは龍騎が社内で編集した記事だった。

龍騎：『ここにいる何人かは知ってると思うけど、俺、新聞記者の仕事してるんだ』

シスターナナ：『まあ、そうでしたの』

龍騎：『で、この記事は今朝取材した事件を俺がまとめたものなんだけど……』

トップスピード：『ほおほお。どんなもんだ……？』

皆がしばらく記事に目をやっていると、真っ先にコメントしたのは、普段からチャット内では無口のリップルだった。

リップル：『ねえ。これってねむりんの事じゃない？』

スノーホワイト：『えっ!?!?』

ラ・ピュセル：『何だって!?!?』

九尾：『ー。おい、この被害者の名前……!?!?』

リップルのコメントにより、チャット内に動揺が走った。そんな中で、ゾルダとライアは冷静に記事を見つめた。

ゾルダ：『三条 合歓……。ああ。ねむりんの「ねむ」って、自分の本名をそのまま魔法少女姿の名前につけただけか。シャレてるね』

ライア：『そんな呑気な事を言ってる場合じゃないだろう。名前といい、死亡したと思われる日時といい、偶然とは思えないな』

すると今度はシスターナナがこうコメントした。

シスターナナ：『ごめんなさい。実はこの記事を読んで、思い出した事があるんです。ウインタープリズン、申し訳ありませんが、あの事を……。』

ウインタープリズン：『分かった。ナナに代わって私が説明する』

オルタナティブ：『私も』

ウインタープリズンやオルタナティブがコメントしたのは、次の内容だった。

ウインタープリズン：『つい先ほど、ナナの頼みでねむりんのチャットでの会話の記録を抜き出そうとしたんだ』

よほどねむりんと別の別れが辛かったのだろう。少しでも記憶の片隅に置いておけるように、これまでのねむりんのコメントを1つ残らず自身のマジカルフォンに記録しようとシスターナナが提案した。彼女の頼みを聞いて、ウインタープリズンとオルタナティブが協力して過去のデータを見返しているうちに、ある記録が目についたそうだ。

オルタナティブ：『これは、その時のコメント欄です』

そしてオルタナティブが表示したのは、昨晚チャット会が終了した後、まだ残っていたクラムベリーとオーデインが、ファヴやシローと会話している時のログだった。チャット内でのやり取りは必ず残るようになっており、そのコメントを見て、何人かは背筋が凍りついた。

龍騎：『！・　こんな会話があの後あったなんて……！』

トップスピード：『おいおい、んな事アリかよ……！』

ウインタープリズン：『内容が内容だけに、この事実を話してもいいかも分からなかった。そもそも確証がなかったから』

オルタナティブ：『ですが、先ほど見させてもらった龍騎の記事を読んで確信しました。これは紛れもない事実だという事を』

スノーホワイト：『そんな！　それじゃあねむりんは……』

マジカロイド：『まあ、この2つの内容を総合して見ても、死んでマスよね』

ナイト：『だろうな』

沈黙が辺りを支配する中、龍騎はこの事をこの場にはいないメンバーも含む全員に知らせる必要があるとコメントし、全員の召集を提案した。誰も反対する者はおらず、早速チャットルームへの集合を呼びかけた。もちろんファヴやシローを呼び出すのも忘れずに。

しばらくして全員が集まったところで、龍騎が事の全てを包み隠さず話した。当然何人かの魔法少女や仮面ライダーは信じられないと言わんばかりにコメントし、疑問の矛先を先ほどから黙っているファヴやシローに向けた。

アビス：『これはどういう事だ』

ファヴ：『どうもこうもないぽん。つまりはそういう事だぽん』

シスターナナ：『脱落したら死ぬなんて、そんな事……！』

ウインタープリズン：『ナナ……』

泣き崩れるシスターナナを、ウインタープリズンは抱きしめた。

トップスピード：『で、どうなんだよファヴ、シロー！　魔法少女や

仮面ライダーが脱落したら、本当に死ぬのかよ……！』

ファヴ：『そうだぽん』

シロー：『否定はしない。事実だからな』

インペラー：『マジか……？』

たま：『う、嘘……！……？』

ミナエル：『じゃあねむりん死んだの？』

ユナエル：『の？』

カラミティ・メアリ：『……ほう』

カラミティ・メアリもこの時ばかりは興味をそそられたようだ。それだけ明かされた事実が皆にとって衝撃的だったのだろう。いとも簡単に事実を認めたファヴとシローはこうコメントした。

ファヴ：『みんなは魔法の力で強さを極限以上に引き出された魔法少女や仮面ライダーだぼん。その権利を失う事は、生き物としての本質を失くしてしまうって事だぼん』

シロー：『それに、魔法少女や仮面ライダーでなくなった者による情報漏えいは、魔法の国からして見ても、絶対に避けなければならぬ事態だ。特に脱落者を多く選出する今回の問題では、そういった事が起きやすい。それを防ぐ為の措置。それが脱落者への対価だ』

ファヴ：『つまりは、死んじゃうって事ぼん』

まるで自分達は何も間違った事はしていないというコメントに続いたのは、これまでに類を見ないほどの批判だった。

龍騎：『ふざけんな！』

トップスピード：『納得いかねえ！』

ラ・ピュセル：『そんな……！』

スノーホワイト：『意味分かんないよ！』

タイガ：『本当に死ぬんだね……』

ミナエル：『死ぬぐらいなら魔法少女辞めるわ！』

ユナエル：『辞めるわ！』

ベルデ：『バカが。んな事したって結局口封じって言いくるめられて死ぬだけだろ』

ファヴ：『ベルデの言う通りぼん。同じ事ぼん』

シスターナナ：『そんな話聞いてません！』

ファヴ：『仕方ないぼん』

シロー：『これは確定事項だからな』

龍騎：『お前ら……！』

龍騎は怒りが爆発しそうになるが、すぐに思いとどまって、クラムベリーとオーデインに質問した。

龍騎：『なあクラムベリー、オーデイン。お前ら他に何か聞いている

事ってあるか!?!? 何でもいいから、このチャット以外であいつらと話した事とかさ!』

だが、2体のアバターは首を横に振るだけだった。

クラムベリー：『残念ですが、私達もそれ以上の事はお尋ねしておりません』

オーデイン：『我々は知りたかった事実を確認したかったただけだからな』

どうやらこれ以上情報は聞き出せそうにないらしい。一同が消沈していると、不意にある人物がこうコメントした。

ガイ：『へえ。脱落したら、死ぬって事か。……面白そうじゃん』

龍騎：『はっ!?!?』

ガイは何故か判明した恐ろしい事実に対し、面白いと答えたのだ。

ラ・ピュセル：『面白いだと!?!? 一体これのどこがだ!』

ガイ：『だってさー。ぶっちゃけつまんねえって思ってたんだ。単純にマジカルキャンディー稼いで魔法少女や仮面ライダーの数を減らしてくゲームなんて、幼稚園児のままごと程度だと思ってたけどさ。この話聞いて納得したんだ。そんなルールがあるんなら、良いよ。このゲームのつた』

ガイがヘラヘラと笑いながら、ファヴとシローに賛同するように拳手した。当然納得しない者もいた。

龍騎：『おい! お前自分が何言ってるのか分かってんのか!?!?』

人が死ぬんだぞ!』

ウインタープリズン：『そうだ。君とて例外じゃない』

ガイ：『うん、知ってるよ。でもこつちの方がスリリングあって、ゲームっぽいじゃん。俺、こういうゲーム大好きなんだ』

ゾルダ：『やれやれ。相当の道楽息子って感じだな、お前』

ガイ：『なんか嫌味っぽい感じだけど、別に何言われても平気だし。きっとこれから面白くなるよ、こういうゲームはさ』

龍騎：『さつきからゲームゲームって、これはそういう事じゃ……!』

王蛇：『ハハハッ!』

不意に王蛇が珍しくコメントして、一同はコメントを止めた。

王蛇：『何をくだらん事ばつか話してるか知らねえが、誰が死のうが知った事か。俺は今戦えればそれで良いんだよ』

フアム：『くだらないですって!?? あんたね……!』

王蛇：『お? やるか、俺と』

今にも王蛇とフアムの一触即発が起きそうになった時、九尾が、全員が集まってから初めてコメントした。

九尾：『やめておきなよ。こんな所で意地張ってどうするんすか』

シロー：『チャット内での喧嘩は禁止されているぞ』

2人は睨み合ったまま、距離を置いた。やがて締めという言葉としてフアヴがコメントした。

フアヴ：『それじゃあ、君達が話したいのはここまでと判断して、フアヴとシローはここで帰らせてもらうぽん』

シロー：『それから諸連絡だ。この後マジカルフォンの機能をバージョンアップさせておく。どのような機能かはこれから確かめて、今後に大いに役立ててもらいたい』

フアヴ：『それではみんな、また来週ぽん!』

龍騎：『あ、おい!』

龍騎の呼び止めも無視して、フアヴとシローは退出し、それに続いて他の魔法少女や仮面ライダーも、どうする事も出来ずに退出した。

この時から事実上、今回の一件は『魔法少女や仮面ライダーとしての存続をかけた競争』から、『生死をかけた闇のゲーム』へと意味合いが変わったといっても過言ではないだろう。

24. バージョンアップ

「(……本当に、死ぬんだ)」

もう何度目か分からない程にため息をつくスノーホワイトは、腰を下ろしている鉄塔の上から水平線上を眺めていた。

誰かに魔法少女である事を明かせば、その時点で魔法少女としての資格は剥奪され、死ぬ。つまり、両親や友人に自分が死ぬかもしれないと、相談する事さえ叶わない。

死にたくない。怖すぎる。そう思いつつも、結局ねむりんの死よりも、今後の自分の事ばかり心配していると気づき、自己嫌悪に至った。「(ねむりんだったら、こういう時どうしたんだろう……)」

あれだけチャットで話し合って仲を深めたばかりなのに、いざその少女の死を受け入れようとすると、悲しい気持ちで胸がいっぱいだっ

た。
スノーホワイトが顔を俯かせて暗く沈みきっている間、九尾、ラ・ピュセル、ライアの3人は一箇所に寄り添って、マジカルフォンを操作していた。電子音だけが鳴り響き、それに気づいたスノーホワイトが顔を上げ、気になって近づいた。

「何してるの？」

「うん。ちよつとね」

何かを確認しているようだが、一体何があるというのか。スノーホワイトの疑問は、3人の実演によって解消された。

「この表示を見ろ」

そう言つて九尾はマジカルフォンの画面を見せて、マジカルキャンデーの所持数をスノーホワイトに覚えさせた。スノーホワイトが領くと、隣にいたラ・ピュセルの持つマジカルフォンに近づけて、何やら操作をしていた。その後再びマジカルフォンを見せられた時、スノーホワイトはある変化に気づいた。

「……あれ？ 減ってる」

記憶に間違いがなければ、九尾のマジカルフォンに表示されているマジカルキャンデーの個数が半分に減っているではないか。それ

から再び2人が操作をしてスノーホワイトに見せると、今度はちゃんと、最初に見せられた数値と同じになっていた。

「何、これ……?」

「これがファヴとシローの言っていた、新しい機能であるバージョンアップらしい」

ライアがそう解説した。

「これが……?」

「いわば、マジカルキャンディーの譲渡機能が追加されたという事だ。ちなみに相手のマジカルフォンがオフになっても時間がかかるが、キャンディーのやり取りが可能だという事も実験で判明した」

「ええつと、……それで?」

「多分、マジカルキャンディーを増やすのに協力してやれっという、向こうからのメッセージだと思うんだ。今まで、モンスター退治だとキャンディーの稼ぎ分がこの中で一番少ないスノーホワイトに、僕達が均等になるように分け与えられるって事さ」

「つたく。こんなバージョンアップを考えてる暇があるんなら、魔法少女と仮面ライダーの人数を調節しておいてほしいもんだよ」

3人の会話を聞きながら、スノーホワイトは内心驚きながら3人を見返した。曇り空を背景にしつつも、スノーホワイトにはその3人が凛々しく、威厳に満ち溢れているように感じられた。

「みんなは、マジカルキャンディー集める気なの?」

「もちろんさ」

「ああ」

「まあ面倒ではあるけど、集めなきや文字通り首切られちゃう。やった方がマシだ」

「……怖いとか、思ったりしないの?」

「お前は怖いのか?」

九尾にそう尋ねられ、スノーホワイトは包み隠さず吐露した。

「そりゃあ怖いよ。誰かが死んだり、自分が死んだりとか、そんなの嫌だよ。お父さんやお母さん、友達にも会えなくなっちゃう。もう魔法少女のアニメを見る事も出来なくなるし、美味しいものを食べたり、

面白いものを見て笑ったりも出来なくなるなんて、そんなの……」

「怖い、よな。うん。僕だつて怖い。怖くないわけないよな。九尾やライアだつてそうだ」

ラ・ピュセルの呟きに、九尾とライアは頷いた。

「でもさ。怖いからつて何もしなかったら、次に脱落するのは僕らになる。そんなの嫌だろ？ だつたらさ、ここにいるみんなで最後まで頑張ろうよ」

その真剣な眼差しを見ているうちに、スノーホワイトはこれまで視聴してきた魔法少女アニメを思い返した。彼女達も、大切なものを守る為にその決意を胸に秘め、如何なる強敵が立ちはだかろうとも、挫けず挑んでいった。その時の彼女達の表情は、今でも忘れる事が出来ないほど、強い印象を幼き日の小雪に影響を与えた。

そして今、目の前の3人……九尾とライアは仮面で覆われている為表情までは読み取れなかったが、きつとその下ではラ・ピュセル同様、強い信念を抱いているに違いない。

自分に果たしてあんな表情が出来るようなものが備わっているのだろうか。置いてきぼりにされそうで不安に押し潰されそうになっているスノーホワイトの表情を察した九尾は、自然と手が動き、スノーホワイトの目にこびりついた水滴を拭った。

「だから、まあ……。とりあえず泣くな。仮にも俺はお前のパートナーだ。簡単に死なせはしないさ」

「もちろん、九尾だけじゃない。俺やラ・ピュセルも同じ気持ちだ。それに、お前の運勢は悪くない。だからあまり気に病むな」

2人について、ラ・ピュセルが鞘から剣を抜いて、柄をスノーホワイトに向けて膝をついた。

「例えこの身が滅びようとも、皆の剣となる事を誓いましょう。我が盟友、スノーホワイト、九尾、ライア」

やけに芝居がかった仕草や口調が目立つが、その表情は真剣そのものだった。頼もしさを感じる3人を見ているうちに安心感が生まれ、スノーホワイトは堪えていた涙が大粒となって流れ落ち、3人に、特に中心にいた九尾に抱きついた。鉄の鎧に覆われたその表面からは、

夜風に当たった影響で冷たさしか感じられなかったが、密着している事で次第に温かみを感じた。九尾は、パートナーの気が済むまで、抵抗する事なく抱きしめられ続けた。

ねむりんの死を嘆いているのは、何もスノーホワイトに限った話ではない。

「ねむりん……」
「……」

ビルの屋上の石段に腰掛け、手を目に当てて涙を流しているトップスピードと、黙って俯いている龍騎もまた、意気消沈していた。

トップスピードにとっては、自分の長話を最後まで嫌な顔一つせず聞いてくれた、数少ない魔法少女であり、龍騎の場合は、まだなつて比較的日の浅い事もあってさほど接点もなかったが、やはり同胞を失うという事実は、龍騎を落ち込ませた。

単なる脱落程度なら、変身前の姿で会う機会があつたかもしれない。が、蓋を開けてみれば、脱落する事は即ち『死』を意味するといふものであり、チャットで知ったクラムベリーとオーデインを除けばいち早くその真相に気づいた正史は、悔やみきれない気持ちでいっぱいだった。

そんな2人に声をかける者達が。

「……おい。もろいい加減落ち着いただろ」

「マジカルキャンディー集めの再会、いつになるんだか……。ぐずぐずしていると、他の奴らに置いて行かれる」

「ナイト、リップル……」

彼らと行動を共にするナイトとリップルが、嘆いている2人を見下ろしていた。

「……つと。悪りいな2人とも。もう大丈夫だ。な、龍騎」

「お、おう……。何かゴメン。心配かけさせちやつたな」

「心配なんかしてないし……」

「でもずつと側にくれてくれたじゃねーの。俺は嬉しいぞ。そう思わねえか、龍騎？」

「……そつか。ありがとな」

2人にお礼を言われると、ナイトは鼻を鳴らし、リップルは舌打ちした。いつもながらの反応を見せて、笑みがこぼれたトツプスピードは、パンと手を叩いた。

「うっし！ 暗い話はとりあえずここまでだ。キャンディー集めの前に、1つ腹ごしらえといこうぜ！ ちゃんと作ってきたからよ！」

2人もこつち来て座んなさい、と手招きして、2人は渋々承諾。龍騎とナイトは変身を解き、レジャーシートの上に座った。

「おっ、これ美味い！」

「だろ？ ちよいとマヨネーズを加えてみたのさ」

「へえ。それ良いな」

「お、そうだ正史。お前料理とかすんのか？」

「まあ自炊ぐらいは出来るよ。あ、後は餃子が俺の得意料理なんだ。結構自分なりにこだわっててさ。それに関してはちよつとうるさいんだけど」

「おお、餃子か！ 久しく作ってねえなそいつは」

「今度機会があったら振る舞ってあげるからさ。楽しみにしといて」

「おうよ！ ……あ。これ食ってみて。俺の自信作だぞ」

そう言ってトツプスピードが差し出したタツパーの中にはかぼ

ちやの煮物が敷き詰められていた。が、蓮二は無表情で他の料理に手をつけるばかりで、リップルにいたっては眉をひそめていた。

「? 何? もしかして嫌いだった?」

「……そんな甘いもの、おかずとして食べる奴の気がしれない」

「ええ、そっか? 美味しいじゃん。特別甘過ぎずって感じで」

「(……ここにいたか)」

正史が躊躇なくかぼちやの煮物を箸でつまんで口に頬張る姿を見て、リップルは呆れ果てた。と、不意にトップスピードが高笑いした。

「はっはっは! 分かるぜそれ! 俺もおんなじでさ。若い頃はそう思ってたんだ!」

「(……じゃあ何で作った)」

「んじゃ、こつち食べれば? ほれ、蓮二も」

トップスピードは玄米の入ったおにぎりを蓮二とリップルに差し出した。今度は2人とも躊躇せずに手にとって、口に入れた。味はなかなか美味だった。

玄米のおにぎりに続いて別のおかずを食す中、蓮二は冷静に今後の事を考えていた。蓮二として説明がないまま生命の危機に追いやられ、拳句の果てにねむりんがその犠牲者になった事に怒らないわけではなかったし、自分が死ぬ事を想定して胸が痛む事もあった。リップルも同じはずだ。それでも蓮二は冷静さを貫いた。

ここから先は、文字通り死ぬ気でキャンディーを集めなければならない。そうしなければ、死を待つばかりなのだ。その為には、利用出来るものは可能な限り利用する。パートナーであるリップルはともかく、常に鬱陶しくなるほど自分達に絡んでくる龍騎とトップスピードには毎度苛立たせられるが、助けを求める人を見つけやすく、且つ人助けに前向きな姿勢で臨んでいる2人と行動していれば、必然と自分達のキャンディーの獲得数も上がり、脱落する可能性は低くなる。要は、利用価値があるから付き合っただけで、いざとなれば切り捨てて、自分だけが助かる手はずも整えてある。

ここまでくると、我ながら最低だな、と思う蓮二だが、それも仕方ないと言い聞かせていた。彼には、生き残らなければならない理由が

ある。こんな事で死んでしまつては、ある目的が果たせなくなる。だから、絶対に死にたくない。何としてでも生きてみせる。

そう決心した蓮二は、気持ちを切り替えて、目の前に広がる料理を見渡しながら呟いた。

「……ただ、アレだな。こんな時でも、よく飯なんて食べようと思えるのか」

魔法少女や仮面ライダーに変身している間は、眠くもならず、飢えもない。とどのつまり、こうして食事をする事はさほど意味を持っているわけではないのだ。が、トップスピードはいつにも増して頑固な口調で言った。

「こんな時、だからこそ食うんだよ。生きる為には食わなきゃ。いぎという時に力が出ねーからな」

「うん。それすつごく分かる」

正史もおにぎりを力強く口に頬張りながら頷いた。

「それにな……」

不意にトップスピードは雲のかかった夜空を見上げ、首からぶら下げてあるお守りを握りしめながら呟いた。

「俺は、まだ死ねない。最悪でも、後半年は、絶対に生きるって、そう決めてんだ。あの人に、そう誓ったんだ」

「あの人……？ それに、半年って、何で……？」

「ん。何でもねえ。こつちの話」

正史が、トップスピードの言い方に疑問を投げかけたが、当の本人は笑いながらはぐらかした。

死への恐怖ではない、生きる事への執着、揺るぎない生存への意志が、彼女からは感じられると蓮二は察した。

「……でも、俺だって同じだ。こんな事で死ぬなんてごめんだ。だから、俺は生き残りたいよ」

正史のその言葉に、蓮二は反応し、表情をきつくしなから呟いた。

「……それだけの理由でか？」

「それだけって……。別にいいだろ。誰だって死にたくないって思うし」

「つくづくその煮物みたいに甘いやつだ。俺にはあるぞ。生きて、やり続けなければならぬ事がある。でもお前には特別な理由はない。そんな事でこの先やっていけると思ったら大間違いだ」

「そ、そんな言い方」

「文句は生き残りたい理由を見つけたら聞いてやる」

「っていうか、お前こそ何でそんなに生きようって思ってたんだ？」

「今のお前に答える義理はない」

そう言っただけで蓮二は再び黙り込んだ。リップルはその表情を意味深な表情で見つめていた。

「ま、何にしたって俺達協力してこれからもやっていこうぜ！ ほら、みんなもつと食つとけよ！」

トップスピードは元の勝気な表情に戻り、さらに食事を推進した。その後、一同は問題を探し、マジカルキャンデーをゲットする為に、夜のN市を巡回した。全ては生き残る為に。

唯一龍騎が疑問に思っていたのは、トップスピードが何故半年という中途半端な期間を目標として掲げたのか、そして最後の方で彼女が呟いた、あの人が誰を指しているのか、という事だった。

25. 強奪作戦

N市の一角にある西門前町には、その名の通り寺が多く、大小様々に軒を連ねていた。そんな西門前町にある、最も古びているように見える『王結寺』は、普段から人が寄り付かないという事もあって、隠れ家にはもってこいの場所だった。

現在、王結寺には魔法少女5人、仮面ライダー5人の計10人が居座っていた。段差の上の方でルーラが、ティアラに手を添えて、長いマントをクツション代わりにして腰を下ろしており、少し離れたところに置かれている廃れた仏像には、ベルデがもたれかかっていた。ルーラの隣には、正座しているスイムスイム、立って腕組みをしているアビスがおり、ルーラが見下ろせる範囲で、たま、ガイ、ミナエル、ユナエル、タイガ、インペラーが座り込んでいた。

「今回、マジカルフォンがバージョンアップされたわけだけど、これによって端末間でキャンディーを移動させる事が可能になった」

「う、うん……」

「……で、これが何を意味しているのか、お判り?」

ルーラが問いかけると、最初に挙手したのはたまだった。

「ええつと……。たくさん持つてる子が足りない子にキャンディーを分け与えましょう……。って事かな?」

「0点」

「あうう……」

たまの回答に、ルーラは冷たく採点した。続いて口を開いたのはピーキーエンジェルズ。

「チームを組んで、その中でキャンディーやりくりして、どうのこうのって事じゃね?」

「ああ、それ正解っぽい。お姉ちゃんマジクール。ならあたしらが一番有利だね」

「30点」

「ええ〜」

ルーラの採点に不満げな様子のピーキーエンジェルズ。と、今度は

インペラーが答えた。

「でもなく。こんな機能より他の奴のキャンディーの数が分かるようにしてほしいよな」

「誰が愚痴をいえと言ったバカ。―5点」

「ひでえ!?!?」

インペラーが悲鳴をあげる中、ルーラはさっさと無視してタイガに尋ねた。

「タイガ、あなたはどうかしら?」

「……」

「……チツ。ならスイムスイム、あなたはどう思う?」

「……」

タイガを首を傾げ、続くスイムスイムも首を横に振って、存在感のある乳を大きく揺らした。それがルーラを最も苛立たせて、睥睨した。

「ったく。本当にバカしかいないのかしら」

ルーラは頼みの綱とばかりに、ガイに質問した。

「ガイ。あんたはどうかしら。チャットであれだけ言ったのだから、分かっているはずよね」

「ああ、この機能ね」

尋ねられたガイは、あつさりと答えた。

「マジカルキャンディーには命がかかっている。んでもってこのタイミングで譲渡機能の解除。これはもうアレでしょ。『お前ら生き残りましたかったらキャンディーを奪い合え』っていう、運営からのメッセージ」
「……まあ、85点ってところね」

「イエーイ」

「え、マジで!?!?」

ガイがわざとらしく喜んでいる中、何人かは驚きを隠せずにいた。
「無理やり奪ってもいいの?」

「いいの? ってかそんな事やれるの?」

「フフフ……。それが出来るのよ」

そう言っただけルーラは立ち上がり、ピーキーエンジェルズに近づいて

口を開いた。

「時にミナエル」

「いや、そつちユナエル」

タイガとインペラーの兄弟によるダブルツッコミが炸裂し、ピーキーエンジェルズは笑いを禁じ得なかった。ルーラでさえ未だに見分けがつかないのだが、2人には即座に判明できた。単にショートカットのはねが内か外か、足首についているリボンが右か左かという違いだけだが、それでも注意して見ておかないと間違えやすいのだ。

「ええい紛らわしい！ ではユナエル！」

カンカンに怒りながらルーラは、ユナエルに「玉を掴む鷲」の像が先端に飾られた1メートルほどの象牙の王笏を向けると、呪文のような言葉を呟いた。

『お前のキャンディーを全て私に差し出せ』

「……はい、仰せのままに」

ユナエルはまるで操られたかのように自身のマジカルフォンを差し出し、操作をした。すると、RPGのレベルアップ音のような音が鳴り響き、マジカルキャンディーがルーラのマジカルフォンに転送されたのが確認できた。

「凄い……。本当に出来ちゃった」

「……！」

「フフ、そうよ。私の持つ魔法なら」

「コラア！ ユナエルのキャンディー返せ！」

「わく!?? 落ち着けてー！」

ルーラがその先を言おうとした時、ミナエルが体当たりをかましてきて、キャンディーを取り返そうとした。慌ててインペラーがミナエルのルーラから引き離し、ルーラは王笏をピーキーエンジェルズに向けて、その場で正座させるように命じた。すると2人は抵抗する事なく正座した。

そう。これこそがルーラの持つ魔法『目の前の相手に何でも命令できるよ』であり、この魔法によってガイ達を服従させてきたのだ。

ルーラはユナエルにキャンディーを返した後、不敵な笑みを浮かべ

ながら言った。

「この能力はただのキャンディー集めなら不利。……でも、やっと私へと流れが変わったのよ。加えて……」

そう言ってルーラはベルデの方を見た。

「パートナーシステムによって、俺もこの魔法が使えるようになったってわけだ」

そう言ってベルデがカードデッキから取り出したのは、ルーラのアバター姿が描かれているカード。つまり、強奪できるチャンスが二倍に増えたという事なのだ。それからルーラは愚民達に問い直すように言った。

「さあ、分かったかしら？ 死にたくなければ、これまで通り、私とベルデの指揮下で働く事ね。この先は私達2人の指示に従ってもらわ。それが嫌なら去るもよし。ねむりんの後をすぐに追わせてあげる」

だが、誰も反対する者はいなかった。ルーラの魔法は、極めて強力であり、逆らったところで下剋上できる未来が見えてこない。異論なしと判断したルーラは、鼻で笑いながらこう言った。

「では、作戦と役割を発表する。とは言っても、お前達バカでもやれるようにシンプルにいく。まずは現時点でキャンディーの所持数がトップのスノーホワイトからだ」

「おお。そりゃあ楽でいいや」

「超クールだよね」

「……本当に、やるの？」

「ううん。他の奴から強引に奪うのも、何ていうか良心が……」

ピーキーエンジェルズがいち早く賛同する中、たまとインペラーだけは未だに倫理的な理由からか、悩んでいた。そんな2人に、タイガとスイムスイムが声をかけた。

「これはリーダーの命令だよ。従わなきゃ死んじゃうよ」

「リーダーの言う事は絶対」

2人にそう促され、たまとインペラーは頷いた。

それからルーラは全員に、スノーホワイトからのマジカルキャン

デーイー強奪作戦を伝え、役割を命じた。

「以上だ。作戦はそれぞれ本番までにイメージトレーニングしておく事。遅れたり失敗した者にはキャンデーはないと思いなさい」

そこで解散となり、皆はそれぞれの家に帰っていった。

それから数日間、キャンデー集めの為の人助けをしつつ、下僕達は斥候に駆り出され、スノーホワイト、そしてパートナーや同じチームメイトがどこを拠点にしているのかを、隠れながら探索していた。過去のチャットログに書かれた内容と照らし合わせながら、ルーラ達はようやくスノーホワイト達が俱辺ヶ浜の近くにある鉄塔をアジトにしている事突き止めた。

成績発表の前日。その報告を聞いたルーラはマジカルフォンの電源を切り、ホッと一息ついてから、不意に隣の方に目をやった。

「……で、あなた何で正座しているの?」

ルーラの目線の先には、魔法をかけていないはずのスィムスィムが正座で待機していた。すでに長時間そこにいるわけだが、足が痺れた

りしないのだろうか。

「尊敬すべきリーダーには、正しい姿勢で応えるべき」

「……それ、私が言った事？」

「言ったこと」

スイムスイムは事あるごとに、過去にルーラが指導したであろう内容を復唱していた。『したであろう』というのは、あまりに多すぎて言った本人でさえ覚えていないからだ。忠誠心が表れているが、若干鬱陶しいところもある。それが、知識は少なくとも、記憶力だけはずば抜けているスイムスイムなのだ。

ルーラは気分を良くしたのか、スイムスイムに歩み寄り、腰を曲げて彼女の頭を撫でた。

「胸の大きい女は大抵バカだから嫌いだが」

「……？」

「尊いものを頭に詰めておけば……バカでも少しはマシになる、か」

「尊いもの……。それって何？」

その問いに、ルーラは笑い、だが冷ややかな声でこう答えた。

「私の言葉。全て頭に入れておけ」

「ルーラの言葉……。尊い……！」

「お前もあいつらと同じバカだが、信用できるバカだ。明日はしっかりと頼むぞ」

そう言ってルーラは再びスイムスイムを撫でた。

「……」

その様子を、物陰からベルデとアビスがジッと見ている事に気付かず……。……。

「尊いもの……ねえ」

「どうかされましたか?」

成績発表当日。N市には数多くの高層ビルが並び立っているが、その中でも特に別格を放っているビルの最上階の社長室に、強者の雰囲気漂わせているようにビシツとしたスーツを着込んだ、大企業の高見沢グループの総帥兼社長である『高見沢 大介』が夕日に照らされた街並みを窓の外から見下ろしていた。その近くのソファには、今日の会議で使用したプレゼンに関する資料や記録したルーズリーフを1つにまとめているスーツ姿の女性『木王 早苗』が腰掛けており、声をかけた。

高見沢は何でもないと告げて、ポケットから緑色のデッキケースを取り出して机に置いた。

「いよいよ今夜決行か……」

「あいつらがバカみたいにポカさえしなければ、それでいいんですよ。チームとしての完成度は決して低くないですから。これも、人選において的確に選抜してくれた社長のおかげですよ」

「フツ。それぐらい見抜けなきゃ、こんな企業のトップに立ちやあしねえよ」

やはりこの会社に入っておいて正解だった。と、周りの社員からは「できる女」と評される秘書の早苗は密かに思った。

木王 早苗は小学校の頃からエリート教育を受けて、常に成績優秀だった。小学校から中学校を経て高校、大学では注目の的となり、大学卒業後もトップクラスの企業に就職した。

が、彼女は最初から最後まで、周囲をバカばかりだと考えていた。自分の価値も分からないバカと付き合うつもりはないと公言しており、その影響か、学校でも職場でも一人ぼっちだった。職場でもその性格が災いして、社長と口論になり、数日後には退職させられた。が、早苗は最初からその気だったらしく、辞めさせられる事に不満はなかった。所詮は自分の価値観を見抜いてくれなかったただけの烏合の衆ばかりの職場だったのだ、と自分に言い聞かせた。

とはいえ職を失ったのも事実。もっと自分を必要としてくれる会社はないのかと、ネットを使って調べていくうちに、高見沢企業の会社に目がいった。そこそこのエリート社だと噂は耳にしていたので、早速履歴書を片手に、会社へと足を運んだ。

面接の結果は当然の如く合格。会社でしばらく働いていくうちに、早苗はこの会社を大変気に入った。そこにいる全ての社員が、自発的に行動を起こして、企業に貢献していく。つまり、自分らしさをこの職場なら最大限に活かせる。早苗はようやくあるべき場所を見つけたのだ。

早苗は入社して以降、メキメキと成績を伸ばして、遂には秘書の座を獲得するところまで登りつめた。そこで早苗は初めて、社長である高見沢 大介という人物をはつきりと目撃した。頭も良く回り、カリスマ性に溢れており、何より社員達から慕われている紳士的な人物であり、すぐに早苗の長所を見抜いてくれた。早苗は確信した。この会社こそが、自分に最も相応しい場所なのだ。

すると、そんな早苗を祝福するかのよう、彼女の元に幸運が訪れた。

『おめでとーぼん！ 君は魔法少女「ルーラ」になれたぼん！』

前の会社に勤めていた時から気晴らしにやっていた『魔法少女育成計画』をプレイしている最中、端末からマスコットキャラクターである『ファヴ』が飛び出し、早苗を魔法少女に変えたのだ。

裾を引きずるほどに長く、宝石が散りばめられた光沢ある朱子織のマント、王笏、パーティー用の長手袋、小さくもダイヤが埋められたティアラ、薄紫色の髪を髪飾りでまとめ、ガラスの靴を履き、何より

も美しい美貌を兼ね備えた魔法少女『ルーラ』が鏡の前に現れた時、全てが解放された気分になった。自身の魔法も大変気に入り、早苗は満足していた。

魔法少女になってしばらくするうちに、何と社長である高見沢が、同胞とも呼べる仮面ライダー『ベルデ』である事が発覚。以降、2人で行動する時間はさらに長くなり、ベルデの厳選のもと、後輩にあたる魔法少女や仮面ライダーを雇い、彼女がリーダーとして君臨した。「今頃スノーホワイトやその仲間共は上位になれてると思つて余裕なんでしょうけど……」

間も無く闇夜が街を支配する頃、早苗は立ち上がり、近くに置かれた姿見を見つめた。その瞳からは邪悪さが込められている。

「だからこそ、打ちひしがれた時の絶望感は大きいもの。そして彼女は全ての気力を失い、脱落する……」

「スノーホワイトはともかく、そいつといつもつるんでる奴らは気にいらねえな。大人のやり方を教えてやるとするか」

高見沢も立ち上がり、時計に目をやった。早苗もそれに続いて時計を見た。

「早めに向かいますでしょうか。リーダーとしてあいつらを統括しておいた方が良くありませんし」

「ああ。迎えの方には、自分で帰ると言つてあるし、このまま向かうか」

高見沢と早苗は姿見の前に立ち、高見沢は緑のカードデッキをかざし、Vバックルを腰に取り付け、早苗はマジカルフォンを取り出した。

「変身」

早苗はマジカルフォンの画面をタップし、高貴な魔法少女『ルーラ』へと姿を変えた。一方、高見沢も右手を左に持つてきてから指を鳴らして呟いた。

「変身」

そのまま元に戻る形でカードデッキをVバックルにはめ込んで、鏡像が重なって仮面ライダー『ベルデ』へと変身した。

2人は同時に姿見を通じてミラーワールドに入り込み、下僕達が隠

れているであろう目的地まで足を運んだ。

音一つ聞こえてこない世界に、女王の堂々たる眩きが足音と共に響き渡った。

「……さあ。最高峰のステージ^戦の幕を開けましょう」

26. 大乱闘勃発

ねむりんの死から1週間が経ち、今宵は2回目となる脱落者の発表日。あと15週間で、15人の魔法少女や仮面ライダーは死ぬ。次に死ぬのは誰か。緊張感漂う中、スノーホワイトは未だに鉄塔の上で体操座りしていた。

「? 帰らないのか?」

「1人で発表見るの、まだちよつと怖くて……」

「……そうか」

そう言つて九尾は彼女の隣に座った。それに続いてラ・ピュセルとライアも近くに座る。

「なら、発表出るまではいてやるよ。帰つてもやる事ないし」

「僕は……、ちよつと怖いかも。一緒に結果を見よう」

「ありがとう、みんな……」

「でも大丈夫だ。キャンディーの譲渡機能もあつて、僕達4人の獲得数に差は出なくなった。元々あつた分も考えると、今週も乗り切れるさ」

「……うん、そうだね!」

「……」

スノーホワイトが少しだけ安心感を持ったが、どういうわけか、ライアは何かを真剣に考え込むかのようにマジカルフォンを睨んでいた。

「……ライア? どうかしたんですか? 何か心配でも?」

「……いや、何でもない。ただ、ちよつと気になってな」

「気になる事?」

「バージョンアップによる譲渡機能の追加。その理由が気になってな……」

「えっ? それって、チームやパートナーが最下位にならないように助け合う為の措置ですよね?」

「……だと良いが(考え過ぎ、か)」

ライアが顔を上げたその時、彼は反射的に立ち上がった。

何事かと思つた九尾とラ・ピュセルはライアの視線の先に目をやつた。途端に彼らも立ち上がつてスノーホワイトの前に出た。3人の行動に疑問を持ったスノーホワイトはそこで初めて目の前に人影が見えている事に気付いた。

その人影は2つあり、片方は左から、もう片方は右から天使の翼が生えていた。4人はその人影に見覚えがあつた。

「あれって……」

「ピーキーエンジェルズ。なぜここに……？」

4人の目の前に突如として現れた、双子の魔法少女、ミナエルとユナエルが不敵な笑みを浮かべながら鉄塔の周りを旋回しだした。一同が警戒していると、不意に双子は方向を変えた。そして九尾を前後から挟み込む形で足を突き出した。

「！ 危ない！」

「せえの！」

「！」

が、九尾は慌てる事なく高く跳躍し、ピーキーエンジェルズからの蹴り攻撃を避けると鮮やかに着地した。そして2人を睨んで呟いた。

「当たるかよ、んな攻撃」

「へえ。新入りのくせにやるじゃん」

「やるじゃん」

それから双子は高笑いしながら下降していった。当然彼らも黙っているはずもなく、ラ・ピュセルがいち早く叫んだ。

「おい、待て！」

「！ ラ・ピュセル！」

ライアの制止を無視して、ラ・ピュセルはピーキーエンジェルズの後を追つた。それを見てから、ライアは2人に顔を向けた。

「九尾はここに残るんだ。スノーホワイトを守つてやれ」

「……分かりました」

「？ 私をつて、どういう事ですか？」

「向こうは俺達が何とかする」

そう言つてライアも3人の後を追つた。残されたスノーホワイト

は困惑と不安の表情を浮かべているが、九尾は周りを警戒するかのよう
に見渡しながら、スノーホワイトに近づいた。

ピーキーエンジェルズを追いかけているうちに、鉄塔からそこそこ
離れた、人気のない港にたどり着いた。ラ・ピュセルが着地すると、顔
を見上げた。そこには宙に佇んでいるピーキーエンジェルズがいる。

「へえ。結構早かったね」

「ライダーじゃないのにそんなに鎧着込んで、よく走れるね」

「これは一体何の真似だ！ 何のつもりでこんな事を！」

ラ・ピュセルの問いに対し、ピーキーエンジェルズはこう答えた。

「何のつもりだって」

「そんなの見れば分かるじゃん」

「「キャンディーちょうだい！」」

「なっ……!?？」

「やはりそう来たか」

ラ・ピュセルが絶句していると、ライアが後方に降り立った。

「ライア！ やはりってどういう……！」

「ただでさえ、この事態の意味合いが理解されているこの状況下で新

たに導入された譲渡機能。チームやパートナー間で共有する事も可能だが、おそらく別の意味合いも含まれているはずだ。それが今、ピーキーエンジェルズやルーラチームがやろうとしている事。そうなんだろう？」

「！まさか……！」

ラ・ピュセルがハツとしたのと同時に、2人の後方から気配を察し、振り返ると3人のライダーが立ちふさがっていた。ルーラチームのガイ、タイガ、インペラーだ。

「へえ。やっぱりあんたも気づいてたんだ。ま、そうだよ。これぐらい誰でも気づけそうだし」

「無理やり力づくでキャンディーを奪おうという魂胆か……！」

「あれ？ その感じだと、気づいてなかったってクチ？ 賢そうに見えるけど、案外しょーもないね、お前」

「……っ！」

ガイの言葉とピーキーエンジェルズのあざ笑いを耳にして、ラ・ピュセルは頭に血が上るのを感じた。

信じられなかった。マジカルキャンディーの強奪という愚かな思考へと走る魔法少女や仮面ライダーがいるとは。気づいた時には背中に背負っていた剣を鞘から引き抜いていた。そのまま前進しようとしたその時、ライアに肩を掴まれた。

「冷静さこそが、お前の力を存分に発揮する最大の武器だろう？」

「ライア……」

「俺もお前と同じさ。奴らのような意識の低い魔法少女や仮面ライダーは苦手だ。だが、怒りに身を任せれば、墓穴を掘るぞ」

ライアの言葉を受け、ラ・ピュセルは一旦剣を下ろすと、深呼吸をした。そしてイメージしたのは、強敵と戦い、勝利する自分の姿。意識を切り替えたラ・ピュセルはライアの方を振り向いた。

「ありがとう。もう大丈夫だ」

「そうか。なら良かった」

「臭い芝居はもう済んだ？ ならやろうよ。別にそっちから奪いに行っても良いけど。それぐらいじゃなきや面白くないし」

「生憎だが、お前達の思惑通りに動くと思ったら大間違いだ。運命は変わるものだからな」

「あつそ。じゃあいくよ」

ガイはそっけなく答えると、カードを1枚取り出してメタルバイザーにベントインした。

『STRIKE VENT』

ガイの右腕にサイの角を模した武器『メタルホーン』が装着され、インペラーも続いてカードをガゼルバイザーにベントインした。

『SPIN VENT』

インペラーの右手に現れたのは、ガゼルの頭部の角を模した武器『ガゼルスタップ』。タイガもデストバイザーを構えてインペラーの横に並んだ。

『SWING VENT』

ライアがエビルウィップを構え、地面に叩きつけた。ラ・ピユセルは剣を強く握りしめて構えた。

ライアとラ・ピユセルの周りを5人が囲み、波の音だけが辺りを支配する中、最初に動いたのはタイガとインペラーの兄弟だった。

「ダアアアアア！」

「ふっ！」

ライアとラ・ピユセルは難なくかわし、続くガイの一突きも避けて背中に蹴りを入れた。

「てええええええい！」

ピーキーエンジェルズが低空飛行で奇襲を仕掛けてくるも、飛び上がって剣やエビルウィップを振るった。ピーキーエンジェルズに起動力はなかなかのもので、2人の攻撃を素早い動きで回避していた。

「へへーん！ そんなの当たらないよー！」

「よー！」

「なら、これでどうだ！」

再び上空に舞い上がったピーキーエンジェルズに対し、ラ・ピユセルは剣の先端をピーキーエンジェルズに向け、魔法で肥大化させて突き出した。想像以上のリーチの長さにピーキーエンジェルズは慌て

て横に飛んだ。が、そこである事に気づいた。

「(?! もう1人は……!!?)」

「ハアッ！」

「!!」

2人が気づいた時には、ライアは壁を蹴って跳躍し、エビルウィツプを振るった。ピーキーエンジェルズはバランスを崩して地面に落下した。

「! ミナエル、ユナエル！」

「よそ見をしてる場合かな！」

「おわっ!!?」

助けに行こうとしたインペラーに、ラ・ピュセルの一撃が当たり、後方に吹き飛ばされた。その間に、ライアは地面に着地してピーキーエンジェルズを見下ろした。

「今のはわざと外したままだ。このまま大人しく引き下がると誓うなら、今回の件は見逃そう」

「調子良いコトをつべこべ言う奴、大っ嫌い！」

「大っ嫌い！」

悪態をつきながら再び上昇しようとする2人に、ラ・ピュセルの大剣が迫った。2人はギリギリのところまで直撃を避けるが、風圧に押しされて吹き飛ばされた。そして方向を切り替えて剣を横に振るい、離れた所にいるガイ達に向かって弾き飛ばそうとした。

が、その攻撃が当たる直前でガイが1枚のカードをベントインした。

『CONFINE VENT』

「!!?」

その瞬間、ラ・ピュセルの持っていた大剣が元の大きさに戻り、リーチの短くなった剣はガイ達に命中する事なく空を切り裂いた。何が起こったのか分からなかったラ・ピュセルだが、瞬時に状況を理解した。

「魔法が、打ち消された……!!」

「へへっ。こういうカードもあるんだよね」

ガイがメタルバイザーを指差して、能力を一定時間打ち消して無力化する『コンファインメント』のカードの力を自慢した。反撃とばかりにタイガとインペラーがラ・ピュセルに接近した。魔法が使えなくなっている今、短い剣と鞘で抵抗する他なかった。完全に戦況が逆転している。

「！ラ・ピュセル！」

ライアの気がパートナーに向いたのを、ピーキーエンジェルズは見逃すはずもなく、先ほどと同様に低空飛行で迫ってきた。

「(同じ低飛行パターン……。……。いや！)」

ライアが何かを察してエビルウィップを左手に持ち替えたと同時に、ライアの足元が振動と共に直径1メートルほどの穴となって、足場がなくなった。

「!?？ 落とし穴が!?？」

「バーカ！ ひっかかった！」

「やっちゃえ、たまー！」

ラ・ピュセルが目を見開き、ピーキーエンジェルズが高笑いしている間にも、ライアは落下し始めた。

伏兵か。ライアがそう推測した通り、ライアのいた地点の真下にはたまが潜んでおり、タイミングを見計らって魔法でライアを落とす事にしたのだ。助けに行こうとするラ・ピュセルだったが、魔法も一時的に使えず、3人のライダーに囲まれているこの状況で一歩も動けずにいた。

そんな中でも、ライアはいたって冷静だった。跳び退かなければ穴に飲み込まれる。が、無闇に跳べば体の自由が利かない空中でピーキーエンジェルズの攻撃をまともに受けてしまう。

「(どちらにせよ、地獄を見る……。か)」

「挿入歌：果てなき希望」

そんな未来はさつきと変えるか。

そう呟くと同時に、エビルウィップを足元に放り、カードデッキから素早く引き抜いたカードをエビルバイザーに素早くベントインした。

『ALTER VENT』

ライアがエビルウィップを踏みしめると同時に、エビルウィップの幅や長さ、厚み、それら全てが飛躍的に上昇し、穴の両端に突き刺さってライアの落下を阻止した。ラ・ピュセルの魔法を駆使して穴に蓋をするように足場を作ったのだ。

「パートナーカード……！」

「マジか!?? あoの状況で使おうって考えれるか普通!??」

「……凄い！」

ライアの無事を知って、ラ・ピュセルは笑みを浮かべ、タイガとインペラーは驚きを隠せなかった。

やはりライアは素晴らしいセンスの持ち主だ。常に冷静沈着で、状況に応じてトリッキーな動きを繰り返す。彼の下で指導を受けていたラ・ピュセルは改めてそう思った。

当然。ピーキーエンジェルズもこの展開を受けて動揺を面に出した。

「何なのあいつ!?? 穴に落ちてないしデカくなってるし！」

「そんなのズルいぞー！」

ピーキーエンジェルズが喚いているが、ライアは聞く耳を持たない。ピーキーエンジェルズは急降下を中止しようとするも、1度勢いをつけてしまった為に止まる事が出来ない。今度はその隙を逃さんどばかりに、ライアは肥大化したエビルウィップをバネ代わりにして跳び上がり、ピーキーエンジェルズよりも高く舞い上がった。インペラーが逃げるように示唆するが、もう間に合わない。

中空でバランスを崩している今がチャンスと思い、ライアは左腕を振り上げた。

「投降の意味はないと見た。少々痛い目にあってもらうぞ」

そう言ってライアは、手刀のようにエビルバイザーをつけた左腕を振り下ろした。エビルバイザーによる殴打を避けられなかった2人は地面に叩きつけられる……かに思われたが、地面に当たる直前に2人の姿が変化した。ミナエルはゴム鞣に、ユナエルはカラスになつて、カラスがゴム鞣を足で掴んだ。そしてそのまま地面に降り立つと、ゴム鞣とカラスの姿は歪み、ゴム鞣はライアの攻撃を直に受けて

片腕を抑えているミナエルに、カラスは心配そうにミナエルを抱きしめるユナエルに戻った。

「変身能力……!?？」

「あれがあの子の魔法か」

ライアがバランスをとりながら落下していると、足元に広がる穴から何かが飛び出した。

「だ、だいじょ……」

どうやらたまが心配になって顔を出したようだ。が、たまが上空を見上げると同時にライアの足が直撃。踏み倒されて、くぐもった悲鳴と共に穴の中へ逆戻りした。

「むっ……？ すまない」

わざとではない為、軽くではあるが落下するたまを見て謝るライア。ラ・ピュセルが駆け寄ると、改めてライダー達と向き合った。

「へえ、結構やるじゃん。ちよつとは楽しませてくれそうだね」

「まだそんな事を言ってるのか！ これ以上続けるなら、もう容赦はしない！」

ラ・ピュセルが剣をガイ達に向ける。それに対し、ライアはある疑問を抱いた。

「(妙だな……。今の段階ならともかく、戦闘が始まった時点で人数差は圧倒的に向こうが多く、戦況は有利だった。キャンデーの強奪が目的なら、数の暴力で俺達のマジカルフォンを奪う事だって出来たはず。にもかかわらず、ここまでその気配を見せていない。だとしたら、この戦闘の意味は……)」

ガイ達が戦いを挑んできた意図を考察していたライアだが、不意にある仮説がよぎった。

「(最初から俺達を狙ったわけではないのか……！ だとしたら奴らの標的は!)」

ライアは顔を少し上げ、遠方に見える鉄塔の上に目をやった。ライダーや魔法少女は視力に限らず、身体能力が通常の人間よりも向上しており、遠く離れた鉄塔の全てを見るのも造作ではない。そしてライアは見つけてしまった。鉄塔の上にある人影は、2つだけではない事

に。

ライアはとつさに駆け出し、3人に飛びかかってその場から引き離さないようにした。突然攻め上がったパートナーの行動に、ラ・ピュセルは困惑した。

「ど、どうしたんだ!?」

「こいつらの目的は、俺達の足止めだ！ 本命はおそらく、マジカルキャンディーを1番多く所持している……!」

ライアの言葉を最後まで聞く事なくラ・ピュセルは鉄塔に目を向けた。そこでようやく敵の真の狙いに気づいたラ・ピュセルは、
「くそっ!」

高潔な騎士にあるまじき罵り文句を一声発し、駆け出した。

「ここは俺が抑える！ ラ・ピュセルは2人の所へ!」

「分かった!」

「行かせるかよ!」

ライア達の頭上を飛び越えて先へ進もうとするラ・ピュセルを逃すまいと、インペラーは新たなカードをベントインした。

『ADVENT』

ラ・ピュセルの後を追いかけるようにどこからともなくギガゼール、メガゼール、オメガゼールが飛び出してきて、背後からラ・ピュセルを襲おうとした。

「ハアッ!」

だが飛びかかる直前で横から何者かが体当たりして、3体の契約モンスターをまとめて海へ突き落とす。

「! 龍騎!」

「早く行って!」

「ああ、恩にきる!」

ギガゼール達を追い払ったのは龍騎だった。ラ・ピュセルを先に行かせた龍騎は、続いてライア達の所に向かい、ライアを3人から引き離した。

「龍騎か。何故ここに?」

「偶々だ! 何かよく分かんないけど、ヤバそうだったからさ!」

どうやら偶然近くを通りかかった際に、鳴り響く轟音に導かれて介入したようだ。

「ライア、お前もラ・ピュセルと一緒に行ってくれ！　ここは俺が何とかするから！」

「しかし……！」

「何かヤバい事になってんだろ!?　俺は大丈夫だからさ！　ほら、早く！」

「……分かった。だが無茶はするなよ」

「おう！」

多少不安はあるものの、龍騎の言葉に押され、ライアは3人の相手を龍騎に任せて、ラ・ピュセルの後を追った。ある程度回復したピーキーエンジェルズもライアを追いかける為に空を飛んだ。これにより、港に残ったのは気絶しているたまを除いて龍騎、ガイ、タイガ、インペラーだけとなった。

「せっかく盛り上がってきたばっかなのに、KYかつつうの」

「お前ら、何を企んでるか知らないけど、2人の邪魔はさせないからな！」

「……ま、いつか。代わりに遊んでくれるなら別に良いし。じゃ、第二ラウンドって事で。いくよ」

「お、おう！」

「……」

依然として余裕を崩す事のないガイの両隣りに、無言のタイガと若干緊張気味のインペラーが並び立った。

「ツシヤア！」

戦力の差に臆する事なく、龍騎は3人を足止めしようと立ち向かった。

27. 脅威の絶対服従

「そうちゃん、ライア……。大丈夫かな……」

「ま、あいつらがそう簡単にやられるとは思えないけどな。……っていうか良いのか？ またそうちゃんって呼んで」

「あ、また言っちゃった……。つい癖で……」

「よっほど仲良かったんだな」

「でも、だいちゃ……。大地君だってそうちゃんと小学生の頃から遊んでたんだよね？」

「ああ。校庭で一緒にサッカーやってるうちにいつの間にか……。な。ってか今、俺の呼び方変じゃなかった？」

「えっ!? う、ううん。き、気のせいだよ……」

何故か顔を紅くして目線を逸らすスノーホワイト。それ以上追求しない事にした九尾は、先ほどのピーキーエンジェルズの様子を思い返していた。

「(互いの担当区域での活動は、許可なしでは禁止されているって言うてたし、あいつらはキャンディー集めの為に来た感じじゃなかった……。って事は……)」

九尾がマジカルフォンを見つめながら考え事をしていると、後方から足音が聞こえてきた。それも2人分。

スノーホワイトと同時に振り返ると、2人の魔法少女がそこにいた。1人は今の季節には先ずお目にかからない水着姿の魔法少女、スイムスイム。もう1人は紫髪の女王を模した魔法少女、ルーラ。

スノーホワイトが驚愕に顔を歪ませる中、九尾はパートナーを守るように前に出た。

「やっぱり、あいつらはおとりだったか。本当の狙いはこっちだったってわけだな」

「その通り。お前を含めて3人同時に誘き寄せればベストだったが、あのアホどもにそんな事が出来るわけもないからな。2人だけでも十分だ」

「……譲渡機能を利用して、マジカルキャンディーを横取りするって

算段か。あんた、チームのリーダーやってる割には随分と低レベルな考えだな」

「横取りつて……!??!」

スノーホワイトが目を見開き、九尾が淡々とルーラを罵るが、ルーラは依然として笑みを崩さない。

「随分余裕そうね。それだけ自分の力に自信があるのかしら? ……

まあ、根拠のない自信を持つてるバカほど、油断は大きいもの」

「何……?」

九尾が目を細めていたその時、九尾の後方から何かが首に巻きついて締め上げた。

「ぐっ……!??!」

「九尾!??!」

スノーホワイトが叫び、九尾が左手で巻きついているものを緩めた。よく見るとそれは、ヨーヨーの糸のようだ。次第に強い力で後ろに引っ張られて後ずさり、遂に鉄塔の上から落下してしまった。

「逃げろ、スノーホワイト……!」

「九尾い!」

スノーホワイトが涙を浮かべながら叫んで手を伸ばすも、届く事なく九尾は街灯のない暗闇の路地に向かって引きずり落とされた。

同じチームメイトが全員いなくなってしまう、動揺を隠せずにしたスノーホワイトに対し、ルーラは鼻で笑い、一歩近づいた。

「無様ね。正面からやりあうだけが戦い方じゃないのよ。さあスノーホワイト。覚悟はよろしくて?」

「何で……、何でこんな酷い事を……!??!」

「この期に及んでまだ抗おうとしないのかバカ。いや、間抜けと呼ぶべきか」

スノーホワイトの様子に毒づくルーラ。一方でスノーホワイトは後ずさりながらパニックに陥っていた。早く逃げなければ何をされるか分からない。今ならマジカルフォンの画面を操作して武器を召喚する事も可能だが、相手はモンスターではなく人間、それも自分と同じ魔法少女だ。同じ仲間同士で戦おうだなんて考えたくない。そ

の気持ちだが、スノーホワイトの行動を制限していた。

戦おうという意思が無いと判断したルーラは、さっさと終わらせようとして、手に持っている王笏をスノーホワイトに向け、魔法の行使を宣言した。

『ルーラの名の下に命ずる。スノーホワイトよ。身動きをとるな』
「!」

その瞬間、スノーホワイトは自分の体の自由が利かなくなっている事に気付いた。どれほど抵抗しようとも、指一本動く事さえ叶わない。

ルーラが隣にいるスイムスイムに目配せすると、スイムスイムはゆっくりとスノーホワイトに近づき、自身のマジカルフォンを向けて操作した。

一方、落下していた九尾は左手で緩めながら、空いている右手でカードを引き抜き、フォクスバイザーに素早くベントインした。

『SWORD VENT』

直後、上空から落ちてきたフォクセイバーをキャッチして、巻きついていた糸を斬り裂いて自由を取り戻し、空中でバランスをとって怪我する事なく着地した。フォクセイバーを構え直す九尾の目の前には、九尾を引きずり落とした張本人であろう、カメレオン型のライダー、ベルデがいた。その両手には千切れたバイオワインダーが握られている。その後ろには、アビスが佇んでいた。

「……最初から俺達を引き離すのが目的か」

「俺はあいつに興味はねえ。お前の実力がどれくらいのもんか確かめたいだけだ」

「それでこんな大胆な奇襲をしたってわけか。ゲスいな、あんた達」

「ガキのテメエにはまだ分かっていないようだが、大人になればこんな事日常茶飯事だぜ」

「……さっさと通してもらいたいけど、その気は無さそうだな」

「だったらどうする?」

「……戦って蹴散らすだけだ!」

九尾は駆け出してベルデに斬りかかった。ベルデは器用にかわし、カウンターとばかりに回し蹴りを仕掛けるが、九尾も俊敏さを活かして回避した。そこへアビスが迫ってきて、九尾は飛び上がってフォクセイバーを構え直した。

『SWORD VENT』

アビスがカードデッキから取り出したカードを左腕につけられた召喚機『アビスバイザー』にベントインし、2刀のアビスセイバーを手を持った。アビスセイバーを構えたアビスの猛迫に対し、九尾はフォクセイバーを交互に振って攻撃をいなした。互いに激しい剣の打ち合いが続く中、両者の武器が弾き飛ばされ、迷いなく肉弾戦に持ち込んだ。拳と拳がぶつかり合い、鈍い音が鳴り響く中、ベルデは1枚のカードをベントインした。

『CLEAR VENT』

その瞬間、ベルデの体が透明となって周りの景色と同化したのを九尾は見逃さなかった。どんな能力を使ったのか知らないが、敵は確実に隙をついて襲いかかってくる。そう考えた九尾は足を使ってアビ

スを転ばせて、距離を置くと、周りに意識を集中した。

「……そー！」

風の動きから推測した九尾が体を屈んで、何も無い空間を握った。すると腕のような感触を感じた九尾はそのまま背負い投げするように投げ飛ばした。

「ぐっ……！」

叩きつけられた事でクリアーベントの効力が切れたらしく、ベルデは地面に倒れた状態で姿を現した。

『ACCEL VENT』

続けざまにベントインした九尾は、素早い動きで起き上がろうとしたベルデとアビスにパンチやキックを入れて、最後は飛び蹴りで2人を吹き飛ばした。一旦九尾がその場で止まると、ベルデは舌打ちしながらバイオバイザーにカードをベントインした。

「調子に乗るなよクソガキが！」

『ADVENT』

まだアクセルベントの効力は切れていない。追い打ちをかけようとしたその時、後方に現れたベルデの契約モンスター『バイオグリーザ』が長い舌を突き出して、九尾を縛り上げた。

「……！」

身動きが封じられた九尾に向かって、ベルデは飛び蹴りを叩き込み、九尾はなす術なく地面を転がった。それに続いてアビスが落ちていたアビスセイバーを再度拾い、九尾に斬りかかった。九尾は体を全力で横に逸らすのが、刃先が装甲に覆われていない九尾の右肩を掠め取り、そこから血が飛び散った。九尾は反射的に傷口に左手を当てた。

「うっ……！」

幸い傷は浅い為、まだ戦闘は続行可能であるが、怪我をしている状態でベテラン2人を相手にする事に、若干焦りを感じ始めた。

「(さすがに手強いな……。ベルデもそうだが、アビスも無駄な動きが1つも無い。けど、ここで立ち止まってちゃ、スノーホワイトは助けられない……。！)」

早くパートナーの所に向かってルーラとスイムスイムを撃退させ

たいが、目の前の敵を先に片付けるしかない。焦る気持ちを押し殺して足元に落ちていたフォクセイバーを手にとって、戦闘を再開しようとした。

その時、すぐそばの鉄塔に向かって誰かが猛スピードで接近しているのが見えた。

「スイムスイム、まだ終わらないの?」

「まだたくさん残ってる」

「(こんなにも時間かかるなんて、1人でどんだけ稼いでいるのよ……!?!?)」

予想以上にスノーホワイトのキャンディーの所持数が多い事に、ルーラは王笏を構える右腕の痺れを感じながら驚きと同時に呆れていた。

ルーラの持つ魔法は極めて強力だが、弱点もある。それは発動条件の多さだ。

- ・ 王笏を向け、ポーズをとらなければならない。
- ・ ルーラの名の下に命じなければならない。

- ・命令している間はずっとポーズをとり続けなければならない。
- ・相手との距離は5メートル以内でなければならぬ。

これら1つでも満たしていなければ、魔法は発動しない。だからこそ、ルーラがとった作戦は、ピーキーエンジェルズ、たま、ガイ、タイガ、インペラーにスノーホワイト以外の3人を自分から遠ざける、いわば陽動役を演じさせ、仮に1人だけそこに残った時は保険としてベルデとアビスが迎え撃つ。そしてルーラが魔法を発動している時にスイムスイムがキャンディーを奪取。万が一ルーラが攻撃を受けかけた時はスイムスイムが魔法を駆使して守ってもらえるようになる。シンプルだが効果的な作戦だとルーラは考えていた。

だが、まだ足りないと感じたルーラはスノーホワイトへの命令をあえて「キャンディーをよこせ」ではなく「身動きをとるな」とした。キャンディーを奪取した後でスノーホワイトが即攻撃を仕掛けてくる可能性もあったので、安全を最優先にした。

が、そんな心配も懸念だったか、とルーラは思った。スノーホワイトに戦闘の意思表示は見受けられない。こうしている今も恐怖に支配されて、僅かながらに体を震わせている。所詮は他の人間と同じ、無能な連中に手を差し伸べるだけの間抜けなのだろう。ルーラはそう吐き捨てた。

正直なところ、ルーラにとってこの作戦はある種のテストに過ぎず、最終的な狙いは別にあった。

それは、宿敵とも言えるカラミティ・メアリを跪かせる事。

事の発端は、ルーラが魔法少女になったばかりの頃。当然ベルデの存在も知らず、ファヴからの紹介でカラミティ・メアリが教育係としてルーラのところにやって来た事があった。その頃のカラミティ・メアリはまだ王蛇とコンビを組んでおらず、いわゆる一匹狼として城南

地区を荒らしていた。

が、教育係であるにもかかわらず、カラミティ・メアリは葉巻を吸って副流煙をルーラにわざと吹き付け、合間合間に酒を飲んでおり、全くと言っていいほど指導をする事はなかった。その不真面目さに腹が立ったルーラが詰め寄ろうとした瞬間、銃声とともに背後で爆音が轟き、振り返ってみれば、そこにはビルの壁に直径3メートルほどの穴が開いていた。恐る恐るカラミティ・メアリの方を見ると、彼女の右手には拳銃が握られていた。そしてカラミティ・メアリはニヤつきながら呟く。

『カラミティ・メアリに逆らうな。煩わせるな。ムカつかせるな。オーケイ?』

『こ、これが、あなたの魔法……?』

『何でそっちが質問してんだ? あたしが聞いてんだよお嬢さん。ほら、バカみたいに頷いていりゃあそれで良いんだよ』

そう言って銃口をルーラに向けるカラミティ・メアリ。魔法によって銃の威力を底上げしている事は把握出来たが、何しろ規模がデカすぎる。今の自分に回避できる確信がない。ルーラは黙って頷いた。

『オーケイ、オーケイ。良い返事だ』

それで気を良くしたカラミティ・メアリは再び酒ビンを傾けて口に含んだ。口から零れたアルコールが胸元まで流れていくのを、ルーラはただ黙って見ている事しか出来なかった。結局、ルーラは暴力に対して何も出来なかったのだ。

それと同時に込み上げてきたのは、血に煮え滾る屈辱。命令する前に、素早さで勝っているカラミティ・メアリの銃弾の嵐に晒されてしまうので、自身の魔法とは分が悪いのだ。

この時から、ルーラはカラミティ・メアリに復讐する事だけ为目的に行動を開始した。今の自分に必要なのは、自分がカラミティ・メアリに魔法を行使する際に、自身の魔法が有効になる状況を作り出し、守ってもらうための肉の壁だ。ベルデと出会い、人の才能を見抜く力を持つ者が現れた事で、ルーラは彼に真相を隠しながら、新しい魔法少女や仮面ライダーが入ってきた時に人選をしてもらい、スカウトし

てカラミティ・メアリを潰すための派閥を作る事にした。ベルデが選んだ者達は一癖も二癖もある者ばかりだったが、社長である高見沢の判断を信じていたし、自分で判断して動く事のない愚か者なら、自分に使われた方が意義のある活動が出来る。ルーラのために死ぬ方がよっぽど幸せだろう。そう自分に言い聞かせて、リーダーとして統治した。

今こそ大人数のチームの力を試す時だ。そう決断してこの強奪作戦を実行した。依然としてスィムスィムはスノーホワイトからキャンディーを奪取し続けている。さすがに長く感じたルーラは苛立ちながら呟いた。

「つたく。このポーズ疲れるんだけど。まだ終わらないの!?!?」
「もうちよつと……」

とその時、スィムスィムが何かを察して塔の下に目を向けた。ルーラもそれに続いて見下ろした。見下ろした先には九尾がベルデ、アビスと交戦を続けているが、そのすぐ近くから、砂利を蹴散らし砂埃を巻き上げて疾駆してくる騎士の姿が。その後方からはピンク色のライダー。さらにその後方からは双子の天使が猛スピードで迫ってきていた。それを見てルーラは頭に血が上った。

「んなつ?!? あのカカどもアホどもゴミ屑ども! 足止めも満足に出来ないのか!?!?」

「ルーラ。もうちよつとで終わる」
「黙ってるボケ!」

ルーラが苛立ちながらそう叫んでいる間も、内心焦りを隠せない。ここで作戦が中断するようでは、カラミティ・メアリに敵うはずもない。万事休すか。そう思っていた矢先。マジカルフォンから音が鳴り響き、スィムスィムは顔を上げて呟いた。

「終わった」

スイムスイムがそう呟いたのを確認したルーラは右腕を下ろし、スノーホワイトにかかっていた魔法を解いた。スノーホワイトは呆然としながら、力が抜けたように膝をついた。ギリギリではあるが、目的は達成したようだ。荒げていた息を整えてから、ルーラは言った。「よし。スイムスイム。このままベルデ達と合流して……」

だが、その先の言葉が続く事はなかった。何故なら、足場である鉄塔が轟音とともに大きく傾いて、バランスを崩してスノーホワイト、スイムスイムとともに地面に向かって落下していったからだ。

28. 援軍の登場

「はっ！ 調子に乗るのもそこまでだぜ」

「悪く思うなよ」

ベルデとアビスに挟まれる形で、九尾は交互に見返していた。右腕からは、アビスからの攻撃で受けた傷があり、血が滴り落ちている。急がなければ、スノーホワイトのマジカルキャンディーは全て奪取され、一気に最下位へ転落する。脱落者の発表までの時間はそう遠くない。パートナーである以上、そして優しい彼女を絶望で終わらせたくないと思う以上、挫けるという選択肢は九尾にない。

どこまで通用するか分からないが、力で押し通すしかない。そう思つてフオクセイバーを強く握りしめたその時、別方向から声が聞こえてきた。

「九尾ー」

「！ ラ・ピュセルか……！ それにライアも」

それは先ほどピーキーエンジェルズの後を追っていたラ・ピュセルとライアだった。ライアの後方からはピーキーエンジェルズが妨害しようとしており、ライアが対抗していた。

「大丈夫か！ 今援護するー」

「俺の事は構うな！ それよりもスノーホワイトを……！」

そう叫んで鉄塔の方を見上げた時、スノーホワイトをまもっていた光が消えて、跪いたのが確認できた。

「間に合つたみたいだな」

アビスの眩きを聞き逃さなかったラ・ピュセルは、全身の血が荒ぶるような感覚に襲われ、怒りを露わにした。

「クツソオオオオオ！」

間に合わなかったとはいえ、早くスノーホワイトを保護しなければ。そう思つたラ・ピュセルは手に持っている剣に意識を集中した。すでにガイの『コンファインメント』の効力は切れている。これでラ・ピュセルはいつでも魔法を使える。

ラ・ピュセルは一瞬にして剣を鉄塔とほぼ同じサイズの大剣に形を

変えて、咆哮とともに大きく振りかぶり、鉄塔にぶつけた。

「っ！ あれがあいつの魔法か……!?？」

「……！」

あまりにも巨大すぎる剣の大きさに気を取られ、ベルデとアビスは一步も動けない。

鉄塔の下から見たら、震度2程度に激しく揺れているようにしか見えないが、上の者にとってはそんな生易しいものではない。電線がまとめて千切れ、猛烈な揺れに襲われ、無防備だったスノーホワイト、ルーラ、スイムスイムは耐えられるはずもなく、鉄塔の上から転落した。

ルーラの悲鳴がこだまする中、スイムスイムは空中でバランスをとってルーラの手を掴み、上空に放り投げた。ルーラを放り投げた事で落下速度が加速したスイムスイムは、途中で姿が見えなくなった。一方のルーラは、空中を舞っていたところをピーキーエンジェルズによって両脇を抱えられる事で難を逃れた。みつともない状態を晒す事に怒りを覚え、ルーラはさっさと下ろすように命令した。

スノーホワイトは未だに恐怖から逃れられる事なく、悲鳴を上げながら落下していた。

「スノーホワイト！」

だがそこに、ベルデとアビスの注意が別方向に向けられたのを見逃さずに飛び上がった九尾が、落下地点から10メートル高い場所でスノーホワイトを受け止めて、近くのビルの屋上に着地した。右腕に若干の痛みが走るものの、依然として涙を浮かべながら怯えているスノーホワイトに、九尾は声をかけた。

「おい、大丈夫か」

「！ キャンディーが……。！ 九尾、その腕……！」

「ん」

スノーホワイトが九尾の腕を見つめて驚いていた。九尾がその視線をたどると、自身の右腕が見えた。どうやら右腕から流れる血を見て驚いたらしい。

「これくらい平気だ。それよりお前は」

「わ、私は、大丈夫。でも……」

スノーホワイトが、傍らに落ちていた彼女のマジカルフォンに目をやった。九尾もそれに目をやり、軽く舌打ちした。やられたか、と眩きながら。

一方、地上に降り立つたルーラの前に、ラ・ピュセルが立ちふさがり、大剣をルーラに向けた。

「ルーラあー！　これがお前達のやり方か！　剣の一太刀を受ける覚悟は出来ているか！」

「ふん。バカな奴ほどよく吠えるものね。生きるためには、要は頭を使えばいいのよ。それが出来ない奴は、できる者に従う。それすら出来ない者に生きてる価値なんてないも同然」

「お前……！」

ラ・ピュセルの怒りの眼差しを受け流しながら、ルーラは考えていた。現状、人数差は従来より減っているとはいえまだ僅かにリードしている。ルーラの最終目標はカラミティ・メアリへの下剋上。が、今のカラミティ・メアリは以前と違って王蛇がパートナーとなつている。彼の危険性は耳にタコが出来るくらいに聞いており、それが彼女を悩ませていた。

だがペアである事が分かったと同時に、魔法少女達には戦力の強化が付与された。目的であるキャンディーは奪えたが、それだけでは足りない気がする。実際に交戦した際、力でねじ伏せる策が使えるか試せる機会も多くない。この状況を利用して、個々の戦力にどれほどの影響があるのか、確かめてみるのも余興だ。そう思ったルーラは、両隣りにいたミナエルとユナエルに指示を出した。

「あなた達。撤収にはまだ早過ぎるわ。足止めもマトモに出来なかった罰として、あいつらと直接戦ってきなさい。しょうがないから、私も手伝ってあげる」

「へえ、戦っていいんだ！」

「いいんだ！」

これにはピーキーエンジェルズも俄然やる気が出たらしく、ニヤツきながら前に出た。

「じゃあ遠慮なくやつちやおうよ、お姉ちゃん！」

「私達の強さ、あいつらに見せつけてやろうよ！」

「まだやろうという事か」

ラ・ピュセルの隣にライアが降り立ち、2人の後方からはベルデとアビスが歩み寄ってきた。

「お前はここにいろ。あいつらとはまだ決着が付いてない」

そう言って屋上にいた九尾もスノーホワイトを下ろして立ち上がった。

「九尾！ でも……！」

「……お前は優しすぎる。だから、関わって欲しくないんだ。こういう戦いには。……それから、すまなかった。お前を最後まで守ってやれなくて」

そう呟いて、九尾も地上に降り立った。スノーホワイトは止める事も出来ず、ただジッとその後ろ姿を眺めていた。

地上では、ピーキーエンジェルズが各々のマジカルフォンをタップして、パートナーの武器を召喚した。ミナエルの両手には、タイガの武器『デストクロウ』が取り付けられ、ユナエルの右手にはインペラーの武器『ガゼルスタップ』が握られた。

「おお、カッチョいい〜！」

「お姉ちゃんの武器の方がなんかカッコよすぎなんですけど。ま、いっか。使いづらくはないし」

2人の身体は他の魔法少女と比べても小さい。ミナエルは体と同じサイズのデストクロウを、ユナエルは自分よりもはるかに長いガゼルスタップを振り回していた。興奮しているピーキーエンジェルズに、ルーラの喝が入った。

「呑気にはしやいでないで、さっさと戦えバカ共！」

そう言ってルーラもマジカルフォンをタップして、右手にベルデの武器『バイオワインダー』を出した。それを合図に、ピーキーエンジェルズは突撃し、ラ・ピュセルに向かった。

「ウオオオオオオオ！」

ラ・ピュセルの一振りには、初動の速いピーキーエンジェルズにかす

りもせず、そのままルーラと交戦する事にした。ピーキーエンジェルズは狙いをライアに替えて、素早く詰め寄った。

「さっきのお返しだ！」

「お返しだ！」

「！」

ライアはとつきに身を翻し、2人の攻撃を避けた。が、ピーキーエンジェルズは方向転換し、二手に分かれて再度挟み込むように接近した。デストクロードとガゼルスタップの突きが襲いかかり、ライアは体を反らして回避しようとした。が、完全には避けきれず、脇腹を掠め取るように攻撃が当たり、ライアはよろめいた。

「やった！ 当たった！」

「このままやっちゃえ！」

「(本来のスピードや切り返しの早さに加えて、攻撃力が増大した事で厄介な強さを手にしている。これもパートナーシステムの恩恵あつての事か)」

『COPY VENT』

だが、弱音を吐いてばかりでもいられない。ライアはコピーベントを使い、再びベルデとアビスの2人と交戦している九尾が握っているフォクセイバーに目をやって、フォクセイバーをコピーし、両手にそれを持った。

「(今はこれで時間を稼ぐしかないな)」

だが、発表まで時間はあまりない。焦る気持ちを押し殺しながら、ピーキーエンジェルズに立ち向かった。

一方、ラ・ピュセルとルーラの戦闘も白熱化していた。

「このお！」

「ふん！ さすがに戦闘向けの魔法を持つてるだけの事はあるけど」

ラ・ピュセルの一振りがルーラに襲いかかるも、ルーラは余裕と言わんばかりに避けている。元々戦闘経験の乏しいルーラではあるが、魔法少女であるが故に、攻撃を回避出来るぐらいには身体能力は向上している。そして何より、ラ・ピュセルの剣の攻撃は当たれば強烈だが、今のようにもあまりにも大きすぎると、振り切るまでに多少のラゲ

がある。それさえ見抜ければ、タイミングを見計らって回避出来る。加えてルーラは、頭をフル回転させて反撃のチャンスを伺っていた。「ハアッ！」

剣の一太刀を回避した後、ラ・ピュセルに向かってバイオワインダーを投げつけて、ラ・ピュセルの体を両腕とともに縛り上げた。「！ しまった……！」

身動きが取れず、両腕の自由が利かなくなったので大剣を振るう事が出来ない。ルーラは勝ち誇った笑みを浮かべてバイオワインダーを引つ張り、ラ・ピュセルを引き寄せると、大剣を蹴り飛ばしてラ・ピュセルから武器を引き離れた。

「ほおらね。真正面から正々堂々と戦おうとするからこうなるのよ。それがあなたの最大の弱点とも気づかずだね！」

そう言つてルーラはラ・ピュセルの腹に、身体強化された蹴りを叩き込み、ラ・ピュセルを近くの壁に叩きつけた。ラ・ピュセルの口から空気が溢れ出て、目眩を感じた。どうにかして立ち上がる力は残っていたが、依然として両腕は縛られたままだ。

九尾の方も、劣勢に置かれる状況が続き、余裕がなくなりつつあった。ひたすらにベルデとアビスの攻撃を避け続け、防戦一方に追いやられている。

そんな彼らの様子を、スノーホワイトは一步も動く事なく眺めていた。

「(どうして……!??) どうしてこんな事に……!-)」

同じ魔法少女や仮面ライダー同士が、キャンディーを目的に戦いあう事自体、スノーホワイトにとって信じがたい事だが、それ以上に九尾、ラ・ピュセル、ライアの安否が心配だった。見るからにボロボロになっていくにもかかわらず、彼らは、自分を陥れた者達と戦っていた。傷ついていくその姿は、見るに堪えないものがあつた。

「(私が……、私が行つて助けてあげなきゃいけないのに、何で、動けないの……!??)」

それが、恐怖による疎みなのだが、今のスノーホワイトにそれを理解するだけの余裕がない。

誰でも良い。彼らを助けてほしい。そう願っていたスノーホワイトだが、それを叶えるかのように、スノーホワイトの耳にこんな声が。『NASTY VENT』

否、スノーホワイトだけではなく、その場にいた全員がその声を確かに聞き取った。

『耳を塞いだ方がいいかもしれないぞ！』

不意に聞き覚えのある、心の声を聞き取ったスノーホワイトはとっさに両手で耳を塞いだ。すると、スノーホワイト以外の全員の耳に、金属を擦り合わせたような、不快感を覚えさせる音が鳴り響いた。

「グツ……!!?」

「な、何だこれは……!」

「ヒイヒイヒイ!!? 何この音チョー気持ち悪い!」

「頭が割れそおお!!?」

「い、一体どこから……!」

皆が苦しみながらも辺りを見渡すと、ユナエルが何かを見つけ指差した。そこには、音の発信源らしき、巨大なコウモリの旋回している姿が。彼らはすぐにそれがモンスターだと分かった。そしてスノーホワイト、九尾、ラ・ピュセル、ライアにはすぐにピンとくるものがあつた。

「契約モンスター……、ダークウイングか!」

「という事は……!」

4人の予想に應えるかのように、ダークウイングの後方から人影が向かってくるのが見えた。ダークウイングを従えている仮面ライダー『ナイト』。そのパートナーである魔法少女『リップル』。さらに2人いつも行動を共にしている龍騎のパートナー『トップスピード』の3人だった。

「挿入歌：果てなき希望」

リップドスワローから飛び降りたナイトは九尾の前に降り立った。

「随分と派手にやってるな」

「! ナイト、あんた……」

「勘違いするな。俺は戦いにきた。それだけだ」

『SWORD VENT』

ナイトはウイングランサーを手に持ち、剣先をベルデとアビスに向けた。

「……チツ！ 妙なタイミングで現れやがって」

ベルデは毒づきながらもナイトに向かって突撃した。アビスもそれに続き、ナイトと九尾も駆け出した。

一方、リップルもラピッドスワローから飛び降りて、ライアとピーキーエンジェルズが交戦している場所に着地した。

「お姉ちゃん！ あいつリップルだよ！ けっこー強いって噂の！」

「マジ!?？ 何でこんな所に来てるのよ!?？ 意味分かんねーし！」

「分かんねーし！」

ピーキーエンジェルズが喚き立てている様子を見て、リップルはそれに負けないぐらいの舌打ちを響かせた。ふと目線を外し、驚きながらも涙目になっているスノーホワイトと、右腕に赤い血が付いている九尾を見つけた後、後方にいるライアに問いかけた。

「……あれ、どういう事。そもそも何でこうなっている」

「……スノーホワイトのキャンディーを強奪するのが奴らの目的だった。今はもう全て奪われてしまっている。九尾とラ・ピュセルもここまでの戦闘で負傷している」

「スノーホワイトと、九尾が……」

「すまないが、協力してくれ。脱落者の発表まで時間はそう残っていない。一刻も早く彼らを退ける必要がある」

「……なら、あなたはラ・ピュセルの所に行つて。こいつらは、私一人で十分」

「だが……」

「私の魔法があれば、あいつら程度、問題ない」

リップルの言葉を受け、ライアはしばらく黙りこんだ後、頷いた。

「分かった。君を信じよう。無理はするなよ」

「お前に言われるまでもない」

ライアの言葉を背中越しに聞いて答えると、ライアはラ・ピュセルがいる地点に向かった。その一方で、リップルが一人で戦いに挑もう

とする様子に、ピーキーエンジェルズはイラついていた。

「私1人で十分とか、ナメプだよ。そういう態度、マジム力つく」

「ホントそれ」

「キャンディーを奪うだけしか能のないお前らが、勝てるわけない」

それに……、とリップルは顔を上げてスノーホワイトと九尾の姿を交互に見た後、目をキツく細めて、マジカルフォンを取り出してタツプし、パートナーの武器であるウイングランサーを構えた。

「誰かを泣かせ、傷つけていくような奴にだけは、負けたくないから」
「アア、もううるさいなあ！　こうなったら意地でも泣かせてやるんだから！」

「やっっちゃおう、お姉ちゃん！」

そう叫んでピーキーエンジェルズは、リップルに向かって武器を突きつけた。対するリップルはウイングランサーを盾代わりにして攻撃を受け止め続けた。ピーキーエンジェルズがどれほど俊敏に裏を取ろうとしても、リップルはまるで最初から分かっていたかのように対処していた。さすがのピーキーエンジェルズも焦りが見え始めたが、リップルは余裕があるかのように表情を崩す事無く、冷たい目力を放っていた。業を煮やした2人は目配せすると、挟み込むように体当たりしてきた。が、それもリップルにとつて計算済みだったらしく、ウイングランサーと、自前の短刀で防御し、双子の動きを止めた後、ミナエル、ユナエルの順に強烈な蹴りを叩き込み、2人を別方向に吹き飛ばした。

「な、何あいつ?!?　何で私達の攻撃が通用してないの?!?」

「やっばマジ強！」

ピーキーエンジェルズが喚くが、リップルはお構いなしに、懐から手裏剣を何枚か取り出し、2人に同じ数の手裏剣を放った。慌ててこれを回避するピーキーエンジェルズだったが、すぐさま異変に気づいた。手裏剣がその勢いを衰える事無く回転して、2人に向かって追いつてきているのだ。リップルの魔法により、手裏剣が百発百中を彷彿とさせるように双子に迫っているのだが、当然2人はそんな事を知る由もなく、ただひたすらに飛び回り続けた。追いかけるのも面倒に

なったりリップルは、その場で双子が必死に逃げ狂う姿を眺めていた。その頃、ルーラの持つバイオインダーによつて拘束されていたラ・ピュセルだったが、

「ウオオオオオオオオ！」

どこからか咆哮が聞こえてきたかと思うと、一瞬の隙にバイオインダーの糸がプツンと千切れ、ラ・ピュセルは自由の身となった。

「おい、大丈夫か！」

ラ・ピュセルに声をかけてきたのは、降下してラピッドスワローから降り立ったトップスピードだった。その手にはパートナーの武器であるドラグセイバーが握られている。先ほどバイオインダーを斬ったのはトップスピードらしい。

「ありがたい、トップスピード！ でもどうしてここに……」

「細かい話は後だ！ それより……」

トップスピードは少し前進して、対峙するルーラを睨みながら両手を広げて叫んだ。

「お前ら一体何してんだよ！ 仲間同士で争ってる場合じゃねえだろ！」

「チツ！ 今日ホントにバカな奴らとしか出会わないわね！ 大体何であんたがここに來てるのよ！ さっさとそこをおどき！」

「ダチが悪い事してるんなら、それを止めるのが俺の役目だ！」

「ダチって、お前まだ私をそんな風に呼んでるのか!?？ こっちは最初からお前の事なんかこれっぽっちも友だと思っけてないわよ！」

「いーや！ お前は俺のダチだ！ 俺が勝手にそう決めた！」

頑なに主張を曲げないトップスピードに、ルーラの怒りは最高潮に達した。そして、王笏を手にとってトップスピードに向けた。

「なら、今すぐその減らず口を黙らせてやる！」

「させるか！」

これを見たラ・ピュセルは剣を拾い、一旦元のサイズに戻してから、剣先をルーラに向けた。ラ・ピュセルは魔法を使って剣のサイズを変化させたが、今回は幅や厚みを変える事なく、長さだけを大きく一直線に伸ばし、ルーラの持つ王笏を弾き飛ばした。

「グウウ……！」

弾かれた時の振動で手を痛めたルーラに対し、ラ・ピュセルはマジカルフォンを取り出してタップし、左腕にエビルバイザーを装着した。

「ラ・ピュセル、援護するぞ」

『STRIKE VENT』

そこへリップルの所から離れてやってきたライアが合流し、2人で同時に左腕を横に振るい、ソニックブームを放った。

「きゃあー！」

直撃こそしなかったが、目の前の地面が爆ぜて、ルーラは地面に倒れこんだ。ここまで打ちのめされたのは、カラミティ・メアリとの一件以来だ。唇を噛み締めながら顔を上げたルーラは、そこで周りの現状を把握した。ベルデとアビスは九尾とナイトに僅かながら押されており、ピーキーエンジェルズはリップルの攻撃から逃げ回る事しか出来ていない。

スイムスイムはともかく、この場にはいない他の4人はどこで道草を食っているのか知らないが、応援は期待できないようだ。現時点でナイト達の援護により人数差が逆転されている。おまけにナイト達のチームは戦闘能力が高い事で知られている。このままでは勝ち目がない。弱気な選択ではあるが、ルーラは仕方なしにと、こう叫んだ。
「撤収するぞー！」

幸い、当初の目的であるスノーホワイトからのマジカルキャンデー奪取は完了している。そこから先はあくまでボーナスポイントを得るようなものだ。無理に続ける必要もない。ただ、ピーキーエンジェルズだけは頬を膨らませて不満を口にした。

「ええ〜？ 自分から戦えって言ったくせに〜」

「そ〜そ〜」

「うだうだ言うなポンコツ共！ 戦略的撤退よ！ アビス！」

ルーラがそう一喝した後、アビスの名を叫ぶと、彼は小さく頷き、他の4人と合流して一箇所に集まった。逃げようとする彼らを追ってこちらも一箇所に集まった九尾達を見て、アビスは1枚のカードをア

ビスバイザーにベントインした。

『STRIKE VENT』

すると、アビスの右腕にサメを模した『アビスクロー』が装着され、右腕を突き出すと同時に、口の部分から激流が溢れ出し、『アビススマッシュ』として九尾達に向かって襲いかかった。

「ワアッ!?」

「くっ……!」

「うっ!」

前線にいた九尾、ラ・ピュセル、トップスピード、リップルの4人は真正面から水流を全身に被り、行く手が遮られた。ようやく視界が開けてきた時には、すでに5人の姿はなかった。

「逃げたか……」

そう呟く九尾の全身は、アビススマッシュによってびしょ濡れになっていた。もちろん他の魔法少女達も同じく。

「バカヤロー! 寒いし、こんな時期だから風邪ひいたらどうすんだよ!」

誰もいない先に向かって場違いなツツコミを怒鳴り散らすトップスピード。彼女のみならず、水浸しになった魔法少女達の服はベツタリと肌に張り付いており、特にリップルは体を震わせながら、元から綺麗な素肌を、さらに強調させるような容姿になつてるので、九尾は目のやり場に困って、黙って目線をそらした。遅れてラ・ピュセルもそれに気づいて顔を紅くして俯いた。

その後、6人は屋上に待機しているスノーホワイトの所に向かった。スノーホワイトも一部始終を見ているので、不安な表情で出迎えた。

「みんな、大丈夫……?」

「まあ、なんとかな」

「んな事より、スノーホワイトこそ大丈夫なのか?」

「無事……とは言い難いですけど……」

スノーホワイトがそう呟くのも無理はない。せっかく大量に貯めていたマジカルキャンディーが奪われてしまったからだ。それも、同

じ魔法少女や仮面ライダー達によって。未だにショックが隠しきれ
ていないようだ。

「すまない。僕が先走って奴らの策にはまったばかりに……」

「お前が謝る事ねえよ。俺の方こそ、油断してた。情けねえよな……」
ラ・ピュセルと九尾が謝る中、ライアが言った。

「自分を責める事はない。それを言うなら、大人である俺にも監督出
来ていなかった責任がある」

それより……と、ライアがナイト達に顔を向けた。

「さつきは協力してくれて感謝する。おかげで事なきことを得た」

「良いっていいって！ そんな堅苦しくなくてもさー！」

トップスピードが大らかな態度でそう言った後、ラ・ピュセルが気
になっている事を質問した。

「ところで、君達はどうしてこの場所に？」

「つと、いけねえ忘れてた！ なあみんな。龍騎見なかったか？」

「龍騎……ですか？」

スノーホワイトが首を傾げた。

「ああ。いつになっても来る気配がなくてな。俺としてはどうでもよ
かったが、トップスピードがうるさく言ってくるから、仕方なく、と
いったところだ」

「そりゃあ心配するだろうよ！ 俺のパートナーだし、今は同じチー
ムだろ？」

トップスピードの正論を受けて、リップルは軽く舌打ちした。と、

そこへラ・ピュセルが慌てたように声をかけた。

「龍騎だったら、さつき僕達をこの場所に行かせてくれたんだ！」

「……またいつものお人好しが出たか」

ナイトが呆れていると、ライアが港の方に顔を向けた。

「まだガイ達と交戦している可能性が高い。全員で向かおう」

「分かった！ 案内してくれ！」

トップスピードにそう言われ、ライアとラ・ピュセルを先頭に、一

同は龍騎がいるであろう港へ急いで足を運んだ。

29. 奪われたキャンディー

『SWORD VENT』

「ダアアアアア！」

ライアとラ・ピュセルを鉄塔の方に向かわせた後、龍騎はガイ、タイガ、インペラーの3人を足止めするために武器を構えた。依然として同胞を傷つけようとまで考えているわけではないが、少なくとも武器無しで対峙しようとは考えていなかった。それに龍騎自身、このような状況は初めてではない。まだ選抜が行われていない、比較的平和だった頃に誤って城南地区に入り込み、王蛇とカラミティ・メアリから一方的な攻撃を直に受けた経験がある。あの時の出来事を活かし、今度は武器を手にとって足止めする事に徹した。

が、やはり人数差もそうだが、目の前にいる3人は龍騎よりも長く仮面ライダーを務めている。そう簡単に状況が覆るわけもなかった。「せいっ！」

インペラーがガゼルスタップでガードし、その隙にガイがメタルホーンで反撃してきた。ギリギリのところかわす龍騎だが、そこにさらなる猛追が。

『STRIKE VENT』

「ふんっ！」

「グアツ!?？」

タイガの両手に熊の手のような、爪の鋭い武器『デストクロウ』が装着され、思いっきり振るうと、龍騎にダメージを与えた。負けじとガイに飛びかかり、龍騎は不意に感じた疑問を叫んだ。

「大体お前ら、何でライア達に襲いかかってんだよ！ 今日発表日だろ!?？ 大人しく結果を見とかなきゃダメだろ！」

「はあっ？ だから何って話。キャンディー集めたいなら、人助けしなくたって別に方法あるっしょ。例えばさ、今一番キャンディー持っている奴からごっそりいただいちゃうとか」

「なっ……!?？」

ガイの言葉にハツとした龍騎は一旦距離を置き、頭の中で整理し

た。

「まさかお前ら、譲渡機能を使つて、スノーホワイトを……！」

「あんたが俺達を止めてる間にも、計画は順調に進んでるっぼいし、結局無駄足になってるってわけ。分かった？」

「このお……！」

ガイ達のやり方に怒りを覚えた龍騎は、完全に頭に血が上つていた。

「もうあつたまきた！ お前ら許さねえからな！」

「悪いって分かつてるけどさ！ こうでもしなきゃルーラに見限られちまうんだよ！ 俺達だつて生き残りたいし！」

インペラーがそう弁解するが、龍騎はとことん無視した。

「こんな事、絶対止めてやる！」

「あつそ。じゃあさつきと終わらせよつか。ウザくてしようがないし」

ガイは左手の親指を立てて、下に向けた。本気で龍騎の息の根を止めにくようだ。再び立ち向かう龍騎だが、やはり人数差に苦戦を強いられている。そこで龍騎が取り出したガードは『アドベント』のカード。

『ADVENT』

上空からドラグレッダーは咆哮をあげて龍騎の隣を旋回した。そして口から火炎弾が放たれようとしたその時。

『FREEZE VENT』

タイガがカードをベントインし、ドラグレッダーは瞬間凍結された。もはや攻撃する事さえ出来ない。

「なっ!? ドラグレッダーが……！」

動揺する龍騎に対し、インペラーはチャンスと見たのか、タイガに指示を出した。

「今だ！ 俺をあいつのところへ飛ばしてくれ兄貴！」

そう言つてインペラーが取り出したのは、ユナエルのアバター姿が描かれたパートナーカード。それをガゼルバイザーにベントインした。

『TRANS VENT』

すると、インペラーの姿が歪み、その容姿をタコに変えた。そのタコを掴んだタイガは龍騎の顔面に向かって投げ飛ばした。

「た、タコ!?? おわあっ!??」

インペラーの使ったパートナーカード『トランスベント』は、パートナーのユナエル同様、魔法によって生き物全般に自分の意思で変化する事ができるのだ。当然龍騎は知る由もなく、顔面に張り付いたタコ（インペラー）を引き離そうとするが、逆に墨を吐かれて、視界が遮られた。

「み、見えねえ!??」

「ダアッ!」

慌てふためく龍騎に対し、その場で元に戻ったインペラーが連続で蹴りを叩き込んだ。インペラーが下がり、龍騎がよろめいていると、タイガが新たなカードをベントインし、インペラーもそれに続いた。

『ADVENT』

『KICK VENT』

タイガが『アドベント』のカードによって現れたのは、契約モンスターの『デストワイルダー』。それが龍騎の後方から接近し、剛腕な両腕で龍騎を軽く吹き飛ばした。その落下地点にはインペラーが待ち構えており、『キックベント』によって脚力が強化された一撃『ガゼルブレイク』が龍騎の腹に直撃。龍騎はなす術なく吹き飛び、近くの工場に全身をぶつけた。背中越しの壁にクレーターのような穴が開き、龍騎は地面に倒れこんでうずくまった。

満身創痍の龍騎を見て、ガイは笑いながら一步一步確実に龍騎に近づいていた。未だに視界が遮られており、どこに敵がいるのかさえも判断出来ない。龍騎が立ち上がってカードを引き抜こうとした時には、すでにガイが目の前に佇んでいた。

「じゃあね」

そう言っただけでガイがメタルホーンを構える右腕を突き出し、龍騎の首元を突いた。

「ゴフツ……!??」

言葉にならない悲鳴をあげ、視界がグラついたかと思うと、龍騎の意識は次第に薄まり、完全に視界が真っ黒に染まった時には、無意識にガイに寄りかかって、両足にしがみついていた。

「触んなよバカ」

ガイはそんな龍騎を蹴り飛ばし、仰向けに寝転がせた。

タイガとインペラーの2人も気絶している龍騎に近づいて、顔を覗き込んだ。

「お、おい。こいつ死んでねえよな……?」

「大丈夫っしょ。こいつバカだから石頭っばいし。ま、仕事を邪魔したのが運の尽きってやつだよ」

ガイがヘラヘラ笑って、龍騎を足で小突いていると、水の波紋のような音が鳴り響き、3人が振り返ると、1人の魔法少女が立ち尽くしていた。先ほどマジカルキャンディーを奪取し、ルーラと分かれたばかりのスィムスィムである。

「あ、スィムスィム。そっちはどうだった?」

「終わった。スノーホワイトのマジカルキャンディーは、全部私のマジカルフォンの中」

「じゃあ、作戦は成功したんだね」

タイガの言葉に、スィムスィムは無言で頷く。それから不意に周りを見渡し、口を開いた。

「……たまは?」

「さっきライアに踏み倒されてそれっきりだったっけ」

「オーイ! たま、生きてるか? 返事してくれ!」

インペラーが、たまの掘った穴に向かって叫ぶと、弱々しくも、確かにたまの声が返ってきた。

「う、うくん……。ちよつと頭がクラクラするけど、大丈夫にや……」

「明らかに口調が変わってるぞ!? 本当に大丈夫なのかよ!?」

インペラーがそうツツコむと、スィムスィムのマジカルフォンに着信が入った。見てみると、ルーラからのメッセージだった。文面を読んだスィムスィムは、ガイ達に伝えた。

「ルーラから連絡。任務完了。至急王結寺に戻れ」

「じゃあ行こうぜ。早く行かねえとまたドヤされるし」

インペラーがそう言い、タイガと共に王結寺に向かって一足先に帰還した。スイムスイムが魔法を使ってたまを救出している最中、ガイだけは倒れこんでいる龍騎に目をやった。ふと目線を外して、龍騎の足元に転がっていた、『あるモノ』を見た途端、ガイは仮面の下でニヤリと笑い、それを手に取った。そこへ、別の足音が聞こえてきて、ガイが振り返ると、そこに現れたのは、ルーラ達と共に撤退したはずのアビスだった。ガイの口元はさらにつり上がった。

静まり返った港に大勢の人の足音が鳴り響いたのは、それから数10分後の事だった。龍騎を探しにやってきた九尾、スノーホワイト、トップスピード、ライア、ラ・ピュセル、ナイト、リップルは、そこで仰向けに倒れている龍騎を発見した。

「！ 龍騎！」

「城戸さん！」

皆が駆け寄り、龍騎の周りに群がった。特にパートナーのトップスピードはこれでもかと言わんばかりに龍騎の体を揺らしていた。

「おい、しつかりしろ！ 死んでねえよな!!?」

「落ち着け。息があるという事は、気絶しているだけのようだな」

ライアが冷静に呟いていると、うめき声と共に龍騎が上半身を起こした。

「……ん、あ、あれ……。みんな……」

「龍騎！ 心配させやがって！」

トップスピードが涙を浮かべながら龍騎を抱きしめた。心底心配していたのだろう。それからトップスピードを落ち着かせた後、龍騎は質問をした。

「そ、そうだ。あいつらスノーホワイトのマジカルキャンディーを狙ってたみたいだけど、どうなったの……」

「……ごめんなさい。奪われちゃったんです。龍騎にも迷惑かけちゃって……」

「い、いいよ。俺の事は気にしなくても。元々勝手に割り込んできたんだし。……でもあいつらマジで許せねえな」

「まあ、バージョンアップされた以上、大方予想は出来た。あいつらみたいに行動を起こす奴らが出てくる事は」

ナイトが肩を竦めて語っていると、ラ・ピュセルが体の向きを変えて、夜空を睨んだ。ライアが低い声で呼び止めた。

「待て。どこへ行くつもりだ」

「僕が取り返してくる！ スノーホワイトから奪ったキャンディーを！」

「だ、ダメだよ……！」

慌ててスノーホワイトがラ・ピュセルの腕を掴んだが、ラ・ピュセルは表情を険しくして叫んだ。

「何言ってるんだ！ 今日とは週間ランキングの発表日だ！ 急がないと君が……！」

ラ・ピュセルの言う通り、このままではキャンディーの数が最も少ない可能性の高くなったスノーホワイトは脱落する。同じチームと

して、何より幼馴染みとして、黙って見過ごす事の出来ない事態だ。が、スノーホワイトは力が抜けたように首を横に振って、静かに呟いた。

「……それでも、良い」

「！」

「なっ!?？」

これにはその場にいる7人に動揺が走り、たまらず皆は口々に叫んだ。

「いい訳ないだろ!?？ 死んじゃうんだぞ！」

「そうだよスノーホワイト！ なんだったら俺のマジカルキャンディーあげる……って、ああ!?？」

「どうした？」

龍騎がスノーホワイトにキャンディーを分け与えようとして自身のマジカルフォンを起動した時、龍騎は思わず叫んだ。

「俺の持ってたマジカルキャンディーの数が、減ってる……！」

「何だっ!?？」

「……あいつらが倒れたあなたからついでに奪った、って事だろ」

「自業自得だな」

「んな呑気な事言ってる場合かよ！ あいつらそんな事まで考えてたのかよ、信じらんねえ……」

龍騎の言うように、彼の所持するマジカルキャンディーの数は全てではないにしろ、かなり減っていた。ガイが拾い上げて、自身のマジカルフォンに転送させたのだ。

トップスピードが絶句している中、九尾はスノーホワイトと龍騎を交互に見合った。そして歩き出し、ラ・ピュセルの横に立って口を開いた。

「ラ・ピュセル。みんなを頼む」

「九尾……？」

「どこへ行く」

「！ まさか、九尾……！」

「お前が止めても、俺が行く。龍騎の分も、取り返しに行く」

「待て！ そんな怪我であの10人と戦って、勝ち目があるとは思えない！」

ライアがそう言うように、九尾の右腕には戦闘で生じた傷がある。血は止まっているものの、ダメージはそれなりに蓄積されているはずだ。限られた時間内にそんな状態で戦ったところでどうなるかは、結果を占うまでもない。

「それでも……」

だが、九尾は迷う事なく決断する。

「それでも、このまま黙ってなんていられない。俺なりにケジメをつけないきゃならないんだ。だから、城戸さんと、小雪を、絶対に死なせない！」

怪我なんて言い訳に出来ないしな、と語るように、今回の件で彼なりに責任を感じたと同時に、プライドがあるのだろう。九尾はキャンディーを取り返そうと、前進しようとした。

「ダメだよそんなの！」

スノーホワイトの悲痛な声を聞きながら、九尾は立ち止まって呟いた。

「もし、上手くいかなかったら……」

「いかなかったら……？」

「俺の持つてるキャンディーは全部お前にやる。スノーホワ」
「ダメ！」

刹那、九尾の背中に何かが密着した。声からして、スノーホワイトが九尾を背後から動けないように抱きしめているらしい。そのスノーホワイトは、嗚咽を鳴らしながら、静かに呟いた。

「だったら絶対、行かせないから……！ お願いだから、そういう事しないで……！ 私、死ぬのも怖いけど、それで九尾が、パートナーが死んじゃう事になったら、生きてく自信ない……！」

「……」

「どうしても行くんだったら、キャンディーの数を同じにして……。死ぬ事になっても、2人一緒だったら……私……」

「小雪……」

「小雪ちゃん……」

ラ・ピユセルと龍騎が呆然と眩き、他の面々もどう声をかければいいのか分からない様子だ。九尾はスノーホワイトを泣かせてしまった事に罪悪感を感じながら、右手でスノーホワイトの右手を優しく握った。

「……ごめん。悪かったな」

慰めるように眩いた後、肩の力を緩めた。どうやら思いとどまれたようだ。頃合いとみたライアが、2人に声をかけた。

「とにかく、キャンディーの数を確認しよう。スノーホワイトの所持数が0でも、最悪この場にいる俺達が均等に分け与えれば、生き残る可能性はある。この譲渡機能は、そのためのものでもあるだろう？」

「……ああ、そうだな！」

「ナイト、リップル。不合理なのは分かるが、今は頼む」

「……仕方ないな」

「少しだけなら構わない」

普段は人付き合いの悪い2人の承諾も得て、一同は早速スノーホワイトのマジカルフォンに貯められているキャンディーの所持数を確認した。

「!?？」

「……えっ」

だが、マジカルフォンに表示された数値は、皆の予想を遥かに上回るものだった。

「これは……!?？」

「どういう事だ……?？」

湿っぽい風が吹いている港の一角で、困惑の空気が漂い始めた。

30. 生きるという事は……

港での激戦を終え、ルーラはベルデ、ミナエル、ユナエルと共に王結寺へ帰還した。スイムスイムとは鉄塔から転落した後から姿を見ていないが、彼女の魔法を知っているルーラは、おそらく大丈夫だろうと考えた。アビスは途中でガイ達を迎えに行くと言って別行動をとっている。

しばらくして、アビスを先頭にガイ、タイガ、インペラー、たま、スイムスイムが戻ってきた。たまはガイの肩に担がれた状態で運ばれてきて、あまりろれつが回っていないようだったが、いつもの事だとルーラは切り捨てた。

スイムスイムは作戦通り、スノーホワイトのキャンディーを奪取できており、加えてガイは乱入してきた龍騎から逆にキャンディーを奪うという成績を残した。弱気に思えた戦略的撤退は、結果的に功を奏したらしい。ルーラは心の中でほくそ笑んだ。

「で、スノーホワイトはどれだけ持ってたのかしら？」

ルーラがスイムスイムのマジカルフォンを覗き込んでみると、『2904』と表示されていた。スイムスイムに確認したところ、彼女が元々所持していた数は、『826』個。差し引きすれば、『2088』。その数の多さに、ルーラは眉をひそめた。2088という数値は、現時点において、このメンバーで最も所持数の多いルーラの分の倍以上だったからだ。

「あいつ1人で2000も稼いでたんだ」

「どうやったならそこまで集められるんだか」

「ブルジョワやね」

「なら、これって現代の打ち壊しだね」

「ああそっか。お姉ちゃんマジクール」

双子がそう呟いている間にも、ルーラは続いてガイのマジカルフォンから、龍騎の所持数を確認した。持ち前の頭脳を活かして素早く計算した結果、『1584』個と判明した。スノーホワイトよりは少ないものの、第3位だった事を考えると納得がいく。

今回強奪した2人のキャンディーの総数は『3672』個。それが伝わった途端、一同の中で話題になったのは、キャンディーの分配だった。

「ええつと……。このキャンディーどうするの？」

たまの眩きに対し、真つ先に口を開いたのはインペラーだった。

「3672をこの場にいる人数の10で割れば、1人あたり367個。余りは2だな」

「おお、早いにや〜」

「そーいやインペラーつて、前からお金の計算早かったよね」

「そうそう。それだけは早いよね」

「まあ、お金欲しさに働いてたらいつの間にか身についちやってさ」

「でも、割り切れないね」

たまがそういうように、2個余った分はどうなるのか。こればっかりはどうしようもないので、優先的にリーダーであるルーラとベルデに1個ずつ献上しよう。1個程度の差なら気にする事もない。インペラーがそう言おうとしたその時、ルーラが割り込んできた。

「何を言ってるの？ どうして10等分しなきゃならないのよ」

「へっ？」

インペラーがキョトンとする中、ルーラは格の違いを見せるかのようになんと言った。

「この『3672』を3で割って、『1224』がリーダーである私とベルデの取り分。あとの『1224』を4で割った分がスィムスィム、アビス、ガイの取り分。残った『306』が他の5人の取り分。そこで余った1個は、龍騎から奪取できたガイにボーナスとしてあげれば良いわ」

一瞬にして破れ寺の中が静寂に包まれた。つまり、ルーラの話を変更してまとめると。

『マジカルキャンディーの獲得数』

・ルーラ、ベルデ……『1224』

・ガイ……『307』

・アビス、スィムスィム……『306』

・タイガ、インペラー、たま、ピーキーエンジェルズ……『61』
という計算になる。これではあまりにも差ができていけないか。
インペラーが物申そうとしたが、ルーラにひと睨みされて、彼らは萎縮した。

「あら、文句ある？」

「うっ……」

「こうなつて当然でしょ。作戦の立案、作戦実行時に最も重要な役割を担ったリーダーと、自分の役割をきちんと果たした役に立つバカや、それ以上の事をやつてのけたバカ、与えられた仕事を満足にこなせなかった無能なバカが、何で報酬が等しくなれると思ってるの？」
バカなのか？

ルーラはそう問い質すが、誰も返事する者はいない。仮面ライダーの表情までは読み取れなかったが、たまの萎縮した顔、ピーキーエンジェルズの不満げな顔、スィムスィムの無表情な顔を見て、ルーラは不満を爆発させるように罵った。

「ああバカだった。もう確定事項だった。あなた達がバカで無能で6対2で足止めすら出来なかったから、もう少しで作戦そのものが失敗しそうになったんだった。私が忘れてたのね」

「ちよ、ちよつと言い過ぎじゃないか……？ だつてその……」

インペラーが我慢出来ずに反論しようとするが、王笏の石突きを木の床に打ち付ける事で会話を絶った。

「一番無能なあなたがそれを言う？ 己の分を知れバカ共。罰を与えられなかっただけ、ありがたいと思いなさい。それで良いわよね、ベルデ」

「……ふん」

段差の上に腰掛けていたベルデは鼻を鳴らし、異論がない事を告げた。

「生きたいと思うなら、黙って私やベルデのような者に従っていればいいのよ」

インペラーがまた何か言おうとするが、それよりも早くアビスの声が遮った。

「チャットが始まる。みんな、入ろう」

そう言われて、王結寺にいるメンバーは全員チャットルームにログインした。チャットルームには、ファヴやシロー、クラムベリー、オーデインがいた。が、それ以外のメンバーはいない。明らかに参加率が激減していた。

ファヴ：『今日は人数少ない気がするぽん？』

シロー：『頻繁に参加しているオルタナティブ達がいらないな』

ファヴ：『後でログ閲覧すれば良いかと思ってるぽん？ それに今いるみんなもあんまり喋ってないみたいだし、もうちよつと明るく楽しくいこうぽん』

誰がするか、とツツコみたくなる言い方だが、文句を言っても何も始まらない。

シロー：『さて、それでは皆が最も気になっている成績発表をしよう』

ファヴ：『そうだぽん。今週最も少なかったのは……』

「(……ふん。そんなものは決定事項。最も少ないのは、全て奪われて0個になってるスノーホワイトに決まってるわ)」

ルーラがニヤつきながら画面を見つめる中、ファヴの口から脱落者の名が告げられた。

ファヴ：『ルーラだぼん』

「……え」

名前を呟かれた魔法少女は、一瞬だけ頭が真っ白になった。

今、何と言った？ 脱落者はルーラ？ スノーホワイトではなく？

そんな言葉が思い浮かぶ中、ファヴとシローのコメントは続いた。

シロー：『ほう。ルーラか。私としては、少々意外だったな』

ファヴ：『ファヴもそう思うぽん。いろいろ頑張ってたみたいだけど、残念ぽん』

シロー：『だがこれもいた仕方ない。結果がこれではな』

ファヴ：『ちなみに順位の変動はないぽん。スノーホワイト、2週連続トップおめでどうぽん！』

そんな事はどうでもいい。インペラーならともかく、何故自分が最下位になってるのか。そちらが間違っているのではないのか。

そうコメントしようとして指を動かそうとしたその時だった。

「……フハ。ハッハッハ」

堪えていた笑いを我慢出来なくなったかのように、笑い声をあげる者が。ルーラが恐る恐る振り返ると、ガイが仮面の下から笑い声をあげ、面白おかしく手を叩いていた。否、ガイだけではない。その隣にいたピーキーエンジェルズも不敵な笑みを浮かべているではないか。まるでこうなる事を予測していたかのように。引きつった表情で、ルーラは口を開いた。

「あ、あんた達、一体……」

「いや、やっぱその顔まじウケるわ。傑作ものだね」

「うんうん！」

「ホントホント！」

「なっ……!? まさか、お前らバカ共が、この私を、出し抜いたとい

うのか!?? どうやって……」

「んな事どうでもいいだろ」

そう呟いたのは、不意に立ち上がったパートナーのベルデ。

「ファヴもシローも言ってたろ? 今週脱落するのはお前だ、ルーラ^{バカ}」

ベルデの低い呟きに、ルーラは戦慄した。無能な彼らに、自分を陥れるだけの策が考えられるとは思えない。となると、今回の計画の首謀者は……。

「あなた、なの……? 何で、どうして、どうなってるの!?? 何で、どうして……!?? だってあなたは私の」

「パートナーってか? ハンツ、あんなもんお飾りだろ。俺からしたらな」

「……っ!」

「パートナーで生き残れてたら近いうちに良い事あるって言ってるけどな。そんなのは実力で手に入れるもんじゃねえからな。いらねえんだよ、ハナっからな」

初めて見る、社長の豹変した態度に恐れ慄いたのか、ルーラは後ずさった。そして魔法を行使してベルデを止めようとしたが、

『HOLD VENT』

それよりも早くベルデがバイオインダーを出して、ルーラの持つ王笏を弾き飛ばした。動揺するルーラに対し、ベルデは歩み寄りながら、堂々と語り始めた。

「お前はその魔法でこいつらを掌握出来てるつもりだっただろうが、所詮魔法は魔法。面と向かって従わせている奴にはこれっぽっちも効かねえんだよ」

「……!」

ベルデの言葉に偽りは無い。ベルデの変身者である高見沢は、インシアチブをとるのが誰よりも上手く、それ故に、彼に忠誠を誓う部下を生み出してきたところを、ルーラ……もとい早苗は何度も身近で見してきたはずだ。

確立した『死』が迫る中、ルーラはあてもなく逃げ出す事だけを選択し、足を動かさそうとした。が、それを妨げるかのように、ピーキー

エンジェルズが素早くルーラの足をそれぞれ掴み、続けてガイ、そして後方にいたアビスがそれぞれ肩を掴んだ。それにより完全に身動きが取れなくなったルーラはたまらず叫んだ。

「な、何をする!?? 離せ!」

「あれあれ? 高貴なお姫様が敵を目の前にして逃げ出すなんて、プライドもへったくれもなくなっちゃった感じ?」

「あああ、いい気味だねえ」

「そーそー。ダツサイよねえ」

ガイ、ミナエル、ユナエルがルーラをからかって、ガツチリと四肢を掴んでいた。一方、何が起こっているのか分かっていないのが、たま、タイガ、インペラーの3人だった。リーダーの脱落が発表されたと同時に、メンバーの半数が態度を変えてルーラに手を出そうとしているのだから、困惑するのも無理はない。

「え、何!?? どうなってるの……!??」

「お、おい待ってって! これって……」

インペラーとたまがガイ達に近寄ろうとした時、2人の肩をスイムスイムが掴み、動きを止めた。

「す、スイムちゃん……!??」

「な、何して……」

「邪魔しちやダメ。これはリーダーの決めた事」

無表情で呟くスイムスイムを尻目に、ベルデはルーラをひれ伏させて、彼女の顎に手を触れてグイツと上げた。

「要するに、お前にリーダーなんてハナから無かったって事だ。分かったか?」

「じゃ、社長……!」

「そんなバカなお前に、最後に教えといてやるよ。さつきお前は生きたかったら俺みたいな奴に従つとけって言ってたがよ……。俺からしたら0点だ。今の社会じゃ通用しねえ」

そしてベルデは足をダンツ! と踏み鳴らすと、ルーラを覗き込むようにこう叫んだ。

「生きるって事はな、他人を蹴落とす事なんだよ! リーダーって呼

ばれる奴も、周りにいる奴らも含めてな！」

「……!?？」

「ヒューヒュー！ カッコいい！」

「さっすが現役のリーダー！」

ルーラの背筋に冷たい汗が流れた。ピーキーエンジェルズが囁し立てる中、ベルデは少し距離を置いた後、カードデッキに手を置いた。「だがこのまま死んでくんじゃみつともねえだろ。ねむりんよりか少しばかり大人だったのは分かったからな」

お前にピッタリなやり方でやってやるよ。

そう呟いてベルデが取り出したカードをルーラに見せた瞬間、ルーラの顔が引きつった。彼の手にあるのは、自分自身のアバター姿が中央に描かれている、パートナーカード。

「ま、待て！ それだけは……！」

ルーラが必死に赦しを請うが、ベルデは聞く耳を持たない。たまらずスイムスイムに助けを求めた。

「す、スイムスイム！ ルーラの名の下に命ずる！ ベルデを止めなさい！」

「……」

だがスイムスイムは無反応のまま、ジツと事の成り行きを見守っていた。当然だ。今のルーラは魔法を行使するための条件が揃っていない。

そしてベルデは、バイオバイザーからカードキャッチャーを引き伸ばし、パートナーカードを挟んでベントインした。

『OBEY VENT』

ルーラの魔法と同等の効果を行使出来る『オヴェイベント』が発動し、ベルデは手元に現れた王笏を、ルーラではなく、少し離れた所にいるタイガに向けた。

『ベルデの名の下に命ずる。タイガよ』

「……？」

タイガが突然の事で考える暇もなくベルデに顔を向けると、ベルデはこう命じた。

『ルーラにトドメを刺せ』

「! や、やめ……!」

ルーラが強張る中、タイガは無言で頷き、カードデツキから取り出したカードを、デストバイザーの刃の付け根の白虎の部分をスライドさせ、挿入口にベントインした。

『FINAL VENT』

直後、ルーラ達の後方に置かれていた、割れている丸鏡の中からデストワイルダーが飛び出してきて、背後からルーラを押し倒し、そのままルーラをうつ伏せのまま引きずって前進し、近くに支柱にぶつけた。

「ガッ……!?」

ルーラの額からぶつけた衝撃で血が流れ出るが、デストワイルダーはお構いなしに再びルーラを引きずり、今度は壁に激突させた。激痛に伴って悲鳴をあげながら顔を上げたルーラが、デストワイルダーが方向転換して引きずっていく先を見て、目を見開いた。その先には、デストクローを両手に取り付けたタイガが腰を低くして力を込めて構えていたのだ。

「ハアアアアアアアッ……!」

操られているタイガが気合いを入れ、タイガに向かってデストワイルダーがルーラを引きずっていく間、ルーラはパニックに陥っていた。インペラーやたまの声が聞こえるが、それを聞き取る余裕はない。鋭く光るデストクローの鉤爪が眼前に迫っている。

「(何で、何でよ……!? こんな結末望んでない! 私は間違っただんかい! スノーホワイトや九尾みたいな奴らが正しいはずもない! 私が統治していれば誰もハマせずに済むのに!? どうしてどうしてどうして何でどうし)」

刹那、王結寺の室内の至る所に、生暖かさが感じられる液体が飛散した。

「やったーやったー！ 嫌な奴がいなくなったー！」
「そーそー！ 偉そうにしてる奴がいなくなったー！」

「キャンディーちゃんとは分けなかつたからこうなるんだよねえ」

「バカだのアホだの悪口ばつか言ってるからこうなるんだよねえ」

しばらくの間、ミナエルとユナエルがそこらじゅうを飛び回りながら侮辱と罵倒を口にして、喜びを爆発させていた。ガイは口こそ開かなかつたが、仮面の下で笑いながら腰に手を当てていた。スイムスイムとアビスは黙り込んでおり、ベルデは疲れたかのように息を深く吐いて腰を下ろした。たまは膝を抱え、耳を伏せ、全身を震わせて目を逸らしていた。

「あ、ああ……」

インペラーは目の前に広がる惨状に理性が耐え切れず、腰を抜かしていた。彼がそうなるのも無理はない。

そこには、変身が解けているスーツ姿の木王 早苗が息絶えており、彼女を中心に多量の血液が、幾つも穴の空いた腹部から今なお広がり続けているという、変わり果てた姿がそこにあつた。うつ伏せに倒れているため、体の前部はほぼ血に染まっていると見て間違いないだろう。

彼女のそばには、必殺技である『クリスタルブレイク』をルーラに向けて放ち、デストクローでルーラの体を難なく貫いた張本人であるタイガが、血に染まったデストクローを呆然を見つめたまま、立ち尽くしていた。その足元は、早苗から流れ出た血で覆われている。

自らが得意としていた魔法によってトドメを刺される。ルーラは彼女にとってまさに屈辱的とも言える最後を遂げてしまったのだ。

あまりにも酷い最後を目撃してしまい、震えが止まらないたまを見て、ガイがしゃがんで頭を撫でた。

「気にしなくていいって。ああなつてもしょうがない奴だったんだからさ。もう泣くなよ」

たまは顔を上げ、涙を浮かべながら思わずガイに抱きついた。よほど不安に駆られていたのだろう。

「どころでさー。これ、どうする?」

「だよねー。邪魔でしょうがないし」

ルーラを特に嫌っていたピーキーエンジェルズは、早苗の死体を突

きながらどうするか考えていた。すると、真つ先に挙手したのは普段からルーラに付き添ってばかりだったスイムスイムだった。

「死体は私が片付けておく。掃除もやっておく。良いよねリーダー」

スイムスイムは念のために現リーダーであるベルデに確認をとると、ベルデは肩を竦めた。

「……好きにしろ。どうせ今日はこれで解散だからな」

それから立ち上がって背伸びをした後、皆の方を向いて告げた。

「お前らもそいつみたいになりたくなかったら、信頼を裏切るようなバカな真似はするなよ」

「大丈夫だってー！ 何てったって、ベルデは超尊敬できるし！」

「天才だしー！」

「……ふん」

ベルデはピーキーエンジェルズに煽てられながら、王結寺を後にした。門の戸締りだけはちゃんとしとけよ、と呟きながら。

スイムスイムは血だらけの早苗を抱き起こし、背負った。スイムスイムの背中一面に血がベツトリとつくわけだが、本人は至って気にしてないようだ。途中で引き戸を開けてもらうのをアビスに手伝ってもらいながら、スイムスイムは外に出て、アビスもそれについていった。ガイはたまを自宅付近まで送るために、2人で王結寺を後にした。ピーキーエンジェルズもタイガとインペラーにさよならを告げてから、文字通り一直線に王結寺からN市上空へ飛び去って帰宅した。

「……」

兄のタイガは未だに、床に広がる血の跡を見つめ続けており、弟のインペラーはこれから先に待ち受ける、底知れぬ不安を全身に感じていた。

門の外に出て、暗い裏通りに横たわらせておこうかと考えていたが、アビスのアドバイスを受け、後先の事を見据えて、あえて裏庭の一角に置くことにした。

血まみれの早苗を茂みの奥に置いた後、その姿をボンヤリと見つめながらスイムスイムはある事を思い返していた。

つい先日、ルーラが女王様として皆から崇められている夢を見た。清く凛々しく振る舞うルーラを見て、彼女はいつも憧れの眼差しを向けていた。

ルーラはスイムスイムにとってお姫様であり、可愛く、賢く、カッコいい存在だった。そんなお姫様に仕える事が、スイムスイムの夢だった。

『そんなルーラが好きなの?』

その時、横に立っていたパジャマ姿の少女がそう問いかけた。スイムスイムが無言で頷くと、さらに少女は驚くべき事を言った。

『そつかく。でも、あなたはお姫様にならないの?』

それは、お姫様に仕える事だけを夢見てきた彼女にとって、ハンマーで殴られた時の衝撃を感じるに等しい一言だった。

『きつとなれるよ。女の子はみんな、お姫様候補なんだから』

それから別れの言葉を告げた後、パジャマ姿の少女はどこかへ消え

去り、そこで目が覚めた。辺りは暗く、柔らかい布団の感触が肌をくすぐった。夢を見ていたらしい。

「……私が、ルーラに、なる」

夢の中で思わぬ事を教えてくれた少女の姿をボンヤリとはあるが思い返し、スイムスイムは目覚めた時と同じセリフを裏庭で呟いた。自分が憧れていたルーラになるには、ルーラを消さなければ、本当の意味でルーラになったとはならない。機会を伺って排除する必要がある。そう思っていた矢先、ベルデがスイムスイムの考えを見抜いて、自らの理想に賛同してくれたのだ。リーダーの座を譲るにはまだ早い、ルーラになる事を実現するのは悪い事ではない、と告げて。今はまだ完全な意味合いでルーラになれたわけではない。だが、ルーラの死により、着実に一歩前進した。

否、訂正しよう。ルーラはまだ死んだわけではない。

「大丈夫……。ルーラは死なない。私がルーラになるから。だからルーラはずっと生きてる」

ルーラがなれなかった、本物の『ルーラ』に、必ずなってみせる。そう誓うように、ルーラは、目の前にあるルーラ早苗の手をそつと握った。すでに冷たくなっていてその手を自らの頬に当てて、しばらくした後、元の位置に戻した。

「さようなら。今までどうも、ありがとう」

深々と一礼した彼女の両目からは、止まることなく涙が零れ落ちている。このチームがこれからどうなったとしても、ルーラの教えは忠実に守っていこう。スイムスイムは指先で涙を拭いながら心の中でそう誓った。背後からアビスがその後ろ姿を見つめていた。その瞳に映るものは、果たして……。

そして。

林の奥から、2人に気づかれる事なく、現場を目撃していたオー
デインは腕を組んだまま、背を向けてその場を後にした。

《中間報告 その2》

【ルーラ（木王 早苗）、死亡】

【残り、魔法少女14名、仮面ライダー16名、計30名】

※ただし、現時点で参加が認められていない魔法少女も含む。

3 1. 新たな同盟

ファヴ：『あ、それからみんなに、2つほどお知らせがあるぼん』
シロー：『1つ目は、16人目の魔法少女の件だ。今週から参加する事が決定した。教育係についてはパートナーシステムを介して、パートナーとなる仮面ライダーに担当してもらおう事になる』

ファヴ：『チャットにはいないみたいだけど、出来れば来週からはチャットに顔を出してほしいぼん』

ルーラの脱落が決定し、ルーラのアバターが強制退出され、他のチームメイトもいなくなったチャットルームにファヴとシローのコメントが表示される。唯一その場にいる魔法少女や仮面ライダーはクラムベリーとオーデインだけだ。皆、自分やパートナー以外の魔法少女や仮面ライダーを敵と認識しているのだろうか。

シロー：『2つ目は、機能の追加だ。といっても、魔法少女側にも適用されるがな』

ファヴ：『今週は先週に引き続き、魔法少女の脱落となったぼん。このままじゃ仮面ライダーの方に偏りが出過ぎてしまつて、ファヴもシローもかわいそうになってきたぼん』

シロー：『そこで今回追加したのは、パートナーの契約モンスターを呼び出す権限の自由化だ。魔法少女も仮面ライダーの仲介無しに自らの意思で契約モンスターを召喚し、サポートしてくれる機能だ。この手順に関しては、マジカルフォンを使う事なく、頭の中で呼び出せばいつでも召喚可能だ』

ファヴ：『今週の諸連絡はここまでぼん。みんな、また来週のチャットでお会いしましょうぼん。それじゃあ、グッバイぼん！』

その言葉を最後に、ファヴとシローは退出し、クラムベリーとオーデインもそれに続いた。

チャットが終わり、ベッドに腰掛けていたクラムベリーは、息を深く吐き、天井を見上げた。彼女がいるのはN市の山奥に佇む、建設途中で打ち捨てられたリゾートホテルの廃屋であり、普段から誰も立ち寄らない事から、ビルの屋上と同様、休憩所には最適な場所だった。否、それ以上の価値がある所なのかもしれない。

誰にも悟られる事なく半年以上過ごしているが、中々に居心地が良い。クラムベリーがそう考えながら肩にかかった髪の毛を払っていると、彼女のマジカルフォンからファヴを立体映像として現れた。

『2週目を迎えて、残る脱落の枠は14人。いよいよ面白くなってきたぽん』

「それはまだ早すぎやしませんか？ まだ先は長いですよ」

ファヴとクラムベリーの間でここまでの経過を振り返る中、ファヴが唯一疑問に思っていた事を話した。

『だけど、ベルデ達はどうやってルーラを陥れたぽん？ 気になるぽん』

「それはすぐにお分かりになるでしょう」

『ぽん？』

ファヴが首を傾げる動作の代わりに体を左右に揺らしていると、すぐ近くの扉が開き、パトナーのオーディンが入ってきた。その手に握られているマジカルフォンからはシローの立体映像が出ている。

「お帰りなさい。どうでしたか、向こうの様子は？」

『お前達の予想は正しかった。奴らは最初からルーラを脱落させる為

に動いていたのだ』

『……ではやはり』

クラムベリーがマジカルフォンを手に持って、オーデインとシローに見せつけるようにして呟いた。

「私達のもとに送られてきた、この『1858』個のマジカルキャンデーはその事と深く関係していたようですね」

『1858個？ それどういう事ほん？』

『ファヴは知る由も無いだろう。私もアビスから『39018』個のキャンデーを分配してくれと言われた時は疑ったものだ』

シローがそう呟いた後、事情がある程度把握できたオーデインが、ルーラが脱落した理由を分かりやすく解説した。

そもそも、スノーホワイトが所有していたキャンデーの総数は、ルーラが確認した『2088』よりもはるかに上回る数値だったのだ。ルーラが魔法でスノーホワイトの身動きを封じている間、スイムスイムが確認できた、スノーホワイトの所持数は『50000』個以上。さすがのスイムスイムも、無表情ながら内心ではわずかにビククリしていた。しかし、スイムスイムはその全てを奪う事はなかった。前もつてベルデから受けた指示通り、半分程だけ奪う事にして、『27088』個を自身のマジカルフォンに転送した。

その後、スイムスイムは港に向かい、思わぬ収穫として龍騎からもマジカルキャンデーを奪取出来たのだが、そこでも全て奪うような事はしなかった。ガイが提示した、龍騎から奪った数は『1584』だが、実際は『30004』個の半分、『15002』であり、2人分合わせて、『42090』が本来の取り分だった。そこからルーラを欺く為にスノーホワイト、龍騎から奪ったと見せかけた『3672』をスイムスイムとガイに戻し、残った『39018』は全てアビスのマジカルフォンに転送された。その後アビスはシローを呼び出し、九尾、スノーホワイト、龍騎、トップスピード、ナイト、リップル、ライア、ラ・ピュセル、ルーラ、そしてまだ参加していない魔法少女の分を除いた、計21人に対して均等に分配するように頼み込んだ。

当初はシローもアビスの提案に訝しんだものの、断る理由もなかつ

た為、シローは『39018』個のマジカルキャンディーを他の魔法少女や仮面ライダーに行き渡るようにして、その結果、1人『1858』個のキャンディーが21人に配られた。この事は発表直前に行き渡っており、故にファヴもルーラが脱落した理由が分からなかったのだ。もつとも、ファヴもシローも誰が脱落しようが構わなかったのだが……。

当然21人の魔法少女や仮面ライダー達も、いきなり多くのマジカルキャンディーがプレゼントされる事に警戒してはいたが、最終的には拒否する事なく『1858』個を受け取った。それもそのはず。マジカルキャンディーの所持数の多さは、それだけ生存の可能性を高めてくれる。

スイムスイムとガイに対するルーラの信用は厚く、奪った一部しか見せずとも、疑われずに事が進んだ。行き渡った『1858』個とルーラ自身の判断で分配した『1224』個では、どちらが持っていて得するかは明白だった。それにより、『1224』個のキャンディーを得て脱落する事はないとタカをくくっていたルーラが最も低いキャンディー所持者となった。つまり、ベルデ達は裏切られたという確信を与える前に、そして脱落者が発表されるまでに魔法を使う機会を与える事なく、ルーラの排除に成功したのだ。

唯一の懸念は、ルーラが奪った『3672』個を1人で独占する場合だったが、その辺りは心配なかっただろうと、オーデインは語った。仮にそのような事態になりかねたとしても、彼女が勤める会社の社長にあたるベルデが最も得意とする、巧みな話術を駆使してルーラを説得すれば、彼女は否が応でもそれに従う。それがベルデの凄みなのだ。

「チーム全体の利益を優先する為に、他のメンバーの賛同を得て、部下である彼女を切り捨てる、ですか。如何にもリーダーらしいやり方ですね。今の社会を風刺しているかのような振る舞い。他の連中はまだこれといった兆候は見られませんが、確かに彼なら有力候補としては申し分ありません」

「いや、ベルデだけではない」

「……ほお」

クラムベリーの感想に対し、オーデインが待ったをかけた。

『一体誰ほん?』

「スィムスィムだ」

オーデインの口から出たのは、ルーラが最も信頼を寄せていた魔法少女の名だった。

「先ほど奴らの所へ様子を見に行つた時、奴は崇めていた。自ら計画に加担して葬り去つたルーラをな」

そして彼女はルーラになる事を決意していた、とオーデインは腕を組みながら語つた。その視線はクラムベリーとファヴ、そしてシローから外れて、窓の外から見える夜空に向けられた。穏やかな風とともに雲は静かに流れている。

「高貴な姫君を目指し、なろうとするには誰よりもその姫君が邪魔だった。消さなければならぬ。それに気づけば胸の内にある憧れの塊は、脆く崩れやすいものへと成り替わる。それがスィムスィムと呼ばれる者だ。……ある意味で興味深さを感じさせる魔法少女だよ、彼女は」

「ありえねえ……！ ルーラが最下位なんて！」

「あ、ああ。そう、だよな……」

トップスピードが今週の結果に対して頭を抱えながら喚き、龍騎がしどろもどろに賛同している様子を、他の6人は黙って聞いていた。

チャット終了後、港にいた一同は場所を変えて、砂浜が広がる海沿いで腰を下ろしていた。休憩も兼ねて、九尾の肩に出来た傷の手当てをする為に、九尾はその場で変身を解いた。唯一正体を知らなかったトップスピードは、大地が自分よりも年下だと気づいて驚いていた。考えてみれば、仮面ライダーの中では14歳の大地が最年少だった事に今更ながら気付く一同だが、今は怪我の治療が最優先という事で、トップスピードが持参していた救急箱から消毒液や包帯などを取り出して、スノーホワイトが大地の肩に消毒液をかけて、包帯を巻いていた。袖を拭って見えた傷はそこそこ大きく、見るに耐えがたいものがあった。それでも、原因を作ってしまった事に責任を感じているスノーホワイトは、なるべく痛くさせないように注意しながら治療をした。大地はスノーホワイトの顔を見る事なく水平線を眺めていた。

そんな中、ラ・ピュセルは疑問を口にした。

「なぜ奴らは全部持っていかなかったんだ……？ おかげで2人とも助かりはしたけど……」

「ホントそれだよな！ 訳わかんねえし……」

「……そう？」

「俺からしたら、難しい話ではないと思うがな」

「えっ？」

ナイトとリップルが確信めいた言い方をした事に、皆は一斉に顔を2人に向けた。

「普通に考えれば、クーデター……」

「クーデター？」

「もつと言えば、造反だな。ルーラ以外の9人が結託して裏切り、ルーラを陥れた」

「ハアツ!?？」

「裏切りつて、そんな……!」

2人の推測に、驚きを隠せないのがトップスピード、龍騎、スノーホワイト、ラ・ピュセル。大地は深く考え込み、ライアは2人の話を聞きながらマジカルフォンを操作していた。

「ルーラが最下位になるように、他の連中が仕組んだんだろ」

「……何でだよ。何でそんな簡単に仲間を裏切れるような真似が……!」

「知るか」

「まあ、うるさいリーダーがいなくなれば、束縛される事なくキャンディーを集められるし、自由に行動出来る。俺の推測では、ベルデあたりが募らせたんだろう。奴からは前々から胡散臭さしか感じられなかったしな。そう考えると、今回の件も納得がいく」

「でも……!」

「いや、あながちその推測も正しいかもしれない」

「えっ……」

ナイトとリップルが冷たい態度を見せる中、ライアが声をかけた。どうやらマジカルフォンでヴェス・ウィンタープリズンと連絡を取っていたようだ。

「先ほどウィンタープリズンにおかしな事がなかったか確認してみました。そうしたら、発表が始まる少し前にアビスからシローを通じて『1858』個のキャンディーが送られてきたそうだ。同じメンバーのシスターナナ、オルタナティブ、ファムにも同数のキャンディーが来たらしい」

「! それってまさか!」

「ああ、スノーホワイトと龍騎から奪ったものだろう。他のメンバーからの信頼を勝ち取っておくためなのかは定かではないが、とにかくルーラを脱落させようとして、今回の強奪作戦が実行された、とみて間違いないだろう」

「マジかよ……」

ベルデ達の恐ろしい考えに龍騎がたじろいでいる中、スノーホワイ

トが不意に包帯を握っていた手の力を緩めて、嗚咽混じりに呟いた。
「……もうたくさんだよ。命がかかっているからって他人から奪ったり、奪い返したり。そんな魔法少女や仮面ライダーじゃないよ……！」

「スノーホワイト……」
「……」

大地が神妙な顔つきで話を聞く中、ナイトだけは違う反応を見せた。

「そういう事が出来る奴らが、本当は仮面ライダーや魔法少女に相應しいと俺は思うがな」

「！」

「おい、ナイト！」

龍騎が咎めようとするが、ナイトは話を止めない。

「誰だって生き残ろうとする理由はあるし、様々だ。生き残る為なら、汚い事でも平気でやる。……俺もその1人だ。今はキャンディー集めの為に手を組んでるだけだが、今後はそうも言ってもらえない事態だって起こるはずだ。……いや、実際に起きた。今回の件がその例だ。その気になれば、お前達とも縁を切る覚悟がある」

「……本気でそれ言ってるのかよ」

龍騎がそう呟くと、ナイトは鼻を鳴らして返答した。

「ああ、そうだ。その何が悪い」

「嘘だな」

「……何？」

「俺、知ってるから。確かにお前の言ってる事はいちいち尖ってるけどさ。それでも、これまで俺達に協力してくれた。今回の事だってそうだ。俺、すげえ感謝してるんだ。みんなが助けに来てくれなかったら、俺も、大地君達も無事じゃ済まなかったかもしれないだろ？」

「それはトップスピードが無理やり連れてきたから……」

「でも断らなかつたんだろ？ お前がその気なら、ついてこなくても良いはずだし。心配してくれたんだろ？」

「……チッ」

ナイトの舌打ちを聞いて、凶星だと判明したのだろう。トツプス
ピードも上機嫌になって口を開いた。

「おーおー。随分ツンデレさんになりやがって。ますますリップルに
似てきたな、お前」

リップルの舌打ちは、波の音にかき消された。

「まあ、俺だってまだ死ねないんだ。でも他の奴らから奪ったって、失
うものの方が絶対多いに決まってるなあ。出来るなら、踏みとどまって
ほしいぜ。もしお前が過ちを犯しそうになったら、俺が絶対に止めて
やる。ダチだからな」

「……なあ。前にお前言ったよな。生き残りたい理由はあるかっ
て。それなら見つけたよ。それは、4人で……ううん、ここにいる8
人で生き残るって決めたから。だから俺、死なないよ」

「……本当にバカだな」

ナイトとリップルは呆れるも、これまでほどに嫌悪感はなかった。
4人の様子を見つめながら、ラ・ピュセルはスノーホワイトに話し
かけた。

「スノーホワイト。君が言ってたみたいに、あいつらみたいな意識の
低い魔法少女や仮面ライダーは許せない。だからこそ君は、こんな争
いに加わってほしくない。君だけは、本当の魔法少女として生きてほ
しいんだ。もちろん、ここにいる全員も本当の魔法少女や仮面ライ
ダーでいてほしい」

その為に、皆を守ろうと剣に誓った。そう言ってラ・ピュセルは剣
を抜いて肥大化させ、皆に向けた。その頼もしそうな一面を見て、何
人かは頷いた。

と、そこでライアが口を開いた。

「どうやら皆、覚悟を決めたようだな。そこでみんなに提案したい事
がある」

「? 何だ?」

「今回、君達の介入のおかげでキャンディーは奪われこそしたが、被害
を最小限に踏みとどめられた。だが、今後もこういった事態が引き起こ
されかねない。そこで、だ。ここにいる8人で協定を結びたい」

「協定……?」

「人数の多い方が、1人が狙われた時でも守りやすいし、能力の違う者同士が組めば、キャンディー集めは有利に働く。悪い提案ではないと思うが」

「ああ、それ良いね! お前らなら寝首搔かれるって事はなさそうだし。俺は乗ったぜ、その提案!」

「私も、仲間が増えるなら嬉しいです!」

「僕も賛成だ。まだまだ未熟である以上、みんなの手を借りる必要があるかもしれない。仲間がいれば心強いよ」

「俺も賛成!」

ライアの提案に真っ先に賛同したのはトップスピード、スノーホワイト、ラ・ピュセル、龍騎だった。ここにいる8人は以前N神社でのモンスター退治で協力しあった仲間でもある為、異論する者はいなかった。

「俺は……まあ、悪くないかな」

大地こと九尾も遅れて賛同の意を示した。

「で、お前らはどうする?」

「私は……」

「お願いします。みんなで助け合いましょう! 私達が正しい魔法少女や仮面ライダーのお手本だって証明出来るように、私も頑張りたいんです! それに、ここにいる誰も死なせたくないから……」

スノーホワイトの必死の懇願が届いたのか、ナイトとリップルはしばらく考え込んだ後、結論を出した。

「……まあ、別に良いけど」

「そんなに言うなら、それでも良い。だが、少しでも裏切ろうとするなら、俺は容赦しない」

「大丈夫だって。みんなお前と違って優しさ全開だから。あ、お前もそうか」

「……喧嘩でも売ってるのか?」

素直とは言い難いが、とにかく2人の了承も得て、事実上、同盟が成立した。これで誰1人深い傷を負うことなく生き延びれる確率は

格段に上がったはずだ。スノーホワイトはそう確信した。

そうこうしている間にも、包帯を巻き終え、大地は礼を言った。

「ありがとな。もう大丈夫だ」

「う、うん。怪我、早く治ると良いね、だいちゃん」

「……え？」

「だいちゃんって？」

「……あつー」

何故か急に、大地の事を別の言い方で呼んだ事に訝しむ一同に対し、スノーホワイトはしまったと言わんばかりに恥ずかしさを全開にし、頬を紅く染めた。異性でちゃん付けは幼馴染みである颯太以外いかなかったはずだが、一体どういう事なのだろうか。

「えつと、その、今のは……」

「だいちゃんって、随分またフレンドリーな言い方だよな」

「この数日でよほど信頼されたようだな」

トップスピードとライアがそう言うのと、スノーホワイトは体をモジモジさせながら呟いた。

「だ、だって……。せっかくパートナーになれたし、本当に頼れるから、もっと親しめるようにしたいって思ったら、やっぱり大地君って堅苦しいって思ってた……」

「だいちゃん……ねえ」

普段からそうちゃんと呼ばれているラ・ピュセルは、口元を押さえて笑いを堪えていた。

「あ、で、でも、ダメだよ。本人が嫌がるかもしれないし、その……」
スノーホワイトは慌てふためいている様子を見つめながら、当の本人は少し恥ずかしそうに、顔を横にそらして呟いた。

「べ、別に良いけど……」

「えっ？」

「その……。変身してる時はさすがに九尾って呼んでほしいけど、普段は気にしないでおくから……」

「い、良いの？」

「もうお互い知らない仲じゃないしな。ま、節度を持ってくれれば良

いし」

「じ、じゃあー！」

よほど嬉しかったのか、スノーホワイトは大地の左手を握った。微笑みながら、彼女はパートナーの名前を呼んだ。

「これからもよろしくね、だいちゃん！」

「お、おう……」

大地は顔を紅くして、無愛想に答えた。それを見ていた他のメンバーの反応は様々だった。ある者はそっぽを向き、ある者はニヤニヤし、ある者はうんうんと頷いていた。

脱線はあったものの、新たに結ばれた8人による同盟。それがこの先の展開にどう影響するのか。その答えを知る者はまだいない。

3.2. 信頼関係は大事

「はい、兄貴。出来たよ」

「……ありがとう」

古いアパートの一室にて、エプロン姿の光希が、椅子に座って愛読書に読みふけていた智に、出来上がったトーストを差し出した。トーストとコーヒーというシンプルな朝食が始まって、向かい合って座っている2人の間には会話はない。今までこんな日が続いた事なんてないはずなのに……、と光希はテーブルに置かれているコーヒーを見つめながら思った。

事の始まりは3日前に起こったルーラの脱落からだ。ルーラの統制に不満を感じていた頃、ベルデの提案によって彼女を脱落させるようにインペラーは陰ながら協力する事にした。パートナーであるユナエルや姉のミナエルはその気だったし、兄のタイガも反対する事なくキャンディー奪取に加担した。結果的にルーラは脱落。これで小うるさいだけの日常は終わる。そう思っていると、ベルデは驚くべき事に、すでに脱落が決定し、後は死を待つだけだったルーラを殺したのだ。インペラーはもちろん、タイガもそこまでの作戦は聞いていなかった為、大変慌てた。ついでにたまたま自分同様、計画の奥底までは何も気付かなかったらしい。そしてルーラは自らが得意とする魔法によって殺された。冷酷にも、兄を操って自ら手を汚す事なく。

あれ以降、智の雰囲気は変わっていた。普段から大人しめという事もあつて寡黙な方ではあつたものの、不可抗力とはいえ人を殺めてしまった影響か、ほとんど口を開く機会がなくなった。父親のもとから離れて2人だけで暮らしている光希にとって、耐え難いものを感じられた。

「……なあ」

やがて光希が口を開いたのは、コーヒーの飲みほした後だった。智が顔を上げると、光希がこんな提案をしてきた。

「俺、考えたんだ。このままベルデ達のグループから逃げ出そうよ」

「……どうして?」

「なんていうかき。怖いんだよ。このままあの人についていったら、おかしくなりそうなんだよ。俺も、兄貴も、優奈ちゃんも美奈ちゃんも、他の奴だつて。どつかでそう思ってるかもしれないし」

光希が企てたのは、ベルデチームからの逃亡だった。確かにルーラにこき使われるのも嫌だったが、ベルデの傘下になってまた別の恐怖心に駆られる日々が続いていたのだ。今ならまだ間に合うかもしれない。そう思った光希は兄や、変身前から交流のある天里姉妹と共に脱退して別のチームに入れてもらって、そこで生き永らえようと計画した。

「だからさ。これから時間のある時に他の所にいって交渉しようと思ってるんだ。で、兄貴にも出来る限りで良いから手伝ってほしいんだ。そばにいてくれるだけでもいいんだ。一応まだ優奈ちゃん達には内緒にしておこうって思ってるけど。……良いかな？」

光希が智の顔色を伺いながら頼み込んだ。しばらくの沈黙の後、智は口を開いた。

「……良いよ」

「！ 本当？？」

「別に止める理由ないから。ついてくよ」

「ありがとう！ 兄貴と一緒になら怖いもんなんでないしな！」

兄からの了承を得た光希は上機嫌になって、椅子から立ち上がって智と肩を組んだ。これまで幾多の困難があったものの、兄弟と共に立ち向かい、解決してきた事は何度もあった為、光希は確信していた。

2人で力を合わせれば、幸せは掴み取れる、と。

計画はその日の夜から実行され、インペラーが最初に向かったのは、九尾達のいるとある空き家だった。

「突然すいません！」

「な、何だよお前ら……」

先日の一件で、九尾達のグループと龍騎達のグループが結託して8人グループとなった新生チームの前に、事の発端を起こしたベルデチームのメンバーである人物が、連絡もなしに現れた事で、一同は訝しんでいた。特に直接戦った事のある龍騎は警戒心MAXで身構えている。インペラーが最初に彼らと交渉を結びに来たのは至極単純で、拠点としている所がある程度判明しているチームだったからだ。が、さすがに彼らがいとも拠点としていた鉄塔やビルの上上にい続けるのは危険だと判断した彼らは、適度に集合場所を変えていたのだ。おかげで探すのに一苦労したインペラーがようやく見つけた時には、8人全員が揃っていた。

「あのお……。先日は、その。誠に申し訳ありませんでした……。これ、お詫びとっては何ですが……」

インペラーはその場に正座してから謝罪し、前もって買っておいた、包装紙に包まれた箱を前に差し出した。その後ろではタイガが様子を見守っていた。一方で腰の低い態度を見せているインペラーを見てナイトは言った。

「そんなものはどうでもいい。何のつもりでここに来た」

「あの、ですね……。俺達、今みたいにベルデが統制してるチームから脱退しようと考えておりました……。それで、行く宛もないから、困ってます。ですから、俺やタイガ、それからピーキーエンジェルズを皆さんのチームに入れてもらいたいです！ もちろんこれまでの

事は反省して、下っ端として働きます！　どうか、助けてください……！」

インペラーが頭を深々と下げて許しを請いた。が、九尾達の反応はインペラーの予想に反して冷たいものだった。

「悪いがお断りだ。君達は信用できない」

「えっ……」

「俺もだ。こっちはお前らのせいで迷惑を被ってるんだ。今さら虫が良すぎだろ」

『SWORD VENT』

最初に悪態をついたのはラ・ピュセルと九尾だった。2人は肥大化させた剣とフオクセイバーを構えて、インペラーに刃先を向けた。本気の敵意を向けているようだ。インペラーは立ち上がって慌てふためいた。

「ちよ、ちよっと待ってくれよ！　俺は本気で悪かったって思ってるんだ！　これでもちやんと反省してるんだ！　ベルデやルーラに言われた通りに動かないと、ねむりんの後を追わせてやるって脅されて……！」

「だったら何でルーラは死んだんだよ！　お前らがルーラを裏切ったんだろ!?　そんな奴と一緒にいて安心出来るかっつうの！」

「そ、それは……！」

龍騎も腹が立ったのか、先日の結果を題材にして、インペラーとタイガを指差して怒鳴った。仲間を平気で裏切れる人物と組んでもメリットがない。実際はベルデの判断でルーラを殺害した訳で、インペラーやタイガは直接関係してないのだが、今の状況でそれを告げても信用してもらえないとは限らない。

龍騎が珍しく反抗的な態度を見せた事に、ナイトは意外性を感じていた。

「バカでも一応善悪の判断は出来るみたいだな。少しは見直した」

「だから一言余計なんだよいつも！　俺だってなあ……」

「何で喧嘩してんだよそこで!?？」

トップスピードがツツコミを入れると、インペラーがトップスピー

ドに話しかけた。

「トップスピード！ 頼みますよ！ 俺達を仲間に入れてください！」

「う、うくん……。そう言われてもなあ……」

トップスピードは帽子の上から頭を掻いて、考え込むように唸った。正直なところ、トップスピードは迷っていた。もちろん仲間が増える事は決して悪い事ではない。ないのだが、相手が相手だ。先日命を繋げるキーアイテムとも言えるキャンディーの奪い合いをしていた者達から、仲間にしてほしいと言われても、果たして背中を預けるに相応しい人物なのだろうか。如何にフレンドリー気質の強い彼女でも、今回の提案には、はたと悩んだ。

ちゃんとした返答が返ってこない事をもどかしく思い、今度はスノーホワイトに声をかけた。

「スノーホワイト！ こないだの事は謝るから！ だからお願いだ！

俺達を助けてくれ……！」

「そ、それは……」

スノーホワイトが何か言いかけたところで、九尾が割って入った。

「これ以上スノーホワイトを巻き込むな。こいつを唆そうって言うなら、あんたを斬ってやるよ」

フォクセイバーをインペラーに近づけて、インペラーを後方に下がらせた。口応えすれば本当に斬られかねない。そう思って今度は壁にもたれかかって、未だに黙り込んでいる人物に頼み込んだ。

「お、お願いだリップル！ 俺達を……」

刹那、インペラーの頬を掠め取るように何かが横切り、タイガの後方にあった壁に突き刺さった。恐る恐る振り返ると、手裏剣がそこにあった。そしてリップルの手には同じサイズの手裏剣がもう1つ握られている。

「今のはわざと外した。その気になれば、私の魔法でお前の眉間に当てる事も出来る」

「ヒイ……！ (お、おつかねえよこの女!?)」

それは、明確な拒絶。睨まれながら、インペラーは背筋に冷たい汗

が流れた。次はナイト……と言いたいところだったが、話しかける前から嫌な雰囲気しか出していない。もはや手詰まりだ。

タイガもそれを察したのか、背後からインペラーの肩を叩いた。

「……行こうよ。もう話しても無駄みたいだし」

「うう……」

インペラーは心底残念そうに項垂れた。ナイトは皮肉たつぷりに告げた。

「ま、そういう事だ。要するにお前達は信用できない。それだけだ。そんなに他のチームに行きたいなら、他を当たれ」

「……はい。すいませんでした」

最後にそう謝ってから背を向けて立ち去ろうとした。

「待て」

が、その間にそれまで黙って事の成り行きを見ていたライアが呼び止めた。2人が振り返ると、ライアは持参している振り子のようなものを取り出し、夜風に吹かれながら動く玉をジッと見つめていた。インペラーがゴクリと唾を飲み込むと、ライアが玉からインペラーに視線を向けた。

「今はまだ動く時ではない。『急いで事は仕損ずる』という諺は知ってるな？ 無理に成し遂げようとすれば、その先に待っているのは、破滅だ」

「破滅って……！ 何だよそれ!!?」

「破滅の運命を避けたければ、もう少し慎重になる事だ。言っておくが、俺の占いは当たる。絶対だ」

「あ、ああ。分かった……」

インペラーは頷きながら、タイガと共にその場を後にした。静まり返ったのを確認したリップルは壁から離れて、突き刺さった手裏剣を回収した。やがて、スノーホワイトが口を開いた。

「……ちよつと、言い過ぎたんじゃないかな？ 九尾もラ・ピュセルもそこまで酷く言わなくても……」

「何言ってるんだ！ 君は被害者なんだぞ!!? 本来なら君はもつと強く反対すべきだ！」

「だな。もっと疑ってもいいはずだし」

「そうちゃん……、だいちゃん……。でも、あの人、心の中でずっと呟いてた。『ベルデが怖い』って」

魔法でインペラーの心情を知ったスノーホワイトの沈痛な呟きに続いて、龍騎も口を開いた。

「そりゃあ、俺もあいつは気にくわないけど、やっぱ色々考えると、ちゃんとあいつの話も聞いとけば良かったな……」

「聞くだけ無駄だと思うがな」

龍騎が少しばかり反省する様子に対し、ナイトは冷ややかな一言を呟く。

「けどまあ、あいつがやってるみたいに、他の奴らに声をかけるのはアリかもしれないな。出来るならもっと仲間は増やしたいし。これからは仕事の合間にちよつくら会えるか確認してみるわ」

トップスピードは早速今後の方針を決め、手を叩いた。彼女の手元には、いつの間にかインペラーが持ってきた箱が抱えられていた。

「結局アテは無しかあ……」

立体駐車場にて、蛍光棒を片手に、警備服を着た光希は暇さをアピールするように大きなあくびをした。

九尾達との交渉が決裂して以降、事態は難航していた。その後も王結寺での活動が終わってから、決まってタイガと共に片っ端から街中を探し回り、交渉に励んでいたが、全く成果無しだった。シローの仲介もあって、ここまで出会えたチームは2つ。

1つはオルタナティブが率いるチーム。シスターナナは温厚な性格故に、チームへの勧誘を薦めていた。が、他の3人は真逆の対応だった。というのも、彼らはライアを通じてベルデ達が働いた悪事を耳にしていたので、ウインタープリズンの強い反対もあって、失敗に終わった。もう1つが、ゾルダ&マジカロイド44ペアだった。こちららはほぼ偶然出くわしたという事もあって、少し世間話で機嫌をとった後、交渉に移った。当初は上手くいくかもしれないと期待してたのだが、そのうちマジカロイドの方から、信頼の証明代わりとして金を要求してきたのだ。これにはインペラーも呆れて、これ以上関わらないようにしようと、その場を後にした。お金が関わるようでは、今度自分達の日常生活が危ぶまれる。

さすがにカラミティ・メアリと王蛇のペアが縄張りとしている城南地区に足を運ぶという選択肢はなかった。シザースとは予定が噛み合わず、クラムベリー&オーティンのペアはどこにいいのかさえ見当がつかない。新しい魔法少女やそのパートナーとも会う事なく、時間だけが過ぎていた。こんな事ならもっと信頼関係を結んでおくべきだったと後悔するが、それももう後の祭り。

今週の脱落者の発表まであと2日。さすがの光希も仲間探しとキャンディー集め、そしてバイト三昧の日々に疲労が溜まりつつあった。

「(ライアの占いも気になるけど、そうも言ってられないんだよな、これ)」

切羽詰まった状況の中、光希はバイト先の立体駐車場で誘導の仕事はもちろん、高級車の持ち主を煽って機嫌をとり、多少のチップを貰いながら、地道に働いていた。が、この日は人も少なく、パイプ椅子

に座り続けるだけの時間が過ぎていた。

光希はため息をついた後、ポケットから茶色のカードデッキを取り出して見つめた。

「これさえあれば、楽な暮らしも出来るんじゃないかと思ってたけど、世の中そう上手くいかないよなあ」

光希は仮面ライダーの力を手に入れた当時の事を思い返した。

光希が兄を引き連れて、親元を離れたのには訳があった。父親に嫌気がさしたからだ。証券会社の社長であるにもかかわらず、裏で賄賂を受け取ったり、家庭では母子と接しようともせず、酒に明け暮れて、時には家に戻らず繁華街で遊んでいる事も多々あった。兄の智を大学院に行かせれるぐらいに金銭面では困る事もなく、決して貧困とは言えない暮らしをしていたが、歳をとるにつれて父親の事を知るうちに、彼は誓った。父親のような人間にはならない。これ以上あの男の顔を見るぐらいなら、縁を切った方がマシだ。

もちろん直接言うことはなかったが、母親に誤魔化しながら、内気な兄を引き連れて2人きりの生活が始まった。時折母親からの仕送りに感謝しつつも、なるべく自分達の稼ぎだけで生活を続けていた。智は大学院で勉強をし、光希はお金ほしさに大学へは行かず、フリーターとしてバイトに勤しんだ。苦労の連続はあったものの、その度に兄弟で支え合った。気の弱い智とお調子者の光希の絆は深いものだと、光希自身は感じていた。

そんな彼らが天里姉妹と出会ったのはほんの偶然だった。バイトからの帰宅途中でひったくりに遭った天里姉妹を目撃し、その場で取り押さえて警察に突き出した事で、2人と会話するようになり、光希は姉妹を、特に妹の優奈を大変よく気に入った。その後、智を交えてオフで会う事もあった。双子とは話が合い、光希はどことなく幸せを

感じていた。こんな風に他人と会話が弾んだのは初めてで、やはり自分の選択は間違っていないかった、と確信した。

彼が『仮面ライダー育成計画』をやるようになったのは興味本位だった。内容も面白く、非課金という事が光希を唆らせ、智にも推した。

そうやって何日かプレイしているうちに、それは突然起こった。

『東野 光希。君は仮面ライダーに相応しいと判断した。今日から君は仮面ライダー「インペラー」となるのだ!』

マスコットキャラクターのシローから、都市伝説として唄われていた仮面ライダーに、光希はなれたのだった。光希は超人的な力を手にして、その日は喜び勇んで街中を飛び回った。驚くべき事に、その数日後には兄の智が仮面ライダー「タイガ」となり、2人はより一層協力しあう事を誓い合った。

そんなある日、2人の前に先輩魔法少女及び仮面ライダーである『ルーラ』と『ベルデ』が現れ、2人の教育係を申し出た。その意図をよく分からないまま承諾し、2人はそれ以降、王結寺での雑務に追われる日々が続いた。当初は嫌気をさしていたが、ルーラの魔法の強力さ故に逆らう事はなかった。が、ある時からこれは出世のチャンスだと思ったインペラーは、態度を改めて、2人とライダーに気に入ってもらえるように奮闘した。この時はルーラチームにはたま、アビス、スイムスイムはおらず、代わりに『ピーキーエンジェルズ』と呼ばれる双子の天使系魔法少女と共に過ごす時が多かった。何度か交流するうちに、ピーキーエンジェルズの正体が天里姉妹だと気付いた時は驚きを隠せなかった。以来、4人で行動を共にする事も多くなった。ピーキーエンジェルズによる、ルーラに対する愚痴を聞き入れながら、彼は今の生活を充実していた。そして同時に願う事もあった。

「……そうだな。ちゃんと大金持ちになって、人生もつと満喫出来

るようになりたいもんな」

大金持ちになった時の自分を想像してニヤついていると、前方から車が入ってきた。滅多にお目にかかれない車種だ。きつと良い商売相手になるはずだ。光希はカードデツキをポケットにしまつて、立ち上がると仕事を始めた。

「オーライ！ オーライ！ こつちですよ！」

今夜も探し回つて、自分達を助けてくれる人達を見つけよう。改めてそう決意した光希は、満面の笑みを浮かべながら蛍光棒を振つた。そして眩く。

俺は生き残る。生き残つて、必ず俺や兄貴、優奈ちゃんや美奈ちゃんんの人生を守るようになってやる、と。

人気がない夜道を、1人の少女が猫背気味に背中を若干湾曲させ、ユラユラと左右に揺れながら、彷徨い歩いていた。髪も服も雰囲気

も、黒一色に染まったその少女のダラリと垂らした右手には、白兎のぬいぐるみが握られており、より一層不気味さを醸し出していた。

その装いを一言で例えるなら、それはまさに『不思議の国のアリス』。

「……白い、魔法少女。……白い、仮面ライダー。……どこに、いるの」

青白い顔にある、暗く淀んでいる両目の下の濃い隈からは、一切の覇気が感じられない。そんな彼女は、誰かを探しているようだった。

しばらく歩いていけると、前方から人影が足音を立てて近づいてくるのが見えた。白い魔法少女、もしくは白い仮面ライダーか。少女は期待を胸に、立ち止まった。が、残念ながら目の前に現れた人物はどちらもでもなかった。

その人物は、少女と同様、黒一色の装甲に覆われており、黒い仮面の複眼は赤く不気味に光っていた。黒い人物は少女の前で立ち止まり、低い声で呟く。

「お前が、16人目の魔法少女、『ハードゴア・アリス』だな」

尋ねられた魔法少女……ハードゴア・アリスはコクリと頷いた。白兎のぬいぐるみを抱き抱えたハードゴア・アリスは聞き返した。

「あなたが、私のパートナー、ですか？」

「……ああ、そうだ。俺の名は……」

…
『リュウガ』。仮面ライダー、リュウガだ」

33. バレた裏切り

3週目を迎える、脱落者の発表日。魔法少女や仮面ライダーの間では、緊迫したムードが漂っていた。『脱落Ⅱ死』と分かっているからこそその雰囲気なのだ。

仮面ライダーインペラーこと東野 光希もその1人だ。

「ただいま〜」

この日のバイトを終え、帰宅したのは日が沈みかけている頃だった。この後は王結寺でベルデ達と合流し、ある程度の活動後に発表を聞く。そんな流れを確認しつつアパートに帰ってきて扉を開けてみたが、部屋の中はシーンとしている。普段なら兄の智が居てもおかしくないのだが、どこを探しても見つからない。靴がない事から、外へ出かけたと思われる。

「(ひよつとして、先に行っただのか? でもそれなら連絡してくれても……)」

光希がコップに注いだお茶を飲み干したその時、マジカルフォンではなくスマホに電話がかかってきた。電話の相手は智だった。

「兄貴?」

気にはなつたが、出てみる事にした。電話越しからは智の声が聞こえてきたが、どこか様子が変だ。

「もしもし? 何かあった?」

「……うん。実は、大変な事になっちゃって……」

「大変って、まさか、マジカルキャンディーの事で何か?」

「それも、そうかもしれないけど……。でもこれは光希の事なんだよ。光希が逃げ出そうとしているのが、ベルデにバレてるみたいなんだ」

空気が凍りつく、というのはまさに今の状況が相応しいだろう。光希は愕然とした表情で固まった。あれだけ細心の注意を払っていたにもかかわらず、裏切りが露見されている。

光希は慌てて確認をした。

「な、なあ! それ本当なのか!?!」

「……うん。最近の光希の行動に目をつけてたみたい。それで僕だけ

呼び出されてね。それで無理やり自白されちゃって……」

「なっ……!」

「向こうも怒ってるみたい。もし王結寺にやってきたら、パートナーカードを使ってインペラーからマジカルキャンディーを没収するって言ってるんだ」

甘く見ていた。まさかベルデがそこまで徹底して自分達を監視していたとは。ルーラとは違う怖さを感じさせる一方で、光希は軽くパニック状態に陥っていた。マジカルキャンディーを没収するという事は、すなわち脱落を強要させ、そしてルールに従って死ぬ。まさに裏切り者への罰だ。

「そ、それで、兄貴はどうするんだ?」

「今は近くにベルデはいないよ。だから隙を見て僕も逃げるよ。ちよつと怖いけど、どこか別の場所で会おう」

「あ、ああ。そっちも気をつけろよ!」

電話を切った光希は、壁にもたれた。よりにもよってこんな時に。光希は誰ともなしに呟く。

何より最悪なのは隠れ蓑がまだ見つかっていない事だ。未だに仲間として迎え入れてくれるチームは皆無で、このままでは逃げ場所も見つからず、下手にベルデ達に見つかってしまったら、そこでインペラーの脱落はほぼ確定する。否、インペラーだけではない。タイガやピーキーエンジェルズにも被害が及ぶ事もある。

タイガが自白された事を考えると、このアパートも位置が知られている可能性があるため危ない。とにかく、今はこの場から遠ざかる事を優先的に動くしかない。

「チックシヨオッ!」

光希は悔しがりながらもコートを羽織り、必要最低限の荷物を抱えて外に飛び出した。どこにでも良い。誰かに助けを求められる場所へと光希は急行した。

「……これで、良いよね」

「うんうんー!」

「本当に裏切るなんてね。ま、どうせ生き残れそうにないのは目に見えていたけどさ」

「……ルーラが言ってた。目の前の事実から逃げる弱者には、容赦するなっ」

「……で、でも。これから、どうするん、ですか……?」

「決まってるだろ。忠告も聞かなかったガキに、大人の怖さを教えてやる」

「どうやら本気みたいだな。なら、先ほどの打ち合わせ通りに」

「りようかい!」

「オツケー!」

「……」

「……オイ。今更怖気付いたわけじゃねえよな。『英雄』になりたいんなら、こんぐらいの事でビビってどうすんだ」

「……英雄。僕が……」

「……つつても、アテもなしに来たけど、本当に大丈夫なんだよな……」

外へ逃げ出した光希がやってきたのは、門前町からかなり離れた先にある堤防の近くだった。ここまで来れば、ベルデ達も見つけにくいかもしれない。

「いや、あの人の事だ。俺以上に賢いし、全員で来られたらマジで終わりだ……！」

少なくとも、タイガと合流するまでは油断できない。光希はそう自分に言い聞かせた。

「(こんな所で死んでたまるかよ！俺には俺の人生があるんだ……！それだけは絶対に守ってみせる……！)」

光希が辺りを警戒していたその時、マジカルフォンから音が鳴り響いた。モンスターの出現を知らせるものである。

「(こんな時に……！)」

モンスター退治に参加すればマジカルキャンディーは増える。が、下手に暴れまわって居場所を突き止められたら、せつかくゲットした

マジカルキャンディーも奪われて水の泡だ。

ここは身の安全を優先してこの場を退くか。そう思つて急いでその場から離れようとした時、耳につん裂くような女性の悲鳴が聞こえてきた。

声のした方に向かうと、女子学生がヤゴ型のモンスター『シアゴースト』に背中を掴まれて、ミラーワールドに引き摺り込まうとしているのが見えた。天里姉妹と同年齢ぐらいの女性が襲われている姿を見て、光希は自分でも気づかないうちに駆け出し、飛び蹴りでシアゴーストを吹き飛ばした。シアゴーストはそのまま奇声をあげながらミラーワールドに逃げ込んだ。

「早く、逃げて！」

「あ、あなたは……」

「いいから！ 真つ直ぐお家に帰れよ！」

光希の言葉に弾かれるように女子学生は走つて逃げ出し、光希はそれを見送った後、シアゴーストが逃げ込んだ鏡の前に立った。

本当はこんな事をしてる場合ではない。頭では分かっているものの、放つておけない感情に催促され、光希は苦々しい表情のまま、両腕をクロスしてカードデツキを鏡にかざした。

「(こうなつたら、俺の強さをとことん他のみんなにアピールして、仲間に入れてもらおうつきやないか！)」

「挿入歌：果てなき希望」

腰にVバックルがつけられ、両腕を上げた後、クロスしていた状態から元に戻して叫んだ。

「変身！」

そして素早くカードデツキをVバックルに取り付けると、鏡像が重なつて、インペラーに変身した。

「行くぜ！」

手を叩いて気合いを入れたインペラーは、ミラーワールドに突入した。ヨロヨロと逃げているシアゴーストを見つけたインペラーは早速一枚のカードをベントインした。

『SPIN VENT』

「そおらー！」

右手に装着されたガゼルスタツブの突きがシアゴーストに命中。シアゴーストは地面を転がり、再び立ち上がって糸のようなものを吐いたが、インペラーはそれをガゼルスタツブで弾き、接近して連続蹴りを放った。

「ダダダダッ！ ダアッ！」

連撃を受けたシアゴーストは苦しそうに呻くと、糸をそこらじゅうに放って近づけさせないようにしていた。

「なら、こいつだ！」

『FINAL VENT』

「ハアアアアアアア！ ハアッ！」

インペラーが構えのポーズをとっているその後方から、契約モンスターであるギガゼールなど、多数のレイヨウ型モンスターが一斉にシアゴーストに襲いかかった。多勢からの攻撃に翻弄され、なす術もないシアゴーストに向かって、ギガゼール達に紛れてインペラー自身が飛び出した。そして左足を曲げて、膝蹴りでシアゴーストを勢いよく吹き飛ばした。

「くらええええええええっ！」

インペラーの必殺技『ドライブバイダー』が炸裂し、シアゴーストは遠くに吹き飛ばされながら、空中で爆散した。インペラーが着地すると、マジカルフォンから電子音が鳴り響き、マジカルキャンデーの数が上昇した。先ほどの女子学生を助けた事が功を奏したようだ。

さつさと離脱しようと思ったその矢先、今度は別方向から大きな音が鳴り響いた。誰かがモンスターと戦っているのかもしれない。そう思ったインペラーは誘われるように現場に向かった。

「ハアッ！ ダアッ！」

インペラーの予想通り、インペラーのいた地点からさほど離れていない所で、龍騎がドラグセイバーを片手に持ち、3体のシアゴーストを相手に互角の勝負を繰り広げていた。

九尾達の所へ合流しに行く途中でモンスターの出現を知った龍騎は、そのままミラーワールドに突入して3体のシアゴーストを退治しに行ったのだ。個々の戦闘能力はさほど高いわけでもないため、倒せない相手ではないが、数の多さに加えてしぶとさがある為、カードをベントインする隙がないのだ。

「クツソオ。しぶといないつらー！」

ドラグセイバーを振り回しながらボヤいている龍騎だったが、そこにこんな電子音が聞こえてきた。

『TRANS VENT』

「パオオオオオオオンー！」

その直後、大きな地響きと共に鳴き声が聞こえてきたのでその方角を振り返ると、一頭の巨大な象が迫ってくるのが見えた。

「うわっ!?? 何で象が!??」

龍騎が慌てふためいて横に飛び退き、象は直進してシアゴースト達に体当たりした。シアゴーストはいとも簡単に吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた衝撃でしばらく起き上がれそうにないようだ。

一方で象は立ち止まると全体像が歪んで、人型になった。それは、パートナーカードで象に変わっていたインペラーだった。それに気づいた龍騎は驚きながら指を指した。

「あ！ お前……！」

「早く！ 今のうちにやって！」

「お、おう……！」

『FINAL VENT』

インペラーの登場に驚きつつも、カードをベントインして、必殺技の構えに入った。

「ハアアアアアア！ ハアツ！」

上空に飛び上がり、ドラグレッツダーが旋回する中を一回転して、右足を前に突き出すと、ドラグレッツダーの火球に押し出された。

「ダアアアアアアツ！」

龍騎の必殺技『ドラゴンライダーキック』が、逃げようとするシアゴースト達に直撃し、その場で爆散した。着地した後、龍騎はインペラーの方に振り向き、身構えた。

「というよりお前、何でこんな所にいるんだよ。まさかお前、また俺からマジカルキャンディーを奪うつもりなのか！」

「ち、違うって！ それ誤解だよ！ さつき別のモンスターと戦ってたら偶然見えただけで……」

インペラーが両手を突き出して否定した。本気で抵抗している様子を見て何かを察した龍騎が両手を下すのを見たインペラーは、ハツとして懇願するように叫んだ。

「そ、そうだ！ なあ龍騎！ 俺を助けてくれ！」

「ま、またそれかよ！」

「頼む！ お願いだ！ このままじゃ俺、ベルデに殺されちゃうよ！」

「えっ……!? どういう事だよそれ！」

インペラーの口から出た情報は龍騎を驚かせるのに十分だった。

それからインペラーによって語られたのは、ベルデの企てた計画によつてルーラは脱落し、タイガを操つてルーラを殺害。それを見てしまったインペラーは兄やピーキーエンジェルズをベルデの魔の手から逃がそうとして他の面々に助けを求めていたが、先ほどの連絡で裏切りがバレたというものだった。

「そんな……。じゃあ本当に……」

「嘘は言っていない！ だから頼むよ！ 俺、まだ死にたくないんだよ！ 少しの間だけでいいんだ！ 俺や、できるなら他の3人を匿ってくれ！」

「お前……」

どうやらルーラチームの全員が全員、邪な考えを抱いていたわけではないらしい。まだ信用できるかは分からない奴だが、少なくとも悪さばかりを働いているという印象は払拭されていた。

「ま、まあ。少しぐらいなら別に良いけどさ。ちゃんとトップスピード達にも説明してからだけど」

「！ 本当か!?? 助かるよマジで！ じゃあ早速……」

インペラーが上機嫌で龍騎の手を握ろうとした時、彼の後方、それも上空から人影が見えた。それも3つ。

「あつ！ あれ！」

「ん？」

インペラーが指さした先に目をやった龍騎も、そこで初めて存在に気づいた。月明かりに照らされて見えてきたのは、天使の羽が生えた2人と、その2人に両脇を抱えられながら、白と水色の鎧を着込んだ戦士。インペラーはもちろん、龍騎もその容姿に見覚えがある。

それは、インペラーが救いたいと考えていた、兄のタイガと、そのパートナーであるミナエル、そして自身のパートナーでもあるユナエルだった……。

34. 叶えたかった願いは儚く散る……

「みんな！ 来てくれたんだ！ おーいー！」

インペラーが、現れた3人に向かって手を振り、合図を送った。どうやら無事に王結寺から脱出できたらしく、ピーキーエンジェルズも引き連れてくれたのだ。3人も手を振り返し、地面にタイガを降ろすと、インペラーは龍騎を引き連れて歩み寄った。

「なあ、聞いてくれよ！ 龍騎が俺達を匿ってくれるって約束してくれたんだ！ そこにいればしばらくはやり過ごせるし、もう無理に争わなくても良いからさ、このまま俺と一緒に行こうよ！ ベルデ達から離れてさ！ なっ！」

「あ、ああ。俺は良いよ」

龍騎もインペラーに続いて頷き、歓迎の意を示した。

対するピーキーエンジェルズはとうとうと……。

「へえ。インペラー、そっちについたんだ」

「マジクール」

「へへっ。まあ俺もそれなりに苦労したからな。甲斐があつたつていうか。でもこれで、俺やみんなの脱落は……」

「バツカじゃないの」

「あんたもう終わってんのよ。まだ気づかないの？」

「……え」

『ADVENT』

不意に冷ややかな態度をとったピーキーエンジェルズに戸惑っている龍騎とインペラーの耳に、ベントインの電子音が聞こえてきた。ピーキーエンジェルズの後方にいるタイガがデストバイザーにベントインしたのだ。

すると、どこからともなくタイガの契約モンスターであるデストワイルダーが2人めがけて突進してきた。

「ウアアアアアアアアアアアツ!?」

「グアアアアアアツ！」

そしてデストワイルダーは龍騎だけでなく、仲間であるはずのインペラーを引き摺り回して、橋の手すりにぶつけ続けた。ようやく止まってデストワイルダーが退散した時には、2人はすでにボロボロ

だった。

「イツテエ……！ どうなつてんだよ!?？ やっぱりお前、俺を罠に嵌める為に……！」

「ち、違うつて……！ だったら何で俺までやられなくちやならないんだよ!?？」

両者がヨロヨロと立ち上がると、ミナエルとユナエルがケタケタ笑いながら言った。

「何であたしらが黙って裏切つたあんたについてかなきやならないのよ?。」

「そーそー。新リーダーのベルデのいる所の方がよっぽど楽だし」

「そ、そんなわけあるかよ……！ 俺、兄貴や2人の為に……」

「そういう気遣い要らないしー」

「要らないしー。てなわけで、みんなやつちやえー！」

ユナエルが右手を振り上げると、今度は大量のメガゼールやギガゼール、マガゼール、オメガゼール達が出現し、インペラーに向かつて一斉に襲いかかった。その際、近くにいた龍騎も巻き添えをくらう事に。

「グアツ!?？ お、お前ら……！」

「な、何だよこれ！ どうしてこんなにモンスターが……！」

「へへーんだ。魔法少女でもパートナーの契約モンスターを呼べるようになったつて知ってるよね? こういう時に役に立つんだよね」

「！ もしかして、バージョンアップした機能を……！」

ルーラの脱落后、バージョンアップによつて魔法少女側もパートナーの契約モンスターを自由に呼べるようにはなった。本来は戦力に乏しい魔法少女達への救済システムのはずだが、この双子はそれを利用してインペラーに襲わせたのだ。制御権がユナエルに奪われているため、インペラーをもつてしても止める事が出来ない。

そうしてギガゼール達に痛めつけられながら翻弄されていると、一体のメガゼールがインペラーに飛びかかり、所持していたマジカルフォンを奪い取った。

「あ！ 俺のマジカルフォン！」

メガゼールは後退すると姿が歪み、ユナエルへと変化した。魔法によってメガゼールへと変身して紛れ込んでいたようだ。

「悪く思わないでね。あたし達を裏切った罰として、マジカルキャンデー！没収！」

「やっっちゃえユナエル！」

「ま、待ってくれ！ それだけは……！」

インペラーが仮面の下で顔面を青ざめながらユナエルに近寄ろうとするが、ギガゼール達に阻まれ、再び地に伏せた。龍騎もインペラーを助けようとするが、数の多さによって抵抗するだけが精一杯だった。

ユナエルが自身のマジカルフォンとインペラーのマジカルフォンを操作し、しばらくした後、インペラーのマジカルフォンを持ち主に投げ返した。

「はい、てなわけであんたの脱落はこれで決定！ 後はこれを分け合えばオツケー！」

「やったねお姉ちゃん！ これでベルデもみんなも喜ぶよね！」

「うっ、グアッ……！」

全身に痛みを感じながらマジカルフォンを握りしめて立ち上がったその時。

「ねえ」

「!?？」

兄の声が聞こえてきたので振り返ったインペラーの腹部に、いつの間にか装着されていたデストクローがめり込んだ。

「ガハッ!?？ あ、兄貴……!?？」

「ゴメンね。あの時リーダーが教えてくれたんだ。光希は大切な家族。だからその人達を倒せば、僕はもっと強くなれる。『英雄』にだってなれるって、そう言ってくれたんだ」

「そ、そんな、どうして……！」

「僕は強くならなきゃいけないんだ。強くなって、生き残りたいんだ。その為には、どうしても倒さなきゃ」

タイガはインペラーを弾き飛ばし、インペラーはなす術なく地面を

転がった。仲間である以前に、パートナーや身内にまで見限られたシヨックで、インペラーには抵抗する力が残っていなかったのだ。

「！ 止めろ！」

龍騎も必死に叫ぶが、ギガゼール達の猛攻にあって、先に進む事が出来ない。タイガが無言のままデストクローをインペラーに向かって突き立てようとした瞬間。

「ハアッ！」

「ウオリヤアアアア！」

タイガにタックルしてインペラーを助ける者が現れた。それは龍騎の仲間であり、パートナーでもある、九尾とラピッドスワローに跨ったトップスピードだった。どうやら騒ぎを聞きつけてやってきたようだ。

「！ 九尾！ トップスピード！」

「大丈夫か!?？」

「また厄介ごとに巻き込まれた感じだな」

「！ お前ら……！」

インペラーが腹を抱えながら2人の登場に驚いていると、ピーキーエンジェルズが妨害してきた2人に突進してきた。が、隙についてギガゼール達の猛攻から潜り抜けた龍騎が2人を押さえ込み、インペラーの方に顔だけ向けて叫んだ。

「逃げろ！ 早く！」

「……！」

「邪魔すんなっつーの！」

「待てよ！」

ミナエルがデストクローを装着してインペラーの所に向かおうとするが、トップスピードがドラグシールドを構えて立ちふさがった。

『SWORD VENT』

九尾もフォクセイバーを召喚してタイガと対峙した。インペラーは逃がしてくれる3人に感謝しつつ、ヨロヨロと歩きながらその場から遠ざかった。

龍騎のもとに2人の加勢が入ったが、依然としてタイガ達に加えて

ギガゼール達がそこらじゅうを飛び回っているため、数の差は歴然だった。

「なら、こいつだ」

『TRICK VENT』

九尾のベントインしたカードの効力で九尾は分身し、分身達はギガゼール達に立ち向かった。そして九尾本体はタイガと、トップスピードはミナエルと、龍騎はユナエルと対峙する形となった。

「何でいつもあんたが邪魔してくるのよ！」

ユナエルがガゼルスタップを右手に装備し、龍騎に殴りかかった。対する龍騎はかわしつつカードをベントインした。

『STRICK VENT』

「ハアッ！」

龍騎は右手に装備されたドラグクローを盾にした後、反撃とばかりにユナエルに攻撃を仕掛けた。状況は戦闘能力の高い龍騎に軍配が上がり、ユナエルを手すりに向かって押し付けた。

「お前らしい加減にしろよ！ 何考えてんだ！ あいつの仲間じゃ、パートナーじゃないのかよ！」

「はあ？ そんなの知らないし。ベルデのそばにいた方が全然良いし」

「ルーラなんかの下っ端やってるよりずっと楽しいもんね！」

「そーそー。ルーラって仕切りたがり屋でいっつもうるさかったもんね！」

「なっ……!!? そんな理由でルーラを裏切ったのか、お前らは！」

「何て事を……！」

ピーキーエンジェルズの発言に怒りを覚える龍騎と絶句するトップスピードに対し、ユナエルは鼻で笑った。

「だから何って感じ。あんた達には関係ない事でしょ？ 分かったらさっさとやられろってーの！」

「お前……！」

遂に堪忍袋の緒が切れた龍騎はガゼルスタップを受け止め、ユナエルが驚いているその隙にドラグクローで殴りつけた。予想以上の一

撃にユナエルの口から悲鳴が漏れるが、龍騎はお構いなしに攻撃の手を緩めなかった。

「お前、あいつがどんだけお前らの事真剣に考えてたのか分かってんのかよ！ パートナーの気持ちも考えないで、裏切ったのはお前らの方じゃないか！」

「……！」

「もう許さねえぞ！ ダアツ！」

「グアツ……！」

気の緩んだユナエルの腹めがけて振るわれた右ストレートは、体重の軽いユナエルを軽々と吹き飛ばし、手すりに背中から叩きつけた。

「！ ユナー！」

これを見たミナエルはトップスピードの相手を止め、ユナエルに近寄った。ダメージは大きいものの、まだ飛べるぐらいには平気なようだった。が、妹が傷つけられた事で、ミナエルは殺気立った目つきで龍騎を睨んで叫んだ。

「よくもユナを！ デストワイルダー！」

「危ねえ！」

ミナエルの指示に反応してデストワイルダーが再び龍騎に向かって襲いかかるが、ギリギリの所でラピッドスワローに飛び乗ったトップスピードが猛スピードで龍騎を回収した。

一方で九尾もタイガを圧倒しているものの、時折妨害してくるギガゼール達が鬱陶しかった。先ずはこいつらからだ。そう判断した九尾は踵落としてタイガを地面に叩きつけた後、1枚のカードをベントインした。

『FINAL VENT』

「ハッ！ ハアアアアアア！」

九尾は気合いを入れ、飛び上がりながら一回転してフォクスロードと合体し、右足を、タイガの周りを囲んでいるギガゼール達に向けた。「ウオオオオオオオ！」

『ブレイズキック』が炸裂し、ギガゼール達はまとめて一掃された。が、いつの間にかタイガの姿がない。龍騎とトップスピードもそれに

気づいて周りを見渡すと、遠くの方でピーキーエンジェルズがタイガを連れて撤退しているのが見えた。ベルデの命令で戻るように告げられたのだろう。

「クツソオ！ あいつら、今度向こうから来たら……！」

龍騎が握り拳を固めて忌々しげに呟いた。

「それよりインペラーの方だ。一体何があつたんですか？」

「そうだそうだ！ 何で2人でいたんだよ？」

「話は後！ 今はあいつを探さないと……！」

龍騎は焦つたように周囲を見渡した。インペラーを逃がしてからかなり時間が経っているのに、どこに向かったのか、皆目見当がつかない。ミラーワールドから脱出した一同が探しに行こうとしたその時、マジカルフォンが鳴り響いた。ファヴ達からのメッセージだ。ハツとした一同が表示されている現在時刻に目をやった。

日付が変わる、20分前だった。

ファヴン』というわけで、今週の脱落者は、インペラーに決まったぽん！』

シロー：『遂にライダー側からの脱落者が出たか』

ファヴン』新機能が不利だった魔法少女に対して、功を奏したかもしれないぽん』

シロー：『では、今週の連絡は以上だ』

ファヴン』みんな、これからも気を引き締めて、パートナーと協力して頑張ってほしいぽん！ それじゃあまた来週ぽん！』

「……………あ、ああ……………」

N市の一角にある大通りを、東野 光希はマジカルフォンを片手に、憔悴仕切ったように彷徨い歩いていた。

終わった。もう何もかもが終わった。

タイガ達から逃げかえり、変身を解いたところでマジカルフォンを確認してみた。表示されたマジカルキャンデーの個数は『0』。文

字通り全てをパートナーに奪われたのだ。

誰でもいい。マジカルキャンディーを稼ぐ為に困っている人を見つけないければ。残り少ない時間の間に、光希は死に物狂いで街を走り回った。

死にたくない。誰か助けてくれ。命乞いをするように叫びながら走っている光希の姿を、通行人は目撃するが、誰も話しかける事はない。当然だ。側から見れば発狂しているだけの変質者と見られてもおかしくないのだ。

そうこうしている間にも時間は刻々と過ぎていき、遂にその時を迎えた。ファヴとシローからの伝達によって確立した、インペラーの脱落。こうなつては今からマジカルキャンディーを集めても、数分後には輝く未来を見ることなく、それまで苦勞しながらも築いてきた人生は終わりを迎える。

「……何で、なんだよ。何で、こうなるんだよ……」

残すはあと数十秒。光希は立ち止まり、涙と鼻水で顔をクシヤクシヤにしながらマジカルフォンを高く掲げた。

どうしてこんな事になってしまったのか。何がいけなかったのか。光希には分からなかった。ただ一つ言える事があるとすれば、それは光希の願いが叶う事は未来永劫無いという、事実しか残らない。

大通りの街灯に照らされながら、彼は口を開く。全てを言い切った直後、彼は前のめりに倒れこんだ。周りの人達が、何も持っていない右手を突き出して倒れている光希の異変に気づいて、周囲がちよつとした騒ぎになったのは、それから数分後の事だった。

すでに息絶えている彼が、最後に口にした言葉。
それは……。

く俺は、ただ、兄貴と、美奈ちゃんと、優奈ちゃんと、幸せになり
たかった、だけなのに……く

《中間報告 その3》

【インペラー（東野 光希）、死亡】

【残り、魔法少女14名、仮面ライダー15名、計29名】

35. 思わぬ再会……？

天里^{あまざと} 優奈^{ゆな}は、頬杖をつきながら日が暮れようとしている窓の外を眺めていた。

「優奈？ 外に何かあるの？」

「う、ううん。何でもないよお姉ちゃん」

隣に座っていた天里^{あまざと} 美奈^{みな}が額を寄せて話しかけるも、優奈は首を横に振り、平気だと告げた。が、その顔色は優れない。

「ひよっとしてこないだのお腹の怪我、まだ痛むの？」

「そ、それはもう大丈夫」

「そっかー。ちよつとでもヤバそうだったらすぐに言つてよ。今度はあたしがあいつに同じ目に遭わせてやるからね！」

美奈が奮起しながら叫ぶのに対し、優奈はいつにも増して大人しかった。

思い起こされるのは、昨日の一件。自身のパートナーであるインペラーの裏切りを知り、ベルデの命令で始末する為に行動を起こした。龍騎のチームに寝返ろうとしているのを発見した3人は協力して龍騎を退けつつ、インペラーからの奪取に成功した。その後九尾とトツプスピードの介入でインペラーは逃走し、3対3の戦いが始まったのだが、状況は龍騎達の圧倒的リードだった。特に龍騎の実力を甘く見ていたが故に、ユナエルは大ダメージを受けた。そして何よりユナエルの心に突き刺さったのは、敗北感よりも龍騎の怒りのこもった一言だった。

『裏切ったのはお前らの方じゃないかよ！』

「……」

そうかもしれない。思えば光希は優奈に対して積極的に話しかけていた。それだけ自分を気に入ってくれたのだ。にもかかわらず、ユナエルは裏切り者としてパートナーを切り捨てた。それは変えようのない、紛れもない事実だ。

もう少し様子を見てやっても良かったかな……と思いは始める優奈とは対称的に、美奈はマジカルフォンを片手に人気投票の事を話し始

めた。

「ところでさー。今度の人気投票のやつ、あたしい事思いついたんだよねー」

「えー、何々？」

「成功してる奴の足を引っ張ってみるとかどうよ？」

「ああ、ネガティブキャンペンってやつだね。お姉ちゃんマジクル」

ようやく本調子を取り戻したのか、優奈も気分を改めてマジカルフォンをぼちぼちといじりながら、まとめサイトの掲示板に美奈と共に、他の魔法少女や仮面ライダーの悪い噂をでっち上げて投稿した。果たしてそれが世間に通用するかは定かではないが、暇を持て余し、何より姉と楽しいひと時を過ごすには十分な遊びだった。

「(……そうだよ。あたしだって、お姉ちゃんとずっと一緒にいたいもん。お姉ちゃんと一緒なら、何言われたって平気だし。だから悪く思わないでね、光希)」

その日の晩、龍騎達はトツプスピードを先頭に、とある場所へと向かっていった。目的はすでに伝えられているため、スノーホワイト、九尾、ラ・ピュセルは待ち遠しい気持ちでいっぱいだった。が、龍騎だけはどこか暗く沈んだ気持ちで魔法の箒に跨ってトツプスピードの後についていった。

「お、見えてきたぞ」

やがてたどり着いた先は、廃れたボウリング場だった。一同が地面に着地し、正面玄関から中に入ると、待ち合わせていた人物達が歓迎ムードで九尾達を迎え入れた。

「ういっす！ 来たぜ！」

「お待ちしておりました、皆さん。遠いところご苦勞様です」

「直に会うのは初めてですよね、シスターナナ」

「ええ、そうですわね」

「お久しぶりです、先生」

「ラ・ピュセル。まさかあなたが魔法少女になっていたとは。私も驚きましたよ」

「はい、これ差し入れ」

「まあ、ありがとうございます！ 後でみんなと召し上がりましょう」

それは、オルタナティブを筆頭としたシスターナナ、ヴェス・ウインタープリズン、ファムの計4人で構成されたチームだった。なぜ彼らと話をする事になったのかというと、次の経緯がある。

先週から、今は亡きインペラーの行動を参考に、トツプスピードは寝首を搔かれない程度には信頼できる仲間を増やそうと、普段のキャンデー集めの傍ら、様々な魔法少女や仮面ライダーに話を持ちかけてきた。そして今日、シスターナナの方から話があったという連絡を受けて、トツプスピードは同じチームメイトを引き連れて、彼らの拠点にやってきたのだ。

それを聞いた面々の反応は様々だった。恩師がいるチームならま

ず間違いなく信用出来るため、抵抗なく受け入れようとしたのはスノーホワイト、九尾、ラ・ピュセルの3人。同胞達と多くのコネを持っているライアもすんなりとその提案を受け入れた。龍騎は彼らとの面識こそ少ないが、インペラーの件を受けて、これ以上無駄な犠牲を増やさせまいと、トップスピードに賛同した。一方でナイトとリップルのペアは不信感丸出しだった。ほぼ無理やりチームメイトに引きずられるようにこの場所にやってきたのだ。

シスターナナは多くの同胞達と会えるのを楽しみにしていたし、ウィンタープリズンもシスターナナの提案に異論を唱える事は決してなかった。オルタナティブは教え子が集まっているチームなら信用出来ると考え、会合に参加した。さすがにスノーホワイトと九尾經由でラ・ピュセルの正体が教え子の颯太だと知った時は香川も驚いたが、広い心でそれをすんなりと受け入れた。無論颯太のプライバシーを守るために、他の3人に話すような事はしなかった。

挨拶もそこそこに、開口一番シスターナナがこう切り出した。「間違っていると思うんです」

いきなり決めつけるような言い方に、ナイトは冷めた気持ちで呟いた。

「間違ってる？ 一体何がだ」

「もちろん現状です。人の世を平和にするために力を与えられた我々が、憎み合い、いがみ合い、蹴落としあい、それで一体何が得られるというのでしょうか」

「……そう、ですよね。私もそう思います」

スノーホワイトも沈痛な面持ちでシスターナナに賛同するように頷く。争い事を好まないという点では、この2人はよく似ている。

そしてシスターナナは、偶々近くにいたリップルの手をとって彼女に詰め寄った。リップルは眉根を寄せ、嫌悪感を際立たせたが、シスターナナは気にしていないのか、構わず話を続けた。

「こういう時だからこそ、一致団結しなければならぬと思うんです」「失礼だがシスターナナ。一致団結とはいかが、具体案はあるのか？」皆が抱いた疑問を代表してライアが手を挙げて質問した。対する

シスターナナはリップルの手を握ったままライアに顔を向け、おつとりと微笑んで口を開いた。

「先ずはそこから一緒に考えましょう。私達魔法少女や仮面ライダーの英知を合わせて考えれば、きつとどびきりの良い案が思いついて解決できるはずですよ」

「まさかのノープラン!?」

シスターナナからの一言に、龍騎は思わずズッコケてよろめきながらツツコミを入れた。スノーホワイト、ラ・ピュセル、トップスピード、ライア、オルタナティブは苦笑いし、九尾、ファムは小さくため息をついた。ナイトはきつきと帰りたい気持ちに駆り出され、リップルは躊躇せずに舌打ちした。その際、ウインタープリズンが軽く咳払いをしたが、リップルの舌打ちに対する窘めが含まれていたのかもしれない。

そこへオルタナティブがこんな事を話し始めた。

「皆さん、何もシスターナナは考えなしにそう言ったわけじゃありません。実は先日……ルーラが脱落した後にファヴ経由で運営に対して抗議文を提出したのですよ。他ならぬ彼女の希望でね」

「おお。なるほど運営か」

「言われてみりゃあ、ファヴとかシローばっかに目が行きがちだけど、その手もあつたな」

ラ・ピュセルとトップスピードがシスターナナの対応に感心するように頷いた。

「それで、どうだったんだ?」

ライアがそう尋ねると、尋ねた本人の予想通りの言葉が、表情を暗くしたシスターナナから返ってきた。

「……黙殺されました」

「マジか!?」

「どうして……」

「ファヴもシローも、そういうものだから諦めてくれ、と……。ですがこれは諦めて良い問題ではありません。すでに尊い犠牲が3人も出ているのです。ねむりんさんに、ルーラさん……。それに昨日はイン

ペラーさんまで……！ あの時強引にでも彼を迎え入れていれば、救えたはずなのに……！」

「……その気持ち、よく分かります」

シスターナナの言葉に、龍騎も深く頷いた。

「俺も、もつとちゃんとあいつの話を聞いてやれば、あいつだけでも助けられたんです……。でも、出来なかった」

当事者でもある龍騎の言葉に反応を示したのはナイトだった。

「あれは奴らの自業自得だろ。それにお前、あいつの事嫌ってたんじゃないのか？ だから仲間に取り入れなかったはずだ」

「死んでも良いなんて一言も言っていないだろ。……それに、あいつはただ、家族やパートナーを幸せにしてやれる環境が欲しかっただけなんだよ。だからベルデ達から離反しようとしてたんだ……」

「って事だよな、多分……」

「……」

途中から関わったトップスピードと九尾も下を向いて同意した。

「けどやっぱり納得出来ないのはあいつらの態度だよ。仲間をあんな簡単に裏切る奴なんて初めて見たよ。あいつらだけは嫌いになるかもな……！」

龍騎の言う『あいつら』とは、間違いなくタイガ、ミナエル、ユナエルの事に違いない。拳を強く固めながら呟く龍騎を見て、ファムが質問した。

「あいつと何かあったの？」

「……ああ、実は」

それから龍騎が事の次第を話し終えた時には、シスターナナの瞳から大粒の涙が零れ落ちていた。

「そんな……！ インペラーさん、どれほど無念でどれほど悲しく、どれほど苦しかったでしょう……！ 可哀想に……！」

その光景を見た時、リップル改め華乃の脳裏に浮かんだのは、疎遠になりつつある母親だった。綺麗事さえ言えば皆が味方すると思ひ、誰かを哀れんでいれば自分は優しいと思われ、その上人前で泣くことを全く恥と思わないシスターナナのその姿は、母親と酷似している。

リップルは久方ぶりの苛立ちを覚えた。

が、リップルがアクションを起こすよりも先に動いたのはパートナーだった。

「おい」

「……はい、何でしょうか」

シスターナナが顔を振り向かせると、ナイトは無言の圧をかけたまま、リップルの手を掴んでいたシスターナナの右腕を強く握りしめた。思わずリップルを手放してしまうほどに痛みが走り、シスターナナは短い悲鳴を上げた。

その直後、伸ばしていたナイトの腕に向かって地面からコンクリートの壁が突き出た。ナイトはとっさの判断で手を離し、後退した。一瞬の事で周りの一同は呆然としていたが、よく見るとよろけたシスターナナをウインタープリズンが素早く動いて受け止めていた。先ほど壁を作り出したのはウインタープリズンに違いなかった。

「……なるほど、それがお前の魔法か」

「ナナに気安く触れるな」

「……くだらん」

「何？」

「キャンディー集めの為に協力しようという魂胆かと思っていたが、どうやら違うらしい。とんだ無駄足だな」

「ちよ、ちよつと……！」

緊迫した雰囲気になりつつある中、龍騎が止めようとしたが、ナイトは構わず話を続けた。

「お前の主張なんて、この世界じゃ役に立つわけがない。綺麗事ばかり口にして、どうにかなるはずがないだろ？ ファヴとシローが黙殺するのも、お前を見ていると納得がいく」

「……これ以上ナナを侮辱するなら、容赦はしないぞ」

「そつちがその気なら、俺は構わない。インペラーの後を追わせてやる」

ナイトとウインタープリズン。両者が睨み合い、殺気立ったムードが流れつつある中、龍騎が割って入った。

「や、止めろよ！ こんな時に仲間割れしてどうすんだよ！ 今は協力して……」

「余計な口出しをするな！」

「イテツ!?？」

振り殴られた衝撃で龍騎は地面に倒れ、頬に手を当てた。スノーホワイト達が龍騎に駆け寄る中、オルタナティブが仲裁に入った。

「よしなさい。龍騎の言うように、我々の間で争っても無意味です。むしろ向こうの思う壺かもしれません。私達は無駄な犠牲は1つでも減らしたいのですよ」

それを聞いて、ウインタープリズンは落ち着きを取り戻し、後退してシスターナナを支えた。ナイトもうんざりしているのか、一歩下がって戦う気が無いことを示した。どうやら最悪の事態は回避できたらしく、周りの何人かはホツとした。

「……ほら、リップルも。気持ちは分かるけど、ここはとりあえず、な」
「リップルさん。お願いします。今はみんな協力しあうのが1番だと思います。それが唯一、生き残れる方法なら……」

「……チツ」

トップスピードとスノーホワイトの言葉を聞いて、リップルも舌打ちしながら賛同の意を示した。主にスノーホワイトの説得が効いたのかもしれない。

しかし、さすがは先生だ、と何人かがオルタナティブに感心していたその時、ファムが龍騎の方を向いて口を開いた。

「にしてもあんた、よく2人の間に割って入ろうとしたものね。まるであのバカによく似てるわ」

「……えっ?」

「何でも首突っ込んで、その度に怪我したりして、おまけに騙されやすく、毎度の事ながら弄り楽しんでたわ」

「……あれ? なんかその言い方」

どこかで聞いた事あるような……、と呟く龍騎だが、不意に何かを思い出したかのように飛び起きて叫んだ。

「! なあ、ひよつとしたらひよつとしてだけど、お前、前にその人か

それからしばらくの間、元恋人同士による口喧嘩が続き、それまで火花を散らしていたナイトとウィンタープリズンは互いに見合つて肩を竦めた。

その後、スノーホワイトとトップスピードが2人の怒りを収め、話し合いは一旦終結した。ライアが代表してオルタナティブと話し合った結果、今しばらく結論を固めた上で改めてシスターナナの意見に合意する事にして、今回に関してはマジカルキャンデーの所有数に問題が発生した際に可能な限り分け与えたりと協力しあうという、いわゆる『部分的同盟』という形を結び、それで会合はお開きとなった。

「余計な時間を労したな。おかげでマジカルキャンデーを獲得できる機会が失われたようなものだぞ。元凶は間違いなくお前にあるな、トップスピード」

「いやマジごめんって。話があるからって言われてさ。じゃあ聞いて

あげようってなるじゃん」

「だからって相手を選べ」

本日の拠点である、とあるビルの屋上に戻ったスノーホワイト達だったが、早速トップスピードはナイトとリップルから愚痴をもらっていた。

「リップルもナイトもあそこまで不機嫌になるとか思ってたし。それに、龍騎まであんなに反抗的になるなんて、誰が想像できんだよ」

「まあ、それも一理あるな。俺としてはお前が彼女を持っていたとは驚きだ」

「俺も」

「あのキーホルダーは、龍騎がプレゼントしたものなんだよね？」

「まあ、ね」

ライアと九尾、ラ・ピユセルがそう呟くと、龍騎は言いにくげに呟いた。

「だってさ……。最初は同じ大学の先輩だった編集長が主催した合コンで知り合った時は、そりゃあしよっちゅう話してたし、終わってから何かと縁はあったよ。けど、あれはもう相性の問題だよ。すぐに人を騙す奴だからさあ、正直寝首をかかれそうで怖いんだよ」

「でも、そんな理由だけで反対しようとするのはちよつと……。今はシスターナナが言ってたみたいに、一致団結ですよ。それに、先生が付いていけば大丈夫ですよ、きつと」

「うくん、そっかなあ……」

スノーホワイトに言われて、龍騎もはたと悩み込んだ。それから再び口を開いたのはトップスピードだった。

「まあ、ぶっちゃけ何か良い案あるならそれに従ってみよっかって思ってたし。そこはちと期待外れだったかもな」

「よほど可能性にかけてたみたいだな」

「俺だって絶対死んだりしたくねーもんよ。最悪でもあと半年はな」

「半年……?」

「半年経ったら、何かあるんですか?」

「半年は半年だよ」

単なる死の恐怖とは違う何かを抱えている様子を見た九尾とスノーホワイトの疑問に対し、トップスピードはまたしてもはぐらかした。本日何度目か分からないほどに舌打ちしたリップルは嫌味を含みながら呟いた。

「……鬱陶しい」

「まあ、向こうも悪気があるわけではなさそうだ」

「そうそう。2人とはちよつと相性が悪かったただけだよ。でもあそこでチャンバラするのは巻き込まれそうだから勘弁してほしいね」

「背中」

「ん？」

『御意見無用』なんて背負ってるくせに……」

「あー……」

リップルを指差す先には、トップスピードの羽織っているマントに刺繍された文字が。トップスピードは照れくさそうにしているのを見て、リップルまた舌打ちをした。

「イモ引きやがって……」

「やな事言うね、あんたも偶には」

リップルの言葉を軽く受け流した後、トップスピードは少し真剣そうに言った。

「でもさ、ウインタープリズンとの喧嘩はマジでお勧めできねえぞ。ほら、前に話した事あったろ？ カラミティ・メアリと王蛇の……」
「それってもしかして、撃ち殺されかけたっていう、あの……？」

九尾がそう問いかけると、トップスピードの代わりにラ・ピュセルが口を開いた。

「目的は分からないけど、以前シスターナナがウインタープリズンを連れてカラミティ・メアリと王蛇に会いに行ったららしいんだ。その時は真正面からのぶつかり合いになったらしく、ウインタープリズンの手助けがあったから、上手く逃げ帰れたらしい」

その時の事を、ほつぺたを赤くしながら教えてくれたんだ、シスターナナからね。ラ・ピュセルの話の聞いて、ナイトは顔をしかめた。

ウィンタープリズンの胸の中で涙を流すシスターナナを思い出し、不快感が戻ってきたらしい。

「あんな奴に、この状況を打破出来るとは到底思えないがな」

「ま、悪い子じゃないんだけどね……」

「それ以前の問題だろ。宗教かぶれのお花畑は虫唾が走る」

と、呟いたのはリップル。

「お花畑っていうのとはちよつと違うと思うけどねえ。こんな事言っちゃ悪いけど、それよりかだいぶタチが悪いっつうかな」

「いずれにせよ、部分的ではあるが、協力をしてもらえるように取り付けたのは良い事だ。後は地道にはあるが、キャンディーを8人で集め続けよう」

ライアが締め言葉の言葉を口にして、話し合いはそこで終わった。

「おっし！ んじゃあ話はこれぐらいにしておいて、腹ごしらえ済ませるぞ！」

言うが早いか、トップスピードは風呂敷を広げて料理を並べ始め、一同は軽い食事を始めた。おにぎりを頬張りながら、ふとある事を思い出した。

「(そーいや、あいつ元気にしてるかな……。美華と別れた時から全然連絡つかないし……)」

月明かりの下で、漆黒に包まれたライダーは夜空を見上げていた。
何かに思い耽っているようだが……。

「……」

「どうか、しましたか？」

「……いや、何でも。次は少し離れた所に向かうぞ」

「……はい」

パートナーの魔法少女はそれ以上追求する事なく、2人並んで次の
目的地へと足を運んだ……。

36. 交渉決裂

大通りに、等間隔で植えられたイチヨウの樹が衣替えを終えているのを確認したボーイッシュな女性、あしゆう 亜柊、しずく 雫は、カーテンを閉めてからポツリと一言。

「……マンションの6階から地上を眺めると人間が小さく見え、小さく見えると人が人でないかのように錯覚してしまうな」

「あら、雫でもそんな事を思うのですか？」

雫の呟きに反応したのは、キツチンで料理を作っている、エプロンを着た小太りの女性、はぶたえ 羽二重、なな 奈々だった。

「魔法少女としては、よろしくないかな」

「でも雫らしいですよ。そうやって難しく考える所が」

奈々がクスリと笑うと、雫もつられて顔がほころんだ。

考えてみたら、久しぶりに奈々の笑顔を見たな、と雫は思った。最近の彼女はとにかく憂い顔か泣き顔になる事が多かった。

その原因は2つある。1つは、突如として始まった、魔法少女や仮面ライダーの座をかけた、ある種の椅子取りゲームのような争いだ。すでに3人の脱落者が出ており、いずれも死に至っている。同胞が死ぬ事は、魔法少女として他者を救う事に喜びを感じていた奈々にとつて相当辛いものだった。雫自身も胸の奥が時折痛くなる。そしてもう1つは昨晚の件だった。自分達の意見に同調してくれそうな魔法少女や仮面ライダーと力を合わせて困難を乗り切ろうと考えたシスターナナは、同じチームで大学の教員であるオルタナティブの教え子が集まっているチームに声をかけた。つい最近結託して、8人組のチームとして活動をするようになった事を知っており、この調子なら自分達も受け入れてくれるだろう。そう思っていた。が、実際には自分達が思い描いていた展開とは少しばかり外れた。九尾、スノーホワイト、ライア、ラ・ピュセル、龍騎、トップスピードはどうか承諾してくれたものの、ナイトとリップルのペアは真っ向から反対した。特にナイトは苛立ちのあまり、シスターナナの腕を掴んで怪我を負わせようとした。これにはウィンタープリズンも頭に来たのか、シス

ターナナの前に立ってナイトを倒そうとしたぐらいだ。

故にウインタープリズンも、それからナイトに不信感を抱いてばかりだった。オルタナティブとライアの仲介がなければ、話は全く進まなかったに違いない。ただ、龍騎とファムが元恋人同士だった事にはさすがに驚いたが。

そんな彼女の笑顔を見る事が、雫にとって至福の時だった。

「やはり君の笑顔は可愛い」

「何か？」

「いや、独り言さ」

そう言つて雫は、本棚の方に目をやった。そこにはこれまで奈々と築いてきた思い出の写真や雑貨類などが置かれていた。どれも恋愛ものをモチーフにした小説や漫画、詩集だ。何枚も貼り付けられた写真の1つ、同じゼミ生として香川や美華も含めた全員が写つたものの端が折れ曲がっており、真っ直ぐに直した。几帳面な性格が面に出ているのがハッキリと見てとれた。

そんな雫の様子をニヤつきながら奈々が見ていると、雫が尋ねてきた。

「今日はカレー？」

「惜しいですね。シチューです。独活のクリームシチュー。灰汁抜きにちよつと時間かかるけど、もう少し待っててくださいいな」

「(……独活?)」

軽やかにおたままで鍋をかき混ぜている奈々を見て、雫は曖昧な表情を浮かべた。山菜の一種である独活をクリームシチューに入れるなんて聞いた事がない。そう思う雫だが、すぐにその理由を察した。

奈々は見た目からも分かる通り、平均より体重が多い。それを気に病んでいる彼女はダイエットの名目で食べたいものを食べないようになっている。しかし、雫はそれを気に入らなかつた。

だからある時、「苦しんでまでダイエットする必要はないだろう、奈々はココロしている方が健康的に見えるし、何より可愛い」と心の底からアドバイスをしたつもりだったが、逆効果だったらしく、それから3日間、口を聞いてもらえず、雫はひどく落ち込んだ。美華が

慰めてくれたり、香川からカウンセリングしてもらわなければ、心に一生深い傷を負っていたに違いなかった。

魔法少女『シスターナナ』になれば、美形になれるのだから気にしなくても良いのではとも思ったが、奈々の乙女心は同性の雫をもってしても理解出来ない為、あえて口に出さないようにしておいた。

最近は食を抑えるだけでなく野菜を摂ろうと努力しているらしく、地物の山菜をどこから調達してきては、聞いた事もない料理を作ってくれる。雫はもちろん、時折奈々の住むマンションに来て食事をする美華や香川一家も首を傾げた。

「(でも、それでも……)」

笑ってくれるだけの余裕が出来たのは良い事だと雫は思った。脱落するのはあと13名。そこに最悪でもシスターナナの名が加わるような事があつては、決してならない。無論オルタナティブやファミの事も全力で守るつもりだが、彼女が死ぬ事を考えただけで胸が張り裂けそうだ。

向かい合うのではなく、隣り合って恋人のように寄り添いあいながら、出来上がった『独活のクリームシチュー』を2人で口にする中、雫は今後の予定を確認した。

「……で、食べ終えたらこれからどうするんだい？」

「そうですね……。やはりもう少し呼びかけをしておいた方が良く思うんです。昨日はスノーホワイト達も承諾してくれましたけど、この際ですからこの調子でもっと積極的に団結を深めましょう」

「……昨日は昨日で成功とは言い難い気もするが」

雫がそう語るように、ナイトとリップルは未だに同調する気は無さそうだ。特にナイトの態度には雫も嫌悪感を抱いていた。

「それに、今は物騒だ。あても無いのに無理に仲間を作らなくても……」

「大丈夫ですよ。雫や美華、それに先生もいれば」

その時、机に置かれていた奈々のマジカルフォンが鳴り響いた。メッセージを受信したようだ。会話を中断して内容を確認してみると、奈々は驚いた表情を見せた。

「これは……」

「誰からだい？」

「森の音楽家クラムベリーからです。是非とも会いたいと」

「クラムベリーから……？」

「私達の活動が耳に入ったのかもしれませんが。もしかしたら協力してくれるかも！」

奈々はさも嬉しそうにはしゃいでいるが、対称的に雫は深く考え込んでいる。ルーラチームの例もある。もしかしたら、罾かもしれない。そう考える雫だが、奈々は完全にその気であり、その笑顔を見て反対意見が出せなくなった。

香川と美華に連絡を入れ、食事を終えた2人は後片付けをしてから支度を整え、2人並んで、カーテンで閉め切った窓の方を向いてマジカルフォンを取り出し、タップした。

「変身！」

奈々がタップすると、光に包まれて現れたのは背徳感溢れる修道服に包まれた魔法少女『シスターナナ』だった。

「変身」

シスターナナとは真逆に、静かに呟いてタップした雫は光に包まれて、ロングコートに身を包んだ魔法少女『ヴェス・ウィンタープリズン』へと変身した。

2人はカーテンを開け、ウィンタープリズンがシスターナナをエスコートするように窓ガラスからミラーワールドへと突入し、途中で合流した、各々のパートナーであるオルタナティブ、ファムと共にクラムベリーが待ち合わせ場所に指定した所へと足を運んだ。

クラムベリーが指定したのは、奈々達の住んでるマンションからかなり離れた所にある、高波山の採石場だった。正確には解体された地元の建設業者が所有権を有していた、採石場跡地であり、周りは滑らかに削り取られた岩ばかりで、殺風景な場所と呼ぶに相応しい舞台である。

「けど、何でこんな時にこんな採石場で話をしようなんて考えたのかしら、クラムベリーは？ リアルで会った事すら無いのに話したいって」

「普段は寡黙な方ですけど、ベテランではありませんし、きつと私達と同じ考えを抱いているのかもしれないね。仲間が増えて嬉しいです」
「そうなるとういだけだね……」

ファミとシスターナナがそんな会話をしている中、ウィンタープリズンは少し不安げな表情のまま、オルタナティブにこっそり話しかけた。

「先生、この件、どう思います……？」

「チャットへの参加率は高い方ではありますが、一方で自発的に語る事はないですからね。素性が見えないという点では警戒すべきではありませんが、先ほどシスターナナも述べたように、彼女はパートナーであるオーティン同様、魔法少女歴は長い。それこそ私が仮面ライダーに選ばれるより前の事ですから。聞く所によれば、あのカラミティ・メアリの教育係も彼女が務めた、とか」

「……ますます不安になりますね」

カラミティ・メアリの危険性は、実際に対峙したウィンタープリズンなら嫌という程理解しているため、不安感は一層に積もった。

主張や目的の見えない相手は、カラミティ・メアリや王蛇、そしてベルデのように分かりやすく危険な相手より厄介極まりない。

そうこうしているうちに、午前2時となり、前方から足音を鳴らして堂々と歩み寄る人影が見えた。長く尖った耳、金色の髪、身体中のそこかしこに蔦が絡んで、大小様々な花が咲き誇り、年上である事を惜しみなく前面に出しているその振る舞いから、妖精エルフを連想させ、すぐにその人物がクラムベリーである事は容易に想像出来た。時間通りにやってきた事を考えると、さほど悪い印象は見受けられない。

クラムベリーは礼儀正しく振る舞うようにお辞儀をしてから挨拶した。

「こんばんは。シスターナナ、ヴェス・ウィンタープリズン、オルタナティブ、フアム」

「こんばんは、森の音楽家クラムベリー」

「クラムベリーで構いませんよ」

「分かりましたクラムベリー。チャットでは何度もお目にかかっていましたが、実際に会うのは初めてですね」

「ええ。皆さん、私が想像していた通りの方々で何よりです」

「……それはどうも」

「パートナーのオーデインは来てないのかしら？」

「彼なら別件で今日は誘っておりません。私だけです」

「そうですか。お忙しいんですね」

一言二言会話した後、内容はキャンディーの奪い合いという現状を打開する為に皆で一致団結していこうという提案と、それに乗っくれている人達がいるという報告へと変わった。

「……ですから、クラムベリーにも是非協力していただきたいのです。一人ひとりの力は小さくても、力を合わせればどんな困難も解決できる。そう思うんです」

「なるほど。お話はよく分かりました」

シスターナナの熱弁に対してそう答えるクラムベリー。ウインタープリズンとファムは意外だと思ったのか、互いに顔を見合わせた。

すると、クラムベリーは話を続けた。

「では、こちらからお話したい事があるのですが」

「ええ、どうぞ。私達で答えられる範囲であれば」

シスターナナはおっとりした表情で許可を出した。そしてクラムベリーは一旦目を閉じて、こう呟く。

「この事、やめませんか？」

「え？」

「迷惑千万なんですよ。こうやってゲームに水を差すような事をされるのは」

「ど、どういう意味なんでしょう、か……？」

「そのままの意味ですよ」

突然の拒絶に困惑するシスターナナ。そこで真っ先に動いたのはオルタナティブだった。後ろに下がらせた後、1番前に立って口を開いた。

「やはり、最初から我々に賛同する気は無かったようですね」

「察しが良いですね。さすがはオルタナティブ」

そう言っただけで再び開かれたクラムベリーの目つきは、何かに飢えた獣を彷彿とさせていた。

「時にオルタナティブ、並びにウインタープリズン。あなた方の噂を聞いて以来、戦いたいと思っていました」

「私や先生と……？」

「ウインタープリズンは肉弾戦に関しては右に出る者がいないという話ですし、オルタナティブは優れた才能の持ち主として多方面から注目されているそうじゃないですか」

「まさか、あなた……！」

「ゾクゾクするじゃないですか。そんな相手と戦えるなんて」

雰囲気一つ変えずに近づくクラムベリー。が、次の瞬間予備動作なしのハイキックがシスターナナめがけて振るわれた。これに対しウインタープリズンは左腕を立てて受け止めた。その一撃の重さに、骨が軋む感覚がした。風圧で首に巻かれていたマフラーが翻り、シス

ターナナは小さな悲鳴とともに尻餅をついた。ファムとオルタナタイプは身構えた。明らかに向こうは本気でやりあうつもりなのだ。「フフ。やはり採石場には、長いマフラーがよく似合う」
「……………」

クラムベリーの指が標的として捉えたウインタープリズンに向かって突き出されるが、この時ウインタープリズンは意識を切り替えて地面に右手を当てた。すると、2人の間に壁が出来た。ウインタープリズンの魔法『何もない所に壁を作り出せるよ』が発動したのだ。壁の材質は使う場に応じて変化するため、今回は石の壁がせり上がった。

クラムベリーの身長を裕に越える高さの石壁。しかしクラムベリーはそれを前にしても迷わなかった。そのまま拳を振るい、易々と壁を貫き、欠片がシスターナナ以外の3人に襲いかかった。ファムとオルタナタイプは横に転がって回避し、ウインタープリズンは後退した。

いかに魔法少女や仮面ライダーの身体能力が向上しているとはいえ、クラムベリーは別格だった。豊富な実戦経験に裏打ちされた自信に満ち溢れており、先ほど石壁を貫いた攻撃からは、単なる破壊の域を超えていた。明らかにクラムベリーは4人を殺しにかかっている。そう感づいたオルタナタイプはスラッシュバイザーに1枚のカードをスライドしてベントインした。

『SWORD VENT』

そしてオルタナタイプはスラッシュダガーを片手に、クラムベリーを抑え込もうとした。殺す気はないとはいえ、放置しておくには危険すぎると判断したのだろう。が、クラムベリーは笑みを崩す事なく逆にスラッシュダガーを片足で押さえつけ、もう片方の足でオルタナタイプを蹴りつけた。

「！ みんな！」

「下がってて、シスターナナ！」

「ここは私達が！」

ウインタープリズンとファムはシスターナナを下がらせて戦いに

集中した。間合いを広くとると同時にクラムベリーをシスターナナから遠ざける為に、ウインタープリズンは退きながら壁を作り出してクラムベリーの動きを阻害しようとした。だがクラムベリーは、普段皆が歩くような道路とは違って障害の多い足場にもかかわらず、ごく自然体で壁を次々と破壊していった。

「(魔法で出来た壁が、こんなにも簡単に……!-)」

予想以上に手強さを感じて舌打ちしようとしたウインタープリズンだが、そこで動けなくなった。見れば、クラムベリーがマフラーの端を掴んで、間合いを開けさせないようにしている。

「しまった……!-」

「無駄だと分かりましたか?」

「ハアアッ!」

ウインタープリズンを引き寄せて殴りかかろうとしたクラムベリーに向かって、ファムがレイピア型の召喚機『ブランバイザー』を突き出し、マフラーから引き離れた。

「ライダーの中では稀に見る女性ライダーの1人、仮面ライダーファム。どれほどの実力を持っていますかね?」

「シスターナナの優しさを利用するなんて、最低!」

「フフ。それは褒め言葉として受け取っておきましょうか」

そう言つてクラムベリーはファムに急接近。ブランバイザーを振り回して対抗するファムだが、深い間合いに入ったクラムベリーがこめかみに向かつてつま先を叩きつけた。

「ああ!?」

さらなる追撃として腹にも蹴りが入り、ファムは地面を転がった。オルタナティブとウインタープリズンも応戦するが、クラムベリーの猛攻は止まらない。

このままでは3人が危ない。そう思ったシスターナナは離れた場所から祈るようなポーズをとり、全身を光に包ませた。すると、戦っていた3人は腹の底からエネルギーが湧いてくるのを感じた。そう、これこそがシスターナナの魔法『好きな人の力をめいっぱい引き出せるよ』であり、それが逆転の一手を生み出した。

クラムベリーが足を突き出してくるが、オルタナティブはこれを退いて回避し、足が戻される前に驚掴みにして動きを阻害した。

「ハアッ！」

続いてファムからの、背中へのショルダータックルが炸裂してクラムベリーは吹き飛んだ。宙を舞うクラムベリーの眼前に石壁が彼女を囲むように出現し、クラムベリーは叩きつけられた。逃走経路を塞ぐ為でもあり、確実に攻撃を当てる為にウインタープリズンが形成したのだ。ウインタープリズンは躊躇する事なく詰め寄り、クラムベリーに向かって渾身の力を込めた両方の拳が振るわれた。鈍い音が鳴り、殴った感触が分かる度に、石壁には血がこびりつく。おそらく一度だけでは向こうも倒れないだろうから、何度も殴りつけ、音をあげるまでやり続けば良い。

そう思っただけで殴り続けていたその時、背後からシスターナナの声が。

「ウインタープリズン、後ろ！」

「(後ろ……?)」

不意に目線や意識を後方に向けるウインタープリズン。それを見たクラムベリーは鼻から赤い液体を滴らせながらも不敵な笑みを浮かべて、拳を突き出した。不意をつかれたウインタープリズンは回避する間がなかったが、そこへオルタナティブが割り込んで、ウインタープリズンの代わりに拳を直に受けた。左胸に直撃し、オルタナティブはウインタープリズンを巻き込みながら後退し、うめき声と共に膝をついた。

「先生……！」

「大丈夫、です。この程度ならね」

「しかし、今は……」

ウインタープリズンが改めて声のした方を振り返ったが、そこにはシスターナナはいない。彼女は声のした方向とは別の場所で呆然としている。叫んだ様子が見受けられない。では、先ほどウインタープリズンが耳にしたシスターナナの声は一体……？

「おそらく、彼女の魔法でしょう。私の推測ではクラムベリー、あなたは音を自在に操る事が可能ですね。だからシスターナナの声と酷似

した音を、本物とは別の場所から発せた」

「！　そうか……！　私が聞いたのはそれだったのか」

「お見事です。まさか初見でそれを見破るとは」

では、こちらにも本気で相手をしないと失礼ですね。

そう呟くクラムベリーはマジカルフォンを取り出し、両手にパートナーであるオーデインの武器『ゴールドセイバー』を2刀出して構えた。

『SWORD VENT』

対するファムもベントインして薙刀状の武器『ウィングスラッシュャー』を手に取り、パートナーのウィンタープリズンもマジカルフォンをタップしてウィングスラッシュャーを握った。

ファムとウィンタープリズンのペアが駆け出し、クラムベリーに斬りかかるが、クラムベリーは依然として余裕を保ったまま、2人を相手に互角の勝負を繰り広げている。

「ほお。肉弾戦だけが得意分野というわけではなさそうですね。パートナーの武器をしっかりと使いこなしている」

「随分と呑気に実況しているな。余裕をこいていられるのも今のうちだぞ！」

ウィンタープリズンはさらに力を込めて攻撃しているが、クラムベリーは動じない。

が、そんな3人の勝負に水を差すかのように、マジカルフォンからモンスターの出現を知らせる音が鳴り響き、3人の間を何か横切った。横切った物体は戻るようにUターンし、近くの岩場に突き刺さった。十字形の巨大手裏剣だった。一同が見上げると、高台になっている崖から姿を現す者が。

それはイモリ型のモンスター『ゲルニユート』だった。しかも1匹だけではない。壁に張り付いている者、宙吊りでぶら下がっている者、何体もの群れで5人を睨みつけているのだ。

「モンスター……！　こんな時に！」

「(だが、これは好機かもしれません) ウィンタープリズン」

「！　はい！」

ウィンタープリズンはファムに目配せで合図を送り、ファムと共に

クラムベリーから離れた。

『WHEEL VENT』

オルタナティブが新たなカードをベントインすると、どこからか契約モンスターのサイコログが現れて、走りながらバイク型のサイコロダに変形した。ウインタープリズンはシスターナナを抱き上げて、オルタナティブはファムを後ろに乗せて、クラムベリーとは反対の方向へ全速力で走りだし、採石場から離脱した。ゲルニユートも何体かが4人を追いかけて、何体かはその場に残った。

残党達はクラムベリーを囲み、背中に背負っている十字形の手裏剣に手をかけた。

「……せっかくの所で思わぬ邪魔が入りましたね。倒される覚悟はよろしくて？」

ため息をついたクラムベリーの目つきは次の瞬間、冷酷なものへと変わっていた。それでも臆さず攻めようとするゲルニユート達だったが。

『ADVENT』

電子音と共にゲルニユートに向かって体当たりしてくる影が。それは不死鳥型であり、パートナーの契約モンスター『ゴルドフェニックス』だった。クラムベリーが再び高台に目を向けると、ゴルドフェニックスを呼び出した張本人が腕を組んで見下ろしていた。

「くっ……！」

「まだ追いかけてくるわー！」

一方、採石場近辺から脱出こそ出来たオルタナティブ達だが、ゲルニユート達は執拗に追いかけてくる。広い地帯に出たのを確認したオルタナティブはバイクを停めて、ファムと共に降り立った。ウィンタープリズンも足を止めてシスターナナを下ろして、安全な場所への避難を促した。

「ハアッ！」

「ふんっ！」

「オオッ！」

ファム、オルタナティブ、ウィンタープリズンの3人はゲルニユートに立ち向かい、激しい交戦を始めた。クラムベリーを相手にしていた時ほど苦戦する事はなかったが、先ほどの戦いで疲弊している影響か、息の上がり具合が早くなっている。

すると、何体かが3人の上空を飛び越え、後方にいるシスターナナに向かっていった。

「！ シスターナナー！」

ウィンタープリズンは慌てて彼女を守るために動こうとするが、疲労が蓄積しているが故に、動きが鈍くなっている。

が、シスターナナは毅然とした態度で立ち上がり、自身のマジカルフォンをタップした。

「挿入歌：果てなき希望」

シスターナナの手元に現れたのは、パートナーの所持武器であるスラッシュダガー。

「やあっ！」

シスターナナは慣れない手つきでスラッシュダガーを振り回し、ゲ

ルニュートを退けた。

「ナナ……！」

「魔法少女や仮面ライダーが相手ならともかく、人々を脅かすモンスターを相手に、怖気ついてなんていられません！ 私も微力ながら戦います！」

シスターナナに奮起されたのか、ウインタープリズンも己の心身に鞭を打って、ゲルニュートに殴りかかった。

途中でゲルニュートが手のひらから強粘性のある液体を噴射させ、オルタナティブを拘束しようとするが、

『ACCEL VENT』

それよりも早くベントインしたオルタナティブが素早く動いて回避し、着実にダメージを与えていった。

「では、私も援護します」

そう言っただけに取り出したのは、シスターナナのアバター姿が描かれたパートナーカード。

『IMPROVE VENT』

光に包まれたオルタナティブが腕をファムに突き出すと、ファムの身体能力は先ほどシスターナナがやってのけたみたいに一気に向上し、ゲルニュート達を圧倒し始めた。『インプローブベント』の効力で、シスターナナの魔法同様、他者の力を存分に発揮させる事が出来るのだ。

「とどめよー！」

『FINAL VENT』

ファムが新たなカードをベントインすると、白鳥型の契約モンスターである『ブランウイング』が現れて、ウインタープリズンとオルタナティブの誘導で一箇所にとまっていたゲルニュート達をブランウイングが突風を巻き起こして吹き飛ばした。なす術なく飛ばされた先には、ウイングスラッシャーを構えて待っているファムの姿が。

「ハアッ！ やあッ！ ダアッ！」

ファムは向かってくるゲルニュート達を一体ずつ両断した。必殺

技『ミスティースラッシュ』を放ったファムを通り過ぎる頃には真つ二つに両断されたゲルニユートは爆散していた。

全てが終わり、マジカルフォンにまたキャンディーが溜まったという情報が入ったものの、シスターナナの表情は浮かないものだった。

「あの方なら、分かってくれさると思っていたのに……」

「ナナ……」

相当落ち込んで地面を見つめているシスターナナを見て、ウィンタープリズンはクラムベリーに対する腹立たしさを覚えた。

「(やはり、この状況下で手を取り合うのは決して得策とは言えないようですね……)」

皆の様子を伺いながら、オルタナティブはシスターナナをどうかわんセリングするか悩みつつ、改めて協力し合う事の難しさを実感するのであった。

「これで最後ですね」

その頃、採石場ではクラムベリーと後から駆け付けたオーデインはゲルニユートを相手にしていたのだが、全くと言っていいほど勝負にならなかった。倒れているゲルニユートの首元に突き刺さったゴル

ドセイバーを引き抜き、適当に蹴り飛ばすと、ゲルニユートは力尽きて爆散した。マジカルキャンディーの総数が増えたという情報が入ってきたが、2人にとってどうでもいい事だった。

「ありがとうございます。しかし、よくここが分かりましたね」

「シローがお前の気配を感知して、ここまでやってきただけの事だ」

『モンスターの気配もあつたからな。ここまで誘導したまでだ』

「それはお気遣いありがとうございます」

「……しかし、逃げられたな」

オーデインが、オルタナティブ達が逃走した方向に顔を向けた。モンスターに妨害されてしまった以上、今から追いかけても間に合わないだろうし、仮にモンスターが介入せずとも彼らが逃げ出した時点でクラムベリー自身、追いかけるという選択肢はなかった。

すると、そんなクラムベリーに疑問を抱いたファヴが彼女のマジカルフォンから立体映像として飛び出した。

『逃がすぽん?』

『シスターナナはさつきと始末する手筈では無かったのか? あれは生かしておいてもゲームの進行には全く役に立つまい』

が、ファヴとシローの話聞いていないのか、クラムベリーの口からは別の言葉が放たれた。

「久々でしたね。あれほどマトモに戦えたのは。この私に魔法を使わせるとは、少し計算外でした」

「だが、ウィンタープリズンやオルタナティブ、それにファムのあの強さも、所詮シスターナナのサポートがあつてこそものだ。今のままでは試験に受かるとは思えない」

オーデインが遠目から見た観察結果を口にした。

「……とりあえず、今回は保留という事にしておきましょう。またいずれ機会があるかもしれませんし」

『いい加減ぽん』

ファヴが呆れたように呟くが、クラムベリーは笑みを浮かべてばかりだ。

「ゲームの進行など、私には正直どうでもいいのですよ。オーデイン

もそうでしょう?」

「殺すか殺されるか。そういう相手と戦いたい……、という事だな。まあ、だからこそこの役目を引き受けたようなものだが」

『我々としてはどうでもよくない事ではあるがな』

「しかしアレですね」

不意に戦闘狂の音楽家は、中々止まらない鼻血を手首で拭いながら呟いた。

「そろそろ様子見という立場も面倒になってきました。こちらから仕掛けても、良いタイミングでは無いでしょうか……?」

とあるアンティークショップから悲鳴が聞こえてきたのは、それから2日後の夜の事だった。偶然近くを散歩していた女性が、鍵の開いていた店に入ると、何者かが倒れ込む姿が。

慌てて誰かに助けを求めに外へ出たその時、1人の男性が駆け寄っ

てきた。

「どうかされましたか!?!?」

「た、大変よ!・ 中で人が……!」

女性が指さした方向に向かって駆け出した男性は、店内に入り込んだ。そこには1人の女性が倒れており……。

それは、正史の上司にあたるOREジャーナルきつてのスペシヤリスト、桃井 令子だった。

37. アンティークショップの怪

その日、正史が訪れたのは仕事場でもなく、取材現場でもなく、市内にある小病院だった。

「令子さん。何かやらかしたんですか？」

「この状態をどう見たらそう解釈出来るのよ？ 被害者は私よ」

ベッドの上で不機嫌そうに答える令子の頭には、包帯が巻かれていた。

通勤途中、編集長の大久保から見舞いに行くように告げられた正史は、慌てて病院に直行し、現在に至る。

一体何が彼女の身に起きたのか。正史が首を傾げていると、ノックと同時に1人の男性が入ってきた。

「お待たせしました。……おや、あなたは」

「あつ！ こないだ三条さんの家にいた……！ ええつと確か……、須藤さん！」

「またお会いしましたね」

そこに現れたのは以前、元魔法少女『ねむりん』こと三条 合歡が亡くなった事件で捜査を担当していた須藤 充だった。どうやら令子が巻き込まれた事件の担当になったようだ。すでに令子との間で挨拶やある程度の概要の説明は済ませていたらしく、正史は話の途中から加わる事となった。

「……で、令子さんは何で怪我を？」

「昨晚、駅前近くのアンティークショップで何者かに襲われたらしいのです。そうですよね？」

「ええ。取材中の事でした」

そう言つて令子は、正史に淡々と説明を始めた。

令子は依然として行方不明事件の調査を続けていたのだが、しばらく調査を進めるうちに、行方不明者の何人かに共通するものが出てきた。それは昨晚令子が襲われたアンティークショップに、行方不明になる前まで出入りしていたという事だ。

何かしらの解決の糸口になるかもしれないと直感した彼女は、夜に

なつて現場にやつて来て、聞き込みを始めた。聞き込みを続けていくうちに、そのアンティークショップの店長が数ヶ月前から姿を見せない事が判明した。市内で頻発している行方不明事件に関係あるのだろうか。探究心を抑えきれなくなった令子は、鍵のかかつていない店内に入り込み、しばらく散策していたのだが、そこで突然背後から何者かに襲われたのだという。令子も必死に抵抗し、近くにあった品物を投げつけたり振り回したりしていたのだが、やがて後頭部を殴られて気絶したのだという。

令子の悲鳴を聞きつけた人が、令子が倒れているのを見て慌てて助けを求めた際、偶然近くを巡回していた須藤が駆けつけ、病院に運んだのだそうだ。

「そうだったんですか。ありがとうございます」

「いえいえ。警察として当然の事をしたままでです。……しかし、店長が行方不明とはいえ、無断で侵入するのはあまり感心しませんね。今回は偶々怪我で済んだとはいえ、近頃は物騒ですから、以後気をつけるように」

「え、ええ」

「それに、いくらあの店の常連客が行方不明になっているとはいえ、それが一連の行方不明事件と関係があるとは思えませんよ」

「でも、あの店の店長まで行方不明になつてゐるんですよ？ 関連性を疑いたくありませんか？」

「ああ、確かに」

正史も深く頷ぐが、須藤は否定的だった。

「まあ、少なくともあなたの場合にはちゃんとした傷害事件として捜査が進むと思いますので、同時並行で調べておきましょう。後は我々に任せてください」

「お願いしますね。警察は昔から頼りにしていますから」

「ご期待に応えるように頑張らせていただきます。では」

須藤は頭を下げると、病室を後にした。

それを見送った令子は、不意にテーブルの引き出しからメモ帳を取り出して、何かを書き込み始めた。

「城戸君。分かっているとと思うけど、見ての通り、私はもうしばらく動けそうにないから、代わりに調べてきて」

ちよつと不安だけど、と付け足して、令子は正史に一枚のメモを渡した。正史は受け取ったメモに目を通す。そこには『加賀 友之』という名前と、彼が店を構えているアンティークショップの住所が書かれていた。

「頼んだわよ」

「加賀 友之ですね……。分かりました！ 行つてきますす！」

正史は力強く頷くと、病室を後にした。お大事に、と告げるのも忘れずに。

病院を出た正史は原付バイクにまたがり、ヘルメットを被った。

「（そういえば、久しぶりにこんな大仕事に取り掛かった気がするなあ）」

ここ最近マジカルキャンディー集めや、それによつて起きている奪い合い等々で忙しく働いていた為、正史はそう思えた。すでに3人も脱落しているが、かといつて本職を疎かにするわけにもいかない。

「ツシヤア！ やるぞー！」

気合いを入れた正史は、事件の真相を追う為に街中を走り回った。

が、勢いよく走り出して間もなく、正史の持つマジカルフォンから電子音が鳴り響いた。モンスターの出現を知らせるものだ。

「何でこんな時に……！」

正史は愚痴りながらも、反応のあつた場所へと急行した。

そこはアンティークショップから少し近い、公園のすぐそばにある地下道だった。バイクから降り立った途端、地下道から男性の悲鳴が。急いで現場に向かうと、そこには見た目からしてイカついスキンヘッドの男性が尻餅をついて後ずさりしていた。男性の目の前には黄色いカニ型のモンスター『ボルキャンサー』がおり、両手に鋭いハサミを構えて男性に掴みかかった。外見上は怖そうに見える男性だが、未知の敵に遭遇して完全に戦意を喪失しているらしい。

「た、助けてくれえー！」

無論正史は放つておくわけもなく、飛び蹴りでカーブミラーからミ

ラーワールドへ男性を連れ込もうとするボルキヤンサーに攻撃し、ボルキヤンサーは男性から離れてミラーワールドに消えていった。

「早く逃げてー！」

男性はパニックになりながら、奇声をあげて逃亡した。正史は周りに人がいない事を確認すると、カーブミラーに取り出したカードデッキをかぎす。Vバツクルが腰に巻かれると、右手を左に突き出して叫んだ。

「変身ー！」

Vバツクルにカードデッキが装填され、正史は鏡像と重なりながら龍騎に変身した。

「ツシャアー！」

龍騎はミラーワールドに入り、逃げようとしているボルキヤンサーは発見し、頭上を飛び越えて行く手を遮った。

『SWORD VENT』

龍騎はドラグセイバーを出してボルキヤンサーに斬りかかった。ところがボルキヤンサーには全く効いていないのか、背中を斬りつけても、ビクともしない。その硬さに舌を巻いていると、ボルキヤンサーは反撃とばかりにハサミを振り下ろして龍騎を攻撃してきた。龍騎は勢いあまって背中から叩きつけられた。

「くっそお。野良の割に硬いじゃねえかよ……！ こうなったら」

龍騎が新たなカードをベントインしようとしたその時だった。

「何をしているのです？」

龍騎とボルキヤンサーの間に、人影が割り込んだ。よく見るとそれは、龍騎と同じ仮面ライダーであり、今は亡きねむりんのパートナーであったシザースだった。

「あつー！ シザースー！ ちょうど良かった！ 手伝ってほしいんだ！ そのこのモンスター結構強くてさ……！」

シザースが龍騎に歩み寄る中、龍騎はシザースに協力を要請したが、シザースから返ってきた返事はどうと……。

「フンツー！」

「グアツ!?？」

左腕についたシザースバイザーを振りかぶり、龍騎を殴りつけるというものだった。

「挿入歌：果てなき希望」

慌てて龍騎は狭い通路から外に逃げ出した。振り返ると、シザースの横にボルキョウサーが並び立ったのが見えた。そこで龍騎はハツとした。よく見れば、目の前のライダーとモンスターはデザインが酷似している。つまりボルキョウサーは、シザースの『契約モンスター』だったのだ。

「！　じゃあ契約モンスターが、人を襲ってたって事なのか!?!」

常識では考えられないが、そう理解した龍騎はシザースを咎めた。

「おい何してんだよ！　その契約モンスター、さっき人を襲ってたんだぞ！　自分のモンスターならちゃんと言なづけないとダメだろ!?!」

が、シザースには反省の色はない。むしろ憤りを覚えているようにも見えた。

「それはこっちのセリフですよ。私の仕事を勝手に邪魔しないでもらいたい」

「仕事って……?」

龍騎が首を傾げるが、シザースはお構いなしに龍騎に飛びかかった。

「お、おい待ってって！　俺はあんたと戦うつもりなんてないんだ!」

「だとしても、私の仕事の邪魔をしたのは事実。それなりの報いを受けなさい」

シザースからの攻撃を避けている龍騎だが、その隙を狙ってボルキョウサーが背後から攻撃しており、龍騎は防戦一方だった。

再び左腕を振ったシザースだが、それを受け止める者が現れた。

「ハアッ!」

「何……?」

シザースの攻撃を止めているのは、最近仲間になったライアだった。さらに龍騎の後方から飛び出してボルキョウサーを退けたのは、ライアより前から行動を共にしているナイトだった。

「ライア！ それにナイトも！」

「何をモタモタしている」

「大丈夫か？」

ナイトはダークバイザーを構え、ライアは龍騎に駆け寄った。龍騎の無事を確認したライアはシザースに顔を向けた。

「シザース。これはどういう事だ。なぜ龍騎を襲った」

「何度も言うようですが、私の仕事を邪魔した罰ですよ」

「だから仕事って一体……！」

「どうでもいいだろ。向こうがその気なら、戦うまでだ」

「ちよつと待ってっ！ そんな簡単に決めるなよ……！」

龍騎がナイトを止めようとしている様子を見て、シザースは呟いた。

「とはいえあなた達3人を相手は少々厳しいですね。ここは退かせてもらいますよ」

「！ 待てー！」

ナイトが龍騎を振り払い、死角に逃げ込んだシザースを追いかけたが、すでにシザースやボルキャンサーの姿はなかった。

「逃げられたようだな」

「……フンツ」

ライアもそれを確認し、ナイトは鼻を鳴らしてその場を後にしようとした。その背中を見て、ライアは龍騎に言った。

「とにかく無事でなによりだ。先ずは外に出るぞ」

「あ、ああ」

そして龍騎とライアはナイトに続いてミラーワールドを後にした。

ミラーワールドを出た3人はその場で変身を解いた。

「ああ、さつきはありがとな。けど、珍しいよな。2人が一緒に来るなんて。特に蓮二とか、華乃ちゃんといつも一緒にいるイメージあったから」

「普段から同じ時間で働いていると思うな。それに手塚とは偶々出くわしたただけだ。モンスターの反応を追ってな」

「ああ、そうだ。近くで占いの仕事をしていたからな。それで反応をたどるうちにバツタリと会ったんだ。……そういう君は、なぜここに？」

「あ、ああ。実は今、ある事件の調査を代理で頼まれててさ」

「事件……？」

「うん。ここからそんなに離れてない所だけどさ……」

そこまで呟いて、正史は不意にある提案をした。

「あ、そうだ。もしアレだったら、一緒に来てくれないかな？ あんまり土地勘ないし、ちよつと心細いつていうか……」

「俺は構わない。仕事も終わったしな。秋山もどうだ？」

「何で俺がこいつの仕事に付き合わなきゃならない。帰るぞ」

そう呟いて立ち去ろうとする蓮二だが、正史に腕を掴まれ、手塚に肩を叩かれた。

「つれない事言うなって。俺達仲間だろ？」

「家に帰っても暇だろ？ 偶には寄り道も気分転換に必要だ」

「おい、離せ！」

一喝する蓮二だが、2人のしつこさに呆れ、とうとう抵抗を止めて、

半ば強引に連れられる形で、現場となっているアンティークショップに足を運んだ。

原付バイクを押しながら、正史は2人に事の次第を説明した。

「なるほど。その加賀 友之という人物が経営している店の常連客が、立て続けに行方不明になっている、と」

「うん。ひよつとしたら、モンスターが絡んでるかもしれないけど」

「……で、それを調査していたお前の上司が襲われたというわけか」
蓮二が気だるそうに呟いた。

しばらく歩いているうちに、目的地のアンティークショップにたどり着いた。

「ここだな」

「ああ。この店で、令子さんは襲われたんだ」

正史がそう呟いたその時、3人の持つマジカルフォンから音が鳴り響いた。が、一瞬でそれは途切れた。しかし、3人はそれを聞き逃す事はなかった。

「今のつて……!」

「モンスターだな。それも、あの店から反応が出た。それにこの反

応、さつきシザースと会った時と同じものだ」

手塚の言葉を聞いた蓮二は一人、納得したような表情を浮かべた。「なるほどな。あの店のオーナーが、シザースで、あの店を拠点にしているというわけか」

「えっ？　でもこの店のオーナーの加賀さんも、行方不明だつて言っただろ？　モンスターに襲われたんじゃないのか？」

「だが間違いなく気配はあるんだ。隠れ潜んでいる可能性だつてある。このまま正体を暴けば、こつちの方が有利になるな」

「おいおい、それつてシザースと戦う気満々じゃねえか。話し合うつて手段はないのかよ」

「さっきの件で、それが通じる相手だと思っつか？」

「そ、それは……」

「いずれにしても、調べてみる必要があるな」

手塚の提案で、正史はアンティークショップに潜入した。手塚と蓮二もその後を追った。

扉を開けると、付けられていたベルが鳴り響いた。店の中は静まり返っており、3人以外の気配は現時点では見受けられない。ガラス細工の所々に埃が溜まっており、何日も掃除されていない事が伺える。奥へ進むと、様々な商品が床に散乱していた。ここで令子は襲われ、抵抗していたのだろう。しかし、特に変わった様子はない。

「加賀さくん、いますか？　いたら出てきてください」

「それでハイそれと出てくるようなら苦労しないだろ。少しは頭を使えバカ」

「うるさいなあ。俺はお前と違って無闇に戦う気は無いんだよ」

正史と蓮二が小喧嘩をしている中、手塚は黙々と辺りを見渡していた。やがて手塚の目についたのは、壁に立てかけてある大きなアンティーク製の鏡だった。真下に置物が落ちており、鏡自体は大きくひび割れている所から、令子が抵抗している時に置物が投げられて割れたのだろう。だが手塚は、その鏡に自分でも分からない違和感を感じて、ジッと鏡を見つめ続けた。

「……おい、手塚？　その鏡に何かあるのか？」

「……いや、モンスターの気配がないか確かめてたが、特におかしなところはなさそう……」

正史が尋ね、手塚が首を横に振ってそう呟いていたその時、ベルの音が大きく鳴ると同時に扉が勢いよく開け放たれて、人が入り込んできた。3人はハツとして身構えていると、やって来た人物は怒鳴りながら詰め寄った。

「ここで何してるんですか!」

「……あ! 須藤さん」

それは少し前に病院で出会った刑事の須藤だった。が、先ほどとは態度を変えて怒りながら正史に言った。

「またあなたですか! 後は警察に任せるように言ったじゃないですか!」

「す、すみません! すぐ出ます! ほら、行くぞ!」

すっかり萎縮した正史は慌てて2人に呼びかけてアンティークショップを出た。手塚も一瞬だけ鏡に顔を向けてから正史についていった。蓮二は須藤に体を向け、しばらく睨み合った後、店を後にした。

「いや、参ったなあ。まさか須藤さんが来るなんて」

店を出た3人は、角を曲がって少し歩いたところで立ち止まった。

「……彼は？」

「須藤 充さん。刑事さんで、三条さんの事件の時に令子さんと会った事あるんだ」

「三条……。確か、ねむりんの変身者がそうだったな」

「……ああ」

正史は当時の事を思い出した。思えば彼女の死を知った事で、この争いの意味合いは大きく変わった。彼女の死を無駄にしない為にも、生き残らなければならない。正史が改めてそう決意する中、蓮二はポツリと呟いた。

「しかし、随分と切羽詰まっていたな。よほど部外者を嫌う性格のようだが」

「そうかな……。？ でも、こないだ会った時と違って、本気で怒ってたなあ……」

正史が、須藤の豹変した態度に首を傾げていると、手塚は懐からコインを取り出し、わずかに見えるアンティークショップの方を向きながら指で弾いて、手のひらで止めた。その動作を3回繰り返した後、アンティークショップをジッと見つめ続けた。いつもの占いをしていくようだが、今までとは雰囲気違っていった。

「手塚……？」

「……何を占った」

「……城戸。この事件、ただの失踪事件とは考えない方がいい」

「えっ？」

「だろうな。少なくとも加賀がシザースだと考えると、俺達も無関係とは言えない」

「まあ、加賀 友之がシザースかどうかはさておき、このままでは終わらないはずだ。俺の占いは当たるからな」

コインをポケットにしまった手塚は、正史の方に向き直った。

「城戸。この事件、俺の方でも調べてみようと思う。手伝わせてくれ」「えっ？ 良いけど……」

「なら俺も今回だけは関わらせてもらおう。言っておくが、俺が確認し

たいのはこの店のオーナーがシザースかどうかだ。事件の方はそつちでやっておけ。俺は加賀 友之の素性を調べる」

「お、おお。ありがとう……」

2人が積極的に協力してくれる事に驚きつつも、正史は感謝した。

こうして始まった、店長不在のアンティークショップにて起きた行方不明事件の調査。しかしこの時、3人は大きな勘違いをしている事に気づくことなく調査を進めていたのであった……。

38. 深まる謎

それは、早朝の事だった。

正史がいつものようにOREジャーナルへ出勤する為に、アパートを出て原付バイクに乗り込もうとした矢先、マジカルフォンが鳴り響いた。モンスターの出現ではなく、魔法少女か仮面ライダーからの電話のようだ。

気になった正史が手に取ってみて、思わず目を見開いた。電話の相手はシザース。昨日、理由も分からず交戦した相手からの電話と分かり、不安な気持ちに駆り出されたが、とりあえず出てみる事にした。

「もしもし？ シザース？」

『昨日はどうも』

「どうもって……。あんた何で……」

『お伺いしたい事がありますね。あなたは私のみならず、他のライダーや魔法少女と戦うのを拒んでいるようですね』

「そ、そうですけど……」

正史がしどろもどろに答えると、シザースはこう尋ねた。

『それは本当なのですか？』

「えっ？」

『風の噂で耳にしたのですが、以前ルーラチームと事を交えたそうじゃないですか。それを受けてもなお戦うのは嫌だと？』

「そ、そうですけど。だって、同じ力を持った者同士なんですよ？ 戦うだけが全てじゃないでしょ。だから話し合いますよ。無闇に戦う必要なんてないんですよ」

正史が力説して語る一方で、シザースは落ち着いた様子で話を進めた。

『分かりました。ではこうしましょう。あなたのパートナーや、現時点でチームを組んでいる者達の事をできる限り教えてください。そうすれば、私はあなた方に協力してさしあげましょう』

「本当ですか？！ 分かりました！」

シザースからの提案に驚きつつも、仲間が増えるかもしれないと踏

んだ正史は、早速情報を教えた。

トップスピードの事を始め、九尾、スノーホワイト、ナイト、リップル、ライア、ラ・ピュセルに関する事を。さすがに全て話すのは危険だと思いとどまり、素性を知らないと誤魔化して、正体までは明かす事はなかった。

聞き終えたシザースはしばらく沈黙した後、正史に言った。

『分かりました。しかし、口頭だけの情報では信用出来ません。現時点でライダーや魔法少女とは敵対関係にあるものだと、用心しているのが私ですから』

「そ、そんな事ありませんって……!」

『ですので、今日の18:30頃、〇〇〇の工場に来てください。そこで待ってますので、面と向き合って話し合いましょう』

「18:30、ですね。分かりました!」

『それからもう1つ、なるべく1人で来るように。仲間には伝えずに来てくれれば、ちゃんと応じますよ』

そう言つて電話は切れた。一息ついた正史はヘルメットを被り、エンジン音を吹かせた。

「(やっぱり話せば分かるんだよ。同じライダーなんだし。これで蓮二にもギャフンと言わせてやれるぞ)」

「♪」

日も暮れかけた頃、トップスピードはラピッドスワローに跨りながら、いつものように上空を旋回していた。真下に見える、煌めく街中を微笑まじげに見つめながら、集合場所となっているビルに着地したのだが、どういう訳か、トップスピード以外誰もいない。

事前に九尾、スノーホワイト、ラ・ピュセルは学校の行事が重なって遅れると告げられており、ナイト、ライア、リップルも急用で遅れてくるとは分かっていたが、龍騎がいない事に疑問を持ったトップスピードは、早速マジカルフォンを通じて龍騎に連絡を取った。

程なくして、龍騎の声が聞こえてきた。

『もしもし?』

「よう、龍騎。お前どこにいた? 俺はもう着いたぞ」

『あ、ゴメン。ちよつとこれから行く所があつてさ。待ち合わせしてるんだ』

「誰と?」

『シザースだよ。これから街はずれにある工場で話し合うんだ。もしかししたら協力してくれるかもしれないんだ』

「へえ。街はずれの工場となると、あそこだな……」

意外な人物から呼び出しを受けた事を知ったトップスピードはしばし考えた。このままここで待っていても退屈で仕方ない。そこでトップスピードはこう言った。

「んじゃあさ。俺もそっちに行くわ。俺、暇だしさ。話し合うんならもう1人いても問題ないだろ?」

『そっか……。分かった。じゃあ外で待ってるから』

「おう! 今から飛ばすぜ!」

トップスピードはマジカルフォンを耳に当てながら、ラピッドスワローに乗って、颯爽と龍騎のいる場所へ向かった。

道中でも会話は途切れる事なく、2人は話し合っていた。内容は言わずもがな、昨日の一件である。

「へえ、んな事があったのか」

『俺ってメンバーの中じゃわりと最近入ったばかりだからよく分かんないんだけどさ。シザースってどんな人なの？』

「シザースねえ……。まあ、チャットには比較的参加率が高いぐらいで、そんなに会う事ってないんだよね。あ、でもパートナーのねむりんとよく話したのは過去ログで見た事あるかも」

トップスピードがそう呟いていたその時、一瞬ではあるが、マジカルフォンから耳鳴りのような音が鳴り響き、どこからか鈍い音がした。

「んっ？」

早い速度でラピッドスワローを運転していた為、どこから音がしたのか分からないトップスピードだったが、何らかの気配がしたと思いい、念のため振り返ってみたが、そこには何もない。地上の方を見下ろしてみても、暗くてよく見えなかった。

『どうかした？』

「いや、何でも……。とりあえず、もう直ぐそっちに着くと思うから、また後でな！」

そう言っただけで電話を切ったトップスピードは今一度振り返った。

「……気のせい、か」

そう呟き、トップスピードは運転に集中する為に前を向いて速度を上げた。目指すは、龍騎とシザースの待つ工場である。

だが、トップスピードの感じた気配は、決して気のせいではなかった。

「ハアツ、ハアツ……い！」

『グルルルル……い！』

地上で息を荒げる九尾、スノーホワイト、ラ・ピュセルの目の前には、ボルキヤンサーがハサミを光らせながら対峙していた。

なぜこのような状況になっているのだろうか。それは、先ほどボルキヤンサーがしかけた行為を偶然3人が目撃した事であった。いつものように集合場所へ遅れて向かっていた3人だったが、不意にスノーホワイトがビル窓に映るボルキヤンサーを発見したのだ。よく見ると、ボルキヤンサーの視線の先には、電話に集中しているトップスピードの姿が。明らかにボルキヤンサーはトップスピードを狙っている。そう思っていた矢先にボルキヤンサーが窓から飛び出てトップスピードを背後から狙ったのだが、とっさの判断で九尾とラ・ピュセルが同時に飛び蹴りを入れて、落下した場所へと急行し、現在に至る。

ボルキヤンサーは邪魔された腹いせとばかりに3人に襲いかかった。スノーホワイトはマジカルフォンをタップしてパートナーの武器であるフォクセイバーを構え、同じくフォクセイバーを構えた九尾、大剣を肥大させたラ・ピュセルと共にボルキヤンサーに斬りかかった。3方向からの攻撃には対処できず、ボルキヤンサーはダメー

ジを負いつつも、隙を見て近くの窓ガラスへ飛び込んだ。

3人も武器を下ろして窓ガラスに駆け寄ったが、すでに気配はなかった。

「逃げたか」

「……でも、どうしてあのモンスター、トップスピードを狙ってたのかな……?」

もったもな疑問を口にするスノーホワイト。一般人を襲うならまだしも、相手はモンスターにとって天敵とも言える魔法少女。わざわざリスクを冒してまで魔法少女を倒そうとするとは思えなかった。その時、九尾がある仮説を立てた。

「ひよっとしたらあいつは、誰かの契約モンスターの可能性が高いな。だからマジカルフォンの反応も、いつもと変わってたのかもしれないぞ」

「それって、誰かがトップスピードを狙ってたって事!?!?」

「かもしれないね」

慌ててスノーホワイトがマジカルフォンからトップスピードに連絡を入れようとしたが、どういう訳か、電話に出る事はなかった。まだ誰かと電話しているのだろうか。

「しかしそうなると、誰の契約モンスターなのか……」

「さっきのモンスター、カニにも見えたよね……」

スノーホワイトがそう呟いたその時、3人の脳裏に、1人のライダーの存在が浮かび上がった。

「「シザース!?!?」」

一方、襲われかけたともつゆ知らず快調に飛ばしていたトップス
ピードは、街はずれの工場を視界に捉えた。その工場の手前付近で、
龍騎が手を振っていた。トップスピードは着地し、2人は並んで工場
に入り込んだ。

中は多少広いものの、様々な機材や道具が置かれているため、満足
に動く事は難しそうだ。

「ここでシザースが待ってるって事か？」

「うん。そのはずだけど……。おい！ 出てきてくださーい！」

工場の中央辺りまで差し掛かった時、どこからか足音が聞こえ、2
人の前に姿を現した。黄色いカニがモチーフのシザースだった。が、
シザースはトップスピードの姿を確認した途端、驚きを隠せなかつ
た。

「……トップスピード!? なぜあなたが……！」

「何でって……。龍騎から聞いたぜ。仲間になりたいそうじゃんか
よ」

「ゴメン。どうしてもって言うから、つい……。でも、良いですよね？」

「これから同じ仲間になるわけだし……」

「……そうですか。なら……」

シザースはそう言うと、1枚のカードを取り出した。

「……えっ？」

『STRIKE VENT』

そしてそれを左腕につけられたシザースバイザーにベントインすると、右腕にボルキヤンサーのハサミを模した『シザースピンチ』が装着され、龍騎とトップスピードに飛びかかった。

「ハアッ！」

「うわっぶねえ!!?」

「わあっ!!?」

慌てて2人は別々に避けてかわし、体勢を整えてからシザースに言った。

「ちよっ、いきなりどうなってんだよ!!?」

「や、止めるよ！ 話が違うだろ！」

「つくづく平和なお方達ですね。1人で来いという約束を守らないとは……。まあ、あなた1人で本当に来たところで、結果は変わりませんでしたが」

「えっ!!?」

シザースの言葉に呆然とする龍騎。

「もうお判りでしょう？ 私はね。あなた方と最初から組む気なんてなかったという事ですよ！」

「そんな……!」

「ここであなた方を倒させてもらいます。ハアッ！」

そう宣言してシザースピンチを振り回すシザースに、龍騎は悪戦苦闘していた。トップスピードもラピッドスワローに乗って龍騎の援護をしようと考えたが、周りは閉鎖空間でもあり、物が散乱している以上、動きが制限されてしまうため、飛び回る事が出来ない。止むを得ずトップスピードはマジカルフォンをタップしてドラグシールドを展開した。

『GUARD VENT』

龍騎もシザースを遠ざけた後、カードをベントインしてドラグシールドを手に持った。シザースの攻撃をしのぎながら、龍騎は叫んだ。

「俺はあんたと戦う気はないんだって!」

「なら、早めに倒されてもらいたいものですね」

「んな事させつかよ！」

「邪魔ですね」

トップスピードが前に出てシザースを抑え付けようとするが、逆にシザースの一撃が、体重の軽いトップスピードを難なく吹き飛ばした。

「うわあっ!?」

「トップスピード!」

慌てて龍騎はトップスピードを受け止め、地面に降ろした。そこへシザースが飛びかかり、龍騎はトップスピードを突き飛ばすと、その攻撃を正面から受けてしまった。

「グハッ……!」

「龍騎!」

「だ、大丈夫だから……。下がって、トップスピード……!」

龍騎は落下地点にあった木材に埋もれながら、弱々しく手を振ってトップスピードに無事を伝えて立ち上がった。

シザースは、話を通じる相手ではない。

奇しくも昨日蓮二が言っていた通りの展開になってしまったのだ。

「……何で、こうなるんだよ……!」

龍騎の悔しげな呟きをよそに、シザースの攻撃が再び猛威を振るった。

一方、駅前アンティークショップでも大きな動きが見られた。

「ここが……」

「ああ。城戸が調べてるアンティークショップだ。おそらくここをシザースが隠れ蓑にしているだろうな。自ら行方不明にして、素性を隠しているはずだ」

「念のためこちらの方で、この店のオーナーでもある『加賀 友之』について調べてみたが、決して善人とは言い難いな。裏で違法売買に手を染めて、多額の報酬を得ているといった、良くない噂が絶えないぞうだ」

人通りも少なくなったアンティークショップの店の前には、昨日訪れたメンバーでもある蓮二と手塚が立っていた。加えて2人の間には、華乃がいた。バイト終わりの蓮二を手塚が迎えに行った為、ものついでという事で華乃も同行する事になったのだ。

「しかし悪いな。君にまで付き合わせる事になって」

「……敵の正体を知っていれば、それだけこっちが有利になる。弱みに付け込める情報は得ておいて損はないから」

蓮二と同じような事を言うなあ、と心の中で手塚は呟いた。ぶつきらぼうに呟く華乃の場合、仲間とはいえ、蓮二以外の男と一緒にいる事が嫌なように見えた。が、逆に言えば蓮二だけは例外らしい。理由は定かではないが、性格の相性なのだろう。そんな事を思いつつ、3人はアンティークショップへの潜入を始めた。

今度は須藤に邪魔されないうちに手がかりを集めようと、3人は分かれて行動に移った。

「裏口もあるのか……」

店の奥へと歩を進める手塚。蓮二はさらにその奥にある居間の方を調べている。その時だった。

「……ねえ、これ」

華乃が何かを見つけたようだ。2人が華乃のもとへやってくると、

2人は目を細めた。

華乃は手塚が手渡した懐中電灯である場所を照らしていた。そこは令子が無我夢中で抵抗していた際に割れたであろう鏡だったが、注目すべき点は他にあった。その鏡の後ろにある壁が照らされているわけだが、どういうわけか、壁の色が異なっている。周りを見渡しても、一ヶ所だけが違っていている事が分かる。さらに注意してみると、配色の違う壁はセメントで出来ていた。そこにはわずかながらヒビも入っている。他の壁がコンクリートで出来ている以上、単なる塗装による手違いだけでは説明がつかない。

つまり、そのセメントで出来た壁には『何か』が埋められているという事になる。

気になった蓮二と手塚は協力して鏡をどかして、近くにあった置物を使ってセメントの壁を剥がし始めた。思っていた以上に脆く、華乃がそのまま懐中電灯で照らす中、壁の中から3人の足元へ何か転がり落ちた。華乃が照らしてみると、それは黒縁のメガネだった。

「！ まさか……！」

不意に鳥肌の立った手塚はポケットから写真を取り出し、メガネを持って写真と照らし合わせた。とあるルートから入手出来た写真には加賀が写っており、彼がかけているものと、今現在手塚が手に持っているものはほぼ一致していた。

手塚が固まる中、蓮二は引き続いて壁を剥がした。しばらく掘り進めた後、蓮二が動かしていた手が止まった。手塚と華乃も思わず目を見開いている。

「シザースは、こいつ^{加賀}じゃ無かったのか……！」

そう呟いた蓮二の視線の先には、固まったセメントから覗かせている、男性のものらしき腕があった……。

39. シザースの正体

龍騎、トップスピードペアとシザースとの激しい戦いは依然として予断を許さない状況下にあった。

「ハアッ！」

「うっ………！」

「うおつと!?？」

シザースはためらう事なく殴りかかり、龍騎とトップスピードは後手に回るしか出来ていない。だが、このままやられっぱなしではいけないというプライドがぶり返してきたのか、トップスピードは叫んだ。

「くっそお！ こうなつたらやるしかねえぞ！ 龍騎！」

「！ で、でも………！」

「でもじゃねえよ！ 倒せだなんて言わねえけど、追い払うぐらいはしなきゃ！」

「！」

トップスピードの言葉に背中を押されるように、龍騎がカードデッキから1枚のカードを取り出し、ドラグバイザーにベントインした。

『STRIKE VENT』

と同時にトップスピードもマジカルフォンをタップし、両者の右腕にドラグクロウが装備された。

これに対し、シザースも対抗策を打って出た。

『GUARD VENT』

「はあああああつ！ ダアッ！」

龍騎とトップスピードが息を合わせて右腕を引いてから勢いよく突き出すと、ドラグクロウファイヤーがシザースめがけて炸裂した。その時にはシザースの左腕に、シザースバイザーに覆い被さるようにかニの甲羅型の盾『シエルデイフェンス』が装着され、ドラグクロウファイヤーを防いだ。が、勢いだけは殺しきれず、後方の壁に激突した。2人分の火力は伊達ではなかったようだが、シザースの防御力も折り紙付きであり、未だに五体満足だった。

「やってくれますね……！　ですが、調子に乗るのもそこまでです」
シザースが再び2人に向かって飛びかかろうとしたその時、シザースめがけて2人の飛び蹴りが炸裂し、シザースは後退した。

龍騎とトップスピードが目を見開いた。飛び蹴りを決めた2人は、九尾とラ・ピュセルだったのだ。遅れて2人の後方からはスノーホワイトが合流してきた。

「龍騎、トップスピード！　怪我はない!?？」

「スノーホワイト！　うん、こっちは大丈夫」

「グッドタイミングかもな！」

「よもやこのタイミングで……！」

シザースが、援軍の登場に舌打ちしていると、九尾が先行して拳を振るった。シザースもそれに抵抗した。素早い動きと研ぎ澄まされた洞察力を駆使して、シザースの懐にパンチを決める。シザースは吹き飛ばされつつも、空中でバランスをとり、機材を踏み台にして、現在無防備になっているスノーホワイトにシザースバイザーを突き出した。

「！」

「させない！」

だがそれよりも早くラ・ピュセルが前に出て、大剣でシザースバイザーを受け止めた。後ずさりながらも、懸命にスノーホワイトを守ろうとしている。

「ハアッ！」

拮抗している所に九尾が体当たりをし、シザースを引き離すと、ラ・ピュセルも九尾に続いてシザースに立ち向かった。九尾がパンチやキックを、ラ・ピュセルが大剣を駆使して戦う様子を、他の3人は黙って見ている他なかった。

そうこうしているうちに、シザースも挟み込まれる形での対処が厳しくなったのか、次第にダメージが蓄積され始めた。

「……これ以上は難しそうですね。ならば仕方ありません」

5人を相手に、特に戦闘能力の高い九尾と戦うのは得策ではないと判断したシザースは距離を置くと、1枚のカードをベントインした。

『BUBBLE VENT』

シザースの右手に、大きな銃口が2つ付いているハンドガン型の武器『バブルショット』が握られ、シザースの横にボルキャンサーが並び立った。

「ふんっ！」

シザースがトリガーを引くと、泡のような弾丸が降り注ぎ、ボルキャンサーの口からも同じく泡が吹き出た。『バブルシユート』が龍騎達のいた地点に当たると誘爆して、周りは煙に包まれた。

「うわっ!?」

「このっ……!」

皆が煙を振り払った時には、すでにシザースやボルキャンサーの姿はなかった。どさくさに紛れて逃亡したらしい。

ようやく一同は肩の力を抜いて、楽になった。

「ふいっ。助かったぜ!」

「間に合ってよかったよ。向こうはトップスピードを狙ってたみたいだし」

「へっ? 俺をか!?」

「ここに向かう途中であのモンスターが襲いかかろうとしてたのに気づいていなかったんですか?」

「うん……。じゃああれは気のせいじゃなかったってわけか」

トップスピードが1人納得する中、いつまたシザースがちよっかいをかけてくるか分からないこの日は、これ以上外を出歩かない方が良いと思いい、その場で解散する事にした。明日はいよいよ4人目の脱落者の発表に入るわけだが、幸い、各々のキャンデーの所持数はこれまでの活動を経て決して少なくない為、以前のような事に注意しておけば、脱落する事も無いだろう。

帰り際、龍騎はポツリと呟いた。

「何でキャンデーの奪い合いなんか考えるんだ? ねむりなんだっからそんな事絶対考えないはずだけど……」

「……」

その言葉に、スノーホワイトも俯きながら考えた。

こんな醜い争いの果てに、何があるのだろうか、と1人心の中で呟きながら。

そして迎えた翌日。この日は朝からアンティークショップの調査に向かおうとしていた正史は、そこでマジカルフォンを通じて手塚からの連絡を受けた。話しておきたい事があるらしく、正史は言われた通りに待ち合わせ場所に向かった。

やってきたのは、アンティークショップの近くに軒並んでいるビルの中の1つの屋上だった。正史が到着した時には、手塚を含め、私服姿の大地、小雪、そして颯太が待っていた。蓮二、華乃は別行動らしく、トップスピードとは予定が合わなかったようだ。

「お待ちせ。で、どうしたの？」

「その前に、あれを見て欲しい」

手塚が屋上の手すりに手をかけ、地上に目をやるように言った。正史が見下ろすと、異様な光景が目に入った。

地上の方にはアンティークショップが見えてくるのだが、そこは昨

日は打って変わってパトカーが止まっております、数人が店の方に目をやったり、店に注目しながら立ち話をしていた。

「あれって一体……」

「昨日、俺と秋山、それから華乃ちゃんはその店に入って調べていたんだ。そして、店長の加賀 友之の遺体が壁に埋められているのを発見した」

「!??!? 加賀さんが……!??!?」

「警察の話では、死後数ヶ月は経っているらしい」

手塚の口から出た情報に、正史は驚きを隠せない。シザースの正体だとばかり思っていた男性は、すでに故人になっていたのだ。

大地達も、昨晚シザースとの交戦後にある程度の事情を聞いており、今回の結果に戸惑っているようだ。

「何にせよ、加賀 友之はシザースではない。別の人物だ。そしてこれは俺の推測だが、加賀と親しい人物が、本物のシザースだと思っている」

「じゃあその人が、昨日トップスピードを襲おうとしたって事ですね」
小雪がそう呟くと、颯太が唸った。

「……けど、何で向こうはトップスピードがあそこにいるって分かったんだ？ どの辺りを巡回しているかなんて、僕達以外知らないはずだし」

「……!」

颯太がそう言ったその時、正史はハツとした。ごく最近になってシザースが何らかの経緯でトップスピードの事を知れたとしたら、そんな機会は1つしかない。

「城戸さん？」

「……ゴメン。多分俺のせいだ。昨日、シザースから話し合う機会を持ちかけられた時に、みんなの事、喋っちゃったんだ」

「喋った……? 何を？」

「色々……。みんなの正体までは明かしてないけど、ある程度は教えちゃって……」

正史が悔いていると、大地は納得したように頷く。

「そっか。だからトップスピードの行動範囲が分かって、襲撃できたのか」

「性格上、うっかり情報を明け渡してしまうだろうとは思っていたし、仕方ないかもしれないが、少々迂闊だったかもな。これからは相手をよく見て選ぶ事だ」

「……ゴメン」

手塚がやんわりと正史を咎めた。これが蓮二や華乃だったら確実にキレていただろう。

しかし、いつまでも俯いてばかりはいられない。結局捜査は振り出しに戻ってしまったのだ。……と思っていた矢先、手塚がある事を尋ねた。

「城戸。もう一度尋ねるが、君の上司が巻き込まれた時の事を話してほしい」

「えっ？ 良いけど……。確か、令子さんが店に入ってからしばらくして、背後から何者かに襲われて……」

「誰がその人を見つけた？」

「偶々近所を散歩してた人が、倒れている令子さんを見つけて、慌てて近くの人に助けを求めたらしいんだ」

「じゃあその人が、君の上司を病院に運んだのか？」

「ううん。実はその時、偶然近くを巡回していた須藤さんが騒ぎを聞きつけてやってきたらしいんだ。それで令子さんを発見して、病院に連絡したって事になってる」

「その刑事はどこから来たか分かるか？」

「あっちから」

正史がメモ帳を見ながら、須藤がやって来たと思われる方向を指差しながら説明すると、手塚は深く考え込んだ。手塚の目線の先には、昨晩手塚達が入った扉とは別に、もう一つの扉が。どうやら店の裏口のようなのだ。

「けど、何でそんな事聞くんですか？」

「いや、ちよつとな……」

小雪の質問に答えた手塚は、マッチに火をつけて、アンテイク

ショップに向けて炎をジツと見つめた。やがて火を消すと、正史に向き直った。

「城戸。今から君の上司がいる病院に向かって、詳しい話を聞いてくるんだ。きつと俺達が知らない情報が転がり込んでいるはずだ。何か分かったら、俺達に連絡してくれ」

「令子さんの所に？ 何でだよ？」

「俺の占い通りなら、その情報によって、この事件の犯人が分かるはずだ」

「本当、ですか……!?？」

颯太が驚きの声を上げる中、手塚は今一度アンテイクショップに視線を向けた。

「そしてそれが、シザースの正体を決定づける、重要な証拠になるはずだ」

令子が入院している病院の近くの駐車場に、白い車が停まったのは、その日の夕暮れ時だった。中から出てきたのは、アンティークショップの事件を捜査していた須藤 充。車の鍵をかけた後、病院に歩を進めた。

周りを見渡し、誰もいない事を確かめた須藤が病院に目を向けて、歩き出そうとしたその時、彼の前に誰かが立ちはだかった。

正史だった。

「やっぱり来たんだな、須藤さん」

「またあなたですか。おまけに今日は同伴者も」

須藤がそう言うように、正史の後方には大地、小雪、颯太が立っていた。まるで須藤の行く手を阻むように。一方で須藤は平然と口を開いた。

「何かお話しがあるみたいですが、今はちよつと立て込んでいるので、後にしてもらえませんか」

「……どこへ行く気だよ」

「この病院に入院している患者さんに、事件の経過を報告しにね」

「れ、令子さんの所には行かせない！」

「……ほお、あなた方も彼女のお知り合いでしたか。ですが、仕事の邪魔をしないでいただきたい」

3人の目的を察した須藤は軽くあしらい、歩き出そうとしたが、正史がそれを遮る。須藤は口調を荒げながら呟いた。

「何のつもりですか。業務妨害で逮捕しますよ」

「……何人もの人の命を奪ったあんたがそれを言うかよ」

「何？」

大地の低い呟きに、須藤は顔をしかめた。

「刑事であるこの私が、人を殺めた？ 悪い冗談はよしてください」

「とぼけたって無駄だよ、須藤さん」

正史は普段見せないぐらいに険しい表情で須藤を睨みつけた。そして、こう語り始めた。

「あんたがここに来る前に、この病院に来て令子さんに話を聞きに来たんだ。あの事件の詳細を詳しく聞きたために。そうしたら、あんたと

同じ部署の刑事さんが、令子さんから事情聴取してたよ。加賀さんの死体が見つかった事について、現場に立ち寄った事のある令子さんから話を聞くために」

「……ああ。例のアンテイクショップで見つかったという、壁に埋められたオーナーの遺体の事ですね。私も休憩時にそれを耳にしました。担当していたのだから、当然聞いてますよ」

「ならもう一つ聞けど、どうして令子さんが襲われた時の事、他の刑事さんに話さなかったんだよ」

「……」

ここにきて。

初めて須藤の表情に僅かながら変化が表れた。

「令子さんの事で、被害届が出てないって刑事さん達が言ってたのを、俺はちゃんと聞いたよ。何で一人で捜査しようとしてたんだ」

「……」

「それに令子さんから、その時の事を聞いたけど。あんた、令子さんが襲われてからすぐに現場に現れたんだよな。それってタイミングが良すぎじゃないのか……？」

「……何が言いたいんですか」

苛立つように呟く須藤に対し、正史は告げた。

「……もし、あんたが最初からあの店にいて、事件の真相を暴こうとしてた令子さんの邪魔をして襲って、あたかも騒ぎを聞きつけてやって来たかのように装って、裏口から走って出てやって来たのが真実だったら、全部都合が合うんだよ、須藤さん」

「……」

「おい、何とか言ったらどうなんだ！」

颯太が叫ぶが、須藤は全く動じない。そればかりか、正史に向かって歩み寄ってくる。やがてその右手がズボンの後ろポケットに入り込み、抜き取ろうとした矢先、須藤の顔が苦痛に歪み、右手から何かが地面に転がり落ちた。

金色のコインと、小型のサバイバルナイフ。後者に目をやった小雪は思わず息を呑んだ。大地と颯太が小雪の前に立ち、正史は身構え

た。そして、右手を抑えた須藤の後方から声が。

「今のでようやく確定したな」

現れたのは、コインを手にした手塚だった。事前に隠れ潜んでおり、須藤が何か仕掛けようとしたのを見て、コインを弾き飛ばして妨害したようだ。

「口封じの為に、城戸の上司に加え、彼らを消そうとしたようだが、俺の占いの方が一歩上手だったな」

「占い……ですか。何ともバカバカしいもので私を」

「俺の占いは当たる。絶対だ」

手塚はコインをポケットにしまい、落ちていたサバイバルナイフを遠くに蹴り飛ばすと、須藤を睨みつけながら口を開いた。

「加賀 友之を初め、あの店に関与して悪行を働いていた人達を行方不明と称して殺害するのが、お前の『人助け』であり、龍騎から得た情報でパートナーを襲撃しようとした。全ては生き残る為に」

そうなんだろう？ と、手塚は自身が独自に調べていた内容が書かれたメモ帳を目の前の男に見せ、そして核心を突く。

「あの店の常連客でもあった、須藤 充。いや、仮面ライダー『シザース』」

「……」

沈黙が辺りを支配し、両者は睨み合う。やがて視線を先に逸らしたのは須藤であり、ため息をついた後、ポケットからあるものを取り出して、皆に見せつけた。

カニの紋章が刻まれたカードデッキ。それは違うことなく、一昨日から龍騎を初めとした、彼が行動を共にしているチームメイトが関わってきたライダーの変身者である事を証明するものだった。

若干目を見開きながらも、遂に確信を得た一同の顔を見渡した後、仮面ライダーシザースこと須藤 充は再び周りを見回してから、こう言った。

「ここでは人目に付きません。場所を変えましょう」

40. 偽りの正義

「……何で、あんな事したんだよ」

令子が入院している病院から少し離れた、海沿いの噴水広場に、正史の低い声が響き渡る。その後方では、不安げな表情の小雪と、険しい顔つきの大地、颯太、手塚が立っており、彼らの目の前には、海に目を向けている須藤が。悪事がバレたにも関わらず、その表情には余裕が見受けられる。

「加賀の事ですか？ あれはちよつとしたトラブルですよ」

「トラブル？」

「まだ仮面ライダーに選ばれる前の事です。仕事のやり取りの最中、向こうが報酬に対して、破格の値上げをしつこく要求してきたものでして。それでついカツとなって手を下した。それだけの事です」

須藤はそう淡々と語るが、聞いてる方は決して気持ちの良い話ではない。現に小雪は目の前にいる男性に恐ろしさを感じて、思わず隣にいた大地の袖を握った。

「仕事……という事は、君の職業と関係ありそうだな」

「ええ。これでも私は正義の味方を目指していた1人ですから」

「正義の、味方……!?」

「どんな理由があったか知らないけど、人を殺す事が正義だつていうのかよー！」

颯太の怒りの声を聞いてもなお、須藤は清々しい表情のままである。

「無論、私も最初はそんな定義を持ち合わせてはいませんでした。しかし、警察というこの世界に入って、そしてこの力を手に入れた時、私は自分が為すべき事を見つけたのです」

そう言つて、須藤は自らの経緯を明かした。

須藤 充は、『正義の味方』を夢見ていた。

きつかけは、幼少期に事件に巻き込まれかけた際に助けてくれた刑事の堂々たる姿を目撃した事にあった。以来、彼は警察官になる事を目指し、そして刑事となり、晴れて市民の平和を守るヒーローとなった。若さゆえに様々な功績を残し、道案内をしたりして人々から感謝の眼差しを向けられた時は、とても上機嫌だった。

しかし、世の中は楽しい事だけが全てではない。自分がどれだけ頑張っても、犯罪を犯す者は減らない。加えて最前線に出れば出るほど、社会に蔓延る『闇』を否が応でも見てしまう。その過程で目撃してしまった、警察内での賄賂の応酬は数知れず。おまけに、幼少期に自分を救ってくれたその刑事も、『闇』を知りすぎてしまったが故に今ではその行方すら分からない所へ追いやられたと耳にした。

須藤はこの時ほど、世間に愕然とした事はなかった。そして彼は次に、アンティークショップを経営している加賀 友之と知り合い、彼を通じて犯罪リストを入手して摘発し、その度に報酬を払う事で正義の味方を目指そうとした。しかし前述でも述べた通り、些細な喧嘩で彼は人を殺めた。加賀の死体を壁に埋める中、彼は考えた。自分は、間違っていたのだろうか。『正義』など、最初から儚き幻想に過ぎなかったのだろうか……。

『なら、君が正義になれば良いだけの事だ』

自身の姿が、黄色のカニみたいな仮面ライダーに変貌している事に困惑していた須藤の目の前で、鳥をモチーフにした『仮面ライダー育成計画』のマスコットキャラクター、シローはそうアドバイスした。仕事の合間に憂き晴らしにプレイしていたゲームをやっていた最中、画面が切り替わり、君には仮面ライダーの資格があるなどと、訳も分からぬ言葉を呟かれたままタップし続けた結果、彼は仮面ライダー『シザース』となった。

『君に与えられたその力があれば、最も相応しい生き方を自由に選べるのだ。その力をどう使うかは君の自由であり、仮面ライダーという力の前では、同じ力を持つ者以外、何人たりとも逆らう事は出来ない』その言葉を聞いて、須藤……もといシザースは興奮を抑えきれなかった。これまでの自分はやれる範囲が限られていたが、今の自分は、ある意味で最強の存在だ。この力を有効に活用すれば、今の社会に制裁を与える事だって可能だ。

この時から、須藤は自身がやるべき事を確立させていた。

「犯罪者がいくら更生しても、一度深みにはまった者は、そこから抜け出す事など不可能に近い。その結果、また新たな犠牲が生まれる。

……だったらいつその事、根元を断ち切ってしまえば良いだけの事だったんです。全ての犯罪者を根絶やしにすれば、少なくともこの街の平和は保たれる。より強大な強さを手にする事も可能ですしね」
「！　じゃあ、今まで行方不明になった人達のほとんどは……！」
「以前、あなたが助けた男性も、『鉄輪会』と呼ばれる暴力団の回し者でしてね。ちょうど取り引きでもしようとしていたらしくてね。裁きを下そうとしたまでの事ですよ。まあ、結果的にあなたに邪魔されてしまいました」

須藤はカードデッキを片手に、自らの生い立ちを明かした。

「以来、私はこの力を使って闇に堕ちた者を消し、人知れず平和を守る事に専念してきました。ミラーワールドに引きずり込めば、特別な力を持たない彼らは自然と粒子化し、消滅する。どうせ生きていても価値のない方々でしたから、躊躇いなんてありませんでした」

「……！」
須藤の手口に、啞然とする一同。そんな中で、小雪は疑問を口にする。

「そ、そんな事をして、マジカルキャンディーなんて、集まるんですか……？」

「ええ。もちろん溜まりましたよ。悪を根絶やし、人々をそういった人達による脅威から守る事もまた、人助けの一環でしたから」

「そんな……！」

「とはいえ、私もこのような事態になるとは想定外でした。人数を増やしすぎたが故に、半分まで減らされる事になろうとは」

須藤の言う通り、今回の件は全くもって偶然的事であり、内心焦りを隠せなかったのだという。自分が脱落してしまっただけは、この街の平和を保つ事は再び難しくなる。おまけにパートナーシステムによって魔法少女が1人つく事により、行動を共にする機会も多くなると思いい、どうすべきか悩んでいたが、その心配は無用だった。選ばれたそのパートナーは魔法少女の中でも積極的に動く事のない魔法少女だったからだ。

「ねむりんがパートナーだったのはある意味で幸運だったかもしれま

せんね。私の素性を探る事なんて先ずありえませんでしたし、あの性格上、私にたてつく事はなかったわけですから。それに彼女の魔法が使えるようになったおかげで、仕事もはかどりました」

「どういう事だよ……」

「！まさか、お前は……！」

手塚が何かを察したのか、須藤を睨みつけた。対する須藤は口の両端をつり上げて言った。

「ねむりんの魔法はご存知の通り、夢の中を自由に行き来できます。そして何より夢の中で起きた事は現実世界に多少ではありますが、フィードバックされる。これがあれば、私の仕事を邪魔しようとする者の記憶を少々イジって、捜査を攪乱させる事も出来る。本当に役に立ちましたよ、彼女の魔法は」

「……酷い！ねむりんの魔法を、そんな事に使うなんて！ねむりんだって、あなたの事を想ってその魔法を託したはずなのに、何とも思わないんですか……!?？」

珍しく小雪が反抗的な態度をとったが、須藤は平然としていた。

「今更彼女がどう考えていようが、もう関係ない事じゃないですか。『死人に口無し』というやつですよ」

「……いつ……！」

颯太は歯ぎしりしながら須藤を睨みつけた。同じ魔法少女であったねむりんを嘲笑った事が許せないのだろう。

「……トップスピードを狙ったのは何故だ」

「生き残る為ですよ。ルーラチームがそうしたように、キャンディーが十分な量さえあれば脱落なんてない。そして全て奪われた者は死ぬ。誰を狙っても良かったわけですが、一昨日の件もありましたし、先ずは戦闘能力の低そうな、あなたのパートナーから奪う事にしました。またしても妨害を受けるとは思いませんでした」

「……それだけの理由で、トップスピードを」

大地は恐ろしく低い声で呟く。

「今回の件に関わった者達も、後で始末してしまえば良いだけの事です。あなた方も、あの女記者も……。そして生き残る為には、あな

た達のようなライダーや魔法少女を倒さなければならぬ。そうやってマジカルキャンディーをより多く手にして、強さを求める。当然の事でしょう？」

「これが私なりの正義です。」

須藤のそれを聞いた正史は一步前に出て、自らを『正義』と称する男性を睨んだ。

「……俺は、人々をモンスターの脅威から守る為に、ライダーになる道を選んだ。それは今でも変わらないし、これからもそうしていくつもりだ」

「それは素晴らしい事だ。それがあなたなりに掲げる正義なら、どうぞ続けていってください。私は止めやしませんよ」

「……でも！」

そこで正史は口調を荒げ、更に詰め寄った。

「あんなだけは許せない……！　ねむりんの気持ちも考えないで、ただ邪魔な相手を殺す事だけを考えて……！　そんな奴とだけは、戦わなきゃいけないと思う……！」

「同感だな。須藤、君のやっている事は、今まで君が殺めてきた者達と大差ない。もはや引き返せない運命の真っ只中に、君はいる」

「お前みたいな奴を仮面ライダーだなんて、僕は認めない……！」

手塚と颯太も、怒りを露わにして前に出る。大地も無言を貫いていたが、明らかに須藤と事を交えるつもりらしい。

「やっとその気になれたようですね。なら、2人までなら相手にしてあげますよ」

須藤もカードデッキを掲げて前に出た。

そんな中、小雪は未だに迷いが生じていた。確かに須藤のやっている事は決して許される事ではない。だが、元は何であれ同じ人間だ。このまま戦って、相手を屈服させる事が本当に正しいのか。小雪が口を開きかけたその時、2人の人影が割り込んできた。

「止めておけ。お前達には無理だ」

「！　蓮二！　それに華乃ちゃんも！　でも俺は……！」

別行動をとっていた2人の登場に驚きつつも、正史は何かを言おう

とするが、蓮二はそれを遮る。

「そいつが許せないから戦うんじゃない。生き残る為に戦う。それだけで理由としては十分だ」

「そんな……！ 待ってください！ 気持ちは分かりますけど、戦うだけが全てじゃ……！」

「甘い考えは捨てる。これはもうキャンディーの競い合いじゃない」

小雪が説得しようとするが、蓮二は冷たく吐き捨てる。更に華乃がこう言った。

「あなた達が手を下す必要はないから、邪魔しないで。……それに、こうやって自分の手を汚す事ぐらい、もう慣れてるから」

「華乃、さん……」

「あなた達は話が早い。いいでしょう。あなた方2人なら、十分相手になるでしょう」

人数差でハンデがあるにもかかわらず余裕を見せる須藤に対し、華乃はいつものように舌打ちをした。バカにされた気分になったのだろう。

そして蓮二と須藤はカードデッキを、華乃はマジカルフォンを取り出し、互いに見せつけた。決闘の合図は鳴らされた。3人は近くの窓ガラスの前に立ち、蓮二と須藤はカードデッキをかざし、腰にVバックルを装着させた。

「変身！」

蓮二が右腕を曲げて左に持っていった後、カードデッキを差し込むと、鏡像が重なり、仮面ライダー『ナイト』へ。

「変身！」

一方、須藤は右手を突き出し、人差し指だけを立ててからカードデッキを差し込むと、鏡像が重なり、仮面ライダー『シザース』へと変身した。

「変身」

華乃はマジカルフォンをタップし、光に包まれると、魔法少女『リツプル』へと変貌した。

そうして戦闘を始める為にミラーワールドへ突入しようとしたそ

の時、不意にシザースが立ち止まった。2人が眉をひそめていると、シザースは正史達の方に振り返り、呟いた。

「おっと。忘れてましたが、あなた達の相手はこれですよ」

そう言って取り出したカードを見て、小雪は目を見開いた。

「！ それって、ねむりんのカード……！」

「先ほど申し上げたように、ねむりんの魔法は現実世界にも影響がある。つまりは、こういう事も出来るのですよ」

『DREAM VENT』

シザースバイザーにパートナーカードをベントインしたシザースは、周りを見渡し、やがてとあるマンションに視線を向けると、左手を突き出し、光線を放つと、引っ張るような動作をした。何が始まるのか身構えていると、マンションから引きずり出されるように姿を現したのは、現実世界では先ず目にかかる事のない存在だった。

『ギャオオオオオオオオオッ！』

「ど、ドラゴン!?!?」

「な、何でドラゴンが出てくるんだよ!?!?」

「！ そうか。あのマンションに住む誰かの夢の中にいたドラゴンを……！」

手塚の推測に対し、シザースは平然と答える。

「その通り。夢の中にあるものを具現化する事も、この能力なら容易い」

それから、シザースはナイトとリップルに顔を向けた。

「さあ、これで邪魔される事なく、存分に戦えますよ」

「……ふん」

2人は態度を変える事なく、シザースと共にミラーワールドへ突入した。一方正史達も、迫り来る巨大なドラゴンに対抗しようと、カードデッキやマジカルフォンを取り出した。

「……変身!」

5人は変身し、武器を構えた。

「とにかく今は、このドラゴンをこれ以上この場から引き離さないようにするんだ。もしこれが街中に出たら大変な事になる」

「あ、ああ！」

「任せてくれ！ ドラゴン退治は僕の専売特許だから！」

「行くぞ、スノーホワイト」

「う、うん！」

「ハアッ！」

「ウオオオッ！」

静まり返っているはずのミラーワールドに、鉄がぶつかり合う音が響き渡る。ダークバイザーとシザースバイザーがぶつかり合っているのだ。

ナイトの後方からは、リップルが動き回りながら手裏剣を投げつけ、魔法によつてシザースへ必中していた。だがシザースの防御力は思っていた以上に高く、さほどダメージにはなっていないようだ。それでも怯まずに手裏剣を投げ続ける事で、気をそらせる程度には功を奏しているようだ。

さすがに鬱陶しく思ったシザースは、一旦ナイトを突き飛ばして、リップルの方に向かって左腕を振るった。身を屈めながらかわすリップルだったが、隙ができて背後に回られた直後、後方から左腕で首を強く絞めつけられた。失神させて戦力を削るのが目的らしい。

「！」

『NASTY VENT』

だがナイトがそれを見過ごすはずもなく、現れたダークウイングから放たれた超音波攻撃『ソニックブレイカー』がシザースを直に襲った。

「ぐっ!? うう……！」

「! (こ)だー！」

あまりの苦しさに左腕を緩めたのを確認し、リップルは全体重を後ろにかけて、右足を振り上げてシザースの顔を蹴りつけた。シザースが後ずさりながら距離を置くと、ナイトは次なるカードをベントインした。

『SWORD VENT』

ウイングランサーを構え、ナイトはシザースに突撃した。負けじとシザースもシザースバイザーを盾代わりに凌いでいたが、リップルが放ったクナイによって左腕が弾かれて、ウイングランサーの突きがシザースの腹に直撃し、シザースは壁に激突した。

「やりますね……！」

『STRIKE VENT』

今度はシザースピンチを右腕に装着し、ナイトに向かって振るつた。一進一退の攻防が続くが、リップルが弾き飛ばされ、ナイトの注意がパートナーに向かれた事で均衡が破れた。左足の蹴りでナイトの足を攻撃してバランスを崩させると、シザースピンチで首元を挟もうとした。ナイトはウイングランサーを盾に首元までは届かせないようにしたが、ウイングランサーごと首が引き裂かれるのも時間の問題だった。

「どうです? これが今日まで培ってきた私の実力です。人を殺めた事のないであろうあなたでは、到底勝ち目などありませんよ」

「随分と余裕だが、隙が多いのが貴様の欠点だ！」

そう言ってナイトは腰につけられていたダークバイザーを抜き取り、シザースの腹部めがけて振るつた。シザースは苦痛と共に怯んで後退した。そこに追撃とばかりにリップルが手裏剣を投げつけ、ダ

メージを与えた。

「くっ……。あなたの相手はこれで充分です」

『ADVENT』

シザースの前に契約モンスターのボルキャンサーが立ちはだかり、リップルは舌打ちと共に交戦したが、ボルキャンサーの硬さに、短刀で応戦しているリップルも苦戦を強いられている。

これ以上長引くと不利になるかもしれない。そう思ったナイトは1枚のカードをベントインした。

『FINAL VENT』

後方からダークウイングが現れ、背中にしがみついてマントとなった。

「そちらがそう来るなら……！」

『FINAL VENT』

目には目を、ファイナルベントにはファイナルベント。

シザースがカードをベントインすると、リップルの相手をしていたボルキャンサーがシザースの後方に立ち、ナイトが飛び上がると同時に、シザースも飛び上がり、ボルキャンサーに打ち上げられた。

「ウオオオッ！」

「ハアッ！」

ナイトはマントに包まれドリル状になった姿で急降下する『飛翔斬』を、シザースは自ら回転を加えて高速前転で体当たりする『シザースアタック』を放ち、互いにぶつかる爆発が起こった。

リップルが呆然とする中、煙の中から現れたナイトは、地面に倒れこんだ。

「ナイト……！」

「どうやら、私の、防御力の方が、一枚上手、でしたね」

ハツと顔を上げると、そこには息を荒げて膝をついているもの、まだ動けそうにあるシザースの姿が。やがて立ち上がると、ナイトと、彼に駆け寄ってきたリップルに目を向けた。

「これで1人減ったようなものですね。次はあなたですよ。……やりなさい」

シザースの指示を受けて、ボルキャンサーは咆哮と共にリップルへ襲いかかった。ナイトから引き離されながら、リップルは必死に抵抗した。助けに行こうとするナイトだったが、先ほどの攻撃を受けて、腕ぐらいしかまともにも動けない状態にあった。シザースはその様子を鼻で笑いながらナイトに近づいた。

「これで分かったでしょう。私の掲げる正義こそが、この世の中を変えらるに相応しいと」

「ぐっ……！」

「では、マジカルキャンディーを頂きましょうか。これであなたは脱落です」

そう言ってナイトの傍らに落ちていた、ナイトのマジカルフォンに手を伸ばそうとした時だった。

「挿入歌：果てなき希望」

「させない！」

「むっ……!?？」

シザースの左腕にエビルウィップが巻きついて、身動きが取れなくなった。シザースが振り向くと、そこにはエビルウィップを手に持ったラ・ピュセルの姿が。否、ラ・ピュセルだけでなく、九尾とスノーホワイトの姿もあった。

「ダアッ！」

そして、両手の鋭いハサミを突き出したボルキャンサーの前に、ドラグシールドとドラグセイバーを構えた龍騎がリップルを守るように現れた。

「！ あなた……」

「ハアッ！」

続けてライアがかかと落としてボルキャンサーにダメージを与え、龍騎はドラグセイバーでボルキャンサーを後ずらせた。

一方でシザースは九尾達が乱入してきた事に驚いていた。

「！ まさか、こんなにも早くあのドラゴンを倒すとは……！」

「仲間がいたからこそ、掴み取った勝利だ！ お前には一生理解できないだろうけどね！」

そう言つてラ・ピユセルはエビルウィップを引つ張り、シザースを引寄せた。よろめくシザースに向かつて九尾が急接近し、右足を蹴り上げてシザースの顎に命中した。シザースが倒れこむ中、龍騎達はナイトに近寄つた。

「おい、大丈夫かよ!」

「気遣いはいらん。あれは俺の敵だ」

「んな状態で言つても説得力ないって」

「貴様……!」

「前にも言つただろ? 俺だつてその気になれば戦えるって」

「……ふん。なら、やってみろ」

ナイトはそう言つと、1枚のカードをベントインした。

『H I T V E N T』

その後ナイトはウイングランサーを握り、ボルキャンサーめがけて投げつけた。するとウイングランサーは勢いが衰える事なくボルキャンサーに向かい、ボルキャンサーを突き飛ばした。パートナーのリップルの魔法でもある必中攻撃を繰り出したようだ。

「おお、スゲエ……!」

「後は任せる」

「ツシヤア!」

「行くぞ、龍騎」

龍騎とライアがボルキャンサーに立ち向かう一方、シザースは九尾と交戦していた。

「ハアツ!」

「グウツ……!」

ナイト達との戦いで消耗しているのか、九尾の素早い動きに対処できずに後ずさつており、せいぜいシザースピンチを振り回す程度だった。そんなシザースに対し、九尾は語つた。

「あんたが色んな事を見てきて、性格が歪んだのはよく分かつた。けどな。あんたが振りかざしているものは、結局は偽りの正義でしかない!」

「偽りの、正義……」

「んな事にすら気づかず人を殺し続けたあんたに、俺達が負ける理由なんて、あるわけないだろ！」

「黙りなさい……！ 私こそが正義！ 私こそが最強のライダーなのですよ！ 生き残るのは、私の方ですよ！」

シザースがヤケクソ気味に突撃してくるが、当然九尾には通用するはずもなく、後方から現れたラ・ピュセルと並んで蹴り飛ばされた。「グハッ！」

シザースの倒れこんだ先には、ボルキャンサーが唸り声を上げていた。

「お前の命運も尽きたようだな」

「俺達は、お前なんかには負けない！ いくぞお！」

『FINAL VENT』

龍騎とライアは同時に飛び上がり、龍騎は右足を突き出して『ドラゴンライダーキック』を、ライアはエビルダイバーに乗って『ハイドベノン』を放った。これを見たシザースはボルキャンサーの背後に回り込み、ボルキャンサーはハサミをたてて突撃しようとした。

やがて龍騎とライアの必殺技がボルキャンサーに命中し、ボルキャンサーはいとも簡単に爆ぜた。煙が晴れると、そこには誰もいなかった。シザースはボルキャンサーを盾代わりにした後、どさくさに紛れて逃亡したようだ。

「ふう……。どうにか退けたみたいだな」

「これに懲りて、2度と来てほしくないものだ。九尾もそう思うだろう？」

「全くだ」

「……どうして」

不意にスノーホワイトが、先ほどまでシザースがいた地点を見つめながら、困惑気味に呟いた。その瞳には涙も浮かんでいる。

「どうして、魔法少女や仮面ライダー同士で、奪い合って……！ こんな気持ちじゃ、いつまでも人助けなんて続けられないよ……！

もう、嫌だよお……」

「スノーホワイト……」

「泣いてばかりで誰かが助けにくれると思うか？」

スノーホワイトの様子を見て、ナイトは起き上がりながら冷ややかな一言を浴びせた。当然龍騎はこれを咎めた。

「ちよつと！ 少しはスノーホワイトの気持ちも考えて……」

「これが戦いというものだ」

だがナイトをそれを無視し、そして呟く。

「仮面ライダーと魔法少女は合わせて残り29名。そして今日、その内の一人が脱落する。残れる枠は16。後13人は敵と認識して、倒さなければならぬ。……その13人の中には、お前達も含まれている」

『……！』

ナイトの発言を聞き、リップル以外の一同に動揺が走った。

「戦わなければ生き残れない」

よく覚えておく事だ。

スノーホワイトにそう言い聞かせるように呟くが、スノーホワイトはすぐには首を縦に振れなかった。それなりに葛藤しているのだろう。心を読まずとも理解できた。

そんなスノーホワイトの表情を見て、リップルは心の中で呟いた。

「（この子は、なるべくして魔法少女になったんだろうな……）」

港での一件以来、行動を共にするようにはなつたものの、まだ面と向き合つて話した事はない。無論それを言つてしまえば、ナイト以外のメンバーとも会話が成立した事が無いのだが……。

それでもリップルには分かった。スノーホワイトは、いつ如何なる時でも困っている人がいたらすぐに手を差し伸べるほどに優しすぎる。ある意味で正統派だ。マジカルキャンディーを競い合うという異常な状況下でなければ、人助けなど考えもしなかったリップルとは正反対だ。

「（まあそもそも、なりたくてなつたわけじゃないし……）」

それでも、心のどこかでもつとスノーホワイトの事を知りたいという気持ちはあつた。と同時に、そのパートナーである九尾の強さの秘訣を知りたいと感じていた。更に、スノーホワイトだけでもこのよう

な争い事には関わってほしくないという気持ちも芽生えた。他人の事など今まで気にする事はまずなかったはずなのに……。

しばらく重い空気が漂っていたが、そんな空気を払拭するかのよう
に乱入する者が。

「ういつす！……ここにいたのかよ！……連絡の1つや2つよこせてえ
の！」

ケタケタと笑いながらやって来たのは、ラピッドスワローに跨った
トップスピードだった。空気を読めと言わんばかりにリップルは舌
打ちするが、トップスピードには聞こえていなかったようだ。

「んで、どうしたのこの状況」

「実は……」

ラ・ピュセルが代表して事の次第を説明した。説明が進むにつれ
て、トップスピードの表情は険しくなって唸った。

「なるほど。そいつはいただけねえなあ……。ま、とにかく無事でよ
かったから、そこは素直に喜ぼうぜ、なっ！」

「は、はい……」

トップスピードがスノーホワイトの肩を叩き、慰めた。それからふ
と思い出したかのように、皆の方を向いた。

「あ。そういやさ。もうすぐ発表の時間じゃねえか？」

「あつ！……そうだった！」

一同はミラーワールドを後にして、早速マジカルフォンを起動して
チャットルームへ入室した。

そこでファヴとシローの口から発表された、今週の脱落者とは
……。

「くっ……！ まさかここまで深手を負うとは……」

一方、命からがら逃げ延びたシザースは港に足を踏み入れた。

「偽りの正義……ですか。まあ、誰が何と言おうと、私は生き残りますよ。私という者がいて初めてこの街の秩序は……」

シザースが九尾の言葉を思い出しながら歩いていたその時、前方から人影が。九尾達が追ってきたのかと身構えたが、その人物はその誰でもなかった。

「こんばんは、シザース。随分と派手に暴れたそうですね」

尖った耳に、花によって全身が彩られた、エルフのような魔法少女『クラムベリー』がそこにいた。

「……何の事でしょう」

「とぼけなくても結構ですよ。私は聴力に関しては他の魔法少女より優れてますから。なので、先ほどのあなた方の会話は全て聞かせてもらいました」

クラムベリーの言い方からして、事の経緯は全て聞いているという事になる。それはつまり……。

「(彼女もまた、私の事情を知った。ならば、始末する他ありませんね)」

幸い、今度はナイト達の時と違って相手はクラムベリーただ一人。手札は少ないが、所詮は魔法少女。戦闘面ではライダーの方が優れている以上、実力なら負けるはずもない。そう思ったシザースはカードデッキに手を当てた。それを見て、クラムベリーはほお、と感心した顔つきになった。

「私を消そうというわけですか。私を前にして、伊達に強いと自負しているだけの事はある。では見せてもらいましょう。あなたの強さを」

「……！」

刹那、クラムベリーの全身から発せられるオーラに気圧されたシザースは勢いよくカードを引き抜き、ベントインした。

『BUBBLE VENT』

この相手を前に、出し惜しみは出来ない。そう直感したシザースは右手にバブルシューターを構えて、『バブルショット』を撃った。ただし、ボルキャンサーは消滅しているためバブルシューター単体だけでの攻撃ではあつたが、威力は申し分ない。クラムベリーに直撃した。

「!? 何!?」

ハッと気配を感じ取った時には、クラムベリーははるか上空に飛び上がっており、狂気に満ち溢れた表情でシザースに飛びついた。エルボードロップを決めて、シザースをよろめかせると、クラムベリーは右手の指を立てて、一直線にシザースの左肩めがけて突き出した。その速さにシザースは目で追う間も無く。

「グギャア!?」

気付いた時には、その右手はシザースの肩の装甲を貫いていた。血が飛散し、遅れて感じた痛みが、シザースの口から悲鳴のようなものを吐き出させた。だがクラムベリーの猛攻はそれにとどまる事を知らず。今度は突き刺さっている右腕を強引に横へ振り払うと、鮮血が飛び散り、シザースが顔を見上げた時には、シザースバイザーが宙を舞っていた。

自身の左腕が舞っている。そう気付いた時には、声にならない悲鳴が漏れ出し、地面を駆け回った。左肩から先の感触がない。左腕がシザースから離れた位置に落ちたが、それに目をやる余裕は完全に消し飛んだ。召喚機が手元から離れてしまつては、新たなカードをベントインする事すら叶わない。そもそも、シザースにはこの日ベントインできるカードはもう残っていないからだ。

「おやおや、こんなものでしたか。失望しました」

クラムベリーは冷めた口調で呟きながらも、顔には不満げなものは感じられない。クラムベリーは地面に膝をついているシザースの頭を、先ほど左腕を破壊した手で鷲掴みにして持ち上げた。その腕力の

強さは、シザースの想像をはるかに超えていた。

「う、グアツ……！ ああ……！」

「自分の強さすらも偽っていたようですね。がっかりですよ。私は強者との刺激ある戦いを望んでいたものですから」

メリメリと音を軋ませながら、クラムベリーはシザースの頭を握る手を更に強めた。必死に空いた右手だけでクラムベリーの右腕を掴み、抵抗しようとするシザースだが、クラムベリーの腕力の方が勝っている為、ほぼ無駄に近い。

この魔法少女は、普通ではない。そう理解したシザースだが、そこへクラムベリーが唐突にこんな事を言い出した。

「そういうえば、あなたはもう消えゆく身でしたね。なら、ここで私が手を下しても、何ら問題はなさそうですね」

「な、何を……？？」

「おや、逃げる事に必死でチャットを見ていなかったようですね。今週の最下位はあなたでしたよ、シザース」

「？？」

シザースの頭が真っ白になる中、クラムベリーは空いた左手でマジカルフォンを取り出し、画面を見せた。そこには確かに、シザースの名が表示されている。

「どうやらトップスピードらを始末する事に専念しすぎて、マジカルキャンディーを集める機会を見失っていたようですね」

「そ、そんな……！ 私……！」

いかに強大な力を持ったシザースといえど、結果を変えるなど不可だ。狼狽えるシザースに対し、クラムベリーは静かに答える。

「どうやらあなたの信じた正義は、全て無駄に終わったようですね。せめて、強者との戦いを目指す私の手で幕を下ろして差し上げましょう」

そう言っただけでクラムベリーは更に強くシザースの頭を握りしめた。頭全体が悲鳴をあげており、シザースはかつてないほどの恐怖を感じた。

「さようなら、弱者さん」

そして、その人物は『左肩から先』と、『首から上』が抜け落ちていた。

「やはり、強者との戦いこそが、私を最高に刺激させる。ここは一つ、私の方から動かしてみましよう」

『あんまり過剰に動いてもらっても困るぼん。この試験の目的を忘れてもらっては困るぼん』

「私には関係のない事です。これでも参加者の一人なのですから」
『……で、誰を相手にするつもりぼん？』

「……そうですね。まずはシスターナナに同調しそうな者で、且つ強そうな人物。……九尾はまだメインディッシュとして取っておくと

して、前菜程度になりそうな人物に、1人心当たりがあります。そこから手をつけていきましよう」

そう呟いた後、クラムベリーは手にこびりついていた、ブヨブヨしたひも状のものを口に近づけた。俗に言う『脳みそ』と呼ばれる部位に付着していた血を、愛おしそうに舐めた。

そして評価する。

「……2つ星。まづまづといったところでししょうか」

《中間報告 その4》

【シザース（須藤 充）、死亡】

【残り、魔法少女14名、仮面ライダー14名、計28名】

41. 金儲けにも色々事情がある

シザースこと須藤 充の死体が港で発見されて以降、彼が裏で行っていた悪事は次々と暴かれていった。加賀 友之が殺害された事件に關与した事はもちろん、違法な取り引きによつて独自に動いていた事など、その数は計り知れず。

皮肉にも、結果的に彼は『悪を滅し続けた正義のヒーロー』ではなく、『数々の悪事を働いた犯罪者』として、世間にその名を知らしめる形となった。

これらの事件は、OREジャーナルはもちろん、様々なマスメディアを通じて報道されたのは言うまでもない。特に事件の最深部まで関わり、より濃厚な記事を書けたという事で、令子だけでなく正史も大久保から手厚く褒められた。

が、正史の表情は優れない。正史は新聞で報じられている内容以上に、須藤の事を知っており、素直に喜べはしなかった。加えて正史や大地達といった、事に關わったメンバーが不可解に思ったのは、須藤が左腕を切断され、頭を潰された状態で発見された事だった。昨晩のチャットでシザースの脱落が発表され、彼が死ぬ事は承知できたのだが、なぜ惨殺されたのが理解できなかった。

パートナーだったねむりんのように心臓麻痺という形で死を迎えるパターンだけではないのか、あるいは第3者が人知れず手を下したのか……。

経緯は分からなかったが、単なる事故死とは思えず、スノーホワイトこと小雪の不安は更に積もり、いつしか、キャンディー集めの最中でも笑みを浮かべる機会さえ少なくなった。

すでに4人も脱落する中、次に死ぬのは果たして……。

一方、そんなスノーホワイトとは裏腹に、せつせとキャンディー集めに励む者も少なからずいた。

『SHOOT VENT』

「ハアッ！」

ミラーワールドにて、動き回るギガゼールを前に、ゾルダは両肩に備えられたビーム砲『ギガキャノン』を撃ち続けて爆散させた。

「ぬおおおおっ!?？」

その後方ではパートナーのマジカロイド44が、支給された武器でもあるギガランチャーを構えて、もう一体のギガゼールを狙って撃つたが、ギガランチャーは威力が大きい分、反動もデカイ。小柄なマジカロイドでは耐えられるはずもなく、反動をもろに受けて吹き飛ばされる。ギリギリではあるが、ギガゼールに命中して爆散させたが、仰向けに倒れているマジカロイドはヘトヘトになっていた。

「おーい、大丈夫か？」

「……生きてマゝス」

ゾルダが声をかけると、マジカロイドはロボットらしくゆっくりと手を振った。

それから2人はミラーワールドを後にして、ビルの屋上でマジカルキャンディーの獲得数を確認しながら休憩していた。

「いやゝ。しかしアレデスね。モンスター退治というのも一苦勞シマスね。命に関わる事情がなければ、やりたくない仕事デシタ」

「それはアレか？ 金儲けにならないって事か、単にやりたくない事

だからってものか」

「両方デス」

マジカロイド44の変身者でもある真琴の事をよく知るゾルダは、なるほどと頷く。やはり自分と似たような性格を持って生きているなど共感していた。

すると、マジカロイド44がこんな話題を提示してきた。

「そういえば、先日シスターナナから連絡がありマシテ」

「へえ、あの人から？」

「ハイ。運営の方に異議を申し立てる為に、是非とも協力してほしいとの事デシテ」

「無理だろうね」

シスターナナの考えを聞いたゾルダは即座に否定した。

「俺からしたら、ファヴもシローも人間の倫理が通じない連中だし、そんな奴ら相手に、世界中のライダーや魔法少女が束になっただって聞き入れやしないさ」

「同感デス。しかし、彼女はワタシにとって嘗ての金づるデシタから、無碍にも断れないのデスよ……」

「金づる……か。けど何でまたシスターナナと？」

「まあ、色々とありマシテね……」

そう言っつてマジカロイド44は夜空を見上げながら当時の事を語り出す。

「理想の王子様に会ったのです」

それは、まだゾルダと出会う前の事。教育係となっていたカラミティ・メアリからの指導を全て終え（ただし、まともに教えられる事なく）、チャットルームで暇を持て余していた頃、そこで知り合ったシスターナナから直に会いたいという申し出を受け、暇つぶしにと許可を出し、早速待ち合わせ場所に出向いたマジカロイド44だったが、断っておけばよかったと、その時のマジカロイド44は激しく後悔していた。

目の前にいる修道服姿の魔法少女、シスターナナは据わった目つきで、理想の王子様が如何に素敵な存在であるかを朗々と語り、とにかくその『王子様』の事を全面的にアピールしていた。

以前、カラミティ・メアリがシスターナナの事を『愚図な女』と揶揄していたが、こうして直に会ってみるとそう言いたくなるのも無理はなさそうだった。

「何よりも大切に思ってくださいなのです。……ですが、私が魔法少女となってしまうのが故に、理想の王子様は、理想の王子様になれなくなってしまうのです！」

「……スママセン。言ってる事、全然分からないのデスが」

もつともな事を呆然と呟くマジカロイド44。だがシスターナナはそれを無視してマジカロイド44の手を握った。

「理想の王子様は、いざという時に私を守ってくれるからこそ、理想の王子様であり、私は守られる立場になりたいのです。しかし今となつては魔法少女である私の方が、腕力で勝っています」

「マア、それでしようネ」

実際、魔法少女や仮面ライダーは身体能力が非常識なまでに向上するとファヴからも説明があった為、間違っではない。

「私やあなたみたいに魔法少女という同じステージに立ってこそ、理想の王子様なのです」

「……」

何を言ってるんだこの露出狂は。それがマジカロイド44の率直な感想だった。

と、ここでようやく本題に入った。

「そこですね。是非ともあなたに、彼女を魔法少女にさせる手助けをと思ってお呼びしたのです」

「それで、ワタシに何をしてほしいのデスか？」

「マジカロイド44さんは、22世紀からいらした魔法少女型ロボットだそうですね」

「……ああ、そういう設定だったデスね」

曖昧そうに呟くマジカロイド44。

「便利な道具をたくさんお持ちだとか」

「便利じゃない道具の方が多いデスけどね」

「それを1つお貸ししていただけないでしょうか？ 失礼を承知で、お礼も用意いたしました。些少ではありますが……」

そう言つてシスターナナが懐から取り出した茶封筒を受け取り、中を確認すると、諭吉が1人。

ふと、以前のチャットで「魔法少女も仮面ライダーも苦労があつても金にならない」とボヤいた気がしており、シスターナナはそれを覚えていたのかもしれない。

「お力添えいただけませんか？」

ニッコリと微笑むシスターナナを見て、考え込むマジカロイド44。報酬が付くのなら、断らなくてもいいかもしれない。それだけでなく、上手くいけば良い商売相手になるかもしれない。

マジカロイド44は咳払いを1つして、腰についていた袋に手を突っ込み、ごそごそと漁つてから、1つの装置を取り出した。それを見てマジカロイド44は一瞬固まったが、意を決してPRを始めた。

「じゃじゃじゃーん！ 『昆虫雌雄鑑定機』デス！」

「これは……？」

「その名の通り、昆虫のオスメスを鑑定する事ができる便利な道具デス」

「どういう意味があるのでしょうか？」

興味深げに『昆虫雌雄鑑定機』を手にとって眺めながら、シスターナナは説明を聞いた。

「昆虫という生き物は宇宙や異世界からの来訪者という説さえある神秘的な生き物デス。そのようなファンタジッククリーチャーとの触れ合いによつて、魔法少女の才能を引き伸ばす事がある……とも言えなくもないわけでもないかもしれないものデス」

最後は早口且つ小声だったが、幸いにも興奮気味のシスターナナの耳には届いていなかったようだ。

「本当ですか!?? ありがとうございます！」

シスターナナは飛び上がり、マジカロイド44にお礼を言った。真に受けてくれたらしい。

もちろんマジカロイド44の口から説明された全てが、金欲しさにでっち上げたものだという事は、言わずもがな。

改めて説明すると、マジカロイド44の魔法は『未来の便利な道具を毎日1つ使えるよ』というものであり、4億4444万4444個ある便利道具から1日一回、1つを取り出して使用できるのだ。が、この魔法は極めて扱いどころが難しいものだった。1つは出てくるアイテムがランダムである事。もう1つは日付けが変わる頃には使えなくなってしまう事。これだけ見ると、スノーホワイトの魔法よりも難しさを感じられる。

シスターナナに渡した昆虫雌雄鑑定機も同様で、「使っているうちに何故か壊れてしまいました」と、機械を片手に翌日再訪問してきた。しかし、そんな事は百も承知だったマジカロイド44は、嬉しそうに喜ぶという演技を見せてシスターナナに言った。

「おおー。それは素晴らしいデス！ そのアイテムが壊れるほどに魔法的な影響を物凄い勢いで吸収したという事デス。これは脈があるという事デス」

何も知らないシスターナナは大いに喜び、マジカロイド44が新たに取り出したアイテム『デブリ除去専用マニピュレーター』を1万円円で購入した。

以来、マジカロイド44とシスターナナのやり取りは続き、シスターナナが訪れる度にマジカロイド44は「兆候が見え始めている」などと煽って『完全自動掃除機（ルンバではない）』や『1日で漫画が描けるペン』、『対魔法生物用光線銃』などを売りつけ、1万円を手にする。このような無限ループが起こり、財布が少しずつ重くなるのを感じ、マジカロイド44はロボットに似合わない顔つきでほくそ笑んだ。

「これは、実にボロい商売デスね」

マジカロイド44は五百円玉に似た満月を眺めながらそう呟いた。が、マジカロイド44の思惑は予想外な形で幕を閉じた。最初の出会いから1週間後、シスターナナは1人の魔法少女を連れてやって来た。

「ありがとうございますー！」

「……へ？」

「昨日お借りした『マジカルパワー増幅ピアス』を、彼女につけたところ、ファヴが現れて魔法少女に目覚めたのです！」

シスターナナが連れてきた新人魔法少女である『理想の王子様』こと『ヴェス・ウィンタープリズン』は軽く会釈した。

「（……しまったアアアアアアアアアア!?）」

商売相手を失い、その日マジカロイド44は2人が何も購入せず帰ってから夜が明けるまで、噎び泣きしていたのだという。

「やはり魔法少女も仮面ライダーも、金にならないのデスよ。改めてそう実感しまシタ」

「……ああ、何となく分かった」

ゾルダも仮面の下で苦笑していた。

それ以来シスターナナと絡む事はほとんどなく、一度だけウィンタープリズンを魔法少女にしてくれたお礼をという事で歓迎パーティーに招待され、食事でありつく為に出席いたぐらいだった。余談だが、シスターナナと親しかつたオルタナティブとファム、最近仲良くなつたという事で呼ばれたライアとラ・ピュセルともそこで知り合い、新たな商売相手になるのではと試みたが、会話していくうちにそれは難しそうだ判断し、諦める事になつたらしい。

「……でもまあ。一応あいつらの提案に乗るふりぐらいは出来るんじゃないか？ 上手くいけばまた儲けられるかもしれないし。今度は俺もいれば何とかなりそうだろう？」

「……そうデスね。まだまだ利用価値はありそうデスし。是非ともお願いしたいデス」

2人分の乾いた笑い声が辺りにこだました。もしこの場に他の魔法少女や仮面ライダーがいれば、この2人はよく似ていると評するに違いなかった。

「ア、それはそうと、少し話題は変わるのデスが……」
「？」

「さっきライアとラ・ピュセルの名前を出して思い出した事があるのデスが。あの2人、以前まではスノーホワイトと九尾のペアと行動していたそうデスが、最近はトップスピード、龍騎、リップル、ナイトのチームと手を組んだらしく、大きな派閥になつてるそうデスよ」

「へえ。よほど信頼できる仲なのかね」

「そこで提案なんです、ワタシ達もスノーホワイト達の所とまでは

いきませんが、どこかのペアと手を組んでみてはと思いマシテ。ワタシとしては、カラミティ・メアリと王蛇のペアと組むのが効率的かと。あの2人なら早々に脱落なんてなさそうデスし、カラミティ・メアリには教育係の件でお世話になりマシタから、すぐに入れてもらえるのデハと……」

マジカロイド44の提案を聞いたゾルダは肩を竦める。

「手を組む、ねえ……。俺は反対かな。そういうのって結局下っ端につくって事になるし、それってなんか生き残っても美しくないよ。どうせならこのまま2人で残りたいし、その方がカッコいい」

それに……。と呟いたゾルダは立ち上がって背伸びしながらこう言った。

「……あの2人と、つてのはお勧めしないね。カラミティ・メアリはともかく、王蛇がいるのは宜しくないし。俺の予想が正しければ、チームを組むどころか首を持ってかれそうになるかもよ、俺達2人とも」

「ほら、あんたも飲むかい？」

「……アア」

一方、ゾルダとマジカロイド44のペアの間で話題になっていたカラミティ・メアリと王蛇のペアは、とあるクラブの一室にある黒革張りのソファアーに腰を下ろしていた。

数分前まで、城南地区で2人を雇っている『鉄輪会』に刃向かう勢力を鎮圧しに『人助け』をしており、2人の前にある黒檀の小机には報酬として受け取った札束の入った茶封筒が。この場にマジカロイド44がいたら、目の色を変えていたに違いない。

カラミティ・メアリに勧められてウイスキーを飲む事にした王蛇は、一旦Vバックルから蛇の紋章が刻まれたカードデッキを抜き取り、変身を解除する。ヘビ柄の上着を着た、目つきの鋭い男性はウイスキーの瓶を受け取ると、グラスに注ぐ事なく直接喉に流し込んだ。度の強い酒類のはずだが、男性は全く気にしていない。その様子を見ていたカラミティ・メアリはクスクスと笑っていた。

「……アア？ 何だ？」

「いや、別に。随分と暴れ足りないように見えたからさ」

カラミティ・メアリは、数分前までそこらじゅうにいた組員を完膚なきまでに叩きのめしていた王蛇の様子を思い返していた。王蛇のそれは、まるで溜め込んでいたイライラを解消するかのよう。が、それをもつてしても完全にはいかなかったようだ。

「あんたはやっぱり面白い。前の旦那とは大違いだ。退屈しない」

「どうでもいい」

全て飲み干したウイスキーの瓶を壁にぶん投げて割れた瓶からこぼれ落ちる、僅かに残った液体を睨みながら、男性は吠える。

「……あいつらじゃ足りない。誰とでも良いと思ったが、やはりライダーや魔法少女じゃなければ、俺を楽しませてはくれないなあ……！」

戦えればそれで良い。

何度も耳にしたフレーズを聞きながら、カラミティ・メアリは笑みを浮かべ、空になったグラスを机に置き、今度は男性の真似事とばかりに瓶を片手に直接口に流し込んだ。

この先もつと楽にお金を稼げたら良いのに、と朝日に照らされながら思い耽っているのはリップルの変身者、細波 華乃だった。

現在彼女は3つの危機に瀕している。『将来』がかかっている学校生活。『日常生活』がかかっているバイト。そして『命』がかかっている魔法少女としてのキャンディー集め。何れか1つでも手を抜けば、破滅へと直結する。特に3つ目は。

電車通学の華乃は、キャンディーの競い合いという状況下に置かれた今、約35分間という移動時間の合間にスマホを通じて、従来の担当地区や、最近仲間になった九尾チームの担当地区の分を含めた箇所を、キャンディー稼ぎに最適そうな仕事を探すのが日課になった。

やがてそれも見飽きた華乃が次に閲覧したのは、魔法少女や仮面ライダーの目撃情報を取り扱っているまとめサイトだった。今日も数多くの目撃情報が寄せられているが、中でも多数を占めているのは、チームメイトのスノーホワイトだった。元々目撃情報が多い事でも有名だったが、昨日は明らかに群を抜いていた。

『白い衣装の人が、服を真っ黒に汚れる事も厭わずに自転車のチェー

ンを付け直ししてくれた』

『白い魔法少女が、泣いている子供の頭を、誰よりも泣きそうな顔をしながら撫でていた』

などと、バリエーションは様々だ。だがその何れも、行動を共にしているリップルには見覚えのない情報だった。間違いなく自分達がない所でも人助けをしている。現状のままでもキャンデーの数は他の魔法少女や仮面ライダーの中でもダントツなはずだが、華乃には彼女がここまで人助けする理由が分からなかった。

どこか、無理をしているようにも見える。シザースの脱落から一夜明けてからのスノーホワイトの様子を思い出した華乃は、どう声をかけるべきか悩んでいたが、目的の駅が近いというアナウンスを聞いて、スマホの電源を切って通学カバンにしまった。

スノーホワイトの変身者、姫河 小雪は考え込んでいた。それこそ、前の座席と小雪の隣で会話している2人の友人の声が入らない程に。

彼女の脳裏にはこれまで脱落していったねむりん、ルーラ、インペラー、シザースの姿が。彼らはもう、この世にはいない。何故彼らは死ななくてはいけなかったのか、小雪には全く分からなかった。善人のねむりんや、兄やパートナー、そのパートナーの姉を救いたいと願っていたインペラーはもちろん、悪事を働いたルーラやシザースが死ぬ理由など、1つも無かったはずなのに……。

そう思っていると、友人達がそんな小雪の様子が気になって声をかけた。

「小雪、どうしたの？」

「ここんところ元気無くない？」

「そうそう。暗いよ〜」

「え、えっ？ そんな事ないよ」

小雪が心配をかけさせまいと首を横に振った。実を言うと昨晚も両親から同じような事を指摘されており、小雪は迷惑をかけているみたいで、申し訳なさげだった。

すると、友人達は小雪を見てこんな事を話し始めた。

「あ！もしかして失恋とか!?!?」

「えっ……!?!?」

「それって、こないだバーガーショップで一緒にいたあの子と?」

「そうそう！あのクールな子」

「ち、違うよ！そんなわけないじゃん!?!? だいちゃんとは別にそういう関係じゃなくて、あの時はただ……」

慌てて弁解しようとした途端、思わず大地の呼び名を親しんだ名で口にしてしまい、小雪は思わず口元を隠した。が、時すでに遅し。話を耳にした2人ニヤつきながら小雪の顔を寄せた。

「ほおほお。だいちゃんとはまた随分愛らしいあだ名ですなあ」

「んじやあやつぱ失恋したわけじゃないみたいだね。で、あれからさらに仲が深まって……」

「も、もう！よっちゃん!」

からかわれて頬を膨らませる小雪だったが、そこへ追い打ちをかけるように、バス停に停車したバスに乗り込んでくる人達の中に、話題の中心人物がいた。

「……あ」

「よう」

「お、おはよう……」

榊原 大地だった。彼の顔を見た小雪は顔を紅葉色に染めて朝の挨拶をした。そこへ友人達もニヤつきながら挨拶をする。

「おっはよく、だいちゃん」

「おはようだいちゃん!」

「……何でさ」

目を細めながら、小雪以外の人物が挨拶し、更には小雪しか呼ばないあだ名で呼んできた事に訝しんでいた。

「ほらほら、仲良しカップルさん達はここに座った座った」

「ちよ、ちよつとスミちゃん!?」

「ほら、こつち来て座んなよ」

スミちゃんと呼ばれた少女がわざと席を空けて、大地を小雪の隣に座らせるようにしたのを見て、小雪は慌てふためいた。もう1人の少女は大地に手招きしている。

そんな女子3人組のやり取りに呆れながら、大地は質問した。

「……てかさ。お前ら誰？ 小雪の友達なのは分かったけど」

「あそつか。名前知らないんだっけ。吉乃浦よしのうら 芳子よしこだよ」

「スマイレよ」

「……榊原 大地」

自己紹介した後、大地は鼻を鳴らしながら、一応空けてくれた席に座った。普段は立ちっ放しになる為、久しぶりにリラックスしていた。

バスが再び動き始めてからも、隣同士座っているはずの小雪と大地には会話がなかった。やがて成り行きに見飽きた芳子とスマイレは恋愛から派生したトークに夢中になり、2人から視線を外した。単に2人の仲を邪魔しないようにという気遣いもあったのかもしれない。

2人の間で沈黙が続き、退屈になってきた大地は少し視線を外すと、小雪の顔が見えた。その表情は暗い。見えて居心地の悪くなった大地は、しばらく見つめた後、何かを察して小声で声をかけた。

「……シザースの事、まだ気にしてるのか」

「……！ う、うん……」

急に声をかけられて驚いた小雪だったが、すぐに視線を下に向けて頷く。

「あいつは自分に溺れただけの奴だ。お前が気に病まなくても良い」

「で、でも……」

「お前はお前なりの正義を貫け。俺も颯太も、仲間みんなも見守ってくれる。それを忘れんな」

「……うん」

それっきり、会話は途切れた。らしくない事を言ってしまったなど

思いつつ、反応を見せない小雪を見て、大地は段々と心配になってきて、思わず彼女の手に触れようとしたが、直前で思いとどまった。

こういうのは俺の役目じゃない、と自分に言い聞かせ、しかし目線だけは小雪から離さなかった。

しかしこの時、小雪の頬が途中から暖房に当たり続けた時のように火照っている所までは気付かなかった。

その日の晩、ウィンタープリズンはシスターナナ、オルタナティブ、ファムと共にある人物の訪問を待ち構えていた。

クラムベリーとの一件から数日間、シスターナナも心に深い傷を負い、ウィンタープリズンも悔しさでいっぱいだった。オルタナティブとファムの援護がなければ、最悪の場合、シスターナナは殺されていたかもしれない。今度会った時は必ず一撃で仕留めようと心の底から決意したウィンタープリズンであった。

そんな中、シザースの脱落が決まった翌日からシスターナナは憔悴しながらも他の魔法少女や仮面ライダーに呼びかけを続けた。パートナーのオルタナティブも最新の注意を払いながら、仲間になってくれそうなメンバーを厳選していた。

そしてこの日、シスターナナ達はある人物と会う事となった。相手はまだ姿を見た事のない16人目の魔法少女。当然素性も分からない為、シスターナナ以外の3人は警戒心を強めて待つ事になっている。待ち合わせ場所でもある廃工場に予定より少し早く足を運んだ一同は、空気を和ませる為にしばらく話し合っていた。

約束の時間になり、少しした後、その人物は現れた。葬式帰りの喪服を思わせるようなドレスに、青白い肌、薄色の唇、暗く淀んだ瞳、その下にできた濃い隈、そして右腕に抱かれた白兔のぬいぐるみが、その魔法少女の不気味さを際立たせた。

「あなたが、新人の魔法少女、『ハードゴア・アリス』さんですね？」
「……」

尋ねられた魔法少女……ハードゴア・アリスはコクリと頷いた。それからファムが周りを見渡してから呟く。

「ねえ、あなたのパートナーはいないの？」
「……」

ハードゴア・アリスは首を横に振る。どうやら1人で来たらしい。ちなみにハードゴア・アリスのキャンディーの初期所持数は全員の合計の平均だけ手にしているとファヴから事前に伝えられている。シスターナナは早速本題に入り、情熱を込めて熱く語り始めた。内容としては、魔法は人々を幸せにするものである事やカラミティ・メアリに襲われかけた時の事、今現在行われている競い合いの事、その過程で脱落し、死に至った者達の事、そしてクラムベリーという魔法少女の危険性などなど、全てを包み隠さず話した。

「今こそ団結すべき時です。これ以上の犠牲を出さない為にも知恵を集めて考えましょう。私達には現状を打開するアイデアが必要なのです」
「……」

……が、ハードゴア・アリスは出会ってから一度も口を開かない。ウィンタープリズンからしてみれば、無反応というよりもぼうっとしているようにしか見えない。さすがに苛立ったウィンタープリズンは声を荒げた。

「……おい、聞いてるのか！」

「……」

「そもそも今回の騒動の発端は、君が16人目の魔法少女としてこの街に現れた事なんだぞ。もう少し責任ぐらい感じて」

「ウィンタープリズン、そこまでです」

唐突にオルタナティブに肩を叩かれ、ウィンタープリズンは押し黙った。如何にウィンタープリズンといえども、講師に逆らう事は無かった。

それから話は続いたが、ハードゴア・アリスがようやく反応を示したのは次の話に入った時だった。

「つい先日、スノーホワイトが襲われたという話を聞きました。おそらくはキャンディーを狙ったの事でしょう。彼女は所持数がダントツのトップでしたから。それに伴い、パートナーである九尾も深手を負ったとの事です。ああ、なんとという浅ましい事を……」

「……スノーホワイト、そして九尾とは」

シスターナナも口を閉じ、ハードゴア・アリスの話を聞く事にする。

「白い魔法少女、そして、白い仮面ライダーですか？」

「え、ええ」

「スノーホワイトは学生服、そして九尾は、狐みみたいな姿、ですよね」

「そうですね」

「どこにいるか、分かりますか？」

「そ、それは……」

シスターナナは返答に困り果てて3人の方に目をやった。

「以前までは俱辺ヶ浜にある鉄塔を拠点にしていたそうですが、先ほどシスターナナも言ったように、襲撃を受けてからはトップスピード達と共に場所を転々としていますからね……」

「……俱辺ヶ浜、ですね。ありがとうございます」

「あ、ちよつと！」

ハードゴア・アリスは頭を下げると踵を返して駆け出し、廃工場を後にした。

「あいつ、敬語を使う事ができたのか」

ハードゴア・アリスの後ろ姿を眺めながら、的を外れを自覚した感想を述べる。

「でも、何で急にあの2人の事を……」

「スノーホワイト達を、助けに行っただのでは無いでしょうか？」

ファムとシスターナナの会話を耳にし、ウインタープリズンはふと思った。

「……キャンディーを奪いにいったのか」

「えっ？」

「いや、何でも無い……」

考え過ぎか、と思い返し、ウインタープリズンはシスターナナ達と共に廃工場を離れ、解散して帰宅した。

深夜、仮面ライダーとしての活動を終えた手塚はシャワーを浴びた後、ふとした気持ちで占いをする事にした。

机に置かれた何枚もの紙には様々な模様が描かれており、近くには火のついたロウソクが置かれている。それらをジッと見つめている

と、偶々開いていた窓から吹き込んできた風がなびいて、机に置かれた紙を撒き散らした。手塚が椅子から立ち上がって拾おうとしたその時、手塚の手がピタリと止まった。何枚も散らばった紙の中の1枚だけが、ロウソクの炎に引火して燃えていた。そこに描かれていたのは、剣のような形の紋章。燃えカスとなった後もジツとロウソクの炎を見つめていると、脳裏に異様な光景が浮かんできた。

どこか分からない工場付近のシャッター通り

血の海の中心にうずくまる少年の姿

「……」

いつの間にか流れ出た汗を拭いた後、ロウソクの火を消して窓の縁に手をかけ、夜空を見上げた。

そして呟く。

「……颯太」

手塚の全身に、先ほどとは違い、生温い風が吹き抜けた。

4.2. 騎士道の誇りにかけて

「そうか。やっと努力が実を結んだってわけか」

「へへ……。これも応援してくれた大地や小雪のおかげだよ」

夕日に照らされながら、川辺の広場でサッカーボールを蹴っているのは、小学校からの親友でもある大地と颯太だった。

互いに仮面ライダーや魔法少女である事が判明して以降、2人はそれまでのすれ違う時間が嘘のように、会う機会を設けるようになり、再び活気付いてきていた。この日も短い部活時間の後に2人並んで帰ろうとしていたのだが、颯太に、川辺の広場で練習に付き合っしてほしいと頼まれ、大地はそれを承諾。パスの練習をする最中、颯太が数週間後に行われるサッカーの大会に代表者として出場する事が決まった事を告げられた。規模の大きい大会なので、颯太は俄然張り切っている。

「今後の進路にも関わってくるかもしれないし、ここは絶対に活躍しておきたいんだ」

「プロサッカー選手になって海外で活躍するのがお前の夢だったよな。頑張れよ」

「ありがとう」

「次の大会も、時間があつたら観に行くからさ。小雪も誘っておくぜ」
「は、恥ずかしいなあ……」

小学生の頃以来となるパス回しをしながら互いに言葉を交わし合う2人。

一通り練習を終えて、草むらに腰を下ろして休憩する最中、大地はふと気になった事を尋ねた。

「あ、そっぴやさ」

「? 何だ?」

「小雪の事なんだけど……」

「小雪がどうかしたのか?」

「……あいつ、ルーラとやりあつてから全然元気ないよな」

「……うん」

颯太は顔を俯かせて頷いた。

龍騎達と手を組むまで拠点にしていた鉄塔でルーラチームに襲撃を受けて以来、スノーホワイトこと小雪は沈んでいた。キャンディーを奪うという発想や、パートナーや家族を裏切る思考、さらには自己主張の為なら平気で一般人にも手をかけるといふ正義を掲げたりと、到底スノーホワイトとは真逆の考えを持った魔法少女や仮面ライダーがいる事に、彼女は悲しんでいる。事実、話しかけても生返事が多く、何も話してない時はどこか遠くに目をやっている。

それから颯太は静かに顔を上げた。

「……あれは、僕のせいだ。マジカルフォンのバージョンアップ機能を譲渡目的としか考えていなかったから、僕や大地、それに手塚さんも油断してしまった」

「そ、それは……」

「あの鉄塔だって、チャットで話した事もあったし、いわば迂闊な公開情報だった。襲撃には絶好のポイントだったに違いない。小雪と同じ考えを共有していると決めつけてしまったから、彼女は戦えなかった。分かっていたはずなのに……」

「お、おい颯太」

「力を振るう事に没頭し過ぎて、小雪だけじゃなくて、城戸さんにも被害が及んでしまった……!」

全部、僕が悪いんだ。

そう言い切った颯太を見て、すぐさま大地は颯太の額を小突いた。

「……っ」

「ちよつと責めすぎじゃねえのか。何もお前が全部悪いわけじゃねえだろ」

「でも、絶対に守るって誓っておきながら、この有様だぞ!? 情けないだろ……」

「なら俺も同じだ。パートナーなのに守れず、キャンディーを奪われて、そのくせ心配までかけさせちまって……」

不意に大地は、以前怪我をした右腕の部分に目をやった。

「だから、その……。無理に一人で全部抱え込まなくていい

んじゃねえの？　どんどん頼ってけよ。このままじゃ、お前が先に壊れる」

「頼る……」

「こんな言い方、俺らしくないかもしれないけど、俺だってパートナーとしてあいつを守りたい。でもやっぱり俺だけじゃ無理だ。お前みたいに頼れる奴がいないと、結局ダメだ。だからさ、俺達で守ろうぜ。小雪を、あいつの言う正義ってやつを」

「……ああ、そうだな」

颯太は深く頷き、何かを決意したように、夕日の反射で美しく輝いている水面を眺めた。その様子を見つめながら、大地は口を開いた。「小雪の事はお前の方が一番知ってると思うけど、やっぱりあいつは昔からこういう事は苦手なのか？」

「それで間違いない。子供の頃から争い事は大嫌いだった。自分には関係ない事でも誰かと喧嘩を始めていたら泣き出してたし」

「そっか……」

本当に何かを奪い合ったり傷つけ合うのは不向きな魔法少女なんだな、と大地は思った。

「……だからこそ、守りたいって思った」

そう呟く颯太の目は真剣そのものだった。本当に小雪の隣にいるべきなのは、彼ではないのかと、大地は思った。自分では、彼女を支える立場にはなり得ない気がしてきたのだ。

「必ず守ろう。小雪や、チームのみんなを」

「ああ」

2人は同時に立ち上がり、互いに見合った。大地はまだ、小雪の全てを知っているわけではない。少しでもパートナーとして守る立場にあるなら、知る必要がある。その為には、彼女を勇気付けなければ。大地の決意は固かった。

すると、颯太はこんな事を言い出した。

「……それから。僕、やっぱりトップスピードにもちゃんと自分の事を話しておきたいと思うんだ。これから先、同じ仲間として、隠し事は極力避けていきたい」

「それって、自分から明かすって事なのか」

「う、うん。結構緊張するけど、これ以上自分の中で彼女にだけ秘めておくのは難しくて……。だから、もし困ったら」

「俺が助ける。当然だろう？」

「……ははっ。やっぱり大地は頼れるよ」

大地は肩を竦め、颯太は頭を掻き、しかし両者は笑みを浮かべながら、話を進めた。

やがて門限が近づいている事を知った大地は、颯太に手を振りながらN神社に向かって歩いて行った。

歩きながらふと思いついたのは、小学生の時に、偶々鉄棒の順番で同学年の生徒と喧嘩になった際、全く関与していないにもかかわらず、大粒の涙を流しながら自分の事をジツと見つめてくる少女がいた事だった。喧嘩の内容ではなく、その時の表情が何故か印象強く残っていて、記憶の底から掘り起こされるぐらいのものだった。あの時はどこの誰かも分からなかったが、今にして思えば、あれが現在のパートナーだったのだろう、と大地は呆然としながら推測した。

その日の晩、いつものようにパトロールを終えて、人気のない港の

コンビナートの一角に隠れるように腰を下ろして休憩していた。皆が地図を広げて今後の事を話し合う中、依然としてスノーホワイトの表情は優れなかった。魔法少女は精神力に応じて魔法の精度も変わるらしく、現にスノーホワイトの能力が活かせず、今日のキャンデーの獲得数は今までと比べて低い方だった。

さすがに気になった一同はスノーホワイトに声をかけた。

「んじゃあ明日はこの辺りを調べてみるか。あたしの知ってる限りじゃ、この辺の修復がまだ……って聞いてんのかスノーホワイト？」

「……え、あ、はい」

「だ、大丈夫？ スノーホワイト」

「……はい」

スノーホワイトはそう呟くものの、明らかに雰囲気暗い。これを見た九尾とラ・ピュセルは頷いて、スノーホワイトに寄り添った。

「落ち着いてスノーホワイト。大丈夫だ。思い出すんだよ、僕達が憧れていた魔法少女達の事を。どんなピンチに陥っても絶対抜け出してきただろ？」

「それはアニメの話……」

リップルが口を開いて何かを呟こうとするが、九尾とライアが右手を突き出して待ったをかけた。それによりリップルも仕方なく黙り込む。

「大丈夫。正義は死なない。絶対に……！」

魔法少女を、自分を信じるんだ。その一言を聞くと、スノーホワイトも僅かながら表情を変えた。さらにラ・ピュセルはこう論じる。

「僕は、この競い合いは世の為になる本物の魔法少女や仮面ライダーを選ぶ試験なんだと思ってる。シザースの事を知ってそう思った」

「世の為に、か。だがそれは……」

「もちろん根拠としては弱いつて分かってます」

ナイトが反論する前に、ラ・ピュセルは口を開いた。

「でも、これがある種の選抜試験だと思うと、ますます生き残らなくちゃ、って気合いが入る。正しい事をしている魔法少女や仮面ライダーは絶対に死なないはずだ。……僕はそう思いたい」

「そう、ちゃん……」

「俺は絶対にここに居る誰も死なせない。ましてや、スノーホワイトは俺のパートナーだ。お前の持つ正義を消させないし、絶対に見殺しになんかせせない」

「だい、ちゃん……」

ラ・ピュセルと九尾の言葉を聞き、スノーホワイトに僅かだが光が戻ったような気がした。するとラ・ピュセルは追い打ちとばかりに懐からある物を取り出した。

「これ、覚えてるかい？」

そう言つてラ・ピュセルが見せたのは一枚の紙のようだが、広げてみるとそこには、見た事のある衣装に身を包んだ少女の可愛らしげな絵と、『しょうらいのゆめ ひめかわ 小ゆき』と書かれた文字がプリントされている。その絵とそっくりな少女は、途端に顔を赤くして取り上げた。

「ちよ、ちよつと!?? それ私が小さい頃に描いたやつだよね!??」

「(子供の頃から思い描いてたのか、この衣装)」

「机の中に入れてあったのを持ってきたんだ」

「へえ。上手だね」

「まさに理想が現実になった、というわけだな」

龍騎とライアがその絵を見つめる中、ナイトとリップルは肩を竦め、トップスピードは高笑いしていた。

すると、恥ずかしさのあまり震えていたスノーホワイトを見て、九尾は呟いた。

「やつと、らしくなってきたな」

「……えっ?」

「今朝のバスの時もそうだったけど、ここんところ暗い顔ばつかだつたし」

「……あ」

そこでスノーホワイトは理解した。九尾とラ・ピュセルは、本気で自分を心配してくれていたのだ、と。普段は会う機会が少なくても、いつでも見守ってくれている。その事がスノーホワイトを安心させ

ていた。2人の素顔を思い浮かべながら、スノーホワイトは感謝した。

「……ありがとう」

スノーホワイトは恥ずかしがりながらも、その言葉を口にすると、ラ・ピュセルもニツコリと笑った。九尾の方は分からなかったが、安心しきった表情になっているに違いない。

そう思っていると、不意にトップスピードが笑いながら尋ねてきた。

「いや、しっかしラ・ピュセル。お前アレだな。魔法少女の事喋りだしたら本当に熱いよな！ それにスノーホワイトとは昔から親しいんだっけ？」

「まあ、家も近かったし、お互い魔法少女が大好きだったから、小さい頃はそれはもう毎日一緒に遊んでたんだ。でも小学校に上がってからは、大地と遊ぶ方が多かったよ。その過程で、城戸さんとも知り合えた」

「うんうん。2人とも本当に仲が良かったからね」

龍騎の変身者、城戸 正史も深く頷く。

すると、ラ・ピュセルはおもむろに立ち上がり、マジカルフォンを手持った。

「? どうしたの?」

「この中じゃ、トップスピードにはまだ見せていなかったよね。僕の秘密を」

「? お前の秘密?」

「!?? ちょ、ラ・ピュセル!?? もしかして……!」

「自分から話す決心がついたのか」

ライアが落ち着いて理解する中、トップスピードだけは頭に? を浮かべていた。

「……いいの? そうちゃん」

「構わないよ。もうトップスピード以外には明かしてるし」

「俺だけ知らない事なんてあったか?」

「僕の正体だよ」

そう呟いてラ・ピユセルはタップすると、光に包まれて、中から変身者でもあるジャージ姿の岸边 颯太が7人の目の前に披露された。ほとんどがノーリアクションではあったが、ただ1人、彼女だけはポカーンとしていた。

「……………え? はっ? えっ?」

「気が動転するのは分かるよ。でも、これは事実だ。僕が、ラ・ピユセルだ。小雪の幼馴染みで大地の友達の、岸边 颯太」

苦笑混じりにそう呟く颯太をしばらくジツクリ眺めた後、

「イエアアアアアアアアアアアアアアア?」

驚きのあまり、奇声をあげながら両手のひらを地面につけた。

「えっ、ちよ、おま、ええっ!?? おと、男!?? な、何でまたお前があ!??」

「落ち着けトップスピード」

「これが落ち着いていられたかよ!??」

リップルの冷ややかなツツコミに対し、トップスピードは喚き立てる。パートナーの龍騎やライア、九尾がどうにかして落ち着かせた後、颯太は一旦ラ・ピユセルの姿に戻って、事の経緯を話し始めた。恥ずかしさはあったものの、九尾やスノーホワイトのフォローもありながら、全てを話し終えた。

「魔法少女が好きなら、男でもなれない事はないらしい。ファムミタいに、女でも仮面ライダーになれるように」

「いやまあ、それはまだ分かるけどよ……………男が魔法少女になったらそりゃあ驚くだろ普通。みんなもそうだろう?」

「確かにいつもサッカーばかりやってる姿しか見てなかったし、そんな様子は全然だったから、俺だって驚いたよ」

「私も……………かな」

九尾とスノーホワイトはトップスピードの意見に同調しつつもそう話した。他の4人も、最初にラ・ピユセルの正体を知った時の事を思い返して、少しばかり頷く。

すると、全てを明かして何かが吹っ切れたのか、ラ・ピユセルはヒートアップしながら喋り始めた。

「女の子なら『魔法少女が好きでも夢見がちねオホホ……』でも済むけどね! 『中学生にもなって男が……』なんてなると、それは最早異常者レベル……変態扱いだよ! それはもう隠れキリシタン並みの迫害を覚悟しながら毎日せつせと魔法少女に隠れながらかじりついていた……!」

「ら、ラ・ピュセル……?」

「(こいつ、変なスイッチが入ったみたいだな)」

「だから本当に魔法少女に選ばれた時の喜びは、君達女子の比じゃなかったと思うよ! 色々とね!」

「おお、わ、分かった! 分かったから落ち着けよ!」

「……」(お前「あなた」へトップスピードが言うな「言わないでよ」へよ……)「……」

それから両者を落ち着かせた後、ラ・ピュセルは深呼吸してからこう語り出す。

「……あの時は、これ以上の奇跡はもうないって、そう思ってた。けど……、また奇跡は起きたんだ。僕が魔法少女になって、大地や小雪とまた会えるようになって、チームを組んで、それから、こんなにも多くの仲間が出来る……」

凄く、嬉しかった。率直な感想を述べたラ・ピュセルの表情は清々しさに溢れていた。

「トップスピード。そういう事だから、この事は内密にお願いしてくれ。俺達もそれを認めてるし、何よりあんたを仲間だと認めたから、こうして話せたんだ」

「おうよ! こう見えても口は堅い方だからな! そりゃあ最初はビビっちまったけど、もう平気だ! てなわけで、これからもよろしくって事で!」

「ああ。ありがとう」

ラ・ピュセルとトップスピードは切れる事のない友情の証として、互いに握手した。

「ま、よかったな、ラ・ピュセル」

「うん。ありがとう」

「私、そうちゃんやだいちやんがいなかったら、こんなにも出会いがなかったし、とつくに脱落してたと思う。2人がここにいてくれて、本当に良かったよ……。ありがとう！」

スノーホワイトは嬉し涙を流しながら、2人に抱きついた。2人が焦りながらもやれやれといった表情でスノーホワイトを慰める中、ライアはずっと黙り込みながら3人を、特にラ・ピュセルを見つめていた。

ひと騒動あったものの、無事に今日の活動を終えた一同は解散した。九尾、ラ・ピュセル、ライアはスノーホワイトを家の近くまで送るためについていった。

やがて住宅街の一角の屋根に立ち止まってから、ラ・ピュセルは口を開いた。

「それじゃあ、僕達はこの辺で」

「うん。いつも送ってくれてありがとう」

「じゃ、またな」

「おやすみ」

「うん！ またね！」

そう言ってスノーホワイトは立ち去ろうとしたが、不意に後方を振り返って、口を開いた。

「ねえ、そうちゃん、だいちゃん、ライア」
「？」

「私、みんなと一緒に生き残りたい。こんな争いが早く終わるように、頑張ろうね」

「……ああ、もちろんさ」

ラ・ピュセルの言葉を聞いて、スノーホワイトも満足げな表情になり、今度こそ帰宅した。

「じゃあ俺達も」

「……」

「何かついてるのかい？」

ライアの視線が気になったのか、ラ・ピュセルはそう尋ねた。

「いや、何でもない。ただ……。帰り道には気をつけるんだぞ。こんな状況だから、いつ何が起こるか分からない」

「うん。大丈夫」

「じゃあな」

3人はそれぞれ家のある方向に顔を向けて、屋根の上を飛び回りながら去っていった。

……のだが、何故かラ・ピュセルだけはその場にとどまっている。その理由は、すぐに明らかとなる。

「出てきなよ。港にいた時から、僕達をつけていたのだろう？」

「……ほお、よくぞお気づきに」

ラ・ピュセルが背後にいる何者かに声をかけながら振り返ると、煌々と輝く月をバックに佇む者が。

体に飾られている花々が特徴的なその人物は、ラ・ピュセルと同じ魔法少女だった。

「さすがです。では何故他の者達を帰したのですか？ 港にいた時点で気付いているなら、8人で相手にすればいいものを」

「私1人の方が、やりやすいから」

「話が早くて分かりやすい」

目の前の魔法少女は不敵な笑みを浮かべる。

ラ・ピュセルが皆に伝えなかつた理由は単純だった。ただでさえ仲間同士の争いで肉体的にも精神的にもダメージを負っている者がチーム内にいる以上、これ以上の負担をかけさせるわけにはいかない。要するに、『これ以上他人を巻き込みたくない。迷惑をかけられない』と思い、あえて自分1人で相手にする事にしたのだ。

「ラ・ピュセル。あなたはガイら6人を相手に戦って勝利したと聞きました」

「……あれは、勝利などと言えないものだ。結果的に2人もキャンディーを奪われ、怪我を負う者もいた。それに、パートナーがいなければ勝てなかつたのも事実だ」

「まあまあ、謙遜や卑下する事はありませんよ。私にはその事実があれば良いのです。あなたが強い魔法少女であるからこそ、私があなに挑戦する意味がある」

それを聞いた途端、ラ・ピュセルは訝しんだ。

「キャンディーが目的ではないのか？」

てつきりキャンディーの強奪が目的かと思っていたラ・ピュセルだったが、目の前の魔法少女は、顔色1つ変えることなく、目的を語った。

「私は、森の音楽家クラムベリー。キャンディーはいりません。欲しいのは……『強敵』です」

魔法少女……クラムベリーの言葉を聞き、ラ・ピュセルの緊張感は一気に高まった。彼女から発せられるオーラは只者ではない事を証明している。強敵と戦うという目的の真意は定かでは無かったが、騎士としてのプライドがある以上、背を向ける事はない。

全ては小雪を、大地を、チームの仲間を守るために。彼女は決断する。

「我が名はラ・ピュセル。森の音楽家クラムベリーよ。相手になろう！」

「ありがとうございます。では……」

相手の承諾を得たクラムベリーは、拳を固め、一直線に駆け抜けた。

対するラ・ピュセルは剣を抜き、向かってくる魔法少女を撃退する為に身構えた。

一方、自宅付近までやってきたライアだったが、唐突に立ち止まり、後ろを振り返った。先ほどまで九尾やラ・ピュセルといた方向に目をやっても、そこには誰もいない。そのはずだったが、不意に昨日占った内容が脳裏によぎった。

「（この胸騒ぎ……。俺の中で何かが警笛を鳴らしている……！）」

ライアが今一度3人でいた場所に戻ろうとしたその時、マジカルフォンから音が鳴り響いた。モンスターの出現を知らせるものだが、雰囲気がいつもと違う。それは以前、シザースの契約モンスター『ボルクヤンサー』が現れた時と似たようなものだった。

ライアが辺りを警戒していると、どこからか黒い影が体当たりしてきた。ライアは地面を転がりながら襲撃した敵を把握した。

「あれは……」

ライアだったが前に立ちはだかったのは、金色の不死鳥をイメージさせるモンスター『ゴルトフェニックス』だった。まるでライアの手を阻むように、ライアを睨んでいる。

「契約モンスターか……！ しかもこのタイミング……。まさか……」

！」

嫌な予感がしたライアは先へ進もうとするが、ゴルトフェニックスは通さない。

「もう少しだけ持ち堪えてくれよ、ラ・ピュセル……！」

ライアはパートナーの名を呟きながら、先ずはゴルトフェニックスを撃退する為に立ち向かった。

4.3. 黄金のライダー

岸边 颯太は大がつくほどに魔法少女好きだ。

その原因としては、幼馴染みの姫河 小雪と幼少期から魔法少女系のアニメを視聴していた事にある。どんなピンチに陥ろうとも、希望を胸に、最後には必ず勝利を掴みとる。そんな姿に彼は惹かれ、何時しか憧れていた。小雪と共にいつもアニメキャラの真似事をして遊んでいた。以来、彼は約10年間に渡って魔法少女に携わってきた。

しかし成長するにつれて周りが魔法少女を卒業していく中、段々と羞恥心が芽生え始め、颯太ははたと困り果てた。唯一、幼馴染みだけは未だに魔法少女を捨てていないようだが、男である颯太は葛藤していた。それでも夢を捨ててきける事はなく、親や親友には内緒で、魔法少女に関する事柄なら、アニメは欠かさず視聴し、漫画は揃え、部屋の隅に隠し置いていた。

そんな彼にはもう1つ夢があり、それはプロのサッカー選手になってヨーロッパで活躍する事だった。魔法少女に携わる傍ら、サッカーに勤しんでいた際に出会ったのが、榊原 大地と呼ばれる少年だった。校庭で遊び相手を探していた際、同じクラスだった大地に誘って共にサッカーをして以来、意気投合。毎日のように互いの家に遊びに行ったり、街に出かけたりと、自他共に認める『大親友』として2人3脚で小学校生活を楽しんでいた。同じ中学に上がると、大地の家の都合で会う機会も減ってしまったが、サッカーに一生懸命取り組み、魔法少女にかじりつく事だけは変わらなかった。

そんな彼が『魔法少女育成計画』と呼ばれるアプリと出会ったのは、中学2年に上がって間もない頃。『プレイしていると本物になれる』という噂も耳にしていたが、颯太は気にせずプレイしていた。そもそも期待すらしていなかった。少女でない自分が魔法少女の力を身につけても大変みつももない。ただ、理想の魔法少女を作るという作業が、魔法少女ファンである颯太にとって楽しくないわけがない為、あくまで純粹に楽しむ事だけを目的にゲームを進めた。

……が、どんな運命のいたずらが働いたのか、彼はなつてしまったのだ。竜騎士を彷彿とさせる魔法少女『ラ・ピュセル』に。

「いや困るから!?? 確かに魔法少女は好きだけど！ 自分がなりたいてってわけじゃないから！」

『そんなのこつちだつて困るぽん。男の子の魔法少女はレアなのにほん』

「しよ、少女つて……」

ラ・ピュセルは思わず鏡に目をやり、体のあちこちを触り、そこでようやく自分の性別そのものまで変貌してしまっている事を確信し、顔を最高潮に赤らめた。

魔法少女になつてから1週間が経ち、正体を隠しながらも夕方から深夜にかけて人助けやモンスター退治、先輩魔法少女や先輩ライダーとの交流も徐々に進め、ようやく慣れ始め、そろそろ教育係が決まりかけてきた頃、ラ・ピュセルは不思議なライダーと出会つた。まだ会つた事すらない人物だつたが、どこことなく不思議なオーラの持ち主である事は理解できた。

「……なるほど。君が数奇な運命に選ばれた者か？」

「俺はライア。君が新人のラ・ピュセルだな？」

「え、ええ」

「中々に大変な事情を抱えているな、君は」

「……え」

「異性として手にした力をどう使うか悩んでいる。俺の占いでそんなお告げがあつた」

「……!?!?」

ライアの言葉を聞いて愕然としたラ・ピュセル。どのような経緯で知つたのか定かではないが、明らかに自分の秘密がバレている。必死に言い訳をする間も無く、ラ・ピュセルは崩れ落ちた。さすがに気を

悪くしたかと思ったライアはラ・ピュセルを落ち着かせ、話し合う事にした。話を進めていくうちに、ラ・ピュセルの心に来た傷は癒されていった。元々心理学を学んでいたようだが、彼の語る言葉はラ・ピュセルを勇気付けた。そして彼は最後にこう語る。

「人間誰だって踏み間違えたルールを進んでしまう事がある。だがそこから修正する事だって出来る。それは自分に誇りを持つ事だ。そうすれば、自ずと運命は変わる」

異性である自分を認めてくれる。

ラ・ピュセルはライアに感謝すると同時に、彼の下で指導を受けてみたいと思うようになり、当初はシスターナナが受け持つはずだった予定を急遽ファヴやシローに頼み込んでライアに変えてもらった。

2人での活動を進めていくうちに、今度は颯太を驚かせる出来事が。まとめサイトで見かけるようになった新人の魔法少女を調べてみた結果、幼馴染みが子供の頃に描いていた理想の魔法少女像と酷似している事に気付き、その魔法少女『スノーホワイト』が小雪だと気付いた時には大変驚き、また会いたいという衝動に駆られた。しかし出会いはそれだけにとどまらず、今度は親友である大地が仮面ライダーになっていたので。学校でモンスターの出現を知り、人目のつかない所で変身しようとした最中、彼は大地が新人の仮面ライダー『九尾』になる所を目撃する。その際颯太の秘め事まで知られる形になったが、結果的に大地は颯太を、ラ・ピュセルを認めてくれた。その時の歓喜は今でも忘れる事がなかった。

そしてスノーホワイト、もとい小雪と再会し、ライア、九尾と共にチームを組み、共に行動出来る日々が楽しかった。理不尽なゲームが始まってからも、彼女の意志は変わらなかつた。何があっても、3人を守り抜いてみせる、と……。

そんな特別な事情を抱えている魔法少女……もとい魔法騎士は不気味な雰囲気を漂わせる魔法少女『クラムベリー』と対峙していた。キャンデーの奪取が目的ではなく、強敵との戦いを目的としている事に不信感を募らせるラ・ピュセルだったが、向こうがその気なら返り討ちにするまでだと思い、剣を構えた。ラ・ピュセル自身、強敵との戦いを欲していたのも事実であり、仲間に危害を加えさせる事なく勝利するという二重の目的を持って、決闘を受け入れた。

最初に動いたのはクラムベリーで、一直線に突撃してきた。ラ・ピュセルは飛び上がり、追いかけてきたクラムベリーに肥大させた剣を振るう。が、クラムベリーは紙一重でそれをかわし、屋根の上に降り立つ。ラ・ピュセルが電柱に降り立った途端、周りの家に明かりが灯り始めた。外から聞こえてくる激しい音が気になったのだろう。

「(マズイ……！　ここだと人目につく……！)」

魔法少女同士の争いに、一般人を巻き込むなど言語道断。そう思ったラ・ピュセルは屋根の上を飛び交いながらクラムベリーに目配せした。ついてこい、と。

対するクラムベリーは少し考える素振りを見せた後、ラ・ピュセルの後を追いかけた。

ラ・ピュセルがやってきたのは、民家から遠く離れた、倉庫が立ち並ぶ港。クラムベリーはそこでラ・ピュセルが窓ガラスに入っていくのを目撃し、クラムベリーも同様に窓ガラスへと突入した。

窓ガラスや鏡などの向こうに存在する世界『ミラーワールド』に入り込んだ2人は倉庫の屋根の上で距離をとって向かい合った。音1つしない世界を見渡しながらクラムベリーは呟く。

「……或いは罠かと思いましたが、考えすぎでしたか」

「ここなら人目にもつかないし、いくら暴れても現実世界に影響はない。存分に互いの力を出し切るのに、ミラーワールドは最適な場所だから、正々堂々と戦おう」

「それは失礼いたしました。強者を目指し、強者を求めて、2人が全力で戦うには、確かに最適なフィールド。王道を上手く利用しましたね」

クラムベリーがラ・ピュセルの対応を褒め称える中、ラ・ピュセルは険しい表情で剣の柄を握った。

「私は……私のなるべき魔法少女を目指す！ それだけだ！」

そう叫んだラ・ピュセルは剣先をクラムベリーに向け、長さを変化させた。よりリーチの長くなった大剣は屋根を擦りながらクラムベリーへと迫ったが、クラムベリーは難なく避ける。

無論ラ・ピュセルもそうなる事は想定済みだったらしく、元の大きさに戻す反動でクラムベリーの真下へと体を動かし、飛び上がって体を捻らせると両足を突き出した。クラムベリーは両腕をクロスしてこれをガード。別の屋上に足をつけた両者は手を緩める事なく戦闘を続けた。ラ・ピュセルの振るう大剣をかわしつつも反撃とばかりに拳を振るってくるクラムベリー。剣を相手に拳だけで対抗するクラムベリーも賞賛に値するが、ラ・ピュセルも負けてはいない。空中戦に持ち込まれると、クラムベリーが途中でバランスを崩し、ラ・ピュセルは隙を逃す事なく蹴りを入れる。

「……やはり、強い！」

「うおおおおおおおつー！」

劣勢な立場にいるはずのクラムベリーが強気な笑みを浮かべる中、ラ・ピュセルは咆哮と共に飛び上がり、上空から下降して斬りつけようとした。

「(ミラーワールドでの活動時間にも限りがある！ 現実世界で力を

振るう事にならない為にも、ここで一気に決着を……!?!?」

「何を焦っているのですか?」

「!?!?」

命中したという手応えがない。そう思っていた矢先に砂埃の中からクラムベリーの声が聞こえてきた。ハツとした時には、すでに首元を掴まれていた。

「他事を考えなくても結構なのですよ。私もあなたと同様に強者を求めています。……いや、求めている? そんな生易しいものではないですね」

「……!」

「飢えて、いるのです」

その時、ラ・ピュセルは見てしまった。クラムベリーの顔が興奮のあまり紅潮している事に。その笑みは今まで見てきたどの表情よりも恐ろしきを感じさせている。

クラムベリーの右腕を引き離そうとした時、クラムベリーの膝蹴りがラ・ピュセルの腹を直撃した。無防備な箇所への一撃を受けたラ・ピュセルは口から血を吐き出しながら屋上にワンバウンドしてから地上に落下した。

以前ルーラから受けた腹蹴りよりも痛みが数倍響いており、ラ・ピュセルはすぐには立ち上がれなかった。そんな彼女の元へ、クラムベリーは降り立ち、語り始める。

「でも、あなたのように自分が強くなる為に戦いに挑んでいる訳ではありません」

「……!?!?」

「私は、より強い者を、この手で殺したいのですよ」

「コロ、ス……!?!?」

ラ・ピュセルが反応するよりも早く、クラムベリーはラ・ピュセルの胸ぐらを掴み、左の拳で殴り飛ばした。声にならない悲鳴をあげながら地面を転がったラ・ピュセルへの、クラムベリーの猛攻は止まらない。ボロボロになりながらも立ち上がったラ・ピュセルに対し、クラムベリーは接近して右のこめかみにキックをかました。

ラ・ピユセルは吹き飛ばされ、そして気づく。眼前にはコンクリートの壁が広がっている。あれは無抵抗で直撃すれば、自身の体はタダでは済まない。

「……っ！」

ラ・ピユセルが思わず身構えた、その時だった。

「ハアッ！」

壁に激突する直前、何者かが横から飛び出してきて、彼女を抱き抱えながら地面を転がった。クラムベリーは目を細めて、乱入者を確認した。そして、ニヤリと口元を歪める。それはある意味で対決を希望していた人物だったからだ。

「ギリギリってどこか。無事じゃなさそうだけど」

「九尾……！」

「つたく。無茶しやがって。小雪が泣くぞ」

突如現れた親友の介入により、ラ・ピユセルの窮地は救われたのだ。

ラ・ピユセルは口元についた血を拭いながら疑問を口にした。

「でも、どうしてここが……！」

「さあな。何となく引き返したらお前がクラムベリーに追いかけられているのが見えてな。ついていったただけだ。さすがにこの場所を特定するのは時間がかかったけどな」

「そうか……。済まない」

「だから無茶すんなって言ったろ？ 一人で抱え込みやがって」

「けど……！」

「まあ、細かい話は後だ。それより……」

九尾はラ・ピユセルの前に立ち、襲撃者を睨みつけながら口を開いた。

「……お前、何をしてるんだ」

「見ての通り、決闘ですよ。文字通り、死力を尽くして戦う、本当の戦い。つまりは殺し合いのようなものです」

「殺し合い……？ 何でそんな事を」

「それが私の流儀だからです。……いや、そもそもこれが定理なのですよ。より強い強者を求めて戦うだけでは足りない。その強者を殺

め、喰らい尽くす。そうする事で、私達魔法少女や仮面ライダーは、強くなれる」

「ち、違う……！　僕は、そんな事がしたくて、この戦いを受けたんじゃない……！」

クラムベリーの言葉を聞いたラ・ピュセルは震え上がり、地面に座り込んだ。クラムベリーは眉をひそめる。

「おや、戦う相手が出来る事を望んだのでは？」

「でも、殺し合いだなんて……！」

それを聞いたクラムベリーは落胆するようにため息をつき、そして呟く。

「何か、勘違いされてませんか？　人知を超える力を持つ者同士が戦うのですよ？　生きるか死ぬかが明確になるのは当然でしょ？」

「……」

「そ、そんな……！」

九尾は黙り込み、ラ・ピュセルは愕然としている。それを見たクラムベリーは冷めた口調になり、ラ・ピュセルに近づいた。

「……ラ・ピュセル。あなたには幻滅しました。死んでください」

「死なせねえよ」

そこへ立ちちはだかるように、九尾はクラムベリーの前に出た。躊躇なく殺害しようとする相手を前に、九尾は怖気付く様子を見せない。「俺も、ラ・ピュセルも、死なない。あんたが死ぬならそれはあんたの勝手だ」

「ウフフ……。やはりあなたは強者です。その彼女とは大違いですよ。だからこそ、倒し甲斐があるというものですよ」

「やってみろよ。ラ・ピュセルを、俺のダチを傷つけたお前になら、容赦しなくてもいいからな」

「では、お言葉に甘えて」

刹那、クラムベリーは九尾に素早く回し蹴りを叩き込む。が、九尾はしやがんで逆に足を突き出してクラムベリーを転ばせた。立ち上がって踏みつけようとするが、クラムベリーはいち早く回避する。

「ラ・ピュセル。ここからは俺がやる」

「ま、待て！ 相手は厄介だ！ 九尾1人じゃ……！」
「んな怪我を見せられたら、行かせられねえよ。ま、ヤバくなったら頼むぞ」

九尾がラ・ピユセルの顔に付着している血痕を見てそう呟くと、クラムベリーに向かって駆け出した。

九尾とクラムベリー。拳と拳がぶつかり合う中、クラムベリーはこんな事を話し始めた。

「やはりあなたはメインディッシュに相応しい実力の持ち主です。前菜では、私の腹は満たされません。もう少し熟してからいただきますと思っていました、気が変わりました」

「前菜とかメインディッシュとか、訳のわかんねえ事を……！」

「ラ・ピユセルでは物足りないですよ。シザースと同じようにね」「何でそこでシザースの名が……」

「以前、この付近で左腕と頭が無い男性の遺体が見つかった事はご存知ですよ？ 人並み外れた力で無くては考えられないほどに潰された跡を残して」

「……！ お前……」

不意に察した九尾は後方に跳んで壁を蹴って、クラムベリーに蹴りを入れた。クラムベリーは右腕でそれを受け流すと、悠々と答えた。

「そう、その通り。その死体こそが、仮面ライダーシザースの正体であり、あれをやったのは、私です」

「妙だとは思ってたが、お前が絡んでたのか……！」

「彼は強者になる事を望んでいた。しかし結果は散々でした。この私を失望させたのですから、当然の報いですよ。そしてそれはラ・ピユセルも然り。シザースよりは期待してましたが、所詮はあの程度……」

「あいつを、バカにするのはそこまでだ」

不意に低い声で呟いた九尾は接近して懐に入るとアッパーでクラムベリーを吹き飛ばした。口元から血が流れるのを確認しながら、クラムベリーは空中で体制を整えている。

「何を知ってるわけでもないお前に、ラ・ピユセルの事を語る資格はな

い……！」

『BRAZE VENT』

フォクスバイザーにカードをベントインさせた九尾の手に、炎の球体が出現し、

「ハアッ！」

と一声発すると火球がクラムベリーに向かって投げられた。『ブレイズボンバー』を回避するクラムベリーだったが、爆炎で九尾が近くまで詰め寄っている事に気付かず、放たれた右ストレートまでは回避できず、地面を転がった。

『SWORD VENT』

九尾は手を緩めず、フォクセイバーを握ってクラムベリーに斬りかかる。クラムベリーは依然として余裕があるのか、体をしならせて避けている。隙を見て足を蹴ると、九尾はバランスを崩して倒れこみ、そこへクラムベリーのつま先が腹めがけて蹴り込まれようとするが、左手に握られたフォクセイバーでどうにかガードできた。

一旦距離を置いたクラムベリーは、その手にマジカルフォンを握った。

「素晴らしい剣術をお持ちですね。しかし忘れてはいませんか？ 私の武器は拳だけではない事に」

そう言つてタップすると、その両手にゴルトセイバーが出現し、九尾に斬りかかった。金属がぶつかり合う音がミラーワールド内に響き渡り、火花が散った。互いに互角の勝負を繰り広げる中、クラムベリーには口を開く余裕があるのか、九尾を評価していた。

「私は魔法少女としての暦が長いですが、ここまで対等に渡り合える者はそういません。やはり最初から期待に添える人材ですね。ただ、唯一の欠点を申し上げるなら……。あなたには、人を殺めるだけの覚悟が足りない」

「そんなもの」

「知らない、とお思いでしょう。ですが、あなたも何れ気づく時が来る。世界は常に刺激を求めている。守れないものだって出てくる。その手を血に染めて、強大な力を振るってあらゆるものを手にする。

そしてその資格が、あなたにはある。あなたなら、なれるはずですよ。飢えるほどに戦いを欲する、最強の仮面ライダーに」

「そんな事にはさせない！」

不意にクラムベリーの左腕に、エビルウィップが巻きつき、身動きが取れなくなつたクラムベリー。隙を逃さず九尾は左腕を蹴り上げた。左腕から鈍い音が鳴り響き、クラムベリーは後退して妨害した相手を睨みつける。エビルウィップを片手に構えたラ・ピュセルの隣に、九尾が降り立った。

「さつきの言葉、そのまま返させてもらう。私の武器は、剣だけではない！」

「……行けるのか？」

「もちろん！ あんな奴を野放しにはしておけない！ 九尾を、人殺しになんかさせるものか！」

「同感だ。俺はあいつとは違う」

2人は剣を構えて、同時に走り出した。左腕にダメージを負つたクラムベリーは、右足を振って寄せ付けないようにしたが、2人はその手前で飛び上がった。訝しむクラムベリーの両端からはさみ込む形で両者は降り立ち、剣を立てて駆け出した。

「うおおおおおおおつ！」

咆哮と共に迫り来る2人を交互に見合い、クラムベリーは思考した。どちらの勢いも凄まじい。しかし無策にも見える。このままギリギリまで引き寄せれば、飛び上がって回避したその瞬間、両者は勢いを抑えきれずに互いの剣が互いに突き刺さる。

クラムベリーの選択肢が定まったその時、ラ・ピュセルは不意に持っていた大剣を上空に放り投げた。自ら武器を捨てた事に違和感を感じていたが、次の瞬間、ラ・ピュセルはクラムベリーにしがみつき、身動きを封じてきた。最初からこれを狙っていたのか。クラムベリーは引き離そうとするが、ラ・ピュセルは強い力で押さえつけている。

「クラムベリーー！ お前のような奴を魔法少女とは認めない！ 九尾！」

ラ・ピユセルは九尾に合図を送ると、九尾は2刀のフォクセイバーをグラムベリーに向けて突き出した。グラムベリーは必死の抵抗を見せるようにラ・ピユセルを力強く振りほどき、体を反らした。フォクセイバーはグラムベリーの両腕を掠め取り、傷口から血が流れた。だが、大ダメージとはなっていない。ニヤリと笑ったグラムベリーはガラ空きとなった九尾の腹に膝蹴りを放とうとする。が、それよりも早く九尾は地面を蹴って、グラムベリーの真上を飛んだ。

「ハアッ！」

すると、先ほど吹き飛ばしたはずのラ・ピユセルが九尾に向かって飛び、宙を舞っていた九尾の足に、自身の足を踏みつけた。

「ふんっ！」

九尾はそのまま足を振り上げて、ラ・ピユセルを上空に飛ばした。ラ・ピユセルを目線で追っていくうちに、グラムベリーは気づいた。ラ・ピユセルの向かう先には、先ほど彼女が空高く放り投げた大剣が落下している事に。更に、大剣やラ・ピユセルに注意を向けた事で、九尾の存在が疎かになり、九尾はグラムベリーの両足の甲めがけてフォクセイバーを突き刺した。

「！」

痛さまではさほど気にならなかったが、足の身動きが封じられており、大剣を手に構えて迫り来るラ・ピユセルの攻撃を回避出来ない。

「うおおおおおおおっ！」

「これで……！」

ラ・ピユセルは鋭くない部分を見せつけるように振り下ろした。彼女にはグラムベリーを殺す気など毛頭なく、叩きつけて失神させるぐらいで十分だと考え、しかし手加減する事なく、グラムベリーに強烈な一撃を与え

『TIME VENT』

……る直前、謎の電子音が2人の耳に聞こえてきたかと思うと、クラムベリーの姿が歪んだ。

「!?」

ラ・ピユセルの一撃が地面に激突し、砂埃が晴れた時には、クラム

ベリーの姿はそこにはなかった。クラムベリーがいたはずの地点には、地面に突き刺さったフォクセイバーだけがあつた。が、肝心の本人はいない。そもそも、手応えが感じられなかったのだ。

「なっ……」

「一体どこに……!」

2人が辺りを見渡していると、

「意外でした。九尾はともかく、ラ・ピュセルにまだそのような力が残っていたとは」

ハツとして振り返ると、最初にラ・ピュセルやクラムベリーが降り立った屋根の上に、クラムベリーは悠然と立っていた。よく見ると、先ほどまでついていた傷は綺麗さっぱり消えており、全くの無傷状態でそこにいたのだ。立ち位置も全く同じ場所におり、まるで、『時間が巻き戻った』かのような状態だった。

「何で……!?? 何であいつは……!」

「よく分からないが、相当厄介な事になったぞ……!」

2人はクラムベリーの様子に驚いていると、クラムベリーは口を開いた。

「さすがに危ないところでした。あなたの援護がなければ、ね」

クラムベリーがそう呟いたその時、クラムベリーと2人の間に上空から光が差し込んできた。思わず2人が目を細めていると、光の中から、腕組みをした人物が降り立った。その人影を見て、ラ・ピュセルは目を見開いた。

「お前は……、オーデイン!」

「……」

目の前に現れたクラムベリーのパートナー、仮面ライダー『オーデイン』は、静かに九尾とラ・ピュセルを見合った。そして無言で右手を突き出した。

一方、ゴルトフェニックスからの強襲を受けていたライアは、1枚のカードをベントインした。

「お前の相手をしている暇はない！」

『ADVENT』

近くのカーブミラーから契約モンスターのエビルダイバーが現れて、ゴルトフェニックスが体当たりした。

「奴の足止めを頼む！」

ライアがそう指示すると、エビルダイバーは頷くような仕草を見せて、ゴルトフェニックスに向かっていった。その隙にライアはその場を離れてラ・ピュセルを探しに向かった。

「(不死鳥の姿をした契約モンスター……。それに当てはまるライダーやパートナーの魔法少女は、一組しかいない……。!)」

これまで素性が掴めていないペアの事を思い出しながら、付近を探索していたその時、轟音が辺りに響き渡った。

44. ラ・ピュセル、死す……!??

「グアアアアアアアアアアッ！」

「ウアアアアアアアアアアアッ！」

港を舞台にしたミラーワールド内に、2人分の悲鳴が響き渡る。

突如劣勢に置かれていたクラムベリーが無傷で復活したかと思うと、彼女のパートナーであるオーデインが乱入し、右腕を突き出すと、黄金の羽根が九尾とラ・ピュセルに降り注ぎ、触れた瞬間爆ぜた事で、2人に多数の切り傷が生じた。地面を転がる2人を見下ろしながら、オーデインは口を開いた。

「クラムベリーを追い詰めるほどの実力がある事だけは認めてやろう。だが、粹がるのもそこまでだ」

「こ、のお……！」

ラ・ピュセルが立ち上がってエビルウィップを振るうが、命中した手応えはなく、オーデインは空気に溶け込むように消えた。

「残像……!?？」

「その通り」

ハツとした時にはラ・ピュセルの背後に回っており、オーデインは軽くラ・ピュセルを弾き飛ばした。よろめいているラ・ピュセルに今度はクラムベリーが突撃して、ラ・ピュセルを殴りつけて吹き飛ばした。口元からは再び血が溢れ出ている。

「ラ・ピュセル！　んなろお……！」

九尾は真つ向から拳を振るってオーデインを攻めたが、ヒラリヒラリとかわさかれて、一発も当たらない。右足を突き出した途端、オーデインが右足首をガツチリと掴み、一旦持ち上げると、九尾を地面に叩きつけた。

「グアッ……！」

頭を強く打って目眩が生じた九尾の胸ぐらを掴んだオーデインは、腹パンを決めて九尾を宙に浮かせた。凄まじい痛みが全身を走り、落下して地面に叩きつけられた。気合いを振り絞って立ち上がって再び駆け出そうとした九尾の眼前にクラムベリーが迫り、思わず両腕を

クロスする九尾だったが、ニヤリと笑ったクラムベリーはフェイントをかけて、拳による連打を決めた。一発当たる毎に口から空気が漏れ出し、息をする事さえ辛くなつていく九尾に対し、クラムベリーは手を緩めず、蹴りを入れて後ずさつた九尾に、今度はかかと落としを彼の頭に直撃させた。

「ガハッ!?」

その衝撃に、片膝を地面につける九尾。顔の下部を生温い液体が流れているのが感覚的に分かった。白い毛並みの装甲にも、赤色の水滴がいくつか付着している。血が出ている。そう思った時にはクラムベリーによつて顔面に蹴りが叩き込まれ、口元から血が飛び散り、地面に滴り落ちた。

続けてオーデインが背後から急襲し、足払いされて地面に仰向けになつた九尾に向かつて右足で踏みつけた。最初に狙われたのは九尾の右足。力強く踏まれた事で激痛が伴い、九尾の口から絶叫が溢れ出した。この状況を打破する為に新たなカードをベントインしようとする腕を動かそうとしたが、それに気づいたオーデインは、今度は右手を踏みつけた。痛さのあまり手を動かせず、オーデインに蹴り飛ばされる九尾。転がった先には、偶然その場に倒れていたラ・ピュセルの姿が。

「九、尾……！ 大丈夫……か……！」

「ラ・ピュセルの方、こそ……！ けど、さすがにヤバイ、な……」
互いに励まし合いながら、どうにかして立ち上がる九尾とラ・ピュセル。どちらも、特にラ・ピュセルは当初からのダメージが蓄積されている為、ほぼ限界に近い状態だった。それでも尚、目線だけはオーデインやクラムベリーをしっかりと捉えていた。

目の前の脅威を排除する。それだけを考えて、2人は駆け出す。2人が狙いに定めたのは、前衛に位置するオーデインであり、カウンターを仕掛けてきたオーデインの攻撃を避けた後、2人は血の付いた拳を突き出し、オーデインを後ずらせる。どうやら全く効いてないわけでは無さそうだ。

「これなら……！」

ラ・ピユセルが背中の中の鞘から剣を取り出して、魔法で肥大化させようとしたその時、普段マジカルフォンから耳にしている、警報が辺りに鳴り響いた。それは、活動時間の限界が迫っているという合図だった。

「！この音……！」

「そんな……！いくらなんでも早過ぎ！」

九尾が、鳴るのには早過ぎる警報に違和感を感じ、思わずラ・ピユセルと共に自身のマジカルフォンに目をやる。が、そこで意識がマジカルフォンに向けてしまった事で、前方から迫り来る気配に気づくのが遅れてしまった。

「ふんっ！」

「ガッ……!!?！」

ハッと振り返った時には、オーデインの両拳が各々の胸元に直撃し、2人は吹き飛ばされて、コンクリートの壁に背中から叩きつけられた。血が滴り落ち、ズルズルと地面に倒れ込もうとする九尾とラ・ピユセルだったが、唐突に首元を絞め付けられ、無理矢理持ち上げられる感触が2人を襲った。

同時に目を開けると、クラムベリーが片方ずつの手で2人の首を絞め上げているのが確認出来た。その力強さに、ラ・ピユセルは思わず剣を手放してしまった。2人が苦しみながらも気道を確保しようとして両手をクラムベリーの手にしがみつかせる中、クラムベリーはふと思いついたかのように悠々と語り始めた。

「そう言えばラ・ピユセル。あなたのいう王道には続きがありましたね。戦いの末、強者が強者を知り、お互いを認め合う」

「グ、ウアアアアア……！」

「ガ、アグアア……！」

2人は必死に抵抗するものの、時間だけが過ぎていき、意識が朦朧とし始めている。

「……でも、この状況では、認めてもらえそうにないですね」

残念です、と呟いた後、更に強く握りしめるクラムベリー。ラ・ピユセルからは悔しさが滲み出ていた。

「グアア……！ お、おまえ、を、野放し、に、して、たら……！ 小雪、が……！ スノー、ホワイトが……！ みんな、が……！」

どうにかして九尾だけでも助けたい一心だったが、最早自由すら効かない。

「グウウウウ……！ (こ、こんな、所で、死ぬわけ、には、いかねえ、の……！)」

首を絞められながらも打開策を考える九尾だが、そうこうしている間にも、失神寸前まで追いやられていた。勝負ありと思ったクラムベリーがトドメを刺そうとしたその時、何かを察したクラムベリーを突き飛ばす影が。クラムベリーはすんでのところで2人の首を離して後方へ飛び上がった。

唐突に酸素が入り込んで来たので、地面に倒れながら咳き込む2人だったが、顔を上げると、2人の前に仁王立ちしている狐のモンスターがいた。

「フォクスロード……！」

『グルルルルル……！』

自らの契約モンスターの名を呼ぶと、フォクスロードはクラムベリーとオーデインを睨みつけながら唸った。まるで主人やその仲間を守るかのように、フォクスロードは立ち塞がった。

「ほお。カードを使わず、パートナーもいないこの状況で契約モンスターを呼び寄せるとは……」

クラムベリーもオーデインもやや関心の様子を見せ、フォクスロードは2人に突撃した。2人と一匹が交戦している中、好機だと思った九尾は、右手をカードデッキに当てて、カードを取り出した。痛みにこらえながら、左腕につけられたフォクスバイザーにベントインする。

『TRICK VENT』

九尾の周りに何体もの分身が現れて、フォクスロードの援護をするようにオーデインとクラムベリーに向かって駆け出した。

その隙に、九尾はラ・ピュセルの手を握って、その場を離れた。フォクスロードや分身を相手にしている2人はそれに気付かず、全ての分

身を倒した頃には、そこには血痕以外何もなかった。フォクスロードもどさくさに紛れて退却したようだ。

念を入れてミラーワールドから退出し、辺りを見渡したが、血の跡こそ残っているものの、その根源となる人物はいない。クラムベリーは肩を竦めながら、しかし表情だけはさも楽しんだかのように笑みを浮かべていた。

「ここまで高揚する戦いは久しぶりでした。ウィンタープリズン達の時とは大違い。やっとそれらしい戦いになりました。……ですが、あの九尾が強者を前に逃亡という選択肢を取るのは如何なものかと……」

『……それで、どうするつもりだ』

『また逃がすぽん?』

2人の持つマジカルフォンからファヴとシローが立体映像として現れ、声をかけた。どうやら一部始終を見ていたようだ。

「無論、今回はタダで帰すつもりはない。勝者には、褒美を。敗者には、罰を。それだけの事だ」

そう呟くオーデインの目線の先には、一台のトラックがあった。

「ハアツ……、ハアツ……！」

港付近に位置する、人気のない路地を2人の人影がゆつくりと歩いていた。クラムベリーやオーデインとの戦闘で疲弊した大地と颯太である。が、2人のその姿は決して無事とは言えず、身体中に擦り傷が出来ており、颯太の指の爪がいくつかひび割れており、大地の鼻からは血が出ていた。現在、シャッターで閉められている店が立ち並び、通称『シャッター通り』を、颯太が大地に左肩を担がれている状態で前へと進んでいた。が、足取りもおぼつかず、いつ倒れてもおかしくない状態にあった。

大地は時折振り返りながら、港からなるべく早く遠ざかるように歩を進めた。

「(さ、さすがに向こうも諦めたか……。……にしても、なんて奴らだ。クラムベリーもそうだが、オーデインはかなりヤバイ……。まるでこっちの攻撃が通じてなかった……。)」

先ほどの戦闘を思い返しながら内心震え上がっていると、ミラーワールドを出てから今まで黙っていた颯太が口を開いた。

「……どうして」

「……？」

「何で、僕を、助けたんだ……。また、僕のせいで大地が、傷ついて……。迷惑かけて……。」

「あんなあ……。！」

不意に大地は少し尖った口調になり、颯太を振り下ろして肩を掴んで叫んだ。

「前にも言ったろ？ 迷惑だなんて気にすんなって……。！ 何かあったら頼れって……。！ そう約束しただろ……。！ 俺はそれを守っただけだ。自分だけで突っ走って無茶ばっかして、少しは周りの事も、考えろってんだ……。！」

「！ でも、それでも、僕は……。！」

颯太が何かを言いかけたその時、2人は港方面から大きくて黒い影が迫ってくるのを視界に捉えた。目を凝らしてみると、それは比較的

よく見かけけるタイプのトラックだった。が、ライトはついておらず、唯一分かったのは、トラックが2人めがけて猛スピードで突っ込んでくるという事だった。

「…ヤバッ…!?」

大地は咄嗟に颯太を突き飛ばし、2人は衝突から回避した。と、今度はトラックが数メートルほど進んだ後に急に切り替えし、再び迫ってきた。そこで始めて、運転席に誰もいないのが見えた時には、すぐそこまで迫っている事に気付いて、大地はスレスレの所で避けたが、そこで右足に強い痛みが走り、大地は跪いた。オーデインに踏まれた時の痛みが戻ってきて、足を捻ったようだ。と同時に、激しく動いて脳が揺さぶられた影響で、意識がグラついてきた。

トラックは急回転して、大地にしつこく狙いを定めるように、一直線に突っ込んできた。誰かが魔法の類で操っている事は分かったが、そんな事は最早大地には関係なかった。トラックはすぐそこまで迫っている。後方にはシャッターのある店、前方からは無人のトラック。そして大地には自ら動くだけの判断が追いついていない。

「大地いー!」

どこからか颯太の叫び声が入ってきたが、朦朧としている大地には、死が目前に迫っている事しか理解出来ていない。

「…あ。ヤバいな、これ…」

もう回避するだけの気力は残っていない。呆然と迫り来るトラックに目をやっていた大地。

トラックが数メートル付近まで迫ったその時、大地の視界は大きく歪み、夜空が見えた。月は輝いているのに、星は一つも見えない。

刹那の事だった。轟音が耳を震わせ、金属が破裂する音が鳴り響き、地面を擦る感触が肌に伝わった。そこで大地の意識は僅かながら回復した。全身には想像していたほどの痛みは感じられない。手を見渡しても、あるのは戦闘で出来た擦り傷だけ。道路の真ん中に転がっていた大地は、不意に視界が歪む直前に誰かに触られた感触があった事を思い出し、顔を上げて、段々とはっきりしてきた視界で辺りを見渡す。

やがてある一点に目をやった大地は、唐突に思考が止まった。
そこに広がっていた光景。それは……。

運転席の部分がひしやげたトラックと、ぶつかった衝撃で折れ曲
がっているシャッター。

出ている。大地は咄嗟の判断で、トラックを退かしてスペースを作つて颯太を引きずり出そうとした。が、重量の重いトラックは、中学生1人の力ではどうにも動かす事が出来ない。それでも、自分を突き飛ばし、身代わりとなつてしまった親友を助きたい一心で、力を入れ続けた。

するとそこに人影が降り立った。

「大地！ 颯太！」

「……！ ライ、ア……！」

現れたのは、颯太のパートナーでもあるライア。突然響いた轟音を頼りに到着したようだ。

「ライア！ 颯太、が……、颯太が……！」

「分かっている……！」

大地が何か言うよりも早く、状況を理解したライアはトラックを押した。2人の力が合わさった事でトラックは動き、ようやく颯太を安全な場所に動かす事に成功した。

大地は必死に声をかけた。

「颯太！ しっかりしろ！ 死ぬな！ おい！」

大地の叫びが届いたのか、颯太の口から微かに呻き声が漏れた。意識は朦朧としているようだが、まだ息はあるようだ。ライアはトラックを見て、燃料が漏れ出していないかを確認した後、変身を解き、颯太の体をチェックし、大地を落ち着かせるように言った。

「まだ息はあるが、急いで止血しないと命に関わる。大地はこのタオルで応急処置を。破片が突き刺さっているから、なるべく刺激しないように。俺は警察等に連絡を入れる。一刻を争う事態だ。頼むぞ」

「……はい！」

「気をしっかり保てよ、颯太……！」

手塚は颯太を励ましながら、大地に持参していたタオルを手渡し、スマホを使って警察や救急車に連絡を入れた。大地はなるべく傷つけないように、足に突き刺さっているシャツターの破片を避けながらタオルを当てて止血を始めた。

「俺の、せいだ。俺のせいで、颯太はこんな大怪我を負ってしまった……。」

そんな自分への不甲斐なさを心に突き刺しながら、視界が滲み始めた大地は必死に呼びかける。それしか、今の大地に出来る事は、ないのだから。

「頼む、死ぬな……！ 頑張れ、颯太……！」

人気がない事故現場に複数のサイレンの音が鳴り響いてきたのは、それから数分後の事だった……。

45. 砕かれかける夢

N市は近辺と比べても大規模であり、故に夜遅くになっても灯りが灯っている所は多い。街の中心部に行けば、その規模は数知れず。その中心部の一角に佇んでいるのは、N市が誇る大病院。

その病棟の一室の、『集中治療室』と書かれた蛍光灯が赤々と灯る扉の近くに設置された長椅子に座りながら、榊原 大地は祈るよう手を組んで額に当てていた。

「……」

つい先ほどまで港付近のシャッター通りを、ラ・ピュセルを襲撃してきたクラムベリーやオーデインの魔の手から助け出して逃げていた大地だったが、無人のトラックが2人に迫り、結果的に颯太が大地を庇って、彼の両脚がトラックとシャッターに挟まれた。おびたらしい量の血が流れる中、駆けつけた手塚と共に颯太を救出し、颯太は手塚が呼んだ救急車に運ばれて、この大病院に搬送された。

因みに手塚はやってきた警察に事情を説明したり、現場検証に立ち会う為に、事故現場に残った。大地は颯太と共に救急車に乗り込み、颯太のそばについた。意識はあるものの、血の流れる両脚を貫かれるような激痛が襲っており、苦しげな表情をずっと浮かべている。道中で大地の腕にできた怪我に気づいた隊員が簡単な治療を施しており、大地の腕には包帯が巻かれ、頬には湿布が貼られている。

やっとの思いでラ・ピュセルを、颯太を助け出せたのに。後悔の念が大地の心中を渦巻いていた。如何に魔法少女といえど、元は人間だ。怪我の治りは早くても、助かるという確信はない。こんな時に限って、仮面ライダーや魔法少女の力が役に立たないという事実が、重くのしかかる。

今の自分には、こうやって親友の無事戻ってくる事を祈るしかできない。それを受け入れながら待機していると、病院であるにもかかわらず、何人もの足音が重なり合って響き渡ってきた。やがてその音は大地に近づいており、大地がふと顔を上げると、見知った顔ぶれだった。

「だいちゃん！」

「大地君！」

「小雪……、城戸さん。それに……」

現れたのは、パートナーの小雪や古くからの知り合いでもある正史。その後方には同じチームの蓮二や華乃がいた。小雪や正史には颯太が集中治療室に入ってからすぐに連絡を入れていたので来るのは分かっていたが、後の2人が来る事までは予想外だった。大方、マジカルフォンを通じて正史に無理やり叩き起こされて来たのだろう。が、大地が声をかける前に小雪が大地に詰め寄ってしきりに問いかけた。

「ねえだいちゃん！ そうちゃんは？！ そうちゃんは、どこのの？！ 大丈夫なんだよね？！？ 死んじゃってないよね？！？」

「……今は、この部屋に。それ以上の事は……」

そう言っただけで大地は扉に目を向けた。幼馴染みの安否や、パートナーの怪我の具合を心配する小雪は、しばらく涙が溢れ続けていた。

「だいちゃんまで、こんな風にさせるなんて……」

「どうしてこんな事に……」

正史も呆然と扉を見つめていた。ついさっきまで元気だった魔法少女が重症を負うなどと、誰が想像出来ようか。

蓮二が扉から大地に顔を向けた。

「……一体何がお前達にあった」

「それが……」

「大地君、小雪ちゃん！」

すると新たに駆け寄る人影が。颯太の両親だった。病院から連絡を受けてやってきた2人は、とにかく焦っていた。自分達の息子が大怪我を負って病院に運ばれたとあっては黙っていられるはずもなく、真っ先に颯太の母親が大地の肩を掴んで、切羽詰まった表情で彼を問い詰めた。

「大地君、どういう事なの？！？」 聞いた話だと、あなたから連絡を受けて助けに行った颯太が、あなたを庇って事故に巻き込まれたって……！」

「……っ。それは……」

「何で……！ 何で颯太が……！ あなたに何があったのよ!?？」
ちやんと説明して！」

「ちよ、ちよつと！ 落ち着いてくださいよー！」

「息子の友達を責めて、それで何が変わる」

怪我をしている大地を大きく揺さぶる颯太の母親を、慌てて止めに入る正史と、冷静に引き離そうとする蓮二。2人に押さえつけられて、ようやく理性を保った颯太の母親は、自身を落ち着かせてから大地に謝り、疲れ切った表情で椅子に座り込んだ。憔悴仕切っている母親と、そんな彼女を励ますように肩に手を置いている父親を見て、大地は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。半分は、颯太の両親には自分が用事の為に、夜道を歩いていた際に鏡の中から出てきた化け物に追われ、颯太に助けを求めて、合流してから逃げていた際に、事故に巻き込まれたと、真実を誤魔化して伝えた事。もう半分は2人をここまで心配させてしまった事。

すると、『集中治療室』のランプが消えて、扉の奥から足音が聞こえてきた。手術が終わったようだ。それに気づいた皆が顔を上げると、扉からは手術を担当していたであろう医師が、マスクを取りながら大地達の前に姿を現した。大地達はすぐに医師に駆け寄った。

「先生！ 颯太は……！」

「一時は危険な状態にありましたが、手早い応急処置が功を奏したのでしょう。足に突き刺さっていた破片も全て取り除きましたし、現在は脈も安定しています」

「じゃあ……！」

「ええ。命に別状はありません。後は麻酔が切れるのを待てば、意識もはつきりします」

それを聞いて、一同はようやく安堵したように息を吐いた。どうやら最悪の事態は回避出来たようだ。さすがは大合併に伴って、最新の医療機器を備えてあるだけの事はある。とにかく颯太は無事だ。その事実が、大地達を安心させた。

……が、医師の次の言葉を聞いて、大地達は目を見開く事になる。

「ですが、破片が奥深く刺さった箇所には、靱帯があり、その損傷は少しばかり激しいものでした。他にもいくつかの神経が傷ついていますから、完全に歩けるようになるには、多少時間がかかるかもしれません。それに、後遺症が残る可能性も否定出来ません。もし、スポーツか何かをやっているようでしたら、多少なりとも、選手生命が危ぶまれる覚悟はしておいた方が良くもありません」

病院を出たその先は、常夜灯の周辺を除いて、漆黒の闇に包まれていた。颯太の両親は今しばらく息子の側につき事になり、残った大地達は、家に帰る事になった。扉の前で5人は固まり、周りに関係者以外の人物がいらない事を確認してから、大地から事の次第が明かされた。話を聞き終えた小雪は泣き崩れた。

「酷いよ……！　そうちゃん、何も悪い事してないのに……！　なのに、もうサッカーが出来なくなるかもしれないなんて……！」

「……ごめん。俺の、せいだ。俺が、颯太を最後まで……」

「だいちゃんは悪くないよ！」

「そ、そうだよ！　その事故だって、クラムベリーかオーデインが仕組んだ事なんだから？　だったらそいつらが悪いに決まってる！」

自虐する大地を、小雪と正史はどうにかして慰めていた。が、大地の表情は優れない。

魔法少女でいるうちは問題ないだろう。魔法少女になれば身体能力はぐんと向上し、現時点では難しいかもしれないが、やがては早期回復によって地に足をつく事だって造作もなくなる。キャンディー集め等の活動に支障をきたす事もない。だが問題は、変身前の状態だ。サッカー選手にとつて命とも言える足に爆弾を抱えていては、ともにプレーする事だって難しい。今後のリハビリの経過にもよるが、彼のもう一つの夢だった、プロサッカー選手になるという願いは、叶わなくなるかもしれない。それを知れば、颯太は精神的にも追いやられるのは間違いない。魔法少女として活動する事と同時に進行だった夢は、同じ魔法少女や仮面ライダーの手によって、砕かれかけようとしているのだ。

小雪の泣き声だけがしばらく響き渡る中、蓮二がもたれかかっていた壁から離れて歩き出した。

「蓮二？　どこへ……」

「もう用は済んだはずだ。今日のところは帰らせてもらう。俺は明日も仕事があるからな。トップスピードにも、後でお前達から伝えておけ」

「ちよ、蓮二……！」

正史が呼び止めようとしたが、蓮二は無視してさっさと闇の中に溶け込んだ。やがて華乃も蓮二に続くように立ち去ろうとした。が、一旦立ち止まると、顔だけ振り返って大地達に言った。

「……あいつらが最初からラ・ピュセルを始末する気だったなら、今回の事故も、殺す気でやったって事よね」

「……はい」

「なら、次に他の奴らと会う時は……。その時は、そいつも殺人鬼だと警戒しておいた方が良さ」

「……………」

「信用出来ないのは、あいつらに限った話じゃないから」

それだけ告げると、華乃も姿を消した。華乃の言葉がしばらく頭の中に響く中、2人と入れ替わるように、手塚が姿を見せた。どうやら現場検証を終えて、病院に直接向かってきたようだ。颯太の現状を聞き終えた手塚は頷くと、言いにくげに口を開いた。

「……つい先日、占いでラ・ピュセルに危機が迫っていると出た事があった。教えようとは思っていたが、逆にそうする事で、どんな形で未来が変わるか分からない。だからあえて黙って監視する事にしていたのだが……。これは明らかに俺の対応ミスが招いた結果だ。すまなかった」

「て、手塚が謝る必要ないって」

頭を下げる手塚に正史がその声をかけたその時、自身のスマホから着信音が鳴った。相手は編集長の大久保だった。時間帯も時間帯だったので気にはなったが、出てみる事にした。正史はスマホを耳に当てながら、何やら情報を得ているようだ。他の3人も黙って様子を見ている中、正史の表情は段々と険しいものになった。やがて短い会話の後、スマホを耳から離すと、こう告げた。

「ごめん。たった今編集長から連絡があつて、取材に行かなきゃならないんだ」

「そうですか。気をつけてくださいね」

「うん。それじゃあまた。明日か明後日は、みんなでお見舞いに行こうな！」

そう言うと、正史はバイクが置いてある駐輪場に向かって走っていった。それを見送ってからしばらくすると、遠くから車が見えてきた。大地の両親が運転する車らしく、病院にいる大地を迎えに来たのだろう。それを見た手塚は大地と小雪に言った。

「それじゃあ、俺はこのまま病院の中に入って、颯太の両親と話してく

る。事故の事とかも話さないとな。とにかく、2人はゆっくり休んでおく事だ。また明日集まろう」

「はい」

「……まだ、彼の運命は破滅したわけではないからな」

そう言つて手塚は手を振りながら病院内に入つていった。やがて両親と合流した大地は、心配をかけた事を精一杯謝罪した後、小雪を乗せて彼女の家まで送つて、各々の両親同士で一言二言会話した後、N神社へ帰宅した。

親は特に何も言う事なく大地を彼の部屋へ入れた。暗闇に包まれた部屋の中でしばらく虚空を見つめていた大地だったが、不意に姿見に目をやり、ポケットからカードデッキを取り出して、かざして九尾に変身。ミラーワールドに入り込み、窓の外から出て屋根の上に足をつけた。

やがてミラーワールド内にこだましたのは、やり場のない怒りのもった、少年によるあらん限りの咆哮だった。

『結局、失敗に終わったようだな』

「の、ようですね」

『やっぱりトラックで轢き殺そうとするなんて、不確定要素がありすぎたんだぼん。ご利用は計画的に、ぼん』

「だが、今回の件が他の連中に良い刺激となれば、それに越した事はない」

「良い刺激……ですか」

森の奥深くない佇む廃屋にて、数時間前までラ・ピュセルや九尾と死闘を繰り広げていたクラムベリーとオーデインが平然とした様子でくつろいでいた。ファヴとシローもその成り行きを見ていた。

オーデインの発言に対し、クラムベリーが目線を横に向けて、とある記事に目を通した。

「それでは、この記事の事もそれに関係してそうですね。これ、あなたがやった事でしょう？ おそらく、私が港で彼らを見ていた時よりも前に」

クラムベリーが見ていた記事には、『森で20代女性の変死体発見。鋭利な刃物による刺殺か』と書かれた見出しで大きく載っていた。

「わざわざルーラの死体を拠点から運び出し、あえて世間に公表させる。そうする事で、ベルデ達を我々の狙い通りに誘い出すと同時に、なるべく騒ぎを小さく済ませる。抜け目ないですね」

「あのまま隠されていても、後で見つかった時に試験に支障をきたさずには面倒だからな」

『これからこのような事態は増える一方だからな。その対応で正解だろう』

シローが、オーデインの対応を賞賛した。その一方で、クラムベリーは考え込む表情を見せていた。

「このままいけば、我々が望んでいた展開が待ってますが、果たしてそう上手く事が運べますかね……」

『いけるいける。今回は人を集めるために、わざわざソーシャルゲームなんて若者向けの媒体を使ってるぼん。おかげで人はたくさん集まったし、年齢は一部を除いて若い奴らばかりぼん。それだけ血の気が多いはずだから、なーんにも心配する事なんてないぼん』

思えば、ソーシャルゲームを材料にすると提案したのもファヴだったな、と思いつつ、クラムベリーは足を組み替えた。自分の手柄として自慢したいのかもしれない。

『けどまあ、そんなに心配だったら、もうちよつと燃料投下してあげても良いぽん。どうするマスター？』

「では、お願い致します」

『それじゃあシロー。早速手配するぽん』

『心得た』

その言葉を最後にファヴとシローは2人の前から姿を消した。

「……………さて。次は誰が脱落しますかね。重症を負ったラ・ピュセルか、それとも別の誰かか……………」

妖しき笑みが、飢えた魔法少女を包み込んだ。

46. 暗躍の陰

チャットルームに、2匹の姿があった。

ファヴ：『えく。今日はみんなにお知らせがあるぽん』

シロー：『本来なら我々の登場は3日後になるわけだが、無視できない事態が発生した』

当然予定されていない時間帯に現れたという事もあって、チャットルームには誰1人としていなかった。

ファヴ：『昨日、ラ・ピュセルが事故に遭って大怪我をしたぽん。

ファヴもシローもそれを聞いた時はとくっても心配したぽん』

シロー：『だが不幸中の幸いか、命を落とすところまでは至らなかったらしい。したがって、現状に大きな変更点はないものとする』

ファヴ：『みんな、キャンディー集めに必死になるのは分かるけど、事故で死んじゃったくなんて事になったら元も子もないぽん。周りに気をつけて頑張るぽん。あ、因みにだけど、もし事故が何かで死んじゃった時は、その週は脱落者を出さない事にしてるぽん。連絡し忘れてごめんなさいぽん』

シロー：『さすがにキャンディー集めとは無縁の範疇で死なれては、皆もそうだろうし、私達としても心苦しいものがある。これは厳然たる措置だ。そしてもう1つ、君達に連絡事項がある。それは、バージョンアップに伴う「レアアイテム」の解放だ』

ファヴ：『次の脱落者が出た後、便利なアイテムをダウンロード出来るようになるぽん！ どんなものがあるのかは、その時までのお楽しみぽん。因みにここだけの話、ペアで残っている人達だけには特別なアイテムが購入可能になるぽん。というわけで、後3日間だけど頑張ってほしいぽん！ それじゃあ、シユーぽん！』

「んじやあ、また明日の夜来るよ」

「……ああ」

「えっと、その……。お大事にね、そうちゃん」

夕方、病室を後にした大地と小雪は扉を閉めた後、しばらくその場から動くことはなかった。

事故から2日が経ち、意識が戻った颯太は気持ちの整理がようやくつき始め、見舞いに行ける許可が下りた為、2人は揃って出かけた。病室のベッドに上半身だけ起こしていた颯太は、両足を太いギプスで固定されており、怪我の具合の悪さが見て取れた。そしてその表情には覇気がほとんど見られなかった。両足に大きなダメージを負い、魔法少女と同じくらいに大好きだったサッカーは出来ず、場合によっては夢が叶わなくなるかもしれないのだ。

どうにかして彼の沈んだ心を潤さなければ。そう思った小雪や大地はとにかくたくさん話しかける事にした。明るい話題をベースに話す2人だったが、颯太は「うん」や「ああ」といった相づちしか反応を見せない。唯一長く語った言葉といえば、

「……みんなに迷惑かけたくない一心で、クラムベリーと戦ったのに、結局、大地や小雪、みんなをこんなに心配させてき……。……情けないよな。きっと、バチが当たったんだよ……」

であった。もちろん2人はすぐに否定したわけだが、颯太の耳には届いていないだろう。

2人が一階に降りて受付の近くに差し掛かった時、見覚えのある人物が前方から現れた。

2人や颯太の恩師であり、仮面ライダーオルタナティブの変身者、香川 俊行である。

「おや、お2人も来てましたか」

「先生！」

シスターナナに呼ばれて以来の再会である。

「もう、見舞いは済んだようですね」

「はい。ついさつき……」

「先生もひよつとして……」

「ええ。これから向かうところです。昨日のチャットで知った時は慌てましたよ。シスターナナも大変心配してましたから」

「シスターナナが……」

慈愛の塊とも言えるシスターナナが、ラ・ピュセルに訪れた不幸を悲しむ様子を、2人は容易に想像出来た。と、ここで香川が2人の顔色を伺った。

「かなり疲れきっているようですね。どうでしょう。まだ時間はありますし、そこで少し休憩しましょう」

香川は2人を引き連れて、周りに人がいないスペースを確保してから、すぐそばの自販機でジュースを購入して2人に手渡した。2人はお礼を言うと、3人揃って腰を下ろした。

その後、香川は大地から事の次第を聞き、深く息を吐いた。

「なるほど。今度は彼に矛先を向けた、というわけでしたか」

「えっ?」

「実を言うと、先日私達も彼女から手痛い仕打ちを受けましてね。どうにかその場を凌いだのですが、向こうも諦めてはいなかったようですね」

「クラムベリーにオーデイン……。あいつら一体何が目的でこんな事を……」

大地が険しい表情で半分飲み干した缶を見つめっていると、小雪がポツポツと喋りだした。

「……私が」

「？」

「私が、弱いせいで……。守ってもらおう立場にばかりいたから、そうちゃんやだいちちゃん、みんなが前に出て、それで今回、そうちゃん……。情けないのは、私の方だよ……」

目に涙を溜めながらそう呟く小雪を見て、大地はどう声をかければ良いのか判断に迷ったが、そんな中でもいち早く彼女に接したのは香川の一言だった。

「誰だっっていうかは自分が無力だと気づく時があります。あなただけではない、大地君も私も、やれる事は限られます。そこに一般人と仮面ライダー、魔法少女の差はありません。人は、誰だっって弱いものです」

ですが……。と、香川は小雪の顔を覗き込むようにして言った。

「そう思ってしまう事自体が、もつと己を弱くしてしまう原因なのです。あなたの持つ独特な強さは、私も知っています。後は、自分の手でそれに気付き、誇りを持って自分自身で磨き上げ、自身の武器としていく。これだけです」

「自分の、強さ……」

香川の言葉を聞いて、不思議と小雪の表情が和らぎ始めた。

「……ありがとうございます。何だか、勇気が湧いてきました」

「そうですか。それは良かった」

「やっぱり凄いな、先生は。俺なんかじゃ絶対無理そうだし、俺ならもつと別のやり方選ぶかも」

「恐縮だよ。それに大地君」

「はい？」

「これから先、生きていけば迷う時もあるでしょう。そんな時は一旦立ち止まって、自分の心に正直になつて行動する事をお勧めしますよ。あなたなら、きっと出来ますよ」

「……ははっ。俺にもアドバイスをくれるなんてな」

大地は苦笑いしながら、缶をゴミ箱に入れた。

「でも、先生が仮面ライダーで本当に良かった。先生はいつから仮面

ライダーになってたんですか？」

「半年ほど前になりますね。元々は妻が『魔法少女育成計画』を空いた時間にやっていたのを見ていて、それに便乗してやり始めたのが、あの『仮面ライダー育成計画』でした。ゼミ生もほとんどの方がやっていましたから、割とすんなり溶け込めましたよ。さすがにまだ幼い裕太にはやらせないようにしてましたけどね。そうやって何日か進めていく内に、シローが現れて、私は仮面ライダー『オルタナティブ』になりました。驚いた事に、同じゼミに所属していた何人かが同じ仮面ライダー、もしくは魔法少女になっていたのです」

「それってもしかして」

「ええ。シスターナナ、ヴェス・ウィンタープリズン、ファム。みんな私の現役のゼミ生です」

それは凄い偶然だな、と2人は率直な感想を述べた。やがて、香川は立ち上がった。

「……さて、それではそろそろ颯太君の方に見舞いに行きます。また会いましょう。時間があれば、食事に誘ってあげますよ」

「はいー」

「それじゃあ、お互い頑張りましょうね、先生ー」

香川は軽く会釈して、颯太のいる病室に向かった。

やっぱり先生と出会えて本当に良かった。きっと先生なら16人の枠に残れるはずだ。そう思いながら、行きと違って少し弾んだ気分で病院を後にし、夜の活動時間になるまでそれぞれの家に帰宅した。

その晩の事だった。王結寺ではベルデを新ライダーとした魔法少女や仮面ライダーのチームが、固まって話し合いをしていた。

「でもさー。誰がルーラの死体動かしたのかね〜」

「ほんととそれー。ま、見つかったってあたしには関係ないけどね。魔法少女や仮面ライダーが関わってるなんて誰も気づくわけないし」「んな呑気な事を言ってる場合じゃないだろ」

ベルデの言葉を聞き、一同は静まり返る。

「わざわざこの庭に捨ててあったあいつを誰かが運び込んだって事は、明らかにそいつは俺達の動向を把握している。いつ狙ってくるか、たまったもんじゃないな」

まあ、来たところで返り討ちにするだけだが、と付け足して、ベルデは壁にもたれた。

「何のつもりで俺達に脅しをかけてるか知らねえが、そいつは確実に狙ってやがる。俺達仮面ライダーや魔法少女の、息の根を止める為に。ラ・ピュセルをそうしようとしたように」

「え、えっ？ で、でもら、ラ・ピュセルは、事故で怪我をしたってファヴが……」

たまがおずおずと手を上げて発言するが、それを遮ったのはアビスだった。

「それはないと判断した。仮面ライダーも魔法少女も身体能力は通常の人間と比較しても上の立場だ。滅多な事が無ければ、怪我なんて起こり得ない」

「滅多な事って……」

「同じ力を持つ仮面ライダーや魔法少女が、そいつを殺そうとしに来ない限り」

アビスの一言は、たまを震え上がらせるには充分だった。一方で他の者はすんなりとアビスの意見を受け入れていた。

「シローもファヴも言ってたろ？ 事故なんかで死人が出たら、その週の脱落者は無いって」

「ああ。だからラ・ピュセルを狙ったそいつも、それを見越して殺そうとしたわけか」

「さっすがライダー。話分かりやすいし」

ピーキーエンジェルズが囁し立てる中、ベルデは静かに語りだす。

「シローやファヴが何を考えているのか知らねえが、そっちがその気なら、あえて乗ってやっても悪くないだろうな」

「えっ？ それってまさか……」

「決まってるんだろ」

ベルデは立ち上がり、僅かに開いた引き戸の隙間から、月明かりの夜空を見つめて、そして呟く。

「世間知らずのガキ共に、大人の本性ってやつを教えてやるのさ。俺達にとって今後邪魔になりそうな奴を、片っ端から消してやる事だな」

47. 悲劇の襲来

『今夜、北区の大橋の下で、話したい事があります。助けてほしいです。私1人で待ってます。 たま』

「これは……」

「罨……か。しかしたま1人となると」

その晩、オルタナティブ宛に、マジカルフォンにメッセージが送られてきた。送信相手はたま。ベルデの傘下にいるメンバーの1人と、いう事もあり、疑念を抱かずにはいられなかったが、待ち合わせの指定場所は彼らが拠点としている門前町から離れている。おまけにたまは比較的良好的な魔法少女である事はオルタナティブ達も充分承知していた。となると、このメッセージは本物の可能性が高い。

「もしかしたら、インペラーさんの時と同様に何か酷い仕打ちを受けてかけているのでは……！ だとしたら、一刻も早く救いの手を差し伸べなくては……！」

シスターナナは焦った表情で他の3人に訴えた。こういった時のシスターナナは頑固な所が出るため、3人も承諾し、細心の注意を払って待ち合わせ場所に向かった。

大橋に向かう道中、4人はすぐ近くのビルを転々としながら同じ方向に向かう白い人影を見つけた。

「おや？ 九尾ではありませんか」

「先生？」

唐突に声をかけられた九尾は立ち止まり、4人と合流した。何故か単独行動をしていた事に疑問を抱く4人だったが、その理由を本人が明かしてくれた。

「さっきたまから連絡が入って、助けてほしいって来たんです。どうやら俺1人にしか来てないらしいんですけど……」

「君だけなのか……？」

「はい。多分スノーホワイト達には……。まだ集合には余裕があるから、とりあえずこつちに来てみたんです」

「九尾だけを呼び出し……。何かきな臭いな」

ウィンタープリズンは険しい顔つきになりながらも、シスターナナに催促されて大橋に向かった。

橋の下にはチョロチョロと流れる小川だけでなくコンクリートで造られた道があり、陰で隠れてはいるものの、誰かがそこで縮こまっているのが確認できた。僅かに覗かせる犬耳が、そこにいる人物がたまたまである事を決定付けた。

「お待たせしましたー！」

「……あ」

5人がコンクリート式の地面に着地して、真つ先にシスターナナが声をかけると、たまはビクついたように飛び上がった。

「念のために聞いておくけど、ここにいたのは、あなた一人？」

「あ……、う……」

「黙ってちや分らないだろ？ 早く答えたまえ」

「え、ええつと……」

不意に、オルタナティブはたまの挙動に違和感を感じた。元々挙動不審なところは見受けられていたが、いつもと様子がおかしい。

まるで、自分達を留まらせて、何かを待っているかのように……。

「！ 離脱をー！」

「えっ!?？」

オルタナティブがいち早く叫んだ瞬間だった。

「きゃあー！」

突如、ファムの背後から何者かがしがみついて、引き離そうとしていた。スク水姿の魔法少女、スイムスイムだった。だが、先ほどまで5人以外の人の気配は感じられなかった。一体どこから出てきたのだろうか。

「ファムー！」

「何!?？」

突然の奇襲に驚くオルタナティブと九尾だったが、その2人を突き飛ばす者が。

「ぐっ……！」

「はいはい。隙だらけだよ」

2人の後方から、ガイが手を叩きながら歩み寄ってきた。

「そんな……！」

「貴様あー！」

ウインタープリズンはキツと目を細めて、怯えながら役目を終えて逃げ出そうとするたまを睨みつけた。自分達を嵌めたであろう相手に対し、ウインタープリズンは容赦なく魔法で壁を形成して、たまにぶつけようとする。

『CONFINE VENT』

『STRIKE VENT』

だが、途中で壁は崩れ落ち、動揺しているウインタープリズンめがけて、虎の手が振るわれてウインタープリズンは地面を転がった。魔法を打ち消したのはガイであり、タイガが隙を狙ってデストクロードで攻撃したのだ。

「ウインタープリズン！」

「シスターナナ！ 下がって！」

ウインタープリズンは立ち上がりながらシスターナナの前に立ち、隠れるように示唆した。

「そおれ！」

「ぐっ……！」

魔法が一時的に使えなくなっているウインタープリズンに対し、上空からミナエルとユナエルが急降下してきて、ダブルキックでウインタープリズンを後ずらせた。加えて橋の欄干から飛び降りてきたアビスが九尾と交戦を始めた。もう疑う余地は無い。この場にはベルデチームの全員が隠れ潜んでいた。恐らくはたまが良心的であるという認識を利用して、5人からキャンディーを奪う為に。

しかし、肝心のリーダーは未だに姿を見せていない。その事に不信感を募らせながらも、九尾はアビスに対抗した。

「こんのお……！ やってくれたわね！」

『BLAST VENT』

ファムはスイムスイムを振り払うと、ブランバイザーにカードをベントインする。すると上空から契約モンスターのブランウィングが

姿を見せた。

「……アビスラッシャー」

対するスィムスィムはパートナーの契約モンスターで、両手に鋭いサメの歯のような武器が付いている『アビスラッシャー』を呼びだし、ブランウイングが翼をはためかせて、突風を巻き起こした。アビスラッシャーは口から水を噴射し、突風とぶつかって相殺させた。水流が吹き荒れて視界が悪くなり、オルタナティブは立ち止まる。無闇に動いては、敵の思うツボであり、長年の勘から待ち構える事に専念した。

が、ようやく視界が良くなり始めた時、オルタナティブに向かってくる影があった。

「？ シスターナナ？」

オルタナティブは隠れていたはずのパートナーが駆け寄ってくるのが見えて、思わず思考を停止した。1人では心細かったのかもしれない。そう思ってシスターナナのそばに寄ろうとしたその瞬間、あることか、シスターナナは拳を固めてオルタナティブに無言の腹パンを決めた。

「ぐうつ……!?？」

「あつけないものだな」

その言葉は確かにシスターナナの口から発せられたものだが、明らかに声色が違っている。そう気付いた時には、今度は膝を曲げて腹に当てて、オルタナティブを吹き飛ばした。

「ナナ!?？」

「えっ？」

ウインタープリズンが目の前の光景に困惑し、シスターナナの名を叫んだが、唐突に別方向から驚きに満ちた声が聞こえてきたので振り返ると、シスターナナは隠れていた場所から一步も動くことなく、ただ呆然とオルタナティブが倒れる姿を目撃していた。一瞬ユナエルが魔法でシスターナナに化けたのかと思った九尾だが、彼女は依然としてウインタープリズンと交戦中だった。

では、オルタナティブを攻撃したシスターナナは一体……？ その

疑問は、シスターナナの姿が歪むと同時に明らかになった。

「どんなに賢いあんだでも、初見じゃ防ぎようがねえもんな。ましてやパートナーの姿じゃ、油断もするだろうよ。まあ、俺はそんなハマを犯すこたあねえが」

「ベルデ……！」

シスターナナに化けていたのはリーダーのベルデだったのだ。『コピーベント』の能力で、孤立していたシスターナナを気づかれる事なく、視界が悪くなったタイミングで姿そのものをコピーしていたのだ。

「フツ。それじゃあ終わりにしてやるよ。あんまり長引くのは好きじゃなくてな」

「やらせるかよ！」

『SWORD VENT』

オルタナティブに何かを仕掛けようとするのを見た九尾はアビスを蹴り飛ばして、フォクセイバーを構えてからベルデに突撃した。全ては、オルタナティブを守る為に。

「先生に手を出させるか！」

「はんっ！ 随分とナメた口をきくガキだな。こないだの礼は返させてもらうぜ」

『HOLD VENT』

ベルデはバイオインダーを構えて、九尾に投げつけた。ヒラリとかわす九尾だったが、ベルデは一步退き、バイオインダーを引き戻した。すると、バイオインダーは九尾の首に巻きつき、思いつきり引つ張ると九尾はバランスを崩し、よろめいた。そこへベルデの膝蹴りが命中し、思わずフォクセイバーが手から離れると、ベルデは回し蹴りで九尾を吹き飛ばした。

立ち上がろうとする九尾だったが、そこで右足に痛みが走った。以前グラムベリー、オーディンペアとの戦闘で負傷した右足が再発した可能性があり、膝をついた。

「！」

『ADVENT』

これを見たオルタナティブは契約モンスターのサイコログを召喚し、九尾を援護しようとするが、

『FREEZE VENT』

タイガのベントインしたカードが、サイコログを停止させてしま
う。

完全に無防備になっている九尾に対し、ベルデは笑いながら歩み寄
る。

「おいおい。随分とボロボロになってるみたいだな。俺達の知らない
所で何があつたかは知らねえが、勝負の世界に情けはいらねえ。モン
スター退治とか人助けもいいが、ライダーや魔法少女の敵は、同じ力
を持った奴らでもあるって事を忘れてるようだな！」

「何、だ、と……！」

「もうお止めください！ 私達は団結すべきなんです！ 魔法少女や
仮面ライダー同士が戦うなんて、以ての外なのです！」

「黙ってよ、口だけの奴はさ！」

必死に説得するシスターナナに対し、ガイが殴りかかり、妨害をし
た。

「ナナ！」

「よそ見は禁物！」

「禁物！」

助けに向かおうとするウィンタープリズンだが、ピーキーエンジエ
ルズがパートナーの武器を構えて行く手を遮っている。ファムもス
イムスイムや合流したアビスの猛攻で、思うように動いていない。

「先ずは邪魔な奴からだ。消えな！」

そう言つてベルデが取り出したのは、カメレオンの紋章が描かれた
カード。それをバイオバイザーにベントインした。

『FINAL VENT』

すると、橋の上にベルデの契約モンスター、バイオグリーザが姿を
現した。ベルデが逆立ちすると、バイオグリーザは舌を出して、足に
巻きつけると、振り子の要領で、九尾に迫った。

「！！ 九尾！！」

「……！」

とつさに逃げようとする九尾だが、足の痛みがそれを許さない。両手を広げて捕まえようとするベルデが目前に迫り……。

「さっせませんー！」

その寸前の所で、九尾を突き飛ばしたのはオルタナティブだった。が、ベルデは仮面の下でニヤリと笑い、九尾の代わりに眼前に現れたオルタナティブを拘束した。そして上空に舞い上がり、両足を逆さになっっているオルタナティブの腕に乗せて、地面へと垂直に落下し始めた。真下には、コンクリートの地面が広がっている。そのまま勢いよく落下すれば、どのような事態が待ち受けているか、容易に想像できる事だろう。

「！ や、止め……！」

九尾が地面を転がりながら、必死に手を伸ばす。他の3人からも、先生と叫ぶ声が響き渡る。

一瞬、オルタナティブの顔が九尾に向けられたような気がしたが、九尾にはそれを気にする余裕はない。ただ、必死に手を伸ばした。オルタナティブを、恩師を、助けたい……。

『大地君。これから先、あなたには様々な困難が待ち受けているに違いないありません。現に私にもありました。人生楽もあれば苦もある。楽な事ばかりに進んではいけません。苦を、受け入れる事も大切な事です。あなたには、きっとそういうものを受け止められるほどの強さを秘めている。私はそう思うのです』

轟音が炸裂し、オルタナティブの頭は、コンクリートに叩きつけられた瞬間を、九尾は目撃してしまった。『デスバニツシュ』を決めたベルデは地面に降り立つと、勝利を確信したように高笑いした。オルタナティブは地面に仰向けに倒れた。九尾は右腕を伸ばしながら思考を停止していた。

「先生ええええええ！」

「イヤアアアアアアアアア！」

「！ 先生……！」

ファム、シスターナナ、ウィンタープリズンの悲鳴や叫び声が辺りに響き渡り、ハッと我に帰る九尾。

高笑いをやめたベルデは、絶命寸前のオルタナティブを見下ろしながら問いかけた。

「ライダーの中じゃキレルあんたも、結局こんなもんか。九尾を庇うようなバカな真似しなければ、助かったものを」

「……フツ」

「何がおかしい」

「教え、子を、最後まで、守る、のが……、教師である、私の、役目、です……！ 後悔、は、ありま、せん、よ……」

その言葉を呟いた瞬間、変身が強制解除され、白衣を着たメガネの男性が目を閉じて大の字になっている状態で露わになった。

「先生らしいごもつともな意見だが、所詮勝ち残った方が正しいのがこの社会だ。つまりテメエのそれは、間違ってたって事だ」

刹那、九尾の口からこれでもかと言わんばかりに奇声が溢れ出て、ベルデに殺気が向けられた。ベルデはほんの一瞬だけ背筋を凍らせただが、すぐに元に戻る。九尾は、怒りに満ち溢れていた。今にも飛びかかろうとしたが、すんでのところ九尾の背中を強烈な痛みが貫

き、地面に伏した。震えながら顔を上げて振り向くと、九尾の背後でタイガがデストバイザーを構えて見下ろしている。

ベルデは肩を竦めて、こう呟いた。

「そもそも、何で九尾をここに連れてきたのかまだ分かってないようだな。それはあいつに大人つてもんがどういものなのかを教えるやる為だ。俺からしたら、まんまとお前らは俺の張った罠に易々と引っかかってくれて、万々歳なんだよ。これで九尾も少しは懲りるだろうよ」

「おお！ ハナっからオルタナティブ殺るのが狙いだっただのかー！」

「ベルデマジエリート！」

ピーキーエンジェルズが囁し立てる中、九尾は頭にのぼっていた血が冷め始める感覚を覚えた。始めから、九尾を陥れる為に、先生やその仲間を利用したのか。

そしてその果てに……、先生は……。

用は済んだとばかりにベルデは高笑いしながら、仲間を引き連れてその場を後にした。現役の教え子達が駆け寄って恩師の冷たくなつた手を握る姿を視界に捉えながら、九尾の意識は深い闇に落ちていった……。

ファヴ：『クラムベリー、オーデイン。こんばんはぽん！』

シロー：『発表の日ではないにもかかわらず参加してくれるとは大いにありがたい事だ。おまけにBGMも流してくれるとは。助かるぞクラムベリー』

ファヴ：『ええ。今回は、悪いお知らせが入ってきたので、それをもみんなにお伝えするぽん』

シロー：『脱落者……というよりも、死亡者が出てしまったというベキか。とにかく、我々が懸念していた事態が起きてしまったのだ』

ファヴ：『それじゃあ手短にお知らせするぽん。「オルタナティブ」が事故で死んじゃったぽん。ファヴもシローも悲しいぽん。辛いぽん』

シロー：『実力も確かだったからな。このような形で脱落してしまふとは、本当に残念でならない』

ファヴ：『でも、この犠牲を無駄にする事なく、みんな頑張つてほしいぽん』

シロー：『なお、先日も述べたルール通り、オルタナティブが死んだ事で今週の脱落者は無しとする』

ファヴ：『連絡はこれで以上ぽん。あ、因みにキャンディー所有数のトップ3の発表は、本人達が嫌がってたから、今後から取りやめにしたぽん。ご了承くださいぽん』

シロー：『それからもう一つ。レアアイテムの解放は従来の脱落者の発表日に行う。我々も、しばらくはオルタナティブの件で忙しくなってしまうからな』

ファヴ：『それじゃあ、また3日後にぽん！』

マジカルフォンから聞こえてくるはずのBGMは、廃屋でいつになっても来ない九尾をずっと待っていたスノーホワイト、龍騎、トックスピード、ナイト、リップル、ライアの耳には入ってこなかった。やがて、最初はすすり泣き程度だった音が次第に大きく響き渡り、6人の中で今週の脱落者と最も関係の深かった白い魔法少女の顔はグシャグシャに濡れだして、身をよじらせ、吠え叫んだり、泣き喚きながら、近くに転がっていた木材を思いっきり殴り続けた。

時折折れた先の部分が、スノーホワイトの拳に食い込み、血が少しずつ流れているが、他の5人はかける言葉すら思いつかない。

スノーホワイトはただただ泣き続けた。何が恩師の身に起きたのか、ひよつとしたら未だに姿を見せない九尾も関わっているのではないか、などと、考えるゆとりもない。

オルタナティブの死が、香川 俊行の死が、悲しくて、辛くて、恐ろしすぎて、認めたくなくて、嘘だと思いたくて、でもやっぱ悲しくなあって、ただただ泣き続けた。

『てなわけで、オルタナティブが死んじゃったから、今週の脱落者の発表は無しになったっていう報告ぽん。つまり、今週君が脱落する可能性はゼロになったって事だぽん』

消灯時間はとつくに過ぎ、暗い病院の個室の中で、立体映像としてファヴが浮いているマジカルフォンの明かりだけが、ベッドの上で上半身を起こしている岸边 颯太を照らしていた。その表情は固まっていた。彼の今の表情を一言で表すなら、『絶望』がピッタリと当てはまる。

やがて、颯太は唇を歪めた。引きつった笑みを浮かべながら、口を開く。

「……ははっ。何言ってるんだよ。ファヴも冗談がキツイぞ。あの先生だぞ。そんな簡単に死ぬわけ」

『だーから何回も言わせるなぽん。オルタナティブはついさつき、事故で死んじゃったんだぽん。もう君のいう先生はいないんだぽん』

嘘だ。

そんなはずはない。

先生は、仮面ライダーの、そして魔法少女の見本に値する、尊敬できる人だ。

自分の夢を、後押ししてくれた、優しい正義の塊が、そんな簡単に……。

『こないだも言ったけど、事故で死んだ人も脱落者として扱うぽん。だから今週はキャンディー数による脱落者は出なくなっただって事ぽん』

「……違う」

『何が違うぽん。言ってる意味分からないぽん。もっと素直に喜ぶべきぽん。おかげで数が少なかった人は助かったし、ラ・ピュセルはまだ生きていられるぽん。ここは前向きに捉えて、早くその足の怪我を治して、キャンディー集めを頑ば』

ファヴの声が途中で途切れたのは、颯太が強制的に電源を切ったからだった。

辺りは再び黒に包まれ、小さな耳鳴りだけが聞こえてくる。

『颯太君。私は君に、もっと広い目で世界を見て、多くの事を学んでいただきたいのです。道は1つに絞るものではありません。そしてその道を創り上げるのは、君が魔法少女でいる時のような、強い意志です。焦らずゆっくりと、その足を治していく内に、きっと見つかる事でしょう』

数時間前、大地と小雪の2人と入れ替わるように見舞いに訪れてくれた恩師のありがたい言葉が、不意に脳内に響き渡ってきた。

「……そう、だよ、な。これ、やっぱり夢、だよな。そうだよな、先生……」

呆然の虚空を見つめながらの問いに、答える者はいない。代わりに返ってきたのは、先ほど耳にしたファヴの無感情な呟き。

『オルタナティブはついさつき、事故で死んじゃったぽん』

……やめろ。

『もう君のいう先生はいないんだぽん』

もう……！！

「やめて、くれ……！！」

誰でも、いい……！！

「誰、か……！！」

誰か、これは、そう……。

「誰か、夢だって、言ってくれよおおおお……！！」

夢であってくれ。

その願いは届く事なく、動く事の叶わない颯太は両手を、目から止まる事を知らずにこぼれ落ちる滴を拭うように当てた。だが、塩辛い水滴は止まらず、口からは嗚咽が次第に大きく鳴り響く。

巡回していた看護婦や隣の病室にいた患者達が音に気付き、颯太のいる室内に駆けつけて、慰めて気を落ち着かせるまで、それから数時間かかったという……。

《中間報告 その5》

【オルタナティブ（香川 俊行）、死亡】

【残り、魔法少女14名、仮面ライダー13名、計27名】

48. 慟哭の雨

榊原 大地は、雨の雨が苦手だった。

決して嫌いというわけではない。ただ、どうしても良い思い出が見つからないだけだ。その原因の大元として、N神社の先代の当主だった祖父の死が関与している。

祖父は大地が5歳の時にガンを患って、そのまま息を引き取った。そして葬儀の日、朝からシトシトと雨が降り続けていた。普段から大地はもちろん、兄の律木にも優しく接し、そばにいただけでも楽しかった存在でもある祖父の突然すぎる死を、当時の大地はなかなか受け入れ難いものがあった。

時折聞こえる雨の音を耳にしながら、数多くの花に埋もれながら、安らかな表情で横たわっている祖父の顔を見る度に、涙が出そうになる。その都度、隣で手を握ってくれていた律木からは、男なら泣くなと指摘され、とにかく必死に堪えていた。結局、家に帰ってからは堪えていた分だけ号泣したのだが……。

こういった経緯もあり、大地には『雨』に対する苦手意識が今なお心の中で燻っていた。

そんな私情を抱えている大地だが、やっぱり雨は嫌いだ、と、しめやかに行われている、恩師の香川 俊行の葬儀の最中で改めてそう思った。

北区の大橋の真下で、首の骨が折れた状態で発見された香川は、橋からの転落死という形で処理された。原因は未だに判明していない、というのが、警察の言い分だった。

市内でも2、3番目に大きな葬儀会場にて、式は行われ、多数の関

係者らが彼の死を惜しんだ。彼が勤務していた大学の生徒や教授等はもちろん、小学校に赴任していた時の教え子やその家族に教員、学生時代の同僚でもある博士や教授も参加していた。これだけでもかなり多くの繋がりや築き上げ、どれだけ大切にされてきた存在だったのか、大地は改めて香川の凄さを思い知らされた。

だが、そんな優しかった恩師はもういない。そしてその原因を作ってしまった一端に、自分の名は間違いなく挙げられる。あの日、倒れこんだ自分を庇った事で、同じ仮面ライダーの1人であるベルデに殺された。あの時、足の痛みを庇いながら回避出来ていれば……。そんな後悔の念を抱きながら、ひよつとしたら香川の代わりに自分の顔写真が額縁に収められていたのではという恐怖心が芽生えつつあり、思わず目の前に広がる香川の写真から目を逸らした。

現在、香川の遺体が納められている棺のそばには、彼の妻である典子が、昨日まで元気だったはずの夫を突然失った悲しみのあまり、声をあげながらしゃがみ込んで棺に手を当てて涙を流す姿が。隣には、息子の裕太が呆然とした表情で棺をジッと見つめていた。まだ小学校に上がる前の彼には、父親の死が理解出来ていないのかもしれない。その姿が、大地の胸に突き刺さるものを感じさせた。

ふと視線を外すと、大地のいる席から少し離れた所に座っていた、小太りな女性が何度も涙を拭う姿が。その隣には、来ている喪服をよく見えないと男性と間違えそうな感じの女性が、小太りな女性を慰めている。その隣には、2人ほどではないにしろ、やるせない表情で俯いている女性が。大地は知っている。その3人が、香川の現役の教え子であるシスターナナこと羽二重 奈々、ウインタープリズンこと亜柊 雫、ファムこと霧島 美華である事を、先日香川の遺体の処理をする為に警察に通報した際、変身を解いて連絡していたので、よく覚えている。

やがて時間は刻々と過ぎ、参列者が数人に固まって棺の前に出て花を入れる時間になった。大地やその両親、隣に座っていた姫河一家も済ませ、しばらくすると、一際目立つグループが前に出た。

車輪から音を立てながら、ゆつくりと棺に近づくとそれは、颯太が乗

る車椅子から鳴っていた。後方からは颯太の両親が車椅子を押ししている。病院からの許可を得た颯太は、当然の事ながら葬儀に参加していた。が、その表情は大地や小雪が見舞いに行っていた時とは比べものにならないぐらいに暗かった。両足に太く巻かれたギプスが、痛々しさを物語っている。まだ立ち上がるだけの筋力は戻っていない為、花は両親の手で代わりに添えられた。唯一彼に出来たのは、香川の顔を拝める事だけ。

「先生……！」

自分の夢を応援してくれた大恩人の死に顔を目の当たりにして、遂に堪えきれなくなったのか、握り拳を棺に置いて、体を震わせ、顔から水滴が溢れ落ちる姿を、大地はハッキリと目撃した。小雪にも見えたらしく、もらい泣きをしている。他の面々も影響されたのか、どこからともなくすすり泣きが聞こえてくるようになった。

大地は、香川の家族に今一度目をやり、拳をこれでもかと強く握りしめた。こんなにも数多くの涙を流させたのは、自分だ、と言い聞かせながら。

と同時に、沸々と湧き上がる『何か』が、大地の全身を支配しつつあった。

その葬儀の様子を、降りしきる雨の中、正史は傘を差しながら、会場の外からジッと見つめていた。学界のホープとも呼ばれていた香川の死を聞いて、OREジャーナルとしても黙っていられなかったのか、大久保は取材を命じた。直接的な関わりは大地よりも少なかったものの、同じ仮面ライダーの死を悼んだ正史は真っ先に志願し、葬儀会場に足を運んだ。令子もついてきたのだが、現在は別の場所で取材を続けているようだ。

事の顛末は大地の口から直接聞いている為、正史は知らず知らずのうちにも傘の柄を握りしめていた。遂に直接的な殺し合いが始まったのだ。それは正史自身最も恐れていた事態だ。実際にはルーラから始まり、シザースも第3者の手で殺されているが、今回の件はキャンデーの競い合いから、仮面ライダー並びに魔法少女同士による、生き残る為の殺し合いへシフトした事を明確化させるようなものである。

「……何で、こんな事が……!」

誰ともなしに正史は声を震わせながら呟く。

「随分と、慕われていたようだな。香川という男は」

不意に後方から、聞き慣れた声が。正史が振り返ると、傘をさして葬儀会場に目を向けている蓮二の姿が。その隣には華乃もいた。バイト終わりに立ち寄ったのだろう。蓮二は正史の隣に立って顔を覗き込むと、口を開いた。

「よほど滅入っているようだな。お前と奴とは、さほど面識はなかったはずだが」

「そりゃあそうだけど……。でもあの人、大地君達の先生だったんだろ。俺だって辛いし。それに、同じ仮面ライダーだったんだし、気分いい訳ないだろ……」

神妙に呟く正史とは対照的に、蓮二は肩を竦める。

「俺としては、何れこうなる事は見込んでいた。兆候はあったわけだしな。……それに、奴はライダーだ。ライダーや魔法少女同士に同情なんて必要ない。これで脱落者の枠が1つ減らされた。敵も減った

し、俺としては大助かりだ」

「……おい！」

蓮二の言い方が気に入らず、正史は蓮二に詰め寄った。

「今の言葉、大地君達の前でも平気で言えるのかよ！ それでもライダーなのかよ！ ライダーも魔法少女も、殺しあう為に力を手に入れたんじゃないだろ！」

「何を勘違いしている。今はある意味で敵同士だ。お前達とは利用価値があるから付き合っただけだが、妙な真似を起こせば、こつちから手を切るつもりだ」

「何い……！」

歯を剥き出しにして鋭い目線を向ける正史を見て、蓮二は鼻で笑った。

「な、何だよ」

「つくづくお前はライダーになるべき人間じゃないなって思ってたな」

「それはお前の方じゃないのかよ！ ライダーや魔法少女と戦う事ばかり考えて……。ちよつとは悲しんでる大地君達の事も考えてやれよ！」

「戦う事でしか、生き残る術はない。颯太が重症を負ったばかりなのに、そんな事も気づかないのか？ お前みたいな奴は、そんなバカなと思うかもしれないが、そのバカな事にしか賭けられない奴だけが生き残れる」

「……！」

蓮二の一言出た背筋が凍りつく正史。

「とにかく、今後も俺や華乃の邪魔だけはするなよ。それが守れるなら、そこにいてやってもいい」

「邪魔をつて、仲間同士で戦う事がかよ！」

「それ以外に何がある」

「もしそうなら絶対止めてやるよ！ お前に何言われても、引つ込むつもりないし！ 大体、俺はこれからこの力で困ってる人を助けたら、モンスターを倒すって決めてんだ」

「何の為に」

「だから！ 誰かをモンスターから守る為に……」

そこまで呟いたその時、蓮二が正史の胸ぐらを掴んだ。互いの傘が地面に落ちて、多量の雨が2人の頭上に降り注ぐ。

「じゃあ聞くが、その安っぽい正義感で、ベルデのように人を殺せるのか！」

「……！」

「それくらい出来ないようなら、この生き残れるわけもない！ お前だけじゃない。手塚や大地に颯太、トップスピード、それに小雪にも同じ事が言える」

「ちよ、何で小雪ちゃん達まで……！ じゃあ華乃ちゃんはどうなんだよー！」

「華乃も俺と同じだ。俺達は背負っているものの為なら何でもできる。何ならこの場でお前達を叩きのめしてもいい！」

「お前……！」

カッとなった正史は蓮二を掴み返そうとして、胸元に手をやった。すると、正史の手は蓮二がいつも首からぶら下げているペンダントに届き、押し倒した勢いで紐が千切れてしまった。そこで正史は手に握られたペンダントに初めて目をやった。写真を入れるタイプのもので、開いていた部分を見ると、そこには蓮二ともう1人、華乃とは別の女性との2ショットが写っていた。年齢は華乃より年上、蓮二より年下に見えた。

「！」

蓮二よりも早く華乃がそれを素早く奪い返し、蓮二に渡した。華乃が正史を睨みつけると、正史はペンダントを指差しながら叫んだ。

「今のって……。ひょっとして、お前が生き残りたい理由と関係あるのか!?？」

「お前が知る事じゃない！」

そう言ってペンダントをポケットにしまい、傘を拾って背を向けた。が、数歩進んだところで再び振り返る。

「最後に聞いておきたい。お前はどの戦いで何を背負っている。無いなら別に良い。勝手に死ぬ事にはなるからな」

蓮二の問いに対し、正史はしばらく濡れた地面を見つめ続けたが、やがて1つの答えを出した。

「大地君達」

「……何？」

「もうあんな涙を流させない為に、それからあの子達が最後まで生き残れるまで、とりあえず俺は死なない。もちろんその後も。それだけで、背負うものは充分だ」

「……本当のバカだな」

呆れがピークに達したのか、それ以上何も言わずに、その場を後にした。華乃は正史の方を振り返ってこう言った。

「あなたがどう考えようと勝手だけど、もし蓮二さんをこれ以上侮辱するなら、覚悟しておいて」

「……えっ」

「あの人の事、何も知らないくせにでしゃばるなって事」

口調を尖らせながら、華乃も蓮二の後を追うように立ち去った。

「……ひよつとして、華乃ちゃんも蓮二の事で、何か知ってるのかな」

傘を拾い上げて呆然としていた正史だったが、やがて葬儀会場の方から声が聞こえてきたので振り返った。どうやら葬式は終わったようだ。正史は大地達に会う前に、令子に声をかけようと、会場に近寄った。

『ベルデを失格にさせてほしいぼん?』

『どういうつもりだ』

葬式が終わり、身支度が始まった頃、大地は小雪と共に会場の外にあった、人気の無い場所でファヴとシローを呼び出した。なお、颯太は式が終わってすぐに病院へと戻っており、現在は2人しかいない。小雪が腫れた目を見開きながら提案したのは、香川改めオルタナティブを殺した張本人であるベルデを失格にし、仮面ライダーとしての称号を剥奪してほしいというものだった。

「だいちゃんから全部聞いたよ。先生、事故で死んだんじゃないよ、ベルデに殺されたんでしょ!?? そうだよね、だいちゃん!」
「……ああ」

『で、それが許せないからベルデを失格にさせろと?』
「だって……! 同じ仮面ライダーなんでしょ!?? キャンデーを奪うだけじゃなくて、今度はその命まで奪うなんて……! そんなの、仮面ライダーでも何でもないよ!」

言いながら、小雪はその場に崩れ落ちる。香川の死を無念に感じて、力が抜けたのだろう。大地はジッとマジカルフォンを見つめながら、ファヴとシローの返答を待った。

『だから何って話ぼん』

だが、2匹からの回答はそっけないものだった。

『だいたい物的証拠もないだろう。それじゃあ向こうに言いがかりだつて言われても不思議じゃない』

『それにベルデは今現在のルールに反してるわけじゃないぼん。ここで失格にさせようものなら、それこそルール違反だぼん。ファヴ達が勝手にそんな事やったら、他のみんなから嫌われるぼん。そんなの嫌だぼん』

「でも……!」

『手短に言うなら、君の提案したそれは全く理屈が通っていない、ただの私情だ。そんなものを私達が受託するとも?』

シローの眩きに、小雪は黙り込んだ。彼らの言う通り、これは単なる私情であり、論破できるだけの手札がない。だが、それでも小雪は口だけは止めないようにと、感情を露わにする。

「でも、このまま野放しにして、いい訳ないよ！ 今度は別の魔法少女や仮面ライダーが狙われるのかもしれないだよ！ それで先生の家族みたいに悲しむ人だってたくさんいるかもしれないのに……！」

『言いたい事はそれだけぽん？ ファヴもシローも、みんなの尊厳をちゃんと考えて君の言い分を否定してるのに。こっちも暇じゃないから、用がないならこれにて失礼させてもらおうぽん。それじゃあ！』
「待って……いー 待ってよファヴ！」

小雪が呼び止める前にファヴは彼女のマジカルフォンから姿を消した。全く相手にさせてもらえなかった悲しみからか、再び涙が溢れ落ちて、濡れた地面に蹲った。

大地は小雪に声をかける事も、そばに寄る事もせず、ただジツとシローを見ていた。

『何だね。君も言いたい事があるようだが』

「……そっちの方で、ベルデをどうにかするのは無理って、事だよな。だったら……」

『何か勘違いしているようだが、私達はあくまで、「こちらから称号の剥奪などといったルールに関与出来ない」という意味を込めてこう言っているのだぞ？』

「……いー」

『後は自分達で考えて動く事だ』

それだけ告げると、シローも姿を消した。

残された2人は雨の音を聞いながら、しばらくその場に居続けた。雨の音に混じって、小雪の嗚咽が聞こえてきており、大地は黙り込んでいた。まるで何かを考え込むように……。

と、その時だった。マジカルフォンからモンスター出現の音が鳴り響き、2人が顔を上げた時、小雪の背後にあった水たまりから、鋭い鉤爪を持った鳳凰型のモンスター『ガルドミラージュ』が小雪に迫っ

た。

「きゃあ!?」

「!」

とつぎに大地が小雪を突き飛ばし、ガルドミラージユの鉤爪はそのまま大地の制服の上から斬り裂いた。地面に血が飛び散り、大地は膝をついた。そしてふと脳裏によぎる。もしあの時、庇いにきたオルタナティブを今みたいに突き飛ばしていれば……と。

ガルドミラージユはそのまま近くの公衆電話のガラス戸を通じてミラーワールドに逃げ込んだ。

「だいちゃん!」

「これ、くらい……。先生が味わったもんと、比べたら……!」

大地は黒の制服をその場に脱ぎ捨てた。降り滴る雨を全身に浴びながら、大地はガラス戸に歩み寄った。ガルドミラージユと戦うつもりなのだろう。

「待ってだいちゃん! 私も」

「……下がってろ」

「えっ、でも……」

「俺だけでやるって言ってんだ! お前はすっこんでろ!」

大地の普段感じる事のない気迫に押されて、小雪はその場に立ち止まった。大地はカードデッキをかざして、Vバックルを腰に装着した。

「変身!」

その時、小雪は気づいた。雨に濡れて透けているTシャツからでも、大地の背中に大きな切り傷が出来ていた事に。小雪は知る由もないが、それはタイガに背後から攻撃を受けた際にできた傷であり、まだ完治していないようだった。

だが大地は気にも留めていないのか、九尾に変身してすぐにミラーワールドに突入した。小雪もすぐにマジカルフォンを使ってスノーホワイトに変身しようと考えたが、何故か足が竦んで動けない。先ほどの大地の怒声を聞いてしまったからなのだろうか。

「グフツ……！」

一方、雨の降り注ぐミラーワールド内では、九尾とガルドミラー
ジユによる死闘が始まっていた。円盤状の武器を用いて戦うガルド
ミラージユに対し、九尾はフォクセイバーで対抗していた。

「うおおおおおおおつー！」

フォクセイバーを振り回しながら、九尾は考えた。それは、先ほど
シローがかけた言葉。

彼らは言っていた。自分達からはゲームのルールに干渉する事は
出来ない。しかし、逆を返せば、それはつまり……。

「（俺が、ベルデを殺せば、いい……！）」

シローやファヴに出来ないなら、自分の手でベルデに手を出せばい
い。向こうはすでに2人も殺している。ならば自分が手を下しても、
何らルール違反にはならない。

「（俺が今から、ベルデを殺せるぐらいに、強くなれば……！）」

それは、明確なる復讐の確立。自分達や香川を慕っていた者達から
何もかも奪い取った奴への制裁。

決意したその瞬間、九尾は自分でも驚くほどに脳内が冴え渡った。
眼前で戦っているガルドミラージユをベルデと仮想した途端、迷いは
吹っ切れた。

「ウアアアアアアアアアアアアアア！」

雄叫びと共に、フオクセイバーを構えた九尾は、殺す事だけを目的に、ガルドミラージュに立ち向かった。

その様子を、ガラス戸から小雪が傘を差しながら見つめていた。何度も立ち向かつては吹き飛ばされて血を流し、なおも立ち上がり、また血を流す。それでもなお、彼は前に進む事を止めない。何度地面を転がっても、何度傷が増えても、何度止められても……。

そうこうしているうちに、根性で乗り切った九尾の一手がガルドミラージュに届き、吹き飛ばされたガルドミラージュの上に、九尾が馬乗りになった。そして、躊躇う事なくフオクセイバーをガルドミラージュの顔に突き刺した。ガルドミラージュの口から悲鳴が漏れ出すが、九尾は手を緩めない。何度も引き抜いては刺し、引き抜いては刺しの繰り返しが続いた。まるで息の根を完全に止めようとしているかのように。まるで煮えたぎった怒りをぶつけるかのように。

不意に目に涙を溜めていた小雪は、自身の体が震えている事に気づいた。バスで出会ったあの日から、ミラーワールドで再開し、コンビを組んで人助けに勤しみ、やがてラ・ピュセルやライアとチームを組み、この理不尽なデスゲームが始まるまで、一度として感じられなかった、九尾に、大地に対する恐怖心が初めて芽生えた感覚がした。「止めて……もう、止めて……！」

声に出そうにも、喉につつかえているかのように、どうする事も出来ない。

何度も串刺しにされたガルドミラージュが完全に力尽き、爆散して九尾がその場で雨空を見上げるまで、小雪はただジツと、溢れ出る悲しみを表情だけで表していた……。

49. 悲しみと憎しみと懐かしき思い出

ミラーワールドでただ一人、モンスターと戦う姿を呆然と見つめている小雪。加勢しようとするよりも早く決着はついた。いや、そもそも彼女は動けなかった。もつと早く加勢できたはずなのに、それが出来なかった。理由は自分でも分からない。

彼女にできたのは、目に涙を溜めながら傷ついていくパートナーの後ろ姿を見つめるだけ……。

「小雪ちゃん！」

不意に声が聞こえてきたので振り返ると、正史が駆け寄ってきた。モンスターの気配を察知したのだろう。

「……あれ？ 大地君は？」

「……っ」

小雪が息を詰まらせて、黙り込んだ。正史は訝しんだが、辺りを見渡して口を開いた。

「とにかくモンスターだ！ 早く変身しないと……」

正史が電話ボックスを見つけて、近づいてカードデッキをかざそうとしたその時、ミラーの中から九尾が出てきた。

「！ 九尾！」

正史が驚く中、九尾は変身を解き、大地の姿に戻った。全身ずぶ濡れで、腕からは血が出ていた。表情も濡れた髪に隠れてよく見えなかったが、覇気が感じられなかった。

「大地君、その腕……！」

「……大丈夫です。これくらい……」

「で、でも……！」

正史が大地の腕の怪我を見て不安げな表情になった時、新たに近寄る人影が。

「正史？ それに大地も」

「美華？」

先に声をかけてきたのは、彼ら同様葬式に参加していた美華だった。その背後には疲れ切った表情で雫に寄り添う奈々の姿も。一方

で小雪は、初めてみる女性の名を正史が美華と呼んだ事に疑問を感じていた。

「美華って、確か城戸さんの……。もしかして、皆さんが……!?？」

「……そうか。君が、スノーホワイトか」

いち早く察した雫は、小雪の顔を見てそう呟いた。それから地面に落ちていた制服を拾うと、大地に差し出した。

「マジカルフォンからモンスターの出現が知らされて、すぐに向かおうとしたんだが、ご覧の通りだ。もう君が倒したようだな」

「……」

雫は奈々を慰めながら、大地に問いただした。大地は無言で頷く。それから雫も同じく無言で自分が差している傘の中に大地を入れてあげた。

「そのままじゃ風邪を引く。親御さんも、心配するぞ」

「……ありがとうございます」

「それですまないが、どこか休憩できそうな場所を教えてくださいませんか？ この区域は少々不慣れでね。奈々を休ませたい」

確かに今の奈々は憔悴仕切っている。後で分かった事だが、同じく行動を共にしていたオルタナティブ改め香川の死を目の前で見ってしまったシヨックから、今日までほとんど眠れていないのだという。加えて先ほどまでの事で泣き疲れており、どこかで腰を下ろして休む必要があると判断した雫は、大地達に尋ねた。小雪と正史が口を開くよりも早く、大地が言った。

「……なら、俺の家が近いんで、そこにしましょう。広いんで、多分大丈夫です」

「かたじけない。では、無礼を承知で頼もう」

そう言っって一同は大地の両親と合流した後、会話を交えて徒歩でN神社へと帰宅した。盛り塩をして、自分達の体にも塩を振ってから家へ上がり、彼らは大地の自室に入ってようやく腰を下ろした。

電気こそついているが、場の空気は非常に重苦しい。

『……』

大地、小雪、正史、美華、雫、奈々はしばらく座り込んで沈黙を貫

いていたが、やがて居心地が悪くなったのか、最初に口を開いたのは小雪だった。

「えっと……。この姿で会うのは、初めてですよ。私、姫河　小雪、です。魔法少女スノーホワイト、です」

「……そうですね。では、私達も自己紹介しておかないと。私は羽二重　奈々。シスターナナの『ナナ』は本名からとってます。そしてこちらが……」

「亜柊　雫だ。ヴェス・ウインタープリズンの変身者だ」

「もう知ってると思うけど、私が霧島　美華。こいつの元カノ」

「私達、同じ大学の出身で、香川先生が所属しているゼミ生なんです」
簡単にではあるが、互いに自己紹介を終え、大地は立ち上がった。

「何か、暖かい飲み物持つてきますね」

「なら、私も手伝おう」

話したい事もあるしな、と言って雫も大地の後ろをついて行って、部屋を後にした。

残された一同は再び黙り込んだが、やがて意を決したように、奈々が口を開いた。

「……先生の件、本当に、残念でなりません」

他の一同は顔を上げて、奈々に目をやった。

「今日の葬儀を見ていただいた通り、先生は私に限らず、雫や美華、同じゼミ生、そして小雪さん達にとって希望そのものでした。あの方がいてくれたから、私は雫と愛し合う事をためらわずに済んだのです。それなのに、どうしてこのような悍ましい事態に先生が……!」

すすり泣きと共に顔を埋める奈々を見て、小雪も我慢できなくなつたのか、再び目に涙が溜まり始めた。香川を悼んでくれた者がいる事に涙が出たのか、それとも彼の死を思い出して涙が出たのか、本人達にも分からないところはあった。

「一番起こってはいけない事が起きてしまったという事実は変えられません。ひよっとしたらベルデ達とは別に、悪意を持って誘導している者がいるのかもしれない……」

一瞬。小雪の脳裏にラ・ピュセルを重症まで追い込んだクラムベ

リーとオーデインのペアがよぎったが、その思考は奈々の次の言葉でかき消される事になる。

「私が最も恐れているのは、これをきっかけにキャンディーや、人助けなんて関係なくなる、ただの殺し合いが、始まってしまう事です」
「……………」

小雪は背筋が震え上がる感覚を覚えた。魔法少女や仮面ライダー同士で戦う。キャンディーの競い合いから、奪い合い、そして人同士の殺し合いへ。段々とシフトしていく現状を改めて理解した小雪は、誰かの手を掴みたくなった。

すると、そんな彼女に応えるかのように、奈々が勇気を振り絞って小雪の手を握った。

「ですが、ただ黙って現状を過ぎ去るのを待つだけでは、例え生き残ったとしても、人としての虚しさが残るだけです。このような悲劇を増やす事は許されない以上、我々は団結すべきなんです」

以前にも同じような事を、小雪や正史を含めた8人にも語っていた事を思い出す2人。が、今度の奈々は真剣そのものだった。

「改めてこちらからお願い申し上げたいのです。皆で知恵を合わせて、解決策を探しましょう」

「……………私に、私達にできる事があるなら、頑張ります！ リップルさんやナイトさんの方は、私も出来る限り説得します。城戸さんも、お願いします！」

「え、う、うん。（でも、あんな事言ってる2人に話なんて通じるのかな……………」

正史は会場の外でのやり取りを思い返していたが、小雪や奈々の真剣な表情に根負けしたのか、笑みを浮かべて頷いた。

「先生の死を無駄にしたくないのは、私達も同じです。協力させてください」

「……………ありがとう、小雪さん！ スノーホワイトの時と同様、本当にお優しい方ですね……………」

そう言って2人は互いに慰め合うように抱きしめた。それを見ていた正史と美華は、言いたい事を言えぬままジツと見つめ続けた。

小雪と奈々が話し合う一方、大地と雫はキッチンでポットのお湯が沸くのを待ちながら、ティーカップを揃えたりと手を動かしていた。大地の両親は、落ち込んでいるであろう大地やその知り合いになるべく干渉しないようにと気を利かせて、別場所でも休憩していた。そんな中で、2人の方でも会話が行われていた。

「……惜しい人を、亡くしたな」
「……はい」

そう呟きながら、気絶する寸前まで聞こえていた、恩師を目の前で殺した憎きベルデの高笑いを思い出したのか、拳を知らず知らずのうちに強く握っていた。それを見た雫は、ポケットに手を入れて、彼に見えないところで同じように握り拳を作った。

「私も同じさ。あいつが、憎くて仕方ない」
お湯が沸騰している音だけがキッチンに響き渡る中、雫のはつきりとした口調が耳にこびりついた。

「でも、私が一番許せないのは、ベルデがシスターナナの姿を利用して先生を騙し討ちした事だ。優しいナナを侮辱するかのような行為に、

私は今でも猛烈に腹が立っている」

雫が言っているのは、視界が悪くなっていた時にオルタナティブを油断させて襲撃するためにコピーベントでベルデがシスターナナの姿を借りて、何のためらいもなく攻撃した事だ。シスターナナを愛しているからこそ生まれた怒りなのだろう。

「先生という支柱を失ってしまったとはいえ、それで崩れる私達ではない。先生の教えを守って、必ず奈々を守り抜いてみせる」

「雫、さん……」

雫の並々ならぬ決意を目の当たりにして、大地は不意に聞きたくなった。なぜそれほどまでに奈々を守ろうとするのかを。2人のその姿は、仲良しの範疇を超えて、愛し合っているようにしか見えないからだ。

「本当に、その……。好きなんですね。奈々さんの、事が」

「好きだなんて軽々しいものじゃないさ」

そこだけは堂々と述べる雫に、大地はどこか圧倒されていた。

「どうしてそこまであの人の事を……？」

「私が彼女と出会ったのは、大学のゼミだ。自分で言うのも何だが、どうも私は見た目の影響からか、大学に入る前からずっと女子からの視線を浴び続けていた。もちろん男性とも付き合った事はあったが、長続きはしなかった。大学でもそんな感じだろうと思いつつ、ずっと退屈な日々を過ごしていた」

でも、奈々だけは違った、と雫は静かに語りだす。

「二目見た時、私は不思議と幸せな気持ちになった。何故そうなったのかは、未だに分からない。でも分かったのは、彼女こそが私の理想としていた、心の底から憧れる人物なのだとね。もつと奈々と近づきたい。だから私は彼女の所属しているサークルに入部して、最初はなるべく彼女の機嫌をとるように努力した。そうしたら、向こうも時間をかけてようやく私を受け入れてくれた。その時の彼女の笑顔が、何より可愛かった。そして、守りたいと誓えるようになった」

「なるほど……。でも、こんな事言うのも失礼かもしれませんが、女同士、ですよね……？」

「愛の前ではそんなもの、些細な問題だ」

落ち着いた表情で、躊躇いもなく宣言する雫を見て、大地はそれ以上何も言えなくなった。それが彼女の強みなのだとしたら、それに口出しをするべきではない。

お湯も沸騰し、全ての準備が整ったところで、部屋に向かおうとした大地だが、そこで隣にいた雫がお湯の入ったポットを手に持ちながら、大地にこう言った。

「君も何れ、愛というものを知る時が来る。だからそれを知るまでは、君は手を汚すべきではない。一度手を汚せば、そこから先は何も手に出来なくなるかもしれない。……だから、ここから先は私が引き受ける。先生の仇は、私が討つ」

「どっかで食事しない?」

大地の部屋でティーブレイクし、N神社で解散したした後、何故かその場に残った美華は帰ろうとした正史を呼び止めて、食事に誘ったのだ。どういう風の吹き回しか分からなかったが、このまま自宅に戻

るのも癪にさわった正史は、美華と共に、近場の喫茶店に足を運んだ。数分前まで飲み物を飲んでいた事もあり、さほど喉は渴いていないため、適当に軽食を注文するだけにとどめた。

「こうやって2人きりになるのって、久しぶりじゃないかな？」

「そ、そうだな……」

「何改まってるのよ？」

「いや、別に……」

いつになくフレンドリーに話しかけてくる元カノに、戸惑いを隠せない正史。デートの時以来となる2人きりの時間に、若干緊張しているのだろうか。そうこうしているうちに料理が出てきて、しばらくは食事に専念する事にした。料理の味の感想などを出し合いながら話を進めていくが、やがてそれも底をついてしまった。

「……あの、さ」

「？」

やがて話題が切り替わったのは、目の前の料理を3分の2ほど消化した頃だった。

「こんな事、お前に聞くのも変かもしれないけど……。やっぱり戦わなきゃ、生き残れないって思うか……？」

それは、シスターナナの理想とは真逆の質問。蓮二に言われてからずっと疑問に思っていた事。自分はそうは思わないが、他人がどうか、この際聞いておこうと思い切って、美華に質問したのだ。

対する美華の口からは……。

「……奈々には申し訳ないけどさ。あたしは、戦うよ。相手を殺す事になったとしても」

「……そっか」

「あんたはバカみたいに優しいから、ためらうだろうけど。あたしは違う。先生を殺したベルデが憎いんだ。あたしのお姉ちゃんを殺した、あいつと同じくらいにね」

「！ それって……」

「前に話した事あるだろ？ あたしのお姉ちゃんは、浅倉 陸に殺された。大した理由もなかったのに、ね」

浅倉 陸。

名前だけなら、N市では知らない者はいないと言われるぐらいに有名な人物。ただし、それは良い意味ではない。寧ろ最悪の名だ。

数々の傷害事件を起こし、時には人を殺めるほどに危険な人物。そして彼に殺された人物のリストに、美華の姉の名があつた。彼が暴れていた当時はN市を震撼させていたが、警察の懸命な努力の末、遂に逮捕する事に成功……したのだが、それから僅か数日で留置所から脱獄したのだ。その原因は未だに分かっていないが、外部から牢屋が破壊された痕跡しか残っておらず、規模が大きすぎて誰が彼の脱獄に加担したのか判明していないのだ。が、ここ最近は鳴りを潜めているのか、目撃情報は出てこないため、いつしか浅倉の脅威は皆の記憶の中から薄れつつあつた。

当時付き合っていた頃にその話を、正史は美華から聞いていた。そして彼女はこう言った。

彼は人間じゃない。モンスターだ、と。

「だから、あたしはこの力を人助けのためだけに使うつもりはない。あんたが止めたって、あたしは戦う。……で、あんたはどうするのこれから？ 誰かと戦う事になったとして、戦うつもり？」

「……蓮二にも同じ事言われたばっかなんだけどさ。正直、まだ迷ってる。こんな時ちゃんとする事決めておかないといけないのにさ……。でも、相手を殺す為に戦うのは、まだ抵抗があるっていうか……。」

「あんたさ。そういうところは相変わらずっていうか、学習してないっていうか……。まあ、あんたらしいけどね」

「ちよ、なんかバカにされた気がするけど。お前も前からそんな感じだったよな」

「そっかあ〜？」

ニヤつきながら料理を口に運ぶ美華。正史はやれやれといった表情を浮かべていたが、不思議と嫌な感じはしなかった。

だが、彼らはまだ知らない。

戦いの激しさは、ここから更に過酷なものへと進展していつてしま
う事になろうとは……。そのきっかけとなる事態は、すぐそこまで
迫っていた……。

50. 激レアアイテム

本来なら5人目の脱落者が発表されるはずだったこの日、九尾達が拠点に選んだ場所は、大病院の屋上だった。理由はもちろん、そこに入院しているラ・ピュセルこと岸边 颯太と共に、ファヴとシローからの通達を確認する為だ。まだ歩くには魔法少女姿でも困難ではあるが、九尾とスノーホワイトのフォローで、どうにかして屋上まで連れて来ることが出来た。

が、ラ・ピュセルは屋上についてからも、膝を曲げて、フェンスにもたれながら顔を下に向けていた。オルタナティブの死によりその週の脱落者は出なかった。が、恩師の死は彼女に相当堪えているようだ。見兼ねたトップスピードがラ・ピュセルに近寄って肩を強く叩く。

「元氣だしなつて！ そりゃああなたの気持ちは分からなくないけどさ。いつまでもメソメソしてたって何も変わんねえぞ？」

「……」

ラ・ピュセルは力弱く首を横に振る。ため息をつくトップスピードだが、この程度では折れないと言わんばかりに、袋の中からタツパーを取り出して、中身を見せるように押し付けた。煮物とメンチカツだった。

「まあとりあえず食べよ。これ美味しいぞ。こいつを食ってちったあ元氣になれよ。食い物腹に入れとけば嫌な気分も吹っ飛ばしきー！」

その場の空気を変えるように笑いながらタツパーを差し出すトップスピード。ラ・ピュセルはお礼を言ってから咀嚼した。煮物の汁で下面が湿ってしまっており、デリカシーの無さが伺えるが、味は中々のものだった。特に煮汁に浸っていない部分はサクサクとして、歯ごたえが良かった。ほんの僅かではあるが、鬱な気分が晴れたようにも見える。

「誰だつて大切な人いなくなったらショックでやられそうになるけどよ。後ろばっか見ても変わらぬ。前を見てハイな気持ちで進まなきやいけないんだ。……あたしは、あの人を失って、やっとそれに

「気付けたんだ」

「……？」

トップスピードの最後の部分の眩きだけが小さかった為、両隣りにいた龍騎やリッツプルは首を傾げたが、それ以上言うつもりはなさそうなので、気にしない事にした。

「それにしても気になるのは、シロー達の言っていたアイテムの追加だな」

「うん、それぞれ。どんなアイテムが出てくるんだろうな……？」

ライアと龍騎が話し合っていると、ちょうどそのタイミングでファヴとシローからメッセージが送られてきた。

ファヴ：『ええー。それでは、先日お知らせしたレアアイテムの解禁をするぽん！』

シロー：『アイテムは、魔法少女側に5個。仮面ライダー側に5個。そして両方で共有可能なアイテムが3個。つまり計13個のアイテムがダウンロード可能となった。なお、共有アイテムに関してはペアが残っている者だけしか購入できないので、そこだけは注意するように』

ファヴ：『数が多いから、個々の紹介は省かせてもらおうぽん。詳しくは『アイテム購入』という項目にあるから、そこをチェックするぽん』
シロー：『どのアイテムも1人で複数個の購入は可能だが、先着1名

限りだ。決断は早めにするこどだ』

ファヴ：『それじゃあ、アイテムを上手く使ってキャンディー集めを頑張るぼん！ また来週！』

『アイテム購入』

【魔法少女サイド】

・四次元袋（10）……どんなものでも無限に入れられる。

・透明外套（25）……羽織った人は誰からも見えなくなる。匂いもなくなる。

・武器（5）……簡単には壊れない武器。種類はリストの中から選択するように。名称は各自で決めても良い。

・元気が出る薬（3）……テンションが上がる薬。怪我は治らない。10錠入り。

・兎の足（6）……大ピンチの時にラッキーな事を起こす。それでピンチから救われるかは持ち主次第。

【仮面ライダーサイド】

・コントラクト（8）×2……目の前のモンスターにかざすと、同じ姿のモンスターと契約した扱いになり、アドベントや武器、ファイナルベントが使える。

・デイメンションベント（5）……自分の思った場所へとワープできる。

・カードベント（10）……対象の相手を弱体化させる。

・サイズベント（20）……切れ味の良い大鎌を召喚する。

【共通（ペアで残っている者のみ）】

・復活の薬（30）……元気が出る薬と違って、瀕死になっている人に使うと全回復する。一度しか使えないので使い所をよく考えるように。

・金の指輪（7）……指につけた指輪を突き出すと、バリアが張ら

れて守ってくれる。

・身代わり人形(3)……一度だけ攻撃を受けた時に身代わりになつてくれる。

「へえ。魔法の国特性アイテムか」

「確かにどれも凄そうなやつばかりだなあ」

「これなんて面白そうじゃねえか。『透明外套』とか。買っちゃおっかな！」

「じゃあ、この『コントラクト』とか使えそうだな。これ使えば仲間が増やせるって事だし」

龍騎とトップスピードが興味津々にマジカルフォンの画面に目をやって、アイテムを吟味していた。九尾、スノーホワイト、ラ・ピュセルも黙り込みながら見ていた。ナイトとリップルはきな臭さしか感じられないのか、購入する気はなさそうだった。

「んじゃあ早速こいつを」

「！ 待て2人とも！」

「ど、どうしたんだよライア」

龍騎とトップスピードが購入のために画面をタップしようとしたその時、それまでジッと画面を睨んでいたライアが呼び止めた。皆の視線がライアに集まる中、彼はマジカルフォンを操作して、シローを

呼び出した。

『呼んだかね?』

「シロー。確認しておきたい事がある」

そう言つてライアはアイテム購入の画面を指差した。

『仮面ライダー育成計画』も『魔法少女育成計画』も、アプリゲームにおいては無課金だったはずだ」

『もちろんだ。お金は一切とらない』

「ならもう一つ聞ぐが、このアイテムの名前の横についている数字は何を指している?」

ライアが最も気にしていたのは、アイテムの名前と共に設定されていた数値だった。無料であるはずのソーシャルゲームが提示する、この数字の意味とは……。

『お金は払う必要はない。ただし、代価は支払ってもらふ事になる』
「代価……?」

皆の疑問に対し、シローは淡々と答えた。

『寿命だ』

「つわつぶねえ!?!」

「ちよ?!?! キャンセル、キャンセル!」

これを聞いた龍騎とトップスピードはひどく慌てて、スタート画面に戻してから、荒げた息を整えた。無論、動揺が走つたのは2人だけでなく、その場にいた全員も、同じように気持ちを落ち着かせた。

「ちよ、ちよつと! そういうの先に言えつて! もう少して寿命縮めちゃうとこだっただろ!?!」

「つーかき。ここにあるアイテムつて人助けに必要なか? 俺にはそうは見えねえぞ?」

トップスピードの言うように、彼らにはパートナーシステムがある以上、武器がないわけではない。これでは助かりたいという思考と矛盾しているようにも見える。寿命を縮めてまで買う者がいるのか、疑問に思うところだが……。

『強い魔法のアイテムを製作するには、それ相応の代償が必要となる』
「随分簡単に言ってくれてはいるが、それをするだけの価値はあるの

か？」

ナイトの呟きに反応したのかは定かではないが、シローは説明を続けた。

『モンスターを動きが例年に増して活発化しているのは間違いない。パートナーシステムによって追加された武器では対処できない部分も出てくるだろう。言ってみれば、これはこの場にいる者で例えるならスノーホワイトやトップスピードのように戦闘向けの魔法を持つていない者への救済措置でもあるのだ』

「救済、措置……！」

「バカな……！ そんな説明だけで納得するとても……！」

スノーホワイトが驚きながらも考え始め、ラ・ピュセルがシローの意見に強く反対している。

『他の者と差を縮めるにはアイテムの購入が近道となる。今そこにある危機に比べれば、あるかどうかも分からぬ寿命など、些細なものと私は思うがな』

「そんなわけ……！」

『ない、と言い切れるのかな？ 現にラ・ピュセル、君は大きな痛手を受けている。自分の身は自分でしか守れない以上、早めに購入する事をお勧めするよ』

シローはそう勧めるが、誰一人としてアイテム購入に動く者はいない。と、そこへシローがこんな言葉をかけた。

『オルタナティブの死を、無駄にするつもりかね？』

「……！」

その言葉に真っ先に反応したのは九尾だった。

『勇気を示せ。本当に現状を打破したいのならば』

「……俺が、買えば」

九尾は改めて画面に目をやった。

アイテムを手に入れば、寿命を失う。最短で3年、最長で30年。数字を見ているうちに、呼吸が荒くなっているのに、本人は気づいていなかった。

ふと目に付いたのは、寿命20年と引き換えに手に入る攻撃系の、

『サイズベント』と呼ばれるカード。他のアイテムと違って、代価が高い部類に入っているのは、それだけ高性能なアイテムなのだろう。震える指先でタップしようとしたのを見たスノーホワイトが、慌ててその腕を掴んだ。

「や、止めてほしいちゃん！ アイテム買っちゃったら、寿命が……！」
「分かってる！ でも……！」

スノーホワイトに続き、ライアも必死に説得し始めた。

「考え直せ九尾！ シローの言葉に惑わされるな！」

「けど……！」

けど。これでベルデを殺せるだけの力が手に入るのなら。大切なものを壊された苦しみを向こうにも味わえさせる事が出来るのなら。

そこまで思考がたどり着いた時、九尾は腹をくくっていた。スノーホワイトを無理やり振りほどき、龍騎達の叫び声を背に受けながらも、迷う事なく画面をタップする。

『そーるどあうとー！』

……が、サイズベントの購入画面に表示されたのは、上記の文字。

「ソールドアウト……売り切れ……！」

九尾の声に反応したのか、他の一同も画面に目をやる。

「ほ、本当だ！ ってかこれ、全部売り切れてないか……！」

「マジで……！」

龍騎の言った通り、別のアイテムをクリックしても、同じ文字しか表示されない。

「そんな……！」

「信じられねえ……！ 何でそんな簡単に」

『やれやれ。だから言ったのだよ。早い者勝ちだからすぐに買うべきだと。皆、こうして即決しているのだ。これで今の君達は多少なりともデイスアドバンテージを背負った状態にあるという事だ』

「……っ！」

『「先んずれば人を制す」ということわざがあるだろう？ まあ、この結果が後々活動に響かないように祈るよ。それでは、これで失敬させていただきますらうよ』

そう言つてシローはその場から姿を消した。ビル風に吹かれながらしばらく呆然としていた一同だが、やがて龍騎が口を開いた。

「どうして……。みんな命削つてまでこんなアイテムを……」

「だよな……。ぶっちゃけこのままじゃ、マジの争いに……」

トツプスピードがそう呟いた直後、屋上に大きな音が響き渡つた。九尾がマジカルフォンを力強く地面に叩きつけた音だ。皆の様々な視線が集まる中、九尾は拳を固めながら不貞腐れたかのように地面に座り込み、フェンスにもたれてため息をつくど、そこからずっと黙り込んだ。

さて、ここでイベント終了後の、各々の動向に目を向けてみよう。

「しかしアレですね」
『ほん？』

山の奥にある小屋の中では、クラムベリーとファヴ、オーディン、そして先ほど九尾達と会話していたシローが今回のイベントについて話をしていた。

「アイテム追加によって、『強い者を残す』という本来の目的がブレやしませんか？ まあ、燃料投下を任せるように言ったのは私なのですが」

「アイテム次第で弱い者が強い者を倒す可能性がある、という事だな」腕組みをしているオーディンの問いかけに、クラムベリーは静かに頷く。だが、ファヴとシローはそんな事を全く気にしていないらしく、こう言っただけだ。

『戦場において、強者がふとした手違いで死に至る事は、珍しい事ではない』

『まあ要するに、その程度で死ぬなら所詮はその程度の強さしか持ち合わせていなかったってだけほん』

その言葉を聞き、オーディンの脳裏に、過去の記憶がよぎった。

く何十人もの、『人の形をした何か』があちこちに散らばり、血の海と化した閉鎖空間く

くこの世のものとは思えない化け物を前に、他者から浴びた血に染まりながらも生き残ろうとして対峙する、2人の少年少女く

『……オーデイン。オーデイン。どうした』

「っ。何でもない」

シローに呼ばれて冷静さを取り戻したオーデインはそう呟いた。

『だいたい、アイテムの追加如きで死ぬなんてヒーローとしては成り得ないし、つまりは脇役が死ぬべくして死んだ事と同じぽん』

不意に、立体映像として姿を現している球体の白黒マスケットキャラクターの口が歪んだ……ように、2人には見えた。

『なあ。あんたらは強い奴と戦つてりや満足なんだろう？ 強いやつだけが勝ち残れない従来の『選抜試験』が気に食わなかった。だからファヴやシローと手を組んで、この試験を始めた』

「……」

『だったら、これで良いんだよ。小賢しさや要領の良さだけで生き残ろうとしてる奴らが本物のヒーローにぶつ殺される展開。これこそが本来あるべき魔法少女、そして仮面ライダーを育て上げる、『人材育成計画』に相応しい選抜方法なんだよ。……と、いう事ぽん』

そこでファヴは言いたい事を全て言い切ったらしく、空中で一回転し、元の表情に戻った。

続いて、シローが声をかけた。

『全力で戦い、人間としてではなく、強者としての答えを見つけたいのが、お前達の願いだったな。こうして叶えてやるようにしているのだ。人間というものにどれほどの価値があるのかを知りたいという私の要望、そして』

『ファヴの、より刺激的な見世物が見たいって要望にも応えてもらうように頑張つてほしいぽん。そういう契約だったぽん、マスター』

「……1つ聞きたい」

『何ぽん？』

「その見世物には、我々も入っているのか？」

『さあな』

2匹は表情を変えない。否、それは2匹と最も関わりの深い魔法少女と仮面ライダーも同様だった。

「本当に、良かったのですか？　だってそれは、7年という寿命を削つて……」

「良いのよ。これぐらいしなないと生き残れないかもって思うと、やっぱり、ね」

廃墟と化したスーパ一の一角では、7年という代価を支払って『金の指輪』を購入したファムが、右手の中指につけられた金の指輪を見せた。シスターナナが心配そうに見つめるなか、ウィンタープリズンはジッと指輪を見つめていた。

「……このタイミングでのアイテム解放。何か裏があると見て間違いないと思うが……」

「分かってる。でも、こうでもしなきゃ。先生の方まで、生き残らなきゃ」

ファムの決意は固い。ウィンタープリズンもシスターナナも、それ以上何も言わなかった。

王結寺では……。

「ふくん。これが元気の出る薬かあ。んでもってこつちが身代わり人形だね」

「ああ、買っちゃった……。これで私もお姉ちゃんも3年寿命が縮んじゃった」

「しよーがないじゃん。みんな買っちゃってたし、リーダーやスイムスイムがアレを買っちゃったのを見たら、さすがにねえ……」

「だったらタイガに買わせれば良かったんじゃない？ パートナーなんだし買えたでしょう？」

「なーに言ってるのよ。2人揃って初めてピーキーエンジェルズって名乗れるんだから。先に逝くなんてさせないから」

「おお。お姉ちゃんマジクール」

ピーキーエンジェルズを含め、ベルデチームが購入したものを披露していた。

ダウンロードアイテムの販売が開始されたという連絡がベルデから入り、リーダーである彼は購入を即断した。大手会社の社長特有の攻めの姿勢だった。

当初ピーキーエンジェルズは購入に反対していた。寿命という対価が大きすぎると思って、支払いたくないと渋っていたからだ。が、2人の目の前でベルデが、更にはそれに便乗してスイムスイムが高い対価を支払った時には、さすがに言い返せなくなってしまった。

ベルデは20年の『サイズベント』という高い対価を支払ったのだ。スイムスイムに至っては25年の『透明外套』を購入しており、それらの行為を目の当たりにして、ピーキーエンジェルズは異を唱えにくくなってしまい、結果的にユナエルが最短の3年を対価とした『元気

が出る薬』を購入した。妹が買ったという事もあり、姉も便乗して痛み分けとは言わないが、同じく3年の『身代わり人形』を購入したのだ。

「で、たまはその武器を購入したんだ。薙刀ってやつか」

「こ、これが、自分の身を守るのに、良いつて、思ったから……。それに、スイムちゃんが、これを買ってほしいって言ってたから……」

「ふうん。で、アビスはそのカードか。どんなカード？」

5年の『武器』を購入したたまの次に、同じく5年の『ダイヤモンド』を購入したアビスに声をかけたのは、8年の『コントラクト』を購入したガイだった。

「自分の思った所にワープできるカード、か。万が一に備えて撤退も可能となるわけだ」

「こっちは契約のカードだから、まあ、ゲームが盛り上がるには役不足かもしれないけど、面白くなりそうだからいいや」

「そうなんだ」

チームの中では唯一アイテムを手に出ていないタイガが、カードを覗き込んだ。と、ここでたまがスイムスイムに声をかけた。

「でもスイムちゃん。25年も早く死んじゃうのに怖くないの？」

「怖い。でも、これは必要だから」

そう呟いたスイムスイムは透明外套をたまに差し出した。

「えっ？」

「交換してほしい。たまにはこれの方が魔法に合う。その武器は私の魔法に合う」

多くの寿命を削ったスイムスイムが、安価な武器を使用しようとする事に、一同は訝しんだが、リーダーのベルデは特に異議を唱えない。なので自然な形でトレードは成立した。

薙刀とはいいが、どちらかというと出刃庖丁を大きくしたような形の武器をじっくり見て、ピーキーエンジェルズはわざとらしく言った。

「おお、切れ味ヤバそう」

「アレに斬られたくねーな。ってか名前どうすんの？」

「そーそー。勝手につけても良いんだよね」

「ルーラ」

即決だった。

元リーダーの名前をそのままつける真意は分からなかったが、本人がそれで良いのなら、という事で、ベルデも反対しなかった。

そんな中、たまは考え込んでいた。頭の回転が遅い彼女でさえ気づいているのだから、当然周りはその気ではないはずだ。

今回のアイテム導入は、きつとキャンディー集めの促進とは別の意味合いがあるはずだった。先日、オルタナティブを殺害する現場にいたたまには、それが否が応でも分かってしまった。それでもなお、先の見えぬリーダーの思惑に、気弱な魔法少女は思わず身震いした。

「……」

月明かりの下で、漆黒の魔法少女、ハードゴア・アリスは先ほど購入した『兎の足』を掲げて見つめていた。その代価、6年。その隣では、パートナーのリユウガが、10年の『カースドベント』を手にとっている。

「……1つ聞きたい」

「……なんででしょうか」

「お前がそれを購入した理由はなんだ。俺にはこれを使ってやるべき事がある。だがお前にはない」

「……これを、渡したい人が、います」

「……そうか」

リュウガはそれ以上追求しない。如何にパートナーといえど、個人の意向に口出しはしないように出会った当初から約束していたからだ。

と、不意にハードゴア・アリスは立ち上がり、リュウガに尋ねた。

「……お聞きしたい事が、あります」

「なんだ」

「……白い魔法少女、スノーホワイト。それから、白い仮面ライダー、九尾。……2人がどこにいるか、知ってますか」

「……さあな。俺も極力他人との馴れ合いは避けていた。馴れ合ったところで、最後には裏切られる。俺はそれを直に味わった」

「……そう、ですか」

それでは、今日は失礼します、と言って立ち去ろうとするハードゴア・アリス。もう家に帰って休むのだろう。そんな彼女の背中越しに、リュウガは声をかけた。

「ただ、その2人が担当していた区域は、過去ログで絞り込める。後で、送ってやろう」

「……ありがとうございます」

ハードゴア・アリスは振り返って礼を言うと、そそくさと立ち去った。1人残されたリュウガは、カードをVバックルにしまうと、再び月を見上げた。満月が、太陽のように眩しかった。

一方、こちらはゾルダ&マジカロイド44ペア。

「で、何か買った？ アイテムの方は」

「買わなかったデス。寿命が惜しいものデスから。そういう先生はどうなんデスか？」

「俺もだ。なんていうか、かつたるいつていうか……。別に寿命云々じゃ無しに、こういうのって俺の趣向に合わないっていうかさ」

「先生らしいデスね」

ゾルダの言葉に、マジカロイドは同意する。この2人はアイテムを買う気はハナから無かったようだ。

「けど、アレデスよね。オルタナティブが死んで、その週に脱落者が出なかったわけデスから、これはやはり……」

「だろうね。要はその週に誰かが死ねば、キャンディーの多寡なんて関係なくなる」

つまり、『誰かを先に殺しておけば、自分が脱落しなくて済む』という事だろう、とゾルダは語る。

「正直、その方が手っ取り早いけどね。このまま進んでも、上位との差は動かないだろうし。それにオルタナティブは巻き込まれて、先んじて死んだ。んでもって向こうは事故としてみんなを納得させて、警戒が薄れたところでアイテム追加ってわけだ。よく出来てるよ、この流れ。案外俺と似通ってる感じがするし、仲良くなれそうだ」

「激しく同意デス」

マジカロイド44も、足をブラブラさせながら呟いた。

「ま、アイテム無かったって、それなりに充実してると思うよ、俺た……」

そこまで呟いたその時、ゾルダは唐突に口に手を当てて咳払いし始めた。しかも、それが途切れる事なく、しばらく続いた為、マジカロ

イドは慌ててゾルダの背中をさすった。

「先生……！」

「あ、ああ悪いね。ちよつと寒くなっちゃって。もう冬も近いからだな」

ハハハと笑うゾルダだが、マジカロイドの表情は笑っていない。アレが単なる咳だとは思えないからだ。

「んじゃあそろそろ帰るか。家に帰って、ゴロちゃんのあつたかいスープでも飲もうよ。今日はこっちに泊まってくか？」

「デハ、お言葉に甘えさせてもらいマス」

そう言つて立ち上がる2人。

この時、ゾルダはパートナーに見えない位置で口を覆っていた右手を後ろに隠しながら歩いていたのだが、マジカロイドにはとつくにお見通しだった。その右手のひらについていた液体の正体に……。

城南地区のとあるクラブのVIPルームにて、王蛇とカラミティ・メアリが腰掛けながら、各々が獲得したアイテムを見せびらかしていた。当然この2人に寿命の概念など通用するわけも無かった。

「この袋、中々に便利だよ。10年は安い買い物だね」

琥珀色の液体が注がれたグラスを口に持って行きながら、カラミティ・メアリは購入した『四次元袋』を眺めている。その一方で、王蛇が購入したのは……。

「しかしアレだね。あんたも肝つ玉が随分と据わってるやつだねえ。30年ものを購入したのを見た時は、さすがにブルっちまつたよ」

「……フン」

鼻を鳴らした王蛇の目の前の小机には、緑色の液体が入った瓶と、無地のカードが置かれている。

王蛇が購入したのは、8年の代価を払う事となった、ガイと同じ『コントラクト』のカード。そして注目すべきは30年という破格な代価でもある『復活の薬』だった。死にかけていたらそれを使って全回復するという観点からも、30年という代価は妥当なのかもしれないが、やはり手を出しにくいのか、誰も手をつけていなかった。

とはいえ王蛇も最初からそれらを購入する気は無かった。元々武器系統のものが欲しかった王蛇だが、1人だけメッセージを確認するのが遅れてしまったが故に、売れ残っていた2つのアイテムを、止むを得ず購入したのだ。当然求めていた物が購入出来ずにイライラしていた為、彼の周りには割れたグラスが散らばっている。

これにより王蛇は計38年という寿命を縮めた事になるわけだが、彼自身全くそれを気にしてはいない。

「寿命がどうした。俺は今戦えればそれでいいんだア……!」

「あんたらしいよ。こいつと組ませてくれたファヴやシローにも、ちったあ感謝しておくか」

カラミティ・メアリは、この日何本目になるだろう、新しい瓶を手に取り、氷の入ったグラスに注ぎ込む。魔法少女となっている今、頑健な肉体によってアルコールで酔う事もない。

すると、王蛇が何の予兆もなく立ち上がり、部屋を出ようとした。

「どこ行くんだい」

「いい加減待つてるのも飽きた。向こうが来ないなら」

「こつちから1人、殺つてく。そういう事だね。ま、好きにしな」

「……ハッ」

仮面の下で狂気的な笑みを浮かべた、紫のライダーは、首を回して音を鳴らし、そして眩く。

「キャンデー集めだけじゃタルい。こっちから遊びに行つてやる
ぜエ……」

51. 白と黒

「ちよつと、離、して……！」

夜も更けた頃の、とある路地裏。

OREジャーナルのシステム担当、島田 奈々子はひつたくり犯と、自前のバッグを取り合う形で格闘していた。仕事終わりの帰り道、突然背後から黒いフードの男性らしき人物が島田に飛びかかり、バッグを盗もうとした。島田は火事場の馬鹿力が発揮したのか、必死に奪われまいとバッグを掴んで引つ張っていた。

が、段々と限界が近づいてきたのか、男性の方が競り勝ってきた。もはやこれまでか。

島田が半分諦めかけてきたその時、どこからか声が。

「スノーホワイト、困ってる人の声はこっちか？」

「うん、この先……！」 九尾、あそこー！」

2人の男女の声だ。島田がそう察したその時、目の前の男性が突然吹き飛ばされた。割って入ってきた人物によって、頭を蹴り飛ばされたようだ。後ろ姿だけしか見えないが、白い毛並みが目立つ人物だった。

と、今度は地面に落ちたバッグを別の人物が拾い上げて、島田に差し出した。島田よりも幼い少女だ。こちらも白を基調としているが、学生服のようにも見える。島田は反射的に受け取ると、少女はもう1人の人物の横に並んだ。白い毛並みの人物は、少女の方に顔を向け、そこで島田は初めてその人物が狐の顔のような仮面をつけている事に気付いた。そして狐の仮面の男は、ひつたくり犯を抱えて、少女と共に颯爽と駆け去っていった。

「……何、あれ」

呆然と見送るしかなかった島田だが、そこでようやく、何かスクープを見つけた時用にカメラを持参していた事を思い出した。

『SWORD VENT』

「ハッ！ ダアッ！」

ミラーワールドの一角にて、九尾がフォクセイバーを振るって、何体ものシアゴーストを斬りつけていた。

ひったくり犯を捕まえて交番の前に寝かせた後、モンスターの出現を知らされ、導かれるように次の現場に向かい、ミラーワールド内でモンスターと交戦していた。

九尾の後方ではスノーホワイトが、九尾の援護用にとパートナーの武器であるフォクセイバーを構えているが、ほとんど突っ立っている事しか出来ていない。何故なら、

「ウオオオオオオッ！」

シアゴーストの相手を九尾がほとんどしているからだ。援護に向かおうとしても、九尾の気迫溢れる斬撃がそれを許さない。

まるで、全ての敵を受け持とうとしているかのような立ち振る舞いだった。そして一切の容赦が見られない。

「九尾！ 無理しないで！」

「分かっている……！！ 心配するな！ これくらいなら俺だけでも！」

『FINAL VENT』

「ハアアアアアッ……！！」

九尾はスノーホワイトを下がらせた後、カードをベントインして気合を入れると、飛び上がって右足を突き出す。

「ウオオオオオオッ！」

フオクスロードと合体し、ブレイズキックを放ち、シアゴーストをまとめて一掃した。

マジカルフォンからキャンディー獲得の音が鳴り、辺りに再び静けさが戻ると、九尾はミラーワールドを後にしようとした。

「次、行くぞ」

「ま、待って九尾！」

不意にスノーホワイトは九尾を呼び止めた。

「何だ」

「困ってる人の声、もういないみたいだよ！ 声が聞こえてこないから……」

「……」

「だから、その……。休憩、しよ？」

「……ああ」

肩の力を抜いた九尾はスノーホワイトと共にミラーワールドを出て、近場の材木置き場の敷地内に入り、隣同士並んで、腰を下ろして壁にもたれた。月明かりや小さな外灯が無ければ、殺風景な場所。休憩を提案したスノーホワイトにはそう思えた。

この日は集団行動ではなく、3組のグループを作り、各所を巡ってキャンディーを集める事になっていた。今はまだともに動けないラ・ピュセルの分まで、キャンディーを獲得する必要がある為、多忙を望む九尾とスノーホワイトのペアだったが、そういった時に限って、人助けになりそうな事は少なかった。

「……ねえ」

「何だ」

やがてスノーホワイトが口を開いたのは、腰を下ろしてから数分後の事だった。

「昨日から、変だよ。九尾、何でそんなに自分から危険な事をしようとするの？」

「どうしてそんな事」

聞くんだと続ける前に、九尾はスノーホワイトの泣きそうな顔を見て、言葉が喉につつかえた。

「私、心配してるんだよ。このままだと、ラ・ピュセルみたいな目に遭うんじゃないかって……。今の九尾を見てたら、そう思っちゃうんだよ」

「……」

九尾は何も言わない。ただジッと、地面を見つめている。

すると、スノーホワイトの手が九尾の手に触れた。それに反応した九尾はパートナーに目をやった。

「私、死にたくない。九尾やラ・ピュセル、みんなの事も死なせたくない。みんなと一緒に、生き残りたいの」

「スノー、ホワイト……。俺だって、お前やみんなを死なせるつもりはない」

「ならどうしてあんなに」

「そうでもしなきゃ、きつとまた誰かを、失うかもって思うと、自分でもどうしようもないんだ……」

九尾は自然とスノーホワイトの手を握り返していた。

「でも、これだけは言える。生き残る為には、誰かを守るには、戦う事も必要だって事」

「九尾……。うん」

おそらく、スノーホワイトはまだ九尾の言葉の真意には気づいていないのかもしれない。だが、今はそこまで深く考えなくてもいい。自分出来る最低限の努力で、生き残ろう。そう決意して、改めて九尾の手を握ろうとした、その時だった。

「……見つけた」

ハツと手を離して、声のした方を同時に振り向く九尾とスノーホワイト。

積まれた木材の間に、誰かが佇んでいる。最初はよく見えなかったが、目が暗闇に慣れて、外灯を頼りに目を凝らしてみて、ようやくその全体像が明らかとなった。

「やっと、見つけた……」

そう呟いた声は少女のものだった。ただし、そこにいたのはただの少女ではない。ドレスにソックス、シューズ、ドロワーズ、リボンカチューシャ。全てが黒かった。第一印象としては、黒い『不思議の国のアリス』というべきか。唯一、手に持っていた兎のぬいぐるみだけは白かったが。

「お前、誰だ……？」

見た事もない人物がゆっくりと近づいてくる為、九尾は少しだけ腰を浮かして警戒を強めた。スノーホワイトは身動きすら出来ていない。

対する猫背気味の姿勢の少女は、唇の端をギイツと上げて、淀んだ瞳の奥に喜びを見せながら、一步一步近づく。

「やっと、会えた……。スノーホワイト、九尾」

不意にどこからか電子音が鳴り響いたと同時に、鈍い音が辺りに響いた。少女は首を傾げた……ように、最初は2人とも認識した。しかし、傾げた角度は徐々に開き、次第に普通ではありえないぐらいに傾き、そして。

ゴトンという音と共に、2人の足元に、『首』が転がってきた。

「……………」

「ヒツ……………」

一瞬の事だった為、瞬きする間もなく、目の前にある首から上のない少女を中心に、血飛沫が飛散した。当然、啞然としていた2人にも降り注ぐ。

首を失くした魔法少女は膝をつき、前のめりに倒れこんだ。首の断面からは気道や血管、骨までがハッキリと見えてしまった。そして死体が完全に横たわったところで、黒い魔法少女の後ろに誰かが武器を持って立っている事に気付いた。

「手応えが無さすぎる」

恐ろしく低い呟きと、近づくと足音がハッキリと耳に聞こえてくる。やがて足音は流れ出る血液によって作り出された血溜まりに足を踏み入れた水音に変わったところで、黒い魔法少女の首を刎ねた人物の全体像が見えてきた。

「…………アア。まだいたか」

そこにいたのは、紫色の蛇を彷彿とさせる仮面ライダー『王蛇』だった。チャットでは姿だけを見た事はあったが、リアルタイムで会うのは初めてだった。その右手には、血がこびりついたベノサーベルが握られており、肩に乗せていた。蛇の牙にも似たその武器で黒い魔法少

女の首を刎ねたようだ。

しかし本来ベノサーベルは叩きつけるものであり、決して斬れ味が良いわけではない。では、どうやって首を落とせたのか。

答えは、彼のパートナーでもある魔法少女『カラムィティ・メアリ』の魔法にあった。パートナーシステムにより付与されたパートナーカードは『ストレンジスベント』。彼女の魔法同様、手に持っている武器の威力を高めるものであり、これによってベノサーベルに首を刎ねるだけの殺傷力が追加されたのだ。

以前、ライアの口から王蛇の危険性は聞かされていたが、転がっていた死体を邪魔だと言わんばかりに蹴り飛ばすその残忍性を目の当たりにして、これまで感じた事のないほどに恐怖心が芽生え始めていた。

「お前が、王蛇……！」

「……なあ。良い加減待ちくたびれた。イライラしてならねえんだ」

「……！」

「俺と、遊べよ」

そう言ったその瞬間、王蛇はベノサーベルを横に振るった。九尾はとっさの判断でスノーホワイトを突き飛ばし、自身も横に飛び退いた。2人の後ろにあった壁は横一直線に切り裂かれ、地面にバラバラと落ちた。2人が息を呑む中、王蛇はリラックスしているかのように腕をブラブラと動かしていた。

「どうしたあ……。戦えよ、俺と」

殺意……というよりも狂気に満ちた視線を向けられて、九尾は自然とスノーホワイトの前に出た。どれほどの実力が向こうに備わっているか分からないが、1つだけ確かなのは、今のスノーホワイトでは彼に太刀打ち出来ない。だから、前線に出て戦う。九尾は駆け出して、王蛇と真っ向から拳を振るった。

「ハハハッ！」

対する王蛇は歓喜に満ちているかのようにかわしながら、ベノサーベルを振り回した。1つ1つの攻撃に、手加減など微塵もない。内心冷や汗をかいていた九尾は、新たにカードをベントインした。

『BLAZE VENT』

「ハアッ！」

両手に作り出して放たれたブレイズボンバーは、王蛇に確かに直撃した。はずだったが……。

「フンッ！」

「グッ……!?？」

王蛇は少しよろめいただけで、何らダメージになっていなかった。完全に油断していた九尾は王蛇に殴られ、よろめいたところを蹴り上げられ、スノーホワイトの近くに転がってきた。

「九尾！」

「う、ウウ……い！」

仰向けに倒れた九尾が、呻き声を上げながら立ち上がろうとした。が、その前に王蛇が九尾の腹を踏みつけた。

「グ、アアアアアアアッ！」

「！」

「どうしたあ……。もつと遊ぼうぜエ」

そう言つて王蛇は九尾を蹴り上げ、スノーホワイトにぶつけた。悲鳴と共に転がるスノーホワイトに、王蛇のベノサーベルによる攻撃が迫ってきたが、これを紙一重のところであわした。が、一向に反撃する素振りを見せてこないスノーホワイトを見て、王蛇にはイライラを通り越して呆れが生じた。

「お前との遊びは、あんまり面白くないなあ……。もつと戦えよ」

「い、嫌……い！」

遂にスノーホワイトは涙を浮かべながら、必死に叫んだ。

「嫌だあ、死にたくない！ どうして、私達を狙うの!? 私達、あなたに何もしてないのに……！」

「知ったことか。戦いたいんだよ、俺は……！ ライダーや、魔法少女と、もつとなあ……！」

もはや常人の域を超えている人物の呟きを前に、遂にスノーホワイトも逃げるだけの気力が失われた。王蛇はスノーホワイトに近づき、その髪を左手で力強く掴んで持ち上げた。あまりの痛さに、スノーホ

ワイトは悲鳴すら出てこない。

「さあ、もつと来いよ。遊び方を教えてやる。俺なりにな」

「や、めろ……！」

九尾が王蛇の足にしがみつぐが、それで止まる王蛇ではない。右腕を高く掲げて、ベノサーベルをスノーホワイトめがけて振り下ろそうとした、まさにその瞬間。

生理的嫌悪を抱かせるような音が辺りに響いた。

「……アア？」

王蛇が、腹部に伝わる熱が気になって下を向いた。同時にスノーホワイトも、音がした王蛇の腹に目を向け、九尾も見上げる。

王蛇の、装甲に覆われていない腹部。そこから、鋭い刃のようなものが突き出ているではないか。何者かが、背後から刺し貫いたとしか考えられない。

やがて刃は背中から抜かれ、傷口から王蛇のものである血が噴き出した。正面にいたスノーホワイトや、足元にいた九尾は直に血を浴びた。

「オ、オオ……！」

王蛇がスノーホワイトから手を離し、少しよろめいてから、自分を刺したであろう人物を確認しようと、勢いよく振り向いた。その瞬間、王蛇は仮面の下から目を見開く事になる。スノーホワイトも九尾も、ゆっくりとその視線の先を追うと、そこにいたのは……。

『首から上のない』黒ドレスの少女が、黒い短剣を右手に構えて佇んでいる姿が、そこにあつた。

ずっと堪えていたスノーホワイトだが、遂に限界がきたのか、喉の奥からあらん限りの悲鳴をあげた。

「イ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!?」

九尾も、本音では悲鳴をあげたいところだった。だがそれ以上に、疑問が脳内を支配した。王蛇を刺したのは、間違いなく先ほど王蛇が首を刎ねた少女だった。だが、大前提として彼女が動いている事が考えられなかった。首は今もなお、顔を地に伏せた状態で九尾の足元に転がっている。にもかかわらず、佇んでいる少女は短剣を握りしめて、そこに立っている。よく見ると、彼女が握っている短剣も、見覚えのあるシルエットだった事に気づく九尾。

「（あれは……! ドラグセイバー……?!?）」

確信はないが、少女の手に握られているものは、同じチームである龍騎の所持武器と酷似していた。辺りが暗いため、色までは判別できなかったが、元から黒のように感じられる。色違いのドラグセイバーを持っている事に驚きを隠せない。

「お前……」

王蛇が体を震わせ、少女に向かって駆け出した。少女はドラグセイバーでベノサーベルを受け止めたりと、対抗している。王蛇が暴れる度に、腹から流れ出る血が辺りの地面に降り注ぐが、本人は目の前の敵を倒す事に意識が向いているのか、お構い無しだ。

今がチャンスだ。そう思った九尾は、目の前に広がる血みどろな光景に、顔を真つ青にしているスノーホワイトに目をやってから、カードをベントインした。

『ACCEL VENT』

「しっかり掴まれよ！」

九尾はスノーホワイトを抱き上げ、アクセルベントで向上した移動力で、素早くその場から撤退した。依然として王蛇と少女の戦いは続いているようだが、2人にはその結末を見届けるだけの余裕はなかった。

「後ろを見るな！」

怯えて体を丸めているスノーホワイトにそう言い聞かせながら、ただひたすらに、遠ざかるように九尾は走り続けた。

やがて2人の後方から聞こえてきたのは、獣に似た、この世のものとは思えない雄叫びだった。

どこをどう走ったのか、曖昧になりながらも、九尾はスノーホワイトを抱き抱えて、ようやく材木置き場から遠ざかる事に成功した。2人とも追いかけてこなかった事が、不幸中の幸いだった。

そしてそのまま九尾が向かった先には、最初にライアやラ・ピュセルと待ち合わせ場所にしていた鉄塔が見えてきた。今日の集合場所にしてきた地点が見えてきた時、九尾は息を荒げながらも、不思議と安心感が生まれた。

2人がたどり着いた時には、すでに先客がいた。北宿の火防道路脇に放置されていた廃道路標識を処理していた龍騎とトップスピードのペアが、先に仕事を終えて戻ってきたようだ。が、2人は九尾とスノーホワイトの姿を見てギョツとした。それもそのはず。戻ってきた2人の至る所に、血が付着しているのだから、驚かない方がおかしい。

「ど、どうしたのそれ!!?」

「お、お前ら!!? 何でそんな血まみれに……!」

九尾に抱えられていたスノーホワイトは降ろされた後、しばらく呆然としていたが、仲間と合流できた事で恐怖から解放された反動からか、急に泣き喚きながらトップスピードに目一杯抱きついた。

「お、おおどうしたんだよ!!? ほら、もう大丈夫だからな、なっ? ほくらよしよし……」

突然抱きつかれて戸惑うトップスピードだったが、母親のようにスノーホワイトの頭を優しく撫でて、落ち着かせた。

遅れてナイト、リップル、ライアの組が合流してきたが、スノーホワイトが泣きながらトップスピードに抱きつく様子や、血で汚れている2人の姿を見て、何事かと思って近くに駆け寄った。

スノーホワイトがようやく落ち着き始めたところで、九尾が代表して、先ほど自分達の身に起きた事を全て話した。話を聞き終えたライアは深刻そうに唸った。

「王蛇がこのエリアに……。こうなると、担当区域云々は意味を成さなくなるかもしれない」

「ここも、安全とは呼べないという事か」

ナイトの呟きを聞き、リップルは真っ先に王蛇のパートナーでもあるカラミティ・メアリの事を思い出した。今は城南地区で暴れ回っている彼女だが、一度N市という枠で解き放たれたら、王蛇同様、厄介な存在になり兼ねない。彼女と因縁を持つリップルは、改めて訪れるかもしれない脅威を認識して、舌打ちをした。

リップル同様、カラミティ・メアリや王蛇とも事を交えたことがある龍騎も、今後に不安を感じる中、ふとスノーホワイトの方を見てあるものに目がついた。

「……あれ？ スノーホワイト、それ。何持つてるの？」

「えっ……？」

スノーホワイトがふと右手に目をやると、何かが握られている事に気付いた。手のひらを広げると、そこにはその白くフワフワした、細長い動物の毛のようなものだった。リップルはハツとしていち早くその物体の名を呟いた。

『『兔の足』……！』

「おいおい！ それって激レアアイテムの1つじゃねえか!?？ どこで拾ったんだよ……！」

今度はトツプスピードが喚く番だったが、スノーホワイトは困惑していた。自分は今までこんなものを持っていた記憶はない。誰かが落としたものを、気づかぬうちに拾ってしまったのだろうか。

心当たりのありそうな人物の姿が頭に浮かんだ途端、その時の情景を思い出したのか、吐き気がして、一度兔の足に目を通してから、その日は見ないようにした。

52. ゾンビvsガンマン

カラミティ・メアリは、ムカついていた。

レアアイテム購入後に王蛇が、城南地区から離れて仮面ライダーか魔法少女を1人殺ってくるはずだった。彼女自身、彼ならすぐにやってのけるだろうと確信めいていた。それだけの実力がある事を、彼女は知っている。

知っていたはずだが、それから数時間後、拠点としているバーのVIPルームに転がり込んだのは、腹部に刺し傷をつけたパートナーだった。かなり出血しており、彼が歩いてきた道には血が転々と滴り落ちていた。カラミティ・メアリが腰を浮かして何事かと尋ねる前に、王蛇は変身を解き、小机に置かれていた瓶の蓋を開けてガブ飲みした。すると男性の体は緑色に光ったかと思うと、傷がみるみるうちに癒えていった。30年という寿命を代価に支払って購入した『復活の薬』の影響だ。

まさかこうも早く使用する事になろうとは誰が想像できただろうか。いや、それ以前にもし復活の薬を購入していなかったら、次の脱落者は王蛇で確定していたのかもしれない。

その王蛇の変身者でもある男性は現在、大きないびきをかいてソファアーに横たわっていた。久しぶりに思う存分暴れたという事もあって、すっかり寝入っていた。当分起きそうもない。

「……」

そんなパートナーの様子を、カラミティ・メアリはジッと見つめていた。その表情からは相当な苛立ちが見受けられる。

勘違いしてもらっては困るが、彼女はなにも、王蛇が誰1人殺せずに戻ってきた事に腹が立っているわけではない。その時の気分でコロコロと考えが変わる事も知っているため、途中で暴れるのをやめる事だってあった。

彼女が怒っているのは、もっと別の事だった。

『はいはい。どうしたほん？』

ソファアーの上で身を翻し、寝転んだ姿勢から座り直したカラミ

ティ・メアリは、マジカルフォンでファヴを呼び出した。ファヴの呑気そうな声を聞きながら、カラミティ・メアリは単刀直入に要件を伝えた。

「王蛇に手を出した奴を教えろ」

『どうしてぼん?』

テーブルの上に置かれたマジカルフォンから、立体映像として出てきているファヴは、首を傾げる動作をした。

「王蛇があたしのパートナーだつて事は、この街の魔法少女や仮面ライダーなら誰でも知ってる事。つまりあたしの存在を知つててあいつを殺そうとしたつて事はさ。カラミティ・メアリを舐めてるつて事だ。んな奴放つておいたら顔が潰れるだろ?」

そう。彼女が憤怒しているのは、自身への侮辱的行為が行われた事だった。カラミティ・メアリの許可を得て暴れに行つた王蛇を殺そうとした事は、すなわちカラミティ・メアリや王蛇への侮辱に他ならない。特にカラミティ・メアリはこれを忌み嫌っていた。この事がこれ以上露見されてしまつては、他のメンバーが彼女を舐めるようになる。そんな事は断じて許されない。

そうなる前に、元凶を始末する。無論この手で。

『でもここで教えたら、ちよつとアンフェアな気がするぼん』

もちろんファヴはマジカルフォンを通じて各魔法少女の動向をチェックしている。故に王蛇を背後から襲つた黒い魔法少女の事も当然知つている。

すると、そんなファヴの返答を聞いたカラミティ・メアリは不敵な笑みを浮かべ、口を開いた。

「フェアだろうがアンフェアだろうが、どうでも良いような顔してくせによく言うねえ。あたしがあんたらの考えに気づいていないとでも思つたのかい?」

『……』

白黒のマスクトキャラクターは、だんまりとなつた。これ以上問い詰めても埒があかない。肩を竦めたウエスタン風魔法少女は、手に持っていたグラスに残つていたアルコールをマジカルフォンに垂ら

しながら、交渉した。

「……オーケイ。取引といこうじゃないか。あたしに情報をくれたら、あんたの望むように動いてやっても良いよ。悪くない提案だろ？」

「……」

翌日の晩。

俱辺ヶ浜の近くに位置する小学校の屋上から、黒い魔法少女『ハドゴア・アリス』は辺りを見下ろしていた。

昨晚、彼女は達成感に浸っていた。理由は、彼女も理想像とも言える、魔法少女スノーホワイトと仮面ライダー九尾をこの手で守れた事にある。自身の首を刎ねた王蛇が、ものついでとばかりに2人を襲おうとしたところを、パートナーの武器を用いて背後から突き刺し、2人を窮地から救った。その後王蛇と交戦し、王蛇が途中で多量出血の影響で撤退した時には、すでに2人の姿はなかった。隙を見て逃げ出したようだ。彼女自身が寿命を払って手に入れたレアアイテム『兎

の足』は、手元から無くなっていた。辺りに落ちていないところから見て、スノーホワイトか九尾が知らぬうちに持つていったようだ。それを察した頃には、すでに彼女の首は元通りにくっついていていた。

どんなに怪我をしても、瞬く間に怪我を負う前の状態に戻る。この魔法さえあれば、スノーホワイトや九尾を悪の手先から守れる。昨晩はきちんとした挨拶なしに別れてしまったが、今度会う時は、必ず挨拶だけじゃなくしてお礼も言おう。

全ては恩を返す為に。そう決意したハードゴア・アリスが、改めて2人を捜索する為に場所を変えようとした、その瞬間。

どこからともなく銃声が聞こえてきたかと思うと、3発の大きめな弾丸がハードゴア・アリスの腹部に直撃。血や臓物をコンクリート式の地面に飛び散らせながら、アリスは倒れこんだ。

静けさが辺りを包む中、血の海に伏したアリスのすぐそばに、テンガロンハットを身につけた、ガンマン風の女性が降り立った。

「こいつが、ハードゴア・アリス、か。……フン。どんな魔法を持つてるのか知らないけど、高が知れてるつてもんだ」

死体の尻を蹴り飛ばす女性……カラミティ・メアリはフウつと息を吐いた。ファヴから王蛇を襲った魔法少女の名を聞き出したカラミティ・メアリは、スノーホワイトや九尾が担当していた地域の近辺を探し回り、ようやくアリスの姿を捉える事に成功した。何を急いでいるのか知らないが、彼女にとって格好の的だったアリスは、メアリが所持していた散弾銃『イズマッシュ・サイガー12』で問答無用に撃ち抜かれた。

王蛇も随分とつまらない相手に首を取られそうになったものだな、と呆れ口調で呟きながら、用は済んだとばかりに、死体に背を向けて立ち去ろうとした、まさにその時。

足首を掴まれた感覚がしたかと思つた時には、カラミティ・メアリは地面にうつ伏せに横たわっていた。

「……」

一体誰が、と口に出す前に身を翻して自分の足元に目をやって、そこで初めて自分の足首を掴んでいた人物を目撃し、思わず目を見開

く。

足首を掴んでいたのは、ハードゴア・アリスだった。虚ろな目が、カラミティ・メアリを見つめている。そんなバカな、と口に出すよりも早く、アリスはメア리를近くに、コンクリートの壁に叩きつけた。カラミティ・メアリは呻き声と共に、口元から血が垂れている感触を感じた。そして改めてアリスを睨みつける。

確かに散弾は腹に直撃していた。事実、腹部から今なお流血が止まっていない。にもかかわらず、彼女は立ち尽くし、ゆっくりと歩み寄ってくる。その姿は、まさに西洋の死霊とも言われているゾンビの如く。

と、今度は目にも留まらぬ速さで殴りかかってくるアリス。メアリは間一髪のところまで横に飛んで回避した。コンクリートに腕が突き刺さり、轟音が鳴り響く。瓦礫と化したコンクリートから腕を引き抜くと、アリスはマジカルフォンを取り出し、画面をタップした。彼女の手握られたのは、黒い『ドラグセイバー』。敵がパートナーの武器を召喚したと判断したメアリは、同じくマジカルフォンを操作して、パートナーの武器でもある『ベノサーベル』を右手に持った。

そこから先は、ドラグセイバーとベノサーベルによる打ち合いが続いた。

「ハアッ！」

「……」

戦いの最中、カラミティ・メアリは舌を巻いていた。予想以上に動きが速く、そして力が強い。単純な腕力ならメア리를上回っているようだ。パワー面ならヴェス・ウィンタープリズンと互角。いや、それ以上か。それにしただって生命力ならまず間違いなくウィンタープリズンを上回る事だけは確かだ。内臓を飛散させてもなお、元気に動き回る。真っ向からの勝負では、長引くと不利かと考えたメアリは叫んだ。

「ベノスネーカー！」

その呼びかけに応えるように、近くの窓ガラスから、パートナーの契約モンスターでもあるベノスネーカーが出現し、ハードゴア・アリ

スに飛びかかろうとした。

「……」

それに対し、アリスは小声で何かを呟くと同時に、同じ窓ガラスから別のモンスターがベノスネーカーに背後から噛み付いた。

「何っ!?？」

メアリが目をやると、ベノスネーカーに噛み付いていたのは、黒い龍だった。それはまるで、龍騎の契約モンスターでもあるドラグレッダーを黒く染めたようなモンスターだった。

一瞬。その龍を見たカラミティ・メアリは以前戦った事のある龍騎の姿が頭によぎった。

「まさか、あいつが近くにいるのか……?？」

彼のパートナーはトップスピードであり、ハードゴア・アリスと行動を共にしているという話は聞いていない。となると、どこからか援護しているのか。メアリは辺りを見回すが、そんな余裕はすぐに消えた。アリスが再びドラグセイバーを振るってきたからだ。

カラミティ・メアリとハードゴア・アリス。ベノスネーカーと黒い『ドラグレッダー』。2陣の戦いが屋上で繰り広げられる中、先に動きが見られたのはメアリとアリスの方だった。フェイントをかけられ、地面に仰向けで倒れたカラミティ・メアリに向かって、ハードゴア・アリスは飛び上がった。上空からドラグセイバーを突き刺そうという魂胆らしい。が、それこそがメアリの狙い。メアリはニヤリと笑うと、彼女の魔法『持つてる武器をパワーアップできるよ』を行使してからベノサーベルを上空に突き出した。下から上を狙う形で、ベノサーベルの先端がアリスの頭部に命中。それにより頭蓋骨や脳が弾け飛び、アリスは宙を舞って後ろに倒れこんだ。少量ではあるが、脳から飛び出た血がメアリの顔面に降り注ぐ。

「……っ。これなら」

再び起き上がったメアリは叫んだそこで息を呑んだ。頭を失ったはずのアリスが再び立ち上がり向かってきたのだ。顔が潰れているにもかかわらず、まるで見えているかのようには、真っ直ぐとメアリに向かってくる。不意を突かれてしまい、ドラグセイバーがメアリの腕

を掠めた。血が流れて痛みが走る事を気にする間もなく、メアリは距離をとった。

接近戦ではまともに勝てない。苛立ちながらもそう悟ったメアリは、ベノサーベルを放ると、サイガ12に持ち替えて撃ちまくった。マガジンが空になるまで撃ち続けた結果、アリスは損傷の激しい姿となった。普通なら目を背けてもおかしくない光景だが、メアリは一切気にしない。

否、それ以前に気にする余裕すらなかったと言うのが正しいだろう。何故なら彼女の目の前で、死体が意思を持って動こうともがいているのだから。

「くそつたれがあ……い！」

トレカフを抜いて立ち上がったアリスめがけて撃ちまくり、弾がなくなったら次はAK。メアリはとにかく撃ち続けた。すでに小学校の屋上は血の大洪水となっている。銃口から煙が上がり、弾切れとなったところで、ようやくメアリは腕を下ろした。

これで死んだだろう、と思つた矢先、肉塊と化した物が、ピクリと動いた。元が何だったのかも判別できないほどに破壊され尽くしたはずなのに。

「チイツ……い！ 調子に、乗るなあ……い！」

逆上したカラミティ・メアリは、腰につけておいた四次元袋から手榴弾を取り出し、ピンを抜いて肉塊に投下した。メアリはベノサーベルを拾い上げると、物陰に隠れ、数秒後には爆発音と屋上が崩れ落ちる時の轟音が鳴り響いた。魔法によって強化された手榴弾、もとい超兵器なら、さすがに死んだはずだ、思いながらも、念を入れてメアリは吹き抜けとなった穴から飛び降りて、教室の中央に立った。肉塊は、蠢いている。

「……い！」

『無法者』と称される魔法少女のこめかみに、太い血管が浮かび上がった。魔法で殺傷力を高めたベノサーベルで切り刻み、バラバラに分解させた。幾つかのパーツは動きを止めたが、一番大きなパーツは動いている。そして、人型になろうとしている。

だし、それは歓喜に満ちたものとは全く違うものだった。

「ここまでコケにされたのは、あんたが初めてだよ、ハードゴア・アリスう……！」

ならば次なる一手は、と思ったところで、外からサイレンの音が聞こえてきた。明らかにメアリがいる場所へと向かっている。

「……派手に暴れすぎたか」

迎え撃とうかと思ったが、またアリスが復活して、妨害してくることも限らない。そこでメアリは四次元袋からドラム缶を取り出し、一旦肉片をそこに詰め込んで、再び四次元袋に入れ戻すと、近くの窓ガラスからミラーワールドに入り込み、追っ手を巻いた。

ミラーワールドを進み、カラミティ・メアリが現実世界に戻ってきた場所は、小学校からそれほど遠く離れていない港だった。サイレンの音を遠くで耳にしながら、メアリは袋からドラム缶を取り出し、蓋を開ける。依然として肉片は動いていた。数が減っており、1つ1つが大きくなっているところから見て、急いだ方が良いと思ったメアリは、袋から粉状のセメントを取り出し、中身を全てドラム缶にぶち込んだ。続けて近くの蛇口から水を汲んで中に注ぎ込み、蓋を閉じる。これでは海に突き落とせば良い。時間が経てば中のセメントはコンクリートのように固まり、例えばドラム缶内で原型に戻ったとしても、コンクリートに埋められた状態では、息も出来ず、死に至る。

3度ベノスネーカーを呼び出したメアリは、海に落とすように命じた。いつそのこと、ミラーワールドに放っておこうかとも考えたが、それでは鏡という逃げ道が出来てしまう。やはり海中という、逃げ場のない所に沈めてやるのが一番だ。ベノスネーカーによって落とされ、海の底に沈んでいくドラム缶を見ながら、カラミティ・メアリは、今日の仕事は済んだとばかりに笑いながら、退散した。

近くの窓ガラスから、彼女のパートナーでもあるリュウガがジッと彼女を見ていた事に気づくことなく……。

拠点に戻ったカラミティ・メアリは、疲れ切った表情で腰を下ろすと、ウオツカを口に含み始めた。

自分を散々コケにした魔法少女が行使していた魔法や、彼女を守るように現れた黒龍のモンスターの事も気になるが、1つだけ確かな事はある。

ハードゴア・アリスは始末した。これで間違いなく、この後ファウヤシローの口から、脱落者として彼女の名が挙げられるはずだ。そう、彼女は思い込んでいた。

……が、数時間経つてもマジカルフォンは鳴らない。アリスが海に沈められたあの段階で死亡しているなら、もっと早くアナウンスがあってもおかしくない。にもかかわらず、VIPルームの中は、依然として眠り続けている王蛇の変身者のいびきだけしか聞こえてこない。

と、なるとハードゴア・アリスは……。

「……」

マグナムを懐から取り出すと、テーブルに置かれていたグラスやボトルを全て撃ち抜くカラミティ・メアリ。口元はキツく結ばれてい

た。が、次第に緩み、そして明確な笑みへと変貌した時には、VIP
ルーム内に高笑いが響き渡った。空いた左手を頭に当てて、狂ったよ
うに、彼女は笑った。鬱屈が全身に溜まっていくように感じられる。
「ただ殺すだけじゃもう足りないなあ！ 派手に！ 華やかに！ 血
が飛んで肉が散って！ んな風にあいつらをぶつ潰せる祭りを、用意
しとかないとねえ！」

次にやるべき事は決まった。後は役者を揃える為の準備をすれば
良い。それで、最高の舞台が整う。

どのようなステージを用意しようかと思考を巡らせようとしたそ
の時、マジカルフォンから音が鳴った。ファヴとシローからのメッ
セージのようだ。どうせくだらない事しか教えてもらえないのだろ
うと思いつつも、気になって読んでみる事に。

が、書かれている内容に目を通したカラミティ・メアリは眉をひそ
める事になる。

そこには……。

脱落者……もとい死亡者として、2人の名が挙げられていた。

53. 黒き魔法少女

『兎の足。持ってて大ピンチになったら、ラッキーな事が起こるかもしれないアイテムぽん』

「んな事は分かってる。俺達が聞きたいのは、どうしてこれがスノーホワイトの手に渡ってるのか、だ」

王蛇からの襲撃を受けた翌日。小雪の家にはパートナーの大地と、道中でお出くわした手塚が、小雪と共に彼女の自室でファヴと話をしていた。

机の上には、白くフワフワした毛の塊が置かれている。先日レアアイテムとして登場した『兎の足』である。だが、これは本来寿命6年という代価を払って購入できる代物だ。スノーホワイトこと小雪がそれを持っている事に気付いたのは、王蛇と途中から現れた黒い魔法少女の戦闘から離脱した後だった。

「どうして、私がこれを……」

『誰かが落としたのを拾っちゃったとかがあり得るぽん』

「なら1つ質問させてもらおうか。この兎の足は、誰が購入したものだ？ 売りに出した以上、それぐらいの記録は残ってるはずだ」

手塚の質問を受け、ファヴは詮索するためにしばらく黙り込んでいたが、やがて1人の名を告げた。

『ああ。それは、ハードゴア・アリスが購入したものぽん』

「ハードゴア、アリス……？」

聞きなれない人物名に、小雪は首を傾げた。大地も疑問に思ったのか、手塚に顔を向けた。

「手塚さん。知ってますか？ その人の事」

「いや、俺も初めて聞く名だな……。ただ、心当たりはある。キャンデーの競い合いが始まった頃に入ってきた16人目の魔法少女。その人物とは面識がないから、おそらくは……」

『ちなみにハードゴア・アリスは、不思議の国のアリスの真つ黒バージョンみたいな子ぽん』

それを聞いて、大地と小雪は確信した。

昨晚2人の目の前に現れ、王蛇に背後から首を切断され、そして王蛇を殺そうと、首から上のない状態で立ち上がり……。

そこで小雪は、口元を抑えた。込み上げてくる吐き気を抑えているようだ。このところ穏やかでない事ばかり続いた影響なのだろう。そんな彼女を見て、ファヴは体を揺らしながら平然と語り出した。

『まあまあ。何が起きたって正気失うような事はないから、そこは安心してほしいぽん。魔法少女も仮面ライダーも、精神的だったり肉体的だったり、健やかじゃないとやってけない商売ぽん』

「デメエ……！ それ以上知ったような口聞くなよ……！」

ファヴの呆気からんとした眩きに、大地は苛立った。

「全くだ。そもそも彼女がここまで精神的に追いやられたのも、君達の管理能力の低さが原因だという事を自覚してないのか？」

さすがの手塚も、逃げ道を封じるかのような発言に憤りを覚えたらしい。が、ファヴはそれ以上語ろうともしない。小雪も、さっさとファヴとの会話を打ち切ろうかと思ったが、そんな勇気は彼女には無かった。

今定義すべきは、兎の足の処理だった。首が斬り落とされても平気だったハードゴア・アリス。龍騎達と合流して以降、チャットを何度か覗いてみたものの、ハードゴア・アリスや王蛇といった、脱落者の名前は無かった。つまりあの2人は、今も生きている。

ハードゴア・アリスは、小雪が兎の足を所持している事をどう思うのか。落とし物を偶然拾ったなどという好意的な解釈をしてくれるのか、判断しにくいところはある。下手に手を打てば、また新たな争いの火種になりかねない。彼らがファヴを呼び出した理由も、そこにあった。

「これ、返してもらえない？」

小雪がファヴに向かって兎の足を差し出すが、ファヴはフワフワと漂いながらこう答える。

『いやいや。そういうのは直接交渉してもらわないと困るぽん。いくらマジカルフォンが便利だからって、転送機能まで付いてるわけじゃないぽん。でも、ハードゴア・アリスと連絡つけてあげるくらいなら

「ファヴにも出来るぽん』

「それが嫌だから頼んでるのに!」

ファヴのあんまりな言い方に、小雪も痲癢を起こして、机に突っ伏して泣き始めた。大地と手塚はファヴを睨むが、本人は平然としている。

それから5分経って、ようやく小雪は泣き止んだ。

「……大丈夫か」

「……うん。ちよつとだけ、すつきりしたかも」

目を腫らしている小雪を見て、大地は複雑な心境になった。と、その時、小雪のマジカルフォンから音が鳴り響いた。ファヴが真っ先にチェックすると、3人に告げた。

『シスターナナからの連絡ぽん』

「シスターナナ、から……?」

連絡してきた相手はシスターナナだった。

今夜、会わせたい人物がいるとの事だった。

その晩、九尾、スノーホワイト、ライアの3人は、龍騎、トップス
ピード、ナイト、リップルを引き連れて、シスターナナが待ち合わせ

場所に指定してきた廃スーパーへと足を運んだ。

「ああ。皆さん。お久しぶりです」

中ではシスターナナが7人を出迎え、後方ではファムが立っていた。が、何故かファムのパートナーでもあるヴェス・ウインタープリズンの姿はない。

「……ウインタープリズンは？」

「先ほど連絡があって、少し野暮用を済ませてからこちらに向かうとの事です」

シスターナナの説明が終わると、ファムが気になった事を尋ねた。

「ラ・ピュセルは……、来てないみたいね」

「あ、はい……。まだ魔法少女姿でも足が痛むらしくて……。もう少し時間がかかるそうです。それに……」

「……そうよね。先生の件もあるし、しばらくそっとしておいた方が良いかもね」

ファムの一言で、空気が重くなった。この場になくなってしまった1人の仮面ライダーの喪失感は、想像以上に堪える。

そんな暗い雰囲気を払拭するかのようには、シスターナナは口を開いた。

「今度ラ・ピュセルに会う機会がありましたら、私達の事もよろしく伝えておいてください」

「はい」

「それよりも、早く要件を伝えろ」

ナイトが待ちくたびれたと言わんばかりに、本題に移行した。シスターナナが7人を呼んだのは、誰かを会わせる為だと言っていたが、果たして……。

「そうでしたわね。実は、私の考えに共鳴してくれる魔法少女が現れました」

「お前の……？」

「ええ。それで今晚、こちらにお招きして、皆さんに紹介しようと思ひまして。……ファム、お願いします」

「もう出てきても良いわよ」

ファムがスノーホワイト達から視線を外して声をかけたのは、7人の後方、つまり彼らが入ってきた入り口の方だった。一同がそこへ視線を向けたその時。

「つぁ……!?？」

「お前は……！」

スノーホワイトは短い悲鳴をあげ、九尾は仮面の下で目を見開いた。

そこに立っていたのは、白い兎のぬいぐるみを抱いた、真っ黒い不思議の国のアリス。見間違えるはずもない。昨晚九尾とスノーホワイトの前に現れ、首を切断されながらも、王蛇を追い払った魔法少女。そんな彼女が、元に戻った状態で再び2人の前に姿を現したのだ。

一方で、初めて目にする龍騎、トップスピード、ナイト、リップル、ライアは何とも言えない気持ちで魔法少女を見つめていた。

「……え？ 誰、この子？ みんな知ってる？」

「いや、俺も初めて見る奴だなあ……。ライアは？」

「俺も同じく。ただ、ひよつとして君が16人目の魔法少女、ハードゴア・アリスなのか？」

「……」

黒い魔法少女……ハードゴア・アリスはコクリと頷くと、九尾とスノーホワイトの前に歩み寄った。

「……お前、生きてたのか。でもあの時……」

「……あら？ あなた達、知り合ってたの？」

「はい。知り合い、です」

九尾が昨晚の事を口に出す前に、ハードゴア・アリスは先んじてファムに答えた。言い出すタイミングを見失ってしまった九尾は黙り込み、スノーホワイトは彼の背中に隠れて震えていた。

「彼女の魔法、とても素晴らしいものなのですよ。見ているこちら側としては気分が良いわけではありませんが……」

シスターナナの言い方に引っかかる九尾達だが、それは次のアリスの行動で明らかになった。

アリスが懐から取り出したのは、1本のサバイバルナイフ。それ

を、九尾やスノーホワイトに見せつけるように突き出した左腕に向かって、思いつきり突き刺した。当然左腕の傷口からは血がドクドクと流れている。

「ヒイ……！」

「っ！」

「ちよ!?? 何してるんだよ!??」

「ば、バカッ! やめろって!」

スノーホワイトが目を背け、九尾、ナイト、リップル、ライアが息を呑む中、龍騎とトップスピードが慌てふためいて、ハードゴア・アリスに駆け寄って自殺行為を止めようとした。そこへ、ファムが割って入ってきた。

「2人とも落ち着きなつて。大丈夫よ。ほら見て」

ファムに言われて九尾達がアリスの左腕に目をやると、信じられない事が起きていた。

左腕からは依然として血が滴り落ちているものの、そこにあるべき傷口は綺麗さっぱり消えていた。

「傷が、消えた……?」

「これが彼女の魔法なのです。そうですね、ハードゴア・アリス?」
「……はい。私の、魔法は、『どんなケガをしてもすぐに治るよ』です」

これを聞いた一回はどよめいた。あのナイトやリップルでさえも、目が惹かれるほどに。

「ま、マジで!??」

「うおっほい! そいつはスゲエな! もうアレだろ! どんだけ怪我しても治るとか、無茶苦茶っつーか、チートじゃね?」

「あまり良い表現ではない気がするが……。でも、その気持ちは分かるなくもないな」

紳士的なライアもそう評価する中、ハードゴア・アリスは九尾とスノーホワイトの2人だけを一点に見つめて呟いた。

「私も、九尾や、スノーホワイト。2人がいるなら、協力します」

「ありがとうございます! ああ、今日はなんて素晴らしい日でしょうか! 志を同じくする仲間が11人もいれば、きつと現状を打破す

る事も夢ではありません！」

いつ俺（私）がお前らの仲間になった、と言わんばかりに鋭い視線を向けるナイトとリップルのペアだったが、興奮気味のシスターナナには気づかれていないようだ。

が、不意にシスターナナは辺りを見渡し、掛け時計に目を向けると、ソワソワし始めた。

「？ どうした？」

「あ、いえ……。ウインタープリズン、中々来ませんね……」

「確かに変ね。こんなにも遅れてくることなんて一度も無かつたはずよね」

シスターナナに続き、ファムも不安な声色でウインタープリズンの事を気にかけて。

「私、彼女を探しに行こうと思います。皆さんはここで待っていてください」

「なら、私も向かうわ」

「ありがとう、ファム。折角ですし、もしよろしければ、ここに残る皆さんで、交流を深めていってくださいな」

シスターナナはそう言っただけで微笑んだ後、ファムと共に廃スーパ―を後にした。

静けさが戻り、どこからか野良猫の鳴き声が聞こえてくる。ハードゴア・アリスはジッと、九尾とスノーホワイトを見つめてくる。隈のついた両目が不気味さを増し、九尾は段々と気味が悪くなってきた。

そんな3人の様子を見つめているライアだったが、ふとある匂いが鼻についた。

潮の、海水の匂いだった。だが、この近くに海はない。さらに匂いの発信源をたどってみると、ハードゴア・アリスから漂ってきていた。ライアの視線に気づいたアリスは、腰を折り曲げて覗き込むように尋ねた。

「……何か？」

「いや……。君の体から海水の匂いがしてな。ここに来る前に泳いできたのか？」

「いいえ」

ハードゴア・アリスはそれ以上何も答えない。

必要以上の発言をしない彼女を見て、スノーホワイトはこの場から逃げ出したい気持ちに駆られたが、トップスピードがレジャーシートを広げる姿を見て、無理だと悟った。

「どうだ？ うめえだろ？」

「……はい。美味しい、です」

「だろー！ 濃すぎず薄すぎず、この辺りがベストポジションで感じて……」
トップスピードの自慢話をよそに、ハードゴア・アリスは変身を解いた大地とスノーホワイトの間に入る位置で黙々と料理を口にしていた。

今日のメニューは五目チャーハンに春巻きといった、中華料理がメインとなっていた。

リップルや、同じく変身を解いた正史、蓮二、手塚も食事にありつ
く中、大地とスノーホワイトは明らかに普段よりペースが落ちてい
た。昨晩首を切断された少女を隣にして、食欲が湧かないようだ。

「そーいやよ。お前のパートナーってどこにいるんだ？」

「……分かりません。普段から、一緒にいるわけじゃ、ありません」

「え、そうなの？」

「アリスのパートナー……。あくまで俺の推測だが、俺がライダーに
なるよりも前に活動していた人物の中に1人、心当たりがある。た
だ、会った事や見かけた事もない。そんなライダーだ」

「へえ。そんな奴がいるんだ」

「……」

時折感じる、ハードゴア・アリスからの強い視線を浴びながら、早
く帰りたい衝動に駆られるスノーホワイトだったが、不意に思い出し
て、ポケットから兎の足を取り出して、購入者に突き出した。

「これ、あなたのものだよね？ 別に、盗ったわけじゃなくて、その
……。気がついたら、持ってただけなの……」

事実を述べたはずなのに、これでは言い訳にしかかっていないよう
な。そう思い始めるスノーホワイトだったが、当の本人は無表情のま
ま呟く。

「違います」

「え、違うって……。けどそいつはお前が」

「それはあなた方のものです」

「ち、違うよ。だってこれ、寿命と引き替えにしたアイテムでしょ？
そんな大事なもの……」

「私がお二人に、あげたから、あなた方の、ものです」

「何で、私達に……？」

そうスノーホワイトが尋ねると、ハードゴア・アリスは首をガクン
と傾けた。その動作に、スノーホワイトだけでなく、成り行きを見て
いた正史もビクツとした。

「気が向いた、から」

「……？」

「気が向いたから、あげました」

「それってどういう」

「気が向いたから」

しつこく連呼するアリスを見て、スノーホワイトもそれ以上口を開かなかった。

「……大丈夫、です。私、死にません。でも、スノーホワイトは、九尾は、危ない。だから、あげます」

「や、優しいんだね、ハードゴア・アリスは」

正史はやや緊張気味にフオローした。

その一方で、オーディンやクラムベリー、はたまた王蛇とはまた異なるベクトルの怖さを持つハードゴア・アリスを見て、背筋が寒くなり始める大地であった。

蓮二とリップルも、同じ事を思ったのか、不死身とも称される魔法少女を目の当たりにして、今まで以上に警戒心を強めている。

そんな中、手塚はただ一人、マジカルフォンを凝視していた。

「それにしても、ウィンタープリズンがあの場合にいなかったのは、少々気になるな……」

「うんうん。どつか遠出でキャンディー集めてるのかな？ ほら、ウィンタープリズンならシスターナナのためにつて張り切りそうだし」

「だとしても、単独行動は危険だ。ましてやオルタナティブが殺された後だ。なおさら集団で行動すると思うが……」

ちよつと占ってみるか。

そう呟いて、手塚はコインを3枚取り出して、指で弾いて床に落としてみた。3回の動作が終わり、しばらく見つめ続ける手塚。大地達だけでなく、ハードゴア・アリスも興味深げに占いの様子を見つめる中、不意に手塚が目を見開いた。何かを察したようだ。

と同時にタイミングを見計らったかのように、全員のマジカルフォンから連絡が入ってきた。ファヴとシローからのメッセージだ。互いに顔を見合わせてメッセージを読んでみると、そこに書かれていたのは、新たに2人の脱落者が出たという情報と、その人物の名前だっ

た
⋮
た。

54. 届かぬ手

亜終 雫は、男女共に周りから終始注目的となっていた。

その一番の要因は、やはりルックスだろう。背も高く、シユツとしたスタイルに、何より特徴的な美貌。端から見れば男性とも間違われなくても不思議ではない。

幼少期からノーブルな雰囲気、ボーイッシュなファッション、端正な顔立ちが確立しており、親でさえどうしてこうなったのか首を傾げていたほどだ。幼稚園、小学校、中学校、高校、そして大学へと、常に雫は周りから注目の的となっていた。無論雫も一途な乙女だ。交際経験もそれなりに豊富だった。(男女問わず)

が、どれも長続きしなかった。どうもしつくりくる相手では無いな、と雫が思ってしまうと、自然と自分から遠ざかってしまい、やがては破局となる。そんな事の繰り返しが続き、段々と周りからチャホヤされる日々に飽きが生じ始めた頃、1人の女性との出会いが、彼女に運命の赤い糸を感じさせた。

羽二重 奈々。初めて彼女というものをしっかりと見たのは2年生の春、応用数学のゼミでの事だった。当時担当だった香川 俊行からのガイドダンスを受けている最中、ふと目が合った途端、雫の心中に不思議な感性が芽生え始めた。俗に言う幸せな気分というやつだ。最初はそれぐらい漠然としていて、何だか分からなかったが、ゼミで一緒にいる時間が増えたり、偶然入部しようとしたスキーサークル部に奈々の姿があつた時から、次第に彼女に雫自身が惹かれ始めた。それ以降、雫は奈々にお菓子をお裾分けしたり、帰りに駅まで送って行ってあげたりと、積極的に近づいた。何度も交流を深めていく内に、奈々の方から、好きな人がいるのかと聞かれた瞬間、雫は決心した。

彼女の笑顔を見る度に、自分は幸せになれる。退屈していた自分に良い転換期を与えてくれた。ならば、それに見合うだけの態度をとらなくては。あの笑顔を守ろうと思った雫は、今度1人で見ようとしていた映画のチケットを差し上げ、しまいには指輪まで購入し、彼女に

手渡そうとまで計画していた。正式に交際を申し込む為だ。

が、計画実行の当日、やってきたのは、少し太り気味な奈々ではなく、コートを着た目がキラキラした美女だった。奈々の友人らしい人物と共に、その日は過ごす事となり、雫は内心ガツカリした。

だが、これで諦める彼女ではなかった。以降もアプローチを続け、奈々が好みそうな事は何でもやった。すると、そんな雫の想いが届いたのか、奈々の方から正式な付き合いを申し込まれたのだ。無論即座にそれを承ったのは言うまでもない。

こうして雫と奈々、同性愛という数奇な運命で新たな生活が始まった。誕生日が近づいた頃にマフラーをプレゼントしてくれた時は、大変喜んだ。そんな日々が続いてしばらくして、雫は奈々から『魔法少女育成計画』と呼ばれるアプリを勧められた。無課金という事もあったが、奈々の頼みを断るわけもなく、言われるがままにプレイし続けた。『ヴェス・ウィンタープリズン』という名前は、奈々がつけてくれた名称だ。その間、奈々は日に日に奇妙なアイテムを持ち出しては雫に近い所で起動させていたのが目に付いたが、彼女自身特に気にする事はなかった。

そして『魔法少女育成計画』を始めて何週間か経った頃に、雫は本物のヴェス・ウィンタープリズンになった。鏡を見て自分の姿が変貌している事に、当初は大変驚いた。が、その直後、もつと驚くべき事が。背後から奈々に呼ばれて振り返ると、そこにいたのは以前映画を観に行った際に現れた、『奈々の友人』と語っていた女性。そう、それこそが、奈々と同じ魔法少女育成計画を経て変身した、『シスターナナ』だったのだ。奈々の友人だとばかり思ってた奈々への想いを赤裸々に語ってしまった事と考えると、余計に恥ずかしくなった。

こうして2人の関係はより濃密なものとなり、互いに魔法少女として有意義な時間を過ごしていた。野蛮な行為を繰り返している事で有名なカラミティ・メアリと王蛇に、シスターナナが忠告した際に襲いかかってきて、ウィンタープリズンが魔法を駆使してシスターナナを守ったり、ゼミの先生である香川改めオルタナティブや、同じゼミ生の霧島 美華改めファムと出会ってチームを組んだり、様々な出

来事があり、ウィンタープリズンは毎日が充実していた。そして思う。

こんな日々が、何時までも続けば良いのに……、と。

「(……けど、幸せは何時までも続くわけじゃない、か)」

誕生日プレゼントとして受け取った、思い入れのあるマフラーを首に巻いている雫はそう自分に言い聞かせながら、門前町の付近に差し掛かり、周りを警戒しながら歩いていた。

1ヶ月前前から突如として始まった、魔法少女及び仮面ライダーの座をかけた戦い。最初はキャンディーの数の競い合いだったルールが、いつしか奪い合い、果てには生き残りをかけた殺し合いへと悪い意味で発展してしまっていた。つい先日、殺し合いの最初の犠牲者として、先生であるオルタナティブがベルデに殺された。冷酷にも、九尾を含めた教え子達の目の前で。

あれから数日間、奈々はショックのあまり、みるみる内に生気を失っていた。笑顔を見る機会も少なくなつた。雫は猛烈に腹を立てた。あんな奴を野放しにしているのは、奈々を幸せになど出来るわけも

ない。

そして彼女は一人、ベルデや彼が従える者達への復讐を決めた。手がかりもない状態では、動こうにも動けない。そう思っていた矢先、雫はベルデ達の拠点に繋がるデータを、ゼミの教室に置かれていた香川の遺品を整理していた最中に発見したのだ。香川が独自で調査していたようだが、門前町の王結寺を拠点にしている可能性が大いにあるという情報は、彼女を奮い立たせた。敵の位置は特定した。後は体調を万全に整えて、敵を一網打尽にする。

だが、同じチームメイトのシスターナナやファミはもちろん、ウインタープリズンと同様、ベルデへの復讐に燃えている九尾を巻き込むわけにはいかない。何よりシスターナナを狙ってくる可能性も低くないため、人数差で彼女まで守りきれるかという点、少しばかり厳しいと思うところがあった。そこでシスターナナへ、少し用事で遅れるとメッセージを送って、彼女を引き離れた。

「……」
これで良い、と雫はマジカルフォンと取り出しながら心の中で呟いた。

奈々の大切なものを、笑顔を守れるのなら、人を何人殺めても後悔はしない。この先奈々から嫌われても。その決意を胸に、雫は門前町への案内板の前に立ち、周りに誰もいない事を確認してから、マジカルフォンを構えた。

「……許せ、奈々。君に嘘を付いた事は一度もなかった。けど、私はやらなければならない。この復讐は、必ず成就しなければ、ならない。君の理想とも言える、魔法少女と仮面ライダーの在り方を否定する者を排除する為に」

そして、雫は叫ぶ。愛する奈々を守る為に。先生の仇を討つ為に。

「変身ー！」

マジカルフォンをタップして、ヴェス・ウインタープリズンに変身した雫は、なるべく足音を立てずに王結寺へと直行した。

門の前に立ち、静かに扉を開く。顔を最低限出して周りを確認する。誰もいない。が、人の気配はあるような気がする。出来れば全員

が寺の内部にいる事を確認してから、魔法の壁でまとめて息の根を止めたいところだが、下手に手をこまねいていると、気づかれて抹殺どころではなくなる。

頃合いだ。そう思ったウインタープリズンは魔法を行使し、壁を王結寺の周りに立てて、一気に崩して押し潰そうとする。

『CONFINE VENT』

……が、そう上手くいくわけもなく、どこからともなく聞こえてきた電子音と共に、壁はボロボロと崩れ落ちた。

「やくっぱ来たね。ラクシヨールラクシヨール」

その声と共にウインタープリズンの背後に現れたのは、ガイとベルデ、たまだった。

「どうやって居場所を突き止めたのかは知らねえが、ここで消せば関係ねえ。お前も邪魔だ」

「……」

ウインタープリズンはベルデから視線をチラツと外して近くのカーブミラーに目をやった。そこには彼らの契約モンスターでもあるメタルガラスとバイオグリーザが睨みつけている。見張りの役割をしていたようだ。

が、ウインタープリズンは3人を前に、依然として狂気的笑みを崩さない。

「あん？ 不意打ちが失敗して、頭でもおかしくなったか？」

「まさか。こうして妨害してくる事ぐらいは、想定内さ。今君が使ったコンファインメントは、使用すればしばらくは使えない。私もしばらく魔法が使えない以上、これを使わせてもらう」

そう言っただけでウインタープリズンはマジカルフォンを素早く取り出すと、タップしてパートナーの武器であるウイングスラッシャーを右手に持ち、3人に飛びかかった。

「ひゃあっっっ」

たまは恐れをなして逃げ惑い、ガイとベルデは即座に反撃に出た。ウイングスラッシャーを振り回し、なるべく相手を近づけさせないよう交戦するウインタープリズン。

「へえ、ちょっとは楽しませてくれそうだね」

『STRIKE VENT』

ガイは仮面の下で不敵な笑みを浮かべ、メタルホーンを召喚してウインタープリズンに向かって突き出した。武道に長けているウインタープリズンと、簡単には崩せない攻撃と防御を兼ね備えたガイが互角の勝負を繰り広げている中、

『CLEAR VENT』

ベルデがカードをベントインして、姿を消した。そしてガイとの一騎打ちに意識を向けていたウインタープリズンの背後から忍び寄り、羽交い締めにした。

「くっ……！」

「後ろがお留守だぜ！」

ベルデはそのまま彼女を門の中へ連れ出し、隙を見てガイがウインタープリズンを蹴り飛ばすと、ウインタープリズンは吸い込まれるように王結寺の内部へと転がり込んだ。

慣れない背中への激痛を少しでも和らげようと寝転がっていたが、瞬時にそんな余裕がない事に、ウインタープリズンは気がつく。内部で待機していたアビスとスイムスイム、タイガが一斉に襲いかかってきたからだ。アビスは2刀のアビスセイバーを、スイムスイムは先日購入した薙刀、通称『ルーラ』を、タイガは斧状のデストバイザーを構えている。ウインタープリズンは起きて身を翻し、奇襲を避けた。続いてガイとベルデが内部へ突入し、周りを5人に囲まれる形でウインタープリズンは対峙した。

「(この数じゃ、ウイングスラッシャーだけでは難しいか……)」

そこでウインタープリズンはマジカルフォンをタップして新たに武器を出した。白鳥の翼もモチーフにした盾『ウイングシールド』を取り出し、攻守を強化させた。

ガイとアビスの突きはウイングシールドで難なく防御し、ウイングスラッシャーでスイムスイムとタイガを薙ぎ払う中、ウインタープリズンは密かにチャンスを伺っていた。彼女の目的は敵であるベルデチームの排除。だが、最初から一気に畳み掛けるつもりはない。先ず

真つ先に狙うべきは、チームを統制するリーダー。彼らがオルタナティブという軸を潰したのなら、こちらも同じようにリーダーという柱を切り崩せば、後は脆くなつた部分、つまり戦意を失つたチームメイトを片っ端から倒していく。

ウインタープリズンは飛び上がり、壁に足を当てて、余裕そうに眺めているベルデに向かって、壁を踏み込んで加速して、ウインタープリズンに突き立てる。

「これなら……！」

「……フツ」

対するベルデは、隣にある何も無い空間に手を伸ばした。するとどうだろう。何もなかったはずの空間に、突如として見覚えのある人物が驚きと恐怖に満ちた表情でベルデに掴まれている状況に陥つた。

「！ ナナ……！」

ベルデが突き出したのは、シスターナナだった。足元には布切れが落ちている。透明外套で姿を消されていたようだが、そんな事はウインタープリズンにとって問題ではない。重要なのは、目の前にあえて隔離しておいたはずのシスターナナがベルデ達の所にいたという事実だった。

「(人質にされていたのか……!?!?)」

突然、愛する者が目の前に現れた事で、ウインタープリズンは思わず彼女を傷つけないようにとウインタープリズンに逸らし、足を止めた。

が、それが命取りとなつた。

「ガッ……!?!?」

気づいた時には、背中に熱さと痛さを感じ、血しぶきが流れた。ウインタープリズンはよろめきながら後ろを睨んだ。タイガがデストバイザーでウインタープリズンの背中を斬り裂いたようだ。武器を手離してしまい、血を垂らしながら踏ん張るウインタープリズンのもとに、ベルデを無理やり振りほどいたシスターナナが駆け寄ってくる。シスターナナのその行為に、一瞬だけ思考が停止する。

何かが違う。目の前の人物は、確かにシスターナナの姿をしてい

る。だが、中身が違っているような……。

と、一心不乱に情報を整理していた、そのわずか数秒間が、ウインタープリズンに致命的な一撃を与える事となる。

「……っあ!?？」

不意に胸元が熱くなり、下を向いてみると、短剣が刺し貫かれている。心臓ど真ん中だ。

「ゴフアツ……」

口から血を吐き出し、前のめりに倒れようとするウインタープリズンに、血の付いた短剣を持つシスターナナが蹴りを入れる。

一体何が。困惑しているウインタープリズンの目の前で、シスターナナはグニヤリと変形した。短剣も同じく。やがて『シスターナナ』だったものは左肩から翼が生え、右足にリボンのついた天使に。『短剣』だったものは、右肩から翼が生え、左足にリボンのついたもう一人の天使に変化した。

「やったやったー！　こーんな単純な偽物に引つかかるなんてね〜！

やっぱバカツプル丸出しじゃん！」

「あいつ刺されるまで全然気づいてなかったしー！」

そう言って笑いながらハイタッチしたのは、魔法でそれぞれに化けていたミナエルとユナエル、ピーキーエンジェルズだった。そこでようやくウインタープリズンも理解し、笑みを浮かべた。何故強靱な肉体を持つウインタープリズンに短剣如きで刺し貫けたのか。何故シスターナナに化けて武器を持つ目の前に姿を現したのか。

が、この時ウインタープリズンの浮かべた笑みには、敵の愚かさをせせら笑っているという意味が含まれていた事を、彼らは知らない。

「ハアッー」

この時ウインタープリズンは、自分の死期を悟った。心臓からの出血は激しく、息も続かない。だが、このまま死んでしまっただけは、シスターナナに嘘をついてまでここに来た意味がない。為すべき事を果たす為に、ここで誰かを殺す。

ウインタープリズンが手を床につけると、床板を割って、何枚もの土壁を形成した。時間が経って、ガイのコンファインメントの効力は

切れていたのだ。

「おわつと……!」

「ぐつ……!」

パーティーを分断された。そう思った時には、壁は迷宮の如くせり上がって、彼らを閉じ込めた。それはまるで牢獄のようだったと、外から様子を伺っていたたまは、後に呟いた。

「ちよつ!??。こいつ何でまだ生きてんの!??。」

「ちゃんと心臓刺したよね!??。分かんないし!」

「つてかこれ閉じ込められちゃったよね!??。」

「ヤバイよお姉ちゃん!」

特に慌てふためいたのは、ウインタープリズンの近くで閉じ込められたピーキーエンジェルズ。どこから離脱しようとも、目の前に広がるのは壁、壁、壁。

こっちはダメ、なら向こうは、と行き来を繰り返している間にも、ピーキーエンジェルズは気づいてしまった。壁が迫り、いつの間にか逃げ道が全て塞がれて、身動き一つ出来ないぐらいに密着してしまっていた事に。

双子の天使達が動揺する中、貴公子の魔法少女は、普段からは想像もつかないような狂気に満ちた笑みを、2人に向ける。

「ナナに変身とは……。見事にしてやられたよ。……でも、変身を解いたのは、ハズレだ」

「ハアツ!??。」

「例え偽物だと知っていても、シスターナナの姿のまま、トドメを刺せていけば、こんな風には殺れてなかったって事さ!」

そう叫んで、ウインタープリズンは左手を硬く握り締め、土壁に閉じ込められている、最後の最後で墓穴を掘ったピーキーエンジェルズめがけて突き出した。

狙うは天使達の体。逃げ場はない。ピーキーエンジェルズはどうする事も出来ず、体のあちこちから血を流しているウインタープリズンの一撃を真正面から受け

『THE
VENETIAN
FINANCE』

……る事はなかった。

何故なら、壁の外から聞こえてきた電子音と共に、壁が消滅し、自由の身となったピーキーエンジェルズは左右に飛んで、ウインタープリズンの突きが空を割いたのだから。

「なっ……!?」

「ひゃく、あつぶなかつたあ!」

「ありがとうガイ! マジ助かった!」

ウインタープリズンは困惑した。壁が消えたのは、間違いなくガイの持つコンファインメントの影響だ。だが、彼は最初にウインタープリズンが奇襲しようとした際に無力化する為に使っていた。まだあれから時間が経っていないにもかかわらず、何故同じカードが使えたのか……?

攻撃を外して前のめりによるめくウインタープリズンに、ガイの冷やかな一言が突き刺さった。

「へっへっへ。驚いたでしょ? カードは一枚だけじゃないんだよねえ」

「……!」

やられた。ウインタープリズンは己の思考を恥じた。

その可能性までは考察できていなかった。つまりガイは、『使用したカードを何らかの能力で再利用した』のではなく、『2枚あった同じカードを、2回使用した』だけだったのだ。考えても見れば、ライダースystemにおいて、アドベントやファイナルベントのカードはともかく、それ以外に特殊能力系のカードは2枚以上持てないという定理はない。

仕留め損ねてしまったショックからか、意識が薄れ始めていく。だがまだ諦めない。ガイに向かって拳を振るおうとした瞬間、突き出した右手が、音もなく切断された。ゆっくりと隣に目をやると、スイムスイムが血の付いた『ルーラ』を構えている。その鋭い刃先で右手を切断したようだ。

膝をついたウインタープリズンは飛んでいく右手をぼんやりと見

送っていた。

「(あの手で、あの指で、奈々の髪を梳いてあげるのに必要なのに……)」

ウインタープリズンは、雫は、宙を舞う右手を掴もうと、左手を伸ばす。が、その左手も吹き飛び、血しぶきが両手の先から流れ落ちた。今度は左に目をやる。そこには、血の付いたアビスセイバーを構えたアビスと、腕組みをしながら道端のゴミを見るような目つきで見下しているかのように立っているベルデの姿が。

不意に、走馬灯の如く脳内を駆け巡る、奈々とのこれまでの思い出。その何れにも、太陽のように眩しい、愛おしき奈々の笑顔がある。

「……奈々。最後に、もう、一度、君の、笑顔、が……。見たかった、なあ……」

どうか、無事に生き残ってくれ。奈々、美華。

ウインタープリズンの姿が解け、亜柊 雫となった彼女は、両手のない腕を天に伸ばしながら、弱々しく笑みを浮かべると、そう刹那に願いながら、血の海に伏した……。

《中間報告 その6》

【ヴェス・ウインタープリズン（亜終 雫）、死亡】

【残り、魔法少女13名、仮面ライダー13名、計26名】

55. 介入者

「確か、この辺って言ってたわよね!?!?」

「ええ、そのはずですが……」

その頃、シスターナナとファミは未だに拠点の、廃スーパーにやつてこないヴェス・ウィンタープリズンを探しに、彼女が向かいような場所を片っ端から搜索していた。が、その最中にマジカルフォンから連絡が入った。ウィンタープリズンからだ。少しトラブルが発生したので、来てほしいという内容だった。

今までどうしていたのかを聞きたかったが、先ずは彼女と合流する事を最優先にして、待ち合わせ場所まで直行する2人。たどり着いたのは、門前町に入って少し進んだ先にある橋の手前。

「ここでウィンタープリズンが、との事ですが」

「何でよりにもよってあいつらが拠点にしている所に……」

「そりゃあもちろん、俺達が呼んだからね」

不意にどこからか声が出たかと思うと、近くの鏡から姿を現す者が。ベルデ、アビス、スイムスイム、タイガ、ミナエル、ユナエル、ガイ、そしてたまの順に、2人の前に姿を見せた。

「あんた達……!」

「ねえねえ。2人ともウィンタープリズンを探しに来てたんでしょ?」

「でしょ?」

「! どうしてあなた方がそれを……。もしかして、ご存知なのか?」

「もちろん。ほら」

そう言つてガイは、肩から担いでいた何かを2人に向かって放つた。よく見るとそれは人だった。顔が地面に伏せられて、誰だか分からなかったが、次第にシスターナナの顔が青ざめていくのを見て、ベルデとガイは仮面の下でニヤついた。

赤い服を着ているのかと思つたが、そうではない。それは血で染まった跡である事が、背中についている大きな傷が物語っている。さ

らに2人が注目したのは、その人物の服装だ。元は白と思わしきTシャツにサスペンダー。該当する人物が1人だけいる。

「何キョトンとしてるのさ？　ちゃんと返してあげたでしょ？　おたくの大好きな人」

「……あ。し、しず……」

「……い」

「あ、そうそう。これも返しとくわ。どうせ持つても邪魔なだけだし」

ガイが続けざまに投げ渡したのは、黒のマフラー。それを手に取ったシスターナナは、膝から崩れ落ちた。そのマフラーは、かつて自分が零にプレゼントしたものだ。そして目の前に転がる、傷だらけの変わり果てた死体の正体は……。

「……い、イヤアアアアアアアアアア?」

「雫……い。そんな……い」

ファミも、シスターナナほどではないが、仲間の死を目の前にして、動揺を隠せない。

一方、ベルデ達は平然とした態度で事の次第を説明した。

「言つとくがな。そいつは俺達の拠点に奇襲をかけようと単独で乗り込んできた。向こうから仕掛けてきたんだから、やり返すのはライダーとか魔法少女とか関係無しに、人として当たり前だろ?」

「お前……い」

「ま、そういう事だからさ。正当防衛ってやつ？　だからこうなってもしょうがないでしょ。つてかどうせ誰かは殺つとかないと勝ち残れないゲームだしさ。これでまた1人脱落つて事で、また生き残れる可能性が増えたんだよね。でも結構頑張った方だとは思うよ?」

「この人数相手にそこそこ戦えてたし」

「あ、ああ……い」

シスターナナは激しい動揺でガイ達の言葉が耳に入ってきていない。一方でファミは最高潮の怒りを覚えたが、現状2人で、しかもうち1人は戦闘向きではないという事実は、それなりに不利が生じていた。

ならば……、と、ファムはシスターナナの手を掴んで叫んだ。

「逃げるわよシスターナナ！ このままじゃ危険よ！」

「で、でもウィンタープリズンは……！」

「無理よ！ 彼女を担いでる暇なんてない！ 今は、生き延びなきゃ！ 先生や、雫の想いを無駄にしない為に！」

「！」

ファムの言葉を聞いて、シスターナナは葛藤したが、やがて意を決して立ち上がり、ファムに引つ張られる形で彼らとは反対方向に駆け出した。

「（……ごめんなさい、雫！）」

シスターナナは心の中で謝りながら、精一杯逃げる事に専念した。

「逃すわけないでしょ！」

「そーでしょ！」

無論彼らもそれを見過ごすはずもなく、8人は2人を追いかけた。後には雫の死体が橋の上に転がっているだけとなったが、それからしばらくして、雫の死体に近寄る者達が現れた。

「……これが、ウィンタープリズンだった人間モですか」

「彼女もここで脱落、か」

死体を仰向けにして顔を確認したのは、オーティンとクラムベリーのペアだった。つい先ほど、ファヴとシローから連絡を受けて駆けつけてきたのだ。

「リサーチの段階では、オルタナティブに次ぐ候補者として名が挙がってたが、思っていたよりあっけなかったな」

「アイテム解放のタイミング、やはり早すぎたのでは……？」

2人がそう話し合っていると、マジカルフォンからファヴとシローが姿を現した。

『解放のタイミングはこれでバッチリだとファヴは思うぽん』

『お前達は目をかけていたようだが、シスターナナが協力している時点で、参戦派とはならなかったはずだ』

『そうそう。このままベルデ達がシスターナナを始末してくれれば、もつとスピーディーに事が運びそうだから、是非とも頑張ってほしい』

ぼん』

「どうやらファヴはベルデ達にそれなりの期待を寄せているようだ。一方でオーデインはこんな事を語った。

「そう上手く行けばいいがな……。そろそろ奴が動き出してもおかしくない」

『奴？ 王蛇の事ぼん？ それともカラムミティ・メアリの事ぼん？』

「どちらでもない。アレは事前調査した者の中で、それ相応の実力の持ち主だ。ある意味、生き残る可能性が高い」

『ふーん。……。あ』

「どうかしましたか？」

『また脱落者が出たみたいだから、ちよつと様子を見に行ってくるぼん。シローも行くぼん』

『ああ』

そしてファヴとシローは姿を消し、再び辺りに静けさが戻った。

クラムベリーはため息をつきながら、橋の欄干に腰をかけて呟いた。

「できる事なら、彼女とは預けた勝負を今一度つけようと思っていたのですが、残念です。彼女の事も、もう少し知りたかったというものもあります」

「だが、脱落すればそこまで。それがこの試験だ」

そう言っただけでオーデインは雫を抱き上げて、歩き始めた。

「……。どこへ行くのですか？」

「このままにしておくのもアレだからな。彼女に敬意を表して、せめてシスターナナの近くに手向けておこうと思っただけ」

そう言っただけでオーデインは雫の死体を連れて、その場を立ち去った。

クラムベリーは地面についた血痕を見下ろしながら、一言呟く。

「……。彼も、変わった美学を持っていますね」

ゆつくりと歩くその男は、飢えていた。

かつて自分からあらゆる幸せを奪い、そのくせ何も責任を感じていない、友と呼んでいた男と、身勝手なままに自分と縁を切った女への、復讐に。今までの自分なら、陰ながら呪うだけの存在だっただろうが、今は違う。今の自分には、力がある。自分に不幸を与えた者達をこの手で倒す事のできる、絶対的な力を。

そしてこの世界に入り、復讐すべき相手が同じ力を持っていた事に気付いた時は、何が何でもこの手で殺すと誓った。

彼女を探しに、とある地区を散策していた時、前方で騒ぎが起こっている事に気づいた。注意深く観察してみると、6人のライダーや魔法少女が、白いライダーと交戦しているではないか。その近くには怯えた表情の魔法少女が。が、その男が目についたのは、白いライダーの方だ。かなり劣勢に置かれている。

まだ奴はこんな所で倒れさせるわけにはいかない。男は左腕についていた、龍の頭を模した召喚器をスライドし、腰についていたカードデッキから、1枚のカードを取り出して、ベントインした。

「ハアツ、ハアツ……！」

ファムとシスターナナが逃げ込んだのは、門前町に唯一存在する立体駐車場だった。狭い空間や死角を利用して攪乱させようという魂胆だ。

が、逃げ回っているうちに、前方からピーキーエンジェルズが回り込んできて、行く手を遮った。慌てて後ろに引き返そうとするが、ベルデ、アビス、タイガ、ガイ、たま、スイムスイムが立ちふさがっている。逃げ場を失ってしまったようだ。

「ほらほら、鬼ごっこはこれでおしまい。次はもつと面白いゲームを始めよっか。……ライダーや魔法少女同士の戦いってやつを」

「やるしか、ないわね……！」

「ファム!? 何を……！」

「……こいつらだけは、絶対に許せない! あたし1人でも、倒してやる! シスターナナは危ないから下がってて!」

ファムはシスターナナを柱の後ろに避難させると、ブランバイザーを構えて、1枚のカードをベントインした。

『GUARD VENT』

ファムの左手にウィングシールドが握られると、戦闘態勢に入った。

「ハアツ!」

先行してアビスがアビスバイザーを構えて斬りかかったが、ファムは軽い身のこなしで回避し、逆にアビスに向かってブランバイザーを突き出して、アビスにダメージを与えた。

「なんのー!」

「まだまだー!」

と、今度はミナエルがデストクローを、ユナエルがガゼルスタップを構えてフアムを挟み撃ちした。フアムはウイングシールドを使って受け流すも、バランスを崩して倒れこんだ。

「このお……。鬱陶しいわね!」

『FINAL VENT』

まずはあの双子から。そう決めたフアムはブランウイングを呼び出して、油断していたピーキーエンジェルズをフアムに向かって吹き飛ばした。

「おわろ!??!」

あまりの速さに旋回する事が出来ないピーキーエンジェルズ。フアムはウイングスラッシュを構えて、ピーキーエンジェルズに斬りかかる。が、その時ミナエルが懐からあるものを取り出して放り投げた。

「ハアッ!」

フアムはミステイースラッシュで双子を真つ二つに斬り裂いた……。と思っていたのだが、様子がおかしい。手応えがないのだ。

「えっ!??!」

フアムが後ろを振り返ると、地面には真つ二つに斬られた人形が転がっているだけ。一方のピーキーエンジェルズはケタケタと笑っているだけで、無傷だった。フアムは瞬時に理解した。

「身代わり人形か……。!」

「正解」

ハッと声のした方を振り返ると、ガイがメタルホーンの付いた右手を突き出して、フアムを吹き飛ばした。

「フアム! ……!」

不意に何かの気配を感じて、シスターナナが振り返ると、いつの間にか背後に回り込んでいたスイムスイムが、ルーラを突き出しており、シスターナナはギリギリのところまで回避した。コンクリートの柱にルーラは突き刺さり、その傷の深さから、武器の威力が凄まじいも

のだと悟ったシスターナナは、涙ながらに尋ねた。

「どうして……！ どうしてこのような非道を、あなた方は……！」

「ルーラが言つてた。強いやつはどんな手を使つても倒せ。だから、あなたもフアムも、倒さなきゃ、いけない」

「……！」

絶句するシスターナナに向かって、スイムスイムは再びルーラを振るつた。悲鳴と共にフアムの近くに逃げ寄るシスターナナ。

「ナナ、大丈夫!?？」

「え、ええ……！」

「こいつら、本当に狂ってる……！」

ならば容赦はしない。フアムは新たなカードを取り出した。

『SWORD VENT』

『SCYTHE VENT』

対するベルデも、レアアイテムの1つ『サイズベント』で死神の大鎌を彷彿とさせる武器『デスサイズ』を構えて、フアムに向かって振り下ろす。すると、フアムが構えたばかりのウイングスラッシュヤーを難なく真つ二つに斬り落としてしまったではないか。

「そんな!?？」

「さすがは寿命縮ませて買っただけの価値はあるな。こいつなら……」

「なら、こつちだって……！」

フアムは購入したレアアイテムの、金の指輪を左の薬指にはめると、再び振るってきたデスサイズの攻撃をバリアで受け流した。

「チツ！ 小癩な！」

ベルデの猛攻に耐えながら後ずさるフアムだが、

「そおれ！」

「きやあ！」

背後がガラ空きだった事もあって、ピーキーエンジェルの攻撃が命中して、倒れこんだ。

「フアム！」

「みつともなく泣き叫んじゃってき。ウザいから消えて」

ファムに手を伸ばすシスターナナに対し、ガイが心底呆れた様子でシスターナナに攻撃を仕掛ける。タイガもそれに便乗してデストバイザーで斬りかかる。

「させないー！」

『WALL VENT』

ファムは一瞬の隙をついて、カードデッキからヴェス・ウインタープリズンのアバター姿が描かれたパートナーカードをベントインし、シスターナナの周りにコンクリートの壁を形成した。これで少なくともシスターナナの身は安全だ。そう思っていた矢先、ガイは笑いながら1枚のカードをベントインした。

「んなのもう一回見てるし。飽きちゃうんだよねえ」

『ADVENT』

ガイはメタルガラスを呼び出すと、壁に向かって突進するように命じた。メタルガラスの突進攻撃は、ファムの想像していた以上に威力が大きく、シスターナナは崩れた壁に埋もれながらメタルガラスに吹き飛ばされた。

「ギャア!?？」

「ナナー！」

とつさに覆った両腕にいくつもの切り傷をつけたシスターナナは、すぐには立てなかった。ファムが介抱しようとする中、ガイが新たなカードを取り出し、メタルバイザーにベントインする。

「んじや、そろそろ終わらせよっか」

『FINAL VENT』

メタルガラスがガイの後ろに回り込み、ガイはメタルホーンの付いた右手を叩きながら、冷ややかに呟く。

「これで本当の、ゲームオーバーだね」

「！」

ニヤリと笑ったガイは、駆け出したメタルガラスの肩に足を乗つけて、メタルホーンを突き出したまま高速で突進してくる必殺技『ヘビープレッシャー』を、ファムとシスターナナめがけて発動する。

これで2人は文字通りゲームオーバーだ。ベルデチームの面々は、

誰もがそう思っていた。

どこからともなく現れた黒龍が、ガイとメタルゲラスに体当たりして吹き飛ばす瞬間を、目撃するまでは。

「えっ!?」

たまが思わずそう叫んでしまうのも、無理ないのだろう。ファムとシスターナナでさえ、目の前の現象に戸惑いを隠せない。

「つてえく。何なんだよ」

ガイが腰に手を当てながら、妨害してきた黒龍が向かう先に目を向けた瞬間、心の中で首を傾げた。

立体駐車場内を旋回する黒龍の中心に、誰かがいる。全身の至る所が黒一色で、赤い複眼が、禍々しさを感じさせている。そして左腕には龍の頭を模した召喚器が。その姿を見て、真っ先に口を開いたのはファムとシスターナナだった。

「……えっ? 龍、騎?」

「どうして、あなたがここに……」

ベルデ達も、突如介入してきた龍騎(?)に、訝しんでいた。

否、もし彼のパートナーであるハードゴア・アリスならば、即座にこういうだろう。彼は龍騎ではなく、リュウガと呼ばれる仮面ライダーだ、と。

「テメエ……。どうしてここに」

「つてかあいつ、なんか様子変じやね?」

「うんうん。なんかヤバイオーラが出てるっっていうか」

一同が困惑する中、ガイがイラついた様子でリュウガの前に立った。

「つたくさあ。折角良いところだったのに、邪魔すんなつづうの!」

そう言つてメタルホーンを振り下ろすガイだったが、リュウガは片手でそれを掴んで、振り払うとその腹に蹴りを数発入れた。

「……っあー!」

ガイは吹き飛び、地面を転がった。実力なら指折りのガイがこうもあっさり返り討ちに遭うとなると、只者ではない。

「チッ!」

ベルデは舌打ちしながら、アビスと共にリュウガに襲いかかる。

が、リュウガは1つ1つの攻撃を避けて、カウンターとばかりに拳を振るって、2人を薙ぎ払った。2人は背中を強く打って、呻き声をあげて地面に落ちた。

「！」

スイムスイムとタイガは、リュウガを挟み込む形で斬りかかるが、素早く動き回って、2人を蹴り飛ばす。

「こんのお！ 調子に乗るんじゃないよ！」

「やるよお姉ちゃん！ コンビネーションなら私達の方が上だもんね！」

ミナエルとユナエルも、同じように挟み込んで、スイムスイムとタイガの時以上に動き回って攪乱させた後、リュウガに飛び蹴りを叩き込もうとした。

「……バカの一つ覚えが」

だがリュウガは依然として余裕があるのか、そう呟いた後、的確に双子の頭をそれぞれの手で鷲掴みにして、強く握りしめた。2人の口から悲鳴が漏れ出す中、リュウガは思いつきり双子を地面に叩きつけた。2人は何度もコンクリートの地面をバウンドして、横たわった。震えながら立ち上がろうとする2人を見て、リュウガはカードを取り出して、ドラグバイザーにベントインした。

『FINAL VENT』

一同の顔が引きつる中、リュウガは自らの体を空中に浮かせて、右足を突き出した。すると後方から、彼の契約モンスター『ドラグブラッカー』が、起き上がろうとしているミナエルとユナエルに向かって黒炎を放った。

「！ お姉ちゃん逃げてー！」

「ユナ……！」

慌ててユナエルがミナエルを突き飛ばすと、ユナエルに黒炎が直撃し、その黒炎はみるみるうちに硬化していった。

「う、うあ……！」

ユナエルは必死に飛ぼうとするが、下半身が硬化した黒炎に閉じ込められており、ビクともしない。

「ユナ！ 逃げてえ！」

姉の声が聞こえてきて、ハツとしたその瞬間、リュウガがユナエルめがけて突撃してきた。が、ユナエルに出来たのは、迫り来る死の恐怖に顔を歪ませる事だけ。

「ハアアアアアアア……！」

右足を突き出したりリュウガの必殺技『ドラゴンライダーキック』が小さな天使に直撃し、ユナエルは血を吐き出す間もなく、体をくの字に曲げて遙か後方に吹き飛ばされて、轟音と共に壁にめり込んだ瞬間を、誰しもが見逃す事はなかった。

「ゆ、ユナアアアアアアアアアアアアアア！」

あまりの衝撃波に、ミナエルが妹の名を叫びながら吹き飛ばされた。ベルデ達も近くにいた影響で、地面を転がった。

煙が辺りに充満し、呻き声が響き渡る中、ファムとシスターナナは一部始終を見て、しばらく呆然としていた。

「あ、ああ……！」

シスターナナは、仮面ライダーが魔法少女を殺した、殺人現場を目撃したショックで気を失いそうになり、ファムは突然の事で混乱している。が、すぐに気を取り直して、シスターナナに声をかけた。

「今がチャンスよ……！ この隙に逃げるわよ！ このままじゃ、私達も……！」

「！……はい！」

シスターナナは震えながらもファムの手を掴んで立ち上がり、一目散に出口に向かって駆け出した。

地面に降り立ったりリュウガも、ファムの後ろ姿を見て足を向けたが、不意に立ち止まり、少し考える素振りを見せた後、港のある方角へと歩き出し、その場を去った……。

それから数分後、ベルデ達は意識がハッキリしてきた所で、ユナエルが吹き飛ばされた地点に足を運んだ。

大きな亀裂やクレーターが出来た壁に目をやった一同は、そこで息を呑んだ。壁から崩れ落ちた瓦礫の中に、大学生ぐらいの女性の頭がめり込んでいる姿があった。ユナエルの変身者、天里 優奈だった。すでに事切れているというのは、見ただけでも判断できる。

「アア……！ ユナが、ユナがあ……！」

ミナエルは優奈の死体に寄り添って、大粒の涙を流し始めた。苦楽を共にしてきた双子の妹の死は、姉の精神に堪えるものがある。

「泣いてる場合か。これは生き残りをかけた戦いだぞ。この中の誰かが死ぬ事ぐらい、分かってただろ。お前の妹も」

「分かっている！ 分かってたけどさあ……！ ユナは、あの時私を庇って……！」

ミナエルは大声でベルデの言葉を遮り、優奈の体に顔を埋めた。「やられたよ。まさかあいつ、あんなにヤバいやつだったとはね。あの意味でゲームを盛り上げてきたね」

ガイがため息をつきながら呟くが、誰もそれに続いて言葉を続ける者はいない。スイムスイムは俯き、アビスは目線を逸らし、タイガはジツと目の前の光景を見つめ、たまはミナエルの隣に寄り添って、しゃくり上げていた。

やがてベルデが、泣き喚くミナエルに声をかけた。

「龍騎……。どうでもない奴だと思っていたが……。まあ良い。お前から、これ以上こういった事にならないよう気を引き締めろよ。まだ脱落の枠は……」

「んなの分かってるって言ってんだろ！」

突如、ミナエルの叫び声が響き渡り、隣にいたたまはビックリして飛び上がった。ミナエルは、優奈から流れ出た血で染まった両手を睨みながら、妹を殺した相手の顔を思い返ししながら、口調を荒げて叫んだ。

「龍騎い……。！ お前は、絶対に、私が殺す……。！ ユナにした事と、同じ目に遭わせてやる！」

新たに生まれた復讐の憎悪。

この救いようなない戦いに、終止符が打たれる時は、いつになったら訪れるのだろうか……。

《中間報告 その7》

【ユナエル（天里 優奈）、死亡】

【残り、魔法少女12名、仮面ライダー13名、計25名】

56. 白鳥の想い

「……じゃあ奈々。風邪引かないようにしてね。ご飯もちゃんと食べるんだよ」

「……」

返事はない。微かに聞こえてくるのは、すすり泣きぐらいか。美華はそれ以上かける言葉が思いつかず、ドア越しから覗かせていた頭を引つ込めた。静かに扉を閉めてから、しばらく歩いた所で、ハアツ……とため息をついた。

今から2日前、オルタナティブの仇を討とうとしたヴェス・ウィンタープリズンは、ベルデ達によって返り討ちにされ、そのまま帰らぬ人となった。一時はファムとシスターナナも危機に陥っていたが、突如現れた、龍騎にそっくりな人物が介入し、ユナエルを殺した事で、隙を見て逃亡する事が出来た。

その後奈々の住むマンションの屋上にたどり着くと、どういうわけか、雫の遺体が屋上に横たわっていた。ベルデ達とは違う、別の誰かが運んできたのだ。両手を失った雫にしばらく寄り添った後、奈々の我が儘で、雫の遺体を人目につかない屋上の物陰に隠した。少しでも彼女を一人にさせたくないという、奈々の気遣いが表れている選択だった。

とはいえ、それ以降奈々の生活スタイルは激変し、元の明るい振る舞いは消え失せていった。毎日様子を見に来る美華がどれほど話しかけても、雫の遺品でもあるマフラーを握りしめているだけ。まともな食事は出来ていなかった。当然外に出かける事も無くなってしまった為、キャンディーが溜まる機会が激減した。今週はもうウィンタープリズンの死によって、脱落者が出る事はないが、次の週もそうなるとは限らない。

このままいけば奈々は確実に脱落する。雫の意思を無駄にしない為にも、彼女を死なせるわけにはいかない。そう思った美華は、今日もキャンディー集めに最適な場所をくまなく搜索していた。

ようやくその機会が訪れたのは夕方の、夕日が沈みかけた頃だった。マジカルフォンにモンスター出現を知らせる音が鳴り、美華は現場に向かった。反応があった場所には、男性のものと思わしき、片方だけの靴とカバンが転がっている。すでに捕食された後のようだ。

だが、美華のやる事は変わらない。キャンディー集めの為にも、1人で戦う。そう決めた矢先、横手から美華の見知った人物が走ってやってきた。同じ仮面ライダーでもあり、昔の彼氏でもあった城戸正史だ。

「美華！」

「！ 正史……！ あんたどうして」

「この近くで仕事があったんだけど、モンスター出たから、こっちに来たんだ。それより、早くやるぞ！」

「で、でも……」

「どうしたんだよ!? ほら、早く……」

正史はそう言ってカードデッキを近くの窓ガラスにかざした。美華も何か言いたげだったが、正史に続いてカードデッキをかざす。正史は右手を左に突き出し、美華は両手を、翼を広げるように動かしてから正史と同じように右手を左に持ってきた。

「変身！」

V バックルにカードデッキが付けられて、2人は龍騎、ファムに変身し、そのままミラーワールドに突入した。

そんな2人の後を追うかのように、その場に現れた人物達が。

「あいつ、ライダーだったのか……」

「モンスターの反応はこの先です。どうしますか？　ここは諦めて別の場所に……」

「いや、行こうよ。どのみち女は放っておけないしさ」

それは北岡 賢治と安藤 真琴だった。北岡はカードデッキをかざし、真琴は北岡の言葉を聞いて若干呆れつつも、マジカルフォンを取り出す。

「変身！」

2人はゾルダ、マジカロイド44に変身し、同じくミラーワールドに突入した。

「挿入歌：果てなき希望」

「ハアッ！」

「ヤアッ！」

龍騎とファムの前に現れたモンスターは、大量のシアゴーストだつ

た。パワーは大した事もないのだが、数が多く、捌くのに苦戦を強いられていた。

「ウォツと……！ こいつら、何でこんなに……！」

「知らないわよ！ 無駄口叩く前に、さっさとやるわよ！」

「な、何だよ……。今日はやけに冷たいなあ……」

『SWORD VENT』

普段よりも焦っているようにも見せるファムに訝しむ龍騎だったが、彼女の言うように、愚痴を言っている場合ではない。龍騎はドラグセイバーを、ファムはウィングスラツシャーを用いてシアゴースト達を薙ぎ払った。

「きやあー！」

しばらく交戦を続けていると、ファムが足を滑らせて転んでしまい、シアゴースト達がチャンスと思ったのか、一斉に襲いかかってきた。

「危ない！」

これを見た龍騎はファムの前に立ち、シアゴースト達の攻撃をその身に受けまくった。

「い、イダダダダダツ!?？」

「！ 龍騎！」

痛がりながらも必死にファムを守ろうとする龍騎を見て、ファムは彼と付き合っていた頃のことを思い出していた。喧嘩が特別強いわけでもないのに、不良に絡まれた自分を助け、彼自身は傷を付けられて、その時の顔が何よりも面白くて、よく笑って……。

やっぱり、彼は何時まで経っても変わらない。そう思いながら龍騎に駆け寄ろうとしたその時だった。

『SHOOT VENT』

どこからか放たれた砲撃が、シアゴースト達に命中し、龍騎も軽く吹き飛ばされた。2人が目線を一点に向けると、ギガランチャーを構えたゾルダが見えた。その隣にはパートナーのマジカロイド44もいる。

「ちよつと!?？ 俺まで巻き込む事ないだろ!?？」

「せっかく助けてやったのにその言い方がよ。ま、俺はそいつを助けてやるつもりだったから、お前がどうなるうと関係ないんだけどね」
ゾルダがファムに顔を向けてそう呟く。

「関係ないって、あんたなあ……！ けどまあ、ありがとな」

「皆さん、また来マスよ」

マジカロイド44の言葉を受けて、一同は再び迫ってくるシアゴースト達に目を向けた。

「よおし！ 4人で協力してやっつけるぞ！」

「！ 待てよ龍騎！ あたしは……」

「ツシヤア！」

だが龍騎はファムの制止を無視して駆け出した。

「やれやれ。相変わらずのバカだな」

「デスね」

ゾルダとマジカロイドも呆れつつも、マグナバイザーと、マジカルフォンから呼び出したギガキャノンを装着して、シアゴースト達をねじ伏せた。ファムも、仕方なしに交戦を始めた。

戦う仲間が2人も増えた事もあつてか、シアゴースト達の数も段々と減りつつある。

「よっしや！ もらった！」

『FINAL VENT』

龍騎とファムは同時にファイナルベントのカードをベントインし、必殺技の体勢に入った。

「ハッ！ ハアアアアアア……！」

龍騎は腰を低くしてポーズをとってから、飛び上がり、旋回するドラグレッダーの中で一回転して右足を突き出す。ファムはウィングスラッシュヤーを構えると、ブランウィングが巻き起こした突風で吹き飛ばされたシアゴースト達に向かってウィングスラッシュヤーを振り抜いた。

「ダアアアアアアッ！」

「ハッ！ フッ！ ヤアッ！」

ドラゴンライダーキックとミスティースラッシュは、シアゴースト

達を多量に一掃し、残っていた残党勢力も、ゾルダとマジカロイド44が相手にしていた。

「それじゃあ、今日はこいつを使ってみますか」

そう言っただけでゾルダが取り出したのは、マジカロイド44のアバター姿が描かれたパートナーカード。それをマグナバイザーにベントインした。

『FUTURE VENT』

すると、ゾルダの手に近未来的な雰囲気漂わせるガトリングガンが現れた。『フューチャーベント』によって、マジカロイドの魔法と同様に未来の武器を使用できる能力のようだ。

「こいつは良いな」

そう呟いて銃口を向けると、向かってくるシアゴーストに銃弾の雨が降り注ぎ、シアゴースト達はなす術もなく爆散した。敵が全滅した証拠に、マジカルフォンからキャンディー獲得の知らせを告げる音が鳴り響いた。

その後、一同はミラーワールドを後にして、現実世界に戻っていった。ミラーワールドを出た途端、ファムは地面に膝をついて、変身を解いた。

「お、おい、大丈夫かよ……。っつかお前、何か無理してる感じがしてたぞ」

龍騎が心配になって手を差し伸べるが、美華はそれを拒んだ。

「放つといてよ……！ 大体あんた達が来たせいで、キャンディーが全然溜まらなかつたじゃないか……！」

「な、何でそんなムキになってんだよ……！ 俺はただ、お前だけに戦わせるのは危ないって思っただけ……！」

「……またお人好しか。あんたねえ」

「まさかお前がファムだったなんてな」

すると、ゾルダが美華に話しかけてきた。美華が眉をひそめていると、ゾルダはVバックルからカードデッキを取り外して変身を解いた。ゾルダの素顔を見た美華は、驚きと同時に鋭い視線をぶつけた。

「あんたは……！ 北岡 賢治……！」

「えっ!?? 美華、北岡さんの事知ってるのか?」

「お知り合いですか?」

同じく自然な形で変身を解いた正史と真琴も、気になって尋ねてみた。しばらく2人の間で睨み合い(ただし美華による一方的な)が続いたが、先に口を開いたのは、美華の方だった。

「……前に話した事あつただろ? あたしのお姉ちゃんは、浅倉に殺されたつて。目の前にいるこいつは、その時浅倉の弁護を担当してたんだ……!」

「……えっ!?? 北岡さんが、浅倉を……」

「ああ、それなら聞いた事ありますね」

正史が、判明した2人の意外な接点に驚く中、真琴は1人、思い出したかのように呟いていた。あの脱獄犯の浅倉を弁護し、姉を彼に殺された美華にとって因縁のある人物が、これほどにまで密接な関係下にあつたとは……。そんな中で、北岡は肩を竦めながら口を開いた。「ま、さすがにあいつの弁護は骨が折れたよ。強盗、殺人、暴行、その他諸々。罪状が多すぎたから、せいぜい懲役10年つてところが限界だったよ。その時は結構怒つてたなあ、あいつ。それこそ、その勢いで俺を殺しそうだったよ」

「あんたが……! あんたがあいつの弁護なんかしたせいで、刑を軽くさせられて、お姉ちゃんやあたしの気持ちを考えないで……!」

「お、落ち着けて美華……! ってか、北岡さんはどうして美華の事を……」

「浅倉がやらかした事件を調べてるうちに、資料の中に偶々顔写真があつてね。一度見た女の顔は忘れない主義だからさ」

「あんたなあ……」

謎の自慢話に呆れる正史。真琴も正史に同情の意を示している。と、不意に正史は真琴に視線を向けた。

「……っていうか、お前がマジカロイドだったんだな」

「ああ。この姿では初めてですね。安藤 真琴です。まだ未成年で、15歳ですよ。今は先生の下でバイトしてます」

「(大地君達の一個上なんだ……)」

軽く自己紹介を終えたところで、キリが良いと思ったのか、美華が正史に話しかけてきた。

「ああ、もうなんかムシヤクシヤしてきたからさ。正史、あんたこの後暇でしょ？　食事に付き合つてよ」

「へっ？　まあ、良いけど……」

「決まりだね。なら行くよ。美味い店知ってんだ」

そう言つて美華は正史の腕を掴み、引つ張るように歩き出した。

「ちよつ、危ないって……！　じゃあ北岡さん、真琴ちゃん、またね！」「へいへい。仲良しカップル同士、上手くやってけよ。……あ、それから令子さんにもよろしく伝えておいてよ。24時間いつでも連絡待ってるからさ」

「言うもんか！」

正史の怒声が響く中、北岡は不意に美華に声をかけた。

「あ、ちよつと君！」

「……何？」

美華が睨む中、北岡は言葉を詰まらせて、やがて首を横に振つた。

「……あ、いや、何でもない。まあ、気をつけなよ。最近色々物騒だしや」

「余計なお世話よ」

そつぽを向いた美華は正史を連れてその場を立ち去つた。

その後ろ姿をジツと眺めている北岡の表情は優れなかった。

「……先生？　ひよつとしてアレですか？　あの方に罪の意識を感じてるのか」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ……」

北岡は咳き込みながら、口を籠らせた。

「ここって……」

「覚えてるだろ？ あんたと初めてデートした場所」

正史が入り込んだ店内を見渡しながら、当時の思い出が徐々に蘇えらせながら席についた。お好み焼き専門店『てんこ森』に足を踏み入れた2人は、空いた座敷に腰を下ろし、注文をした後美華が口を開いた。

「今日はあたしが奢るよ。心配すんなって。お金はちゃんと持ってきたからさ」

「……」

それを聞いて、正史は不意にカバンの中に入ってある自身の財布に手を置いた。どうやらまだ盗られてはいないようだ。表情には出さなかったが、内心焦っているに違いないと確信した美華は、声に出さずに笑い続けた。

しばらくして具材が運ばれてきたので、2人は早速焼き始める。すると美華が、こんな事を言い始めた。

「そういやあんた。前にここに来て最初に焼き始めた時、青のりの入った缶を思いつきり鉄板にぶちまけた事あったよね。不器用なのは分かってたけど、あそこまでとは思わなかったよ」

「ああ、そうだったな。けど流石にもう今は……」

正史が苦笑いしながら、青のりの入った缶を手にとって、蓋を開けた瞬間、衝撃で手が滑って、まだ火の通っていないお好み焼きの上やその周りの鉄板に、青のりが散乱した。

「……」

気まずい空気が漂う中、2人はなるべく周りに悟られぬように、ハラで青のりをお好み焼きの上に静かに乗せた。再び会話が始まったのは、お好み焼きが出来上がってからの事だった。

「……うん。やっぱあんた、全然変わってないよ。変わってないって言えば、あんたが靴脱いだ時に気づいたんだけど、靴紐が解けてたよ」
「……ゲツ!?」

「あれだけ直す癖つけとけよって言ったのにさ。一緒にいるこっちが恥ずかしくなってたよ、あの時は」

美華が、正史の脱いだ靴に視線を向けると、正史もそれに続く。恥ずかしくなって顔を俯かせる正史に、8等分に切り分けたお好み焼きを正史の前に置いた。

「ほら、食べよ。冷めちゃうぞ」

「あ、ああ」

正史は頷くと、箸でお好み焼きを摘んだ。形がすっかりしており、自分とは正反対の器用さがよく出ている。味も中々に良かった。これならトップスピードと良い勝負が出来るかもな、と正史が思うほどに。

しばらく食事を堪能した後、不意に美華が水の入ったコップを置いて、ポツリと呟いた。

「……あ、あのさ」

「？」

「今日は、ありがとね。その……、助けてくれて。後、酷い言い方してゴメン。あの時のあたし、どうかしてたよ。1人で気を張っちゃって、無茶やらかして……。あんたが来てくれなかったら、キャンデー集めどころじゃなかったかも」

「俺1人が、ってわけじゃないだろ。北岡さんや真琴ちゃんも来てくれたから、助かったんだ。俺だっていつもトップスピード達とキャンデー集めしてる時は、助けられてばかりだしさ。オルタナティブやウィンタープリズンと一緒にいた時も、そうだったんだろ？」

「……そうね。そうだった。シスターナナも含めた4人で、いつも街の平和を守ろうって、正しい魔法少女や仮面ライダーでいようって、

決めてた。最初はそんな事、これっぽっちも考えてなかったのにさ」
どこか自嘲気味に話す美華を見て、正史はずっと気になっていた事を尋ねた。

「なあ、1つ聞いていい？」

「何？ 答えられる範囲でなら」

「美華はさ。どうして『仮面ライダー育成計画』をやりだしたんだ？」

『魔法少女育成計画』じゃなくて」

「ああ、その事ね」

美華は水を一口含んでから、仮面ライダーファムになった経緯を明かした。

「1つは、単純に魔法少女なんかよりは、仮面ライダーになった方が、カッコいいかなあつて思ったんだ。あたしにシスターナナや、それこそあんたの相棒のトップスピードみたいな格好は似合わないだろうし」

「うん。俺もそう思う」

そう呟いた直後、正史は顔面に威力の弱い不意打ちの右ストレートを受けて、呻き声と共に鼻を押さえた。美華はため息をつきながら、話しを続けた。

「まあ、都市伝説程度には、本物になれる可能性があるって聞いてたよ。まさか本当になれるとは思わなかったけどさ。でも、あたしにはあの格好がしっくり来たよ」

「そ、そっか……。あ、でも『1つは』って事は、まだ理由があるのか？」

「もう1つは……。……もしなれた時には、この力で、浅倉を殺そうって決めてた」

「……」

正史の表情が、隣の席で焼きあがったお好み焼きの如く固まる。

「あいつは、お姉ちゃんだけじゃなくて、色んな奴を殺してきた。なのに、誰もあいつを止められない。あんな怪物を倒せるとしたら、それって仮面ライダーや魔法少女みたいに、人並み外れた力じゃなきゃ、もうどうにも出来ない気がしたんだ」

美華の胸の内を聞いた正史は、複雑な気持ちになりながらも、口を開いた。

「お前の気持ち、分からなくもないよ。ほら、最初にお姉さんの事を話してくれた事あったら？ あの時、俺も浅倉の事、許せないって思った。……けど、今の仕事やり始めるうちにさ。浅倉ほどじゃないけど、色んな犯罪者の取材をやってくうちに、段々、考えが変わったっていうか……。浅倉だって、1人の人間だし、そういう意味だとさ……」

「意味だと……？」

「死んでも、殺されても良い奴だなんて、言えなくなっただ」

正史の話を聞いた美華は、どこか納得した様子で小さく頷いた。

「やっぱりね。あんたならそう言うと思った。つてかここであたしの予想を裏切るような言い方してたら、あんたとはとつくに縁をバツサリ切ってただろうし」

「ちよ、そんなザツクリ言うのかよ……!?？」

「相変わらずのバカっぷりは健在、か。でも、あんたらしいよ。正史、あんたがシローのスカウトでライダーに選ばれた理由。ちよつと分かるかも」

「そ、そうなの……？」

正史が首を傾げる様子を、美華は笑っていた。こんなにも笑ったのは、本当に久しぶりだ、と自分に言い聞かせながら。

それから会計を済ませた後、店を出た2人。しばらく歩いたところで、美華は立ち止まり、正史の方を向いて、ある事を話し始めた。

「ね、ねえ正史」

「? 何?」

「あ、あのさ……。もし、あんたが今でも変わってないって自覚出来たらさ。その……。もう一度、あたしと……」

頬を紅く染めて、モジモジし始めた美華を見て、正史は再び首を傾げた。

「な、何だよ急に……。トイレでも行きたいのか? だったら早く……」

「なっ……!?？」

これを聞いた美華は、別の意味で顔を紅くして、足を振り上げると正史の、男の急所とも呼ばれる部分に一撃を与えた。

「つてえ!?？ 何すんだよー！」

「……バカ」

「本当にどうしたんだよ……。つてか俺がトイレ行きたくなくなった！

何か変な事言つてたら謝るけどさ！ ちよつと待ってて！」

そう言つて正史は、少し離れた場所にあるトイレへ直行した。正史の姿が見えなくなつたところで、美華はやれやれといった表情で、近くの壁にもたれかかった。

「(正史とこんな話したのつて、何年ぶりだっけ)」

そう思い始めた美華の顔は、段々と笑みがこぼれていた。

「(最初はいいつの方が良いつて思つてたのに、何か正史以上に恋愛云々に関して不器用過ぎだったからなあ……。まあ正史も正史でからつきしだったけど、嫌な気分にはなれなかつた。……。早く終わんないかなあ、こんな戦い。終わつたら今度こそ正史に……)」

そこまで呟いたその時、不意にある事を思い出した美華。

「(そういや、まだこないだの事聞いてなかつたな。あの時あたしとシスターナナを助けてくれたのつて、本当にあいつだったのか……)」

美華が、正史が戻つてきた時に改めてその事を聞き出そうと思つていたが、どういうわけか、正史は未だに戻つてこない。

「……おっそいなあ。何やつてんのよ」

美華が首を動かしながら待ちくたびれていた、その時だった。不意に美華の首に締め付けられるような感覚に襲われた。

「!?？」

それは、背後から手で握りしめているような気がしたので、慌てて振りほどいて、美華は目を見開いた。

美華の立っていた後ろの壁には鏡が設置されていたのだが、その鏡の中から、左腕を伸ばしている者の姿が。黒い装甲に赤い複眼。それは間違いなく、先日美華達を助けて、ユナエルを殺したライダーだった。その容姿は正史の変身する龍騎の色違いとも言えたが、その人物

から発せられるオーラは、正史とは全く別ものだ。

「……龍騎、じゃない。お前、誰なんだ……!!?」

「……俺は、リュウガだ。仮面ライダーリュウガ」

「リュウガ……」

リュウガと名乗るそのライダーは、右親指を美華から見て左に向かつて振った。ついて来い、と言っているようだ。

美華は鏡から距離を置くと、カードデッキを取り出して、突き出した。

「何のつもりか知らないけど、あたしを殺そうってんなら、返り討ちにしてやる!」

「……」

「変身!」

腰に現れたVバックルにカードデッキを付けて、仮面ライダーフォームに変身したのを確認したリュウガは、指で指した方向へと姿を消した。ファムも後を追うように鏡の中に存在する世界、ミラーワールドへと足を踏み入れた。

57. 悲恋の愛

「ああ、さつきはひでえ目にあつたなあ」

トイレの洗面台で手を洗っていた正史は、水を止めた後、鏡に映る自分をジッと眺めていた。

「(美華は……、何か俺と違って結構変わったよな。前は絶対に奢ろうなんて言わなかったし、どっちかかっていうと性格尖ってたし。ずっと1人で突っ走ってたくせに、オルタナティブやシスターナナ、ウインタープリズンとも仲良くなれるなんて、思いもいなかったし)」

だが今となつては、その内の2人は、もうこの世にいない。奈々もそうだが、きつと美華もまた孤独になりかけているに違いない。そうなれば、誰が彼女に手を差し伸べる必要があるのか、守るべきなのか。その答えは必然だった。

「ツシヤア！俺がそばにいてやらなきゃな！」

これ以上、無駄な犠牲を出すつもりはない。そして彼女に人を殺させない。改めて美華と協力する事を決意した正史は、その旨を伝える為に、颯爽と美華の待っている場所へと戻った。

「……あれ？美華？」

だが、そこに彼女はいない。あつたのは、彼女が持ち歩いていたカバンだけ。

正史はカバンに近づいて周りを見渡すが、あるのは壁に立てかけられた鏡だけ。まさか、モンスターに襲われたのか……？

だが直後にその可能性を否定する。彼女には仮面ライダーの力がある。浅倉を殺す事だけでなく、モンスターの脅威から人々を守る為の力。それがあれば、襲われても問題はない。正史はカバンを手に持つと、辺りをくまなく搜索した。

その頃、ファムに変身した美華は、襲いかかってきたリュウガの後をつけて、ミラーワールド内の、ビルの屋上に来ていた。

「どこだ……。どこにいらんだー！」

ブランバイザーを構えながら周囲を見渡していると、背後に気配を感じ、振り返った。そこにいたのは、龍騎にそっくりな容姿をしているリュウガ。夜という舞台に黒いボディと赤い複眼が、不気味さをより一層引き立たせている。

「……やはり来たか。喧嘩っ早い性格は、相変わらずのようだな」

「な、何の話だよ……。!? 大体あんた、どうして龍騎と同じ姿を……」

「知りたいか？ ……なら、聞き出してみろ。俺を倒す事だな」

「何者か知らないけど、臨むところよ！」

ファムは先制攻撃とばかりにブランバイザーの突きを放った。

「だが、お前には無理だ」

対するリュウガはブランバイザーの剣の部分を片手で鷲掴みにし、空いたもう片方の手で拳を作ってファムの腹に殴りかかった。

「ウアッ……い！」

ファムはよろめき、リュウガが追い打ちとばかりに蹴りを入れると、ファムは屋上から転落した。ファムは慌てる事なく、背中のマントを翼のように開いて減速し、空中で体勢を整えると、足から着地に成功する。その後を追うように、リュウガが垂直落下して、ファムの前に立ちはだかった。足元には落下の衝撃でクレーターが出来ている。

「っ、のお……!」

『SWORD VENT』

ウィングスラッシュャーを召喚したファムは、リュウガに斬りかかるが、依然として余裕があるのか、リュウガはカードをベントインする事なく対抗している。否、余裕があるというよりかは、まるで相手の動きを理解した上で対処しているようにも見える。

「どうして、あたしの攻撃をここまで」

「当然だ。俺はお前の事を知っている。だからどんな攻撃も丸裸だ。俺はお前に負ける事など、絶対はない」

「随分と余裕じゃない。だったら……!」

『BLAST VENT』

ファムはブラストベントを使用し、ブランウィングが巻き起こす突風でリュウガの視界を遮る作戦に出た。……が、

『CURSED VENT』

リュウガが取り出したカードをベントインすると、ブランウィングが紫色のオーラに包まれながらも、翼をはためかせた。が、その威力は見るからに弱く、リュウガは吹き飛ばされる事なくせせら笑った。「まるでそよ風だな」

「それって、レアアイテムの……!」

「全てはお前と、あの男に復讐する為に手に入れた道具だ」

「あたしに……!? あんた一体……」

「まだ気づかないとはな。勘まで鈍ったか?」

リュウガにバカにされたと思ったのか、ファムは苛立った様子で、リュウガに斬りかかった。

「そうやって自分を傷つけるような奴には常に手をかける。あの時と同じだな。それで俺に勝てるだけでも、思っているのか」

リュウガは余裕綽々といった感じで、ファムの腕を掴み、殴りや蹴りを連発する。口から血が流れる感覚を覚えたファムは、転がりながらも新たなカードをベントインする。

『WALL VENT』

すると、リュウガの周りに土壁が形成されて、前方以外が全て封鎖

された。パートナーであるウインタープリズンの魔法が行使されたのだ。

「やああああああっ！」

ファムは土壁に囲まれたリュウガに向かって飛び出した。この戦法は、以前ウインタープリズンがグラムベリーに対して行ったものとそっくりそのままだ。逃げ場がなければ、どれほど強靱な敵でも真正面から一撃を受けるほかない。そう思っていた。

『ADVENT』

だが、彼女は知らない。リュウガの左腕についていたドラグバイザーには、すでに別のカードが装填され、いつでもベントイン出来る状態にあった事を。

ファムがそれに気づいた時には、リュウガの契約モンスター『ドラグブラッガー』が上空からファムに襲いかかり、噛み付いて地面を突き破った。

「グアツ!?？」

ドラグブラッガーはファムに噛み付いたまま、地下にある支柱にファムの頭をぶつけながら旋回した。

「あ、アアアアアアアアアア！」

支柱に叩きつけられ、更にはドラグブラッガーの歯が食い込んでいる体に走る痛みが、容赦なくファムを襲う。

ようやく解放されたのは、ミラーワールドの外、つまり現実世界に出てお好み焼き屋の近くに位置する公園の中心部だった。白かった背中のマントは、血で赤く染まっている。

「(う、嘘、だろ……? こんなところで、あたしは……)」

ファムは死に物狂いで立ち上がるが、リュウガがこちらに向かって歩いて来るのが見えて、ファムは背筋が震え上がった。

「く、くそ……！」

ファムは右手の薬指にレアアイテムの1つ、金の指輪をはめて、バリアを張った。

「そんなもの」

だが、リュウガは素早くファムの右腕を掴み、右足を振り上げて、そ

の腕めがけてかかと落としを決めると、骨の折れる音が響き渡り、ファムは絶叫した。右腕に強い振動が伝わった影響で、指についていた金の指輪が地面に落ち、リュウガはそれを拾った。

「こんなもので、俺をどうにかできるとでも？　だとしたら甘いな」
リュウガは地面に膝をついたファムに対し、足で顔を踏みつける。地面を転がり、心身ボロボロになったファムに対し、リュウガは冷徹に呟く。

「もう、終わりか？　本当ならジワジワと嬲り殺しにしようかと思っただが、そんな体ではもう立てないだろう。一思いに楽にさせてやる」
「……何なんだ」

ファムはボソリと呟く。そして口にする。彼女が最も疑問に思っていた事を。

「何者なんだ、お前は……！　どうしてあたしの事を……！」

それを聞いた途端、リュウガは一旦停止し、すぐさま狂気を含んだ笑い声を発した。

「……アレだけヒントを与えてやったのに、まだ気づかないのか？　なら、俺との思い出も、お前にとっては存在する価値すらなかったという事か」

そう言つてリュウガは懐からあるものを取り出し、ファムに見せる。視界が朦朧としているファムでも、その形はハッキリと見て取れた。

黒くて鋭い目の龍の形を模したペンダント。それを見た途端、ファムは仮面の下で目を見開いた。

「お前、ひよつとして……！」
「やっと気づいたか。だが遅い。もっと早く気づけばよかったものを」

そう言つてリュウガは龍のペンダントを握り潰し、ファムの近くに放った。

『STRIKE VENT』

「消えろ。忌まわしき女」

リュウガの左腕に黒色のドラグクローがつけられ、一旦退いてから

突き出すと、周りを旋回していたドラグブラッガーから黒炎が放たれた。

ファムは、目の前で自分を殺そうとするリュウガの正体に気づき、僅かに反応が遅れる。

そして……。

『正史、これ、どうしたの？』

『ん？ ああ、すぐそのクレインゲームでゲットしたやつ。いや、あいつが手伝ってくれたおかげでコツが掴めてさ。んで、これお前に似合うかなって』

『白鳥……か。ありがとな。大切にするよ！』

『おうー！』

近くで爆発音が聞こえた瞬間、正史は肝を冷やした。何か起きて
いる。正史は爆発音が聞こえた場所へ駆け出した。途中で焦げ臭い
匂いが漂い始めた事で、正史は嫌な予感が頭によぎった。

そして現場であると思わしき公園に足を踏み入れた瞬間、正史は頭
が真っ白になった。

焦げた地面の中心地に、見覚えのあるコートを着た女性が、煙にま
みれながら仰向けに倒れている。美華だった。

「み、美華あー！」

正史はカバンを放り捨てて、美華に駆け寄り、上半身を抱き起こし
た。よく見ると、コートだけでなく、髪の毛や皮膚にも焼かれた痕が
あり、火傷の酷さが伺える。

「おい、しっかりしろよ！ 今、救急車呼ぶからな！」

正史がそう叫びながら、ポケットからスマホを取り出そうとする。
が、その手を掴む者がいた。それは弱々しくも目を開いた美華だっ
た。

「正、史……」

「美華！ お前どうして……！」

「……ご、めん。あたし、もう、……ダメ、かも」

「んな事言うな！ 俺が守るって決めたんだ！ 俺達は絶対に生き残

るって！ そんな簡単に……………」

正史が切羽詰まった口調でそう言ったのを聞いて、美華は笑みを浮かべる。

「……………は。やっぱ、変わん、ない、ね。……………でも、そんな、正史に、惚れた、んだよ、な」

「美華……………！ 死ぬなよ、美華！」

「……………青のり、ついてる」

美華は震える手で、正史の歯についた青のりを指さす。それから、呼吸を荒げながら目線を下に向けて、靴紐に目を向けた。

「……………また、靴紐、解けてる、じゃん」

「んな事今はどうだっていいだろう！」

言いながら、正史の目に涙が溜まる。それを見て、美華の瞳も次第に潤い始める。

「……………やっぱ、あたし、ライダーには、向いて、なかったの、かな……………。こんな、惨めな、人生、しか、送れ、なくて……………。自分勝手、で、周りの、事とか、全然、気にしてやれ、なくて。……………嫌い、だったよね、こんな、あたしの、事、とか」

「んなわけないだろ！ 俺だって、ちゃんとお前の気持ち、分かってやれなくて……………！ お前がライダーだったから、香川さんも、雫ちゃんも、奈々ちゃんも、幸せに、なれたんだ……………！」

「……………そう、なの、かな」

本当は、もつと伝えたい事があった。リュウガの正体。そして次に狙われるのは、正史である事も。

だが、彼女の中で、優先すべき事があった。それは、もう2度と伝えられないであろう、自分の心中。

「正史……………。靴紐、ぐらい、は……………。ちゃんと、結べる、ように、なつて、ほしい、けど、さ……………」

「……………おい、もう喋るな！ これ以上は、お前が……………！」

「……………それ以外、は、変わって、ほしく、ない、な。……………後、は、そう、だ、な……………」

美華は最後の力を振り絞るように、手のひらに握ってあった白鳥の

ペンダントを、正史の手に握らせた。そして呟く。彼女が望む、最後の願い。

「……幸せ、に、な……れ、よ……」

幸せになれ。

その一言が、口から発せられたのを最後に、白鳥は、静かに翼をたたんだ。

「……美華？」

正史が、目の閉じた美華の体を揺する。

「……嘘、だろ？　なあ、目え覚ませよ美華……！　美華あ……！」

どれだけ彼女の名前を呼んでも、羽ばたく素振りを見せない。

「美華アアアアアアアア！」

ありったけの一吠えすら、ぐったりとした彼女の意識に、届く事はない。

「……あ」

嘘寝であってほしいと、刹那に願いたい。

「アア……」

また一緒に同じ刻を過ごせたら、変わったかもしれないのに。

「……ウア」

その願いは、『大切な人を守れなかった絶望』となって、お人好しのバカに、降り注ぐ。

「ウ、
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！」

ファヴ・『ええ〜。先日の、ヴェス・ウィンタープリズン並びにユナ
エルの脱落に続いて、また一つ、悲しいお知らせぽん』

シロー：『つい先ほど、ファムの死亡が確認された』
ファヴ・『ファヴもシローも、1週間でこんなにたくさんの魔法少女
や仮面ライダーが死んじやうなんて思ってなかったぽん。とっても
悲しいし、辛いぽん』

シロー・『なお、今回は特別措置として、2週間ほど、キャンディー
の総数による脱落者の発表を先送りにする』

ファヴ・『みんな、この長い期間を有意義に使って、キャンディー集
めを頑張るぽん。それでは、シロー・ぽん！』

羽二重 奈々は当初、亜終 雫という女性に対して、何ら好印象を持たなかった。大学に入ってからすぐに彼女の噂を、一方的に聞き、1年の内はなるべく出会わないように努力した。所詮は才能の塊だ。自分とは住む世界が違うのだから、と自分に言い聞かせて。

2年の春、香川のゼミで初めてお目にかかった時も、お付き合いは極力避けようとも考えていた。別に周りから終始『プリンス』と称されている彼女に嫉妬しているわけではない。奈々にとって、プリンスとはフィクションの中で優しく自分を抱きしめてくれる存在だから、単純に興味がなかったのだ。

一方で同じゼミに居座る影響からか、一度雫と目を合わせて以降、時折雫からの視線が奈々に飛んでくる事が多くなった。この時から脳裏に嫌な予感が掠める訳だが、こういう予感、嫌なものであるほどの中するものだ、と、奈々は思い知らされる。

そしてその予感、勘付いてから数日後に、現実のものとなった。唯一自分しか女生徒のいなかったスキーサークルに、突如として雫が入部してきたのだ。入部希望の書類を見せるために部室にやって来て、雫が同じゼミ生である奈々の顔を見て「おやつ？」という表情を浮かべた時には、奈々の顔から血の気がサーッと引いて、足元が崩れる

ような感覚を覚えた。それまでサークル内で女王的位置にいた奈々は、雫の襲来により、玉座から転落した。

奈々は陰口を叩くのを嫌い、面と向かって罵倒する事も好まなかった性格だった。つまり、心の中でどれだけ汚いことを考えていようと、決して口には出さない。それは、フィクションの王子様に愛される権利を喪失してしまうと、考えているからだ。奇妙な信念だ。

その一方で、雫は奈々に優しくしていた。席を譲ってくれたり、ダイエツトしている奈々に対し、お菓子や飲み会で出された揚げ物を差し出した。が、奈々にとっては迷惑行為としか受け入れられなかった。何故女王の座に君臨しているくせに、自分が我慢しているものを与え、無理を押し付けようとするのか。試しに奈々は、帰りの電車内で、普段は断っていた雫の付き添いをあえて許可して、2人以外誰もいない車内で問い詰めた。もちろん内心憤りを露わにしつつ、優しい口調で。そして彼女は言った。奈々を元気にさせたくて、色々と食べ物を与えていた、と。奈々は余計なお世話だ、とは口にせず、しかし勢いに任せて、好きな人がいるのでは、と尋ねた。そこで雫は観念したかのように、奈々に興味を抱いていた事を白状する。

どうして目があっただけでここまで苛められなければならないのか。帰り際に映画のチケットを半ば強制的に渡された、その時の奈々はそう思ってしまうほどに、雫とどう離れようか、悩みに悩んだ。当時、同じゼミの女生徒で、不思議と仲の良くなった霧島 美華にも相談しようかと考えたが、ろくな答えが返ってくるとは思えなかった。

神様、助けてください。そんな風に祈る日々が続きながら、今宵も最近インストールした『魔法少女育成計画』をプレイする。すると、それから数日後に神ならぬ者から、救いの手が差し伸べられる事になる。

『という訳で、あなたには魔法少女として活動してもらう事になったぽん。教育係については、同じ魔法少女か、もしくはシローがスカウトする仮面ライダーに担当してもらおう事になるけど、いかんせんまだ人数が……。って、ちよつとちよつと、聞いているぽん?』

「もちろん聞いてますよ、ファヴ。ウフフ」

声色も、肌のツヤも、髪も、何もかもが違う。修道服姿の魔法少女『シスターナナ』になれた奈々は、ダイエツトを通じて目指していた美貌を手に入れたのだ。

そして早速奈々はこの力を使って、雫との因縁に終止符を打とうと、計画を実行した。シスターナナに変身後、修道服姿を隠す為にコートを羽織ってから、雫が指定した映画館に足を運んだ。その際、雫には「奈々は急用が入ってこれなくなったので、代わりに友人である私が来た」と嘘をつき、雫を圧倒した。これで諦めてくれればそれで勝ちだったのだが、雫はそのままシスターナナを映画館に引き連れた。

上映中、シスターナナは終始青ざめていた。彼女の不得意なゾンビ映画だった為、内容が全く入ってこなかった。それでもシスターナナは雫を観察していた。相変わらずの無表情だった。それから自販機で買った飲み物を口にしてしていると、今度は雫から質問攻めにあった。特に、「あなたと奈々はどんな関係だ」という質問に対しては、腰を浮かすほどだった。シスターナナは友達だ、と言い張ったが、雫は、そうとは思えないと語っていた。もしや正体がばれたのでは、と、ファヴの説明にあった、資格の剥奪に触れる事になるのではと、内心ビクビクしていたが、話を進めていくうちに、そうではないと察した。そればかりか、雫は奈々に渡し、正式に交際を申し込む予定だったと言って、可愛らしいデザインの指輪を見せた。その時のシスターナナは、思わず強く握りしめた影響で缶の中身をぶちまけてしまった。雫は、「例え君が何者であつても負けるつもりはない。女同士という立場など、愛の前では些細な問題だ」と、言って、その日はそのまま立ち去った。シスターナナはただ、「ああ」と深く息を吐いて椅子の上に崩れ落ちる事しか出来なかった。一応ケリはついた、とシスターナナ改め奈々は、自分を納得させた。

ところがそれ以降、どういうわけか今度は奈々自身が雫に対して興味を持ち始める事となった。ゼミで一緒にいる機会が、あのデート(?)以降増えた影響からか、雫から目が離せなくなってしまったのだ。もしか、これが恋というものなのか。そう思うと、ますます自分

の在り方が分からなくなってしまい、どうすれば良いのか悩んでいた時、ゼミの先生だった香川から声をかけられた。彼は奈々が何かに悩んでいる事に気付いたらしく、個別で相談にのってやった。あまり乗り気になれない奈々だったが、魔法少女になれた影響からか、思い切って前進しようとして、悩みを吐露した。その際、香川の心温まるアドバイスやカウンセリングを受けた結果、奈々は想いを雫に伝える事を決意する。当然雫も喜んでそれを受け入れ、いつしか学内でも噂になるほどのカップルとして、新たな気持ちでキャンパスライフを送り始めた。美華も陰ながら応援すると言い、さらに2人の仲は深まった。

そしてしばらくして、教育係となったオルタナティブの正体が香川と判明し、途中から加わった新メンバーのファミもまた、親友の美華だと分かり、上機嫌になった奈々は、今度は雫を『理想の王子様』として魔法少女にしようとして企てた。が、そう簡単になれるはずもないだろうと考え、雫に『魔法少女育成計画』を勧める傍ら、最近魔法少女になったマジカロイド44の協力を得て、遂に雫は魔法少女『ヴェス・ウインタープリズン』となり、シスターナナは大いに喜んだ。

ちなみに後で分かった事だが、あの日雫は、奈々と目の前にいる友人と称する女性との間に特別な関係があるのではと思いついて、それを断ち切って自分が奈々を守る立場になり変わろうとして、あのようなキツい言い方をしていたのだという。つまりは思い違いだった。

その後も魔法少女や仮面ライダーの後輩は誕生し続け、羽二重奈々は、愛すべき女性やゼミの先生、最高の友人と共に、毎日が飽きる事のない生活を送っていた。

……だがそれも、今は昔の話。奈々の周りには、楽しかった思い出も、そばにいてくれる人もいない。

「……」

この数日間で、奈々と親しく接してくれた者は皆、帰らぬ人となった。

香川 俊行は仮面ライダーベルデが率いるチームによって殺され、その仇を討とうとした亜終 雫もまた、彼らに返り討ちにされ、命を落とした。そしてつい先ほど、霧島 美華の脱落、即ち死亡が発表された。

間違っていたのか、自分の理想など、世間には一切通用しないのか。何度も同じ疑問が頭をよぎり、その度に、涙を流す。ここまでは酒やおつまみでどうにか理性を堪えていた奈々だったが、唯一の心の拠り所だった美華が消えた今、奈々は決断した。

優しく、ヒロインとして王子様を庇って死ぬような魔法少女にすらなれなかった自分は、ここでお終いだ。後に残る者達にどんな地獄が待ち受けているかなど、もうどうでもよかった。戦って死ぬよりは、自分の手にかかった方がまだマシだ。そう思った奈々の行動は素早いものだった。雫の遺品であるマフラート、近くに置かれていた椅子を持って、カーテンレールの下に椅子を置くと、その上に立ってマフラートをカーテンレールに結ぶ。輪も作れば、後は首を輪に通し、足で椅子を蹴り倒せば、それで完了。

「最後まで他の者と戦う事を拒絶するか」

……が、それが叶う寸前、背後から聞こえてきた声が奈々の動きを止めた。一旦首を輪に通すのを止めて恐る恐る振り返った瞬間、奈々

は驚きのあまり、椅子から転げ落ちた。そこにいたのは、黄金の不死鳥を彷彿とさせる、腕組みをした仮面ライダー『オーディン』。以前、奈々の考えを拒絶して襲いかかってきたクラムベリーのパートナー。そして聞いた話では、ラ・ピュセルに重傷を負わせた張本人。

「あ、あなたは……」

「折角ヴェス・ウィンタープリズンの死体をここまで運び、お前の愚かな思考を否定する事で戦いを強要させようと思ったが、とんだ期待外れだな」

「！ まさか、あなたが雫を……！」

「もつとも、私もクラムベリーも、ましてやファヴもシローも、お前など初めから生き残る要素がないと判断していたからな。お前はただ、この舞台を引き立たせる、いわば小道具の役割でしかなかった」

「……何を、何を言っているのですか!?？」

「……消えゆくお前に語ったところで徒労になるだろうが、特別に教えてやろう。……我々が望む、この試験の目的を」

試験。魔法少女になって初めて聞くその単語を聞いて、キョトンとなる奈々だったが、オーディンの口から語られる、『魔法少女育成計画』並びに『仮面ライダー育成計画』がソーシャルゲームとして配信され、魔法少女や仮面ライダーがN市で32人も誕生した、その目的を聞かされると、奈々はサークル室で雫と初めて会った時とは違った意味で、足元が崩れ落ちる感覚を覚えた。

「そ、そんな……!?？ そんな悍ましい事を、あなた方は……！」

「だから言ったのだ。シスターナナ、お前に生き残る要素など、初めから存在すらしていなかったと」

顔面が蒼白になる奈々を見て、オーディンは手元に錫杖型の召喚器『ゴルトバイザー』を出現させて、カードデッキから1枚のカードを取り出した。

「お前がここで死ぬならそれも良し。……だが、脱落を望むのであれば、この試験に相応しい最後を迎えてもらう。これは、私からのせめてもの手向けだ」

『FINAL VENT』

先端の鳥状の飾りの下の部分をスライドさせて、そこにカードを差し込み、装填する。

すると、窓ガラスからゴルトフェニックスが現れ、オーデインの背後に立ち、オーデイン自身は浮かび上がる。

何が起こるといふのか。奈々が呆然としていると、オーデインの背後から後光のような、熱を持った光が奈々に向かって降り注ぎ、次の瞬間、奈々を含めた、部屋全体が炎に包まれた。

奈々は全身にほとばしる炎の熱から生じる痛みを浴びながら、悲鳴と共に倒れこんだ。再び顔を見上げた時には、オーデインの姿はなかった。

服が、髪が、それまで大切にしてきた思い出の品が、全て燃える。奈々は肌を焼きながらも、必死に這いつくばる。伸ばした手が掴んだのは、先ほどカーテンレールに結ばれていた、雫のマフラー。火事によってカーテンレールが落ちた為、掴む事ができたのだ。

不意に掴んだマフラーの前に、陽炎の如く、愛すべきプリンス、ヴェス・ウインタープリズンの姿があった。炎に包まれてもなお美しいその姿に、奈々は自分に死が訪れているとも知らずに見惚れた。やがてウインタープリズンの姿は、雫になり、幻影となっている彼女は、優しく奈々の手に触れ、引き寄せるように近づいて、奈々を抱きしめた。

奈々は、笑みと共に、涙が溢れた。これからは、ずっと一緒ですよ、と呟いて満足したのか、奈々は炎に包まれながら、静かに横たわった。

『さて、ここで臨時ニュースをお伝えします。先ほど、〇〇地区のマンションの一室から火が出ていると、マンションの管理人から通報があり、警察と消防が合わせて15台駆けつける大惨事になりました。火はおよそ1時間半後に消し止められましたが、出火元とされる一室は全焼し、焼け跡から全身が焼けただれた、1人の遺体が発見されました。警察の調べによりますと、出火元のマンションに住んでいた、羽二重 奈々さん21歳と連絡が取れない事から、この遺体は、羽二重 奈々さんのものだとは断定しました。また、同マンションの屋上に、両手が切断されている亜柊 雫さん21歳の遺体が、屋上の片隅に置かれており、警察は出火原因を調べると共に、2人が何らかの事件に巻き込まれた可能性があるとして、捜査を進める方針です』

《中間報告 その7》

【ファム（霧島 美華）、シスターナナ（羽二重 奈々）、死亡】

【残り、魔法少女11名、仮面ライダー12名、計23名】

58. 閑話休題

ファヴ：『うくん。みんな、チャットへの参加率が減ってきてる気がするぽん。ファヴもシローも寂しいぽん』

シロー：『強制ではないとはいえ、重要な情報提供をする場合があるから、なるべくなら参加して欲しいのが我々の本音だ』

ファヴ：『まあ、いない人の事を気にしても仕方ないとは思うけど、やっぱりみんなには積極的にキャンディー集めも頑張っしてほしいから、ここでファヴとシローからおくつても良いことを発表するぽん！ それは、新しいレアアイテムの追加ぽん！』

シロー：『今回のレアアイテムは、これまでとはわけが違うものだ。それ故に、簡単に皆の手に渡るようではアンフェアだと我々は考えている』

ファヴ：『というわけで、今回そのレアアイテムを手に入れられる条件として、ペアで残っていて、且つこれまでの通算成績トップ4組だけが来週から受け取れるようにするぽん！ 欲しい方はこの短期間でもっと頑張るぽん。ただし、無理をして体を壊さないようにしてほしいぽん。このアイテムを手に入れば、それはもう凄くパワーアップ出来るし、モンスター退治もうんと楽になるぽん！ どんなアイテムかは、その時までのお楽しみぽん。それじゃあ、また来週！』

「おはようございます」

「……おお、令子。おはよう」

「おはようございませ……」

普段通りに出勤してきた令子にとって、特に何の変哲もない朝。ドアを開けると、いつものようにパソコンと向き合っている島田と、椅子に座って新聞を読んでいる大久保が見えたが、どうも大久保の様子がおかしい。そればかりか、普段とは全然違う社内である事に気付いた令子は、大久保に尋ねた。

「……編集長、城戸君は？」

「……」

大久保は返事をする代わりに、持っていた新聞のとある一面を、令子に見せた。令子が手にとって記事に目をやると、そこには『N市内の某公園にて、20代の女性の変死体発見』という見出しが。

「これって……？」

「そこに、被害者の名前で『霧島 美華』ってあるだろ」

「ええ、確かに」

「……城戸の、元カノだ」

「……」

令子は思わず目を見開き、正史の仕事場のデスクに目をやった。物は散乱しているが、本人はそこにはいない。大久保は令子に背を向けた状態で、項垂れた様子のまま正史と美華の関係について語り始める。

「大学で俺と城戸が一緒だった頃、入部したばっかのあいつを飲み会に誘って、同じ大学だった美華をナンパ気分で呼んで、俺が紹介した事があったな。それで飲んだり食ったりしてるうちに、思った以上にあいつら意気投合してな。次第に付き合い始めたんだ」

「意外です。城戸君に彼女がいたなんて……」

「ま、結局金銭云々が原因で別れてからは特に連絡をとってなかったはずだが、今回の事を知って、あいつ相当堪えてたな」

「そのせいで彼、今日からしばらく落ち着きが戻るまで来ないみたいなんです。寂しい……」

島田がへの字に口を曲げて呟き、令子は島田の言った事が気になった。

「城戸君、来ないんですか？」

「あんな状態でここにおられても、邪魔で仕方ないだろ。ま、ここんところ張り詰めてる感じがしてたし、今は休ませた方が良さだろうよ」

口は悪いように見えるが、その表情からは、本気で後輩の正史を心配しているのは間違いないかった。

「ったく、ここんところ、俺達の周りじゃこんな事ばつくだよな。こないだは香川 俊行の事故死に、今回は元カノの変死。どうなってんだろうな、この街は」

「その事で編集長、ちよつとお話が」
「？」

令子がカバンから、分厚いファイルを取り出すと、ページを開いて大久保に見せるように手渡した。そのページには、何人かの名前や履歴のリストが掲載されていた。

「三条 合歓に木王 早苗、東野 光希、須藤 充、……香川 俊行まで……。何だこれ？」

「ここに載っているのは、約1ヶ月前から、市内で亡くなった方々の中から不審な死を遂げている人物を、ピックアップしてみたものです。今週になって、新たに天里 優奈、そして昨日火事で亡くなった羽二重 奈々に、そのマンションの屋上で発見された亜柊 雫、編集長が言っていた霧島 美華が同じく謎の死を遂げているとカウントされますから、これで9人になります」

「どうやら行方不明事件を追う傍ら、この9人の相次ぐ不審死に、ジャーナリストとして引っかかる場所があるらしく、独自で調べていたようだ。」

「以前私と城戸君が調査で訪れた、三条 合歓に関しては、幼少期に

患った持病の再発が死因とされてますが、ご家族と再度接触して話を伺って聴いてみても、やっぱり腑に落ちないところがあるそうなんです。そしてその事件を担当していた刑事の須藤 充も、私がアンケートクシヨップで彼に襲われた事件の後、頭と左腕を潰された状態で発見されています」

「ああ。確か、普通じゃありえないような潰され方をして殺されたってやつか。アレは聞いてても結構キツかったな」

「他にも、商店街では東野 光希が心臓麻痺によつてその場に倒れて死亡している事にもなっています。彼に持病がない事は警察の調べでも分かっています。そして須藤 充の遺体発見から数日後に、山奥で木王 早苗の腐敗した遺体が見つかっています。腹部に数カ所刺された痕がありました。鋭利な刃物としか断定できないほどに、凶器が未だに分かっています。そして2日後、香川 俊行が北区の大橋の真下で、首の骨が折れた状態で発見されました」

「けど、それは事故死って事になってただろ？」

大久保がそう言うが、令子は首を横に振って口を開いた。

「それにしても変なんです。あの辺りで足を滑らせた事になっていても、それ以前から雨が降った形跡もなく、足を滑らせる要因なんて、見つからなかつたんです」

「何……？」

「そして一昨日は天里 優奈が、頭部の複雑骨折による脳内出血で死亡。昨日は羽二重 奈々が焼死。そのマンションの屋上に置かれていた亜柎 雫は、両手を切断された状態だったらしく、死後数日は経っているそうです」

「ううん……。こうして見ると、この短期間で若者を中心に謎の不審死ってのは、確かに引つかかるな」

「おまけに、この香川 俊行、亜柎 雫、羽二重 奈々、そして霧島 美華は、同じ大学のゼミという共通点があります」

令子は取り出した色ペンで、4人の名を丸で囲った。

「けど、それ以外は特に特徴的なのは……。強いて言うなら、先ほど編集長が言っていた、若者ばかりってぐらいでしょうね」

「他に分かつてる事とかはあるか？」

「いいえ、これ以上はまだ調査の途中経過ですから……。ただ、最初にリストに挙がった三条 合歓の事件の少し前から、頻繁に魔法少女や仮面ライダーと思しき人物の目撃情報が多数寄せられていた、ぐらいの事はありました」

「ってことはアレか？ この一連の事件、その魔法少女や仮面ライダーが関わってるって事か？」

「さすがにそれは無いかと……」

令子は苦笑混じりに呟いた。が、彼女自身、心の片隅で引つかかるところはあるらしく、何となくではあったが、自身のスマホに目を向ける。

「一応、こちらの方も調査は続けていきます。一昨日、木王 早苗が生前勤めていた、高見沢グループが率いる会社に話を伺おうと思ったのですが、社長の高見沢 大介から直接断られてしまって……。とりあえずは、香川のいた大学のゼミ生から詳しく聞き出そうと思っていきます」

「そっか」

「じゃあ編集長、早速行ってきます」

「おう。無理はすんなよ。城戸がいない今、お前が倒れたらウチの会社はやってけないからな」

「大丈夫です。体の健康は常に意識してますから」

そう言って、令子は早速香川達に通っていた大学に足を運んだ。

「ま、令子がそう言うなら大丈夫か」

「……あの。まだ私がいるんですけど」

1人、置いてけぼりにされている島田が涙目で自分を指差しながら大久保に存在感をアピールするものの、大久保は上の空だった。そして窓の外に目を向けて、深刻そうに呟く。

「……早く戻ってこいよ、正史。またその間抜け面を、俺達の前に見せてくれよ」

夕暮れ時の、車の交通量が多くなる時間帯。大通りから少し外れた道を、2人の少女が並んで歩いていった。小雪の友人、芳子とスマイレだ。道端を歩きながらお喋りしていた2人だったが、その近くを、葬式帰りであろう霊柩車が通り過ぎたところで、それまでの話題をガラリと変えた。

「……あ、またあの車だ。ここんところしよつちゅう見かけるよね」

「そーそー。昨日また出たんでしょ、死んだ人」

「あー、マンションが一部屋焼けて、焼死体が発見されたってやつ？」

「しかも原因が分かって無いって事でミステリアスな感じの」

2人の間で、昨晚起きた事件について論議した後、スマイレがこんな事を口にした。

「ってかき。小雪、今日も来なかったね。どうしたのかなあ」

「もう3日連続だよね。こないだの忌引きで休んだ時以外、滅多に休む事なんて無かったのにさ……」

「忌引き……。ああ、小雪が小学校の時の先生だった人のやつでしょ？ 名前忘れちゃったけど、この街じゃ有名な人だったらしいよ」

「私らは全然関わりないけど、やっぱ昔の担任が死んじゃうのは、ショックだよね」

「ショックっていえばさ。忌引きで休む前も、めつちや落ち込んでた時あったじゃん。あれ何だったんだろ？」

「あれ？ スミ知らないの？ その前の晩に、幼馴染みが轢き逃げ事故で大怪我負ったらしいよ」

「えっ!?？ まさかあの、いわくつきの『中学生轢き逃げ事件』に、小雪とその幼馴染みが関わってたの!?？」

「いわく？ 何それ？」

スミレの言い方が気になった芳子。スミレはネットで拾った情報を彼女に教えた。

「だってその事件で使われたトラックで、その被害者が足を思いっきりシャッターと挟まれて重傷だったって話なんだけど、そのトラックの運転席には誰も乗ってた痕跡が無いって噂だよ！」

「うわっ、何それ。都市伝説っぽいじゃん」

いよいよ気味が悪くなり始めた芳子がわざとらしくブルブル震えていると、スミレも興奮したように喋りまくった。

「でしょ！ 何か例の魔法少女、仮面ライダーの都市伝説と関係があると私は推理するね……！」

「……いや、それは無いでしょ」

さすがに都市伝説マニアの少女の度を越えた発言に、相方は冷ややかなツツコミを入れた。

「大体魔法少女や仮面ライダーの目撃まとめサイトだってさ。あれ絶対CGとかやらせだって」

「いやだってさあ。小雪も信じてたし、何か感化されて調べてるうちに面白くなっちゃってさー」

まあ、とりあえずこれ見て、と言ってスミレが見せたのは、スマホの画面。そこには、この数日間で目撃された魔法少女や仮面ライダーに関するまとめサイトが。

「以前からこの街では多くの魔法少女や仮面ライダーが目撃された。特徴から振り分けても、いま現在判明している限りでは、ざっと30人前後ってとこね」

「30人か……。めっちゃ多いね」

「それでもって最近魔法少女だと、とんがりハットの魔女に忍者、双子の天使と犬っぽい子、そして一番目撃者が多い白いお花の子。仮面

ライダーだと、ドラゴンやコウモリ、エイ、サメ、サイ、ホワイトタイガー。後は狐ぐらいしか目撃談が上がってこなくなってる……。あ、でも最近だと山奥でしか見られなかった、バラの魔法少女や金色の鳥みたいな仮面ライダーが街で目撃されるようになったっけ」

何かが動いている。そう熱く語るスミレだが、芳子にはまださっぱり分かっていないようだ。

「……で、それが例の事故とどう繋がるのよ？」

「あの事故以外にもね。不審な死を遂げた若い男女が、何人もいるらしいの」

「……あ。だから最近霊柩車を見かけるようになったのかな？」

「実は私の近所に住んでたお姉さんが、山の中で凶器もわかってないような刃物でお腹を何箇所か刺されて殺されたのが見つかったらしいよ。仕切りたがり屋でうるさい時もあったけど、良い人だったんだよ」

「そうなんだ……。で、どういうオチなの？」

そう言われて、スミレは本題に入った。

「よく考えてよ。魔法少女とか仮面ライダーって、多くても5人グループで何とかやってけるレベルじゃん。ニチアサの特撮とか、ヒロインものとか……。30人もいたら多すぎでしょ。よっちゃんだって、さつきそう言ってたでしょ？」

「うん。まあそうだよな」

そして、スミレは結論を強く言い放つ。

「ズバリ！ この街では今現在、魔法少女や仮面ライダー同士が、その資格の椅子を命がけで奪い合っているの！」

「……！」

芳子は思わず立ち止まり、何気なく足元に目をやる。すぐそばでは、干からびたカエルの死骸に、無数のアリが巢へ運ぼうと群がっている。気味が悪くなり、慌てて視線を逸らした芳子は引きつった笑みを浮かべる。

「ま、まっさかあ……。そんなメルヘンチックな話、現実的にあり得る？」

「そりやあ不思議な力を手に入れて、仲間と力を合わせて一緒に巨大な悪へ立ち向かう、なんて王道よりはリアリティがあるっていうか」
「考えすぎじゃない？ そんな事って……」

一旦立ち止まった2人だが、すぐさま歩き始める。人通りが多くなる道に差し掛かった所で、再び魔法少女関連の話が浮き出た。

「……そういえば、小雪は何で魔法少女になりたいんだらうね？」

よっちゃんは、もしなれるよって言われたらどーする？」

「えー？ やだよ私は。普通で良いよ。スミは？」

「私も同感。自分の事で精一杯だし、小雪みたいに人助けとかガラじゃないもん」

「うわっ。案外スミも現実的だったんだ」

「案外って……」

友人のあんまりな評価に、若干へこむスミレ。

「まあ、魔法とか使えたら、それはそれで面白いかもしれないけどね。でも、いつかは現実見なきゃならない時も来るし……。夢なんていつかは覚めるもんだし」

「そうそう。魔法とかなくても、頑張ろうって思えば大抵何でも出来るって、先生言ってたしね」

「……全ては自分の努力次第ってやつね。小雪だったら何て言うかな？ 後、だいちゃんは……まあ、私達と同じ事言いそうかな」

「うんうん。でもまあ、明日は来てくれると思うよ、小雪。そんな時に聞こっか」

2人は仲睦まじく、家路を急いだ。

「……人がどんな環境下に置かれていても、必ず持っているもの。それが、『欲望』。その欲望が背負いきれないほどに大きくなった人物こそが、力に選ばれ、戦う。それが仮面ライダー、それが魔法少女」

……2人が通り過ぎた店のショーウィンドウの片隅から、黒龍を思わせる仮面の人物が、2人に目を向けているとも知らずに。

「……神頼みすることではか、魔法という異能の力を望む事ではか、地獄から這い上がれない人間もいる。それを知らないお前達は、それだけ幸せ者なんだろうな……」

黒龍は、昨晚戦利品として手に入れた金色の指輪を握りながら、背を向けた。その姿が完全に、空気に溶け込むように見えなくなるまで、誰一人として、そのショーウィンドウに目を向けて気づく者はいなかった……。

59. 龍騎、決断する

時刻は17時を少し回った頃。ミラーワールドでは、1人の仮面ライダーがモンスターと戦っていた。

「ハアッ！」

『ギシャアッ！』

コウモリを彷彿とさせるライダー『ナイト』である。仕事を終えて帰宅途中にモンスターの出現がマジカルフォンから通達され、現場に向かうと、大量のメガゼール、マガゼールがミラーワールド内で暴れまわっていたのだ。このまま野放しにしておけば、外に出て悪さをするに違いない。ナイトはダークバイザーを片手に、モンスター達に立ち向かった。

『NASTY VENT』

ダークウイングから放たれた超音波でモンスター達の動きを鈍らせた後、連続で斬りつけ、数を減らしていった。

「さすがに1人では、骨が折れるな……」

ナイトが心の中でそうボヤくの中には、訳がある。

つい先日、新たな脱落者としてヴェス・ウィンタープリズン、シスターナナ、ファム、ユナエルの4名の名が挙げられた。あまりにも多すぎる脱落という事もあるが、それ以上に前者の3人の死は、少なからずナイト達に衝撃を与えた。

スノーホワイトはシスターナナ、ファムの名が発表されてから、解散するまでずっと泣き続けて、九尾に顔を埋めていた。その九尾は何も言わずにスノーホワイトのそばに居続けた。トップスピードも、スノーホワイトほどではないが、時折すすり泣きが聞こえてきた。ライアは、占った結果が的中してしまい、「また、運命を変えられなかった……」とボヤいて以降、口数は減った。リップルは、これといったリアクションを見せなかったが、普段よりも表情は暗かった。

ナイト自身も、戦うべき相手が減った事は良かったが、部分的な協力関係にあった者達が全滅してしまった事は無念に思っていた。

だが、それで落ち込んではいられない。まだ戦いは続いている。生

き残るためにも、こういった戦いの場で力をつけておかななくては。

『FINAL VENT』

「ウオオオオオオッ！ ハアッ！」

ナイトは飛び上がり、ダークウイングと合体して、飛翔斬で密集して固まっているメガゼール、マガゼール達を一掃した。

だが、降り立つと同時に残っていた勢力が一斉にナイトに襲いかかり、ナイトは再び構える。

『STRIKE VENT』

が、その直後、どこからか電子音が聞こえてきたかと思えば、横手から火炎弾がメガゼール、マガゼール達に着弾し、爆散した。ナイトが

火炎弾の向かってきた方角に目をやると、ある意味で予想通りの人物が、右腕を突き出していた。

赤い龍の仮面ライダー『龍騎』だ。

「龍騎、お前……」

ナイトは驚いたように呟く。ファミが死亡し、その日から今日まで姿を見せてこなかった男が、唐突に姿を見せたのだ。ナイトは近寄ろうとして、不意に立ち止まった。どこか、様子がおかしい。今まで見てきた龍騎とは、別のオーラを感じさせる。

やがて、龍騎の方から出た言葉は……。

「ナイト、俺と、戦ってくれ」

「……どっまで本気だ」

どういう風の吹き回しだ、といった様子を見せるナイト。それもそのはず。今まで同じライダーや魔法少女同士の戦いを拒んできた者が、突然仲間として行動を共にしていたナイトと戦おうとするのだから。

龍騎も、ナイトがそう反応してくる事は分かっていたらしく、さらにこう言った。

「俺、あれからずっと無い頭で考えて……。……。それで、答えを、出したんだ。戦うって」

「……どっまで本気だ」

「迷っていても、誰も救えないのなら、戦った方が良いに決まってる。戦いの辛さとか、重さとか、そんなの全部自分だけで背負い込めば良かったんだ。それが出来なかったから、あの時……」

龍騎の手は震えていた。今なお後悔しているのだろう。

守ると決めた矢先に、自分の腕の中で、大切な人の尊い命を失ってしまった事を。が、すぐさま龍騎は顔を上げて告げる。

「自分の手を汚さないで誰かを守るなんて、甘いんだ。お前は、最初からそれに気づいていたから、迷わずに戦ってた。……なら、俺にだって出来るはずなんだ……。覚悟を決めた俺なら」

龍騎の言葉を聞いたナイトは、ゆっくりと顔を上げて、カードデッキからカードを取り出す。龍騎もそれに続いてカードを引き抜く。

「お前がそう決めたのなら、俺も俺のために戦うだけだ」

「ああ」

『SWORD VENT』

互いに近接型の武器であるドラグセイバーとウイングランサーを構え、しばらく睨み合った後、最初に動き出したのは、戦いを挑んできた龍騎だった。

「ダアアアアアアッ！」

「！」

思っていた以上に迫力のある龍騎の攻めの姿勢に、僅かだが反応が遅れたナイトが、バランスを崩す。龍騎はそれを見逃すはずもなく、ドラグセイバーを振るって追撃を与える。

「ウオオオオオオオ！」

「フンッ！」

ナイトも負けじとウイングランサーを振り下ろし、龍騎に対抗した。

最初のうちはほぼ互角の勝負になっていたが、しばらくすると、龍騎の方が勢いづいてきた。

本来同じ近接型の戦いであれば、経験値の高いナイトの方に軍配が上がってもおかしくないのだが、龍騎にはそれが通じないのか、一向に息切れする気配がない。否、ナイトの方が、龍騎に攻撃する事への

迷いがあるようにも見えた。

「ハアッ！」

ナイトを振り払い、ガラ空きになった腹に向かって、空いた左の拳が直撃し、ナイトは呻き声と共によろめいた。そこへドラグセイバーの突きが炸裂し、ナイトは勢いを殺せず地面に転がった。

これが奴なりの覚悟か。ナイトは歯ぎしりしながら、立ち上がろうとした。彼にとってある意味で望ましい戦いであるはずなのに、相手がここまで行動を共にしてきた龍騎だと認識していると、心のどこかで歯止めがかかっているようにも感じられた。

「くっ……！」

やられてばかりではられない。反撃しなければ。ナイトは立ち上がり、新たなカードを取り出そうとする。

一方の龍騎も、短期決戦を望んでいるのか、力強くカードを引き抜く。ドラグバイザーをスライドし、カードをベントインしようとした、その時だった。

「……っ！」

不意に、龍騎の脳裏にここまでの記憶がフラッシュバックしてきた。

港での、ルーラチームのガイ、タイガ、インペラーとの戦い。そのインペラーを狙って強襲してきたピーキーエンジェルズとの戦い。歓迎するオルタナティブ。ヴェス・ウィンタープリズンとナイトの対立。仲間が増えたと思って喜ぶシスターナナ。

……そして、美華が久々に見せてくれた笑顔。そして付き合っていた当初の思い出。最後の言葉……。

『他は、変わってほしくないかな』

「……！……あー！」

龍騎の震えは、目の前で対峙するナイトにも分かるほどだった。

龍騎の右手から、カードがこぼれ落ちた。『ファイナルベント』のカードだ。おそらく次の一手で勝負を決めようとしたのだろう。だが、出来なかった。出来ると思っていたはずなのに……。

「……決めたのに」

龍騎は膝から崩れ落ち、呆然と眩く。

「戦うって、さつき決めたのに……！ 結局、俺、また迷ってるのか……！」

「城戸……」

思わず変身前の姿の名を呟くナイト。龍騎は、迷いが臨界点を越えたのか、頭を抱えて錯乱し始めた。

「う、ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

そして徐ろに立ち上がり、近くの金網に自ら体をぶつけて、何度も思いつきり殴りつけた。戦う事が出来ない自分を責めているのだろう。

背後が無防備となった今、ナイトにチャンスが巡ってきた。ウイングランサーを握りしめ、その鋭い先端を、龍騎の背中に向けて、ゆっくりと近づく。そのまま突きすれば、それで決着がつく。龍騎という仲間を失うのは心苦しいが、全ては生き残る為。龍騎にはここで犠牲になってもらおうと、ナイトは決意した。

今更龍騎に手をかけたところで、その前からすでに自分の手は汚れている。何もためらう事はない。ここで龍騎を殺しても、誰から嫌われても、構う事はない。これでトップスピード達から咎められても、それならそれで、1人になって戦い続ければ良い。仮面ライダーにならずと前から、そうしてきたように……。

ウイングランサーを握りしめる力がさらに強くなり、未だに嘆いている龍騎に向かって突き出し

『まあたこんなになつくさんの怪我作っちゃって！　ちよつとは心配するあたしの身にもなってよ！』

『知るか。向こうが勝手にふっかけてきた事だし、俺が勝手にやろうと決めた事だ。いちいち口を出すな』

『……バカ』

『？』

『……もう、あたし達しかいないんだよ。家族の繋がりがあるのは。お願いだから、勝手にどっか行っちゃったりしないで。あたしも、離れないよ。だってあたしがいなくなったら、寂しくなっちゃうでしょ？　蓮兄』

『……分かった。分かったら、もうそんな顔するな、恵里奈。俺は、お前を置いていかない』

『……』

不意に、ナイトはウイングランサーを下ろし、地面に置いた。

そしてマジカルフォンから、活動時間の限界が近づいている警報が鳴り、再び歩き出して、龍騎の腕を掴む。

「おい、行くぞ」

「……」

「……さっさと立て！」

ナイトは叱咤し、龍騎を連れてミラーワールドを後にした。

ミラーワールドから離れて、開けた場所に出た2人は、その場に腰を下ろした。互いに息切れが激しい中、正史は心底悔しげな表情を浮かべ、拳を地面に叩きつける。

「……何で、俺は」

「仕方ないだろ。それがお前なんだ」

「そんな簡単に言うなよ！ 俺だって、ちゃんと悩んで決めたのに

……！ これじゃあ、何もしないのと同じだろ……！」

「……」

蓮二は黙り込む。黙ったまま、地面を見下ろした。

どうして正史が、誰かと戦う事をここまで拒んでしまっているにもかかわらず、彼のその考えを仕方ないと割り切ってしまったのか、自分でもよく分かっていなかった。

やがて日が暮れ始め、帰ろうとした矢先、正史が不意に立ち上がった、ボソボソと呟いた。

「……考えるから、ダメなんだ。何も、考えなければ、きつと……」

「城戸……っ！」

「じゃあな。次は、本気でやるよ、俺」

それだけ告げると、正史は歩き去った。おそらく今日も蓮二達とは共に活動に参加しないのだろう、と蓮二は思った。蓮二は首からぶら下がっているペンダントを手に取り、中身を開いて、写真を見つめながら、誰ともなしに呟く。

「……俺も、随分と甘ちゃんになったな。これもお前がそうさせたのか、それとも、あいつらがそうさせたのか……。どうなんだろうな、

……恵里奈』

60. 龍騎、迷う

「何よ、人が折角良い気分でご口ちゃん美味しい料理口にしたのに」「ほんとですね。早くしないと冷めちゃいますから」

「や、それはゴメンな」

「で、ご用件は？」

翌日、N市の一角に構える『北岡法律事務所』に來客が現れた。秘書の吾郎が作ったカレーを食べている最中、インターホンを鳴らして顔を覗かせてきたのは、正史だった。話があるという事だったので、食事を中断して北岡は真琴と共に外へ出た。おそらく仮面ライダーや魔法少女絡みだろうと考え、吾郎に気づかれないように、外で話す事にしたのだ。

「実はさ……。俺、戦おうって決めたんだ」

「はあ？」

「それはどういう……」

「何とぼけてんのさ。いつもの事だろ？」

そう言っただけで正史は乾いた笑みを浮かべながら、カードデッキを取り出した。が、彼がライダーや魔法少女同士の戦いに断固反対している事を知っていた2人にとって、疑い深いものだった。

「お前本気か？ いつ宗旨替えしたのさ？」

「まあ、昨日かな。生き残りたかったら、やっぱ戦わなきゃって思っで。止めようとした俺がバカだったんだよなあ。そりやあナイトやリップルから嫌な顔されるわけだよなあ」

「……」

依然として笑っている正史を見て、2人の表情は次第に冷め始めた。そして鏡のある方へ連れて行くこうとした正史を振りほどいて、こう言った。

「俺だつて無様に死にたくないし、戦いを否定するつもりはちゃんちやら無いけどさ。悪いけど遠慮しとくよ」

「な、何でだよ」

「1つは今ちょっとそういう気分になれないってのがあってね。こっ

ちはゴロちゃんの料理が楽しみなの。後は……」

そこで一旦言葉を詰まらせて、正史の顔を改めて見てから、見抜いたような顔で呟いた。

「こないだのファムの事が関係してるんだろうけどさ。見てられないんだよ、お前のそういう態度。そういうのウザったいっていうか……。そう思うだろ、真琴？」

「まあ、私としてはあなたがどう決意なさろうと構いませんが、私達にそういう価値観は押し付けなくてくださいな。私、やりたくないし決めた事は一切やらない主義なので」

「そういう事。そんなに戦いたかったら、他当たれよ」

「……チエツ。分かったよ……」

正史は不貞腐れながら、その場を後にしようとして、背を向けた。そんな正史に対し、北岡は最後に一声かけた。

「あ、そうそう。1つ言い忘れてたけどさ。俺も真琴も自分が一番可愛いと思ってる。他人の為の犠牲とか、全然美しくないからな」

「……」

正史は一旦立ち止まったが、すぐまた歩き出す。やがて2人も背を向けて、事務所に向かって歩き始める。

「……彼、随分と落ち込んでましたね」

「ま、惚れた女が突然死ぬのは心苦しいし、そこは俺も同情するけどさ。無関係な俺達まで巻き込まないでほしいね」

「同感です」

「さてと、ゴロちゃんには悪いけど、またカレーを温め直してもらおうか」

「そうですね」

「(つと、その前に……)」

不意に北岡は立ち止まり、マジカルフォンを取り出して、メッセージを打ち込んだ。ここで貸しを作っておいても良いかもな、という遊び心で、彼はある人物達にメッセージを送信した。

『おたくらの仲間、ちよつとヤバイかもよ。あれ相当参ってる。死なせたくなかったら、助けてやれ。ゾルダ』

「やっぱり、霧島さんの事、好きだったのかな……」

「……さあな」

数時間後、商店街付近で正史を探す大地と小雪の姿が。つい先ほど、ゾルダから謎のメッセージを受け取り、2人はもちろんの事、手の空いているメンバーで正史を捜索していた。

「……何で、こんな事になっちゃったのかな。美華さん、何も悪い事してないのに、突然死んじゃうなんて……！　いつまでこんな気持ちにならなきゃいけないの……？」

「小雪……」

再び目尻に涙を浮かべる小雪を見て、大地はその肩に触れようかと思っただが、途中で思いとどまってしまう。すると今度は2人のマジカルフォンにライアこと手塚からの連絡が入った。正史が見つかったという事で、すぐに来てほしいという内容だった。

2人が急いで駆けつけると、どこかへ行こうとしている正史を、蓮二と手塚が必死に取り押さええている光景が目に入った。

「離せよ！」

「止めておけ、お前には無理だと、あれだけ言っただろ！」

「考え直せ、城戸！」

一体何がどうなっているのか。気になった2人は、近くで成り行きを眺めていた華乃に尋ねた。

「あれ、どうなってるんですか」

「ゾルダとマジカロイドのペアと戦おうとしてたけど、向こうは拒否したらしい。それで、カラミティ・メアリと王蛇のペアが縄張りを張っている城南地区に行こうとしたところを、蓮二さん達が見つけてこうなってる」

簡潔に説明した華乃の言葉を聞いて、居ても立っても居られず、小雪は正史に駆け寄って腕を掴んだ。

「だ、ダメです城戸さん！ 戦っちゃダメですよ！」

「は、離せよ！ 俺は、戦いたいんだ！」

「……バカが」

強行手段として、正史の胸倉を掴んだ蓮二。それが功を奏したのか、正史は力が抜けたように、ズルズルと地面に座り込んだ。

「……何でだよ。俺は、もう……」

「城戸、さん……」

「城戸。お前の気持ち分からない俺達じゃない。だが、もう諦めろ。どう足掻いても、ファムは俺達の前に戻ってこない。……このままいけば、間違いなくお前が破滅してしまう！ そんな事は俺が」

「もうどうでも良いだろそんな占い！ 俺だって、もう美華が帰ってこない事ぐらい分かってる！ ……分かってるから、変わらなきやつて思ってるのに！」

正史の足元に水滴が落ちて、地面に染み込んだ。何度も滴り落ちる姿を見て、小雪や大地も辛い気分になる。

手塚が再び何かを言いかけたその瞬間、マジカルフォンから音が鳴り響いた。

『！』

「挿入歌：果てなき希望」

モンスターが現れたという通達を受けて、一同は現場へと急行した。やってきたのは、数多くのコンテナが立ち並ぶ港の一角。そこへ到着すると、男性の叫び声が聞こえてきた。

「た、助けてくれえ！ ウワアアア！」

みれば、作業服を着た男性が、体の前部に強固な盾をつけた、イノシシ型のモンスター『シールドボーダー』に襲われている。すぐさま

蓮二と手塚が飛び蹴りでシールドボーダーを蹴り飛ばした。シールドボーダーはそのまま近くにあった車のボンネットから、ミラーワールドに逃げ帰った。

「大丈夫ですか!?？」

「早く逃げてください！」

正史と小雪が作業員に声をかけて、逃げるように示唆した後、大地、華乃を先頭に、正史、小雪、蓮二、手塚も後を追うように車に向かった。そして後部の窓に立ってカードデッキを取り出してかざしたり、マジカルフォンを片手に持ち、同時に叫んだ。

「「「変身!」」」

6人は変身した後、ミラーワールドへ突入し、シールドボーダーを倒しに向かった。

「ハアツ！」

先ず先手で龍騎とスノーホワイトが飛びかかってシールドボーダーの動きを封じようとするが、向こうも必死に振りほどこうとしており、なかなか動きが止まらない。

『SWING VENT』

ライアはエビルウィップで中距離攻撃を繰り返し、シールドボーダーに地道にダメージを与えていき、よろめいたところで、ナイトが蹴りを入れる。

リップルが手裏剣を手にとって投げつけるが、シールドボーダーが体から取り外した盾が、それらを難なく弾いた。

「思ってたより硬い……」

「ならこれで……」

『HIT VENT』

「リップル、クナイを！」

リップルは言われた通りにクナイをナイトに渡して、前方に投げつけた。ただし、投げた方向は、シールドボーダーのはるか後方。すると、クナイはブーメランのように弧を描いて、シールドボーダーの背中に直撃し、シールドボーダーは唸り声をあげた。リップルの魔法には、百発百中という追尾機能がある為、無防備な背中にダメージを与

える事が可能なのだ。

「……なら」

リップルはマジカルフォンをタップして、ウイングランサーを構えると、飛び上がってシールドボードの背後を取ってからウイングランサーで斬り裂いた。

『SWORD VENT』

「ふっ！ ハアッ！」

九尾はフォクセイバーで、乱舞の如く華麗に動き回り、シールドボードを翻弄した。

『FINAL VENT』

そして龍騎と九尾は並び立つと、互いに必殺技の体勢に入った。

「ハアアアアアアア！ダアアアアアアアッ！」

「ウオオオオオオオ！」

飛び上がって投げつける右足を突き出すと、ドラゴンライダーキックとブレイズキックがシールドボードに直撃。いかに防御力の高いシールドボードとはいえど、パワーに優れた2人の一撃は、盾をもってしても防ぎきれず、盾は破壊され、吹き飛ばされて爆散した。

マジカルフォンにキャンディー獲得の知らせが入るが、6人の耳には一切入ってこない。それ以上に、緊迫した局面になろうとしていたのだ。

「確か、この辺だったよな……」

遅れて港に駆けつけたのは、ラピッドスワローから降りて地面に着地したトップスピードだった。現場に到着した頃には、すでに反応は消えており、誰かが倒したのだろうと思いつつも、気になって様子を見に来たのだ。そして、近くの車の窓ガラスに目をやると、トップスピードは目の前の光景を疑った。見間違いでなければ、パートナーの龍騎が九尾、スノーホワイト、ナイト、リップル、ライアと激しい合戦を繰り広げているのだ。

「な、何やってんだあいつら……！ どうして龍騎が……！」

「ハアツ！ ダアツ！」

「フンツ！ ウオオオオオオオ！」

「や、止めて！」

「よせ龍騎！ 何のつもりだ！」

ドラグセイバーを構えた龍騎が、ダークバイザーを構えるナイトや短剣を握るリップルと戦う状況を、スノーホワイトは青ざめた表情

で、どうする事も出来ずオロオロしており、ライアと九尾が必死に止めに入る。だが、3人の争いはより激しさを増す一方だった。

「こ、のお……!」

九尾は拳を振るって直接止めようとするが、龍騎は一向に手を緩めない。そればかりか、九尾に反撃して、コンテナに体をぶつけた。

「もう、やめてえ!」

スノーホワイトの悲痛な叫び声がミラーワールドにこだまするが、誰一人動きを止めない。リップルは舌打ちしながら短剣を突きつけるが、ドラグセイバーに弾かれ、その腹に蹴りが入って、リップルは後ずさった。

「(やはり本気で来たか……!)」

ナイトは新たにカードをベントインしようとするが、ライアがその腕を掴んで、止めに入った。

「やめるんだナイト! こんな戦いに何の意味がある!」

「邪魔するな! これは奴が決めた事だ! 俺も俺のやり方で奴を倒す!」

「そうじゃない! このままでは、あいつは本当に壊れる! そうなっては……!」

「だからどうした!」

ナイトはライアを振りほどき、ライアは仕方なしに、今度は龍騎を止めに入った。

「龍騎! お前はこんな所で終わるやつじゃなかったはずだ! 目を覚ませ!」

「うるさい! 俺はもう、もう……!」

「ウアアアアアアアアアアア!」

龍騎は何か吹っ切れたように、ドラグセイバーを振るう。その剣先が、ライアの右手を掠め取り、血が流れ出た。

「グアア……!」

ライアは地面を転がり、傷を押さえ込むように右手を空いた左手で握った。

『STRRIKE VENT』

『BLAZE VENT』

「ハアアアアアアッ！」

龍騎は右腕にドラグクローがつけられ、九尾の両手に火炎弾が形成され、互いに同タイミングで、ドラグクローファイヤーとブレイズボンバーが炸裂。どちらもぶつかった瞬間に爆ぜて、その場にいた全員が吹き飛んだ。

「や、めて……………！ もう嫌だよお……………！ どうして、なの……………！ 龍騎、どうして……………！」

「……………決めたんだ。俺」

スノーホワイトが泣きながら問いかけたのに対して、龍騎はいつになく冷徹な声で、ドラグセイバーを構えながら淡々と答える。

「……………もう、迷わない。……………何も、考えない。迷ってたって、考えてたって、人はどんどん消えてく……………。ずっと戦おうとしなかったら、何も守れない。誰も、助けられない……………」

九尾達に迫りながら、これまでの事を振り返る龍騎。

龍騎は、ずっと悩んでいた。迷っていた。考えていた。人数削減と称して、同じ力を持った者同士が次々と死んでいく事。ライダーや魔法少女同士が戦う事。そして失って初めて気づいてしまった、かけがえのないもの。

それもこれも、自分が先立って何もしようとしなかったから、と自分に言い聞かせて、彼は言う。

「……………だったら、俺はもう、迷ったりしない。戦ってやる。誰を殺しても、もうどうでもいい。そうやって、生き残るって、決めたんだ。だから」

「バカヤロオ！」

突然鳴り響く怒声。それは、ライアでも、トップスピードでも、九尾でもない。その声は、横から割り込んで、龍騎と九尾達の間に入って、両腕を広げた人物から発せられたものだった。

「と、トップスピード……………！」

「……………どいてよ。俺は、倒さなきゃいけないんだ」

「どかねえよ！ 俺は、あんたに人を、殺してほしく、ねえんだ……………！」

そう叫ぶトップスピードの声は震えていた。否、体全身も。

「あんたと俺は、同じ過ちを犯してる！ だから分かるんだ！ お前のその気持ちだって！ 誰かを守るって事は、めちやくちや難しい！ でも、だからってそれが出来ないから他の奴を理由もなく殺して、それでいいわけねえだろ！ 目え覚ませよバカ！」

「……………」

トップスピードの言葉に、龍騎は喉元を詰まらせる。

「頼むよ……………！ 頼むから、俺の我が儘も聞いてくれよ！ 今までずっと自分の正義を貫いてきたお前が、そうやって変な覚悟を決めて誰かを殺つても、ファムが……………！ ウィンタープリズンが、シスターナナが、オルタナティブが……………！ ねむりんが、ルーラが、インペラーが、シザースが、ユナエルが、納得してくれるわけねえ！」

「……………」

「……………もし、あんたがそれでもっていうんなら。…………俺だけで、終わりにしてくれ」

「！ トップスピード……………」

リップルは思わず、立ち上がって彼女の前に立とうとした。自ら犠牲になるつもりか、と心の中で叫びながら。

「……………」

龍騎はドラグセイバーを握る手に力を込めた。そして、ほんのわずかだけ振り上げた。

「……………」

一同が緊迫する中、カランカランと言う音が耳に入った。地面に目をやると、ドラグセイバーが横たわっている。そして目の前の龍騎は、微動だにする事なく、しばらく静止していた。

やがて龍騎は膝から崩れ落ち、両手を地面について、涙声で口を開く。

「…………結局、こうなるのかよ……………！ 変わろうって思ってたのに……………！ どうやっても結局、俺は……………」

「龍騎……………」

「城戸、さん……………」

「……ゴメン、美華あ……！」

龍騎は、かつて愛していた女性の名を呟き、そして頭を抱える。

「俺は、どうしたら……！」

「……」

ライアは、この場で龍騎の行く末を占おうかと思ったが、途中でやめる事にした。きっとここで結果を開示しても、彼が本当の意味で変わる事はない。もし変えられるとすれば……、と思い、1人の人物に目を向けた。その人物もまた、極限の緊張から解放されたのか、地面にへたり込んだ。

「俺は、もう……。どこにも、戻れないんだ……」

そう呟いた龍騎は、立ち上がって九尾達に背を向けた。それは、自ら仲間を殺そうとしてしまった責任を1人で抱え込もうと、決別を意味する行動だったのかもしれない。

誰も、彼を引きとめようとはしなかった。そんな余裕がなかったからだ。スノーホワイトは泣きながら九尾に寄り添い、九尾はスノーホワイトの手を握り返す。ナイト、リップルは複雑な表情のまま目を逸らし、ライアは傷を負った右手を見つめた。

ただ1人、トツプスピードだけは、被っていたとんがりハットを外して、ギユツと握りしめたまま、水色の瞳を龍騎の背中に向け、完全に姿が見えなくなるまで、ずっと見つめ続けていた……。

61. 龍騎、パートナーの過去を知る

「うん……」

トップスピードの変身者、室田^{むろた} つばめは、柔らかいソファアに腰を深くかけながら唸っていた。

昨日、現場に駆けつけた彼女が目にしたのは、パートナーの龍騎が仲間達と戦っている光景だった。その後詳しい事情を聞き、龍騎が抱えているものの重さを痛感した。パートナーとして、何より仲間として、どうか公正したい気持ちはあるが、いざそれをやろうにも、良い方法が思いつかない。

誰かに相談しようとも思ったが、これといって良きげな人物が見当たらない。否、かつてはそういう事に対して真っ先に相談できる人物はいた。

「……こんな時、あんただだったらどう言うのかねえ」

つばめはそうボヤきながら、目線を棚の上に置かれた写真立てに向けた。そこには、つばめの隣に、若いサラリーマン風の男性とのツーショットが写っている。

それからまた小一時間ほど頭を抱えていたつばめだったが、

「……ああもう！ 考えるのやめた！」

唐突に立ち上がってそう叫び、颯爽とキッチンに足を運んだ。冷蔵庫の中をチェックして、必要な食材を選抜する。奥の方に、半分だけ残しておいたかぼちゃがあったので、それも取り出す。買い物でもしようかと思ったが、時間も時間なので、この日は余り物でやりくりする事にした。

下ごしらえを手早く済ませて、調理に取り掛かり、味を確認する。

「うん！ 今日もグッド！」

我ながら上出来だと自画自賛し、出来上がった料理をいつものようにタッパーに詰める。ただし、今日に限ってはお弁当のように2人分に分量を分けて入れておく。

手提げカバンに入れて、全ての準備を整えたつばめは、ポケットからマジカルフォンを取り出し、タップする。

「変身！」

つばめの姿は、魔女風のトップスピードへと変わり、片手にラピッドスワローを持った彼女は、写真立てと向き合い、口を開いた。

「じゃあ、行ってくるよ。俺なりに頑張ってみるからさ。もしアレだったらアドバイスよろしく」

明るい表情とは言えないが、僅かな笑みを浮かべたトップスピードは、窓の鍵を開けて、ベランダに出てラピッドスワローに跨ると、上空を一直線に駆け抜けて、地上を見下ろしながら、パートナーを探し始めた。

一方、正史……もとい龍騎は、とあるビルの屋上で、1人腰掛けていた。眼前に広がる街並みを眺めているように見えるが、彼にはボヤけてしか映っていない。何か考える素振りを度々見せるが、すぐにため息と共に項垂れる。

彼の周辺が淀んだ空気を包まれる中、突如としてその空気は払拭される。

「お！ いたいた！」

上空から聞き覚えのある声が聞こえてきたので見上げると、トップスピードが手を振りながら、龍騎に猛スピードで接近し、目の前で降り立って、人一倍元気な声をかけた。

「よっす！　ここにいたのかよ。探したぜ！」

「……何で、ここに」

「おいおい元気ねえな！　飯食ってるか！　ハハハ！」

「……」

トップスピードは高笑いしながら肩を叩くが、龍騎はほぼ無反応だった。何で自分にここまで関わろうとするのか、と言いたげだった。

それを察したのか、トップスピードの高笑いは段々と苦笑いになった。それから許可なく龍騎の隣に座り、カバンからタッパーを一つ取り出して、龍騎に差し出した。

「まあ、とりあえずこれ食ってみ！　俺特性のかぼちやの煮付けが入ってるぜ！」

龍騎は、一応変身を解き、タッパーを開けてみる。中には、白米の中心に梅干しという日の丸弁当に加え、ウィンナー、卵焼き、そしてかぼちやの煮付けがぎっしり敷き詰められている。箸も渡され、いつでも食事ができるようになったものの、正史は一向に手が伸びなかった。

「……どうして」

「ん？」

「何で、俺にこんな事を……。俺は、お前やみんなに迷惑かけて……。

何も、変われなくて……」

「無理して変わる必要あつか？」

「……え」

「俺は、あんまり変わってほしくないかな。あ、もちろんむやみやたらに戦うなって意味でな」

そう呟くトップスピードを見て、正史には疑問に思うことがある。彼女は、自分と同じ過ちを犯した者同士だと言っていた。彼女の事をよく知らない正史は、その事がずっと頭の片隅で引っかかっていた。

すると、トップスピードの方に動きが見られた。

「……ちよつと恥ずかしいけど、こういうのは、この姿で話していいもんじゃねえな」

「？」

「特別に教えてやるよ。俺が、生き残りたい理由。後半年は絶対死ねない理由」

そう言つて、トップスピードは取り出したマジカルフォンをタップし、体が光に包まれる。やがて光が解けて、おそらくメンバーの中では初めて見るであろう、トップスピードの変身者、室田 つばめの姿をしっかりと見た正史だが、直後、その瞳はある一点を見つめて、大きく開かれた。

歳は、正史よりも若いように見え、栗色の髪を三つ編みにしている。耳には星型のピアス。背は魔法少女の状態よりは高い。だがそれ以上に正史を驚かせたのは、その下腹部だ。

冬場でも若干暖かそうに見える、マタニティドレスに包まれていても分かるほどに、そのお腹は『膨れていた』。

「それって……!」

「えへへ……。そ。これが、俺が最低でも、後半年は生きてたい理由」
空いた口が塞がらないほどに驚く正史に対し、つばめは照れながらも、そのお腹をさする。どうして今まで内緒にしてたんだ、と質問しても、恥ずかしいだろ、と返されるに違いないと思った正史は、別の質問をした。

「じ、じゃあ、あんたは、その……。既婚者、なのか？」

「……まあ、そうなる、かな？ あ、後この姿の名前は、室田 つばめだから、そこんところよろしく」

既婚者、という言葉に対し、つばめは曖昧そうに答える。

「で、でも、何で俺にその事を……」

「あんたを見てるとき。ダブって見えちゃうんだ。……俺が惚れちゃまった、昇しやうちって奴とさ」

そう呟いて、そのお腹に命を授かっている女性は、ポツポツと語りだす。

室田 つばめは、幼少期から『遊ぶ』事に関しては『心に余裕を持って生きる』事と考えていた。「若い頃は遊んでいた」というフレーズは嫌いで、どれだけ歳を重ねようとも、遊ぶ事だけは忘れないようにしようと決めていた。それ故に、『燕無礼棲』^{エンブレス}と呼ばれる、高校時代にN市北宿を拠点としてその名を轟かせたりと、不良少女として非行に走っていた時期もあるが、つばめは特に気にしなかった。

小学校の頃、引っ越してきた家の隣家にいた、同い年の女の子とはしょっちゅう遊んでいた。やんちゃな事ばかりが目立つようになり、その度につばめを咎める者がいた。

室田 昇一。隣家の女の子の、7つ上の兄だった彼とは、事あるごとに口論になった。「学校帰りに買い食いするな」や「7個上なぐらいで偉そうな口を叩くな」など、角を突き合わせて対峙していた。それ故に、つばめにとって昇一は「何かと口うるさい友人の兄」であり、向こうからしてみれば「妹を悪の道に引きずり込む悪ガキ」という印象しか持てなかったようだ。

スイカと天ぷらのような関係性だった2人だが、不思議なもので、

時が経つにつれて、次第につばめは昇一に惚れ始めた。そして昇一が市役所の広報課に職が落ち着いたところで、2人はめでたくゴールインした。結婚してから数ヶ月後には、子供も授かった。

「今は大事な時期なんだから、ちゃんと大人しくしとけよ」

「んなもん分かってるって」

そんなやり取りもありながら、行ってらっしゃいのキスをして、堅物の割に心配性な夫を無理やり外へ送り出す事はしよっちゅうあった。心配性なのは、昇一に限った話ではない。実家の両親や隣近所も、つばめやそのお腹の子を気遣っている。バイト先の総菜屋の老店長に至っては、「こんなクソ忙しい時に」と愚痴りながらも、産休を取らせると同時に、あるお惣菜の作り方を教えた。

「かぼちやの煮付けえ？ 何でこれが俺達にお似合いなんだよ？」

「これだから近頃の若いもんは……。かぼちやの願掛けにはなあ、『家族がいつまでも健康で、無事でいられますように』ってもんがあるんだよ」

「へえ。悪いもんじゃねえな。ありがとな、教えてくれて！」

バイト先から戻ったつばめは早速かぼちやの煮付けを作り、味見してみた。ジジ臭い料理かと思っていたが、意外と美味かった。以来、つばめの得意料理の項目の1つに、『かぼちやの煮付け』が加わった。

昇一に言われて大人しくマンションの一室で、余暇を過ごしているつばめだが、彼女には結婚してから暇つぶしにとやっている事があった。『魔法少女育成計画』だ。アニメや漫画とは縁遠い生活を送ってきた彼女だが、いくらやっても無料というキャッチフレーズに惹かれて、『トップスピード』というアバターを操作していた。「プレイしていると、何万人に1人の確率で本物になれる」という噂も耳にしていた。もちろんつばめもデマか何かだろうとタカをくくっていた。

今から半年ほど前に、ファヴに誘導されるがままにタップし続けて、本物の魔法少女『トップスピード』に変身してしまうまでは……。

『おめでどうぼん！ 君は魔法少女に選ばれたんだぼん！』

くるくる回りながら眩くファヴに目もくれず、鏡の前で、19歳の人妻は苦笑していた。つばの広いとんがり帽子に、魔法のワンピース

ス、黒革のブーツ、豊かで艶やかな金色の髪を三つ編みにまとめ、肌は艶やかで、顔立ちは整っているなど、背は低くなつたものの、完全に若返った姿がそこにある。彼女の魔法でもある空飛ぶ箒『ラピッドスワロー』を片手に構えたトップスピードは、立体映像のマスケットキャラクターに向かって手を合わせた。

「や、申し訳ないんだけどさ。もうちょい若い子誘ってやってくんないか？ ほら、今の俺……」

『それについては問題ないぽん。鏡を見れば分かるぽん』

言われた通りに、今一度鏡に目をやると、確かにお腹は出ていない。どうやら変身している状態なら、「妊娠している」という状態は受け継がれないらしく、変身を解けば、赤ちゃんは無事なままだという事も分かった。つまり変身さえしておけば、飛んだり跳ねたりしても影響はない、と認識したトップスピードは、「グツジョブ！」とファヴに向かって叫んだ。

『魔法少女というのは小学生か中学生、ギリギリでも高校生』という知識があつたつばめだが、これは刺激的な『遊び』が見つかったと喜んだ。パトカーと追いかけてこしたり、スマホの画面をピコピコ叩いて遊ぶよりも、ずっと楽しいものだと思った。

魔法少女としての力に魅了されたつばめは、夫を送り出し、家事をあらかた済ませた所で、トップスピードになつて市内の上空を駆け回った。現役時代を思い出させるだけでなく、さらなる欲望をかき出した。それは、バイクや自動車よりも速く飛べるという利点を活かして、誰にも負けないようなコースレコードを叩き出そうというものだった。昼間は目立たない場所で人助けを片手間程度にやり、夕方から夜にかけては教育係であつたオルタナティブからの指導を受け、それから深夜にかけて、上空を縦横無尽に駆けた。

ただ、あまりにも魔法少女としての遊びを満喫し過ぎて、門限を過ぎてしまう事もあり、その度に昇一からこつぴとく叱られた。無論それはつばめやお腹の子を心配して言っている事は、彼女も重々承知していたが、彼女だけの秘密の遊びをやめるつもりは全く無かつた。

自分勝手ではあると自覚しているが、何時だって、「遊ぶ」事は忘れてはいけない。そう自分に言い聞かせながら、トップスピードは今宵もニューレコードを出そうと、夜空を飛び回る。

……が、そんな自分勝手な行動が、彼女から1つの幸せを奪う事になる。

「やっべえな。また門限過ぎちまった!」

トップスピードはマジカルフォンに表示された時刻に目をやりながら、困ったような素振りを見せながらも、笑みを浮かべている。

この日も記録を作る事に夢中になりすぎて、気がつけば日付が変わっていた。魔法少女になって1ヶ月が経ち、ようやく教育係からの指導も終えて、ますますトップスピードは自由になった。懐妊し、ようやく変身前の姿でも、目を凝らせば分かる程度になりかけた頃のことだった。

トップスピードはいつものように、マンションの屋上に降り立ってから変身を解き、階段を降りてから、住んでいる部屋の扉の前に立つ。きつとこの日も、昇一がいつものようにリビングで腕組みをして、無事である事を確認して抱きしめてから説教をするだろう。またキスでもして黙らせてやろうか、と苦笑いしながら、つばめはなるべく音を立てずに扉を開けた。が、リビングからは物音1つしない。明かりこそついているものの、静まり返っている。ふと足元に目をやると、いつも目になっている靴が見当たらない。近くのコンビニに買い出しに出かけたのかもしれない。そう思ったつばめはなんとなくホッとしてから、ソファアームに座って夫の帰りを待った。

が、それから30分経っても、帰ってくる気配がない。近くのコンビニなら、そこまでかかるはずもないが……、と思いながら、お腹をさすっていると、窓の外からパトカーと思しきサイレンが聞こえてくるのが分かった。近頃は世間も騒がしくなってきたという事もあって、サイレン程度で気にする事もなくなったが、大きな音を立てていたサイレンが不意に鳴り止んだ時には、思わず窓の外から景色を覗いた。見れば、ここからそれほど離れていない地点に、ランプが明々と灯っている。かなり大事になっているようだ。

不意に、言いようのない不安に陥った彼女は、トップスピードに変身して、窓の外からラピッドスワローに跨って、現場に向かった。とはいえ野次馬の近くには騒ぎが大きくなるので、現場を上から見

渡せれるビルの屋上に、足をつけた。

青いビニールシートで周りを囲もうと、大勢の警官が手を動かしている。ドラマでよく見かける、殺人事件の現場検証によくあるシーンと似ているな、と思いつつ、誰がやられたのか、気になってビルの屋上から見下ろした。

が、その直後、トップスピードの中で、全ての思考が一旦停止した。片手に持っていたラピッドスワローも、握る力が抜けて、音を立てて地面に横たわる。全身から嫌な汗が噴き出す。顔面は蒼白になる。何かの間違いでは、と思いつつも、もう一度覗き込むと、それが間違いではない事が分かった。

腹部から、頭部から血を流しながら横たわっているのは、メガネをかけた、サラリーマン風の男性。そして、見覚えのある靴が片方、足から抜けて転がっている。トップスピードには、その男性が室田 昇一だと瞬時に理解出来た。理解したくも無かったが。

トップスピードは込み上げてくる悲鳴を押し殺し、ラピッドスワローに乗って地上の裏路地に降り立つと、変身を解き、現場に猛スピードで駆け寄った。幸い、まだ裏路地まではビニールシートの壁が行き届いておらず、つばめは野次馬の波にのみ込まれる事なく、倒れている昇一の姿を確認出来た。

「昇一……」

つばめは夫の名を叫びながら、お腹を気にする事なく走り出す。若い頃の経験からか、脚力に自信はあった事もあるが、どこからともなく妊婦がやって来た事に動揺して、押さえつける暇も無かった警官をすり抜けて、つばめは膝について、震える手で、ぐったりとした昇一の手を握った。すでに冷たくなっている。全体を見渡すと、腹部からの出血はすでに勢いを失くしているように見える。その顔は、眠っているかのような様子で瞑目している。

「……………」

頬を、温かい液体が伝う。そしてそれは血で汚れた自身や夫の手に、その下にある血の池に落ちる。

「なんで……………！　なんで、なんで……………！　なんでえ……………！」

性は、汗だくになりながら謝っていたが、突然目の前からやってきた男性が、手に持っていた棒のようなもので、男性の頭を殴ったのだ。街灯に照らされて、そこでようやく血の付いた金属の棒だと気付いた時には、男性は近くに落ちていたプラスチックで出来た工事用の表示灯を折って、割れた部分を、男性の腹に何度も突き刺したのだという。あまりにも悍ましい光景に、目撃者も唾然としていたが、やがてサイレンの音が鳴り響いてくると、男性はどこかへ立ち去り、パトカーがやってきたところで、目撃者は事情を説明した。

さらに目撃者やつばめを驚かせたのは、昇一を殺したと思われる人物の正体だった。呼んでもいないのにやって来たパトカーは、どうやらある男の目撃情報を元に駆けつけたのだという。

その男は、浅倉 陸。ヤンキー人生まっしぐらだった頃のつばめも、何度か噂を耳にしており、その当時はそこまで恐怖する事は無かった。が、なんら無関係だった昇一を意味もなく殺した事を知り、つばめは初めて、人に対する恐怖というものを直に感じた。

昇一が外で周りを見渡しながら走っていたのは、いつまで経っても帰ってこないつばめを心配し、探しに出向いていたから。いつもなら叱る為にと待っていてくれたはずなのに、つばめが懐妊した事で、不安が増して、探しに来てくれたのだ。

「なのに、俺は……！」

自分のエゴで、昇一は死んだ。趣味の一環で、ハイスコアを叩き出そうという遊びを続けていなければ、こんな事にならなかったはずなのにというその事実が、つばめに重くのしかかる。つばめや昇一の両親、隣近所からも、あまり自分を責めるなど言われたが、つばめはそう言われる度に首を横に振る。

それから1週間、自分への戒めのつもりなのか、外に出歩く事は無かった。ファヴも気になつて声をかけにきたが、つばめは全く応じなかった。もう、誰とも関わりたくなかった。

一度は、中絶する事も考えた。そうすれば、幸せな家庭は捨て去る事になるが、きつと楽になる。こんな悲しい気持ちも吹き飛ばす。昇一の部屋を見て回るうちに、ベビーカーや、健康に良さそうな離乳食が

載っている資料を見つけるまでは、そう思っていた。

「……バカヤロー。まだ、早すぎるつつうのにさ」

プリントアウトされたその紙に載っている画像を眺めながら、一滴、また一滴と、テーブルの上に置かれた紙を濡らす。どこまでも心配性で、曲がった事は大嫌いで、そのくせ正義感は一層強い。それが、室田 昇一だった。

つばめは資料を置いて、冷蔵庫を開けた。中には、昇一や自分の為にと作り置きしておいた、総菜屋の老店主お勧めの、かぼちやの煮付けがラップに包まれている。しばらくまともな食事をしていなかった事を思い出したつばめは、一旦レンジで温めてから箸で摘まんで口にした。ほんのりと甘みが口の中に広がり、しっかりとついた味が、舌を刺激した。

昇一も、これ結構気に入ってたよな……、と思い返しているうちに、皿の中は空になった。ご飯は必ず1日3食は食うように、と自身のお腹を撫でていた昇一から念を押されていた言葉を、つばめは今でもすっかり覚えている。それは、誰よりも家族の幸せを願った男の、心温まる支えであった。

「……分かったよ。俺、絶対逃げないから。もう、門限は破らないから。心配かけさせないから。……だから、魔法少女、続けてくよ。あんたの分まで、その優しさ、振りまいてやるよ」

こみ上げてくる涙を堪えて、目元を擦ったつばめは、トップスピードに変身して、昇一の姿が写った写真に、行ってきますと告げて、飛ぼうとする。

『俺の事は良いからさ。幸せになれよ』

不意に聞き覚えのある口調でそんな言葉が耳に入ってきて、トップスピードは思わず笑った。

この日から、トップスピードはより一層人助けに尽力を尽くし、リップルやナイトを始めとする、様々な同胞達との交流を深めていった。

「んで、これが、昇一が渡してくれたものなんだけど」

そう言ってお腹から手を離れたつばめが取り出したのは、いつもトップスピードの時に首からぶら下げているお守りだった。中を見せたらうと、2つあった。『交通安全』と、『安産祈願』だ。つばめの夫の、想いが込められたお守りだった。

「こないだ言ったろ？俺とお前は、同じ過ちを犯してるって。ようはさ、そういう事なんだぜ。お互い大事なもん失くして、自分勝手すぎて、周りを心配させて……」

そう呟くつばめの声が震え始めたのを聞いて、正史はハツとつばめの方に顔を向ける。つばめは、正面を向きながら、泣いていた。昔の事を思い出して、再び胸が締め付けられるような感覚が芽生えたのだろう。

彼女もまた、自分と同じ経験をしていた。だからあの時、必死に自分を気にかけてくれた。自分と同じ悲しみを背負わせないようにと。それによろやく気付いた正史は、つばめを見つめるも、かける言葉が見つからなかった。

正史の視線に気づいたのか、つばめは慌てて目元を擦って、いつも通りの笑みを見せた。

「ま、そういうわけだからさ。落ち込むのもこれくらいにして、そろそろ飯食おうぜ！ 冷めちまったら勿体ねえだろ？」

「……うん」

「それ食ったらさ。また俺達と一緒に頑張ろうぜ。お前となら、この先上手くやってけそうだし。……絶対、生き残らねえとな。美華と、昇一が遺してくれたものの為にさ」

そう催促して、つばめも自分用に用意していたタッパーを取り出して、ご飯を口にした。その表情は心底美味しそうに食べている様子が伺える。

正史も、かぼちやの煮付けから手を伸ばし、口にした。いつも以上に甘かった。味は今までの中でも最高だった。そして、段々としよっぱくなっているのに気付いた時には、目からとりとめもなく流れ落ちるものがあつた。

一口食べてから、正史は箸を動かすスピードを上げて、タッパーの中の料理をがつつき始めた。久しぶりにマトモな食事を食べたからなのかもしれない。白米が頬一杯に詰められて、顔が涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、正史は頷く。

「……美味、い、美味しい、よ……！ これ、ホンドに、美味、い……！俺、ドツブスピードの、つばめの、ご飯……！ マジで、好き、だよ……！」

「その食いつぶりも、昇一そっくりだな」

つばめは苦笑いしながら、持参したティッシュで正史の顔を拭いた。正史は抵抗する事なく顔を拭かれ、そしてまた料理にがつつく。その様子を見ていたつばめは、ふと思いついたように正史に言った。

「あ、そうだ」

つばめは正史の顔を覗き込むように見て、口を開いた。

「明日とまではいかないけどさ。お返しといっちゃなんだけど、お前が得意料理だつて言ってた餃子。今度作ってきて、俺達に振舞ってくれよ。俺、結構楽しみにしてるんだ！ だから、頼むぜ」

「うん……！ ……うん！」

正史は泣きながらも力強く頷き、つばめとそう約束した。それを聞

いて安心したのか、つばめはうんうんと頷き、再び食事を始めた。

「頑張ろうな、正史。お前となら、絶対大丈夫だ」

お腹に宿る命をさすり、心の中でエールを送りながら、2人は並んで食事を続ける。

この時正史の中では、燃えるような決意が芽生えつつあるのだが、それは今語るべきではないだろう。

6.2. 次に脱落するのは……

「だから、その……。ホントにゴメン！ やっぱり俺、間違ってた。誰かを殺してまで生き残ろうだなんて、思っちゃいけなかった。変わっちゃいけなかったんだ。もうそんな事じゃ迷わないから！」

「まあ、こいつがこう言ってるんだ。ここは一つ、な」

翌日。待ち合わせ場所に龍騎が訪れて、一昨日の件を謝罪した。トップスピードも傍らで皆に言い聞かせている。

対する皆の反応は様々だった。

「まだ答えは見つけ出せていないようだが……。それでも良いと俺は思う。まだ先は長い。だから自分の運命に押し潰されるなよ、龍騎」

「私は……。全然、気にしてませんから。龍騎さん、また一緒に頑張りますようにね。だいちゃんもそう思うでしょ？」

「あ、ああ」

「……チツ。世話の焼ける奴」

「……まあ、また同じ事が起きれば、戦えば良いだけだしな。その時は容赦しない」

「ちよつとちよつと。2人ともさあ、もつと素直になりなよ……」

トップスピードが苦笑する中、龍騎はこの日持参してきた袋の中から、タツパーを取り出してきた。

「でさ。これ、お詫びと言っちゃあんだけど。作ってきたから、みんなに食べてもらおうかなって」

「？ 何ですかそれ？」

スノーホワイトが首を傾げると、龍騎はタツパーの蓋を開ける。中には、キツネ色にこんがり焼けた、特徴ある形の手料理が敷き詰められていた。正史と親しい九尾は、いち早くその料理名を口にした。

「これって、餃子……？ 城戸さんの得意料理ですよね」

「そ！ 前に話した事もあるんだけど、餃子に結構うるさくて。いつかは、みんなに食べさせようって決めてたんだ」

「美味しそうですね！」

「今日はトップスピードのやつだけではなく、城戸の分もか。楽しみだな」

「……」

スノーホワイトとライアが興味を示す中、ナイトとリップルは眉間に皺を寄せていた。ライダー達は変身を解き、小皿に特製醤油を盛つて、箸で掴んで皆で一斉に口にした。

途端に、皆の目の色が変わったように見えた。真っ先に口を開いたのは、言わずと知れたトップスピード。

「！ うんめえ！ これマジで最高だな！ どうやって作ってんだ？！」

「へへ。まあ、昔バイトしてた時にちよつとアレンジしてね」

「本当に美味しいです！」

「久しぶりに食べましたけど、やっぱり城戸さんのやつが良いですね」
「うん、よく出来てる」

スノーホワイト、大地、手塚も絶賛する中、蓮二とリップルも渋々口にする。普段は不貞腐れている表情が多い2人だが、半分に残しておいた餃子に目が釘付けとなっている。

「どう？ 結構イケるだろ？」

「……まあ、悪くない」

「(トップスピードが作るかぼちゃの煮付けよりはマシか……)」

2人は無愛想な形で、正史の餃子の出来を評価した。トップスピードは高笑いし、正史と手塚、スノーホワイトも素直になれていない2人を見てニヤニヤしていた。ただ、大地だけは黙々と餃子を口にしており、しばらく食べ進めたところで、ようやく口を開いた。

「颯太も気にいるだろうな、これ」

「そっか。そうだよな」

スノーホワイトも相槌を打つと、正史もそれに続く。

「うん。今から持ってつちやうと冷めちやうから、今度また作って持っていこっか。退院したら、その祝いに」

「イイじゃん！ 絶対気にいるぜ、お前の料理なら！」

「……？」 (前より親しくなってる……) 「」

リップルは、普段以上のスキンシップを正史にとっている事に僅かながら疑問を抱いたが、考えるだけ無駄かと思い、すぐに忘れた。

「そういえば、颯太君っていつ退院するの？」

「こないだ向こうでそうちゃんの家族と会ったんですけど、来週ぐらいになるかと……。最近はりハビリも始めてるそうです」

「相変わらず気分は優れないみたいですけどね」

「そっか。元気になって戻ってきてくれるといいなあ」

食事の後、この日のキャンディー集めを終えた一同は、再び待ち合わせ場所に戻って雑談を始めた。

「だが奴にとつて親しいメンバーを、この数週間で4人も亡くしている。精神的にも堪えるだろう」

「俺もそう思っている。占ってみたが、まだ彼の心中は大きな葛藤で揺れ動いている。一度また出向いて様子を見ようとは思っているが……」

ナイトとライアがそう話すと、龍騎はおもむろに立ち上がった。

「大丈夫！ 俺、信じてるから。ラ・ピュセルは必ず戻ってくるってさ！」

「……どこからそんな自信が湧いてくる」

「それは……。何となくだよ！」

それに……。と龍騎はどこか改まった雰囲気でこう話した。

「俺、まだちゃんとした答えは出せないけど。漠然とだけ決めた事はある。俺達8人は、絶対に最後まで生き残るように、とりあえず頑張るって事！ それで、誰かと戦っちゃう事になったとしても、もう逃げないって事は、決めたんだ」

「おおー。良いこと言うじゃん！ 俺も賛成するぜ！」

トップスピードが俄然やる気になって叫ぶ中、リップルは軽く舌打ちし、ナイトは肩を竦めた。

そんな中、ライアはジツと龍騎やトップスピードを見つめていたので、その視線が気になった2人は声をかけた。

「？ どうかした、ライア？」

「何かついてるか？」

「いや。……憑き物が落ちたように見えてな。それだけ、大きな試練を乗り越えた証拠だ。今のお前達は、特に龍騎は、運命を変える何かを握っているように見える」

「そっかなあ？ 俺は全然感じてないけど」

「おう。俺も」

「まあ、本人には気づかないものさ。今のナイトも、随分と変わったものさ。俺とコンビを組んでた時は、まずそんな態度を見せなかった」

「……フン」

唐突に話を振られたナイトはそっぽを向く。すると、今まで口を開いていなかったスノーホワイトがこう言った。

「そういうえば、ライアさんって、前はナイトさんの教育係を務めてたって」

「え、そうなの？？」

始めて聞く事実には、龍騎は思わず目が点になる。

「ああ。偶々活動拠点が近い事もあってな。シローの頼みでナイトの教育担当をした。だが、彼の性格を見ても分かる通り、ほとんど会話が成り立っていなかった。時折占って、その運勢を教えても、頑として聞き入れなかった。それで、自然解消されていったのさ」

「アレは、お前に何でも見透かされるのが嫌だったからだ。あの頃は特にな」

そう呟くナイトは、首元に目を向けていた。その時龍騎がふと思いつ出したのは、香川の葬式が行われている最中に、喧嘩になって蓮二が首からぶら下げていたペンダントを、誤って引きちぎってしまい、中身を見てしまった事だった。あの写真に写っていたのは、ぶつきらばうな蓮二とは対称的に、ハキハキとした、蓮二より歳下の女性。恐らく彼が生き残ろうとする事に関係がありそうだが、未だに全貌は見えてこない。

今度機会があれば、多少強引でも聞き出してみよう。そう決めている龍騎を余所に、ナイトは淡々と語っていた。

「ただ、今となつてはもううんざりするほど慣れた。お前が何を言おうと、気にしないぐらいにはなつたつもりだ」

「……そうか。お前も、変わったな」

「言っておくが、この戦いから降りないという意志は変えないぞ。戦いはまだ続いている。気を抜いたら、それで一瞬だ」

ナイトは念を押すように呟く。それはリップルも同様らしく、小さく隣で頷いていた。

ライダーや魔法少女同士の戦いは、まだ続いている。改めて目の前の現実を認識したスノーホワイトは内心震え上がる中、ライアも、さも分かっていたかのように、懐からマッチの箱を取り出しながら、静かに呟く。何かを占うようだ。

「……ラ・ピュセルの一件で分かつてはいたが、中々運命は変えにくいな。特に、こういう戦いの運命は」

そう言つてマッチに火をつけようとするが、右手を使わず、地面に置いてやろうとしているので、やりづらそうだった。それを見て、龍騎は一昨年の戦場で、龍騎の暴走を止めようとした際に彼の右手をド

ラグセイバーで傷つけてしまった事を思い出して、上から押さえつけて箱を固定させた。

「悪いな。手伝ってもらって」

「良いって。元は俺がしでかした事なんだし」

マッチで擦り、火がつくと皆に見せるようにかざした。他の一同も食い入るよう見つめている。スノーホワイトが質問をした。

「あの……？ 何を占ってるんですか？」

「次に消える者を、占いでな」

ライアが占っているのは、次の脱落者のようだ。

次の脱落者。その単語を聞いて、スノーホワイトや九尾、龍騎、トツプスピードは息を呑む。

「戦いは続く。次に脱落するのは……」

ライアがそう呟いた後、沈黙が辺りを支配する。

しばらくして、ライアが僅かに体を揺らすと同時に火が消えた。何かを知って、動揺しているようだ。そして彼は、一瞬だけある人物に目をやった。が、すぐに視線を火の消えたマッチに戻す。

「お、おい。どうだった……」

「次に、消えるのは……」

「消えるのは……？」

「……」

だが、ライアは何も言わない。ただジツと、煙を見つめている。

「な、何だよ。もったいぶってないで言えよ。結構怖いんだよ、お前の占いってさあ」

トツプスピードが待ちきれなくてせがむ中、ライアはマッチを握りしめて、皆に背を向ける。

そして彼は口にする。次に、抗えぬ運命に身を委ねる事になる、その人物を……。

その名は……。

「次に消えるのは……、……『俺』だ」

空気が凍りつくというの、まさにこの事だろう。九尾の、スノー

ホワイトの、龍騎の、トツプスピードの、ナイトの、リップルの驚きに満ちた視線が、はつきりとライアに向けられる。

一難去ってまた一難。月明かりの下では、突きつけられた定めによつて、暗雲が立ち込み始めていた……。

63. 受け継がれたライア

「おっ。だいぶ集まったな、キャンディー」

「ツシヤア！ この調子で稼ごぞ！ 絶対にライアを死なせたくないしな！ 頑張ろうぜ！」

「……ああ」

翌日以降、ライアのそばには必ず誰かが付き添う事になった。理由はもちろん、ライアに迫る死の運命を変える為だ。九尾とスノーホワイトは当然の事、ナイトとリップルも嫌々ながらも、やはり不安があるのか、ライアの護衛に協力している。

そしてこの日は、龍騎とトップスピードがライアと共に高速道路付近をパトロールし、キャンディー集めに精を出していた。ラピッドスワローに跨るトップスピードと、ブルームベントによって同じく魔法の箒を出した龍騎と後ろに乗ったライアが並んで上空を走行していた。

そんな中、ライアは一人、考え込んでいた。自分の占いによって出た、次の脱落者。本当に、その人物の運命を変える事は、可能なのだろうか、と。

「……いや、変えてみせるさ。必ずな」

「そうそう！ その意義だぜ、ライア！」

龍騎がハッスルする中、トップスピードが不意に浮かぬ顔になって、ライアに尋ねた。

「……なあ、ちよつといい？」

「何だ？」

「何で、そんなに平気そうなんだよ？ 自分が死ぬかもしれないってのに。俺だったらさすがにビビっちゃうし、よくそんなに堂々とできるなあって」

『『かもしれない』じゃない。俺の占いは当たる。『絶対』だ』

何度も聞き慣れた言葉のはずなのに、この時ばかりは、重みを感じられる。他の2人がそう思っていると、ライアはさらに言葉を続ける。

「だが、運命は変えられる。少なくとも、俺はそう信じてい

「そつか……。じゃあさ、ついでにもう一つ聞いていい？」

「ああ。構わない」

「ライアはさ……。何で、そんなに運命にこだわるの？」

それを聞いた途端、ライアの動きが止まったように見えた。

「……それは」

「いや、無理して答えなくても良いけどさ。そこまで運命なんてものに敏感になるのが、ちよつと気になって……」

「……」

ライアはしばらく黙りこんだが、しばらくして、腰のカードデッキに手を当てながら、口を開いた。

「……この力は、本当は俺のものじゃない。俺が最も尊敬する親友に与えられるはずのものだった。俺はそいつの代わりになったようなものだ。ライアになるのは、本当はその男だったはずだ」

「そ、そうなのか……？」

ライアの、手塚の親友。新たに出てきたワードに、2人は困惑している。

「……で、そのダチはどうしてるんだ？」

「死んだ」

間髪入れずにトップスピードの質問に答えるライア。2人はどう声をかけて良いのか分からず、互いに目を合わせていると、マジカルフォンから、モンスター出現の音が鳴り響いた。

「二・二」

3人は反応のあった地点に向かい、近くにあった窓ガラスから、ミラーワールドに突入した。

突入してすぐに、ライアの首に巻きつくものがあった。

「グッ……」

「ライアー！」

龍騎とトップスピードが前方を見ると、鳳凰型のモンスター『ガルドサンダー』が尾羽を鞭のようにライアの首に絡めていた。伸縮自在らしく、ガルドサンダーは尾羽を強く引っ張ってライアを引き寄せ

る。

「挿入歌：果てなき希望」

「させるかよー！」

「行くぜー！」

だが2人もそれを黙って見過ごすはずもない。占いの件もある。ライアの死の運命を変えたい一心で、2人は動き出した。

『SWORD VENT』

龍騎はドラグバイザーにベントインし、トップスピードはマジカルフォンをタツプして、各々ドラグセイバーを手に持ち、トップスピードは尾羽を、龍騎は直接ガルドサンダーを斬りつけた。

「大丈夫か!?？」

「あ、ああ」

「グアツ!?？」

ハツと声のした方を見たトップスピードとライア。龍騎がガルドサンダーの体当たりを受けて倒れこんだようだ。そしてガルドサンダーはそのまま2人に向かって突進してくるが、ギリギリのところかわした。着地したガルドサンダーは、口から火球を3人めがけて発射した。

「うおわっ!?？」

「アツチイ！ ドラグレッツダーのやつぐらいヤバいぞあれ！」

「くっ……！」

3人は避ける事で精一杯のようだが、そこを狙ってガルドサンダーは再び急降下する。狙いはトップスピードだった。

「危ない！」

「！ よせー！」

龍騎がいち早く反応し、トップスピードの前に立ち、代わりに攻撃を受けた。ライアが制止するよりも早かった。

「り、龍騎！ 大丈夫か!?？」

「へ、平気だよ、これくらい」

龍騎は仮面の下で笑みを浮かべながらそう返事する。先日、トップスピードの、つばめのお腹に新しい命が宿っている事をメンバー内で

唯一知った龍騎の中で、トップスピードの身の安全を最優先に考えるようになったが故に、彼女に対して過保護になったようだ。

だが、ライアの安堵も束の間、ガルドサンダーは再び猛威を振るう。
『ギエアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

雄叫びと共に突撃するガルドサンダーを迎え撃つように、ライアが前に出て蹴りを入れた。

『COPY VENT』

そして素早くコピーベントでドラグセイバーをコピーして、ガルドサンダーを斬り裂いた。尾羽の鞭を突き出すも、ドラグセイバーであっさり切り払われる。いつも以上に攻めの姿勢になっているライアを見て、呆然とする2人だったが、すぐに気持ちを切り替えてライアの援護に向かう。

占いでは、ライアが死ぬと出ている事もあり、それがいつどこ起きるのか分からない以上、彼が真つ先に危険に晒されているはいけない。2人が向かってくる事に気付いたライアが、唐突に叫んだ。

「待て！ こいつは俺がやる！」

「な、何言ってるんだよ！ このままじゃお前が！」

「大丈夫だ！ 俺はそう簡単に死なない！」

『ALTER VENT』

ライアはそう言いながら、パートナーカードであるアルターベントを使い、ラ・ピュセルの魔法同様、手に持っていたドラグセイバーを肥大化させた。ガルドサンダーが放つ火球も、ドラグセイバーが盾代わりとなつて防いでくれていた。

業を煮やしたガルドサンダーが、突撃してきた。龍騎とトップスピードもドラグセイバーを構えて迎え撃とうとするが、ライアが手を伸ばして制止する。そしてカウンターとばかりに蹴り飛ばして距離を取ると、

『FINAL VENT』

後方から現れたエビルダイバーの上に乗り、ガルドサンダーに向かって『ハイドベノン』を放った。対するガルドサンダーも炎を纏つて突撃し、対抗しようとしたが、ぶつかり合った瞬間、パワーで競り

負けたガルドサンダーはその場で爆散した。

ガルドサンダーを倒したライアは地面に降り立ち、キャンデーを獲得した事を確認してから、息を大きく吐いた。

そんな彼の元に、龍騎とトツプスピードは駆け寄ってきた。が、その表情は優れない。

「す、スゲエけどさ……。何でそんなにムキになって自分一人で倒そうとしたんだよ」

「そ、そうだぜ！ あのままじゃ、お前が死んじゃうかもしれないんだぞ！」

「そ、それは……」

何かを言いたげなライアだったが、マジカルフォンから、活動時間の限界を知らせる音が鳴り響くと、謝りながら言った。

「……悪かったな、心配かけて。だが大丈夫だ。運命は変えられる。さつきも言ったが、俺はそう簡単に死なないつもりだ。……さあ、ここを出よう」

そう言つて背を向けるライア。ミラーワールドを出てからも、龍騎とトツプスピードはライアの意図が分からず、首を傾げてばかりだった。

翌日、ライアの変身者、手塚 海森はとある場所に足を運んでいた。やって来たのは、市内の大病院。そこに入院しているパートナーの様子を見に来たのだ。

途中でパートナーの両親と出会って軽く会話を交えた後、手塚は真つ直ぐに一つの病室の前に立った。ドアをノックすると、小さな返事が返ってきた。手塚がドアを開けると、中にいた少年は、僅かながら目を開けた。

ラ・ピュセルの変身者、 岸辺 颯太である。

「手塚、さん……」

「久しぶりだな」

屋上でレアアイテムの件を話し合ってから来た。手塚は微笑むと、持参していたフルーツの盛り合わせをテーブルの上に置いた。テーブルの上には、千羽鶴と、色々と書き込まれたサッカーボールが置かれている。彼が所属しているサッカーの部員達が見舞いに来ていたようだ。

「良い仲間に恵まれてるな」

「……ええ」

「足の方はどうだ？ リハビリを始めたと聞いているが」

「……正直、これで治るのも五分だって、担当の人が」

ようやく太いギプスが外れて素足が見えるようになった颯太の足だが、依然として痛々しい手術の痕が残っている。まだ一人で歩けるようになるには時間がかかるようだ。

それから、颯太が話題を変えて、さらに暗い表情で尋ねた。

「……ウインタープリズンが、シスターナナが、ファムが死んだって、本当ですか」

「……ああ」

手塚は丸イスに座りながら、そう肯定する。

「運命を変えられなかった。今回の責任の一端には、俺も含まれている事だろう」

「そんな事、ないですよ……。手塚さんは、むしろ頑張ってる方です。みんなの事、ちゃんと考えて動けていて、それが凄く輝いて見えて

……」

それに比べて僕は……、と、颯太は顔を俯かせて呟く。

「……僕がこんな怪我さえしなければ、みんなの事、守り切れたかもしれないのに。自分勝手に戦いを挑んだせいで、大地やみんなに迷惑をかけて……。魔法少女になれたからって、結局僕は、何も出来なくて、ずっと弱いままで」

「そこまでだ」

唐突に颯太の自虐を止める手塚。その瞳は真剣そのものだった。

「お前がそう思う気持ちもよく分かる。だが、お前は自分を低く見過ぎている。お前にはお前なりの強さを持っている。それは、俺もよく知っている」

「でも、僕は……！」

「それに」

颯太の言葉を遮り、手塚はこう言った。

「力が弱い事、何も出来ない事が、迷惑をかける事が悪い事だとは思わない。……俺がそれに気付けたのは、全てが終わってからの事だったが、お前は違う。今なら、お前の運命を変えられる」

「……う？」

手塚の言い方に疑問を抱く颯太。手塚は丸イスに座りなおしながら、一度深呼吸して、再び口を開く。

「少し、昔の話をしようか。今の俺を作り上げるきっかけとなった、俺の親友、『齋藤 雄一』という男の運命を」

手塚はどこか悲しげな表情を浮かべた後、窓の外に目を向けて語り始めた。

「……あいつは、齋藤 雄一は最後まで、俺にとって誇れる友だった」

物心ついた時には、手塚は人の運命を見通せる力を身につけていた。占いは百発百中。周りにいた誰しもが、神から与えられたであろう彼の才能に目を輝かせていた。小学生の頃は、男女問わず彼の周辺に群がっていた。

が、中学に上がる頃になると、今度は彼の占いを忌み嫌うようになった。あまりにも当たりすぎる占いに、いつしか恐怖を覚えたのだろう。1人また1人と彼のそばを離れて、気がつけば、彼は椅子に座って1人、孤立していた。だが、彼にもその事は分かっていた。それもまた、見通していた運命だったから。遅かれ早かれ、人はいつか孤独になる。これもまた、定められた運命なのだと、そう自分に言い聞かせていた。

少なくとも、大学に入って雄一と出会うその時までには。

手塚と雄一の出会いは、ほんの偶然から始まった。空いた時間に占いをしていた所を偶然にも通りかかった雄一が興味を持って話しかけてきた。そして彼はこう語った。

『運命なんて、変えちゃえば良いんだよ。それが出来るから、人間って、人生って面白いんだろ?』

運命は変えられる。生まれて初めてそんな事を言われた手塚は、内心楔が取れたような感覚になった。以来、手塚は雄一との仲を深めた。

後で分かった事だが、雄一はインドアな性格で、大学に入るまで、親友と呼べる者は誰1人としていなかったそうだ。手塚と同じ大学に

進学するきっかけも、そういった友人作りの為だったという。喫茶『ATORI』で雄一は恥ずかしそうにそう語ってくれた。

大学を出てからも、彼らの付き合いは続いた。雄一は、インドア派だった事もあってか、海外で名を馳せるピアニストになるのが夢となった。まだ駆け出しではあったものの、その才能を手塚は高く評価していた。バイト先のフレンチレストランで客を和ませるようにと置かれていたピアノで練習を重ね、ようやくコンクールに入賞して、注目を浴びるようになりつつあった。何度も彼を支え続けた手塚も、ようやく実を結んだ親友の努力を祝福した。

……が、そんな矢先の事だった。バイトから帰る途中に、雄一は偶然そこにいた通り魔に襲われたのだ。それにより、雄一はピアニストの命とも言える腕に重傷を負った。颯太の時と違って、もう再起不能に陥るほどに酷い怪我だったという。

突然全てを終わらされた事に、雄一もショックが大きかった。手塚やその家族も、彼を気遣い、何度も彼の元を訪れる。彼は親友が様子を見に来てくれる事に感謝しつつも、どこか無理をしているような表情で、占いの結果などを交えて会話をしていた。そして会話の中で決まって雄一が口にする言葉があった。

『……何でだよ。他の事だったら何でも出来るのに、何で俺の夢だけは……!』

悔しげに呟く雄一を、その時だけ手塚は目を逸らしていた。親友が背負ってしまった運命から逃げ出そうとしていたのだ。

そして。今から半年ほど前に、手塚の親友は自ら命を絶った。

いつものように彼の見舞いに訪れた手塚は、椅子に座って、テーブルの上上半身をぐったりと預けている雄一を発見。いくら呼びかけても反応を見せない事に不審を抱いた手塚は近づいて、足元に血だまりが出来ている事に気付き、彼の右手を掴んだ。右手首からは血が垂れており、そばには血の付いたカッターナイフが。

『……雄一！ 雄一！ 何で、お前が……！』

ウアアアアアアアアアアアアアアアアアア……！』

手塚は、冷たくなっている親友の亡骸に寄り添ってしばらく泣き続けた。

雄一の死から数日が経ち、手塚は雄一が書き残したものであろう遺書に目を通した。そこには、これ以上手塚や周りのみんなに迷惑をかけたくないという、強い意思が込められていた。

全てを読み終えた手塚は自分を思いっきり殴りたかった。親友の気持ちに気付いてあげれなかった悔しき、そして何よりも彼の運命を変えれなかった不甲斐なさが、彼の頭の中を駆け巡った。だが、立ち止まってばかりもいられなかった。

運命は変えられる。その言葉を頭の中で繰り返しながら、手塚は今日も困っている人々に対して、占いを続けている。

「……ここだけの話、俺には、あいつが自ら命を絶つ運命が見えていた。でも、それなのに、俺は運命を変えようとはしなかった。何もしなかった。俺が、殺したようなものだ」

「……」

夕日が差し込む病室内で、手塚は下を向いて、手に持ったコインを見つめている。颯太はいつの間にか流れ落ちた涙に気付いて慌てて拭う。

「たぶん、雄一にも分かっていたんだと思う。俺がそう占っていたのを」

そう呟いてから、ポケットにコインをしまった。

「……どうして」

「ん？」

「どうして、雄一さんは、自殺なんて考えたんですか。まだ生きる事だって出来たはずなのに」

「あいつは最後まで、他人に迷惑をかけるのを拒絶したんだ。それを臆病だと、自意識過剰だという奴もいるかもしれないが。俺はあいつが誰よりも強いと思うし、それがあいつにとっての選択なら、自分らしく正しいものだったと信じたい」

「正しい、選択……」

颯太が呆然と呟く中、手塚はこう尋ねた。

「今の話を聞いて、どう思った？ ライダーでも、魔法少女でもない雄一が、弱いと思えるか？」

颯太はとっさに首を横に振るう。

「俺にとって本当の強さとは、自分が正しいと思った事を最後まで貫き通せるものだと思う。それが果たして、この競い合いにどこまで通じるかはさておいてだが」

手塚はカードデッキを取り出し、雄一の遺書を読んだ後の事を語り始めた。

「雄一が死んでから、俺はあるものに目がついた。それが、『仮面ライダー育成計画』だ」

「！」

その単語を聞いて、颯太は顔を上げる。『魔法少女育成計画』と同様、この過酷な戦いを身を委ねるきっかけとなったソーシャルゲーム。

「まだあいつの腕が動いていた頃に紹介してもらった事があった。本物になれる可能性があるという噂も、その時にな。……話を戻すが、あいつのスマホに残っていたデータを見るうちに、俺は何かに取り憑かれたかのように、そのゲームデータを俺のスマホに引き継がせた」

「引き継いだ……？」

「そう。このカードデッキは、生きていればあいつが手にするはずだったものだ。雄一が死んで、少しでもあいつの為にとゲームを始めた。……その時のライダーの名前は今は別のものだったが、俺が後から変更した。それが『ライア』だ」

そして手塚は、名前をライアに変えた理由を語りだす。

「占いでは、時に真実とは真逆、もしくは捻じ曲げて相手に結果を告げる事が多い。まさに嘘つき……ライアという言葉がぴったりと当てはまる。もちろんモチーフであるエイがラテン語でライアという意味もあるんだが、その時は、自分を戒めるように『ライア』と決めた」

そしてデータ引き継ぎから数週間後、シローのスカウトによって手塚 海森は仮面ライダー『ライア』となった。

手塚は思った。この力があれば、変えられなかった運命を変えられる。雄一が託した想いを形に変える事も出来る、と。

「俺は、あいつの信じた正義を無駄にしたくない。その一心で、ライダーの力を使い続けた。今までもそうだし、これからも同じだ」
「……」

初めて知った、パートナーに隠された哀しき過去。きつと同じように怪我で道を見失いかけている自分と雄一を重ねて、打ち明けてくれたのだろうと颯太は思ったが、同時に納得がいかない事もあった。

「でも、僕……。僕は、手塚さんがやろうとしているそれが、本当に正しいって言い切れるのか、よく、分からないです……。何も出来ない自分がこんな事言うのも変かもしれませんが……。手塚さんには、もつと違う考えが合うんじゃないかって思っ……」

「正直だな。まあ、それもあるかもしれない。だが俺とて譲れないものもある」

そう言っ手塚は立ち上がった。

「今の俺には、どうしても変えたい運命がある」

「えっ……」

「それも、一番重要な事だ」

そして手塚は、ある事を颯太に告げる。全てを聞き終えた颯太は大きく目を見開き、今すぐにも動くこうとするが、手塚は笑みを浮かべて彼を止める。

「無理にお前が動く必要はない。今はゆっくり体を休める方がいい」
「でも……！」

「俺の占いは当たる。だが、運命は変えられる。その為に、俺は戦う」
「手塚さん……！」

「それが終わった頃には、お前も自分なりの正義が見えてくるかもな。それを見つけたら、何が何でもそれを貫き通せよ、颯太」

それじゃあお大事に、と告げて、手塚は病室を後にした。また一人になった颯太は、何もしてあげられない虚無感に苛まれながら、再びベッドに寝転んだ。

64. 新たなるレアアイテム

ファヴ：『ええ。今日は、みんなが待ち望んでいた第2のレアアイテムを解放するぽん』

シロー：『なお、今回配布されるアイテムに関しては、同時に配信する事はない。成績トップ4組を、下位から順に日を置いて解放していく形になる』

ファヴ：『今度のアイテムは、インストールにたくさん魔力を使うので、同時配信は難しいぽん。そこはご了承くださいぽん』

シロー：『では、まず最初の獲得ペアを発表する』

ファヴ：『最初に見事に幸運を勝ち取ったのは……、『ナイト&リップペア』だぽん！おめでとうぽん！』

シロー：『ナイトにはカードデッキに、リップルにはマジカルフォンに新機能として、パワーアップするものが送られている。どのようなものかは、自分の目で確かめると良い。ただし、注意してもらいたいのは、そのアイテムを一度使用すると、再度使うのに半日はかかる。使い所をよく見極める事だ』

ファヴ：『それじゃあ、2人の今後の進展を祝ったところで、ファヴ達からのメッセージは以上ぽん！』

「これが、新たに追加されたアイテムか」

「翼……？」

いち早くレアアイテムを手に入れた2人は、カードやマジカルフォンを手に取った。

ナイトが手に持っているカードには、右翼と青色の背景が描かれたカードが。それは、『疾風』をイメージさせるものだった。リップルの方には、同じく右翼の画像があつた。今までに見た事のないアプリである事を考えると、これがレアアイテムのようだ。両方に共通しているのは、どちらも『SURVIVE』と表記されている事だった。

他の面々も、2人が手にしたアイテムを覗き込みながら口々に呟いた。

「なんか凄そうだな！」

「サバイブ……『絶対に生き残る』という意味か。随分と意味深なアイテムを解放してきたな」

「良いなあ。俺も欲しいよ」

「まだ3組残ってますから、きつと手にできますよ。そのうち」

「なあ、それ早速使ってみたらどうだ？ 2人がどんだけ変わるか見てみたいし！」

「待ってください。シローの話じゃ、一度使ったらしばらく使えないって言っていましたから、やっぱりいざという時じゃないと……」

九尾の意見に、当事者達も同意する。

「それが良い。無闇に使っても、その時に使えないんじや、意味がないからな」

「チエー。ま、そんな時のお楽しみってわけか。でも、早く見てみたいない！」

トップスピードは笑いながら、腕を背中に回して手すりに寄った。

「あ、だったらさー！ ライアに方が一の事があつたら、その時に使えばいいかも！」

「ああ、なるほどな！」

トップスピードが納得する中、リップルは、新機能に胡散臭さを感じつつも、どれほどの能力が備わっているのか、気にはなりつつあった。

「ああゝあ。結局新アイテムも、キャンディー集めをバカみたいに必死こいてやってたあいつらが独占する事になるんでしょ？　なんかつまらないなあ」

「し、仕方ないよ……。向こうがそう決めた、ルールだから……」

一方、門前町付近のビルの屋上では、ガイとたまが腰を下ろして会話をしていた。

先日、ウィンタープリズンを葬ったまでは良かったが、その後現れた黒い龍騎の介入により、ユナエルが殺害され、それ以降、王結寺内ではギスギスした空気が漂っていた。妹を殺されたミナエルは、ずっとブツブツ呟いており、パートナーのタイガはそれを陰から見つめており、ベルデは表にみせる事はなかったが、明らかに気分を悪くしている。アビスとスイムスイムは相変わらず何を考えているのか分からず、居心地を悪く感じた2人は、時折こうして、皆と別行動をとるようになった。

「まあ、ルールはルールだし、それにケチつけてもしょうがないんだけどさあ。なくんか物足りないっていうか」

「……………え？」

ガイの言い方に疑問を持ったたまが首を傾げる。対するガイは、仮面の下で不敵な笑みを浮かべると、手を叩いてたまの方に顔を向けて呟いた。

「ねえ、ここはさ。俺達でもっと盛り上げていこうよ。このまんまじやつまんないし、折角ライダーになれたんだから、面白い事に有効的に使ってかなきゃね」

「……！」

何かを企むようなパートナーの様子に、たまは怖気づいているのか、何も言い返せなかった。

「どいつもこいつも、俺をイライラさせやがる……！」

N市の城南地区の一角にあるビルの屋上では、王蛇が手当たり次第にフェンスや機材などを異常なまでに殴りつけていた。

先日ハードゴア・アリスによって腹を刺され、しばらく眠り続けていた王蛇だが、ようやく暴れ回るほどにまで回復し、それまで内に溜め込んでいたイライラを、そこら中にぶつけていた。

彼としては真っ先にハードゴア・アリスと戦おうとも思っていたが、彼女がどこにいるのかは、目下のところ見当がついていない。否、彼をイライラさせる者は他にもいる。

「あいつら、全員潰す……！」

「おいおい。随分と暴れてるじゃないか」

そこへ、パートナーのカラミティ・メアリが姿を現した。荒れている屋上を一通り見渡すと、笑みがこぼれた。

「相当イライラが溜まつてるようだね。そんなに誰かと戦いたいのかい？」

「当たり前だ。俺をイラつかせる奴らは全員敵だ」

「フフ。実を言うと、あたしもどうしても屈服させたい奴らがいるのさ」

「アア？」

「リップルと龍騎だよ。あいつらここ最近随分と調子に乗ってるみたいだからさ。このカラミティ・メアリの目が行き届いているところでそんな事されちゃあ、あたしの面子が潰れるってもんよ」

さっさと跪かせたい。そう呟いた、その直後の事だった。

「でしたら、私達の要望に応じていただければ、ご協力させてあげますよ」

透き通るような女性の声が聞こえてきて、カラミティ・メアリと王蛇が辺りを見渡していると、2人の背後に、いつの間にか2人の人影が立っていた。

「突然連絡なしにお邪魔して申し訳ありません。ちよつと興味深い話を耳にしたものですから」

「お前達のその願い、叶えてやってもいい」

「……ほお。どういふつもりか知らないけど、何を企んでいるんだい……？」

カラミティ・メアリは、目の前に現れた2人を見て、静かにその名を呟く。

「……クラムベリー、オーデイン」

65. 嘆きと決意

「何だお前ら……。どこから来た」

突然王蛇とカラミティ・メアリの前に姿を現したクラムベリーとオーデイン。オーデインは王蛇の質問に答える事なく呟いた。

「お前にその気があるのなら、戦いの舞台を用意しよう。お前が望んでいるものは何だ？」

戦いの舞台を用意する。それを聞いた王蛇は少し考える素振りを見せる。

「今は……。ハードゴア・アリス……。だったか？ 後は、龍騎あたりも良い。まあ、1分後にはお前らに変わってるかもしれないがな」

「あなたにとつて、あらゆる者が敵というわけですね。社会も人も、運命も、自分の中に溢れてくる憎しみに、溺れそうになっている。変わった趣向の持ち主ですね、あなたは」

クラムベリーの発言にイラつときたのか、王蛇が2人に向かって歩み寄る。

「……アア。1分もいらなかったな」

そう言つて王蛇は不意の右ストレートを突き出す。が、その拳は空を割き、気がついた時には、2人は王蛇の真横に移動していた。これには王蛇だけでなく、そばで成り行きを見ていたカラミティ・メアリにも動揺が走った。一瞬腰のホルダーからピストルに手をかけようとするメアリだったが、すぐに手を下ろした。

「……妙な手品を使う奴らだね。ま、あんたらはあたしに逆らう訳じゃなさそうだから良いけどさ。……で、見返りは何を？」

「難しい事ではありません。魔法少女やライダーと戦う姿を見てみたい。それだけです」

「……ほう。前々から変わつてるとは思つてたが、ようやく本性をさらけ出してきたつてどこか」

カラミティ・メアリは不敵な笑みを浮かべた。否、それはクラムベリーも同じく。

「おっと、あんたらはあんたらで要望に応えてほしいそうじゃないか。

そいつを先に聞かせてくれたら、考えてやるよ」

「始末してほしいライダーがいます。彼はこれ以上生かしておいても得になりませんから」

「……誰だ」

「仮面ライダー『ライア』。奴を倒せ」

「……ほう」

2人はそれほどライアと接点があったわけではないが、龍騎やリツプルと行動を共にしていて、どちらかと言うと平和主義者というイメージを、メアリは抱いていた。シスターナナほどではないにしろ、見ているイラつかせる所はあるな、と思っていると、王蛇は肩を竦めて呟いた。

「まあ、ライダーでも魔法少女でも、正直誰でも良いかな」

「それは頼もしい。では、彼らが次に拠点とする所をお教えしましょう」

そう言っただラムベリーが、ライアやその仲間に関する情報を伝えた後、オーデインと共にその場を立ち去った。静まり返った後、カラムティ・メアリは手すりから背中を離して、王蛇に顔を向けた。

「なら、いいカモになりそうな奴が、クラムベリーの口から出てたし、そいつをエサに、おびき寄せてやるか。あんたも良いだろ？」

「……ハッ。戦えるなら、何でもやってやる」

翌日の夕方、小雪はスノーホワイトに変身して、街中で一人、人助けをせつせとこなしていた。街を駆け回る最中、脳裏によぎったのは、ライアの占いによって暗示された、ライア自身の死だった。

「……ライアさんの占いは、ここまで全部当たってるって言うた……。それじゃあ、もうライアさんが死ぬのを待っただけしかないの……。そんなの嫌だけど、心を読むだけの魔法しか持たない私には、どうする事も……」

何度も打開策を考えては否定し、その繰り返しが続いていると、マジカルフォンからモンスターが近くにいる知らせを告げた。思わず路地裏に立ち止まるスノーホワイト。ただ、その気配はいつもとはまるで違う。これは、契約モンスターの気配だ。

そう気付いた直後、背後からスノーホワイトに向かって、胴の長い巨大な蛇が迫ってきた。

その頃、スノーホワイトのパートナーである九尾の変身者、榊原大地は大病院を訪れていた。親友の颯太の見舞いの為だ。

いつものようにノックするが、返事は返ってこない。その事に訝しみながらも、大地は扉を開けた。個室に一つしかないベッドの上で、颯太は膝を曲げて顔を埋めていた。

「……おい、大丈夫か」

「……」

颯太は何も答えない。大地は自身のマジカルフォンを取り出して、颯太のマジカルフォンにここまで獲得したキャンディーを分け与えようとするが、ここで颯太が初めて口を開いた。

「……そんな事して、どうするんだよ」

「……あ？」

「……もう、嫌なんだ。友達や、周りのみんなに迷惑かけっぱなしの僕が。決められた運命が、僕の周りから親しかった人達を奪っていく姿が」

「颯太……!」

「大地や小雪を、みんなを守りたい。魔法少女として人の役に立ちたい。悪い奴はやっつけたい。そう思ってあの時、戦ったのに、結局後に残ったのは、夢を押し潰されかけて、どんだん人は死んで……。もう、何一つ役に立てない僕には、魔法少女でも、岸边 颯太として生きる価値なんて」

この先、真っ当に生きていける自信がない。

そんな意味を含めた言葉を口に出した直後、颯太の右肩に強い痛みが走った。そして強制的に振り向けられたその先に、大地が突き出した右拳が。

殴られる。そう直感して目を瞑ったが、来るべきはずの苦痛が襲ってこない。恐る恐る目を開けると、拳は眼前で震えながら静止していた。そして右拳を下ろし、だが肩を掴んでいる左手は離す事なく、大地は颯太の目を真っ直ぐ見ていた。その表情は、悲しげな雰囲気醸し出している。

やがて彼はポツリと呟いた。

「……悔しく、ないのかよ」

「……え」

「お前、悔しくないのかよ……！ クラムベリーとかオーティンとか、まだ会って日も浅い奴らなんか、これまでお前が築き上げてきた理想を全部否定されて、夢も奪われかけて、本当に、何も悔しくないのかよ……！」

「……！」

「俺は、悔しいよ……！ 悔しいに決まってる！ ああそうだ！ めちやくちや悔しいんだよ！ あの時お前を助けに行ったのに、結局お前を危険に晒して、挙げ句の果てにこんな大怪我までさせちまって、活躍出来るはずだった大会に出る機会を失くして……！ こないだだって、先生を目の前で殺されて、その時だって、何も出来なくて……！ ベルデを倒して、先生の仇を討とうと思っていたのに、今度はその仲間が全員やられて……！ 空想にまみれた正義が、全部俺に歯止めをかけて、それで、何一つ守れなかった！ 俺は、そんな自分が許せないんだ……！ だからもう、俺は変わらなきゃって決めたんだ……！ その為なら、俺はこれから先、全てが血で汚れても、戦う！」

「大地……！」

「お前は、どうなんだ。今言ったのは全部俺の我が儘だ。お前は……」

「……」

震える声でそう問いかける大地に対し、しばらく黙りこんでいた颯太は……。

「……僕だって」

ようやく口を開いたのは、夕日が沈みきった頃。ゆっくりとした動きで大地の両腕を掴み、震える唇を動かした。その瞳からは、涙腺に沿って液体が流れ出ている。

「僕だって、悔しいよ……！ 何か見返りを求めてた訳じゃないし、誰かを殺してまで生き残ろうだなんて考えもしなかった！ それが魔法少女のあるべき姿、みんなと協力して悪に立ち向かう、そんなサスセストーリーを夢見ていた！ それなのに、あいつらはそんな僕

の全てを否定した……！ あいつらがやっている事は決して許される事じゃない！ なのにどうしてあいつらばかりに優遇されてしまっているんだよ!?？ 何で正しい事をしてる人達から先にこんな仕打ちを受けなきゃならないんだ……！ そんな運命、受け入れられるはずがないじゃないかあ……！ でも、僕にはこれからどうしたら良いのか、分からないんだ！ ウアアアアアアアアアアアア……！

話が進む度に、颯太の声は大きくなり、次第に腕を掴む力は強くなり、終盤では泣き叫びながら、大地に抱きついていて。大地も、抵抗する事なく、逆に颯太を抱きしめ返した。体を震わせながら、颯太の後頭部に手を回し、なるべく今の自分の顔を見せないように頭を近づけた。

しばらくして、ようやく落ち着きを取り戻した両者だが、先に口を開いたのは大地だった。

「……正直さ。ちよつと安心したかも」

「……？」

「ここでお前がまだ自分の生き方を否定するなら、もう諦めてたかもしれない。……でも、お前は自分に正直になれた。我が儘を言えるぐらいには、まだ心は折れてなかったんだなって」

「……それは」

「こんなの言うの恥ずかしいけど……。やっぱり、お前と友達になれて、マジで良かったと思う。……ありがとな。俺と、出会ってくれて」

「やめろよ。こっちまで照れるだろ」

薄っすらと笑みを浮かべる颯太。久しぶりに見れた事に、大地はどことなく満足していた。が、すぐに気持ちを切り替えて、窓の外に目をやった。

「さつき、こんな運命を受け入れられないって言ってたよな」

「？ そうだけど……」

「俺だつて受け入れたくないものがある。……ライアが、手塚さんが死ぬ運命なんて、何が何でも、変えたいんだ」

これを聞いて、パートナーの颯太は動揺するが、大地が思っていたものとは明らかに違うリアクションだった。

「!?? ちょっと、待って……!」 手塚さんが死ぬってどういう事だよ……!?? だって手塚さんが、次に死ぬかもしれないって言った人は……!」

「?」 待ってくれ。何か食い違いがあるのか……?」

颯太の言い方に疑問を抱いた大地は、颯太に手塚から見舞いに来てくれた際に話してくれた、占いの結果を聞き出した。全てを聞き終えて、今度は大地が愕然とする番だった。

「まさか、手塚さん……、あんたは……!」

何かを悟ったその直後、マジカルフォンが鳴り響いた。メッセージのようだ。大地がいち早く取り出して、内容を確認する。

そこに記載された文面に目を通し終えると、大地は腕を震わせながらマジカルフォンを握りしめていた。気になった颯太が声をかける。

「ど、どうしたんだ……?」

「……王蛇からの連絡だ。小雪が、スノーホワイトが、人質に捕らわれた」

「なっ……!」

「何のつもりか知らないけど、俺達を呼び出してきた。多分だけどパートナーのカラミティ・メアリもそこにいると思う。他のライダーや魔法少女を連れてきても良いって話だ。こなかったら、スノーホワイトを殺すって書いてあった。あいつの事だ。俺達と戦って楽しむのが目的かもな」

「そんなの……!」

颯太は思わずベッドから飛び降りたが、足に激痛が走り、床に両手と膝をつけた。

「颯太、落ち着け」

「落ち着いていられるかよ……!」 小雪が危険な目に遭ってるのに……!」

「ああ、そうだ。俺だって見過ごすわけない」

絶対にスノーホワイトは助け出す。誰一人殺させはしない。

そう呟いて、決意を固めた後、颯太と視線を合わせるように膝を曲げて、ハッキリとした口調で、親友に告げる。
「ぶっ壊そうぜ。こんなふざけた運命なんて、俺達でさ」

66. 運命が変わる瞬間（とき）

「早く来い……！　俺をこれ以上イラつかせるなよ……！」
「焦るなよ。ちゃんと果たし状は送ってやったんだ。お仲間のピンチにバカみたいに駆けつけてくるさ。あたしは気に入らないけどな、そういうの」

とある廃工場にて、王蛇とカラミティ・メアリは所々破れたソファーに腰を下ろしていた。2人の前方には、カラミティ・メアリが持参していた縄で手足を縛られているスノーホワイトが。

人助けの最中、背後からベノスネーカーに襲われて、体を締め付けられながらミラーワールドへ引きずり込まれ、一旦気を失ったが、再び気がついた時には、すでに手足が縛られた状態で、この場所にいた。そのスノーホワイトは、目の前にいる、自分をさらった張本人達に恐怖しているのか、その小さな体を震わせながら、それでも意を決して2人に言った。

「どうして……！　どうしてこんな事をするの!!？　同じ魔法少女や仮面ライダーなのに、どうして……！」

「……アア？」

2人の鋭い視線を受けて、スノーホワイトは萎縮した。王蛇は立ち上がって、近くに置かれていたドラム缶を蹴り飛ばした。ドラム缶はスノーホワイトの背後にあった壁に直撃する。

「戦いたいんだよ、俺は……！　だから、俺をあまりイラつかせるなよ。でなきや……」

「まあまあ、その辺にしときなよ」

と、そこへカラミティ・メアリが王蛇の肩を叩いて下がらせた。代わりにメアリがスノーホワイトに近づき、怯えているスノーホワイトに向かって、拳銃を彼女の額のど真ん中に突きつけた。スノーホワイトは目を見開いた。

「あんたとこうして面と向き合うのは、これが初めてだったね。なら、特別サービスだ。お前に良いことを3つ教えといてやるよ」

そしてメアリは一旦拳銃を下げてから、顔をスノーホワイトに近づ

けた。蛇にも似たその鋭い眼光から、スノーホワイトは目を離せなくなった。

「カラミティ・メアリに逆らうな。煩わせるな。ムカつかせるな。これだけだ。オーケイ？」

「ヒツ……！」

「ほら、返事は？ 黙ったままじゃ話にならないだろ？ それともアレか？ 1発その身に受けなきや分からないタイプか？」

そうして再び銃口をスノーホワイトに向ける。このままでは撃たれる。そう思ったスノーホワイトは涙を浮かべながら首を縦に振った。

「オーケイ。それで良い」

それで本人は満足したのか、笑いながらスノーホワイトから離れる。

カラミティ・メアリといい、王蛇といい、この2人は、異常だ。スノーホワイトはそう思わざるを得なかった。同じ魔法少女でも、一体何があったらここまで違ってしまうのか、スノーホワイトには理解出来なかった。

「（誰か、助けて……！）」

スノーホワイトが心の中で必死にそう叫んだ。すると、それに応えるかのように足音が近づいてきた。

一同がその方向に目を向けると、そこに現れたのは、ピンク色のエイをモチーフにした人影だった。

「へえ。あんたが一番乗りかい」

「ライアさん……！」

「待たせたな。もう大丈夫だ」

ライアはスノーホワイトを安心させるように言った後、王蛇とカラミティ・メアリに目を向けた。

「随分と大胆な行動に出たな。誰かに唆されたのか？」

「あんたの質問に答える義理はないよ。……で、あんた1人かい？

他の連中は？」

「今は俺1人だ。後の面々も直に来るさ。……出来ることなら、俺1

人で片付けたいところだか」

「誰でも良い……！ ライダーが相手なら、悪くない。やろうぜ。さつきからイライラして仕方ないんだよ……！」

首を鳴らしながら、戦闘態勢に入る王蛇だが、ライアが待ったをかけた。

「その前にスノーホワイトを解放しろ。約束通り来たんだ。これ以上、彼女を巻き込むな」

「そいつは聞けない相談だね。こいつはまだ人質として使える。他の奴らに手伝ってもらえ」

「……そうか。なら、場所を変えるぞ。ミラーワールドで戦おう。戦えるなら、どこでも良いだろ？」

「……アア。俺は構わないぜ」

王蛇も同意し、後方にある窓ガラスに親指を向けた。そしてライア、王蛇、カラミティ・メアリは窓ガラスに近づこうとする。と、そこへスノーホワイトの叫び声が。

「ライアさん！ ダメです！ このままじゃあなたは……！」

「大丈夫だ。運命は、変えられる(……本当に、変えられるのか。俺に、誰かの運命を変える事なんて)」

「！」

その時、スノーホワイトはハッキリとライアの心の声を聞いた。それは、今までの彼の占いに対する絶対的な自信とは裏腹に不安が勝るような言い方。スノーホワイトが再び声をかけようとした時には、すでに3人はミラーワールドに突入していた。残されたスノーホワイトはただ1人、どうする事も出来ない虚無感に、打ちのめされていた。どうにかして、自分もライアの役に立ちたい。そう思っていると、新たな足音が聞こえてきた。

一方、ミラーワールドでは現実世界と同様に、夕日が沈み、段々と辺りが暗くなり始めていた。

『SWORD VENT』

『SWING VENT』

王蛇はベノサーベルを、ライアはエビルウィップを召喚し、カラミティ・メアリは『スカーH』と呼ばれる武器を四次元袋から取り出して、引き金に手をかける。

2対1というハンデをかけられている中、劣勢に置かれているはずのライアは、考え事をしていた。

「俺はあの日、雄一の運命を変えられなかった後悔から、ライダーとして生きる道を選んだ。この力があれば、運命を変えられると思っていた。……けど、本当にそうなのか？俺には、運命を見通す力はあっても、変える力はないのだとしたら、俺は、何の為に……」

「ハアアアアア！」

「！」

だが、戦場で余所事を考えていればどうなるのか、目に見えていた。王蛇の奇襲に対応出来るはずもなく、ライアは押し倒された。そこへ更にスカーHの銃弾の雨が降り注ぎ、ライアは転がりながら回避する。

「くっ……！」

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうしたんだい！そんなんじゃないよ分もかからずに終わっちゃうよ！」

カラミティ・メアリは久しぶりに銃をぶっ放せる機会が来てご満

悦なのか、その口元は笑っていた。

そして立ち上がったライアに対し、王蛇の猛攻が容赦なく彼を襲い、全身に痛みが走った。エビルバイザーを盾にしても、王蛇の方がパワーが高いのか、全く止める事が出来ていない。そればかりか、王蛇の戦闘本能に余計な拍車をかけてしまっているようだ。

この時、ライアの中で一つの迷いが生じていた。それは、彼の唯一無二の親友だった斎藤 雄一に課せられた死の運命。手塚自身はそれを見抜いていたし、雄一も親友がそれについて苦悩している事も知っていたに違いない。このままでは、彼は思い悩み続ける。ならばいつその事、その枷を解いてやろう。そう思った雄一は自ら命を絶つ道を選んだ。

そう、手塚は思っていた。

『もつと、違う道があったんじゃないかって、そう思って……』

だが、先日パートナーのラ・ピュセルの変身者、岸边 颯太にそう言われて以降、心の隅で引っかかる所があった。

手塚は、雄一が自分で決めて死を選んだと思っていたが、もし、そうでは無かったとしたら……？ 本当は、助けを求めているのに、手塚自身がそれも運命だと勝手に決め付けて、見捨ててしまっていたとしたら……？

「(雄一)……。お前は、俺を恨んでいるのか？ 手を差し伸べてくれなかった事に。運命を変えられなかった事に。……なあ、教えてくれ、雄一)」

ライアは心の中で雄一に問いかける。だが、返事は返ってこない。代わりに返ってきたのは、ベノサーベルとスカーHによる一撃だった。銃弾が足首を掠め取り、ベノサーベルが肩に直撃して、ライアはうずくまった。

「手応えが無さすぎる」

「あいつらも随分と退屈な相手を選んできたな。まあ、ストレス発散には丁度良いか」

2人は肩を竦めながら、ライアにトドメを刺そうとする。と、その時、近くのため池からライアの契約モンスターであるエビルダイバー

が、契約者の意思とは無関係に、2人に突進してきた。

「おおつと……！」

「チツ……！」

「！ お前……！」

王蛇とカラミティ・メアリはそれを避け、ライアは突然現れたエビルダイバーに目を向けた。エビルダイバーはライアの周りを旋回し続け、戦いに集中しろ、と叱咤するようにライアを睨みつけた。ライアが戸惑っている間、エビルダイバーは再び王蛇とカラミティ・メアリに攻撃を仕掛けた。それを避けながら、王蛇は仮面の下でニヤリと笑った。

「よっぽど俺と遊びたいみたいだなア……。良いぜ、使つてやるよ」

そう言つて王蛇がカードデッキから取り出したのは、無色のカードだった。そこには、『CONTRACT』と書かれている。

「！ レアアイテムのカード……！」

王蛇はそれを突撃してくるエビルダイバーに向かってかぎした。するとカードとエビルダイバーは光り始めて、やがてカードが無色からピンク色の柄へと変貌したのを、ライアは見逃さなかった。

「……なるほど、こういう事か。面白い」

王蛇はエビルダイバーの攻撃を回避した後、カードに目をやってから再びデッキに戻した。そして再度攻撃を仕掛けるエビルダイバーだが、カラミティ・メアリが新たに取り出した鞭で絡め取られて、地面に叩きつけられた。

「ハンツ。契約モンスターと言っても、動きが読めれば大したもんじゃないね」

カラミティ・メアリがニヤつく中、王蛇は首を鳴らしてその場から動けないライアに向かって歩み寄る。ここまでダメージが蓄積されている影響からか、ライアは一步も動けない。

そしてベノサーベルが振り下ろされる瞬間、何者かが割って入って、ベノサーベルを受け止めた。ドラグセイバーを構えた龍騎だった。

「ライア、しっかりしろ！ もう大丈夫だからな！」

「龍騎……！」

「俺達もいるぜ！」

その横手から、ラピッドスワローを片手に持つトップスピードが登場し、その傍らにはスノーホワイトがいた。どうやら2人が駆けつけた事で解放されたようだ。

「ライアさん！ ごめんなさい、私が捕まっちゃったから……！」

「お前のせいじゃない。それよりも、今は……」

「ようやくお仲間のご到着かい。おまけに龍騎が来てくれるとはねえ」

「お前の方がまだ面白い」

「ふざけんな！ 今度は俺が相手だ！」

龍騎は怒りの矛先を2人に向けて、ドラグセイバーを片手に駆け出し、王蛇と激突した。

「龍騎、ダメだ……！ このままでは……！」

ライアが必死に何かを訴えかけていたが、カラミティ・メアリが銃口を龍騎に向け始めたのを見て、トップスピードがラピッドスワローを放り捨てて、慌ててそれを取り押さえた。

「止めてくれ姐さん！ いくら姐さんでも、こればかりは見過ぎせねえよ！ そもそも、こんな事して何の得になるんだよ！」

「……ごどばかりに正義感をぶっかけてくるねえ。前から思ってたんだけどさあ。あんたのそういう所、ハナっから気にいらねえんだよ！」

腕にしがみついていたトップスピードを振り払って、スカーHを向けて、銃弾を放つメアリ。トップスピードは悲鳴をあげながら逃げ惑い、走りながらマジカルフォンをタップして、ドラグシールドを構え、銃撃を防いだ。

「要は、生き残れば良いんだろ？ なら、何でもやるに決まってる。それが魔法少女でもあって、仮面ライダーでもあって、人間の本性みたいなもんだろ？」

「そんな……！」

ライアに付き添っていたスノーホワイトが絶句する中、龍騎と王蛇の戦いの方も激しさを増した。

「オオ、良い感じだ……！ 前にお前と戦ってから、お前を倒す事が生き甲斐になった……！」

「お前……！ どこまで狂ってやがるんだ！ 関係ないスノーホワイトまで巻き込んで……！」

龍騎が王蛇の腹に蹴りを入れ、怯ませる。が、王蛇はその直後にカードデッキから1枚のカードを引き抜いていた。それに気づくことなく龍騎が走り出すと同時に、王蛇はベノバイザーにそのカードをベントインしていた。

『ADVENT』

その電子音と共に現れたのはベノスネーカー……ではなく、エビルダイバーだった。

「ガッ……!?？」

横手からの不意の一撃に対処出来ず、龍騎は体当たりを受けて、横に転がった。そして追撃とばかりに、王蛇に腹を踏まれる龍騎は、そこで体当たりしてきたモンスターに目を向けた。そこにいたのは、自分が知っているエビルダイバーとは色が違うものだった。本来ならピンク色のはずが、黒色に染められている。

「！ どうして、ライアの契約モンスターが……！」

「さっき、王蛇はコントラクトのカードで、エビルダイバーの姿をコピーしたんだ……！」

一部始終を見ていたライアはスノーホワイトに支えられながら、龍騎にそう告げた。

「そんな……！ それじゃあこいつは今、ライアの力の一部も……！」
「そういう事だ。さあ、もっと楽しもうぜ」

王蛇は笑いながら龍騎を蹴飛ばした。そこから先は、龍騎の劣勢だった。立ち上がった後も殴られ続け、次第に気力が失われつつあった。

「龍騎さん！」

「龍騎……！」

「ほらほら、よそ見してる暇あるかなあ！」

「うわっ！」

「……そうか。なら、消えろ！」

そう言つて、王蛇が2枚ある内の1枚をベノバイザーにベントインした。そこに描かれていたのは、蛇の紋章。選んだのは、自身の必殺技。

『FINAL VENT』

「ハアアアアアア……！」

「！ 嘘だろ……!? 逃げろ、龍騎！」

「くっ……！」

トップスピードが叫ぶが、今の龍騎に逃げるだけの余裕は無かつた。

「！」

その瞬間だった。

ライアは龍騎に向かって無意識に駆け出した。何が彼をそうさせたのかは、自分自身よく分かっていない。もしかしたら、先ほど危険を顧みず龍騎を助けようとしたスノーホワイトの行動に触発されたからかもしれない。だが、触発にしろ、自分の無意識な選択にしろ、全ては、運命を変える為の行為だったと、ライアは信じたかった。

「(雄一……。今なら分かる。お前は、後悔なんてしていなかった。だからあの時、お前はあの選択をした。それは、生き永らえようとして他人に迷惑をかける自分が嫌だったわけじゃない。『運命』に固執し続け、定められたルールしか見ていなかった俺の運命を、変えようとしていたんだ)」

それに気づいた時には、多くの魔法少女や仮面ライダーは死に絶えた。何もかも遅すぎたかもしれない。もっと早く気付いていれば、救えた命もあったかもしれない。誰かの涙を流させる事も無かつたかもしれない。運命を、変えられたかもしれない。

「(許せ、雄一。俺はお前の思いに気付いてやれなかった。だが、この運命だけは、変えてみせる。これが、俺の意思だ)」

王蛇は後方から現れたベノスネーカーの口元に向かって回転しながら飛び上がり、両足を龍騎に定めた。そして放たれた毒液に乗り、王蛇は『ベノクラッシュ』を発動した。

「ハアアアアアア！」

「！ や、やめてえ！」

「龍騎い！」

「……ッ！」

スノーホワイトとトップスピードの叫び声がミラーワールド内に響き渡り、龍騎が身構える。その直後、ライアが龍騎を突き飛ばした。突然の事で驚きに満ちた様子の龍騎に目を向けた後、ライアは顔だけを、迫り来るベノクラツシュに向けていた。眼前に迫る死の一撃。だが、ライアには恐怖心は芽生えなかった。彼は、後悔する道を選ばなかったからだ。

「（これで、良いんだ。これで、龍騎は助かり、俺は死ぬ。後悔はしない。俺が、俺自身の手で、運命を変えられた。それだけで、十分だ）」
ライアは、手塚は、仮面の下で静かに微笑み、そして満足げに呟く。

俺の占いが、やっと、外れる……。

……そう。

運命は、確かに変わった。それは、紛れもない事実。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
ただし。

運命を変えたのは、運命を見通せる力を持つ者では無く、運命など
見えるはずもない、2人の少年だったが。

「……！」

「ハアッ！」

自身の身長より少し大きい大剣を地面に突き刺した、魔法騎士『ラ・ピュセル』は、隣で支えてくれている仮面ライダー『九尾』と共に、腕の力だけで大剣を握って踏ん張った。

龍騎を突き飛ばしたライア。そのさらに前方で、ライアに直撃するはずだったベノクラッシュを、九尾とラ・ピュセルが構えた大剣でガードしたのだ。

『！』

その場にいた、九尾とラ・ピュセル以外の面々は、驚きを隠せない。だが、王蛇はイライラが最高潮に達したのか、さらに連続で蹴りを叩き込んだ。すると、ベノスネーカーの吐いた毒液で大剣が溶け始め、さらに衝撃でヒビが入ってきた。そして何度か蹴りが叩き込まれるうちに、遂に限界が来たのか、大剣は根元から大破し、その衝撃で大剣を支えていた九尾とラ・ピュセルは後方に吹き飛ばされた。

「ウアアアアアアアア！」

「グッ……！」

当然後ろにいたライアも巻き添えをくらい、3人は地面に叩きつけられた。が、呻き声こそ聞こえてくるものの、3人ともまだ息はある。ベノクラツシユの直撃が避けられた事で、致命傷を受ける事なく、運命は変わったのだ。

「グッ、ウウ……！」

「ハアツ、ハアツ……！」

「！ 九尾！ ラ・ピュセル！ ライア！」

「……アア？ どういうつもりだ」

一方でトドメを刺しきれなかった王蛇はイライラしているのか、低い声で呟く。一方でカラミティ・メアリは、地面にへばりついているラ・ピュセルの後ろ姿を見て、鼻で笑った。

「……ハッ！ 死に損ないの魔法少女が、随分と張り切ってるみたいだけど、そんな事して何の得があるんだい？ さっさとライアを見殺しにすれば、その週であんたの脱落は無し。16人の枠に残れたはずだろ？」

「姐さん……！」

トップスピードが言及する前に、ラ・ピュセルの言葉がそれを遮った。

「……死なせ、ない！」

「あっ？」

「挿入歌：果てなき希望」

カラミティ・メアリが呆けた声で呟く中、ラ・ピュセルはヨロヨロ

と立ち上がった。震えてはいるが、確かに自力で立ち上がっている。
「！　そうちゃん、足が……！」

魔法少女になって身体能力が向上した事で、魔法少女姿なら頑張つて立ち上がれるほどにまで回復していたようだ。そして彼女は、折れた大剣の柄を持つて、全身を震わせながら、目の前に掲げた。

「もう、仲間を、死なせない！　この剣に、誓う……！　魔法騎士ラ・ピュセルは！　自らの手で、悪夢を変えると！　仲間と共に、運命に立ち向かうと！」

「ああ、そうだ……！　俺達は、決して恐れない……！　終わらなき戦いになったとしても……！」

九尾も立ち上がり、王蛇とカラミティ・メアリに向かって叫ぶ。

必ず、立ち上がってみせる、逆境でも。

それは、揺るぎなき気高さを、心に抱く事のできた2人だからこそ口に出た言葉。命が、希望が果てる事はないと、そう夢見ているのだ。

「九尾、ラ・ピュセル……。……そうか」

「……くつだらなねえ。理屈はどうあれ、あんたらもあたしらに逆らうって訳かい。ムカつかせるねえ」

「どいつもこいつも、俺をイライラさせる奴らばかりだなあ……！　お前ら全員、潰してやるよお……！」

王蛇とカラミティ・メアリが再び戦闘態勢に入り、九尾達が身構えていると、上空からダークウイングの鳴き声と共に、ダークウイングを従えているナイトが王蛇へ体当たりを仕掛けた。王蛇は吹き飛び、カラミティ・メアリが訝しんでいると、別方向から手裏剣が迫ってきたので、それらを全て撃ち落とした。そしてメアリの前に姿を現したのは、ナイトのパートナーであり、メアリの因縁の相手でもあるリツプルだった。

「リツプル……！」

「随分と派手に暴れたな」

両者が睨み合う中、着地したナイトは、後方にいる九尾達の姿を確認してから叫んだ。

「お前達は逃げろ！　後は俺達でやる！」

「ナイト……！ 分かった！」

本当なら加勢したい気持ちもあつたが、龍騎自身体力に限界を感じている為、素直にナイトの言う通りにした。その間にスノーホワイト、トツプス、ピードも龍騎と共に九尾、ラ・ピュセル、ライアのもとに駆け寄る。九尾とラ・ピュセルも極度の緊張から解放されたからか、地面に座り込む。

「だいちゃん！ 怪我はない!?？」

「……ああ、問題ない」

「大丈夫か!?? どこか痛むところは……」

「今のところ、足以外は」

「ライア、俺に掴まれ！ すぐにここから出るぞ！」

「ああ。悪いが頼む」

そして龍騎はライアを、スノーホワイトは九尾を、トツプス、ピードはラ・ピュセルに肩を貸して支えながら、入ってきた鏡に向かって歩き出す。ミラーワールドから出る前に、トツプス、ピードは今一度後ろを向いて、ナイトとリップルに向かって叫んだ。

「お前らもキリのいいところで早く戻れよ！ 待つてるからな！」

2人は首を振る事も、声に出す事も無かったが、理解しているだろうと思つたトツプス、ピードは、そのまま皆を引き連れてミラーワールドを後にした。

「丁度良いや。あんたとはそろそろケリつけときたかつたし、この争いに準じて、殺り合うかい？」

「今のお前に、私は殺せない」

「アア？」

リップルの言い方に訝しむカラミティ・メアリ。ナイトとリップルは目を合わせて頷くと、ナイトは王蛇を、リップルはカラミティ・メアリを睨みつけた。しばらく沈黙が流れた後、ナイトは1枚のカードを、リップルはマジカルフォンを取り出して、タップした。

すると、2人を中心に、風が吹き荒れた。

「(風……?)」

ミラーワールド内では基本的に無風のはずだが、これも2人が引き

起こしたもののなのか？

初めて、目の前の敵に警戒心を強めたカラミティ・メアリは、スカ―Hに強く握りしめた。

その頃、無事にミラーワールドから脱出し終えた6人は、廃工場から少し離れた場所で腰を下ろして、息を整えていた。

「ハアツ、ハアツ……！」

「な、何とか逃げ切れたな……」

「そうちゃん、大丈夫……？」

「あ、ああ。ちよつと足が痛むけど、これくらいなら平気だ。スノーホワイトこそ、無事で良かった」

「ゴメンね、みんな。私が捕まっちゃったから、みんな酷い目に……」
「気にしなくて良いって。悪いのはあいつらなんだからさー」

涙を浮かべながら謝るスノーホワイトに対し、龍騎は慰める。

「そうだぜ！ それにライアの占い通りにならなくて済んだんだし、

万々歳じゃねえか！　そうだろ、ライア！」

「……ああ。そうだな」

ライアが頷くと、九尾が口を開いた。

「……ライア。あんたは、自分じゃなくて龍騎の運命を変えようとした。でも、その自信が無かった。だから俺達に嘘をついてたんだな」
「……颯太から全部聞いたのか。確かに、颯太の為とはいえ、迂闊だったな。まあ、結果オーライだったかもしれない」

ライアが苦笑混じりに呟くが、スノーホワイト、トップスピード、そして名前を出された龍騎には何の事かサッパリだった。

「えっ？　どういう事？」

「龍騎の運命を……。だって次に死ぬのは、ライアだったんじゃない……」

トップスピードの疑問に対し、ライアは小さく首を横に振って、そして告げた。

「違う。次に消えるはずだったのは……。……本当は、お前だったんだ。龍騎」

「「……」」

それを聞いた3人は愕然とした。龍騎本人は思わず自分の手を見つめ、パートナーのトップスピードに至っては思わず彼の右手を掴んでしまうほどだった。

「ほ、ホントかよ……」

「ああ。俺自身、あの時はそんな未来を受け入れたく無かった。そして変えたいと思った。だから俺はあえて占いの結果と違う事を、颯太以外に伝えた。……まさにライアという言葉が相応しい」

自嘲気味に全てを語るライア。他の面々は何も言い返せなかった。「だが、こうして運命は変えられた。……もつとも、九尾とラ・ピュセルによって変えられるとは夢にも思わなかったがな」

「途中で気付けて良かったよ。でも、僕達の介入がなければ、君はあの時死んでいたはずだ。僕達の為を思って嘘をつくのは良いけど、自分の事も大事にしてほしい。僕も、これからはそう肝に銘じておくから」

「ああ、そうだな。こうして運命が変えられると証明された今なら、その事もよく分かる」

ライアが一息つくくと、6人の所へナイトとリップルが現れた。どうやら無事に帰還出来たようだ。

「あつ！ ナイト、リップル！」

「どうやら全員無事らしいな」

皆は2人の安否を確認出来たところでホツとし、それからすぐに九尾が尋ねた。

「……王蛇とカラミティ・メアリは？」

「途中でモンスターが乱入してきて、逃げられた」

どうやら勝負はドロウとなったようだ。ともあれ、誰一人として欠ける事なく生還出来た事に、龍騎やトップスピードを始め、スノーホワイト達も喜んでいた。ナイトとリップルは表情に出さなかったが、舌打ちはしなかった。

その後、ラ・ピユセルを大病院に送り返し、一旦各々の家に戻る事に。そんな中、自宅で変身を解いた手塚は、ちらほらと見え始めた星空に目を向けた。

「……見てるか、雄一。俺もようやく、運命を変えられるという確信を得たぞ」

そして彼は、ポケットからコインを取り出し、夜空にかざしながら、今一度この言葉を呟く。

「俺の占いが、やっと、外れたな」

67. 姉の復讐 サバイブの力

王蛇、カラミティ・メアリとの一戦から一夜明けた、次の日の夕方。この日は比較的、争い事や揉め事が少ないように、龍騎は感じていた。

「いや、しっかし昨日はアレだな！ 危なっかしい場面もあったけど、みんな無事で良かったよな！」

「あ、ああ。そうだな！ 運命も変えられたんだし！」

意気揚々と語るトップスピードに、龍騎も賛同の意を示していた。一方でナイトとリップルのペアは、まだその事を話題にしているのか、と言わんばかりに呆れながら、高速道路が通る山にある、高台の公園から街を見渡していた。

昨日の夕方、スノーホワイトを人質にとった王蛇、カラミティ・メアリと対決。その際、龍騎を庇う為、そして何より定められた運命を変える為にと前に出たライアは、犠牲を覚悟に、龍騎を突き飛ばす。が、その直後、後から駆け付けた九尾とラ・ピュセルの登場によつて運命はさらに大きく変わった。結果として王蛇とカラミティ・メアリも撤退をし、誰一人欠ける事なく、彼らは生き延びたのだ。

因みに、そのライアの変身者、手塚はこの日、用事があつて来れない事になっていた。理由は話してくれなかったが、おそらく彼の今は亡き親友の雄一の墓参りに行って、報告でもするつもりだろうとナイトは推測する。リハビリ中の颯太もそうだが、大地、小雪も用事がある為、この日は合同出来ない。よつてこの4人でキャンディー集めに勤しむ事になった。

そんな中、パトロールにも飽きてきたのか、龍騎は昨日王蛇とメアリが撤退する原因となった、あるシステムについて聞いたのだ。にしても、その……『サバイブ』、だっけ？ それ結構凄いな。だって、あの2人を圧倒したって聞いたけど……」

「で、どうだった？ 使ってみた感想は？」

トップスピードに急かされながらも、リップルは舌打ちしてからその問いに答えた。

「……まあ、悪くはない。あの2人に一泡吹かせただけでも充分」

「どうやら高性能なアイテムである事は実感出来たようだ。そこへナイトが口を挟む。」

「だが気になるのは、なぜこんなアイテムを解放する必要が出てきたのか、だな」

「えっ？ でもそれってファヴとシローが、景気付けにプレゼントするものだって言ってたじゃないか」

「バカが。ここまで多くの脱落者を、犠牲者を出しておいて、その代価がペアの強化？ 割に合わない。この力なら、その気になれば誰かを殺す事だって可能だ」

「ちよっ、何でそんな物騒な事言うんだよ……」

トップスピードが咎めるが、ナイトはスルーして呟いた。

「ライアの話だと、このサバイブにはこの先の戦いの運命を変える何かが秘められていると言っていたな……」

「何か、戦わせる事に意味があるのか、それとも……」

「まあ、向こうが何を企んでいようと、俺達には関係ない。この力は俺達の目的に有効的に使わせ……！」

そこまで呟いたその時、ナイトはハッと上空に目を向けた。何かを察したようだが、トップスピードが尋ねる前に、事態は動いていた。

「伏せろ！」

「おわっ！？」

唐突にナイトに飛びかかれて、戸惑う龍騎。2人が地面に倒れこんだ直後、上空から何の音もなく、巨大な球体が地面に落下した。その衝撃で、近くにいたトップスピードとリップルも軽く吹き飛ばされる。

「な、何だよいきなり！？」

トップスピードが喚きながら立ち上がり、ようやくその球体を見据えた。

そこにあったのは、解体作業でよく見かける、巨大な鉄球。落下地点は龍騎が立っていた場所。もしナイトが気づいていなければ、龍騎は抵抗する間もなくペチャンコに潰れてしまっていただろう。

「て、鉄球!?!? どこから降ってきたんだよ……!」

まさか、また死の運命が働こうとしているのか。トップスピードは素早く龍騎とナイトのそばに寄り、龍騎を守るように立ちはだかる。『ああゝあ。なーんで声出しちゃうのかなあ。同じチームだからって、一応敵同士でしょ?』

「!?!?」

「!」

龍騎、トップスピードは驚き、ナイト、リップルは警戒心を強める。鉄球が言葉を発した。そう思った直後には、鉄球の形は歪み、やがて人型となった。

宙に浮いているその小柄な天使は、彼らが何度も見かけた魔法少女だった。彼女を最後に見たのは、港でのキャンディー争奪戦以来となるか。

「ミナエル……!」

「いいよねえ。あんた達のチームは仲良しこよしで上手くやっててさあ。……ムカつくぐらいに」

そう呟く魔法少女、ミナエルは笑っていた。だが、4人は警戒を怠らない。目の前にあるその笑みは、不気味で狂氣的だった。

「と……ころでさー。龍騎い」

「な、何だよ……!」

「……あんただけはさ。誰一人殺そうとせず平和ボケな正義を振りかざして解決しようとするタイプのバカだと思ってたけどさ」

やっぱ、そんなの甘かったよね。

そう呟きながら、顔を俯かせて、マジカルフォンを取り出すミナエル。そしてその両手には、パートナーであるタイガの武器、デストクローが取り付けられると、一気に態度を豹変させた。

「……てなわけです。さっさと死んで詫びろよ龍騎!」

「!」

刹那、ミナエルは猛スピードで龍騎に迫り、その首元めがけてデストクローを振り下ろす。が、龍騎は紙一重でかわした。

「チツ! 運の良いやつ! ほんつつつとムカつく!」

「ちよ、待って……!」

『GUARD VENT』

さらなる追撃を回避した後、龍騎はカードをベントインし、ドラグシールドを両手に持ってミナエルの猛攻を防ぐ。が、ミナエルは目を血走らせながら、攻めの姿勢を崩さなかった。それに加え、感情を露わにしながら暴言を吐き散らしていた。

「死ね、死ね、死ね! さっさとやられろよ! ユナの仇、とらなくちやならないんだよこっちは!」

「お、おい! やめろよミナエル! 龍騎が何したってんだよ!」

トップスピードが大声で止めさせようとするが、それで止まるミナエルではない。

「こいつは……! こいつが、ユナを……! お前は絶対に誰かを殺さないって思ってたのに! なのに……! 絶対に、殺す!」

「な、何で俺が誰かを殺した前提になつてんだよ!? 俺はそんな事してないって! ってかそんな俺は反対だぞ!」

「うっさい! あたしはこの目で見たんだ! あんたがユナを殺した瞬間を、この目で、タイガ達と一緒になあ!」

「……何?」

「どういう事だ」

ミナエルの発言に、ナイトとリップルは訝しむ。彼が仮面ライダーとなり、同じチームとして行動を共にするようになってから少しずつではあるが、龍騎の、正史の大体の素性は見えてきていた。トップスピードと似た、とにかくバカがつくほどに素直で、騙されやすく、誰かと戦う事に迷いすぎて見られない部分もあるが、その芯は誰よりも強い、といったところか。その龍騎が人を殺めるなど、2人には想像出来ない。だがミナエルが嘘をついているようにも見えない。事実、彼女の片割れはすでに脱落している。おそらくこれも誰かの手によって殺された、と推測はしていたが、それに龍騎が関わっていると、2人には考えられない。

そこで2人がとった行動は至極単純だった。
「フツ!」

リップルが手裏剣を投げて、魔法でコントロールする事で、掠めとる程度にはミナエルにダメージを与えた。片腕から血が流れ、距離をとるミナエル。そこへナイトが追撃とばかりにダークバイザーで斬りかかる。回避されたが、結果的にミナエルを龍騎から引き離す事に成功した。トップスピードも龍騎のそばに駆け寄り、安否を確かめる。

「大丈夫か!?？」

「お、おう。俺は平気」

「……何なんだよー」

そう吐き捨てるミナエルの顔には、苦痛と怒りが入り混じっていた。

「何で、どいつもこいつもあたしやユナの邪魔ばかりするんだよ……！ あたし達だって、生き残りたかった……！ 2人一緒なら、何でも出来るのに……！ だからあの時、決めたんだ。お前だけは、何が何でもユナと同じ目に、いやそれ以上に酷い目に遭わせてやるって！」

「ユナエルの仇討ちってわけかよ……！ でもそれは……」

「やったのはこいつじゃない」

トップスピードが説得に入る前に、ナイトが横から口を出した。

「ああ!?？ どこにそんな証拠があるんだよー！」

「それはお前も同じだろ？ 俺も付き合いが長いわけじゃないが、それでも分かった事はある。……こいつは、同じ力を持つ奴らとは戦う事を拒む、戦場には向かないバカだ」

「そんなの今更……！」

「確かに」

ナイトはそこで止まる事なく、これまでとは雰囲気を変えて、こう呟いた。

「確かにこいつはバカだが、俺やお前よりは、ずっとマシな人間だ」

「蓮……、お前……！」

ナイトの評価に驚く龍騎。

「おお、良い事言うじゃねえかナイト！」

「……」

トップスピードは場違いな歓喜をし、リップルは黙って目をそらす。

「……だからって、もう後戻りなんて出来るかよ！　あたしは、ユナの弔い合戦をするって、決めたんだ！　こんなところで、こんなところでええ！」

そう叫んで再び突撃しようとするミナエルだが、唸り声と共に現れた存在が、行く手を遮る事になる。

「！　モンスター！」

現れたのは、両腕に頑強なカッターを備えたレイヨウ型モンスター『オメガゼール』。これを見たナイトとリップルは、ダークバイザーや小刀を構えて対峙した。オメガゼールはその驚異的な脚力と素早い動きで、ナイトとリップルを振り切り、2人や龍騎達になりふり構わず襲いかかってくる。

オメガゼールの攻撃を回避しながらも、ミナエルは常に龍騎を睨みつけていた。

「だったら……！　デストワイルダー！」

「うわっ!?　?　こんな時にもかよ！」

龍騎は慌ててミナエルが呼び出したパートナーの契約モンスター、デストワイルダーの急襲から逃れようとする。トップスピードもドラグセイバーを構えたのを見て、龍騎も続けざまにカードをベントインした。

『SWORD VENT』

「やめろって！　今はモンスター退治の方が先決だろ！」

「知るかよ！　お前さえ葬れば、後はどうなったって知ったことか！」
「こいつ、どこまで頑固なんだよ……！」

トップスピードがそう毒突くが、ミナエルは聞く耳を持たない。

一方、オメガゼールと戦うナイト、リップルペアも舌を巻いていた。

「……速い」

「……時間をかけると面倒だ。一気に決めるぞ」

「……サバイブか」

「ああ」

2人はオメガゲールを一瞬の隙をついて蹴り飛ばし、距離をとった。そしてナイトは1枚のカードを、リップルはマジカルフォンを取り出し、相手に見せるようにかざした。ナイトが持つカードやマジカルフォンに出たアイコンには、それぞれ翼が描かれており、『SURVIVE』と表記されている。

すると、2人を中心に風が吹き荒れた。

「！ あれって……！」

「何かよく分かんないけど、凄いのが来そうだぜ……！」

龍騎とトップスピードが期待を寄せる中、ミナエルは背筋から冷たい汗が流れ落ちた。前に2人が新たに配布されたレアアイテムを所持している事は知らされたが、とてつもない迫力を、ミナエルは感じ取っていた。

そして、ナイトの持つダークバイザーが盾状の召喚器『ダークバイザーツバイ』へと変貌し、リップルの左腕に、マジカルフォンがスツポリと嵌るようなはめ込み式のケースが出現した。ナイトはサバイブのカードをダークシールドに差し込み、リップルはマジカルフォンをケースに装填した。

『SURVIVE』

ダークバイザーツバイとマジカルフォンから、エコーのかかった電子音が鳴り響き、ダークブレードを引き抜いたナイトには鏡像が重なり、リップルは光に包まれる。やがて姿を現した2人の容姿は劇的に変化していた。

ナイトは紺色から青と金のラインが目立つようになり、西洋の鎧のようなものを纏い、背中にマントをなびかせている、『ナイトサバイブ』へ。

リップルは腕と脚が忍び装束で覆われ、口元はマスクで包まれ、胸部につけられていたビキニはホルターネックへと変わり、膝から下は脚絆で守られ、下駄だった履物は草履へと変わっている。髪留めとしてつけられていた手裏剣ヘアアクセも、左側から後頭部に移動しており、左腕につけられたマジカルフォンがピンクから紺色へとチェンジ

している、『リップルサバイブ』へと変身を遂げていた。

「挿入歌：果てなき希望」

「うおつり!?? これが、サバイブ……!」

「スゲー! カッコいいじゃん!」

龍騎とトップスピードが賞賛する中、ミナエルは苛立ちを隠せなかった。

「姿が変わったからって、何なんだよ!」

「……なら」

そう呟いて、リップルサバイブはマジカルフォンをタップして、パートナーと同じ武器であるダークブレードを手に持った。そして襲いかかるミナエルを正面から捌いていく。その差は第三者から見ても、一方的なものだった。

それもそのはず。今現在ミナエルが敵にしているのは、あの王蛇やカラミティ・メアリをも凌ぐ力。到底彼らの足元にも及ばないミナエルでは、歯が立たないのだ。だがミナエルも頭に血が上っているのか、攻めの姿勢を止めない。

「こ、のお……! パワーアップしたからって、いい気になるなよお!

デストワイルダー! お前もやれえ!」

「負け犬の遠吠えみたいだな。なら、少し頭を冷やせ」

呆れ口調でそう呟いたナイトサバイブは、新たにカードを1枚取り出してベントインした。

『BLAST VENT』

すると上空から、サバイブの恩恵を受けてダークウイングの進化形態『ダークレイダー』が姿を現し、両翼のホイールから凄まじい突風を放った。

「ぐ、アア!」

ミナエル、デストワイルダーだけでなく、近くにいたオメガゼールも巻き添えをくらい、3体はなす術なく地面に叩きつけられた。そしてナイトサバイブは手を休める事なく、カードを渡しベントインす

る。

『FINAL VENT』

と、今度はナイトサバイブがダークレイダーの上に乗ると、形そのものが変形し、バイクモードへと変化した。

「ば、バイク!?」

「何かスゲエよ……」

龍騎とトップスピードが目を見開く中、ナイトサバイブはしばらく走らせ、3体に向かって機首からビームを放った。ミナエルとデストワイルダーは間一髪のところまでこれを回避。オメガゼールだけがビームを受け、その場から動けなくなった。どうやら拘束されたようだ。そして背中にあったマントが翼のようになって車体を包み、一気に速度を上げて突撃し、オメガゼールを難なく爆散させた。ナイトサバイブの必殺技『疾風断』が命中した証拠である。

ナイトサバイブはブレーキをかけ、ダークレイダー・バイクモードから降りて、ミナエルにダークブレードの剣先を向ける。

「次は、お前だ」

「ぐ、うう……!」

「お、おい! もう良いって! 勝負はついたんだし、後は……」

「勝負は、ついた……!? ふざけるのも、大概に、しろよお……!」

あたしは、龍騎を、殺して、ユナの……!」

ミナエルは口から血を流しながら、龍騎を睨みつける。とはいえ、もう満身創痍とも見て取れる。リップルサバイブがトドメを刺そうと決めたその時、森の奥からエンジン音が鳴り響いてきた。一同がその方に目を向けると、奥から現れたのは、アメリカなのでよく見かける、車高の高いモンスターバイク。それが龍騎達に向かって突っ込んでくるではないか。

「! 避ける!」

トップスピードの叫び声と共に、他の3人も一旦後方に下がった。

やがて土埃が晴れると、モンスターバイクの姿は消え、代わりに1人の全体像が見え始めた。そこには、ぐったりしているミナエルと、ミナエルを片手で抱えている彼女のパートナー、タイガがいた。先ほ

どのモンスターバイクは、タイガがパートナーカード『トランスベント』で生き物以外、つまり乗り物に変身してこの場にやってきたようだ。

「お前……！」

「……」

タイガは何も言わず、一度ミネエルに目を向けた後、背を向けてその場から立ち去った。ナイト、リップルはそれを確認した後、元の姿に戻った。

「行っちゃった……」

「ふう。何とかなかったって感じ？」

「あまり油断するなよ。向こうはまだ、お前が双子の片割れを殺したと思っ込んでいる」

「分かってるって。……あ、後さ。さつきはありがとな」

「何がだ」

「俺の無実を証明しようとしてくれて。お前、結構良い奴だな」

「……フン。バカが」

ナイトは鼻息を荒げただけで、それ以上何も言う事はなかった。トップスピードはニヤけ、リップルはいつもの如く、舌打ちを響かせた。

「クツソオ……い。あいつら、あんな隠し玉まで……！」

一方、龍騎達から逃げ帰ったタイガは、途中で目を覚ましたミナエルを安全な場所まで避難させていた。ミナエルはタイガに感謝の言葉をかける事なく、悪態をついていた。その小さな瞳からは、はち切れんばかりの憎悪が煮えたぎっている。

「こうなったら、もう誰でも良い……！ あたしとユナの幸せを邪魔しようとした奴は、片っ端から全部殺してやる……！ だからもうちよつとだけ待ってて、ユナ……！」

「……」

握り拳を固めるパートナーを、タイガは黙って見つめていた。その姿からは、何を考えているのかも想像がつかないほどに。

『で、本当に良かったのか？』

『ぼん？』

『確かにこれで現状生き残っているメンバーの戦力の差が均等になるのは間違いないだろうが、あのサバイブは、かなりイレギュラーな力だ。下手に監視を怠れば、我々の目的の妨害として悪用され兼ねない』

『……はあ。シローは心配性だぼん。向こうがそれを知った頃には、この試験は終わりがけるだろうし、その時には、向こうもファヴ達を受け入れてくれるぼん』

『だと良いがな。長年人間を観察してきたが、どうにも不確定要素、情緒不安定な箇所が多い。下手に手を打てば、何をしでかすかも分からない。それが人間の面倒な所だ』

『だったらファヴはそれでも構わないぼん。何をしでかすか分からないと言う事は、即ちファヴが求める、刺激的な展開が起こりうる可能性が一気に高まるという事ぼん！ ファヴはこの先が楽しみぼん！』

『……能天気な奴め』

『褒め言葉として受け取っておくぼん』

『さて、明後日はあのペアへサバイブ配布か。こちらインストールの準備をしておかないとな』

『あのペアは全然この試験に乗り気じゃないけど、これで参戦派になってくれたらグツジョブぼん。これからも期待してるぼん』

68. 女騎士、復活

「退院おめでとう、そうちゃん」

「ありがとう、みんな」

ミナエルの襲撃から2日後の夕方。学校帰りに早速大地と小雪は、退院した颯太の家を訪れていた。道中で出くわした手塚も同行している。

「無理に活動を再開する事も無いと思うが、良いのか？」

「大丈夫ですよ。いつまでもベッドの上にいるわけにはいかないし、これから徐々に慣らしていけないと」

依然として満足に歩ける状態ではない為、普段は車椅子を使って生活する事になるのだが、魔法少女でいる時には地面に足をつけて動く事になるようだ。

「みんなに迷惑かけた分、きっちり頑張っていけないとね」

「そっか。まあ、無理すんなよ」

「分かってるさ。もう、僕だけで何もかも背負い込みはしないさ」

「(颯太……。良い顔をしてるな。これならもう、彼の運命も安泰だろうな)」

パートナーの成長を心から喜ぶ手塚。その時、マジカルフォンから着信音が鳴った。ファヴとシローからのメッセージのようだ。

『はいはい！ 今日みんなにとっても良い事を報告させてもらおうぼん！』

『先ほど、ここまで一線から退いていたラ・ピュセルが現場復帰する事が決まった』

『ファヴもシローも、ラ・ピュセルが元気に戻ってきてくれて嬉しいぼん！』

ファヴがそう言うが、大地達の表情は険しい。魔法少女や仮面ライダーの席の奪い合いという状況下で、これまでの言動を見ていて胡散臭さしか感じられない。

『さて、そんなラ・ピュセルとライアに、ファヴ達から復帰祝いのなものをプレゼントするぼん！』

「プレゼント……?」

小雪が訝しんでいると、颯太と手塚の持つマジカルフォンが一瞬輝いた。皆が目を見開いていると、シローが言った。

『実は今回、配布の対象になったのは、3番目に成績が良かった、『ライア&ラ・ピュセルペア』だ。偶然にもこのタイミングで配布が決まるとは、正直私も予想だにしていなかった』

『てなわけで2人とも、これからもキャンディー集めやモンスター退治に精を出してもらおうよう、頑張ってほしいぽん！ それじゃあ、次の配布ペアが決まるまで、シユーぽん!』

そう言つてファヴとシローのメッセージは途切れた。

颯太の部屋にいた一同は早速マジカルフォンやカードデッキを確認した。手塚のカードデッキには、右翼と雷の背景が描かれている、新しいカードがあり、颯太の持つマジカルフォンには、新たにカードと同じ絵柄のアイコンが追加されている。『雷電』を思わせるそのイラストの上には、『SURVIVE』と表記されている。

「これは……!」

「そうちゃんと手塚さんにも、サバイブのカードが……!」
「……」

サバイブの凄さ。それは昨日大地と小雪、そして手塚は実際に使用したナイトとリップルから直に聞いている。颯太はまだ目にしたわけではないが、激レアアイテムの追加はマジカルフォンを通じて耳にしていた。

「僕が、サバイブを……」

「この先の運命をも変える可能性を秘めている力。まさか自分の手に渡る事になるとはな」

手塚はそう言いながらカードをデッキに戻すと、マジカルフォンから音が鳴り響いた。モンスター出現の知らせだった。

「! 出たか……」

「僕も行くよ!」

大地、小雪、手塚は近くにあった鏡に向かってカードデッキやマジカルフォンをかざした。颯太はまだ足が動かない為、ベッドの上でマ

ジカルフオンを操作する。

「変身！」

大地、手塚はポーズをとってVバックルにカードデッキを差し込んで九尾、ライアに変身。小雪、颯太はマジカルフオンをタップして光に包まれると、スノーホワイト、ラ・ピュセルに変身した。

そして一同は鏡を通じてミラーワールドに突入した。

現場に向かうと、視線の先にモンスターの姿を捉えた。両腕に音叉状の爪をつけた、クラゲ型のモンスター『プロバジェル』が、その先の鏡から現実世界にいる女性を襲おうとしている。これを見た九尾とライアは同時に飛び蹴りをした。

プロバジェルは不意の一撃で倒れこみ、後からついてきたスノーホワイトとラ・ピュセルも2人の隣に並んだ。

『SWORD VENT』

「ハアッ！」

「！ 九尾！」

九尾はすぐさまフォクセイバーを手に持って、真っ先に攻撃を仕掛けた。

「ど、どうしたんだ九尾は!?!」

「九尾……、また自分から戦いに行ってる……！」

「どういう事だ？」

「分かりません。でも、最近の九尾はいつもこんな調子で……」

「ウオオオオオオオオ！」

九尾は素早いステップで足を動かし、フオクセイバーを振るってプロバジエルにダメージを与えていく。が、隙についてプロバジエルが爪でフオクセイバーを押さえつけると、全身につけられた球状の電極から電気エネルギーが流れ出し、爪を伝ってフオクセイバーへと流れ込み、そして九尾の全身に電流が襲った。

「グアアアアアア……！」

「九尾ー！」

スノーホワイトとラ・ピュセルは九尾に駆け寄った。

「大丈夫!?？」

「くっ……！ 体が、痺れて……！」

「気をつけろー！ こいつの体には、相当値の電圧が流れているんだ！」

「グウ……！」

ライアがプロバジエルの電流を含んだ突きを受けて、倒れこむ。プロバジエルは2人の魔法少女に向かって突進してきた。

「スノーホワイト、危ない！」

「えっ!?？」

ラ・ピュセルはスノーホワイトを突き飛ばし、背中から抜いた大剣でプロバジエルを寄せ付けないように振り回した。が、大剣に触れた途端、再び電流が大剣に流れ込み、手に持っていたラ・ピュセルも全身に痺れを感じた。

「ウアッ！」

思わず背を向けてしまった所へ、更に追い討ちとばかりにその背中に爪を置いて、電流を流し込んだ。

「アアアアアア……！ と、とてつもない……！」

ラ・ピュセルが倒れこみ、唯一立ち上がっているスノーホワイトへ歩を進めるプロバジエルだが、そこへある程度回復した九尾が突進して、直接殴りかかった。が、その度にプロバジエルの電撃が容赦なく

九尾を襲う。

「九尾……！」

必死に立ち上がったラ・ピュセルが、九尾の援護に向かおうとしたその時、近くにいたライアがカードをベントインした。

『STRIKE VENT』

「フンッ！」

ライアがエビルバイザーを横に振るって、ソニックブームを放ち、プロバジエルを九尾から引き離した。

九尾が一步退いて息を整えている中、ライアが不意に口を開いた。

「ラ・ピュセル」

「？ どうしたんだい、ライア？」

急に名前を呼ばれて困惑するラ・ピュセル。対するライアは淡々と語る。

「ここに来る前に、この一戦で、九尾は大怪我を負うという運命が占いで出た」

「えっ……？」

「だが、運命は変えられた。運命に絶対なんて存在しない」

なぜそう言えるか分かるか？

ライアはそう尋ねる。

「俺は今まで、運命は先に見通して、その事態を予測する事で初めて回避されるものだど、そう思っていた。そう思い込んで、俺は占いとライダーの力を合わせて使ってきた。……だが、どうやらそれは間違っていたらしい」

「ライア……？」

ライアは静かに息を吐き、懐から出したコインを見つめた。

「運命は、誰かの手が加わって変わるものじゃない。運命を変える為に本当に必要なもの。それは『当事者の意志』だ」

「意志……」

「そうだ。運命は、自分の力で変えるものだったんだ。自分から動き、自分に相応しい未来を見つけた時、初めて定められた運命は大きく変わる可言えるんだ。そしてそれを教えてくれたのは他でもない。ラ・

ピュセル、君だ」

「……！」

「あの時、君と九尾が来てくれなければ、運命は変わったとしても、満足出来る結果とはならなかったはずだ。俺は2人に感謝してる」

すると、ライアはカードデッキに手を置いて、1枚のカードを引き抜いた。そしてそれをラ・ピュセルに見せた。そこには、『SURVIVE』と表記されていた。

「俺は決めた。この力は龍騎と同様に、モンスターから人を守る為に使う。その運命を変える為に」

「ライア……」

「これからも一緒に戦ってくれるか？」

そう言われたラ・ピュセルだが、答えは既に出ていたと言っても過言ではない。

「もちろんだ。この剣に誓ったように、僕はライアや九尾、スノーホワイトを守る者として、そして今度は自分自身を守る事を約束して、定められた運命を覆す！」

「決まりだな。行くぞ、ラ・ピュセル」

「ああ！ スノーホワイト、下がってて！」

「う、うん」

スノーホワイトは九尾と共に一歩下がりがり、ライアは手に持ったカードをプロバジェルに見えるようにかざし、ラ・ピュセルもマジカルフォンを取り出してタップした。すると2人の周辺に電流が走った。プロバジェルが狼狽していると、ライアの左腕につけられていたエビルバイザーは、巨大なエイと弓を併せ持った形をした『エビルバイザーツバイ』へと変化した。同時にラ・ピュセルの左腰にもホルダーが出現する。

そしてライアは口の部分にカードをベントインし、ラ・ピュセルはマジカルフォンをホルダーに差し込んだ。

『SURVIVE』

その音と共に、ライアに鏡像が重なり、仮面や弁髪が金色に変化した。頭部にはマンタの口鱗を模した、銀色の角が2対。腕や膝には金

色のエイの装飾品があり、装甲も金のラインが目立つ『ライアサバイブ』へと変貌した。

そしてラ・ピュセルは、両手首に従来よりも頑強なガントレットがつけられ、手もアーマーで覆われており、両腰の鎧が強化され、新たに腹にも鎧が追加され、動きやすさだけでなく、防御性にも特化されていた。頭から生えていた角や尻尾も、竜を彷彿とさせるものへと進化し、後ろ足には竜の爪が生えている。胸元は水着から布状へと変わり、首まわりにも鎧がつけられ、マジカルフォンの色も青からピンクへと変わっている『ラ・ピュセルサバイブ』へと変貌を遂げていた。

「挿入歌：果てなき希望」

「凄い……！ 確かに力が溢れてくるかも……！」

「なるほど、これがサバイブか」

ラ・ピュセルサバイブもライアサバイブも、自身の体を見渡して調子を確かめている。と、そこへプロバジェルが突進してきた。

「危ないよ！」

「任せて！」

ラ・ピュセルサバイブが駆け出し、剣を魔法で肥大化させると、プロバジェルを薙ぎ払った。サバイブになった事で攻撃力も数段上がっているように感じられる。

起き上がったプロバジェルは、今度はライアサバイブに標的を変えて電流を溜め込んだ両手の爪を突き出した。が、直撃したにもかかわらず、ライアサバイブは痺れる事なく平然としていた。その理由を、ライアサバイブは察した。

「なるほど、今は俺もラ・ピュセルも電気エネルギーが全身に流れているから、これくらいの電撃はもう通じないというわけだな」

プロバジェルもそれを察したのか、電撃に攻撃を止めて、足払いでライアサバイブを転ばせた。そして踏みつけようとしたその時、それまで後方で成り行きを眺めていたスノーホワイトが駆け出して、プロバジェルにしがみつくとライアサバイブから引き離れた。

「スノーホワイト！ 無茶だ！」

「私、だって……！ もう、ラ・ピュセルやみんなが、苦しむ所を、見るだけなんて、嫌だ……！ だから、私なりに、頑張る……！」

プロバジエルはスノーホワイトを引き離そうと、電気エネルギーをスノーホワイトに流し込む。当然耐性もないスノーホワイトは全身が痺れるが、それでもプロバジエルを先には行かせまいと堪えている。

「スノーホワイト！」

『ADVENT』

だが、このままでは危険だと感じたライアサバイブはカードをベントインし、契約モンスターを呼んだ。現れたのは、エビルダイバーの進化形態『エクソダイバー』。より鋭くなったエイヒレでプロバジエルを軽く吹き飛ばした。

「無茶し過ぎだよスノーホワイト」

「ご、ゴメン。でも私、何も出来ないのが辛くて……」

「大丈夫。その気持ちはしっかり受け取った。後は僕とライアに任せて。行こう、ライア！」

「ああ、決めるぞ」

『FINAL VENT』

ライアサバイブは飛び上がって、旋回していたエクソダイバーの上部に掴まった。するとエクソダイバーの腹から車輪が浮き出て、セグウェイのような形の二輪バイクへと変化し、ライアサバイブは開けた座席に乗った。

「ラ・ピュセル！」

「ああ！」

ラ・ピュセルサバイブもそれに続いて飛び上がり、ライアサバイブの後方の座席部分に立った。プロバジエルが全身に電流を流して突進してきたが、それで臆する2人ではない。エクソダイバー・バイクモードは周囲に放電して敵の逃げ場を無くさせた後、全速力でプロバジエルに突撃した。新たなる必殺技『ハイドバースト』によって掠めとるように体当たりして吹き飛ばされるプロバジエル。そしてラ・

ピュセルサバイブは、後部座席から飛び上がった、両手で大剣を構えて、勢いよく振り下ろした。

「これで、トドメだあああああああつー！」

パワーアップし、更に電撃を吸収した大剣は宙に浮いていたプロバジェルを真つ二つに斬り裂いて、プロバジェルは空中で絶叫と共に爆散した。

「やった……い…… やったよだいちちゃん！」

「あ、ああ」

特にこれといった活躍を見せなかった九尾も、興奮しているスノーホワイトに同情した。ラ・ピュセルサバイブが地面に降り立つと同時に、マジカルフォンからキャンディー獲得の知らせが入った。ラ・ピュセルサバイブは改めて自分の両手を見渡して、サバイブの凄さを実感した。

「凄い力だ……。これなら、運命を変える事も、出来るかもしれない」「かもしれないじゃない。絶対だろ？」

ライアサバイブにそう指摘されて、笑みを浮かべるラ・ピュセルサバイブ。頷いた後、右拳を突き出して、同じく右拳を突き出したライアサバイブと軽くぶつけた。

「お疲れ様、ライア、そうちゃん！」

「だからこの姿でそうちゃんはやめてくれよ……って、聞いているのかな？ ……まあいいや」

ラ・ピュセルサバイブは肩を竦めながら、ライアサバイブと共に、仲間間の所へと戻った。

そして隣を歩くパートナーにこう言った。

「これからもよろしく、手塚さん」

「ああ、こちらこそ、だな。颯太」

運命は変えられる。

それを改めて確信した颯太と手塚は、新たなる力を持って、これからも運命に立ち向かうだろう。今は、そう思わせるような堂々とした姿が、そこにあった。

そんな中、ラ・ピュセルは不意にこう思ってしまった。

「（それにしても、今日の九尾を見てると、やっぱり変だ……。スノーホワイトが言ってたみたいに、自分から危険な事に足を踏み込んでいく。何か、やるべき事でもあるのかな……）」

69. ゲームを盛り上げよう!

芝浦 淳一郎は、定められたルールには必ず従う、という独特の美学を持っている。その為か、ルールを守らない者にはより一層厳しくし、逆に忠実な者には年上だろうが年下だろうが関係なく友好関係を築こうとしていた。

彼がその美学を持ち合わせる事になった1つの要因として、一番に挙げられるのはやはり『ゲーム』の存在があつての事だろう。大手ゲーム会社の社長の息子、ということもあつて、幼少期からありとあらゆるゲームに没頭し、普段の日常生活では味わえない恍惚感に浸っていた。常に限界ギリギリのスリルや刺激を求めているのだ。

M大学へと進学した彼が、『何万人かに一人の確率で本物になれる』と噂される『仮面ライダー育成計画』に興味を持つのは当然の事であつた。無課金であると同時に自分の思い通りにアバターをいじれるという事もあり、芝浦は早速このソーシャルゲームに手をつけた。幼少期に気に入ったゲームを参考に、サイをモチーフにした仮面ライダー『ガイ』を動かし、ゲーム内に出てくるモンスターを退治していた。ソーシャルゲームとは思えないほどに飽きさせないシステムが功を奏したのか、芝浦はしばらく没頭していた。

そうしてプレイしてから数週間が経ち、遂に都市伝説通りの事が起きた。ゲームの画面に突然現れた、マスコットキャラクターのシロー。彼からスカウトを受けた芝浦は一も二もなく承諾。本物の仮面ライダーとして、力を得たのだ。

人助けに関しては面倒くさいし、つまらないという事もあつて手をつけなかったが、モンスター退治の方は積極的に参加していた。彼曰く『そっちの方がゲームとしては楽しい』との事。

数日後、今度は彼の元に2人の同胞が現れた。魔法少女『ルーラ』と仮面ライダー『ベルデ』だつた。2人はガイの腕を見込んで自分達のチームに勧誘しに来たのだという。話を聞くうちに、ガイはその2人から面白みを感じ、承諾に応じた。加えてベルデの正体も判明し、それが自分の尊敬する、父親の経営する会社と交友関係の深い大企業の

総帥、高見沢 大介だと知った時は、喜び勇んでチームに合流した。その後もチームに新しく所属する者が増え、遂には10人ほどの派閥へと成長を遂げ、その度に芝浦の心にくすぶる野心は増大していった。そして彼は思う。こんなにも面白いゲームなら、より一層現実的に応用させ、世に広める事だって出来るはずだ、と。

そしてこの日、自分が独自に開発したゲームの実用性を確かめる時が来た。しかし、間近で見れるギャラリーを自分以外に1人ぐらい増やしたい。そう思った芝浦は、マジカルフォンを通じてある人物を呼び出した。

「お、きた来た。こっちこっち」

「ハアツ、ハアツ……！ ご、ごめんね、芝浦さん……」

現れたのは、地味な服装の小柄な少女。彼女の名は犬吠埼いぬほうざき 珠たま。名前からも分かる通り、芝浦のパートナーである魔法少女『たま』の変身者である。出会った当初から気が弱く、強く言われたら逆らう事もない。その姿は常にルーラやベルデらに言われた通りに行動する、正に忠実な犬。そんな彼女を、ガイは個人的に気に入っていた。故に彼女がしようとしている人助けも、嫌々ながらも手伝っていた。

「えと、その……。面白いものがあるって、聞いたんですけど、それっ

て……」

「うん。もう直ぐ始まるどころ。まあ、何かあるのかは、自分の目で見なよ」

そう言っただけで芝浦は笑いながら、黒いフード付コートを投げ渡した。

「ひゃつ!? な、何ですかこれ？」

「それ着といて。一応顔ぐらいは隠しとかないと後で警察とかにバレたら面倒だし」

芝浦自身もフード付コートを着用し、珠は彼の後を追うように、港の方へ足を運んだ。

しばらくして、物陰に隠れながら、芝浦と共に珠の目に映ったのは、中で火のついたドラム缶の支柱が円状に設置されている舞台。不気味な雰囲気しか感じられず、何かの儀式のようにも見えた。その舞台の中に、2つの人影が。どちらも芝浦や珠が被っているものと同じ服装をしており、両手には各々異なる武器が握られている。顔は鉄仮面で覆われている為、誰なのかも想像がつかない。一体何が始まるというのか。珠が怯えながら気になっていると、芝浦が腕時計に表示された時刻を確認してから、ニヤツと笑って呟いた。

「さあ、ゲームスタートだ」

それが合図となったのか、鉄仮面の者達は同時に動き出し、武器を相手に向かって振り下ろした。

「……あー」

珠は短い悲鳴をあげた。まるで本気の殺し合いだ。そう思って止めようかとも思ったが、あまりにも殺伐とした雰囲気、足が竦んで動けなかった。そんな珠を安心させるように、芝浦は優しく彼女の肩に手を置いた。

「大丈夫だって。あれは俺が考案したゲームだからさ。『マトリックス』ってやつなんだけどね」

「げ、ゲーム……!?」

より一層、鉄仮面達の動きが激しくなる中、珠は動揺を隠せなかった。

「そ。若いくせに人生退屈しきってる奴らに、俺がちよつとした楽し

みを与えてやったんだよ」

「そ、それが、これ……?」

「うん。ゲームを作ったんだよ。キャンディー集めの合間に、色々プログラムを考えてね。もちろんただのゲームじゃない。人間心理を様々な観点から分析して、俺達がよく口にするゲームに応用したんだ。俺のゲームにハマった奴は、より強い刺激を求めるようになる。んで、画面と向き合うだけのゲームじゃ物足りなくなつて、本当に戦い始めちゃう。計画通りに動いてくれて、マジ助かったよ。あ、ちなみにこのゲームの元ネタは、今この街で流行ってる、ライダーと魔法少女の生き残り合戦なんだよね」

ヘラヘラ笑いながら、経緯を語る芝浦だが、話が進むうちに珠は顔を青ざめる。そうこうしているうちに鉄仮面達の体のいたるところから血が流れ始めている。早く止めさせないと、と思う珠だが、どう説得すれば良いのか分からず、オロオロしていた。そんな彼女を見て、面白おかしそうに笑いながら、鉄仮面達に目をやった。

「まあ、今戦ってるのは、俺が所属してるサークルの先輩達だけだ」

「えっ……!?」

「けどまあ、元々危ない奴らだったんだけどね。放っておいたら俺の方が危なかったし」

「ど、どうして、こんな……」

「楽しいからに決まってるじゃん。このゲームを観てくれてる人達からも絶賛されたし、これで俺の優秀性も実証された訳だし。珠もそう思うだろ?」

「え、わ、私は……」

やっぱゲームは面白いわあ。そう呟く芝浦とは対称的に、返答に迷う珠。悪い事だとは分かっているが、彼女一人で皆を止める自信はない。もつと言えば、自分に優しく接してくれている芝浦に異議を申し立てるなど、考えられない。どうすれば良いのか、と頭を抱えていると、鈍い音と共に鉄仮面達が倒れた。両者同時ノックアウトという形で決着がついたようだ。

「あ、ああ……」

「あらら。引き分けって……。ホントしょーもない奴ら」

芝浦が呆れる中、これ以上は見てられないと思った珠が、倒れている2人に駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか!?? しっかりしてください!」

「別に気にしなくても良いのにさ、そんな奴ら」

芝浦もやれやれと思いつつながら、珠の側に寄る。珠が1人の鉄仮面に近づいて思いつきり体を揺すっていると、体を起こすと同時に鉄仮面が外れて、男の顔が現れた。男は目の前に同じフードを被った人物が2人いる事に驚いて、珠を突き飛ばすと、後ずさりながら立ち上がって逃走した。傷を負っている状態でこれ以上敵と戦いたくないという意思表示だろう。

だがその直後、芝浦と珠の持つマジカルフォンから音が鳴り響くと同時に、近くに停められていたトラックのミラーから触手が伸びて、そこを通りかかった男に絡みついて、男をミラーワールドに音もなく引きずり込んだ。

「!?? い、今……!」

「モンスターか」

芝浦は珠の肩を叩いて、共に駆け出してトラックの前に立った。芝浦はカードデッキをかざし、珠はマジカルフォンを取り出す。

「変身!」

芝浦は右腕を曲げて、ガッツポーズするような感じでポーズを決めて、Vバックルに差し込んで仮面ライダー『ガイ』に変身。

「へ、変身!」

珠はオドオドしながらもマジカルフォンをタップし、光に包まれて魔法少女『たま』に変身した。

そして2人のミラーワールドに突入し、モンスターを追いかけた。が、目の前にモンスターの姿はない。

「どこ行った……」

ガイが辺りを見渡していたその時だった。

「ひゃあ!??」

後方からたまの悲鳴が聞こえてきて、ガイは振り返った。見れば、

たまの肩に触手がひつついて、投げ飛ばされる姿があった。その触手の持ち主である、イカ型のモンスター『バクラーケン』は再びたまに襲いかかろうとするが、ガイが割り込んで殴りかかった。その後たまも立ち上がり、バクラーケンを背後から抑えようとしたが、振りほどく力も強く、ガイさえも寄せ付けなかった。

「つてえな」

ガイが腹部を抑えながらも、再び反撃しようとする。が、それよりも早くバクラーケンは、後ろにいたたまに向かって触手を伸ばし、その華奢な体に巻き付いた。

「わっ!?? な、何これ!??」

吸着性の強い触手に絡め取られてしまい、身動きが取れなくなるたま。

「た、助けてえ!」

「まあジツとして。今なんとかしてやるからさ」

そう言っただけガイはカードデッキから一枚のカードを左肩についたメタルバイザーに向かって投げて、ベントインした。

『STRIKE VENT』

「挿入歌：果てなき希望」

ガイの右腕にメタルホーンが付けられ、バクラーケンに向かって突きを入れた。バクラーケンは地面に倒れるが、たまも連動して倒れ込む。が、その衝撃で触手から解放されたようだ。痛がりながらも立ち上がったたまはガイにお礼を言った。

「あ、ありがとう、ガイ……」

「ほら、ボサツとしてないでいくよ」

ガイはそう言っただけバクラーケンに追い打ちをかけた。バクラーケンは器用にかわしながら、反撃とばかりに突撃してきたが、対するガイは仮面の下で笑いながら、一枚のカードを取り出した。そこにはアバター姿のたまが描かれている。

『HOLE VENT』

すると、バクラーケンの進行方向に穴が出現し、バクラーケンはとっさに止まれずに穴に落下した。パートナーカード『ホールベン

ト』によつて、たまの魔法同様、地面に穴を開けたのだ。

「へへっ。さあて、どうなったかなあ」

ガイが笑いながら穴を覗き込んだその時、ガイの顔に穴から伸びた触手が絡みつき、ガイは慌てて後ろに下がった。その要領でバクラーケンは引つ張られて地上に戻り、そのままガイを拘束した。ガイは振りほどこうとするが、バクラーケンの方が力が強く、どうする事も出来ない。これを見たたまは叫んだ。

「め、メタルグラス！ ガイを、助けて！」

直後、バクラーケンの横手から契約モンスターメタルグラスが突進してきて、バクラーケンを吹き飛ばし、ガイを解放した。そしてガイは素早く新たなカードをベントインした。

『FINAL VENT』

「……んなるお。雑魚のくせに調子乗んなよ」

ガイはそう吐き捨てて、メタルグラスの前に立った。そしてメタルグラスが駆け出すと同時にガイは跳躍して、メタルグラスの肩に両足をつけて、メタルホーンを突き出したまま、バクラーケンに向かって猛スピードで体当たりしてきた。ガイの必殺技『ヘビープレッシャー』を回避する間もなく、バクラーケンは直撃と同時にその場で爆散した。

「や、やった……！」

マジカルフォンにキャンディー獲得の知らせが入り、たまがホツとしていると、ガイが彼女のところに戻ってきた。が、その様子はどこか物足りなさを感じさせる。

「……うーん。こういうのじゃないんだよね。俺が求めてるゲームってのは。さつきみたいにもつとこう、みんなが乗り気になつてくれる事にならないと、誰も興味持つてくれないよなあ」

「……………」

ガイの言い方に首を傾げるたま。

すると、たまを差し置いてガイは妙案を思いついたかのように頷くと、たまに言った。

「ねえねえ。どうせだつたらさ。もつとこのゲームを面白くしよう

よ。上手くいけば人数が減って早く決着つくかもしれないし」

「へっ？ えっ？」

「そうと決まれば……」

ガイは不敵な笑みを浮かべながら、未だに困惑するたまを引き連れて、とある場所へと向かった。

「……てなわけでき。他の奴ら一緒にぶっ潰そうってのが、俺達の考え。どう？ 悪くないっしょ？」

「……」

ガイとたまがやって来たのは、城南地区のとあるVIPルーム。裏口から誰にも気付かれない事なく入って、そこを拠点とするペアに話を持ちかけたのだ。隣にいるたまは、気を抜けば失神し兼ねないほどに怯えていた。

それもそのはず。目の前でふんぞり返っているのは、城南地区で縄張りを張って、悪名高い事で有名な仮面ライダー『王蛇』と、魔法少女『カラミティ・メアリ』。元リーダーだったルーラでさえ恐れ慄いた2人なのだから、気の弱いたまにとってこれ以上に居心地の悪い事は

無いだろう。いくつもの酒やタバコの匂いが混じって、異臭がこれでもかと鼻に付く。

そんな中、王蛇とカラミティ・メアリは不機嫌そうな様子で、急に尋ねてきた訪問者達を観察していた。先日、オーデインとクラムベリーからの依頼でライアを殺そうとしたが、結果的に失敗。人質として捕らえたスノーホワイトばかりか、後から駆け付けた龍騎やトップスピード、そして九尾とラ・ピュセルすら殺せずにはいた。加えて後からやって来たナイトとリップルには、レアアイテムとして配布された『サバイブ』によって、全くと言っていいほど手も足も出なかった。以来、2人はナイトやリップル、更には自分達の邪魔を続けてきた龍騎に対してイライラが溜まり続けている。

その最中にやって来たのは、2人に手を貸そうと言ってくるガイ。たまは完全にオマケ扱いだったが、王蛇もカラミティ・メアリも気に留める事すらなかった。

やがてカラミティ・メアリが口を開いたのは、ボトルのウイスキーを飲み干した頃だった。

「……1つ聞いていいかい？」

「ん？ 良いけど」

「あんたがあたしらと手を組む目的は何だい？ まさか手を組むって言うておいてこつちの寝首を取る、なんて事考えてないよね？」

そう言うて銃口をガイに向けるメアリ。たまは震えが止まらなくなってガイの腕にしがみついたが、本人は至って平気そうだ。

「そりやあもちろん、ゲームを面白くしたいからさ。今のままでも良いけどさ。やっぱ人数が減ってきてからじゃイマイチ盛り上がり欠けるんだよね。だから、今のうちに面白くしてこうって思っただけ。もちろん俺達は下っ端って事で良いよ。別にあんたらを殺るつもりはないし。ってか逆らったり煩わせたりムカつかせたらアウトでしょ？」

「……ほう。その辺は弁えてるみたいだな」

少しばかり関心の意を示したメアリ。と、今度はたまに目線に向け、同時に銃口も向ける。

「……で、あんたはどうだい？ こいつと同じ、ゲームを盛り上げるって算段か、それとも……」

カチリ、とロックを外して、引き金に手を置くメアリを見て、たまは涙目になって首を全力で横に振った。返事が聞けたメアリはそれで満足したのか、銃を下ろして口を開いた。

「オーケイ。乗ってやるよ、その取り引き。見返りは、とにかく面白くすれば何でもアリ、って事で良いんだな？」

「そうそう。話早くて分かりやすいね。さすが先輩って感じ」

「褒めても酒なんて出すつもりないよ」

メアリは笑いながら、新しいボトルに手をつける。ガイはともかく、たまはまだ未成年の為、どの道丁重に断ろうとは思っていた。そもそも、酒なんて飲もうとも思わない。

「で。こつちからも確認しとくけど。おたくらが優先的に殺りたいのは、龍騎とリップルって事でOK？」

「……はっ！ 誰でも良いが、先ずは俺をイラつかせたそいつらを潰す……！」

「ま、そういう事だ。もしあいつらが尻尾巻いて逃げようってんなら、その時は……」

「任しといてよ。俺が仕掛けといてやるからさ。どれだけチキンでも、逃げられないようにね」

どうやら3人の中で、万が一龍騎とリップルを逃した場合の対策が決まっているようだ。会合に参加出来ず、ただジツと事の成り行きを見ているだけのたまは、どうして良いかも分からず、身を縮こませるしか、やる事がなかった。

70. 情報収集

N市の都心から少し離れた住宅地に、一際目立つ家がある。丁寧に手入れがされているガーデンングを抜けた先にある玄関には、『北岡法律事務所』と書かれた看板が。

この日、『黒を白にしてしまう』弁護士として有名な男の元へ、1人の来客があった。

「いやあ、よく来てくれたね。でも、もう少し早く来てくれれば食事をもう1人分用意出来たんですけど」

「いいえ、結構よ。こっちは取材目的で来たわけですから」

仮面ライダーゾルダの変身者、北岡 賢治は、OREジャーナルの記者で、北岡がターゲットにしている桃井 令子に、にこやかに接するが、本人は無反応で家の中に入った。

秘書の由良 吾郎の案内で席に座り、彼が淹れた紅茶で口を潤した後、北岡は口を開いた。

「さてと。今日は俺の事で取材しに来たって事で良いんだよね？ 質問はどしどし受け付けるからさ」 質

「お生憎様。断じて違いますから」

そう冷ややかに呟いた令子はカバンに入れていた資料やノートを広げて口を開いた。

「半年ほど前に脱獄した、浅倉 陸について、お聞きしたいんですけど」

浅倉 陸。

その名前を呟いた途端、北岡だけでなく、そばで話を聞いていた吾郎や、マジカロイド44の変身者、安藤 真琴の表情が変わった。特に吾郎は目を細めて、鋭い視線を背後から令子に向けている。

「あなたが彼の担当弁護士だったわよね？」

「……ほう。相変わらず俺の事、何でも知ってるんだ」

「仕事なんで」

再びあっさりと返事を返す令子。

元々は行方不明事件や、ここ最近相次いでいる、若者を中心とした

不審死について調査を進めていたが、これといった有力情報は掴めず、行き詰まっていた。そこへ編集長の大久保が、一旦羽休めとばかりに、丁度半年前ほどに脱獄し、行方をくらませている要注意人物の浅倉の調査を勧めてきた。

たまにはのんびりと取材しようという事もあり、令子はその取材を引き受けたが、そのためには浅倉をよく知る人物でもある北岡に話を伺わなければならない。個人的には関わりたくないのだが、仕事である以上、避けては通れない道なので、やむなく彼の所に出向いて取材を行うことにした。

令子が独自に調べていた資料に一通り目を通し、感嘆した後、今度は北岡の手元にある資料を令子に見せた。その間、令子の資料が気になった真琴は、許可を得て資料を眺めていた。

「浅倉が最初に犯した罪は、家族の殺害だった」
「えっ?」

「子供の頃に、実家に火を放って、両親と弟を殺した時から、彼の周りで密かに良くない噂が続いた。施設に預けられて以降、高校まではまだマシだったそうだけど、途中から獰猛な性格を表に出してきたらしい。強盗に無差別暴行。結構死人も出たらしいよ。それで警察も無視できなくなつて、苦労の末に逮捕出来たのが、今から半年前ほど前。さつき言った、家族の殺害の件も逮捕した直後の事情聴取を通じて判明したらしい」

何度か耳にはしていたが、浅倉という男の残忍性に顔をしかめる令子。そして令子は核心をついた。

「それで、あなたが浅倉の弁護をしに来たそうだけど、どうだったのかしら?」

「向こうも俺の事は知ってたみたいだね。まあ知名度はそこそこあったし。浅倉の依頼で担当して、色々調べてみたんだけど、どんな裏技使ったとしても、無罪になんて出来るわけもなかった。上手くいって懲役10年つてところか」

「へえ。あなたの腕をもってしても無罪に出来なかったのね」

「大体、動機のひとつが『イライラしたから』ってどう思うよ? あ

んなにイカれた奴は初めてだったね。それにさ。弁護するにしたって、相性つてもんがあるからね。他の奴にあたれって言ったたら、浅倉の奴、取調室で暴れまわってさ。警官が数人がかりでやっど止めてたよ」

「で、結局浅倉の弁護は止めたって事ですよね」

そう呟いたのは、資料から目を離れた真琴だった。北岡は頷くと、今一度紅茶を一口含んでから、息を吐いて呟いた。

「それから数日してからだったな。浅倉が脱獄したって警察から連絡を来たのは。そうだったよね、ゴロちゃん」

「ええ、確かに。狙ってくる可能性があるから気をつけろって念を押されました」

「自分の事を弁護してくれなかった事に、逆恨みしてるって事です。また随分と面倒な性格を」

真琴は呆れ口調で呟いた。

その後も浅倉に関する情報を聞き出し、ある程度記事の内容が決まってきたところで、令子はお暇する事にした。

「あ。もし良かったら、今晚一緒にどうよ？ たまに外食で行く上手い店があるんだけど。もちろん俺の奢りで」

「結構です。向こうに戻って今日の取材内容をまとめておきたいので」

またしてもお誘いを断られてしまい、若干へこむ北岡。

外まで送る為、吾郎と真琴は令子に付き添った。玄関のドアに足を運びながら、令子は2人に話しかけた。

「あなた達も大変ね。あんな男と一緒にいて、苦労しない？」

「そんな事ありません。あの人のおかげで、今の生活に満足していますから」

「私も。お給料もそこそこですから、おかげで生活に困らなくなりました。良い求人を見つけたらと思えば、これくらいなんともありません」

「そう……。でも真琴ちゃん、だっけ？ あなた随分と年下っぽいけど、いくつなの？」

令子は気になっていた事を真琴に尋ねた。

「15です」

「15って……。じゃあまだ未成年って事よね？ 学校とか両親は？」

「中卒ですよ。家は、たまに帰るぐらいでほとんどこの事務所か友達の家を転々としてますね。親から何かと口うるさく言われるのが面倒なんで」

「色々と事情があるのね。大地君とほとんど同じ年の子でも、随分と環境が違うっていうか……」

「大地……？」

「ちよつと前にある事件を通じて知り合った、同じ会社で働く記者の知り合いだね。他にも、小雪ちゃんや颯太君って子と知り合ったの」「へえ……（そういえば、龍騎の変身者が、令子さんと同じ会社の人でしたから、もしかしたらそのお三方も……）」

そんな話を話しながら玄関の前までたどり着いたその時、インターホンが鳴った。誰かが事務所に尋ねてきたようだ。

「誰か来たみたいね」

「今日は他に来客の予定は無かったですけどね……」

吾郎は訝しみながらドアノブに手をかけようとするが、令子が前に出て代わりにドアノブを握った。

「付き添いはここまでで良いわ。後は今来たお客さんの相手をしてあげて」

それじゃあ、と言って令子がドアを開けたその瞬間、外にいた何者かが、彼女に向かって鉄パイプが振り下ろしてきた。

「！ きゃあー！」

突然の事で恐怖した令子が身構えた瞬間、吾郎がとっさに前に出て、俊敏な動きで鉄パイプを掴んだ。おかげで誰一人怪我する事は無かったが、吾郎が鉄パイプから襲撃者に目を向けた瞬間、思わず鉄パイプを握った手を離し、ファイティングポーズをとった。

一方で令子の悲鳴を聞きつけて駆け寄ってきた北岡は、玄関にやって来たところで、険しい表情で襲撃者を睨みつける。令子もようやく

冷静さを取り戻したところで、顔を上げた。

そこにいたのは、蛇柄の服を着た、獣のような目つきをした男性。令子を含め、その場にいる全員がメディア等で見た事のある顔だったのだ。そして北岡はその名を口にする。

「浅倉……！」

「！」

「……よう。役立たずの弁護士」

襲撃者……浅倉 陸はギラついた目で北岡を睨みつける。対する北岡は女性の令子と真琴を下がらせた後、呆れたように脱獄犯に話しかけた。

「相変わらずしつこいねお前。何度来たって、ウチにはその辺の警察よりも頼れるボディガードがいるって分かってるのにさ」

「知ったことか。俺を無罪に出来なかった奴を見てると、イライラするんだよ……！」

「……最近は大人しくしてるなどと思ったら、また性懲りも無く来るとはね。下手な借金取りよりも嫌になるよ」

「また、って……!?？」

令子が北岡の言い方に違和感を抱いていると、浅倉は鉄パイプの放り捨てて、唾を吐いてから口を開いた。

「今日も邪魔が入ったな。まあ、また遊びに来てやるよ」

「出来れば2度と来てほしくないんだけどね。大体さあ、お前最初から気に食わなかったんだよね。そうやって無駄に生きてる所とかさ」

「……ハッ。相変わらず潰しがいいのある奴だな」

そう吐きすてると、浅倉は一目散にその場から走って逃亡した。

「浅倉……！ あいつだけは……！」

「ゴロちゃん！」

吾郎は怒りを露わにして、北岡の制止も無視して浅倉を追いかけた。

「今のって、浅倉 陸よね……！」

「え、ええ」

「こうしちゃいられないわ……！」

令子もジャーナリスト魂が目覚めたのか、脱獄犯という肩書きに臆する事なく吾郎の後を追いかけた。

「令子さん！」

「さすがにマズくないですかね？ 吾郎さんはともかく……」

「やれやれ。追いかけた方が良いよねこれ？」

北岡と真琴も2人の後を追いかけた。

途中で吾郎に追いついた令子は、逃げる浅倉の背中を追っていたが、途中で曲がり角を曲がったのを確認した後、見間違える事なくその角を曲がった。が、直後に2人は唾然とした表情を浮かべた。

浅倉が逃げ込んだその道は一本道で、ほんの数メートル先は壁で覆われており、そこには猫1匹いなかった。あつたのは、粗大ゴミとして放置されていた置物ばかり。

「どういう、事……!?」

確かにこの角を曲がったはずなのに、と眩くものの、隠れられるスペースや、抜け道はザツと見た感じでは見当たらない。まるで蒸発してしまったかのように、浅倉は忽然と姿を消したのだ。地団駄を踏みながらも、見当たらないのでは手の出しようもないと思ったのか、吾郎は諦めて壁に背を向けた。

「……行きましよう。きつと、曲がる所を間違えたんですよ」

「そう、かしら……」

腑に落ちない気分になりながらも引き返そうとする令子だが、不意にある事を吾郎に尋ねた。

「ねえ。さつき浅倉の顔を見て、北岡さん、また、って言ってたわよね？ あれどういう事？」

「……あいつは脱獄してから、度々先生の所に向いて襲って来るんです。弁護をしてくれなかった事への逆恨みですよ」

「なるほど……。かなり恨まれてるみたいだったわね」

「先生は、何も悪い事はしてないはずなのに……！ 先生に手出しさせるつもりはありませんよ……！」

「ねえ、どうしてそこまでして彼のボディガードに徹するの？」

令子にそう質問された吾郎は、ポツポツと自分の過去を語り始め

た。

「俺、実家が海の近くにあつて、漁師を継ぐようになってうるさく言われてたのが嫌になつて、家を飛び出してきたんです。それからしばらくしてちよつとした事件に巻き込まれて、そこで俺の弁護をしてくれたのが、先生でした。その時は先生に凄く助けられて、無罪を主張し続けてくれた事が嬉しくて……。でもその代わりに、俺は先生に取り返しつかない事をしてしまつてて……」

「? それって……」

「ゴロちゃん! 令子さん!」

と、そこへ後を追いかけていた北岡と真琴が駆け寄ってきた。

「大丈夫でしたか?」

「え、ええ」

「いや、心配したよ。ゴロちゃんも令子さんもあそこまで大胆になるなんてさ……」

「すいません……。……そういうわけで、俺はとにかく、先生に尽くす事だけが唯一の取り柄ですから」

「……分かったわ。あなたが彼を慕う理由。じゃあ、私はこの辺で失礼するわ」

「大丈夫? まだうちよろしてる事だつてあり得るし……」

「平気よ。とりあえず会社に戻つたら、警察に連絡しておくから」

そう言つて令子は3人に手を振りながら、車が停めてある場所へと立ち去つていった。3人はその後ろ姿を見送りながら、口々に会話をした。

「意外とタフでしたね」

「さすがはジャーナリストつてとこか。ところでゴロちゃん。さつき令子さんと何か話してみたいんだけど、ひよつとして例の事、バレてないよね?」

「……大丈夫だと思います。ちよつと口を滑らせそうになりましたけど、勘付いてる様子はありません」

「そつか。なら良いんだけどさ。変に気を遣わせたくないしね。それにさ、ゴロちゃんも別に負い目を感じなくても良いんだよ」

「いえ、ですが……。俺の弁護をしたせいで、先生の体は……」

吾郎は普段とは違う様子で語るが、北岡は肩を竦めて呟いた。

「どの道間に合って無かったと思うよ。それに、今はゴロちゃんとお出会えてホントに良かったと思ってるし。真琴もそうだろう？」

「……まあ、そうですね」

「……ありがとうございます」

吾郎は照れながら、夕食の調達をする為に2人と共に家へ戻ろうとした。その際、北岡は浅倉が逃げ込んだと思われる場所に今一度目をやった。

「(しかし浅倉の奴、どうやってゴロちゃんから逃げ切ったんだ……?)

そもそもどうやって脱獄したのかも未だに分かってないしな)」

ふと、北岡の目についたのは、使い古されていたであろう、中ぐらの鏡。何の変哲もない鏡だったが、北岡の脳裏に嫌な予感がよぎった。消失した浅倉、古びた鏡、そして頻繁に各地で目撃されるようになった、あるライダーの存在。1つの可能性を見出した北岡は、乾いた笑みを浮かべた。それに気づいた真琴が小声で話しかける。

「……先生? どうかされましたか?」

「ん。まあね。色々と面倒な事になったなって」

そう呟くと、北岡は夕暮れに染まった空を見上げて、やれやれといった口調で言葉にした。

「シローもファヴもやってくれるね。そう簡単に勝ち残らせてはくれないって訳だ」

所変わって、城南地区に位置するとあるビルの屋上に、カラミティ・メアリは腰掛けていた。すると、その近くの窓ガラスから人影が出てきた。彼女のパートナーである王蛇だった。

「やけに早いじゃないか。どうだった？」

「……フン。どいつもこいつも俺をイラつかせる」

「まあ、チャンスはたつぷりとあるんだ。決行は明後日。何ならその時に巻き添えにしちやえれば良いだろうよ」

「それじゃあまだ足りない……！ この手で潰したいんだよ、俺は……！」

「フフツ。狙った獲物は逃がさないって事か。ますます気に入るよ、あんたのそういう所」

カラミティ・メアリは持参していたウオツカの入った瓶を王蛇に投げ渡した。王蛇はVバックルからカードデッキを取り外し……。

その仮面の下に隠れていた、蛇のような目つきの男性、『浅倉 陸』は、蓋を強引に開けてからウオツカを一気に飲み干した。

「……！」

観光スポットとして有名なN神社の敷地内にある、神主の自宅の2階の自室にて、大地がベッドの上に散りばめられた資料の数々を手にとって調べ事をしていた。

その資料は、今は亡きヴェス・ウィンタープリズンの変身者、亜終雫の自宅に保管されていたものである。とはいえ、彼女の部屋に置かれていた資料の大半は、大地の恩師であり、雫の所属するゼミの講師だった香川 俊行が遺したものだ。何故香川の持っていた資料を大地の手に渡っているのか。理由は至極単純だった。

香川が死亡した後、大地は密かに、彼を殺した張本人であるベルデの事を探っていた。そして彼の仲間だった雫が亡くなり、さらなる復

讐心を煮えたぎらせた大地は、仮面ライダーの特性を活かして、九尾の姿でミラーワールドを通じて、ある時は香川の研究室へ、またある時は香川やその関係者の家へと、誰にも気付かれる事なく、ベルデに関する資料を漁っていた。雫の恋人だった奈々の家は全焼した為、資料は残っていないだろうと思つた大地は、香川の研究室で雫の家の住所を突き止めた後、無人となった彼女の家へ侵入し、資料を搜索した結果、遂にそれらしきものを発見したのだ。

そして家に戻って調べを進める内に、遂に彼は突き止めたのだ。

今、最も憎き復讐相手でもあるベルデの、変身者の可能性が極めて高い人物の素性を。

「こいつが、ベルデかもしれないって事か……」

『かもしれない』だとしても、彼のやるべき事は変わらない。

全ては、無念に殺された恩師や仲間の敵討ち。そして彼らの死によつて、流す必要の無かつた涙を流させた事への懺悔をさせる為。

後は準備を進めて、実行に移すだけ。彼は一人、資料を握りしめて、殺意の籠つた目線を窓に向ける。

「……絶対に、仇はとりますよ。先生、雫さん」

71. 危険なお誘い

N市の中央公園の広場に設置されている噴水は、月に一度の午後10時からライトアップが行われている。月に一度という事もあり、レア感が伴っている、というのも人気の1つだが、季節に応じて様々な変化を美しく見せる為、その日を狙って見物に来る市民は多い。

その日も噴水広場では単調なリズムで水を噴き上げて、幻想的なライトアップは、ベンチに座っていた家族やカップル達の心を和ませた。

この時、皆は噴水に夢中で気付かなかったのだろう。噴水広場の近くにある多目的ホールの屋上から、異様な姿をした8人の人影が市民達に混じって見学していた事に。その人物達は時折噴水から視線を外して、地上にいる人々に目を凝らしていた。

やがて噴水のライトアップが終了し、1人また1人と席を立ち、その場を後にする。

『……』

気がつけば、公園に残っていたのは屋上にいる8人だけ。

しばらくの間は沈黙が続いたが、やがてとんがりハットの少女がため息をつき、忍者風の少女が舌打ちを響かせたところで均衡が崩れた。

「……うん、まあアレだな！ 月一のライトアップも無事終了したって事で、とりあえず良かったな！」

「ああ、そうだな！ それに結構見てて楽しかったし」

「どこがだ」

トップスピードと龍騎の発言にナイトが冷たくあしらうと、パートナーのリップルも続けざまに、トップスピードが言っていた事を復唱する。

「今日は人が集まるから、揉め事の1つや2つはある」

「……あ、ええっと」

「だから絶対、魔法少女や仮面ライダーの仕事もある」

「いや、その……。まあアレだ！ 何事もなく平和に終わったって事

で良いんじゃないやね？ 俺達魔法少女や仮面ライダーにとっては！」

「そ、そうですね。平和が一番、ですよ」

隣で腰を下ろしていたスノーホワイトも、苦笑いを浮かべながらトップスピードに同意する。スノーホワイトにそう言われて、これ以上文句を言うのが面倒になったのか、

「……信用するんじゃないかった」

とだけ呟いて、それ以降黙り込んだ。

そもそも、今回彼らがこの場にいるのも、トップスピードの自信に満ち溢れたお誘いが、事の始まりだった。人が集まる噴水のライトアップというイベントになら、人が増える分だけ仕事も増えるし、人目がある以上、他の面々から狙われる事もないはずだ、と力説をしていた。パートナーの龍騎を初め、スノーホワイトや九尾、ラ・ピュセル、ライアはすんなりと承諾し、リップルとナイトも、それならばという事で期待を寄せて現場にやってきたわけだが、その期待とは裏腹に、揉め事も厄介事も何も起こらず、気がつけば自分達以外誰もいなくなつた。唯一仕事としてやってのけたのは、人が集まり始める前に空き缶や割れたガラスに、コンビニ弁当などのゴミ拾いぐらいだろうか。

「そういえば、今日はモンスターも出なかったね」

「言われてみればそうだな。これだけ人が集まるなら格好の的かと思つたが……」

「モンスターも気分屋なのかもな」

ラ・ピュセルとライアの発言に、龍騎は呑気そうに答えた。それを聞いたナイトは呆れ、リップルは舌打ちをする。結局この日は思つていたよりもキャンディーが集まる事は無かつた。無論平和が一番なのは2人にも分かっていたが、今彼らに必要なのは、揉め事であり、キャンディーなのだ。今週はこのままいけば、キャンディーの少ない者が脱落する日が迫りつつあるのだ。

このままいけば、の話だが……。

それから一同は地上に降りて、トップスピードがいつものように用意してきた料理を口にする事にした。

「どうだ？ 今日の筑前煮の味は？」

「うん、美味しい！」

「はい、とっても美味しいです！」

「俺もだ」

「……まあ、はい」

「この筍が良いね」

正史、スノーホワイト、手塚、大地、ラ・ピユセルの順に料理の出来具合を述べる中、蓮二とリップルだけはいつもと同じ反応だった。

「……フン」

「……別に」

「相変わらず素直じゃねえな」

「うっさい」

そう言うものの、トップスピード本人や2人に何かと突っかかってくる正史は苛立たしいが、トップスピードが作る料理には満足していた。事実、芯の芯まで出汁が染み込んでいる。

「しっかしアレだな。こんなこつたら酒でも飲みながら見物してやりや良かったかもしれんね」

「えっ？ でもトップスピードは……」

正史がパートナーの腹部に目をやって何かを言おうとしたが、彼女がにこやかに人差し指を立てて唇に当てたのを見て黙り込んだ。危うく彼女が抱えている秘密がバレそうになったが、お腹に子供がいる事を考えると、トップスピードのそれは不謹慎な発言でもある。

その一方で、スノーホワイト達は正史の言葉が聞こえていなかったのか、返答をしていた。

「あ、あの……。私はまだ未成年ですから、さすがにお酒は……」

「わーってるって。大地もそうだし、ラ・ピュセルだって同じだろ？」
トップスピードは大地の姿と、以前その目で直に見たラ・ピュセルの変身者、岸边 颯太の姿を思い出して頷いた。

「俺はまあ飲めるけど。手塚とか蓮二は？」

「俺は、あまり強くないからな。誘われたら多少は、という程度だ」

「俺もだ」

「ふーん。で、リップルはどうよ」

続いてトップスピードはリップルにも尋ねる。

「私も無理」

「何でさ？」

「未成年……」

「……えっ？ それって魔法少女としてっわけじゃなくて、リアルガチで？」

リップルの一言に、本気で啞然とするトップスピード。他の面々は以前にリップルの変身者、細波 華乃の姿を目にしている為、すぐに彼女が未成年だという事は容易に想像できた。

「へえ、見えねー！ つーかりアルだといくつよ？」

「17」

「マジで？ 俺、19」

「……オイ」

「そっちも酒ダメだろ」

もちろん今の2つのツツコミが、ナイトとリップルの口から自然に出たものだという事は言わずもがな。

「そっかあ。正史と蓮二と手塚は年上だっけ分かってたし、大地とスノーホワイトとラ・ピュセルは年下だっけのも分かってたけど、リップルは年下だったのかー。俺、タメか上だと思ってたわ」

「それでその態度は……」

年長者相手でも、態度や言葉遣いには気を遣わない姿を普段から見ている大地は呆れ、リップルは舌打ちをした。

「ところでさ。学生諸君に聞きたいけど」

それからすぐに、トップスピードは話題を変えて、現役の学生生活

を送っている4人に話しかけた。

「何ですか？」

「学校は楽しい？」

「はい。楽しいですよ」

「……ちよつと面倒ですけど、まあ、それなりには」

「最近足は怪我もあつて部活とは疎遠になりつつあるけど、楽しくないわけじゃないよ」

「普通……」

スノーホワイト、大地、ラ・ピュセルがそう答える中、リップルは端的に呟く。その後もトップスピードの質問は続く。

「友達とは仲良くやつてる？」

「はい。そうちゃんとだいちちゃん以外だと、仲良しのよつちゃんやスミちゃんつて子がいます」

「俺は……まあ、いないわけじゃないです」

「僕は……。大地やスノーホワイトとはもちろんだし、学校のみんなとも仲良くやれてます」

「友達は、いない……」

「んじやあ家族とは？」

「もちろん！」

「家の仕事を手伝つてるんで、苦労はしますけど、何とかやつてけるって感じ」

「相変わらず魔法少女好きだつてバレないかが心配だけど、それ以外なら、特には」

スノーホワイト、大地、ラ・ピュセルの返答は割とすんなりしていたが、家族の事を聞かれた途端、リップルは空いていた手を握りしめて、憎悪を吐き散らすように呟いた。

「あんな奴ら、家族なんかじゃ……！」

「リップルさん？」

「っ！ 何でも、ない……」

スノーホワイトに声をかけられたリップルはハツとして、黙々と料理を口に運んだ。里芋にもしつかりと味が染み込んでいる。

「(リップルさん、親と仲良くないのかな……?)」

スノーホワイトは、リップルの異様な反応が気になったようだ。ただ、リップルの隣にいた蓮二だけは何かを知っているのか、ジツとリップルの顔を見つめている。

「なるほどなー。みんなそれなりには満喫してるみたいで良かったよ。良かった。けどアレだな。俺も17の時はリップル、お前みたいな感じだったわ」

「そうなの?」

正史が筑前煮を頬張りながらそう尋ねる。

「でも、リップルの方がマシかもな。聞かれればきちんと答えてくれる所は、俺には持って無かった。そんな素直に答えてた事なんて、記憶にも無いな」

「へえ」

「俺もあの頃は荒れてたからなー。もつとこう、尖ったナイフみたいな感じで誰も寄せ付けなかったし。まあ今はもう丸くなってるけど」
「今は……って。昔はそんなに悪かったんですか? とてもそんな風には見えないんですけど……」

今度はスノーホワイトが質問をする番だった。対するトップス
ピードは何故か自慢げに高校生の頃の事を話し始めた。

「おうよ! 何てったって俺は昔、『エンプレス』って呼ばれる暴走族のリーダーを務めてたからな!」

「ぼ、暴走族……!?」

「……エンプレス? 何それ?」

不意にリップルが反応を示した。

「えっ? 知らないの? 北宿を中心に活動してた、結構有名な集団だよ? この街じゃ右に出る者はいなかったって噂が広まってたから」

「知らないし」

新聞記者という職業柄か、何かとそういった事情に詳しい見習いジャーナリストはここぞとばかりに説明したが、リップルは肩を竦めるばかりだった。

「へへっ。驚いたろ?」

「意外性がなさすぎて逆に驚いてる」

「……さいですか」

思った以上の反応の薄さに、トップスピードはため息をついた。

そんな中、不意にラ・ピュセルは大地がどこか上の空になりながらも、一点を強く睨みつけているのに気づいて声をかけた。

「大地?」

「っ。何だ」

「それはこっちのセリフ。何か考え事をしてたみたいだけど、どうしたんだ?」

「別に、お前には関係ない事だから……」

「いや、でも……」

ラ・ピュセルが何かを言おうとしたが、唐突にそれを遮るように、甲高い声が聞こえてきた。

『リップル、リップル』

「ん?」

皆がリップルの持つマジカルフォンに目を向けると、自動的にオンになったマジカルフォンからファヴの立体映像が浮かび上がった。ファヴはリップルだけでなく周りを見渡して、龍騎の変身者である正史がいる事に気付いた。

『あつ。龍騎もいるなら丁度いいぽん。2人にちよつと大事なお話があるぽん』

「俺とリップルだけに?」

正史が首を傾げていると、ファヴは要件を伝えた。

『実はさつきカラミティ・メアリからメッセージをもらって、明後日の午後19時に、中宿のホテルプリーステスで会いたいって言ってるぽん』

「カラミティ・メアリが……?」

ラ・ピュセルの呟きに、一同は険しい表情を浮かべる。つい先日、彼女やそのパートナーである王蛇から手痛い仕打ちを受けていたスノーホワイトは、思わず大地の腕を掴んでいた。他の面々も、彼らと

は嫌な思い出しが見つからず、そんな彼女からのお誘いともなれば、すぐには首を縦に振れないのが普通だった。事実、ファヴの話の聞いたリップルは嫌そうな顔をしている。

ところが1人だけ、真逆の反応を示す者が。

「明後日の午後19時に、ホテルプリーステス、だな。分かった」

「城戸さん!?」

正史は待ち合わせ場所や指定時間をメモに書き込むと、メアリからのメッセージを承諾するように呟いた。

「待て城戸。相手はあのカラミティ・メアリだ。罠だとは思わないのか?」

さすがの手塚も危機感を抱いているのか、正史に考え直すように言ったが、本人はいたって真面目な顔をして答えた。

「そりゃああいつらには今まで酷い目に遭ったけどさ。ひよつとしたら今までの事を謝ろうって思ってた俺達に会おうとしてるかもしれないだろ? それでこつちが断ったら、今度こそ向こうが改心する機会がなくなるかもしれないし」

「バカが。あいつらがそんな簡単に改心するなら、もつとこの戦いもスムーズに行ってる。いい加減人を疑う事も覚えろ」

「いちいちそんな事気にしたら、人間やってけないし! それにほら、今回は王蛇も俺達を呼んでるわけじゃないんだろ、ファヴ?」

『ファヴやシローが把握してる内では、王蛇からの連絡は来てないぼん』

「とにかく! 俺は行くよ。話し合えば分かってくれるに決まってる。それが人間だろ?」

頑なに意志を曲げない正史に、手塚も説得を諦めてしまったようだ。その代わりに、ポケットから紐付きのコインを取り出し、ぶら下げてしばらくの間、コインをジッと見つめ続けていた。やがて目線をコインから外し、占い結果をため息混じりに呟いた。

「……正直、先が見えないな。決して良い方向とは言えないが、悪い方向ばかりではなさそうだ」

「手塚の占いでも無理か……。なら、俺もついてくよ。どの道送って

かなきやならないし」

トップスピードも同伴を決め、残るはリップルの返答のみとなったが、依然としてリップルは不機嫌そうな顔をしている。

「……私はパス」

「いやパスって……。気持ちは分かるけどさ。でも行かなきや行かないでスッゲー面倒くさい事にならない？」

「嫌なものは嫌」

カラミティ・メアリとは因縁しかないリップルはなおも会合を拒んでいる。トップスピードはため息をついてから、こう語った。

「最低でも半年だけは生き延びたいっていう俺のささやかな願いが叶わない事になったとしたら、それはそれで俺にとってはすんげー嫌なだけだな」

「……あのさあ」

不意にリップルがトップスピードに顔を向けて、鋭い目つきでトップスピードを睨みつけた。

「良い加減なぜ半年なのか、教えてくれてもいいだろう」

「あー……」

「ま、まあさ！……ここはカラミティ・メアリの誘いによってあげようよ！……それにさ、ほら、トップスピードにだって色々事情があるかもしれないし……」

トップスピードだけでなく、今度は正史まではぐらかすように話を逸らす姿に、蓮二は目がついた。

「……城戸。お前何か知ってるのか、トップスピードの事で」

「ええつと、それは……」

まさか蓮二に尋ねられるとは思っていなかったのか、正史がしどろもどろになっていると、ファヴが割り込んできた。

『ちよつとちよつと、リップル。カラミティ・メアリは大事な用事だつて言ってたぼん。龍騎も行く気満々だし、同じ魔法少女として、聞いてあげてほしいぼん』

ファヴも説得に入り、リップルはますます不機嫌そうな顔をする。「だからそんなに嫌そうな顔しないでつてば」

トップスピードにそう指摘され、リップルは再び舌打ちをする。その一方で、蚊帳の外にいたスノーホワイトやラ・ピュセルも不安げな視線を向ける。

「本当に、大丈夫なんですか……？」

「確かに、相手は無法者だ。向こうは何をしでかすか分からないし……。大地からも何とか言ってくれよ」

「お、俺は……」

「大丈夫だよ。いざとなったら俺が前に出て何とかするからさ」

「何その根拠のない自信……」

ジト目で正史を見つめるリップルだが、その表情からして、完全に信用していないわけではなさそうだ。

「悪いが俺は降りるぞ。戦いが目的ならまだしも、ただの話し合いで無駄に命の危機を晒したくもない」

「俺もだ。それにこの人数で固まって現地に向かっても、向こうは警戒を強める。それこそ話し合いでは済まなくなる」

「どうやらナイトもライアも、カラミティ・メアリとの関わりを極力避けたいようだ。」

こうして話し合いの結果、ホテルプリーステスに向かうのは龍騎とリップルに加え、送迎係となったトップスピードだけとなり、後の5人は万が一に備えて待機する、という事で話は落ち着いた。

が、この話し合いの最中、大地だけは全く別の事を考えていた事に、彼らは気づいていない。

「……ここでもいいか？」

「うん。十分だよ。ありがとう、だいちゃん」

その後一同は解散し、九尾はスノーホワイトを家のそばまで送った。以前はそこまでする必要もなかったが、カラミティ・メアリと王蛇から襲撃を受けて以来、また狙われる可能性も低くないという名目のもと、パートナーが付き添う事となった。時折ラ・ピュセルとライアも手伝ってくれる。

「……ところでだいちゃん」

「？」

「ここ最近、ずっと何か考え事してるみたいだけど、大丈夫？ 心の声
が聞こえてこないし、もし自分だけで抱え込んでるなら、私が」

「平気だ。スノーホワイトには全然関係ない事だし」

「え、あ……。そ、それなら良いんだけど……」

「じゃあ、俺はこの辺で」

「う、うん。お休み、だいちゃん」

「ああ」

九尾は軽く手を振り、スノーホワイトに別れを告げて、N神社の所
まで高く跳躍した。自宅の屋根の上に立ったところで、九尾はポツリ
と呟いた。

「……そうだ。これは、俺がやらなきゃいけない事なんだ。小雪や、颯
太や、城戸さん達が、関わっちゃいけない」

何かを決意したものの、また心の中で決意が揺らぎ始めている様子
の九尾。九尾はマジカルフォンを取り出し、ある人物へ、メッセー
ジを送った。

「おやつ……う？」

山の廃屋で静かなひと時を堪能していたクラムベリーの元へ、メツセージが送られてきた。

「珍しいですね。まだ試験の途中なのに、このタイミングで私に連絡とは」

そう言いながらもマジカルフォンを手にするクラムベリー。興味なさげな表情だったクラムベリーが、メツセージの送り主を見て、眉が上がるまで数秒もかからなかった。

『前に、あんたは言ってたよな。俺には人を殺すだけの覚悟が足りないって。もし、俺がその覚悟を決めた時、俺はどんな強さを手に出来る。』
九尾』

文面を全て読み終えたクラムベリーは、口の両端もつり上がっていた。

やはりあの日の戦闘は無駄ではなかったと、改めて確信した。ラ・ピュセルは殺せなかったものの、あの戦闘を境に、結果的に九尾を参戦派に引き込むだけの役目を果たす事は出来た。

ならば、後はもう一押し。それによって『九尾』という、現時点では候補生となり得る仮面ライダーは、より自分にとって理想の存在と

なる。それを育て上げた者の名として、クラムベリーやオーデインの名が刻まれるのは必然。後の記録の改ざんなど、ファヴやシローの協力があれば造作もない為、この試験が成功すれば、試験官としての今後の自分の立場もより強固なものとなる。

そしてクラムベリーは、九尾を『最強』へと踏み出す一歩として、こんな文面を送り返す。

『強者として、如何なるものをも寄せ付けない、絶対的な力を併せ持つ、仮面ライダーや魔法少女が本来持つべき真の力、ですよ。』

クラムベリー』

72. 白狐ペアと黒龍ペア

「……ねえ、九尾。昨日のアレ。本当に龍騎さんもリップルさんも、大丈夫なのかな……」

「……」

「……ね、ねえ！ 聞いているの？」

「……っ。悪い。ちよつと、な……」

翌日、九尾とスノーホワイトは、とあるビルの屋上から街を見下ろし、困っている人がいないかを探していた時の事。スノーホワイトからの呼びかけに、九尾は反応が遅れていた。

「九尾、本当に大丈夫なの？ 2人もそうだけど、九尾の方も心配だよ……」

「何でそんなに俺を」

「それは、その……。パートナーだから、じゃダメ？」

「……まあ、お前が何しようと思いにしないけどさ。無理してお前が抱えなくても良い事だから」

「えっ……？」

「ほら、始めるぞ。マジカルキャンディー集め」

『MIND VENT』

そう言つて九尾はパートナーカードのマインドベントを使い、困っている人の心の声を聞く事に専念する。

すると早速、マインドベントの効力、そしてスノーホワイト自身の魔法によつて、叫び声に近いものが聞こえてきた。

『た、助けてくれえ！』

「！ 九尾！」

「ああ」

九尾がいち早くビルから飛び降りて、裏口から駆け出した。スノーホワイトもそれに続く。2人が向かった先には、右手に槍のような長柄の武器を持つ、イカ型のモンスター『ウイスクラーケン』が、左手から伸びた触手で男性を絡め取るうとしている。九尾は真つ先に飛び蹴りでウイスクラーケンを引き離し、ウイスクラーケンは後方に

あつた窓からミラーワールドへと逃げ込んだ。

「早く逃げてください！」

その間にスノーホワイトが男性の無事を確認して、その場から逃すと、先に入っていった九尾の後を追うように、スノーホワイトもミラーワールドへと突入した。

スノーホワイトが九尾に追いついた頃には、すでに戦闘が開始されていた。九尾は持ち前の瞬発力を活かして殴りや蹴りを入れているが、ウイスクラーケンも格闘戦に長けているのか、剛腕を振りかざして九尾と対抗している。

「九尾！」

「構うな！　こいつは俺がやる！」

またしてもスノーホワイトの援護を拒絶する九尾。ここ最近はずっとこの調子だった。モンスターとの戦闘では必ず前に出て、力を出し惜しみする事なく、ただ倒すためだけに体を動かしている。

スノーホワイトは一瞬立ち止まったが、唾を飲み込むと、マジカルフォンを手を持って、画面をタップした。今の九尾を見ていて、心配になってきているのだ。無理をしているわけではないが、何か目的を持って、自ら戦いの渦中にその身を置いているようにしか見えないのだ。このままでは、九尾が自分から遠ざかり、しまいには消えていなくなってしまうのでは、という不安が昨晩からよぎっていた。

「(そんな事には、させたく、ない!)」

恐怖心はあるが、九尾を見捨てられない。迷いに迷いながら、スノーホワイトはパートナーシステムによって上空から降ってきたフォクセイバーを受け取り、

「ヤアアアアアアア！」

と叫びながら、ウイスクラーケンに突撃する。対するウイスクラーケンは九尾を槍で吹き飛ばした後、スノーホワイトの振り下ろすフォクセイバーを受け止め、横に弾いた。元々スノーホワイトも武器を持って戦う事に慣れてない為、フォクセイバーを握る握力も弱く、いとも簡単に彼女の手から離れた。

「！」

ウイスクラーケンは返り討ちとばかりにスノーホワイトを剛腕で殴りつけて、後方に下がらせた。

「うあっ……い！」

声にもならない痛みが全身を襲い、スノーホワイトはその場にうずくまる。ウイスクラーケンは、奇声と共にスノーホワイトに飛びかかろうとする。九尾も立ち上がろうとするが、スノーホワイトの方には間に合わない。

スノーホワイトが思わず目を瞑ったその時、上空から何者かがウイスクラーケンの背後からしがみつき、スノーホワイトや九尾から遠ざけるように、ウイスクラーケンを引っ張った。

「……スノーホワイトに、九尾に、傷を、つけさせない」

「ハードゴア・アリス……い！」

九尾は突如現れた、顔見知りの人物の名を呟いた。それは以前、王蛇からの強襲に割り込んで彼を殺そうとした、ハードゴア・アリスだった。魔法少女になって身体強化された体でウイスクラーケンにへばりつくが、ウイスクラーケンも鬱陶しくなったのか、無理やり引き剥がして、槍を突き出して、華奢な少女の首に直撃させた。突きによって、アリスの首はおかしな方向へとねじ曲がった。普通なら、首の骨が折れて息絶えてもおおしくない状態。

だが、九尾もスノーホワイトも知っている。彼女は、その程度では死なないという事を。その証拠に、折れ曲がっていたはずの首がみるみるうちに元の原型に戻り始めているではないか。ムクリと、平然と起き上がるアリスにたじろぐウイスクラーケン。だが臆したのは一瞬だけで、再び駆け出すウイスクラーケンだったが、

『グオオオオオオオオ！』

どこからともなく現れた黒龍が、ウイスクラーケンを吹き飛ばした。突如現れた黒龍『ドラグブラッカー』を見て真っ先に驚いたのは、九尾とスノーホワイトだった。

「えっ!? あれって、龍騎さんの……い！」

「いや、見た目は似てるけど、色だけじゃなくて、雰囲気も違ってる……」

2人が辺りを見渡していると、別の足音が響き渡る。2人が同時に音のする方へ振り返って、そして息を呑んだ。

2人とハードゴア・アリスに向かって歩いてくるその人物の姿は、どこからどう見ても、普段から九尾やスノーホワイトが行動を共にしている龍騎と酷似しているのだ。唯一の違いは、龍騎が赤を基調としているのに対し、彼はハードゴア・アリスと同様に、全身が黒を基調としていた。

「龍騎、じゃない……！ ひよつとしてあんたが……」

「……はい。私の、パートナー、です」

答えたのは、アリスの方だった。黒いライダーはアリスの方に顔を向ける。

「急にどこへ走り出すかと思えば、2人を助ける為に、というわけか」
「……心配かけて、ゴメン、なさい。でも、私は、2人を、守りたかった……」

「……まあいい。それがお前が一番に為すべき事だったそうだからな」

会話からして、どうやら勝手に走り出したアリスを追いかけたきたようだ。

そこへ、スノーホワイトが単刀直入に問いかけた。

「あ、あの！ あなたは、龍騎さん、じゃないですよ……？」

「龍騎……は知らないが、俺は、リュウガだ」

「仮面ライダー、リュウガ……」

どこからどう見ても龍騎とそっくりのライダー『リュウガ』との会合に、不信任を募らせる九尾だったが、不意に襲いかかってきたウィスクラーケンから避けているうちに、それどころではなくなってきた。

「くっ……！」

「俺とアリスも、手を貸そう」

「おい、何勝手に……！ こいつは俺が」

「大丈夫、です。九尾には、迷惑、かけません」

「……」

『SWORD VENT』

九尾はため息をつき、カードをベントインしてフォクセイバーを両手に持った。一応は共闘を承諾したようだ。

『SWORD VENT』

一方のリユウガも、黒いドラグセイバーを手に持ってウイスクラーケンに斬りかかった。

「(にしても、あのリユウガっていうライダーの姿も武器もそうだけど、何であそこまで龍騎と瓜二つみたいになってんだ……?)」

気にはなつたものの、このままリユウガやアリスだけに戦わせたくないと思ひ返して、リユウガと共にウイスクラーケンを圧倒した。

「わ、私も……!」

スノーホワイトも再びフォクセイバーを拾い上げて、援護に向かうとするが、それを遮るように、いつの間にかアリスがスノーホワイトの横に立って、左腕を伸ばして制止した。

「な、何してるの……!?」

「スノーホワイトは、武器を持って、戦う必要、ない、です」

「で、でも……」

「私がいれば、大丈夫……」

そう言つてアリスはマジカルフォンをタップして、その右腕に黒いドラグクローを装着した。

「……!」

そして無言で右腕を後ろに引き、ドラグブラッカーがアリスの周りに降り立つと、アリスが突き出したドラグクローと、ドラグブラッカーの口から黒い火炎弾が放たれた。ハードゴア・アリスによるドラグクローファイヤーによって、直撃したウイスクラーケンの槍にヒビが入った。

『ACCEL VENT』

すかさず九尾がアクセルベントのカードを使い、高速移動でウイスクラーケンに追撃を与え、遂には槍が粉々に砕け散った。

「……トドメは、俺がやる」

『FINAL VENT』

最後はリュウガがカードをベントインし、宙に浮くと、ドラグブラッカーが放った黒炎に押し出され、同時に命中した黒炎がウイスクラーケンを硬化させた。

「ハアアアアアアアアッ！」

リュウガの必殺技『ドラゴンライダーキック』が炸裂し、ウイスクラーケンは難なく爆散した。

黒炎から噴き上がる煙が辺りを支配し、リュウガの全身に異様なオーラが纏われているかのようなものを、九尾とスノーホワイトに感じさせた。

「す、凄い……（龍騎さんとは、違う意味で強いんだ、この人は……）」
初めて見るリュウガの実力に、スノーホワイトはいつの間にか釘付けとなっていた。

やがて4人のマジカルフォンからキャンディー獲得の知らせが入り、リュウガはゆつくりと3人に歩み寄る。すると、アリスの方に動きが見られた。彼女はマジカルフォンをスノーホワイトに差し出したのだ。

「えっ？ 何、どういう事？」

「……今手に入れたキャンディー。スノーホワイトに、あげます。後で、九尾と分け合って、ください」

「い、いいよそんな事！ だって私も九尾もたくさん持つてるし……！ それにキャンディーがなくなっちゃったら困るのはあなたの方じゃないの!?？」

「……大丈夫、です。私も、たくさん持ってます。それに……」

「それに？」

「お二人に、恩返しが、したくて……」

アリスの呟く『恩返し』と言う言葉に、2人は首を傾げる。接触した回数が少ないという事もあるが、少なくともこれまで出会った内ではアリスを助けたような事は記憶にない。むしろ、王蛇の魔の手から助けてもらった礼がある。

それでもなお執拗にキャンディーをあげたがるアリスを見て、九尾は首を横に振った。

「悪いけど、貰えない。それはお前が手に入れたものだ。何が目的かは知らないけど、俺達には必要ない」

「わ、私も、かな……。だから、このキャンディーはあなたが持つていて」

「……それじゃあ」

アリスは少し残念そうな素振りを見せた後、唐突に近づいて、スノーホワイトの手を握った。いきなり手を握られて、スノーホワイトは短い悲鳴をあげる。

「ヒツ……!?」

「お、おい……」

「……私、あなた方に、憧れて、魔法少女に、なりました。……握手を、させて、ください。……それから、私の事は、『あなた』じゃなくて、『アリス』で、お願い、します」

「えっ? あ、うん。分かったよ、アリス」

どうやらキャンディーを渡すのを諦めた代わりに、握手と名前で呼んでもらう事を約束してもらおうようだ。それならば、という事でスノーホワイトも承諾し、その手を握り返した。死人のように冷たい手だった。よほど嬉しかったのか、ニツコリと笑ったつもりなのだろうが、限のついた目で笑みを浮かべると、より一層不気味さが浮き立つ。

その後、スノーホワイトに言われて九尾も握手に応じた。その際、九尾はこう尋ねた。

「1つ、いいか」

「何でしょう、か?」

「アリス、お前と俺達はどこかであつたか?」

「……。それ、は……」

尋ねられたアリスは、答えにくそうな様子だった。

九尾もそうだが、スノーホワイトもずっと気になっていた疑問。それはハードゴア・アリスの過度な密着。向こうは九尾とスノーホワイトに恩義を感じているようだが、2人には身に覚えのない事だ。ライダーや魔法少女同士の戦いが激化しているにもかかわらず、アリスは臆する事なく2人に近寄る。一体何が彼女をそうさせるのか。どう

やらその答えはまだ聴けそうにない。

その代わりに返ってきたのは、リュウガからの質問だった。

「なら、俺からも聞きたい事がある」

「はい。何でしょうか？」

「さつき、お前達は俺の事を龍騎と勘違いしていたようだな。……俺は龍騎の事は、16番目に誕生したライダーぐらいしか情報はない。お前達は、どこまで奴と親しい。奴は、お前達にとって何なんだ」

自分とそっくりの存在に興味を抱いているようだ。

「どうと言われましても……。龍騎さんは、私達の仲間で、とても優しくて、強くて、九尾と前から親しくて……。あ、後はファムと凄く相性が良かったんです」

「ファムと……。？」

「あ、はい。だから、ファムがいなくなつて、凄く落ち込んでた時があったから、やっぱりあの人の事を……」

段々と口調が重苦しくなったスノーホワイトに、アリスはどう声をかければいいのか、分からないようだ。だが、それでもどうにかして接しようと、下から見上げるようにスノーホワイトの顔を覗き込んだ。その仕草に、スノーホワイトはビックリした。

「……スノーホワイト、泣かないで、ください。私が、ついてます。九尾の事も、あなたの事も、今度は、私が、守ります。そばに、い続けます。だから……」

「だ、大丈夫！ そばにいてくれる人なら、間に合ってるから！ だから、その……。今日は、ありがとう！ それじゃあ私達、もう行くね！ 行こつ、九尾！」

「あ、ああ」

スノーホワイトに引つ張られて、その場を後にしようとする九尾。立ち去る直前、九尾は立ち止まり、リュウガの方に顔を向けた。

「？ 九尾？」

「リュウガ。聞きたい事がある」

「……何だ」

「この間、その龍騎がミナエルに襲われたって聞いている。妹のユナエ

ルが、龍騎に殺されたから、その敵討ちにつて」

「……」

「けど、だ。もし俺の予想が正しければ、本当は龍騎にそっくりのあんたが……」

「否定はしない」

その言葉を聞き、九尾は黙り込み、スノーホワイトは軽く血の気が引いた。ユナエルを殺したのは、今日の前にいる黒いライダーだと判明したからだ。

「どうして、そんな」

「全ては目的の為、ある事を成し遂げる為だ。それまでは、俺は死なない」

「……あなたは最初から、人を殺せるだけの覚悟を持ってたのか」

「お前は、どうだ？ 魔法少女が、ライダーが、元は同じ人間だった者が次々と消えていくのを見て行って、何が変わった」

「……」

「き、九尾？ 何言つて……」

スノーホワイトが怯えながら九尾に声をかけるが、九尾はそれを無視してスノーホワイトの手を握った。

「……行こう。そろそろ家に帰らないと」

「う、うん……」

もう夜も遅い。2人は再度アリスとリュウガに手を振って別れた。アリスだけは名残惜しそうだったが、リュウガだけは自分の手のひらを見つめていた。手の中には、黒龍のペンダントが。

「龍騎……か。……もし、俺の予想が当たっているなら、シローもファヴも大それた事をしたものだな」

リュウガとハードゴア・アリスも、九尾とスノーホワイトが立ち去ってからすぐに現地で解散し、家路についた。

アリスは、屋根の上を飛び交いながら、親戚の叔父、叔母が住んでいる家の前に着地した。そこが、今現在のアリスの変身者の家だった。予めロックを外しておいた窓を、なるべく音を立てずに開けてからするりと滑り込むように、自室でもある和室に足を踏み入れた。手に持っていたウサギのぬいぐるみを本棚の上という定位置に置いた後、一度周りを見渡してから、自分の意思で変身を解除した。

光に包まれた後、露わになったのは、スノーホワイトの変身者である姫河 小雪と背丈が同じくらいの少女。少女は一息つくつと、ベッドの上に座って、右手をジツと見つめた。先ほど、スノーホワイトや九尾と握手してもらった時の事を思い返しながらも、深くため息をついた。

「……………どうしたら、上手く伝わるんだろう」

スノーホワイトに、九尾に、もつと近づきたい。そう考えているものの、いざ目の前にすると、自分の本心を素直に伝える事が出来ない。以前、シスターナナの紹介で確認した、2人と行動を共にしているチームメイトはどうやって2人と仲良くなれたのだろうか。

少女が悩みに悩んでいたその時、襖をノックする音が。少女が返事をすると、メガネをかけた初老の男性が襖を開けて入ってきた。

「叔父さん……………」

「どこかに出かけてたのかい？ ついさつき呼んだんだけど、返事が

無かつたらね……」

「そ、それは……」

まさか、魔法少女としてキャンディー集め、そして恩人達と会ってきただなんて言えるはずもなく、少女は口を濁らせながら答えた。

「ずっと、部屋で、寝てました。その……、ゴメンなさい……」

「そ、そっか……。それなら良いんだ。謝らなくてもいいよ」

「(……ゴメンなさい。でも私、叔父さんや叔母さんには、どんな小さな迷惑も、かけたくない)」

少女が心の中でそう謝っていたその時、玄関のチャイムが鳴り響いた。少女やその叔父がビクツとなり、叔父が少女を守るような姿勢になると、ドアの向こうから声が聞こえてきた。どうやら回覧板を渡しにやってきた近所の住民のようだ。叔父は直ぐに行くと言った後、少女に言った。

「大丈夫だ。とりあえず、今日はもう着替えて寝なさい。良いね？」

「はい……」

少女が返事をする、叔父は少女の頭を優しく撫でて、部屋を後にした。少女は再びため息をついて、ベッドの上に座り直した。その体は僅かながら震えている。

とある事件があつてから、少女は常に今のような生活を虐げられていた。虐げられているのは、叔父も叔母もひよつとしたら同じなのかもしれない。もちろん悪いのは少女でも、叔父でも叔母でもない。

……それでも、少女は自分を責め続けた。あの日以来、周りからの視線に怯えている叔父や叔母を見ると、申し訳ない気持ちがぶり返し、『死にたい』という気持ちが一瞬もよみがえる事も多々あった。ほんの少し前の彼女なら、この時点で死を選んでいてもおかしくなかった。

だが、今は違う。彼女は生きる事を望んでいた。そのきつかけとなつたのは……。

「(『あの出会い』が、『あの人達』の助けがなかったら……。私、きつと自殺してたんだよね……。だから、今度はきつと、この気持ち、届けたいよ。だからお願いです。神様が本当にいるのなら、私にその勇気をください……)」

73. ライダー&魔法少女集結

「承諾した、か……。あのリップルが素直に受け入れるとは思わないけどねえ。ま、どうせ龍騎やトップスピードあたりに唆されたんだろうけど」

マジカルフォンに表示されていた、『リップルと龍騎が、カラミティ・メアリからのお願いを聞いてくれたぽん。待ち合わせ場所に時間通りに来てくれるぽん』というファヴからのメッセージを読み終えた、くたびれた中年姿の女性、『山元やまもと 奈緒子なおこ』はマジカルフォンから視線を外し、片手に持っていたボトルから、グラスに酒を注ごうとした。が、中は空っぽだった。いつの間にか飲み干していたようだ。

いつ飲み干したのか全然記憶にないな、と思いつつも、奈緒子はボトルを放り捨てた。ボトルはいとも簡単に砕けた。

「まあ、酒ぐらい後で飲めるしな。お楽しみは後にとっておくか」
今は、それ以上に楽しませてくれる事が待ってるからな。

そう呟いた奈緒子はVIPルームの裏手に隠しておいた、あらゆる武器を手にとって手入れを始めた。面倒ではあるが、相手をいたぶるにはその武器の特性を最大限に活かさなくてはならない。

奈緒子にとって至福な瞬間。それは、強い者や偉ぶった者、美しい者、賢い者、そして自身に満ち溢れた者など、彼女にとって気に入らない、上にいるはずの者が抗いようのない暴力に辱められた時に見せる、苦悶に満ちた表情。それを見る事が出来た時、この上ない支配欲で満たされたと実感できる。

そして。今の奈緒子には酒の力を借りなくとも、特別な力がある。そして今宵、その力が最大限に発揮される時が来るのだ。

必要な武器を、四次元袋に入れ終えた奈緒子は、そこでマジカルフォンにメッセージが届いている事に気づいて、確認してみた。

『こっちの準備はOKだから、派手に面白いゲームを始めて。』

『ガイ』

「……フツ。ならお望み通り、面白くしてやるよ。思いつきり派手にね」

これを見た奈緒子は不敵な笑みを浮かべながら、直ぐ近くでいびきをかいて寝ているヘビ柄の服を着た男性、浅倉 陸を叩き起こした。「ほら、いつまで寝てんだい。もう直ぐ待ち合わせの時間だ」
「……アア？」

浅倉はバツと目を開けて、奈緒子を睨みつける。普通なら失神し兼ねないほどに鋭い目つき。だが奈緒子には全く通じていないようだ。「さあ。あなたの溜め込んでいるイライラを、この辺で一気に発散してやろうじゃないか。あなたとあたしなら、それが出来る」

「戦える場所があるなら、誰と組もうがどうでも良い」
「そうさ。時は満ちたんだ。後はガイが呼び込んでくる役者さえ揃えば、最高の舞台になる。あたしらを恐れないもの全て……。そう、街も人も、魔法少女も仮面ライダーも、お嬢ちゃんも龍騎バカも、焼き尽くすのさ！」

自分をイラつかせる奴らは全員潰す。狂気性に満ちた2人は、予め設置されていた鏡の前に立った。浅倉はポケットから蛇の紋章が刻まれたカードデツキをかざし、奈緒子はマジカルフォンを手に持つ。カードデツキをかざした事で、浅倉の腰にVバックルが出現。右腕でポーズを取り、スナツプを利かせ、同時に奈緒子もマジカルフォンをタップし、2人は叫んだ。

「変身！」

カードデツキを差し込んだ浅倉に鏡像が重なり、蛇をモチーフにした紫色の仮面ライダー『王蛇』へ、光に包まれた奈緒子は、ガンマンスタイルの魔法少女『カラミティ・メアリ』へと変身した。

王蛇は首を回して音を鳴らしてから、両肩を震わせ、カラミティ・メアリは景気付けにホルダーから取り出した拳銃を握って、近くに置かれていたピンが銃弾を打ち込むと、床に広がる液体を見つめながら、ニヤリと笑った。

「あたしらは強いのか。逆らうな、煩わせるならムカつかせるな……。あたしらを恐れない者は、許さない」

ファヴ：『ええ〜っ。今日は、キャンディー獲得数の成績が良かった
ペアへのレアアイテムが配布されるぼん！』

シロー：『今回獲得した3組目のペアは、『龍騎&トツプスピードペ
ア』だ』

ファヴ：『おめでどうぼん！ これからも人助けを、力を合わせて頑
張ってほしいぼん！』

「やっと手に入れたな、このアイテム！ 早く使ってえ！」

「……はしやぎすぎ」

「まあ良いじゃん。一番欲しがってたし、別に寿命を取られるわけじゃないからや」

「にしても、そろそろ約束の時間だな……」

「あ、ホントだ。来てないみたいだけど、もうちよつと待とうか」

「やつぱり罨じゃ……」

「そんな事ないって。リップルも案外心配性なんだな」

「お人好しバカに言われたくない」

リップルは舌打ち混じりにそう呟く。

中宿のホテルプリーステスの屋上にて、強化アイテムを手に入れた龍騎、トップスピードに加えて、リップルの姿があった。彼らはカラミティ・メアリからの誘いを受けて、普段行動を共にしているナイト達と別行動でこの場に來ていた。が、待ち合わせ時間が迫ってきているにもかかわらず、呼び出した張本人が一向に姿を見せない。リップルは周囲を警戒する中、龍騎とトップスピードは暇になったのか、世間話を始めていた。警戒心が薄すぎやしないか、と思うリップルだったが、ずっと周りに意識を集中させていると、どうにも疲れてくる。そこでリップルも一旦肩の力を抜いて、トップスピードにこんな事を尋ねた。

「……ねえ、トップスピード」

「ん？」

「聞いていい？ お前は昔、暴走族のリーダーだったって言ってたよな」

「そーだけど？」

「……どうして、普通の生活に戻れたの？」

『普通』というものを身近で経験する機会がなかったリップルは、どうしても気になっていたらしく、『普通』を取り戻したであろうトップスピードに話を聞いてみたのだ。尋ねられたトップスピードはハッとしてから、少し考える素振りを見せた後、首からぶら下げてあるお守り袋に目をやった。

「……小学校の頃に、隣に越してきた家に、同じ年の女の子と7つ上の

兄貴がいてさ。その兄貴、結構口うるさくてさ。しよつちゆう喧嘩してた。でも、そいつのおかげで今みたいに丸くなれたんだ」

「兄貴……。そいつが、トップスピードを？」

「うん、まあ……。ちゃんと話し合えたのは、多分高校の時だろうな。そつからまあ、色々あつて……。うん。色々あつたよ」

トップスピードの表情が段々と暗くなっている事に、リップルは気づいていないのか、質問を続けた。

「色々つて、何が？」

「そ、それは、その……」

「ちよ、トップスピード……！ さすがにそれ以上は……！ リップルもほら！ もうこれ以上聞かない方が良くも……」

「何でそうなる。その様子じゃ、龍騎は知ってるんだな」

「ま、まあ、そうだけど、これはさすがに本人が簡単に口に出せるものじゃないしさー！」

「言ってる意味全然分かんないけど。その兄貴とは、どうなったんだよ」

「そ、それは、まあ、一応幸せになっ」

「！」

トップスピードが言葉を続けようとしたその時、殺気立った気配を感じ取ったリップルが、龍騎とトップスピードに飛びかかった。何が何だか分かっていない2人は困惑しながら地面に倒れこんだが、直後に耳元に入ってきた、地面が抉れる音を聞いてハッと音のした方に目を向けた。3人が立っていた地点から数十センチほど離れた場所に、抉れた痕が残っていた。その穴の形からして、銃弾だとすぐに察した2人は、この銃弾を撃ち込んだであろう犯人の名をトップスピードは叫んだ。

「カラミティ・メアリか……！」

「ど、どこから撃ってきたんだ!?？」

龍騎が首だけを動かし、狙撃者を探そうとしたが、再び遠くからの銃声と共に弾が3人の近くに着弾した。しかも今度は目と鼻の先を掠め取るように。

「ヤベエぞー！」

「おわっ!?？」

これを見たトップスピードは、龍騎とリップルを引き連れて、一目散に銃弾を撃ち込まれたであろう方角から遠ざかるように駆け出した。3人の背中越しに、再び銃弾が迫ってくるが、奇跡的にもそれらは掠りもしなかった。今夜は少し風が強いという事もあり、照準がズレているようだ。

「お、おいおい!?？ 何でこんな事するんだよ!?？ 俺達は話し合う為に来たのに！」

「やつぱり、最初から私と龍騎を殺す気でいたんだ！」

「じよ、冗談じゃねえぞー！」

3人は口々に叫びながら、どうにかして防壁のある場所までたどり着いた。厚い壁があるおかげで、弾が貫通してくる事はなさそうだ。「大分遠くから撃ってきてるみたいだし、このまま箒でビルの陰から逃げちまおう！」

こうなつては話し合いなど皆無だ。そう考えたトップスピードはリップドスワローを手に持つが、不意にリップルがトップスピードの手を振り払った。

「売られた喧嘩は買わないと……！」

「あ、危ないって！」

リップルが顔を覗かせようとしたところを、龍騎が慌てて彼女の顔を掴み、引き戻す。その間も、銃弾は3人のすぐ近くを飛び交っている。

「バツキヤロオ！ こんなのもう喧嘩じゃねえ！ 良いから来いって！」

トップスピードはそう一喝し、リップルを無理矢理ラピッドスワローに乗せた。

「龍騎も早く！」

「あ、ああ！」

龍騎もこの場から逃げた方が得策だと考え、カードデッキからパートナーカードを取り出してベントインした。

『BROOM VENT』

上空から降ってきた、龍騎版ラピッドスワローをキャッチした龍騎は、手早く箒にまたがった。

「メーター振り切って飛べば、あいつだって捕捉できねえ！」

「メーター……？」

「ものの例えだ！ 行くぞ！ 俺に続け、龍騎！」

「ツシャア！」

龍騎に合図を送ったトップスピードは、最大出力でラピッドスワローを発進させた。龍騎もそれに続く。なおも銃弾は背後から聞こえてくるが、動局的に当てるのは、カラミティ・メアリをもってしても至難の技のようだ。

さらに出力を上げて、全速力で遠ざかろうとしたその時、3人の前方から何かが迫ってきているのが見えた。もしや王蛇が足止めに来たのか。そう思って身構える一同だったが、すぐにそれは違う事が判明した。その人物の背中には、巨大なコウモリが張り付いている。それは彼らにとって何よりも頼れる味方である事を指し示していた。

「ナイト！」

「何でここに……？」

あれほどこの場所には来ないと言っていたはずのナイトが現れた事に困惑していたが、ナイトはすれ違いざまに叫んだ。

「あいつらは俺が足止めする！ お前達は逃げろ！」

「で、でも……！」

「死にたくなければ、これ以上奴らに関わるな！」

そう言っただけでナイトは、カラミティ・メアリがいるであろう方角へと突き進んだ。

「あいつ……。なんだかんだ言っただけで、俺達の事気遣ってたのかよ。素直じゃねえな」

ナイトの素直じゃない一面を見て、一瞬だけリップルの方を向いてから、少しだけ笑みを浮かべて前に集中した。

一方、カラミティ・メアリはビルの上を飛び交っていた。目的はもちろん、3人を狙い撃ちするのに最適なポジションにつくため。

「手を焼かせやがって……」

カラミティ・メアリは不満げに呟きながら、再び銃口を向けて2発撃ちこむが、やはり当たらない。舌打ちしながらも再度スコープを覗き込もうとしたその時だった。

『キイイイイイイ！』

「！」

甲高い鳴き声と共に、上空から人が降りてきて、手に持っていた武器を振り下ろした。メアリはとっさに後方へ地面を転がりながら回避する。メアリはすぐに起き上がり、襲撃者を睨みつけた。ダークバイザーを構えたナイトだった。彼を連れてきた契約モンスター、ダークウイングは、役目を終えたと言わんばかりに、ミラーワールドへと戻っていった。

「あんだ……！」

「やはり最初から狙いは、2人を始末する事だったか」

「なるほど。万が一に備えてあんたは後方で待機してたってわけだ。そんなにお仲間が大切かねえ？ 今となっては、ライダーも魔法少女も敵だつてのにさ」

「何を勘違いしている」

「あつ?」

「俺は、戦いをしにここへ来た。そうでなきゃ俺のいる意味はない。ここでお前達を倒せるのなら、好都合だ」

「……ムカつくね。あんたのそういう傲慢なところ。死んでも骨は拾わないよ」

「そんな汚い手で拾われても、迷惑でしかない」

そう言っつてナイトはダークバイザーの装填口を開いて、カードデツキからカードを取り出した。

「!」

対するカラミティ・メアリも、手に持っていたドラグノフと呼ばれる狙撃銃を捨てて、比較的扱いやすいハンドガンに持ち替えて、引き金を引いた。が、銃を持ち替えている隙が、ナイトにベントインさせる時間を充分に与えていた。

『SWORD VENT』

ダークバイザーを腰に戻し、ウイングランサーを構えたナイトはメアリに斬りかかった。メアリもまた、間合いを計って下がりながら撃ち続けるが、耐久性はウイングランサーに分があるようだ。次第にメアリはこれ以上後ろに下がれないところまで追いやられていた。

「チツ……!」

「フンッ!」

ナイトが一気に勝負を決めようとしたその時、背中に強烈な痛みが走った。

「グアツ……!」

ナイトが前のめりによるめき、カラミティ・メアリが足を突き出してナイトを蹴り上げると、距離が離れた隙に横に飛んで、先ほど放り捨てたドラグノフを拾った。ナイトは起き上がり、背後から襲撃してきた人物を睨みつけた。そこにいたのは、ベノサーベルを肩に乗せている王蛇。

「貴様……」

「俺にも戦わせろよ。ハアツ!」

王蛇はベノサーベルを振り下ろし、ナイトに攻撃を仕掛けた。ナイトは器用にかわしながらも、カラミティ・メアリ以上に躊躇のない攻めにたじろいでいた。

「(やはり、人間離れしているな)」

ナイトはそう愚痴りながらもウイングランサーを持つ手を強くしてから、視線をメアリの方向に向けた。メアリが体を向けている先には、龍騎、トップスピード、リップルの3人が豆粒のようになっていた。ナイトの足止めが功を奏し、かなりの距離を稼げたようだ。これだけ距離があつては、メアリも龍騎とリップルの殺害を諦めざるを得ないだ

「逃げるなら、戻ってこさせりやいだけの事さ」

……ろうと思つていた時期が、あつた。

3人を狙撃するチャンスを失つたにもかかわらず、メアリからは依然として余裕の表情が崩れない。何か秘策でもあるというのか。そう思つていたナイトの目の前で、カラミティ・メアリがとつた行動。

それは銃口を3人のいる上空ではなく、ナイト達がいるビルと龍騎達がいる地点の、丁度中間辺りに向けるといふものだった。そこは通称『上道』と呼ばれる国道が通っており、夜19時という事もあって、様々な車種の車が飛び交うように行き来している。メアリはそれらに目をやつて、口の端をつり上げているのが、ナイトには見えた。

「! まさか……!」

これからメアリがやろうとしている事を察したナイトが足を止めると同時に、メアリは引き金を引いた。

そして、ナイトの視線の先では宙を舞う車が。視力が向上した事で、車の中にいた運転手が困惑と恐怖で歪んだ顔が見え、道路に前からぶつかると同時に、車は爆発と同時に大破した。さらにメアリは後方から接近してきた車にも、同じく弾を当てて、爆発させた。中にいた人達がどうなったかなど、考えるまでもない。

「貴様あ!」

「ハアッ!」

「グウ……!」

一瞬で頭に血が昇ったナイトは冷静さを欠いてしまい、王蛇の腹蹴りを受けて地面を転がった。

「何をよそ見している……！　俺と戦えよ、もつとよお！」
「グツ……！」

そうこうしている間にも、メアリは躊躇う事なくドラグノフから火を噴かせた。爆発と炎上が立て続けに発生し、上道を走る車は次々と破壊されていった。加えて玉突き事故も発生し、運良く玉突きから逃れた車も、メアリが漏らさず破壊していった。夜の国道が、一瞬にして昼間のように明るくなったのだ。

車を破壊しつつも、その近くで逃げ惑っていた男が目について、戯れ程度に撃ってみた。胸から血が噴き出し、特にこれといったリアクションもなく倒れこんだ。それを見て、メアリは鼻を鳴らす。

「……フン。威力がありすぎて、面白みがないね。やっぱり車の方が、断然良い……！」

そう呟き、再度車を狙い撃ちするメアリ。轟音と悲鳴が、上道を中心に埋め尽くしている。すると、国道の周辺に位置する繁華街でも、爆発音が鳴り響いた。それを聞いて、メアリは笑みを浮かべる。

「(どうやら、ガイが張った罫もちやんと作動したみたいだね)」
「オオ……！」

すると、鈍い音と共に王蛇が呻き声を上げたので、一旦手を止めて振り返った。王蛇は後ずさっており、ナイトがメアリに顔を向けていた。仮面に覆われていても、鋭い視線が向けられている事が分かる。だが、その程度で臆するほど、カラミティ・メアリも落ちぶれてはいない。

「珍しいね。普段はクールなライダーだと思ってたのにさ」
「黙れ……！」

ナイトが声を荒げてウイングランサーを突き出すが、カラミティ・メアリはフウツと息を吐いてからこう言った。

「こうなったのもさあ。全部龍騎やリップルが悪いんだよ」
「何……!?？」

「初めて会った時に、どっちも素直に頭下げたりや、こんな事にならな

かったのさ。あたしや王蛇を恐れていなかったから、こうなるんだよ」

そしてメアリは、四次元袋からマシンガンを取り出して、ナイトに向けた。

「車とか一般人にぶちかますよりもさあ。もつと面白くて、気持ちが良いはずだよ。魔法少女を、仮面ライダーを、ぶつ殺すのはねえ！」

特別な力を入れた、ガンマン系魔法少女は、迷う事なくその引き金に手をかける。

上道での爆発が起きるほんの少し前。スノーホワイトの変身者である小雪は自宅に居座り、同じ魔法少女であるラ・ピュセルの変身者、颯太にマジカルフォンで連絡を取っていた。

『大地と、連絡がつかない?』

「うん。そうちゃんも気づいてたかもしれないけど、最近のだいちゃん、何かおかしいよ。考え事ばかりして、こっちの話をあまり聞いてくれないよ……。それに危ない事に積極的になりすぎて、不安で……。そうちゃんは、どう思う?」

『どうって言われてもなあ……。でも確かに、最近の大地は変わったと思う。また学校に行くようになってからは、大地が家まで車椅子を押してくれるんだけど、その時も、他ごとはばかり考えてるみたいだし

……』

「そう、なんだ。やっぱり……」

『それにさ。今日は朝見かけた時から変な感じだった。帰りは、用事があるって言って、さっさと帰っちゃったしき』

「そうなの？　じゃあそうちゃん、今日は朝の時しか見かけてないの？」

『まあ、そうだな』

「(用事って、家の手伝いかな……？　でもそれならそうって言いそうだし……。だいちゃん、どこにいるの……?)」

小雪がパートナーの安否を気にかけていたその時、遠くの方から轟音が聞こえてきた。

「な、何?!?!」

『小雪！　今のって……!』

どうやら颯太の方にも同じ音が聞こえてきたらしい。ふと顔を見上げて、風通しを良くしようとして開けていた窓の方を見ると、かなり離れた場所で灯りがともっている。が、窓を開けてよく目を凝らすと、それは蛍光灯やネオンライトとは全く違う、燃え盛る炎だった。

『小雪！　外で何が起きてるんだ?!?!　こっちは外の状況が分からない!』

まだ車椅子無しでは満足に歩けない颯太では、カーテンを開けて外を見る事が出来ない為、小雪に状況報告を頼んだ。小雪は声を震わせながら、現状報告を行った。

「燃えてる……!　多分、高速道路がある方!」

『何だって?!?!　そこって確か、リップル達がカラミティ・メアリと待ち合わせにしている場所じゃ……!』

颯太が声をうわずらせて叫んだ。

『小雪！　前まで解散場所にしてた所に集合だ！　手塚さんも蓮二さんも気づいてるはずだから、僕達も向かおう!』

「う、うん!」

会話を打ち切って、小雪は画面を戻してからタップし直した。

「変身!」

小雪はスノーホワイトに変身し、窓の手すりに手をかけた。下を見ると、両親や近所の人々が爆発地点を指差しながら口々に話している。スノーホワイトは皆に気づかれないように屋根の上を飛んだ。

「何がどうなってるんだ……!??!?」

小雪との会話を終え、颯太は近くに人の気配を感じない事を確認してから、その場でマジカルフォンをタップした。

「変身ー!」

光に包まれた颯太は、魔法騎士ラ・ピュセルへと変身し、足を床につけた。魔法少女姿なら、足の怪我など心配しなくても良いので、思う存分動き回れる。ラ・ピュセルは窓を開けて、はるか向こうに見える火の海をその目で確認して絶句した。かつてこのような被害がN市で起きただろうか。ラ・ピュセルは家を出る前に、大地に連絡を取ろうとしたが、一向に出る様子はない。

「こんな時に何やってるんだ……! まさか、大地もあそこにいるのか……!??!?」

もの言えぬ不安がよぎったラ・ピュセルは、すぐさまスノーホワイトらと合流する為に、一気に跳躍した。

「……………」

不意に聞こえてきた爆発音で、占いに集中していた手塚は意識を窓の外に向けた。街の灯りが強くなっているのかと思ったが、そうではない。国道を中心に、火が燃え広がっている。

手塚は思わずテーブルに目をやった。そこには、火のついたロウソクやコインが散りばめられている。

先ほど占った際に浮かんできた光景は、火の海と化した街に、逃げ惑う人々、そしてその街中で縦横無尽に駆け巡り、戦い始める仮面ライダーや魔法少女。

そして、血で全身が汚れている九尾と、そこに横たわる1人の男性。
「大地……………」

このままでは、大地は、九尾は取り返しのつかない事をしてしまう。そして何よりも今目の前に見えている出来事を解決しなくては、と思った手塚は鏡にカードデッキをかざし、右の人差し指と中指、親指を立てて叫んだ。

「変身！」

仮面ライダー『ライア』に変身すると、家を出て、現場へと向かった。その道中で、ライアは途中で合流したスノーホワイトとラ・ピュセルの姿を発見した。

「ラ・ピュセル、スノーホワイト！」

「ライアさん！ 高速道路が……………」

「ああ。……九尾はどうした？」

「それが、さつきから何度かけても連絡がつかない。もしかしたら、もう現地にいるのかもしれない……」

「九尾が……」

ラ・ピュセルとライアが九尾の事を話していると、スノーホワイトは唐突に頭を抑えた。

「ど、どうしたんだスノーホワイト!?!?」

「ぎ、聞こえる……! みんなの悲鳴が、頭の中に響いて……!」

「(そうか。スノーホワイトの魔法はフルオートだから、入ってくる量も尋常ではないはず……)」

『困っている人の心が聞こえるよ』という魔法を持つスノーホワイトにとつて、普段の活動時ならまだしも、この状況ではノイズのようなものだ。そう察したライアはスノーホワイトを落ち着かせながら2人に言った。

「とにかく、ここにおいても仕方がない。俺達だけで向かうぞ。龍騎達も助けに行かないとな。スノーホワイトも無理しない程度についてきてくれ。君の魔法が、救助に必要なになってくる。ラ・ピュセルも援護してくれ」

「ああ、分かった! 行こう、スノーホワイト!」

「う、うん!」

3人は人命救助と原因究明の為に、戦地へと出向く事にする。と、その時、3人のマジカルフォンにメッセージが届いた。

「こんな時に一体誰が……」

非常事態であるにもかかわらず、メールを送ってきた相手とその文面を見て、ハツとした表情を浮かべた。

『中宿の方で、面白いものが見れるからさ。みんな来てね。待ってるから。』

ガイ』

同時刻、リユウガとハードゴア・アリスも、上道の方で火が燃え広がっている光景を目にした。そしてリユウガはマジカルフォンに記載された、ガイからのメールに目をやる。

「面白いものを見せてやる、か……」

「……私、行きます。きつと、スノーホワイトも、九尾も、来ます」

「……分かった。俺も行く」

おそらく龍騎も来るだろうし、そこでじっくりと観察してやる。そう呟きながら、リユウガはハードゴア・アリスと共に、戦地へ足を運んだ。

「送信完了」と

メールを打ち終え、今現在生き残っている全ての魔法少女、仮面ライダーに一齐送信し終えた芝浦は、燃え盛る街中に目をやり、笑みがこぼれた。

「すっごいなあ。さすがはカラミティ・メアリ特性の罠だけあるなあ。おかげで面白くなってきたじゃん」

予めカラミティ・メアリが用意してくれた罠を、国道近くの街の至る所に設置していた芝浦だったが、予想以上に効果てきめんのようだ。そして彼は、より刺激的な展開へと持ち込む為に、全メンバーに召集をかけた。23人のライダーや魔法少女が一同に集結し、戦い合えば、ゲームとしては盛り上がる事間違いなし。芝浦は自分の考案に酔いしれていた。そして彼もまた参加者として出向く為に、王結寺にいたたま達よりも早くゲームの進行状況を知りたい為、早速カードデッキを近くにあったショーウィンドウにかざした。

「変身！」

そして芝浦は仮面ライダー『ガイ』に変身し、手を叩きながらその先に待ち構えている、『ゲームの盤面』と称した戦地へと、足取り軽く歩き出した。

「ひよ、ひよつとしてガイが言ってた、面白い事って、アレの事じゃ……」

王結寺からでも、中宿の国道の悲惨さが伺える。たまはガイに言われた通りに王結寺で皆に召集をかけていたのだが、爆発音が聞こえてビクついていると、パートナーからのメールを貰い、待機していたスイムスイム達に声をかけた。

「み、みんな！ 国道がめちゃくちゃになってるよ！ た、助けに、行かなくちゃ！」

「……でも、リーダーがいない。リーダーの指示は、必要」
「で、でも……」

スイムスイムの言う通り、王結寺には何故かリーダーであるベルデの姿はない。たまもそれが気になって、皆に呼びかけたが、誰も知らないと一点張りだった。ミナエルに至っては、膝を抱えてブツブツ言っていた為、会話すら成立していない。

と、そこへアビスがスイムスイムに寄ってきた。数分前までどこかに姿をくらましていたのだが、どこにいたのだろうか。たまが聞き出すよりも早く、アビスはスイムスイムにしか聞こえない声で呟いた。
「お前は、ルーラになりたいのだから？ なら、今からなってみれば良い」

「……？」

「お前が今から、リーダーとして俺達を動かす。ベルデがいなくとも、お前はリーダーとして、ルーラとしては最適だ。ルーラから教わった事を、今こそ発揮する時だ。その為に、お前はルーラを討つたのだから？」

「……！」

「この状況で適任なのは、お前だ、スイムスイム」
「私が、リーダー……」

スイムスイムは、手に持っていた『ルーラ』を見つめる。それからすぐに頷いて、たまの方に顔を向ける。

「たま。ガイに連絡して。私達も、そっちに向かうって」

「えっ？ うん。じゃあそれが終わったらみんなで助けに……」

「救助は、他の魔法少女と仮面ライダーに、任せる」

「えっ？ どういう事……」

予想外な返答に、戸惑いを隠せないたま。スイムスイムは無表情のまま、リーダーとしての決断を下す。

「脱落者は、後7人必要。まだ先は遠い。でも、この混乱に乗じて、他の魔法少女や仮面ライダーを、狙う」

「えっ……」

「ミナエル、タイガ。2人も、準備を」

「……うん」

「そうだね……。何ならさ。みんな殺しちやおうよ」

タイガとミナエルも、スイムスイムに同意した。特にミナエルは不気味なほどに薄笑いを浮かべている。救助に向かうのかと思えば、スイムスイムの狙いは、脱落者をこの1日でなるべく多く増やす事だった。

「み、ミナちゃん。でも……」

「これは、ユナエルの弔いなんだ……！ 絶対に、失敗なんかしない

……！」

「……決まり。みんな、急いで準備を」

元々自分の意見を押し通そうとは思わない性格のたまには、これ以上説得する勇気はなかった。結局、スイムスイムに言われた通りに、『元気が出る薬』や『透明外套』を手に持って、一同は戦地へと出向いた。

そして、ガイからメールが送られてきた時には、すでに戦地に到着しているペアがいた。

「あれが、ガイの言っていた面白いもの、ですか」

『そうみたいだぼん』

「もつとも、見ている限りはカラミティ・メアリがこの事態を引き起こしているようだが」

あちこちから火の手が上がっている中、クラムベリーとオーデインが、まだ火がついていないビルの屋上から、地上で逃げ回っている人間達を見下ろしていた。

『試験とはいえ、一般人を巻き込むのはあまり感心しないが、まあ、世間にはテロとして情報を流しておこう』

『こういうのは疲れるから面倒だけど、この一件でこの試験が魔法の国にバレたら、それはそれで面倒だぼん。ファヴも久々に張り切つてやるぼん！』

ファヴとシローが今後の事を話し合う中、オーデインはクラムベリーに尋ねた。

「で、どうするつもりだ。ガイの誘いにあえて乗るのか、このまま高みの見物といくのか」

「そうですね……」

クラムベリーは考える素振りを見せ、また新たに響いてくる爆音や、こちらに近づきつつある、魔法少女や仮面ライダーの気配を魔法で察知しながら、こう答えた。

「最初の内は、様子見としましょう。機会があれば参戦する、といった

ところでしようか」

「分かった」

様々な思惑が交錯する中、依然として被害が拡大していく中宿に、真実を知らぬまま、『候補生』達は、戦いの渦中へと、足を踏み入れていく……。

……この2人を除いて。

「言って聞かせても分からねえようなら……、直に味わって死んでくのがお似合いだ！ なあ、九尾！」

「言ってるよ……。俺は、絶対にお前を、殺す……！ 後の事なんて、もうどうでもいいんだよ……！」

とある地下駐車場にて、カメレオンのライダー『ベルデ』と、狐のライダー『九尾』が、その身を血に染めながら、対峙していたのだ。

74. 憎しみを力に

「では、今後ともよろしくお願いいたします」

「ええ、こちらこそ」

夕日が見えなくなり始めた頃、巨大企業の高見沢グループが拠点とする大ビルの会議室にて、小企業の会社の社長との取り引きを終えた、総帥の高見沢 大介は握手を交わした。その対応や表情は紳士的で、誰からも慕われている雰囲気醸し出していた。現に高見沢グループからの出資を受け取る事に成功した社長も満面の笑みを浮かべている。

その後会議室を出て社長室に戻り、秘書から手渡された、今回の取り引き相手の会社のプロフィール等が記載された資料に改めて一通り目を通した後、鼻を鳴らしてテーブルに放り捨てた。イスに腰深く座り、腕を伸ばしてリラックスした後、低く呟く。

「……ケツ。所詮は下につくしか能のないゴミ企業が。ま、絞るだけ絞ってやるか」

誰ともなしにそう呟いたその一言。

『そして頃合いを見計らって切り捨てる、か』

眉をひそめる高見沢。社長室には高見沢1人しかいない。声の発信源を探っていたその時、ポケットの中のマジカルフォンが鳴り響き、高見沢は思わず近くにあった姿見に目をやった。

本来なら身だしなみを整える為にと設置したその姿見が歪み、文字通り鏡の中から人影が飛び出してきた。

「デメエ……！」

「さすがに、ライダーや魔法少女をその手で殺した事のある男だけあるな」

そう呟いた、白い毛並みの袴に狐の仮面をつけた人物は、手に持っていたフォクセイバーを高見沢に向かって突き出した。高見沢は反射的に立ち上がり避けて、フォクセイバーはイスの背中をつける部分に突き刺さった。

フォクセイバーを抜いた後、床に放って、カードデッキに手をかけ

るとVバックルから取り外し、変身を解いた。露わになったのは、仮面ライダー九尾の変身者、榊原 大地。その瞳は真っ直ぐに高見沢を睨みつけている。

襲撃を受けたにもかかわらず、高見沢は高笑いし、余裕綽々にポケットに手を入れた。

「……ほう。前からガキみたいな考えしか持っていないなど思っていたが、まさか見た目も本当にガキだったとはな」

「あんたがベルデだっていう証拠は、先生やしず……ヴェス・ウィンタープリズンが遺してくれた資料にあった。ミラーワールドからこの場所に来てみれば、案の定ライダーの反応があつたし、もう確信した」

「……フン。あんな奴らがねえ……」

高見沢は肩を竦め、ドアの所まで歩いて鍵を閉めようと、ドアノブに手を伸ばした。誰かが途中で入ってこれないようにするという意味と、相手の逃げ場をなくすという意味があるようだ。

「で、今日は俺を殺しにきたってわけか。敵討ちのつもりか？ だとしたらテメエもウィンタープリズンと同類だな」

「！ やっぱり、あんたがウィンタープリズンを……」

ウィンタープリズンを殺したのがベルデだと判明し、再び怒りを露わにする大地だが、すぐに冷静さを取り戻し、冷徹な口調で口を開く。「どのみちあんたはここで殺される。でもその前に聞いてみたい事があつてな」

「何だ」

「目的だよ。あんたが、この戦いを望む理由。その事に先生やウィンタープリズンを殺した事に関係してるのかをな」

「目的、ねえ……」

高見沢は一息つくくと、ほんの少し朗らかだった雰囲気から一変して、卑劣感しか匂わせないような態度を取り始めた。

「まあ、ここまで来たんだ。今更気取って話す事もないだろうよ。そうだろうよおい、ガキ」

「……」

大地は何も言わず、ただジツと高見沢を睨みつけている。その様子が面白おかしく見えたのか、高見沢は鼻で笑いながら、演説よろしく堂々と語り始めた。

「いいか。この世界はなあ。所詮は力のある奴だけが勝ち残れる世界なんだよ。弱い奴は強い奴に食い殺される。そういう決まりで成り立ってる社会だ。そんな中で力を求めて何が悪いってんだ。言ってみろ、アア？」

弱肉強食の典型例である、食物連鎖を思わせるような言い方に、傍聴していた大地は目を細める。

「大体なあ。今はこうして16人って枠が決められて、初めて戦いが成り立ってるようなもんだから気づいてない奴らが多いかもしれねえが、んなもん無かったって、そもそもライダーや魔法少女の戦いは終わらねえんだよ！ 力を手にしたその瞬間から、戦いの運命は避けて通れねえんだよ！」

「力、か……」

と、ここで初めて大地が口を挟んだ。

「力を求めてるって言ってる割には、あんたはこの高見沢グループの総帥って呼ばれてるぐらい、N市だけにとどまらず、全国的にも名が通ってるらしいじゃねえか。富も名声も手にしているようなあんたが、それでもまだ望むものがあるってか？」

その質問に対し、高見沢は両手を広げて、大地に歩み寄りながら嘲笑った。

「こんなもんはなあ、屁みてえなもんだ！ 担いだところで俺の求める力には成り得ないんだよ！ 俺の言う力ってのはなあ、全てを屈伏させて、真に頂点を極める為のものなんだよ！」

簡単に言うならば、それは『超人的な力』。全てを手に入れたかに思われた男が、尽きることなき欲望によって求めている力。

「戦いつてもんがあつて人は生きる。いいか小僧。生きるって事はなあ、他人を蹴落とす事なんだよ！ それさえ出来ない奴に、この先生きてる価値なんてねえんだ！」

「戦わなければ、生き残れない、か……」

以前、ナイトがスノーホワイトや大地達に向かって放った言葉を復唱する大地。高見沢は大地のすぐ隣に立ち、その耳元に向かって呟いた。

「人はなあ、みんなライダーや魔法少女みてえなもんだ。ライダーも魔法少女も、一般社会の常識には捉われないって言ってるが、俺からしたら、内も外も変わってるとこなんてどこもねえんだよ。さっきも言ったが、力を手に入れた以上、戦いは避けられない。お前の言う先生とも何れは戦う運命にあっただよ」

「……」

大地は首を横に向け、冷たい目つきで高見沢を見上げている。

「そういう意味じゃあ、俺はシスターナナみてえな奴が一番気に入ってなかった。それにバカみたいに同調してるオルタナティブも、ファミも、そしてヴェス・ウィンタープリズンもな。話し合いだけで争いを終わらせられるなんて、本気で思ってる輩がいるなんて思いもしなかったから、俺がその身に分らせてやっただけだ。シスターナナやファミは殺れなかったが、まあどの道無様に死んでくのがお似合いだったろうよ」

「……」

「……それにな。シスターナナと同じくらいにくだらねえ価値観ばかり押し付けてる奴がいるのも気に入らねえ。……そうさ、テメエのパートナー、スノーホワイトだ。あのゴミ野郎に何一つ文句を言っこないテメエやその周りをうろついている他の奴らを嫌ってたのは、そういう事だったわけだ。あんな奴が掲げてるもんなんて」

「俺の事をどう罵ろうがあんたの勝手だろうけどよ……」

すると、大地が語気を強めて、殺意のこもった眼光が高見沢を襲った。

「スノーホワイトを、ラ・ピュセル達を、先生達をバカにするのだけは、絶対に許せねえ……!」

「!」

刹那、高見沢の背筋を冷たい汗が流れ落ちた。自分よりも体格も知識もずつと格下の相手から発せられる、凶々しき殺意が、本能的に危

険を感じたようだ。が、すぐに平然とした態度で大地を見据えた。

しばらく睨み合う両者だが、先に目を逸らした大地がため息をついた後、手に持っていたカードデツキの紋章を高見沢に見せるように向けた。

「……ハアツ。結局、聞くだけ時間の無駄だったかもな。どの道、あんたはここで俺に殺されて当然なんだからな」

「随分余裕があるみてえだが、そんだけ俺を殺すって言うておいて、口先だけのクズだったなんて、ガツカリさせるなよ」

「口先だけなのはあんたの方だったりしてな」

「口だけは達者なガキだな。嫌いじゃねえぜ」

高見沢は口の端をつり上げて、ポケットから黄緑色のカードデツキを取り出した。決闘を意を表明した証拠である。

2人は、最初に九尾が通ってやってきた姿見の前に立ち、カードデツキをかざした。2人の腰にVバックルが取り付けられ、大地は右腕を後ろに引いて力を込め、高見沢は右腕を左に持ってきて、指を鳴らした。

「変身！」

2人は同時にカードデツキをはめ込み、鏡像が重なって、大地は狐の仮面ライダー『九尾』に、高見沢はカメレオンの仮面ライダー『ベルデ』へと姿を変えた。両者は一度睨み合ってから、姿見を通じてミラーワールドへと戦いの場所を移した。

2人が決戦の地を選んだのは、会社の地下にある立体駐車場。転々と駐車されている黒塗りの車やコンクリートの支柱といった死角が点在する中、一定の距離で位置についた2人は、早速カードデツキからカードを1枚引き抜き、九尾はフォクスバイザーに、ベルデはバイオバイザーにベントインした。

『SWORD VENT』

『HOLD VENT』

九尾の両手にフォクセイバーが握られ、ベルデの両手にバイオワインダーが装着され、一気に殺伐とした雰囲気が始めた。風一つなびかない舞台上、最初に動いたのは九尾だった。

「ウオオオオオオオオツ！」

「フンツ！」

九尾はフォクセイバーの刃先に憎悪を滾らせながら、ベルデに斬りかかり、対するベルデはバイオワインダーを駆使して九尾を絡め取ろうとする。

憎しみを力に変える事で、強くなろうとしている九尾。その憎悪はベルデに届くのだろうか。

その結末は……。

依然として爆発音や悲鳴が鳴り止まない、中宿の国道。その下方に多数の店が構えられている繁華街もまた、どこからともなく発生する爆発によって、甚大な被害が出ている。

その一角に、スーツ姿の北岡と、ニット帽を被った真琴がいる。今起きている騒動を最小限に食い止める事の出来る力を持った2人は、この非常事態にもかかわらず、変身していない。否、するだけの心の余裕が無かった、というのが正しいだろう。

「……ッ！」

真琴は膝から崩れ落ち、その場で俯いた。北岡は目の前の一点を虚ろな目で見つめていた。

彼が見つめている先には、崩れ落ちた鉄骨やコンクリートの瓦礫が散乱していた。いくつも積み重なった残骸。その僅かな隙間から覗かせていたのは……。

「……なんかさ」

やがて北岡が口を開き、真琴は震わせていた体を自分の意思で止めた。

「もう、どうでもよくなったって感じしない？」

「……奇遇、ですね。私も、今そう、思ってたところ、です」

「今更かもだけどさ。正義ぶって誰かを救うとか、ハナから無理だったって話なんだよ」

「もう、誰も、救えなくて、いいですよね」

「……ああ」

北岡はポケットから秘書の吾郎からいつも手渡されていたポケットティッシュを使って鼻をかみ、真琴は腕を使って目から流れ落ちていたものを拭き取った。

「……そういうわけだからさ。ゴメン……」

北岡は謝罪を込めた言葉を放ち、そして、誰ともなしに呟いた。

「俺達さ。もう正義のヒーローとかヒロインに、なれそうにないかも」

75. 自分の為に戦うと決めたら強くなる

それは、午後7時を回ろうとしていた頃の事。中宿の繁華街にあるビルの一角から、スーツ姿の北岡と吾郎が並んで外に出てきた。この日は仕事の関係で、依頼主と書類への書き込み等の為に出向いていた。もちろん内容は汚職関係といった、決して世間には公表できないような内容ばかりだったが。

「今回も上手くいきそうですね」

「ま、あれくらいならお茶の子さいさいって感じだね。ちよいと文面を弄れば、どうって事ないよ」

「流石です、先生」

吾郎は北岡に賞賛の意を示した。その一方で北岡は右手を腹に当てながら、左腕に巻かれている腕時計に表示されている時刻を見て呟いた。

「それにしても、もうこんな時間か。このままどっかに食べに行くのもいいけどさ。今日はゴロちゃんの手料理が良いかも。ちよつとぐらいなら我慢できるしよ」

「ありがとうございます。ちようど今、冷蔵庫に上等な肉が保存されていますから、それを使いましょう」

「サンキューゴロちゃん。んじゃ、早く食べに行こうか」

「はい」

北岡は吾郎の手料理に、吾郎は北岡の『腕』の凄みに絶大な信頼を寄せている。こうして見ると、2人がどれほど固い友情で結ばれているのか、想像するに余りあり得る。

この2人が出会ったきっかけは、吾郎が巻き込まれた傷害事件であり、その際に吾郎を弁護する為に北岡が現れ、吾郎はとても恩義を感じていた。以来、北岡への恩を忘れまいと、彼は北岡の秘書を志願。北岡自身もウマが合いそうだという理由でそれを承諾。その後はバイト先を探して訪ねてきた安藤 真琴を迎え、3人で北岡法律事務所を経営する形となった。もちろん、吾郎が北岡に仕えようとするのはもう一つ別の理由があるのだが、それは今語るべきではない。

「お、見えてきたな」

北岡の目線の先には、自身の愛車が停められており、車内ではついてきていた真琴が暇を持て余していた。近づく途中で真琴も2人の存在に気付き、軽く手を振った。

そして吾郎が先導して助手席側のドアを開けて、北岡を中に入れさせようとした瞬間、それは突如として起こった。

「!?」

最初に聞こえてきたのは、遠くから鳴り響いた爆発音。それは立て続けに起こり、周りにいた人々も突然聞こえてきた爆発音に戸惑っている。

「何だ……? 国道で事故でもあったか?」

「かもしれないっすね。ちよつと裏道から出ましようか」

事故が起きたとなると、駆けつけた警察によつて検問が敷かれてしまつて、帰るのが遅くなるに違いない。そう思った吾郎は早めに中宿を出ようと、急いで運転席側に乗り込もうとしたその時、またしても爆発音が。しかも今度は国道方面だけでなく、3人がいる地点からそれほど離れていない建物が、突然内側から爆発し、近くを通りかかっていた人々は何が起きたのかも分からぬまま吹き飛ばされた。

「うおっ!?」

「先生!」

慌てて北岡の元に駆け寄つて彼を守ろうとする吾郎。真琴もそれにつられて車から降りた。あちこちで爆発が起こり、その度に呻き声や悲鳴、そして逃げ惑う人々で、辺りは一瞬にして大混乱に陥つてた。

「随分派手な事になってますね……!」

「おいおい、花火パーティーにしては張り切りすぎじゃないか!?」

冗談めいた一言を呟きながらも、周囲に目を凝らす北岡。すると、彼の目にオシャレな格好をした女性が右足に手を当てて苦しそうにしている姿が目映った。よく見ると、倒壊したビルの瓦礫が足に挟まっているようだ。

「行きましよう先生! ここにいたら危険です……!」

吾郎が爆発音が鳴り響く場所からなるべく遠くに逃げようとする人々の流れに乗ろうと、北岡や真琴を誘導しようとするが、唐突に北岡は倒れている女性に向かって駆け出した。

「先生ー!」

「ゴロちゃん、手伝って! 真琴もほら!」

「ちよ、何で逃げないんですか!?!」

「ここで女の子助けといたら、後々イメージアップに繋がるだろ!」

何とも不純な理由だったが、人助けである事には変わらないだろう。北岡は瓦礫をどかして、女性の肩を担いだ。

「先生がそうしたいなら、俺も!」

「面倒ですけど、さすがに放ってはおけませんよね」

真琴も普段なら面倒だと一蹴していた人助けも、今回ばかりはという事で北岡や吾郎と共に救助の手伝いをした。彼女自身、人助けは嫌いではない。ただ、どうせ働くのなら金目になる事が望ましいと思っているのだ。

女性を通りかかった別の人物に預けた後、3人はまだ逃げ遅れている人がいないかを確認する為に、辺りを見渡した。あちこちで火の手が上がっており、今なお被害は拡大する一方だ。

「……エグい、ですな」

「本当に酷いですね」

「まったく……。どこのどいつだ? こんなに派手にやらかしたの
は」

北岡が愚痴をこぼしていた時、真琴はある事を思い出していた。

2人が戻ってくる間、真琴はマジカルフォンを通じて魔法少女や仮面ライダーに関するまとめサイトに目を通していた。その中の一つに、『中宿を中心に、近頃ガンマン風の魔法少女らしき人物が至る所で目撃されている』といったものがあつた。

「(あれは……、おそらくカラミティ・メアリのものと見て間違いないでしょうけど。まさか、この一件にあの方が関わっているのでは……)」

真琴が言いようのない不安を感じていたその時だった。どこから

か、子供と思わしき泣き声が3人の耳に入った。

「！これは……」

「あっちだな」

3人が声のした方向に向かうと、爆発の影響からか、支柱が立っているだけで廃墟と化している場所に、1人の少女がうずくまって泣き叫んでいた。

「おい、大丈夫か！」

北岡が声をかけるが、少女はパニックになって気づいていないのか、ずっと泣き喚いている。よく見ると、少女の周辺には血を流して倒れている大人の姿もあった。すでに事切れているのは遠目からもよく分かった。見ているだけで気分が悪くなる3人だったが、真琴は内心焦っていた。

「(姐さんが関わっているとしたら、ここは危険……！　こんなところにいたらますます……！)」

見たところ、彼女の周りに親らしき人物は見当たらない。途中ではぐれてしまったのかもしれない。

そして真琴が動き出すよりも早く、北岡は前に進んでいた。

「ほら、泣いてたら何も分かんないだろ。まあすぐに助けてやるからな！」

女子供は放っておけない主義を持っている北岡がそう言うて駆け出そうとしたその時、彼の隣にいた吾郎は、偶然にも気づいてしまった。少女のすぐ目の前に、近くに燃え広がっていた炎に照らされて光っているピアノ線が張られていた事に。

「先生！」

「!?」

吾郎がとつさに叫んだ時には、すでに北岡は後一步という所まで迫っており、脛にピアノ線は当たっていた。

畏か。そう気づいた北岡と真琴さん目は見開かれ、直後に爆発音が鳴り響いた。発信源は隣のビル。内部から瓦礫などが弾け飛び、北岡と少女がいる場所に向かって降り注いだ。

「やばあつ!?」

「先生えー！」

思わずその場で立ち止まってしまった北岡と、恐怖のあまり泣き止んだ少女、死に物狂いで駆け寄る吾郎、そして衝撃のあまり動けずじまいの真琴。

真琴の目の前に瓦礫が降り注ぎ、視界が遮られてしまった。

「……………」

鈍い地響きが辺りに轟き、呆然とする真琴だったが、すぐに我に返って瓦礫の上をよじ登り、3人がいた地点へと駆け出した。北岡や吾郎、そして少女の無事を祈りながら、懸命に駆け上がった。

やがて最初に目についたのは、地面に尻餅をついている北岡だった。擦り傷こそあるが、大事に至ってはないうようだ。では、後の2人はどこへいったのか。真琴が北岡の目線の先に目を向けると、全身がガクガクと震え始めた。

埋もれている瓦礫の中で、吾郎が頭から血を流しながら四つん這いになって、息を荒げていた。その吾郎が天井代わりとなって、少女は縮こまっていた。

「ゴロちゃん！」

「吾郎さん！」

北岡と真琴は慌てて駆け寄った。吾郎は2人の無事を確認すると、震える声で頼み込んだ。

「……………この子、を！」

「分かった！」

北岡は吾郎に守られた少女を引きずり出した。そして早くこの場から逃げるように真琴が言うと、少女は頷いて、また泣き喚きながら母親の名前らしき言葉を発して、その場を走って立ち去った。1人にしておくのは危険な気もするが、少なくともこの場所にいるよりはマシに違いない。そう思った吾郎はフツと笑った。だがすぐにその余裕も崩れて、口から血を吐きながら、肘をついた。

「ゴロちゃん！…今出してやるからな！…真琴も早く！」

「は、はい！」

真琴も吾郎を助けようと、彼のそばに駆け寄る。が、吾郎の口から

出たのは……。

「……2人は、逃げて、ください。また、巻き込まれる、かも……」
「何言ってるんだよ！ ゴロちゃんも逃げなきゃ！」

「……すいません、どうやら、足が引つかかっている、みたい、で……」
首を横に振りながらそう語る吾郎を見て、2人は唾然とした。足が瓦礫に挟まれているといっても、相当奥の方にある為、この場からどかす事は不可能に近い。他の誰かに救助を要請しようとして北岡が首を後ろに向けようとするが、吾郎がとっさに北岡の腕を掴んでそれを遮る。

「先生……、俺、幸せ、でした。先生の、そばにいられて、真琴と、楽しくやってこれた、事が」

「な、何で死亡フラグみたいな事言ってるんですか！ やめてくださいよー！」

「ま、真琴……。レシピとかは、俺の、机の引き出しに、入ってるから……。俺の分まで、先生に、手料金を……」

「やめて……！」

真琴は首を横に振りながら吾郎の腕を掴んで、引つ張ろうとする。が、北岡と協力しても、ビクともしない。

「ゴロちゃん……！ 勝手に死ぬなんて、そんなの許さないからな！ 絶対に……！」

「……すいません。最後まで、先生には、迷惑かけっぱなしで……。あの時だって、俺が無理に、弁護を依頼しなければ、先生は、きつと……」
「それはもう言わない約束だっただろ？ 俺にはゴロちゃんが必要なんだよ！ これまでだって、これからも……！」

「そう、思ってくれる、だけでも、俺、幸せっす……」

そう呟く吾郎の吐息が段々と弱くなり始めている事に2人は気づいてしまった。

「ゴロちゃん！」

「吾郎さん！」

「先生……。先生は、俺の、誇りです。だから……。生きて、ください。真琴、と、一緒に……。最後まで、最高の、人で、あって、くだ……」

声を振り絞って、北岡と真琴に語りかける吾郎だったが、そのまぶたは閉じつつあった。

「ゴロ、ちゃん！」

北岡が必死に声をかけようとしたその時、まだ倒壊していなかったコンクリートの壁が爆発の影響で脆くなったのか、大きな音を立てて崩れ始めた。吾郎は持てる力の全てを出すように北岡を突き飛ばし、真琴と共に後方へ下がらせた。

「……ああああああん！」

北岡の叫び声は、瓦礫が崩れ落ちた轟音に掻き消され、辺りは砂埃で見えなくなった。

やがて視界が晴れてきた時には、目の前には埋もれた瓦礫の山しか残っていなかった。その僅かな隙間から、男性の手が覗かせていた。

「あ、うあああああ……！」

真琴は膝をつき、その瞳から光が失われた。北岡は足取り重く、瓦礫の前に向かって歩き、膝をつけてその手に触れた。冷たかった。

「……んで。何で、なんだよ。ゴロちゃんは、関係ないだろ……！」

唇を噛み締め拳を震わせる北岡。彼にとって支えでもあった男が、なぜ死ななければならぬのか。北岡はやるせない気持ちで、地団駄を踏んだ。

「……メアリですよ」

不意に真琴がそう呟いたのを聞いて、北岡は振り返る。

「最近この辺りで、あの人の目撃情報が絶えなかったそうです。それに、あの人は武器の威力をあげる魔法を使います」

「……」

かつてカラミティ・メアリから指導を受けていた事のある真琴は、確信めいたように呟く。これほどの大規模な爆破を起こすには、火薬の量を増やせば解決する話ではない。何らかの方法で爆発の威力を高める必要がある。言葉では上手く説明できない異能の力があると考えれば、この規模の大きさも頷ける。

「結局は、これも戦いの一部ってわけか……！」

薄笑いを浮かべながら、立ち上がる北岡。

「……もう少し傍観してようかと思ったけどさ。もう嫌になったよ。……全部、まとめて終わらせよっか」

「……ですね」

真琴も立ち上がり、何かに取り憑かれるように歩き出した。その先には、爆発によって破裂した水道管から流れ出た水が溜まっている。北岡はポケットから取り出したカードデッキをかざし、真琴はマジカルフォンを掲げる。

「変身」

北岡は右腕を曲げて気合いを入れ、真琴はマジカルフォンをタップする。北岡は鏡像が重なって仮面ライダー『ゾルダ』に、真琴は魔法少女『マジカロイド44』へと変身。一度瓦礫の山に目を向けた後、2人は歩き出した。目指すは、今なお爆発音が鳴り響く国道。そこに戦うべき相手は必ずいる。

「……教えてやるよ」

ゾルダは、感情など微塵も感じさせない口調で、自分に言い聞かせるように呟く。

「自分の為に戦う奴が、一番強いってな……!」

76. ゲリライベント

「な、何だ!?？」

「国道が……!」

カラミティ・メアリによる狙撃から逃れようとしていた龍騎、トップスピード、リップルは下界の方で鳴り響く爆音を耳にして、顔を向けた。見れば、国道の方で火の手が上がっているではないか。さらに続けざまに別箇所から爆発が起こり、国道は大惨事となっているのが見えた。

「まさか、あいつ……!」

単なる交通事故とは思えないほどの大規模を目の当たりにして、リップルはとっさにこれが人為的に引き起こされたものだとし、国道の近くに見えるビルの上を目的に目をやった。パートナーのナイトと王蛇が激しい戦闘を繰り広げている中、カラミティ・メアリが国道に向けて銃を構えている姿があった。

「あいつ……!」

「何てことしやがるんだ……!」

龍騎とトップスピードにも状況が把握できたらしく、怒りと絶句が混じり合っている。

頭の中が沸騰したような感覚に襲われたリップルが、脊髄反射でラピッドスワローから飛び降りたのはその瞬間だった。

「ダークウイング!」

リップルがパートナーの契約モンスターの名を叫ぶと、ダークウイングが現れて、背中に張り付くと、カイトの要領で飛び降りるのではなく、真っ直ぐに向かう形で、元いた場所へと急降下していった。

「お、おい待てよリップル!」

トップスピードがリップルを止めようとするが、すでに彼女は遙か彼方へと飛び去っていた。

すると、上空にいた龍騎とトップスピードのマジカルフォンに着信があった。見てみると、ガイからのメッセージだった。中宿で面白いものがある、と表記されていたのを見た龍騎は、怒りを露わにした。

「あいつ……！ この状況を何だと思ってるんだ！ それにメアリも……！ 俺だけならともかく、関係ない奴らまで巻き込むなんて……！」

そう言っただけで龍騎も龍騎専用のラピッドスワローを国道の方に向けてようとしたが、トップスピードが反射的にその腕を掴んだ。

「待て龍騎！」

「待てるかよ！ このままじゃナイトもリップルも、街の人が……！」
「あいつらのやってる事が許せないのは俺だって同じだ！ だけど、カッとなつて飛びかかっても命を落としかねないぞ！」

トップスピードは真つ直ぐにパートナーの方を向いて叫んだ。

「自分の命を大切にしない奴が、人の命なんて救えるわけねえ！ だから怒りで動こうとすんな！ お前は、仮面ライダーなんだろう？？」
「……！」

仮面ライダー。初めてその存在を知った時から取材で追いかけて回っていた、都市伝説に値する人助けのエキスパート。そして今、自分がシローに選ばれて得た力の象徴。そんな仮面ライダー『龍騎』となった正史は、荒げていた呼吸を止めて、落ち着きを取り戻したところでトップスピードに言った。

「……ありがとう。ゴメンな。もう大丈夫だ」

「ああ。それでこそ、俺のパートナーだ」

「でも、あの2人を放っておけない。早く助けに行かないと！」

「つたりめえだ！ 行くぜ！」

そして2人は方向転換して、ナイトとリップルがいる屋上に向かって速度を上げた。

ようやく肉眼でも確認できる位置まで高度を下げ、ビルの屋上に目をやった。ナイトと後から合流したリップルが、カラミティ・メアリ、王蛇ペアと対峙しているのが見える。

「王蛇までいやがったか……！」

「止めるお！ これ以上被害を大きくするな！」

龍騎が上空から説得しようとするが、4人とも聞く耳を持ってないほど、目の前の敵に集中している。トップスピードも説得に加わろうと

したその時、国道の方から女性の声が。

「助けてえ、誰かあ！」

「！今のって！」

どうやら国道にいる、逃げ遅れた人が助けを求めているようだ。仲間の方も気掛かりだが、性格柄、助けを求めている人達を放っておくわけにもいかない。止むを得ず、龍騎とトップスピードはビルから離れて国道の方に向いた。

声に導かれるようにやってきたのは、火の手がすぐそこまで迫っていた地点。そこには母親らしき女性が、生後間もない赤ん坊を抱きかかえて地面に座り込んでいる姿が。彼女が助けを求めている声の主に違いなかった。

「おい、大丈夫か!?？」

「あ、あなた達は……」

「怪我はありませんか!?？」

2人が道路に足をつけて女性の安否を確認すると、女性は赤ん坊の方に目をやった。

「爆発に巻き込まれて、この子が……！」

「!!」

ぐったりしている赤ん坊を見て、2人はハツとした。見たところ外傷はなさそうだが、煙が充満しているこの場所に、いつまでも放置しておくわけにもいかない。自身のお腹にも、小さな命を身籠っているトップスピードにとって、無視できない話だ。一方、龍騎もまた、一度犯してしまった失敗から立ち直った事でより強固なものとなった正義感が働いたのか、女性に駆け寄って安心させるように言った。

「すぐにここを離れましょう！俺達が手伝います！トップスピード！」

「ああ！このまま病院に！さあ、早くこれに乗って！」

トップスピードはラピッドスワローに乗って、後方に乗るよう示唆した。女性は困惑していた。無理もない。脱出するためとはいえ、いきなり箒に乗れと言われても、飛べるはずがないと思っただろう。中々ラピッドスワローに乗らない女性に痺れを切らして、トッ

プスピードは叫んだ。

「何も考えんな！ 今は、赤ん坊の事だけを考えろ！ 俺達が、絶対に死なせねえ……！」

「早く乗って！ 俺達が、絶対に守るから！」

龍騎とトップスピードに励まされ、女性はトップスピードの後方にまたがり、龍騎と共に国道を離れて、病院の近くまで送っていった。女性が振り落とされないようになるべく安定し、なおかつスピードを上げながら、2人はラピッドスワローを飛ばした。龍騎が今一度ビルの方に目をやった。銃撃戦や、剣の打ち合いが続いているようだ。

「待ってろよ……！ すぐにそっちに向かって助けてやるからな！」

ここで少し時間を巻き戻し、舞台はOREジャーナル本社へ。中宿の国道で大規模な爆発や火災が起こっている事は、当然ながらすぐに掴んでいた。やがてデスクに設置されていた固定電話が鳴り響き、編集長の大久保は受話器を手に取った。相手は先んじて中宿に向いている令子だった。

『編集長！ たった今、現場に到着しました！』

『どうだ令子！ そっちの状況は！』

『かなり酷い状況です。詳しい原因は分かかっていませんが、国道や繁華街を中心に、あちこちで爆発が……キャア！』

受話器越しから再び爆発音が鳴り響き、令子の悲鳴が大久保の耳を貫いた。令子が今いる場所からは遠かったようだが、緊迫した雰囲気が出た。令子にも伝わってきた。

「令子、大丈夫か!?」

『な、なんとか……。どうにかして先へ進もうかとは思ってるんですが、人だかりや検問が敷かれはじめていて、今は人のいない裏ルートを探っているところです』

「分かった！ ……とところで、正史はどうした？」

『それが、さつきから何度も電話してるんですが、一向に出る気配が無いんです』

「何だつてえ!? あいつこの非常事態にどこほつつき歩いてやがるんだ!? いや、待てよ。ひよつとしたら巻き込まれたんじゃない……」

可能性が無いとも言切れない。大久保は窓の外に目をやってから、令子に指示を出した。

「よし分かった。令子、俺も今からそっちに向かう！ 令子は引き続き、調査を進めておいてくれ！ くれぐれも無茶だけはするなよ！」

『了解しました！ また何かあったら連絡を入れます！』

大久保は受話器を置いた後、振り返って同じく社内で仕事をしている島田に声をかけた。

「島田、お前も一緒にいてこい！ 現場の状況報告や、常に令子から送られてくる速報をいつでも流せるように準備しておけよ！」

「お任せあれ！」

島田は、ようやく自分が活躍できる場が出来た事で、俄然やる気になったようだ。大久保は自身が運転する車に島田を乗せると、安全運転を心がけながら、現場へと急行した。

ラピッドスワローから飛び降り、ダークウイングと共にビルの屋上へと戻ったリップルは、難なく屋上に着地した。ダークウイングは背中から離れてミラーワールドへと帰還した。

「リップル……！」

ナイトは戻ってきたリップルに顔を向けた。その鎧には傷跡が付いており、王蛇とカラミティ・メアリからの激しい猛攻を受けた証拠である。

「……ハッ。お前も、俺と戦いに来たか」

王蛇はまた新たな対戦相手に恍惚しているようだ。その一方でカラミティ・メアリは鼻を鳴らして呟いた。

「遅えよ、お嬢ちゃん。龍騎が戻ってきてないみたいだけど……。ま、いっか」

「……チッー」

こうしている間にも、繁華街からは爆発音が鳴り止まない。速攻で仕留めるしかない。そう考えたリップルがマジカルフォンに手を伸ばそうとした時、カラミティ・メアリが声をかけた。

「おっと待ちな、お嬢ちゃん。こないだみたいにサバイブになろううたって、そいつは問屋が卸さないよ」

そう言つてメアリがポケットから取り出したのは、2本の押しボタンがついたスイッチ。リップルが警戒していると、メアリは笑いながらスイッチの説明をした。

「もしあんた達がサバイブになろうとしたら、こんな風に」

メアリはそこまで言つて、片方のスイッチを押した。その直後、メアリの背後に見えていた街の一角で爆音が鳴り響き、老若男女の悲鳴が重なった。それを見た2人は自分でも制御できないくらいに齒ぎしりした。

「アツハツハ！ 心配しなくなつて、今のは見せしめ程度だからね。小規模な方さ。でも、こっちはどうかなあ？」

余裕綽々にもう一つのスイッチを見せつけるメアリ。

「貴様……！」

「簡単な事さ。ようはあんた達がそのままの状態で戦つてくれるんなら、そのボタンを押すような事はしないってわけ。その約束ぐらいは守つてやるよ」

「そつちから呼び出して、私や龍騎を殺そうとしたくせに……！」

「それにまんまと乗つたお嬢ちゃんもどうかと思うけどね」

メアリの小言を聞いて、リップルは今までにした事のないぐらいに舌打ちを響かせた。これ以上被害を拡大させないようにする為には、サバイブの力なしで2人を倒さなければならない、という事だろう。リップルは短刀を鞘から引き抜いて構えた。

「お前相手に、サバイブなんか無かつたつて……！」

「そうそう、そうこなくちやねえ！」

国道の方で再び爆発音が聞こえ、それが合図となつてカラミティ・メアリが挨拶代わりにと、銃弾を発射した。リップルはそれらをすべて俊敏な動きでかわして、お返しとばかりに手裏剣を放った。魔法により追尾機能を持った手裏剣はドラグノフに全て命中し、ドラグノフは使い物にならなくなった。が、それで止まるカラミティ・メアリではない。ドラグノフを放り捨てて次に四次元袋から取り出したミニガンを、今度はナイトに向かって撃った。

「！」

ナイトはとっさにダークバイザーを引き抜き、全弾を器用に弾いた。球切れになったミニガンを構えながら、メアリは不敵な笑みを浮かべる。

「相変わらずイラつかせる目を向けてくるねえ。んじゃあ、その目で救ってみせなよ、この街をさあ！」

「カラミティ・メアリ……！」

リップルが鋭い視線を向けながらメアリに向かって歩き出そうとするが、王蛇が立ちふさがった。

「お前は、俺と遊んでいけ。あいつとはもう飽きた。お前も戦えるんだろ？」

リップルはためらわず舌打ちし、短刀を握り直した。リップルと王蛇、ナイトとカラミティ・メアリ、といった対戦カードが決まり、上空から龍騎やトップスピードの声が聞こえてくるが、煮え滾る怒りで耳にする余裕はない。

4人の中で最初に動いたのはリップルだった。短刀を王蛇に向けて、殺気立った勢いを向ける。

「ハハハッ！」

だが王蛇はそれに臆する事無く手に持っていたベノサーベルで受け止め、乱暴に振り回してきた。対するリップルはかわしつつも反撃の機会を伺っていた。腕力などの肉体的パワーだけなら、メアリを上回るであろう王蛇に、隙を作らせてはいけない。その一心でリップルはクナイや手裏剣を放ち続けた。

そしてナイトも、カラミティ・メアリの銃撃を最小限の動きで回避し続けていた。頃合いを見計らって一気に間合いを詰めるナイトだが、カラミティ・メアリはすぐさまミニガンを捨てて、四次元袋から新たな拳銃を取り出した。ナイトが突き出したダークバイザーはその拳銃によって受け止められたが、拳銃の方は碎けなかった。よく見ると、ダークバイザーの刃の部分が、拳銃の先についていた刃渡り30センチほどの銃剣で押さえつけられている。

メアリが選んだ武器は、接近戦でも活躍し、なおかつ射撃が不得意な持ち主でも戦える、銃剣のついた武器『トレカフ』だった。その銃

剣でダークバイザーを捌いたのだ。

「まあ、トレカフだけでどうにかなるわけないわなあ」

笑みをこぼしながら、トレカフを振るうメアリ。対するナイトもダークバイザーで懸命にぶつけている。

「グウツ……！」

「ハハハッ！」

その一方で、リップルは王蛇の容赦ない猛攻により、地面に打ち付けられた。が、すぐさま立ち上がり、振り下ろされるベノサーベルをかわして、手裏剣を投げつけた。ベノサーベルで弾いてはいるものの、何発かは腕を掠めて、血が流れている。が、王蛇は全く気にする様子もなく、腹の底から笑っていた。

「良い感じだなあ。戦いはこうでなきやな！」

「化け物が……！」

リップルは舌打ち交混じりにそう評価した。メアリもそうだが、王蛇も尋常ではないくらいに人間離れしている。全身から狂気性を感じさせる王蛇を見ると、次第に自分の方が飲み込まれそうになる。リップルは全意識を目の前の相手に向けて、集中力を高めた。

ナイトもそれに続くようにメアリに向かってダークバイザーを振り下ろすが、その度にメアリは銃剣で捌いて跳ね除けられ、反撃とばかりに弾を乱射してくる。これだけダークバイザーを当てているにもかかわらず、トレカフには傷一つつかない。その理由を、ナイトは距離を置いて推測した。

「それも、お前の魔法によるものか」

「あいにくだったね。あたしが手にした武器は、絶対に壊れないのさ。銃はもちろん、パートナーの武器もね！」

「だったらどうした」

ナイトはそう吐き捨てて、カードデッキからカードを一枚取り出し、ダークバイザーにベントインした。

『TRICK VENT』

ナイトの両サイドに、シャドーイリュージョンによって形成された分身体が出現し、一斉にメアリに襲いかかった。

確かに武器の強度は格段に上がっている為、容易に破壊する事は難しいだろう。だが、その持ち主の場合は、話は別だ。どれだけ武器が強化されていようと、使用者は脆いのみだから、そこを狙って叩きのめせば良い。

「……とも思ってるんだろうけど」

カラミティ・メアリはそう呟いた後、四次元袋から新たな銃を取り出す。機銃掃射型の銃を取り出し、ほぼフルオートの状態で8体に分裂したナイトに向かって引き金を引いた。

「何体に分かれようが、全部まとめて撃ち殺せば良いだけの事さ！」

途切れる事なく銃弾が襲いかかり、1人また1人と分身体が消滅していく。だがナイトの方も手筈を整えおり、4体まで減った頃には、カラミティ・メア리를囲んでいた。

「……チツ。チマチマと面倒臭い動きばつかしやがって……」

イラつきながらも、銃を時折変えながらナイトを狙っていた。トリッキーな立ち回りを得意とするナイトは、それを活かしてメア리에斬りかかろうとするが、一つ一つの攻撃の威力はメアリのの方が高く、隙をついてもメアリの銃から火が吹き、その度にナイトはかわしている。均衡は崩れなかった。その間にも、国道や繁華街からは爆発音が鳴り響いている。ナイトが動き回りながらもそちらの方に時折気が向いている事に気付いたメアリは、挑発するように叫んだ。

「ほらほら！ あたし達を止めなきゃ、この街はもつと酷い目に遭うよ、正義の味方さんよお！」

「……正義の味方、だと？」

不意にナイトは冷めた口調で言い返した。

「そんなもの、俺は最初から望んでいない。俺には、龍騎やトップスピードのような人助けは向いていないし、出来ない。唯一出来るのは、目の前の敵を倒す事だけだ」

「そうかい。けどあんた、その割にはあたしを全然殺そうとする気がないように見えるのは気のせいかなあ？」

「何？」

「ひよつとしてあんた、処女みたいなもんで、本心じゃ殺す気がないん

じやないのかい？」

「黙れ！」

ナイトは一喝し、再びメアリに接近戦の挑んだ。メアリは易々と挑発に乗ったナイトを見て、さも可笑しそうに撃ちまくった。

と、ここでリップルが王蛇の猛攻をかくぐり、距離を詰めて、足払いで王蛇を地に伏せた。

「オオ……い！」

リップルは王蛇の右腕を両足で絡め取り、腕十字固めの体制に持ち込んだ。関節が外れたような音が右腕から聞こえてきた。このまま一気に締め付けて、右腕を使い物にならないくらいに、力をさらに入れた。

「フハハハッ！」

「!?？」

だが、王蛇の口から出たのは激痛に伴う悲鳴ではなく、狂気に満ちた笑いだった。そして王蛇は、関節が外れたにもかかわらず、右腕を強引に曲げて、そのままリップルを地面に叩きつけた。

「ガハッ!?？ そんな……い！」

息が切れ、動揺を隠せないリップル。そして王蛇は続けざまに空いていた左拳でリップルの顔を殴った。とつさに首を後ろにやった為、クリーンヒットこそしなかったが、鼻に当たり、血が滴り落ちた。「こ、のおー！」

ヤケになったリップルが飛びかかり、マウンドポジションを取ろうとするが、王蛇は受け流すようにリップルを突き飛ばした。空中でバランスをとって、足から着地したリップルだったが、先ほど後頭部を地面に打ち付けたショックで後ろによるめき、数歩後退した。

もうこれで疑う余地はなくなった。王蛇は、カラミティ・メアリ以上に、精神的にも肉体的にも人間としての範疇を超えている。好戦的で常にイライラが止まらず、外れた関節を痛がる様子もない。どう対処しようかと思いを巡らせていたその時、カチリと足元から音がして、リップルは思わず足元に目をやった。

「！」

「何……!?？」

ナイトも瞬時にパートナーに起きた異変を察知した。よく見れば、リップルの右足が踏んでいるコンクリートが僅かに沈み込んでいる。何かのスイッチを押してしまったと気付いた時には、リップルの背筋に怖気が走った。

「アツハツハ！ ヒヤアツハツハツハツハ！」

すると、それまでナイトと激闘を繰り広げていたカラミティ・メアリが腹を押さえながら高笑いして、リップルの足元を見ながらいけしやあしやあと語り始めた。

「あんた達も龍騎並みにバカだねえ！ あたしが無策にこの場所からお嬢ちゃん達を狙ってばかりいたと、本気で思ってたのかい！」

「！ まさか……！」

最初からこの手の罠に嵌める為に、メアリと王蛇は動いていた。まんまとメアリの策略に嵌められてしまった事に気付いたリップルとナイト。だが、すでに罠は作動してしまっている。

「ほらほら、足離してみなよお嬢ちゃん！ いつまでもそこに立たれちゃ迷惑千万だろうよお！」

「くっ……！」

『GUARD VENT』

メアリがナイトからリップルに銃口を向けたのを見て、ナイトはとっさにカードをベントインして、リップルの前に立った。『ウイングウォール』というマントの盾を装備したナイトに向かって、銃弾の嵐が降り注いだ。

「ナイト……！」

「ぐっ、ウウ……！」

ウイングウォールによって守られているものの、1発ごとの威力の大きさ、さらにはここまで蓄積されていたダメージによる体力の低下が、ナイトに苦悶の表情を浮かび上がらせた。リップルは今、地面から右足を離すことは出来ない。離せば仕掛けられていた地雷が爆発するからだ。これが単なる対人地雷なら、身体強化された魔法少女や仮面ライダーにはさほど効果はないが、カラミティ・メアリが仕掛け

た魔法の地雷となると、話は別になる。完全に防戦一方になってしま
い、ただ必死にメアリの銃撃を耐え忍ぶナイト。

ようやくカチカチという音しか聞こえてこなくなった頃には、ウイ
ングウォールからは煙が上がっており、疲労したナイトは片膝をつい
た。

「ナイト！」

「カラミニティ・メアりに逆らうな」

すると、銃を捨てたメアリが次に四次元袋から取り出したものを見
て、2人は息を呑んだ。

「カラミニティ・メアリを煩わせるな」

メアリが手にしたものは、深緑色の球状で、一つ一つにピンが付い
ている。それが2つ。

「そして」

メアリはピンを指にかけ、外すと同時に、2人に向かって投擲した。

「カラミニティ・メアリを、ムカつかせるな」

先ほども述べたが、世間一般の地雷なら致命傷とはならない。それ
は彼らに向かって投擲された手榴弾も同様。だが、カラミニティ・メア
リの魔法は『持つている武器をパワーアップできるよ』である事を忘
れてはいけない。目の前からは手榴弾、足元からは地雷。逃げ場を
失った2人に、爆破という一撃が迫り、そして……。

スノーホワイト、ラ・ピュセル、ライアが大地を震わせるほどの爆発音を耳にしたのは、彼らがようやく国道にたどり着いた直後の事だった。

「な、何!?？」

「また爆発か……!」

爆破の発信源を探ろうとするスノーホワイトとラ・ピュセルだったが、あちこちで似たような事が起こっている為、見当もつかなかった。「……ダメか。龍騎達と連絡が取れない」

マジカルフォンを使って安否を確認しようとしたライアも、肩を下ろした。3人は改めて、国道の惨状に目をやった。

「酷い……。何で、こんな事に……!」

「カラミティ・メアリがこの近くで待ち合わせをしていた事と言い、さっきのメールと言い、偶然起きた事故とは思えない。またよからぬ事を企んでいるとみて間違いない。……後は、九尾が巻き込まれているのかどうかだが」

「クソオ……! 一体何を考えてるんだあいつらは……!」

ラ・ピュセルが感情剥き出しで周囲を睨みつけていると、スノーホワイトが魔法で助けを求めている人の心の声を感知した。

「! みんな、こっちの方から声が!」

「よし、向かうぞ」

「ああ!」

3人はスノーホワイトを先頭に、破壊された車の間をくぐって、救助に向かった。

声のした方へたどり着いた3人は、そこで2人の人影を発見した。地面に倒れていた人々を火の手が回っていない場所へと移動させていた2人は、どちらも黒一色の姿。スノーホワイトはすぐにその人物達の正体を察した。

「アリス、リュウガさん!」

「! スノー、ホワイト……!」

「やはり来たか」

一方で、ラ・ピュセルは初めて見る魔法少女に目が点になった。

「あの子は……魔法少女、なのか？」

「そっか。そうちゃ……ラ・ピュセルは初めて会ったよね。この子、ハードゴア・アリスって言うの。それからアリス、彼女はラ・ピュセル。私の幼馴染みの」

「……よろしく、お願い、します」

「あ、ああ。それから、あなたは……」

と、今度はリュウガの方に顔を向けた。

「俺は、リュウガ。アリスのパートナーだ」

「リュウガ……。龍騎と酷似しているようだが、彼と何か関係があるのか……？」

「……さあな」

ライアからの質問をはぐらかすリュウガだったが、それどころではないと思ったスノーホワイトが、4人に呼びかけた。

「と、とにかく！ 今はみんなで協力して、取り残されてる人達を助けよう！」

「ああ、行こう！」

「私も、ついて、いきます」

「そうだな。話は事が済んでからにしよう」
「……」

そしてアリス、リュウガと合流し、計5人となったメンバーは、引き続き地面に倒れている人達を運んだり、車に取り残されている人々を強引に扉を開けて引きずり出してから担ぎ上げたりと、懸命に働き続けた。だが、被害は拡大する一方で、明らかに人手不足だった。

「まだ、こんなにも……！ どうしよう……！」

「九尾や龍騎達の方の搜索もしなきゃいけないのに、これじゃあ時間だけが過ぎて……！」

「落ち着けラ・ピュセル。とにかく今は手の届く範囲でやれる事をやるしかない」

「……九尾が、どうかしたんですか……？」

「えっ？ うん。それが……」

九尾というワードを聞いて、アリスがスノーホワイトに尋ねていたその時、5人の前方に小柄な人影が空から降りてきた。片方しか翼の生えていない天使だった。

「あれは……ミナエル？」

「……」

何の前触れもなく現れたミナエルを前に、ラ・ピュセルは警戒心を強めて、大剣を持って前に出ようとした。以前、鉄塔で襲撃を受けた時の記憶がよぎり、敵とみなしているようだ。

「ミナエル……！ 何をしに来た！」

「ま、待ってラ・ピュセル！ ダメだよ！ 救助を手伝ってくれようとしてるのに！」

「えっ？」

ラ・ピュセルは拍子抜けた声を発し、スノーホワイトはミナエルに呼びかけた。

「あ、あの……！ あなたも、手伝いに来てくれたんだよね！ だったら、一緒に困ってる人を探しに行こうよ！ 今までの事は全部水に流しておいておくから、協力して」

「……そうだ、あんただよ」

だが、ミナエルはスノーホワイトの質問に答える気はないようだ。そればかりか、最初からスノーホワイトを見ていない。そのギラついた目線の先には、これまで散々追いかけて回っていた龍騎とそっくりの人物が。

「私も、とんだ勘違いしてたんだね。ユナを殺したのは、本当は、あんただったんだ……！ その目で、ユナを殺した……！」

「なっ……!?？」

新事実を耳にして、驚きを隠せないラ・ピュセルとライア。リュウガは何も語らない。

「ま、待ってー！ 確かにこの人はあなたの妹に手を出したかもしれないけど、今はそれどころじゃ……！」

「部外者は黙っとけよ！」

ミナエルは罵声をスノーホワイトに浴びせて、そしてリュウガに再び目を向けると、拳を震わせ、そして。

「あ ん た は、 こ の 手 で え ……！」
うあああああああああああああああああああつ！」

「！ ダメ……！」

スノーホワイトが呼び止めるよりも早く、ミナエルはリュウガに向かって突撃し、上昇して、リュウガめがけて急降下した。その間にミナエルの姿が変わり、斧へと変わった。

「死んじやええ！」

リュウガは瞬時に両腕を前にクロスして身構えたが、斧はお構いなしリュウガの左腕に突き刺さった。装甲を貫いて、血が噴き出たのを見てスノーホワイトは悲鳴を上げた。ラ・ピュセルとライアも咄然としている。ただ、ハードゴア・アリスは動じる事なくその左腕を見ていた。

「……フンツ」

リュウガは鼻を鳴らすと、なおも深々と刺さっている斧を掴むと、勢いよく引き抜いて、地面に叩きつけた。

地面に叩きつけた衝撃で、ミナエルの変身魔法は解除され、元の姿に戻った。

「……こんなものが無駄だと、なぜ学習しない」

そう言ってリュウガは怪我をしていない右腕を使い、ドラグバイザーをスライドし、カードデッキから一枚のカードを取り出した。描かれているのは、パートナーであるハードゴア・アリスのアバター姿。それをドラグバイザーにベントインした。

『RECOVERY VENT』

すると、左腕の傷はあっという間に修復され、元通りとなった。パートナーカードである『リカバリーベント』により、如何なる怪我もすぐに治るようになったのだ。

「は、はあ!?？」

「傷が、治った……！」

「ハードゴア・アリスの魔法か」

ミナエル、ラ・ピュセル、ライアが口々にそう呟く中、新たな声が聞こえてきた。

「……シスターナナのメールに書いてあった事、本当だったんだね」
「タイガ……!」

現れたのは、ミナエルのパートナーである仮面ライダー『タイガ』。
「ちよ、何よそれ! あんたのパートナーの魔法、えこひいきだろ!」
歯ぎしりしながらもリュウガを睨みつけるミナエルに対し、リュウガは新たなカードをベントインした。

『SWORD VENT』

「り、リュウガさん!?!? 何して……!」

「スノーホワイト、他の奴の救助は、お前達に任せる。ここは、俺が引き受ける」

そう言つて黒いドラグセイバーを持ったリュウガが、ミナエルに斬りかかった。

「や、止めて2人とも! 喧嘩してる場合じゃ……!」

「ハアツ!」

必死に説得するスノーホワイトへ、今度はデストバイザーを構えたタイガが襲いかかるが、ハードゴア・アリスとラ・ピュセルが同時に前に出て、タイガを弾き飛ばした。タイガは起き上がりながら、カードデッキからカードを取り出す。

「……邪魔しないでよ。僕が英雄になる為なんだからさ」

『STRIKE VENT』

デストクローを両手に取り付けたタイガがゆつくりと歩み寄り、ラ・ピュセルが大剣を身構えるが、アリスが腕を横に伸ばして呟いた。
「……私が、相手に、なります」

「アリス……!」

「……スノーホワイトを、傷つけようとした。だから、倒します」
ハードゴア・アリスはマジカルフォンを手に持ってタップし、同じく黒いドラグセイバーを持ってタイガと交戦を始めた。

「リュウガさん、アリス! 私達と一緒に人助けをするんじゃないの?!?」

こうしている間にも、助けを求めている声は広範囲で拡大しつつある。そんな中、頭の中に響いてくる声の中に、奇妙な言葉が聞こえてきた。

『困ったなあ、どうしよう……。スイムちゃんはここに来た魔法少女や仮面ライダーを襲えって言ってたけど、事故の方に行つて助けてあげた方が良さそう……。でもスイムちゃんが言つてた事だし、あの子をやっつけてからガイと合流すれば、良いのかな……。』

「だ、誰かいるの?」

「スノーホワイト?」

『えっ。あの子、私の事が見えてるの? そ、それは困るよ。何で見えてるの?』

声の主は明らかに怯えながらも近くにいるとみて間違いない。だが、姿が見えないのだ。

「どうしたんだスノーホワイト」

「あ、あの方向から、声が聞こえてきて……。見えてたら困るって……。』

スノーホワイトが指さした方へ顔を向けるラ・ピュセルとライア。ラ・ピュセルが目を凝らして、一点を見つめていると、空間が僅かに揺れ動いたのをラ・ピュセルは見逃さなかった。

「そこにいるのは誰だ! 出てこい!」

ラ・ピュセルは人がいる事を確かめる為、大剣の面の部分を振り回した。

「ひゃあ!?」

すると、何も無かつた空間から犬耳の魔法少女が外套を羽織つた状態で姿を現し、前のめりに倒れこんだ。ラ・ピュセルの大剣を避けようとしてつまづいたようだ。

「お前は、たまー!」

「外套……。そうか、レアアイテムの透明外套を使って急襲するのが狙いだったか……。!」

「あうう……。!」

どうやら背後からスノーホワイトを襲うのが狙いだったようだが、

相手が悪かった。心を読まれてしまったては、姿を消していても、反応を辿ればバレてしまうのだ。

「何見つかってんだよ！ あんたが見つかったらダメじゃん！ この無能で役立たずのバカ犬！」

「うう……」

「ちよ、ちよつと……！ そんな言い方しなくても！」

ミナエルの罵声を聞いて、狙われる立場だったスノーホワイトはたまを庇うようにミナエルを咎めたが、ミナエルは聞く耳を持たない。

「もういい！ お前が使えないならあたしに寄越せよ！ そんなでもって、自分の力でさっさとあいつら殺してこい！」

そう言つて透明外套をたまからひったくつた後、再度リュウガと交戦した。たまはどうすればいいのかわからずオロオロしている。そんなたまへラ・ピュセルが険しい表情を見せながら大剣を突きつけた。

「お前も私達の邪魔をしようというのか！」

「ヒイ……！」

「あのさあ、それこつちのセリフなんだけど」

「……」

不意に横手から、彼らを呼び出した張本人である、たまのパートナーのガイが姿を現した。

「ガイ！」

「そつちこそ邪魔しないでほしいな。折角世界一面白いゲームの真つ最中なのにさ。水を差すような事やめてよ」

「面白いゲームだと!?？ まさかこの騒動も、お前が引き起こしたもののなのか！」

ラ・ピュセルの問いに対し、ガイは肩を竦めながら呟いた。

「さあね。でも本格的にゲームを動かしているのはカラミティ・メアリと王蛇つてとこかな。俺はもっと面白くしようとして、裏から手伝つてるだけ」

「どうして……！」

すると、スノーホワイトが声を震わせながら叫んだ。

「どうしてこんな酷い状況を目の前にして平気でいられるの!?!? あなた、仮面ライダーなんですよ!?!? だったら、困ってる人を助ける為に使うべきじゃないの!?!?」

「ハアツ?」

ガイは素っ頓狂な声を発し、スノーホワイトを指差しながら言った。

「スノーホワイトってさあ。前から思ってたんだけど、よくそんな綺麗事ばっか口にしててここまで生き残れたよね。他人の為に力使うとかさ、バカじゃないの? そういうのって目障りなんだよね。だからさ、さっさと消えてなくなれよ。最低最悪だよ、お前みたいな奴」

「お前……!」

ガイの冷ややかな発言に、さすがのライアも怒りを隠せず、一步前に出ようとするが、それを遮るように、スノーホワイトの事をよく知るラ・ピュセルが、はち切れんばかりの大声を発した。

「何を笑ってるんだ! 世の為人の為に、正しい魔法少女としてあるべき姿の為に力を使う事が、そんなにおかしいのか!」

大声で叫ばれたので、たまは怯えて耳を閉じた。だが、ガイは平然とした様子で、逆にこう反論した。

「あのさあ、おたくら何か勘違いしてない? 俺達ライダーや魔法少女なわけでしょ? それにさ、今の自分達が置かれてる立場分かってる? 毎週1人脱落するか、潰し合わないと生き残れない状況よ? ゲームに参加しといて、今更何言ってるのって感じ」

「ゲーム……!」

「ま、そういうことだからさ。一人りタイア確定って事になるね。どうせリタイアするならさ、くすぶってないで完全に消えたらどう? みつともないし」

ガイが再びスノーホワイトを指差しながら、彼女をリタイアと罵る。それを聞いた瞬間、ラ・ピュセルの頭の中の沸点は越していた。

「……ライア。スノーホワイトを連れて、九尾を探しに行つて」

「……えっ」

「人手が少なくなってる今、彼の助けが必要になる」

「ま、待って！ ラ・ピュセルは……」

「……こいつらだけは、僕が、相手にしなきゃいけないんだ！ 大丈夫、前の時みたいなのは失敗はしないから！」

「でも！」

「いいから行くんだ！ これ以上被害を拡大させるな！ ライア、頼む！」

「……分かった。無理はするなよ」

「分かっています」

「行こう、スノーホワイト。ここはラ・ピュセルに任せよう」

「……！」

ライアに連れられて、スノーホワイトはその場を後にした。魔法を使つて、九尾の心の声を探つて居場所を見つけに行つたのだ。

「ふうくん。ま、役者が少ないのもアレだけど、とりあえずは暇つぶし程度にやろつか」

「……この騒動も、魔法少女や仮面ライダーを一箇所に集める為の布石だったのか」

「まあ、最近ルールを守る奴は増えたけど、面白い事一つもやらない奴がいて困つてたんだよね。ここまでやったげないと、あのリタイア確定のあいっだって、参加してくれないでしょ？」

「スノーホワイトは、お前の駒なんかじゃない！ これ以上仲間を侮辱するようななら、容赦しない！」

「はいはい。御託とかどうでもいいからさ。そろそろ始めよつか。たまはどうする？ 下がつてもいいよ」

「う、うん……」

たまは一步下がり、ガイはカードデッキからカードを1枚取り出し、メタルバイザーにベントインする。

『STRIKE VENT』

ガイがメタルホーンを、ラ・ピュセルが大剣を構えると、爆発音が鳴り響き、それを合図にラ・ピュセルが先行した。

「お前みたいな奴は、仮面ライダーとして認めるものかあ！」

「さあて、楽しませてよ」

こうしてリュウガとミナエル、ハードゴア・アリスとタイガ、そしてラ・ピユセルとガイの一騎打ちが、燃え盛る国道にて始まった。

その一方で、スノーホワイトは時折振り返りながら、ラ・ピユセル達を気にかけていた。

「そうちゃん……。ライアさん、本当に大丈夫なんですか？」

「俺はラ・ピユセルを信じている。あいつは自分の力で運命を変える」と決意した。『自分』をよく知ったからこそ、出来る事もある。とにかく今は、九尾の搜索が優先だ。急いで彼を探そう」

「は、はい！」

スノーホワイトはライアと共に、九尾を探しに国道を駆け抜けた。通りかかった所で助けを求めている人達の援護も忘れずに。

だがこの時、スノーホワイトやライアは、九尾の搜索に夢中になり過ぎてて、大事な事を見落としていた。

ミナエル、タイガ、たま、ガイといった、同じチームのメンバーが襲いかかってきたにもかかわらず、同じチームメイトのアビスとスィムスィムが、その場に居合わせなかった事に。

77. 烈火の覚醒

全身を引き裂かれるような痛みが、いつになっても襲ってこない事に気付いたリップルは、目を開けた。浮いているような感覚がしたの下方を見ると、先ほどまでいたビルの上が、大きく抉られた状態になっているのが遠目で把握できた。その近くにはカラミティ・メアリと王蛇がいる。

「バツキヤロオ！ ナイトも無茶しやがって！」

「大丈夫か!?？」

不意にトップスピードと龍騎の声が聞こえてきたので顔を見上げると、ラピッドスワローに乗ったトップスピードがリップルの右腕を掴んで持ち上げていた。その側では同じくラピッドスワローに乗っている龍騎がナイトの体を支えていた。

どうやら手榴弾が爆発する直前に猛スピードでかつ飛んできた2人が、横合いからナイトとリップルを搔つ攫っていったようだ。リップルが足を離れた事で地雷も起動したが、ラピッドスワローの飛行速度がそれを振り切り、結果的に僅かな火傷程度で済んだ。

何とか一命を取り留めてホツとしていたリップルだったが、すぐに思い返して、トップスピードに言った。

「さっきの所に戻って！」

「な、何でだよ!?？」

トップスピードの質問に答える前に、リップルは体を1回転させて、後部座席に座りなおした。

「絶対にここで仕留める！」

「ヤクザもんみてーな事言っでんじゃねえぞ！ ここは退いとけ！
大体、勝ち目とかあんのかよ！」

「勝ち目とか、そういう問題じゃない！」

リップルはそう叫び、一呼吸置いてから呟いた。

「これは、私や龍騎に対する嫌がらせだ。私達が……特に龍騎が、この街や何の関係もない人々が困ってるのを放っておけないって分かってて、こんなテロ行為をやってる」

「奴らの事だ。2人が死ぬか、邪魔が入るまで、狩りを続けるだろうな。2人を挑発する為なら、平気で人の命をおもちや扱いにする」

「そんな……！」

「マジかよ……」

龍騎とトップスピードが絶句する中、リップルは下界に見える、燃え盛る中宿を睨みつけながら、こう語った。

「私は、世界中の人間を救いたいわけじゃないし、救えるとも思っていない。でも……！」

リップルは龍騎とトップスピードに顔を向けて言った。

「たとえ、通りかかったただけの人だとしても、あそこにいる人達を見捨てて逃げられない。逃げたら、そんなのはもう魔法少女じゃない」

そして彼女は口にする。かつて憧れを抱き、今は行動を共にして、キャンディー集めや人助けに勤しむ、白い魔法少女の姿を脳裏に浮かばせながら。

「私は、魔法少女だ」

「リップル……！」

「……俺も、このまま尻尾を巻いて逃げるつもりはない。仮面ライダーだから、じゃない。俺の気がすむままにやりたいからだ」

「ナイト……！」

「……ああ、そうかい」

龍騎は2人の並々ならぬ決意を込めた言葉を聞いて黙り込み、トップスピードは少し時間を置いてから、フツと息を吐いて、右手でトンがり帽子のひさしを押さえた。同時に、トップスピードが運転するラピッドスワローも減速する。

「偉そうに言うじゃねーか。つーかりリップルがそんなに喋るの初めて見たわ（そーだよな。ここで他の奴ら見捨ててちゃ、万が一生き残れなくても、昇一に顔向け出来そうにねえし）」

「……トップスピード？」

トップスピードが苦笑したのを見て訝しむリップル。トップスピードはそれに気付かず口を開いた。

「ただまあ、アレだ。ちよいと言葉が足らんところがあるね。俺だって」

『ADVENT』

「！ 避けて！」

「おわっ!?？」

トップスピードが何かを言いかけた瞬間、リップルが前へ身を乗り出し、トップスピードを押し倒した。するとその真上を、黒いエビルダイバーが通過していき、Uターンして戻ってくるのが見えた。王蛇が召喚した黒いエビルダイバーが、4人を襲撃しに来たようだ。

「何だよ！ 人がせつかく良いところ決めようとしたのによお!?？」

「俺達を逃す気はない、という事か」

ナイトが冷静に判断していると、龍騎が叫んだ。

「ツシヤア！ 上等だ！ こんな事、今すぐ止めさせてやるからな！」

行こうぜトップスピード！ あ、後勝手に前には出るなよ！ 体の方も大切にしとけよ！」

「お、おう！」

興奮している為か、龍騎の言葉の意味がよく分からなかったが、先んじてビルへ向かって飛び出す姿を見て、トップスピードもリップルを乗せたまま急行する。後方からは黒いエビルダイバーが迫ってきた。

カラミティ・メアリが屋上から4人に向かって狙撃を始めるが、自在に動き回る2機のラピッドスワローは、暴れ馬よろしく被弾する事がない。

「チツ。だったら、こいつをお見舞いしてやろうか！」

そう言つてメアリは、四次元袋から再び手榴弾を取り出し、ピンを抜いた。そして身構えている4人に投げるのではなく、地上に向かつて放り捨てた。それを見た4人は目を見開いた。地上には、依然として避難を完了していない者達で溢れかえっている。そんな人だから、のど真ん中に手榴弾が放り込まれたら、大惨事になる。

「やめろお！」

『SWORD VENT』

とつさに龍騎がドラグセイバーを手に持ち、手榴弾が地上に落ちる前に、一旦地面スレスレのところまで急降下し、手榴弾の真下に来た

ところで急上昇し、ドラグセイバーを使って野球のようにフルスイングで手榴弾を上に着ち上げた。

が、打ち上げて数メートルもしないうちに、引火した手榴弾が爆発。近くにいた2人だけでなく、後から駆け付けてきたトップスピード、リップルサイドも巻き込まれてしまう。

「うわあああああああつ!?」

「グツ……………」

「うつ……………」

衝撃波に呑み込まれ、4人はラピッドスワローから振り落とされてしまい、地上に落下してしまった。

その様子を、カラミティ・メアリと王蛇は鼻で笑っていた。

「仕留めた…………とは言い難いかもしれないね。どうせならあいつらの死に顔を拜んでおきたいからね。降りてみるか」

「アア…………… まだまだ足りないなあ、もつと戦いたいんだよ!」

そして2人は、さらなる刺激を求めて、地上へと向かっていった。そんな事もつゆ知らないリップルは、全身の痛みが和らいだところで起き上がって、近くで倒れこんでいるナイトに駆け寄った。辺りには大破した車が点在しており、国道のどこかだと判明した。

「大丈夫…………!?」

「ああ。中々に巧妙な手口だが、この程度では根を上げるつもりはない」

そう言ってナイトも立ち上がり、周りを見渡していた時に、ある事に気付いた。

「…………あの2人はどこへいった?」

「…………!」

リップルもパートナーの言葉を受けて、辺りを見渡した。一緒に地上に突き落とされたはずの龍騎とトップスピードの姿が見えない。言いようのない不安に陥ったリップルは、ナイトと共に2人の搜索を始めた。カラミティ・メアリと王蛇の始末も最優先だが、それ以上に2人の行方を気にしている点から見ても、やはりリップルは魔法少女なのかもしれない。

「うつ、ツウ……！」

「うう……！」

一方、龍騎とトップスピードは、国道の真下に位置する建物の中で横たわっていた。爆破の衝撃で吹き飛ばされ、ナイトやリップルと違ってはるか下方まで落下していたのだ。無抵抗のまま落下するトップスピードを見て、龍騎が無我夢中でトップスピードに抱きつき、背中から建物にぶつかってしまったので、抱き抱えられているトップスピードにはさほどダメージは入っておらず、逆に龍騎は上半身にトップスピードの乗せたまま、全身に広がる苦痛が容赦なく彼を襲った。

それを見たトップスピードは慌てて龍騎から降りた。

「わ、悪りい！ 大丈夫か？？」

「お、おう。トップスピードこそ、大丈夫……？」

「ああ、おかげでな。でも、無茶しすぎだろ。さつきも言ったけど、自分の命くらい大切にしねえと」

「分かってるって。分かってるから、俺はお前の事を……あつ！」

すると、龍騎がトップスピードの後ろに目をやって驚いた。何かの

気配を察したトップスピードも、同時に振り返る。

そこには、薙刀『ルーラ』を持つ魔法少女『スイムスイム』と、そのパートナーである仮面ライダー『アビス』が立っていた。ミナエル達とは別行動を取っていた2人は、何故か現場とは離れているこの場所にいた。

「お、お前らどうしてここに……」

「……なるべくなら、正面からの戦いを避けたかったが、仕方ない」

アビスが少し残念そうに呟くと、カードデッキからカードを取り出し、アビスバイザーにベントインした。

『SWORD VENT』

「少々予定は狂ったが、良いよな？」

「……うん」

2刀のアビスセイバーを持ったアビスが、隣にいたスイムスイムに確認をとり、スイムスイムは迷いなく頷く。

「お、おいよせよ！ 何の真似だつて！」

「今日、たくさんの魔法少女、仮面ライダーがここに来る」

スイムスイムはルーラを構えると、その刃先を2人に向ける。

「だから、このまま後7人をやっつける。そうすれば、残り16人になって、それでおしまい」

「なっ……!?」

「こいつらも、初めから殺す気満々じゃねえか……!」

どうやらアビスとスイムスイムは、今現在中宿で起きている混乱に乗じて魔法少女や仮面ライダーを殺害するのが目的だったようだ。が、偶然にも龍騎とトップスピードに目撃されてしまった為、急遽不意打ちではなく正面からの強行に出たのだ。

「ハアッ！」

「おわっ!?」

アビスが斬りかかってきたところを、2人は横に飛んで回避し、そのまま外に出た。龍騎のドラグセイバーは、手榴弾による爆発の衝撃で手から離してしまい、再召喚するには時間がかかる為、接近戦が出来なくなっている。その一方でトップスピードはマジカルフォンを

タップして、ドラグセイバーを構えた。そして向かってくるスイムスイムと刃を交える。が、体格差のある2人では、どちらに軍配があるかなど、見るまでもなかった。

「うぐっ……！」

「……」

トップスピードは押し倒され、スイムスイムは無表情のまま、攻め上がった。

「トップスピード！」

「お前の相手は、俺だ」

「こ、のお……！」

『STRIKE VENT』

「俺はお前達を殺すつもりなんてないんだ！ もちろん殺されるつもりもなし！ それに、向こうでまたあいつらが暴れまわってるなら、絶対止めないと！」

そう叫んで右腕についたドラグクローを後ろに引いて、ドラグレッダーと共にドラグクローファイヤーを放とうとするが、

『FREEZE VENT』

アビスが新たにベントインしたカードの効力で、ドラグレッダーが凍結してしまった。これではドラグクローファイヤーは発動出来ない。

「なっ!?？ あいつ、タイガと同じカードを持ってやがったのか！」

「俺達を差し置いて助けに行くだと？ 随分となめられたものだな」

『STRIKE VENT』

「なら、お前は後回しだ。そこで黙って見ている。ハアツ！」

そう言っただけアビスは、右腕についたアビスクローを突き出し、アビスマッシュを龍騎に向けて放った。激流に呑み込まれて、龍騎は絶叫と共に、後方の壁を突き破って吹き飛ばされた。

「！ 龍騎い！」

パートナーがやられた所を見たトップスピードは、急いで駆けつけようと走り出すが、スイムスイムの方が動きが早かった。横に振るつたルーラが、彼女の左足の太ももを掠め取った。

「ウア……！」

太ももにつけられた傷口から鮮血がほとばしり、トップスピードは倒れこんだ。左足を押さえつけているトップスピードに、スイムスイムは躊躇いもなくルーラを振り下ろす。ハツとなって横に転がるトップスピードだったが、今度は右肩から血が流れた。

「ああー！」

距離を置いてから、再び立ち上がろうとするトップスピード。だが、左足の痛みに伴って、立っていられず後ろから倒れこみ、壁に背を当てた。もはや逃げる気力すらなかった。

勝利を確信したのか、スイムスイムはアビスと共にゆっくりとトップスピードに歩み寄った。トップスピードの血がついたルーラの刃が、近くにあつた蛍光灯によって反射して輝いている。そしてその輝きが、トップスピードの命を奪おうと、迫ってきている。

「クツソオ……！ 何で足が動かねえんだよ……！ 龍騎やリップルやナイトの所に、行かなきゃいけねえのに……！」

と、ここでスイムスイムが疑問を投げかけた。

「どうして、こんな時でも、他の人の事を、考えられるの！」

「……決まってるだろ！ ナイトは、リップルは俺のダチだ！ もちろん、スノーホワイトや九尾やラ・ピュセルやライア、他の奴らだって同じだ！ それに、龍騎は俺のパートナーだ！ こんな戦いを止めたいっていうあいつの願いを、叶えたいんだよ！ だから……！」

まだ、死ぬわけにはいかない。せめて、後半年は。

そう叫ぶトップスピードだが、スイムスイムの心には届く事はない。

「……アビス、ダチって何？」

「友達の略だ。まあ、覚えていても意味はないが」

「友達、パートナー……。ルーラが言ってた。手下とリーダーの関係はあっても、友達なんていい加減な関係はない。パートナーも、同じ」

それは以前、スイムスイムをルーラの元へ送ろうとした際に彼女が

投げかけた言葉。もう説得は通じない。トツプスピードはそう痛感した。

「後で、龍騎をやっつけに行こう」

「ああ。殺れ、スイムスイム」

アビスがそう言うのと、スイムスイムはルーラを振りかざした。反射による輝きは、より一層増した。

「……ああ。これ、もうダメなやつだ」

刹那、トツプスピードは全身の力を抜いた。自分の死期を悟ったからなのかもしれない。だから、無抵抗のまま、ありのままの現実を受け入れようとしたのだろう。

死にたくはなかった。まだ遊び足りないと思っていた。1度は奪われたものの、再び幸せになりたいと思った。

「……悪いな、みんな。俺はここで終わりみたい」

みんなというのは、龍騎やリップル達はもちろんの事、家族や隣近所、地域でお世話になった人々。そして、お腹の中で外の世界がどんなものなのかを今か今かと待っているであろう、名もなき子供に向けられたものに違いなかった。

「（……たたくよお。今日は朝からちよいと気分が良かったから、昇一が好きだったカレーでも作ろうかと思ってたのになあ……）」

と、そこである事を思い出すトツプスピード。

「（……ああ、でもアレか。カレーの材料、買い忘れちゃってたんだっけ。……困ったなあ。後で買いに行こうと思ってたのに）」

だが、もうそんな事はどうでも良かったのかもしれない。何故なら、もう買い物に出かける事は、ないのだから。

「……正史。俺、昇一のところに、行ってくるわ」

そんな小さな呟きは、スイムスイムはもちろん、アビスに届くはずもなく、空き地の一角で、血が飛散した。

「……えっ?」

「どうした?」

国道で倒れている人を安全な場所に避難させていたスノーホワイ
トだったが、不意に立ち止まって、キョロキョロと辺りを見渡した。
ライアが尋ねると、彼女は曖昧そうに答えた。

「なんか今、変な心の声が聞こえてきて……」

「声?」

「はい。カレーの材料が何とか、って……」

「……悪意ある言葉ではなさそうだが、場所は分かるか?」

「すみません。突然聞こえてきたから、場所までは……」

「そうか。とにかく今は、人命救助と九尾の捜索が最優先だ。急いで
向かおう。ラ・ピュセル達が時間を稼いでくれているからな」

「! はい!」

そう言って2人は再び国道を走り出した。謎の声の正体は気にな
るものの、立ち止まるわけにはいかない。

「……？」

閉じていた目を開こうとすると、思うようにまぶたが開こうとしていた。死んだ人間には、到底できない真似だ。それ以前に、痛みを全く感じていない事に気づくトツプスピード。

そして目が開かれ、ようやく目の前の様子が明らかになった時、トツプスピードはさらに目を限界まで見開いた。

「グツ、ウウオオオオオオオツ！」

トツプス。ピードとスイムスイムの間立っていた、龍を彷彿とさせる仮面の戦士は、振り下ろされたルーラの柄を掴んで受け止めていた。

「二！」

スイムスイムとアビスは、突如割り込んできた龍騎に驚く素振りを見せるが、すかさずスイムスイムが腕に力を入れ込める。わずかに肩のアーマーに食い込んでいたルーラの刃先が、さらに深く沈み込み、血が滴り落ちた。

「龍騎い！」

「オオオオオオオオオ！」

龍騎は咆哮と共に、柄を強く握りしめ、無理やり肩から引き離すと、アビスに向かってルーラごとスイムスイムを押し倒した。一旦距離

を置く為に後方に下がる2人。龍騎は息を荒げながら、後ろ目でパー
トナーに目をやった。

「良かった……。今度は、ちゃんと間に合った……」

「龍騎、お前その肩……!」

トップスピードが震える指で指した先には、肩から流れ出る血が。
だが龍騎は平気そうに首を横に振った。

「これくらいの怪我なんて、すぐに治るからさ! そっちこそ、足とか
肩とか大丈夫かよ?」

「ま、まあ……」

「まだ立ち上がれる気力があつたか。悪運の強い奴だ。いや、それと
も単にバカ故の単純思考がそうさせたのか」

アビスは悪態をつきながら、龍騎に顔を向けた。

「またバカ呼ばわりされてるけど、今はそれでも良いよ
?」

「モンスターや、お前らみたいな奴から人を守れたなら、俺はそのバカ
で全然良いから」

そう呟く龍騎の背中からは、燃えるような神々しさが出ているよう
に、トップスピードは思わずそう感じてしまった。

「俺は結局、今でも迷ってるよ。ライダーや魔法少女と戦うなんて、間
違ってると思う。……でも、それ以上に間違ってる事はあるよ。目の
前で困ってるのに、助けようと思わない事だ! それこそ本当に間違っ
てる!」

「!」

「俺はあの時、ファムを助けられなかった。死なせてしまった……。で
も、そんな失敗があつたからこそ、やりたい事を見つけた!」

「やりたい事……?」

スイムスイムが首を傾げていると、龍騎は叫んだ。

「自分の手が届く所だったら、大きな犠牲も、小さな犠牲も出さずに、
最後まで戦う! どんな事があつても必ずみんなを守ってやるんだ
!」

「そんな屁理屈が通用すると思ってるのか?」

「アビス、お前の言いたい事も分かるよ。今の状況がそれを物語ってるって。確かに綺麗事かもしれないけど、それでも俺は、自分が決めた道を最後まで信じるって、決めたんだけだ！」

そこで龍騎は一旦会話を途切らせてから、トップスピードにチラッと目をやると、再び2人に目を向けた。

「それに、今の俺には小さい事だけど、やりたい事を見つけてる。何か分かるか」

「……」

スイムスイムは首を横に振る。そんな彼女に向かって龍騎は堂々と宣言した。

「トップスピードさ」

「えっ？」

「トップスピードと一緒に、最後まで生き残るって事だ！ だから……！」

一度深呼吸してから、声高らかに言い放つ。

「2人は、俺が守る！」

「(2人……？ でも、ここには俺しかいないはずだけど……)」

トップスピードが、龍騎の言葉に疑問を抱き、辺りを見渡すが、トップスピード以外、守るべき対象はいなさそうだが……。

「！ まさか、お前……！」

その時、トップスピードは気づいてしまった。守るべきもう1人の人物は、自分の中にはいるのではないかと。

トップスピードは思わず自身の腹に手をやった。魔法少女姿であるため、腹部は膨れていないが、そこには確かに、新しい命が宿っている。

「龍騎、お前って奴は……！」

驚き半分、嬉しさ半分といった眼差しを、龍騎の背中にぶつけた。彼は、守ると誓ってくれたのだ。パートナーだけでなく、その身に宿した子供の事まで。血の繋がりもなければ、本来なら関わる事もなかった2人を、龍騎は躊躇いなく守ると言ってくれた。それが、彼なりに小さな正義なのだとしたら、それを支えてやるのもパートナーの

務め。ならば自分も横に立とう。

トップスピードは、ゆつくりと立ち上がり、龍騎の隣に立った。『生きたい』という強い意志がそうさせたのか、足の痛みが引いていったような気がした。

「トップスピード……?」

「まさか今度は龍騎に助けられるなんてな。でも、ありがとな。そう言ってくれて」

「へっ?」

「だからさ。俺にも戦わせてくれ。守るための戦いつてやつをさ。俺にだって、守りたいものがあるんだ。だから、戦う」

そう言ってから、今度はスイムスイムに顔を向けた。

「なあスイムスイム。さつき友達なんていらなとか言ってただろ?」

「ルーラがそう言ってたから」

「友達つてのはさ、必要なんだよ」

きっぱりとそう言い切るトップスピード。

「でもルーラは……」

「あいつにだって友達はいたさ」

「……誰?」

「俺や、隣のパートナーさ」

得意げに話すトップスピードの表情には、先ほどまで怯えていた面影は微塵もなかった。その事にアビスは訝しんだ。

「お前……、死ぬのが怖くないのか?」

「怖いに決まってるだろ。でもな、こんな時だからこそ、戦って生き残らなきゃって、思えただけさ。それに、守りたいもんは最後まで守り通す。それが俺達なんだ」

「……」

「そうさ。俺だって、魔法少女だからな!」

それは、先ほどリップルの前で言いそびれてしまった宣言。魔法少女として、何より人間として、守りたいものがあるのなら、自らの意思で、その先に戦場が広がっていても、前へ出向く。そう言い

たいのだろう。

そしてトップスピードは、龍騎に顔を向けた。

「そんなわけだからさ、やってやろうぜ龍騎！ 俺は絶対に死なない

！ 龍騎も死なせない！ アレを使つてな！」

「アレ……？ ああ、アレか！」

相づちを打つ龍騎を見て、アビスもスイムスイムも訝しむ。が、アビスは思い出してしまった。つい先ほど、ファヴとシローからの連絡で、レアアイテムを獲得したのが、目の前の2人だという事に。何が起こるのかは分からないが、止める必要があると思つたアビスはとっさに飛び出す。が、その頃にはすでに2人は動いていた。

「行くぞトップスピード！」

「おう！」

龍騎はカードデッキから1枚のカードを取り出し、目の前の相手に見せた。そこには、『SURVIVE』と表記された、左翼と炎の背景があるカードが。それに続いてトップスピードもマジカルフォンを取り出し、左翼のついたアプリをタップする。それと同時に、2人を中心に熱風が吹き荒れて、アビスは後ずさった。スイムスイムも眩しそうに目をそらす。

そして龍騎が左腕を突き出すと、装着されていたドラグバイザーが無くなり、新たに龍の頭部を模したハンドガン型の召喚器『ドラグバイザーツバイ』が手元に現れた。一方でトップスピードの左腕についていた箆手の手首部分に、ホルダーが取り付けられた。

龍騎はカードをドラグバイザーの口の部分に装填し、口を閉じ、トップスピードはマジカルフォンをホルダーにはめ込んだ。

『SURVIVE』

すると、龍騎に鏡像が重なり、炎を表すかのようなショルダーアーマーが追加され、仮面には髭を表すかのような触角がついた、『龍騎サバイブ』が姿を見せた。

そしてトップスピードは光に包まれ、露わになったのは、元々ワンピース姿だったのが、上半身は焦げ茶色のメッシュが入った服で、下半身はカボチャパンツへと変貌し、左腕にしかつけられていなかった

紫色の籠手が右腕にも取り付けられ、上腕と腹に銀色のアーマーがつき、ブーツには膝当てがつけられた。とんがり帽子には新たに星のマークがあり、耳のピアスも星からハート型に変わっている。胸元のリボンにピンク色の球体がデコレーションされ、首には、今は亡き昇一が渡してくれたお守り袋がついている。全体的に防御面に特化した、『トップスピードサバイブ』の姿が、そこにあつた。

「挿入歌：果てなき希望」

「！ あれが、サバイブか……！」

「サバイブ……」

アビスとスイムスイムが、姿の変わった2人を見て身構える。

「おお、こいつはいいな！ 気に入ったぜ！」

「ツシャア！ これなら……！」

トップスピードサバイブは、溢れ出る力に興奮しており、龍騎サバイブは気合いを入れた。龍騎サバイブは早速カードを引き抜いて、ドラグバイザーツバイの後頭部にある装填口にベントインした。

『SHOOT VENT』

「なら俺もだ！」

トップスピードサバイブもまた、マジカルフォンをタップして、龍騎サバイブが持っているものと酷似しているドラグバイザーツバイを手に持った。デザイン等はほぼ同じだが、装填口はないのである。

すると、上空からサバイブによってドラグレッダーから進化した『ドラグランザー』が姿を現し、龍騎サバイブとトップスピードサバイブの間に降り立った。そして口元に炎を形成し出すと、龍騎サバイブもトップスピードサバイブも、ドラグバイザーツバイを2人に向けた。

スイムスイムが、ルーラを構えて攻撃が来る前に先制しようとしたが、アビスの大声がそれを遮った。

「撤退しろ、スイムスイム！」

「でも……！」

「急げ！ 後で合流だ！」

『DIMENSION VENT』

そう言ってアビスはレアアイテムの一つである『ディメンションベント』を用いて、後ろへ下がると同時にその場から姿を消した。離れた場所に転移したようだ。それだけ、目の前から来る攻撃に危機感を抱いたのだ。

「ハアツ！」

そうこうしているうちに、チャージし終えた龍騎サバイブとトップスピードサバイブは、ドラグランザーと共に、ドラグバイザーツバイからはレーザー光線が、ドラグランザーからは炎が放たれて、『メテオバレット』がスイムスイムに襲いかかる。すると、スイムスイムの下半身から、地面へと沈んでいくのが見えた。

「なっ!?？」

その様子を、龍騎サバイブもトップスピードサバイブも見逃さなかった。メテオバレットはスイムスイムに直撃する事なく、彼女がいた地点を抉り取り、再び静けさが戻ってきた。否、戻ってきたわけではない。依然として国道の方では様々な音が鳴り響いている。しばらくは周りに目を配るが、アビスもスイムスイムも、襲いかかってくる気配はない。どうやら本当に撤退したようだ。

「なんとかなった……かな？」

ドラグバイザーツバイを下ろし、ホツと一息つく龍騎サバイブと、その時彼の隣が光り出し、何事かと振り向くと、お腹が膨れ、マタニティドレスに身を包んだつばめの姿があった。そしてつばめは一息つくと同時にゆっくりとその場にしゃがみ込み、壁にもたれた。よく見ると、額を中心に汗が滲み出ている。

「お、おい！ 大丈夫か!?？」

「あ、ああ。平気だよ。ただちよつと疲れたつつうか、ブルつちまつてな」

アハハと笑いながら、お腹に手を当てて息を整えるつばめ。ようやくひと段落つき、緊迫感ある空気から解放されて、一気に緊張の糸が切れたのだろう。だが、過度なストレスはお腹の中の胎児にも影響が

あるかもしれない。そう思った龍騎サバイブは、安心させるようにつばめの手を握った。その手は最後に美華に触れた時と違って、温もりがあった。そして守り切れた事を実感させるぐらいに、温かかった。龍騎サバイブの行為に、つばめは顔を赤くした。

「ん？　なんか顔が赤いけど、本当に大丈夫？」

「なっ!?　だ、大丈夫だって！　心配性だなあ」

そんなやり取りが行われている最中、2人の元へ足音が近づいてきた。龍騎サバイブとつばめがその方を向くと、ナイトとリップルの姿があった。どうやら探しに来てくれたようだ。

「あっ！　ナイト、リップル！　おーい！」

「そこにいたか。それにその姿……」

「ああ。お前と同じアイテムを使ったんだ。トップスピードもな」
「チツ。手間をかけさせ……、て……」

不意にリップルが言葉を詰まらせたのは、龍騎サバイブの隣に、見知らぬ妊婦の姿があったからである。ナイトもそれに気付き、龍騎サバイブに誰なのかを問おうとした時、つばめが口を開いた。

「んっ？　……ああ。そういやバレちゃったな。俺の秘密」

つばめは、腹に手を当てながら恥ずかしげに笑みを浮かべた。

「秘密だと……？　……！　まさか、お前は……！」

「……あ！」

「あ、うん。そうなんだ。この人は……」

「トップスピード……なのか……？」

リップルの質問に、つばめは頷いた。

「まあ、そういうこった。これが俺の生きたい理由。後半年は絶対に死ねない理由って事。黙っててゴメンな。でもまあ、こういうのは恥ずかしいっていうか……」

が、つばめが言い終わる前に、リップルが前に出て唐突につばめを抱きしめた。

「お、おい……!?」

「……んで、なんで……！　なんで……！」

「いやだから悪かったって。でも恥ずかしいのもあるし、変に気を遣

わせるのもアレかなって。それに、ファヴの話じや魔法少女のままなら全然問題ないらしいしさ」

「そんな事聞いてるんじゃない……！ 自分に言ってるんだ……！ どうしてもっと早く、気づいてやれなかったって……！」

「そ、そりゃあ教えてないし……」

つばめを抱きしめながら、体を震わせるリップル。ナイトは龍騎サバイブに話しかけた。

「……城戸。お前、この事を知ってたな」

「あ、ああ。ちよつと前にね」

「……そうか」

会話はそれだけだった。

そんな中、つばめはリップルの背中に手を回して、落ち着かせるように呟いた。

「心配してくれてありがとな。でも、もう大丈夫だ。龍騎が、守ってくれたからさ。だからもう自分の事を悪く言うのはやめとけよ」

「……だったらー！」

そこでリップルは顔を上げて、トップスピードの変身者の目を真っ直ぐ見た。その目は僅かだが、赤く腫れていた。

「だったら約束しろ……！ この先何があっても、絶対に一人で無茶だけはしないって……！ お前を失ったら、私は……！」

初めて見る、リップルの弱気な姿を見て、つばめは深く頷き、その頭を優しく撫でた。

「分かってるって。もうこの体は、俺一人のものじゃないしな。それに、リップルや龍騎、ナイト達に守ってもらえるだけでも、俺は幸せ者さ。……後な」

不意につばめは顔を上げて、龍騎サバイブとナイトの方に顔を向けると、こう宣言した。

「あの時は、最低でも半年って言ってたけど……。それ前言撤回な。俺、絶対にもっと生きるって決めた。早くこんな争い終えて、平和になって、この子を産んで育てて……。そんでもって、また遊ぶんだ。どんだけ歳とつても、自分が満足するまでな」

78. 復讐の闇

高見沢 大介が『超人的な力』を欲するようになった一つの要因として、父親の惨めな姿を近くで見続けた事が挙げられる。

元々は小さな港町にある鉄鋼業で細々と働いていた高見沢一家だったが、大介が幼少期の頃、とある大企業が多額のお金と引き換えに、彼の住む港町もろとも買収した事が、全ての始まりだった。事実上、土地を追い出された高見沢一家は、都会に出てから慣れない事業に手をつけ、再興を図ろうとしたが、全て失敗に終わり、遂には借金まみれの生活が続いた。

その後相次いで母親が病に倒れて帰らぬ人となり、父親はその日之境に壊れ、遂には一人息子であった大介を捨てて、行方をくらましてしまった。

都会に立ち並ぶビルを見上げながら、高見沢 大介は一人、拳を握りしめながら呟く。自分は、父親のような弱者にはならない。強者として、誰も寄せ付けないほどに強大な力を手にして、全ての頂点に立つ、と。

その誓いを皮切りに、高見沢は独学で経済を学び、遂には高見沢グループという大企業を創り出して、その総帥として一躍名を馳せた。それは、幼少期の頃にはそこに立つとは思いつかなかったであろう地位だった。

だがこの頃から、高見沢は飽くなき欲望を内に秘めていた。富、名声、地位といったものを手にはしたが、まだ残っているものがある。それが、直接的な力。そのカテゴリーを手に入れてこそ、自分は絶対的な支配者として、人間の頂点に達する。高見沢は、そう考えていた。

『さあ、解き放つてみるが良い。お前のその欲を力に変えて、証明してみたまえ、仮面ライダーベルデ』

それは、今から1年ほど前の出来事。横の繋がりを持っている会社を通じて知った『仮面ライダー育成計画』を、バカバカしく思いつつもプレイしていた最中、彼は仮面ライダーに選ばれたのだ。都市伝説として本物になれるかもしれないとは聞いていたものの、本当になれるとはこの時の高見沢は信じていなかった。

マスコットキャラクターのシローからは、教育係として、以前から仮面ライダーを務めていたらしいオーデインの紹介し、1日だけではあるが、仮面ライダーとしての役目を教えてもらった。が、話を聞くうちに、くだらなさを感じていた。力を人助けの為に使うなど、弱者の証。真の強者は、その力で他人を蹴落とし、頂点に君臨する為にこそあるのだと、ベルデは考えていた。

『あなたに頼みたい事があるの』

そんなある日、彼の元に『お姫様』を連想させる姿をした魔法少女『ルーラ』が現れた。後に彼女の正体が、つい最近自分の会社に入社した途端にメキメキと才能を発揮し、高見沢自身が秘書として迎え入れようと思えたほどに将来有望だった女性、木王 早苗だと気付くわけだが。

ルーラが頼んだのは、チームの編成だった。ベテランのベルデを介して、大きな派閥を組織するというものだった。理由は教えてくれなかったが、魔法少女や仮面ライダーがいる社会でも派閥を作っておいても良いだろうと考え、ベルデはルーラと共に使えるような人材を集めた。

その結果、ガイ、スイムスイム、アビス、ピーキーエンジェルズ、タイガ、インペラー、たまといったメンバーを募らせ、普段から人が寄り付かないであろう、門前町の王結寺を拠点に、活動を始めた。

その派閥の中ではルーラがリーダーとして統治する事となり、ベルデは一步下がってその様子を観察するようにした。

しかし、観察していくうちに、ルーラが魔法を行使してばかりいて、ほとんどが彼女に反感を買ってばかりいる事に気付き、リーダーとしての適性がないように感じ始めた。

そして始まった、生死をかけた競い合い。それを利用して、ルーラを支配者の座から引きずり落とす事を決め、今の体制に不満を持っている他のメンバーの賛同を得たり、依然としてルーラを崇めているスィムスィムを言葉巧みに自分のグループに入れて、結果的にルーラを脱落させた。

早苗の死体を見下ろしながら、彼は思った。所詮は魔法無しでは何も出来ない女に、初めから統治など無理な話だった。やはり必要なのは力そのものであり、それらは全て、自分が生き残る為のものなのだ、と……。

「ウオオオオオオオオオツ！ ハアツ！」

「フンツ！ これくらいで……！」

現在、九尾とベルデが死闘を繰り広げているミラーワールドは、地下に位置する立体駐車場が舞台となっていた。2刀のフォクセイバーを器用に振り回し、剣舞の如く素早い動きで攻撃を仕掛ける九尾に対し、ベルデは軽いステップで、バイオワインダーを構えながらかわしている。勝負はほぼ五分といったところだ。

「オラア！」

「！」

九尾の動きを見切ったベルデが、九尾の足元めがけてバイオワインダーを放つと、左足に巻きついて、引つ張ると同時に九尾はバランスを崩して倒れ、フォクセイバーが手から離れた。そしてそのまま引き寄せて腹を踏みつけようとするが、九尾も素早く対処に出た。

両足をクロスしてベルデの右足による踏みつけを阻止すると、今度は両手でバイオワインダーの紐を掴んで引つ張り、ベルデを前のめりに倒れさせると、その顔面に向かって拳を振るった。殴られたベルデは後ずさり、その間に解放された九尾はフォクセイバーを拾った。

「この……クソガキがあー！」

バイオワインダーを放ち、左手に握られていたフォクセイバーを絡め取った後、それをベルデのところに引き寄せて手に取ると、九尾に斬りかかった。だが、剣術ならば使い慣れている九尾に分があったのだろう。何度も打ち合いをした後、ベルデの持つフォクセイバーが弾き飛ばされて、九尾のフォクセイバーが横に振るわれて、ベルデの右肩を掠めた。

「……ッ！」

僅かに血が垂れて後ずさるベルデを見て、一気に勝負を決めようと、九尾は新たなカードをベントインする。

『ACCEL VENT』

「ハッ！ またそいつか！ 効くかよ！」

『CLEAR VENT』

だがベルデも、以前港での戦いで手の内を知っている為か、クリアーベントのカードで透明化した。颯爽と突撃した九尾は、高速でフォクセイバーを振るっても手応えが無いことに気づいて立ち止ま

るが、気配を察知する前に、背中に強烈な痛みが走った。

「ウツ……！」

「セイツー！」

透明化したベルデが、バイオワインダーであらゆる方向から地道にダメージを与えているようだ。このまま身動きしないままでは危険だと判断し、九尾は駐車場の奥に向かって駆け出した。ベルデもその後を追いかけて、九尾を執拗に狙った。

そうこうしているうちに、アクセルベントもクリアアーベントも効力が切れて、再び2人は向かい合った。だが、九尾の方が息が上がっていた。

「ハッ！ どうしたガキ！ そんなんじや、俺は倒せないぜ！ もう無理なら、さっさとギブしな！ 楽にあいつらのところに送ってやるよ！」

「……殺す！」

瞬間、九尾は殺意を甦らせて、カードデッキからカードを取り出し、フォクスバイザーの口の部分に入れて、口を閉じた。

『MIND VENT』

『TRICK VENT』

「(?) 2枚だと……(?)」

フォクスバイザーから聞こえてきたのは、2つの電子音。一つはパートナーカードであるマインドベント。そしてもう一つが、シャドゥイリユージョンによって分裂するトリックベント。

2枚使ってくる意図は分からなかったが、迫り来る8体の九尾の前に、考える余裕は消し飛んだ。このままでは数の差で不利になると考えたベルデは、立体駐車場という場所を利用して、車や支柱の陰に隠れながら、搜索の攪乱をした。

「(どこに隠れた……！ そっちが物陰から来るなら！)」

「(この中に本物が1人か……。 なら、こいつで紛れこむか)」

同時に次の行動を選択した2人は新たなカードをベントインする。

『BLAZE VENT』

『COPY VENT』

九尾は両手に形成したブレイズボンバーを、そこら中に点在する車めがけて放ち、引火した車が大爆発を起こした。

だが、周りにいるのは九尾の分身体だけ。肝心のベルデの姿はなかった。分身体を含む九尾は探し回ったが、それらしいものは見つからない。

「なっ……!?？」

「どこへ消えた……」

「そっちにはいないのか」

分身体達が、状況報告の為に一齐に集まったその瞬間、九尾の中の一体が、突然周りの九尾達をフォクセイバーで斬り倒していった。

「お前！」

「まさか！」

「ハッハッハ！ 気づくのが遅かったな！」

分身体が徐々に消滅し、その場に2体しかいなくなった時になって、次々と分身体を斬り倒していた九尾の姿は、ベルデへと戻っていった。ブレイズボンバーが放たれる直前、ベルデは九尾の姿をそっくりコピーし、分身体に紛れ込んでいたのだ。

「さあ、後はお前らのどっちかが本物って事になるよな。まとめて潰してやるよ」

「やれるもんなら」

「やってみろよ！」

2体の九尾は、ベルデに向かって駆け出し、フォクセイバーを振るうが、ベルデの方はまだ余力があるようだ。

「なら、こいつだ」

『SCYTHE VENT』

ベルデが手に持ったのは、レアアイテムの一つである、死神の大鎌を連想させる武器だった。それを見た九尾は仮面の下で目を見開いた。

「！ それは……！」

「中々に便利なアイテムだったぜ。おかげでウィンタープリズンの厄介な魔法も楽に対処できた」

「くっ、そがあ……！」

九尾が猛烈に腹を立てているのも無理はない。ベルデが手にしている武器は、購入イベントの際に九尾が買おうと思っていたものだった。だがスノーホワイト達によって止められ、後一步というところで誰かに買われて、手にする事が出来なくなってしまった。そして皮肉にも、その武器を使って殺そうとした相手がそのアイテムを買い、ウィンタープリズンを窮地に追い込み、そして同じチーム達と共に彼女を殺した。

込み上がる怒りをなるべく抑えながら、九尾は攻めの姿勢に出た。だが大鎌の方がリーチがフォクセイバーよりも長く、その切れ味の良いい刃先を見れば見るほど、うかつに近づく事は困難だと本能的に感じてしまい、一步踏み出せずにいた。

「ハッ！ ビビってばかりじゃ、勝負にならねえよ！」

今度はこっちの番だと言わんばかりに、ベルデが前に出て、大鎌を横に振るった。一体はとっさの判断でしゃがみ込んで回避し、もう一体は避けきれずに、真つ二つに引き裂かれた。引き裂かれた方はガラスが割れたような音と共にその場で消滅した。どうやらベルデが倒したのは分身体のようなようだ。

そのチャンスを逃すまいと、残った九尾がタックルを入れて、ベルデの両手から大鎌を引き離し、遠くに向かって蹴った。ベルデとの取っ組み合いが始まったが、軍配が上がったのは体格の方で上回っているベルデだった。

「オラァー！」

「グフツ……！」

胸のあたりを蹴られ、立ち上がりながら咳き込む九尾を見て、ベルデはニヤリと笑いながら、カードデッキからカードを取り出した。そこには、かつてのパートナーだったルーラのアバター姿が描かれている。

「こいつをくらいな」

『OBEY VENT』

すると、ベルデの手に王笏が現れた。そして王笏を九尾に向け

て、こう言った。

『ベルデの名の下に命じる。九尾よ。動くな』
「！」

すると、九尾の体は石で固められたかのように動けなくなってしまう。パートナーカードによって、ベルデの思うがままに九尾の体は操られてしまったのだ。

「せっかくだからよお。こいつで終わらせてやるよ。あの時と同じようにな」

そう言つてベルデが王笏をかざしながら、空いた左手で取り出したのは、カメレオンの紋章が描かれたカード。

「！」

「あの世で、先生とやらと、仲良くしてな」

『FINAL VENT』

ベルデがバイオバイザーにカードをベントインすると、九尾の後方に透明化していたバイオグリーザが現れ、舌を出すのと同時に、逆立ちしたベルデの足に巻きついた。そして振り子の要領でベルデは、身動きが取れなくなっていた九尾を捕らえ、上空に向かって回転すると、パイロドライバーのように両足を九尾の腕につけて、一気に急降下した。

「これでお前も、脱落だ！」

そして。

轟音と共に、九尾の頭が地面に激突した。九尾は声をあげる事なく、地面に仰向けに横たわった。

必殺技である『デスバニッシュ』が決まり、動きが止まった九尾を見て、ベルデは勝利を確信。肩を竦めた後、喜びに浸った様子で高笑いを始めようとした。

……が、次の瞬間、目の前で倒れていた九尾はガラスが割れた音を
立てながら、消滅した。

ベルデが目の前で起きた現象に困惑したのと、背後から殺気が迫っ
てきたのを感じたのは、ほぼ同時だった。全力で体を捻らせたのと同
時に、フォクセイバーを構えた九尾が縦に振るってきた。フォクセイ
バーはベルデの右腕に直撃し、鮮血がその傷口から飛び散った。
「ナアツ……!?」

「くっ！ 浅いか……！」

直前で回避行動を取らされた事で、完全に息の根を止められなかった九尾は舌打ち混じりに、足払いでベルデを横倒しにして、その左足に片方のフォクセイバーを突き刺した。ベルデの口から初めて絶叫が溢れ出て、血が噴き出た。足からフォクセイバーを抜いて、一旦距離を置く九尾。ベルデは身の危険を感じたのか、撤退しようとして、九尾から遠ざかるように足の痛みを庇いながら駆け出すが、九尾の方が一歩先を行っていた。

「ハアッ！」

九尾の投げたフォクセイバーがベルデの右腕に刺さり、ベルデは倒れこんだ。そこへ九尾が飛びかかり、馬乗りになった。刺さったフォクセイバーは地面に転がり、もう片方のフォクセイバーを構えた九尾は、その先端をベルデの首元に向けた。

馬乗りになった状態では、この後ベルデがどう振り落とそうとしても、先に九尾がベルデの首にフォクセイバーを突き刺す方が早い。完全に九尾の優勢である。こうなってしまうては、ベルデには死を待つばかりだった。

そんな中、ベルデは九尾に問いかけた。

「デメエ……！ 何で生きてやがる……！」

「あんたと同じ手を使っただけだ。あの爆発で俺の姿をコピーした時、俺も動いてたんだ。物陰に隠れ潜んで、油断したところであんたにとどめを刺すってな」

「！ そうか、あの時か……！」

ベルデが九尾達に紛れて襲撃しようと考えていた時には、すでに九尾はこのような事態を想定して、ベルデの対処を分身体に任せて、オリジナルの方は隠れてやり過ごしていたのだ。そして敵の手の内を晒し終えたところで、反撃に打って出た、という事なのだろう。

「だ、だが……！ 何で俺がこう動くと分かってたんだ……！」

「……スノーホワイトの魔法だ」

「ハアッ!?？」

「お前が散々バカにした魔法少女が行使する魔法の前じゃ、俺をどう

倒そうか『困ってる』声なんて、全部聞き取れるんだよ」

刹那、ベルデは最初に九尾がマインドベントを使った意味を察した。スノーホワイトの魔法を応用し、敵の作戦を読み取って対処したのだ。筒抜けになってしまっているのは、如何に仮面ライダーとしてはベテランでもあるベルデとて、どうする事も出来ない。

「(やった……。やっと、この時が来た……。もうこいつは動けない。後は、この手を動かせば……。!)」

完全にチェックメイトだった。九尾はフォクセイバーを突きつけ、ベルデの首元に狙いを定めた。対するベルデの口からは、悔しげな呻きしか聞こえてこない。

「終わりだ……。!」

「!」

これで、オルタナティブやヴェス・ウィンタープリズンを葬った、憎つき悪の塊は息絶え、仇を取れる。もう慈悲の心など、目の前の男には必要ない。ここで仕留める。

そう決めた九尾は、一度深呼吸をしてから、フォクセイバーを両手で握り、ほんの少し引いてから、一気にベルデの首元に向かって突き出した。

そしてその刃先は……。

「この辺りはまだ探してなかったな」

「だいちやん……！ どこにいるの……？」

一方、依然として連絡が取れない九尾を探しに、国道から少し離れた場所にあった、ビルの地下駐車場に足を踏み入れたのは、スノーホワイトとライアだった。国道での惨状は、未だに解決してない為、一刻も早く戻る必要があるのだが、ベルデチームが人助けをそっちのけにして襲いかかり、ラ・ピュセル、ハードゴア・アリス、リュウガが応対している。九尾を呼び戻さなければ、もつと酷い事になると判断した2人は、搜索を続けていた。

『クソツタレが……！ こんな、ところで……！』

「！ 今の声……！」

「どうした？」

「誰かが、この近くで困ってるみたいです……！」

「まさか、九尾がいるのか……？」

今現在2人がいるビルは、国道で起きてる被害を受けてない為、全く別の事件が起きていると見て間違いない。2人は顔を合わせると、一目散に声のした方へと駆け出した。

ようやく地下駐車場へと入り込んだその時、2人の目線の先で、驚くべき光景が。

「！ あれは……！」

「九尾！ それにあの人……！」

2人が見たもの。それはベルデに馬乗りになった九尾が、フォクセイバーをベルデの首元に突き刺そうとしている光景だった。

「（！ ダメだ！ このままでは九尾は……！）」

本当に人を殺してしまう。ライアが声を出すよりも早く、九尾の手は動いた。

「……！」

だが、フォクセイバーの刃先が首に触れるほんの僅かのところで、

手が止まった。

「……ツアー！ ツグ……！」

よく見ると、九尾の両腕は、震えていた。呼吸も荒げている。あともう一押しというところで、九尾の中で何かがセーブしているようだ。

「！俺、は……！俺は……！」

何を迷っているんだよ。

目の前にいるライダーは、俺の尊敬する人を殺した。

だったら俺も、同じ事をすればいいだけじゃないか。

こんな機会、滅多にあるわけじゃないぞ。

さあ、遠慮するなよ。一思いに殺れ。

「ウウ、ウア……！」

頭の中に、自分の声が囁いてくる。こんなところでためらってなんていられない。九尾は首を盛大に横に振り、再びフォクセイバーを突き出そうとする。が……。

「だいちゃん！」

不意に聞こえてきた、パートナーの声を耳にして、手を止めてその方に顔を向ける九尾。涙目のスノーホワイトと、こちらをジッと見つめるライアの姿が、そこにあつた。

「……フンツ！」

だが、その一瞬の隙が、ベルデに体を動かすだけの時間を作つてしまい、力を入れて体を横へ捻り、体勢を崩した九尾は膝をつき、ベルデは倒れこむ前に右足のつま先を、九尾の左のこめかみにぶつけた。脳を揺さぶられたショックで、九尾はそのままうつ伏せに倒れこんだ。

「九尾！」

スノーホワイトとライアは慌てて九尾に駆け寄り、体を抱き起こし

た。意識はあるが、体は未だに震えている。

「……どうした。何故俺を殺そうとしなかった」

不意にベルデが、ヨロヨロと立ち上がりながら、九尾を見下すように睨みつけた。そして、吐き棄てるように呟いた。

「お前、やっぱり見掛け倒しだったな。所詮、お前も落ちこぼれのライダーだったわけだ」

「九尾の事、悪く言わないでよー！」

これを聞いたスノーホワイトは、彼女なりに鋭い視線をベルデにぶつけた。それだけ九尾を罵ったベルデに怒りを覚えたのだろう。彼女なこれほどにまで怒ったのは、シザースがねむりんの魔法を悪用している事を知って以来だろう。

当然ライアもスノーホワイトの怒りに賛同した。

「ベルデ。お前は随分と九尾を罵っているが、破滅に追いやられる寸前だった事を自覚してないのか？ 俺の占い通りだったら、お前ももう、とつくに九尾の手で破滅していたんだぞ」

「……ほお。だが、結果はこのザマだ」

ベルデは手を広げながら、平然と呟いた。

「なあ。ライダーも魔法少女も、自らの弱点を相手にさらけ出しちまったら、どうなるか分かるか？」

「……！」

「そうさ。お前はもう、他の奴らにとっての、美味しい獲物って事だ。そうになったらもう、その獲物は破滅するしか無いんだよ」

ベルデが九尾を指差したその瞬間、ライアが駆け足でベルデにタックルを仕掛け、その頬や傷口を思いっきり殴った。傷口を痛めつけられた事で、ベルデは後ずさった。

「テメエ……！」

「ライアさん！」

「……呆れたな。お前は、九尾によって運命を変えられた事にまだ気づいていないようだな」

「何……？」

「俺にはお前が破滅する運命が見えていた。だが実際は、九尾が自分

の手で運命を変えた。だから、お前は殺されずに済んだんだ」

「運命ねえ……。そんなもん、力でねじ伏せればどうという事は無いだろ。この世界は、力を持つ奴らしか生き残れない。力の使い方に迷ってるようじゃあ、生きてる意味なんて無いだろ」

「！」

スノーホワイトは目を見開き、思わず自分の手を見つめた。

その一方で、ライアは懐からコインを取り出し、上に放り投げた。

「何のつもりだ」

「お前のこの先の運命を、占つてるところだ」

そしてコインを掴み、裏面をジッと見つめた後、ベルデに占いの結果を告げた。

「ここから退くのはお前の勝手だが、その先には、何も残らない」

「ああ？」

「破滅しか残らない、という事だ」

「……脅しのつもりか」

「俺の占いは当たる。絶対だ。……だが、お前が自分の手で運命を変えられる力があるなら、外れる事もあるかもしれないがな」

「……フン。この借りはいつか返させてもらうぜ」

そう言っつてベルデは、怪我をした足を引きずりながら、3人に背を向けて立体駐車場を後にした。その後ろ姿を、ライアは悲しげな目で見つめている事に、誰も気づいていない。

「……もつとも、お前にはもう、運命に抗えるだけの力は残っていないようだがな」

そう呟いてから、ライアは九尾に歩み寄り、膝をついて口を開いた。「最近、お前の挙動がおかしいとは思っていたが、全てはこれの為だったんだな」

「……」

「なんてバカな真似を……と怒りたいところだが、お前が自分の手で踏みとどまれたのなら、俺も何も言わない。お前にも、運命を変える力があつたという事だ」

「そ、そうだよ！ だってだいちゃん、あれだけ酷い事したベルデを殺

79. 激化の果てに……

「くっ……！ てこずらせやがって……！」

ミラーワールドを出て、立体駐車場から離れたベルデは右足を引きずりながら、出口付近まで足を運んでいた。辺りからはサイレンが至る所で鳴り響いているが、今のベルデに外の様子を確認するだけの余裕はなかった。

ベルデの脳裏には、先ほどライアから告げられた宣告が焼き付いている。

「破滅する未来だと……？ ふぎけやがって。運命だか何だか知らねえが、力を手にしている今の俺が何かに負けるなんて事はもう、あつてはならねえんだよ……！」

自分にそう言い聞かせながら1歩ずつ前へ進むベルデだったが、唐突に立ち止まった。目の前に、胸の大きい水着姿の少女がいたからだ。

「スイムスイム……！」

「……」

水着姿の魔法少女『スイムスイム』は、声をかけられた事で顔をベルデに向ける。龍騎サブイブとトップスピードサブイブからの攻撃による直撃を避けるために逃亡していたのだが、無我夢中で逃げていた為、今いる場所がどこなのか把握出来ていなかったようだ。

「何でここにいやがる……！ 他の奴らはどうした！」

「……龍騎とトップスピードの攻撃を避けてて、気づいたらここにいた。他のみんなは、国道で他の魔法少女や仮面ライダーを襲ってる」

「何……？ 誰がそんな事を命じた」

「リーダーの命令」

「あ……？ 俺は何も」

「……私が、手下達に言った。今なら、一気にやつつけれるから」

スイムスイムは無表情のまま、ベルデに平然と回答するが、ベルデの方は内心ご立腹だった。

「おい……！ 俺の指示もないくせに勝手に動かしやがったのか！

テメエはルーラのようなリーダーになろうとしてたんだろ。だって
ら先ずは俺を無視して勝手に指示を出すな！ お前が仕切った所で
まともりが無くなるに決まってるだろ、それにも気付かねえクズなの
かテメエは！」

「……」

ベルデからの罵声を受けても、スイムスイムは平然としている。聞
こえているのか定かではないが、無反応な所がベルデをよりイラつか
せた。

「……フンツ。まあ良い。向こうでドンパチやってるなら、ついて
行ってやるよ。どう動くかは俺が指示を出す。リーダーの言う事は
絶対だ。力の差を分かせてやるよ。お前なんかより、俺が指示した
方がずっとやりやすいだろうよ」

ベルデがここまで苛立っているのは、九尾に最後の最後で逆転を許
してしまい、絶命寸前まで追いやられたことが要因と見られる。自分
の力の強さを証明する為にも、スイムスイムに見せつける必要がある
と考えたベルデは、スイムスイムを通り越して、国道がある方へと向
かおうとする。

と、その時、背後から声がかげられた。

「……ルーラは、2人もいらない」

「アンツ？」

不意にベルデが立ち止まった、まさにその瞬間。

ベルデの腹から、銀色の鋭い刃が突き出たのを、ベルデ本人が確認した。

「ツグ、ガバツ……!?」

背後から貫かれた事で、ベルデの前方に自身の血が溢れ出て、地面に落ちた。やがて刃は引き抜かれて、傷口や口から多量の出血が起き、ベルデは震えながら振り向いた。

「て、テメエ……！ 何の、真似、ダア……！」

ベルデの殺気に満ちた鋭い視線は、血で染まったルーラを手に持つスイムスイムの姿が。スイムスイムはベルデが振り返ったタイミングで体を一捻りした後、ベルデに向かって斜めにルーラを振るった。衝撃が装甲を貫通して、再び血が噴き出た。全身に痛みと熱さが襲いかかり、ベルデは片膝をついた。

「……忘れてた。……あなたがリーダーなら、あなたはルーラと同じ。でも、それでは私は、ルーラにずっとなれなくなる」

「ハアツ……!?」

「私はルーラになりたい。ルーラは可愛くて、賢くて、気高くて、優しくて、カッコ良い。……キャンディーを奪ったあの時だって、ルーラ

は独り占めしなかった。だからルーラが好き。だからルーラの言う事は絶対」

「お、前……！……！　そこまでルーラを、執拗に……！　ストーカーじゃねえかよ……！……！」

ベルデが血を吐きながら眩く中、スイムスイムはゆつくりとベルデに歩み寄った。

「……でも、そこが甘かった。それだけじゃあ、ルーラが自ら打ち立てた理想像には、いつまでも追いつけない。だから私が理想のルーラになるの。ルーラの為に」

「ルーラルーラってなあ……！　しつげえんだよ……！　こんな事してどうなるか分かってんのかテメエは……！　大体なあ、ルーラはもう死んだんだよ！　そんな奴気にしてるとか、どこまで能無しなんだあ……！」

菌ぎしりしながらスイムスイムを睨みつけるベルデ。すると、スイムスイムは倒れているベルデの前に立つと、膝をついて、ベルデを見下ろしながら、血に染まった手をとった。

「大丈夫。ルーラは死なない」

「アア………!?？」

その時、ベルデは見てしまった。スイムスイムがほんの少しではあるが、とろけたような表情を見せ、その瞳にベルデを映すことなく、うっすらと笑みを浮かべていたのを。

「だって、私がルーラになるから。だからルーラはずっと生きてる。あなたがなれなかった本物のルーラに、私は必ずなってみせる」

「て、メエ………！」

刹那、ベルデによぎったのは自分の脱落。ルーラを指す魔法少女の手によって、ルーラの名を出しておけば自由に動かせる駒によって、自分は殺される。

そしてスイムスイムは、手に持っているルーラの刃先を、ベルデの首元につけてから、静かにこう言った。

「今まで」教授ありがとう。これからは、私がルーラとして、みんなの為に、頑張るから。だから、あなたはもういらない」

「こ、のお……！ スイム、スイムウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

そして。

スイムスイムが右腕を一回振るうと同時に、その身に血を浴びた。しばらくして、弱々しい呻き声と共にベルデの変身が解かれ、スーツ姿の高見沢の姿が露わとなった。斬られた首からの出血は勢いをなくし、やがて完全に物言わぬ肉塊と化した。

人の形をした肉塊が静かになったところで、スイムスイムは立ち上がり、近くに転がり落ちた、カメレオンの紋章が刻まれたカードデッキから、1枚のカードを取り出した。レアアイテムの『サイズベント』である。

と、そこへパートナーのアビスが合流を果たした。アビスは倒れこむ高見沢に一度目を通してから、スイムスイムに顔を向ける。スイムスイムは手にしたカードをアビスに差し出した。

「……これは、あなたが持つてて。私には、これがあれば充分だから」「分かった」

アビスはカードを受け取ると、自らのカードデッキに仕舞い込む。スイムスイムは高見沢を引きずるように引っ張って、近くの壁際に座らせた後、一礼してから、アビスと共にチームメイトがいる国道へと向かっていった。

物言わぬ死体と化した高見沢の全身は、赤黒い液体で染まっていた。

そして国道では、炎や煙が充満する中でもライダーと魔法少女が激しく火花を散らす修羅場となっていた。

「ウオオオオオオオ！」

「緩いぬるい。前もそうだったけど、やっぱ大した事ないねお前。戦うのに躊躇ってるみたいだけどき。俺はお前と違って、トドメを刺すのに迷ったりしないよ」

「うるさいー！」

ラ・ピュセルはそう一喝した後、接近して斬りかかろうとするが、ガイのメタルホーンによって受け止められてしまう。彼らの近くでは、ハードゴア・アリスとタイガが、黒いドラグセイバーとデストクロウを打ち合っている。

ちようどその時、九尾、スノーホワイト、ライアが戦場と化した舞台上に姿を現した。九尾を発見し、ここまでの事情を説明し終えた一同は、ラ・ピュセル達の所へ戻ってきたのだ。とはいえ九尾も、ベルデとの戦闘で体力をほぼ使い果たしており、現在はスノーホワイトに支えられながら歩いている。スノーホワイトは目の前で加速する戦いの模様に啞然としていた。

「そんな……！ まだ、みんな戦ってるの……?!?!」

「ラ・ピュセルが危ないな……。スノーホワイト、九尾を頼む。俺はラ・ピュセルを助けに行く」

「ら、ライアさん！」

『SWING VENT』

ライアはスノーホワイトに九尾を任せた後、エビルウィップを召喚して駆け出した。

一方、ラ・ピュセルは一旦距離を置いて、手に持っていた剣をより肥大化させようと試みるが、それを見たガイがカードを取り出してベ

ントインした。

『CONFINE VENT』

「! またか……!」

「へへッ。これでその剣も役立たずだね」

魔法を打ち消され、元のサイズに戻った剣を握るラ・ピュセルに向かつて斬りかかろうと、ガイがせせら笑いながら突撃する。が、その間に割って入ってきたのはライアだった。エビルウィップを振るってガイを弾き飛ばすと、ラ・ピュセルの隣に立った。

「大丈夫かラ・ピュセル!」

「ライア! 九尾の方は!?」

「ああ、無事だ。それよりも、早くこの状況を何とかしないとな」

「へえ。2人がかりかあ。ま、いいよ。そいつ全然相手にならないし。これぐらいでちようど良いかも」

「ナニイ……! バカにするのも良い加減にしろ!」

「落ち着けラ・ピュセル!」

ライアの制止を振り切つて、ラ・ピュセルは怒りの形相でガイに斬りかかる。だが、防御面なら格段上のガイに、ライアの援護を加えても攻撃がほとんど通じていない。

「ラ・ピュセル、ライア……!」

「くっ……!」

すると、九尾がスノーホワイトを突き放し、前に一歩踏み出そうとした。

「九尾!? どこに行くの!」

「戦うに、決まってるだろ……! 俺にはもう、それしか無いんだあ!」

「九尾い!」

スノーホワイトが止めるよりも早く、九尾はラ・ピュセルとライアを追い抜いてガイに飛びかかった。

「おっと。今度は3人かよ」

「九尾!」

「九尾! 今までどこに……!」

「んな事より、前に集中しろよ！」

そう言つて九尾は再び突撃を試みた。が、さすがに見てられないと思つたのか、それまでガイの後ろに隠れ潜んでいた、たまが九尾にしがみついて、進行を阻止した。

「……邪魔だ！」

「ヒャア!?？」

九尾は舌打ちし、たまに向かつて拳を振るつた。たまは悲鳴をあげながら逃げ惑つた。

「だいちゃん……!! やめてえ！」

「ウオオオオオオオ！」

スノーホワイトの叫びは、パートナーには届いていないようだ。否、届いていないのは他の面々も同じだろう。

「こんのお！」

「ハッ！」

特にミナエルは、リュウガを殺したい一心で、両手につけたデストクローをめちやくちやに振り回している。こんな状況では、説得など皆無に等しい。

「ダアッ！」

すると、ミナエルに向かつて横手から飛び蹴りを放ち、吹き飛ばす影が。それは、スノーホワイト達にとって何度も見慣れた姿だった。

「龍騎さん！」

「スノーホワイト！ 良かった、無事で……！」

スイムスイムとアビスを追い払ってから時間が経つた事で、サブイブが解けて元の姿に戻っていた龍騎が、スノーホワイトのみならず辺りを見渡していたその時、リュウガの姿が目に入って、思わず凝視した。それもそうだろう。初めて見るライダーの姿が、色違いというだけでほぼ瓜ふたつなのだから。

「お前、何で俺と同じ……!?？」

「……お前が龍騎だな。なるほど、見れば見るほど俺と同じだ」

「どうなつてんだよ……」

「オラア！」

だが、龍騎が疑問を解決する事はなかった。ミナエルが怒り狂った形相で、攻撃を仕掛けてきたからだ。

「ミナエル！ もうやめろ！ 今は戦ってる場合じゃないだろ！」

「うるさい！ もうお前の説教は聞き飽きたんだよ！ 大体、いつつもあたしの邪魔ばかりしやがって！」

「……やかましいのはお前も同じだ。お前も妹と同じ所へ送ってやるうか」

リュウガがそっけなく呟いて歩き出そうとしたが、それを遮るかのように龍騎の叫びがこだました。

「いつまで、こんな戦いを続けなきゃならないんだよ……！ こんなのが運命だなんて、俺は絶対認めないからな！」

「何わけの分かんない事言ってるんだよ！ ユナのいない世界なんて、もういらない！ 戦ってお前らも、みんなまとめてぶつ殺してやる！」

ミナエルの復讐心は、想像以上に煮え滾っており、最早戦う事以外に解決策は望めないようだ。

「結局こうなるのかよ……！」

「だったらさっさと変われ龍騎！」

すると、龍騎の前から追ってきたナイトが降り立った。

「ナイト！ でも……！」

「戦ってこいつらを屈服させる事では、もう分かり合えるはずも無い！」

「調子に乗るなあ！」

逆上したミナエルがナイトに襲いかかるが、ナイトの剣捌きには全く通用しない。

「スノーホワイト！」

と、そこへスノーホワイトの元にトップスピードとリップルが駆け寄ってきた。トップスピードもリップルやナイトと合流した直後は変身を解いていたが、まだ事態は終息を迎えていない事から、変身して現場に向かう事にした。リップルはこの時、トップスピードの変身者であるつばめやお腹の胎児を気遣ってか、彼女だけの撤退を命じた

が、本人の意地を通す姿勢に根負けし、「何があっても前に出るな」と約束する事を条件に、同行を許可した。故に現在、リップルはトツプスピードに対してかなり過保護になっているようだ。

「！ トツプスピードさん、リップルさん！」

「とんでもねえ事になっちまったな……」

「これも全部、カラミティ・メアリの仕業だ……！ 私と龍騎への嫌がらせが目的だった……！」

「！ やっぱり……」

出来ることなら外れて欲しかった、同じ魔法少女によって今回の事件が引き起こされた、という事実。スノーホワイトは唇を噛み締めた。

「うわっ!?？」

すると、龍騎が呻き声をあげて倒れこむ姿が目映った。よく見ると、ミナエルの両脇にアビスとスイムスイムの姿があった。龍騎達と交戦してから行方をくらましていたが、チームメイトの援護に駆けつけたのだろう。

「……！ あいつら……！」

2人の姿を見た瞬間、リップルの頭に血が上った。それもそのはず。現れた2人は、トツプスピードを、仲間を殺そうとした張本人。後で聞いた事情からして、龍騎がいなければ確実に殺されていただろうと思うだけに、リップルが戦いに向く理由としては、十分だった。

「……トツプスピード。ここにいて！」

「な!?？ リップル、お前……！」

「スノーホワイト、トツプスピードを代わりに守って！」

「えっ!?？ リップルさん!?？」

「……あいつらは、私が殺る！」

トツプスピードが肩を掴むよりも早く、リップルは駆け出して、咆哮と共にスイムスイムに短刀で斬りかかった。スイムスイムはルーラを使って短刀を受け止める。よく見るとルーラの刃先に血が付着しているのが見えたが、そんな事はどうでも良かったのだろう。リップルはスイムスイムを睨みつけながら叫ぶ。

「お前……！ どうして、トップスピードを殺そうとした……！」

「……倒すべき相手だったから。あの人を倒せば、アビス達はいなくならない。ルーラだったらきつとそうする」

「お前エエエツ……！」

正当な理由も無しにトップスピードに手をかけようとした事に、リップルは腹を立てて、懐から取り出した手裏剣をスイムスイムに向かって投げつけた。が、追尾機能もあり、確実に命中したはずの手裏剣は、彼女の体をすり抜けていった。

「!?？」

血の一滴さえ流れない事に驚きながらも短刀を振り回してダメーヂを与えていこうとするが、スイムスイムには傷一つつかない。魔法の類かと推測したものの、打開策が浮かばず、リップルは舌打ちした。「お、おい！ やめろよ！」

「リップルさん！ ダメ……！」

トップスピードも説得に加わるが、全く応じる気配がない。

すると、遂にスノーホワイトにも限界が来たのか、全身を震わせながら、辺りを見渡した。あちこちに炎上したままの乗用車やトラック、そして無数に転がり落ちている、手遅れと化した死体。それらを放置して、戦う事だけに集中する一同を見ているうちに、恐怖よりも怒りを覚えたのだろう。

「どうしてこうなるの……!?？ 戦ってる場合じゃないのに……！」

こういう時だからこそ、みんなで協力して助け合うのが私達じゃないの!?？」

「それは果たして正論と言えるのでしょうか？」

「……！」

不意に背後から声をかけられ、振り向くスノーホワイトとトップスピード。そこには、ここまで街やライダーと魔法少女同士の争いを見物していた、クラムベリーとオーデインの姿が。

「！ クラムベリーに、オーデインまで……！」

2人の姿を遠目で確認していたラ・ピュセルは、全身を震わせた。それは、スノーホワイトとは違って恐怖から成り立つものであった。

変身前の、自身の足を再起不能寸前まで追いやった、事の元凶を作り出した人物達であり、出来るなら2度と相手にしたくない者達を目撃して、再びあの時の戦いで感じた恐怖が甦りつつあるようだ。

一方で、ラ・ピュセルの方には興味がないのか、2人は淡々とスノーホワイトとトップスピードに語りかけた。

「ライダーも魔法少女も、自分の意思で戦いをしている。それは自分の求めるものの為だ。それを止める権利など、誰にもないのだよ」

「そんな……！ そんなの間違つて……！」

「話はこれくらいにしておいて、せつかくこれだけ集まったのですから、私達もここから混ざる事にしましょう。さあ、あなた達にも戦うだけの力がありますから、相手になつて差し上げますよ。私の目的の為に」

「……！」

クラムベリーはマジカルフォンをタップして、ゴルトセイバーを両手に持つと、ゆつくりと2人に近づいてくる。トップスピードが身構え、スノーホワイトが納得いかないような表情を浮かべて固まっている。

が、そこへさらなる乱入者が姿を現す事になるとは、誰も予想だにしなかった。

「ハッハッハ！」

「なっ……！！ 王蛇！」

「あたしの事も忘れてもらつちやあ困るなあ」

ベノサーベルを振るつて現れた王蛇に加えて、銃火器を構えながら歩み寄るカラミティ・メアリの姿が。よもやこのタイミングで、会つてはならない人物達と鉢合わせする事になり、スノーホワイトはトップスピードと共に右往左往していた。

「まだ戦いは終わつちやいないんだ。相手してくれよ」

「……私を相手にしますか。それでも一応協力を申し付けた身なんですが」

「ハッ。んなのもう知つたこつちやないね。龍騎もリップルもあんな調子じゃ、まともに相手してくれそうにないから、あんだで我慢して

やるよ！」

「……ガツカリさせないでくださいね」

カラミティ・メアリとクラムベリー。新たな対戦カードが出来上がる中、王蛇とオーデインの方でも戦闘がすでに開始されていた。

『SWING VENT』

途中でベノサーベルから、エビルウィップに持ち替えてオーデインに叩きつけようとするが、オーデインは素早く王蛇の背後を取り、叩きながら、格の違いを見せつけようとした。だが王蛇はお構いなしに攻撃を続けている。その訳を、本人が直接口で語った。

「まだ抗うか。やはりお前は戦う事に生き甲斐を感じているようだな」

「……ハッ。ライダーつてのは良いよなあ。戦えば戦うほど、イライラが無くなる。俺をここまで楽しませてくれたんだからなあ！」

「そいつは良かったな」

『SHOOT VENT』

「……アア？」

不意に、王蛇へ話しかける声と、ベントインした音が鳴り響き、近くにいた一同が目を向けると、ギガランチャーを構えるゾルダの姿が。ここまでほとんど人前に姿を見せなかった仮面ライダーの登場に、何人かは目を見開く。そしてゾルダの放った砲弾は、王蛇の近くに着弾し、王蛇は地面を転がった。

「お前……！」

「本当はもうちよつと高みの見物と洒落込んで、潰しあってくれと助かったんだけどさ。……もうそんなのどうでも良くなった。脱落する人数も限られてるんだし、ここら辺で潰すのもアリかなって」

「ゾルダさん……！」

「……イラつかせる奴だ。俺に喰われたいのか？」

「喰われるのはお前の方だよ王蛇。……いや、浅倉 陸！」

刹那、ゾルダのその言葉を聞いて、何人かが動きを止めて、王蛇……もとい浅倉に注目した。

「浅倉つて……！ 嘘だろ!? まさか、あの脱獄犯の……！」

「王蛇が……！ 昇一を殺したあの……！」

「……！」

「へえ。でもそれなら納得かも。ますます面白くなってきたじゃん！」

「あ、あわわ……！」

浅倉の名を聞いた瞬間、龍騎とトップスピードは全身が震え上がった。龍騎にとっては、元カノだったファムの変身者である美華の姉を、トップスピードにとってははかつての夫だった昇一を殺害した男が目の前に仮面ライダーとして立ちはだかっている。その事実、ハンマーに殴られたような衝撃を覚えさせた。

否、この時ライアもまた、人知れず拳を握りしめている事に、誰も気づいていない。

すると、王蛇が何かを察し、不意に高笑いを始めた。

「ハッハッハア！」

「な、何だ……？」

「そうか。お前、どこかで会ったような気がするとは思ってたが、あの役立たずの弁護士だったか。そうだろ北岡ア！」

「ご明察。ようやく分かったよ。お前が脱獄したって聞いて以来、世間に顔を出さなくなったわけが。本当に皮肉だよな。こういうのつてさ」

「お前がライダーだったなら、話は早い！ 良い機会だ。ここでお前を潰してやるよお！」

「悪いけど、今の俺、結構イラついてるんだよね。だからさ。早めに決着つけさせてもらうよ。……みんなまとめて、吹き飛ばしてな」

「なっ……！！？」

ゾルダの冷たい呟きに反応するトップスピード。すると上空から、彼のパートナーであるマジカロイド44が足裏のブースターから火を噴かせながら、側に着地して語りかけた。

「周辺を見回してみまシタが、近くに生きてる人はいなそうデス。思いつきり、派手にやっちゃって良いデスよ」

「あいよ。そういうわけだからさ。まとめて消えな」

『FINAL VENT』

ゾルダがマグナバイザーにカードをベントインさせると、目の前に契約モンスターであるマグナギガが姿を現した。

「ちよ、マズイって……！」

「や、やめてー！」

「やめろと言われマシテも、もう止まりませんよ」

マジカロイドも、肩を竦めながらスノーホワイト達の説得を反故した。ゾルダがマグナバイザーをマグナギガの背中に接続させると、マグナギガの表面にあつた数多くの銃弾や銃口が、龍騎達に向けられた。

「や、ヤバイってー！」

龍騎が慌てて逃げ出そうとしたその時だった。

「な、何が起きてるの……！」

「！ 今のって……！！ 令子さん！」

『GUARD VENT』

声のした方を振り向くと、炎上している車を一台挟んだ先に、検問をかくぐり、現地に取材をしに来た令子の姿が。このままでは、ゾルダのファイナルベントに巻き込まれて、一般人の令子は無事では済まない。龍騎は迷わずドラグシールドを構えて令子に向かってダツシュした。

「危ない！ 伏せてー！」

「えっ……」

声のした方を振り向く令子。

そして仮面ライダーや魔法少女達も、目の前の脅威を察して、各々が行動を開始した。

「ヒイイイ……！！」

「……！！」

「クソオ！」

たまはとつさに魔法で形成した穴に飛び込み、アビスとタイガもその中へ。スイムスイムは全身を道路に沈み込ませて、回避する事に。ミナエルは透明外套を被ると、ある地点に向かって飛び込んだ。

「！ トップスピード！」

リップルは全速力でトップスピードの元に向かいながら、マジカルフォンをタップして背中にウイングウォールを羽織り、トップスピードに覆い被さった。トップスピードは訳もわからぬまま、呻き声と共に地面に倒れた。

「くっ……！」

『GUARD VENT』

『COPY VENT』

続けて九尾とリュウガがカードをベントインし、九尾の腰から9本の尻尾を模したフォクステールが生えて、とっさにスノーホワイトに抱きついて2人まとめてその全身を尾が閉じ込めた。リュウガも黒いドラグシールドを構えており、ライアはコピーしたフォクステールを使い、近くにいたナイトとラ・ピュセルも巻き込んで守りに徹した。

クラムベリーとオーデインも、ゾルダのしようとする事を察して後退し、王蛇とカラミティ・メアリは、龍騎達がいた方へ飛び退いた。

「無駄だ」

ゾルダが一言そう呟くと同時に、トリガーは引かれ、マグナギガからの一斉射撃が、王蛇達に襲いかかる。

『エンドオブワールド』が、国道にあった車や死体をもまとめて容赦なく薙ぎ払い、大爆発と共に辺り一面に悲鳴が響き渡った。

国道で大爆発が起こった瞬間を、一般人に紛れて、OREジャーナルの大久保や島田はしつかりとその目に焼き付けていた。警察官も含め、一同は軽くパニック状態に陥っていた。

「な、何だよアレ……!?? もうテロってレベルじゃねえぞ!??」

「凄い威力……!」

「令子……城戸……! お前ら無事でいてくれよ……!」

大久保は、あれから1度も連絡が取れなくなっている正史や令子の安否を、爆破地点から遠く離れた位置でただ祈るばかりだった。

「う、グウ……」

「ハアツ、ハアツ……！」

ようやく辺りに静けさが戻り、顔を上げた九尾とスノーホワイトは、荒廃した景色に愕然としていた。ちらほらと炎がくすぶっているが、ほとんど消し飛んだようにも見える。よく見ると近くには、腕や足だけの死体が転々と転がっている。エンドオブワールドの影響で、ちぎれ飛んだのかもしれない。

遠くの方では、龍騎が令子に覆い被さっていた。令子の方はエンドオブワールドの衝撃で気絶しているが、外傷は見当たらない。

「！ アリス！ 大丈夫!?？」

ふと見ると、近くにいたハードゴア・アリスが服についた埃を払っていた。が、右腕は爆発に巻き込まれたからか、引きちぎれており、近くに転がり落ちていた。スノーホワイトの不安げな目線に気づいたのか、アリスは右腕を拾って、ボソボソと口を開いた。

「……大丈夫、です。これくらいなら、すぐに、元に戻ります」

「そ、そっか……」

アリスの魔法が何なのかを思い出したスノーホワイトはホツとした。すぐそばにはリュウガも無事な様子で歩み寄ってくるのが見えた。一方、近くにいたナイト、ライア、ラ・ピュセルも起き上がり、リップルとトップスピードの所へ駆け寄った。

「うぐっ……！」

「お、おいリップル！ しっかりしろ！」

「だ、大丈夫……！ それより、トップスピードの方こそ、怪我してないよな……！」

「お、俺は平気だけど」

「本当なんだろうな……！」

「いやだから大丈夫だって。お前にこうして守ってもらったんだから」

トップスピードの言う通り、彼女は無傷だったが、リップルの方はエンドオブワールドによる爆風をウィングウオール越しに直に受けた為、痛みが全身を貫くほどに広がっていた。が、トップスピードを守る為ならば、と言いたげに、リップルはようやくホツと一息ついて、

座り込んだ。

「へえ、まだ生きてたのか」

ゾルダが、リップル達の姿を確認すると、声をかけた。ライアはゾルダをすぐに咎める。

「なんて危ない真似をしてくれるんだ。王蛇だけならともかく、俺達まで巻き込むな」

「俺はこういうごちゃごちゃした戦いは好きじゃないんでね」

「そういうわけデス」

そう言つてゾルダとマジカロイドは背中を向けて立ち去ろうとしたが、不意に何かの気配を察して、前方に向き直った。

クラムベリーとオーデインの姿はなく、エンドオブワールドが発動する前に立ち去ったようだ。

そして、穴に隠れていたアビス、タイガ、たまも顔を出した。

「う、ウウ……。みんな、大丈夫……?」

「ああ、何とかな」

「……あれ!? ミナちゃんは?」

「透明になつて、どこかに隠れたみたい」

タイガがそう説明し、たまは周囲を見渡した。その時、たまの目にパートナーの姿が映った。あれだけの一斉射撃が炸裂した中でも、ガイはその場に立っていたのだ。

「が、ガイ! 良かった、大丈夫だっ」

が、次の瞬間、たまは言葉を失った。一見突っ立っているようにも見えたのだが、そうではない。

前のめりに倒れたガイの背後には、全くもって無傷の王蛇とカラミティ・メアリの姿があった。

そう。

ガイは耐えたのではなく、向かってこられた王蛇とカラミティ・メアリによって、強制的に盾の役割を担わされたのだ。

「ガイ！」

「……フウ。あたしに対抗して銃撃を仕掛けるとは、味な真似をしてくれたねえ。けどまあ、ありがとよ。ガードベントさん」

カラミティ・メアリが笑いながらガイにそう言うと、ガイが地面に

手をつけて、ヨロヨロと起き上がりながら、2人を睨みつけた。

「お、お前ら……！俺が、ゲームを、面白くして、やったのに……！」

「……アア？」

王蛇は首を鳴らして、ガイを指差しながらこう言った。

「近くにいた、お前が悪い」

「……あ、の、さあ」

そう呟くガイは、明らかに苛立っている。

「ゲームを、そうやって、白けさせてんじやねえよお！」

ガイはとつさに王蛇に殴りかかったが、逆に殴り飛ばされて、地面を転がった。その様子を見たカラミティ・メアリが、被っていたテンガロンハットをクイッと上げてから、肩を竦めてガイに近づいた。

「口では分かってくせに、いざとなったらその反応。なら、やつぱり体に分からせてやらないと、いけないようだねえ。冥土の土産に、3つ良いことを教えといてやるよ」

メアリが四次元袋から取り出したのは、手入れが施されているショットガン。それを先ずガイの右肩に向けると、引き金を躊躇なく引いた。

「カラミティ・メアリに逆らうな」

「グアツ!?？」

魔法で強化されたショットガンの威力は、至近距離で撃ち込まれている事もあって、防御力の高いガイの装甲を貫き、右肩にどす黒い穴が開いて、血が噴き出た。そして1発撃った後はスライドして弾を装填し、次は左足へ。

「カラミティ・メア리를煩わせるな」

「アグツ……!?？」

左足にも、同じように穴が開き、ガイは片膝をついた。そしてメアリはガイの目の前に立ち、銃口をガイのど真ん中に当てると、ニヤツきながら口を開いた。

「カラミティ・メア리를、ムカつかせるな」

そして引き金は引かれ、ガイの中心部を弾丸が貫き、ガイは血を吐きながら、後方によるめいた。ポツカリと空いた穴からは血が流れ落

背けた。

轟音が鳴り止み、煙がモクモクと上がっていた地点に目をこらす一同。ガイがどうなってしまったのかを確認するためだったが、ようやく煙が晴れたところで、彼らは確認しようとした行為を後悔する事に。

みれば、先ほどガイがいた地点には、下半身だけの男性のものらしき肉塊が、仰向けに転がっていたのだ。腰から上、つまり胴体や頭部は爆発によって消し飛んでおり、下半身からは腸や臓器が零れ落ちて、その下半身を中心に、血の海が広がりつつあった。

やがて、パートナーの叫びとも悲鳴とも泣き声ともつかない声が、九尾達の耳に入り、スノーホワイトは膝をつき、胃の中にあつたものが全て吐き出され、地面にぶちまけられた。九尾らも、あまりにも無残な芝浦の最後を目の当たりにし、その場から動けない。

だが1人だけ、龍騎だけは王蛇とカラミティ・メアリを睨みつけながら口を開いた。

「お、お前ら、何でこんな……!」

「おいおい。何を今更」

「ハハッ。こういうもんなんだろう？ 戦いつてのは」

違うか？

そう言いたげな目線を龍騎に向ける2人。メアリは鼻で笑いながら、芝浦に歩み寄り、近くに落ちていた、灰色のカードデッキを拾うと、中にあつたカードをすべて抜き出して確認した。

「せっかくだ。戦利品つて事でもらつてくか。どうせあたしには使えそうにないけど」

「や、やめ……!」

「へえ。まだ使っていないアイテムがあるじゃないか。こいつをもらつてく事にするよ。ほら、使いな」

「め、メタルグラス!」

メアリが手に取った、ガイが購入したレアアイテムの『コントラクト』を王蛇に投げ渡そうとするが、そうはさせまいと、たまがメタルグラスを呼び寄せ、妨害した。

「何の真似だい」

「さ、触らないで、ください……！ それは、ガイの……！」

「いちいちムカつかせる犬が。黙らせてやる」

「危ない！」

そう言つてたまに向けてシヨットガンを撃つが、龍騎がとつきにたまを押し倒す事で直撃は避けられた。が、その隙にメアリはコントラクトのカードを王蛇に渡し、王蛇はそのカードを手に取つて眺めていた。

「大丈夫?!？」

「は、はい……！」

龍騎はたまの無事を確認すると、起き上がつて今一度2人を睨んだ。が、王蛇は臆する事なく龍騎に向かって駆け出し、殴りかかった。「ハッハッハア！ せつかくこれだけライダーも魔法少女も集まつたんだ！ もっと楽しませろよお！」

「お前ら、何も感じないのか?!？ あんな簡単に、人の命を奪つて、パートナーを悲しませて……！ 何も……！」

龍騎は王蛇の猛攻をかわしながらも2人に向けて怒鳴り散らす。2人はそれに応じる事はなかった。

「答えろよ！」

「オオ、これだあ……！ この感じだ！これだけでも、ライダーになつた価値は充分にある！」

「なあ、正義の味方さん。大体こうなったのも、全部あんたやりツプルのせいだつて、まだ気づかないのかい？」

「何?!？」

「あんたがさつきとあたしらに跪いてさえいれば、こんな騒ぎも起こらなかつたわけだし、ガイも他の奴らも死ななかつた。全部、お前らが悪いに決まつてんだらうよ！ アッハッハ！」

「カラミティ・メアリ……！ 王蛇……！」

メアリの悪びれた様子もない発言に、九尾は拳を固め、殺意を込めた目線を向けて前に出ようとするが、そこへ聞こえてきたのは、龍騎による今までに聞いた事のないぐらいの怒声だった。

「ぎけんなあ！ お前ら、最低だ！ 最低の仮面ライダーに、最低の魔法少女だ！ お前らだけは、絶対に……！」

「最低、ねえ。あんたさ。まだ自分の立場理解してないのかい？ いい加減口を閉じたら？」

「アア、イラついてきたなあ……！ じゃあ、北岡の方を後回しにして、次にお前が死ぬか？ まだ時間はたっぷりある。戦いを続けようぜえー！」

王蛇が全身をゾクゾクさせながら龍騎に近づこうとするが、再びメタルゲラスが王蛇とカラミティ・メアリに向かって突進してきた。

「！」

「どうしてこう、邪魔が入るのかねえ……」

「よほど俺を気に入ったのか……？ なら、良いぜ。使つてやるよ」

そう言つて王蛇は、手に持っていたコントラクトのカードを、メタルゲラスに向けた。その瞬間、コントラクトのカードは光り出し、無地から灰色へと変わった。そして何も描かれていなかったはずのカードに、メタルゲラスの姿が映し出された。メタルゲラスは変色して黒く染まり、王蛇達に襲いかかる事なく、その場にとどまった。

「う、嘘……!?？」

「あいつ、契約した……！」

「……面倒な事になったな」

「マズい……！ 今の2人は、ライアだけじゃなくて、ガイの力も使えるって事に……！」

王蛇とカラミティ・メアリの周りに、黒いメタルゲラスに加えて、ベノスネーカー、そして黒いエビルダイバーが集まり、圧倒的な威圧感を放った。

これを見たライアは、龍騎を含むチームメイトに声をかけた。

「龍騎！ ここは一旦退くんのだ！ 今のままでは、勝ち目がない！」

「けど、俺は……！」

「その人を守りながら、戦えるのか！」

ライアが指差した先には、倒れている令子の姿が。確かにこのままでは令子まで被害を被る可能性も低くない。

「！クツソオ……！」

国道の火災がほとんど鎮火に向かっているのか、辺りからサイレンが近づいてくる。これ以上この場にはいられない事を察した龍騎は、令子を抱き抱え、王蛇とカラミティ・メアリを睨んでから、ライア達と合流した。

それから龍騎は、そばにいたりリュウガとハードゴア・アリスにも呼びかけて、2人もついていく事となった。その際、アリスはいつも携帯していたウサギのぬいぐるみを探し、瓦礫の陰に隠れていたぬいぐるみを掴み上げて、リュウガの後を追った。

「俺達もここを離れるぞ」

「……嫌だあ！ だつて、ガイが、芝浦さんが……！」

スイムスイム達も撤退しようとするが、ただけは変わり果てた芝浦と離れたくないのかと駄々をこねている。仕方なしにと、スイムスイムはたまの腹を殴り、無理やり気絶させた。

たまは寸前まで芝浦の名を呼び続け、スイムスイムは少し申し訳なさに彼女の頭を撫でた後、タイガ、アビスと共にその場を後にした。

その一方で、ゾルダとマジカロイドも興が削がれたかのように、王蛇達と戦う事なくその場を後にしようとする。

「おい待てよ北岡ア。お前まで帰るなんて言わねえよなあ。俺と戦えよ……！」

「悪いけど、迎えに行かないといけない人がいるのを思い出したからさ。やりあうのはまた今度にしようよ」

「そういうわけデスので、今日はこのくらいデ」

「……チツ」

王蛇はイラついたものの、カラミティ・メアリに肩を叩かれ、仕方なしに地面を蹴るだけに落ち着いた。ゾルダは咳き込みながら、とある場所で眠っている親友を迎えに、マジカロイドと共にその場を後にした。

九尾は龍騎達と共に、誰よりも顔を青ざめているスノーホワイトの背中をさすりながら、足取り重く歩き出す。

そんな彼らの背後から、背筋を凍らせるほどに低い声が耳に入って

きた。

「……なあ、本当に楽しいよなあ。ライダーと魔法少女の戦いってのは」

《中間報告 その9》

【ベルデ（高見沢 大介）、ガイ（芝浦 淳一郎）、死亡】

【残り、魔法少女11名、仮面ライダー10名、計21名】

80. 戦いは終わらない

「ひでえな、こいつは……」

目の前に広がる、瓦礫の山と化した中宿の国道周辺を見渡しながら、OREジャーナルの編集長を勤める大久保の口から出た第一声はそれだった。爆発も収まり、ようやく記者団達に混じって取材を始められる体制が出来たわけだが、あまりにも惨たらしい現場を目の前にして、多くの記者が先に進むのを躊躇うほどだった。

依然として自衛隊や消防隊、救急隊がこぞって瓦礫の撤去や、遺体を運び出したりと、忙しく働いている。

と、そこへ着信音が鳴り響き、大久保が携帯を手にとると、令子からのものだと分かった途端に、慌ただしく応じた。

「令子！ 大丈夫だったか!?!? さつきから連絡が取れなかったから、心配したぞ!」

『あ、はい。ごめんなさい。私もついさつき気がついたところで……』
「気がついたって、お前ひよつとしてあの時の爆発に巻き込まれて……!」

『え、ええ……。でも、直前で誰かが庇ってくれたおかげで、大した怪我はありません。ただ、その後気絶しちやつて、顔までは確認出来なくて。……すいません』

「とにかく、お前が無事でよかった……! 今どこにいる?」

『ええつと……。多分現場からそうも離れていない公園のようですね。誰かがここまで運んでくれたのかもしれないね。編集長はどこに?』

「国道の近くだ。一応島田は、近くに停めてある車に待機させてある」
『了解しました。私もすぐそちらに向かいます』

「大丈夫か? 無理はすんなよ」

『平気です。さつきも言ったように、目立つような怪我はしてませんから。……あ、それと編集長。そっちはどうなってますか?』

令子から現場の状況を尋ねられて、大久保は辺りの惨状を、簡易的に説明した。

「とにかく、酷い有り様だな。こっちの調べじや、復興まで何年かはかかるって話だ。かなりの一般市民が被害に遭ってるしな」

『今、私の方でも情報を仕入れてますけど、一部報道では、テロによるものと断定付けているそうです。予告も犯行声明もあるわけではないそうですが……』

「それ以外に世間を納得させる理由がない、って事か……」

『今頃、閣僚達が動き出して、討論が行われているのかもしれないね』

今回の大規模事件の実態を耳にして唸る大久保だったが、どこか納得がいけない表情を浮かべている。

「確かにこれだけの被害状況から見ても、テロの可能性も充分あるかもしれないが……。何だろうな、こいつはもつと違う何かが働いているような気がするんだよなあ……」

『奇遇ですね。私もそう思ってたところですよ』

大久保も令子も、今回の一件が単なるテロ行為とは思えないらしく、もつと別の事態が人知れず関与しているのではないかと考察していた。そう考える辺りが、真実を常に追求し、追い求めるというOREジャーナルならではのものだろうか。

「とにかく、一度現場に戻ってきてくれ。無理しない程度にな」

『了解です。一応城戸君にも連絡を入れてみますね』

「ああ頼む。あいつとあれから一度も連絡取れてないからな」

電話を切り、スマホをポケットにしまった大久保は、そこでため息をついてから、再び辺りを見回しながら歩き始めた。世間はテロと考えているが、OREジャーナルはこの一件に必ず裏があると思ひ、真実を究明しようと、一つ気合いを入れて調査を始めた。

しばらく周辺を歩いていると、あるものが目に入り、手にとってジツと見つめた。白いウサギのぬいぐるみだった。少し汚れてはいるが、これだけの被害の中であるにもかかわらず、傷一つ付いていなかった。事件に巻き込まれた子供が持っていたものだろう。幼い子供まで無慈悲に命が奪われた事を思うと、大久保も胸の奥が痛んだ。このぬいぐるみの持ち主の犠牲を無駄にしない為にも、自分達がこの

事件を世間に知らせて、一人ひとりに考えを持ってもらう必要がある。

大久保は決意を新たに、ウサギのぬいぐるみをカバンにしまつて、次の現場へ歩を進めた。

俱辺ヶ浜の一角に、長い石階段がある。昼間は近辺に住む子供達の遊び場になっているが、そこには街灯が一つもない為、夜になると、子供はおろか、大人でも立ち寄らない。唯一立ち寄るとすれば、魔法少女や仮面ライダーぐらいか。

そんな石階段に、スノーホワイトを初め、九尾、ラ・ピュセル、ライア、龍騎、トップスピード、ナイト、リップルといったチームに加えて、合流したハードゴア・アリスとリュウガも同席して、腰を下ろしていた。そこにいる誰しもが、疲れていた。原因はもちろん、つい先ほどまで練り広げられていた、カラミティ・メアリと王蛇が引き起こした騒動にある。

改めて振り返ってみると、巡るましい展開ばかりが続いていた。

事の発端は、メアリが龍騎とリップルを誘い出し、殺害しようとしたところから始まった。トップスピードやナイトの介入もあつて難

を逃れたものの、メアリは逃すまいと、一般市民を襲う事で2人を連れ戻そうとした。当然2人も黙っていられるはずがなく、人命救助も含めながら、カラミティ・メアリと王蛇のペアと対峙した。そしてその騒動に拍車をかける為に、密かに手を組んでいたであろうガイが生き残っている魔法少女やライダーを招集し、人命救助に勤しんでいたスノーホワイト達をも巻き込んで、人助けをよそに、大乱闘を始めた。その間にも、九尾はオルタナティブとヴェス・ウィンタープリズンの敵討ちとばかりに、ベルデと戦っていた。あと一歩というところで、とどめを刺すことが出来ず、彼を探しに駆けつけたスノーホワイトとライアの介入もあって、ベルデは逃亡した。九尾は、ただ嘆くばかりだった。

その一方で、龍騎とトップスピードにもアビスとスイムスイムの魔の手が迫り、トップスピードが殺されかけたが、龍騎がこれを阻止し、サバイブに覚醒した事で、事なきことを得た。その際、ナイトとリップルにもトップスピードが抱えていた秘密がバレてしまう事になったが……。

そして一同が国道に戻ってからも、乱闘はとどまることを知らず。加えてクラムベリーやオーディン、ゾルダ、マジカロイド44も参戦し、事態は悪化の一途をたどった。ゾルダの身に何があったのかは分からなかったが、全員を抹殺しようと、超弩級の必殺技である『エンドオブワールド』を放った。その結果、ガイは王蛇とメアリの盾にされ、逆上したガイは返り討ちにあって、王蛇とカラミティ・メアリによつて惨殺された。

彼らは撤退し、途中で巻き込まれかけた令子を安全な場所に運んだ後、一同は人気のないこの石階段にやってきて、そして現在に至る。

スノーホワイトは、膝を抱えて縮こまっている。九尾やラ・ピュセルは声をかけようかと思つたが、負のオーラが漂っている彼女を見ていて、気が引けてしまった。

「……そういや龍騎。お前肩の怪我は大丈夫だったか」

「ん？ いや、これくらいなら平気だけど」

「バイ菌が入るとヤバいかもしれないからさ。とりあえず脱いで、薬

塗ってやるよ。必要なもんは持ってきてるし」

「えっ？ ま、まあ良いけど……」

スノーホワイト達の前でならともかく、初めて出会ったリュウガの前で変身を解くのもどうかと思っただが、仕方なしにとカードデッキを取り外し、その姿を露わにした。

正史の姿を見て、リュウガが僅かに腰を上げたが、ラ・ピュセルやアリスからの視線を察した事で、再び座り直した。

トップスピードはカバンの中から取り出した薬や包帯などを器用に塗ったり巻いたりして、スイムスイムの一太刀で受けた傷の処置を済ませた。正史がお礼を言った直後、ナイトが口を開いた。

「賭けは俺の勝ちだったな。こんな事なら、何か賭けておくべきだったな」

「ハアツ!?? 賭けるってなんの事だよ」

「今日の事だ。お前は随分とあいつらに期待してたようだが、結局はこのザマだ。やはり、人はそう簡単に変わるわけがない。奴らを見てれば分かる事だろ?」

ナイトの呟きに、正史も反論する術を失ってしまった。正史自身、本気でメアリと王蛇が態度を改めて、話し合いをしてくれる気になったと思っていた。が、蓋を開けてみれば、向こうは最初から自分やリップルの抹殺を目論んでおり、それに伴って、多くの市民が巻き込まれた。その過程で、ガイも殺されたのだ。九尾にとっては2度目の光景だったが、目の前で同じライダーが死ぬ瞬間は、今でも全員が鮮明に覚えている。それら全てをメアリは、龍騎やリップルが悪いのだと笑いながら答えた。

「俺だって信じられねえよ……! あんな人間が、ライダーや魔法少女やってるなんて……!」

「正史……」

正史が知らず知らずのうちに震える握り拳を固めながら語るの姿を、トップスピードは表情を暗くしながら見つめる。そんな正史に、ナイトは冷ややかに呟く。

「人間? 何を言い出すかと思えば、今更だな」

「えっ……」

「あいつらは人間じゃない。モンスターだ。戦う事以外何も知らない、飢えた怪物だ」

「……っ！」

それを聞いたスノーホワイトは、息を詰まらせて、皆に背を向けた。王蛇もカラムイティ・メアリも、モンスター。それを聞いてふと脳裏によぎったのは、美華が生前、彼女の姉を殺した浅倉をモンスターと評していた事。その浅倉が王蛇の正体だと思えば、納得してしまうところもあつた。

そんな中、トップスピードは反論した。

「お、おい待てっ。そりゃああいつらがやってる事は、はっきり言つて許せないけど、だからつてそんな風に言わなくても、元は俺達と同じ人間だつたんだろ？ ……なあ、お前らからも何とか言つてくれよ」

そう言つてハードゴア・アリスとリュウガに顔を向けるが、両者共に無反応だつた。ならば、とライアに意見を求めるが、彼の口から出たのは、トップスピードの予想と少しばかり反していた。

「……正直、俺もあいつらを許し難い。大勢の人間を危機に晒したのは事実だ。それに、王蛇の正体が浅倉だつたという事も、少なからず衝撃を受けている。何の因果か知らないが、まさかあいつがシローの手でライダーに選ばれていたなんて思わなかつた」

「……どういう事」

やや強めの潮風に吹かれて前髪が目をくすぐっているのを鬱陶しく思いながらも、リップルは尋ねる。ライアはラ・ピュセルに顔を向けると、こう語り始めた。

「ラ・ピュセル。前に俺がライダーに選ばれたのは、死んだ雄一の代わりだと話したのは覚えてるよな？」

「う、うん。確か雄一さんは、事件に巻き込まれて、それで両腕に怪我をして……」

「その事件で、雄一を襲つた通り魔は、浅倉だ」

ライアの告白は、その場にいた全員からの注目を集めるには十分な

衝撃だった。トップスピードやファムと同様に、ライアもまた、浅倉の手によつて関係者が命を落としたり、夢を絶たされている。浅倉がいかにも危険な人物か、身に染みて理解できる。

「ただ、勘違いしてもらつては困るが、今の俺は奴らの挑発に乗るつもりはない。例え相手が、親友に手をかけた奴だとしてもな。できる事なら、ライダーや魔法少女同士の無駄な争いは避けたいし、止めたい」
ライアはそう念を押した。

すると、ちょうどそのタイミングで皆のマジカルフォンに、ファヴとシローからのメッセージが送られてきたので、一同はチャットに目を通した。

ファヴ：『えーっと、さつきまでみんなキャンディーがたくさん集められるような事が起きていたから疲れてるかもしれないけど、お疲れ様と労うと同時に、今回は皆さんに大事なお知らせがあるぽん。先ず一つ目は、脱落者の発表ぽん！』

シロー：『今回脱落したのは、仮面ライダー側から2名。「ベルデ」と「ガイ」だ』

ファヴ：『これで残つてる魔法少女は11名、仮面ライダーは10

名。順調に数は減ってるし、規定の16名まで、後少し！……と言いたところだけど、残念な事に、不測の事態が起きてしまったぽん』

シロー：『それがもう一つの連絡事項である、人員の削減追加だ』

ファヴ：『何でそうなったのかは、今から説明するぽん』

シロー：『皆には先日レアアイテムを購入してもらった。それによりモンスター退治はしやすくなっただろうが、あのアイテムはこの土地の魔力を使用する。今日は特にアイテムの使用率が高かった為か、このままでは魔力の供給が足りなくなり、16名まで残したとしても、再び枯渇問題が浮上する恐れが出た。これは完全にこちら側の誤算だった事もある。皆には申し訳ないと思っている』

ファヴ：『というわけで、みんなには大変心苦しいお話ではあるのだけれど、16名だった枠が、もう半分の8名になったぽん』

シロー：『ちなみに、それ以上のルールの変更はない。これまで通り、キャンディーの数が少ない者から順に、8名になるまで脱落する事になる』

ファヴ：『いや、本当にごめんなさいぽん。怒りたい気持ちも分かるけど、こればかりはどうしようもないぽん。ゲームの仕様変更はよくある事だし、みんなならきつと残れるはずぽん。それじゃあ、さよならぽん！』

「……んだよこれ……！」

「16名から、8名……！」

トップスピードが絶句し、ハードゴア・アリスが誰ともなしに呟いた後に、海岸に響いたのは、罵声の数々だった。

「フツザツけんなよ！」

「チツ……！」

「この上さらに人数削減だと……！」

「いい加減にしろよ……！ めちやくちやにもほどがあるじゃないか！」

ラ・ピユセルは怒りのあまり、近くにあった手すりを殴りつけた。騎士にあるまじき行為だったが、それだけファヴとシローからの伝達に腹が立っているのだ。

「まだ5人も残ってるのに、これから先も、もつと多くのライダーや魔法少女が死ぬ事になるのかよ……！」

正史が頭を抱える中、一同にはもう一つ気になる事が。

「つていうより、ガイだけじゃなくて、ベルデまで死んでたなんて……！」

「……」

ライアは、皆に悟られぬように九尾に目をやった。九尾もまた、この結果に驚きを隠せない。あの時、仕留めきれなかったはずのライダーが死んだ。こうなると、可能性は2つ。一つは九尾との戦闘によつて致命傷をどこかで受けて、そのまま死に至ったか。もしくは別の誰かがベルデを殺したのか。

いずれにせよ、復讐すべき敵はもういなくなってしまうた事になる。

「……っ！ 俺には、無理だつていうのかよ……！ 誰かと戦うなんて、殺す事なんて……！」

九尾の眩きは、偶々近くにいたスノーホワイトにしか聞こえてないようだ。その証拠に、トップスピード達は別の会話に移行している。「どうすんだよ……!」 まだこんな戦いが続くって事なんだろ!?! やっと、終わりが見えかけたかもしれないのに……!」

「だったらその分、他の奴らを潰すしかない。ここまで来ればキャンデーの数なんてどうでもいい。いかに自分の身を守るかを考えるしかない」

「そんな……!」

「だが待て。今この場には、10人いるんだぞ」

「……つまり、最低でもこの中の2人は、確実に脱落する事になる」

リュウガの一言で、一同は静まり返る。ここまで苦楽を共にしてきた仲間が、協力してもらえた者達が、何人かは消えてしまう。空気はより一層重くなった。

黙り込んでいる状況に居心地が悪くなったのか、正史が口を開きかけた、その時だった。

「……何も、したくない」

そう呟いたのは、中宿を離れて、俱辺ヶ浜にたどり着いてから一度も口を開こうとしなかった魔法少女だった。彼女はゆっくりと立ち上がった。皆が突然立ち上がったスノーホワイトに注目する。

「何も、したくない……! もう、こんなの嫌だ……!」

「……スノー、ホワイト」

「スノーホワイト! どうしたんだ急に!」

ハードゴア・アリスとラ・ピュセルが、異変に気付いて声をかけるが、そこで彼女の両目から、水滴が流れ落ちるのを見た。

「魔法少女が、仮面ライダーが、戦いあって、殺しあって……! こんなの、もう、絶望しか、ないよ……!」

「……!」

九尾は、かける言葉が思いつかない。そうこうしているうちに、彼に、否、ラ・ピュセルや龍騎達にとって、口にしてほしくなかった言葉が、白い魔法少女の口から出た。

「……もう、やめたい」

「なっ………!!?」

「魔法少女なんて、もうやめる………!」

81. 人殺しの目

魔法少女を、やめる。

スノーホワイトの口から出たそれは九尾に限らず、その場にいた者達にとつても、にわかには信じ難い言葉だった。

「お、お前……！ それ本気で言ってるのかよ!?? 魔法少女をやめるって事がどういう事か分かって言ってるのか!??」

トップスピードは本気で心配しているからなのか、いつもより語気を強めてスノーホワイトに問いただす。が、スノーホワイトの決意は揺るがなかった。

「私は、もう、やめたいの……！ 何も、したくないの……！ ……そうだよ。何もしなくて良いよね……」

スノーホワイト自身、優しい返答を期待して問いかけたつもりだった。

「いいえ」

……が、真っ先に返ってきたのは、ハードゴア・アリスの口から出た否定の言葉だった。

「私が出る事なんてないし」

「いいえ」

「したい事もないし」

「いいえ」

「私なんて、何の役にも立てないし」

「いいえ」

「……あのさ」

「いいえ」

「あのさあ！」

何を言っても否定ばかりのアリスに、スノーホワイトは癩癩を起こし、彼女の胸ぐらを掴んだ。

「お、おい……！」

「私はもう何もしたくないって言ってるの！」

正史が止めるよりも早く、スノーホワイトは叫んでいた。

「この街に魔法少女なんてもういない！ 仮面ライダーもいない！
いるのは殺人鬼ばかりだよ！ 平気で人を傷つけたり、殺したりする
事ばかり考えてる人しか、もういない！」

「なっ……」
それはつまり、この場にいる九尾やラ・ピュセル、龍騎、トックス
ピード、ライア、ナイト、リップル、ハードゴア・アリス、リュウガ
もまた、王蛇やカラミティ・メアリらと同等に、人を傷つける事に躊
躇いを持たないだろうという事か。

そう解釈したのか、ラ・ピュセルは思わず幼馴染みに詰め寄った。
「スノーホワイト……！ 今のはいくら君でも聞き捨てならない！
僕達はいいつらみたいない卑劣さなんて微塵も考えてない！ 僕らは
常に正しい魔法少女として、仮面ライダーとして……！」

「だったらー！」

唐突にラ・ピュセルの言葉を遮るスノーホワイト。

「だったらどうしてあの時、ガイと戦ったの!?？ 人助けじゃなくて、
ライダーと魔法少女の戦いを！」

「……！」

「助けを求めている声はたくさんあった！ ラ・ピュセルが私と一緒に
いてくれたら、救えた命だってあったはずだよ！ でもラ・ピュセル
は、そうちゃんは、やってきたガイと戦う事を選んだ！ 目先で困つ
てる人達に手を差し伸べずに、同じ魔法少女や仮面ライダーと戦う事
が、正しい魔法少女や仮面ライダーのあり方なの？ 私の知ってるそ
うちゃんは、そんな事絶対しない！」

「あ、あれはガイが……！」

と言いかけたところで、ラ・ピュセルは言葉が詰まった。確かにガ
イは、今の状況をより面白くしようと、スノーホワイト達と接触した。
が、実際のところ、彼は挑発こそかけてきたが、実際に一般人に手を
かけていたわけではない。にもかかわらず、彼の挑発にまんまとか
かって、勝手に戦おうとしたのは、ラ・ピュセル自身の選択だ。目の
前の男をライダーと認めたくない一心で、戦いに没頭した。

「ラ・ピュセルだけじゃない……！ 他のみんなだって、勝手に他のみ

んなと戦い始めて、やめると言っても聞かないで……！ あそこに戻るまでも、戦ってたんだよね！」

「……」

「ねむりんも、先生も、ファムも、シスターナナも、ウィンタープリズンも、もういない……！ 魔法少女なんて、仮面ライダーなんて、もうとつくにいらなくなってたんだ……！」

スノーホワイトは、正しいと思える魔法少女や仮面ライダーの表情を思い返していた。彼らこそ、スノーホワイトにとつてあるべき魔法少女や仮面ライダーのお手本になるべきだった。だが、自分に優しくしてくれた5人は、もういない。

「いいえ。この街に、魔法少女は、まだいます。仮面ライダーも、います」

「もういないよ。魔法少女も仮面ライダーも、もういなくなった」

「いいえ。います」

「いないって」

「いいえ」

「いないって言ってるでしょ！」

スノーホワイトは胸ぐらを掴まれていたハードゴア・アリスを荒々しく離れた。そして、彼女から渡されていたレアアイテムの『鬼の足』を、アリスに投げつけた。もう彼女との繋がりを一刻も早く断ち切りたいのだろう。

そして踵を返し、背を向けて立ち去ろうとした瞬間、九尾は無意識のうちに彼女の肩を掴もうと手を伸ばした。

「スノーホワイト……！」

「触らないで！」

だがスノーホワイトからは拒絶の意を示され、伸ばした手は叩かれた。そしてスノーホワイトは、鋭い目つきをパートナーにぶつける。

「九尾は……、だいちゃんは、絶対に正しいって、信じてた……！ 悪い事なんて考えないと思ってた……！ そんな私がバカだった！」

「……！」

「だいちゃん、ずっとベルデを殺す事だけ考えてたんでしょ！ 先生

の仇を取ろうとしてたんだよね！ だから、最近はずっと危ない事ばかりに手を出して……！ そんな事、先生が望んでるなんて本気で思ってたの!?!？」

九尾は何も言い返せない。復讐を望んでいたのは事実だから。何らアクションを見せない九尾や、理不尽だとは分かかっていても怒る事しかできない自分に腹を立てながら、スノーホワイトは早口でまくし立てた。

「誰かと戦って、殺しあう事が魔法少女や仮面ライダーに必要な事なら、私はもう魔法少女にはならない！ 誰かの敵討ちなんて、考えたくもない！」

「スノーホワイト……！」

「気安く呼ばないでよ！ この……『人殺し』！」

人殺し。

九尾に向けられたであろうその言葉は、九尾のみならず、ハードゴア・アリスもまた、ハツとした表情を浮かべ、下を向いて震え始めた。「私は、人殺しにはなりたくない！ だから……、もう私にかまわないで！」

「スノーホワイト！」

「ついてこないで！」

そう吐き捨てて、九尾を突き飛ばしたスノーホワイトは石階段を上がり、暗い夜道に向かって駆け出す。途中でリュウガの横を通るが、リュウガは止めるような動作を見せない。リップルは少しだけ彼女に向かって手を伸ばしたが、段々と背中が豆粒に見えるようになって、とうとう手を下ろしてしまった。

「あ、ああ……！」

その一方で、同じ魔法少女愛好家として、スノーホワイトのそばにいる事を良しとしていたラ・ピュセルは、ショックのあまり、膝から崩れ落ち、両膝を砂地につけた。しばらく夜道に顔を向けていたラ・ピュセルだったが、やがて立ち上がり、砂地に尻餅をついていた九尾の前に立ち、先ほどスノーホワイトがアリスにやってのけたように、

激しく胸ぐらを掴んだ。

「何で……！ 何で呼び止めなかったんだ！ お前は、パートナーなんだろ!? パートナーなら……！」

「……もう、俺には無理だと思うから」

そう呟く九尾は、大地は自嘲気味だ。

「……小雪の言う通りだ。俺は、自分勝手な理由で、ベルデを殺そうとした。そんなの、小雪もそうだし、颯太やみんなが納得してくれるはずないよな。だから、これは俺一人でやらなきゃいけないと思った。だから、人知れず仇を取ろうと思った。……なのにこのザマだ。笑いたきや笑えよ。肝心な時に、誰も倒せないって、カツコ悪すぎだよな」

「……！」

ラ・ピュセルは拳を振り上げたが、以前似たような事が起きた際、大地は颯太を殴らず、抱きしめた事を思い出して、拳を下ろして、後ろへ下がって項垂れた。

元々沈みきっていた空気感がさらに淀みを増そうとしていた時だった。

「九尾。……ううん。大地君。俺の目を見て」

正史が九尾の正面に立ち、その両肩を掴むと、ジッと狐の仮面を見つめた。大地も仮面の下から、言われた通りに正史を見つめる。他の一同も気になってその一連の動きを眺めていたが、やがて正史が見せたのは、安心しきったような微笑みだった。

「うん。大地君は確かに俺達に黙って、復讐しようって考えてたよね。でも出来なかった」

「……」

「出来なくていいんだよ」

「えっ……」

「出来なかったって事は、大地君は本心でそんな事望んでなかったって事だよ。だったら大地君は人殺しなんかじゃない。ちゃんとした人間だよ」

「城戸、さん……」

「……それにさ。俺が戦うのは、誰かを倒す為じゃない。生きる為な

んだ。これから先も、寿命が尽きるまでずっと生き続ける為にね。生きていれば、誰かを守る事だって出来るし、ご飯も毎日食べる事が出来る」

そうだろ？ と正史は後方に見えるパートナーに目を向ける。パートナーは当初、戸惑いに満ちた表情を見せていたが、すぐに頷いた。

「俺はそれに気づく事が出来た。だから今日、トップスピードを守りきれた。それが俺の自慢なんだ」

「自慢……」

「スノーホワイトだって、口ではああやって言ってたけど、きっと本心では、あんな風には思っていないよ。あんな表情で言っても、俺はアレが本音とは思えないし。……きつと、苦しくて、どこで吐き出せばいいのか分からなくなってるんだよ」

「……そう、なのかな」

「きつとそうだよ。俺はそう信じてる」

「信じてる、か……」

ライアはそう呟き、コインを見つめる。彼の占いはほぼ百発百中だが、必ずしも当たるわけではない。そのきっかけは、運命に抗える力を信じるか否か。龍騎なら前者だろう。では、九尾はどうだろうか。

「(……まあ、こればかりは本人次第だな)」

ライアが自分にそう言い聞かせていると、ナイトが口を開いた。

「ま、スノーホワイトの方はしばらく放っておいても問題ないだろう。今は頭を冷やす時間も必要だ」

「……なら、帰らせてもらう」

リユウガは立ち上がり、その場を立ち去ろうとした。が、一度だけ龍騎の方に目をやった。

「？ 何だよ」

「……いずれ、ケリをつけよう」

「？」

最後の方は、ほぼ小声だったので、正史は聞き取れなかった。その間、トップスピードはリップルに声をかけた。

「あ、ええつと……。リップルさんよ、そういうわけだから、今夜はここで解散な。俺の体の事は明日……。じゃなくて明後日の夜に、ちゃんと話すからさ。だから今日は、な」

「……分かった」

リップルはいつもと違い、舌打ちする事なく了解し、トップスピードを少しばかり困惑させた。

その頃、夜道を駆け抜けていたスノーホワイトの目からは、大粒の涙が溢れ落ちていた。

「バカだよ、私……！ 何で、あんな酷い事言っちゃったの……！ もう、一緒には、いられない……！」

正史の憶測通り、スノーホワイトは本音ではないにもかかわらず、仲間達に、特に九尾に汚い言葉ばかりを投げつけてしまっていた事に、後悔していた。そしていつしか、彼女の中で一つの諦めがついていた……。

鳩田 亜子は、椅子に座りながら、机の上に置かれた『兎の足』を、

ジツと見つめていた。その近くの棚には、いつも持参しているウサギのぬいぐるみがチョココンと座っていた。

その後、一同は解散し、ハードゴア・アリスに変身していた亜子もまた、叔父と叔母の家に戻り、ぬいぐるみを置いてから変身を解くと、そのまま椅子に座り、一つため息をついた。

スノーホワイトが魔法少女をやめる。その事實は、彼女にとって受け入れ難い事実である。彼女と九尾に出会えたからこそ、亜子は『死』を選ぶ事を放棄したのだ。

そもそも、彼女が魔法少女『ハードゴア・アリス』になったきっかけも、2人に帰り道で落としてしまった小さな家の鍵を探している事に気付いてくれて、探して持ってきてくれた事が全ての始まりだった。

父親の罪に苦しみ、自分の無力さに嫌気を感じ、もう死ぬしか、他人に迷惑をかけない方法が思いつかないほどに追いやられていた亜子を助けてくれたのが、当時は噂程度にしか耳にしていなかった、魔法少女や仮面ライダーの存在だ。仮面ライダーの方は顔が隠れていて分からなかったが、少なくとも魔法少女の方は、嬉しそうで幸せそうで、見ている者も楽しくなれるような笑顔を、分け隔てなく向けてくれた。亜子にとって、それがたまらなく嬉しかった。こんな自分にも、そんな眼差しを向けてくれるのかと言わんばかりに。

恩返しをしたい。そしていつか、横に並んで共に歩みたい。2人を守りたい。そう決意した亜子の日常は、翌日からガラリと変わった。貯金を一部崩し、いつか返済する事を叔父と叔母に強く約束させてから、スマホを購入、契約をし、学校で何度か耳にしていた、本物の魔法少女になれるかもしれないと噂のソーシャルゲーム『魔法少女育成計画』を、契約したその日から始めた。目的はただ一つ。魔法少女になる事。もしなれなければ、今一度取りやめた死の選択を繰り返せばいい。そんな覚悟を胸に、ひたすらゲームに没頭した。

文字通り死ぬ気で、睡眠を初めとした、生活に必要な時間を割いて『魔法少女育成計画』に取り組み、本当に倒れる寸前までゲームをやるどころか、倒れてもゲームを続けるという荒行が実を結んだのか、遂

に亜子は魔法少女に選ばれたのだ。まさに執念が成せる業だろう。

ファヴもまた、彼女の執念さに驚いている様子だった。その容姿は、スノーホワイトや九尾と対照的に黒かった。白と黒。表裏一体でのチームの活動は、必ず噂になる。そして何より自身が授かった魔法『どんなケガをしてもすぐに治るよ』は、2人を護衛するのに最適な魔法だと思った。この力さえあれば、2人に危機が迫っても、自分が盾になればいい。

ファヴから、現在魔法少女と仮面ライダーの人員削減の為にキャンデー集めが活発に行われており、生き残っている参加者の合計したキャンデーの平均数を与えられたハードゴア・アリスには、パートナーとなるリユウガとペアを組んでもらい、共に頑張っしてほしい、という説明を適当に聞き流しながら、ハードゴア・アリスは、夢見ていた。

「……」

スノーホワイトにも気を配る必要があるが、九尾の方も放つてはおけない。彼は今日、人を殺しかけた。敵討ちの為らしいが、それは彼が背負うべきものではない。それは、身近でそれを体験してしまった自分が背負えばいい事だ。必ず、守ってみせる。

部屋の外から、叔母に呼ばれた亜子は、兎の足をポケットにしまうと、急いで部屋を出た。そしてその日は風呂から上がってパジャマに着替えた後、真っ直ぐにベッドに潜り込んで、眠りについた。

中宿でのテロ騒動から2日が経ち、昨日はN市全域に渡って、休校していたところも規制が解除されて、学生にとっては普段通りの学園生活が再開する。

亜子は目覚ましで設定した時刻よりも少し早く起きて、ベッドから降りた。棚の上には、何もなかった。普段ならそこにウサギのぬいぐるみが置かれているのだが、昨日から行方知れずとなっている。元々亜子がぞんざいに扱うせいもあり、しょっちゅう行方不明になるが、1日経っても見つからないのは珍しい。

叔母にも聞いてみたが、見つかっていないそうだ。とはいえこれ以上迷惑はかけられないと思い、捜索を諦めて、支度を急いだ。

この日は朝からあいにくの雨だった。長靴を履いて、傘を持ってから、叔母に行つてきます、と告げて、家を出た。学校に向かう学生の集団に混ざり、誰と話す事もなく人集りに混ざった。元々亜子には友達と呼べる人もいなければ、愛する人もいない。加えてあの事件以来、クラスの皆は亜子に近寄らなくなった。誰からも必要とされない事には慣れてしまったぐらいに、だ。

それ以上に、亜子が気にかけているのはスノーホワイトの事である。どうやって話しかけたら良いのだろうか。他のチームメイトに相談するのも気がひける為、亜子は1人、ため息をつく。

数メートル先にいた、黄色いカッパのようなフードを被った人物がゆっくりと歩み寄ってくるのに気付いたのはその時だった。群がる学生達の流れに逆らうように、その人物は向かってくる。真っ直ぐに、亜子に向かつて。

ふと見ると、コートの下から覗かせている衣装に違和感を感じた。ピンク色の水着だ。ようやくその人物の顔が確認できる距離まで近づいてきた。どこかで見た事あるような……目。

刹那、亜子は気付いてしまった。ピンク色の水着に、見覚えのある目つき。それは今現在、魔法少女や仮面ライダーの座をかけて、倒すべき相手の特徴にそっくりではないか。やがてその人物は、亜子に向

かつて確かにこう呟いたのを聞いた。

「……ハードゴア・アリス」

「……！」

もう疑う余地はなかった。同時に驚愕もした。まさか、こんな時間帯に、しかも一般人が周りにいる状況下で殺しに来るとは、誰が想像できようか。

どうやってハードゴア・アリスの正体に気付いたのかは分からないが、今の状態では無敵とは言えない。亜子は急いでハードゴア・アリスに変身しようとするが、そこでハッと気づいてしまった。今、周りには同じ学校の生徒だけでなく、大勢の人目がある。ここで変身してしまえば、亜子の正体が露見し、魔法少女としての資格が奪われてしまう。資格を奪われる事、それは即ち『死』を意味する。

目の前に迫る人物が、コートの下から、鋭い薙刀を覗かせているのを見てしまった亜子は身を翻し、誰もいない場所を求めて、一步踏み出す。

背中を押されたと感じた瞬間、熱さを感じたと同時に転んだ。悲鳴が聞こえてきたのと、自分の背中から流れ出る血を確認したのはほぼ同時。傘ごと、襲撃してきた魔法少女『スイムスイム』が、ルーラを振るってきたのだ。

亜子はよろめきながらも、再び足に力を込めて転ばないように走り出した。不幸中の幸いか、背中に受けた傷はまだそこまで深いわけではない。70%ほどの実力で駆け出すぐらいには、体力は残っていた。運動神経には自信はないが、逃げなければ死ぬだけだ。

一撃で仕留め損ねた事を確認したスイムスイムは、

「……逃がさない」

と一言呟くと同時に、その体を地面に沈ませた。周りからは、驚きと困惑の聲が飛び交った。

「ハアツ、ハアツ……！」

時折通行人からの異様な視線を浴びながら、亜子はひたすら人気のない場所を探していた。人目さえなければ、変身はできる。そしてハードゴア・アリスになれば、どんな攻撃が来ようと、まず問題は無い。

ようやく裏路地を発見し、入り込む亜子。立ち止まって、息を整えた。背中から流れた血が腕を伝って、真下の水たまりに滴り落ちる。

「ここで、変身すれば……！」

亜子がマジカルフォンを取り出したその時、マジカルフォンからモンスターの存在を知らせる音が鳴り響いた。しかもその反応は、契約モンスターがいるというもの。亜子が固まっていると、近くのガラス戸から、モンスターが現れて、亜子に体当たりしてきた。吹き飛ばされた事で背中を打ち付け、亜子の口から血が吐き出された。咆哮を上げて亜子に攻撃してきたのは、ホワイトタイガーをモチーフにした『デストワイルダー』。再び逃げ出そうとする亜子だったが、新たにガラス戸から現れた、サメをモチーフにした『アビスラッシュャー』と『アビスハンマー』が飛び交って行く手を遮る。

「オラアアアアアアツ！」

さらに真上からは、何かが急降下してきた。亜子はとつさに横に飛

んだが、鋭い爪が亜子の右腕を掠め取り、血が噴き出た。激痛が襲い、悲鳴と共に倒れこんだ。亜子が痛がりながらも顔を見上げると、デストクローを両手につけた天使が、狂気に満ちた表情で亜子を見下ろしていた。よく見ると、デストワイルダー達の後方からは、スイムスイムやミナエルの仲間であるタイガとアビスが向かってきている。つまり、チームがほぼ総動員で亜子を殺しにきたという事になる。

そもそも、どうして自分の正体が、さほど面識もない連中にバレてしまったのかが、未だに分からない亜子。そんな彼女の考えを見透かしているかのように、ミナエルがケタケタと笑いながら口を開いた。「ククク……い・私はスノーホワイトみたいに心が読めるわけじゃないけど、あんたのその顔見てれば、何て言ってるか分かるさ。どうしてバレちゃってるかって？ ……それはなあ、こういう事だよ！」

すると、ミナエルの姿は歪み、人ではない物体に変わった。魔法を行使して、人以外なら何でも変身できるミナエルの変化した姿を見て、亜子は表情を青ざめた。

「まさか、そんな……！」

亜子の眼前に浮いていたのは、行方知れずとなっていたはずの、ウサギのぬいぐるみ。そして、気付いてしまった。なぜ彼女達がハードゴア・アリスの正体に気付けたのかを。

「もう分かってるよねえ！ 国道でゾルダが一斉射撃してた時に、あんたの持ってたぬいぐるみに化けて、こっそり偵察してたんだよ！ おかげで、家に帰ったあんたが変身を解いた瞬間を、この目でバッチリ見れちゃったんだよねえ〜！」

「……あー！」

中宿でのゲリライベントの終盤。ゾルダはまとめて一掃しようとして『エンドオブワールド』を放ったわけだが、この時ミナエルの手元には、たまから強奪した透明外套があり、それに包まれて、姿を消したミナエルは落ちていたぬいぐるみに変身。その後、ガイが王蛇とカラミティ・メアリに殺される瞬間に皆が釘付けになっている隙に、道端にあつたぬいぐるみに透明外套をかけて、ぬいぐるみになったミナエルは入れ替わる事になった。入れ替わっているとは知らずにハード

ゴア・アリスに拾われて、海岸でスノーホワイトらの騒動をジツと観察した後、家に連れて行かれ、そこでハードゴア・アリスの正体と住所を知った。

まさに、「情報を制する者は戦を制す」と言わんばかりの作戦に、亜子はまんまとはまってしまったのだ。啞然とする亜子に、ミナエルは冷めた目線を向けながら、口調を変えて呟いた。

「そっぴやあんだ、新しく入った魔法少女なんだよね……。あんたや、スノーホワイトや、九尾や、龍騎が、魔法少女や仮面ライダーになるからだよ……。だからユナが……。ユナがあ……。お前らさえいなければ、ユナは死なずに済んだのに……。！」

その瞳からは、憎悪が満ち溢れている。

「……。だからさあ。あんたにはちゃんと責任とってもらわないと困るんだよ。あんただけじゃなくて、あんたのパートナーや、他の連中も、全員もそうさ。……。そういうわけだからさ。さっさと死ねよ。どうせお前なんか、この先、生きてたって意味ないだろ？」

「……。！」

生きてたって意味がない。自分の中で消えかけていた言葉が燻り返し、亜子は自然と足が震えだした。

「スイムスイム！ こっこだ！」

ミナエルが叫ぶと、近くの水たまりからスイムスイムがルーラを片手に構えて姿を現した。今の亜子には、逃げるだけの気力は残っていなかった。変身していない状態では、パートナーの契約モンスターであるドラグブラッカーを呼び出す事は出来ない。完全に無防備である。

「これ以上騒ぎを大きくされる前に、手短かに片付けるぞ」

アビスがそう言うと、スイムスイムも頷き、亜子を見下ろした。

「(その、目は……。！)」

亜子は、スイムスイムの目つきを見て走馬灯のように思い起こされるものがあった。

刑務所の中にいる、実の父親が、これと同じ目をしていた。

あの時、父親の手によって、母親が惨殺される瞬間を目撃してし

まっただ際に見てしまった、底光りするあの瞳。その時向けられた父親の瞳。

亜子は、知っている。スイムスイムがルーラを振り上げながら向けてくる瞳。父親と同じ瞳だ。

そう。それは……。

「『人殺し』の、瞳だ」

スノーホワイトが、おそらく本心ではないだろうが、パートナーに向けて言い放った一言。

せめてスノーホワイトに、アレだけは渡したい。その想いを踏みにじらんとばかりに、ルーラが無垢な少女に向かって振り下ろされ……。

82. 僕が英雄になる為に

簡単だった。

迫り来る死の恐怖に、なす術もなく怯えた様子を見せる亜子を目の前にして、スイムスイムが率直に浮かんだ感想はそれだった。

2日前に繰り広げられたゲリライベントでは、結果的に自分達の陣営から2名が脱落した。ベルデとガイである。ベルデの場合は、自身をよりルーラへと近づける為に、このタイミングでどうしても消さなければならなかった。だからスイムスイム自身が手を下した。だが、ガイの脱落はそれなりに痛手だったかもしれない。インペラーほどではないにしろ、自分の力を過信しすぎていたところがある。自分の能力の力量を測れないようでは、足元をすくわれるだけなのだ。

それでも、ガイがやられてしまったのはスイムスイムにとっても誤算だった。

「(ルーラなら、殺される前に引き止めてたのかな……)」

王結寺に戻り、かつてルーラやベルデが立っていた位置と全く同じところでスイムスイムは、マジカルフォンを通じて伝えられた、脱落者の追加削減の文面に目を通していた。16名から8名。今現在、21名がN市に在籍している為、あと13名の命を奪わなければならなくなつた。気の遠くなるような仕事だが、スイムスイムは項垂れる事なく、リーダーらしく次の標的を考え始めた。

最初にターゲットに考えたのは、生き残っている魔法少女の中で戦闘能力の低いスノーホワイトだが、透明外套を羽織つたたまの奇襲が失敗した事を考えると、スノーホワイトの魔法は相手にすると厄介になりそうだった。彼女のパートナーである九尾は、2日前の戦闘を見るからに、容易に倒せる敵ではないだろう。彼らと行動を共にするラ・ピュセルも、決して侮れない。そのパートナーのライアもトリツキーな戦闘スタイルで、やり辛いところが見受けられる。トツプスピードはあともう少しというところで殺せそうだったが、龍騎に止められてしまった。初めて対峙して分かったが、龍騎は攻守のバランス

がとれている為、トップスピードにも手が届きそうにない。リップルも2日前に戦闘をしたが、とにかく素早さなら全魔法少女の中でもトップクラスであり、スイムスイム1人でならまだしも、たまやアビス、タイガが一緒にいると、倒せるか、確信が持てない。パートナーのナイトも同じようなものだろう。加えて前述で出た魔法少女や仮面ライダーの内、6人は強化用のアイテムが付与されている。龍騎サバイブとトップスピードサバイブの攻撃には身の危険を感じ、見逃すしか手はなかった。

では、他の面々はどうか。リュウガはとにかく強い。そのパートナーのハードゴア・アリスも驚異的な治癒能力で、上手く倒せるようなビジョンが見えてこないのだ。ガイを殺したカラミティ・メアリと王蛇のペアは、今はなるべく干渉せずに、どうしてもという時は臆せず倒しに行けば良いだろう。ゾルダとマジカロイド44のペアは、少し情報量が少ない為、彼らの弱みを握ったところで倒しに行こうと考える。それ以上に情報がないペアは、クラムベリーとオーデインのペア。未知という事で懸念されることもあるが、『何よりも強い敵は、何よりも打ち滅ぼさなければならぬ敵である』と教えてくれたルーラの言葉を思い返し、スイムスイムは考え直した。

スイムスイムは顔を上げて、周囲に目を向けた。彼女のパートナーであるアビスは、王結寺に戻ってから姿を少しばかり消していたが、すぐに戻ってきていた。タイガは何をするわけでもなく、ジツと座って待っていた。もつとも手を焼かせたのは、たまただった。パートナーのガイを目の前で殺されたショックから立ち直れていないらしく、常時すすり泣きし、時折しやつくりを上げながら、室内の片隅で丸まっていた。ミナエルだけは、まだ合流もしていないし、帰ってきていない。どこへ行方をくらませたのだろうかと頭を働かせていた矢先に、音を立てて扉が開けられて、ミナエルが荒々しく入り込んできた。そしてスイムスイムが口を開くよりも早く、ミナエルは叫んでいた。

『殺せる奴がいる！ 今度こそ失敗しない！』

詳しく聴きだしたところ、ミナエルは魔法でハードゴア・アリスの

所持しているウサギのぬいぐるみに化けて、アリスの正体を目撃したのだという。加えて、偶然の産物と言うべきか、その道中で龍騎の正体を知る事もできた。龍騎の方はともかく、アリスなら今からでも殺れる。興奮気味に熱弁するミナエルだが、スィムスィムはそこで一旦冷静に状況を分析した。

相手は治癒能力の高い魔法少女。魔法少女姿では到底勝ち目がない。倒すのなら、変身前にするべきだと考えたスィムスィムは、襲撃のタイミングを厳選するところから始めた。以前、ウインタープリズンを相手にピーキーエンジェルズが油断して変身魔法を解いてしまつて、反撃されそうになつた経験も活かして、絶対に反撃をもらわない場所。即ち人間に囲まれ、変身すれば正体を知られてしまう場面。

そして、殺る気満々のミナエルを初め、アビスとタイガも2日後に行動を開始した。たまだけは参加させなかった。ガイの死で精神的にも疲れているように見え、とてもじゃないが、無理やり連れて行つても足手まといにしかならない。よつてスィムスィムを含めた4名でアリスの変身者、鳩田 亜子の殺害を実行した。

作戦は功を奏し、亜子は魔法少女に変身できぬまま、追い詰められていた。後はルーラで倒す。それで厄介だった敵が排除される。実に簡単な戦いだった。とスィムスィムは思っていた……。

「……！」

「こ、のお……！」

魔法少女というよりも、騎士という言葉が相応しそうな少女が、ミラーワールドから出てきて、亜子とスイムスイムスィムの間に割り込んで来るまでは。

「あ……！」

亜子は開いた口が塞がらない。彼女にとって予想外の人物が、そこにいた。彼女に助けられるとは思っていなかったのだ。

「お前……、ラ・ピュセル！」

ミナエルが、大剣でルーラを受け止めて拮抗している魔法少女『ラ・ピュセル』の登場に歯ぎしりしながら、スイムスイムの代わりにと、前に出て亜子に襲いかかろうとする。

「フンッ！」

だがそこへ新手が加わり、唐突にねじ伏せられたミナエルは後ずさった。フォクセイバーを構えた九尾が、ミナエルよりも真上から飛びかかってきたのだ。

「！ 九尾……！」

亜子は思わず呟いた。憧れの対象が、そこにいる。が、九尾は亜子やミナエルに目もくれず、ラ・ピュセルの援護とばかりに、スイムスイムに斬りかかる。スイムスイムは一旦後退し、間合いをとってから、素早く前進する。目の前にいる九尾やラ・ピュセルは後回しにして、まずは亜子を倒すと決めた彼女はフェイントをかけて、間を縫うようにルーラを突きつけながら狙いを定める。

が、2人がそれを見逃すはずもない。スイムスイムの行動を読み取ったラ・ピュセルが真っ先にバックして手刀でルーラの柄を振り

払った。その際、軌道が逸れた影響でルーラの刃先はラ・ピュセルの太ももをわずかに掠め取った。

「……………」

降り注ぐ雨に混じって傷口から血が流れ落ちるが、踏ん張って大剣を振り回した。当然スイムスイムもこれを避けるが、ラ・ピュセルに気を取られすぎたからか、

『BLAZE VENT』

九尾の放った火炎玉『ブレイズボンバー』までは予測できず、爆発に巻き込まれて、衝撃波で吹き飛ばされた。

「！ んの野郎！」

逆上したミナエルが、小さい体を活かして、爆発を掻い潜りながら九尾にデストクローを振るった。九尾はとつさに両腕をクロスして防御の構えに入るが、デストクローの鋭い爪が、両腕に傷をつけて、血が流れた。

「！」

「九尾！」

「平気だ……………」

九尾は後ずさりながらも、ラ・ピュセルに無事を伝える。出遅れたアビスやタイガとも交戦するが、九尾とラ・ピュセルは怪我の具合を気にする事もなく、亜子を守ろうと躍起になっていた。背中についた傷ほどではないにしろ、2人は傷を負いながらも、自分を守ろうと戦っている。特に九尾は、自分が守ってやらなければならないはずなのに、いつの間にか守られる立場にある。その事が、亜子にとって胸を締め付けられるような感覚を覚えさせる。

「くっ……………」

アビスは舌打ちしながら後退し、タイガもそれに続く。スイムスイムが今後どうするかを模索していると、ミナエルが怒りをぶつけた。「何なんだよお前ら……………」 あたしらの邪魔をすんなよ！ 大体そんな奴守ったって、何の価値があるんだよ！ ちっぽけで安いものなんか、ユナと比べたら石ころにしか……………」

「だからこそ！」

そこへラ・ピュセルが唐突に遮り、ミナエルは黙り込む。

「ちつぽけだからこそ、守らなきゃいけないんだ！ 誰だってそうだよ！ 例え周りから見ても小さなものだったとしても、それを刈り取る理由なんて、一つもない！ だから……！ 彼女を傷つけようものなら、僕が勝手にそれを守る！ それが、僕が決めた正義のあり方だ！」

「……！」

亜子は目を見開き、ラ・ピュセルの後ろ姿を見つめた。初めてだった。スノーホワイトや九尾以外に、自分を惹きつけるようなものが見受けられたのは。

ラ・ピュセルに続いて九尾も口を開いた。

「……俺にはまだ、ラ・ピュセルみたいなのは持ち合わせてないけどな。それでも、こんな状況を放っておけるほど、俺だって落ちぶれちゃいない」

「……これでも、ダメなのかよ！ 最初からこうすれば良かったと思っただのに！ そうすれば、ユナは死ななくても済んだってなるはずだったのに！」

「！ ミナエル……！」

「おおおおおおおおお！」

アビスの制止を無視して飛び出すミナエル。九尾とラ・ピュセルが身構えていると、

『GUARD VENT』

「ダアッ！」

2人の前に、ドラグシールドを構えた龍騎が現れてミナエルを押し返した。

「龍騎！」

「大丈夫……？」

龍騎は顔を向けて、2人の無事を確認した。それから、背中から血を流している亜子に目をやって状況を確認した龍騎は、スイムスイム達を睨みつけた。

「お前らがこの子にこんな酷い事したのか……！ どうしてなんだよ！ この子は関係ないだろ！」

「関係あるよ。足元を見てよ」

「えっ」

タイガに指摘されて、龍騎だけでなく九尾とラ・ピュセルも亜子に目をやる。彼女の足元には、先ほどデストワイルダーに体当たりされて手放してしまった、薄紫色のマジカルフォンが。見覚えがあった。黒い魔法少女が所持しているものと同じ色のもの。

「！ ひよっとして君、ハードゴア・アリスの……！」

「変身前に襲うなんて、姑息な手を……！」

「お前……」

九尾は改めて亜子の姿を見つめるうちに、思い出した事があった。まだラ・ピュセルやライアとチームを組む前に見かけた事があった。鍵を紛失して家に入る事ができずに困っていた少女だ。

「そうか……。だからお前は……」

何かを察した九尾だが、雨に打たれて段々と衰弱しているように見える亜子をどうにかしなければと思い、九尾は2人に話しかけた。

「とにかく今は、ここから離脱しよう」

「ああ、それが良い」

「うん！ 先ずはこの子を守らないとな！」

龍騎とラ・ピュセルも頷き、九尾の前に出た。そして龍騎はカードを引き抜き、サバイブのカードをスイムスイム達に見せつけると、左腕を突き出してドラグバイザーツバイを取り、口の部分に差し込んだ。

『SURVIVE』

ラ・ピュセルもそれに続いて、マジカルフォンをタップして腰についたホルダーにマジカルフォンをセットした。

『SURVIVE』

龍騎サバイブ、ラ・ピュセルサバイブへと変化した2人は、前進してスイムスイム達の足止めに徹した。その隙に、九尾は亜子をなるべく背中傷に触れないように抱えて、屋根のありそうな場所へと駆け出した。

「！ 狙いはそっちか！」

「逃がすかよお！」

ミナエルが九尾を追いかけようとするが、強化された大剣を振るいながら、ラ・ピュセルサバイブはマジカルフォンの画面をタップして、大剣を掲げると、彼女の真上にエクソダイバーを出現させた。アビスが警戒していると、エクソダイバーの腹部から雷が落ちて、避雷針代わりとなっていた大剣に当たり、剣に電流を帯びた状態で、ミナエルに向かって振り下ろした。サバイブによって新たに得た『ヴェイパースパーク』は、大剣を中心に放電して、空中を飛んでいたミナエルにダメージを与えた。

「ぐ、アアアアアアアアアアアア！」

全身が痺れたミナエルは地面に膝をついた。タイガがミナエルを抱き抱えると、龍騎サバイブがダメ押しとばかりに新たなカードをベントインした。

『ADVENT』

「頼む、ドラグランザー！」

龍騎サバイブはドラグランザーにそう言うと、応えるように咆哮を上げて、スイムスイム達に襲いかかった。4人は身を翻して回避した。そこへ向かってドラグランザーが口から火炎放射をなるべく周りに被害を出さない程度に放った。

やがて炎が晴れると、4人の姿はなく、遠くに傷を負ったミナエルを抱えてビルを飛び交うタイガの姿があった。おそらくアビス、スイムスイムらと二手に分かれて逃亡したのだろう。ようやく敵を退けることに成功した2人はホッと一息ついた。

「良かった……。ありがとう龍騎」

「まさかこんな朝から戦いを仕掛けてくるなんて……。なんで奴らだよ。っていうより、ラ・ピュセルも九尾も、何でここに？」

「それは後にしよう。まずは九尾と彼女の所に」

「あ、ああ」

2人はサバイブ状態を解除すると、九尾のいる地点へ出向いた。

九尾と亜子がいたのは、現場からそれほど離れていない地点の、シャッターの閉まったタバコ屋の、屋根の下だった。

「九尾！」

「ラ・ピュセル、それに龍騎も」

「その子、大丈夫だった？」

「……」

亜子は全身を震わせながら、うずくまっていた。死への恐怖と、何も出来なかった事への悔しさが混じっているのだろうか。龍騎は周りに誰もいない事を確認してから変身を解除し、正史の姿に戻った。

「ええつと……。とりあえず、無事で良かったね。あ、俺は城戸 正史。君は……」

「……鳩田、亜子、です」

亜子は声を震わせながらも自分の名を告げた。

「亜子ちゃん、か。もう大丈夫だから。またあいつらが来ても、すぐに追いついてやるからさ！」

正史は亜子を励まそうとしたが、依然として亜子の表情は優れない。仕方なく、正史は九尾とラ・ピュセルに顔を向けた。

「そういえば、2人はどうしてここに？」

「ああ、それは……」

ラ・ピュセルが代表して事の次第を話した。

大地に車椅子を押してもらう形で、颯太と2人で学校に登校していた途中で、通り魔が隣近所の中学校に通う生徒を襲ったという情報を耳にして、妙な胸騒ぎを覚えた2人は、人目につかないところで変身して、街中を搜索した。襲われた少女は通り魔から逃げている最中だという。一刻も早く保護しなくては、とラ・ピュセルは内心焦りながら探していた。

しばらく搜索していると、九尾がスイムスイム達の姿を目撃した。しかも彼らの前には、血を流した自分達と同一年くらいの少女が。なぜスイムスイムらが一般人を襲おうとしているのかは分からなかったが、放っておけるはずもなく、ラ・ピュセルが真っ先に飛び出たのだという。

「……って事なんだ。城戸さんはどうしてここに？」

「この辺は仕事場に向かう時に使う道だったからね。マジカルフォン

が反応を見せたから、変身して追いかけたんだ。そしたら2人と亜子ちゃんがいるのが見えてね」

「どうやら正史が駆けつけたのは、通勤途中に異変に気付いた事が要因らしい。」

「正史は亜子の背中にできた傷に目をやると、九尾とラ・ピュセルに告げた。」

「亜子ちゃんは俺が何とかするから、2人はもう戻っていいよ。この後学校があるでしょ?」

「え、ええ。でもその子は……」

「大丈夫。俺がついてるからさ」

「……分かりました。また今夜会いましょう」

「了解!」

「正史とラ・ピュセルで話がつく中、九尾は膝を曲げて、亜子に目線を合わせた。」

「……まさか、お前がハードゴア・アリスだったなんてな」

「覚えて、くれてたん、ですか……?」

「まあ、おぼろげだけだな」

「九尾は納得していた。なぜこれほどまでに彼女が執拗なまでに自分やスノーホワイトに絡んでこようとしてきたのかが、今やっと、理解出来たのだ。」

「……鍵、あれから失くしてないな?」

「! は、はい」

「なら良かった」

「それだけ告げると、九尾は立ち上がってラ・ピュセルと並び立った。亜子は何かを言いたげだったが、途中でつかえてしまったのか、口に出る事はなかった。九尾とラ・ピュセルは2人に手を振ると、学校のある方へと跳躍していった。」

「残された正史は、一度亜子の傷に目をやってからスマホで手当てをしてくれそうな近くの病院を探し始めた。」

「……ううくん。この時間だとまだやってない所が多いかなあ」

「あの……。私も、そろそろ学校に……」

そう言つて亜子が立ち上がり、雨の中に出ようとするが、正史がそれを見過ぐすはずもなく。

「そんな怪我してるのに学校なんて無理だろ!!? 先ずは病院で治療しなきゃ……」

「でも、それじゃあ、あなたに迷惑をかけちゃいます……。それに病院なんて行つたら、叔母さん達を心配させちゃ……」

「だからつてこのまま放つておいたらもつと酷くなるかもしれないだろ!!? ちよつと待つて……」

正史は亜子の腕を引っ張りながら検索を続けるが、芳しい結果は出ないようだ。空いた片方の手で頭をかきむしりながら、正史は亜子にこう言つた。

「とりあえず、ここにいたら風邪ひくかもしれないし。俺の勤めてる会社に行こつか。『OREジャーナル』つてところでき。この近くにあるんだ」

「えっ? でも……」

「大丈夫だよ。変な会社じゃないからさ」

正史は安心させるように言つた後、カバンの中に入れておいた折り畳み傘を開いて、亜子の中に入れさせてから、亜子の背中に気をつけながらOREジャーナルへと、並んで足を運んだ。

「うっ、グウ……!」

「……あ」

ミナエルの意識がはつきりしてきた頃。タイガはミラーワールド内を移動していた。タイガに掴まれている事に気付いたミナエルは、乱暴に振り払った。

「離せよ! あいつらどこにいるんだよ!」

「もう逃げたよ。僕達は今、二手に分かれて行動してる」

「クソツ! 今度こそやれると思ってたのに……! こうなったら、あたらしただけでも、もういつペン行こうよ! どうせまだ遠くまで逃げてないんだろ!?!」

「……」

タイガが黙り込む中、ミナエルは息を荒げながら鏡の外を睨みつけた。

「大体、ファヴもシローも、ふぎけてるとしか思えねえんだよ! まだ目標人数にも到達してないのに、その上さらに8人にまで減らすなんて……! いつになったら終わりが来るんだよ! ユナが死んで、こっちも気が気じゃないのに……!」

その時、タイガが顔を上げて、ミナエルに背中越しに尋ねた。

「ミナちゃんにとって、ユナちゃんは大切な人なんだよね」

「ったり前だろ! 今まで何見てきたんだよ! ユナがいてくれたから、毎日が飽きなくて、大切で……! だから何で死んじゃったのか、分からなくて……!」

「……へえ」

間延びした声を聞いて、ミナエルはイラついていた。だからこそ、背後にいるタイガに注意が向いていなかったのかもしれない。

「……ねえ」

「アツ? 何だよあたしは」

ミナエルが振り返るよりも早く、

大きな天使の羽根が、血飛沫と共に宙を舞った。

「……………!?アッ、ツツア……………!?」

羽根の付け根から血が溢れ出し、ミナエルは地面を転がった。目を

血走らせながら見た先には、血の付いたデストバイザーを構えるパートナーの姿が。

斬り落とされた天使の羽根が、音を立てて地面に落ちた。

「た、タイガア……！ なんの、つもり、だよお……！ ガハッ……！」
「ミナちゃん。僕ね……。前からずつと考えてたんだ。どうやったら早く英雄になれるかなって」

「は、ハアツ……!?？」

唐突に何を語りだすかと思えば、それはいつも彼が口にしていた『英雄』という言葉。それがミナエルに襲いかかる事とどう関係があるのか。その答えを、タイガの口から教えられた。

「この戦いに勝ち残る事で、英雄になれるのは知ってる。でも、それだけじゃあ英雄になるのはまだまだ先って思った。……でも、さっき気付いたんだ。光希もそうだけど、ユナちゃんが死んだから、僕は英雄にまた一步近づけた。だからね。僕にとって大切な人が犠牲になれば、それって僕が英雄にまた近づけるって事じゃないかな」

「ナアツ……!?？」

めちやくちやな論破じゃないか。ミナエルがそう口を開こうとするが、タイガは暴走を止める事を知らず。

「ミナちゃんは、僕にとって大事な人。だからね。犠牲になってもらわないと」

「……アツ、アア……！」

僕が『英雄』になる為に。

その一言を聞いて、ミナエルは全身が震え始めた。まさか、智が自分を、パートナーを殺そうとするだなんて……。

「ゴメンね、ミナちゃん。僕、君を倒して、必ず英雄になってみせるから」

そしてカードを取り出し、デストバイザーにベントインしようとしたその時だった。

『キエエエエエエエエエ！』

横手からタイガに襲いかかってきたのは、偶然出沒した鳳凰型のモンスター『ガルドストーム』。タイガと同様に斧を振り回して、タイガ

に襲いかかる。

「！」

今がチャンスだと思ったミナエルは、よろめきながら、その場を後にした。それに気づく事なく、タイガはデストバイザーを振るって、ガルドストームを押し倒した。

「……君は、英雄には相応しくないから。邪魔しないでよ」

『FINAL VENT』

先ほどベントインしようとしたカードを使い、両手にデストクロウをつけたタイガは待ち構えた。ガルドストームの背後からデストワイルダーが飛びかかり、タイガに向かって引きずっていく。ガルドストームは抵抗するが、抜け出すよりも早く、タイガのデストクロウが食い込み、『クリスタルブレイク』をまともに受けたガルドストームは爆散した。

一息ついて辺りを見渡すタイガ。が、そこにあつたのは血の付いた天使の羽根と、奥へ転々と続く血の痕。

「(逃げたのかな……。でも、あの様子だと、もう助からないよね。これで2人目。後は……)」

「ハアツ、ハアツ……！　　んだよあいつ！　　何であたしを……！　　何考えてんだよ……！」

一方、タイガから逃げのびたミナエルは、ミラーワールドを出て、壁伝いに必死に前へと進んでいた。が、ラ・ピユセルからの攻撃に加え、タイガの奇襲を受けて、ミナエルはすでにボロボロになっていた。脚に力が入らなくなり、坂道になっていたところを、転がりながら前に進んだ。

息をどうにかして整えながらも、這いつくばりながら前に進むミナエル。ただ必死に前へと進んだ。何かを目指しているわけでもない。ただ、前に進みたかった。ユナエルの、最愛の妹の分まで生き残る為に。

「……っ！　　死にたく、ないよお……！　　あたしにだって、帰りたい、ところが、あるんだから……！」

出血が酷くなり、だんだんと朦朧としてくる意識。

「……アアツ？」

不意に、前方から声が聞こえてきた。誰かが助けに来てくれたのか。スィムスィムか、アビスか。そんな期待を寄せて、ミナエルは顔をバツとあげる。

その数秒後には、全身から血の気を引く事になるが……。

「おやおやあ〜？　　迷子の迷子の天使ちゃん〜？　　あんたのお墓はどこかな〜？」

とある童謡のリズムにあやかって口笛を鳴らしながら、テンガロンハットの奥からギラつかせた目を向けてくる女性と、紫色の蛇を彷彿とさせる姿を見に纏った男性が、傷だらけのミナエルを見下ろしていた。

刹那、ミナエルに浮かんだのは、『絶望』の二文字。口をパクパクさせている天使を見て、肩を竦めたライダーは、カードデッキから一枚のカードを引き抜いて、そして……。

シロー：『今回、新たな脱落者が出たので、皆に伝達する』

ファヴ：『今回の脱落者は、「ミナエル」だぽん』

シロー：『主な連絡は以上だが、ついでに例のレアアイテムについて話そう』

ファヴ：『いよいよ最後のレアアイテム獲得ペアとなったぽん！

そのペアは最もマジカルキャンディーの獲得数が多かったペアだから、ひよっとしたらもう誰かは分かるかもしれないけど、もう少しで解禁するつもりなので、心待ちにしてほしいぽん！ それじゃあ、シユーぽん！』

シロー：『おっと。クラムベリーもBGMをかけてくれて感謝するよ』

天里 美奈、優奈の双子姉妹は常に2人で1人、ワンセットという扱いを受ける事が多かった。双子というのはどうしても歳をとるにつれて趣味や主義、容姿でさえ差異が生まれてもおかしくないのだが、美奈と優奈は特別違った。

大学生になってからも互いに仲が良く、同じものを好み、同じ服を着て、まさに瓜二つな2人は、親でさえ区別がつかない。当然大学も同じであれば、同じマンションに暮らし、終始行動を共にしている。

もつと言うなれば、片方に彼氏が出来ても必ずもう片方も隣を歩いているのだ。それ故に男女交際が長続きする事はなかったが、それでも2人に不満はなかった。2人だけの世界でも、何ら不便な事はないと、美奈も優奈も思っているのだ。

そんな彼女達だが、唯一例外として、東野 智、光希の兄弟との付き合いは思っていた以上に長く続いた。きつかけは、2人のカバンをひったくった犯人を、偶然通りかかった光希が追いかけて、取り押さえてくれた事から始まった。以来、すれ違う度に話し合う関係が芽生えて、数日後には兄の智も紹介してくれた。オフの日に4人で固まって会話を交える事に、2人は新たな楽しさを感じていた。とりわけ美奈は智の純粹そうに見える雰囲気が入り、いつしか妹には内緒で好意を抱いている時もあった。

これだけ双子が一緒にいる事に生きがいを感じているのだから、『魔法少女育成計画』に2人揃ってハマるのも当然の事。無課金だからと始めたゲームに昼夜を忘れて没頭していた。東野兄弟にもこの話題を振ると、自分達も同じメーカーが配信しているとされる『仮面ライダー育成計画』を兄弟揃ってプレイしていると話すと同時に、何

万人かの確率で本物になれる、という噂も耳にした。天里姉妹は内心面白がっていたが、口では信じていないと告げていた。

そんな2人の目の前に、ある時、マスコットキャラクターのファヴが立体映像が飛び出してきて、気がついた時には、双子は魔法少女『ミナエル』、『ユナエル』へと変貌を遂げていた。

『双子が揃って魔法少女になるなんて、初めてのケースだぼん』

各々が手に入れたマジカルフォンからファヴの声が重なって響いてくるが、そんな事はお構い無しに、2人は魔法少女になれた事に歓喜していた。本来の目的である人助けやモンスター退治など、ハナからやるつもりはなく、魔法少女である事を利用して、『ピーキーエンジェルズ』と名乗って、新たな娯楽を追求し始めた。

が、現実はその上手くないかない。数日後には突然現れたルーラに屈服されて、2人はほとんど雑用係として、毎晩を過ごすようになった。彼女を引き連れてきたベルデはともかく、ルーラの態度には毎度イラついていた。とにかく不平不満が絶えなかった。そんな彼女達をなだめてくれていたのが、当時は同じく新人だった仮面ライダーのタイガとインペラーだった。その正体が東野兄弟だと判明した時は、内心ホッとしたのをミナエルは覚えている。おかげで毎日がストレスまみれになる事は避けられそうだと。

魔法少女として人気を得ようとして、携帯端末が同じIDだったせいで自演がばれた事もあったが、失敗はかえって絆をより深め、今まで以上に仲良く魔法少女活動を営んできた。

「やっぱ時代は、ワンコとかよりも天使だよね〜!」

「分かる分かる! お姉ちゃんマジナイス!」

「てな訳で、今日も行くよ〜!」

「オツケー!」

2人は人気獲得の為に、美奈は左手を、優奈は右手を互いに合わせてから、いつもマジカルフォンをタップして変身していた。

「変身!」

そして2人は魔法少女『ミナエル』、『ユナエル』になってから、今宵も夜空を縦横無尽に飛び回り、幸せを感じていた。

いつまでも、これからも、こんな日々が続く。ファヴとシローの口から、魔法少女及び仮面ライダーの人員削減が発表されるまでは、少なくともお互いにそう思っていた。

光が解けて露わになったのは、口から血を流した若い女性だった。硬直した腕は何かに向かって伸ばしていたが、そんなものは、王蛇やカラミティ・メアリが知る由もない。仰向けに倒れている彼女の胸には、ベノサーベルが突き刺さっていた。その持ち手に手をかけた所有者の王蛇は、ためらいなく美奈の胸からベノサーベルを引き抜いた。貫かれた胸から、血がドツと噴き出た。やがてそれは勢いを失くし、それ以上何も起こらなかった。ただ、降り注ぐ雨が美奈の体についた血を洗い流している。

「……………つまらん」

王蛇はただ一言、そう吐き捨てた。

先日の戦いでガイを殺した2人だが、王蛇の方はまだ暴れ足りない
と、荒々しく駄々をこねていた。そこでメアリと同行しながら、やり
あえそうな相手を朝から探していた。ようやくと見つけた相手は、瀕
死に近い状態だった。実際、王蛇が前に出て戦闘を繰り広げたが、全
くと言って良いほど、相手にならなかった。その事が王蛇をよりイラ
つかせた。

「あの弁護士を相手にした方がよっぽど面白い。……ゾルダ、だった
なあ。潰してやるヨオ……！」

王蛇は鼻を鳴らして、こんなものは勝負の内に入らない、と言わん
ばかりに美奈の死体を放置して、さつさと立ち去ろうとする。メアリ
は一度、手に持っていた銃を美奈に向けたが、引き金を引くことなく
ホルダーにしまった。

魔法少女や仮面ライダーに弾丸を撃ち込むのは楽しいが、すでに物
言わぬ死体と化した奴を撃つても、面白みがない。肩を竦め、不敵な
笑みを浮かべながら、カラミティ・メアリも王蛇の後を追った。

朝から降り続く雨は、双子の片割れに容赦なく降り注ぎ、血だまり
一つ残すことなく、まっさらになるまで洗い流された。

《中間報告 その10》

【ミナエル（天里 美奈）、死亡】

【残り、魔法少女10名、仮面ライダー10名、計20名】

83. 私の逃げ場所

「おっそいなあ、正史の奴」

明け方から降り続けている雨を、社内の窓から大久保が、自作のてるてる坊主を弄りながら見つめていた。

「1時間24分46秒の遅刻ですね」

なぜかてるてる坊主に派手なデコレーションをしている島田が、依然として出勤してこない正史がどのくらい遅刻しているのかを秒数単位まで測っている。

令子はパソコンに向かい合いながら、2日前に中宿で起きた騒動について、片っ端から情報を仕入れていた。

「またどこかで道草食つてたりしてるんじゃないですか？ なんとか彼は……。トラブル体質といえますか……」

「にしたって、限度つてもんがあるだろうよ。……そろそろ本気で減給するか」

「早く帰ってこい」

島田が意味もなくにやけながら、正史に似せたてるてる坊主を完成させた直後、扉が勢いよく放たれて、話題の中心人物が滑り込むように入ってきた。

「おう正史。お前また遅刻だぞ！ 良い加減……」

だが大久保が小言を言うよりも早く、正史の大声がそれを遮った。

「すいません編集長！ それよりも早くこの子を……」

「……ん？」

そこで大久保を含む全員が、正史の横に小柄な少女が佇んでいる事に気付いた。雨に濡れた影響で、ポタポタと制服から雫が垂れている。

「……隠し子!?？」

「んなわけないでしょ結婚してないんですから！ っていうより、冗談抜きに……」

島田が本気で驚いた口調で叫んだ事に対して正史のツツコミが入ると、令子がアツと叫んだ。

「! あなた、それ……!」

令子が指さしたのは、正史が連れてきた少女、亜子の背中につけられている、斜めに裂かれた傷。そこから少量ではあるが、血が流れている。大久保もそれに気づいて駆け寄った。

「おいおいどうしたんだよこの傷……! 何があつた!?!」

「とにかく今は、この子の手当てを……」

「お、おう分かった。島田、その棚に救急箱があるだろ。手当てをしてやってくれ」

大久保は島田に指示を出し、令子はハンカチを取り出して、亜子の背中についた血を拭こうとした。が、亜子は洗ったばかりであろう、綺麗なハンカチを見ると、拒みはじめた。

「そ、そこまでしてもらわなくても……。汚れちゃいますよ……」

「そんなの気にする事ないわ。こんなの見せられたら、放っておけるわけないでしょ」

そう言つて令子は軽く亜子の背中にハンカチを押し付けて、血を拭き取った。亜子は黙り込み、正史は安心させるように亜子の手を握り続けた。

その後、亜子を椅子に座らせてから、島田が背中や腕に消毒液やガーゼを使つて、応急処置を始めた。

「ちよ〜と痛いかもしれないけど、我慢してね〜」

「……はい」

亜子は小さくコクリと頷く。現在、亜子は上半身の服を全て脱いでいる。が、胸部の方は亜子がタオルを抱えて隠してある。

その間に、正史は大久保や令子に、亜子が怪我を負った理由を話し始めた。ただし、仮面ライダーや魔法少女の事は話さずに、2人には彼女は通り魔に襲われた、と誤魔化しておいた。

「白昼堂々通り魔出現か……。こいつは警察に相談しておいた方が良いかもな。ウチだけでどうこうなるもんじゃない」

「編集長。とにかく先ずは病院に連絡を……」

「そうだな。ええつとこの辺なら、大病院の方が良いから、番号は……」

大久保がカバンからメモ帳を取り出そうとした時、カバンの中に入っていたものに目が止まった。

「そういやこれ、カバンに入れっぱなしだったなあ」

そう言っただ久保が取り出したのは、ウサギのぬいぐるみ。それを見て、正史だけでなく、ずっとそれを探していた少女が思わず身を乗り出した。

「！ それ……！」

「あ、まだ動かないで」

島田に止められて、座り直す亜子。その様子を見て、令子はある事を察した。

「ひよつとしてこれ、あなたの？」

「……はい」

「編集長、それどこで拾ったんですか!?!」

「ああ。中宿で調べまわってた時に落ちててな。あのままにしておくのも後味悪かったし、そのまま持って帰ったんだよ。けど、お前さんがこのぬいぐるみの持ち主だったとは、縁があるなあ」

大久保はウサギのぬいぐるみを亜子に返却した。亜子は片方の手でようやく手元に戻ってきたぬいぐるみを抱き、ホッと一息ついた。

「あら？ 現場に落ちてたぬいぐるみの持ち主が見つかってるって事は、あなた2日前に、現場にいたって事よね!?!」

「……！ は、はい」

令子の読み通り、亜子は確かに現場にいた。そして事故に巻き込まれた人を救う中でスノーホワイト達と合流し、そして現れたタイガラと戦った。全ては、スノーホワイトや九尾を守るための行為だと、自分を納得させていた。が、結果的にその行為はスノーホワイトを失望させてしまった。魔法少女を、仮面ライダーを否定してしまった。

表情を暗くした亜子を見て、令子はメモ帳をポケットに仕舞った。「……事情はまた今度聞かせてもらうとして、今はその怪我の治療が最優先ね。それにその通り魔の事も調べておかないと」

どうやら次の記事内容を決めたようだ。
と、その時だった。

「……どうして」

亜子が質問をした。皆の視線が集まる中、亜子はさらに言葉が続ける。

「どうして、私なんかの為に、ここまで……。私、みんなに優しくしてもらおう、理由なんて……」

「理由って……。そんなのいらないよ。困ってる子を放っておけるほど俺だってバカじゃないから」

「……でも」

正史が慰めるが、亜子は自分自身に納得がいかないようだ。

「……でも、私は、誰にとっても不必要で、ただ、迷惑を振りまいてるだけで……」

「そ、そんなわけ」

「どうして、自分の事をそう思うのかしら？」

正史が問いかけるよりも早く、令子が顔を覗き込むようにして、亜子が自己嫌悪に陥っている理由を聞いてみた。対する亜子は、一度ウサギのぬいぐるみに目をやってから、静かに自らの経緯を話し始めた。

「……私、見たんです」

「見たって、何を？」

「……お父さんが」

「？」

「お父さんが、お母さんを。……刺し殺す所を」

雨音がより一層皆の耳に響いてきた。あの島田でさえ、ガーゼを持った手を止めてしまっていた。亜子は、皆の反応をさぞ予測していたかのように、淡々と話を続ける。

聞くところによると、月が煌々と輝いていた日に、偶然目が覚めた亜子が、物音のする台所へ足を踏み入れたところ、父親が包丁を持って、何度も鈍い音を響かせて、ぐったりとした血まみれの母親に向かって突き刺している現場を目撃してしまった。亜子は目の前で起きている、にわかには信じがたい事態に、ただ「お母さん」や「お父さん」と涙を流しながら呟くだけで、止めようともせず、その場に立ち

尽くしているだけだった。

その後警察の手で父親は逮捕された。詳しい動機は聞かされていないが、些細な罵り合いがきっかけで殺人事件まで発展してしまったのだと言う。

「あの時、私がある場においてあげられたら、もしかしたら、喧嘩を止められたかもしれない……。でも、怖くて、何も出来なくて……」

亜子の全身は自然と震えていた。

以来、亜子は母方の弟にあたる叔父の家に引き取られて暮らしているのだと言う。寝食の場を提供してくれただけでなく、家が変わってからも今までと同じ学校に通い、お小遣いももらい、何不自由ない生活があった。

だが亜子にとってそれは、『大迷惑のかけ通し』のようなものだった。

「二度だけ、お父さんのいる刑務所に行って、会ってきました。……でも、こう言われました。『もう二度と来るな』って」

「……！」

正史の拳が強く握られている事に気付いた大久保は彼の肩を叩いて、彼の顔を見た。正史は自然と肩の力を抜いた。

曰く、父親にとってさえも亜子は不必要な存在だったのだと、彼女は語る。

学校では、誰も彼女に話しかける者はいなかった。亜子の父親が母親を殺したという事実は、何故か学校中に知れ渡っていた。おそらく近所の同級生の父母の間で話が広がっていたのだろう、と亜子は推測する。何をされたわけでもなく、亜子の通う学校の生徒達はただ、ヒソヒソと噂するだけで、誰も亜子に近づく者はおらず、遠巻きにしていた。直接的では無いが、ある意味で間接的な『いじめ』を、彼女は受けていた。

「……だから、私はこれからもずっと、みんなにとって邪魔な存在でい続けるんだって、そこで気付いたんです。私は何をやっても迷惑を振りまくだけの存在だって……」

随分と思ひ込みが激しいな。大久保は心の中でそう呟いていた。

亜子はウサギのぬいぐるみをギュツと握りしめると、こんな話を話し始めた。

「だから私、死んじゃおうと思ってました」

「……え」

「ずっと迷惑をかけ続けるぐらいだったら、死んだ方が良い。そう思って、準備を進めてたんです……」

そして亜子は、死ぬ為の準備を始めた。それまで溜め込んできた思いの品は全て処分し、遺書も書き残した。薬も少しずつではあるが、溜め込み始めて、ようやく目標の量まで達しようとしたある日、彼女は出会った。

きっかけは、バイトが終わって家までたどり着いてから鍵を落とし、しまった事に気付いて、探していた時の事だった。

「これ以上、迷惑をかけたくなくて、死のうと思ってたのに、余計な迷惑をかけちゃう。そう思うと、悲しくて、辛くて……。そうしたら、声をかけられたんです」

「声？」

「綺麗で、可愛い声でした……。その声の人は、私が鍵を失くして『困ってる』事を知っていて、気になって振り向いてみたんです」

「（！ 困ってる事を知って……。まさか……。！）」

正史の予想通りの言葉が、亜子の口から出た。

「……そこには、白い魔法少女と、白い仮面ライダーが、いたんです」
「えっ!?? 白、って確か目撃情報が特に多い2人……」

「ホントにいたのかよ……。!??」
「……マジだったんだ」

令子、大久保、島田が驚く中、亜子が口にした2人と密接な関わりを持つ正史も、そこでようやくよく理解した。何故彼女が必要以上に九尾やスノーホワイトに近づこうとしているのかを。

「……あの2人と会ってから、私の中で、死のうという気持ちは無くなりました。それから、私もあの2人みたいに、必要とされるような人になりたい。そう思うように、なりました……」

でも……。とここで亜子は再び表情を暗くしたので、令子もまた顔

を覗き込む。

「でも、現実には、甘くありませんでした。どれだけ頑張っても、私の事を、認めてはもらえませんでした……。やっと一緒にいられると思ってた人も、私にとつての魔法少女や仮面ライダーを、否定して……。今でも、苦しんでいます」

『魔法少女も、仮面ライダーも、もういない！』

正史の脳裏に、ライダーや魔法少女の戦いの有り様に絶望して、全てから逃げ出してしまった少女の言い分がよぎった。

「……だから私、迷ってるんです。私がやろうとしてる事って、他の人にとつて邪魔にしかならないのかな、って……」

「なるほどねえ……」

大久保は唸りながら、いつの間にか手にしていた孫の手で軽く肩を叩いていた。令子と島田も複雑な表情を浮かべている。

すると、正史が口を開いた。

「そっか……。実はさ。俺もちよつと似たような事で悩んでて、ビツクリしちやった」

「……？」

「自分が正しいって思ってた事があるが、実は相手にとつて全然正しくないパターンに出くわす時が、最近をよくあるんだ。そういう時はいつも悩むんだけど、『正しい事』って、結局何なんだろうな？

……なんて思ってた」

苦笑いを浮かべながら髪の毛を掻きむしる正史。正史や大地らと同じ境遇に立たされている亜子にとつても、無関係とは言えないだろう。スノーホワイト……もとい小雪にとつて、魔法少女や仮面ライダーは、正しい事をやってのける象徴だと思っていた。だが現状を見るに、その理論は間違っているようにも見える。何が本当に正しいと言えるのだろうか？

「へえ。正史も悩む時があんのかあ。どくりでここんところ、しよげてる訳だ」

だが大久保の次の言葉が、2人の心を揺れ動かす事になる。

「正史。それと亜子ちゃん、だったな。今から言う事はオレ流の

ジャーナリズム精神に基づく言葉だ」

「どんなですか?」

正史と亜子が耳を傾けると、大久保はこう言った。

『「真実の一つだが、正義は一つじゃない」』

「正義は、一つじゃ、ない……」

「んでもって最終的には、自分を信じるしかないんだよ。考えてもみるよ? 同じ記事のネタ一つでも、書き手によって、全然考察が違うだろ? そして書かれてる内容は全部、書き手がこれだ! って思っ
て他人に読めるものにしたもんだ。読み手に伝わるかは本人の努力次第だが、自分自身が信じるものがそこにあるのは確かだ」

「……そうね。私も同感です。というより、そういう所が気に入って、この会社に入った訳ですから」

「令子さん……」

「……」

不思議な気分だった。気がつけば、正史も亜子も、憑き物が落ちたような感覚に見舞われた。2人の表情に微妙な変化が見られた所を
確認した大久保は一人頷くと、ハツキリとした口調で喋り始めた。

「さてと! んじゃあこの手の話はこれくらいにして、これから亜子
ちゃんを病院に連れてく事になるが……。令子はどうする?」

「私は、亜子ちゃんが襲われたっていう現場に向かおうと思います。
まだ目撃情報が多いと思われるから、今のうちに集められる情報を
集めてきます」

「あつ! だったら令子さん、俺も連れてって……」

「バカヤロー! お前には溜め込んでたデスクワークを片付ける仕事
が残ってるだろ。それが済むまで、今日は帰さないからな」

「ゲエツ!?」

「てな訳で島田。ちゃんと正史が仕事をやってるか、監視しとけよ」
「フフフ……。正史君、今日は逃しませんからね」

「ヒイヒイヒイヒイ……!」

ヒステリックな叫び声や、笑い声が社内を包み込む様子を見て、亜
子は新聞記者に対する偏見的なイメージが変わったような気がした。

その後、大久保の連絡で大病院に亜子を連れて行く事になり、亜子は大久保が運転する車に乗車した。亜子の叔父と叔母にも連絡を入れて、病院でおちあう事になっていた。令子は亜子から事件現場を聞き出した後、すぐに取材に向かった。正史は島田の監視の下で、デスクワークに追いやられていた。

「とりあえずさ。何か困ったりしたら、俺達の所に来てもいいよ。ナイトやリップルには上手く言っておくからさ」

会社を出る間に、正史から小声でそう言われて、亜子は小さく頷いた。なるべくなら、迷惑をかけないようにしよう、と自分に言い聞かせてはいるが。

「ま、背中をつけてたら体に毒だろうから、寝転んでも良いぞ。安全運転は心がけてるからな」

大久保は笑いながらシートベルトをつけて、車を発進させた。亜子は普通に座ろうかと思ったが、下手にシートに背中を血をつけてし

まっつては申し訳ないので、言われた通りにうつ伏せに寝転ぶ事にした。

雨は依然として止む気配がない。故に車の数も少ない為、割とスムーズに病院に向かえそうだ。

「予報だと、夕方まで降るって話だったなあ。ま、最近はあてにならないけど」

「そう、ですね……」

「けどまあ、話は変わるけど、よく堪えてる方だよな。ほかの人に迷惑かけまいと、自分を抑えてて……。俺には出来ない芸当だな」

「そんな事、ないと思いますよ……」

「ある意味、お前さんと正史は似てる所もあるな」

「えっ?」

「あいつ、普段は底ぬけに前向きなクセして、悩む時はとことん悩んじゃまう。出来の悪いあいつが1人で何もかも抱え込んでたって、マトモな答えを出せる訳でもないって、大学じゃ何度も言い聞かせてるんだがよ……」

「正史さんと、同じ大学、だったんですか?」

「ああ。だからあいつの事はなんとなく全部分かってる。それなりに腕もある奴だと思って、会社に俺が引き入れた。それで全部分かってたつもりなんだけどなあ……」

赤信号で止まった時、大久保が不意に表情を変えて、遠くを見つめ始めた。

「近頃のあいつは、かなりデカイヤマを抱えてるみたいだな。それも人に絶対言えないようなものだ。見てりや分かる。仮にも後輩だからな。今のあいつが背負ってるもんは、多分俺には何も教えてくれないな」

「……」

そうだろう、と亜子は考える。打ち明けてしまうと、その瞬間、資格は剥奪される。それは即ち、人としての『死』を意味する。今まで、亜子は死を恐れる事はなかった。それは自身の魔法がそうさせる所もあるが、他人に迷惑をかけたくないという想いが強かったからか、

『死』について深く考える事はなかった。この時点で人間味が薄れるとも言えるかもしれないが、それも過去の話だ。今は違う。スイムスイムらに襲われ、そこで初めて死ぬ事に対する恐怖を覚えた。

死にたくなかった。真実は話せなくとも、心の抛り所が、無性に欲しくなった。今住んでいる家だけでは足りない。もつと別の空間が欲しい。

「なあ、亜子ちゃん」

「！は、はい」

不意に名前を呼ばれて返事をする亜子。大久保はその様子に苦笑しながら、話を続けた。

「この先生きてりや、楽な事ばかり続くわけないし、時にはでっかい敵にぶち当たる。1人じゃ絶対に突破出来ないぐらい、強い敵だ。そういう時、1人じゃ無理だと分かったら先ず何をすれば良いか分かるか？」

「……………」

悩む亜子を尻目に、大久保は解答を提示した。

「大勢の奴がいるところに逃げ込むんだよ」

「えっ……………」

逃げ込む、という予想だにしない発想に、亜子は自然と口を開けている。

「逃げ込んだ先に誰かいれば、誰か1人くらいは相談に乗ってくれる。んでもってそいつと協力して敵に立ち向かう。それでもダメそうだったら、また別の所に逃げ込む。んで協力してもらおう。そうやって人同士が繋がってけば、最後はでっかい岩みたいに一丸になって、それまで出来なかった事が出来て、新しい事に気づける。要するに、『自分だけの逃げ場所』を確保しておく事が大事だ」

「私の、逃げ場所……………」

誰かに助けを求める。そんな簡単に、見つけられるだろうか。亜子の疑問は、大久保が解消してくれた。

「ま。小難しい事はほっといてな。辛くなったり、困った事があつたら、『OREジャーナル』っていう『逃げ場所』があるって事だけは忘

れるなよ。お前さんの味方になれるのは、正史だけじゃなくて、俺や令子、島田もだからな」

「……はいー」

「お、見えてきたぞ」

両目にうつすらと溜まり始めた水滴を軽く拭った亜子は、窓の外から大久保の言うように、病院が見えて来たのを確認する。

今はまだ、素直に気持ちは伝えられないかもしれない。魔法少女としてももちろんだが、鳩田 亜子として、自分を必要としてくれる人には、まだ出会えないかもしれない。

「(それでも、これだけは、言わせてほしい)」

くありがとうく

そんなありきたりの言葉が、自然と口から出せた。

84. ゴルダ危機一髪

夜明けから降り続いていた雨は、ようやく勢いを弱め、雲の隙間から日光が見え始めた夕方。

令子は亜子が襲撃された現場を中心に、下校途中の生徒や、通りかかった人々から情報収集をしていた。

「じゃあ、その黄色いパーカーを着た人は、その場で突然蒸発したかのように、姿を消したという事なんですね？」

「ええ。遠目で見ただけですけど、驚きましたよ。いやあ、あの時のやつ撮っとけばなあ……」

「ホントですよ。それに後で聞いた話じゃ、ナイフ見たいな鋭いものを持ってて、それで急に女の子に振り下ろしたって」

「そういえばあの女の子、大丈夫だったのかなあ……」

「その子の事ですが、こちらの調べでは、無事に保護されて、念のために病院に連れて行って、問題なかったそうです」

「へえ、そうだったのか」

「そりゃあ何よりだ。……けど、2日前の中宿のアレといい今回の事といい、なんか急に慌しくなったよな」

「そうそう。ちよつと前までは仮面ライダーとか魔法少女とかがブームになってたのに、最近は目撃情報が減ったらしくて……」

「……魔法少女、仮面ライダー……」

取材に応じてくれた2人のサラリーマン達の会話を聞いて、令子は少し考え込む素振りを見せた。

その後2人にお礼を言ってからその場を後にし、次の聞き込み調査へ向かおうとしたその時。令子の視界に、見慣れた人物がいた。坂の上で傘をさしながら、下方に広がる街を寂しげに見下ろすスーツ姿の男性は、令子にとつてできる事なら関わりたくない人物だったが、その時の彼の表情が気になった令子は声をかけた。

「北岡さん。どうかしたかしら？」

「……ああ、令子さん。こんな所で会えるなんてね」

「あら。今日は口説き文句から入らないのね」

「おっ？ ひよつとしてちよつと期待してた感じ？」

「いえ全く」

令子は冷たくあしらい、北岡はそれを見て肩をすくめる。

「まあぶつちやけ、今日はそんな気分じゃないってところかな」

「珍しいわね。……とところで、今日は他の2人は一緒じゃないの？」

そう尋ねられて一瞬、表情が固まる北岡だったが、令子を前にしている事に気付いて、慌てて返事を返した。

「ま、まあね。真琴は友達の家に戻ってるし、ゴロちゃんは……。……うん。買い物に出かけてる。たまには1人でぶらぶら歩きたかったからさ」

「そう」

「(令子さんには、余計な心配させたくないもんな)」

北岡はなるべく平気を装って誤魔化した。

1人になりたいという気持ちは本当だった。2日前に長年秘書を務めて唯一心を許した親友の吾郎は、カラミティ・メアリが仕掛けた爆弾による被害から人々を守ろうとし、そして命を落とした。戦いという渦中で、何の関係もない者達が巻き込まれること事態、北岡も真琴も想定していた。が、仲間の死の前に、想像以上に堪えるものが確かにあった。

だからこそ、北岡も真琴も変わろうと思った。やはり自分の手を汚さずに勝ち残れるほど、現実は甘くない。が、それでも迷うところがあった。

『先生は、最後まで変わらないでいてください』

『ゴロちゃん……』

脳裏に、吾郎の最後の言葉が浮かび上がる。北岡は蚊の鳴き声ほどのトーンで親友の名を呟いた。

「？ どうかしたの？」

「あ、いや何でも……。それより令子さんこそ、今日はどうしてここに？」

「あなたが知ってるかどうか分からないけど、今朝この近くで通学途中の女子中学生が、通り魔に襲われて、怪我をしたの。それでその取

材中だったわけ」

「へえ。そういえばさつきからパトカーをよく見かけてるけど、そういう事だったんだ。……ああ、立ち話も何だしさ。ちよつと休憩しない？」

「……まあ、それぐらいなら」

そこで北岡と令子は、雨宿りに最適な場所へと移動を始めた。

2人の後方に広がる水たまりが雨に打たれて波を打っている。その水たまりから、音もなくピンク色の髪の毛の少女の頭だけが出てきて、2人の後ろ姿をジツと見つめている事に、2人は気付いていない。

ようやくたどり着いた場所は、現場からそれほど離れていない、人の少ない通りに佇むビルの屋外のベンチだった。屋根が上にあるため、多少の湿気こそあるが、座って腰を休めるには申し分なかった。

道中で北岡が購入したホットコーヒーを受け取り、一口含んだ令子は北岡にこれまでの取材で判明した事を話し始めた。

「普通に考えれば、人がその場で蒸発するなんてありえない。あると

すれば、地面に潜り込んだとしか……」

「潜り込んだ……？ どうしてそう思うんだ？ 大体、人間にそんな芸当ができるわけ……」

「そう。普通の人間ならね」

「？ じゃあ何？ その子を襲ったのは、普通の人間じゃないって事？」

北岡が首を傾げる中、令子はこの事を話し始めた。

「あなたもこの街に住んでるなら、魔法少女や仮面ライダーの噂ぐらい、耳にしているわよね？」

「え、ええまあ。ってか、まさか令子さん。そんな奴らが現実にいるって、本気で信じてるわけ？」

「私も最初は単なる都市伝説だと思ってたわ。……けど、これまで頻繁的に目撃されているって情報が多いのも事実だし、一昨日の中宿の事件でも、多数の目撃情報が入ってきてるわ。それに今回被害に遭った女の子……亜子ちゃんは確かに白いライダーと白い魔法少女を見たそうなの。それに……」

「それに？」

「ついさっき仕入れた情報なんだけど、近くで若い女性の刺殺死体が見つかった事に関連して、最近この街で相次いで起きてる不審死も引つかかる所があるの。一昨日の件に、今朝の件。そしてこの街を中心に起きている、行方不明事件や不審死……。魔法少女や仮面ライダーの事と合わせて、この一連の事と、何か繋がりがるように思えるの」

「へえ。でも令子さんらしくない見解だね。そりゃあバカバカしいよ」

実際は当事者でもある北岡は内心焦りながらも、どうにかして否定的な言葉を告げる。が、逆にその対応が令子の気に障ったらしく、眉をひそめて問いかけた。

「あなた、もしかして何か知ってたりする？」

「さあ。考えすぎじゃないですか？ まああまり思いつめないで、少し頭を冷やしましょうよ」

そう言つて温かいコーヒーを口にする北岡。令子は鼻を鳴らして、同じくコーヒーを口にする。

「でも、何か気になるのよね……。この街で起きてる様々な事が、単なる偶然が重なつてるとは思えないの」

「行き詰まつてるなら、いつその事違う取材に切り替えたらどうですか？」 『北岡 賢治の密着24時』……的なの？」

「あのね……」

やはりいつも通りだった、と言わんばかりにため息をつく令子。とはいへ北岡自身も、令子と話すうちにモヤモヤしていた気分が晴れていくような気がしていた。やはり令子さんは今までの女性と格が違うなあ、と思つていると、異様な視線を感じて、北岡は気配のした方に顔を向けた。

一瞬だけだったが、ピンク色のスク水を身にまとつた、無表情な少女が顔や全身を引っ込める動作を北岡は確認した。

「！（あいつは……）」

「どうかした？」

チャットルームで、アバター姿だけではあるが、彼の記憶が確かならば、ルーラがリーダーとして統括していた派閥に所属していた、胸が異常に大きかった少女がそこにいた。北岡が眉をひそめ、令子が気になつて声をかけた。

北岡は顔を令子に向けて、何ともない、と言おうとして、気付いてしまった。令子の左手奥にできた水たまりに一際大きな波紋が広がり、鋭く光る刃が突き出てきた事に。そして勢いよく刃が飛び上がり、それが薙刀だと分かつた時には、その持ち主の全身が地上に出ている。ピンク色のスク水と巨乳が特徴的な少女は手に持った薙刀を振り下ろそうとしていた。その目線の先には令子が。

「令子さんー！」

「えっ!? キゃあー！」

令子が振り返るよりも早く北岡が引き寄せ、振り下ろされた薙刀『ルーラ』は、令子の頬を掠め取った。傷は大した事なく、少量の血が流れる程度で済んだが、北岡が気付いていなければ、令子も無事では

済まなかっただろう。

「令子さんしつかり……！」

「うっ……」

令子はどこかで頭をぶつけたらしく、そのまま気絶した。北岡は令子から手を離し、彼女に襲いかかった魔法少女『スイムスイム』をこれでもかと睨みつけた。スイムスイムは相変わらず無表情のまま、近くのガラス窓に飛び込んだ。ミラーワールドへ逃げたようだ。

令子を屋根の下に寝かせた後、スイムスイムが逃げ込んだガラス窓に向かって取り出したカードデッキをかざした。

「変身！」

ポーズを決めて、ゾルダに変身した北岡は、誘われるようにミラーワールドへ突入した。

スイムスイムを追いかける為に走っていたゾルダは、ミラーワールド内のビルの前で足を止めた。スイムスイムがルーラを手にとって、待ち構えていたのだ。ゾルダは憤然とした態度でスイムスイムに怒鳴った。

「どういうつもりだお前！ 何で令子さんを狙った！ 令子さんは関係ないだろー！」

「ルーラが言ってた。正面から勝てないと分かっている強い相手に、無闇に正面から戦うのは愚図のやる事。正面から勝てないなら、それ以外の方法で戦えばいい」

呆然と呟くスイムスイムを前に、ゾルダは怒りを通り越して、呆れが生じていた。

「お前、何言ってるんだ……？？」

「魔法少女も仮面ライダーも、一般人に正体を知られてはならない。立ちはだかる敵は、どんな手を使ってでも倒す。ルーラならきつとそうする」

今朝方、ハードゴア・アリスを仕留め損ね、ミナエルまで脱落したが、念のためにと襲撃現場を見回っていたスイムスイムだが、偶然にも自分達の事を探ろうとしている令子に目をつけたようだ。

スイムスイムにとって、令子は自分達の正体を探ろうとしている

『敵』であり、秘密がバレる前に排除しようと考えているようだ。当然ゾルダが納得するはずもなく、マグナバイザーに手をかける。

「さつきから訳のわからないことばかり口にしてるけどさ。……どうせお前も魔法少女だからな。倒すに越した事ないからね」

「……邪魔するなら、倒す」

スイムスイムがルーラを両手で持ち、掲げると同時にゾルダの持つマグナバイザーの銃口から火が吹いた。銃弾をルーラで弾きながら、スイムスイムは反撃とばかりにルーラを振り回してきた。これをゾルダは身を翻しながらかわし続ける。元々遠距離戦法を得意とするゾルダに、接近戦は不向きなのだ。

「フンッー」

だが不得意な接近戦を利用して敵にダメージを与える方法もある。左腕でルーラを振り払い、バランスを崩したスイムスイムに向かってマグナバイザーを狙い定めて、引き金をためらいなく引いた。

が、すぐにゾルダは目を見開いた。銃弾がスイムスイムの体をすり抜けたのだ。直撃を受けたにもかかわらず、スイムスイムの体からは血が流れず、本人は平然としている。動きが止まったその隙をついて、スイムスイムは反撃とばかりに、ゾルダの腹を蹴り上げた。そしてルーラの柄を振り回し、ゾルダを弾き飛ばした。

「ぐっ……！…こいつが効かないなら……！」

『ADVENT』

スイムスイムがルーラの刃先を突き出す前にゾルダがマグナバイザーにカードをベントインし、契約モンスターであるマグナギガを盾にして、新たなカードをベントインした。

『SHOOT VENT』

自身の身長よりも長いギガランチャーを構えて、マグナギガの合間を縫うように砲撃した。が、結果は先ほどと同じく、砲弾はスイムスイムの体をすり抜け、後方にあった木に被弾し、根元から折れた。

「何？？」

自身の攻撃をまるで寄せ付けていない事に驚くゾルダ。

「(ひよっとして、あいつの魔法か？ だとしたら相当マズいだろこの

状況……!」

次の一手を迷うゾルダに対し、スイムスイムの方は早かった。

「……アビスハンマー」

「うわっ!?」

スイムスイムがパートナーの契約モンスターの名を呟くと、現れたアビスハンマーがゾルダの後方から狙撃を始めた。不意をつかれたゾルダは前のめりに倒れ込み、スイムスイムに接近を許してしまった。慌てて立ち上がって回避するゾルダだが、ルーラの一太刀が彼の右腕を掠め取り、血が流れた。

「グウツ……!」

「……アビスラツシャー」

スイムスイムは出し惜しみする事なく、もう一体の契約モンスターを呼び寄せて、ゾルダと交戦させた。2刀の刃を振るうアビスラツシャーを前に、右腕を負傷したゾルダは対抗手段が間に合っていない。追い詰められたゾルダはアビスラツシャーに羽交い締めにされて、身動きが取れなくなつた。アビスハンマーもそれに加わり、抵抗する術を失つたゾルダが叫んだ。

「随分と汚い真似するじゃないか……!　　そういう女は美しくないね……!」

『強い奴はどんな手を使つても倒せ』。それがルーラの言葉だから「ルーラって、お前……!」

ゾルダが何かを言いかける前に、迅速に仕留める。そう決めたスイムスイムはマジカルフォンを操作して、自身の右腕にアビスクローを装着し、突き出した右腕のアビスクローから『アビスマッシュ』を放ち、激しい水流がゾルダの視界を遮った。水を飲んで意識が朦朧としているうちに、スイムスイムは接近し、ルーラを振り下ろす。

「ハアッ!」

「……!」

だがルーラがゾルダに届く事はなかった。それを剣で受け止める者が現れたからだ。

それはダークバイザーを持ったナイトだった。そしてそのままス

イムスイムを押し戻し、スイムスイムとの一騎打ちを始めた。

「あいつ……！」

「ラアツ！」

「先生！」

と、今度はゾルダを押しさえつけていたアビスラッシャーとアビスハンマーに向かって体当たりをする2つの影が。1人は白い狐のライダー『九尾』で、もう1人はゾルダのパートナーであるマジカロイド44だった。

「ゾルダ！」

「！」

九尾の合図を受けて、ゾルダは落ちたマグナバイザーを拾って、2体に連射を放った。2体は銃撃を正面から受けて後ずさり、ナイトに苦戦していたスイムスイムの横に並び立った。スイムスイムがルーラを構え直すと、ゾルダとスイムスイムのマジカルフォンから、音が鳴り響いた。活動時間の限界を迎えたようだ。

「(時間もないし、数の差がありすぎる……。これは私1人では難しい)」

そう判断したスイムスイムは、以前ルーラが口にしていて、戦略的撤退という言葉を思い出しながら、高く跳躍してその場を後にした。2体の契約モンスターもその後が続いて、退散した。

九尾が一息ついていると、ナイトが口を開いた。

「すぐに出るぞ」

「先生、私に掴まってくださいな……！」

「あ、ああ……」

スイムスイムとの戦闘で疲労したゾルダを、マジカロイドが右腕を首の後ろに回して、肩を支えた。が、身長の高いマジカロイドだけでは動きづらいただろうと思ったのか、ナイトと九尾も手を貸した。

3人の協力を経て、ミラーワールドから脱出したゾルダは、その場で変身を解いた。雨はすっかり上がっていたが、額から流れる汗は尋常ではなかった。他の3人も変身を解除し、息を整えていた。3人が合流したのは偶然であり、反応をたどって行き着いた先でゾルダがスイムスイムと戦っているのを見て、介入したのだ。

すると、北岡が後方の壁に体を預けた。

「北岡さん、大丈夫ですか？」

「先生！」

真琴が心底心配そうに駆け寄る中、北岡は自分の手を見つめていた。よく見ると、その手は震えている。

「信じ、られるか……！ この俺が、あんな、訳の分からない奴に……！ あいつが強いのか、それとも、俺、が……」

そう呟きながらも立ち上がって、どこかへ立ち去ろうとした北岡だったが、不意に北岡の体がグラつき始めた。

「！」

そしてそのまま、北岡は前のめりに濡れた地面に向かって倒れこんだ。

「北岡！」

「先生！」

「おい！」

3人は慌てて駆け寄り、体を揺さぶるが、目を覚ます気配はない。真琴がこれでもかかと体を揺らし続ける中、異常事態だと悟った蓮二はスマホを取り出し、病院に連絡を入れた。

大地はただ、目の前で突然倒れた北岡と必死に彼の名を叫ぶ真琴の姿を見て、困惑するしかなかった。

85. 迷える狐

「……本当なんですか、それ」

「……確信はありませんけど。近頃の先生の様子を見てると、どうにも悪い事ばかり想像してしまつて……」

空のベッドの上に腰掛けている大地と真琴は、直ぐそばのベッドに目を閉じて横たわっている北岡に目をやった。

スイムスイムを撃退した後、突然倒れた北岡を介抱する為、蓮二が呼んだ救急車に乗せて、病院へと搬送された。幸いにも意識はあるとの事で、じきに目を覚ますだろうと担当医は語っていた。

だがその場に立ち会った大地と蓮二には、何故急に北岡が体調を崩して倒れこんだのかが分かっていなかった。2人が原因を知ったのは、他に患者がいない大部屋のベッドに運ばれて、ひと段落ついてからの事であり、パートナーの真琴の口から、倒れた理由や、彼が無理してでも戦おうとする訳が話された。

「吾郎さんの分まで生きたい。それは私も同じです。でもその為には、戦わなくてはいけない。……何れこうなる事は分かっていました。でも……」

「敵討ち……か。俺と同じ事を、北岡さんは……」

大地もまた、恩師や同胞に手をかけたベルデを殺そうと、孤独を背負う覚悟で戦った。が、結局それは叶わなかった。自分自身が無意識のうちに踏みとどまつてしまったからだ。もしこのままいけば、北岡は自分と同じようにためらつてしまうのだろうか。

そんな疑念が浮かぶ中、病室の扉が開いて、缶ジュースを買いに別行動をしていた蓮二が戻ってきた。

「北岡の方は……?」

「もうじき目を覚ますそうです。ただ……」

「病状の悪化は間違いない、と」

「……」

真琴が黙つてコクリと頷く。

北岡を運び終えた後の診察室で担当医が語った、北岡が背負ってい

るもの。それこそが、いつ死ぬかも分からない恐怖との戦いだった。

聞けば、真琴が知り合うよりも前から不治の病に侵されていたらしく、吾郎も出会った当初はその事を知らなかったらしい。以来、真琴と吾郎以外の面々にはその事をひた隠しにして、弁護士の仕事とライダーの仕事を両立させていたのだという。

「(医者の話だと、もう末期に近いって事になってる……。今続いている戦いの決着がいつになったらつくのか分からないのに、そうまでしてこの人が戦う理由って、何なんだよ……)」

大地の疑問がさらに膨らむ中、不意にベッドの上に寝かされていた男が咳き込むと共に目を開けた。

「！ 先生……！」

真琴が立ち上がり、北岡のそばに寄った。北岡は真つ先に真琴の姿を確認した後、後方にいる大地と蓮二に顔を向けた。

「真琴……。それに、お前らまで……」

「傷の方は大した事はない。お前が倒れた本当の理由。……医者と真琴から聞いている。全てな」

北岡は真琴に目を向けると、目線を逸らされた。事情は全て向こう側に知られていると分かった北岡は、素っ気なく答えた。

「別にお前らが気にする事じゃない」

「もちろんだ。お前が不治の病にかかっているように、友の仇を考えていようが、ライダーや魔法少女の世界に同情なんてない。それだけだ」

「……」

「ま、そういう事だな」

同情なんてない。その言葉が大地の胸の奥底に染み付いた。しばらく沈黙が続いたが、蓮二は立ち上がって、背を向けた。

「そろそろ失礼させてもらうぞ。今日はトップスピードから招きを受けててな。リップルと龍騎も一緒だ」

「トップスピードから……?」

「大地。お前も家に帰ったらどうだ? 親が心配するぞ」

「……はい」

そう言つて大地も蓮二の後に続くこうとする。すると2人に向かつて、北岡が疑問を投げかけてきた。

「しかし分からんな。お前ら、そこまで分かつて、何で俺を助けようとしたんだ？」

蓮二は一旦立ち止まり、一瞬だけ脳裏に龍騎の変身者である正史の顔を浮かばせてから、首を横に振つて、こう答えた。

「前に作らされた借りを返そうとしたただけだ。これでチャラになっただろ」

蓮二が言っているのは、以前ファム改め霧島 美華の死を受けて、半ば自暴自棄になりかけていた正史の事を大地達にマジカルフォンを通じて教えてくれた事だろう。

それを察した北岡は、病院に似つかわしくないような高笑いをした後、ポツリと呟いた。

「嫌な奴だな。お前」

「お互いにな」

蓮二もフツと笑みを浮かべて、再び歩き出そうとする。が、そこへまた北岡が声をかけた。が、今度は大地に向けられたものだった。

「それはそうと、そこのお前。ええつと、大地……だったか？」

「……？」

「お前、随分と何かに迷つてるみたいだけど、早いとこ解決しとかないと、取り返しのつかない事になるかもよ」

「……」

「ま、俺が言うのも何だが、こういう機会を使つて、大人の黒い所もちゃんと目を通しとけば、良い事あるかもよ。別に俺みたいになれとは言わないけどさ。でも俺は、俺の為に戦うつもりだし。今は降りるつもりないよ」

「……」
「親切にどうも」

それだけ呟くと、大地も蓮二と共に病室を後にした。

「しっかしまあ。シローもファヴも、思い切った人選をしたもんだねえ。何も未成年相手にここまでやらせる事もなかっただろうに。真琴はどう思う？」

「私は……」

大地ときほど歳が離れていない少女もまた、返答に困り果てている様子だ。

翌日。

この日の授業も全て終わり、身支度を済ませようとしている大地に、クラスメイトが声をかけてきた。ゲームセンターに寄り道しないか、という誘いだったが、

「……ごめん。送ってく用事があるから。またな」

とだけ告げて、教室を後にした。

「送ってくって、誰の事だ？」

「あいつじゃねえの？ ほら、小学校の時の同級生で、今足を怪我してるって……」

「ああ。そいつを家まで送るって事か。よくやるよなあ」

クラスメイトは口々にそう語り合っていた。

彼らの推測通り、大地がまっすぐに向かったのは、親友の颯太がいる教室。扉を開けて、窓際の席で椅子の代わりに車椅子に座って、窓の外を眺めている颯太を見つけて、近寄って声をかけた。

「颯太。行くか」

「あ、大地か。……うん」

大地は颯太の後ろに立ち、車椅子の取っ手を掴んで、外へ連れ出した。颯太のクラスメイトだけでなく、通りかかる生徒達もここ最近は見慣れた光景だったので、気に留める者は少なかった。

学校の門を出て、静かな住宅街に差し掛かるまで、2人の間に会話はなかった。そんな中で最初に口を開いたのは颯太だった。

「小雪とは、あれからどうなってる……？」

「……別に。連絡してるわけじゃないし。しばらくはそつとしたい方が良いつて、手塚さんも言つてただろ？」

「でも……。……まあ、そうなるか」

小雪ことスノーホワイトは、あの日以降、集合場所に来ることはなくなつた。ひよつとしたらどこかで待っているのではと淡い期待を寄せて、鉄塔やビルの屋上など、これまで拠点にしていた所は立ち寄ってきたが、誰一人としてスノーホワイトの姿を見る者はいなかった。彼女自身が魔法少女を否定してしまったので、もう活動すらしていないのでは、と大地は推測する。

「小雪……」

幼少期は、よく魔法少女の事を互いに語り尽くしていた颯太は、シヨックを隠しきれない様子だ。

「（人殺し……か。でも今の俺はどっちつかずだ。北岡さんは自分の為に戦おうとしてる。でも俺は……？俺は何かを背負つて、目的があつて戦おうだなんて考えた事なかった。……いや、そもそも）」

そもそも、なぜこのような事になつてしまったのか、自分でもよく分かっていない所がある。大地は周りを見渡して、2人以外誰もいない事を確認してから、マジカルフォンを取り出して操作した。

「大地？ 何を」

『呼んだかね？』

大地のマジカルフォンに立体映像として現れたシローは、呼び出し主に問いかけた。颯太が険しい顔つきになる中、大地はシローに質問を返した。

「……N市の仮面ライダーや魔法少女を削減する為の、マジカルキャンデーの競い合い。それが当初のコンセプトだったはずだよな」

『ああ、その通りだ。それがどうした?』

「でも今、どこで歯車が狂ったのかも分からないまま、文字通り、命がけの戦いが始まった」

『そうだな』

「……なあお前。最初から、こうなる事を分かってたんじゃないのか。最初は16人、次に8人。どう考えたって、土地の魔力が枯渇してるからって理由付けは、無理があるように見える」

『それを知ってどうするつもりだ。今更このルールを変える事は出来ない』

「シロー、お前……!」

颯太が今にも飛びかかろうとするが、大地がそれを制し、こう尋ねた。

「お前が簡単にボロを出すだなんて思っていない。聞きたい事は他にある」

『何だ?』

「お前らの目的は何だ。何を理由に、こんな戦いを仕組んだんだよ」

『仕組んだ、とは人聞きの悪い言葉だな』

シローが呆れたように呟く。が、やがてこう語り始める。

『理由を問われているわけだが、そんなものはない』

理由はない。またその一点張りかと思っていた2人だったが、シローは続けざまにこう答えた。

『だが、私の客観的立場からして意見を述べるとすれば、今の状況を作り出した要因。それは「内にある欲望」だと私は考えている』

「僕達の、欲望……!??」

予想外な返答に目を見開く2人。

『一国の女王や国の大統領、首相、救世主と謳われている者、奴隷、平

民、ごく普通に生活している者。ありとあらゆる人物に共通して保持しているもの。それが「欲望」だ。秘めたる度量に違いはあれど、人は必ず欲を持って社会を動かす。君達もまた、欲望を持って力に選ばれた』

「欲望……。それがこの戦いに何の関係があるんだよ」

『ここまで来たのだから、話しても良いだろう。我々が選抜した32人のメンバーには、この街の住民の中でもより強い欲望が見受けられていた。「夢の中でずっと楽しんでいたい」「大切な人と幸せになりたい」「仇を討ちたい」。……そういった欲望がこの戦いを創り上げた』

「……!」

シローの言う通りかもしれない。
大地は『退屈な日常を変えたい』と思っていた時に仮面ライダーに選ばれた。颯太は『魔法少女を大好きでい続けたい』、小雪は『魔法少女になれたらなりたい』、手塚は『避けられない運命を変えたい』、正史は『仮面ライダーみたいに人助けを勤めたい』と、心のどこかで願っていた。皆が、何かしらの形で欲望を抱いていた。

『全ての人間が欲望を背負い、その為に戦う。そして、その欲望が背負いきれないほど大きくなった時、力に変わる。その象徴こそが仮面ライダー。それこそが魔法少女』

シローの言葉に、何も言い返せない大地。そんな彼を見て、シローは思った。

『(人間……。やはり複雑な回路を形成している生き物だ。この試験が終わるときに得られる「答え」がますます気になるな。人材育成計画とはよく言ったものだ)』

シローは考え事をやめると、呼び出し主に告げた。

『では、これ以上質問がなさそうだから、この辺りで失礼させてもらおうよ』

そう言ってシローは姿を消した。颯太は前を向いたまま、車椅子の上で拳を握りしめた。一方で大地は険しい表情を崩さない。

「(欲望……。こんな俺にも、まだ残ってるって事なのか……。？ 仇も取れず、パートナーを傷つけて、信頼を失った俺に、まだ戦う理由が

あるとしたら、それって……」

夕日に照らされている大地は、マジカルフォンからしばらく目を離せなかった。

彼が『答え』を見つける時は、いつ来るのだろうか……。

86. 1人じや怖くても

それは、雨上がりの夜だった。

中宿での激戦から早くも2日が経ち、互いになりを潜めているかと思えば、この日もまた、新たな脱落者としてミナエルの名が挙げられた。残る脱落者の枠は12。生き残りをかけた戦いは、まだ終わらない。

そんな緊迫感が高まる中、トップスピードはチームメイトの龍騎、ナイト、リップルの到着を待っていた。濡れた地面に座らずに待ち続けていると、ようやく3人が出揃った。

「お、来たなー！」

「イヤ、ゴメン遅れちゃって。今日いろいろあつてさ……」

やや徒勞しているような様子を見せる龍騎。思えばこの日の龍騎は多忙に追われていた。通勤途中で襲われていたハードゴア・アリスの変身者である亜子を助け、OREジャーナルに連れて行って手当てをしたり、その後は大久保に言われて島田の監視の下で、デスクワークに追われて、ようやく仕上げが済んだ頃にはヘトヘトになっていた。それでもこの日はトップスピードとの約束がある為、体を無理やり引きずってやってきたのである。

一方でナイトの方も、つい先ほどまでスイムスイムと交戦していたゾルダの変身者である北岡を病院まで連れてきて、そのまま直接集合場所に向いたのだ。

「……それで。今日は話してくれるんだよな」

リップルはトップスピードのお腹に一度目をやってから、彼女に問いかけた。2日前に判明した、トップスピードの秘密。その詳細を本人から聞く為に、リップルを含む3人はやってきたのだ。とはいえ、龍騎はすでに事の次第は聞いている為、あくまで補足説明をする担当になるわけだが。

「んじゃ、ここで話すのもアレだから、ついてきなよ。俺の家に招待するぜ。そこで話すよ。俺が生きたい理由。それからこの腹の事も」

トップスピードの提案で、場所を移し替える事となり、一同はラ

ピッドスワローにまたがるトップスピードを先頭に、つばめが住むマンションまで飛んでいった。トップスピードの後ろに乗っているリップルは、空を飛んでいる間は一言も話さずに下界を見下ろしていた。中宿の方は、相変わらず瓦礫などの撤去作業が続いている。あの場でライダーだけでなく、多くの一般市民が犠牲になったことを考えていると、リップルは次第に拳を固めていた。

やがてマンションの屋上に着地し、4人は変身を解いた。

「ここを降りたらすぐのところが、俺んち。今は俺以外住んでないから、ベランダから入っても良いんだけどな」

マタニティドレスに身を包み、膨れた腹に手を当てているつばめは、笑いながら階段に向かった。正史、蓮二、華乃も後に続き、階段を降りてすぐの扉の前に立つと、鍵を開けて、部屋に入り込んだ。靴を脱いで先ず向かったのはリビング。物はそれなりに置いてあるが、整理整頓されており、手際の良さが出ている。物は置いてないが、ここまで綺麗にしようとは思っていない華乃は、思わず目が惹かれていた。

テーブルの上には、ラップに包まれた手料理の数々が用意されていた。予めつばめが作っておいたものらしく、初めから家に招き入れるつもりだったのだろう。

「折角面と向き合って話すなら、何か食べながらの方が気楽だしな」

「……これ、全部あなたが？　っていうよりその体でここまでする？」

「まあな。今までも料理は俺が全部やってたからな。昇一がいる時も、正史達に振る舞う時も」

「昇一？」

初めて聞く名前に、蓮二は訝しむ。その返事はすぐに返ってきた。

「……うん。俺の旦那。そこに写真があるだろ？」

ラップを外しながら、つばめが指さした先には、つばめと昇一のツーショット写真や、昇一だけが写っているものなどがあった。

「この人が昇一さん……」

正史自身、名前は聞いたことがあるが、姿を見るのは初めてだった。「そいつはどれも新婚の時のやつだな」

「ふくん……。で、いつ帰ってくるの？ さすがに遅くまでいたら、不審に思われるんじゃない？」

「……あー」

華乃の言葉を聞いて、正史がハツとするが、もう遅い。正史が振り返ると、つばめはラップを外し終えて炊飯器の前に立つところだった。炊飯器に手を当てながら、つばめ口を開いた。

「……もう、帰ってこないんだ。あいつはもう、俺達の手が届かないところまで旅立ちまわってる。もうすぐ5ヶ月になるかな？ そりやあ帰ってきてくれたら嬉しいけどさ」

「……！」

華乃は己の失言を恥じた。黙り込んだ華乃に目をやって、つばめは笑いながら声をかけた。

「別に気にしなくてもいいって。お前が悪いわけじゃないんだし。昇一を死なせちゃったのは、俺のせいでもあるし」

「……どういう事だ」

「そいつは後で話すよ」

そう言って炊飯器の蓋を開けるつばめ。ホカホカの白米が次々と茶碗に添えられていき、出来上がったところで、つばめは茶碗をテーブルに運んだ。その際正史も運ぶのを手伝ったが、不意に茶碗が5つある事に気付いた。1人多くはないかと思ったが、すぐに5つ目の茶碗の行方が分かった。昇一の写真の前に、黒色の箸と共に白米が盛り付けられている茶碗を置いた。

「仏壇とかは向こうの実家につて事になったから、俺はせめて、こうするぐらいしかないんだけどな」

そう言って両手を合わせて目を閉じるつばめ。しばらく静止した後、つばめはテーブルに戻って席に座ると、3人を座らせるように示唆した。

「ほら、突っ立ってないで座りなよ。冷めないうちに食べようぜ。あ、でも今日はワインとかは無しで。さすがにそこまで用意出来なかったし、腹がこれだしな」

「別にそこまでされなくても良い。今はお前の健康が第一だからな」

「へえ、蓮二も言うようになったな」

「……フン」

そうしてつばめの隣に華乃が並び、向かい側に正史と蓮二が座る形で食事が始まった。

最初のうちは雑談交じりに料理を口にしていた。華乃は普段から少食だったが、カボチャの煮付けだけは黙々と食べ進めていた。甘すぎるものはなるべく敬遠していたが、いつの間にか美味しいと思えるようになっていた。これも彼女が成せる『魔法』なのだろうか。

「くそ甘いけど、嫌いにはなれないな……」

そして、おかずの量が残り半分辺りになったところで話題は、つばめの事が中心となった。昇一との出会いから結婚、妊娠、魔法少女へ半ば強引にスカウトされた事。……そして、愛する夫が先立たれた事も、包み隠さず話した。

中でも華乃や蓮二を驚かせたのは、昇一に手をかけた人物が、仮面ライダー『王蛇』の変身者だと判明した、浅倉 陸だという事実だった。

「あいつが、昇一って人を……!」

「そういう事になるけどな。……でも、俺だって責任ぐらい感じてるさ。俺の我が儘に巻き込まれて、そのせいで昇一が死んでしまったわけだし」

残りのおかずを口に頬張り、ご馳走様と告げたつばめ。その後は温かいお茶を飲みながら、話を進めた。

「最初はショックだったさ。……でも、久しぶりにご飯を食べてくうちに、生への欲が出たっていうか。人生もつと楽しんでいかなきゃって思うと、力が湧くんだよなこれが。この争いが始まった時とかは、最低でも半年は死にたくないって気持ちはずと強くなったよ」

「……そうか。話は変わるが、城戸は今の話は？」

「ああ、前に話してくれたんだ。美華が殺されて、ヤケになってた時に、つばめの姿で話してくれたんだ。俺にこれ以上、自分勝手な私怨で戦わせたくないって言ってくれて……。だから、俺ももつと頑張ろうって変わった。失った命は戻せないけど、今ある命だけは、絶対に

守り切ろうって」

その信念があったからこそ、スイムスイムとアビスの強襲から、トップスピードやそのお腹の子を守りきれたのだろう。そして彼の決意を聞いて、トップスピードは心底嬉しさが溢れ出ていた。

「俺はこいつを産むまで絶対に死なないし、誰も俺の周りで死なせない。絶対に生き残ってやる。……なんて、出来るなら旦那の前で言っておきたかったけど、それももう無理だしな」

つばめは昇一の写真に目をやり、お腹をさすりながら呟いた。

「結局、迷惑かけたまま、何も言えずに終わっちゃまったな、あいつの人生。俺の子供も見せてやりたかったよ。もうそれも叶わないけど」

「……どうして」

「ん？」

「何でお前は、昇一さんって人の仇を取ろうって考えないの……？」

だって浅倉に、王蛇に殺されたから、幸せとか何もかも奪われて……

！ 本当に大切に想ってた人なら、なおさら……！」

「そこまでしか考えられないようじゃ、やっぱリリップルはまだまだ子供だな。ま、そりゃそつか。こんな事滅多に経験できるわけじゃないし」

「な、何言って」

華乃が問いたただすよりも早く、つばめは立ち上がって、華乃の前に立った。そして華乃の右腕を軽く握って、片方の手で膨れた腹を指さしながらこう言った。

「なあ。俺のここに手を当ててみな」

「……？」

華乃は言われるがままに、つばめの腹に手を触れて、マタニティドレス越しにさすった。自身の体温より温かさが感じられた。

「分かるか？ ここには、新しい命が宿ってる。小さな宝物だ。こいつだけは、絶対に傷つけたくない。もし俺がここで敵討ちって事で王蛇に挑んだって、きつとやられるのがオチだ。何で分かるか？」

「それが分からないから質問して……」

「そいつは生きる為の理由じゃないからだよ」

「……え」

「ただ相手を殺す事が生きる事じゃない。そんなもんは最後まで尾を引いて、きつとどこかで壊れる。それはこの子にまで受け継がせたくない」

「なら、俺からも聞かせろ。お前が戦う理由は何だ？」

蓮二が質問すると、つばめは頷いてから答えた。

「守りたいものがあるからさ。さっきも言ったけど、俺は周りの誰も死なせたくない。その中には、リップル達だけじゃなくて、お腹の子も含まれてんだぜ」

つばめも空いている手でお腹をさする。

「守る為なら、俺は戦える。命を守るっていう、それが俺にとっての生きる理由なんだ」

華乃は黙り込んだ。これが彼女の揺るがない意志だと思うと、そうとも知らずに鬱陶しいと敬遠してきた自分の行為が、情けなく思えてきた。

「（これじゃあ、どっちがバカなのか分かったもんじゃない……）」

華乃が心の奥底でそう呟いていたその時、不意に華乃の体がつばめと密着した。つばめが華乃を引き寄せて、抱きしめたからだ。

「辛い話ばっかでゴメンな。でも、リップルにも分かってほしい。早まった事だけはしてほしくないんだよ。そりゃあ中卒の俺なんかよりずっと賢いお前なら大丈夫だと思うけどさ。でも、ここいらで言っておかないと、生きる事の意味を履き違えたまま、シケた人生送っちゃう。この先止めてやれない時が来るかもしれないからさ。ま、身長とか学力でリップルに負けてる俺だけど、ここはひとつ、人生の先輩として、歳上のアドバイスとして覚えといてくれよ」

言い終わってから、再び腕に力を込めるつばめ。つばめに抱き締められ、華乃の全身を、懐かしさを感じさせる温もりが包んだ。

「（何、この感じ……。前にもどこかで……。……。そうか、これって母親の）」

長らく家族と疎遠になりつつある華乃にとってそれは、いつしか忘れかけていた、母親の愛情溢れる行為。身長差では華乃の方が少しば

かり上だったが、今はつばめの方が高く思える。それだけ今の華乃は母性の優しさに包まれているのだ。

華乃の視界がぼやけ始めて、気がつけば華乃自身もつばめに抱きついていた。まだ完全にはないが、心の中の、氷の壁が溶け始めているようにも感じられた。それは、孤独でない事を悟ったからなのか定かではないが、つばめは優しく彼女の頭を撫でた。

「やっぱり、リップルも女の子だな。ちよつと安心したな」

「……華乃」

「えっ?」

「……細波 華乃。この姿の時は、そういう名前だから……」

「……ああ。なるほどね。んじゃあ」

つばめは華乃を正面から見据えて、ニッコリと微笑みながら、その名を呼んだ。

「これからもよろしくって事で、生きような。華乃」

「……ああ、当たり前だ。その……、つばめ、さん」

「ヨソヨソしいなあ。別に呼び捨てでも良いし、その方がしっくり来るよ?」

「……なら、そうする。つばめ」

「おうよ」

頬を紅く染める華乃を見て、ニヤニヤするつばめ。その光景を正史と蓮二は見守っていた。

「良かったな。華乃ちゃんも吹っ切れたみたいで」

「……まあな」

「俺達もこれから仲良くしてこうぜ。なっ?」

「生き残る為なら賛成だが、お前が言うど気持ち悪く聞こえる」

「相変わらず口悪いなあ。ってか素直になれないのか」

「うるさい」

「こちらも普段通りのやり取りが続いているようだ。」

その後、夜も10時を少し周ったところで正史達はつばめの家を後にしようとした。華乃も学校があり、蓮二もバイトが朝から入っている。正史も同じように仕事はまだ山のように残っている。

食事の後片付けは後でつばめがやる、という事になり、3人はリビングを出て、玄関の前まで来た。と、ここでつばめが正史に声をかけた。

「あ、正史。悪いんだけど、ちよつと話があるんだ。もう少しだけ良いか？」

「？ 良いけど」

どうやら正史にだけ大事な話があるようだ。他の2人も気になるが、これ以上帰りが遅くなるのも困るので、そそくさと扉を開けた。蓮二と華乃が立ち去り、気配がなくなって静けさが、正史とつばめだけの玄関を包んだ。

「で、どうしたのつばめ？ 俺に話って……」

正史がそう問いかけたその時、つばめの方から正史に抱きついてきた。当初はキョトンとしていたが、不意に我に返って驚きながら、つばめの肩を掴んだ。

「ちよ、どうしたんだよ!?？」

「……悪い。ちよつとだけ、このままにさせてくれ……」

顔を正史の胸に埋めながらそう呟くつばめの声は、先ほどどうって変わって震えている。ただ事でない悟った正史は、つばめの膨れたお腹の感触を直に感じながらしばらく何も言わずに、彼女の気が済むまでジツと立ち続けた。

やがて落ち着きを取り戻したのか、顔を離して、下を向きながら口を開いた。

「急にゴメンな。ただ、ちよつと怖くなつてさ」

「えっ？ 怖いつて何が……」

「みんなの前じや言い辛かつたんだけど。俺、今まで死ぬ事にそこまで怖いイメージはなかつた。俺の命一つと引き換えに誰かが助かるなら、それも良いと思つてた。……でもこないだ、スイムスイムに殺されかけた時、死ぬ事が、突然怖くなつちまつたんだ……！」

つばめの脳裏に、無表情でルーラを振りかざしてくるスイムスイムの姿が焼き付いていた。あの日から今日までの2日間、実はマトモに睡眠をとれていないと告げられた時は、正史は心底心配した。思えば彼女は昇一が亡くなってからずっと1人で、生活を続けていた。気の強い彼女なら問題ないと思つていたが、2日前の大規模な戦いを見て、内に眠つていた恐怖が甦つたのだろう。

「だから、その……！ 今日だけでも良いんだ。その……。家に、居てくれないかな？ もちろん、仕事もあるから無理に引き受けなくても良いけど、もし嫌じゃなかつたら……」

「つばめ……」

初めて見る、パートナーの弱気な姿に戸惑いを隠せない正史。だが、すぐに決意を固める正史。魔法少女といえど、彼女も人間だ。誰だって恐怖する事はある。それを慰めてくれる人はもう、近くにはいない。ならば、下すべき選択肢は彼にとって一つしかないも同然だった。

「や、やっぱ何でもないや。うん、今のは忘れてくれ。俺は大丈夫だ。だからほら、明日も仕事があるんだろ？ もう家に……」

「良いよ」

「へっ？」

「今日だけ、じゃなくて良いよ。つばめの気が済むまで、俺、ずっとそばにいてあげるから」

「で、でもお前……」

「大丈夫だつて。ここから仕事場はそんなに離れてないし。それにさ。せっかく食事までいただいたんだし、お返しぐらいさせてよ。皿洗いとか洗濯とか料理とか、バイトでちよつとだけやってたから、大丈夫」

それに、と正史は右手でつばめの肩を、左手でつばめの膨れたお腹を触った。

「つばめには、魔法少女としての活動の次にやらなきゃいけない事あるしな」

「……あ」

正史に触れられて、また顔を紅くするつばめ。それに気づいていないのか、正史はリビングに目を向け、テーブルに残っている皿の山を見てから気合いを入れた。

「ツシヤア。先ずはこいつを片付けてからだな。手伝うよ」

「あ、ああ。ありがとな」

首を振って火照った顔を冷ましたつばめは、正史と並んでリビングに戻っていった。

その後、皿洗いをしてから風呂を入れて、正史が入っている間につばめが洗濯物をたたみ、つばめが入っている間に正史が部屋の掃除を行い、部屋も体も綺麗になったところで、寝る準備に入った。つばめの頼みで、正史と2人で横に並んで布団の上に寝転び、就寝する事となった。雑談を交えながら夜を過ごしていると、先に仕事で疲れが溜まっていた正史が眠りについた。その寝顔を見つめながら、つばめは考え事をしていた。

「(ホントにやさしい奴だな、正史は。こんな奴、今時そう見当たらないだろうし。ファミも良い奴に目をつけてたな。あの時みたいに、幸せな感じがしてくるなあ)」

そこまでいきついた時、つばめの中である不安がよぎった。

「(でも、本当に良いのか……? 自分勝手な幸せばかり考えて、大切

なものを失った俺が、また幸せになろうとして……。なあ昇一。俺、こんな幸せ受け取っても良いもんなのか……？」

返答が返ってくるわけがないと思いつつも、今は亡き夫に問いかけるつばめ。

やがて久々となる睡魔が襲いかかってきた。正史が隣にいてくれたおかげかもしれない。これ以上自分でも分かってない事を考えても仕方がないと思つたつばめは、お腹に気をつけてそのまま目を閉じて、寝息を立て始めた。

「……………」

ふと目を開けると、そこは寝室ではなかった。目の前にあるのは、美しくライトアップされながら水が噴き出ているモニュメントだけ。辺りはシャボン玉のようなものが浮いている光り輝く空間だった。

「噴水……？　って事は、これって広場の」

思い起こされるのは、以前スノーホワイト達と訪れたN市中央公園の広場にある噴水。いつの間にかそこに彼女は移動していたのだ。

「んっ!?? この服!??」

ふと下を見ると、ベンチに座っているのが確認でき、首から下げたお守りや黒いワンピースが目映った。どうやら今の姿は魔法少女『トップススピード』となっているようだ。何がどうなっているのか把握できていないトップススピードへ追い打ちをかけるように、それは突如として彼女の元へ現れた。

「懐かしいな。ここの噴水は」

「えっ?」

それは聞き覚えのある声。もう二度と聞けないかと思っていた声。トップススピードは声のした横手に目をやると、予想通りの人物が、噴水に目を向けながら近づいてきた。

メガネをかけたサラリーマン風の男性。それは間違いなく彼女が愛した男だった。

「しよ、昇一……!??」

「? 何を驚いた顔してるんだよ。まさか自分の夫の顔まで忘れたわけじゃないだろう?」

「あ、あたりまえだろう! そうじゃなくて、何でお前がここに……だっってお前は……」

「何でって言われてもなあ。気がついたら、ここにいて、お前がここにいたから来た、つてとこだな」

「は、はあ……」

「それにしても、随分と背が縮んだよな。そこまで幼稚じゃないと思ってたけど……。何ていうか、魔女?」

「へっ? ……あ!」

そこでトップススピードは初めて、昇一の目の前で魔法少女姿を晒している事に気付き、慌てて叫んだ。

「いやこれは、その……! こ、コスプレだよコスプレ! つてかよくこの姿で俺だつて分かったな」

「隣に越してきてからの付き合いは長かったからな。見てたら何となく分かるさ。それに結構似合ってるよ」

「そ、そうか……?」

「ああ」

昇一に褒められて、顔を紅くしているつばめだったが、不意にこんな事を思った。

「(つてか、今だったら魔法少女の事も話しても問題ないよな?　ここは現実じゃないだろうし)」

現実世界では魔法少女や仮面ライダーの正体を一般の人に話してはいけない決まりだったが、もう亡くなっている昇一がいるとなれば、ここは現実世界ではないと推測できる。ならば打ち明けてもよからう、と思つたトップスピードは、昇一に声をかけた。

「まあ、何があつてこうなつたのか分からないけど、とりあえず話とかしない?」

「ああ、俺もそう思つてた」

そう言つて昇一は、トップスピードが腰を動かして空けてくれたスペースに腰掛けて、肩を並べて嘖き上がる水のパレードにしばらく酔いしれていた。その後、トップスピードの口から、魔法少女として日々人助けに励んできた事、そして今、その魔法少女と仮面ライダーが生き残りをかけて争っている事などが語られた。

「……そうか。そつちもかなり大変な事になつてたのか」

「もういろいろと課題が残つててさ。もうちよつと頭良くなりたんだよ」

「それは勉強してこなかった自分が悪いだろ」

「そりゃあ分かつてるけどさ……」

唇を尖らせながら、前をジツと見ていたトップスピードだったが、やがて雰囲気を変えてこう聞き出した。

「……なあ、昇一」

「ん?」

「俺さ。もしどこかで昇一とまた会えたら、謝ろうつて思つてたんだ。あの時、俺がお前に内緒で遊んでばかりいたから、余計な心配かけさせて、それで危険に巻き込まれて……。今思うとバカな事してたなつて思う」

「……」

昇一は何も語らない。それをいい事に、妻は想いを打ち明けた。「だから思うんだ。こんな俺がこの先幸せを貰っていいもんなのか。それが分からなくて、魔法少女になって与えてばかりしてたけど、やっぱそのモヤモヤが消えなくてさ……」

とんがりハットのつばを指で摘みながらそう語るトップスピード。ようやく昇一の口が開いたのは、噴水の勢いがなくなってきたからの事だった。

「良いんじゃないのか」

「えっ？」

「幸せなんて、誰にでも貰える権利なんだからさ。どう思おうが、貰っておいて損はないだろ？」

「ま、まあそうかもしれないけど。けど俺はお前の幸せを奪って……」
「それはそれ、これはこれ。俺だってお前に謝らなきゃいけない事もあるしな。最後まで家庭を守ってやれなくてゴメンな、つばめ」
「！」

昇一がトップスピードの肩に手を乗せて、静かに語りかける。

「俺はつばめが誰よりも優しく、誰よりも真つ直ぐな心の持ち主だと知ってる。だからもう、俺が死んだ事に負い目を感じるな。昔みたいに、自分の信じた道を通つ走れ。俺がそこを惚れたようにな」

「突つ走れ……か」

自然と笑みがこぼれるトップスピードに、昇一は安心したように言った。

「なあつばめ。今、一番に大切にしてる人はいるか？」

「大切な……？」

そう言われてすぐに思い浮かんだのは、パートナーの存在。それを意識しすぎたのか、トップスピードの顔が段々と紅くなっている事に本人は気づいていない。昇一だけは笑みを浮かべて、トップスピードのお腹に手を置いた。その瞬間、不意にトップスピードの姿から、お腹の膨れた室田 つばめへと戻った。昇一と、お腹の中の子供の鼓動が伝わってくる。

「なら、その人との幸せを優先しろよ。俺はもうお前を守ってやれな

い。だから、代わりに頼むんだ。きっとその人なら、お前を全力で守ってくれる。俺の事を忘れろとまでは言わないけど、これからは、『3人』で歩いていけよ。温かい未来をな。それが俺にとっての幸せさ」

「昇一、お前……」

不意につばめの視界が僅かにぼやけた。瞼を擦るが何も変わらず、昇一の姿が、雲に覆われていくのが確認できた。

「！」

「そろそろ時間みたいだな」

「ま、待ってくれよ昇一！ まだ話は……」

「また会えるかどうか分からないから、言っておくよ。俺は、つばめと会えて良かったと思ってる。お前はどうか？」

「つたりめえだろ！ 俺はお前に会えたから……！」

さらに視界がぼやける中、昇一の笑みが見えた。声が段々と遠ざかる中、つばめは手を伸ばす。その手は何も触れなかったが、代わりに声が聞こえてきた。

「じゃあ、魔法少女の方も頑張れよ。つばめ……いや、トップスピード」

「待って……！ 待ってよ……！」

「……！」

目が覚めて、最初に視界に捉えたのは気持ち良く眠る正史の寝顔だった。ふと目線を下げると、自分の右手が正史の左手を掴んでいる。

「……そっか。夢か」

幸せになれ、か。

不意に夢の中で言われた事を呟くつばめは今一度隣に眠るパートナーに目をやって、フツと笑った。つばめにも分かっていた。彼なら、きつと最後まで自分を守ってくれる。少し危なっかしいところもあるが、それは自分も同じ。1人で庇えないようなら、2人でなんとかすれば良い。それに、今こうして正史を手を繋いでいる事に、ありがたみさえ感じている。それは、初めて昇一を意識した時と、似てるようで非なるものだった。

そして彼女は、静かにお腹に気をつけながら、正史に体を寄せて、自身と正史の手を、新しい命の上に置いて、そして呟く。

「こういう浮気も、悪くないな」

生きる目標を見つけて、温かな気持ちに包まれたつばめは、もう一眠りする事にした。

「うん。まさかトップスピードに、あんな秘密があるとはねえ。人は見かけによらない、って事だね……。でも、夢の中で会わせられたから、きつと私、良いことしたよね、うん。……おつとつと、もう行かないや。じゃあ、また会おうね。フワア……。……うん。元気な赤ちゃんが産まれると良いね」

雲が広がる世界にいた、小脇に白い枕を抱えた、パジャマ姿の少女が眠たげに目を擦りながら、次なる目的地へと『人助け』をする為にフワフワと前進していた。

87. 孤高の英雄

「……ええ。以上が現時点でこちらが把握している面々の動向です」
居酒屋が立ち並ぶ繁華街の路地裏にて、スーツ姿の男性……『鎌田かまた春水しゅんすい』が、人目につかないような所を選んで、電話越しに会話をしている。一見、勤めている会社関係の話かと思うかもしれないが、その中には所々奇妙なワードが入っている。

「……えつ？ クラムベリーとオーティンですか？ ……さあ。中宿での一件でチラッと見たきりですね。死亡アナウンスも無かったですし、第一あの程度で死ぬようじゃ、あなたも幻滅しますでしょ？ 興味を抱いていたそうですし。……ええ、その通りです。向こうがさらに8人まで枠を削減しましたから、まだしばらくはあなたの望み通り観察出来そうです」

鎌田は空を見上げるが、雲に隠れて星一つ見えない。

「……分かりました。何か動きがありましたら、また報告しますよ。……ええ。あなたの期待に応えられる人材なら、ある程度絞れてますからね。気に入ってもらえれば何よりです。……フツ。監視の方も続けてもらっても結構ですよ。必要なら、髪の毛の方も可能な範囲で調達しましょう。……『ピティ・フレデリカ』」

電話の相手の名前を呟いたのを最後に、鎌田は電話を切った。

「(今週だけで3回目、か)」

一息ついてから、ネオンの輝く繁華街に目を向けた。

「場は違えど、やる事は結局変わらない……か」

どのような環境下に置かれようと、鎌田はいつも同じ立場にいた。誰かが作り上げたデータや周りの動向を細かくチェックし、次の相手に報告する。いわば仲介役を買って出ているのだ。先ほどの報告もその類。もつとも鎌田自身、それが苦になっっているわけではないが。

それでもやはり刺激は欲しかった。地味な作業に精を出し、才能を開花させたいわけではないが、飽きてきたのも事実。ガイが企画したようなものほどとまではいかない。が、やはりどこかで物足りなさを感ずる。

色々と思いを巡らせていたその時、彼の持つマジカルフォンが鳴り響き、開いてみた。見れば、タイガからの呼び出しだった。この後、彼が指定した場所で果たしたい事がある、という文面が書かれている。彼から呼び出しをするのは珍しいものだ、と思いながらも考えさせられる事はあった。

ここ最近、タイガの様子がどこかおかしいようにも見える。まるで何を考えているのか見えてこないのだ。

「まあそれを言ってしまうえば、俺のパートナーも変なところだが」何を仕掛けてこようか、自分にはそれを凌ぐ力がある。そう自分に言い聞かせて、周りに誰もいない事を確認してから、ポケットからカードデツキを取り出して、近くの窓ガラスにカードデツキを映し出し、腰回りにVバックルを取り付けた。

「変身！」

かざしたカードデツキをそのままVバックルに差し込むという、言ってみれば地味な変身方法だが、鎌田自身、変身ポーズにそこまでこだわる理由が今ひとつ見つからない。第一、シローやファヴにも確認したが、そんな決まりなど作られていないではないか。それが、水色のサメをモチーフにした仮面ライダー『アビス』という男の言い分だった。

アビスはミラーワールドを通じて、タイガが待ち合わせている場所へと直行した。

タイガが指定してきた場所は、王結寺から少し離れた、線路下を通る地下道だった。ミラーワールドを出てその場所へやってきたアビス。しばらく電車が通過する音を耳にしながら待っていると、呼び出し主であるタイガが現れた。

「やあ、来てくれてよかったよ」

「わざわざこんな所まで呼び出して、何を企んでいる?」

「企むなんて人聞きの悪い。僕はね。試したい事があるんだ。……僕が英雄に近づけているか。それを確かめる為に、君を使いたいんだ」
「使う……か。回りくどい言い方は好まないんでね。つまりは俺と戦いたい、と言いたいんだな?」

その問いに対し、タイガは不敵な笑い声をあげた。

「大切な人を倒せば、それだけ英雄に近づける。君も例外ではないさ。だって僕達、なんだかんだでチームとしてやってきたわけだし。君達を倒せたら、僕は英雄になれる。そう思わないかい?」

「前から言おうと思っていたが、お前のくだらん理想には付き合ってもらえない」

「へえ……。そんな事言うんなら、僕だって言いたい事はあるよ。君は英雄に相応しくないってね」

「英雄……か。念のため聞か、お前は自分がどれだけ近づけているか、把握はしているのか」

「最初は光希を、インペラーを倒せた。ユナちゃんはリユウガってやつにとられたけど、ミナちゃんはこの間、僕が倒せた。僕が英雄になる為の、小さな犠牲なんだよ」

「やはり、ミナエルはお前が殺つたのか」

「ここでようやく、先日判明したミナエルの不審死の原因を察したアビス。とはいえ張本人の口から出た言葉をそのまま信用するほど、アビスも単調ではない。いずれにせよ、目の前のライダーは倒すべき敵だと判断はできた。」

「先ほども言ったが、回りくどいのは好きではない。食後の運動にはなるだろうし、遠慮なくかかってこい。……だが、俺はそう簡単に殺られるほどヤワではないがな」

「へえ。なら、始めようか」

『STRIKE VENT』

『SWORD VENT』

タイガがデストクローを、アビスが2刀のアビスセイバーを持ち、互いにミラーワールドへ突入した後、前進して火花を散らした。

「ラァー！」

「フンッ！」

最初のうちは互角と言ってもいいかもしれない戦いだった。が、次第に押され始めたのはタイガの方だった。ただ無作為にデストクローを振りかざすタイガに対し、アビスは器用にかわしつつ、反撃とばかりにアビスセイバーを突き出し、タイガにダメージを蓄積させていく。遂にはアビスセイバーの一太刀で、デストクローがタイガの手元から離れてしまった。

「！」

「ダァッ！」

その隙を逃すまいと追撃を加えるアビスだが、タイガもデストバイザーで受け止めて、これに対抗している。

『ADVENT』

タイガが距離を置いてカードをベントインし、デストワイルダーを出現させると、アビスに襲わせるように指示した。

「ならば」

『ADVENT』

対するアビスもカードを取り出し、アビスバイザーにベントインさせると、アビスハンマーが出現して、デストワイルダーの進行を妨害した。

「数で圧倒しようと思ったのだろうが、無駄だったな」

アビスとタイガ、アビスハンマーとデストワイルダーが双方で激しい戦いを繰り広げ、その勢いは止まる事を知らず。デストバイザーを

振り回すタイガに対し、アビスは新たなカードをベントインさせる。

『ADVENT』

「！」

「ガイの真似ではないが……。カードは1枚とは限らないぞ」

アビスの言うように、彼が契約しているモンスターは2体。現在アビスハンマーはデストワイルダーの相手をしているため、現れたのはアビスラッシャー。タイガの後方から鋭い刃を構えて迫ってくる。

『FREEZE VENT』

だがタイガも負けじとカードをベントインし、アビスラッシャーを凍結させた。

「(これで、向こうもこれ以上攻められないさ……！ 後はこれで)」

『TRANS VENT』

続けざまに取り出したのはミナエルのアバター姿が描かれたパートナーカード。それをデストバイザーにベントインし、タイガは走り出して飛び上がると、その姿はミナエルの魔法同様、生き物以外の姿に変え、一本の先が尖った槍となった。

「！」

「ハアッ！」

槍(タイガ)は、その勢いのままに、アビスを貫こうと、体を回転させて殺傷力を高める。地下道は一本道の為、横に飛んで回避する事は難しい。タイガの一撃が迫る中、アビスは依然として狼狽える素振りを見せない。その事に不審がっていたタイガだが、それはアビスの取り出した、パートナーであるスィムスィムのアバター姿が描かれたパートナーカードによって判明する。

『LIQUID VENT』

すると、槍がアビスの体をすり抜けて、アビスは振り返りざまに回し蹴りをタイガに叩き込んだ。

「グアッ……？」

トランスベントの効力が切れて、元の姿に戻るタイガ。平然としているアビスを睨みながら殴りかかるタイガだったが、その拳もアビスの体をすり抜けて、逆に体に沈み込んだタイガの腕を掴んだ。

「！」

「忘れたか？ パートナーカードはお前だけの専売特許ではない。こういう使い方もあるんだよ！」

「ガアツ……！」

抵抗虚しく、アビスの拳をもらい、吹き飛ばされて地面を転がるタイガ。そこで一旦冷静になったタイガは、アビスのベントインしたカードの効力を確認した。アビスが使ったのは『リキッドベント』と呼ばれるカード。パートナーのスィムスィムが駆使する魔法『どんなものでも水みたいに潜れるよ』は、その名の通り、あらゆる地形に潜り込める。それは自らを液体化させる事で意味を成す。当然液体になった場合は、あらゆる物理攻撃はすり抜けてしまう。接近戦を得意とするタイガに、勝ち目はなかった。

「こ、のお……！」

だが、タイガはしぶとく立ち上がろうとする。

「僕が、英雄に……！」

英雄になる。その一心で、腕に力を込めて起き上がろうとしていたが、その様子を見ていたアビスが、呆れたように口を開いた。

「どうした。さっきまで意気込んでいた奴が、その程度なはずがないよな」

そう言つてタイガを無理やり起こすと、その腹に何度も拳を叩き込んだ。タイガの口から、これでもかと悲鳴が溢れ出た。その足元に、血が滴り落ちてきた。今までに見た事のない、アビスの容赦のない攻撃に、タイガの中で戸惑いと恐怖が入り混じってきた。

「お前、英雄になりたいんじゃないやなかつたのか？」

「……！ん、ウアアアアアアアアアアア……！」

ヤケになったタイガはアビスを振りほどいて、デストバイザーを振り下ろそうとするが、そこへ背中に衝撃が走った。

「アグア……!?？」

困惑しながら前のめりに倒れようとするが、そこへアビスの蹴りが入り、タイガは吹き飛ばされ、デストバイザーを落とした。振り返ったタイガはそこでアビス以外に別の人物がいる事に気付いた。

「！ スイムスイム……！」

「……」

アビスの隣に並び立ったのは、彼のパートナーであるスイムスイム。無表情にタイガを見下ろしていふ彼女の手には、血の付いたルーラが握られていた。先ほど背中に衝撃が走ったのは、スイムスイムが背後からルーラで攻撃したからだろう。

アビスとスイムスイムの攻撃を受けたタイガの中で、これ以上戦つては危険だという本能が働いたのか、後ずさりながら逃亡しようとした。

「……逃げるのか」

「勘違い、しないでよね……！ 僕は、必ず英雄に、なってみせる……！ 君達の手も借りないし、誰にも、僕の邪魔はさせない……！ まだ時間はたっぷりあるからね……！ 今度会ったら、その時は、倒してみせるよ……！」

「……抜きたいなら、どうぞ、抜けてもいい。リーダーの指示が聞けないなら去るもよし。ミナエルの後を追わせてやるだけ。ルーラならそう言う」

「……君も、英雄には相応しくないね。スイムスイム」

捨て台詞を吐き捨てたタイガは、体を引きずりながら、その場を後にした。その背中からは血が滴り落ちている。

「……英雄？ 私がなりたいのは、ルーラみたいな、お姫様。それだけあれば、良い」

辺りに静けさが戻り、アビスはタイガが逃げていった方向に目を向けながら、ポツリと呟く。

「孤高の英雄を目指す……といったところか」

その道がどれだけ険しいものか、彼は分かっているのだろうか。

「……まあ、勝手に自滅してくれば、こちらとしては大助かりだな」

この戦いは、あくまで自分を守る為のもの。これ以上干渉する必要もないと判断したアビスは、スイムスイムと共に、王結寺へと足を向けた。

その一部始終を陰から目撃していた魔法少女『たま』は、ズルズルと地面にへたり込んだ。その目からはポロポロと涙が零れ落ちている。

「タイガまでいなくなっちゃった……！ ミナちゃんもいない……！ このままじゃ、みんなバラバラになっちゃう……！ こんなじゃ、生き残れるわけ、ないよお……！」

頭を抱えて必死に打開策を考えてみるが、良い案が全く浮かばない。たまは改めて己の無能さに打ちひしがれ、どう自分を責めれば良いのか分からず、頭の中がグチャグチャになっていくのを感じた。彼女のそばにメタルグラスがいるが、人間の言葉を喋れるわけもないので、たまにとっては慰め程度にしかない。

顔を埋めながら、たまは体を震わせ、自分の首輪についていたリールを手にとつて、ポツリと呟く。

「ガイ……。私、これからどうしたら、良いのかな……」

今は亡きパートナーに問いかけるが、その声は風と共に流されて、消えていった。

『いやー。ここ最近では疲れてばっかりだぼん』

夜明け近くの船賀山。その中腹にひっそりと建っている山小屋の中で、ベッドに寝転んでいた『森の音楽家クラムベリー』は、形式上彼女の補佐役を担っているファヴの愚痴を興味なさげに聞いていた。

先日ファヴとシローから発表された、魔法少女及び仮面ライダーの枠を当初予定していた16名から8名に減らすという内容は、他の魔法少女や仮面ライダーから罵声の的となった。ファヴとシローは運営役として、嫌われ役を演じてきた。ようやく鳴りは静まりつつあり、ファヴもシローもひと段落ついたようだが、実際苦労はしているのだろう。クラムベリーの目から見て、球体の白い部分が少しばかりくすみ、羽の動きに力がないように見えた。

『やれ詐欺だのペテンだのインチキだのイカサマだの言われたい放題で、休む暇がなくて困ってたぼん。やっぱりアイテム追加のせいで生存枠を8人にするって言い訳はちよつと苦しかったんじゃないかぼん?』

「苦しいならそれはそれで結構」

クラムベリーはあくまでドライな対応をとった。こうなる事ぐらい、クラムベリーだけでなく、パートナーのオーデインやシローも分かっていた事実であるのは間違いない。

『マスター』

「なんですか?」

『ファヴがどんなに苦労したってファヴだからいいやとか思っていないぼん?』

「今更何を。嫌われるのも仕事のうちでしょう」

寝転んだまま頬に手を当てながら、クラムベリーはゆっくりと目を開けて、冷徹に呟く。

「それに、血の気は多い子の方が断然良いですからね。大体、この状況で文句の一つや二つも言えないようなら……」

『言えないようなら?』

「……全員殺して、試験を最初からやり直した方が良くらいですよ」
『それはそうかもしれないぽん』

「とにかく、今はあなたもシローも嫌われ続けてください。私達はその間に色々と考えておきますから」

そう呟いた後、いなくなつたファヴを他所に、クラムベリーは現状を頭の中で整理する。

現在まで死亡した魔法少女や仮面ライダーは、ねむりん、ルーラ、インペラー、シザース、オルタナティブ、ヴェス・ウインタープリズン、ユナエル、ファム、シスターナナ、ベルデ、ガイ、ミナエルの12名。クラムベリーとしてはウインタープリズンやオルタナティブとの再戦を果たしたかったが、残念ながらベルデ達に殺された後だ。正直なところ、彼女やオーデインを除いて、ウインタープリズンとオルタナティブは最後まで残ると思つていた節もある。

「……あと20人ですか」

クラムベリーがそう呟くように、20人が残っており、目標人数まで、まだ先は長い。もう直ぐ半分までさしかかろうとするわけだが、これは当初予定していたペースよりもはるかに遅いとクラムベリーもオーデインも感じていた。今回の試験では血の気が多い者がそこそこいるのは間違いないが、本来ならこの辺りで10人ほどに絞り込めてもおかしくない。急ぐ理由はないが、久々に試験官側から手を加える必要がありそうだ。クラムベリーはそう結論付けた。

「ここから先は、強者だけが集う戦いが相応しい。そろそろ引き立て役には消えてもらいましょうか」

誰ともなしにそう呟くと、クラムベリーは起き上がって地面に足をつけた。そこへまたファヴが姿を現した。

『あ、ところでマスター。途中経過まとめて報告書にして送ろうってシローが言つてたけど、そつちから何かリクエストは……って、どうしたぽん?』

「いえ。ちよつと野暮用を済ませようかと思ひまして」

『野暮用? 誰かに会いに行くぽん? ならファヴが言伝を』

「結構です。私の方から勝手に出向きますよ。オーデインにもそう伝

えておいてください。……それから報告の件ですが、適当でいいですよ」

『はいはい』

なんとも適当な返事だが、クラムベリーは特に気にかける様子はない。

「ああ見えてきちんと形にして、魔法の国にちゃんと健全なものとして報告してくれませんかね」

血の色で彩られた『バトルロワイアル』を、牧歌的で平和的な『良い子選びの試験』に見せかけてくれる才能を褒めつつ、クラムベリーは入ってくる朝の冷たい風など気にもとめず、小屋の扉を開けた。

夕日も沈み、辺りの街灯に段々と灯りがともり始めた頃。ピンクのフリルをつけた少女が、人気のない道を歩いている。姫河 小雪である。平日ではあったが、普段は一緒に行動している友人に表情を見られないようにしながら家に帰って、そこから更に、母親に見られないようにしようとして、家を出て街をあてもなく彷徨い歩いていた。

「もう、私は一人なんだ……。あの時、だいちゃんに、みんなに酷い事言っつて、きつともう、私の事なんて忘れて、今でも戦ってる……」

街灯の真下で立ち止まった小雪は、肩を震わせながら、口を開いた。

「……どうして、戦わなきゃいけないの？ 私達魔法少女や仮面ライダーは、戦うために生み出されてきたの？」

もしそれが本当なら、自分が抱いてきた魔法少女への感情そのものが間違っていたのだろうか。他の面々が狂っているのではなく、それが当たり前の定義であり、本当は自分が今まで目にしてきた事が、幻想だったのか。そんな疑問が頭の中を駆け巡る。

「……だったら、私にはもう、魔法少女になる資格なんて」

ポケットの中に入れてあるマジカルフォンに手を伸ばし、触れてみたその瞬間、ポケットの中から耳鳴りのような音が響いてきた。

「……！」

モンスターが近くに出現したようだ。普段の癖で、マジカルフォンを握って駆け出そうとする小雪だったが、唐突にその足をピタリと止めた。

「……私なんか変身して、これ以上誰の役に立てるの？ だってもう、魔法少女は……」

魔法少女は、もういない。そう自分に言い聞かせて、あれ以来マジカルフォンをタップする事はなかった。

小雪は180度回転して、来た道を引き返そうとした。が、依然としてマジカルフォンから音が鳴り止まない。耳障りだから止めてやろうかと思ったが、マジカルフォンにその機能は付いていない事を彼女は知っている。

小雪は再び立ち止まり、拳を自然と握りしめ、そして……。

『シユルルルルルルル……！』

「……っ！」

夜の街にもかかわらず、静けさが辺りを支配する世界。それがミラーワールド。そこにはモンスター以外住み着かない。例外として、魔法少女や仮面ライダーだけが、時間制限こそあれど、その世界を行き来できる。行き来できるという事はつまり、戦うこともできる。

白い魔法少女『スノーホワイト』は、目の前にいるモンスターを睨みつけていた。そこにいたのは、ジョロウグモ型のモンスター『レスパイダー』。かつて、スノーホワイトが最初に対峙したモンスターである。あの時、スノーホワイトのひ弱なパンチやキックでは到底相手にされず、いたぶられ続けていた。そこへ救世主として彼女を助けてくれたのは、後にパートナーとなる仮面ライダーだった。その圧倒的な強さを目にして、スノーホワイトは憧れを抱いていた。そして、それ以来行動を共にした。

生き残りをかけた戦いが始まってからも、九尾はスノーホワイトを常に気にかけてくれた。守ってもらえる事にありがたみを感じていた。だがそれは、恩師であるオルタナティブの死をきっかけに、全てが墮落した。復讐に走り、仮面ライダーとしてあるまじき行動を起こしかけた。その姿に、スノーホワイトは絶望した。彼だけは、本物の仮面ライダーでいて欲しかったとつくづく思うが、結果的にスノーホワイトは彼を拒絶した。冷酷にも『人殺し』と罵って。

もう、あの時と同様に九尾は助太刀にやってこない。そして、魔法少女や仮面ライダーの実態を目の当たりにして、魔法少女を辞めたいと考えた。殺しあう事でしか力を発揮しないのが定石なら、少なくとも

も自分だけは正しい存在であり続けたい。そのために、魔法少女にならないと決めていた。

……はずだった。

「……………いい加減に、してよ……………」

スノーホワイトはレスパイダーを睨みつけ、そしてありのままの感情をぶつける。

「私はもう、魔法少女になりたくなかったのに……………！　なのに、あなた達は、私の気持ちなんか知らないで、悪さばかり働いて……………！」

『シャアアアアアアアア！』

だがレスパイダーは、それがどうしたと言わんばかりに両手の鋭い鉤爪を突き出して、スノーホワイトに襲いかかる。

慌ててスノーホワイトは回避するが、そこから反撃に打って出るという選択肢は彼女になかった。

元々は、レスパイダーは現実世界に映る女性をターゲットにしていた。が、背後から襲いかかろうとした矢先に、スノーホワイトが行く手を遮り、獲物を逃してしまった。そこでレスパイダーは急遽標的を変えて、スノーホワイトを捕食しようと鉤爪を振るってきた。

スノーホワイトからすれば迷惑な話だった。結局、また人助けに一役買ってしまった。もうなっても無意味なはずなのに。そして何より、スノーホワイトに『闘う』という選択肢はない。あくまで、困っている人を手助けするために、力を使うと最初から意気込んでいた事を忘れずに、モンスターを相手にした。

だが今のスノーホワイトと、元から凶暴性の高いレスパイダーを見れば、結果はどうなるかなど一目瞭然だ。レスパイダーの容赦なき攻撃は、徐々にスノーホワイトの逃げ場を失くしていく。

「うっ……………」

遂にレスパイダーに吹き飛ばされ、地面に片膝をつくスノーホワイト。息を荒げながらも、威圧だけで何とか追いかえせないかと足掻きを見せるスノーホワイトだが、レスパイダーは止まらない。距離を詰められて、レスパイダーの口から糸が吐き出されようとしたその時。レスパイダーやスノーホワイトの横手から、何者かによる飛び蹴り

が、レスパイダーに直撃した。

レスパイダーは悲鳴をあげながら地面を転がり、スノーホワイトは思わずその人物に目をやる。ひよつとして、九尾カラ・ピュセルが助けに来てくれたのか。そんな淡い期待を寄せて、その人物の顔に注目するスノーホワイトだったが、すぐに開いた口が塞がらないような表情に変わった。

レスパイダーを蹴り飛ばしたのは、スノーホワイトにとって予想だにしない人物だったからだ。その人物は、スノーホワイトと同様に、花を基調とした服に包まれている。バラと共に妖艶な雰囲気を纏った、エルフの魔法少女は、スノーホワイトに見下ろした。

「随分と腰が引けてますね。モンスターを目の前にしてそんな無様な姿を晒しているようでは、相手にとつて餌みたいなものですよ？」

「クラム、ベリー……！」

「今日はあなたと会うために出向いたのですが、その前に、先ずは邪魔な害虫を駆除しましょうか」

そう言つてクラムベリーがマジカルフォンをタップすると、両手にゴルトセイバーが握られて、月明かりに照らされながら、黄金の剣は向かってくるレスパイダーに振り下ろされた。斬られ続けてもなお、レスパイダーは鉤爪を振るつてクラムベリーを狙うが、クラムベリーの動作は、スノーホワイトから見れば余裕そのものが出ている。本人も退屈そうに身を翻し、隙あらばゴルトセイバーの一振りが的確にレスパイダーへカウンターとして必中する。勝負は圧倒的にクラムベリーのほうが優勢だった。

スノーホワイトはただジッとクラムベリーの動作を見ているだけだったが、不意に彼女の表情を目撃したスノーホワイトは、息を詰まらせた。彼女は、レスパイダーを斬り刻むたびに笑っていた。まるで闘う事に悦を感じ、自己満足の為だけに、力を振るい続けているかのように。その不気味な事と言ったら……。

そんなスノーホワイトに目もくれず、クラムベリーはトドメとばかりに飛び上がり、ゴルトセイバーを上空から投げつけて、レスパイダーを貫いた。よろけるレスパイダーの正面に立ち、膝を曲げて下か

らすくい上げるように、突き出した右手がレスパイダーの胸を貫いた。

「……………」

スノーホワイトが目を見開き、レスパイダーがよろめいている間に、クラムベリーは突き刺した右腕を横に振るい、レスパイダーを真っ二つに引き裂いた。レスパイダーはそのまま爆散し、スノーホワイトとクラムベリーのマジカルフォンからキャンディーの獲得を知らせる音が伝わってきた。が、今のスノーホワイトにそれを気にする余裕はなかった。

クラムベリーは右腕にこびりついた、緑色の液体を振り払うように右腕を横に振るい、液体を飛ばした後、スノーホワイトに向かって歩を進めた。スノーホワイトは立ち上がり、ゆっくりと後ずさる。

「な、何なの……………?」

「なぜ逃げようとするのですか? 私達は魔法少女。やっと2人きりになれたのですから、これで思う存分戦えます」

「! やっぱりあなたも…………… 私は、戦いたくなんかない!」

そう叫んでからクラムベリーに背を向けて、鏡のあるところから脱出しようとして駆け出すスノーホワイトだったが、すぐさま背中に強い衝撃が走り、前のめりに倒れこんだスノーホワイトはそのままバウンドしながら地面を転がった。クラムベリーがスノーホワイトの背中に蹴りを叩き込んだのだ。

「どこへ行くつもりですか? あなた程度がこの私から逃げられるとでも?」

「うつ……………! くう……………!」

「いや、そもそも敵を目の前にして逃げ出すなど、力を有する者としてあるまじき行為ですよ。……………さあ、悔いのないように全力で歯向かってきてください」

「いや、だ……………」

両手を広げて、あえて隙を見せつけるクラムベリーに対し、スノーホワイトは両腕に力を込めて、膝をついて起き上がりながら、戦う事を拒んだ。元から戦いに向いている性格をしていない事を分かって

いたのもあるが、それ以上に魔法少女同士が戦うシナリオを思い描けない。

「私は、戦いなく、ない……！ 魔法少女も、仮面ライダーも……！
こんな事の為に、力を使うなんて、そんなの、間違ってるよ……！」
「この後に及んで、まだそんな悠長な事を口にできるとは。これどこまで残れたのも、どうせ九尾らがそばにいたからでしょうね。……でも、それももう終わりです」

クラムベリーはため息をつき、そしてスノーホワイトの前に立つと、冷ややかな目つきで見下ろしながら、こう告げた。

「本音を申し上げますとね。もうあなたは『用済み』なんです。今までは九尾の引き立て役として見逃していたところもあるのですが、これ以上生かしておいても、何ら引き出せそうにないですし」

「どういう事、なの……?!?!」

「シスターナナがウィンタープリズンやオルタナティブを目立たせる為の小道具だったように、あなたも九尾という逸材を育て上げる為に生かされ続けた小道具のような存在なんです。ここまで舞台が整えば、もう小道具も必要ありません。そして、いらぬ道具は速やかに処分するべきなのです。そうなれば九尾も余計な世話を焼かずに済む。……いや、あるいはあなたを始末する事で、彼の中で新たな潜在能力を引き出せる事もありえますね」

九尾という主役を引き立たせる為の、スノーホワイトという道具。クラムベリーの評価を受けて、スノーホワイトは身の毛もよだつ恐怖に襲われた。ラ・ピュセルを襲撃したという情報を聞いてから予測はしていたが、目の前の魔法少女は、人としては異常なまでにズレている。

「わ、わたしは……！ こ、殺し合いなんて、したく、ない……！
そんな事したら、魔法少女どころか、人間じゃ、なくなる……！」
「だから魔法少女になりたくない、という事ですか？」

「?!?!」

「私は他の魔法少女より耳が良い方です。だからあなたが殺しあうだけの魔法少女になりたくないと思っただけの事など、お見通しですよ。

その上で言わせていただきます。……あなたもラ・ピュセルと同じ勘違いをしている大バカなんですね」

クラムベリーに睨まれ続けているスノーホワイトは、その場から一歩も動けずに、怯えた表情を向けていた。

「力を持っている以上、同じ力を持つ者が集うのはなんら不思議な事ではありません。そしてそれは、互いにぶつかり合い、勝った者は負けた者を喰らい尽くす。それこそが戦いの定義なのですよ」

「ち、違……！」

「もつとも、あなたの場合は初めから戦う意思がないようですね。……目障りで仕方ありませんね。戦う気がないなら、死んでくださいよ。それが嫌なら、もう少し抗ってみてください」

「……！」

スノーホワイトがハツと目を見開いた直後、クラムベリーは目にも留まらぬ速さで詰め寄り、足を振り上げた。紙一重のところでも後ろに仰け反って直撃を避けたスノーホワイトだが、クラムベリーの猛攻はそれで終わらない。軽くジャンプしたクラムベリーは振り上げた右足をそのままスノーホワイトの胸に突きつけ、よろめいたスノーホワイトに向かって回し蹴りを叩き込んだ。とっさに肘を曲げて両腕でガードしたスノーホワイト。鈍い音が腕から鳴り響き、呼吸が荒れている。

このままでは鬺り殺しにされると思ったスノーホワイトは遠ざかろうとして駆け出そうとするが、クラムベリーがそれを見逃すはずもなく。その髪を鷲掴みにして、驚くスノーホワイトを正面に引き寄せた瞬間、クラムベリーは膝を曲げて、無防備な腹に膝蹴りを入れた。

「ガファ……！！？」

腹の底からこみ上げてきたものが、スノーホワイトの口から吐き出された。口の中で鉄のような味が広がる中、真下を見ると血が滴り落ちていた。まぎれもなくスノーホワイトのものである。生まれて初めてみる自身の血を見て青ざめるスノーホワイトだが、クラムベリーは容赦なく追撃として、前のめりに倒れようとするスノーホワイトの後頭部に肘を曲げて、エルボードロップを決めた。勢いよく地面に叩

きつけられたスノーホワイトの背中を踏みつけ、踵がこれでもかといこんでスノーホワイトの口から悲鳴が漏れた。

「元から期待はしていませんでしたが、これでは想像以上に面白みに欠けますね。弱者をいたぶるのは趣味ではありませんが、まあ、ここから先に強者を残すためなら仕方ないですね」

強者との熱い戦いを望んでいたクラムベリーにとってスノーホワイトでは不満足だったのだろう。だが目的のためだと自分に言い聞かせて、スノーホワイトを蹴り上げたクラムベリー。息を荒げながらも立ち上がるスノーホワイトに向かって、クラムベリーは猛追を仕掛ける。伸びた爪を立てて、スノーホワイトを引き裂こうと迫ってくるのを見て全力で体を捻るスノーホワイトだったが、狙いから逸れた一振り、スノーホワイトの腕を掠め取り、鮮血が飛び散った。

「ああ!?？」

「フッフ」

スノーホワイトの腕から流れ出た血を見て、クラムベリーは紅潮した。そして本能の思うがままに、逃げ回るスノーホワイトを執拗に狙い撃ちした。ひっ搔くだけでなく、足蹴りも駆使して、スノーホワイトの体力を徐々に削っていく。

そして気がつけば、白かった学生服姿も、4割近くが真紅に染まっていた。腕や足についた切り傷からはダラダラと血が流れ落ち、震える全身からは、立っているのがやっとに見える。

「フツッ」

「うあ……」

振り落とされた足蹴りが、スノーホワイトのこめかみに直撃し、新たにつけられた傷口から飛び散った血が、頭部のリボンについた大きなつぼみを赤く染めあげる。意識が朦朧とし始めた頃、スノーホワイトはいつの間にか今いる場所が、最初にクラムベリーと対峙した地点から離れた港付近に移行している事に気付いた。僅かに潮の香りが鼻にこびりついてくる。

「良い加減鬼ごっこも飽きてきましたよ。それにあなた。魔法少女を辞めたいそうじゃないですか。……だったらこのまま楽になった方

顔面を中心に鈍い音が全身に伝わり、気がついた時には、浮遊感と共に視界が大きく歪み、数秒後には、轟音と共に全身を引き裂くような激痛が、スノーホワイトを直に襲った。

クラムベリーがやってのけた事は至極単純だった。

泣き顔の魔法少女の顔面に右手拳をめり込ませ、その剛腕で遙か後方に吹き飛ばし、華奢な少女の体は軽々と宙を舞って、立ち並ぶ工場のコックリート式の壁を何枚も突き破っていった……。

89. 散り際の花

ミラーワールドに響き渡った轟音が鳴り止み、再び静けさが辺りを包み込む。ついさっきまでひっそりとそびえ立っていたコンクリート式の壁の幾つかは、今や面影一つ残さずに瓦礫の山と化していた。そして注目すべきは、まだ崩壊していない壁の一つに、1人の少女の体がめり込んでいる事だった。所々白い部分が見え隠れしているが、今や真紅に染まつている箇所が多い。装飾として付けられていた花やつぼみは真っ赤に変色しており、顔を中心に亀裂だけでなく、血で出来た楕円が広がっている。

クラムベリーの拳をまともに受けたスノーホワイトは吹き飛ばされ、その前面を壁に打ち付けられていたのだ。

やがてズルズルと地面に向かって顔を壁に引きずるようにしながら落下し、倒れこんだ。壁には縦一文字に血の跡がべつとりと伝っている。

「……………あ」

息をする事すら苦しく、身体中を駆け巡るような痛みが容赦なくスノーホワイトに襲いかかる。それでもまだ体は動くかと判断したスノーホワイトは、膝と両手をついて立ち上がるとした。

と、その時。スノーホワイトの目線の先に血だまりがある事に気付いた。しかもその血だまりは、上から降り注ぐ血の水滴によってどんどん広がっていく。水滴がどこから流れ落ちてくるのか疑問に思ったスノーホワイトは不意に、自身の顔面がヒリヒリしているのと同時に、生臭い匂いやベトつとした気持ち悪い感触に気付いて、思わず右手を顔面にやった。

右手のひらを見たスノーホワイトは息を呑んだ。手のひらについてるのは、生まれてこの方、見た事のないほどの血の量。なぜこれほどの量の血が顔面についているのかが気になったスノーホワイトは視線を外し、偶然近くに落ちていた、ガラスの破片に目をやった。

刹那、スノーホワイトはガラスに映る光景が信じられなかった。普段チャットやブログなどで噂されている、幼げで可憐な表情はそこに

なかった。あるのは、ほぼ赤一色に塗りつぶされ、とても公には晒す事のできないぐらいに血だらけの、元は白き魔法少女の顔。

「……！」

信じられなかった。魔法少女になってから一度も悪い事など一つもしてこなかったはずの自分が、幼馴染みを傷つけた同じ魔法少女の手によって、こんなにも醜く変わり果ててしまった事が。

「随分と驚いた顔をしていますね。ひよつとして、こういう経験自体初めてなのですか？」

不意に横手から聞こえてきたのは、自身の顔をここまで醜くした原因を作った魔法少女の声。震えながら振り向くと、クラムベリーが悠々と歩み寄ってくるのが見える。

「私にとつてはなんら不思議な現象ではありませんよ。戦いにおいて血が流れるのは当然の事。血の流れない争いなど、戦いとは呼べません。おままごとみたいなものです」

「……うー！ あっ……！」

月明かりをバックに、妖しく光るクラムベリーの目を見てスノーホワイトの恐怖心はより一層増しました。

「私が望むのは強敵との戦い。今のあなたからは、強者の匂いを感じられません。……まあ、そもそもあなたを最初から強敵と称えようなど、微塵も思っていないんですけどね」

「……！」

逃げなきや。逃げなきや殺される。

頭ではそう分かっていたが、体が言う事を聞かず、少し動いただけでスノーホワイトは出血が多すぎた影響からか朦朧とし始め、気がつけば立ちくらみでフラついて、仰向けのまま瓦礫の山に身を置いた。

喉に血が溜まっているのか、気道を確保できず、呼吸が上手くいかない。血で覆われている為か、視界も赤くボヤけていた。

「やれやれ。もう少し抗ってもらいたかったですが、もうその体じゃ無理そうですね。一思いに楽にしてあげましょう」

クラムベリーは心底残念そうに肩を竦め、血に染まったスノーホワイトの前に立った。そしてその右手をスノーホワイトに向かって、今

度こそ息の根を止めようと伸ばしてきた。

死が目前に迫る中でも、スノーホワイトは無抵抗だった。まともには動ける体ではないという事もあるが、それ以前に抵抗するという選択肢が浮かぶよりも早く、今日までの自分を振り返り、そして責めた。

「(罰……なのかな。これって……)」

フラッシュバックする記憶の中で最初に浮かんだのは、彼女が魔法少女に憧れを抱くようになったきっかけのアニメ『キューティーヒーラー』が映るテレビの前で夢中になる幼少期の姫河 小雪。そして幼馴染みで同じ魔法少女好きとして遊んだ仲の岸辺 颯太。中学に入って魔法少女に憧れを抱きつつ、表に出さずに仲を深めた2人の友人。そして本物の魔法少女になって知り合い、共に人助けをするようになった仲間となった者達。その中には、初めてモンスターに襲われていた自分を助けてくれて、後にパートナーとなって、様々な障害にあいつつも乗り越えてきた、スノーホワイトにとって憧れの仮面ライダー、榊原 大地。

が、そんな彼らとも、あの日を境に決別してしまった。他ならぬ自分から彼らを見放した。挙げ句の果てに、パートナーには罵声を浴びせて。

「(守ってもらってばかりで、そのくせ私はそれをいいことに、何もなくて……。自分の価値観ばかりを押し付けて……。バチが当たって当然だよね……)」

スノーホワイトはそこで観念したかのように、体の力を抜き、ありのままを受け入れる事に決めた。解放感からか、意識がさらに薄れ始めてきた。

「(……だいちゃん。……そうちゃん。ごめん、ね……)」

もう届くはずもない声を、心の中で呟くスノーホワイト。

そんな彼女の前に、クラムベリーの右手が迫る。

「……散り際の花も、こうしてみると少しは美しさがありますね。もっと枯らしてみましようか」

クラムベリーの手がスノーホワイトに届く、まさにその寸前だった。

「！」

長年の経験で培ってきた感が冴えたからか、気配を察したクラムベリーが右手を引つ込めると同時に、彼女の右腕を何か掠め取り、地面に突き刺さった。滴る血を気にせず顔に顔を地面に向けるクラムベリー。突き刺さっていたのは真新しい手裏剣だった。

「手裏剣……。なるほど、そうきましたか」

クラムベリーの表情から笑みがこぼれたと同時に、追撃とばかりに幾つもの手裏剣がクラムベリーめがけて出現した。クラムベリーは勢いよく後退しながら体勢を整えてそれら全てを足蹴りではたき落とした。

が、それによりスノーホワイトとクラムベリーの距離が離れ、クラムベリーの前に2人の人物が降り立った。紺色のコウモリと忍者。目の前に現れたのはクラムベリーの予想通りの人物だった。

「パートナーである九尾の登場にも期待してたのですが、あなた方がスノーホワイトを助けに来るとは思いませんでしたよ。ナイト、リップル」

「……フン。カラミティ・メアリにも言ったが、俺には人を助ける能はない。戦うことぐらいは出来るがな」

「……」

リップルは一度、後方に見えるスノーホワイトに目をやった。ぐつたりとしているスノーホワイトの顔面には血が覆われている。そしてクラムベリーに目線を戻して尋ねた。

「……あれはお前がやったのか」

「だとしたらどうします？ 敵討ちでもしますか？」

笑みを浮かべるクラムベリーを見て、リップルはためらいなく舌打ちした。どのみち話を通じる相手ではないと察していたし、戦う事に変わりはない。リップルは懐から取り出したクナイを投げつけて牽制した。

「フフツ。血の気が多い敵は嫌いではありません。あなた方なら、私を楽しませてくれますね」

「楽しむ、か。腐ってるな、貴様も」

「それはお互い様でしょ?」

「……ああ」

ナイトは特に否定する事なく、腰にさしてあるダークバイザーにカードをベントインした。

『SWORD VENT』

ウイングランサーを構え、直接勝負を仕掛けるナイト。クラムベリーはそれに応じるように正面から迎え撃った。リップルもスノーホワイトの事が気になりつつも、目の前の敵に集中する為に駆け出した。クラムベリーの動きは、先ほどスノーホワイトを痛めつけていた時と違って俊敏かつ威力を高めていた。相手がそれなりに戦闘経験豊富だと知っているからだろう。

2対1という状況下でも、ほぼ互角で渡り合っているところから見て、クラムベリーの底知れぬ力を感じさせる。

「(……話には聞いていたが、あの九尾とラ・ピュセルを追い込んだだけの事はあるな)」

下手に出し惜しみをしていると危険だと感じたナイトは一步下がって、カードデッキから一枚のカードを取り出した。引き抜くと同時に風が吹き荒れて、突き出したダークバイザーが変形してダークバイザーツバイとなり、クラムベリーは腕で目を隠した。ナイトの次の動きを察したリップルもマジカルフォンを取り出してタップした。

『SURVIVE』

ナイトはカードを差し込み、リップルは光に包まれると、それぞれナイトサバイブ、リップルサバイブに姿を変えた。

「なるほど。今度はサバイブですか。ますます楽しみですね」

サバイブを前にしても動じる様子を見せないクラムベリー。むしろサバイブの力を得た相手と戦える事に悦を感じているのかもしれない。

ダークブレードを引き抜いて、クラムベリーに斬りかかるナイトサバイブ。リップルも同じようにダークブレードを手に持ち、挟み込むようにクラムベリーに向かっていった。

サバイブとなった2人の攻撃力は先ほどと打って変わって高く

なっており、それに伴ってクラムベリーの猛攻も激しさを増した。

『NASTY VENT』

ナイトサバイブがカードをベントインすると、ダークレイダーが姿を見せ、超音波をクラムベリーめがけて放った。それに対しクラムベリーは右腕を突き出す。動作はそれだけだった。にもかかわらず、クラムベリーは苦しむ素振りを見せない。そして不意打ちとばかりにナイトサバイブと距離を詰めて、その胴体に蹴りを入れた。

呻き声を上げながら後ずさるナイトサバイブだが、瞬時にクラムベリーがノーダメージだった原因を察した。

「超音波を自分で操ったといったところか。どうやらそれがお前の魔法のようだな」

「中々に使い勝手が悪いように思えるかもしれませんが、案外便利なものですよ？ それにこの魔法は、ただ音を遮るだけにあらず。こんな風に」

クラムベリーが右腕を突き出すと、そこから放たれた衝撃波がナイトサバイブに迫る。が、すんでのところまでリップルサバイブが突き倒して回避した。音波の威力を操り、攻撃に転換したのだ。当たればかなり危険な攻撃である。

「フフッ。サバイブを手にしたからといって、油断は禁物ですよ。私やオーデインにはそれを凌ぐ力がある」

「だったら……！」

リップルサバイブはマジカルフォンをタップして駆け出した。するとその両隣に同じ容姿のリップルサバイブが出現し、次々と分裂していった。サバイブの力を得たリップルは、ナイトサバイブの『シャドーリリユージョン』を使えるようになっており、言うなれば『影分身の術』。

クラムベリーも予想外の攻撃パターンに僅かながら目を開くが、臆せず倒しに向かった。四方八方からの攻撃に精神を研ぎ澄ますクラムベリー。そのせいか、ナイトサバイブの方までは気が向かなかった。

『BLAST VENT』

続いてナイトサバイブが使ったのは『ブラストベント』のカード。再びダークレイダーが姿を現すと、両翼にあつたホイールが勢いよく回転し、そこから放たれた突風がクラムベリーめがけて発射された。「！」

リップルサバイブが突然後退したのに気付いた時は、『ダークトルネード』が間近に迫っており、音波で相殺する暇はなく、クラムベリーは直にダークトルネードを受けて、宙を舞った。

クラムベリーは空中でバランスをとりながら、片膝をつく形で着地した。クラムベリーの頬に、突風によってつけられた傷が付いており、そこから血が僅かに垂れ落ちた。が、本人は全く気にする様子はない。

「やりますね。戦闘経験の豊富さを活かし、ここまで対等に渡り合えるとは。本当ならもつと拳で語り合いたいところですが……」

クラムベリーがそこまで呟いた直後、警報が鳴り響いた。それはクラムベリーのマジカルフォンから流れてきていた。活動時間の限界が迫っているようだ。

「どうやら時間切れのようですね。スノーホワイトと少し遊びすぎましたか」

クラムベリーは少しばかり残念そうに呟くと、頬の血を拭ってから2人に告げた。

「では、キリもいなので勝負はまた別の機会に、という事で。今度会う時は、より至高な戦いが出来るようにしましょうね」

そう言つてクラムベリーは背中を向けて、あつという間に飛び去つていった。気配が消えたところから見て、本当に撤退したようだ。それを確認した2人は武器を下ろして、スノーホワイトのところへ駆け寄った。ぐったりとしている、顔面が血だらけのスノーホワイトに触れたナイトサバイブは、彼女の状態を確認した。その間にリップルサバイブは元の姿に戻り、スノーホワイトの手を握った。気を失っており、反応はないが、まだ温かい。

「傷は深いが、息はあるようだな。このままこいつを連れ出すぞ」

ナイトサバイブもスノーホワイトの無事を確認し、スノーホワイト

を軽々と抱き上げた。そしてリップルと共にミラーワールドを出た後、リップルの提案である場所へと向かった。本当ならこのまま病院へ連れて行くべきところだが、普通ではありえないような大怪我を診せて、後で大事になってしまうのも面倒だったので、蓮二と華乃が向かった先は、彼女を人知れず休ませるのに適した場所である。

90. 秋山 蓮二の過去

密室とも呼べる空間内。異臭が鼻につき、その床のいたるところに似たような形をしたものが点々と転がっていた。それが人である事は容易に理解できた。

ある者は首から上を失くしており、ある者は原型が分からないほどに損傷が激しかったり、ある者は膨れた腹に手を置いた状態で絶命していたり、ある者は背中に刺し傷を残したまま息絶えていたり、男女問わずに多くの者が死に絶えていた。

そんな死体で出来たカーペットの上にただ1人、白い制服とピンク色の髪や花が特徴的な少女は佇んでいた。その瞳に光は宿っていない。目の前に広がっているのは、顔もよく見えない死体だけ。そこに転がっている面々の中には、自分が親しい者もいたはずなのに、感覚が麻痺しているからか、今やその面影すら思い出せない。

一つだけ分かっている事があるとすれば、何かが終わったという事だろうか。その中で、彼女は生き残った。何をしたわけでもない。戦おうとも、止めようともしたわけでもなく、ただそこに立っていた。それだけの事だった。戦いは終わったはずなのに解放感も、脱力感も、何もない。

「……何も、してない」

そう呟いたその瞬間、脳内に映像が流れ込んできた。それも一つではない。どれも彼女自身が記憶にないものばかりだ。

ベッドから上半身をはみ出しているジャージ姿の少女の亡骸にすがりつく女性。

寺の中と思われる室内で苦しみながら倒れこむスーツ姿の女性。
同じ魔法少女によって首を絞められ、地面に倒れこんで絶命した魔法少女が殴られ続け、思わず目を背けたいほどに傷つけられいく姿。
背後から胸を貫かれ、血の海に伏せるニット帽の少女。

コート姿の女性が心臓辺りから血を流しながらも、左肩から羽根を生やしている天使の頭を鷲掴みにし、壁に叩きつけて殺害し、もう1

人の天使に近づこうとするが、薙刀を持ったスク水の少女によって手を切断され、そのまま倒れこむ様子。

部屋の中にて、天井から垂れ下がるマフラーで出来た即席の輪に首を通し、ユラユラとぶら下がっている小太りの女性。

どこかの屋上にて、ガラス片が額に突き刺さった状態で息絶えている歳上の女性と、その近くで下腹部が膨れている女性がマントを羽織った状態で血を流しながら倒れており、そのそばに忍者らしき少女が泣きながらうろたえている様子。

雨が降り注ぐ中、背中や口から血を流しながらも、死が目前に迫っていないながらも、目の前に現れた少女を想い、何かを渡しながらかつて絶命する様子。

森の中で先ほどでてきた、右肩から羽根を生やした天使が胸を貫かれて絶命している姿や、腰から下だけの変わり果てた姿の死体や、首から血を流し、倒れこむ少女がいた。その少女の表情からして、何が自分の身に起きたのか分からずに困惑した様子が伺える。

雨の降りしきる高台には、背中から日本刀のようなものによって刺し貫かれている小学生らしき姿や、左腕を失くし、地面に伏せている少女がいた。

また、別の光景も広がっていた。

蟹のような化け物によって、抵抗していた男性が断末魔を上げながら、その化け物に喰われていく様子。

紫色の人物の蹴りによって、灰色の人物が火花を上げながら爆散する姿。

男性の腕に抱かれている男が、満足げな表情を浮かべながら静かに目を閉じる様子。

白衣を着た男が男性に抱えられながら粒子となって消滅し、抱えていた男が涙を流す姿。

ガラス片を手に掲げながら、何かを呟きながら、雨に打たれながら粒子となって消滅する哀しげな結末。

横断歩道を渡っていた親子を迫り来るトラックの魔の手から救おうと親子を突き飛ばし、代わりにねらわれた男性。

地下駐車場にて、逃げようとする緑色の人物が背後から勢いよく貫かれて爆散する様子。

ソファアールの上で手に1本の花を持ちながら息絶えている男性。

鉄パイプを持って雄叫びを上げながら走り出した男性の全身に銃弾が撃ち込まれ、前のめりに倒れる男性の姿。

茂みの中で、眠るように息を引き取り、誰にも気付かれる事なく倒れている女性。

赤と黒が蹴りでぶつかり合い、黒が消滅する様子。

口から血を流している男性が、車にもたれながら右手でもう1人の男性の手を握り、そのまま目を閉じてぐったりとする様子。

腕を組みながら消滅する黄金色の人物。

病室と思わしき場所でベッドに寝転がる事なく、地面に座り込んで、全てのしがらみから解放されたかのような表情を浮かべて絶命している男性。

胸が苦しくなり、膝をついて倒れこむ少女。なぜこのようなものが流れ込んできたのは分からないが、明らかに日常とはかけ離れている光景がいくつもあった。

「どう、して……！……こんな……！」

問いかけても、誰も答えてくれない。が、代わりに返ってきたのは背後から聞こえてくる足音。水たまりに足をつけた時のようにピチャピチャと音を鳴らし、近寄ってくるのが分かった。少女は振り返った。そこにいたのは、狐のようなアーマーをつけた人物。

仮面ライダー『九尾』。すぐにその名が脳裏に浮かんだが、様子がおかしい。よく見るとその全身には白い袴や袴のいたるところに点々と赤い斑点がこびりついている。一步一步確実に近づいてくる姿に、少女は畏怖した。

逃げなければ。そう思い後ずさろうとするが、何か足が掴んだ。見下ろしてみると、もう物言わぬ死体だったはずの者達が彼女の両足

にしがみついていたのだ。悲鳴を上げながら振り払おうとするが、ビクともしない。まるで彼女を道連れにしようと言わんばかりに。生き永らえている彼女を呪うかのように。

気がついた時には、九尾は眼前にいた。目を見開く少女は次第に呼吸が荒れ始めてきたが、直後に荒げていた息は止められた。下腹部に焼けるような熱が帯び始めている。同時に何かが飛び散り逃げていく感覚があった。下に目を向けると、九尾の武器であるフォクセイバーが彼女の腹を貫いていた。そこから溢れ出る血は、突き刺さっているフォクセイバーを持つ九尾を赤く染めあげる。

少女……スノーホワイトは、血で汚れた右手を九尾に伸ばすが、それを遮るかのように、もう片方の手に握られていたフォクセイバーが振り下ろされ……。

自分の悲鳴で目が覚めた小雪は、上半身だけを勢いよく起こした。全身が汗でぐっしより濡れており、気持ち悪い感覚に纏われていた。

が、直後に頭を痛みが貫いた。思わず頭に手をやると、肌とは違う感触があった。

小雪は頭を押さえながら息を整え、冷静さを取り戻した。布団がかけられているところから見て、どうやら夢を見ていたようだ。それも血生臭さしか感じられないもの。改めて状況を整理する必要があると考え、小雪は周りを見渡した。

先ず分かったのは、今自分がいる所が自室ではないという事だった。記憶に手違いがなければ自分の部屋には、魔法少女関連の小物がそれなりに置かれており、部屋もそれなりに女の子らしく凝らしている。だが今いる場所には、石油ストーブやハンガーラックといった、家主には失礼だが殺風景な雰囲気しか感じられない。おまけに物がそれほど置かれていないばかりか、部屋も少しオンボロな気がする。割と近い場所から電車が通り過ぎる音が聞こえてくる。

となると、ここはどこなのだろうか？ 小雪の疑問は、さらに周りを見渡す事で判明した。小雪が寝ていた斜め後ろに、壁にもたれながら寝息を立てている少女の姿があった。冬が近いにもかかわらず、薄手の半袖や半ズボンを着て、毛布一枚を肩からかけているだけ。小雪が何より目についたのは、目の前で寝ている歳上の少女の顔だった。素顔を見たのは一度だけだったが、魔法少女『リップル』としては、何度も会ってきた少女だ。

「……華乃さんの、家」

小雪はそう結論付けた。

すると雲に隠れていた朝日が窓から部屋に差し込んで、小雪は窓に目をやった。窓ガラスに映っている自分の額に包帯が巻かれ、頬には湿布、両腕には同じように包帯が巻かれている事をそこでようやく知った。額の包帯には僅かに赤く滲んでいる箇所がある。華乃が手当てしてくれたのだろうか。

その疑問が解ける前に、目の前の少女は小鳥のさえずりにうるささを感じたのか、ゆっくりと目を開けた。そして窓ガラスに目を向けている、包帯に巻かれた小雪に声をかけた。

「……目が覚めたようね」

「！ お、おはよう、ごうございます……！」

「……おはよう」

突然声をかけられた小雪は反射的に挨拶をした。華乃も一応挨拶を返す。

「あ、あの……。どうして、私ここに……」

「覚えてないの？ クラムベリーにあれだけ打ちのめされたのに」

その一言で小雪はハツとした。昨夜、スノーホワイトはクラムベリーの猛攻によって瀕死寸前まで追いやられた。そして気絶したスノーホワイトを窮地から救ったのはリップルとナイトだった。その後クラムベリーを退け、2人は小雪を華乃の住むアパートの一室まで運んだ。朝日が見えてきた事を考えると、夜の間はずっと気を失っていた事になる。

直後、クラムベリーの氷のような笑みや、血のついた手を伸ばしてくる姿を思い出し、小雪は両手を胸の前に当てて震えた。恐怖が、再び戦いの過酷さをまだ知らない少女を支配する。華乃はそれに気づいていないのか、あるいは気づいてて敢えて何も言わずにいるのか、小雪を見つめるばかりだった。

そんな小雪の震えを払拭したのは、扉が開いた音だった。小雪と華乃が音のした方を振り返ると、藍色のコートを着た華乃のパートナー、秋山 蓮二が部屋に入ってきた。

「どうやらタイミングは良かったらしいな」

蓮二は2人が目を覚ましている事に気づいて、鼻を鳴らした。

蓮二は右手に持っていたコンビニ袋をちゃぶ台の上に置き、壁にもたれてから小雪に目を向けて、口を開いた。

「出血は多かったが、傷はそこまで深くなかった。大人しくしていれば、すぐに治るかもな。……とにかく、今は良い機会だと思って、頭を冷やしておけ」

「た、助けてくれて、ありがとうございます……。でも、どうやって私を見つけて……」

「大した事じゃない。偶々近くを周っていた時に見かけたただけだ。まあ、助けようと言ったのは華乃の方だがな」

そう言つて蓮二は華乃に目を向けた。華乃は恥ずかしさからか、目を背けている。しかし偶然とはいえ、2人が近くにいなかったら、小雪は今頃確実にクラムベリーの手であの世に送られていたという事になる。再び震え始める小雪を見て、蓮二は声をかけた。

「これでようやく分かっただろ。戦うという事がどういふものかをお前が何を見て育ってきたのかは知らないが、お前は二次元を夢見過ぎている。いい加減現実にも目を向けるべきだ。俺達はピーターパンじゃないんだ。いつまでも子供のままではいられない」

「……じゃあ」

小雪は声を絞り出して口を開いた。

「2人は、これからも戦い続けるんです、か……？」

「当然だ」

蓮二は即答。華乃は黙り込んでいるが、否定する気はないようだ。その雰囲気小雪は何も口出し出来ない。そんな小雪へ蓮二がさらに詰め寄る。

「……で、お前は どうする？」

「えっ？」

「拳を交えて戦う事がどういふものかをお前は知った。それでお前はこれからどうするつもりだ」

『答え』は出たのか？

そう問われた小雪は、思わず自分の手のひらを見つめた。しばらくの沈黙の後、口を開いて感情を吐露した。

「……私は。スノーホワイトになる前から、魔法少女が、大好きで、憧れてたんです。子供の頃は、本気でなりたいて思っていました……。いつの間にか、昨日見た魔法少女アニメの事を語れる女の子達は周りからいなくなっていました。当然ですよ。魔法少女なんて幼稚だって、よっちゃんやスミちゃんもそう言っていました……。唯一、幼馴染みだったそうちゃんとか、魔法少女の事で話してなくて……。それでも私は、『魔法少女になって人々を幸せにしたい』って想いは捨てきれずにいました」

「……」

『魔法少女育成計画』の影響で本物になれた時は、本当に嬉しくて、ファヴや魔法の国に感謝しつつ放しで……。そのおかげで九尾にも出会えたし、そうちゃんとも魔法少女として再会出来たし、とにかく幸せでした。もちろん、華乃さんや秋山さんに出会えたのも良かったと思ってますし……。『世の為人の為に魔法を使う魔法少女』になって、これからも人助けに励もうと思ってました」

そこに来て、この人員削減と称した生き残り合戦もといバトルロワイアルの開催。数多くの同胞が息絶え、同じチームメイトも心身問わず傷を負い、何よりそれらが同じ魔法少女や仮面ライダーによって引き起こされた事が、スノーホワイトにとって耐え難いものだった。

「生き残るためとは言っても、率先して人を傷つけて、殺そうとするなんて、魔法少女や仮面ライダーのすべき事じゃない。そう思ったのに、みんなは……。でも、死にたくないのはみんな同じ気持ち。それは分かっています。でも、それなら私は……」

「だから？」

蓮二が小雪の言葉を一蹴する。

「それで？ お前は何をしたいんだ？ さつきから質問の答えになつてない事ばかり口にしてているが、お前は結局どうしたいんだ？」

「それが分からなくて……！」

不意に小雪は腹の底から悲鳴に近い声をあげた。

「それが、分かんなくて……！ 誰かを傷つけてまで生き残ろうとするなんて、間違ってるって分かっているのに、でもだからってこのまま何もしなくても良いわけじゃないはずなのに……！ これじゃあ、私かみんなのどつちが正しいかなんて、分からなくて……！」

「だから答えが見つからない。そう言いたいのか」

目に涙を溜めながら俯く小雪は首を振らない。そんな彼女を見て、蓮二はため息と共にこう言った。

「お前は今までずっとそうやって迷ってきた。……それで、誰か一人でも漏らさず救えたのか？ 一般人なら確かに救ってきたところは俺もよく知っている。だが他の魔法少女や仮面ライダーはどうだ？」

お前から手を差し伸べて救えた事はあったか？」

「……！」

答えはNOだ。少なくとも彼女は魔法少女や仮面ライダーを自分の手で救い出した記憶はない。自分が授かった魔法はあくまで道端で困っていた一般の老若男女を助けるためだけに使っているだけ。決して同胞同士での戦いの場では使う事はなかった。魔法少女や仮面ライダーが死に行く中で彼女に出来たのは、同胞の死を嘆き悲しみ、泣く事だけ。これではとてもじゃないが、同胞を救ったとは言えない。

こんなやり方で魔法少女や仮面ライダーを厳選しようなど間違っているのは分かっている。だが本当に間違っているのは、自分の弱さに身を委ね、時の流れに身を任せて、何もせずに他者の死を看取る自分の有り様ではないのか？ そんな疑問がスノーホワイトと呼ばれる少女の頭の中を駆け巡る。

「（私が、弱いせいで、みんなが……）」

段々と意識が深い闇に堕ちようとする小雪だが、そこへ戦う事を肯定する男の声が耳に響いてきた。

「お前の存在そのものが弱いとは言わない。むしろお前が今まで信じてきた事、それそのものは強さの一つだ。捨てる必要はない。ただ……。お前は、戦う事に対して思い違いをしている。確かに相手を傷つける事に相違はない。だが、その奥にはもつと深いものが隠れている。俺も華乃も、それに気づいている。だから戦える」

「奥……」

「そういう意味じゃ、城戸の方がお前よりは多少弁えている。最初はどうしようもないバカだったが、少しはマシになったと思ってる。奴自身、戦う理由を見つけたようだからな」

「城戸さんが……」

蓮二は俯いている小雪に向かってこう言った。

「確かにあいつはバカだが、俺やお前よりは、ずっとマシなバカだ」

「……」

「俺は、戦うと決めている。俺には、戦って生き残らなければならない理由がある。……あいつを、恵里奈を見つけるまでは、少なくとも俺

は死ねない」

「秋山、さん……」

小雪は思わず蓮二の目つきに惹かれていた。そこにあつたのは、揺らぐ事のない決意。まだ全てを把握したわけではないが、生きる理由を彼は見つけている。

そんな小雪の目線には目もくれず、蓮二はちやぶ台に置いてあつたコンビニ袋の中から取り出したものを小雪に投げ渡した。よく目にするこんぶ味のおにぎりだった。先ほど外に出かけていたのは、朝食用の分を調達してきたからだろう。同じくおにぎりで鮭味のことを渡した後、華乃にも同じものを投げ渡し、口を開いた。

「飲み物もここに入れてある。好きに選べ。お金の事はいいが、一つ貸しを作ったから、またどこかで返してもらおうぞ」

「は、はい」

「それじゃあ、こいつの事は頼むぞ華乃。俺はもう出かける」

「分かりました」

「それから……」

部屋を出る寸前、蓮二は首だけを小雪に向けて言った。

「手塚は特別だが、俺は名字で呼ばれるのは好きじゃない。よほどの事情がなければ、名前の方で呼べば良い」

それだけ告げると、蓮二は部屋を出た。扉を開いて閉まる音が部屋の外からも聞こえてきた。一度小雪と華乃は目を合わせたか、特に会話する事なく、腹ごしらえと言わんばかりにおにぎりにかぶりついた。丸半日寝ていたからか、食欲はあつた。冷たくはあつたが、胃袋に収まるなら何でも良く、黙々と食べ進めた。一つ食べ終えたところで、最初に口を開いたのは華乃だった。

「……あの人は、目的があるから、自分に厳しいだけだと思う。だから、きつとあなたにああやって冷たく言ってしまうけど、本当はそれだけ気にかけてる。だから、あの人の事、分かってあげてほしい」

「そ、それは分かります……。でも、さっき言つた恵里奈って人。蓮二さんと何か関係があるみたいですけど、どんな人か、華乃さんは知ってるんですか？」

「……ええ」

華乃は立ち上がり、袋から緑茶の入ったペットボトルを取り出し、元の位置についてから蓋を開けて一口含む。そしてペットボトルを口から離すと、小雪に顔を向けた。

「……あの人は、恵里奈さんは、蓮二さんのたった一人の肉親。妹なの」

「蓮二さんの、妹……」

華乃は小さく頷き、彼女の面影を振り返りながら語り始めた。

同じ頃、一度華乃の住むアパートの一室に顔を向けた後、蓮二は首から提げている写真入れのペンダントを開いた。無粋な表情の蓮二とは対称的に、ハキハキとした表情の女性が写り込んでいる。

「……恵里奈」

蓮二は一言、写真に写る女性の名を口にすが、それも偶々通過した電車の轟音に掻き消された。

秋山 蓮二は、よほど親しい仲を持った者以外とは極力避けてきた。喧嘩っ早い性格もあるのだが、頑固さや好き嫌いの激しさが災いし、大学時代は行く先々での喧嘩がいつの間にか日課になっていた。友と呼べる者は当然おらず、終始孤立を貫き通していた。

大学生の頃に両親を事故で亡くし、唯一の家族である妹の恵里奈と共に生活をするようになってからも、その性格は変わらなかつた。喧嘩で怪我をしたら恵里奈はブツブツ文句を言いながら手当てをする。そして蓮二も負けじと小言を言って小喧嘩になり、最後は何だかんだ言って和解する。それがいつしか当たり前前のようになっていた。

とはいえ本心は強い正義感と思いやりのある持ち主であるため、彼の事をよく知る人物の目からは高く評価されており、信頼も厚い。
『ねえねえ、これ知ってる?』

ある日、恵里奈は食卓を挟んで彼女が持つスマホの画面を見せてきた。画面には『魔法少女育成計画』と大きくタイトルが貼り出されている。蓮二がおおよそ聞き慣れない単語に顔をしかめていると、恵里奈は言った。

『これともう一個、『仮面ライダー育成計画』とかをやり続けてると、何万人かに1人の確率で、本物になれるって聞いた事ない?』
『さあ。興味ないな』

『だと思った。まあやってみようよ。私もほら、もうこれだけレベルアップしてるし、今だったら知り合い通じてレクチャー出来るから! 協力プレイも出来るみたいだし、この仮面ライダー育成計画ってや

つダウンロードしてみてもよ！ 結構面白いよこれ！』

『……ふん』

鼻を鳴らしつつも、言われた通りにアプリをダウンロードする蓮二。いくら無課金制を徹底しているとはいえ、所詮はソーシャルゲーム。どこかで飽きて当然だから、今はあえて妹の誘いに乗ってやるか。そんな軽い気持ちでゲームを始めた。

彼が始めた『仮面ライダー育成計画』は、結果的に蓮二にとって気晴らしには最適なゲームとして、その後も彼はプレイし続けた。『仮面ライダーナイト』という騎士姿のアバターを文字通りレベルアップさせて、いくつものトリッキーなアイテムを獲得した。いつの間にか、中々手に入らない激レアアイテムまで手に入れていた。

『(本物になれるかも……か。随分とふざけたデマが流れてるな)』

そう思いつつも順調にレベルを上げていき、『仮面ライダー育成計画』を始めてから約1ヶ月後に、それは突如として起こった。

マスコットキャラクターのシローがいつもと違うセリフを口に出しているのは分かっていたが、気にもとめずにタップし続けていた。そして気がつけば、彼はアバターと同じ姿になっていた。

『おめでとう！ 君は仮面ライダーに選ばれたのだ！ これからは本物のヒーローとしてこの街を守っていくのだよ、仮面ライダー「ナイト』』

シローにそう言われ、ようやく事態を理解したナイトだが、すぐにシローに異議を申し立てた。

『何？ 仮面ライダーを辞めたい？』

『こんなものは俺の趣向に合わない。さっさと契約を破棄しろ』

『取り消しは不可能だ。大方、文章を読まずにタップ連打した結果だろうが、そういう輩は他にもいた。そもそも、本当になりたいと思っていないかったら、選ばれるはずもない。心の奥底で望んでいたんじゃないのか？ 正義に満ち溢れたヒーローになる事を』

『バカバカしい……！』

その後はいざこざがありながらも、結果的に仮面ライダーになる事を承諾した蓮二。自身のスキルや注意事項を確認した上で、蓮二は暇

つぶしにと、空いた時間で性能を試してみた。魔法少女や仮面ライダー以外に正体を明かしてはならないという決まりがあるため、恵里奈やバイト先の連中にも話す事は許されない。もつとも彼自身口は堅い方だったので、懸念だったかもしれない。途中で教育係としてライアが配属されたが、何でもかんでも占いで蓮二の運勢を見透そうとする姿勢を鬱陶しく思い、一方的に関係を断ち切ってきた。

そんな彼が初めて出会った魔法少女。それが後に『リップル』と呼ばれる細波 華乃だった。初めて彼女という存在を認識した当初はまだ魔法少女ではなかった。ある出来事を経て知り合った2人はバイトで同じ時間帯のシフトで仕事をしていた。

華乃が魔法少女になった事を知ったのは、それから間もない頃だった。いつものようにモンスター退治をしようとした現場でまだ魔法少女になったばかりのリップルが苦戦しているのを目撃し、嫌々ながらも助太刀し、モンスターを倒した。そこで偶然にも互いの正体が判明し、2人はより一層親しくなった。

当然ながら、華乃には妹である恵里奈の事も紹介し、信頼関係を築き上げてきた。そしてリップルの教育係として手を挙げ、夜道を駆け巡り、モンスター退治に勤しんできた。

その頃から、蓮二は恵里奈と過ごす時間が少しずつ減っている事に気づいた。蓮二が家にいる時は決まって恵里奈の姿はなく、逆に蓮二が出かけている時に恵里奈がいたり、ようやく会えた時には、すでに日付が変わっていた。このまま、何れは別々の道を歩むのではと思っていた蓮二だったが、とうとうその予感が現実のものとなった。

恵里奈がいつになっても家に戻ってこない。日付が変わってから戻ってこないなど、今まで一度もなかったはずなのに。そんな日が続く、さすがに異常事態だと思った蓮二は警察に連絡し、華乃と共に調査を進めていた。が、賢明な捜査も虚しく、恵里奈の居所は掴めていない。それでも2人はめげずに恵里奈を探し続けた。

そんな最中に起きた、総勢32人の魔法少女と仮面ライダーによる生き残り合戦。最初はキャンディー集めに重点を置いていた抗争が、いつの間にか本物の殺し合いへとシフトチェンジした。それによつ

て恵里奈搜索に割く時間は事実上取れなくなった。下手に搜索にばかり集中していたら、足元をすくわれ、そして殺される。

「戦わなければ生き残れない」

その信念のもと、恵里奈の無事を願いながら、今宵もナイトは、リップルや戦いを経て知り合った仲間と共に、生き残る術を模索している。

9 1. 憧れの魔法少女

「……蓮二さんは、周りからは非情だって言われてるけど、私はそんな事ないって知ってる。龍騎もトップスピードも、薄々それに感じていると思う」

華乃の口から語られた、仮面ライダー『ナイト』の『戦う理由』を耳にした小雪は、知らぬ間に布団を握りしめていた。

彼には、生き残る目的があった。生き別れた妹を探す為に、モンスター退治や人助けをこなしつつ、情報を集め続けていた。こうしてライダーや魔法少女と戦う合間も、そうしてきたに違いない。明確な目的も無いまま、死にたくないという気持ちだけで逃げ続けた『スノーホワイト』と、目的の為に、何かを犠牲にする事を厭わず、戦う事で生き長らえている『ナイト』では、実力だけでなく精神面でも天と地ほどの差があった。

やっぱりあの人は凄い。自分が情けなく見えるが、それ以上に感嘆とした思いが前に出ていた。ただ、それでも思う所はある。

「(でも、それでも、殺しあう事には変わりはない……。私は、どうしたら……)」

なおも迷い続ける小雪の表情はさらに曇る。そんな彼女を視界に捉えながら、2つ目のおにぎりに手をつける華乃。

ようやく会話が再開したのは、彼女がおにぎりを全て食べ切ったところだった。

「あの……。華乃さんも、その……。蓮二さんみたいに、恵里奈さんを見つける為に、戦い続けるんですか……?」

「……それも、ある。恵里奈さんには、ここに来てから少しだけど、世話になった事があるから。恩返しみたいのがしたいものもある。……でも、今はそれ以上に、その……」

不意に顔を少しばかり紅くした華乃は、こう語る。

「蓮二さんや、つばめ、城戸 正史さん。……あなたを含めたあのチームで、最後まで生き残りたい。死なせたくない。そのためなら、剣を握れる」

「つばめ……?」

「トップスピードの本名」

「そうですか……。あの……」

「何?」

「その……。上手く言葉に出来ないんですけど、華乃さんって、蓮二さんと似てるような気がするんです。初めて見た時から雰囲気とか、何となく……」

「……まあ、否定はしないわ。私も蓮二さんも極力、他の人との馴れ合いは避けたいところはあるし、それに……」

華乃は目線を下げて、自身の手のひらを閉じて、握り拳を作った。

「私も蓮二さんも、暴力の中でしか、生きていけなかったから」

「えっ……?」

困惑する小雪と、これまでの事を静かに思い返す華乃。歳はさほど離れていない少女である2人の決定的な違いが、明かされようとしていた。

「……私の母さんは、今まで5回くらい再婚を繰り返してた」

「お母さんが……?」

「小学校の時とか、中学校の時とかは、その事でクラスの奴らはからかってた。それがたまたまなく悔しくて、憎くて……! その頃から、私は相手を屈服させるまで殴り続ける事で解決してきた」

曰く、『理不尽な理由で自分を侮辱した相手に対しては音を上げるまで暴力を振るって、屈服させる』のが、細波 華乃のスタンスだった。

「酷い……!」

「……それは、誰の事を指してるの?」

「華乃さんを、そんな風に悪く言った人達だよ……! だって華乃さんは、お母さんの再婚の事には全く関わってなかったんですよ……! それなのに、華乃さんの事を悪く言うなんて、それじゃあ華乃さんが怒るのも無理ないよ……!」

「そう言ってくれるだけで、少し救われたかも」

肩を竦める華乃。

ここまで見ただけでも分かる通り、華乃も蓮二も暴力を用いてあらゆる事を解決している点でも似ているところはある。

とはいえ華乃も高校生にもなると、様々な差し障りが生じ、暴力だけで問題を解決する事が困難になった。あくまで、外の世界に限った話だが……。

華乃に転機が訪れたのは、母親が自称義父を名乗る男を連れてきた時の事だった。紹介されてものの数日も経たないうちに男が本性を表し始めたのか、性的な行為を目撃するようになった。それが華乃に及び、無言で尻を撫でられた時は、屈辱を拳で返しただけに留まらず、急いで荷物をまとめて、実家を出たのだ。

「さすがに我慢の限界が来たし、ある程度年月が経ったら一人暮らしを始めようって決めてたから、今にして思えば、良い機会だったかも」
「そう、だったんですか……」

少なくとも、小雪の父親はそんな性癖を持たない。ほぼ同世代でも、これだけ家庭環境に大きな差が生まれる事を、小雪は初めて目の当たりにした。そして改めて自分が恵まれている事に気づく。

「このアパートの事は、前もって調べてたから、手続きが完了するまではネットカフェとかに籠ってたけど」

狭いが家賃はそれなりに安いので、一人暮らしにはもってこいだ。だが、それでも将来の事を考えて最低でも高校を卒業するにはお金が必要だった。そこで彼女は給料や場所の事を念頭に入れながらバイト先を探し始めた結果、たどり着いたのは喫茶店『ATORI』だった。

店長である老婆一人と数人しかいない従業員がいる環境は、人との馴れ合いを避けてきた彼女にとって、さほど悪くない条件だった。給料もそれなりに出るの、早速履歴書を作成して出向いた。

面接も滞りなく終わり、ウエイトレスとして働く事になった。接客業を担当する事になり、少し不満はあったが、生活の為には仕方ないと腹をくくり、店長の紹介で、一人の男性からレクチャーを受ける事になった。

「それが、蓮二さんだったんですか？」

「そう。それがあの人との最初の出会い」

歳上の男性という事もあって、すぐに義父の顔が思い浮かび、レクチャー担当の男性……秋山 蓮二を知らず知らずに睨みつけていたが、本人は全く気にしていない様子だった。

華乃が蓮二の事を自然と意識し始めたのは、会ってから数日も経たないうちだった。蓮二は基本となる動作や注意点を軽く説明しただけで、「後は好きなようにやれ」と告げて、華乃とそれ以上関わろうとしなかった。その事は、華乃を惹かせるのに十分だった。

「私と同じだ、って思えたのは、あの人が初めてだった」

そんな中、バイトと学校の両立に慣れ始めてきた頃に、気晴らしになる趣味が欲しくなり、目に付いたのが、『魔法少女育成計画』だった。

「小雪。あなたはさつき、魔法少女に憧れてたから、『魔法少女育成計画』に手を出したって言ってたわよね？」

「え、ええ……。華乃さんは、どうして『魔法少女育成計画』を？」

「単純に気晴らしになるものが欲しかったのと、無課金で、しかも単独プレイが出来るってところが私に合致してたし、魅力的だった。趣味にお金なんてかけるのはバカらしいし」

「(本当に、一匹狼みたいだな……)」

スマホの普及化に伴ってソーシャルゲームの数は増え、無料を前面に押し出しつつも、快適にゲームを進めるなら課金が必要だ、といったゲームが数多く出回ったが、その点、『魔法少女育成計画』において、ゲーム内のアイテムはゲーム内のコインまたはマジカルキャンデーでしか手に入らないといった、完全無課金を徹底していた。

華乃も学校で『魔法少女育成計画』や、同じ内容で男子向けの『仮面ライダー育成計画』の話を耳にして、幼稚な連中だと最初は小バカにしていたが、いざやってみると、中々に面白いギミックが満載だった。契約料の事もあって、1日30分という制約を設けてプレイした事が功を奏したのか、ゲームの進行こそ遅かったが、自分が理想とする戦術やコンボの為にアイテムを集め続ける作業は、ゲーム未経験者だった華乃にとって新鮮味があり、面白かったそうだ。

「私も子供の頃は、魔法少女系のアニメを観てたから、懐かしさもあつ

た」

「あ、それ私も分かります。それに、本物になれるって噂を耳にした時も、別になりたいわけじゃなくて、なれたら良いし、昔みたいに楽しめたらいいなって思っただけでプレイしてましたから」

「私もよ。本気で信じてたわけじゃなかったし。……でも、現実になっちゃった。ゲームを始めてから1週間ぐらいの時だった」

「えっ!? 私なんて1ヶ月くらいかかったのに!」

驚く小雪を尻目に、華乃は再び語り始めた。

普段見慣れない画面に切り替わったものの、一々説明文に目を通すのも面倒だった華乃は画面をタップし続けた。その結果、光に包まれた細波 華乃は魔法少女『リップル』となり、ゲーム内で設定したアバターと寸分違わぬ姿を、鏡を前にして確認した。そして噂は本当だと確信した。

「フアヴに目的とか聞いてみたけど、全然話は通じなかったし、取り消しもアバターの変更もできないって言われて、怪しいけど承諾するしかなかった」

「……」

小雪は自分が魔法少女に始めて変身した時の事を思い返した。あの時は本物になれて興奮していたから、特に怪しまなかったが、確かになぜ選ばれたのかまでは、詳しく語られなかった。

『あなたはもう、「用済み」なんですよ』

昨晚、クラムベリーが放った言葉。頭の中で整理してみると、彼女には自分が魔法少女になれた訳を知っているようにも捉えられた。

「フアヴから、教育係を配属するって言われた時は、また人間関係に悩まされるのか、って不満ばかりだった。さっさと一人前になって、1人で行動した方が良くって思っただけで、早速現れたモンスターに戦いを挑んだ。でも、想像してたよりキツかった」

リップルの魔法『手裏剣を投げれば百発百中だよ』は、見ての通り戦闘向けであるため、困ってる人を助けるよりも、モンスターと戦うのに最適だとタカをくくっていた。だが彼女が始めて対峙したモンスターは、予想以上に硬く、手裏剣程度ではどうにもならなかった。

「その時に、偶々現場に来たナイトが援護してくれたおかげで、そのモンスターを倒せた。始めて会ったばかりなのに私の動きに合わせて動いてくれた事に疑問はあつたけど、それからすぐに人目のつかないところに連れてかれて、変身をお互い解いてから、やっと納得したの」

路地裏でナイトがVバックルからカードデッキを外し、素顔を表した時は、華乃も衝撃を受けた。まさか自分を助けてくれたライダーが、バイト先の先輩だったとは夢にも思わなかった。それからお互いに素性を話し合ううちに、華乃の中で、蓮二に対する男性嫌いの感覚がなくなっている事に気付いた。彼女にとつて異例の事だった。それから華乃はなぜ自分を助けたのかを問い詰めた時、彼は言った。

『俺は俺のやりたいように、戦いたいだけだ。モンスター相手なら、暴力を振るつても咎めるやつなんていないしな』

やりたいように戦う。その言葉がリップルを、華乃を揺れ動かした。

「後で分かったんだけど、ファヴも活動拠点が近いからって理由でナイトを教育係にするつもりだったらしい。蓮二さんに教えてもらうぐらいだったら悪い気はしなかったから、そこだけは素直に受け入れた」

相変わらず、基本的な事だけ教えて、後は必要以上に教えてはくれなかつたけど。華乃はそう呟いた。

蓮二とバイトや魔法少女としての活動時間で共にするようになってから、華乃の中で生活が充実していくのを感じていた。休みの日には蓮二から妹の恵里奈を紹介され、話し相手になってくれたり、生活の援助もしてくれた。華乃は生まれて初めて、人に感謝した。

そんな彼女が行方不明になったと兄から聞かされた時は、心底心配するほどにまで、華乃の心は人間らしさを取り戻しつつあった。そしてモンスター退治の合間に、恵里奈の失踪に関する情報を収集し続けた。

「……………これは、あくまで私の推測になるんだけど、恵里奈さんはもしかして、魔法少女関係で行方不明になったんじゃないかって思ってる」

「えっ!?? 魔法少女が……………」

「彼女が『魔法少女育成計画』に手をつけているのは知ってたし、モンスターに捕食されて消息を絶つたって可能性もあるけど、私にはそうは思えない。魔法少女の存在は、私が魔法少女になるずっと前から噂になり続けてるみたいだし、何らかの形で巻き込まれた可能性もゼロじゃない。でもあの人は、きつと今でも生きてる。確証はないけど、そんな気がする。それだけ」

魔法少女や仮面ライダーの座をかけた戦いが始まってから、自分の身を守るためにと、搜索する時間がほとんど潰れてしまったが、それでも彼らは夢見ている。いつの日か、妹や恩人と再会出来る日が来ることを。

「それが、華乃さんの、戦う理由……」

「それで全てとは言わないけど」

ようやく会話も一区切りついた頃には、外の方からも親子と思われる会話話が聞こえてくるようになった。と、ここで華乃が再び口を開く。

「ねえ。今度は私から質問しても良い？」

「えっ？ 良いですけど……」

「始めてあなたがいろんな活躍してるのをチャットで見てて、ずっと気になってた。どうして、そこまであなたは、人助けに精を出せるの？ 何が、あなたを突き動かすの？」

そう問われた小雪は当初、質問の意味が理解できなかった。当たり前のようにこなしてきた『人助け』をする理由。怪我の影響で上手く回らない脳をフル回転させ、ようやく言葉にするのに多少時間がかかった。

「……私でも、よく、分からないところがあります。子供の頃から好きだった魔法少女のアニメを見ているうちに、人助けに憧れてて、それで……」

「……それだけ？」

「はい。……私は、だいちちゃんやそうちゃんみたいに、誰よりも誇れるものなんてないし、勉強やスポーツも得意とは言えないです。それに勉強やスポーツは、キャンディー集めみたいに誰かと競い合って結

果を出すもので、私は、そういうのは苦手なんです……。でも人助けはそんな風に競わなくてもいいから、それが一番の取り柄だから……。だから、それが思うがままに出来る魔法少女になれた時は、とっとも嬉しくて……。でも、現実には私が思ってるよりも甘くなかった。ねむりんや先生、雫さんに奈々さん、それに美華さんもいなくなつて……。私に優しくしてくれた人は、みんな死んじやった。そう思うと、何もしてない自分が情けなく思えて、それを認めたくなくて、みんなに八つ当たりして、あんな事を言っちゃつて……」

目に涙が溜まり始めた小雪を見て、華乃はこう語り始めた。

「やっぱり、私の想像通りの魔法少女だった」

「えっ?」

「争い事を好まず、他人の為に涙を流せるぐらいに、優しい子」

でも……。

華乃は小雪の目を真っ直ぐに見つめていた。その瞳からは相手を問い質そうとする強い感情が渦巻いている。

「優しいだけを抱いても、この世界では生きていけない。時には、自分の事も最優先に考えながら、相手と向き合つて、分かつてもらえるまで、戦い続けなきゃならない時もある。それで相手を殺してしまう事になつたとしても、それは……」

「そんなの、ダメだよ!」

小雪は思わず叫んで遮つた。

「生き残るためだからって、誰かを傷つけるなんて、私には考えられない……。もし私にとつて大切な人が殺されたとしても、私には人を傷つける事なんて出来ない……。自分勝手な判断だつて分かつてる! 分かつてるけど……。だからって、戦つて殺そうだなんて、そんなの嫌だよ……。そんなことしたら、もう魔法少女でも、仮面ライダーでもなくなつちゃう! ただの『人殺し』になつちゃう! そんなの私が」

「ただ一つだけ、自分にとって大切なものを最後まで守り通す為だつたら、私はその『人殺し』でも構わない」

返す刀でそう呟く華乃。

「誰かの願いの為に生きるつもりなんてない。私は自分の望みの為だったら、死んでもいい。それだけで自分の仁義を貫き通せるから」
他のみんなだって、きっとそうだから。

華乃は確信めいたように呟く。小雪は涙が止まらなかつた。目の前にいる魔法少女すら止められない自分に腹を立てているのだ。小雪は段々と自分の存在価値が分からなくなり始めた。

すると、そんな小雪を見て、華乃はある事を告げた。

「魔法少女は、憧れるだけでなるものじゃないと思う。私自身、魔法少女とか仮面ライダーとかいなくても、この世界は上手くやってくれると思う。実際、私達と普通に生きてる人にこれといった差はない。あるのは『力』の有無だけ。だから、ここから先は、戦う覚悟を決めた者だけが、戦場に立てば良い。あなたなら、力を保持しながら普通の人として生きていくのもアリだと思うし、似合ってると思うから」

「華乃、さん……」

「迷ってるうちは、答えを出さなくてもいい。でもこれだけは忘れないで。迷ってる間に、時間だけじゃなくて、自分でも気づかないまま大切なものまで失われていく事を」

「……」

「……そろそろ戻りましょうか。家の人も心配するだろうし。ゴミとかは後で私になんとかするから」

そう言って立ち上がった華乃は、小雪を立たせるように促した。小雪の家まで送り届けるようだ。

いつまでも長居できないと悟った小雪は立ち眩みを挟みつつも、自力で起き上がり、アパートを後にした。外から見ると、いかにもオンボロという表現が相応しかった。

冬が近いにもかかわらず、日が照っており、隣同士で並んで歩いていても、会話する余裕はなかつた。小雪が道案内している間も、華乃は相槌を打つだけで、会話をする素振りは見せない。

ようやく華乃の口が開いたのは、小雪の家の正面玄関が見え始めた頃だった。

「でも」

「……………」

「私は、あなたのような魔法少女に憧れていた。それは事実よ。……だから、あなたがこの先どんな決断をしたとしても、私の心の中で、あなただけは魔法少女であり続けるから」

魔法少女であり続ける。その言葉が小雪の心に突き刺さる。

その後は自然な流れで、インターホンを鳴らし、昨夜から帰ってこない事を心配していた小雪の両親が出てきて、一言二言話した後で、華乃は手を振りながら背を向けて立ち去った。小雪は多大な心配をかけてしまった事を謝り、怪我の方は大丈夫だと告げた後、自室に入って、ベッドの上に寝転んだ。

「(魔法少女……。私の理想とは、かけ離れてた……。私は、これからどうしたら良いんだろう……)」

机の上に置かれていた学生カバンに取り付けられていた、昔観ていた魔法少女アニメのキーホルダーに目を向けながら、考えを巡らせている小雪は、昨晚の疲れが完全に取れていないのか、ものの数分もしないうちに、眠りについてしまった。

9.2. 戦う理由は十人十色

「うくん……。この写真はここで……。ツシヤア！ やっと終わったあー！」

「おい正史。終わったのはいいけどもうちつと音量下げろよ」

「す、すみません……」

「まあいい。令子、ちよつと正史の出来を見てくれ」

「はい」

いよいよ肌寒くなり始めた休日。『OREジャーナル』では今日も平和な光景がそこにあった。

ペットのイグアナの餌やりに夢中の島田に、令子から記事に関する指摘を受けている正史。さして変わり映えのない光景だった。そんな中で大久保は正史のデスクに近寄り、後方から彼が作った記事を覗き込むながら口を開いた。

「にしてもお前。相変わらずジャーナリズムに欠けてる点はあるが、遅刻は免れてるじゃねえか」

「そ、そうですか？ いや、照れますよ」

「別に褒めてねえよ。社会人として当たり前だろ？」

孫の手で軽く正史の頭を叩く大久保。

「(……まあ、実際はつばめに助けてもらってばかりなんだけどな)」

正史が心の中で呟くように、正史が遅刻せずに出勤できるのは、現在訳あって同居しているトップスピードの変身者、室田 つばめのお陰でもあった。決まった時刻に起こしてくれて、栄養バランスのとれた朝食を提供してくれる。おまけに昼食の弁当も作って渡してくれる。正史にとってこの上なくありがたい事だった。

「(けどまあ、体の事もあるし、迷惑かけたたくないのも本音だけどなあ。パートナーの俺もすっかりしないと)」

「正史？ 何にやけてるんだ？」

「えっ？ 別に何でも……」

正史が適当に誤魔化しながら熱いお茶を飲んでいると、外からドアをノックする音が。誰かが尋ねて来たのだろう。

「は〜い。鍵開いてますけど、どちら様で」

「お邪魔します〜す!」

不意にハキハキした声と共に、その声の主が勢いよくドアを開けて入ってきた。その人物を見た途端、正史は驚きのあまり吹いて、口の中のお茶を撒き散らした。おかげでお茶は直線上にいた大久保の腕にかかってしまい、大久保は悲鳴をあげながら暴れまわった。

「編集長!?!?」

「ちよ、おい正史! 何してんだよお前!」

「す、すいません編集長! ってか何でここにいるんだよ、つばめ!」
「えへへ、来ちゃった!」

正史に向かってウインクをする女性は、紛れもなくつばめだった。その手には手提げカバンが握られている。

「にしてもここが正史の仕事場かあ。もつと広いところを想像してたんだけどな」

「いや、そういう事聞ってるんじゃない? 何でここに!?!?」

「前にこの会社の事を教えてくれただろ? スマホ一つありやあ、場所なんて分かるに決まってるし」

「いや、だから……」

一方で大久保達は、突然現れた妊婦が、仕事仲間と普通に会話している事が気になった。特に島田はこれでもかとおつばめを睨みつけている。

「お、おい正史。その人お前の知り合いか?」

「えっ? あ、ああはい。まあ、その……」

「チイツす! 俺、室田 つばめ! 正史と仲良くしてもらってるんで、よろしく!」

「お、おう……。ていうか正史。お前いつから別の女と知り合ってたんだ?!? しかも子持ちとか!」

「城戸君、どういう事?」

「えっ? いや、これは……」

令子にも迫られ、どう答えていいのか分からない正史だが、それよりも早くつばめが正史に近づいて、カバンから何かを取り出した。

「それよりもほら正史。忘れ物」

「……あ」

つばめが差し出したのは、いつも弁当箱を包んでいる風呂敷だった。どうやらつばめの自宅に忘れてきたらしく、それを届けにOREジャーナルに出向いた、という事だろう。

「あ、ありがとなつばめ」

「おうよ。おっとそれから、これ、みんなに差し入れって事で」

次につばめが取り出したのは、料理が入っているであろう、中ぐらいのタッパー。それを正史のデスクに置いた。

「お、おう……。ってかちよつと待て正史。お前結局その女とはどういう」

「い、いやこれは……。あ、すいません編集長！ そんなわけでこれから取材に出かけてくるんで、行つてきます！ 昼にはまた戻ってきますから、その時にまた説明します！ ほ、ほらつばめ！ 行くぞー！」

「ちよ、おい勝手に引つ張るなよ……。あ、そんじゃまた！」

つばめは大久保達に手を振りながら、正史と共にOREジャーナルを後にした。

嵐のように現れ、嵐のように去る。その言葉通り、つばめにつられて正史もいなくなり、何とも言えない空気が漂い始める。あの令子でさえ、状況が追いついていない。

「……正史君に、新しい女……！」

一方で島田は歯ぎしりしながらワナワナと震えている。触らぬ神に祟りなし、という諺がある以上、今は島田に触れない方が良く考えた大久保と令子は目を合わせた。

「……見たところ、私よりも若かったわね。それでもって妊娠中……」「あいつ、女が出来てたのか……。しかし謎だな……。よりによって何で妊婦と？」

「不倫……って線はないですよね。城戸君に限って」

「まさか……。だとしたらとつくにバレてるだろ、向こうの夫に」

正史に新しい彼女ができた。そう結論付けてから、つばめが持ってきた正史用の弁当とタッパーに目を向けた。

「これ、いつも城戸君が持ち歩いてる弁当箱ですよ。じゃあここ最近の弁当は全部彼女が……？」

「差し入れて言っただけど、何なんだ？」

大久保が開けてみると、中にはかぼちやの煮付けがぎっしり詰まっている。3人は一口だけ口に入れると、程よい舌触りによって目を見開いた。あの島田でさえ、悔しがるほどに。

「ああ、びつくりした。つばめも忘れ物届けに来てくれたのは嬉しいけど、言ってくれば良かったのに」

「この近くのスーパーで買い物してくつもりだったし、良いだろ？」

会社の玄関前で、同居中の2人が並んで外に出た。そこで不意にある事に気づく正史。

「てかつばめ。お前ひよつとして、アレで飛んできたのか？ ラピツドスワローで」

「モチのロンだぜ。あれならここまでひとつ飛びだしな！」

「……やっぱり」

普通に考えて、妊婦が公共交通機関を使わずに走ってここまでくるとは考えられない。だとすれば、魔法少女として近くまで文字通り飛んできた事になる。よく周りにバレなかったなと思いつつ、正史はホッと一息つく。

「んで正史。お前これからどうするの?」

「とりあえずネタ探しかな? 色々飛び回ってくつもり。じゃあ俺、行くから。弁当ありがとな」

「おう! 仕事頑張れよ! ところで今日も帰りはいつもと同じ?」

「多分そうだと思う」

「じゃあ美味いもん用意して待つてるからな!」

そう言っつばめは手を振りながら人気のない路地に入っつた。人目のつかないところで再びトップスピードに変身して、移動するのだろう。正史は苦笑しつつも、原付バイクに跨り、ヘルメットに手を伸ばした。

「俺もまだまだだな。2人を守る為にもしつかりしないといけないのに……。ま、これから少しずつ頑張るか!」

改めて気合いを入れてエンジンをつかしてから、正史は郊外へと足を運んだ。

しばらくバイクを走らせていると、前方に見知った人影が見えたので、近くまで寄ってから停車し、ヘルメットととつて声をかけた。

「亜子ちゃん!」

その声に、若干俯きながら歩いていた小柄な少女……鳩田 亜子は振り向いて、笑みを浮かべながらお辞儀をした。

「正史さん。お久しぶりです」

以前、スイムスイムらに強襲を受けて、傷を負った亜子を九尾、ラ・ピュセルと共に救い、傷の手当てをする為にOREジャーナルに出向いて以来の再会だった。

「怪我の方は大丈夫だった?」

「あ、はい。お医者さんも、大事はないって仰ってました。それに……、叔父さんや叔母さんに、本当の気持ちを伝えれたから」

亜子によると、手当てをする為に大久保の運転する車で病院に向かい、そこで亜子が暮らしている家の叔父と叔母と合流し、無事を喜び合った2人に、亜子は今までひた隠しにしてきた心情を全て吐露したのだという。今までの亜子なら考えられない決意だっただろう。涙を流しながら謝罪と共に全てを打ち明けた亜子に、2人も涙を流しな

がら、彼女を精一杯抱きしめた。2人に余計な迷惑をかけてしまった事に罪悪感を感じつつも、今は受け入れる事にした。拒絶してばかりでは、何も変わらないからだ。そのことを、OREジャーナルが教えてくれたのだから。

あの日以来、亜子は態度を改めて、少しずつではあるが、前に向かって進む事に決めた。

「ところで亜子ちゃんは、どうしてここに？」

正史の質問に、亜子はハツとしてから、こう告げた。

「今日は、お父さんに、会おうと思ってここに来たんです。……でも、今日はお父さんの方から一方的に断ってきたらしくて。だから、会えなくて……」

「(! そういえば……)」

正史はふと、亜子の口から、「父親から面会の際に『もう来なくていい』と言われた」と言っていた事を思い出した。スイムスイムとの一件もあり、勇気を振り絞って再度父親との面会を望んでいた亜子だったが、その父親が娘との面会を断ったのだ。

正史は自然と拳を握りしめていた。

「それで、亜子ちゃんはこれからどうするの？」

「とりあえずは、今日はもう諦めて帰ろうかと……。これ以上、お父さんに迷惑かけたくないから……。それに、もしこれ以上お父さんが会いたくないって言うてるなら、もう無理に……」

「そんなの……! 絶対後悔するよ! お父さんに、ちゃんと自分の気持ちを伝えたいんじゃないの!?!」

「でも、お父さんが、それを望んでいるなら、私は……」

こうなっては亜子は頑として、自分の決意を曲げないだろう。

だが、正史としても放ってはおけない事だった。少しでも、困っている彼女の力になりたい。そう思った正史は、ある決意を固めた。

「分かった。俺がなんとかするよ。とりあえず今日は、亜子ちゃんはお家に帰ってもいいよ」

「えっ? でも……」

「心配すんなよ。俺が何とかするから」

何か策でもあるのか、と思っていた亜子だったが、一番の疑問をぶつける。

「何で、私の為にそこまで……?」

「俺は、俺のしたいようにやるだけだよ。それで亜子ちゃんが少しでも救われたら、俺はそれで満足だよ」

そう言うってから、正史は急転換して、反対方向に走り去っていった。その方角には、亜子の父親……鳩田 重蔵じゅうぞうが服役している留置所がある。亜子はただ呆然と、正史の後ろ姿を見つめていた。

「んで、俺に何の用よ。電話でアポもなしに突然来られても困るんだけど」

「その点はゴメン。でも、北岡さんだから頼みたい事なんだ」

それから約1時間半後、正史がいたのは留置所ではなく、北岡法律事務所だった。

正確に言えば、一度は留置所に出向いて、重蔵との面会を試みた。が、そもそも彼とは何ら接点を持たない正史がどれだけ求めても入れてもらえるはずもなく、門前払いのような形で、断念せざるを得なかった。

だが正史とて、この程度で諦めるはずもなく、一生懸命考えて、ある策を思いついた。確かに今のままでは亜子の父親に会う事は難しい。向こうから人との面会を断っているからだ。だがもし、それらの権限を打ち負かすぐらいに強い発言権を持つ人に、面会を受託してもらえたらどうだろうか。すなわち、無理やりにでも面会を取り繕う事が可能な弁護士に頼み込めば、話が出来るのではないか？

そして正史は、そういった弁護士に1人、心当たりがある。それが仮面ライダーゾルダ改め、北岡 賢治だ。

玄関先で対応にあたった、彼のパートナー兼補佐役の真琴も、突然の訪問に驚きつつも、正史が口うるさく入らせると言ってくるので、追いつ返すのも面倒になった真琴は彼を部屋に招き入れた。

「で？ 俺に何を依頼すんのよ？」

「亜子ちゃんのお父さん……鳩田 重蔵と面会する機会を、作ってほしいんだ」

「理由は？」

「今の亜子ちゃんには、服役中のお父さんと話し合う機会が必要だからだよ。だから先ずは、俺が説得しに行く。亜子ちゃんとの面会を断り続けているその人に、直接会って、何とかしてみせる！」

全てを聞き終えた北岡の反応はというと……。

「ハハハッ！」

「な、何だよ……」

「お前がバカなのは今更分かりきってる事だけどさ。それにしたって、何でそうまでして赤の他人の為に、一肌脱ごうとするわけよ？」

「関係なくないね！ ……この際だから話すけど、その亜子ちゃんつてのは、魔法少女なんだよ。ハードゴア・アリスの」

「！」

後方で様子を伺っていた真琴は僅かに目を見開く。一方で北岡は動じなかった。

「ならちよつと訂正するよ。他の魔法少女の為に、そこまでする必要がどこにあるんだ？」

「亜子ちゃんが、心の底からそれを望んでるから。だから俺は、それに

出来る限り応えたい。俺が説得しても向こうが首を縦に降るかは分からない。けど、やってみなくちゃ分からないだろ！ ライアだつて、それを信じて運命を変えようとしているように、俺だつて……！ やれる事をやりたいんだ！」

「結局他人の為に、か。お前らしいけどさ……」

正史の熱の入った言葉は、冷たい態度を見せている北岡には届いていないらしく、椅子に深く腰掛けて、口を開いた。

「悪いけどお断りだ。大体さ。そんなに俺に依頼をしたいんなら、令子さんみたいに美しい女を連れてくる事から始めるんだね。それにお前、依頼するだけの金あるの？ とてもそうには見えないけど。分かったら、さっさと帰ってくれる？ ここんところ俺も真琴も気分悪くてさ」

ヘラヘラと笑う北岡。その一方で、真剣な表情を見せる正史は、引き下がる事なく呟いた。

「北岡さんならそう言うと思ってたよ」

「……ほう」

これだけ罵詈雑言を浴びせながらも退かない正史を見て、何を条件にしてくるのかに注目する北岡。

「だから俺は、この方法で北岡さんに依頼する」

だが、その北岡をもってしても、正史の次の行動は予測出来なかった。真琴もまた然り。

正史はポケットに手を伸ばし、あるものを取り出した。龍の紋章が刻まれた、カードデツキだった。それを相手に見せつける事、すなわち……。

「俺と、戦ってくれ。北岡さん」

「!?? ちょ……」

「俺があんたをねじ伏せて勝つたら、重蔵さんとの面会を取り繕ってもらおうよ。逆にあんたが勝てば、令子さんと食事する機会を作るとか、何でもするよ。これでどう?」

カードデツキを見せつけて同意を求める正史だったが、北岡は戸惑いを隠せない。

「お前、正気か？ あれだけ他のライダーや魔法少女が戦う事を止めたがってたお前が？ 俺と戦えだつて？ 何の冗談よ」

「あんたにとつて冗談かもしれないけど、俺は本気だよ。本気で北岡さんに、俺の考えを納得させてもらうから！」

「お前……。あの時みたいに頭でもおかしくなったのか？！？ それともお前、やっぱりこの戦いを肯定して……」

「そんな事はないよ。俺は最後までこの戦いを否定する。それは変わってない」

「だったら何で……！ お前はライダーや魔法少女同士の戦いを拒んでいるのか、望んでいるのか、どっちなんだよ！？！ お前なら止める側だと思つてた俺が間違つてたのか？！？」

ますます困惑する北岡に、正史はこう語りかけた。

「正直、俺は美華が死んで、トップスピードの励ましをもらつてまた仲間になってから、ずっと考え続けてきた。戦いを止める事が正しいのかどうか」

「それで？」

「まだ分からないところもあるさ。自分でも頭が悪いのは分かってる。でも、俺はこの戦いだけはどうしてもしたい」

カードデツキを握りしめる手に力が入る。

「俺には、守りたいものがある。繋げたい命がある。その為に、俺は戦うって決めたんだ。その約束を果たす為に、どうしても戦わなきゃいけないんだつたら、俺は相手になる。北岡さんや真琴ちゃん、他のみんなだつて、何かを背負つて戦つてる。相手の戦いの重さを受け止めるには、今はそれが一番だと思うから」

「……」

「今の俺は、亜子ちゃんの心を救う為に、戦う。それだけだ」

「……」

正史の戦う理由を聞き終えた北岡は、しばし無言を貫く。それが1分ほど続き、我慢の限界を迎えた真琴が正史の背後から詰め寄る。

「あの……！ 私に反対です！ 先生は」

「いいよ真琴」

そう口を挟んで、北岡は両手を机に当てて立ち上がった。

「こういうバカは、言ってみせないと分からないタチだし」
それに……。

北岡はポケットから、スイギユウの紋章が刻まれたカードデッキを取り出し、正史に見せつける。

「今、お前となら、戦う理由はあるしね」

「先生……！」

「そういうわけだから、真琴は手を出さないでよ。これは俺と奴の勝負だから」

結論は出た。後は戦いの舞台に場所を移すだけとなる。2人は近くに立てられている鏡の前に立った。変身する前に、北岡は正史に確認を取る。

「そーいやさつき、お前は言ってたよな。この勝負で俺が勝ったら、令子さんと俺に食事の場を設けるって」

「ああ」

「その言葉、忘れるなよ」

「北岡さんこそ」

両者は、互いに意地をを賭けて、睨み合った。

そして2人は鏡に向かってカードデッキをかざす。鏡にVバックルが映り、それが腰に装着されると、現実世界の2人の腰にも同じくVバックルが装着された。

「変身！」

カードデッキがはめられ、胸像が重なり、正史は『龍騎』へ、北岡は『ゾルダ』へそれぞれ変身した。

「ツシヤア！」

「……フン」

龍騎はいつものように気合いを入れ、ゾルダは鼻を鳴らしてから、同時に鏡を通じてミラーワールドへ突入した。真琴もマジカロイド44に変身して入ろうかと思ったが、北岡の言葉通り、介入する事なく、戦いの様子を眺める事に決めた。

ミラーワールドに入り、龍騎が舞台に選んだ場所は、近くにあった工事現場。5階建てのうちの3階部分にて、両者は睨み合っていた。機材などがあちこちに点在しており、入り組んだ形となっている。

「わざわざ狭い所を選んで、直接飛びかかってくる……つてのが向こうの狙いか？ だとしても、俺の方が早い。狭くなってるおかげで、狙う的も当てやすくなるし。……まあ、あのバカの事だから、無策って可能性もあるけど」

ゾルダは龍騎の考えを気にすることなく、普段通りの戦い方を貫くことにした。

しばらく睨み合う両者だったが、先に動いたのはゾルダだった。

「フンッー」

マグナバイザーに素早く手を伸ばし、銃口を龍騎に向け、問答無用でトリガーを引く。龍騎は横に飛んでこれを回避する。ゾルダも逃すまいと続けざまに銃弾を放つ。やがて重機材の間をくぐった所で龍騎がカードをベントインした。

『GUARD VENT』

龍騎の両手にドラグシールドが展開され、前に突き出す事で、銃撃を全て防いでいる。マグナバイザーの火力では、ドラグシールドを突破できない。

その間にも、龍騎は一步一步確実にゾルダへと近づいている。この

まま接近戦に持ち込んでも問題ないのだが、万が一のこともある。ゾルダは足元を狙い、龍騎が怯んだ隙に迷わずカードデッキから一枚のカードを取り出す。

『SHOOT VENT』

ギガキャノンが両肩に装着され、マグナバイザーよりもはるかに威力の高い砲撃が、龍騎に襲いかかる。

「うおっ!?」

さすがにドラグシールドでは防ぎきれず、龍騎の手から弾かれてしまった。そこへゾルダは容赦なくギガキャノンの砲撃を撃ち込む。ただし今度は龍騎本体ではなく、その足元へ。

何発もの砲撃を受けて、耐えきれなくなった地面は崩落を始めた。当然龍騎もそれに吞まれて、悲鳴をあげながら地面へと落下した。

煙が晴れて地面に開いた大きな穴から下を覗き込むゾルダ。龍騎の姿は確認出来ないが、あれぐらいで仕留められる程度なら、こんな戦いで苦勞はしない。念のためにと、ゾルダは1階部分に降り立った。しばらく歩き回っていると、上の方から羽交い締めされる感覚が。ゾルダが振り返ると、龍騎が背中からしがみついていた。どうやら天井に張り付いて、ゾルダが通り過ぎるそのタイミングを計って奇襲を仕掛けてきたようだ。

「!、こ、のお……!」

「大人しく、しろよお!」

必死に腰回りにしがみつく龍騎に、ゾルダは苛立ちを覚えた。綺麗な女性に付きまとわれるのはいいが、男性の、それも他人の事ばかり気にかけている人物には、嫌気がさす。ゾルダはマグナバイザーに新たなカードをベントインした。

『STRIKE VENT』

「離せ!」

「ぐおっ!?」

ゾルダの頭部にスイギュウの角を彷彿とさせる『ギガホーン』が装着され、ゾルダは頭突きをかました。普段のゾルダは銃撃といった遠距離戦法をスタンスにするため、ギガホーンは滅多に使わない。逆に

言えばこういった接近戦の際に効力を発揮するのだ。

頭突きをまともにくらい、軽く脳震盪に陥った龍騎に対し、ゾルダは追撃とばかりにマグナバイザーに手を伸ばし、銃弾を無防備な龍騎に向けて放った。

勢いに押されて、龍騎は屋外に弾き飛ばされる。地面を倒れこみ、立ち上がろうとする龍騎が滑稽に見えたのか、ゾルダは小バカにしたように言い放つ。

「シローも随分とつまらない奴をライダーに選んだな。これだったら、まだ浅倉の方が張り合いがあるよ」

ゾルダは銃撃を止める事なく、龍騎にダメージを与えていく。龍騎は息を荒げながら後ずさり、その姿をゾルダは仮面の下でさも分かりきっていたかのように口を開いた。

「なあ、何でここまでお前が追いやられてるか教えてやろうか？

お前はあの戦いを、ハードゴア・アリスの変身者……つまり他人の為に想って戦いを挑んでるわけだが、それじゃ俺には勝てない」

「何でそう言い切れるんだよ！」

「お前よりかは、ずっと人間つてものを見てきたからに決まってるだろ？俺がライダーとして戦うのは、全部自分のためだからね。真琴も同じさ。その一線を踏み外すと、お前達みたいに弱くなるんだよ」

「……！」

ゾルダのいう『お前達』とは、龍騎だけでなく、彼と行動を共にする九尾やスノーホワイトらの事を指しているのだろう。

「それでもまだ否定する？この状況、どう見ても俺の優勢だよね？

まあ、俺の言ってる事なんてお前に理解してもらおうつもりなんてないけど」

そう言っつてゾルダはトリガーを引き、龍騎に連射をかまし、龍騎は倒れこむ。それを見て、ゾルダは1枚のカードを取り出した。

「結局正しい事を言ってるのは、最後に勝ち残った奴なんだよ。……そろそろ終わらせようか」

『FINAL VENT』

ゾルダの前に契約モンスターのマグナギガが現れ、その体に敷き詰

められた銃口が、龍騎に照準を定めている。ゾルダはマグナバイザーをマグナギガの背中に接続する。後はトリガーを引けば、それで龍騎は『エンドオブワールド』の波に飲み込まれ、死ぬ。

「最初から他人の為に、なんて微塵も考えてなければ、ゴロちゃんも死なせずに済んだかもしれないけど」

もう後の祭りだな。

その眩きと同時に、ゾルダは迷いなくトリガーを引いた。

93. 漢の勝負 龍騎 vs ゾルダ

マグナギガから放たれた、無数に近い銃撃の嵐は、対峙する龍騎に向かって一直線に覆いかぶさっていく。

「やっと終わったか」

トリガーを引き終えたゾルダは、肩の力を抜いた。

「これでもう、あいつとは2度と顔を会わせる事はない」

罪悪感はなかった。相手はライダー。ライダーは魔法少女同様、戦う定めにある。約束の件もあつたが、相手を潰す事を決断したゾルダは、深く息を吐いて、マグナバイザーを下ろす。

だが、ゾルダはまだ知らない。『龍騎』と呼ばれるライダーの、底知れぬ根性を。

『BROOM VENT』

その電子音を、ゾルダは聞き逃さなかった。ハツとしたゾルダの視線の先に、『エンドオブワールド』によって出来た爆炎が広がっている。その炎の中から、信じられないスピードで飛び出してきた影があつた。

「ウオオオオオオツ!?」

ゾルダの見間違いでなければ、絶叫と共に箒らしきものにしがみついて飛んでいるのは、龍騎に違いなかった。

エンドオブワールドに巻き込まれる直前にパートナーカードの『ブルムベント』を使って龍騎版ラピッドスワローで逃げ切ろうとした龍騎は、跨つてはおらず、ラピッドスワローにぶら下がって落ちないように必死にしがみついているという、何ともシュールな光景であったが、少なくとも致命傷を負っている様子はない。

「……！」

だが傍観してばかりもいられない。龍騎がラピッドスワローもろとも、こちらに急接近している。正規の方法で乗車していないので、コントロールが上手くいってないようだ。たまらずマグナバイザーを構え直して撃ちまくるゾルダだったが、空をフラフラ飛んでいる敵に必中できるほどのスキルは持ち合わせていない。

そして龍騎はそのまま体当たりする形でゾルダと激突し、両者は地面を転がってようやく停止した。

「つてええええ……！」

「うっ……！」

両者は気力を奮い立たせて立ち上がり、体に力を込める。そして龍騎が少し誇らしげに胸を張って呟く。

「へへっ。悪いけど、今日の俺はしぶといよ」

「みたいだな。そうやって根拠もない癖して抗う。俺にとっちゃ、お前見たいのが一番つまらないんだよ！」

「北岡さんにとってそうでも、俺は、諦めが悪いんだよ！ ツシヤア！」

ひと吠えした龍騎が再びゾルダに向かって突撃する。また無策に突っ込んでくるか。ゾルダはバックステップしながら、マグナビザーで牽制する。が、龍騎には2度も同じ手は通用しない。そればかりか、一直線にゾルダにタックルし、地面に倒そうとする。が、ゾルダにも意地があるのか、倒れることなく抵抗している。

幾度となく繰り返し返される、タックルと銃撃の応酬。先に痺れを切らしたのはゾルダの方だった。

「つたく、お前ってさあ、全然変わってないよ、何もかも！ さつきから同じパターンばかりで、本気で俺に勝つ気ある!!? それとも、まだライダーや魔法少女の戦いを否定する気!!? 少しは考えも変わったかと思えばこのザマか?」

「考えを……、ライダーや魔法少女同士が戦う事を否定するって考えは、変えるつもりなんてないよ」

ようやく龍騎が口を開いたのは、ゾルダを殴り飛ばして、引き離れた後だった。そして首を横に振りながら、こう語る。

「……いや。そこだけは変わっちゃいなかったんだ。俺は、一度それを忘れた事がある。俺が、ライダーになった理由を」

龍騎の脳裏に、美華を殺され、自棄になっていた頃にナイトを始め、九尾やスノーホワイトらと戦ってしまった際の情景が。

「俺は、人を守る為にライダーになったんだ。俺にはまだ、ライダーや

魔法少女を倒すって事の重さが分かってないのかもしれない。でも、だから今の俺にできる事は、それだけなんだ。戦いが何だろうと、俺は俺にできる事を最後までやる」

そして拳に力を込めて、ゾルダに向かって突き出す。

「俺は、この戦いに勝って、亜子ちゃんと、亜子ちゃんのお父さんに、もう一度話し合う機会を作る。あの子の笑顔を、守れるのなら、俺は、戦える！」

「……！ バカっていうより、お前はなんか、ズレてるみたいだけどな！」

『SHOOT VENT』

「それでも、俺は……！」

『STRIKE VENT』

龍騎はドラグクローを、ゾルダはギガランチャーを手にして、攻撃の体制に入った。ゾルダはギガランチャーの銃口を龍騎に素早く合わせる。ギガランチャーの威力を、向こうが知らないはずもない。それに恐れをなして、必ず回避行為が行われる。ならば確実に龍騎が取る手段は先ず、銃撃をかわそうとして、弾が飛んでくる瞬間に飛んで回避すること。そうすれば、一度の発射に多少のタイムラグが起こるゾルダの裏をかいて、ドラグクローを当てる事が可能だ。

ならば、トリガーを引く『ふり』をして、更に裏をかいて龍騎がバランスを崩したタイミングで、確実に狙い撃ちする。自分のタイミングで、確実に仕留める。

駆け抜けてくる龍騎を見据えながら、ゾルダは脳内イメージを決行する。

数十メートル、数メートル……。段々と距離が詰められていく。龍騎は走ることを止めない。まだその時は来ないか。ゾルダは引き金を握る手に力を込める。

「ウオオオオオオオ！」

射程圏内に入り、ゾルダは更に意識を眼前に集中する。龍騎はまだ走ってくる。肘を曲げて、右腕についたドラグクローを後ろに引く。

……と、ここでゾルダの中でふとした可能性がよぎった。それは彼

を驚かせる事に他ならない。

もし、龍騎が最初からゾルダにドラグクローを当てる事だけを考えて突撃してくるのだとしたら？ ギガランチャーの殺傷力など、気にもとめていなかったとしたら？

「！ マジか……!?？」

その予感が確信へと変わった時には、今度は龍騎の方が間合いに入っていた。契約モンスターのドラグレッダーが上空から龍騎の後方へと接近し、右腕をアッパーの要領で振り上げると、両方の口から火を吹いて、『ドラグクローファイヤー』がギガランチャーに直撃した。

「！」

ギガランチャーはゾルダの手元から離れて、空中へ飛び上がり、そのまま上空で爆散。

「ダアアアアアアアアアア！」

だが龍騎の猛追はそこで終わらない。ギガランチャーの行方に視線が泳いでしまったゾルダは、ドラグクローによる、龍騎のパンチをかわせるはずもなく、殴り飛ばされた。

親父にも、お袋にもぶたれた事なかったのに。朦朧とする意識の中で、地面に背中から叩きつけられたゾルダは、唐突に意識を取り戻した。頭を揺さぶられた影響からか、起き上がるだけの気力は残っていなかったが、顔だけは動かす事ができた。

腰を下ろして息を整えた龍騎は、仰向けのゾルダに近寄り、口を開いた。

「ハアツ、ハアツ……！ 今ので、あんたを地面に伏せれたし、これは俺の勝ちって事で良いよな」

「……チツ」

舌打ちするゾルダだが、反撃するだけの気力は残っていない。今のままでは龍騎に分がある。これ以上抗っても、無理があると察したゾルダは、両腕を地面に垂らした。

「……お前、少しはやるようになったって所か」

「そうかな……?？」

不意に龍騎は頭を掻いて、首を傾げる。

「あの状況で逃げずに、バカみたいに突っ込んでくるとか、サバイブ……だっけ？ あれを使わずに俺に挑んでくるんだもの。大した根性持つてるな、お前」

「……」

ゾルダの評価を黙って聞いていた龍騎だったが、しばらくして、こう返答した。

「こんな事言うのは悪いかもしれないけど……。ゾルダ、あんなの方が弱くなっちゃったんじゃないの？」

「ハアツ!?？ 俺が!?？」

「だってそうだろ。あんたは……」

「前にも言っただろ……。俺は自分が一番可愛いんだよ。他人の為に犠牲は美しくない！ ……最低だと思うか？ 思うよな、お前だったら。でも、だからこそ強くなれる。結局どう取り繕った所で、自分の為に戦うって決めるしか、生き残る術はないんだよ！ それに分かってたら、ゴロちゃんは……！」

息を荒げてそう言い返すゾルダ。それに対し龍騎はというと……。

「言ってる事は分かるよ。北岡さんに何かあったのは分かる。何を背負って戦うのかは人それぞれだし、戦い方だって人それぞれだよ。俺はそれを否定するつもりはないよ。でも、ただ捨てれば良いなんて事は絶対ないよ。あんたは心の中で、大切にしていたものを捨てて、俺と戦った。だから俺に勝てなくなっちゃったんじゃないの？」

「俺が、捨てたもの……」

「それが何なのかは、俺には分からない。けどこれだけは言える。俺は、『誰かを守る為に変身する』って気持ちだけは捨ててない。変わってない。変えるつもりもないし、これからも、それを忘れずに、戦い続ける。それだけだよ」

「……ハッ」

ゾルダは深く息を吐く。どうやら自分が思っていた以上に、龍騎は想像を超えていた。完敗を認めるつもりはないが、今は負けを認めるしかない。

ゾルダは腰に力を入れて、上半身を起こした。

「……で、お前が会いたいののは、鳩田 重蔵……だったか？ まあ、面会できるように連絡ぐらいは入れといてやるからさ。とりあえず、今日の所は帰ってくれよ」

「！ 北岡さん……！」

「ここいらで漢意気を見せておかないと、カツコ悪くてゴロちゃんに顔向けできないし」

そう言つて立ち上がろうとするゾルダ。そこへ龍騎が無言で手を差し伸べる。気に食わなかったが、ゾルダもまた、無言でその手を握り返し、立ち上がってミラーワールドから出る事にした。

娘との面会を断つてから3日後。妻を殺害し、留置所でいつ終わるかも分からない生活をしていた鳩田 重蔵に、面会を命じられた。また亜子が来たのかと思いつつ、断ろうと思つたが、今回はそうはいかなかった。3日前と違う点は2つ。

1つは面会者が亜子ではないとの事。そしてもう1つは、その面会があのある名弁護士の本岡 賢治によつて半ば強引に決められた事。重蔵自身は罪を認めているため、今更名のある弁護士に弁護してもらうつもりはないが、気になった重蔵は言われるがままに承諾。

パイプ椅子に座つて面会相手を待っていると、警官と共にその後ろをついてくる、1人の男性が。重蔵は首を傾げた。少なくとも、ヘルメットを片手に持つ、オレンジ色の上着を着た男性に見覚えがない。

その後警官は部屋の外に出て、男性は重蔵の顔を見て挨拶を始めた。

「えっと……。初めまして、ですよ。俺、城戸 正史って言います。OREジャーナルの新聞記者見習いです」

そう言つて正史は名刺を重蔵に見せる。ガラス窓で隔たれているため、さすがに渡す事は出来ないが。だが、重蔵が聞きたいのはそこではない。

「……それで、あなたは一体、私と何の関係が」

「あつ。それは、その……。亜子ちゃんと最近知り合った仲間なんです」
「亜子と……」

なるほど、とようやく納得する重蔵。しかし、それでもまだ疑問に残る点もある。

「で、亜子の知り合いが、私に何の用で？」

「亜子ちゃんから、あなたの事は聞いてます。あなたが、亜子ちゃんとの面会を拒んでる事も……。でも俺、どうしてもこのままじゃ納得がいかなくて……。だから、北岡さんに個人的に頼んで、こうして会いに来たんです」

「……それはつまり、亜子の意思とは関係なく、あなた自身が、という事ですか」

「そうです。亜子ちゃんからじゃ無理だと分かったから、俺から頼みに来たんです。亜子ちゃんに会つて、もう一度話し合うべきなんですよ！ お願いです！」

正史は頭を下げて、亜子との面会の機会を作ろうとしていた。だが重蔵も素直に首を縦に振るわけもなく。

「……あなたが何を考えて、私と亜子を会わせようとするのかは分かりませんが、そういう話なら、お断りです。私には、亜子と話す資格はない」

「……何で、ですか」

「些細な理由とはいえ、私は妻に手をかけた。そのせいで、亜子は苦しんでいる。こんな人殺しなんかに事を気にかけていたら、それだけで重荷になる。だから早く、私の事など忘れて、普通の女の子として生

活を続けて欲しい。亜子を引き取っている家族の方にも、そう言伝を済ませていきます。だから、あなたがやろうとしてる事は結局亜子を……」

重蔵が面会を締め括ろうと、正史に目を向けるが、そこでハツとした。正史の目は鋭く、重蔵を睨みつけている。

「……あんな。亜子ちゃんの親父さんなのに、そんな事も気づかないのかよ……！」

「何？」

「亜子ちゃんは、ずっとあんたの事を気にかけてたんだぞ！ 人殺しだとか、そういう事は関係ない！ あんたと亜子ちゃんは、血の繋がった家族なんだぞ！ 家族の事を想うのは、人として当たり前じゃないか！ その優しさに、どうして気づいてやれないんだよ！」

正史は息を整えた後、こう語りかける。

「……すいません、取り乱して。でも重蔵さん。あんたを見ててやっぱり親子だっと思ったよ。あんと亜子ちゃんは、よく似てる。誰かに迷惑をかけたくなって、自分一人で何でも抱え込もうとしてる。俺や会社のみんなに全部明かしてくれた時も、亜子ちゃんはそんな感じだった」

でも……、と言葉を区切る正史。

「だからって一人で抱え込んでたって、何も変わらない。確かに、変えちゃいけない信念もあると思う。でも俺から言わせたら、誰にも頼らずに全部抱え込んでたって、本当の意味で強くなれない。本当に強い人ってさ。周りにそういう、頼れる人がたくさんいる奴を指してるって思うんだ」

「頼れる人……か」

「少なくとも、俺には頼れる人がそれなりにできた。後さ。亜子ちゃんにとって一番頼れる人って、俺はやっぱ親父さんだと思う。今はこうして離ればなれになってるけど、その繋がりが消えたわけじゃない」

「……」

「重蔵さん。最後にもう一度お願いするよ。亜子ちゃんに会って、親子として、話し合ってくれ」

今一度頭を下げる正史。本来なら赤の他人である彼の、懸命な姿を見ているうちに、重蔵の中で、新しい息吹に当たりたくなる感情が芽生え始めた。

そして彼は、口を開いた。

時計に目をやった真琴は北岡と共に、面会時間が終わった事を確認した。やがて、正史が警官に連れられて、2人の元へ戻ってきた。

留置所を出て、正史が最初に行ったのは、2人に礼を言う事だった。「ありがとう、北岡さん、真琴ちゃん。2人がいなかったら、重蔵さんと話ができなかった」

「俺は機会を取り繕っただけだし。まあ、あの勝負で勝ったのはお前の方だしな」

「……それで、向こうは何と?」

真琴が尋ねると、正史も少し上機嫌になって、重蔵からの返答を伝えた。

『気持ちの整理がいたら、近いうちに考えておく』だってさ」

「じゃあ、まだ完全に決めきったわけじゃないんですね」

「まあそうなるね。でも、これで良いと思う。まだ亜子ちゃんがお父さんと会えるチャンスが潰えたわけじゃないし」

「つくづく考えの読めない奴だな、お前ってさ」

北岡は肩を竦めて、停めておいた車に乗り込もうとする。

「あつ、ちよつと待って」

と、ここで正史は持参していた紙袋を真琴に差し出した。

「何ですかこれ？」

「約束を守ってくれたお礼って事で。出来立てじゃないけど味は確かだから、みんな食べてみて。それじゃあ！今日はありがとな！」

正史は手を大きく振って、その場を後にする。

真琴が気になって紙袋の中を覗き込んでみると、そこには丸皿に綺麗に並べられた、こんがり焼けた餃子があった。

「得意料理……なんですかね？」

「やれやれ……。お返しがこれって、最後までバカ丸出しだな。ま、丁度腹も減ってたし、もうこの際だから、口に入るものなら何でも良いかも」

「ですね」

真琴も車に乗り込み、発進してから3つ目の交差点で信号待ちしている間、北岡は自分の手のひらを見つめていた。不意に咳き込み、再び手のひらに目を向けると、赤い液体が点々と付着している。

「（こいつはそう長く持たなさそうだな……。ゴロちゃん、こんな俺でも、まだ正義のヒーロー気取れるのかね……？）」

迷いを見せ始める北岡の問いに対し、その人物からの返答は、もうない……。

9.4. 獣帝ジエノサイダー

「……ああ。随分遠くまで来たな」

橋の欄干付近で休憩していた大地は自転車を近くに止めて、道中で買った缶ジュースを口に持っていきながらそう呟く。

母親から買い出しを頼まれて、いつも通り慣れている商店街に向かったのだが、目的の品がいくつか売り切れており、止むを得ず遠出する事になった。

冬はもう近いはずなのに、この日は朝から雲ひとつない青空が広がっており、直射日光の影響で暑いこと、この上ない。俗に言う温暖化が関係しているのだろうか。

だが、今の大地には暑さ以上に彼を悩ませている事がある。

仮面ライダー『九尾』として、そしてスノーホワイトのパートナーとしての、今後の事である。

「……理由なんて、考えた事なかったな」

復讐心の代償と言わんばかりに、スノーホワイトとの決別、更にシローから指摘された言葉が、彼に重くのしかかる。

「……死にたくないのは俺も同じだ。だから戦う理由に……なるのか？ まだモヤモヤしてるけど、もつと違う理由があるはずだよな。仮にそれが分かったとしても、どうやってそれを小雪に伝える……？」

改めて、自分は不器用且つ退屈な人間だな、とつくづく痛感してしまふ大地。気がつけば、缶の中は空になっていた。

ため息を一つついて、自宅兼神社に戻ろうと、自転車のハンドルに手を伸ばしたその時、近くからサイレンの音が聞こえてきた。まだ遠くの方ではあるが、何となく気になった大地は、音のする方へペダルを漕ぎ進んだ。

しばらくして、近道をしようとして裏路地に進入した大地は途中で急ブレーキをかける事になる。

「……！」

みれば、目の前には数人の警官がうめき声をあげながら、重なって

倒れている光景が。そしてすぐさま銃声が鳴り響き、男の悲鳴が大地の耳に届いた。路地の奥に、足を押さええてうづくまる警官が見えた。その太ももからは血が流れている。自転車から降りて駆け寄ろうとした大地だが、撃たれた警官が何者かによって蹴り飛ばされた。ロングブーツが見えた。

やがてその人影は、背を向けた状態で姿を見せた。テンガロンハットに、ビキニらしき下着をつけた人物。カラミティ・メアリだ。大地はそう直感する。その隣からは、やはりというべきか、紫色の蛇をモチーフにした仮面ライダー『王蛇』が現れる。普段は城南地区を拠点にしている2人がなぜこの場にいるのかは不明だが、見て見ぬ振りは出来ない。

王蛇は勘が鋭いのか、すぐに後方を向いて大地の存在に気づいた。カラミティ・メアリもパートナーに続いて後方を確認し、そして不敵な笑みを浮かべる。

「まったく、あいつらも世話を焼かせる。何もこんなクソ暑い真昼間にあたしらを駆り出すか普通？ おかげで警官どころかガキまでくっついてきやがる」

「フンッ。うるさい連中だが、この際相手は誰でもいい」

「お前ら……！」

「何だい坊や。あたしらが気に入らないのかい？ ならさっさと退きな。でないと……怪我じゃ済まなくなるかもよ！」

そう言って大地に向かって、手に持っていたハンドガンを構えて引き金を引いた。大地は横に飛んで、物陰に隠れる事でやり過ぎた。銃弾が金属を掠める音を聞きながら、我ながら上出来な反応だと思いつつ、ポケットからカードデツキを取り出す。

「(さすがに相手が悪すぎるな……！ けど、このまま逃げるなんて、俺には出来ない。だつたらとことん……！)」

どの道このまま隠れていても、殺されるのがオチだ。すぐさま大地は壁を背にして、近くにあった鏡にカードデツキをかざす。

「変身ー！」

すぐさま九尾に変身し、物陰から出て、王蛇とカラミティ・メアリ

の前に立った。変身と叫んだ声とその主の姿を見た2人の反応は様々だった。

「なるほど。坊やが九尾だったのか。にしてもあんたみたいなガキが仮面ライダーなんてね。ま、ガキだからって手加減するつもりないけど。運が悪かったと思えばこれくらい」

「こいつらじゃ物足りない。けどお前となら楽しめそうだなあ……。久々にライダーと殺り合えるんだからなあ……！」

王蛇は首を鳴らして、早くも臨戦態勢だ。その間、九尾は視線の先で倒れている警官に目を向けた。

このまま戦ってしまうと、無防備な警官達も巻き込まれる。中宿での惨劇のように、これ以上一般人を巻き込む訳にはいかない。そこで九尾が最初に取り出したカードは……。

『ADVENT』

『グルルルル……！』

「オオツ……！」

王蛇に飛びかかったのは、九尾の契約モンスターである『フォクスロード』。2人がフォクスロードに気を取られている隙に九尾も突撃し、カラミティ・メアりにタックルした。そうしてフォクスロードと共に2人を押し出して、広い道路沿いに出てから口を開いた。

「こっじや人目につく。ついてこい（それにこいつらと戦っていれば、もしかしたら何か答えに繋がるものも見えてくるかもな）」

そうやって2人に背を向けて、近くの山に向かって飛び上がった。

「イライラするぜ……！」

そう吐き捨てて、王蛇も九尾を追いかけた。メアリもやれやれと思いつつ、2人の後を追いかけた。

九尾が誘導する形で、戦いの舞台となったのは、山の近くにある溪流が見える崖。普段から人が立ち寄る事は無いため、確かに人目につかずに戦うには十分だろう。

下流に向かって流れる川の音が響き渡る中、狐は、蛇とガンマンと対峙する。カードデッキからカードを取り出し、左腕についているフォクスバイザーにベントインした。

『SWORD VENT』

2刀のフォクセイバーを握り、2人に向かって斬りかかった。

「ハアッ！」

「おっと！」

「フンッ！」

2人は横に飛び、王蛇は体勢を整え直した後、ベノバイザーを取り出し、カードをベントインする。

『SWORD VENT』

ベノサーベルを手にした王蛇は、九尾に反撃する。刀身の細いフォクセイバーでは太いベノサーベルを抑え付けられないと判断した九尾は受け流すように、振り下ろしてくる王蛇の猛攻を捌き切っていく。

「チイッ！」

軽やかに戦う九尾を見てイラついているのか、カラミティ・メアリはAKに持ち替えて、その足元めがけて撃ちまくる。九尾は王蛇を押し倒してから、回避に専念する。

その後もフォクセイバーのしなやかな斬撃が、王蛇を押し返し、遂には腕を掠め取り、血を流させた。これを見た王蛇は、追い詰められているにもかかわらず、昂ぶり始めた。

「そいつの武器の方が面白そうだなあ……！」

そう言つてベノサーベルを放り捨てて、別のカードをベントインした。

『STEAL VENT』

すると、九尾の両手に握られていたフォクセイバーは勝手に手元から離れて、王蛇の両手に行き渡った。

「!?？ 俺の武器を奪うカードか……！」

「ハアッ！」

勢いよく振り回す王蛇。ベノサーベル以上に鋭い切れ味を持つフォクセイバーを前に、さすがの九尾も回避するしか選択肢はなかった。加えてカラミティ・メアリの銃撃も容赦なく迫ってくる。

「ほらほら！ そっちばっか気にしてると、痛い目を見るよ！」

「くっ……！」

次第に追い詰められていく九尾は、いつの間にか、崖の端まで下がっていた。後方には崖の下に広がる川しかない。

「あんたも中々にできる奴だったけど、結局ここまでだったみたいだね。あんたのパートナーがあんな奴じゃなければ、まだ勝機はあっただろうに」

「スノーホワイトを……、バカにするな……！」

「遅えよ。んなこと口にしたつてさ！」

カラミティ・メアリの魔法で強化されたAKが火を噴く……事はなかった。そのAKに手裏剣が直撃し、壊れはしなかったが、軌道がズレた。地面に落ちた手裏剣を見て、メアリは舌打ち混じりに叫んだ。

「リップル……！ また邪魔しに来たのかい！ 正義の味方気取りしやがって、どこまで甘ちゃんなのかねえ！」

「私は……、私のやりたいようにやるだけだ！」

そう言つて3人の横手からリップルが登場し、さらにクナイを投げつける。2人がそれをかわしている間に、九尾の元にリップルだけで

なく、龍騎、トップスピード、ナイト、ライア、ラ・ピュセルが姿を現した。

「九尾！ 大丈夫!?？」

「あ、ああ。けど、どうして……」

「さつきネットの情報で、警察官が倒れてるってあって。それで詳しく聞いたら、狐みたいな仮面の人が、ガンマン風の人や紫色の蛇みたいな仮面の人を連れてどこかに行っただって書いてあって、多分君の事だと思ったんだ」

「んでもって俺が上から調べてたら、お前らが戦ってたのが見えて、みんなをここに案内したってわけ」

龍騎とトップスピードが手短かに説明し、ラ・ピュセルが心配そうな顔つきで九尾に駆け寄る。

「九尾！ 無事でよかった……！」

「悪いな。心配かけさせて。けど、これは俺個人の問題だ。後は俺が……」

「そんな事認めるわけないだろ！ 僕達も協力するに決まってる！」

同じチームだろ!?？」

「チーム……か」

ラ・ピュセルにそう言われ、黙り込む九尾。

その一方で、ライアは仮面の下から王蛇を睨みつけている。

「浅倉……！」

変身者の名前で呟き、拳を構えるライアだが、王蛇は鼻を鳴らした。

「お前に興味はない。さつきと俺をそいつと戦わせろよ！」

「随分と余裕があるのか、単に戦いたいただけのバカなのか知らないが、お前の敵は九尾だけじゃない」

「数を揃えて余裕をかましてるのはどっちかねえ？ そういう奴ほど、足元すくわれるのにさ！」

ナイトの言葉を一蹴するカラミティ・メアリに、リップルの投擲が迫る。が、これを器用にかわし、リップルを睨みつける。

「……目障りだね。そういや初めてあんたと会った時も、あたしみたいにそんな目をしてた。あの時からあんたはあたしをムカつかせ続

けた。同じ目をする奴は2人もいらぬ。そろそろ決着つけとくか？ あんたで良ければ」

「私は、お前とは違ふ」

「あつ？」

「確かに、昔の私と今のお前は似ている。……たった一つだけ、ナイトやトップスピードみたいな存在がいるかどうかという違いを除けばな」

「リップル……！」

「私は……、お前のように力を屈服させる事だけに使うようなクズにはならない！ 自分の正義を貫きながら、誰かを守っていけるような力を求めるバカになら、なつてやる！」

珍しく感情的になつたリップルを見て、一同は彼女に視線を向ける。が、それもほんの数秒後には緊迫した雰囲気へと変わる。

「……気に入らない。潰してやるよ。その後ろにいるくだらない連中と共になあ！」

そう言つてAKを構え直すカラミティ・メアリだったが、そこへ四方八方からうめき声と共に、ヤゴ型のミラーモンスター『シアゴースト』が飛びかかつてきた。当然メアリや王蛇だけでなく、九尾達にも被害が及んだ。

「おわつり？」

「くっ……！ 複数で攻めてくるタイプか！」

「こ、のおー！」

龍騎がしがみついてくるシアゴーストを払いのけようとしたその時、トップスピードの飛び蹴りが決まり、シアゴーストは吹き飛ばされる。

「トップスピード！」

「こいつは俺が何とかしてやる！ だから姉さん達を止めてくれ！
リップルも俺を手伝ってくれ！」

「……分かつた！」

リップルは後退し、トップスピードと共にシアゴーストを九尾達も所から遠ざけようと動いた。2人の魔法少女が駆け回りながら注意

を引かせて、シアゴースト達を誘導した。

その間に、龍騎達は2人の最強最悪コンビを相手に、戦いを始める事に。

「……フンツ。戦う相手は多い方が良い……!」

『STRIKE VENT』

王蛇は、元々ガイの武器であった『メタルホーン』を装着し、ナイトラに襲いかかる。メアリもそれに続き、銃撃を始めるが、龍騎達もかわしながらドラグセイバーやウイングランサー、エビルウィップ等で対抗した。

そして、リップルとトップススピードは溪流に建てられている大橋へとシアゴーストを誘導する事に成功した。これだけ広ければ、戦うには申し分ない。リップルが短刀を手に持とうとしたその時、トップスピードが声をかけた。

「あゝ、リップルさんよ」

「何?」

「さつきは、結構思い切った事言ったよな。俺、安心したよ。リップルならもう、ちよつと前までみたいに危なっかしい所を見ずに済みそうだし」

「あ、あれは、その……」

「さすがツンデレさん。でも、俺も同じ気持ちだ。守りたいものがあるからな。魔法少女のこれは、その為に授かった力だ」

トップスピードはマジカルフォンを取り出し、タップすると周りから炎が吹き荒れた。それを見てリップルもまた頷いて、同じようにマジカルフォンをタップすると、風が吹き荒れた。

『SURVIVE』

「挿入歌：果てなき希望」

両者同時に、ホルダーにマジカルフォンをはめ込み、トップスピードサバイブ、リップルサバイブへと進化した。

「ツシヤア! いっちよ派手に暴れるか!」

「あまり無茶するなよ。何かあったら、すぐに私に任せろ」

「頼りにしてるぜリップル!」

トップスピードサバイブはドラグバイザーツバイを手に持ち、ドラグブレードとしてシアゴーストに斬りつける。リップルサバイブもダークブレードを取り出して、シアゴーストを翻弄する。そこに加えて、リップルサバイブが魔法を駆使して手裏剣を投げつけて、シアゴーストを一箇所に固めた。散ろうとするシアゴーストは、トップスピードサバイブがラピッドスワローに乗りながら囲むように飛び回ることので乱れないようにしている。

「ある程度固まったな。よし、いくぞリップル！」
「分かってる！」

2人は横に並び、マジカルフォンをタップした。

「ハッ！ ハアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「ヤアッ！」

トップスピードサバイブが腕を曲げると、本来ならドラグランザーが出てくるところだが、進化前のドラグレッダーが姿を現し、トップスピードサバイブの周りを旋回し始める。一方でリップルサバイブもまた上空に飛び上がり、ダークレイダーからダークウイングに姿を変えたコウモリが、リップルサバイブの背中にしがみついて、リップルの背中にマントが取り付けられた。

そしてトップスピードサバイブは飛び上がり、空中で一回転すると、右足を前に突き出し、リップルサバイブはマントが彼女を覆い、ドリル状になってシアゴーストに狙いを定めた。

2人のその姿は、まさに互いのパートナーの必殺技の体勢そのものだ。サバイブの力を得た魔法少女は、パートナーの必殺技を受け継いでいたのだ。

「イツケエエエエエエエエ！」

「オオオオオオオオオオオオッ！」

トップスピードサバイブの『ドラゴンライダーキック』と、リップルサバイブの『飛翔斬』は、固まっていたシアゴースト達をまとめて塵一つ残さず一掃した。一息ついた2人は互いに顔を見合わせた。

「やったな、相棒！」

「……ああ」

普段は無愛想な表情しか見せないリップルも、この時はかすかに笑みを浮かべて、トップスピードとハイタッチした。

が、すぐに表情を引き締めて、九尾達のいた方へ顔を向ける。

「こんな事をしてる場合じゃない。早く戻らないと」

「あ、ああ。そうだな！ よし、後ろに乗れリップル！」

トップスピードサバイブは早速ラピッドスワローに跨り、リップルサバイブに手招きした。リップルサバイブは迷うことなくトップスピードサバイブの後ろについて、ラピッドスワローは急発進した。

そんな中、リップルサバイブは心の中で呟いていた。

「力が弱くても、戦えなくても、スノーホワイトみたいに誰かに必要とされるような魔法少女になれたらそれでいい。私の魔法は誰かを幸せにできるものでは決してない。でも、それでも、今あるこの関係だけは、絶対に壊されたくない。壊させない」

その頃、九尾達の方も激しい戦いが続いていた。

『『SURVIVE』』』

龍騎、ナイト、ライア、ラ・ピュセルはサバイブとなり、応戦を始めた。加えて人数差でも優位に立っている事もあって、王蛇とカラミ

テイ・メアリを押し返していた。

『BLAZE VENT』

「ハアッ！」

「チイツー！」

まだサバイブを獲得していない九尾も、仲間が来てくれた事で精神的にも回復したのか、持ち前の身体能力を駆使して『ブレイズボンバー』でメアリにダメージを与えていった。

「ベノスネーカー！ やれ！」

たまらずメアリはパートナーの契約モンスターを呼び出し、九尾達に向かって毒液を浴びせようとした。

『SHOOT VENT』

だがそこへダークブレードをダークシールドに収め直したナイトサバイブがベントインしたカードの効力で、ダークバイザーツバイの両端の弓が開き、ボウガンとなって光の矢が放たれ、ベノスネーカーに直撃した。

「貴様もだー！」

「グウツ……！」

おまけの一射として『ダークアロー』がメアリの足元に放たれ、メアリは不安定な足場である岩を転がった。

『THUNDER VENT』

「王蛇あ……！ くらえ！」

ライアサバイブがカードをベントインすると、王蛇の上空にエクソダイバーが出現した。ちょうど王蛇の真上に位置をつけると、腹に収納されていた車輪が勢いよく回転し、そこから真下にいた王蛇に向かって雷が落雷した。『ヴェイパースパーク』が王蛇に直撃し、爆発と共に王蛇を吹き飛ばす。ヴェイパースパークを直に受けて全身が痺れた王蛇に、ドラグブレードを構える龍騎サバイブと、魔法で肥大化させた大剣を構えるラ・ピュセルサバイブは同時に剣の先端を突き出し、王蛇を突き飛ばした。王蛇は崖下の岩場に落下し、平たい部分に体を打ち付けた。さすがに無抵抗で叩きつけられては、王蛇とてすぐには動けない。そう思った龍騎サバイブは下にいる王蛇に向かって

叫んだ。

「もう終わりだ浅倉！ 大人しく刑務所に戻れ！」

「フハハハハハッ！」

だがどうだろう。王蛇は体を大きく振り動かし、痺れを無理やり振り払った。そして何事もなかったかのように龍騎サバイブ達のいる所へ飛び上がって着地する。

「浅倉あ！」

「！ 待ってライア！」

ラ・ピュセルサバイブの制止も無視してライアサバイブが飛びかかるが。

『ADVENT』

「グワッ！」

王蛇が呼び出した、黒いエビルダイバーがライアサバイブの死角から体当たりして、彼を弾き飛ばした。

『ADVENT』

さらに追撃とばかりに今度は黒いメタルゲラスを呼び出し、倒れているライアサバイブに向かって突進してきた。

「！ ライア！」

『ACCEL VENT』

九尾は高速移動でライアサバイブに接近して担ぎ上げて、メタルゲラスから遠ざけた。

その一方でカラミティ・メアリも勢いを取り戻したのか、ナイトサバイブを退けつつ、ベノスネーカーと共に王蛇と合流した。

王蛇、カラミティ・メアリ、ベノスネーカー、黒いメタルゲラス、黒いエビルダイバー。5体から発せられるオーラは、九尾達に異様なプレッシャーをかけてくる。

と、ここで王蛇が今までに見せた事のないような笑い声を発した。「お前らと戦ってる方がよほど面白い。ライダーも魔法少女も、ここなくっちゃなあ……。良いぜ、お前らに面白いものを見せてやるよ。俺のとおっておきを」

そう言って王蛇が取り出して九尾達に見せたのは、磁石のような絵

柄の特殊能力系のカード。それをベノバイザーにベントインした。

『UNITE VENT』

一同が初めて見るアドベントカードに身を引き締める中、信じがたい現象が5人の目の前で起きた。彼らが契約モンスターとして使役していたベノスネーカー、メタルグラス、エビルダイバーが一つに重なり、ベノスネーカーを軸に、その姿を変えていった。メタルグラスのようなツノのついた頭部に、両手と両足。背中にはエビルダイバーの鱗のような翼が生えて、その姿はまるで竜。

3体合体によって誕生したキメラ型の契約モンスター『ジエノサイダー』が、ここに姿を現した。

「う、嘘だろ!?」

「モンスターを合体させるカードまであるなんて……!」

「これが奴らの切り札、というわけか」

ナイトサバイブも冷静に見てはいるものの、初めて見る相手にどう対処すれば良いのか分からず、ジリジリと後ずさっていた。

それを見てカラミティ・メアリは余裕と言わんばかりに笑った。

「どうやら形勢逆転みたいだね。にしてもこいつは良いな。モンスターを一つにまとめて強化するカード。フォルムも嫌いじゃないよ」
「やれ」

王蛇が一言、そう命じただけで、九尾達に向かってジエノサイダーは口から光弾を吐き出した。光弾は九尾達に直に襲いかかり、口々から出た悲鳴は爆発音に掻き消されるほどに凄まじい攻撃が、目の前の敵を薙ぎ払っていく。

爆音が耳に届いた事で、リップルとトップスピードの間で緊張感が生まれる。さらに速度を上げて爆発音のした地点に向かうと、そこから少し離れた、道路が通っている地点に九尾達の姿が見えた。見たところ、5人とも健在だったが、明らかに傷を負っている。

「みんなー！」

2人はすぐそばで着地し、ラピッドスワローから降りて、5人の元へ駆け寄る。サバイブになつていた龍騎達はすでに皆、元の形態へと戻っている。時間が経った事で強制解除されたようだ。なお、ここに来る途中でリップルもトップスピードもサバイブの効力が切れて元に戻っていた。そんな7人と対峙する王蛇とカラムיתי・メアリの方も、まだ余力が残っている様子だった。ジエノサイダーの方は、サバイブ同様時間切れになったのか、その姿はない。

「フフツ。遅かったねえお嬢ちゃん達。けどこれで分かっただろう？ あんたらみたいにな、ありもしない正義を振りかざし続ける強者気取りが、あたしらに勝てるどころか、サバイブすら使いこなせないって事がさあー！」

「メアリ……………」

「くっ……………」

トップスピードとリップルは2人を睨みつけ、リップルに至ってはクナイに手を伸ばして、いつでも戦闘に入れるような体勢を作っている。

「まだ、だ……………」

だがそこへ、ライアの力強い声が聞こえてくる。

「まだ、運命は変わっていない……！　こんな事でやられる俺達じゃない事は、自分達自身がよく知っている……！　それに浅倉、お前には聞きたい事があるからな……！　話が聞けるように、大人しくしてもらおうか！」

『FINAL VENT』

ライアが震えながらエビルバイザーにカードをベントインすると、後方から現れたエビルダイバーに飛び乗って、王蛇めがけて突撃を始めた。

「……ハハハ！」

『FINAL VENT』

これに対し王蛇もカードをベントインし、身構える。後方から、黒いエビルダイバーが出現し、ライアと同様に黒いエビルダイバーに飛び乗り、ライアめがけて突撃する。

目には目を、『ハイドベノン』には『ハイドベノン』を。

両者共に同じ必殺技が真正面から激突するまで、さほど時間はかからなかった。

「ライアあー！」

パートナーであるラ・ピュセルの叫び声は、ハイドベノン同士がぶつかった衝撃で起こった爆発によって掻き消されてしまった……。

95. きっかけ探し

『ハイドベノン』の衝突により、爆煙が風に乗って九尾達に襲いかかる。

一同が咽ぶ中、2つの人影が爆煙から転がり落ちてきた。ライアと王蛇だ。両者共に相討ちという形で、地面に叩きつけられたようだ。

「ライア！」

「ぐっ、ウウ……！」

ラ・ピュセルとトップスピードが真っ先に駆け寄り、ライアの上半身を抱き起こした。一方の王蛇はカラミティ・メアリの助けもなく、自力で起き上がった。あれだけのダメージを受けていながら立ち上がれる気力が残っていた事に、ボロボロのライアは驚きを隠せない。

「……アア！ 久々に気分が良いなあ……！ だがまだだ。もつと来い……！」

首を鳴らしてさらなる刺激を求める王蛇に対し、ライアはこう言った。

「王蛇……！ お前に聞きたい事がある」

「アア？」

「お前は、斉藤 雄一という男の事を知っているか？」

「!?? そういや、こいつのダチはもう死んでて、それが浅倉と関係してるって言ってたよな……」

これを聞いたトップスピードは、便乗するかのように追加で質問をした。

「俺からも聞かせてくれ！ あんたは、室田 昇一って奴をどこまで知ってる!?? あんたがやったんだろ!??」

ライアやトップスピードだけでなく、その後方から駆け寄ってくる九尾らも王蛇に視線が集まる。

「……知るか。いちいち俺をイラつかせた奴の顔なんか、覚えてるわけないだろ？」

だが王蛇から返ってきた言葉は、何とも素っ気ないものだった。2人にとって親しかった者に怪我を負わせ、死亡、あるいは夢を断ち切

られるといった残虐行為を働いたにもかかわらず、王蛇はバツサリと切り捨てる。龍騎やリップルがこれでもかと睨みつける中、ライアは割り切ったように呟く。

「……そうか。なら、いい。だがこれだけは言っておく。俺もトップスピードも、お前によつて運命を狂わされた。『人を呪わば穴二つ』。よく覚えておく事だ」

「それがどうした。もっと俺と戦おうぜ……!」

溢れ出る力を抑えられないように体を震わせる王蛇。それに対し、ナイトは肩を竦めて呟いた。

「行くぞ。これ以上奴らに絡まれるのは面倒だ」

「でも……」

「このままやりあつても埒があかない。用がないなら、もう無理して関わる事はないからな」

「……そうだな」

龍騎も賛同し、一同はその場を離れる事に。当然王蛇は黙っているはずもなく。

「……おい待てよ。もう帰るのかあ？まだまだ足りないんだよこつちは！ ミラーワールドの中じゃないんだ。時間なんか気にせず戦えるだろ。もっと遊んでけよ!」

「悪いがこつちもお前の遊びに付き合つていられるほど、暇じゃない。帰らせてもらう」

「……フン。勝手にしな。そもそもふっかけてきたのはそのガキの方だし」

メアリもため息まじりに銃を持つ手を下ろし、九尾に視線を向けた。九尾は目をそらし、ナイト達と共にその場から立ち去る事にした。

「待てよ……!」

王蛇が追いかけてしようとしたその時、不意に彼の動きが止まり、次の瞬間には地面に仰向けに倒れて、強制的に変身が解除されて、元の浅倉 陸に戻っていた。

「……おい?」

メアリが気になって近寄ってみると、浅倉の瞳は閉じていた。口からはいびきに近い音が鳴り響いている。ここまでの戦闘で疲労が溜まったのだろう。

「……やれやれ。どこまで自由奔放なのか……。ま、こっちも一仕事終わった所だし、ここいらでゆっくりさせてもらおうか」

メアリも橋の欄干に背中を預けて腰を下ろし、寝転がる王蛇と共にしばらくの間、溪流の水が流れる音に浸っていた。

「いや、しっかし焦ったよな。まさかこんな形であの2人とやりあうなんてさ」

「まあ、みんな無事だったんだし、良かったよな！ 九尾も怪我とかしてないだろ？」

「ま、まあ……」

山奥から遠ざかり、ようやく最凶コンビの魔の手から離れられた一同は会話するだけの余裕が出来た。

「相手が悪いのもあるが、今回は賢明な判断だったかもな。あのままでは警官達も無事では済まなかったはずだ。人気のない場所に誘導出来た点はいい事だ」

「別に褒められる事じゃないです……。結局、俺はまだ答えを見つけてない……。あの2人と戦ってれば、なんて思ってたんですけど、

やっぱり人選違いだった所もあるかも」

「まだ、スノーホワイットの事で……？」

リップルは九尾の顔を覗き込む。九尾は何も言わずに首を縦に振る。

「九尾は……、スノーホワイットの事はこれからどうするつもりなんだ？ このままなんて事はないだろ？ 俺だって嫌だし」

「そりゃあ、俺だって……。あいつを傷つけたのは間違いなく俺に責任があります。俺があいつの気持ちも知らずに、勝手に先走って……。もし、俺がもつと早くあいつの考えに気づいてやれば、俺は……」

それを聞いて最初に口を開いたのは龍騎だった。

「だったら本人に直接話を……ってのは無理か。なら、もつと別の方法でスノーホワイットの事を知っていうか……」

「なるほどな。だったらラ・ピュセルの方が適任じゃね？ だっておたくらは付き合い長いんだし」

トップスピードにそう言われて、ラ・ピュセルも頷きながら九尾に語りかける。

「僕で良ければ、力になるよ。というよりも、僕としても彼女をこのままにしておけない。同じく『正義の魔法少女』を愛する者として」

「ラ・ピュセル……」

「ラ・ピュセルも魔法少女愛好家か。スノーホワイットと同じだな」
なるべく日陰の所を優先的に歩くリップルがそう呟いた。

と、ここでトップスピードからある疑問が。

「つーかき。スノーホワイットって何であそこまで魔法少女に拘ってるのかね。前から気になってたけど、あそこまで魔法少女にくいついてる中学生なんてそういないだろ？ ラ・ピュセルみたいに男の間ではどうか分かんないけど、女同士だと何というか……。もう恥ずかしくならね？ 昔の俺なら絶対恥ずかしい」

「ラ・ピュセル、何か知っているか」

ライアに尋ねられた、スノーホワイットをよく知る魔法少女は次のように答えた。

「スノーホワイトが……、小雪が魔法少女にハマるきっかけがあるとしたら、やっぱりアレかな」

「アレ？」

「みんなは、『キューティーヒーラー』ってアニメを知ってるかい？」

「知らん」

「興味ないな、そういうのは」

「俺も、そっち方面は疎いからな……」

「ゴメン。俺も聞いたことないな。令子さんとか島田さんは知ってるかもしれないけど」

「聞いた事があるような……、ないような……」

「ああ、名前だけなら知ってるぜ！ まあ別に興味なかったし観てはないけど」

とといったように、皆の反応は様々だった。ただ、スノーホワイトが魔法少女に憧れる原点であると分かってか、九尾はもう少し聞き出すことにしてみた。

「その話、もう少し詳しく聞かせてくれ」

「九尾？」

「……やっぱり、俺はあいつを放っておけない。パートナーだからとか、そんな事は関係ない。これ以上、あいつには人の生き方から外れてほしくないから。だから……。俺は、小雪の事を知る必要がある。その為には」

「相手の土俵に立って物事を考える……か」

ナイトはそう補足する。その考えで合っていたらしく、九尾は何も言わない。

「なるほどな。いいじゃんそういうのー！」

「まあ、パートナーの事を知るのも、良い転換期になるかもしれない」と、ここでラ・ピュセルからある提案が。

「なら、僕の家に来ないかい？ 今だったら『キューティーヒーラー』シリーズは全部揃えて持ってるし。せっかくなら観て考えても良いと思う。時間があるなら、今からでも準備できるよ。丁度親は出かけてるし」

「……なら、そうするか」

そうと決まれば、善は急げ。

一同はその場で解散後、九尾は家に戻り、支度を整えてから、颯太の家へ向かう事にした。

それから30分後。時間通りにやってきた大地は、玄関先で颯太と会ってから部屋まで招かれて、パソコンを立ち上げると、小雪にとつて原点ともなる魔法少女アニメを視聴する準備を始めた。

リハビリに励んでいる事もあってか、車椅子から松葉杖に乗り換えている颯太は、大地に支えてもらいながら押し入れの奥に手を伸ばし、そこにあつた段ボール箱から、DVDのケースを取り出した。埃が付着しているが、どれも『キューティーヒーラー』と各巻数が明記されている。

「最近魔法少女活動に専念してたから観てないけど、多分このパソコンなら見れるはずだ」

「というより、よくここまで揃えられたな……」

「結構苦労したんだぞ。全巻揃えるのに隣町まで出かけたんだし。親とか友達にバレないように買いに行くのは、ある意味で命がけなんだ

から」

「隠れキリシタンってのがサマになってるな」

以前ライアがそう比喻した事を思い出し、苦笑する大地。

さすがに全ての内容を細かくチェックするほどの時間はない為、颯太の監修のもと、初代の、物語のキーとなる箇所を視聴し、ある程度は飛ばしながら目を通す事にした。大地の目の前の机には、いつの間にか颯太が用意した、『キューティーヒーラー』のガイドブックや魔法少女関連の月刊誌が置かれている。これから魔法少女の事を、小学校時代からの男友達に余すことなく語れる事に興奮しているのだろうか。

そうこうしているうちに、颯太がマウスを操作し、『キューティーヒーラー』の1話目の視聴が始まった。大地には馴染みのない、なんともリズムミカルなオープニング曲が流れ始めた。

「なんというか、幼児向けって感じがするよな……」

「まだまだだよ。オープニングだけが全てじゃないんだから。そりゃあ子供の頃はそこまで深く考えてなかったけど、今になって観てみると、考えさせられる内容だぞ」

「ふくん……」

「僕はキューティーヒーラーの織り成す必殺技に釘付けだったけど、小雪の場合は決めゼリフ派だったよ」

「なるほど……」

大地は画面に映る映像を見つつ、何気なくパンフレットに目を通し、颯太から解説をもらった。

物語の大筋としては割とシンプルだった。ごく普通の女子中学生がある日、謎の妖精と出会って不思議な力を手にして変身。世界の平和を守る為に悪の組織と戦う。

「まあ、今時の女兒だったら戦うヒロインって珍しいし、惹かれるかもな」

「それもある。でもキューティーヒーラーがバカ売れしたのは、やっぱり物語の質とか、キャラのバランスの良さがあると思うんだ」

「バランスねえ……」

ぎこちない様子を見せながらも、ようやく初めて敵を倒し、ホツとしている2人の新星ヒロインを観て、大地は頬杖をついた。

その後も日常を舞台に様々なシーンが流れていくが、ふと大地がある事に気づく。

「そっ、いやこの2人。なんというか……。全然正反対な感じがするよな」

「おつ、良いところに目を付けたな。そうなんだよ。同じクラスメイトでも、初めて変身するまでは全然接点はなかったんだ。例えばこの『キューティーパール』とか、理系で成績トップ、物静かでお嬢様風な家庭で暮らしてるんだけど、逆に『キューティーオニキス』はラクロス部でクラスの親友が多くて、活発なタイプなんだ。見た目も性格も真反対だから、同じクラスでも口も聞いた事がない2人でもある」

「それが終盤になるにつれて、固い友情へ結ばれていく、って事か」
そんな会話を交えつつ、物語は進んでいく。やがて大地は物語の最中で目についた点が。物語の要所要所にて、何度か2人が喧嘩して、仲違いするシーンが見られるが、最終的には仲良くなつて、また敵を協力して倒している。

「こんだけ喧嘩してる割に、まだ仲直り出来るのか」

「あれは、お互いにまだ相手の事を知らないから、些細な喧嘩に繋がると思うんだ。だから、いろんな形で気持ちを伝える。そうやって2人は段々強くなるんだ。誰だって最初は弱いからね」

「……」

不意に自分の手のひらを見つめる大地だが、すぐに映像に視線を戻した。

物語の中盤以降、追加戦士が増えていく所で、再び会話が始まった。中にはダークヒーローポジの戦士も出てきて、大地も少しばかりきいた。

「ダークキューティーね……。また随分と酷な役割の戦士が出てきたな」

「小雪は好印象を持たなかったらしいけど、僕はキューティーヒーラーシリーズの中じゃ好きだったよ。割と感情移入がしやすく、考

えさせられるっていうか。孤高のダークヒーローって、案外カッコいいものなんだぜ」

「ダークヒーロー……。まあ、王蛇とかベルデとか、ルーラとかカラミティ・メアリとかが実際にいたんだしな。ダークヒーローなんて珍しくもないのかもな」

「そ、それは……」

乾いたような表情を浮かべる大地を観て、颯太は何も言い返せない。魔法少女も仮面ライダーも、必ずしも正義のヒーローを演じているわけではない。シロー曰く、自らの欲望に突き動かされて、戦う。今、目の前で二次元であるとはいえ、少女達もそういった感情を抱いているのではないか。本物になって現実に通じた彼らには、そんな疑問を抱かずにはいらなかった。

とはいえ、何ら接点のないクラスメイトが、かけがえのない友達へと成長していく過程の丁寧さには、大地も人気の理由として頷ける箇所はあった。気がつけば、会話は成り立たずとも、物語の展開に注目していた。

ようやく悪の組織を倒し、元の日常生活に戻っても友情は途絶える事なく続いていく。そんなシーンをラストに、初代『キューティールヒーロー』は完結した。

エンドロールが流れて、息を吐く大地。ふと窓の外に目を向けると、夕日が沈みかけていた。思っていた以上に没頭していたようだ。

颯太もそれに気づいて、片付けながら口を開いた。

「悪いな。長い時間付き合わせて。でも分かっただろ？ 小雪が魔法少女にハマる理由が何となく」

「まあ、分かる気はするな。俺も昔からお前と一緒に観てたら、案外お前ほどじゃないにしろ、ファンになってたかも」

「そうか。それは勿体無い事したなあ」

互いに笑みを浮かべながら、後片付けを進める親友2人。

確かに、男友達と肩を並べて魔法少女アニメを観るというこの過程は、大地にとって不思議と、無駄とは思えなかった。思えなかったのだが、今ひとつ自分の中でモヤモヤしたものがあり、この魔法少女ア

ニメから何を得たのかは、自身の中でも理解できない。

大地の浮かない表情に気づいた颯太はベッドに腰を下ろしてから、大地に言った。

「まあ、今すぐに答えを出せなんて、難しいよな。僕だってそうだし。もしこれから先、力になれる事があつたら相談しろよ。僕の時だつて、そうやって立ち直らせてくれたじゃんか」

「……そう、だな。今日はありがとな。じゃあ、俺はもう帰るから」
「ああ、また後で」

そういつて一旦自宅に戻ろうと足を動かした大地の耳に、聞き慣れた音が鳴り響く。マジカルフォンを通じての、メッセージ受信だ。颯太と顔を見合わせて、2人はマジカルフォンを起動する。

ファヴ：『はいはい！ みんな、チャットにぜんぜん顔を出さなくなっただけど、元気にしてたぽん？』

シロー：『さて、今回はいいよ最後のレアアイテム獲得者の発表を行う』

ファヴ：『諸事情で遅れてしまい、申し訳ないぽん。それでは、栄えあるマジカルキャンデー獲得数総合第1位のペアを発表するぽん！ そのペアは……『九尾&スノーホワイト』ペアだぽん！』

シロー：『この2人は人員削減以前から人助け等に精を出していた

からな。至極当然の結果だったかもしれない』

ファヴ：『素晴らしいとしか言いようがないぽん！ これからも、頑張ってほしいぽん！』

シロー：『脱落の枠はあと12名。最後まで気を緩めずに、キャンデー集めに励んでくれたまえ』

ファヴ：『それじゃあ、みんなの活躍、期待してるぽん！』

『ようやく全部揃ったぽん。これですますます刺激的な展開になりそうだぽん！』

『しかし良かったのか。結果的にスノーホワイトにサバイブが行き届いてしまった。クラムベリーは排除したがっていたはずだが』

『あれは運が悪かったとしか言いようがないぽん。ナイトとリップルが邪魔さえしなければ、楽に死ねたはずなのに。そういう意味じゃ、スノーホワイトも悪運が強いぽん。だからちよつとファヴも気になってるぽん。シローもそう思わないかぽん？』

『彼女にも生き残る要素がある……ということか』

『それは分からないけど……、少なくともパートナーを引き立たせる為に死ぬ事になっても、それはそれでアリな気がするぽん。だから、もう少し生かしてやっても良いとファヴは考えてるぽん』

『仮面ライダー九尾に、魔法少女スノーホワイト……。有力候補が次々と消えていく中で、この2人が、やはりこの試験の目玉となりそうだな……』

96. 夢の中でのアドバイス

「……」

下から鳴り響いていたテレビの音も、今や聞こえなくなり、街の住民が寝静まる時間帯。

暗闇の部屋の中で、大地はベッドに横になってカードデッキを天井に向かって掲げている。月明かりに照らされて黒光りするカードデッキを見つめていた大地は、そこから一枚のカードを取り出した。左翼の絵柄と背景が白い、『SURVIVE』のカードが手元にあった。日暮れ頃にファヴとシローから通達があり、サバイブを提供されたのはマジカルキャンディー獲得数トップの九尾とスノーホワイトだった。

ラ・ピュセル、トップスピード、リップル、ライア、龍騎、ナイトといった、仲間と同等の力を手に入れた事は本来なら喜ばしい事なのかもしれない。が、今の大地には満足げな様子は伺えられない。

「(……これを使って、俺は……。何を、すれば良いんだ……。？ モンスター退治？ 他のライダーや魔法少女を倒す?)」

後者は先ず、スノーホワイトは納得しないと考えている。ならば前者か、と思えど、モンスター退治なら今の状態でも差し支えなく戦えている。サバイブの有無はあまり関係ないと考えている。ならば……。

「……結局俺は、また迷ってるだけ、か」

どうやって小雪を魔法少女として再び奮い立たせるか。小雪の気持ちを受け止められるか。そんな疑問が頭の中を駆け巡る。

「(つて、こんなに小雪の事を考える俺も、なんからしくなくなった気がするんだよ……。前の俺だったら絶対なかった考えだ。変わったのか、変えられたのか……)」

ため息を一つつき、カードをデッキに戻した後、枕元に置いて目を閉じる大地。

この力、どう使うか。大地に与えられた課題は、それに近いと言っても過言ではない。

ほぼ同時刻。スノーホワイトの変身者である小雪も、マジカルフォオンに目を通していた。そこには大地が手にしたものと同じ絵柄で『SURVIVE』と表記されたアイコンがある。これを起動すれば、ラピュセル達と同じ力を手に出来る。隣に並んで戦う事もある意味で可能だろう。

……だが。

「……こんなの、結局誰かと戦う事にしか使えない。そんな力、私は、望んでない……」

無論これから先、戦いが激しさを増すのは明白だ。敵は以前スノーホワイトを痛めつけたクラムベリーだけではないからだ。そうなった時、必要なのは『力』だ。今のスノーホワイトは優しすぎるが故に、戦いの場では仇となる。

分かってはいた。分かってはいるのだが、心の奥底で抵抗があるのもまた事実。

「……使う必要なんて、ない。使ったって、私は……」

向こうが、何を目的にサブイブを配布したのかはまだ見えてこないが、少なくとも思い通りには動きたくない。

小雪は静かにマジカルフォオンをベッドの上に放った。

どれだけ抗っても、ライダーや魔法少女の宿命からは、逃れられない

い。力の片鱗を手に行っているスノーホワイトに、その意味が分かる時は来るのだろうか……。

「……っ！」

榊原 大地は、逃げていた。ただひたすら、夜の街を当てもなく、後方より迫り来る異形から距離を置くために。

経緯は分かっている。ただ、気がつけば外にいた、としか答えられない。この世のものとは思えない怪物が迫ってきていたと分かったのは、羽音だと分かる程に音が近づいてきてからの事だった。

「っ。何でこんな時に変身出来ないんだよ……！」

大地がそう悪態つくように、ポケットの中をいくら探しても、普段の学校生活の中でも肌身離さず持ち歩いていたカードデッキは手元に現れない。街灯のない街中でも分かる程にギラついた爪を見て、大地は一目散に逆方向へと駆け抜けた。

一本道しかない為、自分の足だけが頼りだった。追いつかれたら殺される。本能的にそう感じた大地は、余計な事は一切考えず走り続けた。

敵は空を飛んでいるらしく、上空から羽音が聞こえてくるのが、背中を向いても分かる。そして同時に悟った。このまま逃げ続け

ても、向こうの方が速度はある。何れ追いつかれる。

大地は一度だけ後ろを振り向く。もう異形の怪物はすぐそこまで迫っていた。その怪物が爪を一振りすると、風圧で大地は吹き飛ばされて、近くの壁に激突した。

「ぐっ……い！」

走り疲れた事と、背中にダメージを負った影響で、大地はすぐに立ち上がれなかった。その間に、怪物達は大地の前に群がる。

「(万事休す……ってやつか)」

戦う力もなければ、抵抗するだけの体力もない。怪物の中の一体が大地に迫り来る。もうダメか。そう諦めかけていた。

「そここまでだあ！」

間延びした少女の声が聞こえてきたのは、ちょうど爪を振り下ろそうとしかけたタイミングだった。不意にその怪物が吹き飛ばされた。どこからか投げつけられたものが直撃したらしい。大地が目を凝らしてみると、地面に延びている怪物の傍らに、白い長方体の物が転がっている。

「枕？」

大地がその物質の名を呟いた直後、「しゅた！」という声と共に、先ほど枕を投げつけた人物が、大地の前に降り立つ。

その全貌を目にした瞬間、大地は自然と鳥肌が立った。大きめなパジャマの上着にハイソックス。雲のような飾りを身につけた、その容姿は、大地もよく知る人物だった。否、よく『知っていた』と言う方が正しいだろう。その少女とは2度と会う事はないと分かっていたが故に、彼女の登場に驚きを隠せない。

「仮面ライダーを苦しませる悪夢は、まとめて退治しちゃうよお！」

「挿入歌：おやすみパラレル」

大地が声をかける前に、少女は気合いを入れて、眉間に両人差し指を当てて、ポーズを決めると稲妻状にギザギザと折れ曲がるビームが放たれて、怪物達の半数を薙ぎ払った。生き残った怪物達達が少女に襲いかかるが、少女は難なく飛び上がり、地上に向かって叫んだ。

「ボルキョーンサーくん。お手伝いおねがい！」

すると、その呼びかけに応えるかのように、両手に鋭いハサミを備えた黄色のカニが、怪物達に飛びかかり、次々と殴り倒していった。大地はさらなる衝撃を受けた。

「ボルキョーンサーまで……！」

『グルルルル……』

かつて、彼女のパートナーが使役していた契約モンスターは大地を守るように、怪物達を倒していく。

上空にいた少女は、仕上げと言わんばかりに懐からマジカルフォン

を取り出し、操作した。彼女の右手に握られたのは、2つの銃口が並んで取り付けられた『バブルショット』。ボルキャンサーの隣に並び立ち、その銃口を怪物達の残党に向けてからトリガーを引いた。ボルキャンサーは口から、少女はバブルショットから『バブルシュート』を放ち、怪物達を全て一掃した。

唾然としていた大地だったが、すぐに我に返って、少女に歩み寄った。少しだけ声を震わせながら、その名を呟く。

「……ねむ、りん。なのか……」

「間に合ったみたいで良かったよかった」

欠伸を一つしながら振り返って、大地の無事を喜んでいたパジヤマ姿の魔法少女を見て、間違いなく『ねむりん』だと確信を得た。

所変わって、真っ白な雲が絨毯のように果てしなく敷き詰められる空間。四方八方が、雲で囲まれている。ねむりんが場所を変えようと提案し、移動したこの空間。現実的に考えても、こんな光景はどん

な秘境でもお目にかかれない。

ならばここは、ねむりんが普段から活動していた夢の世界だろうと、大地は悟った。そして瞬時に理解できた。なぜカードデッキが手元に無かったのか。そして、もうこの世にいないはずの魔法少女が、目の前の柔らかいソファーに寝転んで、こちらを見つめているのか。ただ、それでも疑問に思うところはあるようだ。

「何で、俺の夢の中に？」

確かに彼女の魔法なら夢に自由に出入りできるから、夢の中に現れる事自体珍しくもないとは思うが、それでも悪夢にさらされている者は他にも大勢いるはずだ。そもそも、現実世界では一番最初に脱落し、真実を知らぬまま、息絶えた魔法少女がここにいる事が、大地にとって受け入れ難い事実だった。

一方でねむりんは大地の質問に、曖昧そうに答える。

「うくん。ねむりんもよく覚えてないんだよねえ」

「？」

「何か特別な事があって、こんな風になっているんだとは思うんだけど、それが何か全然思いつけなくて……。それに、夢の中から現実世界に抜け出せなくなっちゃって……」

「(ひよっとして……)」

もしかやと思った大地は、ねむりに新たな質問……というよりも確認を取った。

「なあ、ねむりん。もしかして自分がもう人としては死んでるって事、自覚してないのか？」

「……死んだ？ 私か？ まっさかあ」

「……やっぱりそうか」

大地は項垂れた。予測はしていたが、日付が変わったタイミングで、運営側によって命をもぎ取られ、死に至った少女は、自分の死を理解していなかったようだ。

そこで大地は、ねむりんが死んでから今日に至るまで、現実世界で起きた事を洗いざらい全て話した。

「……ほおほお。ねむりんが死んだ後で、現実世界ではそんな事が起

こつてたのかあ。参加してなくて正解だったかな？」

「……ねむりんは、後悔してないのか？ 何も聞かされずに死なされて……」

「うくん。それを言われちゃうとねえ……。そりゃあ魔法少女を辞めたら、これからはニート卒業して就職しようかなって考えてはいたけど。やっぱり、夢の中で人助けするのが性に合うのも事実だしね。これはこれでアリだと思ってるよ」

「そうか……」

ねむりんは自身の現状には、それなりに満足はしているらしい。

「まあそれでも不自由になったのは事実かもね。自由に夢の中へ出入り出来なくなったし。多分だけど、もう魔法少女か仮面ライダーの夢にしか行けなくなった気がするんだよね」

「？ って事は、あれからも夢の中で活動は続けてたって事か？」

「うん。どうせ夢の中でしか動けないって分かってからは、また頑張るようにはしてたよ」

「それは何より」

ホツとした感じがした。それからふと思つた疑問をぶつけてみる事に。

「ねむりん」

「んっ？」

「ねむりんは……。何で、生きてる頃は夢の中でしか活動しようとしなかったんだ？ 現実世界でも、ねむりんの役に立てる事はそれなりにあつたはずだろ？ 常人よりは力はあつたんだし……」

「うくとね」

ねむりんは体を起こし、大地の顔を真っ直ぐ見つめて答えた。

「ファヴにも似たような事を指摘されたんだけど。ねむりんはね。夢の中で同じ魔法少女や仮面ライダーが困つてたら助けてあげようって、自分の力を知った時から決めてたんだ。たまたま失敗する事もあるけど、でもきつと役に立ってるよ。魔法少女や仮面ライダーが夢を見ていないなら、そうじゃない人の悪い夢をやっつけてるよ。宇宙怪人を改心させたり、殺された人を生き返られたり、こういうのって全部

ねむりにしか出来ない事だからね」

「じゃあねむりんは、良い夢を見させる為にずっと活動を……？」

「良い夢はね。疲れた人々の心にささやかな幸せをもたらし、起きてから1日の活力になってくれる……事だってあるんだよ。うん、正しい事が言えたと思う」

だから、ねむりんは夢の中で頑張れるんだよ。

そう締めくくったねむりんの言葉を聞き、大地は深く考え込んだ。彼女には、自分の役割が分かっていたから、死後も『人助け』を勤しんできた。ならば、今の自分に出来る事は……。

「……戦うぐらいしか、見つからないな」

自分はスノーホワイトのように優しくもないし、ラ・ピュセルやトップスピード、龍騎のように心が強くもない。リップル、ナイト、ライアのように迷いなく戦えるだけの自信がない。

出来るのは、戦って勝利を掴むことだけ。だが命を奪ってしまえば、それを勝利とは納得出来ない。そして何より、スノーホワイトがそんな事を納得してもらえないとは思えない。こんなバカげた戦いは、もう終わらせない。が、どうするべきかが見えてこない。これ以上一人で悩んでも解決できないと思った大地はねむりに問いかける。

「ねむりん。俺は、どうにかしてスノーホワイトに、自分の気持ちを伝えたい。どうやったら、あいつの心に響かせる事が出来るか、分かるか？」

「うくん……。対人関係の悩み事はねむりんの苦手分野だしなあ……」

首を捻って考え込むねむりんは、枕をポフポフ叩いていたが、不意に何かを思いついたように起き上がった。

「それじゃあ、この人達に相談相手になってもらおうか。夢の中だから、登場させてあげられるよ」

そう言ってねむりんは両腕を前方にかざす。すると光が集まり、気がつけば4つの人影となって、その姿が露わとなった。大地は思わず叫んだ。

「！ 先生！ それに、雫さんに奈々さん、美華さんまで……！」

「大地君。随分雰囲気は変わりましたが、またこうして会えるとは」
そこにいたのは、香川 俊行、亜柊 雫、羽二重 奈々、そして霧
島 美華。かつてチームとして活動し、九尾やスノーホワイト、ラ・
ピュセル、龍騎にとつて心の支えとなった人物達。そして今は、争い
の過程で命を落とした者達。

ねむりんの魔法で具現化に成功したようだ。

「お久しぶりですね、大地君」

「夢の中に呼ばれた……という事は、私を含めてここにいる4人はも
う……」

「そうなるわね」

雫の言葉に納得する美華。雫は隣にいた奈々に顔を向けて、その手
を握った。

「すまなかった、奈々。君や美華に迷惑をかけたたくなくて、独断で行動
してしまい……。結局私は、何も守りきれなかった、という事だ」

「それはお互い様です。私も、雫がいなくなつて、もう生きた心地さえ
しなくなつて……。遅かれ早かれ、きつと雫のもとへ行こうとしてた
わ。だからもう、自分を責めるのはやめましょう。それよりも今は
……」

「ああ、やるべき事があつてここに呼ばれた。分かつてるさ」

雫と奈々は抱きしめた後、ねむりんに向き直り、確認を取った。

「私達が彼の相談役になれば良いんだな？」

「うん。時々口出すかもしれないけど。後、4人も呼んで結構力使つ
たから、手短かにね」

欠伸をしてからそう答えたねむりん。

彼らは雲で出来たソファーに座り、大地の口から、先ほどねむりん
に話したように、その後の事を明かした。どれも4人にとつて唸らせ
るような話ばかりだったが、それでも聞き逃す事なく現状を理解し
た。

「なるほどね……」

「結局、俺にはベルデを殺せなかった。みんなの仇を討ちたくて、それ
なのに……。最後の最後で、止まっちゃまった……。戦わなきゃつて

思ってたのに、それも出来なくて、しまいにはスノーホワイトを、パートナーを傷つけた……。情けない、ですよ。迷いに迷って、どっちつかずの存在になった俺なんて……」

「大地君は、それで良いと思いますよ」

「えっ」

不意に奈々が立ち上がり、大地の側に寄ってその手を優しく包んだ。

「誰だって道に迷う人はいます。初めからその道を知る人なんていません。自分の努力、他者からの教え。そう言った繋がりがあって、やっと道は決まるんですよ。私の場合は、そんな時に手を差し伸べてくれたのが零だった。それだけの事です」

「彼女の言う通りです。私はあなたの担任として、あなたの成長ぶりを見てきたから、確信しているのです。あなたには、あなただけにしか出せない答えがある。それを支えるキーは、仲間と呼べる者達なのです」

「仲間……」

香川にそう言われ、脳裏に小雪らの姿が。

「君はもつと、仲間と打ち解け合う時間が必要だと思う。君は自分が思っているほど、孤独をひた走れるほどの力を持っていない。だから、ベルデを殺せなかつたんだと思う」

「私は、こういうアドバイスとか苦手だから何て言ったら良いか難しいけど、少なくとも、私達はあんたの味方だって事は、分かってちゃうだい」

美華が照れくさそうに言うと、次に口を開いたのは、ここまで成り行きを見守っていたねむりんだった。

「じゃあねむりんからも一言。そんなに悩むくらいだったら、自分らしいやり方で、相手にぶつかつちやえば？」

「自分らしく……？」

「それは人それぞれですから一概には言えませんが、自分で納得出来るものこそが、一番ですよ」

「美華と同じ事になるけど、私達は君が選んだ『答え』に反対しない。

何があっても、君の意見を尊重する」

「雫、さん……」

大地の中で、モヤモヤした何かが晴れ始めていくのを感じていた直後、辺りが雲に覆われ始めた。それを見て、ねむりんは口を開いた。

「あらら。もう時間か。残念だけど、ねむりん達はここでお別れだね」

「ねむりん……!」

「なんか今生の別れみたいなの雰囲気になっちゃったけど、ねむりんは、これからも夢の中にいるから。また困った事があつたら、会えるかもね。そんな時もあるから、みんなによろしくね」

「では、私達も行きましょうか」

「はい、先生」

まだ話したい事は色々あるが、時間も限られている。まどろみの時間、間も無くその扉を閉ざす。

「大地君。これを」

雫が前に出て首元に手をまわすと、巻きついてあつた黒いマフラーを外して、大地の首にかけた。

「これから先、辛い事が待ち受けているのは分かっている。そんな時は、これを見て思い出すと良い。何度も言うが、私達は君の味方だ。何があつても、私達は見守っている。肉体は滅んでも、魂までは消えない」

「頑張ってください。きっとあなたなら大丈夫。私よりもうんと強いんですから」

「正史や他のみんなにもよろしくね」

「あなたと小雪君が一緒なら、きっと、前に進めますよ」

「じゃあ、まったね〜」

ねむりんが手を振りながら呟くのを最後に、大地の夢の中での意識は途絶えた。

朝の木漏れ日を浴びて、仰向けに寝転んでいた大地の意識はようやくハッキリと始めた。

こんなにも夢の内容がハッキリと思い出せるのは始めてだった。始めてなのは、ねむりんと面と向き合って話した事も、だ。どうやら彼女の魔法は特別らしく、死後もその効力は発揮されているようだ。チャットでのやり取りを除けば、ねむりんの事はあまり知らなかった。以前小雪が夢の中で会って以来、仲良くなったと聞いていた。こうして会ってみると、中々に好印象な魔法少女だった。彼女がもうこの世にいないというのは、少し嘆かわしい事でもある。

不意に首元に、何かが触れている事に気付いた大地は、首元に手を伸ばした。毛糸のような感触があった。目の前に広げると、黒いマフラーだった。雫が別際に渡してくれたものとそっくりだった。

何故夢の中で行われた事が現実に影響したのかは定かではないが、何気なくそのマフラーを巻いてみた。冬にはもってこいのアイテムだったのだ、自然と体が温まった。単にマフラーの性能だけではない。そのマフラーからは、ねむりんを含めた5人の想いが込められている……ように感じていた。

「……………ああ」

息を吐き、そのマフラーに手を置く大地。まだ答えが出たわけではないが、1人ではない事を、大地は実感した。大切な繋がりが、ここ

に残っているのだ。

下の階から母親に呼ばれるまで、大地はマフラーに包まれたまま、朝のひと時を過ごしていた。

97. ツーマンセルバトル（前編）

澄んだ青空が広がる、昼真っ只中。

マジカロイド44の変身者、安藤 真琴は庭の花壇に植えられた色とりどりの花に向かって水を撒いていた。事務所に華やかさを求める意味で植えられた花々だが、数が多ければそれだけ手入れの数も増える。真琴自身、面倒な仕事ではあると思っていたが、誰かが手入れしなければ、花達は枯れるのを待つだけだ。

庭の手入れは基本的に、吾郎が丁寧にやってくれていた。が、彼が庭に訪れる事はもうない。その事を真摯に受け止めて、真琴は手入りに勤しんだ。吾郎の仕事を引き継ぐ形で庭中を歩き回り、一通りやり終えたところで、そろそろ休憩しようかと考えていた。

不意に殺気立った視線を感じるまでは。

「……！」

誰かがこちらを見ている。真琴は注意深く辺りを見渡した。

玄関先に植えられた木の間から、視線の主が把握できた。細く鋭い視線。蛇のような狂気性を感じせるオーラ。

「（浅倉……！）」

見間違いであつてほしかったが、浅倉は真琴に見られている事に気がつきつつも、なおも北岡が在住している事務所に顔を向けている。真琴が近づこうと足を動かしたところで、浅倉もその場を離れて、どこかへ行ってしまった。真琴が浅倉のいた地点にたどり着いた時には、影も形もない。

浅倉の狙いは、北岡である事は明白だ。弁護をしてくれなかった事への逆恨みとして、仮面ライダーである北岡を抹殺しようと考えているようだ。

「先生……」

真琴にしては珍しく、心配に満ちた表情のまま、事務所に顔を向けた。今のままなら、また接触を試みるに違いない。浅倉の事だから、この後すぐにも決行に移るのではないか。そんな不安が頭によぎった真琴は、水を止めてから急いで玄関に戻る事にした。

今の北岡を見ている、浅倉改め王蛇やそのパートナーであるカラミティ・メアリに勝てる確信が持てない。

その北岡は現在、パソコンと向き合ってデスクワークに勤しんでいた。間も無く依頼先に書類関係を見せる為に事務所を出発する為、指を忙しく動かしていた。文章もようやく終わりに近づいて、時計に目をやろうとしたその時、北岡の視界が歪み、意識を失いかけた。

「……っ」

そばに立てられていたチェスの駒に手が当たり、幾つか横倒しになったところで、ようやく北岡の意識がハッキリとしたものになった。こうなる事は時々あったが、ここ最近は周期が短くなっているようにも感じる。

「……」

手のひらと共に、そばに置かれていたカードデッキに目をやる北岡。

『医者に告げられた期限は、後どれくらいだ。半年か、3ヶ月か、それとも……』

吾郎の死から間もない頃、突然マジカルフォンを通じて現れたシローが言った言葉が脳裏をよぎる。彼が不治の病に侵されている事を見透かすように、シローは淡々と告げた。

『戦わなければ、ライダーでいる意味はない。戦いを止めたら最後、死ぬだけだ。それが嫌なら、生きたいのなら、戦うのだ。どう戦うかはお前の自由だが、遅すぎたという事のないように励んだまえ』

「……そうだよ。俺は俺のやり方で生き残る。そう簡単に死んでたまるかって話だ。どんな手を使っても生き残る。そうだろ、ゴロちゃん……」

そう呟いて、北岡は今一度体に力を込めて残りの分を打ち込む。

ようやく完成し、コーヒートを淹れようとして立ち上がったその時、どこからか視線を感じた。心当たりがないわけではない。北岡は迷いなくカードデッキを手に持った。

玄関に向かって歩き出した、まさにそのタイミングで、真琴が歩み寄ってくる姿が確認できた。

数十分後。

静まり返った北岡法律事務所内に、荒々しい足音が響き渡る。

「……アア！」

終始イラついた表情を浮かべながら事務所内を動き回っていたのは、言わずと知れた浅倉 陸。

「弁護士さくくんは金持ちだろ。命が惜しくて、逃げ出したさ」

そう口ずさみながら、浅倉は机の上に横倒しになっていたチエスの駒を、腕を振るって吹き飛ばす。手当たり次第、近くに置かれたものに八つ当たりする中、やつれた雰囲気の中、中年女性がすぐそばのソ

フアーにどっかりと腰を下ろした。

「流石は弁護士。生まれた時から力を有してた奴らしい、豪勢なもので溢れかえってるな」

山元 奈緒子は隅々まで見渡して、そう吐き捨てた。実際、最初から恵まれずに力を持たなかった彼女にとって、その空間は自身の手にした力で手に入れたVIPルームとは違い、憎たらしい事この上ないだろう。

暇を持て余す為に、北岡を付け狙う浅倉に同行した奈緒子だったが、とんだ骨折り損だったかもな、と思い知らされる。鍵がかかっている事に訝しんでいたが、案の定、そこには誰もいなかった。相手がいないのでは話にならない。

少し待つてみる事にした2人だが、いつになっても戻ってくる気配がない。単なるニアミスか、それとも……。

「……あんな奴に限って、それはないか」

奈緒子は肩を竦め、もうしばらく寛ぐ事に決めた。浅倉はイライラが収まらないのか、ふてぶてしい表情のまま、窓の外を睨みつけている。

と、その時。事務所に設置されていた電話機から着信音が鳴り響き、2人の視線が集まった。しばらくして、留守電と思わしきメッセージが聞こえてきた。

連絡してきた相手は、市内の証券会社らしく、明日の会合の開始時間を確認するものだった。待ち合わせ時刻を耳にした奈緒子の口元はつり上がり、そして呟く。

「……このまま逃げられると思ってるのかい。恐れる事を知らないあたしからさ」

「なあ真琴。何で出かけなくちやならないのさ。先方との約束の時間まで、まだかなりあるよ」

市街地を進んで、信号が赤になったところで、北岡が腕時計を指差して、助手席の真琴に問いかけた。それに対し、真琴は清々しい表情で返答する。

「気分転換に、とでも思いました。最近は何々と面倒事ばかり続いてましたから、ここいらで一つ、息抜きでもしようかと」

「息抜きねえ……」

「まあ差し支えなければ、令子さんの代わりに、私がデート相手になればと」

「……ま、偶にはいいか」

北岡はそれ以上詮索しなかった。真琴の言う事にも一理あったし、今の彼女の表情を見て、自分を無理やり外へ連れ出した理由は語ってくれないだろうと思ひ、そつとしておく事に決めた。

信号が青に変わり、再び発進する北岡の自家用車。助手席の窓から、真琴は外の風景を眺める。相変わらずビルが立ち並ぶ、何ら面白みのない街だったが、それでも2人が出会ったきっかけとなる街である事に変わりはない。

だからこそ、真琴は諦めたくなかった。金に困っていた自分をアルバイトとして雇い、食事や生活に至るまで、あらゆる居場所を与えてくれた先生の期待に生きている間だけでも応えたい。吾郎のような人になりたい。

「（先生はもう、戦つてはいけない。これ以上戦えば、勝敗の有無に関わらず、先生の体がもたなくなるでしょうから……）」

今は、北岡と因縁のある男と、そのパートナーを近づけさせてはいけない。真琴は決意を固めた。

だが、そんな計らいがいつまでも続くわけがなく。次の日もまた、真琴はカバンを持ったまま、ネクタイを締めている北岡の元へやって来て口を開いた。

「あの、先生。今日は出かけるのを止めといた方がよろしいのでは……」

これに対し、北岡の口から出た問いかけは、理由云々ではなく、確認に近いものだった。

「浅倉か？ それとも……お前の教育係だったカラミティ・メアリ？」

真琴の表情が僅かに揺れ動く。北岡は更にこう呟く。

「昨日、来てたみたいだしな、ここに。真琴も気づいてたみたいだな」……」

真琴はだんまりとしている。それでも、彼をこのまま行かせるわけにはいかないという意思表示は見受けられた。それを見て、北岡はフツと笑みを浮かべる。

「心配してくれるのは分かるけどさ。俺、今のところはまだ戦いたくないよね」

「……！ でも先生……！」

「体の方なら、まあこまめに気にかけてれば大丈夫だろうよ。それに、真琴と一緒に戦ってくれるなら、それはそれで心強いし。お互いズル

賢いには定評あるから、上手くいけば最後まで生き残れるだろう」

「先生……」

「ま、何とかなるって」

そう言って北岡は真琴の肩を強く叩き、車のある方へ向かっていった。

隣に立って、共に戦う。口で言うのは簡単だが、果たしてこの戦いにどこまで通用するかは、判断しかねる。だが、今はやれるだけの事をするだけだ。

「（それが、ある意味で吾郎さんの弔いになるのなら）」

真琴は息を一つついて、カバンを揺らしながら北岡の後をついていった。

この日はお得意さんである証券会社と、大人のやりとりが行われる為、早めの昼食を済ませた2人は早速先方が待つ会社まで、車を走らせた。広い道に出たところで、北岡は時刻を確認する。1時を少し過ぎた頃だった。

「……あ、ちよつと遅れそうだな。少し急ぐか……!?？」

不意に北岡が言葉を詰まらせて、急ブレーキをかけた。窓の外に目を向けていた真琴も、何事かと言わんばかりに北岡に目を向けたが、本人は前方を向いていた。それにつられて真琴も顔を動かし、すぐに北岡が急停止した原因を悟った。

車の向かう先に、2つの人影があった。

1人は、見覚えのない女性だった。紫色の長袖にロングスカートという、飾り気のない服装に包まれた、くたびれた中年女性だ。そういう意味では真琴も地味な要素はあるが、少なくとも目の前の女性みたいに、おどろおどろしい雰囲気は持っていない。

そしてもう1人は、嫌という程見てきた男性だ。上下蛇柄の服に、殺気立った目つき。この街に住む者なら、そのほとんどが口を揃えて答えるだろう。

浅倉 陸。数多の犯罪を犯し、その街に恐怖を植え付ける要因となった人物が、イライラを解消する為に、因縁深い弁護士に牙を剥く。

「あいつら……!」

「まさかここまでしつこいとは……。どうします？　ここはひとまず背を向けて遠ざかるのもアリかと」

「向こうはそれで納得してくれるわけないよね。……向こうには遅れるって連絡しておくか」

北岡はため息まじりにスマホを取り出し、素早く証券会社宛に、手短かにメールを打って送信する。

全てが整ったところで、北岡はドアを開けて車から降りた。真琴もそれに続き、北岡のそばに寄る。

その間に、浅倉とそのパートナーである奈緒子は2人に急接近していた。北岡は堂々とした態度で2人に毒づいた。

「昨日は家を汚してくれてどーも。おかげで久々に軽い運動が出来たよ」

「おかしくなりそうだったぜ。あの時からずっと、お前と戦えなくてな。だが、もう逃がさねえぞ」

「戦うの一点張りか……。最初から気に入らなかつたんだよね。お前の、そうやって無駄に生きてるところがさ。それに引き換え、何でゴロちゃんがお前らに殺されなきゃならないのさ」

「そんなの知ったこっちゃないね。巻き込まれたのが運の尽きってヤツさ」

そう答えたのは奈緒子だった。鼻で笑う奈緒子を見て、ムツとした表情を見せた真琴は、奈緒子の前に立った。

「あの浅倉と一緒にいるという事は、あなたがカラミティ・メアリという事でよろしいのですね？」

「山元 奈緒子だ。ま、覚えてもらわなくたって良いけどね」

「もう少し美しい美貌の持ち主かと思っただけですが、真実とは真逆でしたね。こう見えて、一応あなたの美肌には一目置いていたわけですので」

「……フフツ。相変わらずムカつくお世辞だが、まあ許してやるよ。何てったって、あたしの教え子だからね」

「流石は私の教育係。器の小さいこと」

奈緒子は狂気に満ちた笑みを浮かべて、真琴を見下ろしていた。一

方で見兼ねた浅倉が、自身のカードデッキを相手に見せつけた。

「さあ、俺と戦えよ北岡……！」

「まったく、こいつを押さえつけるのに、もう監獄は狭いか。なら、俺がお前に相応しい場所に連れ込んでやるよ。監獄がダメなら、地獄にな」

「……ハッ。相変わらず潰しがいいがあるなあ……！」

北岡もまた、カードデッキを手に持ち、決闘の意思表示を示している。真琴と奈緒子の間でも、話の決着がつこうとしていた。

「で、あんたはどうする？ 別にお前と殺り合う理由はないし、何なら使いパシリ程度には可愛がつてやるよ」

「その必要はありませんよ。私も、生き残る為に、自分の為に戦うと決めたものでして」

「ほう。そつちもやる気なら、ここはひとつ、2対2といこうじゃないか」

「了解しました。あ、そちらが名乗ったのであれば、こちらも名乗らなければ失礼かと。安藤 真琴ですよ」

「そうかい。ま、数時間後には忘れてるだろうけど」

「先輩らしいですね」

2人の女性もまた、引き下がる事なくマジカルフォンに手をかける。

一同は車の窓の前に立ち、ライダーに選ばれた者はカードデッキをかざした。Vバックルが腰に取り付けられ、魔法少女に選ばれた者はマジカルフォンを構える。

そして北岡、浅倉、真琴、奈緒子は同時に叫ぶ。

「！！変身！！！！」

ポーズをとってカードデッキをはめ込んだ北岡と浅倉の全身に鏡像が重なり、それぞれ仮面ライダーゾルダ、王蛇となった。真琴と奈緒子も光に包まれ、魔法少女マジカロイド44、カラミティ・メアリに変身。

首を鳴らした王蛇とメアリが先んじてミラーワールドに入り、後の2人もそれに続く。

ゾルダ&マジカロイド44ペアと、王蛇&カラミティ・メアリペア。両者が近くの廃墟で向かい合ったところで、王蛇がベノバイザーにカードをベントインする。

『SWORD VENT』

王蛇の右手にベノサーベルが握られ、その隣にいたメアリも四次元袋から『PPSH』と呼ばれる銃身の長い武器を構える。ゾルダがマグナバイザーに手をかけると、マジカロイドもマジカルフォンをタツプして同じくマグナバイザーを出す。

舞台は整った。後は自然な流れで、戦いは始まる。それがこの場に
いる4人に課された宿命なのだから。

「オオオオオオ！」

王蛇の雄叫びと共に、宿命に導かれし4人の決戦が、幕を開けた。

98. ツーマンセルバトル（後編）

静まり返っているミラーワールド内に、銃声やら雄叫びやらが鳴り響く。大量の瓦礫や放置されたままの機材が散らばっている廃墟では、起こるべくして起きた対決が繰り広げられていた。

「ハアッ！」

マグナバイザーで素早く逃げ回る王蛇を狙い撃っているゾルダは、距離を取られないように追いかけている。引き金を引いている。

「オラオラア！ 逃げ回ってるだけじゃ勝負になんないよ！」

一方でカラミティ・メアリは四次元袋に収納されている銃火器を次々と取り出しながら、マジカロイド44に乱射していた。体格の小ささが幸いしたのか、細かい動作でかわしきっている。時折ロケットブースターを使って高い所へ逃げ回っており、制空権を確保していた。廃墟という閉鎖的空間であるとはいえ、小ジャンプ程度ならブースターで飛んでも問題ない。当然回避ばかりでなく、パートナーと同じ武器であるマグナバイザーを構えて、反撃を仕掛けていた。

「ハハハッ！」

そして王蛇は、機材に隠れながら徐々にゾルダに近づき、不意のタイミングでベノサーベルを振りかざしながら飛びかかってきた。が、ゾルダもその動作を読んでいたらしく、一步引いて間合いを取ってからマグナバイザーで王蛇の腹めがけて銃弾を撃ち込む。

王蛇はとっさの判断でベノサーベルを盾にし、勢いに押されて2階部分に吹き飛ばされるが、どうにかしてバランスを整えて着地する。

現状、王蛇の劣勢だと思われるが、その声色には余裕がある。

「……オオ、良い感じだなあ！」

『ADVENT』

王蛇がベノバイザーにカードをベントインすると、ゾルダの後方で戦っていたマジカロイドとメアリの間を通り抜けるように、王蛇の契約モンスターであるベノスネーカーが急接近。

後方からの敵襲に、どちらを狙うかで判断に迷ったゾルダに向かって、ベノスネーカーが毒液を吐き出す。間一髪の所で回避したゾルダ

だったが、ペースが乱れてしまい、チャンスと見た王蛇がゾルダに近づいて、ある意味で得意な肉弾戦に持ち込んだ。

「先生ー！」

「よそ見してたら、そっちが先にお陀仏するよ！ エビルタイバー！」

ゾルダが襲われている所を目撃し、メアリから視線を外してしまったマジカロイド。メアリは笑いながら黒いエビルタイバーを呼び出し、マジカロイドに向かって体当たりの指示を出した。

ギリギリではあるが、直撃は避けられた。が、乱気流に吞まれたかのようにバランスを崩してしまい、思うように直立ができない。それを見てメアリはマジカルフォンをタップし、メタルホーンを右手に構えた後、魔法を行使して、マジカロイドに突き出す。

所持している武器なら何でもパワーを底上げする魔法を持つメアリの攻撃をまともに受ければ、魔法少女の身であっても致命傷になりかねない。紙一重ではあるが、回避したマジカロイドはそのまま地面を転がった。砂埃が身体中について不快になるマジカロイドだったが、王蛇の連打を受けて倒れ込むゾルダを見て、とっさに叫んだ。

「マグナギガ！」

直後、ゾルダと王蛇の間に割って入る形で、ゾルダの契約モンスターであるマグナギガが、ゾルダを守るように出現した。距離が近い事もあり、王蛇は一旦後方に飛び退がる。

「大丈夫デスか先生？」

「ああ、何とかね。しかし、さすがにあいつら相手は骨が折れるね」

「ここは連携して、あの方々を出し抜いてやりましょウ」

「だな」

『SHOOT VENT』

ゾルダがカードをベントインし、マジカロイドもマジカルフォンをタップして新たな武器を召喚する。2人の両肩に、ギガキャノンが取り付けられ、王蛇とメアリに向かって砲撃を始めた。

マグナギガが盾になっている為、うかつに接近できない上に、威力の高い砲撃が来ると分かった2人は廃墟内を駆け回った。

「王蛇あ……！」

対する2人は高笑いしながら砲撃を避け続けていた。しばらくした所で王蛇が叫んだ。

「お前は俺を最高にイラつかせるなあ……！　もっと戦うなら、そいつはいらない……！」

『STEAL VENT』

王蛇が新たにベントインしたカードによって、ゾルダのギガキャノンが王蛇に奪われた。また王蛇自身も使う気は無いらしく、すぐさま脱ぎ捨てて身軽になった。

「まだ私がいる事をお忘れでなくテ？」

マジカロイドがそう呟くように、彼女が所持しているギガキャノンはまだ生きている。マジカロイドは徹底的に王蛇を狙い撃ちした。

その間、カラミティ・メアリは物陰に隠れて、武器を持ち替えた。瓦礫の間から銃身を覗かせて、撃ち続けているマジカロイドに狙いを定める。それは以前、龍騎とリップルを呼び戻す為に車や一般市民を撃ち抜く際に使用したドラグノフ。

メアリの狙いに気づいたゾルダがいち早くマジカロイドが狙撃されるよりも早く、マグナバイザーでドラグノフではなく、狙撃手本人を狙った。武器を狙っても魔法で強化された以上、容易に破壊はできない。だが狙撃手そのものは強化されていない。

メアリは舌打ちしながら、ドラグノフを放置してトレカフに持ち替える。再び接近してナイフの部分振り下ろすメアリに対し、ゾルダはマグナバイザーで押さえつける。

「カラミティ・メアリ。あんたも随分と厄介な獣に首輪をつけたな。あんなやつさつきとその辺に捨てて、自分の身を心配した方が身の為だって忠告しとくよ！」

「ハッ！　心配される筋合いはないね。あいつはあたしのお気に入りなんだ。あれだけ重宝する力をみすみす手放すなんてどうかしてると思うけどね！」

「……これでも一応、女性として優しく教えてるつもりだったんだけどね！」

とはいえどの道魔法少女や仮面ライダーは、同じ者同士で戦う宿命

でもある。相手が女性だからといって、手加減する時代はもう終わっている。

武器と武器がぶつかり合う、激しい戦いが続いた。やがて自然な流れでペア同士が固まって対峙する構造になった。ミラーワールドでの活動時間にも制限がある為、何時までも均衡状態であるわけにはいかない。

「……そろそろケリをつけるか」

王蛇が腹の底から低い声を出し、1枚のカードを取り出す。

『UNITE VENT』

ゾルダとマジカロイドの後方にベノスネーカー、黒いメタルゲラス、黒いエビルタイバーが集結し、3体が重なると、ジエノサイダーへと姿を変えた。初めて見る王蛇の切り札に、マジカロイドは動揺した。

「！まさかあれほどのものまで隠し持っているとは……。やはり侮れないデスね」

「向こうもその気なら、こっちも決着をつけるか」

『FINAL VENT』

ゾルダはマグナギガを再度呼び出し、その両腕を2人に向ける。

『FINAL VENT』

対する王蛇もカードをベントインし、メアリもショットガンを構える。するとジエノサイダーの腹が胎動し、黒い穴が出現した。そしてその穴から全てを吸い込もうと言わんばかりに風が引き寄せる。それは例えるなら、小型のブラックホール。

2組のペアは、一気に勝負を仕掛けるつもりようだ。

「ハアアアアアアア！」

先に動いたのは王蛇だった。飛び上がり、回転しながら蹴りをマグナギガもろともゾルダに叩き込もうとする。だがこの時ゾルダもマグナバイザーをマグナギガに接着しており、後は引き金を引くだけの体勢になっていた。

なっていた、はずだった。

「グッ……!? アッ……！」

不意にゾルダの視界が歪み、体の中の芯が抜け落ちたかのように、力が足に力が入らなくなった。

「(こ、こんな時に……!)」

ゾルダの身に異変が起きた理由は単純だ。戦闘中に病状が悪化し、エンドオブワールドを撃てるチャンスを手放してしまったのだ。ゾルダがマグナバイザーから手を離してしまった間にも、王蛇のもう一つの必殺技『ドウムズデイ』が迫り来る。

距離が取れていない事。そして何よりパートナーの危機的状态を見たマジカロイドは、考えるよりも早く行動に移っていた。

「先生!」

「!」

足のロケットブースターが素早く火を噴き、王蛇に向かって飛び出した。マジカロイドを狙っていたカラミティ・メアリのショットガンの銃撃は外れ、空を割いた。

ドウムズデイがマグナギガとゾルダに届く前に、マジカロイドの渾身の両足蹴りが、王蛇に直撃して吹き飛ばした。王蛇は地面を転がり、風圧に押されたマグナギガは後方に倒れこもうとする。

「!」

ゾルダもそのタイミングで正気を取り戻し、横に飛んで下敷きになる事は避けられた。

「先生! 大丈夫デスか!?!」

「あ、ああ。悪いな……」

「(あいつ……。何で今のタイミングで撃とうとしなかったんだ……?)」

メアリはゾルダが引き金を引かなかった事に疑問を感じていた。殺れるチャンスはあったはずなのに、そうしなかった。否、そうする事が出来なかったとしたら……?

「(……そうかい。マジカロイドのあの様子からして、あいつが攻撃を止めた理由は、一つしかないよなあ!)」

メアリはニヤリと笑い、王蛇もまた起き上がって歓喜の雄叫びをあげた。

「ハツハツハ！ 戦いはこうでなきやなあ！ さあもつと戦えよ！
お楽しみはこれか」

『FREEZE VENT』

不意に4人の耳に鳴り響いた電子音。

その直後、ジエノサイダーの身動きが止まった。まるで全身が凍り
ついたかのように。

「なっ……」

「こ、コレは……」

「……何だ」

「誰だ……?」

王蛇のみならず、4人全員が一斉に周囲を見渡す。

『FINAL VENT』

続いて聞こえてきた電子音で、4人は更に警戒心を強めた。

「誰だ！ 隠れてないで出てきたらどうだい！」

メアリが挑発するかのように叫ぶ。そしてその時はいきなり訪れた。咆哮と共に、王蛇に飛びかかってきたのは、ホワイトタイガーをモチーフにしたデストワイルダーだった。

「あのモンスター……！ まさか！」

マジカロイドが、王蛇を引きずるデストワイルダーの向かう先に目を向け、急襲を仕掛けた敵の姿を確認した。

「ハアアアアアア……！」

そこにいたのは、デストワイルダーを従える仮面ライダー『タイガ』。両手にはデストクロウが付いており、腰を低くして、かつてその手でルーラを葬った『クリスタルブレイク』の体勢に入った。

「グアツ、アアアアアアアアアアアアアア！」

王蛇は必死に抜け出そうと抵抗するが、彼の馬鹿力をもってしても、容易に抜け出せそうにない。

「んなろお！」

メアリが毒づいて、ショットガンをデストワイルダーめがけて撃った。2発の弾丸が、デストワイルダーに命中した。よろめいたデストワイルダーに、王蛇が渾身の一撃とばかりに蹴りを入れて、デストワイルダーを倒した。勢いが止まらず、王蛇は地面を転がり続け、ようやく停止したところで、王蛇は力尽きたかのようにぐったりとなった。あの程度で死ぬとは思えないが、相当なダメージを受けて気絶したようだ。

めがけては倒れ込むデストワイルダーを見て僅かに目を見開いた。2発の弾丸が見えたという事は、自分以外にデストワイルダーを撃つた人物がいるという事だ。メアリには思い当たる節があるのか、ゾル

ダに目を向けた。ゾルダはマグナバイザーをデストワイルダーに向けたまま、肩で息をしていた。あれだけ王蛇と敵対していたにもかかわらず、結果的に王蛇を助ける事に一躍した事になる。

「……………つ。俺もヤキが回ったかな。あいつを助けるなんてさ。あのバカが移ったのかな……………」

「先生……………」

ゾルダを支えるマジカロイドが必死に呼びかける。メアリは2人から視線を外し、パートナーに襲いかかったライダーを睨みつけた。タイガはクリスタルブレイクが失敗した事を悟り、肩の力を抜いた。

「お前、不意打ちとは随分味な真似をするじゃないか」

「ああ、ゴメンね。そのライダーは、英雄とは程遠いと思ったから」

タイガは倒れている王蛇を見下ろしながら呟いた。

「英雄……………」

「そう。戦うためだけに戦うライダー。自分より弱い奴を痛めつけて楽しむ魔法少女。聞いて呆れるよね。あの時龍騎が言ってた事、今なら僕にも分かるよ。君達はやっぱり、最低最悪のライダーと魔法少女だ。だから僕が倒す事に意味がある。君達のような害悪を倒して、僕は英雄になる」

「英雄ねえ……………。目的は違えど、いつぞやのスィムスィムと同じような事言ってるな」

ゾルダが小声でそう呟く。

「まあ、今日はもうやめとくよ。3人も相手にするのは不利だから。じゃあね。今度こそ僕は英雄になるよ」

タイガは言うだけ言うと、背を向けてその場を立ち去った。メアリも逃がすかと小さく呟いて銃を構えようとしたが、マジカルフォンから警告音が鳴り響いた。時間が来てしまったようだ。

メアリは舌打ちし、王蛇に目を向けた。王蛇が戦えない以上、この状況下で2人を相手にするのは厳しいところもある。無理に決着を急がずとも、まだ時間はある。それに今回はゾルダが抱えているであろう爆弾の正体が見え始めただけでも収穫だ。

メアリは王蛇の肩を担いでから、2人に顔を向けた。

「そういうわけだ。今回はここで退くことにするよ。まあ、お互い命拾いしたって事でおあいこにしようか、ゾルダ」

「……」

そしてメアリと王蛇は先にミラーワールドを後にした。

ゾルダとマジカロイドも少ししてからミラーワールドを出て、路上に停めてあつた車に背中を預けた。

「ふう……。さすがにあいつら相手は疲れるな」

「先生大丈夫なんですか？　もしかして病気が悪化したんじや……」

変身を解いた真琴が、同じように元の姿に戻つた北岡を心配そうに見つめる。対する北岡はフツと笑みを浮かべてこう返した。

「平気だって。いつも通りだよ。ただ、タイミングが悪かつたのは事実かな。……少し休んでから、会社に向かうか」

「……はい」

そう言つて車の中で一息つく2人。北岡は少し仮眠を取るために目を瞑つた。だが真琴は瞑れなかつた。もしこのまま北岡の目が覚めなかつたとしたら……。彼が現在起きているライダーと魔法少女の戦いに決着がつく前にいなくなつてしまつたら……。

そんな不安が真琴の中を駆け巡り、両手でニット帽を深く被り直した。

99. 息抜きと遊園地と大地の頼み

本格的に冬の寒さが見え隠れし始めた、とある休日。N神社の本殿周りに散らばっている落ち葉を竹箒で払う大地の姿があった。その表情は決して優れているとは言えない。朝早くテンションも上がらないという事もあるのだが、それ以上に彼には悩ましい事情がある。「結局、小雪とも会えないまま……か。あいつも俺と同じで多分、答えが出てない……。俺には、自分の命以外に背負うものなんて……」
「あつ、大地君！」

不意に呼ばれたような気がしたので顔を上げると、近所に住む龍騎こと正史が手を振りながら歩み寄ってきた。何故か大きなリュックを背負って登場してきた事に訝しむ大地。

「城戸さん。どうしたんですかその荷物？ まさか家賃が払えなくて追い出されたとか……」

「いや、そうじゃなくて……。まあそつちもそろそろヤバいかもかもしれないんだけど、しばらくはここから離れたところに住む事になるから、その分の荷物を取りに戻ってきてね。仕事も休みだったし」

「……誰かと一緒に住んでるんですか？」

「う、うん。まあ色々あつてね。それで来たついでに寄つたんだ」

なるほど……、と呟いた後、再び箒を持つ手を動かし始める。その顔色を見て、正史は声をかけた。

「大地君」

「……何ですか」

「最近さ……。元気がない、よね。やっぱり、小雪ちゃんの事で……」

小雪の名を聞いたところで、大地は手を止めた。

「……だったら何なんですか」

「大地君が本気で小雪ちゃんの事を心配してるのは分かるよ。でも、何もしないままなんて、やっぱり良くないと思う。だからさ、一回会いに行ってみたらどう？ もし良かったら、俺が協力してあげ」

「余計なお世話なんですよ！ これは俺が自分で解決しなきゃいけない事なのに、そんな簡単に首を突っ込まないでくださいよ！ 俺だっ

て……！ 俺だって、小雪が困っているなら力になりたい。それをどういう風にするのかは、俺が決める事です！ いつまでも他人に頼ってばかりじゃ、俺は結局、前に進めない……！ 大人になんか、なれない……！」

珍しく感情的になって唾を飛ばしまくる大地を見て、息を呑む正史。少ししてから、大地はハツとした表情で、顔を俯かせた。

「……すみません。言い過ぎました」

「い、いや、良いよ。俺も、ちよつと、大地君の気持ちを考えてなかったところがあるからさ……。でも、小雪ちゃんが心配なのは俺も同じだよ。つばめとか、蓮二や華乃ちゃん、颯太君、手塚、それに亜子ちゃんだって、みんな同じ気持ちだよ。だから、一人で抱え込んで立って、きつと、良い答えなんて出ないと思う……。俺は経験したから、よく分かる。トップスピードが、つばめが話しかけてきてくれたから、俺は、彼女を守ろうって、答えを出せたから」

つばめ、という人物は初めて聞くが、トップスピードの事を指しているのは理解できた。

『君は、自分が思っているほど、孤独を走れる勇気はない』

以前、ねむりんが見せた夢の中で、雫に言われた一言が脳裏にチラつく。今ある疑問を解消するには、やはり誰かの力を借りなければならぬのだらうか。

「……」

大地も正史も、口が開かぬまま、一陣の風が2人の頬を撫でた。

しばらくして、空を見上げた正史が、何かを思いついたかのような表情を浮かべて、大地に話しかけた。

「ねえ大地君。この後って予定とかあったりする？」

「……特に、ないですけど」

「じゃあさ、ちよつとお出かけとかしよつか。久しぶりにさ」

じゃあ荷物置いたらまた後で、とだけ言い残して、正史はリュックを揺らしながら大地と別れた。1人になったところで、大地はカードデッキを取り出した。その表情からは何も読み取れないが、やがてため息をついてから、カードデッキを戻して、神社に足を向けた。

「いや〜。こうやって誰かと散歩とかマジで久しぶりだな！ 正史から誘ってくれるとは思わなかったけどさ！」

「ほら、天気も良いから散歩日和って感じだし、偶には気分転換もアリかなって」

「お前の口から気分転換、か。嫌な予感しかしないが」

「ちよ、何だよその言い草！ もう少し楽しそうにしろよな。折角華乃ちゃんとお出かけ出来たんだしさ」

「……チツ」

数時間後、市内の住宅街を歩く9人の姿があつた。先頭を歩いているのは、散歩改め気分転換を発案した正史と、彼と同棲しているつばめ。最後方には蓮二と華乃が嫌々そうについてきている。その間には大地を始め、小雪に颯太、手塚、そして亜子が歩いていた。

つばめは真っ先にOKを出し、颯太と手塚もすんなりと提案を受け入れた。どうせならば賑やかな方が良いと考え、正史の方から亜子も誘う事になった。問題は小雪と蓮二、華乃だった。中宿での一件以来、向こうから縁を切っていた小雪の方は説得を続けるうちに、どう

にかして了承を得たが、他の2人は別物だった。そもそもこの2人は余計な事にお金を使いたくない主義だった為、説得に時間がかかった。結局ある程度のお金は正史や他の面々から補助してもらおうという同意のもとで、向こうから折れてくれた。とはいえ華乃の方はつばめだけでなく、小雪が来ると分かっただけからまんざらでもない様子を見せているようだが……。

「あ、あの……。私なんか聞いて、良いんでしょうか……。？ その……、今まで一緒に行動してたわけじゃ、ないですから、皆さんが楽しんでるのに、邪魔になるような……」

「そんな事ないって。大勢の方が楽しいしき！ だから今日はお金の事なんか気にしないで、子供らしく遊んじやえばいいよ」

「まあそもそも、変身前でみんなが揃って出かけるのもこれが初めてだからな」

「は、はあ……」

複雑な家庭環境に身を置いている亜子は、戸惑いながらも頷く。その一方で、松葉杖をつきながら前へ進む颯太は、つばめのお腹に目をやりながら会話をしていた。

「でも、びっくりしました。トップスピードのお腹に子供がいたなんて……」

「まあ今までなるべく内緒にしてたしな。いい事ばかりじゃなかったし色々あったけどさ、俺は正史と出会えて良かったって思ってる。守ってくれるって約束してくれたしな。だから、絶対に生き残ってるんだ。この子を産んで、幸せにしてやるんだ」

「……（トップスピードが最低でも後半は死にたくないって言ったのは、この事だったのか）」

お腹を優しくさするつばめを横目でチラリと見ながら、大地はそう納得した。一方でここまでほとんど一言も発していないのは大地だけでなく、小雪も同様だった。ハードゴア・アリスの変身者である亜子と初対面した時は、鍵を失くして探していた少女だと気づいて、一言二言話ただけで、その後は会話すらなかった。普段は些細な話題でも会話に入ってくる小雪も、どこか思いつめたような表情のまま、

地面ばかりを見ている。

「小雪、大丈夫か？　なんか元気なさそうだけど」

「えっ？　う、ううん。何でも、ないよ……」

颯太からの呼びかけにそう答えて、再び黙り込む小雪。

「（こんな時にそうちゃんやだいちちゃん、それにみんなと一緒に出かけるのは、楽しくないわけじゃないけど、でも、やっぱりモヤモヤしちゃう……。みんなと違って、私には誰かと戦う勇気なんて……。私、これからどうすれば……。どうやったらこの気持ち晴れるの……？）」

今なお、小雪は戦う事に躊躇しており、一步踏み出す事が出来ずにいた。段々と正しい魔法少女としての在り方が分からなくなっているのだ。小雪が言葉に出せずに悩んでいると、正史の悲鳴が聞こえた。

「おわっ!?？」

「ちよっ!?？　何だよいきなり!?？　危ないって!」

坂を下る途中に、前方で何かを見つけた正史が、慌ててつばめの背中に隠れたようだ。全員が目を向けた先には、柴犬を連れて散歩している飼主が。

「おっ、可愛いワンコだな」

つばめが腰にしがみついてくる正史をどうにかしながら、柴犬に手を振った。他の面々も通行の妨げにならないように左右に分かれた。その際、蓮二は手すりに乗りながら避けていた。

すれ違った後も、正史はブルブル震えながらつばめにしがみついている。

「あ、あの……。もう、過ぎちゃいましたよ」

「何だ正史？　ひよっとして怖いのか？」

「い、いや、その……」

「……そういえば、城戸さんは子供の頃から犬苦手でしたよね」

大地がふと思いついたように、後方を振り返りながら呟いた。

「昔噛まれたからか？」

「……」

手塚の問いに、正史は黙って頷く他なかった。

「へえ意外だな！ 犬が苦手とか、正史も可愛いとこあんじゃん！」

「あ、あんまり言いふらすなよ……。……って蓮二？ どうした？」

正史が、犬が登場してから黙り込んでいる蓮二に声をかけた。

「……。お？ 蓮二もひよつとして苦手だったりする？」

「……。まさか」

「いやいや、お前さつきめっちゃ逃げてたじゃん！ 手すり使って必死にさあ！」

「うるさい。さつさと歩け」

蓮二は話題を逸らそうと言わんばかりに、強引に歩き始める。その動きは普段と違ってぎこちなく感じる。大地と小雪を除く面々は苦笑していた。

と、不意に手塚が正史に尋ねた。

「そういうえば、誘いを受けたのは良いが、具体的にどこへ行くか決めるのか？」

「ああ、それね。これだけの人が集まってワイワイ出来るところって言ったら、やっぱりあそこが一番でしょ」

「……。どこ？」

華乃が若干イラつきながら問いかけると、正史は笑いながら答える。

「遊園地だよ。久しぶりに子供に戻って目一杯遊ぶのもアリだろ！」

バスを乗り継いで辿り着いたのは、隣町に位置する、大型のアミューズメントテーマパークだった。ジェットコースターや観覧車など、メジャーなアトラクションが数多くあり、休日のお出かけスポットとしては、最適なのかもしれない。

一同が最初に向かったのは、ジェットコースター。正史を初め、様々な人の悲鳴や歓声が、四方八方に飛び散っている。

「うう〜！ 何で観てるだけしか出来ないんだよ〜！ 俺だつて久々に現役バリにはつちやけたいのにさ〜！」

「……今の自分の状態を理解してないな、これ」

口元をへの字に曲げてふてくされているつばめの隣で、華乃がため息混じりに呟いた。妊婦ともなれば、乗れるアトラクションにも制限がある。仕方なく、華乃が彼女に付き添う事でどうにか宥める事にした。ちなみに両足を負傷している颯太に関しては、皆で協力して乗り降りを手伝う事で事なきことを得ている。

「……遊園地、か」

華乃はふと、つばめに聞こえない音量でそうボヤク。母親が再婚を繰り返していく思い出ばかりで、遊園地どころか、外に出て遊ぶ事すら、どことなく遠い過去の思い出として懐かしく思えた。大人の面々はきつと今の自分と同じ年頃には、誰かと遊びに出かける事ぐらい当たり前になっていたのかもしれない。それが出来ないことに歯痒さも感じていた。故に、遊びに金を使う事にバカらしさを感じていた華乃だったが、正史に無理やり連れ出されて、こうして誰かと娯楽を楽しむのも、悪い気分にはならない。

「その点は、まあ、あのバカに感謝しておこっか」

口が裂けても言えないような事を、華乃は心の中で呟いた。

その一方で、初めてのジェットコースターを堪能し終えた亜子が降

りようとした際、不意に以前この遊園地に来た時の情景が頭をよぎった。

「あの時は、お父さんも、お母さんも、仲は良かったし、優しかった……」

3人で笑いながら過ごした、思い出に残る日。年月が経つにつれて、その歯車は錆び始め、その事に亜子は手入れをしていない。そしてある日、歯車は壊れた。もっと早く手を出していれば、自分の存在価値は高いものだったのだろうか。誰にも迷惑をかけない存在になれたのだろうか。

「……っ。ダメだ、また私、自分一人で抱え込んで……。城戸さんやOREジャーナルの皆さんにも指摘されたのに」

今は楽しむ為に、殺伐としているライダーと魔法少女同士の戦いも、過去の苦い思い出も、奥底にしまっておこう。亜子はそう決意して、小雪達と共に颯太を降ろす手伝いをした。

その後も絶叫系のアトラクションを堪能し、一度羽根を休める為にと、近くにある池に寄って、通常のボートやアヒルボートに乗って、優雅なひと時を楽しんでいた。その際、正史と蓮二が意地を張り合っていて、どちらが早くこげるかを競争するという一歩乱もあったが、つばめの応援があつたりなど、茶番ではあつたが、結果的には盛り上がった。

流星に急な予定だった為、つばめの手作り料理ではなく、園内のフードコートで食事を済ませた後、一同はゲームセンターに寄った。

「ツシヤアー！」

「85点、ですね」

「やるじゃんー！」

「へへっ。どうだ。俺だってやれば出来るんだよ」

「……フン」

パンチングマシンで腕力を自慢している正史と、鼻を鳴らす蓮二。その次にクレイニングゲームをする事になって、ここで本領を発揮したのは、ここまで目立っていなかったつばめだった。

「……オオ、持ち上がった！」

「んでもって……入ったあ！」

「アツハツハー！ これくらい朝飯前つてもんだ！」

「……ちよつと意外」

つばめは両手を腰に当てる高笑いした。その光景を無表情で見つめる大地だったが、不意に視線を外して、別のクレーンゲームコーナーに目を向けている小雪を発見した。その視線の先には、最近テレビで放送している魔法少女ものらしきキャラクターのキーホルダーが景品としてぶら下がっていた。大地は近寄って声をかけた。

「……あれ、欲しいのか？」

「……！ う、ううん。私は……」

「……そう」

それだけ言うと、大地は小雪のそばを離れた。距離が離れる毎に、2人の胸の奥がチクリと痛んだが、それは本人にしか分からない痛みだった。

続いて一同は再び外に出て、アトラクションを堪能した。向かった先は、メリーゴーランドだった。大地、小雪、正史、手塚、亜子が馬に乗り、蓮二、華乃、つばめ、颯太は馬車の方に腰を下ろした。陽気な音楽と共にゆっくり回転する舞台。正史とつばめは心底楽しそうに会話を弾ませていた。

「メリーゴーランドかあ。まだまだ子供だな、正史も」

「つばめがみんなと一緒に楽しめるものって言ったら、これと観覧車ぐらいしか思いつかないし、これはこれでアリだろ？」

「まあ、嫌いじゃないから良いけどさー」

つばめは笑いながら、膨れた腹に手を当てて、深々と座席に座っている。

そんな中、次に口を開いたのは、蓮二だった。その表情は今までと違い、今いる場所の雰囲気とかけ離れているような、どこか物悲しげな様子だった。

「……あいつは」

「？」

「あいつは、恵里奈は、嫌いだった」

「恵里奈……さん？」

颯太が首を傾げながらそう呟いていると、蓮二は首から提げているネックレスのホルダーを開いて、そこに写っている兄弟姉妹を見つめた。その脳裏に、どうして嫌いなのかと蓮二が恵里奈に尋ねるといふ、当時の記憶が重なる。

『1周してくる間に、お父さんもお母さんもいなくなったらと思うと、凄く怖かった』、それが、あいつの言い分だった。……そして、本当に2人はいなくなつた」

「蓮二……」

「多分、俺達にはお互いしか、いなかった……。どんな事があつても、すぐに相談できる、そんな相手が……」

「な、なあ。さつきからよく分かんないところがあるんだけど、そもそも恵里奈って誰だ？ ひよつとして、蓮二の彼氏か？」

「秋山の、実の妹だ」

つばめの疑問に答えたのは、蓮二ではなく馬に乗りながら後方を振り返つた手塚だった。蓮二は顔を見上げる。何故お前がその事を知っているのか、と言わんばかりに。

対する手塚は申し訳なさげにこう答えた。

「悪かつたな。前に須藤が起こした事件を調べていた時に、行方不明になつている人物を調べている時に、偶然その名を見つけてな。もしかしてと思つて素性を調べてみた。……間違いなく、秋山の妹だった」

「で、でも行方不明って、まさか……」

「それは違う」

真つ先に否定したのは華乃だった。

「あの人は、生きている。今はきつと、事情があるんだと思う。私はそれを夢見ているから」

「蓮二、お前……」

「！ じゃあ、お前の戦う理由って、その妹さんを見つける為に……」

蓮二の戦う理由を知り、空気が重たくなつた。大地も黙り込んでいく。と、そこへ正史の声が聞こえてきた。

「分かった。それが蓮二のやりたい事なら、俺にも手伝わせて。探すんなら、1人よりも多い方が良いだろ？」

「関係ない奴が首を突っ込むな。そんな事をされる道理は」

「あるよ。仲間だから」

「……！」

「お前が拒んでも、俺と一緒に見つけに行く。だから、こんな戦いは早く終わらせなきゃ、いけないんだ。今の話を聞いてそう思ったよ」

蓮二と正史が、顔を見合わせる中、回転が止まり、スタッフの誘導が始まった。

「……勝手にすれば良い」

「……ああ」

蓮二は素っ気なく答え、正史は笑みを浮かべる。その光景を見ながら、大地は考え込んだ。

「城戸さんは、自分の意志で戦う事を決めた。きっとみんなも、自分の為に、自分らしく決めた。……今の俺が、小雪にしてやれる事、自分だけの戦う理由を作る方法は……」

『自分らしいやり方で、相手にぶつかっちゃえば？』

夢の中でねむりんが語った言葉を頭の中で復唱し、一度目を閉じてから再び目を開く。その表情からは、先ほどと違う雰囲気が出ていた。

メリーゴーランドを降りて、腰を伸ばしながら、正史は皆の方を向いた。

「さあてと、んじゃあ次は……って、大地君、小雪ちゃん」

「な、何ですか？」

「いや、その……。小雪ちゃん、今日全然楽しそうに見えないからさ。無理してるのかなって」

「そ、そんな事は……」

後半は声をしばせながら、返答に迷う小雪。

「……辛いのは分かるよ。でもそれは、みんな同じだから。だから今日ぐらいは、その……。小雪ちゃんにも、前みたいに笑っていてほしいんだ」

「私が……ですか」

「うん！ 大地君もそう思うだろう？」

正史が大地にそう尋ねるが、どういうわけか、当の本人は明後日の方向を見ている。

「大地？ どうしたんだよ」

颯太が呼びかけても、返事はない。その一方で、蓮二と手塚、華乃は何かを察したのか、僅かに表情を変える。

「……なあ、小雪」

「う、うん……」

「お前さ。みんなと一緒に生き残りたい、って、死にたくないって、言ってた事、あったよな」

それは以前、初めてハードゴア・アリスと出会い、王蛇から襲撃を受ける前の事。ベルデへの復讐に焦っていた九尾に対して、スノーホワイトが語った、曖昧ながらも誓った決意。

「……もし、今でも、本気でそう思っているなら、俺の我が儘に、応えてほしい」

そう言っただけで大地が取り出したのは、狐の紋章が刻まれたカードデッキ。それを、周囲に気付かれないようにしながら、小雪に見えるようにかざす。

それが何を意味するのか。理解はしていた一同の表情が一斉に変わるのを見ながら、大地は決意を込めて、口を開く。

「……俺と、戦え。小雪」

100. 叫べこの決意 九尾 vs スノーホワイト

時は、小雪がまだ小学生だった頃までに遡る。

『小雪は、このままで大丈夫なんでしょうか』

家庭訪問の最中、小雪のクラスの担任を受け持っていた香川に対して、小雪の両親が口にした言葉は、小雪に対する不安視だった。

『育ての親がこんな事を言うのは良くないとは思いますが、あの子は、小雪は、心が弱すぎます。高学年になって、そろそろ大人の世界の事も知る年頃になるという段階で、先ほど先生が仰ったように他人の喧嘩を目撃するだけで泣いてしまう。人との言い争いを好まない。何れ社会に出れば、自分とはそりが合わない人との付き合いも必要になってきたり、時には衝突しあつたりする時もあります。……このままだと、小雪は手も足も出せずに、社会に取り残されるかもしれないんです。私も妻も、それが心配で……』

小雪の両親は、今現在自室にこもっている娘の今後に不安を抱いているようだ。その悩みをこうして担任にぶつけてみた、という事なのだろう。

これに対し、香川は笑みを浮かべながら、小雪をこう評価する。

『あの子は、弱くなんかありません。優しすぎるんですよ』

だが小雪の両親もすぐには納得がいかなかった。大人の世界では、『優しい』事も『弱い』事も、一緒の目で見られる。弱者と見られても何ら不思議ではない。彼らはそう語った。香川はさらにこう論じた。

『でしたら、優しすぎれば良いじゃないですか』

『優しすぎる……ですか?』

『彼女の優しさは、彼女だけの、唯一無二の武器なのですよ』

『武器……』

『今はまだ小さい欠片です。弱く見られても仕方ありません。臆病、と捉える人もいるでしょう。ですが、いずれ彼女の優しさは、大きなものとなるでしょう。その優しさを、やがて社会が必要とする時が来る。私はそう思っています』

ただし、とここで香川は言葉を区切って、こんな事を語り始める。

『それには、優しさに匹敵する強さが、厳しさが必要になります。他者の痛みを知り、感じ、引き受け、あるいは拒絶して、柔らかく包み込む。そんな優しきです。彼女には、その資質があります』

確信めいた表情で語る香川を見て、小雪の両親は心の中のモヤモヤが消えかかっている事に気づく。

『これから彼女は、いろんな事を経験していくでしょう。世の中は辛い事、苦しい事が多いと思われませんが、その度に彼女は強くなり、優しくなるはずです』

香川は天才的な学者ではあるが、決して未来を予知できるわけではない。にもかかわらず、それから数年も経たないうちに、香川の予言通り、小雪は過酷な環境に身を置く事となった。優しさだけを振りまいてきた彼女にとって、ライダーと魔法少女同士が、命を懸けて戦う現状は、見るに耐えがたいものがあるのだ。

そして今、彼女の明暗を分けるかもしれない事態が起ころうとしていた。

「俺と、戦え。小雪」

カードデツキを見せながら、小雪にそう語るのは、小雪のパートナーに選ばれた大地。

他の面々も、大地のとった行動に驚きを隠せず、正史や亜子、颯太

は大地に詰め寄った。

「だ、大地君!?? 本気、なのか……!」

「大地さんと、小雪さんが……」

「どうして……! どうして小雪と戦う必要があるんだよ! そんな理由なんて……!」

「お前に聞いてない。俺は今、小雪に問いかけてる」

大地は颯太を見向きもせず、ジツと戦うべき相手を睨んでいる。

「俺は本気だ。本気で、お前を倒しに行く。パートナーだからとか、仲間だからとか、そんなこじつけはいらない。俺は俺の為に戦う。そして見つける。俺の、俺だけの戦う理由を」

そう言っただけは、遊園地の奥にある通路に向かって歩き出し、皆も自然と足を運んだ。

人気のない通路はガラス貼りとなっており、大地は迷う事なくガラスに向かってカードデッキをかざす。Vバックルが腰に取り付けられ、右腕を後ろに曲げてから叫ぶ。

「変身!」

Vバックルにカードデッキを差し込み、鏡像が重なって仮面ライダー『九尾』に変身した大地は、一度小雪に目をやり、首をガラスに向けて振ると、ミラーワールドへ突入した。先に行って待ってる、と言わんばかりに。

「小雪……」

「どうすんだよ……」

颯太とつばめが不安そうな顔をしている。小雪自身も、不安げな表情を浮かべている。小雪は一旦、そばで黙って見ている蓮二と華乃に目を向けた。蓮二は無反応だったが、華乃は軽く頷いた。

小雪はガラスに目をやり、「変身」と小さく呟いてから、マジカルフォンをタップしてスノーホワイトに変身。後を追うようにミラーワールドへ入り込んだ。残された一同は、ガラス窓の前に立ち、ミラーワールドの様子を外から見守る事にした。

「小雪さん……。大丈夫でしょうか。大地さんは、強いです。私には、小雪さんが勝てるイメージが、どうしても……」

「優しすぎる……か」

亜子の眩きに、手塚はボソリと小雪に対する印象を口にする。次に口を開いたのは、蓮二だった。

「あいつの優しきは分かっている。だが、今は大地と戦って倒しに行く事が、優しさに繋がるはずだ」

「ああ。『優しさ』を『強さ』に変えるのは、今しかないと思う」

華乃も蓮二と似たような言葉を口にする。

手塚は不意にポケットからマッチを取り出して、火をつけて炎をジツと見つめた。しかし、火が消えてからの彼の表情は、困惑を表していた。

「……見えない」

「えっ?」

「見えないんだ。この戦いの行く末が。ここまでボンヤリしている未来は、初めてだ……」

それはつまり、この戦いがどうなるかを全く予想できない、という事になる。一同は2人が戦う舞台を見つける為に場所を転々とした。彼らに出来る事はただ一つ。2人の戦いの結末を見届ける。ただそれだけに絞られた。

賑やかだった遊園地の園内とは裏腹に、音一つ聞こえてこないミラーワールド。文字が反転している世界の中で、九尾はスノーホワイトの到着を待った。仮面の下にある目つきは鋭い。少ししてから、ようやく目に見える距離の所に、スノーホワイトがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

舞台は、遊園地からほんの少し離れた陸橋。そこで2人は対峙した。魔法少女と仮面ライダーの、それも運命共同体とも言える、パートナー同士の戦いが、始まろうとしている。

九尾は左腕についたフォクスバイザーの口を開き、カードデッキから取り出したカードを口に入れて閉じた。

『SWORD VENT』

上空から2刀のフォクセイバーが地面に突き刺さり、九尾はそのうちの1本を引き抜いたかと思うと、スノーホワイトに向かって投げ渡した。互いにフォクセイバーを1本ずつ手に持って、勝負を挑もうというのだろう。

が、近くに落ちたフォクセイバーを、スノーホワイトはすぐには手に取らなかった。実を言うと、スノーホワイトの中で九尾のしようとしている事は、単なる演出ではないかと、心の片隅で思う所があった。自分を奮い立たせる為に、戦わせるように仕向けているだけで、本心で殺しにかかるとは思えない。そう思っていた。

「……ラァッ！」

瞬時にもう1本のフォクセイバーを引き抜き、スノーホワイトに向かって持ち前の素早さで、スノーホワイトに振り下ろしてくるまでは。すんでのところでスノーホワイトはフォクセイバーを手に持って、九尾のフォクセイバーにぶつけた。軌道はズレて、スノーホワイトの肩を掠め取り、血が流れ出た。スノーホワイトがとっさにフォクセイバーで防御していなければ、体を斜めに斬り裂かれていたはずだ。

「言っただろ。俺は本気だって。気を抜いてたら、死ぬぞ」

「……!?？」

手加減なしの攻撃に、スノーホワイトは自然と気を引き締める。向

こうは最初から殺す気で来ている。本心では殺しに来ないと思っていた自分が甘かった。

「ハアッ！」

続けざまに九尾の猛攻がスノーホワイトに迫り来る。スノーホワイトはただ、フォクセイバーを盾代わりに、受け止め続けた。完全に防戦一方である。

「だいちゃん……。本気、なんだね……。！」

「ああ。俺はお前を倒す。迷ってウダウダするくらいなら、自分に正直になってやる！」

「……私には、無理だよ。九尾みたいに強くもないし、今だって、こうやって受け止めるぐらいしか出来ない。私には、九尾みたいに誰かと戦うなんて、傷つけ合うだけの戦いなんて、耐えられない……。！」

「……そうやって、自分を弱いと決めつけて、また逃げ出すのか！」
「!?？」

九尾の怒号にビクツとなったスノーホワイトに向かって、九尾は容赦なくフォクセイバーを振り回す。切り傷が、至る箇所について、スノーホワイトは悲鳴と共に後ずさる。

「いい加減目を覚ませよ！ お前も俺も、もうすぐ守られる側から、守る側になる！ いつまでもガキのままじゃられない！ 大人になるって事は、自分の強さも弱さも全部知って、それを武器にする事だ！ お前が誰よりも優しいのは、この数ヶ月でよく分かった！ けどな！ お前は優しさを履き違えてる！ だからお前は、何も成長出来ていないんだ！」

さらなる猛追が、スノーホワイトを襲う。肌だけでなく、口の中にも血が溜まっているのが分かる。

「死にたくないんだろ！ 生き残りたいんだろ！ だったら、そうする為に自分で何が足りないのか気づけ！ 俺もこの戦いで、何が足りなかったのかを見つける！ だから……。！」

フォクセイバーがスノーホワイトの太ももを掠め取る。激痛を伴い、膝から崩れ落ちるスノーホワイトに対し、九尾は叫ぶ。

「お前の本当の強さ、俺に見せてみる！」

九尾のスノーホワイトに接近し、持ち手の部分でスノーホワイトの胸に打ち付けて、仰向けに倒させた。スノーホワイトの口から、血が滴り落ちたが、九尾は手を休めない。

九尾は勢いよくフォクセイバーを振り下ろす。スノーホワイトは腕に力を込めると、自身が持っていたフォクセイバーで攻撃を受け止めた。押しきろうと、腕により力を込める九尾。スノーホワイトは苦悶の表情を浮かべながらも、

「……っ、アアアアアアア！」

がむしやらに足をバタつかせ、九尾のみぞおちに命中した事で、九尾は初めて後ずさった。九尾が左腕でみぞおち部分を抑えている間に、スノーホワイトは立ち上がって息を整えた。

沈黙が辺りを支配する中、スノーホワイトは考え事をしていた。

「(死にたくない……みんなで生き残りたい……。確かにあの時、私はそう言った……)」

もちろんそれは今でも嘘ではない。だが、今の自分にはその両方も叶えられる力はない。

強くなりたい。スノーホワイトとて、その気持ちはあった。だが、いくら人助けしても、本当の強さというものには出くわさなかった。分からなかった。分からないが、こうして戦う事で、その強さを見つめる事が出来るのだろうか？

「……ウウ、ヤアアアアアアアアアア！」

スノーホワイトは大声と共に駆け出し、九尾にぶつかっていく。九尾はフォクセイバーで軽く受け流し、横に振るおうとするが、スノーホワイトも絡め取るようにフォクセイバーを振るい、思いつき横に薙ぎはらった。両者のフォクセイバーが手元から離れて、橋の下に落ちた。

「！ ウオオオオオオオ！」

九尾が次に打って出た行動は、拳による戦闘だった。

「フンッ！ ハアッ！」

「……っ!?？」

剣術でさえまともに出来ていなかった少女が、拳による殴り合いに

対応できるはずもなく、スノーホワイトの全身に、打撃による痛みが駆け巡ってくる。息をするのも苦しかった。

加えて隙あらば、蹴りも入れてくる為、スノーホワイトの四方八方から、九尾の猛打撃が飛んできている。

「ハアアアアアアアア！」

「ウアツ!?？」

スノーホワイトの頬に、右ストレートが決まり、意識が飛びかけてよろめいているところに、九尾が下からすくい上げるようにアツパーを決めて、スノーホワイトを後方に吹き飛ばした。スノーホワイトは悲鳴と共に、橋の欄干に背中から打ち付けられて、横に倒れこんだ。両手を地面につけて起き上がろうとするスノーホワイトのこめかみからは、血が滴り落ちている。

そこへ足音を響かせながら、九尾は歩み寄ってくる。その全身から発せられる覇気は、戦っているスノーホワイトにしか分からない、凄まじいものだった。

「……戦え」

ただ一言、そう呟きながらゆっくりとスノーホワイトに近づく九尾。スノーホワイトの息は荒い。

「戦え……！」

よく見れば、九尾の全身も震えていた。やはりパートナーと戦う事に、心の片隅で躊躇いが起きているのかもしれない。だが、もう後にはひけなかった。

「(九尾も、苦しんでる……。私と、同じなんだ。自分に何が必要なのかを、見つけようとしている……)」

スノーホワイトは、僅かに残った意識の中でこれまでの自分を振り返った。

「(私は、あの時観てたアニメに出てくる魔法少女みたいに、世の為人の為に、魔法を使える魔法少女に、憧れていた……。それが難しいって分かった時は、胸が、張り裂けそうだった……。！ 否定された事が、とても悔しかった……。！)」

その時、スノーホワイトの目線の先に、コンクリートの地面の隙間

に咲いていた、一輪の小さな花が見えた。寂しそうにポツンと咲いている、名前もパツとは思いつけられないような、誰にも振り向いてもらえなさそうな、小さな花が、確かにそこに咲いている。

誰の助けもなく、自分の力で花を咲かせたのだろう。

「……でも、私は」

その花を見ていると、ある時の記憶が蘇ってきた。

クラスの皆が校内の花壇に植えた花に、水をやる係になっていた小雪は、他に係に選ばれたクラスメイトがサボる中、ただ1人、毎日空いた時間があれば、1日に何度でも水やりをする習慣が身についていた。晴れの日も雨の日も、ただ1人で水やりを勤しんでいた。

やがて芽が生え、茎がすくすくと伸び始め、蕾が見え始めた頃。相変わらず小雪は1人で、大量の水を花に提供していた。笑みを浮かべながら水をかけていると、担任の香川が様子を伺いに、花壇に訪れた。水やりをしている小雪に気づいた香川は、彼女の隣に立った。

『最近はずっとここにいますけど、水を撒いているようですね』

『うん！ だって毎日お水をあげないと、枯れちゃうから。もうすぐ

お花も咲くし、もし枯れちゃったら、みんな悲しむでしょ？ 私もそんなの嫌だから、お花さんには、いつも元気できてほしいの！』

花という生命を大切にする、小雪らしい優しきだった。

『良い心構えだと、私も思いますよ。……ただ』

『？』

『あまり優しすぎるのも、このお花達にはよろしくないかもしれないよんよ』

『ええ？ だって水をあげなかったら、お花さん、死んじゃうんだよ！』

担任から自分の考えを否定された事で、小雪が涙目になった。それに対し、香川は微笑みながら目線を合わせるように中腰になって、花壇に植えられている面々に顔を向けた。

『小雪君はとても優しい。それは人として、とても大切な事です。でも、この花達は、ずっとあなたの力を借りて生きていかなくてはならないでしょうか？ 自分の力で咲かせる事に、花が生きる意味があると、私は思いますよ』

『自分の、力……？』

『ええ。例えば水がなくても、自らの生命力で、枯れる事なく立ち上がれる。自分の意志でね。この花達もそれに気づいた時は、きつと、立派で綺麗な姿になれますよ』

そう言って香川は小雪の頭を撫でる。深い意味は分からなかったが、小雪は香川の言葉を信じて、水やりの回数を減らす事にした。

その年、立派で綺麗な花を咲かせた花壇は、小雪のクラスのものだったそうだ。

「戦ええ！」

「！ 私は……！」

九尾の、力のこもった拳が、地面に倒れこむスノーホワイトに向かつて振り下ろされ

鈍い音が、ミラーワールドの中に響き渡った。

「……！」

「ツッ！ ハアツ、ハアツ……！」

九尾が放った右拳の一撃は、同じく右手だけで、スノーホワイトが受け止めていた。互いのその手は力が拮抗しているのか、震えている。だがそれ以上に九尾が注目したのは、スノーホワイトの目つきだ。軽く赤みの帯びた髪の毛の奥から覗かせる視線は、鋭く尖っている。怒っている時のものとは違う。言うなれば、この瞬間に闘志を燃やしている者にこそ放てる、そんな眼差しだった。

スノーホワイトはそのまま、カ一杯右腕を振り払い、九尾を後ずらせた。フラついて倒れそうになるスノーホワイトだが、足に力を入れて踏ん張った。そして、九尾に向けて、こう語りだす。

「……自然に、何となく、変わっていくものだって、思ってた。大人になっただけで、心も体も、今よりもっと強くなるって、そう思ってた」
でも。それは間違ってた。スノーホワイトは唇を噛み締めながら、確かにそう呟く。

「私は、今でも無力だよ。私が弱いせいで、失われた命も、あった……。魔法少女だったのは、姿だけで、憧れているだけで、力もなかった……。みんながボロボロになっても戦い続ける姿を見ると、怖くて、逃げたくなって……。でも守ってもらってばかりで……。何でこんなに情けないんだろうって、自分に問いたただけばかりだった……。！」

でも、今は違う。スノーホワイトの拳に自然と力がこもる。

「先生にも言われたように、自分を弱いと思う心が、自分をもっと弱くしてたんだ……！」

「スノーホワイト……」

「九尾……ううん、だいちゃん。私の夢を、教えてあげるよ」

「……何だ」

スノーホワイトは一度深呼吸をした後、九尾を真っ直ぐ見据えて、こう語る。

「私の夢は、『みんなを幸せにする魔法少女になる』。今はまだ、そんな魔法少女にはなれてないと思う。だからって、そこで諦めちゃいけなかったんだ。夢の途中だったなら、今の自分の優しさ、強さ、弱さを受け入れて、夢に向かって……！ 進むんだ、変わるんだ！ だから……、もう逃げない！ 自分の為に辛い事でも立ち向かっていく！ それが、魔法少女なんだ……！」

「……そうか。見つけたんだな。お前の、魔法少女としての信念を」
九尾は肩の力を抜いて、自身の手のひらを見つめた。

「……俺は、力を持っていても何も守れない事に歯痒さを感じてた。同時に、分からなくなってた。何の為に戦うのか。こうして生き残ってる俺がすべき事が、何度考えても、モヤモヤしてばかりだった」
でも、分かったんだ。九尾は一歩前に進む。

「今日までの間に、多くの魔法少女や仮面ライダーが死んだ。きっと誰もが、生き残りたい理由があった。俺達は今、その人達の屍の上に立って、生き残ってる。確かに弱いのは罪なのかもしれない。けど、こうしてお前と戦う事で、弱さの中にも、一つの強さがあるって、気づけたんだ。だから決めたんだ。俺は生き残っている事に負い目を感じない！ 今日まで命を絶った人達の想いも受け止めて、その人達の分まで、精一杯生きていくんだ！ これが、俺の見つけた『夢』だ！」

言い切った後、九尾はカードデッキに右手を置いた。

「口先だけなら、何でも言葉を置き換えれる。そうならない為にも、ここで証明するんだ。自分自身の力で、自分の意志を！」

「私は、強くなる！ 生きる為に、守る為に戦う！ だから見てて、私

の変身を」

「俺もだ。そしてこれが、俺の答えだ」

勢いよく引き抜いたカードを手前に持ってくる九尾。『SURVIVE』と表記されている、右翼と光の絵柄のついたカードを見せるのと、懐から素早くマジカルフォンを取り出したのはほぼ同時だった。

〔挿入歌：Revolution〕

2人の向かい合う中央付近を中心に光り輝き、2人を正面から照らし出した。ミラーワールドの外から一部始終を見ていた正史達も、開いた口が塞がらない。

両者共に鋭い視線を向けている。今、彼らを突き動かしているのは、刺激された欲望だけ。目の前の相手に、自分の決意の固さを見せる為の、戦い。

九尾は龍騎と同様に左腕を突き出し、装着されていたフォクスバイザーが消える代わりに、左手には狐の頭部を模した柄があり、その口から片刃の刀身が出ており、鰐の部分にはトリガーとカードの装填口があった、『フォクスバイザー』が握られた。スノーホワイトの方は、マジカルフォンをタップして胸の中心にホルダーが現れた。

九尾は『SURVIVE』のカードを狐の柄の頭部の部分に向かって差し込む。スノーホワイトはマジカルフォンを閉じて、ホルダーに差し込む。

そして。たった一度与えられた、『命』^{チャンス}を持つ2人の想いの糧が、新たな力となって、その身に宿される。

カードを装填した九尾は、瞬時にフォクスバイザーツバイを横に振るい、スノーホワイトはマジカルフォンをセットした後に、両手の拳を強く構える。

九尾には鏡像が重なり、スノーホワイトには光が包まれる。

やがて、正史達からも見える程に、全容が明らかとなった。

白い毛並みの袴と、前部の開いた袴はこれまでと相違なかったが、背中には荒縄のように太い金色の腰帯がつけられ、仮面の頬に限取りのような赤い模様が描かれている、『九尾サバイブ』の皇后たる姿が見えた。『SURVIVE』の魂魄の力によって、強化された形態である。

一方でスノーホワイトの方は、相当な変化が見られた。金色のラインやピンク色のバンドやハートの飾りに加え、上腕部のアーマーは、右が黒、左が白となっており、他にもショルダーアーマーやブーツ、全体的な服装も白黒となっている。頭の蕾も白黒で開花されており、学生服だった姿が、文字通り魔法少女に相応しい衣装となっている。その全体像を見て真っ先に反応を示したのは、小雪と同じ魔法少女愛好家の颯太だ。その印象は、小雪が最初に憧れを抱いた『キューティー

ヒーラー』を思わせているからだ。『強さ』を象徴するかのような黒と、『優しさ』を象徴するかのような白が強調されている、『スノーホワイトサバイブ』の表情にもう迷いはなかった。

この胸に生まれついた、『生きる』という威力を武器に替えて、彼らは戦いを決意する。

「この先、どんな未来が待ってるかなんて分からない。またいつ弱さが晒け出されるのかも」

「きつと俺達は、これからも迷い続ける。力を手にした以上、戦いが終わる事はない」

己の中で覚悟を決めた、2人の眼差しが交差し、そして口にする。

「それでも俺私は、夢見てる」

そう、彼らはまだ、自分の覚悟を相手に見せているわけではない。この戦いを終わらせるに相応しいのか。それは、これから起こりうる事で分かる。

「生きる為に、守りたいものを守る為に、私は、戦うよ」

「命を散らせたみんなの想いを繋いで生きる為に、俺は、戦う」

それぞれの『武器』をぶつけ合う戦いが、幕を開けようとしていた。

101. 愛ある戦い

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

『ハアアアアアアアアアアアアアアアア！』

男女2人の咆哮が、ガラス窓の方から聞こえてくるのを聞き取れているのは、その声の主と同じ力を持つ者だけ。とある遊園地の片隅にある、普段人が滅多に通らない箇所にて、正史ら7人が、ガラス窓の方を向いたまま、息を呑んでいた。

ガラス窓の向こうにある世界、ミラーワールドで戦っていた九尾とスノーホワイトの姿は、強化形態『SURVIVE』によって変化した。どちらも気迫がこれまで以上に溢れている。

そんな彼らだったが、再び拳や刃を交えた時には、さすがの颯太やつばめ、亜子も困惑した表情でガラス窓に目をやった。

「そんな……い。まだ戦う気なのか!?？」

「もう十分だろ!?？ サバイブにもなれたんだし、あいつらなりに答えは出たんだし……い！」

「小雪さん、大地さん……い。もう、やめて……い！」

亜子は悲痛な面持ちで、腕を震わせている。

ミラーワールドの方では、新たに手に入れた、刀型の召喚機『フォクスバイザーツバイ』を惜しみなく振るってきた九尾サバイブに対し、スノーホワイトサバイブは前転して回避した後、起き上がりながらマジカルフオンを手にし、タップしてから同じく武器としてカードの装填口のないバージョンのフォクスバイザーツバイを握り、斬りかかってくる九尾サバイブを迎え撃った。

しかし、如何に戦闘に特化したスノーホワイトサバイブといえど、経験の場数は九尾サバイブの方が圧倒的に上。九尾サバイブの容赦ない猛攻による斬撃が、スノーホワイトサバイブに襲いかかる。勢いに押されて、手すりに背中をぶつけられても、九尾サバイブはひと吠えして、再び接近する。

回避する対応力が次第に良くなりつつも、九尾サバイブは手を緩めない。フォクスバイザーツバイの斬りだけでなく、蹴りも入れてくる

為、スノーホワイトサバイブへのダメージは蓄積されていく。崖のあ
る所まで追いやられて、スノーホワイトサバイブのピンチが伺えた時
には、颯太は耐え切れずにマジカルフォンを手にして変身しようとす
る。

が、その肩を掴んで止めようとする者がいた。驚く颯太の目線の先
には正史が。

「ま、正史さん！ 何してるんですか！ 早く止めないと……！」
だが当の本人は首を横に振るばかり。

「あの2人は、もう止まらない。止められないと思う。こうして見て
て、そう分かった」

「！ そんな……！」

「大地君も小雪ちゃんも、きつと、最後の瞬間まで、戦いを止めない。
後ろばかりを振り返らずに、前へ進んでいく。例えそれが無駄な行為
だったとしても、自分の命が尽きるまで、自分の為に、戦う。そう決
めたんだよ。俺達みたいに」

「自分の、為に……」

「だろうな。俺も、俺の為に戦うと決めている。華乃もそうだろう？」

「……ああ」

「華乃……。そっか。お前も、そう決めたんだな」

蓮二、華乃、つばめの会話を耳にしながら、颯太は目線を落として、
マジカルフォンに目を向ける。颯太自身、そこまで考えた事はなかつ
た。否、それは亜子も然り。彼らは自然と、大地や小雪に出会えた事
に感謝して、彼らの為に戦うと決心して、ここまで戦ってきた。冷静
に考えてみれば、他人の為に奮起していた事でもある。もちろん他人
の為に頑張れる事は素晴らしい。だが、いつしか彼らは大事な事を忘
れていたのではないだろうか。

それは、自分自身の身を優先する事。本当の意味で守るべき存在。
「(他人を愛するには、先ず自分を愛する事……)」

香川から教えられた言葉を思い出して、パートナーである手塚にも
顔を向ける。彼は言った。運命は、自分の手で変えるもの、と。誰か
に支えてもらう事もそうだが、自分の力で答えにたどり着く事が、本

当の意味での強さを得られる。

「(大地も小雪も、今、それに気づいて……)」

そこまで行き着いた時、颯太はマジカルフォンを持った腕を下ろした。

「今の俺達に出来るのは、彼らの運命を見届ける事だ。この運命は、俺にも見抜けないだろうからな」

手塚はそれだけ言うと、ジッとガラス窓の奥で交戦している2人を見つめた。

「ふっ！ ハアッ！」

「うっ……！」

フォクスバイザーツバイ同士での打ち合いが続き、次第に互いの体力は消耗しつつある。このままでは埒が明かないと思ったのか、九尾サバイブは、フォクスバイザーツバイを左手に持ち替えて、カードデッキからカードを引き抜き、鏢にあるトリガーを引いて、開いた装填口にカードを入れて押し込み、ベントインした。

『BLAZE VENT』

「ハアアアアア……！ ハアッ！」

右手に従来のブレイズボンバーよりも大きな火球が形成され、それ

を振り払うように投げつけると、火球が分裂して、スノーホワイトサバイブの周囲を抉った。サバイブによって強化された『ブレイズ・ウィルオ・ザ・ウイスポ』の爆風は凄まじく、スノーホワイトサバイブは軽い火傷を負った。

だが、ここで手を緩めてはいけない。そう直感したスノーホワイトサバイブは、フォクスバイザーツバイを強く握り、黒煙の中を突っ切って九尾サバイブに斬りかかった。

「！」

不意の攻撃に動揺する九尾サバイブ。スノーホワイトサバイブも、軽くステップを踏みながら、確かに九尾サバイブを追い詰めてきている。

「(この短時間で、ここまで来たか。それだけ、あいつも覚悟を決めて……。なら、こつちも真打ちをくれてやる！　これが、俺の想いが創り上げたものだ！)」

九尾サバイブは距離を取ってから、新たなカードをベントインした。スノーホワイトサバイブの魔法で聞いていた、九尾サバイブの心の声の真意や、何をベントインしたのかは定かではないが、スノーホワイトサバイブはそのまま斬りかかる。

『WALL VENT』

すると、九尾サバイブとスノーホワイトサバイブの間に現れたものが、スノーホワイトサバイブの攻撃への盾となった。それは『壁』だった。

「!?？」

九尾サバイブがやってのけたのは、壁を形成する事だった。だが、九尾サバイブにこのような能力は付与されていない。いや寧ろ、その壁を形成出来る者はスノーホワイトサバイブの記憶の中で一人しかいない。

「ヴェス・ウィンタープリズンの、魔法を……。!?？」

見間違いでなければ、その壁は、今は亡き魔法少女、ウィンタープリズンが得意とした、『何も無い所に壁を作り出せるよ』という魔法によるものだ。仮面ライダーである九尾が使えるはずもない。

『BUBBLE VENT』

と、今度は九尾サバイブの手元に2つの銃口がついた、『バブルショット』が現れて、壁ごとスノーホワイトサバイブめがけて『バブルショット』を放った。壁は難なく破壊され、壁の欠片がスノーホワイトサバイブに向かって降り注ぐ。スノーホワイトサバイブは素早く後退しながら、フォクスバイズーツバイブでなぎ払っていった。九尾サバイブの手にあるのは、4番目に脱落した仮面ライダーシザースが使用していた武器である事を、スノーホワイトサバイブは記憶している。ウインタープリズンといい、シザースといい、何れも今はこの世にいない者達だ。

もう疑う余地はなかった。今現在、九尾サバイブが使っているのは、これまでに脱落していった魔法少女や仮面ライダーが使っていた能力だ。

「……それが、九尾の新しい、力……!」

スノーホワイトサバイブは思い返した。彼が手にしたサバイブの名は『魂魄』。魂魄とは、死者の魂や人の靈魂を意味する。思えば彼は、『これまでに散っていった命を無駄にせず生きていく』と言っていた。

つまり彼は『死者が紡いだ想いを受け継ぐ』事で、『これまでに死んでいった魔法少女や仮面ライダーの能力の一部を使用できる』事が可能となったのだ。現時点で12人程が脱落している事を考えると、その一人ひとりの能力が使える事が伺える。

「……そうだ。これが、俺が手にした答えだ」

君がどんな決断を下そうとも、私達は君の事を見守り続ける。ねむりんが見せてくれた夢の中で、雫に言われた言葉を思い返す九尾サバイブ。腰に巻かれているベルトからも、ハッキリと伝わってきている。生きる理由を抱えていた、12人の魔法少女やライダーの魂が。これから先、また多くの魂をこのカードデッキに刻む事になるだろう。だがその度に、彼は心身共に強くなる。そう予感させるように、九尾サバイブの全身に力が漲ってきた。

スノーホワイトサバイブも、もうその事に臆する必要はない。みんな

なを幸せにする魔法少女になる。その為には、障害となる敵は倒していく。それが自分だけのエゴだったとしても、もう迷わない。内に秘めた大切なものを守る為なら、愛する者を守る為なら、もう刃を手にする事を躊躇わない。

それを伝える為に、彼らは戦う。戦って、その想いを伝える。

「ウオオオオオオ！」

「ヤアアアアアアア！」

再びフォクスバイザーツバイ同士が火花を散らす。九尾サバイブの器用な身のこなしは相変わらず圧巻されるが、スノーホワイトサバイブも必死にこいついてきている。護られるだけだった面影は、もうそこにはない。傷がつけられても、もう引き下がらない。

『TRICK VENT』

「！ なら、こつちも……！」

九尾サバイブがシャドーイリユージョンで8体に分裂するのを見て、スノーホワイトサバイブも同様にマジカルフォンをタップして、同数のスノーホワイトサバイブを召喚させた。コンクリートの橋の上で四方八方に散らばり、激しさを増す戦闘。段々と分身が消滅し、気がつけば、オリジナル同士の戦いだけが残っていた。

『ACCEL VENT』

次に九尾サバイブが仕掛けたのは、自身も得意としていて且つ恩師であるオルタナティブも得意としていた高速移動。九尾サバイブは死角になる場所へ移動して、後方から一気に攻めこもうと、考えていた。

が、瞬時に九尾サバイブはあるミスに気づいた。スノーホワイトの魔法は、心の声を聴くもの。となれば、今の九尾サバイブよ考えなど、全て見通されているのではないかと。気づいた時にはもう遅く、最初から魔法を行使して、次の攻撃を読んでいたスノーホワイトサバイブが、フォクスバイザーツバイで受け止めてから、右足を振り上げて、九尾サバイブを蹴り飛ばした。

「ヤアアアアアアア！」

スノーホワイトサバイブは反撃とばかりにマジカルフォンをタッ

プして、右手に火球を形成した。ブレイズ・ウィルオ・ザ・ウィスプを放つつもりらしい。

「……！」

『CONFINE VENT』

この一撃を回避する為、咄嗟にガイの使っていたカードをベントインして、火球を打ち消した。だが、スノーホワイトサバイブとてその事は予測済み。フォクスバイザーツバイを持ち直して、九尾サバイブに斬りかかった。剣先が僅かに触れて血が流れるが、九尾サバイブは気にせず次のカードをベントインする。

『TRANS VENT』

九尾サバイブは、ユナエルのアバター姿が描かれたカードをベントインし、生き物であるキリンに変異した。その脚力でスノーホワイトサバイブを踏みつけようとするが、ギリギリの所で回避し、スノーホワイトサバイブはフォクスバイザーツバイでその前足に切り傷を入れ込んだ。キリンは後ずさり、九尾サバイブの姿に戻った。フォクスバイザーツバイは手前に落ちて、左腕からは僅かに血が出ていた。が、一方で切り傷を入れる前に、キリンが前足を振り上げた衝撃波で、スノーホワイトサバイブが握っていたフォクスバイザーツバイも手元から離れてしまった。

どちらも武器を手放している。そう理解した2人は足に力を入れて、駆け出した。武器を手を取ったのはほぼ同時。振り下ろしたのもほぼ同時。勝負は再び拮抗と化す。

「ハアッ！ ヤッ！ オオオオオ！」

「ダアッ！ フッ！ ッラアッ！」

静かなミラーワールドの中に、金属がぶつかり合う音が響き渡り、その戦闘の激しさを伺わせた。

「ハアアアアアアア！」

「ウオオオオオオオ！」

スノーホワイトサバイブがバランスを崩してよろめいた所に、九尾サバイブがフォクスバイザーツバイを突き出す。対するスノーホワイトサバイブも体を捻らせて、フォクスバイザーツバイを横に振る

う。

その刃が届きかけたその時、互いのマジカルフォンから音が鳴り響いた。

「！」

刃は、僅か数ミリの所で停止した。

マジカルフォンから鳴ったのは、ミラーワールドでの活動時間に限界がきたという警告だった。

「……さすがに時間をかけすぎたか。まあ、これで、良かったのかも、な」

乱れた呼吸を落ち着かせようと、2人はフォクスバイザーツバイを下ろし、息を整える。すると、気が緩んだのか、スノーホワイトのサブ状態が解けて、前のめりに倒れこむ。ハツとなって九尾サブは彼女を抱き寄せた。

「き、九尾……」

「引き分け、だな」

そう呟くと、九尾もサブ状態が解けた。スノーホワイトは息を荒げながら、コクリと頷く。九尾は黙って彼女を自分の体と密着させた。少しでも、彼女を安心させる為である。それから周りに目をやり、窓ガラスからこちらを覗いている颯太達に目をやって、スノーホワイトに呼びかけた。

「そろそろ出ないとな。歩けるか？俺が支えてやるから」

「……うん」

スノーホワイトは九尾に支えられながら、2人で並んでミラーワールドを後にした。静けさが、再び戻ってきた。

ミラーワールドを出て、現実世界に戻って来るのと同時に変身が解けて、大地と、彼に支えられている小雪の姿が露わとなった。

「大地君、小雪ちゃん！」

「大地、小雪！」

「大丈夫かお前ら!?？」

一同は、つばめはお腹に気をつけながら、2人の元へ駆け寄った。2人の頬や腕には、目立つほどではないが、切り傷がいくつも付いている。2人はそのまま横に寝転がるように倒れこんだ。

「大地、小雪！ 無茶しやがって……！」

「そう言うなよ……。俺だって、ここまで激しくなるなんて思ってたなかったし」

「うん、そうだね……」

本気で心配していた様子が伺える颯太や亜子を見て、当の本人達は苦笑気味に答える。それから、お互いに向き合って口を開いた。

「言葉に出来なくても、戦ってるよ、何となくお前の気持ちが伝わってきたよ。覚悟も、本当になくやりたい事も」

「私も、だいちゃんに後を押ししてもらって、やっと分かれたよ。私がいから魔法少女として何をするべきなのか。逃げてばかりじゃダメなんだって。どんな事があっても立ち向かう事が大切なんだって」
だからね。

小雪は大地の手に優しく触れた。

「だいちゃんと出会えて、本当に、良かったと思ってる」

「……ああ。俺も、優しい小雪に出会えて、良かったって思ってる」

「俺達の事も忘れないですよ？」

振り向くと、正史達が笑みを浮かべながら2人のそばに寄って

た。

「俺達も、2人と出会えて良かったって思ってるさ。だからさ。これからもお互い助け合って、生きていこうよ。きつといい事あるからさ！」

「だな！」

「……はいー！」

「ああ、その信念さえあれば、運命はきつと変えられる。そう思わないか？」

「……フン」

「……まあ」

手塚の問いに、蓮二と華乃は相変わらずの反応だった。その様子に、一同は何となく生きた心地を得た。

それから大地と小雪は起き上がり、9人でこれからどうするかを考えていた時、小雪がこう言った。

「あの……。だいちゃんにお願いが、あるっていうか……」

「あ、あのね。きつきのゲームセンターに戻りたいんだけど」

「ああ。それが？」

「そ、その……。あの時見てた、キーホルダー。私、欲しいな、って思っちゃって……。その……。一緒に、ついて行って、くれないかなあ、って思って……」

小雪は顔を紅くして、恥ずかしそうに頼み込んだ。

「別にいいけど、何で俺？」

「そ、その……。だいちゃんが隣にいと、なんか、安心するみたいで、そんなに緊張しなくても、いいみたいだから……。で、でも無理に付き合ってもらわなくても、いいけどね」

「……分かった。一緒にやるか」

「本当!?？」

「怪我させたお詫びつつうか、まあ、パートナーの頼み事だしな。断るわけにもいかないだろ」

フツと笑みを浮かべる大地を見て、小雪も自然と笑みがこぼれた。

久々に2人揃ったの笑顔が見れた。颯太は率直な感想を心の中で述べた。

ゲームセンターへ戻った一同は、小雪のリクエストでクレーンゲームコーナーへ。2人は先ほどまでとは打って変わって、仲睦まじく動き回りながら、小雪が求めている魔法少女のキーホルダーの場所までのルートを確認していた。正史達が見守る中、クレーンは下された。一段と気合いが入っているお陰か、1発で引っ掛ける事に成功。

その際、偶然隣に置かれていた色違いのキーホルダーも同時に引っ掛かり、結果的に2つのキーホルダーが小雪の手元に渡った。そこで小雪は、求めていたキーホルダーを自分のものにして、もう一つのキーホルダーを大地にプレゼントした。魔法少女モノにはあまり疎い大地だったが、素直に受け取る事にした。

一同が遊園地を後にする頃には、夕日が西の空に煌々と輝いていた。

海岸沿いの道路を、バス停のある所まで歩く9つの影。笑いながらお喋りして歩く者や、黙って夕日で輝く海を見ている者、手をつないで歩く者。それらの色はバラバラでも、心は一つ。

運命のいたずらなのか、命をかけた戦いに身を委ねる事となった一同だが、ハプニングを挟んだものの、彼らの表情には、前を向いて、明日を生き抜くという自信に、眩しいほどに満ち溢れていた。

102：お泊まり会

「フッ！ ヤアッ！」

「……！」

スノーホワイトが左右に振れ動きながら、リップルに接近し、右のハイキックを繰り出す。対するリップルは軽く後退し、手刀で首元を狙うが、動きを読んでいるのか、首を勢いよく下げて、手刀は髪の毛を掠め取った。そして再び拳が飛んでくる。勝負は再び拮抗する事になった。

スノーホワイトが、縦横無尽に駆け回って、戦いに馳せ参じるように体を動かす。こういった光景は遊園地での、パートナーとの一戦以降、頻繁に見られるようになった。空いた時間には、スノーホワイトを初めとした8人に加え、時々会いに来てくれるハードゴア・アリスを含めて9人で訓練が行われるようになった。訓練を提案したのは、先日改めて生きる決意を固めたスノーホワイトだ。『誰かに守られる』だけでなく、『誰かを守る』自分になりたい。その為には、今以上に力を身につけて強くならなければ。スノーホワイトの決意は固かった。否、それは九尾も同じだったか。

この特訓に関して、当初はラ・ピュセルやハードゴア・アリス、そしてリップルはあまり快く思っていなかった。スノーホワイトが前に出て戦う必要はない。彼女には危険な真似はさせたくない。闘うのは私達だけでも充分ではないか、というのが彼女達の本音だ。だが、そんな彼女らに、スノーホワイトはいつになく真剣に語った。『私の為を想って、そう言ってくれるのは有り難い事でもあるけどね。ただ優しいだけの私じゃ、もうダメなんだ。小さい親切だけじゃ何も変わらないし、見るだけじゃ何も変えられない。他人任せじゃ、何も解決しない。……そういうのを今日までたくさん見てきた。だから、変わりたいんだ。今の私に出来るのは、昨日よりも強くなって、自分の正義を貫いていく事だって思えるから』

その言葉を聞いて、3人は返す言葉が詰まり、何も言えなかった。生き残っている魔法少女や仮面ライダーと事を交えて、命を奪わせる

ような事にはさせたくないが、最低限自分の身を守るぐらいには強くなつてもらうのは、決して損な事ではないだろう。そう考えた一同は彼女の意思を尊重し、こうして夜も更けた山の麓の一角で、拳を交えている。

当初は稽古の場を公園にしていたが、段々と組み手は激しさを増して、子供達が楽しむ為の遊具が壊れてはいけない、というスノーホワイトの配慮もあって、場所を移したのだ。微笑ましくも常識的である、と監督役を買って出ているライアはそう評価した。

こうして大人の目線からスノーホワイトを見ると、中々に物覚えの良い子だと判断できる。ただの数日でスポンジが水を吸うかのような感じで戦闘における体の動かし方などを吸収し、覚えている。稀に教えている事以上の動きを見せ、ハンデこそつけてもらつてあるが、相手になつてもらつているラ・ピュセルや龍騎、ナイトを驚かせている。枷が外れた魔法少女の実力は、決して侮れない。

「よし、時間だ。そこまでにしよう」

ライアは近くに設置された柱時計を見て、訓練の終了を告げた。スノーホワイトとリップルはすぐに距離をとって、一息入れてから、軽く一礼した。

「いや、今日も一段と激しかったな！ そう思わねえか、トップスピード？」

「ああ、リップルの腕は分かつてたけど、スノーホワイトも案外やるんだな」

「だが、まだ前に一步踏み出す癖が抜け切れていない。相手に行動を先読みされないように心がけておけ」

「はい」

龍騎やトップスピードとは対称的に、ナイトのやや厳しめの評価に、スノーホワイトは力強く頷く。

その後はトップスピードが持参してきた軽食を口にしながら、今日の訓練の反省点や課題を話し合い、時計の針の両端が頂点を指す頃になつて、一同は解散する事となった。龍騎はトップスピードと共に、共住している家へとラピッドスワローを走らせ、ナイトとライア、

リップルもそれぞれの家へ戻った。

残された九尾、スノーホワイト、ラ・ピュセルは固まって屋根の上を飛び回りながら家路を急いだ。周りを警戒しながら解散場所まで辿り着き、ラ・ピュセルは手を振る。

「じゃあ、また明日……っていうか、もう日付は変わってるから、また後で、かな？」

「まあそうか。んじゃあ……」

「……あ、ちよつと待って」

「？ スノーホワイト……？」

不意にスノーホワイトが2人を、主に九尾の方を向いて声をかけてきた。

「あ、あのね……。明日から、お父さんもお母さんも、用事があって、家に居ないの。まだ、ちよつと1人が寂しいっていうか、その……。だから、ね。無理だったら別に良いんだけど、だいちゃんかそうちゃんの家に、行っても良いかなって……。あ、もちろんだいちゃんの家だったら、神社の仕事も手伝えるから……」

「えっ？」

スノーホワイトからの頼みに、2人はポカーンと口を開ける。スノーホワイトの方は段々と顔が紅くなっている。

しばらくの沈黙の後、九尾は口を開いた。

「まあ、明日なら別に学校終わってからなら大丈夫だ。親には説明しておくから、ご飯も用意できるし。寝床も用意できるから、来なよ」

「い、良いの!?!？」

「なぜ驚く？」

スノーホワイトの反応に戸惑う九尾。何となく理由を察したら、ピュセルは、2人に見えない位置で笑みを浮かべていた。すると、不意に九尾がラ・ピュセルの方を向いてこう言った。

「そうだ。ラ・ピュセル……颯太も来いよ」

「は？」

「どうせ泊まるなら多い方が良いし。それに、最後にお前と2人で寝たのって中学に上がる前だろ？ 久々にどうだ？」

「いや、そうかもしれないけど……」

さすがに気まずく思えたラ・ピュセルは、とつさにこう言い返した。「だ、だったら！ アリス……亜子も誘ったらどうだい？ ほぼ同年代だし、悪くはないだろう？」

「あ、うん。そうだね。だいちゃん、それでも良い？」

「構わないけど？」

「（本当は、だいちゃんと2人きりで話す機会があるだけで良かったんだけど……ね）」

といった感じで、4人でのお泊まり会の開催が決まった。半ばとばっちりな感じでアリスもとい亜子を参加させてしまった事に、ラ・ピュセルは申し訳なさを感じていた。

そして迎えた翌日。大地ら4人は、学校終わりに家に荷物を取りに戻った後に、榊原家が住んでいるN神社へ足を運んだ。その日の朝に両親に事の次第を説明すると、2人はすんなりと宿泊を許可した。そればかりか、大地の両親は夕食の献立を如何に豪勢にしようかと、息子そつちのけで相談しており、時折大地を見ながらニヤつく様子に、当の本人は嫌な予感しか感じられない。知り合いの女子2人を連れてくる、という言い方がまずかったのだろうか。

ともあれ一同は、夕食の時間になるまで、前もって約束した通りに

神社の手伝いをした。足の怪我もある為、座ったままの状態で手を動かしていた颯太。最初は外泊の誘いに戸惑っていたが、勇気を出して同行し、あたふたしながらも懸命にこなしていた亜子。そして魔法少女の時と同様に、困っている人に対して手助けを勤しんできた小雪。3人の協力もあり、仕事はいつも以上にスムーズに進み、3人もまた、普段は滅多に経験できない事をさせてもらい、感謝の気持ちでいっぱいだった。

一生懸命働いて腹を空かせた後の夕食は格別だな、と颯太が述べていたように、普段よりも美味しく感じていた大地。ここまで賑やかな夕食は兄が行方不明になる直前以来だろうか。大地は改めて、3人や、自分達を支えてくれる正史やつばめ、華乃、蓮二、手塚らに感謝した。

夕食を食べながらのトークは大いに盛り上がった。小学生時代のエピソードを中心に、自分達のプロフィールが次々と暴かれていった。颯太に至っては勢い余って、男である自分が小雪と同様に魔法少女に夢中になっている事を露見されてしまい、しばらくの間は茹でタコのように顔を紅くしていた。

その一方で、亜子には小学生時代のエピソードが、これといって思い当たる節がなかった。あったとすれば、それは父親である重蔵が母親を殺し、叔父叔母の家に引き取られた事ぐらいか。さすがに大地の家族がいる前では話す気分にはなれなかった。大地の部屋で4人だけが集まった所で、打ち明ける事にした。亜子が一身に背負ったであろう哀しき境遇に、他の3人は驚いたり悲しんだり、表情を変えていた。

「……そっか。そうだったんだね。あの時から亜子ちゃんは、変わったんだ」

「……はい。あの時は、本当に、ありがとうございました。いつかは、ちゃんとお礼を言いたいって、思っていました。だから、お二人みたいな魔法少女になりたい。生きて隣に立ちたい。それが、私の目標でした」

「目標……」

「小雪さんに嫌われた時は、正直なところ、これからどうすれば良いのか迷ってました。……でも、正史さんやOREジャーナルの皆さんと会えて、私の中で、ちよつとずつではあるんですが、変わっていったような気がして……。こんな私でも、生きていて良いんだって、思えた事が凄く嬉しくて……」

段々と涙目になりながら、本音を吐露する亜子。そんな彼女の目元に向かつて、指でなぞるように涙を拭いたのは、颯太だった。

「話してくれて、ありがとう。君も、随分辛い思いをしてたと思うけど、もう大丈夫だ。悲しい事ばかり抱え込むのはもうお終い。これからはもつと楽しい事を見つけていこうよ」

「颯太、さん」

「僕なんかじゃ君の支えになるかは分からないけど、ここには大地や小雪、正史さん達もいる。みんなで、支え合おうんだ」

「……はい！」

亜子は、涙を拭きながら、微笑んだ。闇のように黒い過去を持つ彼女の表情に、光は確かに灯っているようだ。

その後は就寝時間となり、寢床の關係上、女子2人はベッドの上に、男子2人は床に敷いた布団で寝る事となった。因みに、事前にこの日の魔法少女並びに仮面ライダーの活動は休みになっていたので、4人は徐々に肩の力を抜く時間が取れた。

間も無く日付が変わろうとする頃、ようやくまどろみ始めてきた大地は、背中越しにモゾモゾと動くような気配を察して、横になりながら、そちらに体を向けた。窓の外に見える月明かりをバックにしながら、小雪がちよこんと座っている姿があった。

「……何だ？」

「うん、ちよつと、ね……」

2人はなるべく他の2人を起こさないようにと、小声で会話を始めた。

「隣、行っても、良い……?」

「……」

大地は断るのも面倒になったのか、無言で颯太を起こさないよう

に、体を動かしてスペースを空けてくれた。小雪は礼を言いながら、布団の中に潜り込み、顔を向かい合わせた。小雪が布団に入って早々、彼女は口を開いた。

「……ありがとね。今日、私の我が儘に付き合ってくれて」

「別に良いけどさ。……ってか、何で俺の家に泊まろうとしたんだ？」

いや、別にダメだったって言うてるわけじゃないけどさ。その……、何で、俺なんかと」

不意に言葉を詰まらせた大地。原因は、小雪が大地の寝間着の裾を掴んで体を密着させたからだ。そして、少し震えるような声で話しかける。

「……ごめんね。でも、急に、怖くなって……」

「怖い？」

「……私ね。こないだ、怖い夢を見たんだ。……そうちゃんやみんなが死んでる中で、私だけが立ってて、そしたら、だいちゃんが、私を……」

「……」

小雪の言っているそれは、クラムベリーに重傷を負わされ、華乃の家で療養している最中に夢を見た時の光景である。

「あんな事、きつと起こらないって思ってる。けど、時々、心配になるんだ。だいちゃんが、いつの間にか遠いところに行っちゃったら、私はこれからどうすれば良いのかなって……。きつと、私にとってだいちゃんはもう特別な存在だって思ってる。だから、いなくなる時が来たらって思うと、とても、怖くて……」

「……俺は」

すると、それまで黙って聞いていた大地の手が、小雪の背中に届き、自然と引き寄せる形で2人の体が密着した。突然の事で動揺して、顔を紅くする小雪に対し、大地も少し恥ずかしげな様子を見せながら、彼女を安心させるように呟いた。

「俺は、どこにもいかない。仮にどこかに行ったとしても、どれだけ離れてても、俺はお前の事を忘れない。お前だって、俺を忘れなければ良い。だから、もうそんな事は考えるな。俺はお前のパートナーだ。」

絶対に、お前は俺が守る」

「だい、ちゃん……」

ゆっくりと顔を上げて、大地の顔を見つめる小雪。大地の表情に、一切の揺らぎはない。それが小雪を安心させた。そして裾を摘む力を強くして、穏やかな声色で呟く。

「親以外で、誰かと同じ布団で寝るなんて初めてだけど……。だいちゃんがいてくれると、凄く、落ち着く。大きくて、あつたかい……。俺も初めてだけど、なんかまあ、悪い気はしないな。うん」

そう言つて頭をポンポンと叩く大地。小雪は顔を赤らめており心臓の鼓動が自分でも信じられないくらいに早い。そして彼女は思い切つてある言葉を口にしようとする。

「あ、あのねだいちゃん、私……」

ふと目線を上げると、大地は寝息を立てていた。よほど仕事の疲れが溜まっていたのだろう。もう限界だったようだ。小雪は苦笑しつつ、最後に耳元でこう呟く。

「私も、だいちゃんを守るくらいに強くなる。だから、生き残ろうね。約束だよ」

不意に寝返りをうった衝撃で目を覚ましてしまったのは、大地の隣で寝ていた颯太だった。ふと隣にいる親友に目を向けると、寝息を立てている彼の向こう側に、幼馴染みの姿があった。

「おお、仲良しだな」

普段見慣れない、2人の大胆な行動に若干戸惑いつつも、一旦窓の外に目をやろうとする。そこで颯太は、亜子が上半身だけを起こして、外の光景を眺めているのに気づいた。月が間も無く地平線の底に沈もうとしている、ようやくうつすらと明かりが見え始めた頃のことだった。時計を見れば、普段彼が起床している時間よりも早い。

もう一眠りしようかと思った颯太だが、亜子の様子になり、小声で彼女の名を呼んだ。

「……あ、颯太、さん。おはよう、ございます。……起こしちゃいましたか?」

「い、いや別に。……早いね。やっぱり寝床が変わると早起きする感じ?」

「い、いえ。普段からこの時間には……」
「そっか」

颯太も上半身を起こして、その後、ベッドに手をつけながら、起き上がろうとする。亜子は慌てて音を立てないように颯太の腕を掴んだ。まだ完治しているわけではないので、フラついている颯太を支えようとしているのだ。

「あ、ありがとう」

「平気です」

そして2人は、窓の外を見つめながら、暇を持て余す為に、寝ている2人の迷惑にならない程度で話し始めた。

「空、綺麗、ですね」

「ああ。言われてみれば、こんな時間の景色は初めて見るかも」

「生きているから、見えるんですよね」

「? 亜子?」

ふと横に目を向けた颯太が、亜子の不安げな表情を目撃した。その視線に気づいた亜子は慌てて平気を装った。

「あ、ごめんなさい。別に変な事は言っていないつもりですけど……」
「いや、大丈夫。亜子にとって、生きる事の意味って、結構深いと思うしや」

それから、亜子はこう言った。

「あの時……。スイムスイムに襲われてた私を、あなたは助けてくれた。本当に、ありがとうございます」

「大した事はないよ。あれくらいいしないと、魔法少女失格だ。君の方こそ、あの時無事で良かった」

「あ、はい。颯太さんのおかげです。……思えばあの時から、私の中で、生きる事の意味を知れたのかもしれない。あの時は、まさか自分が死ぬだなんて、夢にも思わなくて……」

亜子の言うように、変身している状態なら無敵だが、普段は別だ。だからこそ、『死』の恐怖がこびりつく。

「私、勘違いしてたのかもしれない。生きる事にどれだけの価値があるのかを」

「生きる意味、か。僕も、前にクラムベリーに殺されかけた時、九尾の助けが無かったら、きっとこうして夜空を見上げる事なんて無かっただろうな」

窓の外から、バイクの音が聞こえてくる。新聞配達に勤しんでいるのだろう。

やがて、颯太はこう呟く。

「僕達は、案外似ているのかもしれないね。大地と小雪、2人に支えてもらっている点で」

「お二人に……。そう、かもしれないですね」

亜子は自然と納得する。2人がいてくれたからこそ、魔法少女が好きになり、親友になれて、そして殺されかけた所を助けてくれた。2人がいてくれたからこそ、あの日死のうとしていた自分を悔い改め、魔法少女になって戦いに身を投じる道を選んだ。颯太と亜子にとって、大地と小雪は切っても切り離せない存在だ。

やがて颯太はこう呟いた。

「……僕は、これからも守っていききたい。今みたいに争いが起きる前

の時みたいに、あの2人が当たり前のように過ごす日常を、この力で守っていきたい。もちろん守るのは2人だけじゃないよ。守りたいものを、悪い事をしようとする奴らから守りたい。亜子も、その中に入ってる」

「颯太さん……」

「必ず、守ってみせる。それが、僕の理想の魔法少女だから」

「……優しいんですね。颯太さんは」

「そうかな……？　あまり自覚はないけど」

「……私も、守りたい。この魔法も、その為のもの、です。最後まで、2人を守りたい」

誰かを守るのは難しいかもしれない。でも、人として生きる上で、大切なものを守る為に、自分の理由として戦うのは、決して間違っていない。2人の決意は固かった。

「……さてと。それじゃあ、もう少し寝たいから僕は」

「……あ」

颯太が床に戻ろうとした時、亜子に袖を掴まれた。その瞳には、何かを懇願しているようにも感じられる。

「？　どうしたの？」

「……もう少し、いてもらっても、いい、ですか？　颯太さんが、近くにいてくれるだけで、……落ち着きます」

「ええっと……」

困惑しつつも、一度布団に入っている大地と小雪に目をやり、その後「分かった」と小さく呟いてから、颯太はベッドの上に寝そべった。亜子も静かに、横になって背中越しに颯太に寄り添った。

「温かい……です」

「う、うん」

颯太は若干顔を赤くしつつも、背中に伝わる熱い感触が、颯太の眠気を覚ました。それでもなお、紳士として抵抗する事なく、亜子のそばに居続けた。颯太も亜子も、自分でも理解できないほどの胸の鼓動が、身体中を駆け巡る。まるで、新たな青春の1ページを刻むのを予感させるかのように……。

なお、朝日が差し込む頃になって、大地と小雪、颯太と亜子がそれぞれ寄り添うように寝ていたと知った一同の顔はとても滑稽だったと、大地の両親は後に語る。

103. 最恐 VS 最凶

王蛇・メアリペアとの死闘から2日が経とうとしていた頃。

「ッ！ ゴフオ、ゴホツ……！」

「！ 先生……！」

北岡法律事務所にて、食事中の北岡が不意に口元を手で抑えて咳き込む姿を見て、真琴は手に持っていた掃除機を放り捨てて、彼に駆け寄る。それに対して北岡は空いた左手で待ったをかける。

「大丈夫だつて。ちよつと口に入れすぎちやつて噎せただけ。それより、中々に腕があがってきたじゃん」

「は、はあ……」

「これくらいの腕なら、将来この道もやってけるかもよ」

「……」

作り笑いを浮かべている北岡はそう言つて真琴を追い返すが、彼の右手は震えている。だが、真琴もかける言葉が思いつかず、黙つて再び掃除機に手をかけようとした、まさにその時。

玄関のドアの向こうから、大きな音が響いてきた。その音の発信源は扉からようだ。つまり、何者かがドアを強引に叩いているという事だ。

インターホンを鳴らさないで、直接ドアを叩きに来る訪問者に警戒を強めながら、真琴はロックを外して、ドアを開ける。

「よう」

「！」

刹那、真琴は用心していたとはいえ、扉を素直に開けてしまった事を後悔する。訪問者は、浅倉 陸。北岡に強い恨みを抱く、要注人物。慌てて扉を閉めようとしたが、時すでに遅し。浅倉は強引に扉を押しつけて事務所に土足で入り込んでいた。

真琴がとっさにポケットにしまつてあるマジカルフォンに手を伸ばそうとしたその時、北岡の声が真琴の耳に入った。

「いいよ真琴。そのまま通して」

「！」

狙われている張本人が、入室の許可を出してしまい、真琴は困惑してしまった。その僅かな隙を突いて、浅倉は真琴に目もくれずにズカと北岡に接近する。一方で北岡は最初からこの事態を予測していたかのように、余裕綽々と言わんばかりに真琴が作った海鮮パスタを口にしていた。

「きつと来ると思ってたよ。お前は随分と、俺を恨んでるわけだし」
そう言つて、エビに向かつてフォークを刺そうとする。

「お前は後回しだ。先ずは、タイガつて奴を潰す」

それを聞いて真琴だけでなく、さすがの北岡も浅倉の口から出た予想外の言葉に思わず手を止める。

「はっ?」

「何だつて?」

面食らっている2人に対し、浅倉は声を震わせながら、タイガに敵意を向ける訳を語った。

「あんなにイライラさせる奴は久しぶりだア……! お前らにあんな獲物をやる訳にはいかねえ……!」

「そういうこつた。あいつがあたしらを恐れなくてんなら、その身に分かせてやりたいってわけさ。分かったら、さっさと教えた方が身のためだと思うけど?」

「! あなたは……」

浅倉に続いて玄関から入ってきたのは彼のパートナー、山元 奈緒子。彼女も浅倉同様、タイガに次の狙いを定めたようだ。

「なるほど……、よほどこないだの一件で頭に血がのぼっていらつしやるようで……」

真琴は以前、戦いに乱入して不意打ちで王蛇を殺そうとしたタイガの姿を思い出し、お気の毒に、と心の中で呟く。今この場でそれを口にしたら、下手を打つて浅倉のイライラの矛先がこちらに向けられるかもしれない。そんな面倒事に巻き込まれたくはないし、今の北岡の様子を見るに、無理に戦わせるのは得策ではない。

真琴の考えは北岡も同様だったらしく、あつさりとは判明している分だけの情報を提供した。

「多分、西門前町だろ。あそこら辺で牛耳ってたって聞いてるし、今もそうじゃないか？」

「門前町……。そういや、以前ルーラとかいう奴がチームを作るとか何とか言って、拠点を構えてたな。どうせあたしらを数の差で圧倒して跪かせようとしたんだろうが、どうせ烏合の衆だ」

「……そうか。なら……！」

「お、おい」

情報を手にした浅倉は、北岡の手からパスタが盛られている皿をフォークごと取り上げ、力づくであらゆる食材に突き刺して、口に頬張っていった。一方で北岡が懸念したのは、せつかくの真琴の手料理を横取りされたからではない。食材の一つである、ムール貝を殻ごと食べようとしている事だ。が、そんな事もお構いなしに浅倉はバリバリと音を鳴らしながら、ムール貝を殻ごと咀嚼している。

「あの……。せめて、殻はお取りになった方がよろしいかと」

「言ったところで無駄さ。こいつはそういう奴なんだよ」

真琴のツツコミもスルーし、野獣の如くがつつく姿に、北岡と真琴は畏怖を覚え、奈緒子は肩をすくめながらおかしそうに笑った。

腹ごしらえを終えて、2人が事務所を後にしたのはそれからすぐだった。腹一杯美味しい料理にありつけたからか、帰り際の浅倉の表情はどことなく満足げだった。もともと、勝手に食べかけの料理を敵に食べられてしまった側からしたら、迷惑この上ないが……。

「……やれやれ。とんだ来客でしたね」

「……ま、昼メシはこの辺でいいか。真琴、後で片付けておいて」

真琴に皿の片付けを指示してからコーヒーを淹れようとする北岡。そんな彼が不意に窓の外を見上げながら、不敵な笑みを浮かべる。

「しかし、あいつらもこういう時ぐらいは役に立つかもしれないな。小物共を奴らに倒してもらって、俺達は楽して生き残る。……うん、やっぱ戦いはなるべく少数精鋭でやりたいしな」

「……それで、私達の元へ訪れた、と?」

「そうさ。分かったらさっさと連れてきな。言う通りにしてやれば、今回は見逃してやるよ」

場所は変わって、門前町の一角にひっそりと佇む王結寺。かつてのリーダーだったルーラが拠点とし、今現在はスィムスィムを中心にあビス、たまが居座っている、彼女らのアジトと化している廃寺に、乱雑に入り込んだきたのは、言わずと知れた王蛇、カラミティ・メアリペア。

連絡も無しにやってきた2人からの要求は、チームメイト『だった』タイガに会わせろ、というものだった。そんな要求に対して、アビスの答えは一つしかない。

「生憎、今となっては私達も知らないのだよ。奴はお前達も知ってるし、尖りすぎている。それもあって、奴は英雄を目指すだのほざいて、すでにこの地を後にしている。奴の行方など、もう私達には興味のない事だ」

「……ほお、つまり一番親しかったあんたらでも、奴の居場所は分からないという事か?」

「……うん」

「アア?」

スィムスィムが深く頷いたその時、話を聞いていた王蛇が、殺氣立った舌打ちを響かせ、先ほどまで腰掛けていた木製の手すりを蹴り

つけた。脆くなっていた手すりはあつさりと音を立てて砕けた。

「いい加減こつちは戦えなくてイライラしてんだよ……！　俺は、戦いたいんだよ……！　戦いだけが、俺の中でイラつく『何か』を忘れさせてくれる……！」

一般人がこの光景を目にすれば、たちまち震え上がるような凄み。だが、そんな王蛇のプレッシャーも、ある意味で常人を超えている2人には通用しない。

「こくなったら、お前らでも構わん……！　俺と戦ええ！」

「……チツ。勝手にやってきて勝手に戦いを挑まれるとは。獣の域を超えてるな、貴様のパートナーは」

「そういう奴なのさ。だからこそ、あたしのお気に入りなんだよ！」

そう叫ぶが早いか、メアリは懐からマグナムを取り出し、唐突に引き金を引いた。2人は横に飛び退いて、スイムスイムは薙刀であるルーラを取り出し、

『SWORD VENT』

アビスは2刀のアビスセイバーを持って、メアリに斬りかかった。スイムスイムは王蛇に向かってルーラを振り下ろすが、王蛇はしなやかな動きでかわしていく。

『SWORD VENT』

「ラアッ！」

ベノサーベルを片手に、反撃とばかりにスイムスイムへ斬りかかる王蛇。スイムスイムもルーラで押し流しているが、王蛇の勢いの方が勝っている。

「フンッ！」

王蛇はスイムスイムの背後を取り、その背中に向かってベノサーベルを突き出す。が、スイムスイムの背中から血が流れる事はなかった。そればかりか、ベノサーベルはスイムスイムを貫通している。

「……アア？　何だ、お前……！」

それがスイムスイムの魔法だとも知らず、王蛇は思考する事さえなく、ただいたずらにベノサーベルを振り回した。スイムスイムは一瞬の隙についてルーラを振り上げて、ベノサーベルを吹き飛ばした。紙

一重で追撃をかわした王蛇は、すぐさま別のカードを取り出し、ベントインした。

『STRIKE VENT』

『STRENGTH VENT』

メタルホーンを装着し、さらにパートナーカードで強化して、再びスイムスイムめがけて飛び出す。結果は変わらない。掠め取っても、血は流れない。スイムスイムは無表情のまま、メタルホーンに向かって突きを入れた。モロに命中したメタルホーンは砕けて、刃先が王蛇の右腕にくいこんだ。王蛇は咆哮と共にルーラを引き剥がし、別のカードとベノバイザーを構える。

『STEAL VENT』

その瞬間、スイムスイムの手元からルーラが離されて、王蛇の手元に渡ろうとする。これを見たスイムスイムの表情は一変。

「アビスマッシャー……！」

パートナーの契約モンスターを呼び寄せて、背後から王蛇を羽交い締めにした。背後からの急襲を受けて、王蛇はルーラを手にする事はなかった。

「ルーラに、触れていいのは、私だけ……！」

そして地面に落ちたルーラを掴んだスイムスイムは、そのまま王蛇に向かって斬りつける。王蛇は後退し、右の太ももを掠めた。右腕や右太ももから血が滴り落ちるが、王蛇は気にする事なく、直接スイムスイムに向かっていった。

そして、アビスとカラミティ・メアリの方も、銃撃と剣舞の激しさが一段と増していた。次々と銃を取り替えて戦うメアリに対し、アビスは必要最低限な動きでアビスセイバーを駆使して銃弾を弾いている。

「ッ！ イラつかせる奴だな……！」

メアリは舌打ち混じりに四次元ポケットから手榴弾を取り出し、栓を抜いてアビスに投げつける。こんな狭い空間内で爆発させては、投げた本人まで巻き込まれるはずだが、最早お構いなしといったところか。

『STRIKE VENT』

とつさに召喚したアビスクローから放たれた『アビススマッシュ』が、手榴弾を呑み込み、そのまま襖を突き破り、庭へと放り出される。直後に耳をつんざくような爆音が響き渡り、地面を抉った。距離が近い事もあり、王結寺内の地面が僅かに揺れた。

「チツ……い！　なら、こいつで……」

メアリはマジカルフォンをタップして、メタルホーンを装着する。そしてアビスに向かって突撃しようとした瞬間、背後からのタツクルでメアリは押し倒された。ハツとなつて顔を見上げると、涙目のたまの姿が。

「お前……い！」

「ガイの武器で、誰かを傷つけるなんて、そんなの、ダメ……い！」

恐怖で口調が震え上がっているが、かつてのパートナーの武器を悪用される事に、陰でひっそりと様子を伺っていたたまに、我慢の限界がきたようだ。たまはメアリの手からメタルホーンを力一杯引き離し、手に付いた犬の手から鋭く尖った爪を伸ばす。そして油断していたメアリに向かって突き立てようとした瞬間、たまの思考が止まった。

今のままなら、メアリに傷を負わせる事が出来る。そして、その傷穴に対して、魔法を行使する。たまの魔法は、『いろんなものに素早く穴を開けられるよ』である。ほんの少しでも穴を掘れば、魔法によって瞬時に直径1メートルほどの穴を開けられる。地面はもちろん、コンクリートであろうと、鉄であろうと。

……人体であろうと。

「ツ！」

刹那、たまは躊躇ってしまった。あのガイを殺した凶悪な相手が、無防備な状態で転がっている。これはチャンスだ。魔法少女の中でも最も過激な者が脱落すれば、自分達が生き残れる可能性は少しも上がる。たまが爪で傷をつければ最後、メアリは全身が弾け飛び、死ぬ。ガイの仇を討った事になる。

なのに、たまには出来なかった。否、そうするだけの勇気が、覚悟

が足りなかったというべきか。

「ッラア！」

「ひゃっ……!?？」

わずか数秒停止した、たまを睨みつけながら、メアリは体を捻り、馬乗りになっていたたまを引き離す。

「メタルゲラス！」

メアリはそう叫び、黒いメタルゲラスを呼び出すと、黒いメタルゲラスはたまに向かって突進した。うずくまっていたたまは、真正面から攻撃を受けて、壁に叩きつけられる。

「このクソガキが……！ あたしに逆らうとどうなるか、教えてやる……！」

目を血走らせながら、屈辱を味あわせられた、ぐったりしている元凶に向かってマグナムの銃口を照準に合わせる。すると、咆哮と共に、月明かりに照らされて銀色に輝く巨体が、メアリに向かって突進してきた。不意の一撃をもらったメアリは吹き飛ばされ、襲撃者を睨みつける。

たまの前に立ちはだかるように現れたのは、現在はたまが使役している本物のメタルゲラスだった。パートナーの危機に際して現れた、といったところか。

メアリは威力のある別の銃火器を取り出そうと、四次元ポケットに手を伸ばすが、魔法少女になって向上した聴力で、近辺のいたるところからサイレンや人の声がこの地に向かって集まり始めている事に気付いた。先ほどの手榴弾の爆発で、周りの住民が騒ぎに気付いてしまったのかもしれない。メアリとしては、このまま戦闘を続行して、住民に被害が及ぼうが関係ないのだが、下手に騒ぎが大きくなって、今後の資金稼ぎの仕事に影響が出ては本末転倒だ。そこでメアリは仕方なしにと、撤退を選んだ。

「……興が冷めたな。このケリはまた別の機会でつけるよ。そら、行くぞ」

「……フンッ。どいつもこいつも、俺をイラつかせる奴らばかりだ」

王蛇はそう吐き捨てて、メアリと共に、人目につかないようにその

場を後にした。残されたアビスとスイムスイムは、外壁の向こうに目をやり、人が近づいてくるのを確認した。

「……………ここも捨て時か」

そう呟くアビスは、振り返って半壊している王結寺に目をやった。今回の一件で王結寺は人目についてしまうだろう。そうなっては、拠点としては意味をなさなくなる。

『私人なら問題ないが、お前達のような愚図共は何らかの拍子に、一般人に正体がバレる危険性もあるからな。下手に騒ぎが大きくなれば、この拠点を利用する事は不可能と言っつていい。もしそうなら、人気のない場所に拠点を移すだけだ。そうならないように、常に気を抜かない事だな』

かつてルーラが語った言葉を思い出したスイムスイムは、たまを担いで、アビスに言った。

「ここはもう使えない。場所を移すべき。ルーラならそう言う」

「その方が良いな。こんな時のために、候補は絞っておいた。ついてこい」

そうしてアビスを先頭に、スイムスイムは未だに唸っているたまと共に、王結寺を手放し、新たな拠点へと移動を始めた。

しばらくして警察等が駆けつけた時には、半壊した王結寺がひっそりと佇んでいる事以外、特におかしな点はなく、文字通りもぬけの殻と化していた。

そして。

人集りが出来始めた王結寺をカーブミラーの中から見つめていた、青白いライダーは踵を返して、誰にも気付かれる事なくその場を離れた。

104. タイガの苦悩

ミラーワールド。

鏡の奥に広がる、この世の理を覆す世界。常識など一切通用しない世界には、常人を越える者が存在する。

一つはミラーモンスター。ミラーワールドに生息し、時折現実世界に出向いて捕食等の悪さを働く。

もう一つは、そんなミラーモンスターに唯一対抗できる力を持つ、異形の戦士。名を『仮面ライダー』、もしくは『魔法少女』。

端から見れば、人類の脅威でもあるモンスターと戦う為に生み出された存在なのだから、正義の味方と捉える者が大半だ。しかし、彼らにそんな概念はない。あるのは、己の正義を貫こうとする意志のみ。故に彼らは無条件に手を取り合わない。否、今となつては、同じ力を持つ者同士が戦う事が何時しか当たり前となつている。

誰かが言った。真実は一つだが、正義は一つではない、と。

全ては、生き残る為の戦い。或いは、己の願望を叶える為の戦い。それを彷彿とさせるかのような戦いが、今まさに行われていた。

「グアツ……！」

「……フンツ」

強烈な回し蹴りを受けて地面を転がるのは、ホワイトタイガーをモチーフとした仮面ライダー『タイガ』。そんな彼に対し、仮面越しに冷たい眼差しを向けているのは黒龍をモチーフとした仮面ライダー『リュウガ』。

リュウガ自身、さほどの戦いに興味も無ければ、意味もなかった。ただ、モンスター退治を終わらせたまさにそのタイミングで、不意に現れたタイガが、何の前触れもなく戦いを強要してきた事もあり、仕方なしにと相手になつてあげているのだが、結果はご覧の有様だった。

「その程度か。英雄になる為だか何だか知らないが……」

リュウガは倒れているタイガを掴み、その無防備な腹に拳を叩き込む。

「俺にそんな理論は通用しない。俺は英雄に興味などない。なろうと思つた事もな。ここはガキの遊び場じゃない。寝言なら寝て言え。三下風情が」

「黙れえ……！」

逆上したタイガがリュウガを振りほどき、落ちていたデストバイザーを拾つて、カードデッキから取り出したカードをベントインする。

『STRIKE VENT』

「ハアッ！」

デストクロウを装着した両手を振り上げて襲いかかるタイガだが、リュウガはその一手先を見据え動いていた。

『GUARD VENT』

黒いドラグシールドで攻撃を受け止め、押し返すと共に、ドラグシールドを鈍器のように叩きつけて、タイガの脳を揺さぶった後、ドラグシールドを振るつてデストクロウを引き剥がした。

攻め手を失つたタイガは本能的に危機を感じ取つたのだろう。尻餅をつきながら後ずさりし、近くにある橋の手すりに向かって駆け出す。

『STRIKE VENT』

そんな自称『英雄』の後ろ姿を見ながら、リュウガは右手に黒いドラグクロウを装着し、右腕を後ろに引くと、すぐそばに契約モンスターであるドラグブラツカーが降り立つ。

「……消えろ。ハアアアアアアッ！」

右腕を突き出してドラグクロウファイヤーを放つたのと、タイガが手すりに足をつけて飛び降りたのは、ほぼ同時。ドラグクロウファイヤーが手すりに直撃して黒煙が上がった。悲鳴のような音も聞こえた。

しばらくその爆発地点を見つめていたが、やがて半壊した橋の手すりに歩み寄るリュウガは、そこから下を覗いた。川が流れている。ファヴやシローから死亡アナウンスが流れてこないという事は、下に流れる川を利用して、直撃する寸前にミラーワールドを出たのだろう。

う。完全には仕留めきれなかったようだ。

「(……まあ、俺にはどうでもいい事だが、あのまま野放しにしても、邪魔で仕方ないな。奴と本格的に決着をつける前に、腕慣らしに始末しておくか)」

新たなターゲットを決めたところで、マジカルフォンから活動制限が近づいている事を知らせる警報が鳴ったので、リュウガはそのままタイガと同じ事をやってのけた。

所変わって、翌日の午後。

とある大学院内の一角で、東野 智は爪をかじるような動作をしながら、一冊の文庫本を片手にブツブツと呟いていた。

「どうしてだ……！ 僕はあの時、美奈ちゃんを倒したはず……。大切な人を犠牲にすれば、僕は英雄になれる……！ ……それとも、まだ倒さなきゃならない奴が他にも……！」

体を震わせながら、今後策を巡らせていたその時、智の前に見覚えのない人物が現れた。スーツの上から上品なロングコートを羽織った男性だった。

「お前が、東野 智か」

「……誰？」

「おっと。さすがにこの姿じゃ分からないよな。こいつに見覚えは？」

そう言つて男性が取り出したのは、緑色のカードデッキ。ここで初めて、智が僅かながら反応を見せた。

「ゾルダ、だね」

「正解」

男性……北岡 賢治はニヤリと笑いながら、智が座っているベンチの隣にあるベンチに腰を下ろした。その一方で智にはある疑問が。
「……どうして、僕の事が分かったの？」

「仕事柄だね。調査はお手の物さ。ある程度は浅倉とかに任せようかと思うけど、こつちでも潰せる奴は潰しとかないとね。こつちも早いとこ終わらせたいし」

ポケットからカイロを取り出して、手を温めながら、北岡はこう語った。

「タイガとインペラーが兄弟だったのを思い出してね。それで3番目に脱落したインペラーの素性を調べてみると、4つ上の兄貴がここにいて分かってね。おまけに周りからは遠ざけられてる奴がいるって学校じゃ評判らしいじゃん、お前。英雄って言葉以外、何も知らないぐらいに噂になってるよ」

「あんな奴らと一緒にしないでよ。彼らには分からないのさ。英雄になる事がどれほど崇高なのかをね」

『英雄』という名のタイトルの本に目を通しながら、智は自慢を続ける。北岡は肩を竦め、学内を見渡す。

「それにしても、中々に良いキャンパスじゃん。懐かしいなあ。俺も大学時代は楽しかったよ。夢があつてさ」

「へえ、あなたにも夢があるんだ。お金持ちって無欲だつて思つてたけど」

「俺は特別なのさ。……でも、だからこそ分かった事もあるよ。無理な夢は見ない方が良く。だろ？」

「何が言いたいのか？」

焦らす北岡に、苛立ちを隠せないのか、智は口を尖らせる。

「さあね。んじゃあ、そろそろいくか。お前だって、俺がここに訪ねてきた時点で決めてたんだろ？ その英雄とやらになる為にさ」

「……」

見れば、本を片手に読んでいる智のもう片方には、水色のカードデッキが握られている。2人は言葉をかわす間も無く、その場を後にして、近くにあったガラス張りの壁へと歩いて行った。

移動中、智は不気味な笑い声を腹の底から響かせてきたので、北岡は声をかけた。

「何がおかしい」

「やっぱりあなたじゃ、英雄にはなれないって思ってたね」

「俺は初めから英雄になろうなんて、夢にも思ってたないからね」

「そう。なら、僕が証明してあげるよ。僕が英雄である事をね」

そう言って2人はカードデッキをガラスにかざす。腰にVバックルが装着され、2人は同時にポーズを決めた。

「変身！」

カードデッキをVバックルにはめ込み、鏡像が重なると、それぞれのライダーに変身し、ミラーワールドへと入り込んだ。

舞台は木々に囲まれた、大学の裏手。ゾルダとタイガが距離をとって、互いに召喚機を構えている。最初に動きを見せたのはゾルダだった。マグナバイザーの引き金を迷う事なく引き、タイガに向かって連射を放つ。が、タイガもその程度で翻弄されるはずもなく、デストバイザーで弾いている。

ゾルダはなるべく林の中から狙撃するように銃弾を放ち、敵の死角から狙い撃った。対するタイガは動き回りながら、銃口の的にならないような立ち回りを見せていた。これに対しゾルダも動き回りながら、銃弾が当たる位置まで走り続ける。タイガは木々やデストバイザーを盾にしながら、徐々にゾルダへ接近していく。銃撃戦を得意とするゾルダに、接近戦は相性が良いと踏んだらしく、アクロバティックで軽快な動きを見せて、一瞬の隙をついて、木々を踏み台にして、一

気にゾルダへ飛びかかった。鋭い切れ味を持つデストバイザーが襲いかかるが、ゾルダも動きを読んで、マグナバイザーを盾にしながらタイガの猛攻を凌いでいる。さすがに経験の場数が違うとはよく言ったもので、近接戦闘になっても、タイガが優位に立つ事はない。タイガは苛立ちを隠せないのか、段々とデストバイザーを振るう腕力が雑になってきている。激しい攻防が続く中、突如として終止符は打たれた。

デストバイザーを振るうタイガの背中に、鋭い痛みが生じた。よろめきながら後ろを振り返ると、茂みの中から小学生サイズのロボット型魔法少女『マジカロイド44』が姿を見せた。その手にはマジカルフォンから召喚したマグナバイザーが握られており、それでタイガの背中を撃つたようだ。

突如現れたマジカロイドに注意が逸れてしまい、ゾルダはマグナバイザーで殴りつけて、タイガを吹き飛ばす。そしてマジカロイドがゾルダの隣に並んで、さもおかしそうにマグナバイザーをタイガに向けた。そんな魔法少女にタイガは怒りを露わにする。

「汚いぞ……！　僕を後ろから狙い撃ちするなんて……！」

「先生1人でここに乗り込んできたと思ってるマシタか？　所詮、勝てばよかろうの世界デス。卑怯だろうがラッキョウだろうが、どうぞお好きに吠えていなサイな」

「そういう事。それじゃあ、そろそろ決めるか」

『SHOOT VENT』

ゾルダの手にギガランチャーが握られ、マグナバイザーよりも大きな銃口がタイガに向けられる。タイガは畏怖して後ずさった。

「終わりだ」

「よ、よせっー！」

タイガは必死に2人のペアに攻撃の中断を呼びかけた。が、勝負の世界に、勝つか負けるかの世界にそれは通じない。

「何だ、散々偉そうにしてた割には、命乞いか？　英雄なんだろう、お前？」

「……ッ！」

「それじゃあ先生、トドメを……ノオオオオオオオオオオオオ!?」

不意にマジカロイド44が、横手からの蹴りで吹き飛び、ゾルダを巻き込んで倒れた。2人が顔を見上げると、そこには見知った2人が。

「こいつらは俺達の獲物だと言ったはずだ。邪魔はさせねえ……!」

「ようやく見つけたねえ。随分と腰抜けてやがるけど。ま、いつか」

現れたのは、最恐のペアとして君臨している仮面ライダー『王蛇』と、魔法少女『カリミティ・メアリ』。元々、先日の一件を受けてゾルダよりも先にタイガを始末する、という目的でN市全域を搜索していた。そして遂に標的を見つけ、特に王蛇は体を武者震いさせながら、タイガへと近づいていく。その姿に、タイガは震えが止まらない。

「ようやく、だなあ……! 俺をあそこまでイラつかせた礼は、たっぷりさせてやるよお!」

『SWORD VENT』

ベノサーベルを持った王蛇はタイガへ強襲した。だがその刃が届く前に、王蛇は何者かに弾き飛ばされる。皆が目を向けると、黒いドラグセイバーを構えるリュウガの姿が。

「悪いが、こいつは俺が殺る。昨日の続きが残っていたからな」

「お前……! 俺の獲物に手を出すなら、お前から潰す!」

立て続けに邪魔された王蛇はリュウガを睨み、ベノサーベルを突きつけた。タイガの元へ向かおうとしたリュウガはドラグセイバーで受け流しながら、そのまま王蛇と交戦を始めた。そんな2人を尻目に、メアリは不敵な笑みを浮かべる。

「それじゃあ、そっちがじゃれあつてる間に、あたしが代わりに遊んどいてやるよ。それで良いだろ?」

なあ、タイガ。蛇のような目つきを見せるメアリは、マジカルフォンをタップしてベノサーベルを握る。逃げようとするタイガだが、メアリに首根っこを掴まれて引き戻され、メアリの猛攻をその身に受けた。叩きつけるようにベノサーベルを振るい、時折腰のホルダーから取り出したのはマグナムからも火を吹かせる。タイガは次第にボロボロになり、腕の擦り傷から血が流れて地面に垂れる。

地面に横たわったタイガがメアリに足で踏みつけられたのを見て、蚊帳の外だったゾルダに動きが見られた。1枚のカードを取り出し、マグナバイザーにベントインする。

『FINAL VENT』

ゾルダの前に、契約モンスターであるマグナギガが出現。

「アツハツハ！ どうしたんだい坊やあ！ そんなんじや、いたぶりがいなくてつまないんだよ！ このあたしをムカつかせたんだ。それなりに覚悟してもらおうか？」

「グ、ウウウウウウ……！」

興奮気味のメアリは、ゾルダの動きに気づいていない。マグナバイザーをマグナギガの背中に接着させようとしており、パートナーも横で銃口の先を見ていた。地面に横たわるタイガに、その彼を踏みつけているカラミティ・メアリ。そのすぐそばで火花を散らしながら剣を交えている王蛇とリュウガ。

「4人まとめて、あの世に逝きなよ」

準備が整い、マグナギガの身体中にある、あらゆる銃口が光り始めたと同時に、真つ先に異変に気付いたリュウガが、王蛇を押し退けて攻撃の範囲外へと駆け出した。遅れて他の3人もゾルダに視線を向けて、ハツとなった。

銃弾やレーザービームの雨が降り注ぎ、4人は必死に駆け出す。ゾルダの必殺技『エンドオブワールド』は、そばにあった大学の校舎に直撃し、その爆風を諸に受けた4人は吹き飛ばされ、絶叫は轟音にかき消された。

後に残ったのは、跡形もなく瓦礫の山と化した、ミラーワールド内の校舎と、僅かに残った木々だけだった……。

ガラスの壁から飛び出してきた4つの人影。強制的に変身が解かれ、智は地面に叩きつけられ、浅倉と奈緒子は壁にもたれた。リュウガの変身者と思しき男性も、壁に手をつけて息を荒げている。そんな4人の元へ、同じく変身を解いた北岡と真琴が近寄った。

「まだやるか？　そう語りかけてくるような表情を見せてくる北岡や真琴を見て、智は悪態を吐くように、体を震わせながら立ち上がる。「何なんだよ……！　こんな事、ありえない……！　僕は、英雄なんだ……！　選ばれた人間なんだ……！　光希を、美奈ちゃんを倒せた僕が、こんな奴らに、英雄とは程遠い奴なんか……！　僕は、認めない……！」

「……アア？」

智の言葉を聞いて怪訝な声をあげたのは、口から血を流す浅倉だった。そして何かを察したのか、不敵な笑みを浮かべながらこう話した。

「……おい、お前」
「？」

「……ミナエルを殺ったのは、俺達だぜ」

「!?　何、言ってるんだよ……！　だってあの時、僕がこの手で……！」

「じゃあ聞くけどさ。あんた、あいつの最後を見たのかい？」
「……！」

「あたしらはちゃんと見たよ。口を金魚みたいにパクパクさせて、泣きながら命乞いしてる姿をね」

奈緒子の言葉に、何も言い返せない智。彼女の言う通り、智自身はミナエルが死亡する瞬間をこの目で確かめたわけではない。斬られ

た羽の付け根から血を流しながら逃げようとするミナエルの後ろ姿は覚えていた。捕まえようとしたが、モンスターに妨害されて、気がつけば見失っていた。致命傷を負っているのは分かっていた為、間も無く息絶えるだろうと、タカをくくっていた。

だが、もしあの時点でまだミナエルには息があり、本当の意味でトドメを刺した者がいたとしたら……？　つまり、最終的に彼女の息の根を止めたのが、実は目の前の2人だったとしたら……？

「そうさ。トドメを刺したのは、あたしらさ。自分でパートナーを殺った気になってたんだろうが、残念だったね」

せせら笑う奈緒子には目も暮れず、智は髪を掻き乱して、錯乱し始める。

「そんな……！　そんなはずない……！　彼女は、僕が倒さなきゃいけない人なんだから……！　僕が、英雄になる為に……！」
「諦めろ。他を当たれ」

浅倉がさもつまらなさそうに呟いたのを聞いて、智がこれでもかと睨みつけるが、その手で何人も命を奪ってきた事のある男に、その程度の威嚇は通用しない。

しばらく睨み合う両者だが、不意に智が何を思ったのか、笑い始めた。その目線はもう5人には向けられておらず、不気味なものを残す形で、後ずさりながらその場を後にした。

「……フン。これ以上は無駄だな」
リュウガの変身者である男性も、興味を削がれたらしく、特に言い残す事なく背を向けて歩き出した。

残されたのは、因縁で結ばれている2組のペア。浅倉は、標的としていた智の事など気にも留めず、北岡を睨みつけた。
「所詮、奴は小物だ。後でもどうにかなる」

「そういう事だな」
「……やるか。今ならケリをつけてもいい頃だぜ」
「……お前、怪我してるみたいだな」

北岡の言葉を受けて、真琴が浅倉に注目すると、確かに彼の腕からは血が流れている。出血の量も決して少なくない。

「気にするな。この程度でぶっ倒れるほど、俺はヤワじやねえ……！」
「だと思ったよ。んじやま、やりますか」

そう言つて再びカードデッキを懐から取り出そうとする北岡。が、何を思ったのか、再び元の場所へ仕舞い込んだ。その主な原因として、浅倉がよろめいて、膝をついた事が挙げられる。奈緒子はパートナーの方を振り向く事なく、北岡の行動に訝しむ。

「……やっぱやめとくか。何かそういう気分じゃないしさ。今のお前を殺つたつて、達成感ないし。どうせ殺るなら、本気のお前を倒した方が、よっぽど自慢になるだろうからさ」

「……フン。いちいちムカつかせる」

「んじや、決着はまたの機会に、つて事で。お互い疲れたしな。真琴、家に帰つたらお茶を淹れて」

「了解です」

そう言つて2人は背を向けて、2人から離れた。浅倉も頭に血がのぼつて追いかけようとしたが、眩暈と同時に倒れ込み、そのままいきをかいて寝込んでしまった。

いつも通りの彼を見て、やれやれと呆れる奈緒子。

「……どいつもこいつも、イかれた奴らばかりだね。ま、そうでなきやライダーも魔法少女も務まらないだろうけどさ」

自分を逆らい、煩わせ、ムカつかせる奴は、誰であろうと潰す。そんな彼女なりの『正義』を胸に秘めて、中年女性はポケットから取り出した、コンパクトの中の小さな鏡に写る自分の顔を見て、フツと笑みを浮かべた。

105. 夢を目指す者 支える者

「へえ、じゃあ明日の試合には出れるんだな!」

「ああ。医者からの許可はもらったからね」

榎原家でのお泊まり会から2日後、一仕事終えて休憩していたラ・ピュセルの口から語られたのは、しばらく休業していたサッカーの試合への出場が出来そう、という吉報だった。

リハビリの経過も順調に進んでおり、まだフラつく時こそあれど、自分の足で立って歩けるようになった事で、顧問の先生から、間もなく行われる他校との練習試合に出てみないか、という誘いを受けて、颯太の復帰戦が決まった。

「多少ブランクはあるけど、みんなの足を引っ張らない程度には、頑張ってみるよ」

ラ・ピュセルは己の足をさすりながらそう答える。スノーホワイトはさも嬉しそうに、笑みを浮かべて口を開いた。

「頑張つてねそうちゃん! 私も応援しに行くから! だいちゃんも行くでしょ?」

「ああ。その日は特に予定は入れてないし、行けるぜ」

「アハハ。それじゃあまり恥ずかしいプレーは見せられないな」

ラ・ピュセルが苦笑する中、他の面々はというと……。

「そっかあ。俺も応援に行きたいけど、編集長から仕事を入れられちゃってるしなあ」

「俺も、エコー検査……だっけ? 時期も近いからって、向こうから口酸っぱく言われてるから、そっちにいかなきゃならねえし……。お互い健康だし、面倒なだけだと思っただよな」

「……妊婦としてその発言はどうなの」

定期的な妊婦健診を受けているトップスピードのぼやきに、リップルは的確なツツコミを入れる。

リップルとナイトもバイトの都合で応援には向かえそうになく、ライアもまた、用事があつて来れないそうだ。よって颯太が出場する試合の応援には、大地と小雪が出向く事になる……と思われていたのだ

が。

「あ、そうだ。亜子ちゃんも誘ってみようかな。そうちゃんのサッカーを頑張ってる姿を見た事ないみたいだし」

スノーホワイトは、現在この場にはいない魔法少女の事を思い出し、解散後、早速連絡を入れた。

翌々日、快晴となったこの日。市内最大級の広さを誇る『N川公園』の一角にある広場に、普段は見慣れない数の人達が集まってきた。そこで行われる、サッカーの練習試合を一目観ようとやって来た面々である。練習試合と呼ばれるだけあり、さすがに周囲を埋め尽くすほどではないが、自分達の中学校の選手の活躍を観ようと、親や学友がコートを覆うように座って応援の準備を進めていた。

キックオフの時間が刻一刻と迫り、両チームの先発メンバーが定位置に着く中、颯太は控えのベンチで他のチームメイトと並んで腰掛けしていた。さすがにフル出場する事は叶わず、担当医との相談で、後半から出場する事になっていたので、前半は応援に徹している。

主審の笛が鳴り響き、相手校が軽くボールを小突いた所で、周囲の興奮は一気に高まった。ベンチ内とはいえ、久々の感覚だ。颯太はゴクリと息を呑む。

港での一戦でクラムベリーとオーデインに打ちのめされ、足に怪我を負わされて以来、サッカーはおろか、日常生活でも足を地面につけて歩く事さえ叶わなかった。医者からは、選手生命も危ぶまれる事も覚悟しておいた方がいい、とさえ言われた。その一件を機に起きた、魔法少女や仮面ライダー同士による殺し合い。足を負傷してすぐに、恩師や親しかった者達を亡くし、絶望と失意に暮れていた。生きる事さえ、諦めかけた。

そんな彼を救ってくれたのが他でもない、親友の大地だった。彼もまた、恩師を失った悲しみをバネにし（実際には復讐の為に）、颯太を支えてくれた。その甲斐あって、パートナーであるライアの運命を変える事が出来た。こんなボロボロになった自分でも、やれる事があるのだと気づかせてくれた。魔法少女として、皆を守ると改めて誓った。そのきっかけを作ってくれたのは、同じ魔法少女愛好家として語り合えた、幼馴染みの小雪だ。颯太にとって、この2人はなくてはならない存在になっていた。

そしてようやく、この晴れ舞台に戻ってくる事が出来た。緊張はしていた。数週間とはいえ、足を動かす事から遠ざかっていた自分に最後まで試合についていけるか。そこに一抹の不安を覚える颯太。足に触れていた手が、汗で濡れてきた。

試合の流れはほぼ五分。敵味方問わず、様々な応援が飛び交う中、颯太は試合から視線を外して周囲に目を向けた。不意に見えてきたのは、コートを挟んだ奥に、私服姿でも一目で分かる人影だった。見間違えるはずもなく、大地と小雪が隣り合って試合に注目する事なく会話していた。颯太が前半の試合に出ない事は周知していた為、適当に時間を潰しているようだ。それでも、応援に駆けつけてくれているのは事実なので、颯太は心の中でお礼を言った。

すると、そんな2人に駆け寄ってくる者がいた。小雪よりやや小柄な少女だ。颯太は目を見開いた。

「(ど、どうして亜子まで来るんだよ!?!?)」

颯太の目に飛び込んできたのは、息を切らしながら大地と小雪に向かって必死にペコペコと頭を下げる、ハードゴア・アリスの変身者で

ある亜子の姿だった。さすがに亜子まで応援に来るとは予想だに
なかった為、別の意味で緊張感が身体中を駆け巡る颯太。先日のお泊
まり会で、亜子の本音を知り、夜が明けるまで背中に張り付く形で
ベッドに並んで横になっていた事もあり、あつという間に眠気が吹き
飛んだ記憶がある。異性からあそこまで積極的にされた事を思い返
すと、どうしても顔を赤らめてしまう。隣のチームメイトも、どうか
したのかと声をかけてきたが、すぐに平気を装って誤魔化した。

「ううっ、まさか亜子まで来るなんて……。ますます緊張してきた
……！」

あの一件以来、颯太は亜子を意識する度に、どうしても心臓がバク
バクする感覚に見舞われる。魔法少女の時と同様に、常に威厳を保つ
た騎士でいなければ。そう思った颯太は大きく息を吐いて、グラグラ
に陥りかけている精神を立て直す。

「……本当に、すみませんでした。この辺りは、ちよつと不慣れとい
いますか」

「気にしてないよ。そうちゃんの出番はまだだから。集合時間が早
かったのもあるし、こっちこそゴメンね。急に誘っちゃって」

「い、いえ。私の方こそごめんなさい……。でも、誘ってくれたのは、
嬉しいです。颯太さんの活躍、見たかったから」

途中から合流した亜子が、2人と会話していた。

「でも大丈夫かな？ そうちゃん久しぶりだから、凄く不安そうに見
えるよ」

「何てったって、あいつ自身の夢に一步近づく為の試合だからな。緊

張はしてるだろうけど、あいつなら大丈夫だ。ああいう状況下で結果を残してきたのが、颯太だからな」

「夢……ですか。颯太さんの夢って確か……」

「ああ。プロのサッカー選手になって海外で活躍するのが、あいつの目標でもある。俺も小雪も、それを応援してるんだ」

大地の話聞いて、亜子は感銘を受けた。

「凄い、です。私なんか、そんな余裕はありませんでした……。どうやって死のうか、とかどうすればお二人の役に立てるのか、ぐらいしか、あの頃は考えてこなかったから……」

亜子は羨ましげに、試合の風景を見つめていた。夢が見つかっていない事に劣等感を覚えているようだ。そんな彼女の肩に優しく触れたのは、彼女の憧れでもある小雪だった。

「今すぐに決めなくなたって、大丈夫だよ亜子ちゃん。焦らずゆっくり。それで良いんだよ。焦って叶えようとする夢ほど、小さいものはないから。……まあ、これ全部香川先生から教えてもらった事なんだけだね」

「焦らず……。ありがとうございます」

亜子がお礼を言って再び試合に注目しようとしたその時、ホイッスルが鳴り響いた。敵チームの打ったシュートが、颯太のチームのゴールへと吸い込まれるように入ったようだ。

前半戦は、0―1と1点リードされる形で終わり、ハーフタイムの時間を告げるホイッスルが鳴り響く。後半からは、いよいよ颯太が動き出す。事前のウォーミングアップも調子が良く、足にもさほど負担はかかっていないように感じられる。颯太は最後に水分を含まうとして、荷物置き場にある自身のカバンに手をかける。

と、その時。カバンの中から耳鳴りのような音が聞こえてきた。それを聞いて手を止める颯太。

「これは……!」

間違いなくマジカルフォンから発せられる、モンスターの出現を知らせる警報だった。音の大きさからして、それほど離れていない場所に出現したようだ。試合を観に来た観客達を狙っているのか。

よりによってこんな時に、と歯を噛み締める颯太。ハーフタイムの時間もそう長くはない。かといってこのまま放っておいては、観客達が危機に晒される。少し悩んだ末、颯太は近くにいたチームメイトに声をかける。

「ゴメン! ちょっとトイレに行ってくるから、監督にそう伝えたいて!」

「お、おう。すぐ戻ってこいよ」

「ああ!」

颯太は誰かに見られないように素早くマジカルフォンを抜き取り、駆け足でその場を後にする。近くの建物の裏手に入り込み、周りに誰もいない事を確認した颯太は、窓ガラスの前でマジカルフォンを構えた。

「変身!」

マジカルフォンをタップして光に包まれた颯太は、ラ・ピュセルへと変身し、窓ガラスを通じてミラーワールドに突入した。

反応をたどって駆けつけた先には、公園に設置されている噴水のそばにイノシシ型のモンスター『シールドボーター』が水面を凝視している光景があった。水面には、敵チームのサポーターと思しき少女の

姿が。彼女を捕食しようと、シールドボーダーが動き出そうとするが、ラ・ピュセルがいち早くその胴体に飛び蹴りを入れた。

「僕が相手だ！」

ラ・ピュセルは鞘から剣を引き抜き、魔法を行使して肥大化させて、起き上がろうとするシールドボーダーに向けた。シールドボーダーは激怒したかのように咆哮を上げ、その胴体に似合わないスピードでラ・ピュセルに飛びかかった。両手の鋭い爪に当たらないように大剣で押さえつけながら、隙を見て蹴りを入れるが、元から防御力の高いシールドボーダーにはさほど有効ではない。距離を置いて、大剣をぶつけてみるも、前面にある盾が邪魔をして、シールドボーダーにダメージが通らない。

「だったら挟み込んで……！ エビルダイバー！」

ラ・ピュセルはパートナーの契約モンスターの名を呼び、シールドボーダーの後方から襲わせた。シールドボーダーがエビルダイバーに気を取られている間に、ラ・ピュセルは一気に詰め寄って、大剣を突き出した。シールドボーダーの盾から火花が散り、僅かに亀裂が入る。だがそこまでだった。数メートルほど吹き飛ばされたシールドボーダーは起きあがり、体を震わせると、再び突進を繰り返してきた。かなり厄介な攻撃パターンに、ラ・ピュセルは次第に焦りを覚える。「（こうしている間にも、時間だけが過ぎていく……！ 早く戻らないと、仲間に迷惑がかかるだけ……！ でもこいつをここで仕留めないと、誰も守れない……！）」

魔法少女としての活動に専念するか、自分の夢の一端に専念するか。ラ・ピュセルの中で迷いが生じ、隙が出来てしまった事で、シールドボーダーの突進攻撃が命中し、ラ・ピュセルは地面を転がった。「！ しまった！ 余計な事を考えてたばかりに……！」

起き上がろうとするラ・ピュセルに向かって、シールドボーダーが近寄ってその大きな足で踏みつけようとする。ラ・ピュセルが身構えたその時、横手からシールドボーダーを突き飛ばす影があった。両目の下に隈が出来ているドレス姿の少女が、そこにいた。

「間に合い、ましたか」

「アリス！」

しやがみこんでラ・ピユセルの無事を確認してきたのは、ハードゴア・アリスだった。突然の妨害に憤るシールドボーダーだったが、

「ハアアアアアアア！」

シールドボーダーの前に2人が現れ、回し蹴りを浴びせられ、巨体は地面に倒れこんだ。

「九尾！ それにスノーホワイトも！」

「大丈夫だった!?？」

「悪いな。飲み物買いに行つてて気づくのに遅れた。ま、遅れた分はきつちりやるさ」

「助かった！ よし、ここからはみんなまで……」

ラ・ピユセルが起き上がって体勢を整えていると、九尾が左手を突き出して待ったをかけた。

「ラ・ピユセル。お前は戻つて試合に出ろ。ここは俺達が引き受ける」
「で、でも」

「お前には、お前のやるべき事があるはずだ。叶えたいものがあるんなら、こんなところで立ち止まるな！ 先へ進め！」

「そうだよラ・ピユセル！ 私達が、応援してるから！ 私はいつもそ
うちゃんに守られてた！ だから今度は、私がそうちの夢を守る
！」

「みんな……！ 恩にきる！ (自分が今やるべき事、それは……！)」

ラ・ピユセルは剣を鞘に収めると、九尾に向かって拳を突き出し、互いに拳を軽くぶつけた。

「後は任せたよ、九尾」

「やれるだけやってこい、ラ・ピユセル」

誓い合った後、ラ・ピユセルは素早くミラーワールドを後にする。それを見届けた3人が、シールドボーダーと交戦を始める。

アリスはマジカルフォンをタップして黒いドラグセイバーを召喚。すぐさまシールドボーダーに斬りかかる。

『SWORD VENT』

九尾はフォクセイバーを両手に持つと、アリスに続いて突撃する。

2人を抑え込もうとするシールドボーダーだが、それよりも早く後ろから回り込んだスノーホワイトが、シールドボーダーを羽交い締めして身動きを封じた。2人の斬撃がシールドボーダーの胴体に命中したのを確認して、スノーホワイトも飛び上がった。一旦距離を置いた。シールドボーダーは依然として気力が残っているらしく、身体から盾を外して手に持ち、そのまま突進してきた。

『TRICK VENT』

九尾は新たなカードをベントインし、分身を出現させ、シールドボーダーを攪乱させた。分身を含めた九尾がシールドボーダーを相手にしている隙に、スノーホワイトがアリスに近寄ってこう告げた。「アリス、そうちゃんの応援に行つてあげて！ 私と九尾がなんとかするから！」

「えっ……？ ですが、お二人は……」

「そうちゃんにとって、アリスの……亜子ちゃんの応援は必要だと思うから。だから行つて！ 行つてそうちゃんの頑張る姿を、しっかりと見てきて！」

「スノー、ホワイト……」

「心配すんな！ 俺達だつて、やればできる！ ここは俺達を信じて、向こうの様子を見に行つてやれ！」

「九尾……」

九尾にもそう言われ、悩む素振りを見せるアリス。

ラ・ピュセルの事を、颯太の事をもっとよく知りたい。あの日、殺されかけた自分を、危険を顧みず助けてくれた少年が、夢へ執着する姿を見てみたい。その欲が勝つたのか、アリスは意を決して呟く。

「……分かり、ました。でも、無理だけは、しないで、ください」

「大丈夫！」

「そつちは任せたからな」

「はい。それでは……」

アリスはペコリと頭を下げて、先ほどラ・ピュセルが出た窓ガラスへ向かつて駆け出した。シールドボーダーがそれに気づいて追いかけてようとすると、九尾の分身が行く手を遮る。

ミラーワールドを出て現実世界に戻ったアリスは、誰もいないのを確認してから変身を解き、試合会場へと駆け出した。息を切らせながらようやくたどり着くと、既に試合は始まっており、前半を遥かに上回る激しさが、サッカーコートという名の戦場で繰り広げられている。その中で、颯太が歯を食いしばりながら、ボールに喰らいついている。どうやら試合開始までには間に合ったようだ。その事を確認してホッと安堵してから、試合を観る事に集中する。

接戦の末、遂に主導権を握ったのは颯太のチーム。仲間からパスを受け取った颯太は、足の故障を感じさせないほどに、素早い動きで相手の猛攻をかわしていく。頭の中には、目の前に見えるゴールへの執着心しかないように感じられる。

これが、夢を目指す者が見せる、底力なのか。亜子は自然と颯太の動きに合わせて目を動かしていた。

「……頑張って」

その小さな呟きは、周りの歓声に掻き消されて、とても周囲に聞こえるものでもなかったが、亜子は両手を胸の前に組んで、ただひたすらと、彼の戦いの応援に徹した。

一方、トリックベントの効力も切れ、一体だけとなった九尾、そしてスノーホワイト。シールドボーダーとの一戦に決着をつけるべく、

2人同時に飛び上がった。間合いを取ってから、九尾は1枚のカードを、スノーホワイトはマジカルフォンを取り出してタツプした。九尾は左腕を突き出すと、その手に片刃型の召喚機『フォクスバイザーツバイ』を握り、周囲に光をもたらした。隣にいるスノーホワイトも胸の中心にホルダーが現れた。

「挿入歌：Revolution」

『SURVIVE』

九尾はサバイブのカードを狐の顔の形をした柄に装填し、その姿を九尾サバイブに。スノーホワイトはマジカルフォンをホルダーにはめ込んで、スノーホワイトサバイブに、それぞれが進化した。

シールドボーダーは一瞬気圧されるが、そのまま突進してきた。

『SPIN VENT』

九尾サバイブがカードをベントインし、その右手に持ったのは、インペラーが所有していたガゼルスタツプ。突撃してくるシールドボーダーめがけて突き出すと、シールドボーダーは返り討ちにあい、いとも簡単に吹き飛ばされた。ガゼルスタツプを放り捨て、右手に持ち替えたフォクスバイザーツバイでシールドボーダーに斬りかかった。スノーホワイトサバイブもそれに続いて、パンチやキックをシールドボーダーに浴びせる。強化された2人から同時に仕掛けられては、シールドボーダーでも対処が間に合っていないようだ。

分が悪いと判断したのか、離脱しようとして後ろを振り向き駆け出すシールドボーダーだったが、それを逃すはずもなく、九尾サバイブは次の一手を打つ。

『TRANS VENT』

取り出したカードは先日脱落した、ミナエルの魔法を宿すカード。それをベントインし、スノーホワイトサバイブに声をかける。

「スノーホワイト！」

「！」

九尾サバイブはスノーホワイトサバイブに向かってジャンプすると、その姿を生き物以外の物体、つまり長い鞭に変えて、スノーホワイトサバイブに握らせる。その意図を理解したスノーホワイトサバ

イブは思いつきり鞭を振るって、シールドボーダーに絡みつくように拘束した。

「ヤアッ！」

身動きが取れなくなったシールドボーダーに、スノーホワイトサバイブの飛び蹴りが命中。シールドボーダーは地面を転がり、手に持っていた盾に、大きなヒビが入った。ラ・ピュセル、ハードゴア・アリス、そして九尾の攻撃を何発も受けていた影響で、耐久値は低くなっているようだ。好機は、今だ。

「これで、決める！」

スノーホワイトサバイブはマジカルフォンをタップして、全身に気合いを込める。その間に元の姿に戻った九尾サバイブは、カードデッキから取り出したカードをベントインする。

『FINAL VENET』

直後、九尾サバイブの後方からフォクスロッドが進化した、フォクスロダーが雄々しい勇姿で登場し、跳ねて飛び上がると、九尾サバイブもそれに続いて飛び上がり、背中に乗った。すると、フォクスロダーの前足と後ろ足で2対ずつくつき、車輪が出現し、バイクモードへと変化した。

「ハアアアアアア……！」

スノーホワイトサバイブは飛び上がり、右足を突き出すと、その右足が炎に包まれて、威力を増した『ブレイズキック』が、盾を突き出して突進してきたシールドボーダーと激突した。それにより盾は完全に大破し、シールドボーダーは吹き飛ばされた。

そこへフォクスロダー・バイクモードに乗った九尾サバイブが接近。前方につけられたフォクスロダーの目から閃光が放たれて、シールドボーダーの視界を遮った。混乱したシールドボーダーめがけて、そのまま車体を勢いよくぶつけた。九尾サバイブの必殺技『ブレイズシャイニング』が炸裂し、シールドボーダーは吹き飛ばされた先にある噴水に体を沈めて、そのまま水飛沫をあげて爆散した。

無事に勝利を収めた2人は、マジカルフォンからキャンディーを獲得した知らせを受けて、息を整えてから、ミラーワールドを後にした。

2人が駆けつけると、亜子がジッと試合を見つめている後ろ姿が見え、その両隣に2人が立った。

「！ 小雪さん、大地さん……！ 勝てたん、ですね」
「ああ」

「試合は、どうなってるの？」

「……まだ、負けてます。でも、颯太さんは、頑張ってます」

「だろうな。あいつは好きなものなら、最後までしがみついても諦めようとしなない。サッカーもそうだし、きつと魔法少女の事もそうだったんだろうな。そういう所には、頑固になる。それがあいつの良い所だと思うな、俺は」

「私も……。そうちゃんが魔法少女の事で私と語り合う時に、本気で好きなんだってアピールしてくる姿が、輝いて見えるんだ。だから、夢見てるんだよ。サッカーも魔法少女も、自分の好きな事なら何でも一生懸命に頑張って、人の役に立とうとする。そうちゃんは本当に凄いいんだよ」

「……何となく、先ほどまでの颯太さんを見て、分かる気がします」

亜子の目には、いつしかボールを奪い返そうとする颯太の必死な姿だけしか映らなくなっていた。

「ああ〜あ。結局負けちゃったか……。ゴメンな亜子。勝ちたかったけど、やっぱりそう現実には上手くいかないよね」

「そんな事、ありませんよ。颯太さん、とても頑張っていました。お二人も、そう言っていました」

夕日が見え始めた頃、カバンを手に提げている颯太と亜子は川沿いの道を並んで歩いていった。結果的に試合は後半に入ってから拮抗が続き、どちらも無得点のまま、前半にリードしていた相手校の勝利という形で勝負はついた。颯太は後半フル出場し、ギブアップする事なく最後まで粘り続け、そして戦い抜いた。それだけでも、リハビリの成果が出たと言っても過言ではない。

その後、大地と小雪は用事があるからといってさっさと会場を後にし、残された颯太と亜子が、気まずいながらも歩いて帰宅していた。「また、練習を積み重ねれば、きっと、大丈夫です。私も、出来る限り、手伝います」

「……ああ、うん。そうだね。ありがとう」

「? どうかさされましたか?」

「いや、うん……」

何故か上の空だった颯太が気になり、亜子が声をかける。颯太は立ち止まって、川の水に映る自分自身を見つめた。

「サッカーも大事だけど、魔法少女として戦う事も大事だなんて思ったんだ」

「それは、どういう……」

「今日の事、もし僕が見て見ぬ振りをしていたら、確実に被害が出ていた。モンスター脅威は、いつでもどこにでも潜んでいるって考えると、そつちも疎かに出来ないなって思ってたね。……魔法少女として、僕も精進していかないと、って考えてたんだ。大地や小雪がそうしているように、僕自身も、強くなりたい。それに、もう直ぐ脱落者が発表される。それよりも早く、脱落者が出てもおかしくない。一瞬でも気を抜けない局面に立たされているんだ、僕達は。だから、絶対に負けた

くない」

その決意は、鉄のような硬さを感じさせた。そんな彼の姿を見て、亜子は肩を寄せてこう呟く。

「……私も、強くなりたいです。まだ私では、皆さんの隣にいられるほどの強さは、ありません。だから、お互いに、頑張っていきましょう」「そうだね。1人で出来なくても、誰かと一緒なら」

「はい。きつと、何とかなる。そんな気がします」

2人は頷きあい、再び歩き出す。しばらくして、颯太の口が開いた。「亜子、今日は、応援に来てくれてありがとう。おかげで、色々支えになったよ」

「……お役に立てて、嬉しいです。あの……、颯太、さん」「んっ?」

不意に亜子は、颯太の手を優しく握った。その行為に戸惑っていると、亜子は顔を紅くして、こう呟く。

「私、まだ具体的に、こうなりたいたいという夢は、ありません。……でも」

「でも?」

「夢を、守る。それは、今の私にも、出来る事だと思います。……だから、私に、颯太さんの夢を、応援させて、もらえますか?」

「あ、亜子……」

最初は戸惑う颯太だったが、自然と表情は柔らかくなり、軽く頷く。そして2人は、羞恥心が捨てきれないのか、手を握りつつも互いにぎこちない歩き方をしたまま、夕日に照らされながらゆつくりと前進した。

今宵もまた、魔法少女及び仮面ライダーとしての活動の時間が、始まりを告げようとしていた。

106. 異変の兆候

「ハアッ！ ダアッ！」

夜も更け、人通りの少なくなった噴水広場に、様々な音が響き渡る。正確にはミラーワールドで繰り広げられているものだが。

「フンッ！ トオッ！」

片手に持つドラグセイバーを振り回しながら龍騎が相手にしているのは、ヤゴ型モンスター『シアゴースト』。強さの部類としては、これまで戦ってきたモンスターと比較しても、さほど特殊な能力を宿しているわけでもなく、ただ不気味な鳴き声を出しながら、歩くスピードで襲いかかってくる程度だった。だが、そんな相手でも龍騎は舌を巻いている。その訳は……。

「何だよこれ……！ どんだけいんだよこのモンスター！」

龍騎がそう喚くように、辺りを見渡してもシアゴーストしか捉えられない。倒しても倒しても、湧いて出てくる相手に、さすがの龍騎も消耗戦になり、疲れが開始する。

「せめて他の誰かが来るまで、持ち堪えないと……！」

『ADVENT』

龍騎は契約モンスターであるドラグレッダーを召喚し、戦力の穴埋めを行った。が、それでもシアゴーストの方が依然として数の差では優勢。

「おわっ!?？」

シアゴースト達に押し倒されて、近くにあった水辺に転げ落ちた。全身びしょ濡れになりながら立ち上がる龍騎は、先ほどよりも多いシアゴースト達が迫ってくるのが見えた。

龍騎が身構えていると、彼にとって待ち望んでいた展開が。

『STRIKE VENT』

「ハアッ！」

「うおりやあああああ！」

シアゴーストを横手から薙ぎ倒す者達が駆けつけてきた。

「ライア！ トップスピードも！」

「遅くなっちまったな！ 加勢するぜ！」

「よおし！ なら俺も！」

仲間の登場で俄然やる気になった龍騎が気合いを入れ直し、水辺から出て、シアゴーストに立ち向かった。

『SWING VENT』

ライアはエビルウィップで周囲の敵を討ち、トップスピードはマジカルフォンから取り出したドラグセイバーでシアゴーストと応戦。龍騎は直接拳で倒しにかかる。

ある程度数が減ってきたところで、龍騎は叫んだ。

「ライア、行くぞ！」

「ああー！」

『STRIKE VENT』

『COPY VENT』

龍騎が右腕にドラグクローを装着し、その横に立ったライアが、ドラグクローをそのままコピーして右腕に装着した。

「ハアアアアアア！」

2人は同時に腕を突き出し、ドラグレッダーと共に吐かれた炎が、一箇所に固まっていたシアゴースト達を難なく一掃した。

今の一撃で全滅したらしく、辺りにモンスターの気配はなかった。それが証拠に、3人のマジカルフォンからキャンディー獲得の知らせが届いた。だが、3人にそれを確認する余裕はなかった。

「助かったぜ2人とも！」

「いいってもんよ！ パートナーなんだし当然っしょ！」

「しかし、あのモンスター……」

ライアは水辺の方を見つめながら呟く。龍騎もトップスピードも、ライアが言いたい事が分かっていた。

「そういや、ここ最近ああいう奴としか会わなくなったよな。っていうか、モンスター出るのがほぼ毎日になってきたし」

「それぞれ！ どっちかっていうと、人助けよりもそっちに関わる事が多くなったよな」

ミラーワールドの中であれこれ考えていても仕方ないと思ったの

か、3人は現実世界に戻り、ナイト達に連絡を入れて、その場で解散する事にした。

「すごいや龍騎。お前随分びしょ濡れだけど、平気か？」

「大丈夫だって。これくらい何とも……ヘックション！」

「全然じゃねえかよ!? ほら、早いとこ家に帰ろうぜ！ 風邪引いちまうかもしれないし、あつたかいもん作ってやるから！ ほら早く！」

「お、おう悪いな。じゃあライア、俺達はこの辺で！」

「ああ、お大事にな」

トップスピードが急いで龍騎を後ろに乗せてラピッドスワローをアクセル全開に飛ばして立ち去るのを見送った後、ライア自身も自宅へと戻った。

シャワーを浴びてリビングに戻った手塚は、気晴らしに手元にあった、紐のついたコインをぶら下げて、ユラユラと揺らしてみた。しばらくジツと見つめていたその時、手塚の脳裏に、今まで以上に鮮明なビジョンが浮かんだ。

N市の中心部に位置する、普段から人通りの多い繁華街。だがそこに映っていたのは、手塚自身、初めて目にする光景だった。至る所から炎や煙が上がり、人々が逃げ惑い、悲鳴が交差する。その光景の一角には、泣き叫ぶ少女らしき姿が。母親とはぐれてしまったのだろうか。そんな少女の背後から吸い寄せられるように迫り来る『何か』。明らかに少女を狙っている。

「……………」

不意に我に帰った手塚は、無意識に左手を虚空に伸ばしている事に気づいた。あまりにも戦慄的な光景を前に、現実と区別がつかなくなってしまうようだ。

「……………」この街に、大きな災いが訪れる、とでもいうのか……」

今の光景が現実のものとなる確証はない。ここ最近、龍騎達との出会いもあってか、占った結果はそのまま100%起こされる、と断言はできなくなった。しかし、ここ最近になって起きている、N市の異常なまでのモンスターの出現と関連してしまうと、決して無視はで

きない。

「……だとしたら、俺達はその運命を変える。変えなければならぬ」
そう呟いた手塚は、テーブルの上にある、お茶の入ったコップに手を伸ばした。

翌日の午後。

「んくつ。久々に休みも取れたし、天気も良いし、つばめのお腹の赤ちやんも順調だし、良い事づくめだな！」

「そんな街中でおおっぴらに言うなよ恥ずかしい……。でもま、オレもこの子もそうだけど、お前の方こそ大した事なくて良かったな。鼻水垂らしまくってんの見た時は、どうしたもんかと思ってたけど」

「つばめの淹れてくれたレモンティーが効いたのかもな」

「ま、バカは風邪を引かないって言うしな！」

「つばめに言われたくないし!?!?」

口論になりながらも、自然と笑みを浮かべる正史とつばめは、商店街を抜けて、家のある方へと歩いていった。休日を利用して、つばめの健診や買い物に付き添っているのだ。そろそろ本格的に育児休暇とも考えてみようかな、と思いつつ正史が両手にレジ袋を持ち直している、隣でお腹に触れながら歩いていったつばめが、路地に見える喫茶店を指差した。

「なあ、まだ時間はあるしき。あそこで休憩とかしない？ 正史もずつとそれ持つてんの辛いだろ？」

「そんなに重くはないけど、まあ、なんか飲もつか」

正史も賛同し、2人は迷う事なく看板に『A T O R I』と表記された喫茶店の扉を開けた。

「いらつしやいませ〜」

店の奥から年老いた女性の声が聞こえてきて、店員の1人が2人に寄ってきた。正史は人数を告げようとした。

「あ、ええつと2名……で……」

「……！」

「ああ？？」

つばめが素っ頓狂な声を上げるのも無理はないだろう。驚きのあまり表情が固まっているその店員は、2人にとって見知った少女だったからだ。

「華乃じゃねえか！ おいつすー！」

「ちよ、今はそんな事……」

つばめに抱きつかれそうになる、エプロン姿の華乃は迷惑半分、恥ずかしさ半分といった具合に顔をしかめて後ずさった。その反応に、店長のおばさんは不思議そうな顔を浮かべた。

「おや華乃ちゃん、その人達、知り合いかい？」

「そ、それは……」

「どうかしたのか？」

すると、店の奥から、これまたエプロン姿の男性が、現れた来客を見て眉をひそめた。

「あつ！ 蓮二！」

「お前達……、何でここにきた」

「何でって、そりゃあお茶しに來たに決まってるだろ。喉乾いたんだし。でも、2人ともここで働いてたんだな」

「……今日は随分と、顔見知りと会うな」

そう言つて蓮二が顔を斜め後ろのカウンター席に向ける。正史がそれになぞつて視線を向けると、なんとそこには手塚がティーカップ

を片手に持って顔だけを振り向かせて、軽く会釈しているではないか。

「手塚もいたのかよ!?」

「隣なら空いている。来ていいぞ」

手塚にそう言われ、正史とつばめは手塚の隣に座った。しばらくして、蓮二が水の入ったコップを持ってきた。つばめの所には丁寧に置いたが、正史の前には勢いよく置かれ、水が飛び散ってテーブルが濡れた。

「ちよ、お前何してんだよ!? 何で俺だけそんな態度!?」

「文句があるなら帰れ。今日はこれ以上、顔見知りには会うのはもううんざりだ」

「そんな事言うなって。あ、じゃあコーヒー一杯」

「ごめんなさいねえ。ウチは紅茶しか取り扱ってなくて」

「そういうわけだ。コーヒーを飲みたいなら他を当たれ」

店長が申し訳なさそうに謝るのに対し、蓮二はそっけなく呟く。その態度にムツとしながらも、正史は渋々答える。

「……じゃあ、紅茶で」

「オレもそれで!」

「……フン」

鼻を鳴らして注文を承った蓮二は、店の奥へとさっさと入っていった。その様子を見ながら、店長はクスクスと笑った。

「蓮二君、知り合いに3人も会えてよっほど嬉しいのかもねえ。らしくないけど、そういう彼もアリかねえ」

「そうっすか? いつもあんな調子ですよ。どうにかならないんですかねえ?」

「それも愛情の裏返しさ。あたしにや分かるよ。……それにしても、蓮二君も華乃ちゃんも、良い友達を持ったもんだねえ。前から人付き合いが苦手そうに見えたからちよいと不安だったけど、それも徒労だったかもね」

2人の事を身近で見てきた店長にとって、正史達と2人のやり取りに新鮮さを感じたようだ。店長は手塚を含めた3人に頭を下げて

言った。

「これからも、2人の事、よろしく頼むよ。それじゃあたしはちよつと奥に残るから、華乃ちゃんと話しておいで。あと、その嬢ちゃんには、紅茶を飲みすぎないようにね。お腹の赤ん坊は大事にしとかないと」

「気遣いサンキュー！」

つばめは照れながらそう言い、店長は店の奥へ。華乃の方はテーブル拭きだったり、注文を聞きに行ったりと忙しそうだったので、しばらくは手塚と会話する事にした。なお、平日にもかかわらず華乃が働いているのは、学校がテスト期間であり、午前中しか通っていないからだったと、後に判明した。

「昨日はお疲れ様だな」

「……ああ、そうだな」

「? どうかしたのか、手塚? ひよつとして風邪?」

「いや、何でもないさ」

手塚の反応に違和感を感じた正史は声をかけるが、本人は首を横に振って紅茶を口に含んだ。何かを言おうとしてためらっているように思えた正史は再び聞き出そうとするが、それよりも早く手塚が話題を変えた。

「それより、昨日のモンスターの件だが、あれから俺なりに調べてみた」

「で、どうだったんだ?」

「確かに、モンスターの出現率はこの数日で右肩上がりだ。おまけに目撃情報に挙がるモンスターは皆、同じタイプのものである事も確認できた。今後も同じ奴らが出てくる事も考えられる。……少し、活動範囲を広げようと思うんだ。門前町と城南地区、それから北の麓付近を除くエリアには、縄張りを張っている連中はいない。すでに脱落した者達の活躍範囲だったエリアを含めれば、大変ではあるが、やれるだけの事はやろう。運命を変えられるのは、俺達しかない」

「お、おう……。てかき、今日の手塚、随分とやる気満々だな」

手塚の真剣な表情を前に、つばめはたじろぐ。

「でもまあ、オレも手塚と同じ気持ちさ。少しでも助けられる人達を、助けていかないと、魔法少女失格だしな。正史もそうだろう？」

「お、おう。俺も、人を守る為にライダーを続けてきたんだし、これからもそうさー！」

「…………お前達らしいな」

2人の姿を見て、羨ましげに呟く手塚。そこへ華乃が仕事をひと段落つけて、3人のいるカウンター席に寄った。

「…………でもつばめ。お前は、もう少し自分の体にも、気にかけて方が、良い…………」

「おっ？　氣い遣ってくれるのか？　ありがてえな！　ほくれヨシヨシ」

「ちよ、頭ワシヤワシヤしないで…………」

華乃が顔を赤らめて、つばめに頭を撫でられている。

随分と物腰柔らかくなったな。正史と手塚が同じ事を考えていたその時、カバンやポケットから耳鳴りのような音が聞こえてきた。

「！！！！」

一同は目を見開き、立ち上がる。モンスターが出現しようとしている。それも、距離はさほど遠くはない。遅れて蓮二も、急ぎ足で店の奥から出てきた。

「向こうにはすぐに戻ると伝えてある。行くぞ」

蓮二にそう言われて、正史達は立ち上がり、華乃と蓮二はエプロンを脱いでから店を出た。

その道中で、正史達は4人の人物と合流した。学校帰りの大地ら中学生組だった。

「正史さん！　皆さんも…………！」

「大地君、小雪ちゃん！　颯太君に、亜子ちゃんも…………！」

「丁度良い。このまま現場に向かおう。亜子も手伝ってくれ」

「はい…………！」

偶然バツタリ出くわしてそのまま帰宅しようとしていた4人は、正史達の背中を追った。

しばらくしてたどり着いたのは、住宅地の一角にある公園。そこに

は仲睦まじく遊ぶ幼児達と、それを見守る母親達の姿が。そして、そんな彼女らに狙いを定めているかのようには、鏡の中からシアゴーストが腕を動かしていた。やがて頃合いと見たシアゴーストが、鏡から飛び出して、砂場で遊んでいた幼児達に襲いかかる。

「ハアツ！」

だがそれは、蓮二と手塚の飛び蹴りにより妨げられた。シアゴーストは急襲に失敗した事で、近くにある電話ボックスのガラス窓へと飛び込んだ。幼児達が呆然とし、母親達が動揺で動けずにいる中、正史と小雪が幼児達を守るように寄り添い、つばめは膨れたお腹に気がつけながら駆け寄って、母親達に向かって喚いた。

「早く！ 子供を連れてここから離れろ！」

「えっ？ でもあなたは……」

「オレも後で行く！ だから、今はあの子達の安全だけを考えろ！」

「さあ、早く！」

正史と小雪が幼児達を母親達の元へ連れ戻し、母親達は妊婦に急かされる事に戸惑いながらも、言われた通りに公園を立ち去った。

周りに誰もいない事を確認した3人は、蓮二達と合流し、電話ボックスの前に立った。

「あんな小さな子を狙うなんて……！ 許さねえ……！」

「これ以上、奴らの好きにさせるもんかよ！」

正史とつばめが躍起になり、カードデッキやマジカルフォンを取り出す。大地達も隣に並んで変身の準備を進める。

「「「「「変身！」「」「」「」」」」」

〔挿入歌：Revolution〕

仮面ライダー、魔法少女に変身した一同は、ミラーワールドへと突入した。

枯れ葉の絨毯に覆われた世界に、先ほど逃げたシアゴーストが彷徨い歩いている。一同がシアゴーストの前に立ち、攻撃を仕掛けようとした時、別方向からシアゴーストが登場し、いつの間にか9体まで増えていた。

『SWORD VENT』

『SWING VENT』

九尾、スノーホワイトはフォクセイバーを、龍騎、トップスピード、ハードゴア・アリスはドラグセイバーを、ライアはエビルウィップを召喚し、手に構えた。他の面々は所持武器であるダークバイザー、短刀、肥大化した大剣を持ち、シアゴーストに斬りかかった。

「ハアッ！」

「こんのおー！」

「そおらー！」

何度も特訓を重ねてきた成果もあり、ダメージは確実に通っている。が、問題は敵の数だった。時間をかけていると、再びどこからともなくシアゴーストが参戦してくる。

「これまでと同じ、複数タイプだな！」

「個々は大したことないが……！」

「数の差がここまでハッキリ出ると、案外キツイものだね……！」

九尾とラ・ピュセルが背中合わせに戦いながら愚痴を洩らす。

その一方で、シアゴーストとは連戦になる龍騎とトップスピードは、昨日の繰り返しになる事を避ける為に、決断した。

「ああもうじれつたいなあ！」

「一気に片付ける！ トップスピード！」

「分かってらあ！」

そうやって2人は、マジカルフォンを取り出したり、カードデッキから一枚のカードを引き抜いてドラグバイザーバイを左手に持つ。

『SURVIVE』

「！ おい、無駄に力を使うな！」

早々に龍騎サイブ、トップスピードサイブになったのを見て、ナイトが注意するが、2人は聞く耳を持たない。

「良いだろ別に！」

「一体ずつ相手にするより、こっちの方が一気に倒しやすいしな！」

2人はそのままドラグブレードを持ってシアゴーストに斬りかかる。

「ハアアアアアア！」

アリスが一箇所に追い込んだシアゴーストを、ラ・ピュセルが大剣の面の部分を押し潰し、爆散させたところで、2人は辺りに注目する。途端に、彼らの耳にシアゴーストの鳴き声が聞こえてきた。それも、四方八方から。

「……いつらだけじゃない……！ まだ他にもいるのか！」

言うが早いのか、増援とばかりにシアゴーストが出現。ラ・ピュセルはアリスを守るように立ちはだかる。

「これは確かに、力の使い所だな！ アリスは後方で援護して！」

「……はい！」

『SURVIVE』

ラ・ピュセルもサバイブとなり、シアゴーストに斬りかかった。アリスもサバイブには劣るものの、懸命にシアゴーストを退けようと戦いに奮起していた。

一方、こちらも既にサバイブになった九尾、スノーホワイトペアは、迫り来るシアゴーストをすれ違いざまに斬りつけてきた。

「ヤアアアアアアア！」

スノーホワイトサバイブは豪快にフォクセイバーツバイを振り、シアゴーストを退けさせる。

『STRIKE VENT』

シザースピンチでシアゴーストを挟み込み、向かってくる仲間の元へ投げつけてから、新たにカードをベントインする。

『BLAZE VENT』

「私も！ ヤアッ！」

スノーホワイトサバイブも加勢し、2人分の『ブレイズ・ウィルオザ・ウイСП』を投げつけ、シアゴースト達はまとめて爆散した。

『SHOOT VENT』

「ハアッ！」

龍騎サバイブはカードをベントインし、ドラグランザーを隣に立たせると、迫ってくる20体ものシアゴーストに『メテオバレット』が炸裂し、押し返されたシアゴーストは爆散した。

そして、『シャドローリリジョン』で分裂したりップルは、シア

ゴーストを囲むと、上空にいるトップスピードサバイブに向かって叫ぶ。

「トップスピード！」

「任せろ！」

トップスピードサバイブはラピッドスワローから飛び降りると、後方から現れたドラグレッダーの吹いた炎に押される形で、『ドラゴンライダーキック』を地上にいるシアゴーストに当てた。シアゴーストは耐え切れるはずもなく爆散する。

『FINAL VENT』

「ハアアアアア！」

ナイトとライアはサバイブにならず、通常形態のまま、逃げようとするシアゴーストに向かって『飛翔斬』、『ハイドベノン』を命中させ、爆散させた。

「残りは……！」

「あいつらだけ！ 龍騎！」

「ツシャア！」

『FINAL VENT』

九尾サバイブと龍騎サバイブは、同時に飛び上がると、上空で回転しながら、右足を前に突き出す。すると体中を眩しいオーラが包み、勢いよくキックが放たれた。

従来のフォームの必殺技を、サバイブによって更に強化した、九尾の『ブレイズキック』の強化版『ブレイズ・バーストキック』と、龍騎の『ドラゴンライダーキック』の強化版『ネオ・ドラゴンライダーキック』が、残ったシアゴーストを難なく爆散させた。ようやく敵の姿がなくなり、マジカルフォンがキャンディー獲得の合図を知らせる音を鳴らした。

「やつと終わったあゝ。……にしても、また昨日と同じモンスターだよ。何でこんなに出てきたんだ突然？」

「分からない。だが、何かの前触れかもしれない……！」

「かもしれない……？ 絶対じゃなくて？」

ラ・ピュセルが聞き返すと、ライアは静かに呟く。

「この一件が何を意味しているのかは、今は俺にも分からない。単なる偶然が重なって起きた事で済めばそれでいいが……」

「そうなる試しはないだろうな。でなきや、俺達がこうして生き残りをかけて戦う事もなかったしな」

「……ああ」

空気が重くなり、居心地が悪くなる九尾とスノーホワイト。

何かが、この街で起こる。そんな漠然とした予感が、彼らの頭をよぎるばかりだった。

「フンッ！」

「トオッ！」

一方で、異変に気付いていたのは九尾達だけではなかった。別のミラーワールドでは、ゾルダとマジカロイド44が、大量のシアゴーストを一網打尽にしていた。

両者共にギガランチャーやギガキャノンを駆使して、シアゴーストを退けている。

『FINAL VENT』

「こいつで……最後だ！」

トドメの一撃と言わんばかりに、前方にマグナギガを呼び出し、銃口をマグナギガと接着させてから引き金を引くと、無数の銃弾が向

かってくるシアゴーストに降り注ぐ。『エンドオブワールド』を受けたシアゴースト達は爆散し、周囲は再び沈黙に包まれる。

「数だけ揃えてきたようデスが、相手が悪すぎマシタね」

マジカルキャンディーの獲得数を確かめているマジカロイドが、リラックスした声で呟く。

「さてと、そんじゃあ戻りま」

用は済んだと思ったゾルダがミラーワールドを出ようとしたその時、背後から殺気を感じつき、両腕で身を守った。

「！ 先生！ それにあなたは……！」

マジカロイドがハツとなつて振り返ると、パートナーに襲いかかるうとした、デストクロウを装着しているタイガの姿が。

「お前……！ 懲りない奴だねえ！」

ゾルダは両腕を弾き、押し返すと、その胸に向かってマジカロイドが飛び蹴りを放つ。倒れこんだタイガは、起き上がりながら、こんな事を呟き始める。

「……ねえ、聞きたい事があるんだけど」

「？」

「やっぱりき。自分でトドメを刺さないと、倒した事になんないのかな」

「……アツ？」

「光希だったらすぐに答えてくれそうだけど、もう死んじやってるし。優奈ちゃんはリュウガって奴が倒して、美奈ちゃんは、結局王蛇とカラミティ・メアりに倒された。全部、僕が倒さなきゃいけなかったはずだったんだ……！ 僕が、英雄になる為に……！」

明らかに様子がおかしい。そう思ったマジカロイドが皮肉な言葉をかけて挑発しようとするが、ゾルダが片手で制して、先に口を開いた。

「……なんかさ。お前とか浅倉とか、山元 奈緒子とか見てるとな。この戦いに生き残った者は確かに『最強』かもしれないけど……。……『最悪』って気がするよ。これなら、まだ龍騎とかの方が数倍マシかもな」

「あんな奴らと、一緒にしないでくれないかなあ！」

激昂したタイガが、唸り声をあげながら、ゾルダ・マジカロイド4
4ペアへと突撃を始めた。

全ては、英雄になる為に。

107. 英雄になる為の条件

『英雄』

才智や武勇が優れ、普通の人には出来ない事を成し遂げる者を指す言葉。

東野 智がそれを調べて知ったのは、小学生の頃。その頃は弟の光希と共にテレビの前で特撮に登場するヒーローに、釘付けになっていた。毎度の如く怪人に勝利して、皆から褒め称えられるその姿に、いつしか智は憧れを抱いていた。物静かな性格が災いしてか、家族以外の誰から見向きされていなかった智は、英雄になる事で注目を浴びようとしていた。

しかし、いざ英雄になろうと思うと考えるも、これといった才能もなければ、誇れる事もない。どうすれば振り返ってもらえるのか。そんな疑問ばかりが頭をよぎった。その間にも周りはどうどん変化していき、気がつけば弟の光希に急ぎ立てられる形で実家を出て、2人暮らしが始まり、気がつけば光希に誘われて『仮面ライダー育成計画』に手を出していた。

「僕も、こんな風になれたら、英雄に近づけるかもしれないのにな……」

自らカスタマイズした、アバター姿の仮面ライダー『タイガ』を操作しながら、そう呟く智は、いつしか、タイガの姿を英雄と重ねて、自分も同じ姿になれる事を夢見ていた。

そして、突如としてその理想はある意味で現実のものとなった。シローが彼を本物の仮面ライダーに仕立て上げたのだ。同じ時に光希も仮面ライダー『インペラー』となり、兄弟揃って異能の力を手にしたのだ。

改めて装甲に覆われた自分の姿を確認しながら、智は仮面の下で不敵な笑みを浮かべた。この力があれば、他の者が出来ない事だってやれるようになる。英雄になる事だって、夢じゃない。だが、これだけではまだ足りない。同じ力を手にしているのは、光希もそうだし、N

市には他にも仮面ライダーや魔法少女がいる。彼らとは違う形で、真の『英雄』になりたい。

そう考えていた智は不意に、今まで観てきた特撮のヒーローの事を思い出す。全てとはいかないが、ほとんどのヒーローは何らかの形で大切な人の屍を超えて、戦いに挑んでいる。なら、自分にとって大切な人が犠牲になれば、英雄により近づけるのではないだろうか。その時から、智は真の意味で英雄になる道突き進む決意をした。

そして、彼は今なお夢見ている。自ら編み出した、真の英雄になった自分が、誰かに必要とされる日を。

「ハアッ！ ダアッ！」

「ぐっ……！」

ミラーワールドの一角で、デストクローによる猛追が激しさを増し、ギガアーマーが吹き飛ばされる。ゾルダとマジカロイド44は後退しつつもマグナバイザーを打ち続け、反撃の機会を伺う。

が、突然2人の懐にあったマジカルフォンから警告音が鳴り響いた。ミラーワールドでの活動時間に限界がきたようだ。

「！ 時間か……！」

タイガと交戦する前まで大量のシアゴーストと戦っていたので、かなり時間を消費していたようだ。振り返ちにする事は叶わないと判

断したゾルダは、タイガに向かって話しかけた。

「なあ、お前さ。そんなに英雄になりたいたいんなら、絶対に英雄になれない条件が一つだけあるんだけど、教えてやろうか？」

「へえ、そんなのあるんだ」

英雄になれない条件。主に『英雄』という言葉に反応したタイガは、デストクローを下ろして聞く耳を立てる。

ようやく話し合える状況になった所で、ゾルダは冷ややかにこう言い放った。

「英雄ってのはさ。英雄になろうとした瞬間に、失格なのよ」

「……………」

一瞬にして、タイガの頭の中で何かが冷め始める。英雄は、なろうとした瞬間に失格……？ それなら、英雄を目指してきた自分の行動は……。

「要するにさ。お前、いきなりアウトってわけ」

「さすがデスね先生。ま、所詮英雄なんてもんになった所で金にならない商売デスし。というわけで、お引き取りくだサイな」

そう言つて、2人はマグナバイザーから火を吹かせ、タイガは咄嗟にデストクローを盾代わりにして柱に隠れた。ひとまずそこでやり過ぎし、反撃に打って出ようとした所で、辺りが静かになった事に気づくタイガ。ハツとなつて柱から出てみると、既に2人の姿はない。タイガが隠れた隙にミラーワールドから脱出したようだ。

『お前、いきなりアウトってわけ』

先程のゾルダの一言が、タイガの全身にこびりつく。

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアア！」

自分でも抑えきれない程に自暴自棄になったタイガは、デストクローを振り回して八つ当たりを始める。英雄を否定するゾルダとマジカロイドの顔が頭をよぎり、タイガのイライラは最高潮に達したと言つても過言ではない。

ひとしきり暴れた所で、フェンスにもたれたタイガはズルズルと腰を下ろして座り込む。そして、異様な程に腹の底から笑い声をあげる。

「そんなにみんなして、英雄である僕を否定するのか……！ ……ああ、光希や美奈ちゃん、優奈ちゃんを倒せば、8人の柱に残れば十分だと思つてたけど、もうどうでもいいや。……全員この手で倒せば、英雄になれるんだ。見せてやるよ。真の英雄に相応しいのは、この僕だつて事をねえ！ クフアツハツハツハツアハツハツハツアハツハツハ！」

乾いた笑い声だけが、ミラーワールドに響き渡る。

そして。タイガは、生き残っている仮面ライダー及び魔法少女を殲

滅すべく、狂気に満ちた笑みを浮かべながら、作戦を練り始めた。

「ほいこれ！ みんなで食べてくれよ！」

「オツ、サンキュー！ 気が効くじゃねえか。丁度健康診断で食事制限されててな。これなら問題ないだろうよ。にしても正史。お前も随分と大したやつを選んだもんだな」

「あ、アハハ……」

翌日。OREジャーナルに正史を含めたいいつもの面々に加え、つばめの姿があつた。差し入れを持ってきており、大久保は正史の頭をわしやわしやかき回していた。正史も照れており、それを見ていた島田が嫉妬のオーラを前面に押し出している。令子もその視線に気づき、少しばかり居心地の悪さを感じている。

「けどまあ、ここまで家庭的なやつも、ウチにはいないわけだしな。なあつばめ。子供が産まれてから、もしその気があれば、OREジャーナルに入って仕事でもしてみねえか？ 勿論、育児休暇も手配するし、なんならうちの会社で子供の面倒も見てやるからさ」

「へえ。考えとくよ！」

「良いんですか編集長？」

「正直人手不足つてのもあんだけどな。令子も忙しくなったら、正史だけじゃ頼りないしな」

「ちよ！ 俺だつてやる時はやりますつて！」

「……私が除け者扱いされてる」

島田が部屋の片隅で蹲っている事に、一同は気づいていないフリをしている。

真面目な話、つばめもパートナーが勤めている職場の雰囲気は悪くないと思っており、条件が整えば入社しても良いかもな、と内心決めている。

と、その時。正史とつばめの持つマジカルフォンから着信音が鳴り響いた。マジカルフォンから鳴る音は、仮面ライダーか魔法少女にか聞こえないので、周りの面々からしてみれば、突然ポケットを探りし始めた2人の様子に訝しんでいる。

「? どうしたお前ら?」

「あ、すいません編集長、ちよつと出ます!」

「あ、オレも!」

2人は部屋を出て、誰もいないのを確認してからマジカルフォンを開いた。メールが届いており、差出人はタイガだった。

珍しい相手からのメールに顔を合わせる2人だが、文面を読んで、その表情は険しくなった。

『今日の18:00に、東区の4丁目にあるN川の下流付近に来て。そろそろこの戦いを終わらせよう　タイガ』

「これって、まさか……!」

正史が息を呑んでいたその時、今度は電話をかけてくる者が。『仮面ライダーナイト』と表記されており、仲間からの連絡だと分かってホツとした正史はすぐに応答した。

「もしもし、蓮二?」

『メールの方は見たか?』

「……ああ。さつき、側にいるつばめと一緒に確認した」

『タイガのやつが、戦いを仕掛けてきた。何様のつもりか知らないが、呼び出しと見て間違いないな。恐らく全員にこのメールが行き渡っているはずだ。そうなれば、多分浅倉辺りも来るだろうな』

自然と、マジカルフォンを握る手を強くする正史。血の気が多い面々が生き残っている以上、戦いは避けられない。だが、極力同胞との戦いは避けたい正史は、どうするべきか悩んでいた。が、それを見

透かしているのか、蓮二がこう言い放つ。

『お前の事だ。ライダーや魔法少女同士の戦いに介入するか迷ってるんだろ？ 迷っているなら足手まといだ。俺と華乃はもう決めている。手塚は知らないが、大地もあの様子だと、来る可能性が高い。やつ呼び出しに応じるかはお前やつばめ次第だが、戦いの邪魔だけはするなよ』

「……」

『小雪にもそう伝えておけ』

それだけ告げると、向こうは電話を切った。しばらく呆然とする正史に、つばめが声をかけた。

「なあ、どうすんだ？ あいつらなら間違いなく向かうぜ。姐さんも浅倉も、それにスィムスィムも来てもおかしくない。正史は……」

「……いや、行くよ。行って、タイガを止める」

「正史……」

「あいつが何を目的に戦いを仕掛けようとしてるのか分からないなら、あいつから直接聞き出してやる。その上で、絶対に止めさせる。……どの道戦いは避けられないだろうけど、何もしないでジツとしてるわけにもいかないんだ！」

「……だと思っただぜ。オレも、お前についてく。お前1人だと何しでかすか分からないし」

「大丈夫かよ？ 強制参加ってわけでもなさそうだし……」

「今何もしなかったら、それこそ昇一の時みたいに、手遅れになるかもしれないねえ。もう、それだけは嫌なんだ……」

俯きながらそう語るつばめを見て、正史は自然と彼女の肩を抱きしめた。

「大丈夫。俺は絶対に死なない。もう、つばめを1人になんかささせない」

「正史……。ありがとう」

その一言で気が楽になったのだろう。つばめに笑みが戻った。

日も暮れ、人通りの少ない河川敷。そこはまさに、これから先起こる戦場の舞台に相応しいだろう。

一番乗りは、王蛇&カラミテイ・メアリペアだった。待ち時間の間、メアリは軽く銃火器の手入れをしており、王蛇はイライラを発散する為に、近くのコンクリートの壁を蹴っている。

しばらくして、2人のいる地点に続々と人影が姿を見せる。最初にゾルダ&マジカロイド44ペア。次に水辺から姿を見せたのはアビス&スイムスイムペア。すぐ後に、リュウガ&ハードゴア・アリスペア。遅れて、ナイト&リップルペア。その後ろをついて来る形で九尾&スノーホワイトペア、龍騎&トップスピードペア、ライア&ラ・ピュセルペア。総勢16名が集結し、中宿での激戦以来の大所帯と化した。が、それで全てではなかった。

「……クラムベリーとオーデインがいない」

「たまとは、連絡が取れてない。多分来ない」

ラ・ピュセルが周りを見渡しながら、スイムスイムは淡々とした口調でそう呟く。何より気になるのは……。

「……タイガの姿がないな」

九尾がそう呟いたように、肝心の呼び出し主が、一向に姿を現さな

いのである。これだけ大胆な呼び出しをしておいて、主催者が尻尾を巻いて逃げ出すほどチキンな男だったのか、と拍子抜けする一同。それを良いことに、龍騎は皆に呼びかけた。

「な、なあ。タイガがいないんじゃない、そもそも戦う必要なんてないんじゃないのか？ それよりもさ。タイガがいないならこの際、みんなで考えようぜ！ あいつの事だから、このまま放っておくわけにもいかないし、協力してあいつを……」

龍騎が皆を説得し、タイガへの対策を考案しようとしたが、不意にスノーホワイトが、

「！ 危ない！」

と叫んで龍騎を突き飛ばすと同時に、彼の足元に銃弾が埋め込まれた。みれば、カラミティ・メアリが握る銃の口から煙が上がっている。スノーホワイトの魔法が、メアリの思考を先読みした事で間一髪、銃弾の餌食になるのを避けられたようだ。

「ちよ、何すんだよ！」

「勝手に仕切らせやしないよ。主催者がいないからどうしたって話だ。これだけ集まる機会もそうないだろうしね。まとめてぶっ潰すのもアリだろ？ そう思わないかい王蛇？」

「フン。まあこれだけいけば十分楽しめるぜ、俺は……！」

「ま、ある意味でこれがベストメンバーって所か」

「なら、やりマスか？」

マジカロイドが皆に問いかけ、ナイトとリップルはすっかりその気になったようだ。リュウガとアリスも表情には出さないが、少なくとも戦いに否定的とは見えない。こうなるとスノーホワイトらの動向が気になる所だが……。

「……だいちゃん」

「俺は戦う。俺はもう、迷わないと決めてるから。守りたいものがあるから」

「……そうだね。私も、覚悟を決めたんだから……！」

「やはりこうなったか。運命は中々変え難いな」

「それでも、やるしかないんだ。運命を変えるには、僕達が頑張らな

きやいけないんだ」

「ああ。行こう、ラ・ピュセル」

心配無用と言わんばかりに、それまで非好戦的だった面々は戦闘モードに突入した。

一同、やる気を露わにしつつ、近くに点在していた鏡の破片を使つて、ミラーワールドに突入した。

「結局こうなるのかよ……！　でも、これ以上放っておくわけにもいかないし……！」

「龍騎、行こうぜ！　オレ達も！」

「あ、ああ！　絶対止めてやるからな！　ツシヤア！」

一番最後にミラーワールドへ突入した龍騎とトップスピードが現実世界からいなくなった事で、辺りは川の流れる音だけとなった。

が、しばらくして龍騎達がいた地点に、一台の乗用車が滑り込むように止められた。そこから出てきたのは、呼び出し主である東野智。

車から降りた彼の手に握られていたのは、液体が詰まっているポリタンク。車のキーを刺したままの状態で、彼は躊躇なく自家用車に向かってポリタンクから大量の灯油を注ぎ始めた。灯油特有の匂いが智の鼻を刺激するが、その時には既に智は興奮状態に近かった。

「ライダーなんて……！　魔法少女なんて、最低な奴ばっかりだよ……！　あんな奴らに、何言われたって、気にする必要、なかったかもね……！　そうだよ、英雄に相応しい僕が、全部正しいに、決まってるんだ……！　僕に逆らう奴は、みんな、消しちやえばいいんだ……！」

一心不乱に灯油をぶちまける智。やがてポリタンクの中身を空にした智は、それを放り捨てて、懐から取り出したカードデッキを、フロントガラスにかざして、腰にVバックルを出現させる。

「変身！」

独特のポーズを決めてVバックルにカードデッキを差し込むと、鏡像が重なって智は仮面ライダー『タイガ』に変身。車からではなく、川からミラーワールドに突入した。

「…………どうしよう。私も、止めなきや、いけないのかな…………？　でも、
どうやったら…………？」

その一部始終も遠くから目撃していたたまは、オロオロする他な
かった。

108. 小さな英雄

「ガイに続き、今度はタイガからの招集ですか。彼も案外、思い切った行動を取るものですね」

マジカルフォンに表示されているメールの内容を目に通したクラムベリーは、そのまま近場に放り捨ててから、今一度横になった。そこへマジカルフォンとは別の端末から、ファヴが姿を現した。

『あれ？ マスターってば行かないつもりぽん？ 行けばきつと楽しいと思うぽん！』

「そうかもしれませんがね」

『珍しく歯切れ悪くないかぽん？』

「どうでも良い事です。ただ、前回の成り行きを見るに、あまり乗り気になれないだけです。あの件で脱落したのは仮面ライダー2名。せめてあの時に6、7人死んでくれれば、今回の誘いに乗れたんですけど」

『まあたマスターのいい加減な面が出てるぽん。まあいいぽん』

「オーデインやシロー辺りが監視に出向いてくれるでしょうから、今回はパスしますよ」

『はいはい』

ファヴはそう言って、その場を後にした。山小屋に残ったクラムベリーが、天井を見上げながら、フサフサした髪をいじる。

「(さて、タイガが生き残る可能性は……、まあ、ほぼないでしょうね。となれば、残る候補生は……)」

ふと、クラムベリーは思い出したかのように上半身を起こし、魔法の国特製の端末を起動する。そこには、今回の試験の参加者の情報がプロファイリングされているのだ。そして、脱落した面々を除いて何人かのプロフィールをチェックしていると、ある人物の欄で目が止まった。

「……なるほど、これはまた随分と因果の深い。どちらに勝敗が転ぶのか、少し興味がありますね」

唇の端をつり上げるクラムベリーの瞳には、黒龍のライダー、リュ

ウガの画像が映っていた……。

そして舞台は、ミラーワールドへ。

『……』

主催者のいないステージに、総勢16名の魔法少女、仮面ライダーが己のプライドをかけて戦う。各々が武器を構え、風が動くのを待つ。

「ハアッ！」

最初に文字通り引き金を引いたのは、ゾルダだった。その銃口は、龍騎に向けられたものである。

「つて、いきなり俺かよ!?」

「龍騎！」

慌てながらも後ずさりながら、銃弾を回避する龍騎。だがその動きには危なっかしさが伺える。トップスピードは龍騎を助けようと、ラピッドスワローに跨り、空中から龍騎を救い出す。その間にゾルダは次の標的を王蛇に向ける。その銃弾をベノサーベルで弾きつつ、砂利の地面を縦横無尽に駆け回る。余裕を醸し出しているのか、それとも快楽に溺れているのか、とにかく王蛇は笑いながら銃弾を避けてい

た。中々命中しない事に苛立つゾルダに、ウイングランサーを構えたナイトが飛びかかるが、これも銃弾で怯ませる。

「ナイト！」

これを見てライアはナイトを加勢するべく、エビルウィップを片手に駆け出した。その一方で、トップスピードは次の行動を考えていた。

「下手にあの銃撃の中には飛び込めないし……。姐さんもいるし、ここは遠くから……」

『ADVENT』

「なっ……!?？ おわあ!?？」

不意に龍騎を乗せたラピッドスワローがバランスを崩した。別方向から現れたドラグブラツカーが体当たりをし、2人は地面に放り出された。2人の前に、ドラグブラツカーを呼び出した張本人が、黒いドラグセイバーを構え、その剣先を龍騎に向ける。

「逃がさん。お前とはそろそろ決着をつけようと思っていたところだ。死ねえ！」

「リュウガ……！ こんのお！」

対する龍騎も起き上がりながらドラグセイバーで受け止め、そのまま押し出すように前進した。

「お前、何でそんなに俺を恨んで……！ お前は一体、誰なんだ！」

「そんな事にも気づかないとは、つくづく平和な奴だな！ ……だが、もうそんな事はどうでもいい。そのままくたばれ！」

「んな事させるか！ 龍騎は死なせねえ！」

トップスピードも龍騎を援護する形で、リュウガへの攻撃を開始する。

「……トップスピード。お前も、あいつと同じか」

リュウガの小さな呟きは、2人の耳には届かなかった。

「ハッハッハ！ いいね良いねえ！ もっと逃げ惑えよお嬢ちゃん！ 久々のシャバだからなあ！ 弾はいくらでも残ってただよお！」

「くっ……！ 調子に乗りやがって……！」

一方で高々に笑いながら機銃を両手に持ち乱射しているカラミ

テイ・メアリを、リップルは舌打ちで一蹴する。いざとなればサバイブで圧倒する事も可能だが、これだけ敵が多い中で下手に切り札を使うわけにもいかない。奥の手として温存する事に決めたリップルは、短刀を片手に、接近戦に挑んでいく。

それを見ていたスノーホワイトが援護をしに向かおうとするが、横手から銃弾が炸裂し、スノーホワイトは軽くジャンプして回避する。着地してから顔をあげると、マジカロイド44が召喚したマグナバイザーを片手に、対峙している。

「さすがにここまで生き残るだけあつて、しぶとさはありませんね」
「……あなたが私の相手に、なるんだね」

「別に誰でもいいんですけどね。あなたに生きててもらう理由はないデスし、今更人殺ししたってなーんにも感じませんからネ。ここでサヨナラして差し上げマスよ」

「私は、死なない。絶対に生き残る！ だいちゃんと約束した！ だから……！ 戦いから、逃げたりなんてしない！」

「さいデスカ。なら、二言はありませんネ」

そう叫んで、スノーホワイトはフォクセイバーを召喚。マジカロイド44との一騎打ちに挑んだ。ブースターを駆使して動き回るマジカロイドに対し、スノーホワイトは回し蹴りなどで応戦する。

一方、スノーホワイトのパートナーである九尾は、アビスと対峙していた。フォクセイバーとアビスセイバーが火花を散らし、互いに俊敏な動きで隙を見せる事なく戦っていた。

「なるほど、この齢にしてこれだけの対応や決意……。あのお方が一目置くのも、今なら分かる」

「あのお方……？ お前のバックには誰かの後ろ盾があるというのか……！」

「答えるつもりはない。俺は知りたいだけだ。お前の内に眠る強さの根源をな！」

「何を目的としているのか知らないが、やれるものなら……！」

『ACCCEL VENT』

「やってみろ！」

九尾は高速移動でアビスを翻弄するように動き回った。

そのアビスのパートナーであるスイムスイムは、ルーラを片手にラ・ピュセル、ハードゴア・アリスに向かって振り下ろしている。「フンッ！」

ラ・ピュセルは肥大化した大剣で、刃先の鋭いルーラを受け止めている。下手に切り刻まれると、致命傷になりかねない。慎重になりつつも、反撃のチャンスを伺うラ・ピュセル。

一方でアリスは、黒いドラグセイバーを片手に、ラ・ピュセルとは対照的に攻めに入っていた。当然ルーラの斬撃で至る所から血が流れるわけだが、彼女の魔法『どんなケガをしてもすぐに治るよ』は、レアアイテムの武器をもってしても簡単には攻略できない。

隙を見てスイムスイムの右腕にしがみついたアリスは、もう片方の手でドラグセイバーを突き刺した。が、ドラグセイバーの刃先は文字通りめり込んだようにスイムスイムの腹を貫通していた。無論血が流れている様子もなく、スイムスイムは平然とした表情を浮かべている。

「アリス、下がって！」

ラ・ピュセルがそう叫ぶと、マジカルフォンをタップして召喚したエビルバイザーを左腕に装着し、ソニックブームを放った。アリスは後方に下がって避けたが、スイムスイムはその場から動かない。そしてソニックブームは、ドラグセイバー同様、彼女の体をすり抜けていった。それを見てラ・ピュセルは舌打ちをしそうになる。

「(あれも、彼女の魔法なのか……！ だとしたら、どうすればあいつを攻略できるんだ……！このままじゃ僕もアリスも、手の出しようがない……！)」

「私が、前に出て、戦います。ラ・ピュセルは、観察を、続けて」

そう言っただけに出てくるアリスだが、血だらけの右腕をラ・ピュセルが掴む。

「待ちたまえ！ これ以上君を……」

「平気、です。この魔法があれば、私は、死にません」

「それはそうかもしれないが、そんな体を見せられては、僕も黙ってい

られない……！ 大丈夫だ。僕も戦う。君を守る騎士として、何より生き残る為に、戦う！」

「……優しい、です」

そう呟くアリスの頬は、どこか紅い。そんな2人のやり取りを気にする事なく、スイムスイムは一旦周囲の状況を確認する。連絡がつかないたまはともかくとして、依然として現状を作り出したタイガが姿を現さない。何を考えているのかは分からないし、今はどうでもいい事だと自己判断したスイムスイムは、再び前進しようとするが……。

「！」

〔挿入歌：Revolution〕

スイムスイムの背後からしびれがみつくように現れたシアゴーストが、妨害工作に打って出たのだ。襲われたのは、スイムスイムだけではなく、その場にいた全員を混乱させる。

「なっ……！！」

「……アア？ なんダア……！！」

「なんだってまたこいつらが出てくるんだよ！！？」

トップスピードがそう喚く間にも、シアゴーストは四方八方から出沒。対人戦は一時中断となり、全員が一旦はシアゴーストの対処にあたった。

「き、キリがない……！！」

「ハアッ！」

「ま、また増えてるよ！」

「こいつら、一体……！！？」

その場にいた全員が、大量のシアゴーストの出沒に頭を抱える。いくら倒しても、またその背後から同じ個体がぞろぞろと姿を見せて、飛びかかってくる。ヤゴの性質を持っているはずなのに、そのしぶとく有様はどちらかといえば、ゴキブリに近いものがある。

「チィ……！！」

『FINAL VENT』

数の多さに苛立った王蛇がベノバイザーにカードをベントインしたのを皮切りに、各々が必殺の体勢に入った。

『FINAL VENT』

『SHOOT VENT』

『COPY VENT』

『SURVIVE』

アビス、ナイトが『ファイナルベント』を、ゾルダが『シユートベント』でギガランチャーを出し、それをライアが『コピーベント』で同じくギガランチャーを手に構える。

魔法少女サイドもマジカルフォンをタップし、リップルとラ・ピユセルがサブイブとなり、再度マジカルフォンをタップして必殺技を放つ体勢に入る。マジカロイド44はパートナーと同じくギガランチャーを、スイムスイムはアビスクローを、ハードゴア・アリスは黒いドラグクローを召喚した。なお、カラミティ・メアリだけは武器を召喚せず、四次元袋からロケットランチャーを取り出して構える。

龍騎も皆に続いてカードを取り出そうとしたその時、リュウガに腕を掴まれて、シアゴーストの姿が見えない方向まで引きずられていった。

「お、おい！ 何すんだよ！」

「……丁度いい。思わぬ邪魔が入ったが、好都合だ。このままサシで相手にしてやる」

「待って……！」

「龍騎！」

リュウガに連れて行かれる龍騎を見て、トツプスピードも2人を追いかけて、その場を後にした。

九尾とスノーホワイトも攻撃を仕掛けようとするが、大量のシアゴーストの波に吞まれて、段々と遠ざけられてしまった。

「ハアアアアア！」

アビスの背後にあった川から契約モンスターであるアビスハンマー、アビスラッシャーが姿を見せると、2体は吸収されるかのように合体し、太古の海に生息したとされる、メガロドンを彷彿とさせる『アビソドン』へと変化。アビスはアビソドンの上に乗り、勢いをつけると、飛び蹴りを放ち、アビソドンと共に、眼前に広がるシアゴース

トにぶつかっていく、『アビスダイブ』を放った。これによりシアゴーストは次々と爆散。

それに続く形で、王蛇の『ベノクラツシユ』、ナイト、リップルサバイブの『飛翔斬』が炸裂した。ゾルダとライア、マジカロイドの持つギガランチャーが火を噴き、シアゴーストをまとめて吹き飛ばした。スイムスイムの『アビスマツシユ』、アリスの『ドラグクローファイヤー』、ラ・ピュセルサバイブの『ハイドベノン』も動きの鈍いシアゴーストを一掃し、残党もメアリのロケットランチャーが薙ぎ払った。

辺りが爆撃の轟音から静まり返った所で、再び戦士達は体を向け合う。

「ハアツ……、やっと、戦える」

人数は多少減ってしまったものの、王蛇の口調からは不満が感じられない。依然として憎つくき相手は目の前にいる。それだけで彼にとつての戦いは充分成立するのだから。

「お前とは早いとこ決着つけて、永久にお別れしたいよ」

そう言つて前に出るゾルダだが、不意にその体がグラついて、頭を抑え始めた。

「……ウツ！」

「（！ あいつ、まさかまた……！）」

その光景に見覚えのあるナイトが駆け寄ろうとするが、パートナーの方がいち早く動いていた。

「先生……！ 無理をなさらずに、ここは私が行つてきます……！」

「何をコソコソ話してるのか知らないけど、あたしには分かつてるよ！ 今のおんたじや」

『FINAL VENT』

と、ここでメアリの言葉を遮るかのように、電子音が響き渡る。

その場にいた一同が辺りを見渡していると、咆哮と共に現れた白い影が、マジカロイドを押し倒し、そのまま引きずっていった。

「ヌオオオオオオオオオオ？」

「マジカロイド！」

仰向けになりながら引きずられ、背中から火花を散らすマジカロイ

ベルを振り下ろす。タイガがいたぶられている間に、隙ありとばかりにゾルダがギガランチャーで王蛇とタイガを狙うが、紙一重でかわされてしまう。

「お前は、後回しだ」

『ADVENT』

「！ 先生！ 後ろデス！」

「何っ!?？」

マジカロイドがそう叫び、ゾルダが振り返ると、王蛇の契約モンスターであるベノスネーカーがゾルダを見下ろしている。ギガランチャーから弾を発射するよりも早く、その口から毒液が吐かれた。

「手を離せ！」

「！」

ライアがとっさにそう叫び、ゾルダはギガランチャーを手放した。するとギガランチャーは毒液を浴びて、ドロドロと溶けていった。もしライアに言われて手放さなかったら、確実に自分もギガランチャーと同じ運命を辿っていただろう。仕方なく腰に提げていたマグナバイザーで応戦する事に。だが、マグナバイザー如きでは、契約モンスターの前では豆鉄砲とさして変わらない。

「ゾルダ！」

「おっと。あんたらの相手はこいつらだ！ 来な、メタルガラス、エビルダイバー！」

カラミティ・メアりに呼ばれる形で現れた、黒く染まったメタルガラスとエビルダイバーが、その場にいた他の魔法少女、仮面ライダーに襲いかかった。スイムスイム、アビスはエビルダイバーを、ライア、ラ・ピュセルサバイブ、ハードゴア・アリスはメタルガラスを相手にし、ゾルダに加えてある程度回復したマジカロイド44はベノスネーカーを相手にした。そしてリップルサバイブは、カラミティ・メアりと再び対決する事に。

その間にも、タイガと王蛇の対決は一方的なものとなっていた。

「来いよ。遊び方を教えてやる」

肩の力を抜いているような動作を見せながら、強烈な蹴りでタイガ

を圧倒する。

「クウツ……！ まだ、だ……！ 僕が、英雄に、なる為には……！」
「英雄ねえ……。興味ないな、俺には。戦えれば、それで十分だろお！」

何度もタイガの腹を踏み続けて戦いに悦を感じ始める王蛇に対し、タイガは最早声が聞こえてこないほどに吐き気が込み上げてくる。

その後も殴りや蹴りが入り、段々と意識が朦朧とし始めるタイガ。だが、英雄と呼ばれるに相応しい自分が、こんな所で死ぬわけがない。そう自分を奮い立たせて、反撃を試みるタイガだが、相手が悪いこともあり、それも無謀に近い。

そのすぐ近くでは、ゾルダとマジカロイドがベノスネーカーから距離を取りながら銃弾を撃ち込んでいる。そして、近くに王蛇の姿を確認したマジカロイドが、そこへ向かうようにベノスネーカーを引きつけた。彼女の意図を理解したゾルダと肩を並べながらベノスネーカーを誘導し、向こうが毒液を再び吐こうとした瞬間、2人は息を合わせて、横に飛び退いた。それにより、毒液は2人の間をすり抜け、直線上でタイガにトドメを刺そうとしていた王蛇の仮面の左半分に降り注いだ。

「ウツ、グアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

自らの契約モンスターの攻撃をまともに浴びてしまい、悶え始める王蛇。その隙に、タイガはうさぎの如く跳ねるようにその場から遠ざかった。仮面に覆われている以上、毒液を受けても死ぬ事はないだろうが、それでもかなりのダメージにはなっているのだろう。事実、それまでの荒々しい様子はなくなり、毒液を浴びた左半分を押さえながら狂ったように動き回っている。

「チツ……！ 王蛇！」

これを見たメアリが舌打ちしながらも、リップルサバイブを蹴つて後ずらせると、王蛇を抱えてミラーワールドを出た。ゾルダとマジカロイドもそれに続く。

リップルサバイブも追いかけてしようとするが、時間切れとなり、ラ・ピュセル同様、サバイブから元のフォームに戻ってしまい、更にはメ

アリアが呼び出したモンスターが足止めに徹しており、ミラーワールドを出れない。

どうにかして引き剥がそうと、手裏剣を構えるリップルだったが、『グオオオオオオオオオオオ！』

どこからともなく聞こえてきた咆哮と共に、2体のモンスターに進してきたのは、灰色のメタルグラスだった。

「同じモンスターが、2体……!?？」

「いや、黒い方は王蛇とメアリの契約しているモンスターだから、あの灰色の方は、オリジナル。となると……」

ライアが周りを見渡すと、柱の奥から顔を覗かせていたたまが、ライアから視線を向けられた事で慌てて物陰に隠れる姿が映った。たまが消えた方角へ、仲間であるスィムスィムとアビスが向かい、現場は先ほどと打って変わって静かになった。

なぜ自分達を助けたのかは分からなかったが、お陰で道が開けた事に変わりはない。

「よし、俺はゾルダ達の方へ向かう。ラ・ピユセルとアリスは、九尾とスノーホワイトを探しに行ってくれ。ナイトとリップルは、龍騎とトップスピードの方だ。どちらもまだそう遠くへは行っていないはずだ」

「分かった」

「ライアも気をつけて！ まだ王蛇が暴れているかもしれないから！」

「心得ているさ。そっちも気をつけろよ」

そう言っただけで各々は3方向に分かれていった。

ライアがミラーワールドを出て現実世界に戻って来た時、目の前に広がっていた光景はと言うと……。

「北岡あ！」

「先生離れて！」

変身を解いた浅倉が、同じように変身を解いている北岡に掴みかかり、鉄パイプで殴ろうとしていた。その左目は毒液の影響で炎症を起こしているのか、赤く腫れている。真琴が助けようとするが、それを

奈緒子が腕を掴んで妨害している。

「ハアッ！」

「チイツ！」

ライアは真っ先に奈緒子に飛びかかって真琴を引き離し、今度は浅倉と北岡を引き離すと、そのまま浅倉を殴り倒した。

「貴様あ……！」

「お前には色々と借りを返さなければならぬ事があるが、今は後回しだ」

ライアを睨みつける浅倉。その隙に奈緒子が、近くにあつた乗用車に向かって駆け出す。逃走を試みるようだ。

「浅倉！」

「！」

浅倉はライアを押しのとけると、ドアを開けて助手席に乗り込む。と、その時、人一倍鼻の効くライアが、ドアが開けられた瞬間に異臭を感じ取った。空気よりも重苦しい、独特な感じが、一つの可能性を導き出す。

「（これは、油……、いや灯油か！ まさか……！） ダメだ！ キーを回すな！」

ライアがとつさに、運転席に乗り込んだ奈緒子を呼び止めるが、時すでに遅し、奈緒子は勢いよくキーを回し、エンジンをかける。

その直後、ライアの予想通り、乗用車にぶちまけられていた灯油に引火し、内部から大爆発を起こして、外にいた3人はバックファイアの如く吹き飛ばされた。

「真琴！」

北岡は、衝撃波を受けた、コンクリートの壁に頭を打ち付けて倒れこもうとしている真琴を抱き抱え、その場から遠ざかろうとする。

「ウアアアアガアアアアアアアアアアアアアアア！」

すると、割れた窓ガラスから男のものと思しき腕が炎の中から伸びてきて、北岡の腕を掴み、引き摺り込もうとした。浅倉だ。奈緒子の姿は見えないが、このままでは北岡も真琴も道連れにされてしまう。

「北岡！」

すぐさまライアが介入し、エビルバイザーで浅倉の腕を叩いた。それにより浅倉の手は離れ、雄叫びと共に再び炎の海の中へ。

「今のうちに！」

「あ、ああ」

ライアは北岡の背中を押す形で、その場から遠ざかる。ようやく日の当たる場所まで逃げた所で、ライアは変身を解いた。

「あの乗用車……。俺達が来た時にはなかったはずだ。恐らくは……」

「間違いないね。あの英雄気取りの仕業だ。まったく、小物のくせにやってくれ……！」

不意に北岡の声が詰まったかと思うと、気絶している真琴を抱えたまま、地面に倒れこんだ。

「！　しっかりしろ！」

手塚は必死に北岡の体を揺するが、反応はない。何が起きているのかは分からないが、只事ではないと判断し、すぐに携帯を取り出して救急車を呼ぼうとする。

刹那、手塚の後方で轟音が響き渡り、背中が熱くなった。振り返ると、先ほどまでいた地点には炎が吹き荒れている。ナイト達がいなかったのが不幸中の幸いだったようだ。手塚は、車内にいた2人の安否が気になりつつも、しばらく呆然とした表情で、火柱を見つめていた。

「クツフツフ……！ 今頃、誰かが、車のエンジンをかけて、ドガーン……！ これで、また1人……！ また英雄に、近づいたんだ……！」
N川から少し離れた街の中を、変身を解いた智が王蛇に蹴られた腹を押さえながら、ヨロヨロと歩いている。その表情は苦悶ではなく、恍惚としたものが伺える。

「ライダーも、魔法少女も、ただの人間なんだ……！ 初めから、こうすれば良かったんだ……！ こうすれば、もっと早く、英雄になれたかもしれないんだ……！ でも、もう大丈夫だ……！ この調子で、僕は、真の……！」

『英雄になれない条件が、1つあるんだけど、教えてやろうか？』

不意に智の脳裏に、北岡のあの言葉が思い浮かぶ。バカバカしいと思いつつ、記憶から消そうとするが、その言葉がリピートされてしまう。

『英雄ってのはさ。英雄になろうとした瞬間に、失格なのよ』

「……そんなわけない。そんなはずない！」

『お前、いきなりアウトってわけ』

「黙れ……！」

誰もいない歩道で、智の怒声が響き渡った。

しばらく歩いていくうちに、大通りに出た智。交差点に差し掛かり、信号待ちをしていると、向かい側にまだ小学生に満たないくらいの男児2人と、その父親と思しき男性が手を繋ぎ、仲睦まじく待っている姿が。その姿に、かつてまだ、ヒーローを夢見ていた頃の自分と弟、そして父親を自然と重ねていた。

「光希……」

あの頃は、まだヒーローに憧れるだけだった。テレビの奥に映る、弱い人々を守る、そんな英雄になりたい。それが智のヒーロー像だった。だが哀しいかな、現実はそれらを覆していく。

そしてそれは、いつしか智のヒーロー像を歪める結果となり、弟を手にかけてしまった。もう、目の前にいる親子のような時間は、戻ってこない。

だが、それでも良いと思っていた。ヒーローは常に孤高の存在でなければならぬ。そこには弟やパートナーの関係は存在しない。英雄は、1人だけで十分だ。そしてその英雄とは……。

信号が後になり、父親は2人の子供を抱き抱え、横断歩道を渡る。智も歩き出し、中間地点に差し掛かった、その時。

前方に見えた、信号無視しているトラックが急に左に曲がった。進行ルート上に、前から歩いてくる親子が。いち早くそれに気づいた智。遅れて迫り来るトラックに気づいて、驚きのあまり動けない父親。

危ない。

そう叫んだその時、智は無我夢中だった。反射的に親子を突き飛ばし、振り返った時には、一瞬だけトラックの姿が映り、後は視界が歪んで頭が揺らされる感覚と共に、目の前に青空が広がった。

「……え」

「? どうした」

「声が……。誰かの声が……」

大量のシアゴーストを退け、一旦ミラーワールドを出て変身を解いた大地と小雪。元いた場所からは少し離れており、仲間と連絡を取ろ

うとした矢先、小雪が微かではあるが、心の声と思しきものを聞き取った。周りには2人以外誰もいないので、あり得るとすれば、小雪の持つ魔法によって感知されたと推測される。変身前でこんな事は初めてだった。サバイブの力に目覚めた事が関係しているのだろうか。

ともかく、声の正体をより深めるために、今一度2人は変身。スノーホワイトはそのまま魔法を行使し、九尾はパートナーカードを引き抜く。

『MIND VENT』

すると、九尾の耳にも確かに声が聞こえてきた。それもかなり弱々しい。

『どうすれば……、僕は……』

何を困っているのかは、現時点では分からない。声は段々と小さくなっていくのを感じた2人は、声のする方を目指して、なるべく人目につかないように電柱を駆け上がり、電線の上から地上を見下ろす。N川から少し離れた街中に、明らかに不自然な人集りが見えた。その中心には、1人の男性が倒れている。声の発信源はあそこか。

2人は路地裏に降りて変身を解いてから、人集りの方へ向かった。すぐ近くにトラックが停められており、次第にまた野次馬が集まってくる。

どうにかして人集りを掻き分けて、倒れている男性の姿を確認できた。腕からは血が出て、明らかに意識が朦朧としている。倒れている男性に向かって、父親と思しき男性が必死に声をかけており、その息子達であろう兄弟が、何が起こったのか分かっていない表情で、倒れている男性を見つめている。

「大丈夫ですか!?? しっかりしてください!」

「いや、触らない方が良い!」

「おい、救急車はまだかよ!」

「どうしよう……!」

周囲の人々が騒ぐ中、小雪の耳には、倒れている男性の声しか聞こえない。小さく、弱々しく、今にも消えそうで、なのにはつきりと聞

こえてきた。誰に対する投げかけなのかも分からない、困ったような声だ。

『なろうとした、瞬間に、失格……。……じゃあ、僕は、どうやって……。英雄、に、なるの、かな……。次は、誰を……。……ねえ、誰か……。答、え……。て……。』

そこで、声が出て途絶えた。ハツとなつて顔に注目すると、目が閉じられている。

その一方で、大地は倒れている男性のポケットからはみ出ている、ケースのようなものを凝視していた。青色と、金色の装飾が施されたケース。自分が所持しているものと同系統のアイテム。

2人は察した。英雄を目指していた、仮面ライダー『だった』1人が、今、ここにいる。

小雪は知らぬ間に拳を握っていた。大地は無表情のまま、男性を見つめていた。やがて遠くからサイレンが聞こえてきて、2人はその場を離れた。

「だいちゃん。あの人……。』

「……。』

大地は答えない。ただ、前だけを見つめている。少し歩いた所で、振り返る。人集りで姿は見えないが、先ほどの光景から察するに、親子を助けようとした結果、迎える事となった、自称『英雄』の結末があれなのだろう。

くバカなやつく

英雄になろうとも思わない少年の皮肉な呟きは、冬風によって掻き消された。

翌日。

新聞の中に、小さくではあるが『親子を救った英雄』として、『東野智』の名が記載されていた。

《中間報告 その11》

【タイガ（東野 智）、死亡】

【残り、魔法少女10名、仮面ライダー9名、計19名】

109. 因縁の再会

タイガの脱落が確定したちやうどその頃。

ミラーワールドの一角でまた一つ、運命の歯車が動き出そうとしていた。

「フンッ！ ハアッ！」

「ぐっ……！ こんのお！」

側から見れば、同一人物が殴り合いをしているように見える光景だが、その中にいる者は全くの別人だ。色もまた、赤と黒で分けられている。

龍を彷彿とさせる容姿の2人が、激しく対立している。状況は僅かながら黒龍の方が押しているようにも見える。

「ダアッ！」

「そんな単調な攻撃が、俺に効くとも?」

「なっ!? グフッ……！」

龍騎が突き出した右ストレートはまるで予期していたかのようにかわされ、カウンターをくらった龍騎は吹き飛ばされる。リュウガは更に追い討ちをかけるように、龍騎の腕を掴んで無理やり立ち上げると、その顔を殴り続ける。

「グハッ!? ……ウオオオオオ！」

いつまでもやられっ放しのままではいられないと本能的に感じ、突き出した腕を掴んで背負い投げの体勢に入る。対するリュウガは体を浮かせながらバランスを取り、地面に着地すると龍騎を掴みなおしてフルスイングで投げ飛ばした。地面を転がる龍騎は、息も絶え絶えになりながら起き上がる。

「何、で……！ 何で、俺の行動が、読まれちゃうんだよ……！」

「当然だ。俺とお前の姿がよく似ているように、俺とお前には戦うべき理由がある。その運命からは、逃れられる術はない」

「運命……だと！」

そのワードに反応したのか、龍騎は握り拳を固める。

「そんな運命、簡単に受け入れたらそれでおしまいだ……！ 俺は自

分の手で、運命を変える！ 守ってやるんだ、大切な人を！」

「それこそが、お前の弱点だ」

「何!?!?」

「誰かを守る為に変身？ お前に出来るはずもない。否、すでにお前は2度も守りきれなかった事に、まだ気づいてないのか」

「!?!? どういう、事だよ……! おい、お前は、一体……!」

リュウガの口調に訝しむ龍騎。だがリュウガは聞く耳を持たない。そればかりか、憎悪を吐き散らすようなオーラを見せつけている。

「あの女と同じだ。俺の事に気づく素振りすら見せない。結局お前にとって、俺はその程度の存在する価値だったわけだ」

そう言っつてリュウガが取り出したのは、金の指輪。レアアイテムの一つで、龍騎には見覚えがあるものだった。

「! それ、まさかファムの……!」

「懐かしいだろ？ これはあの時、あの女を葬った時の戦利品だ。正直こんなアイテムを持っていたところで使い道が無かったが、レアアイテムである以上、貰っつておいて損はないだろ？ 寿命を削つてまで買った度胸は褒めてやるが、所詮は宝の持ち腐れ。脱落は必然だったわけだ」

「お前……! お前がファムを、美華を……!」

ファムを、かつての想い人を殺した相手が、目の前にいる。龍騎の中で怒りがこみ上げてくる。段々と理性を失いつつある龍騎の背後から、声突き刺さった。

「龍騎落ち着け！ 怒りに囚われてんじゃねえぞ！」

「! トップスピード……!」

それは2人の後を追つて駆けつけていた、龍騎のパートナー。そして今は、龍騎が全力で守りたい存在。

「あいつに何焚きつけられたかは知らねえけど、目先の復讐で戦おうとすんな！ お前には戦う理由が、守りたいもんがあるんだろ!?!?」

「だったらそれを忘れんな！」

「!」

トップスピードの喝が功を奏したのか、龍騎は次第に冷静になる。

「……ありがとう、トップスピード。俺、もう大丈夫だ。……ツシヤア！」

「……ほう。パートナーの一言で立ち直ったか。バカらしく突撃してくるかと思っただが、前よりはマシになったか」

「何の事を言ってるのか分からないけど、俺達は支え合って、生き残るって決めたんだ！ もうあの時みたいな過ちは犯さない！ 俺はお前に負けない！」

「その言葉、そのまま返してやろう。俺は、お前だけには負けるつもりはない！」

『SWORD VENT』

2人の龍騎士は、ドラグセイバーを手に持ち、すぐさま交戦を始める。激しい打ち合いが続き、火花が散る。何度も背後を取ろうとするリュウガに対し、龍騎は直感で防いでいく。トップスピードは介入する事も忘れて、その戦いを見届けている。

『STRIKE VENT』

「ハアアアア……！」

龍騎が新たなカードをベントインし、ドラグクローを装着した右腕を後ろに引く。

それに対し、リュウガが引き抜いたカードは……。

『CARSD VENT』

「ダアアアアアアア！」

『ドラグクローファイヤー』をリュウガめがけて放つ龍騎。軌道はずれておらず、確実に命中している。それはトップスピードの方でも確認できた。にもかかわらず、リュウガは炎の波に吞まれる事なく、悠然と立っていた。いくら仮面ライダーといえど、直撃を受けて吹き飛ばされないのはおかしい。

すぐさまその原因が何なのかを察したのは、ドラグクローファイヤーを放った本人だった。

「！ まさかそれって、レアアイテムの……！」

「ファムに対して使った時もあるよ。お前やファムを抹殺する為に購入したアイテムだが、予想以上に役に立った」

「俺とフアムを……！ お前、それだけの為に寿命を!?？」

「あんだ、一体何考えてんだよ！ そんなに自分の命が惜しくないのかよ!?？」

トップスピードも喚き立てるが、リュウガは気にも留めない。

「言ったはずだ。俺は結局、お前やフアムにとつて、いてもいなくてもどっちつかずの存在。お前達を道連れに出来るのなら、本望だ！」

「どうしてそこまで……！（もしかして、俺はリュウガの正体を知ってる……？）」

頭の中で疑問が湧き上がるが、ずっと考え込んでいる暇はない。

リュウガの猛攻がより一層激しくなったからだ。

『GUARD VENT』

ドラグシールドを装備した龍騎は、リュウガの攻撃を凌ぎながら、隙を見て受け流すように動き回る。リュウガのバランスが崩れ、前のめりになったところで蹴り倒して距離を取り、カードデッキから1枚のカードを引き抜く。と同時に周囲に炎が吹き荒れ、突き出した左腕のドラグバイザーがドラグバイザーツバイへ。口の部分の装填口にカードを差し込むと、

『SURVIVE』

という電子音と共に、龍騎は強化形態である龍騎サバイブへ。そしてドラグブレードを展開し、リュウガに斬りかかった。サバイブの恩恵もあって、龍騎の攻撃は一つ一つが重くなり、リュウガが段々と下がり始める。が依然として引き下がる様子は見せない。それだけ龍騎の抹殺への執念が深い証拠だ。

「ダアッ！」

龍騎サバイブも負けじとドラグブレードを振り下ろし、対抗している。リュウガが一步引いて、斬撃を紙一重でかわすと、体勢を整える為、右手首を右腰に当てるようにスナップを利かせた。

「！ 今のって……！」

それを見た龍騎サバイブの思考が、一旦停止した。今しがたリュウガが行なった動作。龍騎サバイブは、城戸 正史は、それに見覚えがあった。随分と久々に見た事しか思い出せない為、まだ確信は持てな

いが、もし、リュウガの正体が自分の思い浮かべた通りの人物だったとしたら……。

「今までの事も、全部説明がつく……！」

出来る事なら外れてほしいと思いつつも、龍騎サバイブは再び接近戦へ。

「サバイブの力を使っているからと言って、調子に乗るのもそこまでだ」

「！ ハアッ！」

ドラグセイバーの突きが龍騎サバイブに襲いかかるが、ドラグブレードを盾代わりにし、必死に踏み止まった。力が拮抗する中、最初に動きを見せたのは、リュウガだった。

「オオオオオオオ！」

足払いして地面に寝かせた後、ドラグセイバーを絶妙なタイミングで振り下ろし、龍騎サバイブに対して死角を作らないように、狙いを定めている。

これに対し龍騎サバイブは、右に体を捻って回避し、戻った反動でリュウガの脇腹を蹴り上げた。リュウガの口から始めて苦悶の息が洩れる。よろめくリュウガに対して追い討ちとばかりに蹴りを叩き込み、リュウガを遠ざけた。

芯に命中したのか、リュウガはよろめきながら後ずさっている。今なら龍騎サバイブの猛攻に晒されるほどに隙ありだ。

「いけるぞ龍騎！ …このまま……！」

トップスピードが龍騎サバイブに向かって声をかける。が、どうした事か。龍騎サバイブは折角のチャンスにもかかわらず、肩で息をしながら、リュウガの様子を眺めているばかり。まるで何かに動揺しているみたいにも見える。

何故反撃しないのか。トップスピードが声をかける前に、龍騎サバイブが口を開く。

「……子供の頃から、ずっと遊んでいた友達に、剣道がめちゃくちゃ上手い奴がいたんだ。そいつの試合は必ずといっていいほど観に行つて、その素振りも、何度も見てきた……」

「……」

リュウガは口を挟まず、ジツと龍騎サバイブを睨みつけている。

「それにもう一つ。美華が不良に巻き込まれかけた時、俺とそいつは必死になって美華を守る為に、喧嘩を挑んだ。殴ったり殴られたりの繰り返しで、俺がヤバくなつた時は、そいつは自分の事よりも俺の無事を優先して……。独特のポーズで、俺を奮い立たせてくれた。……そうだよ、お前がさつき見せた、そのスナップが、まさにそうだ」

「……」

「ど、どういう事だよ……?」

トップスピードが困惑する中、龍騎サバイブは震えながら、左手でリュウガを指差す。

「……お前、なのかよ！ 銀斗！ 黒崎くろさき 銀斗ぎんとが、リュウガ……!」

「やつと気づいたか。まあ、ファムよりかは鈍くなくて幸いだつたよ」
トップスピードには何が起きているのか、全く理解不能だった。話がよく見えてこない。先ほどまで確かに龍騎サバイブの方が僅かに押ししていた。が、いつの間にか両者の形勢が逆転している。正体を明かされてもなお冷静なリュウガと、狼狽する龍騎サバイブ。

「何で……! 何でお前が、仮面ライダーに……!」

「それを知って今更どうする。俺がライダーになつた目的はただ一つ。お前と美華を、この手で葬る事だ!」

不意に殺気立ったオーラを放ち、突進してくるリュウガ。不意の体当たりに対応できず、吹き飛ばされる龍騎サバイブ。そして彼はそのまま、背後にあつた、誰かが放置したままであろうガラスへと吸い込まれるように転がり、現実世界に戻ると同時に、変身が解けた。

「正史い!」

トップスピードがリュウガを追い越して現実世界に戻り、パートナーの無事を確認する。ぐったりしている彼は、幸いにも大きな怪我は負っていないようだ。

ホツとしたトップスピードは、そこで背後に人の気配を感じて振り返ると、ミラーワールドから出たリュウガが立っている事に気付いた。トップスピードが警戒する中、正史は苦しい表情を浮かべなが

ら、膝をついて起き上がる。

「お前が、リュウガだったのか……。でも、どうして……。何で、美華を殺して……！」

「さっきからそんな質問ばかり、聞き飽きたな。……まあいい、どの道お前のその声も姿も、見納めになるだろうからな」

「さ、さっきから何言ってるのか分かんねえぞ!!? 大体、あんたと正史はどんな関係なんだよ!!? ダチなのか、それとも同級生なのか?」

「……どっちも、だよ。俺と美華の、友達だ。子供の頃から、ずっと……」

声を掠れさせながら、正史が答える。それに対し銀斗は鼻をフンと鳴らす。

「正直、お前に友達と言われて気分が優れないが、事実だから今回は大目に見てやる。……そうだ。俺は黒崎 銀斗。お前のパートナーとは、学生時代からの旧友だった」

リュウガはそう言つて、カードデッキをVバックルから取り外す。ガラスが割れるような音を立てて鎧は霧散し、中から黒いコートを羽織った、黒髪の青年が露わになる。

銀斗はトップスピードに語りかけるように、その過去を吐露する。

「家が近かった事もあつて、俺と正史は毎日のようににはしやぎ回つていた。性格こそ違ったが、根暗な俺をお前や中学からの付き合いだった美華はいつもバカみたいに手を取り、その度に俺を日の当たる場所まで連れ出した。……今にして思えば迷惑千万だったよ」

「……」

「そんな俺達も高校生になり、ある転機が訪れた。それが美華からの告白だった。高校生活もあとで1年に迫った頃に、俺に想いを馳せていた美華の告白を受けた時は、受験で悩んでいた俺にとって良い薬だった。……だが哀しいかな。その頃は俺も恋愛下手でな。不器用さが災いし、結局長続きしないまま、あいつはあっさり俺との縁を切った。そしてそんなあいつが次に相手に選んだのが、子供の頃からバカでお人好しな正史だった」

「そんな事が……」

トップスピードが思わずそう呟くように、パートナーとリュウガの知られざる過去を聞いて、彼女は上手く言葉が思いつかない。正史と美華の関係はこの魔法少女、仮面ライダーの世界を通じて知れたわけだが、壮大なストーリーりまでは気づいていなかった。

「言っておくが、その頃はまだ正史に寝返った事自体を恨むつもりはなかった。自分の不器用さが招いた失敗だ。それを逆恨みにする事など、考えもしなかった」

「だったら、何であんたは正史をそんなに強く恨んで……」

「全ては、お前が美華と破局した事から始まったんだよ」

「！」

と、ここで始めて正史の目が見開いた。

「お前なら、美華を幸せにできると信じて、俺は敢えて手を引いた。それなのに、このザマは何だ。理由はどうであれ、美華はその身勝手さを発揮し、正史は美華との縁をあつさり切った！俺が本来手にするはずだった幸せを、お前達が、お前が奪ったも同然だ！」

段々と語気を荒げる銀斗。正史は何も言い返せない。まさか友がそんなにも重い決意を固めていたなんて、思いもしなかったから。

「……そして俺は、お前との縁を切った。人知れずお前達の前から姿を消しても、お前達2人は気にも留めてくれなかっただろ？結局、俺はお前達にとって何の価値もない、見せかけの友情という手のひらで踊らされていた、哀れな道化を演じさせられていたにすぎない」

「ち、違う！俺は、そんな事……！」

「……だが、それで良かったのさ。おかげで俺は、心の慰めと称して、『仮面ライダー育成計画』に着手し、その結果、シローからのスカウトを受けて、俺は仮面ライダーの力を手に入れた。常識には捉われなない、常人を圧倒する力をな」

そう言っつて両手を広げる銀斗。その両腕には外からも分かる通り、力が込められている。

「そして仮面ライダーになって幾分か経つうちに、俺に復讐の好機が訪れた。それが、仮面ライダーファム。そして仮面ライダー龍騎。お

前達2人の登場だった。ファヴとシローによって生き残りをかけたサバイバルゲームが始まり、情報収集で先手を打つ為に、あらゆるネットワークを介し、お前達の正体を掴めた時は、色々と昂ぶったさ。ましてやお前と同じ容姿だったと知った時は、奇妙な因果さえ感じた」

「……」

「同じ仮面ライダー同士なら、このゲームを介して、何の違和感もなく抹殺できるのだからな。そしてあの日、俺は一つ目の復讐を果たした」

「！ ファムを殺した、あの時の事かよ！」

トップスピードが声を上ずらせる。

「そうだ。奴も最後の最後で俺の正体に気づいたようだが、そんな事はどうでも良かった。本当に憎むべき相手は、最後にとっておいて正解だった」

銀斗は冷めた目つきで、愕然とする正史を睨みつける。

「もう分かっただろ。何故美華が殺されなければならなかったのか。そして俺が、仮面ライダーリュウガとして、生き残る理由もな」

「……俺が」

正史は両膝をつき、青ざめた表情を浮かべた。トップスピードが声をかける前に、正史の口が開く。

「俺が、美華を、幸せにしてやれなかったばかりに……！ 銀斗の気持ちに、気づいてやれなかったばかりに……！ お前はライダーの力で、人を殺して……！ 美華も、死なせてしまった……！ 全部、俺が……！」

「そうだ。全部、お前のせいだ」

銀斗の冷酷な一言が、正史の胸の奥に突き刺さる。

「だが、仮にもお前は、俺の友だった。過去を反省し、全てを俺に委ねると約束できるなら、少しぐらいは選択の余地を与えてやっても良いだろう」

「！」

「受け入れろ。お前の運命の末路を。お前の存在を消す事で、俺はよ

うやくこの地獄から解放される。お前が死を受け入れた時が、俺の戦いの終わりだ」

「なっ……!?? お前、無茶苦茶言ってるじゃねえぞ！」

「お前は黙っている」

銀斗はトップスピードを一蹴し、手に持っていた黒いカードデッキをかざす。

「お前が死を受け入れれば、お前のパートナーに手を出す必要もない。勿論その仲間もだ。そして俺も、自らの死を受け入れると約束する。お前1人の死が、結果として生存できるものを2枠も増やせる。お前の言う、仲間を死から守り抜く方法として、これ以上に最適な方法はないだろ？ パートナーをそんなに守りたいのなら、本望だろう」

「……！」

「変身」

銀斗は静かにそう呟き、腰につけられたVバックルにカードデッキをはめ込む。鏡像が重なり、銀斗の姿は黒龍を彷彿とさせる『リュウガ』へと変貌する。そしてトップスピードを突き飛ばし、呆然とする正史の首根つこを掴んで持ち上げた。

「ウツ、グアツ……！」

「受け入れる。自分の罪を。それが、美華に対するせめてもの慰めとしろ」

「……！」

何かを諦めたように脱力する正史を見て、リュウガは仮面の下でニヤリと笑う。そして、空いている左手で正史の首を掴もうとした、まさにその時。

「ウオオオオオオ！」

横から強い衝撃がリュウガを襲い、正史の首から離れて地面を転がった。起き上がったリュウガの視線の先には、ラピッドスワローから降り立って正史の横に立つトップスピードの姿が。

そういえば、あいつのパートナーはそんな魔法を使えたな、と思いつつ、再び正史に手をかけようとするが。

「それ以上、正史に近づくんじゃねえ！」

トップスピードはマジカルフォンをタップし、ドラグセイバーを構える。

「あんたがよっぽど正史を恨んでるって事はよく分かった！ 確かに正史にだって、悪い所があるのは分かっている！ 大切な時間を壊されて誰かを恨む気持ちだって、オレも分かる！ けどなあ、そんな理屈を並べた所で、こいつがオレの目の前で殺されそうになつてるのに、見過ごせるほど、オレだってバカじゃねえんだよ！」

「……お前もその男といつまでもダベっていれば、美華と同じ運命を辿るだけだ。お前にも生き残りたい理由があるんだろ？ そんな男とい続けければ、お前も遠からず破滅の運命を辿る」

「……だとしてもー」

トップスピードは思わず腹に手を当てて叫ぶ。外見からは分からないだろうが、そのお腹には、託された命が宿っている。その命を産み落とし、精一杯育てて幸せな時間を、パートナーと共に過ごす。それがトップスピードの、室田 つばめの生きる理由と決めており、その芯を捻じ曲げるつもりは、毛頭ない。

「オレは、正史と一緒に生きるって決めたんだ！ オレも正史も、同じように取り返しのつかない罪を犯しちゃった。それを見て見ぬ振りしちやいけない！ 憎しみとか恨みとか、そんな重いもんはちゃんと受け入れなくちゃいけないんだよ！ だから……！ こんな所で勝手に死ぬ事を受け入れるなんて、絶対許さねえからな、正史！」

「……」

その一言で一瞬だけ我にかえる正史。

その一部始終を見ていたリュウガは肩を竦める。

「自分から破滅の運命を選ぶとは、罪深い奴らだ」

「なんとでも言いな！ オレはもう、選ぶ事を怖がったりなんかしない！ ……行くぞ正史！」

そう言つて正史の腕を掴み、ラピッドスワローの後部座席に乗せると、その場から離脱しようとする。

そんな2人の後ろ姿を見つめながら、リュウガは一言、こう呟く。
「明日の午後17:00、美華が死んだあの公園で、決着をつけるぞ。」

来なかった時は、そうだな……。お前の務めている会社の社員をまとめて葬る」

「……………!?」

その一言に、思わず振り返るコンビ。

「選択の余地を与えてやると言ったはずだ。お前が死ねば、他の者には一切手を出さない。それを拒めば、お前は大勢の命を見殺しにする事になる。出来の悪い頭で、どちらがより正しい選択なのか、よく考えて決める事だな」

『正史』と『OREジャーナル』。2つの命が天秤にかけられている。その事実にはショックを受けつつも、トップスピードは、今はリップル達との合流が先決だと判断し、全速力でリュウガから遠ざかった。てつきり追いかけてくるのかと思ったが、本当に明日に勝負をかけようとしているようだ。

「……………」

リュウガは飛び去る2人の背中を、憎悪を込めた目つきで睨み続けていた……。

110. お前が信じるもんだよ

「……おい正史。早く起きねーと遅刻するぞー」
「……」

タイガが脱落してから一夜が明けて、朝日が昇ってきた頃。臨月にもほど近い、膨れたお腹の上にエプロンを着ているつばめが、未だに姿を見せない正史を起こそうと、寝室に顔を出す。名前を呼ばれて上半身を起こす正史だが、その表情は優れない。誰の目から見ても寝不足だと分かる。

無理もないか。つばめは心の中でそう呟く。

昨日、それまでほとんど関わりを持ってこなかったリュウガと交戦し、その正体が、正史のかつての友である銀斗だと分かり、彼や美華に強い復讐心を抱いてこの戦場に赴いた事を知った正史が受けたショックは、つばめにも計り知れない。ファヴとシローからタイガの脱落が発表されてからも、悲しむ様子も見せずに呆然と、頭を抱えて俯いていた。

今、彼は2つの選択を迫られている。今日の17:00までに、リュウガの前に来て自らの死を受け入れるか。それともこのまま背を向けて遠くに離れ、大久保や令子、島田を見捨てるか。正直なところ、正史の中では前者に揺らぎつつある。自分1人の為に多人数が犠牲になるなんて、あってはならない。それならよっぽど自分が犠牲になる方がまだマシだ。お人好しならではの、シンプルな発想だった。

……だが、それでも自分の中で割り切れない気持ち芽生えている。心の片隅で、死を受け入れる自分に抵抗を感じているのもまた事実。

「……どうすりゃいいんだよ」

思わずつばめの前でそう呟いてしまうほど、正史の精神はグチャグチャに掻き乱されている。それを見てつばめも放っておけるはずもない。それでも、なるべく直接的に干渉しないように、声をかける。「ほらほらー！ ボーツとしてないでさっさと顔洗ってきなよ。丁度出来立てのもんが待ってるんだからさ。冷めないうちに食べようぜ！

朝は特に腹一杯食つとかないと、今日一日もたないぞ」

「……あ、うん」

そう言つて素直に起き上がり、洗面所に足取り重く歩く正史。そんな後ろ姿を見て、ため息が出そうになるつばめだが、胎児への負担や、正史に余計な気をつかわせないようにと堪えた。

いつもより多めに朝食を作つたが、正史の口には普段の半分にも満たない量しか放り込まれなかった。本人曰く、「食欲が湧かない」との事。相当な重症だな、と表情に出さないように努力しながら、つばめはトーストを頬張りつつ、俯く彼に視線を向ける。気がつけば、出勤時間まであと僅かに迫っている事に気付き、正史は普段着に手を通す。

必要なものをカバンに入れて、手に持とうとしたその時、背後からつばめが抱きついてきた。正史は突然の事に動揺する中、つばめは膨れたお腹を押し付けすぎないように注意しつつ、冷たい背中を温めようと肌を密着させる。

「……リュウガ、つていうか、銀斗つて奴が言つてた事だけどさ」

「……！」

「……オレだつて、もしお前の立場になつて決めなきやならなくなつた時は、オレの体の事よりも、誰かが犠牲になるのを止めたいって思う。自分のエゴに、他人を巻き込むなんて、絶対嫌だからな。……でも、もしその道を選んで、オレが死んで悲しむ奴だつているのも事実だ。迷うのは当たり前だよな。大切な人が出来るつて事はさ。そういうところまでちゃんと視野に入れとかないといけないんだ」

大切な人がいる。今まさに背中から抱きついている女性が、正史にとって、その1人だ。だが、事の原因を作つてしまったのは事実。自分のエゴが、本来なら関わるはずもなかった男を、戦いに引きずり出してしまった。それを償わなければならない気持ちがある。

信頼を奪つてしまった友の為に責任を取らなければならぬ。でも、それで自分が死ねば、悲しみがまた一つ生まれる。どっちが正しい選択なのか。正史はますます分からなくなった。それが証拠に、右手には握り拳が作られている。

そんな彼を見て、つばめは最後にこう呟く。

「……まあ、小難しいのはオレも苦手だからさ。選ぶのはお前だ。何を選んで、オレはお前に反対しないし、ついてくよ」

「つばめ……」

「ほら、さっさと行かないとまた編集長に怒られっぞ！ 今日も頑張ってこいよ！」

「お、おぉ……」

つばめに背中を押され、正史はうつすらと笑みを浮かべて、つばめに手を振りながら玄関の戸を閉めた。外からため息が一つ聞こえてきたのを、つばめは聞き逃さなかった。

つばめは腕を組みながら考え込む。悔しい話だが、今の自分にパートナーを立ち上がらせるだけの力は無いと見える。このままでは、本当に自分を犠牲にしかねない。「何を選んででも反対しない」とは言ったものの、正史を失いたくない気持ちがある。勝っている。

それに、こうして悩み続ける事自体、正史らしくない。そんな彼に、一歩踏み出す勇気を、彼自身の強みを引き出す事を、可能にする人物がいるとしたら……。

つばめはいそいそと懐からスマホを取り出し、ある人物に電話をかけた。

「ちよつと城戸君！ 手が止まつてるわよ！ まだあなたに頼みたい仕事はたくさんあるんだから！」

「す、すいません……」

「全く……。ほら、この部分は私が引き継ぐから、そつちは任せたわよ」

遅刻ギリギリのところに入社した正史は、仕事でもずっと銀斗に迫られた選択の事ばかりが頭をよぎり、記事の作成にも普段以上に乱れが生じていた。

今日の正史は様子がおかしい。マイペースに自分が使っているパソコンにデコレーションをしている島田を尻目に、令子は首を傾げている。

それは奥のデスクで孫の手を使って背中を擦っている大久保も同様だった。

「……」

大久保の鋭い視線に気づく事なく、正史はパソコンの画面に顔こそ向けているが、全くと言っていいほど作業に集中できていない。

昼食時に至っては、普段は人一倍、同居している彼女が作ってくれた弁当を美味しそうにがつつく彼も、今日に限ってはほとんど口にしていない。

午後に入ってから、難しい顔つきでほとんど指を動かさずにいた。時折、壁時計に目を向けていた。刻限までもう間も無く。カウントダウンは確実に正史を追い詰めていた。どちらが正しい選択なのか。つばめや大地といった、同じ力を持つもの同士ならいざ知らず、天秤にかけられているとも知らない人達に相談できるはずもなく、時間だけが過ぎていく。

「島田。ちよつとお茶つ葉切らしたからよ。その辺のコンビニでパツクでもいいから買ってきてくれ」

事態が動いたのは、約束の時間まであと1時間半に差し掛かった頃だった。

「えっ？ でもこないだ買ってきたばかりですし、まだ仕事が残って

て……」

「良いからいいから。ちゃんとお駄賃用意してあつから。ほら、買ってこい」

「うう……。最近私の扱いが酷いような……」

島田はブツブツ文句を言いながらも、席を立ってお茶つ葉の調達に出かけようとする。正史が代わって出向こうと発案するも、大久保に呼び止められた。すると今度は、大久保と無言でアイコンタクトを取った令子が立ち上がり、口を開いた。

「編集長。私も席を外します。近場で取材が出来たので。明日の朝、仕上げてきたものを持ってきます」

「おおそうか。じゃあ頼むわ」

「ではお先に」

そう言つて令子も仕事場を出て、残されたのは考え込む正史と、そんな彼を見つめる大久保の2人だけ。辺りに他の人の気配がなくなったのを確認した大久保が、唐突に話しかけた。

「さてと。んじゃあ正史。そろそろ、お前の口から色々聞かせてもらおうか」

「えっ」

「えっ？　じゃねえよお前。お前に何かあつたのはもうバレバレなんだよ。何年同じ大学で先輩後輩やってきたんだよ」

呆れ口調ではあつたが、その表情は真剣そのものだ。どうやら自分が悩む姿を見て、気にかけてくれたようだ。その事に申し訳なさを感じつつ、作り笑いで誤魔化そうとする正史。

「い、いや。別に大した事じゃないっすよ。ただちよつと、昔喧嘩別れた友達に昨日バツタリ会っちゃって、色々複雑な空気になっちゃって、それで……」

「その割には、えらく深刻そうな顔してるじゃねえか。何があつても真正面からバカみたいにぶち当たっていく姿勢はどうした？　そうしたくても出来ない理由があるんだろ？」

「……」

この人の前で、嘘はほぼ通じない。正史は改めて、大学時代の先輩

の顔を見やる。

「全部さらけ出せ……なんて言うつもりはないけどよ。お前程度が何かでつかいもん背負ったって、潰されるのがオチだろうよ。もしそれがどうしても下ろせないもんだったらいつそ、他の奴におすそ分けする形で押し付けたって、俺は嫌じゃないぜ」

「……」

「話してみろよ。スカツとするかも、だぜ。仮にも俺はお前の先輩だ。後輩の悩みぐらい、ドーンとこいってんだ！」

「編集長……」

両手を広げて、心の傷を負った正史を受け止めようとする姿勢を見て、正史は自然と、自分の中に抱えていたものを語り始める。

幼少期から仲の良かった友人がいた事。高校生になって、最初は美華と付き合い始めたが、途中で自分に移り変わった事。大久保も知っているように、結果的に彼女と破局した事。それを知った友人が自分に憎しみを抱き、人生を狂わせてしまった事。

仮面ライダーの事や、O R E ジャーナルを人質に取っている事以外は、全て大久保に打ち明けた頃には、夕日が窓の外から差し込んでいた。刻限まで、あと1時間である。

「……そっかあ。美華も関わっていた事でもあり、あいつを死なせちゃまった事が、そのダチの油に余計に火を注いじまったってわけだ。んで、お前に対して逆恨みを抱いている、と。だからお前は、どう謝れば良いのかわからずじまい、と。……そりやあまた随分とスケールのデカイ悩みだな」

1人大きく頷く大久保。正史はその様子に目もくれず、美華の形見でもある白鳥のキーホルダーを見つめていた。

「……俺、全然、答えが出せないんです……。今だって……。あいつの事、何も分かってやれなくて……。俺の望んでた人生って、あいつにとって障害でしかなかったとしたら……。俺って、あいつの為に何かできる事って、あったのかなって……。結局、迷ってばっかで、あいつにしてやれる事、全然思いつかなくて……。情けないのは分かっていますけど、でも……。やっぱ、答えが、見つからないんです」

正史の独白を、何も介せず耳に入れる大久保。正史はチラツと時計に目をやる。時間はあまり残されていない。そろそろ決断するべきか。そう思つて、一言断りを入れて立ち上がろうと、腰を浮かす。「上等だよコノヤロー」

が、大久保のこの一言を受けて、正史は思考を停止させられる事に。「？」

「良いんだよ、んなもん。答えなんか出せなくてよ」「えっ？」

答えを出す必要はない。あまりにも予想外の返答をされて困惑する正史を見て、大久保は笑いながら孫の手を叩く。

「考えてきたんだろ？ 今まで、お前のその、出来の悪い頭で必死によお。それだけで十分なんじゃねえか？ 全貌を知つた訳じゃねえが、少なくともこうやって話を聞く限りじゃあ、俺はそう思うぜ」

「編集長……！」

ただし、だ。

大久保が念を押すようにこう告げる。

「何が正しいのか選べないのは良いが、その選択肢の中に、自分の事もちゃんと入れとけよ」

選択肢に、自分を入れる。

その言葉の意味が分からないといった表情を見せる正史に対し、大久保は孫の手を向けながら、こう言った。

「お前が信じるもんだよ。お前だつて、ここんところに芯がねえと、話し合いにもなんねえし、誰もお前の言う事も聞いてくんねえだろ。なっ？」

空いた拳を胸のところにあてる大久保を見て、正史も思わず同じポーズを取る。

「俺の、信じるもの……」

それは、自らがこの戦いにおいて掲げている目標を問われているようにも感じられた。

正史自身、最初はラ・ピュセルが呟いていたように、正しい魔法少女や仮面ライダーを決める試験のようなものだと思つていた。バカ

みたいに正義感を振りかざし、それが結果的にマジカルキャンディーと呼ばれる、延命の為のアイテムの確保に繋がった。世のため人のために、この力を使う。鏡の中に潜む脅威が、街に暮らす人々の日常を脅かすというのなら、そんな人達を守る為に、変身する。これからもそんな日々が続くと思っていた。

だが、蓋を開けてみればどうだ。ねむりんの脱落（＝死）を筆頭に、キャンディーの奪い合い、そして魔法少女及び仮面ライダー同士での殺戮へと発展。龍騎もそうだが、スノーホワイトや九尾、ラ・ピュセル、ライア、そしてトップスピードといった面々は、こんなふざけた戦いを止めるべく奮闘してきた。それは、途中で協力してくれた、フーム達も同様。

だが、龍騎は守れなかった。恩師や先輩、やり直そうと想っていた恋人。あの4人を守りきれずに死なせてしまった事は、龍騎達が作ったチーム内でも、今なお後悔の念が渦巻いている。自棄になった自分も、死に急ごうとしていた。それを止めてくれたのが他でもない。そのお腹に新しい命を宿し、最低でも半年は死ねないと、強く生存を望んでいるパートナーだった。彼女がいなかったら、きつとこうして大久保に悩みを打ち明ける時間さえなかっただろう。そして彼は再び立ち上がった。

「（でも、俺の信じるものって。俺がこの戦いに賭けてるものって、一体……）」

正史が強く望むもの。

この戦いをやめさせる事か？ もちろんそれが一番望ましい結末だ。どうにかして魔法の国にこんな無駄な争いをやめさせる様に頼めば、これ以上現場に血が流れる事はない。だが、シスターナナがそれを試しても、結果的に黙殺されている。そもそも、現時点で生き残っている仮面ライダーや魔法少女にも、血の気が多い輩がいる。そんな彼らに、今更どう説得しても、改心するビジョンが浮かんでこない。心の片隅で、そんな事は分かっていた。それでも、彼は訴え続けた。

それは何故か？ きつかけはやはり、室田 つばめが自身の哀しき

過去を打ち明けてくれた時だ。あの日から、正史にとってつばめは、パートナーであるだけでなく、本心から彼女の幸せを守ろうと決めた。それが結果として、スイムスイムとアビスに殺されかけた彼女を救い、今も同居生活を送れている。あの日、彼女を死の運命から回避させられた事が、彼にとつての誇りだ。そしてその誇りを胸に、これからも自分は……。

「……！」

刹那、正史は立ち上がる。

彼は、見つけたのだ。彼だけの生き残る、真の理由を。

『お前は、何の為に生き残ろうとする』

以前、蓮二にそんな風に言われた気がする。

「(今なら、答えられるかもしれない)」

思えばあの頃の自分は、迷ってばかりだった。蓮二はそれを見透かして、自分に冷たくあたっていたのだろう。本当の意味で、生きる事の大切さを見出す為に。

その為には、この戦いには、自身の手でケジメをつけなければならぬ。自分のエゴを貫き通すという、本当の意味での仮面ライダーになる為に。そしてその先に待つ、幸せを築く為に。

「おっ。いい目つきになったじゃねえか」

その様子を見ていた大久保が、ニヤリと笑みを浮かべる。深呼吸を一つしてから、正史はこの日初めて大久保に真っ直ぐと視線を向けた。

「編集長。俺、今やらなきや一生後悔するかもしれない事、見つかりました。……行かせてください！ 行って、自分の言葉で、あいつに全てをぶつきたいんです！」

「……お前ならそう言うと思うってたよ。なら、特別サービスだ。今日のうち、ケリつけてこい。ダメだったらその時はその時だ。青汁50杯分の贈呈並びに100時間残業。それで手を打ってやる」

「編集長……！ 俺、そうならないように頑張ります！」

そう言うのとサツと身を翻し、コートを羽織って荷物をまとめると、「お先に失礼します！」と告げて、OREジャーナルを後にする。

そんな後ろ姿を、物陰から盗み聞きしていた令子と、買い物帰りの島田が見送っていた。

「……正史君、随分急いでるみたいですけど、何かあったんですかね」「さあ。彼の事だから、唯我独尊とばかりに、自分の選んだ道に向かっていったのかもしれないわ」

そう呟く令子は、大久保と無言でアイコンタクトを取り、2人同時に自然と笑みがこぼれた。

「(正史。何を選ぶのもお前の勝手だが、今のお前には『つばめ』っていう大切なもんがあるからな。落ち込んでたお前を誰よりも気にかけてくれてたんだ。その期待を裏切るんじゃないぞ)」

職場を出た正史は、目指すべき場所がある方角に目を向ける。

「時間がない……！早くあそこに行かないと……！」

「そこで、オレの出番ってわけだ！」

不意に横手の路地から声があったので振り返ってみると、人目につかない場所に、長いつばのついたとんがりハットをかぶった魔女が、魔法の箒を片手に、壁に背をつけていた。

「トップスピード……！」

「決まったみたいだな。お前だけの『答え』ってやつが」

「……ああ、決まったよ。向こうに納得してもらえとは思ってないけど、それでも、俺が決めた道だから。もう迷わないよ」

「ならそいつをぶつけに行くつきやないよな！ 送ってやるから乗りなよ。こっちの方が早く着く。オレも見届けるからさ」

そう言つてトップスピードはラピッドスワローに跨り、後ろに乗るように催促する。

「ほら、行こうぜー」

「ツシャアー」

その表情に、もう迷いはない。正史は勢いよくまたがると、目的地めがけて急加速しながら、真っ直ぐに空を駆け抜けていった。

「……タイムリミットまで、もう僅か、か」

公園に設置されていた時計に目をやり、佇んでいるのは、黒龍の騎士。この時間になれば、人が通りかかる事も滅多にない為、仮面ライダーの姿のままでも、何ら問題はない。

彼の目的はただ一つ。自分の幸せを奪った男に復讐する為。それ

以外に戦う理由などない。その目的さえ果たせば、後は時間の流れが勝手に事を進めてくれる。自分の命の行方も……。

「……本当に、それで、いいんです、か」

「……？」

横手から、彼のパートナーであるハードゴア・アリスが、人形を抱えながら、腰を折り曲げて問いかける。

「正史、さんは、何があっても、スノーホワイトや、九尾のように、挫けず立ち上がる、そんな人です。……私も、そんなあの人に、救われた。命の大切さを、知りました」

「何が言いたい」

「……どっちを、応援すれば良いのか、分からない、です」

正史に恩義を感じている事と、パートナーとして共に戦ってきた事。2つの葛藤が、ハードゴア・アリスの心中で駆け巡っている。この戦いが成立すれば最後、どちらかは死ぬ。どちらにも死んでほしくない。彼女もまた、『答え』を見出せず、迷い続けている。

「……アリス。俺と最初に出会った時、俺と交わした決まり事を、覚えてるか」

「……お互いの事情に、深くは干渉しない事、ですか？」

「そうだ。お前が何を選ぶほうが、お前の自由だ。それに、これは俺の戦いだ。他人の入る余地などない、俺がケリをつけなければならぬ、そんな戦いだ」

「……それが」

それが、あなたの戦う理由なのか。もつと他に、道を見つけようと、選ぶとは思わなかったのか。

そんな彼女の切実な思いは、言葉に出る事はなかった。遠くに見える空から、流れ星のように急降下する物体が見えたから。箒にまたがる、2人の男女が戦地に赴いてきたのが見えたから。

111. 愛する者を守る為に

「尻尾を巻いて逃げ出すかと思っていたが、お前にも、それなりの意地があるようだな」

「……」

辺りが暗くなってきた頃、灯り始めた街灯の下で、リュウガが皮肉混じりにそう呟く。地面に降下し、ラピッドスワローから降りた正史は、臆する事なく盟友を睨みつけた。その隣で、ここまで送迎してくれたトップスピードもラピッドスワローを握り締めながら並んでいる。リュウガの後方には、彼のパートナーであるハードゴア・アリスが隈のついた瞳を見開いて固唾を飲んでいる。

「お前がここに姿を現した。つまりは自らの犠牲を受け入れた、そういう事だな。利口な奴だ。そうさ、お前のようにバカ正直に正義を振りかざす奴さえいなければ、もつと多くの命を救えただろうに。今となつては後の祭りだが、今からでも遅くはない」

そう言つてリュウガはカードデッキに手を置き、カードを引き抜こうとする。

「待てよ。俺の選択を勝手に決めつけるなよ」

「……？」

正史の言葉を聞き、リュウガは動きを止める。

「今更命乞いか？　だがもう遅い。お前は……」

「俺は、犠牲になんかならないって言ってるんだ、銀斗！」

「何……？　お前は死にたくないと言っているのか？　……なら、何故ここに来た。或いはお前の会社仲間を犠牲にしても生き残りたいと、俺に宣言しに来たのか？」

「それも違う！　編集長や令子さん、島田さんを見殺しになんかさせない！　俺の居場所を、自分勝手に失わせてたまるか！」

「傲慢もほどほどにしろ！　貴様には自分1人だけの命か、多くの他人の命、どちらかを選べば良いと言った筈だ！　どちらも否定する事は、選択肢として認められていない！」

「そう思う事自体が、間違いだったんだ！」

「！」

正史の、気迫のこもった一声がリュウガの体を貫く。

「どちらかを選ぶ、そう考える事自体がそもそも違ってたんだ！ 俺は……どちらも選ばない！」

「正史、貴様……！」

「俺が選んだ道は、たった一つだ！」

正史はポケットからカードデッキを取り出し、リュウガに見せつけるようにして叫ぶ。

「お前と戦って、勝って、明日もトップスピードが作ったご飯を、食べていけるように生き続ける事だ！」

「正史……！」

「……！」

これには、トップスピードもハードゴア・アリスも目を見開く。彼が選んだのは、『犠牲』ではなく、『生存』の為の『戦い』。

リュウガの拳が異様なまでに強く握られているのを、アリスはその目で確認する。

「バカも休み休みにしろ正史い！ いい加減受け入れろ、自分の運命を！ パートナーを守る為に戦うのがお前の正義なら、それでもいい！ だがそうやって自分勝手な正義を振りかざして、最後には手痛い思いをした事を、貴様はもう忘れたのか！」

「忘れたわけじゃない！ 忘れるなんてできない！ 確かに俺はどうしようもなくバカで、弱かった……！ でも、だからこそ叶えたい願いがあるんだ！ その為に、俺は戦う！」

美華を、一度愛した女を死なせてしまった事を忘れる事などできない。ましてやその罪を無かった事にもできない。正史はそれを自覚している。

「罪を自覚してなお、生きる事を捨てない、か。ハッ！ そうまでして生き恥を晒したいのか！ お前がバカなのはガキの頃から目に見えていたが、大人になった今でもそこだけは全くブレないとは、とんだ大バカだな！ さっさと死を選べば、生き恥と言う名の地獄を味合わなくても済んだものを！」

カードデッキから手を離して、淡々と皮肉るリュウガ。心の弱い人ならば、ここまで罵詈雑言を浴びせられてはいとも簡単に折れていただろう。それでも、正史は諦める姿勢を一切見せつけなかった。

「もう、お前の言葉なんかには騙されたいし、惑わされたりもしない！俺は、この道を選んだ自分を信じる！ 体や心の痛みも、1人で抱え込むのが無理なら、パートナーや仲間と一緒に分かち合う！ その為にも、俺達は絶対に死なない！」

「……ならば」

リュウガは目線をトップスピードの方に向ける。

「お前にとって、そんなにその女が大切だと言うのなら、そいつの存在さえ消せば、お前の正義は容易く壊れる。悪く思うなよ、トップスピード……！」

「……！」

オレを殺しにくるつもりか。トップスピードが身構えたが、その前に正史が前に立って、片手で制す。

「大丈夫！俺が絶対守るから！」

「正史……！ ああ、お前なら、絶対大丈夫だ！」

「銀斗！お前にとって俺が一番の障害だって言うんなら、それでも構わない！なら俺は、障害らしくどこまでもお前の犠牲ありきな考えを否定する！俺はお前を、自分の弱さを超える！」

「……バカめが」

殺気のコもった言葉が、正史の全身を貫く。

「ならば、その傲慢極まりない正義に溺れて、どちらも死ぬがいい！」

『SWORD VENT』

遂に我慢の限界が来たのか、リュウガは黒いドラグセイバーを召喚し、2人めがけて飛びかかった。後方から見守っていたアリスが、間に合わないと思いつつも飛び出そうとするが、それよりも早く、正史が左手でリュウガの右手首を掴む。

そして空いたもう片方の手は、黒いドラグセイバーの表面にかざすようにカードデッキをかざす。

「！俺のドラグセイバーの反射面を利用して……！」

正史の狙いに気づくりユウガだが、時すでに遅しとはまさにこの事。腰にVバックルを出現させた正史は右足を振り上げて蹴飛ばした後、右手を左に突き出して叫ぶ。

「変身ー!」

『SWORD VENT』

カードデッキをVバックルに差し込んで、鏡像が重なると仮面ライダー『龍騎』に変身。すぐさまカードをベントインして、赤いドラグセイバーを構えると、リュウガめがけて駆け出す。

「ダアアアアアアア!」

「!」

互いに鏝迫り合いが始まり、2対のドラグセイバーから火花が散る。足を止めてしまえば力に押されて不利が生じる。とにかく足を止める事のないように、2人は動き回りながらぶつかり合っていく。そこには学生ならではの『喧嘩』という領域を超えて、『殺し合い』にも似た圧迫感が、見守っているトップスピードに押し寄せてくる。

「トップスピード、さん……!」

不意に名前を呼ばれて顔を向けるトップスピード。みれば、ハードゴア・アリスが駆け寄ってくるのが見えた。

「アリスか!」

「始まり、ましたね……。私、どちらを、応援すれば、良いのか、自分でも、分からない、です……!」

「……まあ、分からんでもないな。助けてもらった恩があるやつとパートナー。どっちかなんて選べないかもしれないな。でもまあ、オレはもちろん正史を、龍騎を応援するぜ! あいつが胸の奥に信じたものがどんな強さになるのか、見ておかなきゃならないんだ!」

「……」

ハードゴア・アリスは、それ以上何も言わない。ただジツと、トップスピードと共に両者の決着がつくまで、世紀の一戦の目撃者としての立場を貫こうと決めた。

その頃、龍騎とリュウガの対決はさらに激しさを増した。駆け回っているうちに舞台は公園から近くにあった廃ビルの内部へと移って

いる。

「ハアッ！」

龍騎が勢いよくドラグセイバーを突き出すと、リュウガも黒いドラグセイバーでガード。そして龍騎はドラグセイバーを横に振るい、その反動で両者のドラグセイバーを遠くかなたに弾き飛ばした。

そして一度向き直ると、文字通り肉弾戦と化した。そこから先は、カウンターの応酬に近いと言っても過言ではなかった。互いに知らぬ仲ではなかった事が、逆に反撃の一手を生み出す。

龍騎が回し蹴りをしようものならリュウガは屈んでアッパーを打ち付ける。リュウガが右ストレートを放つものなら、龍騎は一步退いて、顔面ギリギリでかわしてからその腹に殴り込む。

「グッ……！」

「グフッ……！」

両者の口から血が垂れており、段々とダメージが蓄積されていく。それでもまだ、2人は戦う意志を閉じようとはしなかった。

「最後の最後まで、俺の邪魔をするというのだな！」

「ああそうだ！ 俺はお前の事をちゃんと見てやれなかった。でも、過去を悔やんでも、運命なんて何も変わらない！ だったらそんな自分は今もう捨てて、今のお前と向き合う！ 俺のやり方で、お前を倒す！」

「凶に乗るのも大概にしろ！」

逆上したリュウガが龍騎に飛びかかるが、その前に軽くないした後、その腹に思いつき蹴りを叩き込む龍騎。不意の一撃で苦悶の声と共に壁をぶち抜いて、地面を転がるリュウガ。龍騎は逃すまいとリュウガの前に駆け寄る。

「こい銀斗……いやリュウガ！ お前の憎しみも悲しみも、全部俺が受け止めてやる！ それで満足できるのならな！」

「……フン」

うつ伏せに倒れているリュウガは仮面の下で不敵な笑みを浮かべる。その理由は、手に握られているカード。転がっている間に引き抜いたカードを、起き上がりながらベントインする。

『ADVENT』

すると、リュウガの隣に契約モンスターであるドラグブラッカーが出現。そのまま龍騎めがけて襲いかかってくる。龍騎が慌てて避けようとしたその時、龍騎の後方の壁を破壊して飛び出してきたのがドラグレッダーだった。

「チツ……！」

契約モンスターと共に龍騎を追い詰めようとしたが、これでは結果的にモンスター同士が相手になってしまう。さらにドラグレッダーとドラグブラッカーの激突によって生じた砂埃で龍騎の姿が見えない。リュウガが首を動かしていると、後方から龍騎が飛びかかってきた。そしてそのままリュウガを壁に頭から打ち付ける。

「そんな程度でえ、俺を倒せるものかあ！」

龍騎を引き剥がしたリュウガは、腕を締め上げると空いた拳で龍騎の顔面に3発ほどぶつけた。よろめきながらも、龍騎は倒れこむ事はなかった。

「今の俺は、お前を倒す、ただそれだけの憎しみが、俺の原動力となっている！ お前程度では到底受け止めきれない力の前に、お前如きが、ちっぽけな覚悟しか決めていないお前が勝てる見込みが、あるものかあ！」

「いいや、俺は勝つ！ お前に勝つ！ 俺だけの、俺の信じるもののために！」

『STRIKE VENT』

「ハアアアアアアア……！」

龍騎の右腕にドラグクロウが装着され、右腕が後ろにひかれる。

「その選択が愚かだと言っている！」

『CARSD VENT』

対するリュウガは、昨日と同じように、通常形態ならファイナルベントの次に威力の高い攻撃に対処する為にレアアイテムのカードをベントインする。

「ダアアアアアア！」

分かっても止められない。『ドラグクロウファイヤー』はその

まま発射され、カースドベントの能力で弱体化した炎はリュウガの視界を遮る程度にしかならなかった。

やはりお前は、同じ過ちを繰り返す姿が相応しい。

そう言おうとしたそのタイミングで、龍騎の咆哮が耳に届いた。

「ツシヤアアアアアアアアアアアア！」

「!?？ 貴様……!」

炎の中で見えたのは、ドラグクローファイヤーを放ったまま接近してくる龍騎。炎に視界を遮られて接近に気づくのが遅れたのだ。そしてドラグクローの効力が切れると同時に別のカードをベントインする。

『GUARD VENT』

「ダアッ！」

「くっ……!」

ドラグシールドを装備した龍騎が、油断していたリュウガめがけてその腹に武器を叩き込む。『攻撃が最大の防御』ならぬ、『防御が最大の攻撃』が、リュウガを正面から追い込もうとしている。よろめきなから、リュウガは考え込む。

「俺がレアアイテムを使ってくる事を計算に入れて、別の攻撃を仕掛けてきたか。少しは学習したようだが、押し切るように攻めるようでは、バカの称号は揺るがないぞ!」

『STRIKE VENT』

黒いドラグクローを装備したりユウガは、あいも変わらず突進してくる龍騎をエルボードロップで地面にひれ伏させると、ほぼゼロ距離でドラグクローファイヤーを放った。

「グアアアアアアアアアアアアッ！」

黒炎が龍騎の背中に打ち付けられ、龍騎は焼けるような熱さに耐えきれず、悲鳴をあげながら地面を転がる。

「美華と同じやり方で、あの世に送ってやろう！」

再度右腕を引いて、ドラグクローファイヤーを浴びせようとするリュウガ。無防備な状態ではまともに攻撃を受ければ如何にスペックの高い龍騎といえど、致命傷になるのは目に見えている。

死が、龍騎に迫りつつある。

「っ、アアアアアアアアッ！」

喉の奥から叫ぶ龍騎。体にまとわりついていた黒炎は消えても、心の中の炎は消えようとはしなかった。ここで諦めたら全てが終わる。トップスピードが作るご飯も食べられなくなる。

だからこそ、死ぬわけにはいかない。

『BROOM VENT』

ほとんど無我夢中でカードデッキから引き抜いたカードをベントインすると、龍騎の手に龍を模したラピッドスワローが握られる。力を込めると、勢いよく飛び出し、リュウガのドラグクローファイヤーが頬を掠め取った。

「しぶとい奴め！ まだ抗うか！」

リュウガは苛立ちを隠しきれないまま、ドラグクローファイヤーを連発する。対する龍騎は大きく揺さぶられながらもリュウガの攻撃をかわし続け、タイミングよくラピッドスワローに跨る。

「行くぞ、ラピッドスワロー！」

龍騎がそう叫ぶと、それに応えるかのようにラピッドスワローが変形し、バイクのような装甲が取り付けられる。そして勢いよくエンジンを吹かせて、狭い空間の中でもリュウガの周囲を飛び続けた。狙いが定まらないリュウガは、翻弄されている。

「ウオオオオオオオオオオ！」

不意に急回転して、リュウガめがけて突撃するラピッドスワロー。反応が遅れたリュウガはラピッドスワローに跨る龍騎に体当たりされて、右腕を壁に打ち付けた。それによりドラグクローは粉々に砕け散る事に。そしてなおも龍騎はドリフトしてリュウガに突撃を試みる。

「しっしっ！」

『GUARD VENT』

黒いドラグシールドを手に持ち、ラピッドスワローからの攻撃を受け流すリュウガ。

「まだまだあー！」

龍騎は身を翻すかのようにラピッドスワローを傾けて、再度攻撃を仕掛けてきた。何度やっても同じ事。そう思う事自体が間違いだと感じづいた時には、龍騎はラピッドスワローに足をつけて、踏み台にして飛び上がった。

「……！」

更に、踏み込んだ際にラピッドスワローは加速。予想以上の速さに対応できず、黒いドラグシールドを構えるよりも早く、ラピッドスワローの柄がリュウガの右目に直撃した。仮面で覆われているとはいえ、勢いよく放たれたラピッドスワローの突きを受けて、右目に激痛が伴い、目が開けられなくなった。

「ダアアアアアアアアアア！」

視界が悪くなったところに、龍騎は追い討ちとばかりに上空からかかと落としを決めた。上からの攻撃を受けて、リュウガの真下の地面が亀裂が入ると同時に崩壊し始めた。廃ビルという事もあって、脆く崩れやすくなっていったようだ。そして龍騎とリュウガは重力に従って落下する。両者共に受け身を取る暇もなく、数メートル落下した後、コンクリート式の地面に叩きつけられた。

互いに苦痛の声を上げながらも、ヨロヨロと立ち上がる姿は満身創痍にほど近い。しかし、同じダメージを受けたにもかかわらず、リュウガにとつてこの状況は好機だと悟っていた。

「やってくれたな……！　だが、ここまで追い詰める為に体力を使いすぎたな。忘れたのか？　俺のパートナーの魔法を」

「……！」

『RECOVERY VENT』

ハードゴア・アリスのアバター姿が描かれたカードをベントインすると、黒いオーラが彼を包み、元の気迫を取り戻す。右目や両腕に蓄積されたダメージは全て回復した事になる。

「勝負ありだな。全てがリセットされた俺と、立っていられるのもやっとなお前。どちらに分があるのかは、明白だ」

常識の範囲内であれば、それは紛れもない事実。

「……だだ」

達の明日を、守る為なら、俺は……戦える！ 美華達が託していった
思いは、絶対に俺の中で色褪せたりしない！」

「そんなもので、お前の闘志に火をつけたとでもいうのか!?」

「そうだ！ 現に、こうしてお前と対等に渡り合っている！ 守りた
いものがあるから、俺は、負けたくないんだあ！」

「愛など、幸せなど、幻に過ぎない！ 俺はそれを直に味わった！ だ
から……！ こんな道しか、選べなかったんだあ！」

そこから先は、会話が成立する事はなかった。ただ相手を打ちのめ
す為に、ただ相手から勝利をもぎ取る為に。

「死ね！ 死ね！ 死ねえ！」

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

両者の足元には、いつのまにか血の雫が飛び散っていた。そんな
中、主人の危機を察して現れたドラグレッダーが、リュウガめがけて
突撃してきた。最早回避は間に合わない距離まで迫っていた。ドラ
グブラツカーは制限時間が来てミラーワールドに帰ったようだが、ド
ラグレッダーだけは別だった。それだけ龍騎の力になろうと奮闘し
ているようだ。

「！」

これに対し、避けられないと直感したりユウガはとっさの判断で龍
騎の腕を掴み、身動きを封じた。その直後、ドラグレッダーの体当た
りを受けて、リュウガは吹き飛ばされた。ただし、道連れという形で
龍騎も同じように吹き飛ばされる。

「うわアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

廃ビルの壁を突き破り、上空まで放り飛ばされた2人。外ではトッ
プスピードとアリスが、2人が落下している事に気づく。そして落下
地点は、トップスピードの真上。

「……！」

それを見た龍騎は震えながらも空中でリュウガの腕を引っ張り、軌
道を変えた。これによりトップスピードが押し潰される可能性はゼ
ロとなる。そうして2人は受け身を取る事なく、本日2度目となる地
面の落下ダメージを受ける事に。地面をバウンドし、両者との距離が

開いた。

「龍騎！」

「……！」

2人の魔法少女が龍騎に駆け寄るが、それよりも早く、龍騎は立ち上がった。同じタイミングでリュウガも。

「……変わらないな、お前は」

最初に口を開いたのはリュウガだった。

「その女に衝突するのを避ける為に、無意識に体を動かす。思えばガキの頃から、お前はそうやって自分の事になるとダメダメだったが、他人の為なら人一倍強かった」

「お前も、昔から喧嘩は強かったと思ってたけど、やっぱり変わんないな。正直言つて、結構キツいんだよ、俺」

「だが、それでもお前は、諦めようとはしない。……本当のバカだ。あの頃のままだ」

「どんなに時間が経つても、変わらないものがあるって聞くけど、本当にそうなんだな」

「だが、それでも、譲れないものがある。お前もそうだろう？」

「ああ、絶対に生き残る為に、な」

「……パートナーを、愛する者を守る為に、か」

「そうだ」

そして両者は同時にカードデッキに手を置く。

「なら、今ここで証明してみせろ。俺とお前、どちらか立っていた方が、正義だ」

「……」

正史にも、分かっていた。こうして覚悟を決めて戦いが始まれば、このカードを使わざるを得なくなる事を。

何せ、今の今まで、モンスターにしか使つてこなかった力を、初めて人にぶつけようとするのだから、皮肉にもほど近い。

「……でもー」

でも、もう迷わない。この選択が正しいか間違っているか、その是非を問える者がいたとしても、例えば誰かが間違いだとか決めつけたとし

ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
……！」
「ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
……！」
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！」

互いに構えると、同時に足を動かす。リュウガは宙に浮いて左足を突き出し、龍騎は駆け出して飛び上がり、右足を突き出す。そして両者の龍が2人の後方につき、炎を噴き上げようとする。だがこの時、龍騎の中で体力が底をつきかけようとしていた。度重なる怒濤のラッシュは、彼の意識を朦朧とさせ、必殺技を放つだけの気力も削がれかけようとしていた。

「いっ
けええええええええええええええええええええええええええええええ
！」 正

史いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！
だが龍騎の背中越しに、パートナーのあらん限りの声援が聞こえた途端、龍騎の意識は自分でも驚くほどにハッキリとなる。

「龍騎い！」

名前を呼ばれた男の全身の装甲は、ガラスが砕ける音と共に本来の姿を露わにする。服もボロボロで、傷が至るところに生じてはいたが、そこにはいつものような笑みがある。トップスピードは我先に駆け寄り、正史に抱きついた。

「心配させやがって！ でも、勝ったんだな！」

「イデデ……ん？ お、おう。何とか、ね」

傷口がヒリヒリする感覚に襲われながらも、涙目のトップスピードを優しく抱きしめる正史。それからハードゴア・アリスの方にも顔を向けて、笑みを浮かべる。アリスも一安心したような表情を見せる。
「……そうか」

正史の後方から声がしたので振り返ると、同じく変身が解けた銀斗が、仰向けになりながら口を開いていた。

「お前が、俺より勝っていた、部分。それが、ようやく分かった、気がする」

「銀斗……」

苦悶の表情を浮かべながらも起き上がろうとする銀斗を見て、正史が手を貸そうとするが、銀斗は首を横に振ってそれを拒む。

「正史……。俺は、お前が、嫌いだ。昔も、今も……。だが、心のどこかで、友である、という自覚もあった。昔も、今も……」

「ああ、俺も。お前とは、これからもずっと、友達だ」

「ストレートな、奴だ」

銀斗はよろめきながらも、落ちていたカードデッキを拾い、正史に疑問をぶつける。

「正史。お前には、ファヴとシローから、サバイブの力を渡されていた筈だ。事実、昨日もそれを、使っていた。何故、今回は使わなかった」

「それは……。確かに、サバイブを使えばここまで苦戦しなくても勝てたかもしれない。……でも、俺の中でそれは違うと思ってた。俺がサバイブを使うのは、俺の周りにいる人達を危険から守る為なんだ。誰かを傷つける為に使うものじゃない。……それに、俺は自分を乗り越える為に、これを使おうとはしなかった……ってどこかな？」

「フツ……。余裕をかましているのか単にバカなのか……。まあ、どちらでもいいがな」

そう言いながら、カードデッキから1枚のカードを抜き取り、正史に投げつける。手に取ったそのカードには『CARSD VENT』と表記されている。

「！レアアイテムのカード……。お前どうして……。！」

「勝利の証、だと思え。俺にはもう、必要ない」

そう言ってから、銀斗は背を向けて足取りがおぼつかない様子で3人から遠ざかろうとする。

「お、おい。どこ行くんだよ？」

「さすがに疲れた。ここでおさらばするでしょう」

すると銀斗は振り返って、真剣な眼差しで正史を見つめる。

「……正史。お前には、守りたい奴がいるんだったな。……なら、何があっても、必ずそいつを守り通せ。もし出来なかった時は……。化けて今度こそ、お前を倒す」

「随分と怖い脅しだな……。心配すんな。俺はもう、自分の信じる道を進むって決めたからな」

「……ならば良い」

それから、こいつも渡そう。そう言っただけで銀斗が取り出したものを、再び正史に投げつける。それは、金の指輪。かつてファムが購入し、その後リュウガの手に渡ったレアアイテム。美華の形見でもあるそれを手にした正史は、思わず顔を見上げたが、すでにそこには友の姿はなかった。

「銀斗……」

「拍子抜けでしたね」

「二・一・二」

3人の後方から声が聞こえたので振り返ると、損傷の激しい遊具の上には腰を下ろしている、クラムベリーの姿があった。

「九尾ほどではないにしろ、彼にはそれなりに期待してたところがあつたわけですが、最後の最後で弱みを見せつけられてしまい、敗北へと至った。非常に残念です。彼には失望しました」

「お前……！」

トップスピードはこれでもかとクラムベリーを睨みつけるが、彼女は全く相手にしなかった。

「ときに龍騎。これであなともようやく、仮面ライダーとしての本質を理解したのではありませんか？　どんなにこの戦いを否定しようとも、力を手にしている以上、殺し合いは避けては通れぬ道。あなたも薄々気づいていたでしょう？　リュウガはもう、助からない事を」

「……」

正史は何も語らない。ただジッとクラムベリーを睨みつけている。

「あなたには、何も変える事が出来ませんよ。人が辿る運命もね」

「……いいや」

「？」

「一つだけ、この戦いを通じて、変わった事がある」

「……ほう？　何が変わったと？」

「重さだよ」

間髪入れずに、正史はトップスピードに支えられながらそう語る。

「人の命の重さってやつが、2倍……それ以上に増えた！　だから

「……！　これ以上は、お前の思い通りにはさせない！」

拳を握りしめ、強い口調で叫ぶ。

「俺は、人を守る為にライダーに選ばれたんだから、ライダーも、魔法少女も守ったって良いんだ！」

「……！」

トップスピードとアリスが、同時に正史に目を向ける。彼の揺るがない信念が、生きる決意を凝固させる。

これを聞いて、クラムベリーは乾いた笑みを浮かべる。

「それは大変素晴らしい心構えです。あなたらしい、ポジティブな考え方ですよ」

でも、無意味なんですけどね。

それだけ告げると、クラムベリーは戦う気が失せたのか、高く飛び上がったその場を後にした。

後に残された3人は、先ほどまで銀斗が立っていた地点に目を向け

る。そこには当然、誰もいない。すると、正史とアリスのマジカルフォンにそれぞれ1通ずつメールが届いていた。

一方、銀斗はしばらく歩き続けていたが、意識が朦朧とし始めた頃に、道路沿いに設置されていたベンチに深く腰掛けた。視界が歪み始めているのを感じて、銀斗は全てを悟った。

「……そろそろ、死ぬか」

その表情に、後悔や絶望は微塵も感じられない。

だがその前に、と己を奮い立たせて、マジカルフォンを取り出すと、メールを打ち込み始める。送信相手は正史とアリスの2人である。

『俺のパートナーの事を、お前に任せる』

『これからは、俺の友がお前の支えになる。俺の事は忘れて、強く、生きろよ』

「(俺の知らないところで交流はあったようだし、徒労かもしれないが……)」

やらないよりはマシだと思い、送信する銀斗。送信完了を確認した銀斗は、ベンチに全体重を乗せる。見上げた夜空には、都会という

事もあつて星一つ見えないが、銀斗にはキラキラしたものが見て取れた。

「美華……、済まなかった。結局俺は、間違つた選択しか、できていなかった……。俺を赦せ、とは言わないが……。また、あの頃に、戻れたら、良いなあ……」

段々と、呼吸する事さえ苦しくなる一方だ。それでも、銀斗は弱々しい笑みを崩さなかった。

「……俺も、今から、そつちに、い……くか、ら、な」

後は、任せたぞ、正史……。

そう呟いた後、銀斗の瞳はゆつくりと閉じられ、手首がダラリと垂れ下がった。

夜が明けて、多くのサラリーマン達が出勤する為に小道を進んでいる。昨晩の爆音の正体が何かで話題が広がる一方で、ベンチに座っている、黒いコートを羽織つて目を閉じた青年には、誰一人として気にかける者はいない。その青年が息をしていない事に気づくのはいつになるのか。

誰一人として青年が生き絶えているのに気づかない理由は単純明快だ。その青年の表情は、全てのしがらみから解放されたかのように、清々しい寝顔のようにも見えているのだから……。

《中間発表 その12》

【リュウガ（黒崎 銀斗）、死亡】

【残り、魔法少女10名、仮面ライダー8名、計18名】

112. ご主人様を求めて

「行ってきます……」

とある一軒家。蚊の羽音のように薄れた声で顔だけを振り向かせて、犬吠崎 珠は制服姿で家を出る。返事はなかった。勿論家には両親も、妹も弟もまだいるわけだが、誰一人として珠に声をかけようともしない。まるで最初から気にかけるつもりがないようにも感じられる。声が小さい事もあるだろうが、珠はもう慣れた様子で、さつさといつものように通学路に踏み込む。

学校までの道のりは一人。道中で同じクラスの子と出くわしても、誰一人として挨拶すらかけてこない。それすらも慣れた様子でトボトボと歩き続ける。

「珠ちゃん、おはよう」

「あ、おはよう。千尋ちゃん」

そんな彼女にも、友達はいた。桑田 千尋。校外学習の一件で親しくなった同級生。彼女と会話したり、昼食をとったりする時間が、『魔法少女育成計画』をやり始めるようになってから、唯一の至福とも言えた。あのゲームがあったおかげで、彼女とも仲良くなれた。

だが、今となつてはちよつぴり後悔している事もある。今なお繰り広げられている、同じ魔法少女や仮面ライダー同士の、生き残りをかけたサバイバルゲーム。その中に『たま』として自身も含まれている。幸い、同じゲームをしている親友は被害に遭っていない様子だが、今でも時々思う事がある。

どうして、自分みたいな鈍臭い奴が魔法少女になって、ここまで生き残っているのだろうか、と。

「珠ちゃん？ 具合悪いの？」

「！ な、何でも、ないよ……」

「そっか……。最近調子悪そうだし、なんか困った事あったら相談してね」

「う、うん。ありがと……」

珠はなるべく平気を装いつつ、肩を並べて校舎に入っていく。こ

んな自分にも構ってくれる千尋ちゃんが、本当に私なんかと釣り合っているのだろうか。珠は鈍い頭で考え込む。

犬吠埼 珠は、生来の臆病さがオドオドした態度に表れ、反応の鈍さや頭の回転の遅さが相まって、『格下』と烙印を押され続けていた。学業は下の下、スポーツは下の中。絵や歌の才能もなく、人並み以下。物覚えに至っては最悪の位置。これだけ悪評がつけられている事もあつてか、珠以外の家族は、彼女が最初からいないような形式で扱ってきた。学校の先生も最初から相手にしないか、どこかで諦めるかの何れかで対処している。クラスメイトからは、使い走りか数合わせ程度にしか思われていない。千尋も最初はそんな感じで珠を見下していただろう（と、珠は思い込んでいる）。

唯一、彼女の抛り所だったのが祖母だった。たどたどしくつつかえる珠の話を面白そうに最後まで耳を傾けて聞き、「優しい子だね」と頭を撫でてくれていたのを、今でも鮮明に覚えている。そんな祖母も、急性肺炎で亡くなったのは、今から半年ほど前。両親が「よくここまでもったもんだ」と半ば呆れながら親戚と話す中、珠だけは仏壇に飾られている祖母の写真の前に居座っていた。葬式の際は祖母の手のひらがとても温かかった事を思い出して、ただただ悲しくて、涙が枯

れ果てるまで泣き続けていた。

祖母が亡くなり、珠を相手にしてくれる人は誰もいなくなった。そんな寂しさを解消する為に始めた娯楽、それが『魔法少女育成計画』だった。それにまつわる噂も、クラスメイトが話しているのを聞いていたので周知している。同系列の『仮面ライダー育成計画』同様、何万人かに1人の確率で本物になれる。もし本当に魔法少女になれば、この閉塞状況の打開に繋がるのでは、とぼんやり考えながら、縁側に腰を下ろしてスマホにすがりつくように没頭していた。それもあつてか、いつのまにかカンストに成功し、初めて千尋に見られた結果、フレンド登録を申し込まれた。ちよっぴり嬉しかった。

そしてゲームをやり始めてから2ヶ月ほど経ったある日の夜。それは現実のものとなった。

『おめでどうぼん！ あなたは本物の魔法少女に選ばれたぼん！』
マスコットキャラクターのファヴにそう話しかけられ、珠は全身を見返す。犬のような耳や尻尾、フード付きのケープ、水玉模様のタイツ、そして爪を出したり引つ込めたり出来る肉球グローブが、魔法少女『たま』に変身できた事を物語っていた。

変身してから先ずは、そばにあつた漬物石を握って砕いたりして性能を確認。ビルの側面を駆け上がったり、連続バク転で町内一周をしたりと、犬吠埼 珠の時とは比べものにならないほどの身体能力を目の当たりにし、たまは初めてはしゃぎ回った。頭に生えていた耳はただの飾り付けに非ず、自分の意思で動かす事も出来た。最大の魅力は、魔法少女に1つは与えられる魔法。彼女の場合は『いろんなものに素早く穴を開けられるよ』であり、どこまでも穴を掘り続ける事が出来た。ようやく違う自分になれた事に、たまは感情を爆発させた。

それからしばらくして、彼女は先輩である『ルーラ』から連れて来いと命じられ、会いにやってきた仮面の人物と出会った。そこで初めて、魔法少女と同様に選ばれた仮面ライダーを目撃した。灰色の装甲で、サイをイメージさせるフォルムだった。イカついそのフォルムを目の前にして、たまは縮み上がった。『ガイ』と名乗るそのライダー

は、拠点としている西門前町の廃寺、王結寺に彼女を案内した。そこにはすでに、魔法少女スィムスィム、仮面ライダーベルデ、アビスの姿があった。リーダー格であったルーラの気迫にオドオドしながらも、魔法少女としてのレクチャーを受けるたま。魔法少女になれたからといって元の性格が変わるわけもなく、結果的に話の内容が理解できず、叱られる羽目となった。その後は彼女も気を利かせてるのか、小冊子『魔法少女への道』を配布してくれた。そこに書かれている事を覚えてくるように、と言われたが、読めない漢字もあって困り果てた。その時フォローしてくれたのが、ガイだった。たまの指摘に従ってルビを入れたり注釈を入れてくれたりして、何から何まで助けられた。ルーラもそうだが、このガイという青年も『怖い人』から『意外と良い人』というポジションに位置付けられた。

「どうして、私に、構ってくれるの……？」

だからこそ、彼女は聞きたくなくなった。どうしてこんな鈍臭い自分に構ってくれるのか、と。対してガイの変身者、芝浦 淳一郎はニヤニヤしながらこう言った。

「そりゃあ、見ている面白いからに決まってんじやん。犬みたいにチヨロチヨロ動き回って走るぐらいが似合ってるっていうかさ。ま、要するに見てて飽きないから、つて感じかな？ これからも、お前は犬でい続けければ良いんだよ。それが一番面白いし」

そう言って彼は後日、犬の首輪をプレゼントしてくれて、以降も彼女はそれを気に入って首につけている。その頃からだろう。彼女に自信がついたのは、誰かの役に立ちたいと思えたのは、彼に好意を抱くようになったのは。

気がつけば、10人程の派閥となり、それなりに魔法少女として充実した日々を送っていた記憶も、遠い夢。今はもう、過半数を割る脱落者がチーム内から続出し、リーダーだったルーラやベルデ、後から入ってきてそれなりに良好な関係を築けたピーキーエンジェルズ、タイガ、インペラー、そして彼女のパートナーであり、心の拠り所だったガイ。彼らに代わってチームをまとめているスィムスィムと、彼女のパートナーのアビスは、ほとんど相手にはしてくれない。何を考えているかも分からない、という事もあるが、そもそもチームとして機能していないのが現状だった。

あの頃には戻れない。それを自覚した時には、彼女はチームからの脱退を決意した。決意こそしたが、いざ実行に移そうと思っても、持ち前の気の弱さが災いし、言い出す事が出来ない。先が読めない2人だからこそ、余計に口に出す事が難しくなる。

何とも自分勝手に情けない話だ。そう考えてため息をつきながら、放課後のN市を1人、珠は周りに興味を示さなのまま家路へ向かおうとしていた。千尋もこの日は用事があるらしく、隣にはいない。

こんな時、魔法少女関連で相談できる相手がいてくれれば、と常々思う時が多々ある。これが少し前なら真っ先に芝浦と答えれたが、彼はもういない。中宿での騒動において、終盤で王蛇とメアリに殺された瞬間が今でも脳裏にチラつき、その度に吐き気を覚える。

今の自分に構ってくれる人が欲しい。自分を必要としてくれる人の所にいたい。そう彼女が願っていた矢先、返ってきたのはマジカルフォンから鳴り響く警告音だった。モンスターが近くに出現したようだ。この時間帯ならば他の魔法少女や仮面ライダーが活動を始めている頃だろう。ならば今は自分が行かなくても良いのでは、と思い

つつも、どうしても周りが気になってしまう珠。

今となつては意味を成すかも分からなくなつてきたキャンディー集め。先日、リユウガが脱落したと連絡を受けて、脱落者の発表は先延ばしとなつたが、果たして来週は同じ事になるのだろうか。その答えが見えない以上、戦つて稼いだ方が良いだろうと思ひ、珠は誰にも気づかれないように裏路地に足を踏み入れて、ガラス戸の前に立ち、マジカルフォンを手に取る。

「へ、変身ー」

オドオドしながらマジカルフォンをタップし、魔法少女『たま』に変身。ガラス戸からミラーワールドに突入し、反応のあつた方向へ、両手両足を使って犬のように駆け抜けていく。

「挿入歌：Revolution」

「ハアッ！ ダアッ！」

「フンッ！」

「ウオリヤア！」

現地では、龍騎、ライア、トップスピードが先んじてシアゴースト

と戦闘を開始していた。3人とも既にサバイブ状態となっており、特に龍騎は気合いが一段と入っていた。つい先日、友であった銀斗と、仮面ライダーとして対立し、そして命は燃え尽きた。彼が遺した意志を継ぎ、必ず生き残り、パートナーを守ってみせる。その約束を果たす為、龍騎サバイブは奮闘する。それを支えるかのようにトップスピードサバイブが、さらにライアサバイブが2人のフォローに入る。

『SWING VENT』

従来のエビルウィップに棘がついて威力が高まっているエクソウィップを右手に持ち、回転を加えて振り回し、シアゴースト達を寄せ付けない立ち回りを見せるライアサバイブ。

龍騎サバイブも腕力だけでねじ伏せ、トップスピードサバイブはドラグブレードで華麗に動き回って斬りつけていった。

ある程度疲弊させた所を見計らい、トップスピードサバイブが叫んだ。

「決めるぜ2人とも！」

「ツシャア！ 良いぜ！」

「分かった！」

2人のライダーはカードデッキから1枚のカードを引き抜いて、各々のバイザーにベントインする。

『SHOOT VENT』

龍騎サバイブがドラグバイザーツバイを、トップスピードサバイブがその横に並んでマジカルフォンをタップし、同じようにドラグバイザーツバイを構える。一方でライアサバイブは、エビルバイザーツバイの先端に電気を溜め込み、チャージを始める。3人の元にドラグライザーが降り立ったタイミングでライアサバイブの方もチャージが完了。

「ハアッ！」

「いっけえ！」

シアゴースト達が逃げようとしており、それを逃すまいと、2人のペアがトリガーを引き、『メテオバレット』を撃った。ライアサバイブは電撃を纏った矢を放ち、『ライトニングアロー』が空気を裂いて一直

線に飛ぶ。同じタイミングでドラグランザーも口から炎を発射した。

4つの砲撃はシアゴーストの群れに直撃し、爆発が起きた。が、よく見ると2体ほど生存が確認された。攻撃が当たる直前に、糸を吐いて上空に回避したようだ。不意を突く形で龍騎サバイブ達に襲いかかる2体のシアゴースト。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

だがそのすんでのところで、灰色の生物らしきものがシアゴースト達に体当たりし、龍騎サバイブ達は不意打ちを免れた。

「！今のつてまさか……！」

自分達を助けてくれた生物が、サイをモチーフとした灰色のメタルグラスである事に気づいた3人は、辺りを見渡す。すかさずトツプス・ピードサバイブが、柱に身を潜めている魔法少女を見つけた。

「たまー！ たまじゃねえか！」

「ヒウ……！」

あつさりとバレてしまった事にビクつくたま。観念したのか、その身を面に出した。

「さつきは助かった。けど、なぜ君が俺達を？」

「そ、それは、その……」

ライアサバイブの質問に、どう返答しようか迷うたま。すると、そんな彼らを倒そうと、先ほどメタルグラスに吹き飛ばされたシアゴースト達が襲いかかってきた。3人が身構える中、真っ先に動いたのはたまだった。

「やあああああああああああ！」

3人の前に躍り出て、マジカルフォンをタップしてからその右手にメタルホーンを装着し、シアゴースト達をすれ違いざまにメタルホーンでダメージを与えていく。しかし、たま自身のポテンシャルが低いからか、小さな擦り傷が出来た程度で、一瞬だけしか動きが止まっていない。当然ダメージにもなっていない。シアゴースト達は首を傾げる動作をしてから、再度龍騎サバイブ達に襲いかかろうとする。

だが、モンスター達は知らない。確かに擦り傷程度であれば何ら問題はなかったであろう。攻撃したのがたまである、という事実がなけ

れば。

『!?』

たまの魔法は穴掘りだ。ほんの少しでも穴を掘れば、魔法の力で瞬時に直径1メートルほどに穴が広がる。それは地面だけにあらず、どんな物体でも広げられる。

つまり、傷がついたシアゴーストの体は瞬時に行使されたたまの魔法により、胴体と頭部が消し飛び、そのまま爆散した。爆風を受けて悲鳴をあげながら前のめりに倒れるたま。実を言うと、たま個人でモンスターを倒したのは、これが初めてだった。これまではモンスター退治においては、ガイのフォローにほんの少しだけ回り、その結果マジカルキャンディーを獲得してきた。これも、ガイを間近で見えてきたが故に出来た戦法だろうと、たまは自答する。

「お、おい。大丈夫か?」

中々起き上がらないたまを心配に思ったのか、3人が彼女に近寄る。丁度そのタイミングで4人のマジカルフォンに、キャンディーが付与された事が知らされ、たまは反射的に飛び跳ねて起き上がる。3人が驚く中、たまは3人に見られている事を恐れてその場をすぐに立ち去ろうとする。

「あ、あの……! ぐ、ごめんなさい!」

「ま、待って!」

トップスピードサバイブが逃げようとするたまの手首を掴む。

「いきなり逃げる事ないだろ? ってか、さっきの凄かったな。お陰で助かったし」

「で、でも、結果的に、皆さんの取り分、減らしちゃったし、私、そこまで役に立ててなかったような……」

「それでもないよ。契約モンスターに指示を出したのはたまなんですよ?」

「うっ……」

「……何か悩んでいるようだな」

「……!」

ライアサバイブが見透かしたように口を開く。凶星を突かれたか

らか、たまは目線を逸らす。

「そうなのか？　なら、何でも良いから言ってみてよ」

「で、でも……！」

「こんな状況だけど、少しでも支えになりたいんだ。……お前の仲間だったインペラーの時みたいいな事には、なりたくないから」

事実、インペラーがベルデの支配下から抜け出そうとしている事に気付いていれば、救えたかもしれない。龍騎サバイブはしみじみとそう語る。

悩みに悩んだたまは、意を決して口を開く。

「わ、私……！」

「？」

「す、スイムちゃんとアビスさんのチームから、抜きたい……！　でも、行く宛が見つからなくて、怖くて……！　でも、皆さんのいるチームなら……！」

「ひよ、ひよつとしてたま、お前……」

トップスピードサバイブが何かを言いかけた直後、マジカルフォンから活動制限が迫ってきている知らせを告げる。それを聞いてハツとなったたまは無理やり手を振りほどき、背を向ける。

「ご、ごめんなさい……！　い、嫌ですよね！　私なんて、みんなの足手まといになるし、敵だったのに、今更虫が良すぎるし……。い、今の話は、わ、忘れてください！」

そう言って撤退しようと、前に踏み出すたま。そんな彼女の背中越しに、同じ魔法少女の言葉が入ってきた。

「たまー、ここにいるオレ達は、お前を否定しない！　同じ魔法少女のよしみだ。何か悩んでるなら、オレ達にも相談してくれよ！　いつでも来ていいからな！」

「……！」

一瞬立ち止まるたま。いつでも来ていい。その言葉を噛み締めながら、振り返る事なくその場を駆け足で立ち去った。

「……」

その後ろ姿を、ライアサバイブはジッと見つめている。

3人との距離が離れる中、たまは考え込む。

突発的に口にしてしまった、他勢力に身を置く事。スイムスイム達からすれば、ある意味で裏切りに近い。

「(ど、どうしよう……! 私、なんかとんでもなくヤバい事言っちゃった……!!?) で、でも、あの人達なら……)」

途中で何度かこけそうになりながらも、彼女達なら、自分を必要としてくれるのではないか、という淡い期待を寄せて、犬はミラーワールド内を駆け抜けていった。

113. スイムスイムの正体

「……やっぱり、そう簡単には、会えないよね」

夕日が沈み、街灯がちらほらと灯り始めた頃、犬耳の魔法少女『たま』は、比較的高いビルの上から、地上ではなく周囲のビルの屋上を見渡して、肩を落としていた。

スイムスイムのチームから1人内緒で抜け出してやって来た彼女の目的は、先日共闘したトップスピードらと会う事。

いつでも待ってる。その言葉に引き寄せられるように、たまは生前、ピーキーエンジェルズが使用していた、魔法少女の目撃情報まとめサイトを慣れない手つきで操作し、比較的彼女達が現れやすいポイントを絞って、この地に訪れた。

が、いつまで経っても現れる気配がない為、時間もまだあるし、そろそろ別の場所に移ってみようと、そのビルを立ち去ろうとしたその時、上空から何かの気配を察知した。顔を上げると、夜空でもはつきりと分かるぐらいに小さな黒い点がこちらに向かって急接近して来るのが見える。

「え、えっ!?」

突然の事で慌てふためくたま。このままではぶつかる。たまを身を縮ませて蹲る。

「おー！ たまじゃねえか！ おいつす！」

不意に近くから声が聞こえてきたので恐る恐る両手を顔から離してみる。目の前に何かが浮いている。目が慣れてくると、箒に跨った、西洋の魔女がニヤつきながらこちらと目を合わせていた。見れば、その背中越しに黒いドレスに見を包んだ、目に隈が付いているゾンビのような少女が顔を覗かせている。たまは驚いて尻餅をつくが、魔女は苦笑しながら手を伸ばす。

「おいおいそんなに驚く事ないだろ？ まあでも、こんなところでまた会えるなんてな」

たまはキョトンとしながらトップスピードの伸ばした手を掴み、立ち上がった。

そしてトップスピードとハードゴア・アリスがビルの屋上に足をつけて、トップスピードは手提げカバンからビニールシートを取り出し始める。

「？ トップスピード？ どうしたの？」

「何って、せっかくだからここで腹ごしらえでもしよっかなって。龍騎もまだ仕事があつて来れないって連絡来たし。アリスだけは特別何も無かったみたいで、他の連中も似たようなもんさ」

「そ……ラ・ピュセルは、まだ、用事があつて、来れない、と言つてました。それで、トップスピードに誘われて、空の旅を」

ハードゴア・アリスはそう呟きながら、トップスピードが敷いたビニールシートに腰を下ろす。手に持っていた人形も地面に下ろした。

「んなわけで、ちよつと早いかもしれないけど、あまりは沢山あるし、ほれ！ これ口に入れてけよ。腹が減つては何とやらつてやつさ」

そう言つてトップスピードはラップに包まれたおにぎりを、たまに差し出す。たまは戸惑いつつも、トップスピードからおにぎりを受け取り、同じように腰を下ろす。形がしっかりと整えられており、水々しさを感じさせる。口に含めば、たちまち丁度いい塩加減と、中に入っていた鮭のフレークの香ばしさが味覚を刺激する。

「美味しい……！」

「へへッ。喜んでもらえて良かったぜ」

たまがおにぎりを一つ平らげたところで、トップスピードがこんな事を聞いてきた。

「なあ、こないだの事だけどさ……。答えとか出たか？」

「……っ、それ、は」

「まあ無理に答え出せつていうつもりないけどな。そりやああのルーラが作ったチームなんだぜ？ 慣れ親しんだ所離れて、いきなりオレ達の所になんて、難しい話だよな」

「……」

ハードゴア・アリス自身、たまにそんな考えがある事をこの場で始めて知ったわけだが、敢えて成り行きを見守る事に。

「……わ、私」

「？」

「私、時々考えるの。どうして、私が魔法少女になって、ここまで生き残っちゃったんだろうって……」

「どういう事だ？」

「私、人間の時からずっと、鈍臭くて特技も何もなくて……。家族からも、全然相手にされなくて……。お婆ちゃんだけだったの。幼い頃の私に、優しくしてくれたのは……。それから、ガイが、芝浦さんが、私を見てくれていた」

たまは首についたリードに手をやる。

「でも、お婆ちゃんも芝浦さんも、もういない。誰も、私に構ってくれない……。だから思うの。私、生きてていいのかなって……」

「……なるほどねえ」

トップスピードは卵焼きを頬張りながら考え込む。しばらくゆっくりと咀嚼した後、自分のお腹に目をやってから、たまの方を向いて話し始めた。

「……特別にさ。オレの生き残りたい理由ってやつ、教えてやるよ」

「えっ？」

「夢があるんだ。オレと正史、それから……」

そして自身のお腹に手を軽く触れる。

「ここにいるやつと一緒に、テーブル囲んで、ご飯を食べていく事。そいつが、オレの理由」

「……って……。！まさか……！」

たまは驚きに満ちた表情で、口に両手を当てて、トップスピードの事情を察した。トップスピードをウインクをしてから、料理の入ったタッパーを手にとって呟く。

「正直さ、未来がどうなるかなんて分かったもんじゃねえ。オレが今言った事だつて必ずしも叶うとは限らない。だから、少しでもそれが現実になるように、オレは戦うんだ。アリスにだってあるだろ？生き残りたい理由がさ」

「はい。私は、ラ・ピュセルの、夢を、これからも、応援したい。もちろん、皆さんの、夢も。だから、生きたい」

唐突に話を振られるも、アリスは律儀に質問に答える。そんな2人の姿を見て、ますます自分の存在価値感が分からなくなるたま。2人には戦うだけの理由がある。だが自分には、明確に定まったものが何一つない。ガイはより刺激的なスリルを味わいたいが故に、生きようと戦ってきた。皮肉にも、協力してくれていたメアリと王蛇に首を取られる形になってしまったが。

ならば、自分はなぜ今も生きようとするのか？ たまの頭はさらに混乱する。そんな彼女を見兼ねて、トップスピードがこう告げる。

「無理矢理でもさ、生きてる方がいいんだよ。生きてさえいれば、ご飯も食べられるし、新しい夢も見つかるだろうから」

ま、結局決めるのは自分だけだな。

肩をすくめてトップスピードはおにぎりにかじりつく。

「無理矢理でも、生きる……」

たまは復唱する。その短い一言が、たまの中で何か定まり始めたようだ。

「わ、私……！」

「？」

「も、もう一度、スイムちゃんの所に、行って、話を、したい……！」

スイムちゃんに黙ったままなんて、そんなの嫌だ……！ 私にはま

だ、やりたい事も全然見つからないけど、少しでも気持ちを伝えたい

……！ 前に、進みたい……！」

改めて意思表示を示す。たまはそう宣言し、2人に背を向ける。それから、ふと思いついたように顔だけが振り返る。

「あ、あの……！ おにぎり、ご馳走さま……！ 美味しかった……！」

また、食べにきても良いかな？」

「おうよ！ なら今度から多めに作ってやるから、そんな時はちゃんといい面してるよ！」

トップスピードが手を振り、たまは頭を下げるとビルを飛び交ってその場を後にする。たまの姿が見えなくなったところで、アリスがボソリと呟く。

「……大丈夫、でしょうか？ あなたは良いかもしれません。でも、ナ

イトさんもリップルさんも、きつと反対します。九尾も、もしかしたら……」

「そんな時はそんな時だ。今度とびきり美味しい飯作ってきてやるから見逃してくれ、って頼むだけさ」

何ともお気楽な雰囲気で手に残っていたおにぎりを全部口に放り込むトップスピード。どうしてそこまで余裕なのか、釈然としないまま、おひたしを食べるアリス。染み込んだ鰹出汁が良いアクセントになっていた。

「見つからないなあ……」

それから24時間経った、西門前町の一角。たまは人目につかないように注意を払いながら、屋根の上から搜索を行っていた。

スイムスイムと話をしようと思気込んだのは良いものの、彼女が今、どこにいるのかが皆目検討つかない状況だった。あてもないまま、かつて拠点としていた西門前町に足を踏み入れたのだ。パートナーを殺した元凶でもある王蛇とメアリが、タイガを探しに王結寺へ強襲し、半壊した今、アビスの提案で拠点を転々と移動していた事を

思い出し、心当たりのありそうな場所を片っ端から出向いてみた。が、結果は言わずもがな。闇雲に探し回っても時間だけが過ぎていく。そこでたまは思い切って、原点に立ち返って西門前町に戻ってみた。

いくら探しても見つからず、途方にくれるたま。今日はもう諦めようか、いや、ここまで来たのだから全部見て回ろう、などと葛藤が繰り広げられる中、突如ピリオドを打つかのように、マジカルフォンに反応が見られた。モンスターが近くにいます。それも野良ではなく契約したモンスターだ。こうなるとただ事ではない。ライダーや魔法少女同士が戦っている可能性がある。

たま、全身を震わせながらも、スイムスイムがいる事に期待を寄せ、反応をたどりながら屋根を危なっかしい足取りで進んでいく。やがてたどり着いた先に見えたのは、王結寺からでもよく見えていた廃ビル。あそこに同胞達がいるようだ。たまはなるべく大きな音を立てないように廃ビルの中に。

辺りは薄暗く不気味な雰囲気がある。気の弱いたまにとってみれば、心臓が縮み上がりそうだ。懐中電灯でも持つてくれば良かったかな、と考えていたその時、廃ビル全体が揺れ出して、隠れていたであろうコウモリがたまに向かって飛んで来た。悲鳴をあげる暇もなく回避するたま。コウモリはそのまま外へ出て行った。ビルが揺れた後から、何度も衝撃音が耳をつんざく。激しい戦闘が繰り広げられているのは間違いない。

たまは意を決して奥へと進む。廃ビル1階の奥に繋がる道を歩き、赤い光が見えてきて、それを頼りに少しだけ開けた場所に出た。煙が上がり、所々で火の粉が飛び交っている。

やはり誰かが戦っている。たまは気づかれないように顔を覗かせる。左手に見えたのは、際どいビキニとテンガロンハットを被った、ガンマン風の女性。その隣には、紫色の蛇を連想させ、目の前に立っているだけでも本能的に危機感を感じてしまうぐらいに禍々しさを覚えさせる人物が。カラミティ・メアリと王蛇のペアだ。よりにもよってガイを殺したペアと遭遇してしまうとは。たまは震え上がり

ながら、彼らが対峙している相手に注目してみた。薄ピンク色のスク水に、メアリとほぼ同じぐらいの乳を併せ持つ、薙刀を携える少女。「スイムちゃん……!」

思わずか細くはあるが、最恐ペアと対峙している魔法少女の名を呟くたま。スイムスイムの表情は、いつもと違って気を引き締めているようにも見受けられた。

失念していた。まさか奴らがここまでしつこいとは。

相手に気づかれない程度に息を荒げるスイムスイムは、そう自答して感情を押し殺す。

元々、アビスに言われて門前町で使えそうな拠点を確保する為の視察が、スイムスイムに与えられたミッションだった。たまにも手伝わってもらいたかったが、ここ数日、隠れ家にも姿を現さない。何度も拠点を移し替えるうちに場所が分からなくなってしまったのか分からないが、戦力としては期待出来そうにない。仕方なくスイムスイム自らが門前町に戻って、王結寺を中心に使えそうな拠点を探している最中、奴らと出くわしてしまった。タイガに招集されて魔法少女やライダー同士が争いあった一件以来、行方知れずとなっていた2人。前に

一度戦った事があるが、その獰猛さは決して侮れない。

そんな2人を相手にどこまでやれるか。

「……やるしかない。強い敵はどんな手を使っても倒せ。ルーラならきつとそうする)」

戦略的撤退、という選択肢も出来たが、おそらくこの2人を前にそう上手く事は運ばないだろうと、スイムスイムは考える。ルーラを構え、一旦場所を狭い空間内、つまり廃ビルの中に移し替える所までは成功した。自身の魔法をフル活用する上でも、相手の油断を誘う上でも、この場所は最適だ。スイムスイムはそう自分を納得させる。

「随分と狭いところに逃げ込んだもんだねえ。あんたが何考えてるのかわからないけど、格好の的になりそうじゃないか！　なあ王蛇！」

「どうでもいい事だ。俺は戦えればそれで良いんだ……！　スイムスイム……！　俺を楽しませろお！」

王蛇は雄叫びをあげながら手に持っていたベノサーベルを振り下ろしてくる。スイムスイムはルーラで捌きながらその腹に蹴りを入れるが、全くと言っていいほど効いていない。

「オラオラオラオラア！」

そこへメアリが追撃とばかりにマシンガンを両手に持って乱射する。2人は距離を取って回避する。明らかに王蛇を巻き込むような形だったが、当の本人は気にかける素振りを見せない。

「逃すかよお……！」

『STRIKE VENT』

次にメタルホーンを右手に装備し、突撃する王蛇。

「……アビスラッシャー」

パートナーの契約モンスター、アビスラッシャーを呼び出して、王蛇の動きを止めるスイムスイム。その隙に彼女は真下に潜り込んでルーラを突き出す。

「！」

とつさに身を翻す王蛇。脇腹を掠め、血が地面に滴り落ちる。もつと早く突き出せば仕留められたのに。スイムスイムは舌打ちしかける。すると王蛇が何を思ったのか、ゲラゲラと笑い始めた。

「アア……！ 戦いってのは本当に、楽しいよなあ……！ もつと、もつとダア……！」

背筋に寒気が走るとは、この事だろう。腹から出血している以上、ダメージが入ってないわけではない。にもかかわらず、王蛇は戦いに悦を感じている。ここまで異常な人間がこの世にいたとは。スィムスィムですら、内心驚きを隠せない。

「アビスハンマー」

しかしここで攻撃の手を緩めては、向こうの思う壺。もう一体の契約モンスターを呼び出して、アビスラッシャーと共に王蛇への攻撃を命じる。

「お前らと遊ぶ気はない。こいつとじゃれあってろ」

『ADVENT』

王蛇はそう言ってベノバイザーに一枚のカードをベントインさせる。どこからともなく現れたベノスネーカーが、2体のモンスターの前に立ちはだかる。尻尾で巻きつけてから地面に叩きつけたり、反撃とばかりにアビスハンマーの砲撃を直に受けたりと、激しさがより一層増した。

「やつと戦えるなあ……！ もつと俺を楽しませろお！」

ベノサーベルを片手に再び突撃する王蛇。2体のモンスターが足止めされている今、自分1人しか王蛇を止められない。殺るなら、今しかない。スィムスィムは魔法を行使して、地面に潜り込んだ。

「アア……？」

「チツ！ 隠れやがったか？ 出てこい！」

メアリがマシンガンを地面に向けて引き金を引き続ける。次々と地面が抉られていくが、肝心の魔法少女の姿はない。弾も底をつき、新しい銃に切り替えようと、レアアイテムの四次元袋に手を伸ばすメアリ。

「(……今!)」

メアリの注意が自分から袋に逸れたところを、スィムスィムは見逃さず、ルーラを構える。

「！…の……！」

ハッと、メアリが地面に波紋が生じたのを確認し、後退する。ルーラが振るわれ、右足を掠め取った。血が流れて蹲ると同時にスイムスイムが全身を地上に出した。

「この……クソガキがアアアアアアアアアア！」

見下されていると思ったメアリが血管を浮かび上がらせながら、ミニガンを構えて撃ちまくるが、スイムスイムの魔法の前においては、全てすり抜けていく。

「何なんだこいつの魔法は……!?？」

メアリが後ずさりながら引き金を引き続けるが、スイムスイムは臆する事なく距離を詰めて、ルーラを振るう。

「クソツタレガア！」

万事休すかと思われたメアリが、この窮地を脱する為にと、袋から小型のボムらしきものを取り出し、口でピンを外しスイムスイムに投げつけた。

刹那、廃ビル内が激しい光によって塗りつぶされる。メアリが投げたのは、閃光手榴弾。俗に言うスタングレネード。それが至近距離で、尚且つ咄嗟のことで油断していたスイムスイムを直に襲う。

「……いーウウ……いー！」

初めてうめき声が洩れた。視界が悪くなり、足取りもおぼつかない。一刻も早く距離を取らねば。スイムスイムは後退しようとする。

「ハアッ！」

だが逃すまいと、王蛇が無防備な背中に向かってメタルホーンを振り下ろす。メタルホーンをぶつけられ、スイムスイムは背中から流血し、地面をバウンドしながら転がった。手応えはあった。王蛇は仮面の下で笑みを浮かべる。その一方で、王蛇の攻撃が初めてまともに入ったスイムスイムを見て疑問を浮かべたのはメアリだった。

「(野郎……。さつきまで弾をすり抜けてたはずが、ここに来て魔法の効力が切れたのか？ まあどっちにしても、今なら殺れる!)」

好機が訪れた。メアリは口の両端を吊り上げて、AKを構える。

閃光弾の影響で頭の中がぼやけ始めるスイムスイム。二度も仕留め損なった上に、弱点を突くような形での反撃をくらって、身の危険

を感じるスイムスイム。こうなると2人を脱落させる余裕はない。仕方なく撤退を決断するスイムスイムだが、この2人を前に、そう上手くいくはずもなく。

「ハツハツハア！　いつまで逃げられるかなあ!?？」
「もつと戦ええ……！」

再びベノサーベルを構えて猛威を振るう王蛇、その後方から銃弾を撃ちまくるカラミティ・メアリ。完全に後手に回ったスイムスイムに容赦なく攻撃の雨が降り注ぎ、ルーラで弾くのが精一杯だ。

それにしても、とスイムスイムは考える。メアリの放つ銃撃は、下手をすれば王蛇に流れ弾が当たってもおかしくない。それだけ王蛇が暴れまわりすぎているのか、メアリが御構い無しに撃ちまくっているのか定かではないが、これだけはハッキリと分かる。

この2人、ペアだからとか関係なく、連携が取れているわけでもなく、自分達のやりたいままに戦っている。味方が巻き込まれようと関係ない。ただ、目の前の障害を抹殺する為に武器を手にとって戦う。それが王蛇とメアリが、ここまで生き残る秘訣なのかもしれない。何にせよ、どちらの攻撃も厄介極まりない。閃光弾の影響はまだ大きく、耳鳴りと視界ジャックがスイムスイムの判断力を鈍らせる。

「！」
故に気づくのが遅れてしまった。足元には、いつのまにかメアリが投げ込んでいた手榴弾が転がっていた事に。

直後に爆発が起こり、黒煙が上がった。スイムスイムの体が煙の中から出てきて、地面を転がった。もはや呼吸が荒れている事を隠す余裕もない。ギリギリのところまで直撃は避けられたが、爆風によるダメージは大きく、スイムスイムは初めて膝をつく。口から、鼻から血がボタボタと流れ、続けざまに放たれた銃弾が彼女の右肩を掠め取り、血が流れる。

そしてメアリの前に王蛇が立つと、首を回しながら新たなカードを引き抜く。

「お前との遊びは、もう飽きた。消えろ」

『FINAL VENT』

王蛇がベントインしたカードは、灰色のサイの顔が刻まれたカード。それをベノバイザーにベントインすると、後方から黒いメタルゲラスが。そしてメタルホーンを装着した王蛇が軽く飛び上がり、両足を黒いメタルゲラスの肩に乗せてもらおうと、一気に急加速してスイムスイムに襲いかかる。

ダメージが蓄積しており、回避する余裕はない。『ヘビープレッシャー』が、勢いをつけて、無防備なスイムスイムに襲いかかる。ルーラを握るだけの握力もまだ回復しない。思わず歯をくいしばる。

と、その時だった。

「アア……!?」

メタルゲラスの直線上の地面が陥没し、足を踏み外してバランスを崩し、地面を滑るように、王蛇と共に倒れこんだ。スイムスイムは目の前の現象による困惑と、助かったという解放感から意識が薄れかける。両膝をつきかけたところで、誰かにおぶられる感触が伝わる。犬耳の魔法少女『たま』だ。薄れる意識の中でスイムスイムはそう認識する。

「ッ！ あの犬……！」

王蛇がトドメを刺せれなかった事に疑問を感じていたメアリが、介入者の正体を知り、苛立ちを露わにする。ヘビープレッシャーが当たる直前に、たまが魔法を行使して地面に穴を掘り、直撃を阻止したのだ。

すぐに銃口を向けて引き金を引くメアリ。それに対し、たまは悲鳴をあげながらスイムスイムを担いで、素早く身を翻して、廃ビルの外に出た。犬の如く早く直進するたまを相手に、メアリの銃弾は掠りもしなかった。

「チイツ……！ エビルダイバー！」

メアリがそう叫ぶと、黒いエビルダイバーが出現し、たまを追跡させるように命じた。

「逃すかよ……！ あたしらをコケにしゃがって……！」

このまま逃して舐められる事を、メアリは忌み嫌っている。不快感を露わにしながら、王蛇を叩き起こす前に止血を始めた。

「ハアツ、ハアツ……！ スイムちゃん大丈夫!?!？」

「ウツ……」

走りながら、たまは必死にスイムスイムに呼びかけるが、返事はか細い。

「ゴメンね……！ 助けるのが遅くなっちゃって……！ 本当はもつと早く助けられたんだけど、意気地なしで……！ すぐに安全な所に連れてってあげるから！」

「……」

涙目になりながら、とにかく前進するたま。どこか隠れられる場所はないかと、必死に頭の中でこの街の地図を思い返そうとするたま。

すると、担がれていたスイムスイムの方に変化が。光ったかと思うと、背丈が一気に縮んで、たまの腕の中にすっぽりとはまり込む。

「……え」

思わずたまは、逃げ隠れる事も忘れて立ち止まってしまった。先ほどまで、確かにスイムスイムという魔法少女を担いでいたはずだった。背丈はルーラとほぼ同じ。発育の良さはたまをはるかに上回ってい

たはずだった。

しかし、いくら目をパチパチさせても、自分が抱いているのは……。

たまよりもずっと背丈が小さくてピーキーエンジェルズと同じくらいで、ルーラよりも胸の標高が低く、ねむりんのような幼げある風格。それでもって良家のお嬢様のような容姿。

そんな幼女が、たまの腕の中で気を失っている。

坂凧^{さかなぎ} 綾名^{あやな}。7歳。

ベルデと共にルーラを陥れ、そのベルデを自ら葬り、トツプスピードやハードゴア・アリスにも手をかけようとした、魔法少女の真の姿を目の当たりにして、たまの思考は一旦停止した。

114. 勇気を選択

「珠ちゃん、中学生になって随分経つけど、お友達は出来たかい？」

「そ、そんなの、出来ないよ……。私なんて鈍臭いし、だって、家でも、全然ダメダメだし……。私に友達なんて……」

「そうかいそうかい。人生は限りもあるし、短いからねえ。友達を作っておくと、きつといい事があるよ」

「で、でも！ 私には、お婆ちゃんがいるし、ずっといるだけで、全然寂しくもないよ！ 私には、お婆ちゃんがいれば、それでいいの……。」「……珠ちゃん。これが最後の言葉になるかもしれないから、よくお聞き。これから先、いろんな人に出会う事になるけど、誰しもあるしや珠ちゃんみたいに優しいわけじゃないの。仕方ないのさ。そうやって世の中はバランスが保たれているんだからね。その中で本当に珠ちゃんの事を分かってくれる人はもつと少ない。もし、そんな人に出会えたら、最後まで大切になさい。どんな宝石よりも、ずっと高いもんなんだから」

「友達……。私にも、出来るのかな？」

「珠ちゃんは優しいからね。もしかしたら、向こうから友達になってくれる人がいても、おかしくないだろうねえ」

「……イムちゃん、スイムちゃん！」

ボンヤリとしていた意識が、近場から聞こえてくる声によって揺さぶられ、段々とハッキリしてくる。綾名はゆっくりと目を開けて、誰かが立っているのを確認する。犬耳の魔法少女だった。

「スイムちゃん、大丈夫……!?？」

「た……ま……う？」

「うん、そうだよ！ 良かった……！ スイムちゃん……だよね？」

「？ う、ん……」

たまの言い方に引っかけかりを覚えた綾名。その疑問は半べそのたまの言葉で判明した。

「び、びっくりしたよお……。スイムちゃん、年上かと思っていたから、まだ子供だったんだね」

「……」

そこで綾名は自分の体を凝視し、変身が解けている事に気づく。先ほどまで王蛇とカラミティ・メアリと交戦していて、思った以上にダメージが大きかったのだろう。もつと言えば、今の彼女はたまの腕に抱かれていた。廃ビルからここまで抱き抱えながら逃げてきたのだろう。

自分の手のひらを見つめている綾名には目もくれず、たまは謝り続けていた。

「ご、ゴメンね！ 助けるのが遅くなっちゃって……！ 私、逃げてばかりで……。ホントは少し前から見てて……。もつと早く掘れていれば、こんなにならなくても済んだかもなのに……」

「……」

「あ、あの、スイムちゃん……で、いいかな？ 立てる？ 無理しなくても、このまま運んであげるけど」

「……いい。降ろして」

ようやく綾名は口を開き、自ら降りようとする。最初に地面に足を

つけた時はフラついたが、たまが寄りかかってくれて、脇腹を抑えながらバランスをとり、ようやく完全に立ち上がった。

そしてその小さな手にマジカルフォンを握る。

「……変身」

小声でそう呟き、タップすると魔法少女『スイムスイム』に変身。振り返り、たまに体を向ける。

「あ、あのねスイムちゃん……！ お、お話があるんだけど、ちよつといいかな……？」

一方でたまはこれから面と向き合ってリーダーと話をする事に、極度の緊張感を持ちながら、勇気を振り絞って口を開く。その間、スイムスイムは片手でマジカルフォンを操作する。

「あ、あのねスイムちゃん……！ 私、これから」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

「！」

スイムスイムが手元に呼び出したルーラを横に振るおうとするのと、横手からメタルガラスが突進し介入してきたのはほぼ同時だった。メタルガラスの突進攻撃によって、ルーラの軌道は逸れ、たまの首元から外れて左腕を掠めとる。突然自分の腕から流れ出た血とそれに伴う痛みのみあまり、悲鳴をあげるたま。メタルガラスに助けもらわなかったら、絶命していたはずだった。

「な、なんで……!?? どうしたのスイムちゃん!??」

突然襲いかかられた事に困惑するたま。メタルガラスがその前に立ち、スイムスイムはルーラを構え直す。たまの返事に答える気は無いのか、再び距離を詰めようとする。パニック状態になったたまは悲鳴をあげながら背を向けて、一目散に駆け出す。メタルガラスもそれに反応して、スイムスイムから遠ざかる。

全速力のたまの前では、スイムスイムとて魔法を行使して地面を泳いでも追いつく自信はない。一旦肩の力を抜いた。それから、ルーラを見つめながら呟く。

『魔法少女同士であっても、絶対に正体を明かしてはならない』、それが、ルーラの掟」

正体が露見されては、それが必ず弱みになる。敵味方問わず、身バレしたら最後、その情報を利用されるだけの愚図に成り下がる。ましてや敵の手にその情報が渡れば、即ち死を意味する。これら全ては、ルーラが生前教えてくれた事。

たまは仲間だ。どんな事情があつたのか知らないが、例え遠く離れたとしても、彼女を受け入れるつもりだつた。だが、ルーラの教えは守り通さなければならぬ。それが『スイムスイム』が『ルーラ』として生きる為の必須条件だつたから。

「……だから、仕方ないの。さつきは失敗しちゃつたけど、ちゃんと私は、ルーラになるから」

頬に流れた涙を手首で拭き取り、たまが立ち去つた方角を見つめる。ちようどその時、彼女の後方にパートナーであるアビスが降り立つた。一部始終を見ていたわけではないようだ。さらに、上空には黒いエビルダイバーが旋回しているのが見える。自分達を追つて、位置を知らせようとしているのだろうか。

スイムスイムは考えた。このままアビスにも、そしてこれから来るであろうペアにも手伝つてもらおう、と。

「ヒイツ、ヒイツ……！」

脇目も振らず、たまは魔法で向上した脚力をフル活用し、人目のつかない路地をひたすら駆けていた。いつのまにか、門前町を越えていた。

何がどうなっているのかも分からず、ただ前だけを向いて走っていた。何か琴線に触れるような事でもしてしまったのか。だとしたら謝らなければ。でも今のままでは殺されてしまうかもしれない。

「た、助けて……！」

とにかく今は、安全な場所を見つけ出し、身を潜める必要がある。もちろん他の魔法少女や仮面ライダーの所に。

そうして全力疾走していた矢先、目の前の地面にクナイが突き刺さった。

「!?？」

急ブレーキをかけて立ち止まるたま。ハッと上を見上げると、電柱から地面に降り立つ2つの影が。

「お前、何でここにいる」

最初に話しかけてきたのは、忍者姿の魔法少女『リップル』。手には手裏剣がいつでも飛ばせるようにと握られている。その隣にいるパートナーの仮面ライダー『ナイト』はダークバイザーを突きつける。「単身で戦いを挑んでくるつもりなら、それでもいい。俺は龍騎と違って優しくもないし、そうする必要もない」

「あ、アワ、アワワワ……!?？」

パニック状態のあまり、思うように口が動かない。会話する気がないと察した2人は臨戦態勢に入ろうとするが……。

「ちよつと待ったあー！」

「おーいー！」

突然上空から、聞き慣れた声が。龍騎とトップスピードだ。その後方からは九尾とスノーホワイトの姿も。

「何だ。戦いの邪魔をするな」

「ちよつと待ってってナイト！ この子怖がつてんだろ!?？ 戦う気も

ない奴にそんな事すんなって!」

「そうやって油断させるのが奴の作戦だったらどうするつもりだ」

「そ、それは……」

龍騎とナイトのやり取りを他所に、トップスピードが話しかけた。

「や、ごめんな。リップル達も悪気があったわけじゃないんだ。ただまあ今がこんな状態だし、ちつとばっか張り詰めてるからな。ほら、2人とも謝んなよ」

「……チツ。紛らわしい」

「素直じゃないね」

先ほどまでの緊張感はどこにいったのか、リップルは謝る事なく舌打ちで返す。たまが困惑する中、九尾はスノーホワイトに話しかけた。

「……で、どうなんだ。こいつが嘘を言ってるって事はなさそうか」

「うん。心の中では少なくともそんな気配はないよ。……でも、何かから逃げてきたって感情は強そう」

「逃げてきた……? 待てよ、って事は……」

九尾がいち早く何かに気づき、たまに話しかけた。

「おい」

「! ひゃい!?」

「お前、どうしてここまで来た? 誰かに狙われてんのか?」

「そ、それは……! そ、そうだ! た、大変なの……! スイムちゃんが、スイムちゃんが……!」

たまが必死に何かを伝えようとするも、呂律が回らず、上手く伝えられない。そうこうしている間に、脅威は迫ってきていた。

「!」

咄嗟に九尾がたまを地面に押し倒す。と同時に、たまが立っていた地点を銃弾が掠めた。九尾が手を出してくれなければ、餌食になっていただろう。たまの口から悲鳴が上がる中、一同は警戒を強める。こんな場所で銃を撃ってくる者など、容易く想像できた。

「こんなところにいたのかい。あの女を先に殺っておこうかと思ったけど、あんたが先ならそれでもいいさ。さっきの借りはここで返させ

てもらおうからねえ！」

「祭りにはちようどいいなア……！ 北岡を潰す前に、お前らで我慢してやるよ」

ミニガンを構えながら前進してくるカラミティ・メアリ。その隣を王蛇が悠然と歩いてくる。その場にいた全員が身構える。さらに横手からはアビスの姿が。

「……アア？ お前も、俺と戦うか？」

「貴様など眼中にない。が、これだけの人数がいるなら好都合だ。ここで数を減らしておくのも無難だ」

「……！」

直後、アビスから殺気が溢れ出たのを察した九尾。王蛇とはまた違った何かを彷彿とさせ、警戒心を強めた。

そして何の前触れもなく、開戦の合図が送られ、先んじて王蛇が駆け出した。リップルが牽制とばかりに手裏剣を投げるも、全てベノバイザーによって弾かれている。

『SWORD VENT』

「ハアアアアアア！」

そのままベノサーベルを召喚し、めちやくちやに振り回し始めた。一同は散会し、難を逃れる。

「逃すかってんだ！」

だがメアリが当然それを許すはずもなく、銃弾が撒き散らされる。他の面々が武器を片手に攻めようとする中、たまは悲鳴をあげながら、銃弾を避ける形で逃げていた。

『ADVENT』

アビスも2体の契約モンスターを呼び出した後で、2刀のアビスセイバーを構えて交戦を始める。先ほどまで静かだった、住宅も少なく開けた場所はいっしょか戦場と成り代わっていた。

「ヤアッ！」

「フンッ！」

九尾とスノーホワイトは、メアリが召喚した黒いエビルダイバーに対し、回避を繰り返しながらフォクセイバーで対抗し、リップルはメ

アリとの一騎打ちへ。ナイトはアビスラッシャーと、龍騎とトップス
ピードはアビスハンマーと戦いを始める。一方で王蛇はたまをなぶ
り殺しにしようと執拗に追いかけていたが、メタルグラスが彼女を守
るように妨害を繰り返した事で、イライラがピークに達し始めた。

「イライラするぜ……！」

『ADVENT』

ベノバイザーにカードをベントインし、召喚させたのは黒いメタル
グラス。不意の突進には、本物のメタルグラスも対処できず、横に転
がった。

「同じやつは2人もいらぬ。消えろ」

『FINAL VENT』

続けざまにカードをベントインし、王蛇の背後からベノスネーカー
が接近してきた。王蛇は飛び上がり、両足を起き上がろうとするメタ
ルグラスに定める。

「ハアアアアアアアアアアアアアア！」

ベノスネーカーの口から吐かれた毒液に乗っかり、王蛇は渾身の
キックをメタルグラスに連続で打ち込む。重量級であるはずのメタ
ルグラスはいとも簡単に吹き飛ばされ、『ベノクラッシュ』を正面から
受けた事で、たまの横をすり抜ける形で爆散した。

「！　そん、な……！」

たまは絶句する。これまたまた幾度となく自分を守り、そして事あ
るごとにすり寄ってくれた、パートナーの契約モンスターがやられて
しまい、たまにとつての戦術を失った事に、ショックを受ける。そ
んな彼女を見て呆れが生じたのか、首を鳴らしながら吐き捨てる。

「……つまらん。お前ぐらいなら後回しでもいいなア。他のやつの方
と戦ってる方が面白い」

鼻を鳴らして、王蛇は龍騎とトップスピードがいる地点へ。たまは
何も言い返せず、その場で座り込む。体の震えは止まらない。

そして王蛇の乱入で、龍騎とトップスピードの間が空いてしまっ
た。

「！　ヤバっ……！」

「俺と、戦ええ龍騎い！」

「お前の相手なんかしてる場合じゃ……グハツ！」

「知った事かあ！ お前は前から俺をイラつかせた！ 戦う理由なんて、そんなもんでいいだろお！」

「こいつ……！ どんだけ狂ってんだよ!?？」

『GUARD VENT』

ドラグシールドを構えて応戦するも、王蛇の狂気ぶりに押されて、追い詰められているのが分かる。

「龍騎！ おわっ!?？」

助けに行こうとするトップスピードだが、アビスハンマーの砲撃によつて吹き飛び、地面を転がった。

「！」

「おおっと！ そつちには行かせないよ！」

リップルが慌ててトップスピードを助けに行こうとするが、ベノサーベルを召喚したメアリによつて阻まれる。

「く、そお……！ さすがにこいつは、ヤバそうだけど、とにかく、ただけでも逃した方が良いか……?？」

『STRIKE VENT』

「!?？」

トップスピードがとんがり帽子を押しさえながら、怯えているたまをどう逃すか考えていたその時、背中越しに激流が襲いかかり、またしても地面を転がる。よろけながら顔を見上げると、アビスクロウを構えるアビスの姿が。『アビススマッシュ』を直に受けてしまい、息が荒くなりつつある。

「真っ先に消す理由はないが、お前には、ここで消えてもらう」

「……ッ！ 死んで、たまるかよ……!？」

よろけながらも立ち上がるトップスピードに対し、アビスは追撃とばかりにアビススマッシュを発射し、トップスピードの体力を奪っていく。サバイブの力を使おうにも、敵はその隙さえ与えてくれない。

完全に万事休すとなりつつあるトップスピード。その姿を、遠くからたまがジツと見つめている。

「(ど、どうしよう……! このままじゃ、トップスピードが……! で、でも、あの人が脱落したら、それはそれで得するかもしれない……! だって、どう考えても、ここにいる何人かは脱落しちゃうかもだし、無理して助けに行く必要なんて……! それに、私なんかが助けようとしたって……! でも、本当に、これで、いいの……! 私、どうしたらいいの、お婆ちゃん……!」

『そんな人に出会えたら、最後まで大切になさい』

『いつでも来ていいからな!』

今は亡き祖母と、トップスピードの言葉が、たまの小さな脳の中を駆け巡る。

たまにとって、トップスピードとは……。感情で押し潰されそうだった。

「(私……私……! どうしたら、いいの……?!? 私にも、戦える力って、あるの……?!?)」

誰も、答えてはくれないと分かっていた。分かっていたから、思わず目の前を見る。水浸しになりながらも、懸命に戦い、生き抜こうとするトップスピード。彼女が抱えている秘密を、生き残りたい理由を、たまは知っている。その背中に、憧れさえ抱いた事もあった。そんな彼女の命を刈り取ろうと、アビスは着実に追い詰めていた。

「いい加減諦めたらどうだ? さっさと自分の運命を受け入れろ。どうあがいてもお前は」

「いいや諦めないね! オレは、絶対に、死なない……! オレには、まだ、やりたい事が、あるんだからなあ!」

「どこまでも妄想を描くつもりか。なら、その幻想を断ち切つてやろう」

そう言ってアビスは、何故か頭をカクンと一瞬下げた。意図が分からないトップスピードとたま。が、ただだけが気づいてしまった。

トップスピードの後方、少し離れた位置の地面に波紋が生じ、ピンク色の髪の少女が頭だけを突き出して様子を伺っていた事に。その少女は小さく頷き、また地面に潜り込む。

再びトップスピードに注目してみる。彼女は目の前のアビスに集

中していて、背後から迫り来るものには気づいていない様子だ。このままではどんな結末が待っているかなど、頭の悪いたまでも容易に想像がつく。他の面々はその事に気づいている様子はない。体の震えは最高潮に達した。

「(スイムちゃん……!)」

「ん……?」

トップスピードが迫り来る死に気づいたのは、近くから人らしき気配を察知した時。その時には、既に魔法で地面に潜り込んでいたスィムスイムの体が、膝から上まで出ている状態で、その手に光の反射で輝くルーラを振り上げる体勢に入っている。回避は、間に合わない。

これがいわゆるデジャヴというやつか。中宿での一件が、走馬灯のように駆け巡るトップスピード。

「ダメエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

「やめろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

リップルと、龍騎の声が耳に聞こえて来たが、それでどうにかなる状況ではない。トップスピードが限界まで目を見開くのをその目で確かめながら、スィムスィムが無表情のまま、冷徹にその刃を振り下ろす。

命を刈り取る刃は、そのまま1人の魔法少女の元へと向か

「…………ア」

肉が断ち切られる音が、その場にいた全員にハッキリと行き渡る。音のした地点から溢れ出た赤い液体は、その周囲に降り注いだ。

とんがりハットに、思わず手から離れたラピッドスワローに、そして常に首から提げていたお守り袋に、赤く点々としたものがついた。

全員の、特に龍騎とリップルの動揺は激しかった。死を目前に控え、力が抜けて倒れこむトツプスピードには、全くといって外傷がない。付着した血も、彼女のものではない。

トツプスピードは、ゆっくりと、目の前の光景に意識を向ける。

そこに広がっていたのは……。

「……ウツ、グフツ……！」

トツプスピードを、敵対していたはずの魔法少女を庇うように立ち、仲間であるはずの魔法少女による一撃を、その背中に受けて、背

中から、そしてきつく縛った口から血を吐き出す、犬耳の魔法少女の姿が、そこにあつた……。

れながら倒れこむ姿を見て息を呑んだ。

「たま……！ くっ……！」

後一步、間に合わなかった事に地団駄を踏むラ・ピュセル。だがそれも、再び起き上がって首を鳴らし始めた王蛇が向かってくる事に気付いて、そちらに意識を向けざるを得なかった。

リップルもカラミティ・メアリと交戦する中、たまに守られたトツプスピードの元へ向かおうとしているが、彼女は隙を与えてくれるわけでもなく。

「オラオラア！ そんなにあの犬つころが気になるかい！ そんなに心配なら、後を追わせてやるよ！」

「こ、のお……！」

舌打ち混じりにメアリの構えるデザートイーグルを短刀でいなすリップル。

一方で、震えながらもたまの元にたどり着き、見るからに衰弱の激しい少女の上半身を起こして、必死に呼びかけるトツプスピード。

「たま……！ たま……！」

「……トツプ、……スピード……！」

「たま……！ バカヤロオ……！ 何で、オレを、庇って……！」

目から大粒の涙を流し、何故自分を庇ったのかを問うトツプスピード。たまは限りある意識の中で答える。

「……仲間、だから」

「！」

「同じ、魔法少女、だからじゃ、ダメ、かな……？ こんな、私の事、仲間だって、言っ、くれたの、トツプスピード、だったから……。だから……！」

そう言っ、て血を吐くたま。限界が近い。

「だからって……！ お前が、死んじまったら、元も子もねえだろ！ 無理矢理でも、生きるんじゃ、なかったのかよ……！」

「……アハ、は。ゴメン、ね。私は、やっぱり、トツプスピードみたいには、なれない、かな……。トツプスピードみたいに、心も、体も、強く、ないし……。だから、ずっと、後悔ばかりの、人生しか送れないっ

て、そう、思ってた」

「たま……！」

「……でもね。こんな、私でも、誇れる事が、出来たんだよ。トップスピードを、誰かの幸せに、繋がる、未来を、守れた。それが、私の、自慢……」

お婆ちゃんも、きつと、喜んでくれるよね。

そう呟くたまの、体の傷口から流れる血の量が少なくなりつつある。

「居場所なんて、ないって、決めつけて、自信も無くなって、こんな私に、それでも、声をかけて、くれて、凄く、嬉しかった……！ そんな、トップスピードと出会えて、私、良かった……！」

「たま、お前……！」

「……私は、もう、ここで、終わるけど、トップスピードは、諦めないで、ね……。生きる事、ご飯を、食べる、事」

たまは震える左手で、首元についていた、千切れかけの首輪を弱々しく掴んで、トップスピードに差し出す。同じように震えながらそれを手に取るトップスピード。

「もし、良かったら……。それ、持ってて、くれると、嬉しいなあ……。ガイ、からの、プレゼント、なの。私にとっての、宝物。私の事、忘れないで、くれると、嬉しい……。な」

「忘れるわけ、ねえだろ……。忘れたくても、絶対に……！」

「……！ 嬉しい、なあ」

そう言つて薄っすらと微笑むたま。意識が、闇の底に向かおうとしているのが自分でも分かる。だからこそ、たまは絞るように口を開く。

「……トップ、スピード」

「な、何だ」

「……私の、分まで、戦つて。それ、から……。お腹の中の、赤ちゃんと一緒に、生きて、ね……！」

視界が、ボヤけ始める。これが、死を迎える間際の光景か。朦朧とする意識の中で、たまはそう考察する。

「千尋ちゃん、先に逝っちゃうけど、ゴメンね。友達になれて、凄く嬉しかった……。お婆ちゃん、芝浦さん。私、今から、そっちにいくね」

レポート作成を通じて仲を深めた友への謝罪と感謝を述べた後、脳裏には自分に密接に関わってくれた者達の所へ訪れる事への嬉しさで胸いっぱいだった。

「2人に会えたら、いっぱいいっぱい、自慢するんだ。『魔法少女育成計画』で、優しい魔法少女にたくさん出会えた事。自分を必要としてくれる人に出会えた事。それから……、

同じ魔法少女の命を、守れた事」

犬の一吠えが、弱々しくも辺りに響き渡る。

自然と笑みが零れ、スウツと溶け込むように、意識は闇の中に墮ちた。

「たま……！ たまあ……！」

両目から、光が失われている事に気付いたトップスピードが、ぐつたりとなつている少女の体を揺さぶるが、返事はない。

すると、たまの体は光に包まれ、犬耳の魔法少女から、どこにでもいそうな、小柄で制服に身を包んだ内気な少女へと変化した。この少女こそが、魔法少女『たま』の人間としての姿なのだろうとすぐに察した。

自分よりも若い少女の死を前に、涙が溢れ出て、止まらない。嗚咽と共に、冷たくなった彼女の体を抱きしめる。

その様子を、黒いエビルダイバーを弾き飛ばした九尾とスノーホワイトは目の当たりにし、九尾は仮面の下で歯軋りをし、スノーホワイトは感情に突き動かされる形で拳を固め、目から水滴が零れる。

やがて、たまの亡骸を抱き寄せるトップスピードの目の前に、足音を響かせながら、アビスが立ちちはだかる。

「戦う運命にあつた他者の死を嘆く、か。なんとも見苦しい光景だな」「んだと……!」

「力がある限り、戦いの運命からは逃れられない。その犬はその意味を理解する事なく無様に散つた。同じ魔法少女によって、自らの野望は絶たれた。弱者にはお似合いの、哀れな最期だったな」

「ツ、て、メエエエエエエエエエエー!」

アビスの冷徹な一言に逆上したトップスピードがたまを下ろし、勢いに任せて殴りかかる。が、アビスは左拳を振るうだけでトップスピードを地面に伏せさせる。そして首根っこを掴むと、胸元を蹴るように遠くへ吹き飛ばした。地面を転がるトップスピードからは呻き声が出た。

「トップスピード!」

「そんなにこの女が侮辱された事が癢に触るか。ならばその未練、断ち切つてやろう」

そう言つてアビスは地面に横たわるたまを踏みつけようとするが、

『SWING VENT』

「ハアッ!」

すんでのところでライアが、エビルウィップでアビスに攻撃し、体当たりしてたまから引き離す。

「お前に、人の運命を語る資格など……!」

「なおも屍人を守るか。価値のないものに媚びるとはな!」

『SWORD VENT』

空いた手でベントインしたアビスは、両手にアビスセイバーを召喚し、ライアを斬りつけた。後ずさるライアを吹き飛ばした後、いけしやあしやあと語り始める。

「ただだけではない。ルーラもベルデも、タイガもインペラーも、そし

てピーキーエンジェルズも、己の欲望を受け止めるだけの器を掲げてなどいなかっただ。自らの力に酔いしれ、そして無意味に散った。商品価値のない命だったといえよう。元々期待していなかったとはいえ、想像以上に無能な連中だったよ。こんな事なら、初めからチームなど組む時間すら無駄だったといえよう」

「お前が……！ たまの、ルーラ達の、命を、語ってんじゃねえ……！ あいつらだって、生き残る為に、必死になって、戦ってきたんだ……！ お前は、何も感じなかったのかよ……！ 誰よりもチームの中にいて、その素晴らしさを、誰よりも見てきたはずのお前が、何も……！」

起き上がりながら、たまのそばに寄ろうとするトップスピードの口調は、穏やかとは程遠い。

トップスピードの怒声を気にも止めず、アビスは悠然とアビスセイバーを構えながらトップスピードに近づく。

「この試験が、戦いがどれほどの価値があるものか、興味を抱いたのが間違いだったな。私が求めていた戦いとは程遠い。もはや手をこまねく理由もない。死をもって私を永遠に崇めるがいい！ 私こそが、命の管理者にして、最強の仮面ライダーに相応しいのだからな！」

これまでに聞いた事もないほど狂気に満ちた、アビスの不気味な嘲笑と共に、トップスピードに向かって飛びかかる。

『STRIKE VENT』

「!?？」

「……語るな」

不意に右手首を掴まれたアビスが、状況を理解する間も無く、その腹に形ある何かが押し付けられた。よく見ると、右腕にドラグクローを構える龍騎が、アビスの腹めがけて発射体勢に入っていた。さらに後方に目をやると、ゆつくりとトップスピードが向かってくるのが確認できた。本能的に危機感を覚えたアビスが引き剥がそうとするが、右手首を掴む龍騎の力強さの方が勝っている。

「お前が……！ お前があ……！」

「くっ……！ 離せ……！」

「ハアアアアア！」

九尾サバイブとスノーホワイトサバイブは、フォクスバイザーツバ
イを駆使して、スイムスイムに突撃する。可能な限りルーラで攻撃を
防ぎ、背後から仕掛けてこようものなら、魔法を行使して地面に潜り
込んだ。敵の姿は見えなくなったがある、スノーホワイトには何ら問
題はない。魔法によって、どう攻めあがろうか『困っている』心の声
を利用し、次にどこから現れるのか、的確に察知していた。

とはいえ互いに有効打を与える事は出来ていない。

『SWORD VENT』

ファムが使用していたウイングスラッシャーを手に持った九尾サ
バイブの攻撃も、ルーラとぶつかり合い、均衡が崩れない。

「九尾、代わって！」

と、今度はスノーホワイトサバイブが前に出て、軽い身のこなしで
スイムスイムとぶつかっていった。以前に増して攻撃の動作が素早
い事に訝しむスイムスイムだが、顔色一つ変えずに互いの武器をぶつ
け合っていく。

「同じ魔法少女でも、これだけは、見過ごせない……！　あなただけ
は、許しちゃいけない！」

「……ルーラなら、きつと、こうする」

なおも罪の意識を感じさせない一言を呟くスイムスイム。再び鏢
迫り合いとなり、スイムスイムは体力の消耗を避けるべく、一気にト
ドメを刺そうと、魔法で地面に潜ろうとする。が、その時。

『NASTY VENT』

ナイトサバイブが、王蛇を黙らせるべく発動させた『ソニックブレ
イカー』による超音波が、スイムスイムにも直撃し、そのうるささに、
顔をしかめて気がそれてしまった。

『この音、嫌い……！』

「！　ヤアッ！」

スイムスイムの心の声が聞こえてきたスノーホワイトサバイブは、
すぐさま距離を詰めて無防備な頬に向かって、拳をぶつけた。手応え
は、あった。

「……！」

スノーホワイトサバイブに殴り飛ばされたスイムスイムは、思わずルーラを手放してしまった。地面に音を立てて落ちたルーラを、スノーホワイトサバイブはすぐに手に取った。

「これ以上、あなたにこの武器で、人を、殺させない！」

「ルーラを、返して……！」

スノーホワイトサバイブに没収されてしまっている事に気付いて、すぐに起き上がり、素早くマジカルフォンをタップしてアビスセイバーを構えて攻撃に転じるスイムスイム。が、動揺のあまり、1つ1つの攻撃が先ほどと比べて単調になっていた。それ故に、九尾サバイブはウイングスラッシュャーで押さえつけてから、回し蹴りでスイムスイムを逆に弾き返す。

「(あの武器を取られて動揺が激しいな。このまま一気に……！)」

九尾サバイブが次なる一手を仕掛けようとしたその時、カードデッキの中のカードが光り始めた。新たにカードが追加された証拠である。引き抜いてみると、たまのアバター姿が描かれているカード。彼女の死が、九尾サバイブに新たな力を付与させたようだ。

「たま……。一緒に、戦うぞ！」

『HOLE VENT』

カードをベントインすると、起き上がったスイムスイムの真下の地面がポツカリと空いて、スイムスイムはわけもわからぬまま落下した。たまの魔法によって、瞬時に自分がイメージした場所に穴を開けるのが、このカードの能力のようだと察する九尾サバイブ。

「！ あれは……！ トップスピード！」

「おう！」

その一方でアビスを追い詰めていた龍騎サバイブは、九尾サバイブが開けた穴の存在に気づいて、トップスピードサバイブに呼びかける。トップスピードサバイブはラピッドスワローで高速移動を続け、真正面から体当たりをかますと、アビスはカードをベントインする間も無く吹き飛ばされ、そこへ龍騎サバイブのかかと落としが決まり、アビスも穴の中へと吸い込まれるように落下する。

「俺達は、お前らなんかには、負けない！」

『SHOOT VENT』

『IMPROVE VENT』

龍騎サバイブがドラグバイザーツバイにカードをベントインすると同時に、トップスピーードサバイブも同じくドラグバイザーツバイを構える。九尾サバイブも援護するように、シスターナナの魔法を行使し、2人の力を引き出す手を整える。

2人の周囲にドラグランザーが降り立ち、ドラグバイザーツバイの銃口と、ドラグランザーの口が穴に向けられる。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

『メテオバレット』が普段の二倍以上の火力で穴の中を埋め尽くし、炎が噴き上がる。

「くっ………！　こんな、奴らに、殺されてたまるか………！」

『LIQUID VENT』

穴の奥からアビスの声と、ベントインした音声が出てきたのを、スノーホワイトサバイブは確認した。攻撃が止んで穴を覗いてみたが、アビスもスイムスイムも、その場にはいなかった。アビスはパトナーカードの能力で液状化して、スイムスイムは落ち着きを取り戻したのか、自身の魔法で地面の奥底に潜り込んで攻撃をやり過ごしたようだ。

だが、反撃を仕掛けてくる様子はないらしく、スノーホワイトサバイブが懸命に反応を辿っても声が聞こえてこない事を考えると、本当に撤退したようだ。

ふと気がつくと、辺りが静寂に包まれている。振り返ると、ナイトサバイブ達がこちらに歩み寄ってくるのが確認できた。

「あいつらは」

「途中で撤退した。どっちもそれなりにイラついている様子だったが、まあしばらくはこっちにちよつかいを出す事はないだろう」

サバイブの時間も切れて、元の姿に戻る一同。

そっつか、と呟いたトップスピーードは、目元を隠すようにとんがりハットを深くかぶり直した。そして龍騎達に背を向けて、仰向けに倒

れている少女の所へ。

その後ろ姿は、今まで見てきたどの後ろ姿よりも物悲しさが溢れ出ていたと、後にリップルは語る。

しゃがみこみ、今一度動かなくなった、細身の彼女の体を抱き抱える。血の量が減っているからか、空の弁当箱を持っているような感覚だった。拳がギュツと握りしめられているのを、九尾達は見逃さなかった。どう声をかけたらいいのか戸惑っている者もいる。

不意に内ポケットの中をガサゴソとあさり始めるトツプスピード。何かを見つげようとしているようだが、見当たらなかつたらしく、少しだけ肩を落としてから、今度は自身のマジカルフォンを開いて、操作する。

程なくして、彼女の端末から、久々に見かけた気もするマスコットキャラクターが飛び出してきた。

『はいはい！ 呼ばれて登場、ファヴだぼん！ これから大事な報告があるので、要求なら手短に済ませてほしいぼん！ ……とと思ってたけど、ここにいるみんなにはその必要はなさそうぼん』

ファヴが、横たわる珠の姿を見て、そう呟く。これから、新たに脱落した魔法少女の名を発表するところだったのだろう。

トツプスピードはファヴに目向きもせず、淡々と尋ねる。

「……なあ、ファヴは、オレ達の正体とか全部知ってんだよな。例えば、どこの家に住んでるとか」

『それならまあ、一応抑えてあるけど、それが、どうしたぼん？』

「……ちよいと、オレの頼み、聞いてくれないか？」

寒空の下、民家が密集している地帯の上空を、いくつもの影が飛行していた。

先頭を走るトップスピードの腕には、目を閉じている珠が抱かれており、その後ろを、龍騎達が各々の移動手段を用いてついてきている。目的地が近づいてきたところで、一同は降下し、近隣の住民に気づかれないように、とある民家の玄関前まで降り立った。ネームプレートには『犬吠埼』と刻まれている。珠の家に違いないと確信を得た。この場所を教えてくれたのは、他でもないファヴだった。

『魔法少女や仮面ライダーにも、一応個人情報保護法は適用されるけど、もう死んじやった魔法少女なら話は別だし、トップスピードのこれまでの頑張りに免じて、教えてあげるほん！』

と言った形で、珠の家の住所を教えてもらい、現在に至る。

ラピッドスワローから降りたトップスピードは、玄関の戸まで運び、ゆっくりと降ろして上半身を立たせる形で、その華奢な体を傷つけないように静かに横たわらせる。

「……悪いな。あのままにしておくのも、後味悪い気がするな。お前は、家族から嫌われてたそうだけど、そいつはきつと、お前の思い込みだろうよ。子供を心配しない親なんて、いるわけねえだろ？　だから、ここがお前の、帰るべき居場所なんだ。魔法の世界なんて関係ない、どこにでもある、そんな場所だ」

そして、物言わぬ体をそっと抱きしめる。

「……ゆっくり休めよ。後の事は、オレらで何とかしてやるからさ。」

……お前は、オレの、最高なダチの1人だからな」

気が済むままに抱きしめ続けたトップスピードは、珠から離れる

と、リップルに目線で指示を飛ばす。少しだけ反応に遅れながらも、インターホンを鳴らした。

家の奥から足音が聞こえてきたのを確認した一同は、手早く撤収した。明かりがついていなかったのも、暗くてよく見えないかもしれないが、明かりに照らされれば、誰でも傷口や血のついた制服に気づくだろう。後は、向こうの家族の手で解決してもらおう。

名残惜しそうに一瞬だけ立ち止まるトップスピードだが、ラ・ピュセルに催促されて、再び駆け出し、空に向かって飛び上がる。

私の体、家まで運んでくれたんだね

ハツとなってラピッドスワローから後方に振り返るトップスピード。明かりがついているのが確認できたが、すでに豆粒ほどに遠ざかっており、姿は確認できない。今頃大騒ぎになっているはずだ。

最初から最後まで、本当に、ありがとう

トップスピードの言う通りだった。私は、ずっと、自分から殻に閉じこもってただけだった。でも、それが間違ってるって気づけて、本当に良かった

トップスピードは、凄いや。私にとっての、本当の、魔法少女だね

ラピッドスワローを握る両手が、震え始める。涙が、止まらない。

もし、生まれ変わったとしたら、その時は……

嗚咽が聞こえてきたのを確認した龍騎は、トップスピードに近づいてその小さな体を抱き寄せる。

その時は、トップスピードみたいに、うんと優しい、自分に自信が持てる人になるんだ

リップルも、彼女を慰めるべく、なるべく顔を見せないように近づく。

頑張つてね、トップスピード。生きてね

刹那、トップスピードの感情がはち切れんとばかりに、夜空に虚しく響き渡った。

自分よりも幼い少女の命を守れなかった事への悔しさ。そして死に絶えながらも、自分の夢を後押ししてくれる事への感謝が入り混じ

り、いつのまにか自分でも制御が追いつかないほどに、顔をクシヤクシヤにしながら、2人に体を寄せた。

龍騎は、同情するかのようにその手を握りしめ、彼女を安心させる。リップルは、トップスピードを悲しませた元凶を恨むように、虚空を睨みつける。

他の面々も、それぞれ思う事は多々あるが、それは今、この場で語るわけにはいかないだろう。

《中間発表 その13》

【たま（犬吠埼 珠）、死亡】

【残り、魔法少女9名、仮面ライダー8名、計17名】

116. タイムリミット

N市の大病院内の、とある待合室で城戸 正史は1人、眉間にしわを寄せて座り、壁にもたれかかっていた。近くに『産婦人科』と表記された部屋がある。そこにいる彼女が出てくるのを待つ間、時折ため息をつくその表情からは、普段の彼からは似つかわしくないものを感じさせる。

やがて病室の扉が開き、膨らんだお腹に手を当てながら正史に向かって手を振る女性……室田 つばめが姿を現した。

「お待たせ〜！ ……って、どしたの？」

「！ あ、いや何でも……」

「の割にはイカつい顔してたぞ？」

「そ、そう……？ あ、ところで検査の方はどうだった？」

「順調そのものだってさ！ ……ただ」

「ただ？」

「ちよつとストレスが溜まつてるみたいだって言われてさ。赤ん坊に影響するかもしれないから、なるべく発散するように心掛ける、だってさ」

「……」

2人同時に黙り込んでしまうのも無理はない。ストレスが蓄積された原因を、彼らは知っている。理由は言わずと知れた、数日前に起きた、同じ魔法少女である『たま』の死にある。それも目の前でその最期を看取った事もあり、トップスピードにとってそのショックは計り知れないものがある。事実、たまの死から一夜明けた頃は、休暇を利用してつばめの側に寄り添い、お腹の中の赤ん坊共々、安心させる事に徹していた正史。気分は優れなかったが、それでも子供の事を気遣ってか、ご飯だけはしっかり食べるようにしていた。正史のケアや、本人の持ち前の性格が功を奏し、つばめの機嫌もすぐに良くなった。たまから託された犬の首輪は現在、昇一の写真の隣に飾られており、毎晩必ずご飯を装って置いてある。

ようやく普段通りの調子に戻り、定期検診に出かけるつばめを心配

し、動向した正史だが、本人はもう吹っ切れたかのように話しかけてくる。

「……けどな、オレだってこのまま引き下がるわけにはいかないんだ。たまがオレらに遺してくれたもんは、絶対に守ってみせるんだ。生き残って、夢を叶えてやるのさ。……そう考えると、オレも悪運強いよなあ。何だかんだでここまで残れた訳だし、お前やみんなに感謝だな」

ハハハ、と自嘲するつばめを見て、少しばかり安心する正史。どうやら思っていた以上に引きずっている気配はなさそうだ。

無論正史も、悔しがってばかりいるつもりはない。たまがそうしたように、自分も他者の幸せを願い、人々を脅威から守る。その為には仮面ライダーになった事を、改めて確認する正史であった。

「もう後一ヶ月くらいしたらこっちに移った方が良いつて話だから、そろそろ準備しとかないとな」

「そっか。……ツシヤア！俺も張り切って仕事片付けて、育休取れるように頑張るぞ！」

魔法少女や仮面ライダー同士の戦いに決着をつける事も大切だが、日常の事も忘れてはならないと言わんばかりに気合いを入れる正史だが、ふと目の前を、見知った人物が通り過ぎた事に気付いて足を止めた。

院内であるにもかかわらず、ニット帽を被っているその少女は缶ジュースを片手に、どこかへ向かっている途中だった。

「ん？」

「どうしたんだ正史？」

「今の子……。真琴ちゃん？」

「真琴？ 誰だそれ？」

「安藤 真琴ちゃん。マジカロイド44の変身者だよ。北岡さんの所にアルバイトしてる子」

「マジ？？」 北岡ってゾルダだったろ？ あいつらペア同士でいつもオレ達みたいに行動してたのか」

「でも、何でこんな所に……？」

気になった2人は、気づかれないように、且つ周りに怪しまれないように真琴の後を追いかける。

やがて真琴は、1つの病室に滑り込むのが見えた。

「あの部屋だな」

「誰かの見舞いかな?」

2人が真琴の入った病室をジッと眺めていると、偶然近くを通りかかった2人の看護婦が、声をかけてきた。

「あの……。面会のご希望でしたら受付の方で」

「! あ、いや。ちよつと知り合いがあこの部屋に入ってくのを見かけて……」

「あの部屋って……。確か急に倒れて、他の男性によって担ぎ込まれた人が入院している部屋よね?」

「ええ。本人は単なる疲労だつて言い張ってるけど……」

「? どういう事ですか?」

看護婦の言い方が気になった正史が尋ねると、周りを見渡して他人がいない事を確かめてから、正史とつばめにだけ聞こえるように話しかけた。

「実はあそこの患者さん、もう助からないつて診断されてるのよ」

「えっ」

「度々ここの病院に搬送されてて、最近は頻度が高くなってるらしいの。病気の侵攻が早まって、今の医学じゃ、どうしようもないらしいの」

「そ、その事本人は知ってるんですか?」

声をうわづらせながら尋ねる正史。看護婦は静かに首を縦に振る。

「……でも、不思議な人よね。もうすぐ死ぬかもつていうのに、全然普通で……」

「そうそう。それでもつて、弁護士の仕事してるわけでしょ? テレビで何度か見かけたし。何だか、死ぬのが怖くないみたいな感じよね」

看護婦の、この何気ない一言は、2人に衝撃を与える事となった。

安藤 真琴が病室に入り、真っ先に購買で買った缶ジュースを、ベッドに横たわっている北岡に渡した。

「サンキュー真琴」

「いえいえ。これくらいバイトの身として当然です」

そう言つて自身も丸椅子に座つて、缶ジュースを開ける。他にもベッドはあるが、2人以外誰もいない為、個室同然だった。

「……そういや、最近令子さんと連絡取れてないな」

「事務所には何度か押しかけてますよ。その度に本人は不在だつてお返ししてますが。取材したい事が山ほどあるけどつてボヤいてましたよ」

「そりやあ悪い事したな。退院したら、お詫びに食事に誘おうか」

「それがいいですね。あ、もちろん例の事は内密にしてあります」

「サンキュー。令子さんを同情でオトしたくないもんな」

封の開いていない缶ジュースの側面をつつきながらそうボヤく北岡。真琴が何かを言いかけて喉の手前まで詰まらせていたその時、扉をノックする音が。2人は目を合わせる。看護婦が様子を見にきたのだろうか。

真琴は立ち上がり、返事をしてから扉を開けると、見知った顔の男性が、見ず知らずの妊婦を連れて扉の前に立っていた。真琴が声をか

けるよりも早く、2人はやや急ぎ足で入室する。真琴が呼び止めるも、正史は勢いよく仕切られていたカーテンを開けて、そこに横たわる人物の名を呟いた。

「北岡さん……！」

「お前か……。見舞いなら間に合ってるけど？　っていうより、妊婦なんか連れてきて、どうしたのお前？」

「そりやお前、オレもあんたと同じ世界にいるからな。因みにオレの名は室田　つばめな」

そう言つてつばめは、懐からマジカルフォンを取り出し、北岡と真琴に見せた。それを見て瞬時に、目の前の妊婦の正体に気づく北岡。

「……へえ。ますますファヴの事が分からなくなってきたな。子供とや年増の女だけかと思つたら、今度は妊婦と来たか。どんな基準で選抜したのやら」

「そんな事よりも……！　北岡さん。病氣の話、本当なのか……！」

真つ直ぐと見つめながら真剣に問いかける正史の姿が面白おかしく見えたのか、フツと笑みを浮かべながら口を開く。

「別に、お前らが気にする事じゃない。蓮二の奴も言つてたぞ。ライダーや魔法少女の世界に同情なんてない。戦つて生き残るのに、病氣なんて理由にならないんだよ」

「そんなわけないだろ……！　っていうか、蓮二も知つてたのか、北岡さんの事」

「はい。前に先生が倒れた時、九尾とナイトに手伝ってもらつてここまで運んでもらいましたよ。今回はライアに手伝ってもらいましたけど」

「大地君に、手塚も……！」

「そういう事。でもお前らのチームは、お人好しばかりだな」

北岡の秘密を知る者は他にもいると分かり、複雑な心境の正史とつばめ。それを見て北岡は鼻を鳴らす。

「だからお前らが気に病む事じゃないって。ま、もって後数週間が限界だろうって話だけだよ。命が尽きるまでは、まだ現役で頑張るつもりだよ」

「そんな体で、どうやってこの先……！」

「それが、今の俺だからな。……前にも言ったよな。俺は、自分の欲望だけを愛している。体の事だけが全てじゃない。だから俺は、強くなれた」

「北岡さん……」

死が刻々と近づいているにもかかわらず、全くもって恐れる様子のない北岡を見て、息を呑む正史。つばめも、北岡同様に、生きたいという意思だけは誰にも負けないという点では似ていると評価する。

例えその選択が、同じ魔法少女や仮面ライダーの命を奪う事になつたとしても、彼は止まらない。生きる事を、諦めない。

「そんな凄い覚悟で、北岡さんは……」

「こいつは参ったな。オレにも止められそうにないや。リップルと同じだな」

「別に褒められる事じゃないけどな。じゃないと、ゴロちゃんにも申し訳立たないだろうよ」

「……？　そういえば、いつも一緒にいる秘書はどこに？　前から全然会ってない気がするけど……」

正史は、秘書である吾郎の姿がない事に気づく。その事を指摘されるやいなや、2人の表情が曇る。

「！　まさか……！」

嫌な予感を察した正史が問いかけようとした瞬間、病室にマジカルフォンから発せられた音が鳴り響く。モンスターが近くに現れたようだ。それもすぐ近くだ。

気配を察して周囲を見渡すと、近くの窓ガラスに素早く走り抜けるモンスターの影が映った。レイヨウ型のモンスター『マガゼール』と『ネガゼール』だ。

「正史！」

「！　あ、ああ」

つばめに呼ばれ、正史は準備を始める。北岡も変身するべく、起き上がろうとするが、真琴に止められる。

「こいつらは私達に任せて、先生は休んでてください。後でキャン

「デーイーをお裾分けしますから」

「……なら、そうさせてもらおうか」

流石に万全とは言い難いのを北岡も周知していたので、3人に一任する事に。

正史は窓ガラスに向かってカードデッキをかざし、腰にVバックルを展開。つばめと真琴はその両隣に立ってマジカルフォンをタップする。

「変身！」

それぞれ龍騎、トップスピード、マジカロイド44に変身した一同は、窓ガラスからミラーワールドへと突入した。

しんと静まり返った病室にただ1人、北岡は腕を後ろに組んでくつろぐ。ベッドの上での生活は暇だと思いつつ、

「……そういや、俺だけじゃなくてあのつばめってやつ、身籠ってるけど、戦いとか大丈夫なのか？ ま、本人がそれでいいってんならいいけどさ」

と、相手が女性だからか、それとも同業者だからか、少しばかり他人である魔法少女を気にかける様子を見せる。

ミラーワールドに突入し、病院を出て、2体のモンスターを追いかけていた3人だが、姿が見えなくなり、立ち止まってしまう。

「逃げたのでしょうか？」

「いや、あのタイプのモンスターとは、前に戦った事がある。だよな、トップスピード？」

「そーいやそうだったな。初めてお前と会った時に戦ったやつだ。九尾ともな。思えばあの頃は割と平和だったよなあ」

トップスピードは当時の事を懐かしんでいる様子だ。

「とにかく、あいつらスツゲエ素早いからな。遠くから一気に攻撃してくるから、気をつけろよ！」

「ハハア。先人の知恵ってやつデスね」

その後も警戒しながら前に進む3人。反応は、まだ途切れていない。

そしてその時は、いきなり訪れる。

「！ 来たぞー！」

龍騎が叫んだ時には、マガゼールとネガゼールは屋根の上から飛び降りて奇襲を仕掛けてきた。横に飛んで回避する3人だが、向こうも素早く対応し、龍騎とマジカロイドに飛びかかり、地面に押し倒すと殴りつけた。

「龍騎！ マジカロイド！」

トップスピードがマジカルフォンをタップし、ドラグセイバーを持ってラピッドスワローに跨り、高速で斬りつけて2人を助ける。

「た、助かった……！」

「また来るぞー！」

2体のモンスターが態勢を立て直して攻め上がってきたのを確認したトップスピードは、ラピッドスワローの力で振り切ろうとする。モンスター達はトップスピードの素早い攻撃を警戒しているからか、真っ先に倒そうと飛び上がり、ラピッドスワローにしがみついてバランスを崩そうとする。

「おわっ……？」

「トップスピード！」

『ADVENT』

ドラグレッツダーを召喚し、すぐさまトップスピードの救助に入る。どうかして事なき事を得た2人の元へ、休む間も無く物理的な攻撃を仕掛けてくるネガゼールとマガゼール。マジカロイドもその華奢な体型を活かして飛び蹴りをくらわせたりするが、いかんせん攻撃力が高くなく、すぐに押し返されてしまい、地面を転がる。

「つたく！ 本当と同じパターンだなこいつらー！」

だが、ワンパターン戦法しかとってこないからこそ、動きも読みやすくなり、次第に龍騎とトップスピードの回避が上達していった。加えて、今の龍騎とトップスピードは、更なる力をその身に宿している。守りたい人を最後まで守り抜くという、炎のように強い意志を象徴する力が。

「ここが使い所だな！ 龍騎！」

「ああー！」

『SURVIVE』

龍騎はドラグバイザーツバイにサバイブのカードをベントインし、トップスピードはマジカルフォンをタップし、ホルダーに嵌め込む事により、それぞれ龍騎サバイブ、トップスピードサバイブへと進化。

龍騎サバイブは、依然として苦戦を強いられているマジカロイドを助けるべく、ドラグブレードを展開し、

『SWORD VENT』

「ハアッ！」

ドラグブレードから炎の刃を飛ばす『バーニングセイバー』がマガゼールに炸裂し、吹き飛ばされた。助けられた事に驚くマジカロイド44。龍騎サバイブは隣に立ち、口を開いた。

「北岡さんが、ゾルダが、今まで何を背負って戦ってきたのか、全然分からなかったけど、分かった今なら、あの人がここまで残れた理由も、その為の強さの秘訣も、分かる気がする」

「龍騎……」

「大切な人が、親しかった人が死ぬのは悲しいよな。俺も同じ気持ちになった事もあるし、こないだもそうだった」

でも……。

龍騎サバイブの右拳は強く握られている。

「だからって、立ち止まっていい理由になんかならない……！ いなくなつた人達の無念を背負つてでも、やらなきゃいけない時があるんだ……！ 北岡さんがそうだったように、俺にだって……！ 欲望みたいなものがある！ それを叶える為に、俺は、最後まで戦う！ 俺自身を、勝ち得る為に！」

〔挿入歌：Revolution〕

『FINAL VENT』

「そうこなくっちゃな！ オレだって、託されたもんを粗末にする気はねえんだ！」

トップスピードサバイブも同じように決意を固め、マジカルフォンをタップし、ドラグバイザーツイバイを召喚する。ドラグランザーが迫ってきているのを見て、本能的に危険を察知したマガゼールは逃走を試みようとするが、

「！ マグナギガ！」

マジカロイドがパートナーの契約モンスターを呼び出し、その巨体がマガゼールの行く手を遮る。現れたドラグランザーに尻尾で叩きつけられ、動きが鈍くなるマガゼール。そして今度は龍騎サバイブがドラグランザーの背中に乗り、ドラグランザーはバイクモードに変形。地面に降り立つと、トップスピードサバイブが龍騎サバイブの後ろに飛び乗る。そのままマジカルフォンをタップし、ドラグブレードに炎を宿す。狙いは、狼狽えているネガゼール。

一方、ある程度回復したマガゼールも起き上がって逃げようとするが、その前にマジカロイドが立ちはだかり、魔法を行使して未来のアイテム『超高性能ワイヤー』で縛り上げると、ギガランチャーを構えて照準を定める。

「どこへお逃げになるつもりデスか？」

これで終わりだ、と言わんばかりに引き金を強く引く。ギガランチャーから放たれた一撃は、一瞬でマガゼールを蒸発させた。

そして龍騎サバイブもウイリー走行をしてドラグランザーの口か

ら火を放ち、ネガゼールの逃げ場をなくす。

「ウオオオオオオオ！」

そこへ後方に乗っていたトップスピードサバイブがドラグブレードを振り回して、『バーニングセイバー』でダメージを与え、トドメは『ドラゴンファイヤーストーム』で踏み潰し、ネガゼールを撃破。

「ツシヤア！」

「やったぜ！」

バイクから降りて、ハイタッチする龍騎とトップスピード。その様子を、マジカロイド44は静かに呆れつつ、されど羨ましそうな雰囲気で見つめていた。機械で出来た顔面では、表情の変化は読み取れないが……。

「そうかい。あの後2人は帰ったか」

「はい。先生にはお大事に、と言伝を」

「あいつらしいな。おまけにマジカルキャンディーまでくれるなんてさ」

ジュースを口に含み、喉を潤す北岡と真琴。

戦いの後、正史とつばめはそのまま病院を後にし、知り合いが勤めている喫茶店で昼食を済ませると言って立ち去った。帰り際、2人は真琴のマジカルフォンに、獲得したキャンディーの半分を転送した。北岡に分け与える分だと彼らは言っていた。

「……ところで、真琴から見ても、城戸はどうだった？」

「どうと言われましても……。最初に会った時と変わってない感じでしたね。アホみたいの前向きで、眩しいと言いますか……」

でも、それが彼らしいですけどね、と付け足す真琴。

「へえ……。俺が休んでる間に3人も死んだから、それなりに堪えてるかも思ってたが……。やっぱりバカは立ち直りが早いね」

「でも先生。確かに彼はバカですけど」

「俺やお前よりマシな人間、でしょ？」

真琴の心情を代弁する北岡。奇しくもそれは、蓮二が事あるごとに正史に対する評価と酷似していた。

「ま、ここまで来たんだし、ちよつとは認めてやっても良いかもな。奴がライダーだったのは、俺達にとって得だったのか、損だったのか……。真琴はどう思うよ？」

「私は……。よく分からないですね。あの人の考えは、浅倉以上に読めないと思いますよ、多分」

「それな」

互いに意見が一致したのが面白かったのか、病室に笑いが生まれた。多分、こうやって笑っていられる時間も、これが最後かもしれない。タイムリミットが迫る中、少しでも北岡が北岡らしくいられるよう、吾郎から託されたものを守ろう、と決意を新たにす真琴であった。

117. 喰うか喰われるか

「……ええ。結果としてたまが死んだ事で、こちらのチームは事実上は壊滅。スイムスイムも、スノーホワイトに奪われた魔法のアイテムを取り返そうと躍起になっています。ほとんど口もきかなくなりました。あれはもう、使い物にならないでしょう。あなたも期待していたのですが、結局はこの有様ですよ」

中宿の繁華街も、とある魔法少女と仮面ライダーの手によって、人知れず引き起こされた惨劇から数ヶ月が経ち、工事の跡はちらほら見えつつも、ある程度は元の形を取り戻していた。が、テロという形で落ち着いた事もあり、今ではかつてほどの賑わいはない。事件前までは親子連れもそれなりに見かけてはいたが、治安の悪さが露見された、という風評被害もあって、それらしい影は一つも見当たらない。歩いているのは、肝の据わった屈強な者や、命知らずに大袖を振っているのうとうろつく者ぐらいだ。

スーツ姿でスマホを耳に当てながら薄暗い路地を歩いている鎌田春水も、その1人だ。電話の相手は、言わずもがな。

「魔法少女も仮面ライダーも皆、自分の欲望の為だけに戦う。……魔王塾で教わった通りでしたよ。派閥を構成し、統制をもってして力を得ようとしたルーラの考えは、この社会では通用しない。おかげでこちらも吹っ切れましたよ。私は彼らとは違う。……そろそろ認めてはもらえないでしょうか。あなたが理想とする仮面ライダーとして相応しいのは、この」

不意に、異臭が鼻にこびりついた。血生臭いものだ。距離はそれほど離れていない。電話を続けながら、痕跡を辿る鎌田。角を曲がった先で、その正体が判明した。

普通の人間なら卒倒するような光景がそこに広がっているが、人としての感覚が薄れてきている鎌田は、全くといって動じていない。

血の海に伏しているのは、如何にも暴力団の組員を思わせる格好の男性達。微かに呻き声も聞こえてくる。それを遮るかの如く、頭を踏みつけて完全に息の根を止める、蛇柄のジャケットを着込んだ男が、

目の前に現れた鎌田に目を向ける。

「……失礼。少し野暮用が出来ました。この話の続きは後ほど」

そう言って電話を切り、カバンを路地に放り捨てる。

「この有様を見て物怖じしないやつがいるとはねえ。良い度胸じゃないか。あたしは嫌いだけどね。それって結局あたしらをナメてるみたいなものだしさ」

続いて男の背後から姿を見せたのは、西洋のガンマンを思わせる、豊満な女性。彼女はニヤつきながらピストルをホルダーから取り出す。対する鎌田は肩をすくめる。

「生憎だが、こんなものは、私にとっても見慣れた光景の1つに過ぎない。何故なら、君達と私には共通点がある」

そう言って、懐から水色のカードデッキを取り出して開示する。それを見て、2人の目つきが変わった。

「そのデッキ……アビスだったか？ こいつはとんだ巡り合わせだな。……良いよ。相手にしてやるよ。あたしはともかく、こいつのイライラは、近頃あたしでも制御が追いつかなくてね。抑制剤として一役買ってくれよ」

「足りないんだよこいつらじゃなあ……！ さっさと北岡を殺りたいところだが、今はお前で我慢してやるヨオ……！」

男……浅倉 陸は飢えたハイエナの如く、首を鳴らして獲物を睨みつける。鎌田も初めからそのつもりらしく、2人に近づく。

「私に勝てるライダーや魔法少女など、いるわけがない。あの時は不覚をとってしまったが、もう同じ手に引つかかる事もない」

またいずれ、私をコケにした九尾達はこの手で始末しますけどね。そう呟くと、近くに立てられていたガラスにカードデッキをかざし、腰にVバックルを形成する。

「ナメた事ばつか言いやがって……。浅倉、あたしもやらせてもらおうよ」

「……勝手にしろ。戦いの邪魔だけはするなよ」

そう言って浅倉も鎌田と同じ動作をする。

「変身！」

鎌田と浅倉は同時にカードデッキを装填し、それぞれアビス、王蛇に変身。元から変身していたカラミティ・メアリと共に、ガラスを通じてミラーワールドに突入。路地に残ったのは、赤く染まって物言わぬ壊れた人形と化したものだけだった。

『SWING VENT』

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

咆哮と共にエビルウィップを振り回して先手を取る王蛇。アビスは軽くステップを踏んで回避する。隙を見て蹴り飛ばして、カードをアビスバイザーにベントインする。

『SWORD VENT』

2本のアビスセイバーを両手に持ち、王蛇に猛追をかける。エビルウィップは弾き飛ばされ、王蛇は火花を散らしながら倒れこむ。イライラが増したのか、仰向けになりながら唸り声を上げる。

アビスがその首を取ろうと駆け出すが、メアリの狙撃による横入りによって阻まれる。

「邪魔だ。お前の相手はこいつらだ」

『ADVENT』

アビスは契約モンスターであるアビスラッシャーとアビスハンマーを召喚し、メアリの相手を務めさせる。メアリは舌打ちしながら銃を持ち替えつつ応戦している。

アビスの注意がメアリに向けられたその隙に、王蛇は起き上がって

新たなカードをベノバイザーにベントインする。

『SWORD VENT』

右手に持ったベノサーベルを振り上げながら、アビスに叩きつける。元からの獰猛な性格が攻撃力に転換されており、その一撃は重い。アビスも口から息が洩れる。しかし一瞬の隙について足払いで王蛇を地面に倒し、アビスバイザーの突きを入れる。王蛇は転がる形で回避し続けた。

「さすがに2体相手は割に合わないなあ。来い、メタルグラス！」

一方のメアリは、遠距離型のアビスハンマーと、近接型のアビスラッシャーを同時に対処するのは不利と判断して、黒いメタルグラスを呼び出すと、アビスラッシャーに飛びかかるように指示を出す。不意打ちで倒れこむアビスラッシャー。アビスハンマーが動揺している隙に、シヨットガンに持ち替えて得意の銃撃戦に持ち込む。アビスハンマーも負けじと銃撃で応戦する。

「ウオオオオオオオ！」

「フンツ。その威勢ぶりは評価してやろう。だが、まだ甘い」

変身前においては持ち前の暴力性から、最悪の名で知られている王蛇の猛追を、ことごとく回避し、カウンターとばかりにアビスセイバーを振るい続けるアビス。

「(これまでの観察から、カラミティ・メアリは銃撃戦、つまり遠距離での戦いに特化した魔法少女。だがその分数で押されれば対応が難しくなる。流れ弾に注意すれば、モンスターだけに任せておけばいい。そして王蛇は、メアリ以上に警戒するべき人物ではあるが、不用意に間合いに入らなければ、単調な攻撃だけに意識を集中させ、じわじわと追い詰める事ができる。……この勝負、迅速に終わらせられそうだ)」

心の中で勝利を確信するアビス。それも、生まれ持った才能、すなわち観察眼があつての事だと自称する。

様々な『凶悪』と烙印された仮面ライダーや魔法少女を輩出してきた『魔王塾』でも、塾長である『魔王パム』という魔法少女からもお墨付きを得ており、後に傘下に下った『ピティ・フレデリカ』という

魔法少女からも、過大な評価を受けている。

彼が本来なら何の由縁もないこのN市に訪れたのも、全てフレデリカによる指示だった。同じ『魔王塾』の出身であるクラムベリーとオーデインが試験官として始まる『人材育成計画』なるゲームに、プレイヤーとして参加し、スカウトするに相応しい魔法少女や仮面ライダーを吟味してこい、という依頼に、アビスが選ばれたのだ。N市に潜入してからは、クラムベリーやオーデインといった、魔法の国の関係者に不審がられないように、『鎌田 春水』として普通の会社員と同じように生活を送っていた。

パートナーシステムが導入される事も裏を通じて知っていたので、パートナーになるであろう人物となるべく身近で行動する事を意識して、ルーラとベルデが指揮するチームに自ら所属を申し出たのも、フレデリカの指示だ。その結果、ルーラにスカウトされて入った、スク水の魔法少女『スイムスイム』がパートナーに選ばれた。無感情で、何をしてもルーラを意識した発言しかなく、それが逆にこちらへの介入がほぼ皆無だと位置付けられ、大いに助かった。

『LIQUID VENT』

パートナーカードを行使して、王蛇の拳が液化化した体をすり抜けると、背後を取って首を絞め上げる。呻き声を上げながら振り解こうとする王蛇だが、その前に首の関節を砕こうと、腕に力を込める。

が、2人の足元に何かが放り投げられたのを見て、目を見開く。間違いでなければ、手榴弾と思われる投擲物を確認して、王蛇を離して横に飛び退くアビス。王蛇が地面を蹴るのと同時に爆発し、2人は吹き飛ばす。両者共に地面を転がるが、ダメージは爆破地点に近かった王蛇の方が大きいようだ。なお、今の手榴弾はメアリが追い詰められている王蛇を目撃した際に、アビスハンマーの隙を伺って放り投げたものである。一步間違えればパートナーに手をかけるような行為だが、メアリに悪びれた様子はない。パートナーがどうなろうと、御構い無しのようなだ。

また妨害される可能性もあると踏んだアビスは、決着をつけるべく、カードデッキに手をかざす。

「私は迅速な決断が売りなんでね。先ずは1人、片付けさせてもらおう」

「イライラするぜエ……！」

『FINAL VENT』

2人が同じカードを各々のバイザーにベントインしたのは、ほぼ同タイミング。

王蛇は飛び上がり、背後から出現したベノスネーカーから吐かれた毒液に押される形で、両足を突き出す。

反対に、アビスはメアリと黒いメタルガラスを相手にしていた2体の契約モンスターを集結させ、アビソドンに姿を変えると、メアリとメタルガラスをノコギリのような鼻で吹き飛ばし、アビスの背後から接近し、アビスは飛び上がってその背中に乗り、頃合いを見計らって飛び蹴りを放つ。アビソドンも突進を試みる。

「ハアアアアアアアアアアアアア！」

『ベノクラッシュ』と『アビスダイブ』がぶつかり合う。威力はほぼ互角だったが、アビソドンの一押しが、アビスの勢いに加算され、結果として王蛇の蹴りが押し返され、地面に叩きつけられる。

「グオツ……！」

「ツ……！ 中々の威力だったよ。お前みたいなやつがもっと早く魔王塾に入っていれば、この世界も変わっていただろう。この場で殺さなければならぬのが、本当に惜しい」

「魔王、塾だあ……？ 何だ、そいつは……」

アビソドンに叩かれて無防備な腹を強打されて膝をつくメアリが、血を拭いながら問いかける。アビスは質問に答える事なく、アビスセイバーを持つ。

「お前達は何も理解していない。この戦いの本当の目的を。生き残るだけがこの戦いの全てではない。本質とは常にその先にある。故にこれが単なる選抜試験だと思っただけなら、所詮はそこまでだ」

もつとも、もうその本質を知る術はないがな。

そう言っただけアビスは、王蛇の近くに落ちているベノバイザーを、手の届かない場所に蹴り飛ばす。これで地面に倒れこむ王蛇に、反撃の

術を与えるチャンス潰した事になる。アビスダイブの一撃は大きかったらしく、転がって回避する様子もない。

「力に溺れた哀れなライダー。先ずは、お前からだ」

アビスセイバーの刃先を王蛇の首にめがけて、一気に振り下ろす。それだけで、ライダーの1人が脱落し、後は手負いのメアリを始末して、ようやく脱落者も過半数が割れる手はずだった。

無音の世界に響く、発砲音と共に、腹の辺りに熱を感じるまでは。

「!?? ウグア……………!??」

アビスセイバーが手から滑り落ち、腹を抑えてよろけるアビス。その手からは血が滴り落ちる。最初は何が自分の身に起きたのか理解な苦しんだアビスだが、すぐに得意の観察眼で把握した。

腹に撃ち込まれたのは、間違いなく弾丸だ。となれば、この場合はメアリが狙撃した、と考えるのが筋だが、メアリの手にそれらしき武器は握られていない。

銃口から煙が出ている拳銃を所持しているのは、倒れ込んでいる王蛇の方だった。懐から出したと思われるが、それまで直接的にしか攻撃を展開してこなかった王蛇が飛び道具を使うなど、誰が想像できただろうか。

「ば、バカな……！ 王蛇が飛び道具を使う事など、今までになかった……！ 私の観察眼に、狂いが生じたのか……！」

「試験だか、観察眼だか知らないが……！」

拳銃を放り捨てて、首を鳴らしながら起き上がる王蛇。

「俺には関係ない……！ 今戦えれば、それで充分なんだよお！
ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

全身を震わせて雄叫びを上げるライダーの姿を見て、アビスは恐怖という2文字を覚えた。自分の体が震えている事に気付き、止めようとするが、むしろどんどん震えが大きくなっていく。

自分自身も人外だという自覚はあった。だが、目の前にいるそいつは、その比じゃない。かといって獣なんて容易な例えでは説明がつかない。強いて言うなら、モンスターそのものだ。故にアビスの決断は早かった。

「想定外だ……！ 一旦出直すとしよう……！」

『STRIKE VENT』

アビスクローを右手に装着し、『アビスマッシュ』による激流で攪乱させようとする。

「ほらよー！」

だがその前に、メアリがベノバイザーを拾って王蛇に向かって放り投げると、予め引き抜いたカードを、ベノバイザーを受け取った瞬間にベントインする。

『STEAL VENT』

「なっ……!?」

するとアビスの右腕についていたアビスクローは、王蛇の右腕に行き渡り、鼻で笑った後、逆にアビスめがけてアビスマッシュを放ち、アビスは壁に打ち付けられた。

「おいおい。帰るなんて言うなよ。お楽しみは、これからだろお……？」

『UNITE VENT』

契約モンスターを合体させる能力を持つカードをベントインすると、ベノスネーカー、黒いメタルグラス、黒いエビルダイバーが合体し、ジェノサイダーが、アビスの背後に召喚された。

続けざまに別のカードを引き抜き、ベントインしようとするのを見て、アビスは本能的に、最後に残っていたカードを取り出す。

「(あれをやらせるわけにはいかない……！ その為には、このカードを……！)」

残された僅かなカードの中から、この状況に最適なアドベントカードを引き抜き、ベントインしようとするが……。

「ギャア!?」

不意に右手のひらに赤黒い穴が空いて、手放されたカードが宙を舞った。カードはヒラヒラと地面に向かって落ち、ガンマン風魔法少女の足元にポトリと置かれた。『DIMENSION VENT』と表記されたカードだ。

「レアアイテムのカードか。こいつで逃げようって魂胆かい？ 生憎だがなあ、そんなもんではいそれと逃がすほど、あたしらも余裕じゃないもんでね。惨めに死にな」

そう言っつてメアリがオマケとばかりに、アビスの左足に銃弾を撃ち込む。血が流れ、身動きが取れなくなる。

「消えろ、そろそろ」

『FINAL VENT』

「ハアアアアアアアアアアアアアアア！」

王蛇はジェノサイダーの前に立つアビスめがけて駆け出し、きりも

み状に回転を加えてキックを放つ。アビスはらしくない動揺のあまり、動く事が出来ない。

無防備なまま、『ドウムズデイ』を正面から受けて、ジエノサイダーに向かって吹き飛ばされる。そして待ち受けるのは、ジエノサイダーの腹に空いた、ブラックホールに通じる穴。バネのように吸い込まれていくアビスの体だが、最後の力を振り絞って腕に力を込め、上半身だけがジエノサイダーから突き出ている形となり、完全には吸い込まれてはいない。

だが、そこまでだった。そこから力を込めて脱出しようとしても、吸引力が凄まじく、腰から下が抜け出せない。体力も消耗し、段々と腕に力が入らなくなっていく。ここで気を抜けば最後、『死』を受け入れなくてはならない。

「や、やめろ……！ やめてくれえ！ こんな、事で、私が、死ぬと言うのか……!? 最強であるこの私が、こんな奴らに……！」

「おうおう。ミイラ取りがミイラになるってこの事かあ？ ほらほらもつと喚けよ！ 助けを請いてみるよ！ ほらほらほらあ！」

メアリはマグナムを逆手に持って、トンファアの要領で、アビスの頭を殴り続けた。声を出したくても、出す余裕すらない。

王蛇が黙って見過ごしている間、メアリは興奮のあまり、全身を紅潮させながらジエノサイダーに吸い込まれているアビスを殴り続けた。強い者、偉ぶっている者、自信に満ち溢れている者、つまりは上にいるはずの者が、抗いようがない暴力に辱められたその瞬間に見せてくれる表情……は仮面に覆われて見えないが、それ以外に仕草や命乞いの言葉。それを見たり聞いたりするのがメアリにとって最良の薬だった。アルコールや違法ドラッグなどでは決して味わえられない、快樂の一種だ。

やがてその酔いが醒めると、マグナムを本来の用途に準じて、引き金に指をかける。そして、今や『弱者』と成り下がった、ボロボロの仮面ライダーのこめかみに向けて、銃口を合わせて、そして唇の端を吊り上げる。

「最高だったよ。あんたみたいなやつと遊べてな。つーわけで、愚図

はざっさとおねんねしな」

そして。

躊躇いなく引かれた引き金。1発の銃声がミラーワールドに響き、力の入っていた腕はダラリと垂れ下がり、掃除機に吸い込まれる塵のように、出口のない暗黒の世界に引きずり込まれていき、高らかな笑い声がこだまして……。

ファヴ・『えええ、今回は、新しい脱落者が出たのでお知らせするぽん！』

シロー・『今回の脱落者はアビスだ』

ファヴ・『いよいよ32名いた魔法少女と仮面ライダーも、当初予定

していた半分になったぽん！ でもご存知の通り、残りの枠は8名だぽん。8名になるまで、頑張つてキャンディー集めるぽん！ それじゃさよなら〜』

「やはり彼には荷が重すぎましたか。まあ、仕方ありません。逸材が減るのは残念ですが、この試験を通じて彼の代わりを見つけ出せば、問題ありませんから」

子供の頭部大ほどの水晶玉に、アビスの姿が映らなくなったのを確認した魔法少女は、座っていた椅子に深く腰掛け直す。

星型の、飾りをつけたヴェールや首飾り、星のペイントに星柄のストッキングなどと、全体的に星だらけのスタイルを兼ね備える魔法少女『ピティ・フレデリカ』に、悲観な様子は見受けられない。

彼女の魔法『水晶玉に好きな相手の姿を映し出すよ』は、対象の頭髪を手の指に巻いて結ぶ事で、水晶玉にその髪の毛の持ち主が映し出されるのだ。場合によっては、自分の手を水晶玉の中に入れて、そこに映っている物を掴んだり、自分の所に引き出す事も出来る。だが、その力を持つフレデリカに、彼を救出する選択肢はなかった。

「試験の中間報告が見れなくなるのは惜しいですが、脱落する魔法少女と仮面ライダーは、あと8名。全ての結果が出るまで、それほど時

間はかからないでしょう。……彼が、仮面ライダー九尾を初めとしたチームが、どこまで活躍するか、期待したいものです」

そう思いませんか？

背後に立ち尽くしている、男女2人に対して、フレデリカは問いかける。返ってきた返事は覇気がなく、曖昧なものだった。

いつも通りの反応だ、と思っていると、ヤカンがしゅんしゅんと鳴り始めたので、火を止めるために立ち上がった。彼女が求める、理想の魔法少女、仮面ライダーが描く結末に期待を寄せながら。

《中間発表 その14》

【アビス（鎌田 春水）、死亡】

【残り、魔法少女9名、仮面ライダー7名、計16名】

1118. 引退宣言

「(ルーラを返して)」

少し豪勢な民家の一室にて、小学校低学年である坂風 綾名は正座のまま、ジツと一点を見つめていた。視線の先には、低いテーブルに置かれているスマホが。

「(ルーラを返して)」

それが、綾名にとつて宿題よりも最優先の課題だったと言えよう。先日、訳あつて秘密が知られてしまった事もあり、チームメイトであるたまの殺害を強行。結果としてたまの口封じには成功したものの、何故かスノーホワイト率いるチームの反感を買ってしまったらしく、スノーホワイトによつて、何よりも大切な『ルーラ』を奪われてしまった。その場ではパートナーであるアビスの判断で撤退を余儀なくされたが、ルーラを手放してしまった代償は彼女の中で大きかった。

その後も粘り強く、マジカルフォンを通じてスノーホワイトにメールを送り続けた。

ルーラを返して。ただその一言だけなのに、一向に返事が来ない。気づいていないのか、気づいているふりをして無視しているのか。綾名には判断がつかなかったらしく、ただ時間を置いて同じ文言を送り続けていた。

一度、ファヴと相談し、スノーホワイトからルーラを返してもらおうように頼んだ事はあつた。管理者と魔法少女が交渉し、無償で返却、もしくはマジカルキャンディーと交換、という形でも何でも良かったので、とにかく寿命と引き換えに手に入れたものを返してほしい一心だった。

『そんなに執拗に言われても、ファヴにはどうしようもできない事だってあるぼん。勝手に持ち出して返したりしたら、ファヴはみんなから嫌われるぼん。大体、管理をしつかりしていないからこういう事態に陥つたと考えるのが妥当だぼん』

難しい単語も含まれていた為、時たまに首を傾げる綾名だったが、

会話の内容からして、ファヴにはこれ以上の期待は出来ないようだが、ファヴの言葉には続きがあった。

『そんなに取り返したかったら、自分で動く事をオススメするぽん。仲間を利用するなり何なり、やり方はいろいろあるぽん。不正に奪われたのだとしたら、同じように自分から動いて取り返せば、なーんの問題もないぽん!』

それを聞いて、綾名は深く考え込んだ。

「(ルーラならきつと、奪われたものは自分で取り返すように命令する)」

かつてはチームとして派閥を作っていたメンバーも、先日のファヴとシローからの報告でアビスが脱落した事もあって、今やスイムスイムだけが生き残っている状況だ。パートナーシステムによる恩恵はまだあるが、レアアイテムはどうだろうか。どの程度有利になるかは分からないが、持っているのといかないのでは、生存率も大きく変わってくるに違いない。

ともあれ先ずは、武器の『ルーラ』の奪還から。その為には、利用できるものは何でも利用する。魔法少女としての『ルーラ』ならきつとそうする。

すでに手は打ってある。後は彼が一時的にはあるが協力してくれるかどうか。その返事があり次第、スノーホワイトからルーラを奪還する。

約束の時間が迫っているのを確認した綾名は立ち上がり、スマホを懐にしまってから、代わりに白のマジカルフォンを取り出す。

「変身」

画面をタップして、綾名の容姿は幼げな低学年少女から、肉質の良いピンク色のスク水を基調とした魔法少女へと即座に変化する。

そして顔を背後に向けて、家にいる両親に、行ってきますと小声で告げて、スイムスイムは魔法を行使して壁に溶け込むように姿を消した。

「……でき。俺と手を組みたいって、どういうつもり？」

待ち合わせ場所には、交渉相手でもある、緑色のライダーの姿があった。ちなみに彼のパートナーは呼んでいない。人数が多いと、情報がスノーホワイトらに露見してしまう恐れがあるからだ。交渉は少数で手短に。これもまたルーラが魔法少女になる為の心得として教えてくれた戦法だ。

「ルーラを取り返したい。その為に、あなたと手を組みたい」

「ルーラ……？ それってお前が慕ってたあの魔法少女の事だろ……？ 今更死んだ奴の事なんて気にしてどうす」

「ルーラは生きてる。私がルーラであり続ける限り」

「……」

ゾルダは不意に黙り込んだ。それを良いことに、スイムスイムは押しをかける。

「スノーホワイトに奪われた武器を取り返したい。でもその為には、あなたの力が必要。協力してくれたら、あなたの命は奪わない。あなたも生き残らせる。信用するかはあなた次第だけど、ルーラなら協力

してくれた人に悪い事はしないから。ルーラは優しい。だから」

「……や、あのさあ」

そこで口を挟む形で、ゾルダが口を開く。逆に押し黙ったスイムス
イムに対し、ゾルダは頭を掻くような仕草を見せながら、淡々と呟く。
「お前さあ。いつもルーラが、ルーラがって言ってるけど、アイツみた
いに普段『駒』って呼んでるような奴等の為に戦おうって心から考え
たこと、一度でもある?」

「……?」

「俺、女性には割と厳しくチェックしててさ。魔法少女もまあそれな
りに目を配らせてたわけ。あいつはさ、仲間を駒扱いしてる割には、
そいつらの為になるような行動をとってたんだ。そういう意味じゃ、
ベルデもやり方はアレだけど、色々チームを優先してたし」

でも、お前はどうか?

ゾルダの鋭い問いかけに、押し黙るスイムスイム。

「あいつから色々と教わって今のお前があるんだろうけど、お前は何
一つ、ルーラになっちゃいないんだよ。当然だよな。何せお前は、本
当の自分を愛してなんかいないからさ」

「自分、を……?」

「俺は自分が好きだから、今の自分がいる。ルーラだって自分が好き
だからああしてリーダーになってやってこれた。……けど、お前が
リーダーになってからチームとしての機能は失い、気がつけばお前1
人になった。分かるか?」

「……」

「英雄気取りだったあのライダーと同じだよ、お前は。お前はルーラ
になろうとした瞬間に、ルーラじゃ無くなった。いきなりアウトだっ
たわけ」

「ルーラ、じゃない? 私か?」

僅かに動揺を見せるスイムスイム。それまでの自分の価値観が否
定されている事に、本能的に気づいているのだろう。

「ルーラはルーラ、お前はお前。本当の自分を愛せない奴に、誰かの代
わりになろうなんて生き方、やめといた方がいいよ。……さてと、

さっきの話を返事だけど、パスさせてもらうわ。そっちの面倒事に巻き込まれるのはゴメンだ。それにもう、今の俺に見返りだなんてほしくもないし」

肩を竦めてゾルダがそう呟いたのを聞いて、ハツとなるスイムスイム。自分がルーラである事を否定されて呆然としていた彼女だが、交渉が決裂した事を悟ると、意識を目の前に向ける。

さすがに交渉決裂までは想定外だったが、こうなると今の自分の戦力が激減してしまっている事を露見された事になってしまう。それが迂闊に王蛇やカラムイティ・メアリ側に漏れたら、面倒極まりない。

ならばここで自分が、ルーラが取るべき最善策は……。スイムスイムは身構える。

「……秘密を知った者は、同じ魔法少女や仮面ライダーであつても生かしてはいけない。ルーラならきつと……ううん、絶対そうするか」

「聞き分けのない子供は好きじゃないね！　ま、どの道こうなる事ぐらいは分かってたけど！」

ゾルダが腰からマグナバイザーを、スイムスイムはルーラの代わりにアビスセイバーを、それぞれ手に構えて、臨戦態勢に入った。

「フンッ！」

「……！」

引き金を引くゾルダ。対するスイムスイムは魔法を行使して、弾丸は全て貫通した。もちろんスイムスイムに外傷はない。

「！　やっぱり面倒な魔法だなそれ！」

一度、令子が狙われた際にも彼女と戦闘した事があつた。当然銃弾は全てすり抜けて、全く歯が立たなかつた。パートナーカードである『フューチャーベント』を使えば、打開策もあるのかもしれないが、あくまでランダム仕様だ。確実な一手とは成り得ない。

ならば、正面から戦わずに弱点を見極めるべきだ。そこでゾルダは、近くに置かれていた鏡からミラーワールドに飛び込んで、スイムスイムと距離を離しながらあらゆる攻撃を撃ち込む事だった。スイムスイムも距離を離されまいと駆け出すが、ゾルダの銃撃の方が早

かった。ただし、彼女本体を狙ってもいたちごっこにしかならないので、フィールドを利用して、廃棄されている物を撃ち落として、スィムスィムを押し潰そうとする。

スィムスィムの魔法によって、物質は全て体をすり抜けるが、足止めにはなっているようだ。事実、ゾルダとスィムスィムの距離は離されている。

このまま逃亡を図るつもりか。それだけは何とかして避けたいスィムスィムは、事前に持ってきていたもう一つの策を講じるべく、懐から瓶を取り出した。

『元気が出る薬』。ユナエルが購入したレアアイテムであり、これまで一度も使う機会がなかった代物だ。ユナエルの死後、ベルデの管理下にあったそれは、彼の殺害後はアビスの管理下に置かれていた。その彼も亡き今、スィムスィムの手元に残されたそれを使う時が来たようだ。ためらう事なく蓋を開けて、中にあった薬を一錠飲み込むスィムスィム。

「(? アレは……)」

ゾルダも、スィムスィムが何かを飲み込んだを目撃する。

刹那、スィムスィムは接近してきた。ただし今度は、目にも留まらぬ速さで。

「なっ……っ?」

仮面の下で目を見開き、マグナバイザーで撃ち続けつつ距離を置くとうとするが、向こうの瞬進には敵わない。あっという間に距離を詰められて、アビスセイバーが振り下ろされる。ゾルダは咄嗟にマグナバイザーを盾にして防ぐが、勢いだけは殺せず、地面を転がる。

『SHOOT VENT』

即座にギガランチャーを出して構えてから起き上がるゾルダだが、すでにスィムスィムの姿は見えない。場所は開けているので、隠れるスペースはない。

まさかと思ったゾルダが足を動かすよりも早く、スィムスィムは地面から上半身を出して、アビスセイバーを振るう。

「グアツ……!」

鮮血が辺りに飛び散った。幸いにも切断される事はなかったものの、左足についた傷からは血が流れており、地面に膝をついた。これでは満足に動けない。

スイムスイムは少し下がってから再び急接近する。

『STRIKE VENT』

意地を見せんとばかりにギガホーンを右手に装着したゾルダ。向かってくるスイムスイムめがけて、牛の角を模した鋭い突きを入れる。金属音が鳴り響き、押し倒されたゾルダ。ギガホーンとアビスセイバーが宙を舞っているのが視界に捉えられた。

では彼女はどこにいるのか。その答えは首を下に動かした途端に悟った。

腹の部分に、ピンク色のスク水がめり込んでいる。否、下半身がゾルダの体にめり込んでいる。何が起きているのかさっぱり分かっていないゾルダだが、不意に首が締め付けられる感覚に陥った。

見れば、ゾルダの背中からスイムスイムの上半身が突き出ており、腕を伸ばして後方から彼の首を絞め上げているのだ。

「捕まえた」

「こ、この……い……はな、せえ……い……」

ゾルダが無理矢理に振り解こうとするも、めちやくちやに振り回す腕も、スイムスイムを貫通しており、掴み所がない。水に触れているような感触が伝わってきている。武器による近く中距離攻撃はフェイク。本命はこうして直接手をかける事にあつたようだ。

「お、お前、体が水に……!!?　　っていうか、俺の体に潜ってるみたいだな……!」

段々と意識が途切れかけているのか、ゾルダは両膝をついてしま

う。

「(そう、か……!　　こいつの、魔法は……!)」

気づいた時には後の祭り。最初から相性が悪い敵だった事を悟るゾルダ。勝負を決めるべく、腕に力を込めるスイムスイム。ゾルダの筋力が緩み始めている。意識もすでに飛んでいるようだ。もう少し、このまま一気に首の骨を折ってみせる。スイムスイムは勝利を確信

する。

「先生エー！」

どこからともなく声が聞こえてきた。反応に遅れている。ハッと
する間も無く、目の前に何かが投げ込まれた。それが光と熱を帯び始
めたのを感じて、慌ててゾルダの体から離れるスイムスイム。眩し
い高熱と大きなパチパチ音が辺りに鳴り響く。地面を転がったスイ
ムスイムはしばらく目を閉じていたが、静まり返ったのを察して目を
開ける。

目の前には煙が立ち込めているだけで、ゾルダの姿はない。逃げら
れてしまったようだ。唇を噛みしめるスイムスイム。薬というアイ
テムをフル活用し、現地で采配を振れるようにする。どれ程の時間だ
け効力があるのかは分からないが、あらゆる能力が高められるこの時
間で勝負を決め切れなかったのは痛手だった。

使ってみて理解したが、『元気が出る薬』は、体の反応、即ち俊敏さ
を向上させる為のものである一方で、思考回路が大雑把になってしま
うようだ。その為、背後からの何者かによる奇襲に気づけなかった。
普段ならある程度冷静になって行動できたはずだが、このアイテムは
使用タイミングに気をつけなければならぬと痛感するスイムスイ
ム。

「(でも、ルーラなら失敗しなかった。次は絶対に)」

『本当の自分を愛せない奴に、誰かの代わりになろうなんて生き方、や
めといた方がいいよ』

「(……私を愛するって、何?)」

つい先ほどかけられた言葉の真意が今一つピンとこないスイムス
イム。自分は、ルーラに成るべくして生まれた魔法少女。ルーラ以外
の何かになるなんて、考えた事もなかった。

それじゃあ、ルーラにならなかつたら、自分は周りにとってどんな
存在になるのか? そもそも、本当の自分とは何か? なりたかった
自分とはどのようなものなのか? 自分の知っている憧れのお姫様
は今の自分を見て、どう思うのか?

幼い少女の疑問のタネは尽きない。

「……ッ！　んん……」

「先生！」

眼前に真琴の心配そうな顔が見えてきた。少し目線をズラせば、事務所の見知った天井が見えた。スイムスイムに首を絞められた事までは覚えていたが、それ以降の記憶がない。否、聞き覚えのある叫び声。声が意識の奥底に届いていたような覚えはある。

「……そうか。お前、俺を助けて」

「急に連絡もなしに事務所を離れたんですから、気になるじゃないですか！　もう心配かけさせないでくださいな！　こっちの寿命が縮んじやいますよ！」

内緒でスイムスイムに会いに行っていた事にご立腹な様子。真琴の後を追いかけて待ち合わせ場所にやってきた彼女が、スイムスイムに殺されかけているゾルダを助けるべく、魔法を行使して未来アイテム『いつでもどこでもキボウレインボウねずみ花火』を投げつけていなかったら、と思うと生きた心地がしない。

「……で、大丈夫なんですか？」

「まあ、何とかね。見ての通り五体満足だよ。お前のおかげでな」

そう言っただけで彼女の頭を撫でようと足を動かす北岡。左足に目をやると、包帯が巻かれていた。スイムスイムに付けられた傷の手当てを、彼が意識を失っている間に処置してくれたのだろう。北岡は礼を言っただけで、頭を撫でた。

「それで、やっぱり向こうは初めから先生を……」

「そういうわけでもないみたいだな。こつちが提案に乗らなかったから、情報流出の口封じ、ってどこだろ。ま、こつちには真琴が来てるのを見抜けなかったのが運の尽きだな」

「スイムスイム。要注意人物ですね」

そう言ってコーヒーを淹れにキッチンへ向かおうとする真琴だが、不意に立ち止まって引き返し、懐から緑色のカードデッキを取り出した。

「スーツを洗う時に預かってたんです。これ、お返しします」

それを一旦は手に取る北岡。が、その表情は優れない。怪我をした左足とカードデッキを交互に見合い、そしてスイムスイムや王蛇、カラムティ・メアリなどの一件を含め、これまでの事を振り返り始める。

しばらくの沈黙の後、北岡は口を開いた。

「……なあ真琴」

「? はい」

「俺。なんかライダーとか魔法少女同士の戦いが、虚しくなってきたよ」

「……?」

「短時間だけど、このまま残りの人生を謳歌するのも、それはそれでアリかなって」

「! まさか……!」

ゴクリと息を呑む真琴。北岡の言葉の真意を理解したからこそ、足が思うように動かない。そんな彼女も、北岡が咳き込み始めたのを見て、慌てて駆け寄る。

「先生!」

「ああ大丈夫。ちよつと埃が入っただけだよ」

普段から、清潔な身だしなみを好む彼の口からは出ないような言葉を聞き、黙り込む真琴。事実、口を抑えていた右の手のひらからは、少量ではあるが赤い液体が滴り落ちている。

「ま、なんやかんやでここまで生き残れたわけだし。悲しい事こそ

あれど、俺はもう満足してる。お前1人を残して逝くのは心苦しいけど、もう疲れたんだよね、俺。ま、お前なら俺がいなくても、1人でメシ食っていけるだろ」

「先生……」

「いつまでもここにいちや、巢立ちなんて出来やしないぞ。ここを出て、美味しいものたくさん食べて、彼氏作って、家庭を作って……。色々やりたい事やれば、人生悔いなんて基本残らないしな」

「……私、は」

返答に悩む真琴だが、意を決して告げる。

「先生がいなくなる瞬間まで、ここでバイトさせてください。その後の事は、その時になってからまた考えます。家事全般のスキルも、ようやく身につけ始めた所でしたし、もう少し修行を積ませてくださいな」

「……やれやれ。励ましのつもりで言ったのに、しょうがない奴」

「お互いしぶといですからね」

「ま、さつきも言ったけど病気がどうこうとかじゃなくて、この戦いがバカらしく思えたただけだしな。こころで手を退くのアリだな、うん」

北岡は自分をそう納得させると、パンと両手を叩く。

「よし、それじゃあライダー引退記念と称して、先ずは令子さんを食事にでも誘いますか。どこか景色の良い所なかったかなあ〜」

わざとらしくそう呟いて、机の上の雑誌を手に取ろうとする北岡だが、ポトリと落としてしまう。手に力が入っていなかったからだ。真琴の表情に陰が見え始めた。

「……参ったなあ、力が入らなくなってきたか。ま、すぐに治るだろうな。それより真琴。コーヒー淹れにいく途中だったろ？ とびきり高い豆の方で頼むよ」

「は、はい」

そう言っつて背を向けてキッチンに向かう真琴。彼女の姿が見えなくなつた所で再び咳き込む北岡。その手のひらについた血の量は、先ほどよりも多い。自分の体の事だからよく分かる。きつと数日もしないうちに、心臓の鼓動は止まる。

これで良かったのだ。自分らしく最期を飾る。戦いに巻き込まれ、
儂い夢を抱いたまま生き絶えるよりも、こうして人知れず人生の幕を
下ろす生き様も、自分らしさが表れている。

それ以上に、北岡自身も驚いている事もある。

「……結構、もったほうだよな」

椅子に座った北岡は、ガラス張りの窓の外の世界に目を向ける。太
陽の光が強すぎるのかは定かではないが、ほぼ白一色だった。

1119. 進化する脅威

「……っ！」

「どうした？」

「また、スイムスイムから……」

「またか……！」

アビスの脱落が発表されてから、早くも3日が経過した頃。スノーホワイトの変身者、姫河 小雪の持つマジカルフォンにメッセージが届き、彼女は顔をしかめる。側にいる大地や颯太もまた然り。

アビスの1つ前に脱落した魔法少女、たまを殺害したスイムスイムから、スノーホワイトがサバイブの力を使いこなして、レアアイテムの薙刀を没収したその日から、彼女宛に執拗にメッセージが届くようになった。送ってくる相手は言わずもがな。

文言はただ一言。『ルーラを返して』のみ。メッセージを受け取った当初は首を傾げていたスノーホワイトだったが、何度も送られてくるうちに、『薙刀＝ルーラ』と結びつき、尚更返すわけにはいかないと、決意を固めて無視を続けた。あの武器でまた人を殺させるわけにはいかない。そんな魔法少女は、作り出してはいけない。

「これ以上、この武器で人は殺させない……！ 私、守るんだ……！」

「……ああ」

現在、生き残っている魔法少女と仮面ライダーは、合計16名。丁度半分が脱落した事となる。ここまで来れば、残っているのはそれ相応の実力者だ。それも血の気が多い者が半分近くを占めている。戦いは避けられない。生き残る為にも、そういった面々を倒していかなければならない。

「（……でも、それが終わったら？ 他の奴らを倒した後、最後の1人を決めなきゃならなくなる……）」

パートナーである大地の脳裏に、自身を含めた9人の仲間が映し出される。生存の枠は8名だと、ファヴとシローは言っていた。おそらくそれ以上の生存枠を増やすつもりは毛頭ない筈だ。そうなれば、9

人いるチームメイトの中から、最低限1人は脱落を余儀なくされる。つまりは、身代わりだ。それが向こうの方針であるならば仕方のない事だが、この数ヶ月で苦楽を共にして、生き抜いてきた面々を見捨てる事など、大地だけでなく、小雪も望んではない。

一体どうするのが正解なのか。大地が小雪や颯太に気づかれぬように、眉間に皺を寄せていると、大地の持つマジカルフォンから、マスコットキャラクター兼運営担当のシローが飛び出してきた。

『随分と深刻そうな顔をしているな』

「何の用だ。呼び出しなんてしていないぞ」

冷ややかに返す刀でそう呟く大地。小雪も警戒心を捨てきれない様子だ。

『あまり歓迎されてはいないようだな。まあ良い。君達に頼み事と言ってはなんだが、話しておきたい事がある』

「話？」

『オーデインについてだ』

それを聞いて、半ば強制的に電源を落とそうかと考えていた大地の手がピタリと止まった。同じ仮面ライダーであり、一度対峙した敵でもあり、依然として素性が全くと言って良いほど明かされていない、謎多き存在。そんな人物に関する事とあっては、聞いておいて損はないだろう。

『最近、私やファヴに隠れて、妙な動きが見られる。奴はこの状況下においても、基本的に傍観に徹しているが、時たまに消息を眩まし、何事もなかったかのように戻ってくる事が多い。尋ねてもはぐらかすばかりだ。我々の目が届かない所で、何かを企んでいる可能性も否定できない。そしてその一件に、パートナーであるクラムベリーが絡んでいるとも考えられる』

それを聞いて、小雪と颯太は思わず拳をギュツと握りしめる。この2人は一度、スノーホワイトはクラムベリーに、ラ・ピュセルは両方に殺されかけた事がある。あの時の忌まわしい記憶がこびりついており、自然と力が入ってしまうのだ。

その一方で、大地は立ち上がってこう聞き返した。

「随分回りくどい言い方をしているようだが、つまりは俺達の手でそれを調べてくれ、って事か」

『話が早くて助かる。私やファヴだけでは調査の手が届かないものでな』

「けど待つてくれよ大地！ 相手はあのペアだぞ!?? それに、シローが何か企んでいるかもしれないとは思わないのか!??」

颯太が待ったをかけるように立ち上がる。それは小雪も同じだった。シローが何かしらの嘘をついて、大地達を陥れようとしているのではないか。或いは接触する機会を与えて、戦いを強要させるのが目的か。何れにせよ、無理にシローの提案に乗るような、危ない橋を渡る必要はない。もし裏があるのであれば、小雪がスノーホワイトに変身して、魔法を行使してシローの本音を聞き取れば良い。

そう提案する小雪だったが、大地は首を横に振った。

「生き残る為の枠が定められている以上、どの道、戦いは避けられない。少しでも奴らの情報が欲しいのは事実だしな」

「でも……!」

「その代わり、だ。俺からも奴らについて、シローに聞きたい事がある。それがお前の依頼に乗る条件だと思え」

『可能な範囲でなら構わない。……で、何だ?』

「……あの2人は、何でこの街で活動をしてきたんだ? 何が目的で、

この地で活動を続けてきたんだ?」

大地が聞きたかった事。それは謎多きペアが、この戦いで望んでいるもの。生存、と答えるのが筋だろうが、恐らくあの2人に関してはそうではないだろう、と大地は推測している。

「この戦いは、マジカルキャンディーの所持数を競い合い、少なかった者から脱落していく、というルールにのっとって全てが始まった。その脱落が死を意味すると知る事となったキツカケは、お前らとあの2人のやり取りの記録だ」

「……あつー!」

小雪は思い出す。ねむりんが脱落した次の日、龍騎の変身者である正史が、彼女の死について情報を開示した際、今は亡き恩師のオルタ

ナティブが見せてくれたもの。それがたった今、大地が語ったものであった。全員が集まった後も、龍騎が2人に対して情報を集めようと問い詰めてみたが、彼らははぐらかすように首を横に振っていた。

「あの2人は、最初からこうなる事を分かっている、この街に居座っていた。だとしたら、奴らがこの戦いにおいて鍵を握る存在だとしたら、俺達は奴らと向き合う必要がある……！ 奴らがこの戦いで何を求めているのかも、全部……！」

『中々に良い観察眼を持っている。やはりクラムベリーが目をつけるだけの事はあるな』

「！ クラムベリーが、だいちゃんを……！」

「じゃあお前は、あの2人が何を目的としているのか、知っているんだな……？」

颯太がシローに問い詰めた。

『それは君達も何度か耳にした事があるだろう？ 最強の魔法少女や仮面ライダーを完成させ、育て上げる。それが奴らの、特にクラムベリーが願ってやまない事だ。それ以外に生き甲斐が無くなってしまうのが、あの2人だ』

『どうして、そんな事を……』

『詳しい事は、彼らから直接聞き出すと良い。……あまり長話は好きじゃないので、私はこの辺で失礼させてもらう。因みにだが、彼らは今、船賀山の山小屋を拠点としている。そこに行けば彼らと会える。この情報開示は、一種の前払いだと思っておいてくれ』

諸君らの健闘を祈る。

そう言ってシローの立体映像は、マジカルフォンからも姿を消してしまった。

静まり返った部屋の中で、呆然としていた3人だったが、オーディンが何かを企んでいるとあっては、事前に阻止する必要があるかもしれない。

可能な限り、動ける人員だけでも会いに行こう。そう考えた大地は、この後合流するはずの亜子を初め、他のメンバーに一報を入れた。

「船賀山、かあ……。こんな所に、本当にあの2人がいるのかな？」
「シローはこういう事に關しては、嘘をつくような奴とは思えません。
罨だとしても、痕跡ぐらいは残っているはずです」

それから数時間後の夕方。船賀山の北側に、5人の人影が、険しい
山道を難なく登っている姿が。

船賀山は、N市内では2番目に高い山として、冬場はスキーやス
ノーボードを目的とした観光客が県の内外から訪れるスポットだ。
とはいえそのように整備されているのは山の南側であり、北側は人の
手が全く加えられていない。その為、草木が生い茂り、未舗装の林道
が1本あるだけで、他は獣道しかない。加えて高角度で切り立ってい
る為、人間が踏み込むにはそれなりの専門的知識が必要となる。もっ
とも、身体能力が格段に上がっている魔法少女や仮面ライダーなら、
話は別だ。

シローの情報によれば、クラムベリーとオーデインが拠点としてい
るのは、船賀山の中腹に位置する山小屋なのだそうだ。そこに向かっ
て山を登っているのは、最初に連絡を受けた3人に加えて、待ち合わ
せ場所に到着した亜子と、仕事終わりの正史の5人。華乃や蓮二、手
塚、つばめは、仕事や買い物だったり都合が合わなかった為、真相
は伝えずに待機してもらった。険しい山を登る為でもある
が、万が一彼らと接触してすぐに戦闘になった時の事を考えて、山に
入る手前で変身を済ませておいた。

「……見えました。あれです」

ハードゴア・アリスがゆつくりと指をさした先には、確かに山小屋があった。何年か前に起きた、大雨による土砂崩れに巻き込まれて、山小屋の後方が土に埋もれてしまっている。二次災害の危険性もある為、普通の人間ならば、この小屋を見つけても出入りしようとは思わないだろう。逆を返せば、魔法少女や仮面ライダーにとってはうってつけの隠れ家と化す。

「ここに2人が……。龍騎さん、どうします?」

「えっ? ど、どうしようって言われても……。大地君は、どう?」

「……向こうの情報は皆無に等しいです。かといってバラバラに分かっていたら向こうの的になるかもしれない。5人全員で動いて、2人を探しましょう。まあ、目撃情報も少ない相手です。向こうが素直に出てきてくれる保証はないですけど……」

「そうとも限りませんよ? 訪ねてくる相手次第ですが」

不意に響いてきた、ネットリとした声色。スノーホワイトの背筋に悪寒が走る。

振り返ると、薄暗くなりつつある森の中でもハッキリとそのシルエツトが浮かび上がっている、2つの人影。彼らは腕を組んで、まるでずっとそこで待ち構えていたかのような雰囲気醸し出す。

「こんばんは。お待ちしておりましたよ。……何人か、余計なお客様を連れてくるようですが、まあいいでしょう。歓迎の準備は済ませてありますので」

いきなり背後を取られた事に驚き、5人は同時に距離を置くように飛び退がり、身構える。龍騎やハードゴア・アリスにとっては、初めて対峙する事となるが、それでも今まで出会ってきた者達は一線を越えている事は容易に想像できてしまった。

クラムベリーは歓迎ムードだが、そのパートナーの方は快い気分ではなさそうだ。

「……何をしにきた。我々を倒しに来たのならそれも結構だが、あいにくとこちらにも、君達が思っているほど暇ではないのだよ」

「! 何を企んでいる……!」

「知る必要はない。その時が来るまではな。……理解したならば早々に()を」

「まあまあ。せっかく向こうからこちらに来てくださったのですから、……少しはおもてなしに興ずるのも、人間である彼らへの礼儀でしょう」

「……強者との戦いを第一に欲するお前らしい、不条理な言葉だな」
「褒めてもらえて何より」

クラムベリーに呼び止められて、オーデインもやつとその気になったようだ。九尾はそのやり取りに構わず聞き出す事に専念する。

「今、この街で起こっているこのデスゲーム。お前らが絡んでいると見た。それを確かめる為に来たんだ」

「……それを知ってどうするつもりだ」

「もしそれが本当なら……！ 私は、この戦いを止めたい！ こんな事、誰も望んでいなかったはずのこの戦いを、絶対に止めたい！」

九尾に代わって、スノーホワイトが叫ぶが、クラムベリーは聞く耳を傾ける素振りすら見せない。

「私達を倒せば戦いが終わる、ですか。……だからあなたは弱いんですよ、スノーホワイト」

「何だと!?!」

「私達を倒したところで、この世界の法則は何も変わりません。力がその手にある限り、同じ力を持つ者同士による戦いが終わる事は、永久にありません。それは、決して抗いようのない理なのです。……そして、そんな事にも気づかないで、浅はかな考えでそれを否定するあなたに、私は幻滅しています。あなたのような弱者はこの世界に不必要な存在。障害となる者はとっとと駆除するのが私の主義でしてね」
「スノーホワイトを、バカに、しないで、ください……！」

表情からは読み取れないが、隈の目立つアリスは、明らかに怒りを露わにしているようだ。

「スノーホワイトは、私達にとっての、正しい魔法少女の、見本になるべき方です……！」

「右に同じだ！ クラムベリー！ お前達に何があったのかは知らない

いが、そんな自分勝手な価値観を人に押し付けるなんて間違ってる！」

「アリス……い！ ラ・ピュセル……い！」

スノーホワイトが驚く中、クラムベリーは1人、ため息をつく。

「……つくづく人間の思考は理解に苦しみます。魔法少女や仮面ライダーに染まりきっていない証拠ですね」

「ちよつと！ あんたらだつて同じ人間だろ!?？」

「私達をあなた方と一緒にしてほしくはありませんね。私達はもうそんな固有名詞に縛られてなどおりません。……いや、正確にはそこからもう脱却し、人間を越えた存在になったのです。故に……」

人間を捨てきれないあなた方では、私達には勝てない。

龍騎からのツツコミを一蹴したクラムベリーは、次の瞬間、素早くスノーホワイトの眼前まで迫り、拳を突きつけてきた。

「！」

すかさずアリスが、啞然とするスノーホワイトの前に立ち、彼女の代わりとしてその身に拳を受けた。スノーホワイトを巻き込む形で吹き飛ばされたが、守られたスノーホワイトはもちろん、アリスも頬に痛みこそあるが、魔法によってすぐに引いた。

「あ、アリス！ 大丈夫!?？」

「平気、です。スノーホワイトこそ、無事で何より、です」

「クラムベリー！ お前はあ！」

「ハハッ」

逆上したラ・ピュセルが鞘から剣を抜き取り、魔法によって肥大化させ、クラムベリーめがけて振るう。クラムベリーは軽く飛び上がって回避し、ラ・ピュセルを蹴り飛ばし、そのまま3人の魔法少女に向かっていった。

「！ みんな！」

「余所見をしていると命取りだぞ」

「！」

ハッとなって龍騎が前方に目をやると、オーデインが眼前まで迫り、はたき倒そうとするのが見えた。間一髪で九尾が割って入り、両

腕を使ってオーデインからの攻撃に耐える。

「ハアッ！」

「！ 避けてー！」

「オワアッ!?？」

一旦距離を置いた九尾と龍騎に、オーデインは追撃とばかりに右腕を突き出し、衝撃波を放った。黄金色の羽根もそれに乗って拡散し、九尾がかわすように叫ぶ。羽根が地面に触れて小爆発するが、どうにかして回避に成功する。

やはり相手は、自分とラ・ピュセルを追い詰めた事のある敵。ならば出し惜しみは無しだ。そう思った九尾はカードデッキから一枚のカードを取り出す。龍騎も同じ事を思ったのか、九尾が手に持つものと同じ表記のカードを取り出す。

『SURVIVE』

サバイブとなり、ドラグバイザーツバイとフォクスバイザーツバイを構える2人。それに対し、向こうも素手で対抗するつもりはないのか、一枚のカードを取り出して、手元に出現したゴルトバイザーにベントインする。

『SWORD VENT』

2本のゴルトセイバーを手に持ち、待ち構える。かかって来いと
言っているようだ。

「ウオオオオオオオ！」

2人は同時に駆け出し、オーデインに斬りかかる。が、オーデインは瞬時に2人の背後に移動。勢い余った2人の背中に一太刀を浴びせた。

その後も瞬間移動を駆使して、斬撃を繰り出すオーデイン。真正面からやりあった事のない龍騎サバイブは、完全に翻弄されている。唯一九尾サバイブだけが、オーデインの動きを予測してフォクスバイザーツバイで防ぎつつ、カウンターを仕掛けている。

『SURVIVE』

一方、クラムベリーと対峙していた魔法少女達もサバイブを行使し、果敢に立ち向かう。従来の魔法少女よりも強化された相手を前に

しても、余裕の表情を崩さないクラムベリー。先んじてラ・ピュセルサバイブが大剣を振り下ろすが、クラムベリーは左手の甲だけで柄の部分を受け止める。

「クツ……！」

そればかりか、反対側から攻め込んできたアリスの攻撃を、足技だけで反撃し、そのままサッカーボールを蹴るようにアリスを蹴り飛ばし、ラ・ピュセルサバイブごと吹き飛ばした。

休ませる暇は与えないとばかりに、ラ・ピュセルサバイブの左腕を掴んで拘束したクラムベリーは、その腹に向かって膝蹴りを叩き込む。

「グアツ……！」

以前、港でクラムベリーと初めて戦ったあの日も、同じように膝蹴りを腹に受けた事があった。不意の一撃という事もあつて血を吐きながら全身に伝わったあの痛みを、彼女は完全に忘れ去ったわけではない。無論、あの時と違ってサバイブの恩恵を受けている為、まだフラつく程、深刻なダメージとはなっていないが、苦痛で顔を歪ませしてしまうのはどうしようもない。

動きが鈍くなったラ・ピュセルサバイブの首元を掴んで絞めあげようとすするクラムベリーだったが、寸での所でスノーホワイトサバイブが割り込んできた。

「ヤアツ！」

「遅いですね」

だが魔法によって耳の良いクラムベリーにとって、死角からの奇襲は無意味に等しい。スノーホワイトサバイブの拳をヒラリとかわして、回し蹴りでスノーホワイトサバイブに一撃を与える。が、彼女にも意地があるのか、吹き飛ばされずに、右足にしがみついて身動きを制限させる。思わず舌打ちをするクラムベリー。

そこへ間髪入れずにラ・ピュセルサバイブによる、横一直線の大振りが迫ってくる。が、クラムベリーは勢いよく上半身を反らし、ラ・ピュセルサバイブの渾身の一撃が空を掠める。またしても攻撃が当たらず、ラ・ピュセルサバイブは肘打ちで弾き飛ばされ、足元のスノー

ホワイトサバイブの腕を掴むと、巴投げで地面に叩きつけた。

体内から酸素が吐き出されて苦痛に顔を歪ませるスノーホワイトサバイブ。が、間一髪で意識を取り戻し、踏みつけてくるクラムベリーの攻撃を、反射的に横に転がって回避する。その事に、クラムベリーは意外そうな表情を見せた。

「サバイブを手にしただけでこれほど身軽になるとは。以前とは大違いですね。それにあの時と違って、戦いから迷いが薄れている。少しはやれば出来る子だったのですね、スノーホワイト。……まあ、それでも私の足元には遠く及びませんけどね！」

そう言つて右腕を突き出すと、破壊力を持った音波が襲いかかり、3人のいた地面が爆ぜた。ギリギリの所で飛び退いた3人は地面を転がりながら、オーデインと対峙していた仮面ライダー達と合流した。

「！ 大丈夫か……！」

「何とか、ね……！ けど、このままじゃ……！」

「でも、このままやられっ放しでいられるもんか……！ 俺達は、絶対に生き残るって決めたんだ！」

「！ そう、ですね……！ ならこっちは、手数で……！」

そう言つて九尾サバイブは1枚のカードをベントインする。

〔挿入歌：Revolution〕

『BLAST VENT』

九尾サバイブが行使したのは、ファムの契約モンスター、ブランウイングが翼を動かして突風を巻き起こす、ブラストベント。オーデインが吹き飛ばされまいと踏ん張っている間に、別のカードをベントインする九尾サバイブ。

『WALL VENT』

その直後、ヴェス・ウィンタープリズンの魔法によつてオーデインの周囲に壁が出現。逃げ場を塞いだ所で、龍騎サバイブも攻撃に加わった。

『SHOOT VENT』

『STRIKE VENT』

龍騎サバイブの側にドラグランザーが降り立ち、ドラグバイザーツバイの銃口をオーデインに向ける。隣にいる九尾サバイブはその右腕に、アビスの武器であったアビスクロウを装着。遠距離攻撃を放とうとしているようだ。

『GUARD VENT』

これに対し、オーデインは別のカードをベントイン。黄金色の盾『ゴルトシールド』を左腕に装着する。

「ハアッ！」

メテオバレットとアビススマッシュが放たれたが、ゴルトシールドによって阻まれる。攻撃が止んでも、オーデインは無傷だった。かなり高性能な盾のようだ。

「だったら……！」

『STRANGE VENT』

ストレンジベントのカードを使い、その絵柄が別のカードになったのを確認し、再度ベントインする。

『STEAL VENT』

選ばれたのは、相手の武器を奪える能力を持つスチールベント。これにより、オーデインに装備されていたゴルトシールドは、持ち主の手から離れ、龍騎サバイブに移行する。強力な武装を獲得した龍騎サバイブに対し、向こうは無防備となっている。攻め込むなら今が好機だ。

「甘いな」

『STEAL VENT』

……が、オーデインが焦る事なくベントインしたカードは、あろうことか、龍騎サバイブが行使したカードと同じもの。

目には目を、スチールにはスチール。再びゴルトシールドがオーデインの手元に戻ってしまう。

「ええっ!? 嘘だろ!?」

「(あの盾は厄介だな……! ここを使うか!)」

『CONFINE VENT』

相手の武器を無力化する、ガイが所持していたカードをベントイン

した九尾サバイブ。これによりゴルトシールドは誰の手にも渡らぬまま、その場で消滅する。が、オーデインにとつてそんな事はどうでもいらしく、一瞬の隙をついて彼らの眼前に迫ってきた。

身構える一同だが、オーデインからの一撃は彼らに届く事はなかった。その直前で横手からの攻撃を受けて、吹き飛ばされたからだ。オーデインは涼しい顔をしているかのように、何事もなかったかのように着地する。

一方でオーデインに不意打ちを仕掛けてきた人物が誰なのか、5人が振り返ると、そこには4人の人影が。

「！ リップルさん！ 皆さんも！」

「遅くなってすまねえ！ 上から探しても森に隠れてて見つかんなくてな！」

「でも、どうしてここが？」

「あれだけ派手に暴れていれば、外にいても俺達ならすぐに気づく。詳しい事情は後で聞くとして、今はこの状況を打破しよう」

「おやおや。随分と人数を揃えてきましたね」

現れたのは、リップルを初めとした仲間達。全員がサバイブとなっており、先程オーデインを攻撃したのは、ナイトサバイブとリップルサバイブのようだ。

「お前ら……！」

「勘違いするな。助けに来たんじゃない。こいつらと戦いに来たんだ」

「……フン」

2人は素っ気なく答えると、次なる一手を繰り出そうとする。一気に勝負を決めようとしているようだ。隣にいるライアサバイブとトップスピードサバイブもまた然り。九尾サバイブ達も、これ以上の消耗戦を避けるべく、カードを引き抜いてベントインする。

『『『FINAL VENT』』』』

上空から、ドラグランザー、ダークレイダー、エクソダイバー、そしてフォクスローダーの4体が降下して、4人のライダーが飛び乗ると、バイクモードに変形。それぞれのパートナーも、ドラグバイザー

ツバイ、ダークバイザーツバイ、エビルバイザーツバイ、そしてフォクスバイザーツバイを手に持ち、乗り手の後方に立つ。ハードゴア・アリスは、黒いドラグセイバーを持ってスノーホワイトサバイブの後ろに立った。

「これなら……！ どおだアアアアアアアアア！」

龍騎サバイブが叫び、後方の魔法少女達が一斉に飛び上がって、正面と上空から、仁王立ちの2人に向かって一斉に攻撃を繰り出す。

対するクラムベリーとオーデインは……。

「少しは見せてくれますね……。ですが、まだ甘い！」

「ハッ！」

飛び上がってライダー達の攻撃を回避した後、2人は両手に握られたゴルトセイバーで弾きながら攻撃を受け流した。

「！ これでもダメなのか……！」

「言ったでしょう？ サバイブの力を持っているからと言って、私達には勝てない！」

そう呟いたクラムベリーが、オーデインと共に右腕を突き出すのが、不意に目線を外して腕を下ろした。何事かと思った九尾サバイブ達が目線を辿ると、シアゴーストの大群が向かって来ているのが、夜も更け始めた今でもハッキリと見えてきた。

「またこいつら……！」

「これって……！」

シアゴーストの介入により、クラムベリーとオーデインもそちらの対処に手を回す事に。他の9人も、シアゴーストとの戦闘を始める。

『TRICK VENT』

ナイトサバイブと九尾サバイブがシャドゥイリユージョンで分身を作り出し、数の差を埋めようと応戦する。

『SHOOT VENT』

「ハアッ！」

ライアサバイブが、ライトニングアローで一体のシアゴーストに攻撃し、シアゴーストはそのままうつ伏せに倒れこむ。

と、次の瞬間、その背中にはパツクリと割れて、中から青色のトンボ

をモチーフとした『レイドラグーン』が誕生し、頭部に生えた、4枚の羽を動かして、空に飛び上がった。見れば、倒していったはずのシアゴーストから次々とレイドラグーンが現れて、いつのまにか空を飛ぶ個体の方が上回っていた。両手足の鋭い鉤爪が、地上や空中から容赦なく襲いかかる。

これ以上の長居は危険と判断したライアサバイブが、皆に声をかけた。

「一旦退くぞー！ 九尾ー！」

「！ はいー！」

さすがの九尾サバイブも、これだけの数の敵を相手にするのは厳しいと判断し、ライアサバイブの指示に従う事に。あの2人から聞き出した事は山ほどあったが、それどころではなさそうだ。

『BLAZE VENT』

ブレイズ・ウィルオ・ザ・ウィスプで幾多もの火球を放ち、レイドラグーンを何体か巻き込む形で爆散させると、残されたレイドラグーンが混乱しているうちに、素早く下山を試みる。途中でクラムベリーとオーデインに追われないか、時折後ろを振り返るが、幸いにも2人が追いかけてくる様子はなかった。

「フンッ！」

最後の一太刀でレイドラグーンの残党が倒れて、ようやく辺りに静けさが戻る。

クラムベリーは耳を立てて、九尾達の足音を辿るが、かなり遠方まで逃がっている。追いかけた所で徒労に終わるだろう。

「こうも邪魔ばかり入ると、気に入りませんね。私達で仕掛けておいたものとはいえ」

「こちらで用意していたものが何体か羽化した個体だったか。戦いに集中していて、管理を怠ってしまったな。……だが、お陰で進化する個体も確認できた。今のところは順調と言える」

「出来る事なら、アレを使う前に決着をつけたいところですね。特に、九尾とはね」

頬についた血を舌で舐めながら、クラムベリーは不敵な笑みを浮かべる。

「……」

そんな中、オーデインだけは虚空を見つめており、しばらくして、試験マスター専用の端末を通じて、自らのパートナーを呼び出した。

『何か用かな』

「……彼らをここに誘ったのは、お前の差し金か？」

『……だとしたら、どうするつもりかね。私を消すか？』

シローの堂々とした態度を見て、オーデインはため息をつく。

「何を探っているのか知らないが、余計な詮索はしない方が身のためだ。その気になればこの端末を処理する事など容易い」

『ちよ、ちよと待つぽん！ ファヴのもそうだし、魔法の国特製の端末が壊れたら、直ちに向こうの連中が異常を感知してここにやってくるぽん！ そうなったら試験は中断するし、ここにいるファヴ達の今までの苦労が全て水の泡になるぽん！ それは2人にとっても避けたい事じゃないのかぽん？』

オーデインの呟きに対し、今度はクラムベリーの持つ端末から、ファヴがいつにも増して慌てたように出現し、オーデインを説得する。

その必死さが滑稽に思えたのか、オーデインはファヴに向き直る。

「お前がそこまで焦る姿はレアだな。心配せずとも、これまで通りにしていれば、問題ない事だ。私もクラムベリーも、このまま試験の監督を続ける。今回はちよつとしたアクシデントもあつたが、試験も佳境に入る。少しでも情報が外部に流れないように、頼むぞ」

『やれやれ、脅かすなぽん。ファヴの楽しみが減らされたら、たまつたもんじゃないぽん。シローもあまり余計な事をしてほしくないぽん。ファヴ達はあくまでマスコットキャラクターの役を演じきらなきやダメぽん』

『それは失敬。以後気をつけよう』

それ以降、シローは黙り込むわけだが、その視線はオーデインにずっと注がれていた。

120. 決断

「(結局、オーデインの事はサツパリ分からなかったなあ……)」

つばめ特製のエビフライを、タルタルソースにつけながら口に頬張る正史は、ボンヤリと虚空を見つめながら、昨日の一件を思い返していた。

シローによれば、オーデインは何かを企んでいる。具体的な事までは探れなかったが、相手は命の奪い合いとも称されるこのゲームのターニングポイントとなり得る人物。野放しにしておく、後々厄介な事が起きるような気がする。正史とてそれくらいの言葉を理解している。

「……し。おい、正史」

「!?? へ、編集長!」

「さつきからブーツとしてるけど、また悩み事か?」

「あ、いやそういうわけじゃ……」

どうにかして誤魔化す正史だが、大久保の視線はずっと彼に注がれている。何か勘付いている節もありそうだが、敢えて黙っているようにも見受けられる。

故に大久保は、別の話題を振ってみる事に。

「ははーん、さてはつばめのか、もしくはその子供の事でも考えてたんだろ? そういやいつになるんだ? お産の予定日は」

「!、そ、それは多分、後1ヶ月もしないうちに、って言ってたんで……」

「そうか。んならさつきと溜め込んでた仕事キツチリと終わらせて、少しでもあいつの側にいてやれるように、お前のその体に鞭打つことだな」

「は、はい……!」

それは早く仕事を済ませろ、という命令なのか、2人の事を想つてのメールなのか、定かではないが、一応は2人の関係性を気にかけてくれたようだ。そういう点では先輩に感謝しなければならぬ。

そう思いながら再び箸を動かしていると、外で食事を済ませてきた

令子と島田が戻ってきた。と同時に、デスクの上の固定電話が鳴り出し、令子が代表して電話に出た。

「はい、OREジャーナルです」

『やあ、令子さん。久しぶりだけど、相変わらず美しい声だね』

「……北岡さん？」

令子の呟きに反応して、正史は箸を止める。

『久しぶりついでに、食事のお誘いをしたくてね。明日の夜、駅前のレストランで、ディナーでもどうかなんて』

「明日の夜？ ダメダメ、明日は取材があつて……」

『ええ？ そんな仕事ばかりじゃどうするんですか？ ……じゃあ100万歩譲って、ランチならどうですか？』

「ランチ？」

『ええ』

「あの、お昼も……」

令子が適当に理由を作って断ろうとしたその時、正史が彼女の前に立って、待ったをかけてきた。訝しんだ令子は北岡に待ってもらおうように告げてから、受話器を離れた。

「何よ城戸君」

「あ、あの……！ OKしてみても、いいんじゃないですか……？」

「えっ？ 何でよ」

「いや、その……。たまにはほら、気晴らしも必要ですし、1回ぐらい奢ってもらおうのもアリだと思うんです！ 仕事の方は、俺の方で少しは引き継ぎますんで、ここは一つ、北岡さんの誘いに乗ってあげてもらった方が……」

いつになく食い下がらない正史の姿勢を見て、令子だけでなく、島田も訝しむ。が、最後は令子の方が折れて、結果として北岡の誘いに応じて、場所と時間の確認をする事に。

そのやり取りを見ながら、正史は心の片隅でホツとする感覚を覚えた。彼がここまで執拗に、北岡に華を添えようとしたのは、彼の境遇を知ってしまったからに他ならない。

つばめの定期健診に付き添った際、偶然出くわし、そして知ってし

まった、北岡が抱えている爆弾。それを抱えて、今日まで戦い、そして生き残ってきたのだ。

「(北岡さんは、いつ死ぬかもしれない恐怖と、向き合ってた。それでも戦ってたんだ。自分が生きる為に……。それだって、戦う理由としては間違いじゃない。……。俺も、つばめと、そのお腹の子供を守る為に、俺自身を守りたいから。だから、戦うんだ)」

ゲームが始まった頃には、全くそのような考えには至っていなかったが、多くの苦難を経て、つばめを愛おしく思えたからこそ、自らの『願い』を叶える為に、彼は戦う事を決めたのだ。

答えは出せなくて良い。ただし、お前が信じるものを、選択肢に含めろ。

かつて、正史のそばで孫の手を動かしてリラックスしている男の、行き詰まっていた彼にかけてくれた言葉が、再び脳裏によぎった。

願わくば、北岡さんには後悔のない人生を送ってもらいたい。それが、今の正史の、同じ仮面ライダーとして戦ってきた彼に捧げる、やさやかなエールであった。

好きな食べ物は『贅沢なものなら何でも』。好きな言葉は『濡れてに

粟』。好きな乗り物は『高級車全般』。好きな角度は『斜め45度』。その性格は、一見すると気さくで社交的にも見えるが、母親から甘やかされて育てられた影響からか、転んでもタダでは起きず、度を超えたナルシスト気質で口が悪く、利己主義的。

それが、友人のいない北岡きたおか賢治けんじの、彼をよく知る人物からの手酷い評価である。

幼少期のみならず、大人になって弁護士という職に就いてからも、その性格は変わらず。エリート意識が強くてダブルのスーツを着こなす、スタイリッシュな振る舞いを好む一方で、人間の欲望をこよなく愛し、それを極限まで追求するという主義を併せ持ち、社会主義やプライドよりも、報酬を重視している。それ故に黒い噂も少なくない。そんな中でも表舞台ではイメージアップを計ろうと、どんな不利な裁判でも逆転無罪にするという、「クロをシロに変える」程の実力を持つ『スーパー弁護士』として世間の注目を集め続けていた。これだけ見ると酷評が目立つ彼だが、重病人の高額な手術費用を密かに立て替えたりなどと、実際は根っからの悪人ではないのだ。

その理由は、自らが不治の病に侵されている事にあつた。気づいた時には、病の侵攻が身体中に広がっていたらしく、加えて今は亡き秘書の吾郎が巻き込まれた事件を担当していた時期と重なって、発見が大幅に遅れたのである。しかし本人は、病気で死ぬ事を恐れる事なく、吾郎を秘書に迎えて、いつ終わるとも知れない人生を謳歌する事に決めた。

その際、彼が気晴らしにと手を伸ばしたのが、『仮面ライダー育成計画』と呼ばれるアプリゲームであつた。最初はバカバカしいと思いなからプレイしていた彼であつたが、いざやり進めていくうちに、欲望の赴くままに、自らが作成したアバター『ゾルダ』を強化させていった。

そしてある日、シローが現れて、契約書がない事に訝しみながらも、半ば強引にスカウトされる形で、彼は仮面ライダーとしての力を手に入れた。最初こそ戸惑う彼であつたが、これはこれで、欲求を満たす為の商売道具になるのでは、と考えを改めて、人助けやモンスター退

治を行なってきた。

N市の中では比較的早い段階で仮面ライダーになった事もあり、オーデインに基本的なマニュアルを学んだ後は、単独で行動する事が目立った。やがてN市に魔法少女や仮面ライダーが増え始めた頃になって、彼は『魔法少女育成計画』のマスコットキャラクター、ファヴの手引きによって、『マジカロイド44』の教育担当となった。後にパートナーとなる彼女にレクチャーするうちに、金絡みで話が合うようになり、彼女の要望で、マジカロイドの変身者、安藤 真琴を事務所のアルバイトとして迎え入れたのである。

弁護士北岡、秘書の吾郎、そしてアルバイトの真琴。3人の間で絶対的な信頼関係が築かれていくうちに、北岡は自然と『生』に対する欲求が高まってきていた。今の今まで友達が1人もいなかった彼にとって、これほど大きな支えは他にない。

「ホント、退屈しないよな、この毎日はさ」

思わず本音が口から出るほど、不治の病に侵された弁護士は満足げな生活を送っていた。

戦いが本格化し、秘書を失った今でも、北岡は時折目を瞑って、そんな事を思い出す。あの頃に戻って、和気藹々とした時間の中を生きる事を、密かに夢見ている。

『……警察は、N市近辺の市町村に捜査網を張り、検問を強化していく方針を打ち出しており、付近の住民は……』
「……」

よく晴れた朝のニュースにて、アナウンサーの隣の画面に映し出されている、かつて自分が弁護を担当した人物の顔写真を、呆然とした表情で見つめている北岡。以前の彼であれば、鼻を鳴らして自分よりも目立っているこの男に対して恨み言の一つや二つは愚痴をこぼしていただろう。しかし今の彼にそのような気迫は微塵も感じられない。

尚もテレビの画面上で、アナウンサーと評論家らしき人物達が、脱獄犯である浅倉 陸について語り合っている。不意に画面が暗くなり、振り返ると、真琴がテレビのリモコンを机に置いて、代わりに両手に2種類の高級感溢れるスーツを持って、北岡に尋ねてきた。

「そろそろ約束の時間ですし、着替えた方がよろしいかと。今日の令子さんとのデートの服、どちらにします?」

「真琴」

その質問に答える事なく、北岡は口を開いた。

「……俺、さ。やっぱり、浅倉とはちやんと決着つけなきゃいけないと思うんだよね」

「……」

一瞬、言葉を詰まらせる真琴だったが、このままでは本当に行きかねない。そして最期には成す術もなく……。

たまらず真琴は反論する。

「でも先生! その体ではもう……!」

「勝ち負けの問題じゃないよ」

真琴の言葉をそう一蹴する北岡。

「奴が、ライアの友人や、ファミのお姉さん、つばめ……トツプスピードの元旦那に手をかけた事も、そもそもライダーになってメアリと共に悪事を働いてきたのも、多少なりとも、俺の不甲斐なさが招いたって事で、ちよつとばかり責任があると思うんだよね」

「先生……」

「……スーツを着る前に、さ。デツキ、出してくれる、か」

そう言って立ち上がる北岡だったが、すぐに足元がぐらついて、机の上に手を置いた。たまらず、真琴は悲痛な声を張り上げる。

「先生……！ やっぱり、無理ですよ……！」

「行かせてよ、真琴……。このままじゃ俺、何か1つシミを残していく感じで、嫌なんだよね……」

そう呟きながら、外の世界に目を向ける北岡。目を細めて、ジッと虚空を見つめている。

「……それにしても、今日は、天気が悪いね」

「……！」

窓の外に目をやる真琴。空は、雲が少し多いだけで、暖かな日差しがしっかりと差し込んでいる。

「真琴の顔が、見えないよ……」

そう呟いて、玄関に向かおうとする北岡。

不意にその動きが止まったのは、背中から真琴が腕をお腹周りに回して、抱きついてきたからだ。

「生きて、ください、よ……！ 最後の、最期まで……！ 『仮面ライ

ダーゾルダ』として、じゃなくて……！ 『北岡 賢治』先生として

……！ お願いだから……、いつもの先生らしく、生きてよ……！」

お願いだから、生きてよ……！」

自分でも制御がつかないほど、感情が昂ぶるのを感じている。語気を強めて、彼にとつて悲願だった、令子とのデートを全うしてほしい。その一心で、腕に力を込める。

「心配して、くれるのか。そいつは、なんか、嬉しい、ねえ」

北岡はうつすらと笑みを浮かべてそう呟く。

「……けど、どの道助かりそうに、ないから、ね。戦って死ぬか、このまま、令子さんに会う前に果てる、か。……どうせなら、令子さんには、知られないまま、心配させないまま、逝きたいんだよね」

そのまま真琴の腕を引き離そうとするが、腕に力が入らない様子だ。

「これが、令子さん、だったら、これ以上に、ない、幸せ者に、なるだろう、なあ……。……。けど、今は、真琴に、看取ってもらえるのが、よっぽど幸せに思える自分が、いるんだよね……。」

「……………」

思わず腕を緩めてしまう真琴。北岡はまた一步、戦いの地へと踏み出そうと前に出る。

このままでは、本当に北岡は、戦いの中で命を落とす。どう足掻いても、王蛇やカラミティ・メアりに勝つ可能性など皆無だ。無論漢ならば、戦場で果てる事を恥とは思わず、寧ろ勇敢だと讃えるだろう。

「(でも、私にとって、先生は……………!)」

不意に真琴は、食器棚の上に置かれた、茶色の小瓶に目をやる。稀に北岡が仕事の疲れや病気が悪化したりなど、眠れない時に使う、『クロホルム』と呼ばれる液体が入っている事を、彼女は周知していた。そしてその小瓶から目が離せなくなり、そして……。

「クツクツク……………! これですべて終わらせてやるさ。あたしに逆らう

奴を、ようやくぶつ潰せるねえ……！」

ミラーワールドの一角にて、レイドラグーンの死体の山のそばで、ショットガンを下ろしたカラミティ・メア리가、マジカルフォンを通じて、ある人物にメッセージを送っていた。

送信し終わると、不敵な笑みを浮かべながら、依然として武器を振り回し続けるパートナーに目をやる。

「ハアッ！ グウオオオオオオオッ！」

空を飛び回る敵を物ともせず、ベノサーベルを振り下ろし、叩きつける王蛇。敵の数は多いが、王蛇にとって、戦いの舞台としては申し分ない展開……のはずだった。

「足りないんだよこれじゃああ！ もっと戦ええ！ 北岡あ！」

不満を爆発させるように、レイドラグーンの羽根を破壊していく動作には、人間らしさはなく、モンスターそのものだ。

そんなパートナーの荒々しい姿を、満足げに見ていたメアリは、追加文とばかりに姿を見せてきた、レイドラグーンの大群に向けて、銃口を向ける。

「……にしても、さっきから同じような奴らばかり出てきて、腹の足しにもならないね。やっぱり、モンスターをぶつ潰すよりも、魔法少女や仮面ライダーを殺る方が、気分が良いねえ！」

これから巻き起こるであろう戦いを前に、メアリは軽快に引き金を引いていく。

銃声と、獣に似た雄叫びが、静けさをぶち壊すようにして、ミラーワールド内に響き渡る。

121. 人間であり続けたい

やりたくない事は絶対にやらない。

それが安藤^{あんどう} 真琴^{まこと}が唯一持つているポリシーである。

それもあつてか、彼女は受験に失敗して、結果として中卒のフリーターに位置付けられた。親からは、なるべくしてなつたと口酸っぱく酷評し、真琴自身も同感であつた。彼女の両親は、ただひたすら、ぶらぶらしている真琴を捕まえては、色々な事を強要させており、真琴はそれが不服以外の何物でもなかった。故に彼女の寢床は友達の家を転々と泊まり歩く事がいつしか当たり前となつていた。実家には2週間に1回程度しか戻っていない。

もちろんずっと友達の家にいびり立つてはいられないので、食事は様々な方法でやりくりしていた。基本はバイト先のコンビニで廃棄予定の弁当をこつそり抜いて持ち帰って、それをホームレスを通じて知り合つた人と隣り合つて談笑しながら食べている。時たまに段ボールを分けて寢床を確保してくれているので、歳も性別も違う人ではあるが、決して不満はなかった。流石に結婚話までは断らせてもらつてはいるが……。他にも、食べられそうな野草を見つけたらビニール袋に入れて持ち帰ったり、炊き出しに並んだり、ある時は鼻腔をくすぐるような立ち食い蕎麦の匂いを嗅いで空腹を凌いだりと、方法は様々だ。

親の言う事を聞いて真面目に勉強するよりも、こういつた暮らしの方が性に合っている事を、堪え性があるのか定かではないにしても、真琴は全くもって間違つてはいないと思つている。

以前、『真琴ってけっこう可愛いんだしさー。もうちよつとお金の稼ぎようあるじゃん?』とアドバイスしてくれた友人が、『良い人』を紹介しようとしてくれていたが、真琴は直感的に『やりたくない事をやらされる』気がして、その日以降、連絡先を携帯から消去して、付き合いを綺麗さっぱり無くした事もあつた。こういつた事には敏感で、逆にそれ以外だと鈍感。それが真琴の特徴とも見て取れる。

その日、真琴が友人から引き受けた作業も『やりたくない事』であれば、決してやらなかった事だろう。面白みがなく、純粋な作業ではあったが、やりたくないわけではなかったもので、一晩泊めてもらう事を条件に、その作業を引き受けたのだ。

その作業というのが……。

『魔法少女育成計画』……。バイト先でも話には聞いていたけど、思ったよりクオリティは良さそうね」

「まあ、レベルを上げるだけでいいから」

友人がメイクに勤しんでいる間、真琴は彼女がバイト先の客から貰ったとされるスマホを、教えてもらった操作方法の通りに指を動かしていた。

自作のアバターを操作して、敵を魔法でやつつけて、報酬としてマジカルキャンディーを得て、新たなレアアイテムを購入する。そんな単純作業を内心面倒だとは思いつつも、寝床の確保の為に文句を言わずに画面と向き合う真琴。とはいえ真琴も、友人が設定したとされる魔法少女のフォームには口を挟まずにはいらなかった。

背中にはランドセルのようなブースター、腰にはウイング。小学生のような見た目ではあるが、明らかにロボットを模したようなアバターだ。何でこんなアバターにしたのかと尋ねると、友人が今付き合っている彼氏の趣味に合わせている、とあっさり返答してくれた。言われてみれば、友人の部屋にはロボット専門の月刊漫画誌や、プラモデルの箱がいくつかが点在しており、なるほどと納得するように頷いた。

友人が学校に出かけた後も、黙々と作業を続ける真琴。友人は夜遅くまで帰ってこないらしく、恐らくそのまま彼氏と食事に出かけるのだろう。そういった事には疎い真琴にはどうでも良い事の類だった。

それにしても……と、真琴は作業を続けながら思う。『魔法少女育成計画』は完全無課金を謳い文句にしていたが、真琴から言わせれば、時間の無駄に他ならない。同じ娯楽なら金になるものだってあるし、無料で暇つぶしをするくらいなら、小銭を稼いだ方が良い。何が面白いのか、サツパリ理解できない。

この辺りを見る限り、同じ魔法少女であり、リアルでは真琴に似て金に困っているリップルの変身者、細波 華乃と比べて見ると、娯楽に対する価値観が根本的に違っているようだ。

「ま、ホテル代と思えば……」

そうボヤきながら、友人からシャワーを使っても良いと言われていた事を思い出し、ひと段落ついたところで、リフレッシュしようとして立ち上がったその時、奇妙な現象が彼女の目の前で起きた。

『おめでどうぼん！ あなたは魔法少女に選ばれたぼん！』

ファンファーレが鳴り響くと同時に、白と黒の球体が現れた。フワフワと漂い、周囲には鱗粉が漂っている。

何が起きたのか、理解に苦しむ真琴。単純作業と位置付けて、ろくに画面も見ずにボタンを連打していたが、ひよつとして間違った操作でもしてしまったのだろうか。もしそうだとすればマズい。やり直せるものなら良いが、取り返しがつかないものなら大変だ。流石に金で払えと言われる事はないだろうが、無料でネイルアートをしてくれる友人を失うのは、そこそこの痛手だ。

『どうしたぼん？ 魔法少女になれて嬉しくないのかぼん？』

「ちよつと黙ってて。そんな事聞いている場合じゃないから」

『わーん。黙ってるとか酷いぼん』

「ぼんぼんうるさいから。語尾を特殊にすれば可愛いとでも思っているのか。鬱陶し」

慌てて画面をタップして事態の解決にあたろうとする真琴だったが、ここに来て、画面内のマスコットキャラクターと会話が成立して

いる事に気付いた。だがそう思った時には、彼女は最後の引き金を引いていた。

不意に画面から光が溢れて、真琴を包み込み、そして……。

「……何、コレ」

口調がロボットっぽくなっている。まさかと思つて鏡に目を向けると、そこには安藤 真琴の姿はなく、先ほどまで画面の中にしかなかった筈のアバターがそこにいた。

不意に彼女は思い出す。『魔法少女育成計画』には1つの噂がつきまとつていた。数万人に1人の割合で、本物の魔法少女を生み出す、奇跡のゲーム。バイト先や友人が話していたそれを耳にした時は、随分とバカらしい迷信だと肩を竦めていたが、そんな自分がその噂通りになるとは、誰が想像できようか。

こうして真琴は、自分の所持するゲームでも、自分で作ったアバターでもないのに、魔法少女『マジカロイド44』として、非日常的な世界に足を踏み入れてしまったのである。

魔法少女になつた際のレクチャー役が、常識も良識もぶつちぎつた無法者、カラミティ・メアリだった事もあってか、マジカロイド44の中では、魔法少女も仮面ライダーも、非常識の塊だと認識していた。故にシスターナナが理想の王子様の事を意気揚々に話してきたりしても、何ら人間らしい共感を得る事はなかった。どうせ人間として生きていても、やりたくない事をやらされる機会が多々あるだろうか、いつそのこと、人間を捨てて生活するというのも悪くはないだろう。金にならない商売ではあるが、魔法少女でいるうちは金に困る事

は先ずない。マジカロイドはそう考えながら、適当に夜の街をぶらぶら歩いていた。

そんな折に、彼女は鏡の中に潜む、ミラーモンスターと戦う羽目になり、面倒だとは思いつつも、鈍った体を動かすべく、戦いに出向いた。最初は楽勝かと思われていたが、自身の魔法がさほど戦闘向きではない事を悟り、後悔の念に陥った。そんな彼女を救ってくれたのが、緑色の、自分と同じメカニックな仮面ライダーだった。戦闘慣れしているらしく、『マグナバイザー』を駆使して敵を一掃する姿に、マジカロイドはいつのまにか感嘆していた。

戦いが終わった後、暇つぶしとばかりにお礼を交えつつ、『ゾルダ』と呼ばれるライダーと話し合った。変身者は弁護士で、それ相応に裕福な暮らしを満喫しているようだ。真琴とは対照的な生活を送っているその男性の話を聞くうちに、共感できる部分が見受けられてきた。次第に人間らしさを取り戻しつつある中、彼女はそのライダーがいる事務所で働かせてくれないか、と提案した。同じ異能の力を持つ者同士なら近い関係下にあった方が何かと都合が良いし、コンビニのバイトとは比べ物にならないほどの稼ぎにもなる。

面接をどうにかして乗り越え、真琴は『北岡法律事務所』のアルバイトとして、新たなスタートを切った。会計職に就いた彼女は、コンビニでの経験もあつてか、さほど苦にはならなかった。給料もそこそこ出て、寝床も確保してくれた。ずっと前から秘書を務めていた由良吾郎とは時たまに口論になったりするが、それでも最後には仲直りして、3人で食事に出かけたりする事が多々あつた。中卒の自分でも、こんなにも満喫した生活を送れるなど、夢にも思わなかっただろう。

だからこそ、真琴は夢見ている。いつか互いにしわくちやになるまで、人間として最期まで美しく飾るように生きていこう、と。

もう何年も前に廃棄されたであろう工場に、例の如くニット帽を被った真琴の姿があった。おおよそ15歳の少女がいるには似つかわしくないその場所で、どうしてもやらなければならぬ事があるからだ。昔の自分なら、面倒事には巻き込まれたくない、と素っ気なく退避していただろうが、もうそんな悠長な事は言ってられない。

事前にやる事は済ませておいた。仮にここで自分が亡き者になつたとしても、特別後悔はしていない。負け戦になる可能性が高いにしても、だ。

工場に足を踏み入れてすぐに、目の前に2人の人影が割り込んできた。くたびれたような女性と、ヘビ柄の服に身を包んだ、不機嫌そうな男性だ。

「少し時間が過ぎてしまいましたね。悪気はないのですが、ちよつと野暮用があつたものでして」

「……おい待てよ。北岡は、どうした」

浅倉が、今最も戦いたい相手が来ていない事に気付いて、彼のパートナーを睨みつける。その隣にいる奈緒子も訝しんだ様子だ。

「おつかしいねえ。あたしは北岡に用があつて呼び出したつもりだけど、あんたまで呼んだ覚えはないよ」

「……先生なら、もう来ませんよ」

「アア？」

「先生は大事な用事があつて、今日はそちらを優先させております。なので代わりに来たのですよ。面倒ですけど、買い物も済ませたいので、そのついでという事で」

真琴の話が最後まで言い切る前に、浅倉が近くの木材を蹴り飛ばし

て、轟音がそれを遮った。

「俺は北岡と戦う為にここに来た！ お前に用はない！ さつさと北岡をここへ連れてこい！」

「それは今更無理な相談です。そんなにあの方と会いたいなら、先に私を相手にしてくださいな。ま、私を倒した所で、向こうに行っても手遅れでしょうけど」

「何だとお……！」

齒軋りする浅倉を他所に、奈緒子は肩を竦めて前に出た。

「結局お前も最後は、他人の為に戦うってか。全くどいつもこいつも愚図な連中ばかりだ。あたしが教育係として躡けた割には、もう龍騎とかに毒されたわけ？」

「まあ、最初は鬱陶しいとは思いましたが、色々付き合いが長いと、案外悪い気はしませんでしたよ」

「……仮にもあなたは、あたしの下で教えられてた身だ。少しは情けをかけてやって、見逃してやるって手もあるけど、どうするんだい？」
「今更背を向けた所で、そちらのパートナーが許してはくれませんでしょうし、私もここで引き下がるつもりはありません。先生の分まで、ここで決着をつけた方が、何かと都合が良さそうですし」

「少しは慈悲を拾ってやっても良いだろうに、つくづく哀れな奴だね。……ま、いつか」

不敵な笑みを浮かべた奈緒子は、懐からマジカルフォンを取り出す。

「そういうズル賢い性格も、嫌いじゃなかったよ」

「早い所決着をつけて、買い出しに出かけたいので、速やかにお願いしますね」

そうして真琴もマジカルフォンを、浅倉は無言でカードデッキを取り出す。

「変身！」

3人はマジカロイド44、カラミティ・メアリ、王蛇に変身し、しばらくの沈黙の後、王蛇が八つ当たりするように、近くの木材を足でどかした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

咆哮を轟かせて、王蛇が突撃してきた。対するマジカロイドはマジカルフォンを操作して、手元にマグナバイザーを召喚させ、銃口を向かってくる王蛇に向けて、ためらう事なく引き金を引く。王蛇は横に飛びながらも、銃弾を潜り抜けて、前に突き進んでいく。

四次元ポケットから銃身の長い武器を取り出すメアリ。不意に気配を感じて目の前を見ると、マジカロイドの手にはいつの間にかギガランチャーが握られており、すぐに火が吹いた。寸でのところで武器から手を離して回避するメアリ。銃そのものは魔法によって耐久力が高い為、壊れる事はなかったが、すぐには取りに行けない所まで吹き飛ばされてしまった。メアリは舌打ちしながらも、ベノサーベルを手元に召喚する。

『SWORD VENT』

『STRENGTH VENT』

同じく王蛇もカードをベントインしてベノサーベルを構え、獰猛な姿勢を見せる。マジカロイドは王蛇にもギガランチャーを向けて砲撃を撃ち込むが、同時にベントインしていたカードにより、メアリの魔法を受けて強化されたベノサーベルが盾代わりとなり、王蛇を止められない。振り下ろされたベノサーベルは、ギガランチャーを真つ二つに斬り裂いた。そのまま横に振るわれようとするが、間一髪で両足のブースターを噴かせて、後方に飛び退く。

それでもなお、執拗にベノサーベルを突きつける王蛇と、横から奇襲を仕掛けてくるメアリに押され始めて、メアリの蹴りがマジカロイドの腹に命中。呻き声と共に廃材の山に叩きつけられた。

チャンスとばかりに四次元ポケットから取り出したロケットランチャーを構えて、廃材めがけてぶっ放した。爆発と轟音が鳴り響く中、炎の中から出てきたのは、ランドセルや両足から火花をほとばしらせて、最大出力で飛び出てきたマジカロイド。すぐに第2波で狙い撃とうとするメアリだったが、マジカロイドの右手に握られているものを見て、とつさに飛び退く。

マジカロイドの右手には、ワイヤーのようなものが取り付けられて

おり、それを地上めがけて一振りすると、2人の持つベノサーベルが弾かれたように手元から離れた。僅かに傷も付いている。そしてメアリは直前で手を離れた事で無傷だったが、パートナーの方はそうではない。両腕に切れ込みが入って、装甲越しに血が流れ落ちた。多量とは言わないが、少量とも言い難いほどの赤い液体が地面を染めている。

「ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……！」

だが出血しているにもかかわらず、王蛇は腹の底から唸り声をあげながら、マジカロイドを睨みつける。まるで空を飛び回る獲物を狙う獣を連想させる姿だ。

「(せっつかく当たりを引いたと思いマシタのに。人間を捨てタ成れの果て、という事でしようネ。私も先生と出会って無ケレバ、アアなっていたのかもせれません)」

魔法を行使して手に入れた未来のアイテムは、いつにも増して戦闘にはうってつけのアイテムであったにもかかわらず、何人も人の命を奪ってきた王蛇相手には、抑止力ともならないようだ。

その後もメアリによる銃弾のあられを避けつつも、反撃を試みるマジカロイドだが、イラつきがいつにも増している王蛇の猛攻を凌げず、小柄な体は軽々と蹴り飛ばされる。堪らずマジカロイドは両肩にギガキャノンを召喚させ、王蛇を退ける。

「そおらよー！」

王蛇が吹き飛ばされると、代わりにメアリがアサルトライフルを構えて、マジカロイドを狙い撃ちする。足を銃弾が掠めて、バチバチと火花を散らしながら膝をつく。それでもなお執拗にギガキャノンから攻撃を繰り返すマジカロイドを見て、メアリは舌打ちをする。

ここまでしつこく食らいついでくるとは。ならば至近距離から弾丸をぶち込めば、流石に黙る筈だ。

「ウオオオオオオオオ！」

トレカフを取り出したメアリは、先端の刃を突き出す形でマジカロイドの心臓部分に狙いを定めて突撃する。対するマジカロイドはギガアーマーを突き出して防ぎ、

「ハアッ！」

飛び上がった拳を振りかざしてきた王蛇にはギガホーンを装着した右腕を突き出して、動きを止める。しかし、2人も腕に力を込めて押し返そうとしている。隙ができれば、トレカフから火が吹く。この至近距離で撃ち込まれば、如何に身体強化されたこの肉体にも風穴が開く。

しかしそれも、マジカロイドは織り込み済みだったのだろう。

「ファイアアアアアアアアアア！」

ギガキャノンが火を吹き、3人の目の前で小爆発が起きた。その反動で、3人は吹き飛ばされる。

「クソ……ガア！」

腕が痺れて、その美肌から焦げたような匂いが漂ってくる。至近距離でトレカフが爆発して、火傷を負ったようだ。青筋を浮かべるメアリの目つきは殺意に満ちていた。

とはいえマジカロイドの方も無事では済まなかったらしく、体の至る部分から煙が出ており、ショート寸前まで陥っているのが伺えた。

「ヤッパリあなた方の相手は、面倒くさい事この上ありませんネ……」

口から煙を吐きながら、マジカロイドはヨロヨロと立ち上がる。

「……デスがネ。こんなどうしようもない私にも、ロボットみたいな見た目の私にも、人間のままいられる事が、どれだけ有り難い事なのか、少しは、理解できたんデスよ」

フツと笑みを浮かべたような表情を見せた……ように、メアリの目にはそう映った。

「面倒な事も、やりたくない事も、誰かの励ましがあって、不思議とやる気に、満ちるんデスよ」

それが分かっていたいけば、受験にも受かる事が出来たのではないだろうか。それが分かっていたいけば、もつと楽にお金を稼げていたのではないだろうか。それが分かっていたいけば、初めからこのような戦いなど……。

「……デモ、先生との出会いが私を変えてくれたのも事実デス。ならば、それに恩義と受け止めて、その人の為に尽くすこの人生も、捨て

「タもんじやないんデスよ！」

マジカロイドの気迫に鼓舞する形で、前方にマグナギガが出現。両腕と胴体にある銃口が、そしてマジカロイドの右手に握られたマグナバイザーが、教育係を担当してもらった魔法少女に向けられる。

歯軋りするメアリを見据えながら、立つていられるのもやつとな状態で、一步前へ踏み出すマジカロイド。後はマグナバイザーをマグナギガの背中にセットして、引き金を引けば……。

『UNITE VENT』

不意に電子音が鳴り響き、マジカロイドの背後に、ベノスネーカーと、黒いメタルゲラスとエビルダイバーが出現。3体の契約モンスターは重なり、ドラゴンを彷彿とさせるジェノサイダーへと姿を変えらる。

ジェノサイダーは、マグナバイザーを構えるマジカロイドめがけて、口から毒液を放った。ハツとなったマジカロイドは弾かれるように地面を蹴ったが、その場で起きた爆発に巻き込まれて、マグナバイザーを手から離してしまう。

「ハハハハハハハハハア！」

『FINAL VENT』

そこへ聞こえてくる、狂気に満ちた高笑い。奥から、先程吹き飛ばされて地面に延びていたはずの王蛇が、ベノバイザーにカードをベントインさせてから、駆け抜けてこちらに向かってきた。必殺技を打ち込むようだ。その前にこちらが先手を打たなくては。

マジカロイドが地面に落ちたマグナバイザーを拾おうとするが、目の前でそれは爆ぜた。メアリの高火力攻撃で粉々に粉碎されてしまったのだ。成す術のないマジカロイドに向かって、王蛇が『ドウムズデイ』を放ってきた。

身構えるマジカロイドの盾になるように割り込んできたのは、契約モンスターのマグナギガ。だがその巨体すらも、王蛇の全力の蹴りの前では塵芥にも等しい。吹き飛ばされたマグナギガは、後方のマジカロイドを弾き飛ばすと、そのままジェノサイダーが腹に形成したブラックホールに、抵抗する事なく吸い込まれた。

そしてマジカロイドは、悲鳴をあげながら壁に叩きつけられて、地面を転がる。体からは、火花の代わりに血が流れ出て、地面を赤く染める。

まだだ。勝負がつくその瞬間まで、彼女は抗うと誓ったのだ。人間の意地を、最期まであのモンスターペアに見せしめてやる。そしてその暁には、今日の晩ご飯は……。

傷が目立つ体を震わせながら、足に力を込める。ガチャリと金属音が目の前で鳴り、顔を見上げるマジカロイド。同時に、胸の辺りに鉄のようなものが当たる感触が。ボヤけた視界の先に見えたのは、テンガロンハットを被る、豊満な女性の、勝利を確信したような表情。

次の瞬間には、胸の辺りが炎に包まれたように熱くなり、そしてそれは段々と冷めテイキ、ソシテ……。

「……せい。先生」

「……、……？」

ふと目を開けると、もう2度と見られないと思われていた、数少ない親友の1人の顔が目の前にはないか。

「……あれえ、おつかしいなあ。いよいよ幻覚まで見え始めたのかな、俺」

「俺もよく分かりません。けど、先生がここにいるって事は……」
「……」

ああ、そうか。

彼は思い出す。最後の戦いに出向こうとした矢先、目の前からやってきた彼女に、鼻先にハンカチのようなものを押し付けられて、その匂いを嗅いですぐに意識がなくなって……。

「……やれやれ。そうになると、俺もここで終いという訳か。ま、令子さんのデートが叶わなかったのはちよつと心残りだけど、浅倉に殺されて惨めに終わるよりはマシか」

「先生……」

「なあ、……ちゃん。俺、ちよつとは人間らしく、振る舞えたかな？」

目の前の男に対する問いかけをした彼の表情は、どこか穏やかにも見受けられる。そしてその返答も早かった。

「……先生は、立派にやり遂げたと思ってます。だって、俺との約束、最期まで守ってくれたじゃないですか」

「！ そっか。そんな単純な事で良かったんだな。人間らしくいるって事はさ」

そう思うだろ？

彼はそう呟きながら、目線を別の所に向ける。男性も振り返って驚いた表情を浮かべる。

ゆっくりと歩いてきたのは、ニット帽を被った少女だった。薄っすらと笑いながら、2人の男性に近寄る。

「……さあて、と。向こうの世界でも何か美味しいものでもあると良いな。またあの時みたいは、3人で楽しむとしますか」

「良いですね」

「なら、お酒でも飲んでみたいものですね。私未成年だったのであの時は止められてましたけど、もうそんなの関係なさそうですし。大人の付き合いとやらも経験しておかないと」

「そいつは良いね。じゃ、行きますか」

そう呟いた彼の両隣に並び立つように、2人の男女は肩を並べ、光り輝く場所を頼りに、静かに歩き始めた。

そんな3人の後ろ姿を、パジャマ姿の魔法少女が眠たげに目を擦りながら一言。

「せえ〜つかく、ねむりんが夢の中で会わせてあげたのに、ねむりんはガン無視ですか〜……。まあ、人知れず人助けつてのは、魔法少女のセオリーには反してないし、それなりに良い事したよね、うん。……。向こうの世界でも、仲良く暮らすんだよ〜……」

昼休憩も兼ねて『A T O R I』を訪れていた正史が、令子から連絡を受けたのは、勤務していた蓮二と口論になりかけていた時だった。いつになっても、半ば強引にランチに誘ってきた北岡が、指定された場所に来る気配がない。電話越しに、憤り半分、不安半分といった口調で令子はそう語る。

訝しむ正史だったが、不意に嫌な予感がよぎった。北岡が不治の病に侵されている事を知っているのは、魔法少女や仮面ライダーの中でも数人。一般人ともなれば、せいぜい担当医やそこで働いている看護婦ぐらいだろう。令子は当然ながらその事に勘付いている様子はない。

次第に焦りが、正史の全身を支配する。病気の事はさておいても、

北岡の身に何かがあったのは間違いない。電話を切った正史はすぐにお金を払って店を出た。異様な雰囲気を感じ取った蓮二も、店長に断りを入れて、正史に同行する事に。彼もまた、北岡が抱えている事情を知る側の一人だからだ。

そうして原付バイクに乗り込んだその時、彼のマジカルフォンにメッセージが送られてきた。こんな時に、と思いつつも開いてみると、そこには短いメッセージと、何千個もあるマジカルキャンディーが添付されているではないか。

『あなたなら色々信用できそうなので、我々のキャンディーをそちらに預けておきます。明日までに私から連絡がなかったら、そのキャンディーはそちらのご自由に。』
マジカロイド44』

相手は、北岡のパートナー。このタイミングでマジカルキャンディーを全部預ける事の意図が読めなかったが、まずは北岡の安否確認が最優先だ。

「北岡さん！ 北岡さん！」

原付バイクを走らせて、北岡法律事務所に辿り着いたのは、それから10分後。玄関のインターホンを鳴らしても、ドアを強く叩いても、反応はない。かといってドアノブをガチャガチャと回しても、鍵がかかっていて入れない。それならもう外に出かけたのかとも考えたが、遅れて到着した蓮二が車庫に北岡がいつも乗っていたポルシェを発見した事で、その可能性は否定された。

だとすれば、北岡は中にいるはずだ。2人は意を決して、同時に足を突き出してドアを蹴破ろうとする。何発か蹴り込んで、ようやくドアが内側に開いた。

すぐにリビングへと足を運び、そして見つけてしまった。高級そうなソファアームの上で、眠るように横たわっている弁護士姿を。下半身にはブランケットが被らされており、無表情で横たわる北岡の手には、白い花が添えられている。寝かされた後に誰かが持たせたものだろう。胸も上下に動いていない。

それが何を意味するのか。普段彼からバカと称されてきた正史でも、否が応でも理解できてしまう。

「手遅れ、だったようだな」

「北岡、さん……！ あんた……！」

正史は膝から崩れ落ち、蓮二はやるせない表情を見せる。

淀んだ空気が室内に立ち込める中、再びメッセージが送られてきた。もしや真琴か。そう思つて2人がマジカルフォンを確認すると、こんな文言が。

ファヴ：『はいはい！ 呼ばれて登場ファヴだぼん！ 本日はお日柄もよく……つてそんな前置きはいらさないぼん？ ああそう』

シロー：『茶番劇はその辺にして、新たな脱落者を発表する。今回は「2人」だ』

ファヴ：『ええ。先ず1人目は、仮面ライダーゾルダだぼん。ここだけの話、実はゾルダつて、とおつても重い病気にかかつて、みんなに内緒で凄く苦労してたんだぼん！ そんな中でも最期まで頑張ったゾルダを、みんな惜しみなく讃えてほしいぼん！ それから、もう1人の脱落者は……』

もう1人の脱落者がファヴの口から告げられた直後、北岡の亡骸の前に居座っていた2人の目が見開く。北岡が持っていた花が、玄関から入り込んだ風に吹かれて、手元から離れて地面にポトリと落ちる。

「……」

鉄骨を蹴りながらイライラを解消させている王蛇の叫び声を他所

に、カラミテイ・メアリは銃を降ろそうとはしなかった。

積まれた木材にもたれかかるように、小学生のような見た目のロボットが倒れている。胸の中心部に空いた穴からは、火花の代わりに赤い液体が流れて、下半身を、そして地面を染め上げる。白い部分が目立っていたはずのその容姿も、今や赤黒い部分が多く見受けられる。2つの目玉も点滅を繰り返している。

やがて壊れたラジカセのような声が、メアリの耳元に届いた。

「……セン、セイ。また、美味イ……もの、買っテ、……帰り、マス……」
その直後、マジカロイド44の体が光り始め、それが解けると、人間だった時の姿に戻っていった。

安っぽい服の中心部は赤く染まり、鼻と口から血を流している、ニット帽を被ったその少女の表情は、絶望に染まりきった様子もなければ、後悔に押し潰されたものでもない。

言うなればそれは、人間として最期まで何かをやり遂げた、という達成感に満ち溢れたもの、と捉えるべきか。

その表情が、ガンマン風魔法少女をより一層イラつかせる。しかし何よりも彼女をイラつかせたのは、今さっき殺した魔法少女が、北岡と共に散々自分達を翻弄し続けてきた邪魔者の正体が、自分よりもずっと歳下の少女であった事。

自分よりもずっと存在も地位も下のはずの女にここまで翻弄されていたとは、ムカつく事この上ない。その顔を更に赤く染めてやろうか。

再度引き金に手をかけるメアリ。

「……チッ」

だがメアリは、その引き金を引く事はなかった。そして銃を下ろし、舌打ちを1つするだけで、それ以上の事はしなかった。

今更物言わぬ亡骸に銃弾を撃ち込んだ所で、苦痛に満ちた表情など見せてくれるはずもない。それに……。

「初めてだな」

魔法少女を殺しておいて、何ら満足感が得られない事など。

「……昔の誼だ。今回は手を引いてやるか。……にしても、やっぱガ

キはあたしをとことんイラつかせるね。……あの嬢ちゃんを思い出
すだけで、イライラする」

そう吐き捨てて、メアリは王蛇を連れて、その場を立ち去る。

静けさが戻った廃工場に横たわる、1人の少女の懐から、小銭の
入った財布がポトリと落ちる。ニット帽の少女がそれを拾い上げる
事は、2度と無かった。

お金よりもずっと価値のあるものを、彼女は確かに掴み取ったのだ
ろう……。

《中間報告 その15》

【ゾルダ（北岡 賢治）、マジカロイド44（安藤 真琴）、死亡】

【残り、魔法少女8名、仮面ライダー6名、計14名】

122. 人質救出作戦

人は快楽を求める時、何かしらの基準や目標を立てる。その域に達した時に得られる満足度は、他者からは計り知れないものとなる。

快楽の求め方は人それぞれだ。ありきたりな例で言うならば、小さな事でも良いから人助けをする。そうして自他共にある種の幸福を掴んだ気分を味わえる。他にも、苦手な事でも我慢を積み重ねて、時が来たら吹っ切れたように解放する。更には、どんな手を使つても、欲しいものを手にする。などと、例えを挙げ始めたらキリがない。

山元 奈緒子の場合は、強者をその手でいたぶる事を、快楽と捉えていた。

しかし、彼女は弱かった。周りの連中がそう評価してしまつたからだ。それを克服するべく、アルコールに手を出したものの、万能薬として働いてくれた時期は、そう長くない。金銭的な問題や、酩酊が抜けた後の倦怠感、不平タラタラの亭主。これらの要素がアルコールを万能薬たらしめなかつたと、奈緒子は愚痴る。

そうして彼女が次に手を出したのは、一人娘だった。弱者だからこそ、弱者しかいじめる事が出来ず、それが娘であり、不満の捌け口となつた。本心ではそこまでするつもりもなかつたが、本来求めていたものではなく、代用品に近い形だったから、ひたすら暴力を振るいつけた。

しつつけと称して蹴り、殴り、タバコの火を押し付け、食事を抜く。これらの要素は、アルコールと組み合わせると事で時たまにストレス解消となつたが、我慢の限界が来た亭主が、娘を連れて家から出て行った。それが、約1年くらい前の事。

甲斐性のない愚図だ、と吐き散らしながら、2人が颯爽と扉を開けて立ち去っていく後ろ姿をジツと見つめ、それ以上追いかける事はしなかつた。一瞬だけ、娘がこちらを見てきたが、どんな表情をしていたかなど、今はもう覚えていない。

丁度その頃、彼女の手元ではリリースしてから1週間しか経っていない新作アプリゲーム『魔法少女育成計画』が起動されていた。新た

なストレス発散になるのでは、と多少期待していたが、アルコールや娘への虐待に勝る事はなかった。それでも、彼女は夢見ていた。自分も、アバターとして設定していたガンマンのように、強者を圧倒し、辱めを与えられれば、どれほど満たされるだろうか、と。

そしてその夢は、なんの前触れもなく訪れた。

『おめでどうぼん！ あなたは本物の魔法少女に選ばれたぼん！』

最初は、過度なアルコール摂取のせいで、幻覚でも見ているのでは、と思いつながら、面倒だと言ってタップしていたが、次の瞬間、光に包まれた奈緒子は、先ほどまで画面に映っていた、豊満なバストとビキニ、テンガロンハットなどといった、30代後半のくたびれた女性の面影をすっかり失くした、若々しさが残る、魔法少女『カラミティ・メアリ』へと変貌していた。

しかし、それ以上驚いたりも、喜ぶ事もなかった。マスコットキャラクターであるファヴが10分ほど何かを言っていたが、ほとんど耳に入っていない。ただ、「ああそうかい」と言いたげな表情で口元だけを歪めて、笑っていた。

その後、彼女はファヴの紹介である魔法少女からレクチャーを受ける事となった。それが、『森の音楽家クラムベリー』と呼ばれる魔法少女だった。やる気のなさそうな説明を聞きながら、メアリは不満を募らせていた。

アプリがリリースしてから1週間しか経っていないのなら、いくら自分よりも早く魔法少女になったとはいえ、ほぼ同期に近い。上から見下ろすような態度が、どうしても気に入らなかった。その事を、不自然に開いた距離感で指摘した結果、クラムベリーは謝った。ただし、本気でない事には気づいた。向こうもそれを見越しているようだ。ギスギスした空気が立ち込め、しかしお互いに敵意はないと判断し、その場は御開きとなった。

それ以降、クラムベリーとはほとんど顔を合わせなかった。一度だけ、彼女と共闘した事はあった。隣県で行われた試験の最中に逃げ出したとされる、魔法で生み出された生物がN市に潜伏しており、その対処にあたっていたクラムベリーに協力する形で戦場に出向いたの

である。別にクラムベリーを助ける為に来たのではなく、「力を振るうのに相応しい場所があったから」という理由で引き金を引き続けたのだ。事態はあつという間に終息し、気がつけば、戦いだったものが一方的な虐殺に変わっていた。

その際、彼女は見たことの無い、黄金色の仮面の人物と出会っていた。それが『仮面ライダー育成計画』を経て誕生する『仮面ライダー』と呼ばれる存在である事を知ったのは、少し後の事だった。

「新しい仮面ライダーを増やす事に、協力してもらいたい」

黄金色の仮面ライダー『オーデイン』にそんな話が持ちかけられたのは、魔法少女になって1ヶ月ほど経った頃だった。その頃になれば、魔法少女姿ならどれほどアルコールを摂取しても人体に害はなく、美貌も維持できる事も、自覚できるようになっていた。

そうして暴力のプロを自称し、肩で風を切って歩くヤクザ者の命乞いを見て恍惚する事に楽しみを覚え、遂には『鉄輪会』と呼ばれる暴力団グループに雇われて、金や酒にも困らなくなってきた、別の刺激を追い求めかけていた時、それは訪れた。

「……何が目的だい？」

『この街は、ミラーモンスターの出現率が極めて高い事が、魔法の国の調査で判明した。そこで我々は、このN市にて魔法少女及び仮面ライダーの数を増やし、効率良く対処する事に決定した』

そう説明しているのは、オーデインの持つ魔法の国特製の端末から浮かび上がっている、『仮面ライダー育成計画』のマスコットキャラクターであるシローだった。

「……んで、あたしにその候補者を探せ、と？ 随分と生意気な事を言ってくれるじゃないか。あんたらみたいには、得体の知れない奴らの言う事を、素直に聞くとでも思ったのかい？ そもそも、あたしはそういう上から目線で語られるのが1番気に入らないのさね」

そう呟いて、暴力団から拝借した銃をオーデインに向ける。が、彼は動じる事なく、腕を組みながら、平然と口を開く。

「無論、闇雲に探してもらう必要はない。そもそも、この街に住む誰もが選ばれるわけではない。適正値の高い人物を、シローとファヴガリストアップして、その力を与える。いわばお前も、選ばれし者なのだよ」

『そして次に仮面ライダーとして候補に挙がっている人物を、我々は見つける事に成功した。……ただ、問題が1つあってね』

「何だい？」

『その人物がいるのは、ここから少し離れた場所に位置する拘置所だ。数ヶ月ほど前に、そこに放り込まれている。本来なら私が出向くべき所だが、当然ながら、彼は端末など一切持ち合わせていない。そこで、君の腕を見込んで、彼の脱獄に手を貸してもらいたい。彼を仮面ライダーにすれば、これほど頼もしい者は他にいない』

「無論、それ相応の報酬は弾ませておく。奴の力は、お前にとっても必要とする日が来るはずだ」

これを聞いたメアリは、少し考える素振りを見せてから、次なる候補者に関する情報を聞き出した後、オーデインとシローの依頼に応じる事に。最初は「いたぶりがいのある奴をサンドバッグ代わりにこき使う為に助けてやるか」とも考えていたのだが、彼らから聞かされた人物は、メアリの興味をそそる事となる。

「カラミティイミラクルクルクルリン！ 魔法のガンマン、カラミティ・メアリになくれ！」

今でこそ唱える機会もなくなったが、魔法少女になったとファヴに告げられた時、自然に心の中に浮かんできた呪文を唱えながら、奈緒子は魔法少女に変身する。

拘置所に侵入する事は造作もなかった。魔法の力を使えば、回りくどい事をせずとも、歯向かってくる警官隊を、銃を乱射する形で薙ぎ払う事も可能だ。改めて、素晴らしい力を手に入れたものだ、と自分に酔いしれるメアリ。

自分を捕まえようとした警官を振り返りにした後、悠々と、目的の人物がいるであろう場所に、バズーカの砲弾を撃ち込んだ。その威力は、自身に与えられた魔法によって強化されており、鉄の牢屋など何の役にも立たないほどだ。

その人物は、家族を含めて何人もの人を無差別に殺してきたそうだが、そんな彼をもつてしても、目の前で起きた謎の爆発や、正面から現れたガンマン風の女性の出現に、驚きを隠せないようだ。

「何だ、お前はあ……」

「ちよいと依頼を受けてね。あんたにチャンスを与えてやりに来たのさ」

「チャンス……？」

首を傾げる男性に、メアリは躊躇う事なく銃口を向ける。男性は動じる様子を見せない。

「言つとくけど社会の負け犬に拒否権はないよ。つまりは逆らう事も許されない。死にたくなかったら、あたしをム力つかせない事だ。」

オーケイ？」

「……」

「ほら、返事は？ あんまりあたしをイラ」

右手に銃を構え、左手にウイスキーの瓶を持ち、そのまま口に運ぼうとした瞬間、メアリの頬を何かが掠めた。

一体何が、と目を見開くメアリは、左手に持っていたはずの瓶がなくなっている事に気づく。目の前を見ると、男性がギラついた目つきで自分に睨んでいるのが確認できる。その右拳はメアリの左頬に触れるか触れないかの瀬戸際を通り越して、後ろにあつた、瓦礫の壁に突き刺さっており、ウイスキーの瓶がその下で砕けており、中身が地面に染み込んでいく。事前に景気付けでウォッカを飲んでいたので、一瞬で酔いが覚めてしまったようだ。

「……俺をあまり、イラつかせるなあ。助けてくれた事には礼を言うが、そこから先は別だ」

自分が死ぬかもしれない立ち位置にいるにもかかわらず、そんな死の概念に恐れる事なく、ただの人間が魔法少女である自分に殴りかかってきた。

その事が、メア리를より刺激する起爆剤となった。

「……クッククック。アツハツハツハツハ！」

「何がおかしい」

「いやあ、あんたほど面白い奴に出くわした事がないんでね！ 思わずブルっちまったよ！ ヒヤアツハツハツハ！」

あいつらも面白い逸材に目をつけたものだ、とこの時ばかりはオーディン達を賞賛するメアリ。彼もまた、社会的に1番地位の低い所まで墮とされ、強者への復讐を望んでいるに違いない。自らの快樂と合致しているからこそ、メアリは彼に興味を抱くようになったのだろう。

ならば、答えは1つだ。

「気に入ったよ！ こき使ってやろうかと思ったが、あんたにはそれ以上の価値がありそうだ。あたしと一緒に、このクソツタレな世界に、イライラするもんを全部ぶつけてやろうじゃないか！」

「……戦える場所が、祭りの場所があるんなら、俺は構わないぜ」
そうして、自然とがっちり手を組む2人。不敵な笑い声が、半壊した拘置所の一角に響き渡る。

これが、後に最凶最悪のコンビと謳われる『カラミティ・メアリ』と『王蛇』、すなわち山元 奈緒子と浅倉 陸のファーストコンタクトであり、N市に恐怖の種を植え付けたのだ。

「(……そうさ。あたしは強い。魔法少女や仮面ライダーみたいな、『何よりも強く立派な存在』を辱め、蹂躪する事が出来るんだ。それを今から証明してやるのさ……!)」

外から複数のサイレン音が聞こえてくるのを確認しながら、すぐそばで震えるだけしかできない、哀れな人間達を見下ろすメアリ。

彼女がいるのは、市内のとあるファミレス。魔法少女姿で堂々とやってきたわけだが、勿論食事をしに来たわけではない。でなければ、わざわざ脱獄犯として指名手配されている浅倉を連れて来たりなどしない。

彼女が求めているのは、同じ魔法少女であり、因縁深い『リップル』の殺害。しかしこちらから誘っても、向こうが素直に応じるとは思えない。ならば、彼女のくだらない正義感を利用して、引き寄せれば良い。メアリに迷いはなかった。

最初に銃弾を天井に向けて撃つと、一瞬で店内が静まり返り、一瞬でパニックに陥った。次はそんな客達に向かって銃弾を撃ち込む。

足や腕を撃たれて倒れこむ弱者達。やはり面白みに欠けた。魔法少女や仮面ライダーを撃ち殺す方がよほど面白い。

そこで彼女は、偶然近くにいた幼い女の子を捕らえて、銃口を突きつける事で、その場にいた全員を沈黙化させた。

「ママあ……！」

「チカあ……！　　お願いです！　　この子を離してください！　　お願いします……！」

「何であんたが頼み事してんのさ。立場を理解しな。あたしに逆らうな。煩わせるな。ムカつかせるなよ」

チカと呼ばれる少女の返還を必死に懇願する、母親らしき人物に、メアリは銃口を向ける。

店内の椅子で作られたバリケードの中に、浅倉の姿はない。厨房でイライラを解消するべく、飯を漁っているのだろう。時折、唸り声が響いてきて、その度に客達は畏怖を覚える。

メアリもボトルのワインを口にしながら、窓の外を確認する。すでに周りは特殊部隊を含めた警官達に囲まれており、その奥では野次馬に交じって、カメラマンや新聞記者達が注目している。思ったより派手に暴れすぎたようだ。

「……まあ、これも全部、あのガキ共のせいだけだな」

メアリがそう毒づく理由。

ここ最近脱落する魔法少女は皆、自分よりもずっと歳下の少女だった。例を挙げるなら、たまやマジカロイド44だ。彼女達には、ここに至るまでずっとナメられ続けた。それが、彼女の中の憎しみを煮えたぎらせた。今も生き残っているリップルもそうだ。言動からして、まだ未成年である確信は抱いている。何度も戦う機会があつたにもかかわらず、命乞いをする姿を見ていない。龍騎も標的だが、先ずはリップルを痛めつけたい。が、このまま待ち続けても拉致があかない。だからこそ、メアリは今回の計画を実行に移した。

「さあ来いよ……！　　今度こそ、お前の息の根を止めてやろうじゃないか……！」

一方、店外は打って変わって慌ただしい雰囲気にも包まれていた。野次馬達も、思わず息を呑むほどだ。

やがて駐車場近くに、連絡を受けて駆けつけた刑事が到着した。彼がこの事件を担当するようだ。

「中の様子はどうか!?？」

「子供とその母親がいる事以外は何も……。一応、連絡用の携帯を中に入れさせましたが、要求はありません」

「浅倉と、その共犯らしき女の姿は？」

「時折、共犯の女が窓から顔を見せたりする事はありますが、浅倉の姿はまだ確認できません。店の奥にいる可能性があるかと」

「城南地区で目撃情報の多かったあの脱獄犯が、まさかこんな所に出るとはなあ……。それに女の方も、西洋風のガンマンのコスプレをして立てこもり、か……。こんな事例は初めてだな……」

ベテランの雰囲気も匂わせる刑事も、この非常事態を前に、苦悶の表情を浮かべていた。

そしてその様子取材する記者達の中に、『OREジャーナル』が含まれているのは言わずもがな。

「とんでもない事になったわね……」

そう呟いたのは、先日、悪徳弁護士として名高い北岡とのデートに

誘われた令子。もつともその彼も、つい先日原因不明の病に倒れて、そのまま息を引き取っており、彼と色々な意味で関係の深かった令子も当初はそれなりにショックを受けていたようだ。それでもすぐに開き直って、記者として再び立ち上がったあたり、メンタル面は誰よりも強そうだが。

そしてもう1人、令子の隣で拳を握りしめている正史の姿もあった。

「あいつら……！」

少し前に見えた、女の子に銃口を突きつけながら外を確認するメアリの姿を思い出し、怒りに震えていた。同じ目的を持って誕生したはずの魔法少女や仮面ライダーが、人質を取って悪さをしているという事実が、正史の中の正義感を逆撫でていく。

これ以上、彼らの悪行は見過ごせないし、何としてでも、中にいる人質達を助け出してみせる。そう決意を固めていると、懐のマジカルフォンにメッセージが送られてきた。仲間からの連絡に目を通した正史は、令子に気づかれないように、そつとその場を離れて、人目のつかないビルの上上に駆けつけた。

屋上には既に変身しているナイト、トップスピード、リップルの姿があった。他の面々は後から合流するようだ。

「そつちでは何か掴んだのか？」

開口一番、ナイトが正史に調査の結果を尋ねる。

「女の子がメアりに捕まえられて、銃を向けられている事以外は、何も……。浅倉は、店の奥にいるかもって話だ……」

「まだ中にいるのは確実、か」

下界に見えるファミレスを睨みつけながらそう呟くりツプルの口調は、明らかに尖っていた。メアリが何を目的にこの騒ぎを起こしたのか、気づいている様子だ。

「にしてもひでえな……！ 姐さん、マジで頭イカれたのか……!!?」

「こつまでするなんて……」

「……中宿の時と同じだ。私や龍騎をおびき寄せて、倒す為に、人の命を弄ぼうとしている……！」

「そんな事絶対させるもんか！　こうなったらミラーワールドからあいつらを無理矢理にでも引き寄せて……！」

「待て」

「な、何だよナイト！　邪魔すんなよ！」

「バカが。もう少し冷静になれ。真正面からいけば、あいつらが確実に手を出してくる」

ナイトが指をさした先に目をやると、正史は息を呑んだ。窓には、時折ベノスネーカーや黒いメタルグラス、黒いエビルドライバーが見え隠れしているのが分かる。周囲を監視しているのだろう。当然、周りの面々にはそれが見えていない。

「見つかったら、確実に面倒な事になる。人質の命の保証は先ずないだろうな」

「最悪の場合、突入したサツ達も巻き込まれるって事か……！」

トップスピードも、この状況を前に、地団駄を踏むばかり。この状況下で、契約モンスター達を上手く巻いて、且つ店内に侵入して人質を救出する為にも、分担の采配が重要となる。

「ライア達の到着を待つてから動く手もあるが……」

「それじゃダメだ！　多分子供が保たなくなるに決まってる……！　今すぐにも、助けに行かなきゃならねえんだ……！　オレのプラ

イドが、そうさせるんだ……！」

「トップスピード……」

トップスピードの、その瞳から溢れ出る決意は、『最低でも後半年は絶対に死ねない』と豪語していた時と似たようなものを、リップルは感じ取った。

「オレは行くぜ。姐さんとは、腹を割って話さねえといけない事もあるしな」

「……私も、ケリをつけなきゃならない。これ以上、あいつらのせいで誰かが泣く姿を見たくない……！」

「だ、だったら俺も！」

龍騎も、メアリとの戦いに赴く意思を示すが、ナイトがそれを遮った。

「奴らの相手はこの2人に任せるんだ。それよりも俺達は……」

「(取り敢えず、ここまでは上手くいったか……)」

音を立てないように、鏡の中から現実世界に戻ってきたトップスピードは、小さく息を吐いてから、こっそりと店内を確認する。

ミラーワールドを徘徊していた契約モンスター達は、龍騎とナイトが挑発する形でファミレスから引き離し、それを確認したトップスピードは、リップルとは二手に分かれて、ミラーワールドを通じて中に入る事に成功した。

周りに気づかれぬように顔を出したトップスピードは、すっかり怯えきっている客達の無事を確認する。

「ママ……!」

「ガキだからって、ギャアギャア喚くなよ。泣いたって、ヒーローのいないこの世界じゃ、誰も助けにきやしないのさ」

メアリはそう叱りつけながら、ワインを一本飲み干す。

「結局最後に頼れるのは、自分の力しかない。だから追い求めたのさ。あたしみたいに、最初から何も持てなかった奴が、1人でも生きていけるような力をね。悔しかったら、あんたもあたしみたいに、力を恐

れず、求めてみる事だね」

勿論、あんたらにも言える事だけどな。

女の子にだけでなく、周りの客達にもそう論ずるメアりに、誰一人口応えできなかつた。

「(姐さん……)」

メアリがどのような境遇にいたのか、トップスピードは知る由もない。トップスピード自身は、どちらかと言えば恵まれていた方になるだろう。それに自惚れて、大切な人を一度失くしてしまった事もある。そんな自分が魔法の力を手に入れた事に、メアリはどこかで腹を立てていたのではないだろうか。

「(けど、だからって、こんなやり方は、間違ってる筈だ……！ 姐さんは、今だって、オレにとつての……！)」

この気持ちは、メアりに直接ぶつける他ない。その為には先ず……。

青ざめ始めている少女を見て、トップスピードは先ず、彼女のケアを始める事に。冷静に周りを見渡し、レジの側に置かれていた人形を手にとると、少女にだけ見えるように、その人形を動かした。

彼女も、間も無く母親になる為、母性に溢れた行動で、少女を落ち着かせようと、必死になっているようだ。

少女もそれに気づいたのを確認したトップスピードは、口パクだけでこう伝えた。

『がんばれ』と。

少女は、魔女のような格好の人に励まされた事で、落ち着きを取り戻し、泣き止んだ。トップスピードも微笑み、絶対に助け出すと誓った。

しかし……。

「誰だ！そこにいるのはー！」

少女の様子が変わったのを見逃していなかったメア리가、少女の視線を辿り、誰かがいる事に気付いた。

怒声をあげたメアリは華麗にバリケードを乗り越えて、奥に隠れていた人物を確認し、口元をつりあげた。

「あんたか……。ご苦労なこつ」

不意に殺気を背後から感じたメアリは、振り返って手裏剣が向かってきているのに気づいて、トンファアの要領で叩き落とした。僅か数秒間の一手だったが、それだけあれば充分だった。

「ウオオオオオオオオオ！」

客達からは見えない位置の窓から姿を現したリップルが、メアリに飛びかかる。咄嗟に銃口を向けて引き金を引くが、体当たりされた事で軌道がズレて、天井付近に着弾した。

外でどよめきが起きているのが、窓越しに分かった。突然銃声が聞こえてきた事が要因だろう。

「クソ……があー！」

「来い！」

そのままリップルはメアリにしがみついて、近場の鏡に吸い込まれるようにして、ミラーワールドに突入した。

ここまでは作戦通りだった。中に侵入したトップスピードとリップル、どちらか一方に注意が惹きつけられたら、その隙にもう片方がメアリをミラーワールドに連れて行く。ようやく少女が母親のもとに戻っていったのを見て、ホッと安心するトップスピード。

しかしまだ油断はできない。直後に浅倉が厨房から顔を出し、悲鳴が客達の間で飛び交った。騒ぎを聞きつけて戻ってきたのだ。そんな浅倉も、トップスピードの姿を見つけて、ニヤリと笑みを浮かべる。

「魔法少女か……。丁度良い」

次なる獲物を見つけた浅倉が飛びかかる前に、近くの鏡から、3つの人影が姿を見せて、逆に浅倉を押し倒した。龍騎とナイト、そしてライアだった。

「大丈夫!?？」

「お、おう！」

「ここは俺達に任せて、お前はリップルの所へ！」

「け、けどモンスターは!?？」

「向こうは、九尾達が対処してくれている。増援は無用との事だ」

ライアがそう呟くように、3体のモンスター達の足止めは、後から

合流した九尾、スノーホワイト、ラ・ピュセル、ハードゴア・アリスが受け持ってくれているようだ。

「分かった！ そっちは任せたからな！」

「トップスピードも、無理するなよ！」

龍騎に見送られながら、トップスピードもミラーワールドに突入する。そして振り返り、立ち上がる浅倉を睨みつけた。

「浅倉……！ 関係ない人をこれ以上巻き込むな！」

「俺をイラつかせるなあ！ 変身！」

『挿入歌：Revolution』

カードデツキを取り出した浅倉は、王蛇に変身すると、龍騎達に飛びかかった。そして4人はそのままミラーワールドへ。

「戦いは良いなあ……！ ゾクゾクする……！」

ベノサーベルを振り回しながら、ドラグセイバーを持つ龍騎に殴りかかるが、すかさずウィングランサーを突き出したナイトがそれを遮り、エビルウィップを持つライアが王蛇にダメージを与えていく。しかし王蛇も、元からの狂気性を剥き出しにして、3人を相手に回し蹴りを打ち込む。

「日に日に強くなっているな……！ これでもまだ、奴もメアリもモンスターじゃないと言い切れるのか、龍騎！」

「そんなの分かんねえよ……！ けど、こいつらがやつてる事を止めるのが、ライダーと魔法少女の責務だろ！」

『STRIKE VENT』

「ハアアアア……！ ダアアアアアア！」

反撃とばかりに、ドラグクロウを装着した龍騎は、ドラグクロウファイヤーを放ち、王蛇は後方に吹き飛んだ。

尚も立ち上がって首を鳴らす王蛇に向かって、龍騎は叫んだ。

「浅倉……！ 大人しく刑務所に戻れ！」

「どこに行っても……！ 俺をイラつかせる奴らばかりだなあ！」

ミラーワールドに、獣の雄叫びが響き渡る。

その頃、現実世界でも動きが見られた。銃声の後に続いて大きな物音がしたので、警官隊は、強行突入を試みる事に。

煙幕を店内に張り、統制のとれた動きで盾を持った特殊部隊が、先陣を切る。

しかし店内を見回しても、銃を持った女の姿はなく、バリケードの中で縮こまっていた人質しかない。人質の安全を確保した後、店内をくまなく探したが、日暮れになっても、女も浅倉も、その痕跡すら確認する事は出来なかった。

後に、魔法少女や仮面ライダーに関するまとめサイトに、当時の事件に関する書き込みが投稿されており、このような見出しとなっていた。

『レストランで、人形を持った西洋の魔女が、お母さんのように子供を元気付けようとしていた』

123. 母親としての、真の強さ

「ハハハハハハハハハッ！ そおらそらあ！ どこまで耐えられるか、見せてもらおうじゃないかあ！」

「チツ……！」

半壊しかけたビルの一角にて、一方的な銃撃戦が繰り広げられている。カラミティ・メアリの足元には、使い切った銃が何種類も。リップルの足元には、空となった薬莢がいくつも。

人質のいる現場から遠ざける事に成功したものの、脅威は依然として収まる事を知らない。メアリの乱射攻撃に、短刀一本で弾いて耐えてきたリップルも、限界に近づきつつあった。

「（威力も弾数も、前とは桁違いだ……！ 本気で私を殺しに来ているのは間違いないし、私もそのつもりで来たのに、もうこの刀では……！）」

メアリの魔法によって威力が上がっている弾丸を弾く度に、短刀は削れていき、次第に使い物にならなくなる。そうなる前に体制を立て直したいところだが、狂暴性の増したメアリはそんな隙すら与えてくれない。

万事休すか、と思われていたリップルだったが、上空から聞き慣れた声が。

「上に飛べ、リップル！」

リップルが反射的に飛び上がるのと、龍の咆哮と共に炎が降り注いだのはほぼ同時だった。

飛び上がったリップルの右手を掴んだのは、彼女の予想通り、ラピッドスワローに跨ったトップスピード。その右腕にはドラグクローが装着されており、ドラグクローファイヤーが、地上にいるメアリの動きを阻害している。メアリは何事か叫んでいるようだが、2人の耳には入ってくる間も無く、一旦上空に飛び上がって距離を置く事に。

「大丈夫か!?？」

「ああ、何とかな……。そっちはどうなってる」

「レストランの人達は多分無事だ！ 浅倉は正史達に任せだし、契約モンスターの方も、スノーホワイト達に何とかしてもらってるみたいだ」

「間に合ったのか……」

気が抜けないとはいえ、少しばかりホツとするリップル。その様子に、仲間に芽生えた、丸く優しい性格を捉えたトップスピードは笑みを浮かべる。

「？ 何……？」

「いや、別に。それより、こつからどうする？ このまま身を引くって手もあるけど……」

「逃げる事は、しない」

そう、キツパリと言い切るリップルの目線は、現実世界で騒ぎになつていたファミレスに向けられていた。

「このままあいつらを放置してたら、また被害が出る。必要のない犠牲が生まれる。それが分かっているなら……。私は魔法少女として、あいつと同じ魔法少女として、絶対にここで因果を終わらせる」

「リップル……」

「ここから先は、私1人で決着をつける。万が一にも、お前がこの戦いで傷つくような事があつたら、龍騎や昇一さんに顔向けできない。だから」

「ちよい待ち」

待ったをかけるトップスピード。

「確かに姐さん相手に勝ち目があるかは分かんないし、姐さんの破天荒さに憧れてた事もあつた……。普通に考えれば逃げる方が、この場で誰も犠牲になる事なんてないだろうけど……」

それじゃあ、かつこ悪いよな。

そう呟いて、ラピッドスワローを握る手に力を込めるトップスピード。

「上等だ！ ここでダチを残していけるほど、オレも腐っちゃいねえよ！ 姐さんを止めたいのは、オレも同じだしな！」

「トップスピード……」

「中宿の時は言いそびれたけどな！ オレだって魔法少女だ！ オレも大事なもん守る為に、最後まで戦ってやる！」

ここまで言い切ったら、誰も真つ直ぐにひた走る彼女を止める事は出来ないだろう。その事を長い付き合いで理解している彼女は、深く息を吐いて、決意を固める。

「……なら、トップスピードは私が守る！ そして2人で、メア리를倒す！」

「決まりだな！ 正直気乗りしないけど、それで少しでも助かる人がいるんなら！」

トップスピードがそう叫ぶと、ラピッドスワローはその叫びに呼応するかのように変形して、より一層バイクに近い装甲と化した。アクセルを吹かし、ブースターに炎がともると、急発進する。リップルは振り落とされないように、トップスピードの腰にしがみつくと、下方を確認し、いつの間にか屋上に陣取っていたメア리를視界に捉える。

迷う事なく、トップスピードは前進する。対するメアリモ、獲物を見つけて興奮したのか、両手に構えた銃を乱射した。

「罠にも気をつけて、トップスピード！」

「効かねえっての！ こちとら音速飛行にも耐え抜くだけの風防構えてるからな！ 任せとけ！」

彼女が自信ありげにそう叫ぶように、前面を覆っている流線型の風防は、それなりの強度を誇っているらしく、銃弾が当たってもかすり傷程度しかつかない。

風を切るような音と共に、ラピッドスワローに跨る2人は風防に隠れるように姿勢を低くする。あらん限りに引き金を振り絞るが、こちらに向かって一直線に突っ込んでくる事に身の危険を感じたメアリ。しかしその時には、ラピッドスワローは床を抉り、あらゆる機材を巻き上げながら、フロアを横断していた。ミラーワールドで戦っている以上、中に一般人がいる事はまず無いので、躊躇う事なく破壊を選択する。壁を突き抜けて外に出ると、ターンして上空に飛び上がる。

「見たか！ ラピッドスワローの音速飛行！」

そして身体強化によって上がった視力を頼りに、屋上の様子を把握

する。すぐに舌打ちがトップスピードの耳に入ってきた。瓦礫の山と化した屋上の中から、覗き込むような姿勢のメアリを捉えた。ギリギリのところまで回避したようだ。

こちらを睨みつける視線からは、闇よりも黒く、密度の高い、ドロドロと粘り気の強い殺気を感じさせる。リップルでさえ、ゴクリを息を呑んでしまう。

「ゲッ、まだ生きてやがる……!」

「そうだね……。さすがに、ここまでしぶとく生き残るだけはあるのかもな……」

「よおし! もっぺん行くぞコラ! しっかり掴まっとけ!」

再度ブースターに再点火し、突撃するトップスピード。

ハツと身を強張らせるリップル。その理由は、メアリの不敵な笑みにあつた。今までと何か様子が違う。この感覚は、中宿での戦闘で地雷を踏んでしまった時と同じだ。

よく見ると、メアリの手に握られている銃は拳銃でもなければ、自動小銃でもない、いわば狙撃銃のようなものに代わっている。銃身だけでも1m以上はありそうだ。

「そんな鉄砲玉、弾いてやん」

「避ける!」

唇を歪ませるメアリを見て、リップルは反射的に前へと身を乗り出し、トップスピードのトンがり帽子やその中身を掴んで、全身の力と体重を乗せて押し倒す。ラピッドスワローの軌道が急激に折れて目標からズレると同時に、一際大きな破裂音がすぐ近くで鳴り響いた。だが、その音の正体を確かめる間も無く、制御不能となったラピッドスワローは2人を乗せたまま落下し、地上の倉庫らしき建物の屋上を突き破って着地した。

砕けた天井の破片がパラパラと舞い落ち、細かな粒子は煙状になってたなびいている。

「なーにしゃがんだよ! 急に押し倒して!」

当然運転を邪魔されたトップスピードは腰をさすりながら、さも当然の権利とばかりに怒鳴るが、同じく腰を痛めたリップルはそれを無

視して、そばに転がっているラピッドスワローを指差す。

「これ、見て」

「あん？」

リップルに言われてラピッドスワローに目をやったトップスピードは、そこで目を見開く事に。

風防の上部がよじれ、吹き飛んでいたのだ。無数の弾丸を受け止め、音を置き去りにする程の速度を叩き出してコンクリートにぶつかっても、ほとんど傷つかなかった盾が、無残に破壊されているではないか。

「何だこれ!?!?」

「さっきの弾丸が掠った……」

トップスピードには見えていなかったが、メアリの狙撃銃から放たれた弾丸は、確かに風防を破壊していたのだ。リップルがとつきに軌道を変えた事で、上部を掠めるだけにとどまったのだが、直撃していれば、中の2人ごと貫通していた事になる。

「おいおい……! 音速にも耐えられる風防だぞ……。さつきまで全然通用してなかったのに、一体……」

「銃の種類が違ってた。多分、瓦礫の中でどさくさに紛れて持ち替えたんだと思う。まともに当たってたら、木っ端微塵だった」

「クソつたれ……! こうなったら、もっぺん行くぞ!」

服の汚れを払い、とんがり帽子を被り直しながら、忌々しげにメアリがいるであろう屋上を睨みつけるが、すかさずリップルが呼び止めた。

「待つて。また正面から突っ込めば確実に撃たれて死ぬ……」

「じゃあどーすんだよ!?!? オレは真正面からぶち当たる以外の事は、出来ねえからな!」

トップスピードの言う通り、ラピッドスワローによる攻撃は直線的なものにならざるを得なくなる。この他にも、パートナーシステムによる武器の恩恵もあるが、決め手に欠けるのだ。ドラグセイバーは言わずもがな近接武器である為、どちらにしても正面から攻撃を仕掛けるしかない。唯一の中距離攻撃手段であるドラグクローも、先程使用

してしまつた為、再使用には時間を要する。リップルの武器も、豊富とはいへ威力が劣る為、やはり決め手に欠けてしまう。

「私も、それしか無理」

「だったら……！」

「……でも」

「でも？」

正面からの攻撃ではすぐに対処される事は、これまでの戦闘で身に染みている。生き残つたのは本当に運が良かっただけだ。だが時間をかけてはいられない。ミラーワールドでの活動時間には限度もあるし、これを逃せば、また被害が出てしまう。それを見越した上で、メアリを倒すには……。

リップルは辺りを見渡し、そして最後にトップスピードに目を向ける。

「次は……」

「次は？」

「……やっぱり、正面から行く。そして勝つ。その為に、生き残る為に、これを使う」

フツと笑みを浮かべ、リップルは懐からマジカルフォンを取り出す。その言動の意味を何となく理解したトップスピードは、同じく笑みを浮かべ、マジカルフォンを取り出した。

「全く、ムカつくぐらい良い反応してくれるね、お嬢ちゃんは……。さて、次はどう来る……?」

下界を見下ろしても2人の姿を確認できなかったメアリは、鼻で笑いながら、目線を手に持つ武器『KSVKアンチマテリアルライフル』に向ける。

メアリの魔法は、武器に魔法の力を宿すものであり、ゼロから武器を作り出せるものではない。よって奈緒子が魔法少女となって最初に取り掛かったのは、元となる武器を用意する事だった。

これまでメアリが使ってきた武器は全てロシア、もしくは旧ソ連製であり、西部開拓史時代のガンマンをモチーフとした自分に相応しい銃かと問われれば、疑問に思うところだ。メアリ自身、出来る事なら全てアメリカ製で揃えたかったのだが、近代都市のようなN市を介しても、中米の麻薬密売組織経由で手に入れた武器の数々は、横流し元がそれなりに偏っているのだ。それでも今となっては愛い奴らとして、重宝させてもらっている。

「フフツ。こいつの一撃は掠めるに留まったけど、あの2人は相当精神的にダメージを負ったはずだ」

そう呟きながら、マズルブレーキに舌を這わせる。鉄の味がした。「(こいつにビビったあの2人は、真正面から策もなく突撃する事はないだろうしな。そうになると、1対1で勝てないと分かった今、数の有利を頼りにし、二手に分かれてくる)」

相手の動きが分かるなら、対処も簡単だ。だがその為にも、場所を変える必要がある。見晴らしの良い屋上でそのまま戦っても良いのだが、制空権のあるトップスピードを相手にするのは厄介だ。幸い、激レアアイテム『四次元袋』のお陰で、武器弾薬共に不足はない。KSVKに頼らずとも、適応した武器で確実に2人を仕留める。

そう決めたメアリは、地上を確認して、目に付いた建物の屋上を銃で破壊すると、その穴目がけて飛び降りた。魔法少女である今なら、高い所から飛び降りてもダメージにはならない。

そうして降り立ったメアリは、周りを確認する。聖マリア像が彫ら

れたステンドグラスに教壇。そして十字架のモニュメント。どうやらここは教会のようだ。天井に穴が空いたが、地上からなら、入り口は一つしかない。

「おあつらえ向きだ……！ リップルとトップスピード、ここをお前達の墓場にしてやるよ……！」

不敵な笑みを浮かべながら、四次元袋に手を入れるメアリ。

2人は今でもKSVKの威力に震えて、攻めあぐねている頃だろう。その時間を最大限に活用し、左右の壁や後方のステンドグラスに、地雷やグレネードなど、可能な限りの罠を仕掛けた。

「これで良い……。左右は壁に阻まれた直線的な構造だ。攻撃は頭上か正面に絞れる。2方向で来るとしたら、上は絶対にトップスピード、正面はリップル……！」

各魔法少女の対処法はシンプルだ。

上から来るトップスピードには、飛び道具がないので、お得意の早撃ちで瞬殺できる。

正面から来るリップルには注意を払えば、先程のKSVKで木っ端微塵にする事など容易い。

万が一壁を破って来たとしても、罠によるダメージで怯んだところに銃弾を浴びせれば良い。

何度も脳内シミュレーションを繰り返し、勝利を確信していく。1番困るのは、時間だけが過ぎて、ミラーワールドから出てしまう事だった。そうなった時は、また現実世界にいる弱者を盾に誘き寄せれば良い。どんな手を使っても、少なくともリップルの死体だけはこの目に焼き付けておきたい。

しかし、その心配も懸念だったようだ。一つしかない正面入り口から、音と共に何かが迫って来ているのを、全方向に神経を研ぎ澄ませていたメアリは捉えた。

いよいよ、決着がつく。

「挿入歌：Revolution」

準備万端とばかりに機関銃の銃口を入り口に向けるメアリだったが、瞬時に困惑の表情を浮かべた。

「何だありや？ 壁が、走ってくる……!!?）」

視界に捉えたのは、人の形をしておらず、文字通り壁の形をした物体が入り口を突き破って突進してきたのだ。

「バカか!?? 2人同時に来るとはね！ 盾か何かのつもりか知らないけど、苦肉の策にも程がある！」

そうして引き金を引き、フルオートで銃弾の嵐を浴びせるが、一向に形が崩れる気配がない。思っていた以上に硬い。ただの壁ではなさそうさ。

壁の正体は、倉庫や百貨店の設備でよく見かける、防火扉だった。なるほど確かにコンクリートの壁よりかは頑丈だろうし、魔法少女でなら軽々と持ち運ぶ事も出来るだろう。なるべく硬くて頑丈な防火扉を、盾か遮蔽物として利用し、距離を詰めた所で、こちらが引き金を引く前に近接武器でトドメを刺す。そういう算段なのだろう。

「だったらこいつでぶち抜くだけだ！」

対してメアリは舌打ちをしてから、機関銃を捨てて、足元に置いてあったK S V Kに持ち替える。いくら頑丈な防火扉だろうと、狙撃銃の中でも指折りクラスのK S V Kを使えば、ラピッドスワローの風防のように弾け飛ぶ。そしてその威力は、標的と銃口の距離が近ければ近いほど、大きくなるものだ。

「目一杯引きつけて……、後ろにいるお嬢ちゃん達もろとも吹き飛ばしてやる……!」

防火扉は勢いを衰える事なく直進している。この強度ならメアリを打ち負かせられると、本気で思っているのだろう。

「(そうやってすぐに思い上がるのが、ガキのダメな所なんだよ！ 思い知らせてやるよ、このクソツたれな世界に生き残れるのは、圧倒的な力のある奴だけだったことをなあ!)」

遂にこの瞬間がやってきた。涎が滴り落ちそうさ。

「さあ来い！ そして、死ねええええええ！」

引き金を引いた瞬間には、もう着弾していた。回避など、出来るはずもない。防火扉は爆ぜ、破片になってバラバラと落ちていった。カラムティ・メアリの表情に喜びが広がり、そして……。

「……アツ？」

歪んだ。

喜んだからではない。不可解な状況を目の当たりにして、顔を歪ませている。

防火扉は確かに爆ぜて、カーペットの敷かれた地面に横たわっている。しかし……。

「(血の匂いも、飛び散る臓物もない……！ 死体が、無い……！)」

そこには、死体はおろか、ラピッドスワローの残骸さえない。

どこへ行った。辺りを探す間も無く、肌を刺すような殺気を感じた。正面でもなく、左右の壁でも、真後ろのステンドグラスでもない。

「！ 上か！」

感じた殺気に従い、真上を見上げるメアリ。トレカフに抜き替えようとするとメアリだが、すぐに訝しんだ。

穴の空いた天井には、夜空が広がっていた。時期的にも日の入りが早い事から、月や星が見えても、何ら不思議ではなかった。

「(……星?)」

ちよつと待て、と冷静になるメアリ。田舎ならまだしも、街中でもないにも星が輝いている光景など、見た事もない。しかもその星は、段々ところらに落ちてきている。

あれは、星ではない。こちらに向かつて飛来する無数の……手裏剣、でもない。幾ら何でも多すぎる。月光に照らされてキラキラと輝いているそれは、手裏剣ではなく……。

「大量のガラス片だと……!? クソどもが……！」

ミラーワールドだろうが、現実世界だろうが、辺りを見渡せばどこでも手に入れられる武器が、こちらに向かつて的確に降り注いでいる。

刹那、メアリは思い出した。初めてリップルとやりあったあの日、彼女は自分に向けて多量の手裏剣を投げつけて戦っていた。しかもその軌道は、不自然な動きで確実にこちらに向かっていた。あの時ががむしやらに撃ち落としていたが、今にして思えば、あれも魔法の類なのだろう。

彼女の魔法は、『手裏剣を投げれば百発百中だよ』。だがその『百発百中』は、手裏剣に限った事ではない。応用すれば、手にしたものなら、投げつけければ標的めがけて確実に向かっていく。例えばそれが、巨大な防火扉であったとしても。

それを自覚していたリップルは、防火扉を投げつけて、メアリの注意を上空から逸らす。そうして欺いている間に、空中に飛び、ガラス片を投げつけてダメージを与える。ガラス片であれば、いくらメアリが銃で乱射して砕こうとしても、分裂してより一層手数が増えるだけ。それらが全身に突き刺されれば、例えば魔法少女といえど、致命傷は避けられない。

「……でもお、思ってたかよおおおおおおお！ ベノスネーカーアアアアアアアアアアアアアアアア！」

しかし、メアリは笑みを崩さなかった。背後のステンドグラスから飛び出してきたのは、パートナーの契約モンスターである、ベノスネーカー。とぐろを巻くように素早くメアリの全身を覆い、ガラス片は全てベノスネーカーの全身に突き刺さった。ベノスネーカーの悲鳴が轟くが、モンスター相手に、ガラス片によるダメージはかすり傷程度のようなだ。そうして役目を果たしてステンドグラスに戻っていくベノスネーカー。その間に、本来ならダメージを受けるはずだったメアリがK S V Kを構えて、上空に見える人影に狙いを定める。

「今度こそ……！」

再度引き金が引かれた。魔法少女の反射神経を弾速が凌駕している。

箒のような物体から、人影が落下したのを確認した。運転している人影までは落とせなかったが、ガラス片を投げたであろう張本人は、確かに頭から落下している。

今度こそ、喜悦に満ちた表情を浮かべるメアリ。この生き残りをかけたゲームに乗じて、因縁の対決に、決着がついた。自然と高笑いが教会内に響き渡る。

「……アツ？」

しかしその表情も、落下する人影が空中でガラスのように砕け散つ

たのを目撃した途端、消え失せてしまった。

背後に何かが降り立ったと気づき、振り返る間も無く、お腹周りに熱を感じた。眼前に、赤黒い液体が噴き上がり、目の前の地面を赤く染めていく。力が抜けていくのを感じた。

下に目をやると、鋭く尖った剣のようなものが、腹から突き出ている。不健康そうな液体が剣から滴り落ちている。振り返るまでもなく、背後に立つ人物の名を、恨めしそうに呟く。

「リッ、プル……！ テメエ……！」

「不本意だが、対人戦に長けたお前をナメなくて良かったと思ってる。お前なら、あの二段構えの攻撃ぐらい、どうにかすると思っていたからな」

「さつき、あたしが仕留めた、奴は……！」

「分身だ。私はずっと、気づかれないように屋上で機会を伺っていただけだ」

薄紫色の忍者服に身を包んだりリップルサバイブは、メアリの体を貫くダークバイザーツバイを握る手を緩める事なく、淡々と呟く。

防火扉を投げつけたリップルサバイブは、パートナーシステムの恩恵によって得た『シャドーイリユージョン』を駆使して、分身にガラス片を持たせて、トップスピードサバイブと共に上空から攻撃を仕掛ける。しかしメアリならその対策を練っていてもおかしくない。更なる奥の手と称して、別行動で屋上に先回りして、隙を見て背後から奇襲を仕掛けたのだ。

「サバイブの恩恵があつたとはいえ、あんな重い扉を投げるのは、もうこりこりだけだ」

そう愚痴りながら、深々とダークバイザーツバイを突き刺していくリップル。勢いに押されて膝をつくメアリ。急所を外している為、油断は出来ない。それでも、忍者相手に背中を見せたのが運の尽きだな、と思いつつ、トドメを刺そうとする。

「……すな」

「……！」

「あ た し を お、 そ ん な 風 に、 見 下 る す

なああああああああああああああああああああああああああああああああ
！」

魔法のガンマン、カラミティ・メアリに逆らうな、煩わせるな、ム
かつさせるな。

そんな怨念のこもった殺気が、リップルの全身を貫く。メアリの右
腕には、四次元袋から取り出された拳銃が握られている。その銃口は
メアリの胸元を貫く形で、リップルの顔面に向けられている。そのま
ま引き金を引けば、魔法によって威力が増した一撃が、メアリの体に
穴を開け、同時にリップルの頭が破裂したスイカのように弾け飛ぶ。
一瞬怯んでしまったリップルの足は動いていない。

メアリの目に迷いはない。リップルを確実に葬る為ならば、自己犠
牲をも選ぶ。血を滴らせながら、メアリは勝ち誇ったような笑みを浮
かべる。

「……………」

め

ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！」

叫び声が聞こえてきたが、メアリにはどうでもいい事だった。この
引き金を引いて、リップルを道連れにする。それで、全てが完結する
はずだった。

「…………ガハッ?？」

今度は正面から痛みが全身を貫いた。目の前に、星のマークがつい
たとんがりハットを被り、首からお守りをぶら下げている魔法少女が
見えた。その手にはドラグブレードが握られており、剣先が右手の甲
を貫通し、胸元に届いていた。右手に力が入らなくなり、右人差し指
が、引き金から離れた。拳銃が半壊した地面に音を立てて横たわる。

「お、前……………」

吐血し、意識が薄れていく中、目の前の魔法少女は、目元がとんがり
ハットのつばで隠れて見えなかったが、自分の胸に突き刺さってい
るドラグブレードを握る腕は震えており、微かに「ゴメン、姐さん……
！」と聞こえた。

そして同時にドラグブレードとダークバイザーツバイが引き抜か

れ、体から流れ出た赤黒い液体が、地面に流れ落ち、前のめりに倒れこむ。

「姐さん！」

目の前にいたトップスピードサバイブが、彼女の体を支える。

「情けの、つもり、か……！ あたしは、そういうのが、1番、気に食わなくて……！」

「分かってる！ けどよ……！ もう、姐さんを止めるには、こうするしか、無くて……！ ホントに、ゴメン……！」

なぜ、彼女にとって敵であつた自分の為に涙を流すのか、メアリは一向に理解できない。ならば相手はどうなのか。顔だけを振り向かせると、その表情はもの哀しさを感じさせた。見下されているのか定かではないが、最早怒りを露わにするだけの余力は残っていないかつた。

最後に、話がしたい。

そう言ってトップスピードサバイブは、リップルサバイブに手伝ってもらおう形で満身創痍のメア리를支えつつ、ステンドグラスを通つて

ミラーワールドから現実世界へと帰還した。

何一つ壊れていない教会に足を踏み入れたところで、メアリの体が光り、豊満なビキニ姿からは想像もつかないような、くたびれた歳上の女性へと変貌した。これが、あの無法者として恐れられてきた魔法少女『カラミティ・メアリ』の、人間としての本来の姿なのだと、誰が予想できただろうか。さすがの2人も僅かに目を見開く。

傷口に触れないように気をつけながら、2人は奈緒子を長椅子に座らせる。

「……何の、つもりだい。あたしを見せしめにして、嘲笑おうつてのかい」

「そんなわけないだろ姐さん。ちよつと、聞きたい事があつたんだよ」

「……何を」

「姐さんは、何でリップルをそんなに嫌うんだよ……？ そりやあこれまで魔法少女として因縁つけられてたのは見てたけど、あんな事してまで、リップルに手を出す理由なんて、あつたのか……？」

まるで純粹な子供から問いかけられているような疑問。笑って無視してやろうかとも思ったが、トップスピードサバイブの真剣な眼差しを前に、つい黙り込み、そして吐露する。

「……あたしにも、いたよ。子供も、夫も。いわゆる、普通の家庭つてやつを、確かに持っていた。貧しくはあつたけどね。それでもまあ、最初のうちは上手くやってこれたと、思ってる」

それを聞いて、2人の目つきが変わった。それは2人にとって関わりのあるようなワードだったからだ。

「けど、あたしは、強さを追い求めるうちに、自分の弱さを知って、隠したくて、それでも毎日を楽しむ為に、酒に手を出して。……遂には、娘にも手を出すようになってたよ。それが、魔法少女になる前の、ストレス解消法だったから、ね」

再び咳き込み、血を垂らす奈緒子。トップスピードサバイブは自分でも気づかぬまま、拳を握っていた。娘を虐待した、という事実を目の当たりにして、複雑な心境なのだろう。

「……だから、だろうね。リップルや他にも魔法少女や仮面ライダー

になったガキを見ると、昔の自分を思い出して、腹わたが煮えくり返って、イライラが収まらなくなって……。まあ、龍騎の事も似たようなもんさ。良い子ぶって力を振るっているあいつが、ガキみたいで気に食わなくてな……」

「誰かを守る為に、変身する……か」

いつの日か、後にチームを組んで戦うようになった仮面ライダーの言葉を、自然と口にするリップルサバイブ。そして天井を見上げながら、昔を懐かしむように語り始める。

「……最初にお前と戦った時、私はこう問われたな。『どうして力を恐れる？ お前も無意識に力を求めて魔法少女になったんじゃないか？』と。……今なら答える事が、出来ると思う」

「……」

「……そうだ。確かに私は期待した。私が私らしくいられる、存在理由が欲しかった。魔法少女になれた時、子供の頃に観た、アニメに出てくる魔法少女のように、誰かに頼られるような魔法を使えたら、お前と同じように、暴力の中でしか生きられなかった自分が救われる事を、密かに望んでいた」

だが、現実残酷だった。

「私の魔法は、投げたものを必ず必中させるもの。誰かを幸せに出来る力ではない。そしてそれは、自分自身さえも、幸せには出来ない魔法だ……。そんな力を振るう事に意味があるのか、ずっと疑問だった。モンスター退治も、1人ではろくに出来なかった私を必要としてくれる人なんて、いないと思っていた」

でも……。と、天井から視線を横に向ける。青ざめつつある奈緒子と、真剣に見つめるトップスピードサバイブの顔が見えてきた。

「ナイトと出会って、トップスピードと出会って、龍騎と出会って、そして……。あのスノーホワイトと出会えて、九尾や他の仲間が増えていって、……。やっと、力を手にした意味が、分かった気がした」

自分の手のひらの中にある手裏剣を見つめ、懐にしまいながら、リップルサバイブは語る。

「さつきも言ったが、私もお前も、暴力の中でしか生きられなかった。

昔の私とよく似てるんだ。……ただ一つ、トップスピード達の存在があった事が、今の私を作った」

「……」

「お前のやってきた事を許す事は、金輪際ない。……でも、お前と魔法少女として出会えた事は、間違っていないと思っっている。こうして自分を見つめ直して、やっと自分らしく戦える方法を、見つけられるようになったから」

「……そう、かい」

ただ一言、そう呟いただけだが、奈緒子は自然と、忌々しく思っていた少女の生き様を悟ったような気がした。

と、今度はトップスピードサバイブが口を開く事に。

「……姐さんにも、色々あったんだな。オレが自然と憧れを抱くようになったのも、頷けるな」

「……？」

「姐さんは、オレにとっての人生の先輩になってたかもしれないって事だ」

そう言ってマジカルフォンを操作すると、光に包まれて、室田つばめの全身が露わになる。当然、奈緒子の視線はその膨れた腹に向けられる。

「！ お前……」

「そうさ。オレももうじき、母親になるって訳。姐さんの事をもっと知ってたら、それはそれでアドバイスとかもらえたかもな」

「つばめ……」

「もちろん、子供絡みの事だけじゃないぞ。元暴走族のリーダーとして、姐さんの姿に、惹かれる部分もあったよ。……まあ、あそこまで無法者だって知った時は極力関わらないようにしてたんだけどな」

ハハハ、と笑いながら、段々と冷たくなりつつある奈緒子の右手に、そつと自分の左手を乗せる。その流れで、リップルサバイブも変身を解き、細波 華乃となる。

対する奈緒子も、苦笑まじりに呟く。

「……なら、あたしの後を、追いかけてなくて、正解だったな。あたし

じや、母親らしい事なんて、何も学ばなかった、だろうよ」

「まあ、な……。虐待つてのはちよいと頂けねえな。少なくとも、オレは自分の子供をそんな不幸な目に遭わせたくないし。……。けど、姐さんがちゃんとして今でも母親やつてるのは、ちよつと嬉しいかも」

「？ どういう、意味だい……。あたしはもう、気にしてないし、向こうだつて」

「その娘さんの事を、ちゃんと口にして出してらつて事だよ。本当に気にしてなかったら、今だつてその事話してないだろ？ だから、姐さんにもまだ、母親としての情は残つてるつて、分かるんだ」

「何を、根拠に……」

「さあね。オレの勘がそう言つてる。けど、ナイトとかはあんたや浅倉をモンスターつて呼んでたけど、オレはそう思わねえよ。例えそれが、娘さんを虐めた奴でも、前の旦那を殺した奴でも。……。心があるうちは、人間だつて、オレも龍騎も、そう思つてる」

「前の、旦那を……。そう、だったのか」

つばめの腹を見て、そう呟く奈緒子。

「だからさ、姐さん。こんな状況で今更かもだけど、自分のしでかした罪を、認めてもいいんじゃないか？ 今ならきつと、赦してくれるかも、だぜ。そうしたら、オレも華乃も、姐さんの分まで頑張れると思うから」

「……ツクツクツク。アツハツハ！」

不意に傷口が広がるにもかかわらず、笑い声をあげる奈緒子。そして次第に、その瞳に水滴が流れる。

「散々周りを苦しめてきたあたしが、今更赦されると？ そんな都合よく、世界が出来てるとは、思えないけどねえ……！」

それでも……。と奈緒子はステンドグラスと共に映る聖マリア像に目を向けて、弱々しく口を開く。

「……自分の弱さを、最初から知ってたなら、色々と、変わつてた、かもねえ……」

「お前……」

「……だと、しても。この、クソつたれな世界が、変わるなんて、あり

えない。……結局は、その中で力を、どう使うか。それで全部、決まってくる気が、今ならするよ」

そうして奈緒子は、意識を朦朧とさせながらも、懐から、小さな袋を取り出し、華乃の手元に突き出す。

「！それは」

「あんたは、力の使い方を、今でも探してるんだっただな……。なら、こいつを、くれてやる……。精々そいつを、使つて、このクソつたれな世界を、もつとよく、見てみる、んだな……」

「……」

華乃は無言のまま、四次元袋を手取る。くれると言うのなら、断る理由はない。

「……らしく、ない事したけど。……最後ぐらい、人間らしい、事するのも、まあ、悪くない、か、ね……」

そうして段々と目が細くなり始める奈緒子。口元ではボソボソと何かを呟いているようだが、2人にはその言葉は聞き取れない。

そして何かを言い切った直後、糸が切れたようにダラリと首を沈ませ、そして二度と動く事はなかった。

「えっ……?」

「どうした?」

「う、ううん。何でもない、けど……?」

「けど?」

「分かんないけど、ごめんなさいって、言われたような気がしてね?」

「……?」

「聞いた事がある声だったような……。ひよっとして……」

「ハハハ。まさか、あの女が言うわけないだろ。もうあの人の事は忘れても良いって、お父さんいつも言ってるだろ?」

「う、うん……」

「お互い、色々大変だったけど、これからはうんと幸せな人生を歩めるようにしてやるからな」

「うん!」

「じゃあ折角の給料日だからな。お前の好きなものでも食べに行くか!」

「うん! お父さん大好き!」

正史達が教会に足を運んだのは、それから30分後の事だった。浅倉も撤退し、別行動を取っていた大地達とも合流し、一同は反応を辿って、つばめや華乃がいるであろうその場所を訪れたのだ。

扉を開けて彼らの目に飛び込んできたのは、つばめと華乃に挟まれる形でぐったりと座り込む、30代後半の女性だった。血は既に止まっており、顔も青白い。その表情からは、絶望や怒り、悲しみと言ったものは見えてこなかったが、少なくとも、憑き物は落ちているように感じられた……。

後に、つばめは語る。

『姐さんは、人間だ。オレと華乃は、そう思ってる』

《中間報告 その16》

【カラミティ・メアリ（山元 奈緒子）、死亡】

【残り、魔法少女7名、仮面ライダー6名、計13名】

124. 雨中の決闘

「……っ！」

「スノーホワイト……？」

懐にしまつてあつたマジカルフォンから着信音が鳴り、スノーホワイトは文面を見る事なく、顔をひきつらせる。龍騎が顔を覗き込もうとする中、もしやとは思いつつ、手に取ってメッセージを確認する。もう何十回も見慣れた文言だった。

『ルーラを返して』

送ってきた相手は言わずもがな。毎晩、必ず一回はこの一言を目に通すようになり、その度にまた偏頭痛に苛まれる。鉄塔の上で腰を下ろしていた他の面々も、スノーホワイトの表情を見て察しているようだ。

「また、スイムスイムから……？」

「……はい」

「ここまで執拗に返却を求めてくるなんて……！」

悪態をつくラ・ピュセル。そしてそれは周りの面々も似たような心情に違いない。こんな事が続けば、スノーホワイトはノイローゼに陥つてもおかしくない。どうにかして打開策を見つけなければ。考え込むスノーホワイトだが、真正面から出向いても、勝ち目がない事は彼女とて周知している。そもそも、この案件を受理すれば、また新たな犠牲が出るかもしれない。それだけは絶対に避けたい一心だった。しかしこのまま無視し続けても、事態は悪化の一途を辿る。俯きながらマジカルフォンをしまおうとしたその時、手すりに乗っていた彼女が目の前に降り立った。

「それ、貸して」

「えっ？ リップルさん？」

スノーホワイトが戸惑う間にも、隙ありとばかりに彼女のマジカルフォンをひったくったリップルは、自身のマジカルフォンを片手に持つと、スノーホワイトに背を向ける形で、指を忙しく動かし始めた。

皆の視線が集まる中、数十秒後にはスノーホワイトに向き直り、マ

ジカルフオンを元の持ち主に投げ渡した。

「今、何を……？」

「スィムスィムが持ってた武器を、私のマジカルフオンに転送しておいた。あなたがこれを持っている限り、あいつに狙われ続ける。戦闘向きじゃないあなたでは、奪われるリスクが高い。なら、裏をかいて私が持っていれば、スノーホワイトを狙う理由もないし、情報を攪乱させられる」

「でも、それじゃあ今度はリップルさんが……！」

「私はあなたと違って、こういった荒事に慣れている。そう簡単には奪られない自信はある」

「そ、それは……！」

「……これはもう、スノーホワイトだけが抱え込む問題じゃない。私にも、ここにいるみんなと同様に、あなたを守る理由がある。魔法少女として、あなたを守らせてほしい」

「リップルさん……！」

「……もつとも、今の私は、ただの人殺しかもしれないけど」

冗談めいたように呟いた後は、背を向けて話しかける様子もなくなった。スノーホワイトも思わず黙り込んでしまう。胸が苦しくなるのがハッキリと感じる。またリップルに迷惑をかけてしまう。その事が、心優しき魔法少女の胸の奥を締め付ける。

そんな中、トップスピードとハードゴア・アリス、そしてナイトは目を細めているリップルをジッと見つめていた。

一夜明け、いつもより遅めに起きた華乃は、窓の外に目をやった。今日は朝から生憎の空模様だ。まだ雨は降っていないようだが、約束の時間になる頃には激しくなるだろう。

そして窓から目を離し、テーブルに置かれてあったものを手に取る。先日倒したカラミティ・メアリが購入した激レアアイテム『四次元袋』だ。トツプスピードと共に彼女を倒した後、手渡されたものだ。あれから中を確認して、メアリ特製の武器が多数収納されている事も知っている。

「……無いよりは、マシか」

これから自分がする事を考えれば、このアイテムも宝の持ち腐れにはならないだろう。舌打ちをして、1つしかない私服に着替え始める。

『リップル、リップル。ようやくお目覚めほん?』

不意に、側に置いてあったマジカルフォンからファヴが現れたが、彼女は驚かなかった。挨拶をする代わりに、質問を投げかける。

「連絡ついた……?」

『ついたほん。予定通り、項島台ダムで待ってるそうだほん』

「……そうか」

それだけ呟くと、電源を切り、軽く朝食を口にしてから、一息入れて、玄関の扉を開けた。傘は手にしなかった。

時折、遠くの方からゴロゴロと音が鳴っている。これから向かう先の方角だ。華乃は臆する事なく、前進する。この程度で疎んでいては、魔法少女失格だ。また一息を吐いて、雨雲を見上げる。

「ようー。元気ねえな! ちゃんと朝食食ってきたか?」

不意に声をかけられてハツとなった華乃は、顔を横に向ける。そこには予想通りの人物が、手提げ袋と傘を持って立っていた。最初に見た時よりも、お腹は随分と膨れていた。もう臨月に入っていたんだっけ、と思いつ返す華乃。

「……つばめか。買い物にでも行くつもりだったのか?」

「まあね！ 今日のかぼちやが安売りしてるらしくてさ！ 乗らない手はないだろ？」

「……お前らしいな」

「んで、華乃は……」

「ちよつと用事が出来ただけ。無理に付き合う必要はないから」

そう言つて立ち去ろうとする華乃だが、つばめの表情がとても不意に険しくなる。

「……スイムスイムを、自分の手で倒そうって腹か」

ピタツと足を止める華乃。何故バレたのか、と言わんばかりの表情だ。対するつばめは苦笑していた。

「おいおい。もう何ヶ月もチーム組んでた仲だろ？ お前のやろうとしてる事はお見通しだぞ。スノーホワイトがスイムスイムに狙われる前に、決着をつけようとしてる事ぐらい、昨日のお前を見てればすぐに分かったよ」

「……なら、邪魔しないで。これは、私の戦いだ。今回ばかりは、お前を連れていけない」

そう吐き捨てて背を向ける華乃。つばめはため息をついて、再び口を開く。

「……戦うだけが魔法少女じゃない。リップルだつて、それくらい分かかってるだろ？ 何でそうまでして、スイムスイムと決着つけようつて急ぐんだ？」

「仇、だから」

「んっ？」

「あいつは、トップスピードを泣かせた。お前の友を2人も殺した。あいつを放っておけば、また必要のない悲しみが生まれる。だったら……」

そうなる前に、息の根を止める。

その部分を強調する華乃の拳は強く握られていた。

犬耳の魔法少女、たまは最期に、トップスピードを庇った。そしてその亡骸を家に送り届けた後、トップスピードは声を張り上げて、夜空に響くぐらいに泣き叫んだ。どれ程の悔しさが滲み出ていたか、隣

に寄り添っていたりリップルは理解できてしまった。彼女としては、たまの死に対して深い喪失感は無かった。大切な人の命を守ってくれた事には感謝しているが、そこまでの評価だった。だが、トップスピードは違う。トップスピードの悲しむ姿をこれ以上見たくない。その為には、危険因子は速やかに排除する必要がある。

そう決意した華乃は、今日これから、目的を果たす為に進むと決めた。もう、後戻りは出来ない。

「たまとルーラの敵討ちってわけか。……つたく、オレが望んでるわけでもねえのに。よくやるよ」

「……」

「ダメだって言っつて、はいそうですか、って答えるリップルさんじゃねえしな。……けど、オレは知ってるぜ。お前は誰よりも優しい奴だつて事を」

「ハアツ？」

「出来れば、早まった事はして欲しくないけどさ。……こないだ、姐さんとやりあつたばつかりだし、オレも大きな事は言えないからな」

「けど、あれは……!」

「お前だけに全部背負わせねえよ。オレも償うつもりで、あの場に立つたんだ」

カラミティ・メアりに、『母親』としての先輩をその手で刺した事を思い返しながら、つばめは自身の手のひらを見つめる。

立ち止まる華乃。そんな彼女に向けて、つばめは手提げ袋から取り出した、あるものを投げつけた。反射的に受け取った華乃が目にしたものは、トップスピードが愛用している『御意見無用』と刺繍が施されているマントだった。

「それ、持ってきたよ。風邪ひかないようにな」

「お前……」

「お前の頑固さはオレもよく知ってるからな。今のお前を見ると、止められる気がしなくてさ。一応お守り代わりに、な」

「……」

華乃は礼を言う事なく、マントを器用に畳んだ。それから再び歩き

出そうとして、背中越しに声をかけられた。

「今晚は煮付けも沢山作れそうだし、腹を空かして待つてろよ！ お前が戻ってくるまで待つといてやるからさ。……絶対に、死ぬんじやねえぞ」

「元からそのつもりだ」

それだけ告げると、華乃は小走りにその場を立ち去った。その後ろ姿を、つばめが不安げに見つめている事に気付かずに。

つばめの視線がなくなった事を確かめた華乃が、目の前に見える小さなトンネルに差し掛かろうとする。そして気づいた。顔見知りか2人、トンネルの前で立っている事に。止めるように説得でもするつもりなのか。そう思って無視しようと、小走りになる華乃だったが……。

「……私も、ついて行って、よろしい、ですか？」

「小雪さんを、悲しませたくないから……。だから私にも、戦う理由が、あります」

華乃よりも小柄な少女……亜子は決意の眼差しを向けている。彼女も、目的は同じらしく、同行を求めている。

「どのみち、奴を倒さなければ生き残れない。スイムスイムを討つのなら、俺も戦うつもりだ。お前だけでは、荷が重そうだし、弱点も見つかっていない。なら、人数は多いに越した事はないはずだ」

パートナーである蓮二も、ぶっきらぼうにそう呟く。極力1人で決着をつけたいと思っていた華乃だったが、蓮二の言う事も一理ある。具体的な弱点が見つからないまま戦っても、勝機は見えてこないかもしれない。

少しだけ考え込む仕草を見た後、舌打ちをして、口を開いた。

「……場所はこの先にあるダムだ。ついてくるなら、勝手にしろ。2人の分まで守りきれぬ保証はないけどな」

「覚悟は、出来てます」

「俺は最初からそのつもりだ」

2人の決意は固かった。華乃は返事をする事なく、2人の間に立

つ。そして、華乃と亜子はマジカルフォンを、蓮二はカードデッキを取り出す。

「変身（一）二」

少女の体は光に、青年の体は鏡像に包まれ、その身を変貌させた。そして一気に跳躍して、目的の場所へとビルを飛び交いながら駆け抜けていった。

「……ルーラなら、みんな死なせずに、リーダーになれたのかな」

漢字ノートに『友』という一文字を書き続けながら、孤独のリーダーと化した綾名はボソリと呟く。宿題に手をつけながらも、頭の中は理想としていたお姫様の事ばかりに支配されている。

『あんた達みたいな使えない者を、私がわざわざ世話してやってるの。何故だと思う？』

脳裏に浮かんだ、お姫様からの問いかけに、首を横に振る綾名。

『私には、優れたリーダーの素質がある。その持って生まれた才能を伸ばす為に、どんなへボな部下であろうと、部下無くして、リーダーたり得ないの』

「部下無くして、リーダーたり得ない……」

そう復唱した直後、側に置いてあったマジカルフォンから、ファヴが姿を現した。

『おいスイムスイム。そろそろ約束の時間じゃないかほん？』

ファヴに指摘されて、壁時計に目をやる綾名。確かに、待ち合わせ

の時間までもう間もない。もうすぐ、スノーホワイトがルーラを返してくれる。それは彼女にとって願って叶ったようなものだ。

これまで何度もメッセージを送って、一度も返答がなかった事に困り果てていた綾名だったが、昨晚メッセージを送って、宿題を終わらせた直後に、スノーホワイトからメッセージが返ってきた時は内心驚いた。見たことの無い漢字も含まれていて、ファヴに通訳してもらいながら、メッセージを確認した。それによると、ルーラを返してもらえるような内容だった。項島台ダムを指定しており、そこで返却してもらえららしい。ちよつぴり嬉しかった。

そんな中、ファヴはこんな事を提案してきた。

『でもせっかくなんだから、取り引きするだけじゃ面白くないぽん。スイムスイムはルーラのようなライダーになりたいはずだったぽん。だったらチャンスだぽん。このままスノーホワイトを屈服させて、部下にすりや良いんじゃないかぽん?』

スノーホワイトを部下に。ファヴの提案を聞いて考える素振りを見せる綾名。そろそろ殺しあっている場合ではない。その先の事も考えて、部下を持つ必要もありそうだ。

『部下が欲しいなら、己の強さを示して、屈服させれば良い。私があんた達にしたようにね』

「強さを示して、屈服させれば良い……」

ルーラに教えてもらった、理想のリーダー兼お姫様になる方法を再確認する綾名。

『お前さあ。いつもルーラが、ルーラがって言ってるけど、アイツみたいに普段『駒』って呼んでるような奴等の為に戦おうって心から考えたこと、一度でもある?』

『お前は何一つ、ルーラになつちやいないんだよ。当然だよな。何せお前は、本当の自分を愛してなんかいないからさ』

『英雄気取りだったあのライダーと同じだよ、お前は。お前はルーラになろうとした瞬間に、ルーラじゃ無くなった。いきなりアウトだったわけ』

『ルーラはルーラ、お前はお前。本当の自分を愛せない奴に、誰かの代

わりになろうなんて生き方、やめといた方がいいよ』

刹那、緑色のライダーの幻影が理想のお姫様と重なる。一瞬動揺する綾名だったが、すぐに払拭する。

「私は、ルーラになる。ルーラの言ってた事は絶対。今まで失敗ばかりだったけど、今度はちゃんと、ルーラになってみせる」

『おーい。聞こえてるかぽん?』

ファヴの声は届いていないらしく、綾名はさっさと電源を切り、時間も無い為、宿題を途中で切り上げる事に。そして窓の側に立ち、

「変身」

と呟くと、魔法少女『スイムスイム』へと変貌し、待ち合わせ場所まで一直線に地面を潜って進んでいった。

数十分後、待ち合わせ場所であるダムに到着したスイムスイムは、雨が降っている事に気付いた。雨足はそれほど強くはない。コンクリートの地面に点々と黒いシミが滲み、じわじわと広がる。雨はスイムスイムの身体を濡らすことなく、すり抜けて地面を濡らしていく。

周りには誰もいない。どうやら自分が一番乗りだったようだ。東側には山が広がり、西側には、轟音と共に膨大な量の水が滝のように落ちていく。夏場はコスモスなどの花が咲き誇っているであろう花壇が下方に見えるが、冬真っ只中である為、土しか見えない。そこから少し先には、円状にくり抜かれて石畳が敷き詰められている空間があり、木製のベンチが数台設置されている。ここで働く職員の休憩場所のようだが、当然ながら、人の気配はない。故に魔法少女や仮面ライダーの待ち合わせ場所としては最適な環境だった。

雨が強くなり始めたその時、雨音に混じって、足音が聞こえてきた。ダムの入り口の方からだ。そちらに目を向けるスイムスイム。

見えた人影は、1人ではなかった。西洋の騎士を彷彿とさせる仮面の戦士、黒いドレスに身を包み、人形を片手に、隈のついた両目を向ける少女、そして中心には、マントに身を包んだ、忍者風の少女。何れもスイムスイムにとって見覚えのある者達だったが、彼女が会いたがっていた人物とは容姿が全く異なっていた。

首を傾げるスイムスイム。約束が違う事に気付いたスイムスイムが口を開く。

「スノーホワイトに会わせて。ルーラを返してほしい」

「その必要はない。お前の欲しいものは、私が預かっている」

そう呟いたリップルが、マジカルフォンを操作して、目の前に現れた薙刀を握る。目を見開くスイムスイム。間違いなく、自分が寿命と引き換えに手に入れた、大切な代物だった。そして無言で手を差し出す彼女だったが、リップルは一步も動かなかった。そればかりか、ルーラを握りしめている。まるで最初から、渡す気など無いように。「そんなに返して欲しいなら……。私から奪ってみろ。代わりに、私はお前の全てを奪ってやる」

刹那、スイムスイムは理解した。あの時、メッセージを返して、会いたいと言ってきた相手は、スノーホワイトではなく、目の前で殺意のこもった目つきで睨んでいる魔法少女である事に。そして両隣りにいる2人も、目的は同じであるに違いない。

先制とばかりに、ルーラを一旦しまったリップルが、クナイを取り

出して投げつけた。対するスイムスイムはかわす事なく、魔法を行使してすり抜けさせる。やはり並みの攻撃は通用しない。そう認識を改めたリップルはマジカルフォンを手に持った。その傍らで、ナイトも1枚のカードを取り出す。風が、吹き荒れる。

『SURVIVE』

リップルとナイトの姿は、サバイブの恩恵を受けて変わった。最初から出し惜しみはナシ、という事なのだろう。サバイブの強さはスイムスイムも理解している。だが逃げるような事はしない。ルーラなら絶対に撤退しない。

スイムスイムは懐から、激レアアイテムの1つ、『元気が出る薬』の入った瓶を取り出す。取り出した錠剤を口に含み、噛み締める。

「激レア、アイテム……！」

ハードゴア・アリスが、マジカルフォンで黒いドラグセイバーを召喚し、警戒を強める。他の2人も、腰に力を入れて、同時に駆け出した。

スイムスイムもマジカルフォンを取り出して、パートナーだったアビスの武器である、アビスセイバーを構えて、3人を相手に、剣を振り回し始めた。雨に打たれる中、激しい打ち合いが続く。時折リップルサバイブが武器を投擲するが、やはり全部すり抜けてしまう。舌打ちも、雨音にかき消された。

背後から、アリスが飛びかかるが、アビスセイバーで防がれる。前方がガラ空きとなった隙を逃さず、ナイトサバイブが距離を詰める。それに気づいたスイムスイムは、アリスを肘打ちで吹き飛ばし、後ろにステップを踏んでナイトサバイブの攻撃を回避。そのまま魔法を行使して、地面に潜り込んだ。

敵の姿が見えなくなり、3人は意識を集中させる。どこからか奇襲を仕掛けてくる筈だ。そうして雨音だけが聞こえる中、スイムスイムは浮上した。リップルサバイブの背後から、一瞬で。狙われた本人は気づいていないのか、一步も動いていない。好機と見たスイムスイムは、アビスセイバーを振り下ろす……が、その刃はリップルサバイブには届かなかった。ナイトサバイブが、ダークバイザーツバイで受け

止めていたのだ。最初から動きを読んでたかのような動作に、どうして自分の居場所が分かったのか、疑問に思うスイムスイムだが、その答えはナイトサバイブから語られる。

「お前の目的は最初から、あのルーラと呼ばれた武器の奪還。なら、お前は真つ先にこいつを狙うはず。単調過ぎるんだ、お前の行動パターンは！」

そうしてギリギリと均衡する間にも、リップルサバイブは次の手を打っていた。腰に吊るしてあった、因縁の相手であったカラミティ・メアリの遺産から、リボルバーを取り出して躊躇う事なく引き金を引いた。

が、リップルサバイブの動きを見ていたスイムスイムは、動揺する事なく魔法で全てすり抜けさせた。

『SHOOT VENT』

「ハアッ！」

銃撃に合わせて、ダークバイザーツバイの盾を展開させ、ダークアローを放つが、これもすり抜けて、コンクリートの地面を抉るだけに終わった。

「やっぱりすり抜けるか……！」

弾切れとなったりリボルバーを投げつけ、すり抜ける姿を見て、舌打ちをするリップルサバイブ。飛び道具はほとんど通用しないようだ。かといって接近戦も、スイムスイムの反応の良さが災いして、決定打が見えてこない。早々に弱点を見つけないければ、何れ消耗戦に陥り、勝機が薄れてしまう。

再び剣の打ち合いが始まるが、均衡は崩れず、再びスイムスイムは地面に潜ってしまう。

このままでは埒があかない。それに、ダムの上は足場も限られており、行動に制限がかかってしまう。場所を移すべきだ。ナイトサバイブの判断は早かった。2人に目配せして、駆け出した。リップルサバイブとアリスもそれに続く。地面の中で様子を伺っていたスイムスイムも、3人が遠くに離れるのを見て、追いかけた。

そうして3人がやって来たのは、ベンチがある広場だった。ダムの

上で戦うよりかは、フィールドも広い。3人は誘蛾灯の上に立った。ここならば、地面に潜り込んだスイムスイムからの奇襲も、かわしやすい。一旦息を整えて、周りを警戒する3人。姿は見えないが、スイムスイムも到着している頃だろう。まだ姿を見せてこない所から見て、攻め上がるタイミングを計っているのだろう。その間にも、対策を練らなければ、ナイトサバイブは考え込む。

これまでのスイムスイムの行動を観察していて分かった事と言えば、遠距離でも近距離でも、あらゆる攻撃に対して、スイムスイムは自らの身体を液体と化して、すり抜けさせている事ぐらいだ。決して物質を透過させているわけではなさそうだ。しかしそれが分かったからと言って、打開策は浮かんでこない。あらゆる攻撃を受け流す事は、ある意味で不死身を冠しているのだ。

「……本当に、そうなのか？」

しかし、ナイトサバイブは考え込む。そんな無敵にほど近い魔法が、この世に存在するのだろうか？　いくら常識を覆す法則だとしても、リスクがないなどは考えにくい。つまり、彼女にもすり抜けられないものが存在する。それが分かれば、勝機が見えてくるはずだ。

空から轟音が鳴り響いた。かなり近い場所で雷が落ちたようだ。

「雷……」

水は、電気を通しやすい。バカにでも分かるような法則が脳裏に浮かび、ダメ元で試してみる事に。

ナイトサバイブは、リップルサバイブに目線で合図を送る。何かを察したリップルサバイブが、四次元袋から、手榴弾を地面に向けて放り投げた。小型ではあるが、メアリの魔法で強化された手榴弾は、思っていた以上に音を大きく響かせて、地面を抉った。スイムスイムに直撃していれば儲けものだが、そう上手くはいかないだろう。

それを裏付けるかのように、リップルサバイブの背後から水音を立てて、飛び上がってきた。今一度、彼女が持つルーラを狙っているようだ。

「そこだー！」

『HIT VENT』

地面に降りて避難するリップルサバイブへ向かって攻撃を仕掛けるスイムスイムを阻害するかのようになり、ナイトサバイブはパートナーの魔法を行使。コウモリ型の手裏剣を投げつけて、アビスセイバーを振り下ろすスイムスイムへ、必中の攻撃を仕掛ける。手裏剣はスイムスイムの目元に向かったが、魔法によってすり抜ける。

その直後だった。

「……………」

スイムスイムをすり抜けた手裏剣に、空から雷鳴と共に、一筋の閃光が直撃。当然、側にいたスイムスイムにも被害が及び、体勢を崩して地面に叩きつけられた。

雷が通すのは、酸性を含んだ水だけとは限らない。例えば、手裏剣などの金属も当てはまる。水に濡れた状態ならば尚更だ。

しかし雷が直撃したわけでもないのに、スイムスイムはここに来て初めてダメージを受けた。電撃なら攻撃が通るのか……………？ 否、もつと身近に感じるものが、弱点に繋がるのではないか……………？

そこまで行き着いたその時、リップルサバイブはある事を思い出した。

たまが殺された直後の戦闘で、メアリとの戦闘の最中、彼女は目撃していた。ナイトサバイブが『ナステイイベント』のカードを使い、超音波を発した際、スイムスイムは顔をしかめ、スノーホワイトサバイブの拳をすり抜ける事なく、その身に受けて吹き飛ばされた事を。

「光と、音……………」

先程の雷と、ソニックブレイカーの攻撃だけが、スイムスイムにダメージを与えていた。そしてそれがスイムスイムが唯一透過できないものではないのか……………？

リップルサバイブの眩きを聞いて、ハツとなる他の2人。好機が見えてきたかもしれない。再び体勢を整えた3人を見て、スイムスイムはアビスセイバーを拾って、そのまま地面に潜り込む。

強力なサバイブにも時間制限がある。これ以上時間はかけられない。一矢報いる為のチャンスは1度だけ。3人の目に迷いはなかった。

不意に、リップルサバイブの両腕に掴まれる感触が伝わった。契約モンスターであるアビスハンマーとアビスラッシュだ。スイムスイムが呼んだと見て間違いない。2体のモンスターに動きを封じられたリップルサバイブ。隙を逃す事なく、浮上したスイムスイムは右手のアビスセイバーを突き出した。仰け反る事で回避しようとするリップルサバイブだが、予想以上に速く、力強かったが故に、避け損ねてしまう。

顔の左側に熱を感じ、視界が赤く染まった。鮮血が宙を舞い、濡れた地面にベタリと音を立てて落ちた。

「リップル、さん！」

「狼狽えるな！」

左目を負傷したリップルサバイブはそう叫び、トップスピードのコートを脱いで、スイムスイムに覆い被せる。コートはすり抜けたが、スイムスイムの気をひく事には成功し、距離を取るように、地面を滑った。

すぐに目の前に意識を向けるリップルサバイブだが、視界が半分になつた挙句、赤く染まつていて姿を確認できない。

「屈服しないなら」

背後から声が聞こえた。反射的に身を捻って逃げようとする。風圧を感じた。間に合わない。

「リップルウー！」

ナイトサバイブの叫び声が響くと同時に、鮮血と共に腕が宙を舞った。しかし悲鳴は聞こえてこない。よくみると、リップルサバイブの両腕は健在だった。そして吹き飛ばされた腕には、黒いドラグセイバーが握られている。

リップルサバイブとスイムスイムの間には、割り込む形で黒い人影があつた。切断された右腕の断面から血が溢れているにもかかわらず、表情1つ変えないハードゴア・アリスは、残った左腕でリップルサバイブを押し出して、2人同時に距離を取った。

「お前……！」

「平気、です。あなたこそ、間に合つて、よかつた」

右腕からの出血が止まりつつあるアリスは、リップルサバイブの無事を確認する。彼女の魔法ならば、片腕を切断されても問題はない。寸でのところで、リップルの腕が切断されずに済んだのだ。しかし、驚異的な治癒魔法を持っていても、すぐにアリスの右腕は再生しない。スィムスィムに一撃を与えるのはほぼ不可能だろう。

「ハアッ！」

一方、ナイトサバイブもアビスラッシュャーやアビスハンマーと戦っていたが、スィムスィムが一気に詰め寄って、アビスセイバーを振り払う。

「グッ……！」

右腕を切りつけられ、血が噴き出る。が、その血がスィムスィムの両目に降り注ぐと、バランスを崩してよろめいた。この隙を逃す事なく、ナイトサバイブは右足を蹴り上げて、スィムスィムを吹き飛ばした。返り血が目隠しとなって功を奏したようだ。

これを見て、リップルサバイブは左目に手を当てながら、アリスに耳打ちをした。聴き終えたアリスは、残された左手でマジカルフォンを操作し、その腕に黒いドラグクローを装着した。

そして文字通り、捨て身の覚悟でスィムスィムに向けて、ドラグクローを突き出す。背後にドラグブラツカーが出現し、口を大きく開ける。そして放たれたドラグクローファイヤーは、スィムスィムに直撃……する事はなかった。紙一重で横に避けて、一気に距離を詰める。アビスセイバーを振り上げると、ドラグクローのついた左腕が舞い上がった。両腕を切断されたアリスだが、瞬時に切断面をスィムスィムに向けた。そこから溢れ出た血が、スィムスィムの顔面に直撃。視界がリップルサバイブ同様赤く染まり、怯んでしまう。

「フンッ！」

そこへナイトサバイブの猛攻によって後ずさった2体の契約モンスターが転がってきた。敵が一箇所に集まったのを見て、ナイトサバイブは新たなカードをベントインする。

『NASTY VENT』

上空からダークレイダーが出現し、ソニックブレイカーが放たれ

ムに向かって突き進み、爆発音がダムの一角に轟いた……。

125. 友を守る為に 驚愕の結末

坂凧 さかなぎ 綾名 あやな、7歳。市内の小学校に通う、お嬢様感を醸し出した、物静かな1年生。それが彼女の、表向きの肩書きだ。

家は、裕福とまではいかないが、決して貧乏ではない。それは住んでいる土地の広さを見れば分かる。育ちの良さもあつてか、何でも卒なくこなし、周りの人達からの評価は高い方だ。その為か、小学生であるにもかかわらず、自分専用のスマホを持つ事も許可された。

そんな彼女が憧れているもの。それは『お姫様』一択だ。小さい頃、母に読んでもらった童話に出てくるお姫様に見惚れ、そんな人に仕える事が、彼女の目標となった。

そんなある日、スマホに表示された画面の中に、『アバターとコスチュームの組み合わせで、殺人鬼にもレースクイーンにも陶芸家にもお姫様にもなる事が出来る!』と書かれていた広告を発見し、これを見た綾名は、無課金という言葉に惹かれつつ、一も二もなく、そのゲームをダウンロードした。言わずと知れた、『魔法少女育成計画』だ。

しかし実際のところ、彼女は初期アバターから一切コスチューム等を変更する事はなかった。彼女の中で『お姫様Ⅱ白』という認識が強く、結果として白い部分が一番多かったという理由で、スク水のような衣装となった。それでも、パーティー全体に防御アップの特殊効果をつけたり、常時バフを意識した設定にするなど、ゲームの流れを考慮したカスタマイズには念を入れていたようだが。

そんなある日、彼女の目の前に、マスコットキャラクターであるファヴが登場し、小難しい事を口にしてるなど思いつつ、画面をタップし続けた結果、彼女はゲームのアバターと同じ身なりの魔法少女『スイムスイム』へと変身を遂げた。

ファヴの説明によれば、彼女の魔法は『どんなものにも水みたくに潜れるよ』というものらしく、水泳を習っていた彼女は、早速色々な場所に潜って性能を確かめてみた。流石に山の中を潜っていた時は深く潜りすぎて、息継ぎが出来なくなりかけたが……。その為、本来の目的である『人助け』とは無縁の生活を送っていたのだが、『ルーラ』

と呼ばれる魔法少女との出会いで、彼女の運命は大きく変わった。自分が理想としているお姫様に限りなく近い容姿の彼女を一目見て、迷う事なく彼女に付き従っていこうと決め、ルーラからの勧誘もあつさり受け入れた。既にルーラの傘下に入っていた、たまやガイといった面々とはそこまで話し合う事は無かった。ただ一人、『ルーラ』^{お姫様}の命令に一言一句従い、行動していく事に、満足していた。

そんな彼女の価値観を変えたのは、やはり夢の中で、パジャマ姿の魔法少女に言われた、この一言ではないだろうか。

『お姫様に仕えるんじゃないかって、あなたがお姫様になるのはダメかな？』

ルーラのようなお姫様になる事を夢見ていた少女にとって、その一言は考えさせられるものだった。

ルーラこそがお姫様であり、お姫様こそが正義の塊。ルーラは強く、賢く、可愛らしく、リーダーシップに溢れていた。そんなルーラを目指そうとしたのだが、何よりも厄介な存在だったのが他にもない、ルーラと呼ばれている魔法少女そのものだった。ルーラが2人いては、ルーラとは成り得ない。誰よりも彼女に憧れ、尊敬し、それを形にする為には、ルーラを殺さなければならなかった。

純粹無垢な小学1年生の決断は、それほど遅くはなかった。試行錯誤したものの、結果としてルーラを脱落させ、更にはパートナーとなったアビスのサポートもあつて、その後のリーダーを引き継いだべルデをも殺害し、ようやく彼女はリーダーの座に君臨した。

しかし、現実はそう上手くいかない。ある者は仲間裏切られて死に、またある者は英雄になる事を夢見て死に、またある者は知らず知らずの内に死に、またある者は正体を知られた為、掟を守る為にその手で殺し、気がつけば、自分の周りには誰もいなくなっていた。

ルーラなら、全員を生き残らせた上で、この戦いを終わらせる事が出来たのだろうか。その問いに答える者は、もう、誰もいない……。

「何、これ……！」

外から雨が激しく屋根を叩く音が室内に響く中、小雪は声を上ずらせる。彼女の手には、マジカルフォンが握られており、画面に表示されたメッセージの内容に、衝撃を受けていた。

自室の中で何かする事もなく、ふと何気無く開いたメッセージ欄。そこに記されていたのは、スイムスイムに向けて送られていたメッセージの履歴だった。今日の日付で、夕方にルーラをそちらに返却する為に、ダムで待ち合わせしたい、といった内容。

当然ながら、小雪はそんな文言を打った覚えもないし、あの魔法少女に武器を返そうなどと考えた事もない。いつ書いたかななどは分からないが、マジカルフォンによるやり取りの履歴は、ファヴ達の許可なくして削除出来ない、とファヴから説明されていた事を考えると、誰かが自分の持つ端末を使ってメッセージを書いて送ったと考えるのが筋だ。

「……あ」

思い当たる節は、あった。

昨晚、スイムスイムからまたルーラの返却を執拗にねだってきた際、リップルが自然な動きで自身のマジカルフォンを取って、何やら操作をしていた。当人からは、ルーラを自分のマジカルフォンに移したと話され、それで無理やり納得させられていたのだが、もしかしたらその時に、武器の移動とは別に、『なりすまし』によってスイムスイムを誘い出したのではないかと。

あのリップルが素直にルーラを返すとは思えない。ならば目的は一つしか考えられない。

「スイムスイムを、倒す為に……！」

反射的に立ち上がり、叫ぶ。

「変身！」

窓を開けたスノーホワイトは、床を蹴って、豪雨の中を突き進んだ。道中で他の面々に連絡を入れて、リップルを止めるようお願いしつつ、自分は先行して現場に向かう事を伝えた。これで少なくとも、九尾やラ・ピュセルは駆けつけてくれるだろう。

スノーホワイトは、ただひたすら前だけを向いて、屋根を駆け抜ける。頭の中にはリップルの事しかなかった。理由は2つだ。

1つは、リップルの安否だ。確かに今のスイムスイムは激レアアイテムである通称『ルーラ』を失っているが、同胞を何人も殺しているのも事実だ。つまりは実力も込みで、人を殺す事に手慣れている。対照的にリップルは、強力なアイテムもあり、実力こそスイムスイムに引けを取らないかもしれないが、先日、あのカラミティ・メアリをトツプスピードと2人がかりで倒したばかりだ。決して殺し慣れているわけではない。そんな彼女が1人でスイムスイムを倒しにくくするのは、無謀のように思えてくる。最悪、返り討ちに遭ってもおかしくない。そしてもう1つの理由が、リップルにこれ以上、罪を背負わせない事だった。

くただ一つだけ、自分にとって大切なものを最後まで守り通す為だったら、私はその『人殺し』でも構わない。

脳裏に、グラムベリーからの襲撃を受けて、負傷して彼女の家に運ばれた際、人間の姿で面と向き合った時に交わした言葉が蘇る。

彼女にとって守りたいものは、今回ならばスノーホワイトに置き換えられるだろう。スイムスイムに狙われていると分かった以上、その脅威をいち早く片付けるべく、彼女は戦場に自らの意思で出向いた。自分を『人殺し』と自嘲して。

く私は、あなたのような魔法少女に憧れていた。

「そんなの、ダメだよ……！」

下唇を噛み締めるスノーホワイト。

これ以上、自分1人の為に、他の誰かに重荷を背負わせたくない。罪を重ねてはいけない。これ以上命を奪ってしまえば、きつともう、後戻り出来なくなるから。例え本人がそれを望んでいたとしても、だ。

「リップルは……！ 魔法少女だよ……！」

全速力で駆け抜けるスノーホワイト。これ以上、自分の周りから魔法少女を失わせはしない。果たして彼女は、間に合う事が出来るのだろうか……？

「ハアツ、ハアツ……！」

爆音が鳴り止み、片膝をついたナイトはサバイブ状態から元のフォームに。同じく肩で息をしていたリップルも同様に、サバイブが解ける。

目線の先に、スク水姿の魔法少女が横たわっている。側にいた契約モンスター達は、ナイトサバイブのファイナルベントで跡形もなく消し飛んだようだ。が、魔法少女である彼女だけはまだ生きているようだ。それが証拠に、僅かに体が上下に動いている。

至近距離でカラミティ・メアリ特製のスタングレネードを使った為に、直撃したスィムスィムのみならず、近場にいたナイト、リップル、そして両腕を切り取られたハードゴア・アリスも、少なからずその影

響を受けている。雨音が聞こえず、耳鳴りも酷く、足が震えている。それでも、リップルはすぐに我に返り、一旦右腕で、左目から出た血を拭い取り、殺すべき対象をしつかり位置確認した後、ゆつくりと前へ進む。マジカルフォンを取り出すと、ルーラを持ち、その刃先をスイムスイムに向ける。彼女にとって慣れ親しんできた武器でトドメを刺す。それがせめてもの慈悲だ、というメッセージを込めて、敢えてルーラを使うようだ。

「終わらせる……！ この、手で……！」

フラつきながらも、ようやく殺すべき魔法少女の前に立てたリップル。ナイト、アリスは何も言わない。ここで彼女を止めてしまつては、ここまで戦ってきた意味がない。

ルーラを振り上げる。魔法を行使するだけの力は残っていないのか、抵抗する素振りを見せない。ならば後は、心臓に突き刺せばそれで生命を断ち切れる。

……が、目一杯振り上げた直後、スイムスイムは光に包まれた。変身が解かれるようだ。そして光は徐々に失われ、その中が露わとなる。刹那、リップルは思考が停止した。他の2人も同様だ。

そこに、スイムスイムはいなかった。魔法少女ではなく、人間の、それも自分達よりずっと歳下……小学1年生くらいの少女が、そこに倒れこんでいた。

スイムスイムの変身前の姿か。片目だけで見えた光景に、思わず動きを止めてしまうリップル。あれだけ自分達を苦しめ、他の魔法少女や仮面ライダーを殺してきた魔法少女が、こんなにも幼いとは。躊躇してしまふのも、無理はないだろう。心が乱れ、そのまま振り下ろす事が出来なくなった。

だがその一瞬。僅か10秒間の躊躇いは、綾名の意識が回復する為の時間を作ってしまう。

「……変身！」

小さく、素早くその言葉を発すると、バツ！と起き上がると同時に、リップルのみぞおちに肘を曲げて打ち込む。

不意の一撃で酸素が吐き出され、意識が飛びかけるリップル。背中

赤黒い液体が、街灯を、地面を、染め上げる。

く。ゴメン、トップスピード……！ 約束、守れなかった……く

『死』を覚悟した少女は、不意に首元が緩み、息が出来るようになった事に疑問を浮かべ、そして目の前の光景を確認する。

えっ、と思わず息を詰まらせるリップル。ナイトとアリスも、目の前で起きている事に思考を停止する。

リップルの体は、生ぬるさが残る血で汚れていた。しかしそれは、リップルの体から流れ出たものではない。

えっ、と次に声を上げたのは、スイムスイムだった。口から血が溢れ出ている。上半身が焼けるように熱い。不意に顔を下に向けると、彼女の豊満な胸の谷間が見える。その間から、銀色に光る、鋭く尖つ

たものが、彼女の背中を貫いているのが確認できた。

「ルー……ラ……？」

スイムスイムは、自身の体を貫く、慣れ親しんだ武器の名を呟く。その上半身から流れ出た血が、リップルを、そして地面を赤く染め上げる。

何故、リップルの手元から離れたはずのルーラが、スイムスイムを貫いているのか……？ 当然だが、魔法を行使する余裕がなかったリップルには、手元から離れた武器をコントロールする力はない。かといって、ナイトやアリスも、武器を手取る時間さえなかった。

「ルー……、ラ……！」

クナイを落とし、震える両手で、その刃先に触れるスイムスイム。その表情は、どことなく恍惚なものに見えた。ようやく、ルーラが戻ってきた。そればかりか、ルーラと一心同体になれた。血が流れ、意識が薄れながらも、スイムスイムは愛おしそうに刃先を握る。

不意に人の気配を感じた彼女は、ゆっくりと顔を、後方に向ける。誰かいる。その人物の顔を認識した直後、崩れるように、前のめりに膝を曲げて倒れこんでいく。その際、リップルや後方にいた2人は、ようやくそこに誰かが立っている事を認識した。

刹那。リップルは自分の眼に映る光景が信じられなかった。片目で見えなくなつた今でも、そこに見える人物が誰なのか、ハッキリと認識できてしまう。否定したくても、認めたくなくても、だ。

雨風に晒されながら立っていた人物。それは……。

肩で息をし。

学生服や頭の花飾りを、返り血で真っ赤に染め上げ。
いかにも棒状のものを握っていたかのような体勢で。

両目から、雨か涙か分からない、透明な液体を流している……。

憧れの魔法少女……『白雪姫』スノーホワイトが、確かに、そこにいた。

雨の音が、緑地帯を支配する。背中から刺し貫かれたスイムスイムの全身が再び光に包まれ、元の小学生の姿に戻る。ただし今度は、その小さな体を中心に血の海が形成されていき、二度と起き上がる事はない。

スイムスイムは、死んだ。そして誰が彼女に手をかけたのか。その答えは、明白だ。

「そん、な……い！」

彼女だけは、その手を汚してほしくなかった。この、血で血を拭いあう戦いには、関わってほしくなかった。死ぬはずだった自分を救ってくれた彼女だけには、こんな事をしてほしくなかった。両膝をついた黒服の魔法少女は、開いた口が塞がらない様子だ。

「……っ」

その近くにいたコウモリの仮面ライダーは、僅かに俯く。戦いの渦中にいる以上、こうなる事は頭の片隅で分かっていたはずなのに、いざ目の当たりにすると、やるせない感情が湧き出てくる。イメージがつかなかったから、尚更だ。

「……んで」

そして。

顔についていた返り血は雨で流され、視界も少しずつ戻りかけてきた忍者の声は、震えていた。思考回路もままならない。

信じられなかった。人一倍優しく、どの魔法少女よりも、魔法少女らしく謳歌してきたはずの彼女が、その手で同じ魔法少女を貫き刺した事が。

怒りが湧いてきた。自分の手で決着をつけようと躍起になったにもかかわらず、最後の最後で油断し、殺されかけ、そして彼女に『罪』を背負わせてしまった自分が、猛烈に許せなくなった。

「何で……！ どう、して……！」

自分への問いかけのつもりが、彼女には自分への問いかけに聞こえたのだろう。ビクつきながらも、全身を震わせ、そして血に染まった両手を見つめる。

「守り、た、かった……！」

「……！」

「守られる、んじゃない……！ 守りたい……！ そう思っで、ここまで、来たの……！」

なのに。

木々を転々とし、ようやくリップル達の姿が見えた時、スイムスイムに首を絞められる彼女の姿が見えた時、自分でも驚くほど俊敏に、気づかれない位置から着地して走り出し、落ちていたルーラを拾い、前に突き出し、そして……。

視線を下げて、大きな薙刀が深々と幼女に突き刺さり、伏している光景に今一度目を向け、両手で頭を掻き毟る。手についた血が、ピンク色の髪の毛を赤く染める。

「私が……！ 私が、やった……！ 私は、もう……！ 魔法少女じゃ、いられな」

不意に、正面から抱きしめられる感覚がスノーホワイトを包み込む。濃い血の匂いが鼻に付く。布の柔らかさが、濡れた肌に張り付く。

「やめて……！ それ以上、言わないで……！ 全部、私が悪いんだ……！ スノーホワイト……！ あなたにこんな、苦しい事をさせてしまった……！ ごめん……！ 本当に、ごめんなさい……！」

頬を伝う涙を止める事なく、リップルは力強く抱きしめ、スノーホ

ワイトを説得する。

言いたい事がもつとあるはずなのに、言葉に出来ないスノーホワイ
ト。

「……っ、アッ……！ 私、は……！」

そこが我慢の限界だった。

雨に負けないほど、腹の底から声を出し、枯れるほどにまで、嗚咽
を辺りに響かせた。リップルを抱きしめ返し、彼女もそれに抵抗する
事なく、抱きしめ返した。

程なくして、九尾、ラ・ピユセル、ライア、トップスピード、龍騎
といった面子が到着。各々の反応は様々だった。

龍騎とトップスピードは、負傷しているナイトとアリスを介抱しつ
つ、事切れている少女を見て息を呑み、幼い命が戦いの果てに散った
事を受け止め、互いに慰めるように肩を寄せ合った。

ライアは全体を見通して、状況を理解した後、何も言わずに見守る
事に。

ラ・ピユセルは泣き崩れるスノーホワイを目の当たりにし、彼女
がやった事が信じられないのか、リップルと同じ表情を浮かべる。

そして九尾は……。

「……」

スノーホワイとリップルの側に寄り、無言のまま、血のついたス
ノーホワイの頭を撫でるだけに留まった。

その日の雨は、スノーホワイが泣き止むまで続き、止む頃には、赤
い跡はほとんど洗い流されていた……。

《中間報告 その17》

【スイムスイム（坂風 綾名）、死亡】

【残り、魔法少女6名、仮面ライダー6名、計12名】

126. 竜狩りの騎士 vs 狂獣の音楽家

『いや、こればかりはファヴも予想だにしない、刺激的な展開だったぼん!』

夜明け前の船賀山。その一角にある廃屋の中で、黒白の球体がこれでもかと鱗粉を撒き散らしながら、興奮冷めやまぬ様子を、ベッドで仰向けに寝転がっている音楽家に見せていた。

『まさかあの穏健派だったスノーホワイトが、ダントツのスコアを叩き出していたスイムスイムをやっつけるとは、夢にも思わなかったぼん。いやはや、やっぱり魔法少女も仮面ライダーも、可能性に満ち溢れているぼん! ファヴの想像を軽く超えてくる辺り、今回の試験は大当たりで間違いないぼん!』

「……そうかもしれませんね」

『? 珍しいぼん。クラムベリーがファヴの言葉に同調するなんて』
「そうでしたか? まあ、どうでもいい事ですけど」

平然を貫き通そうと、天井を見つめ続けているクラムベリーだが、その顔が恍惚に満ちている事に、本人は気づいているのだろうか。

事実、魔法少女の中ではねむりに次ぐ最弱候補と罵っていたスノーホワイトが、殺し合いを幾度となく否定してくる印象の強かった魔法少女が、同じ同種族を、それも冷酷で効率的な精神性を併せ持ち、参加者の中でもトップクラスの魔法を得ていたスイムスイムを殺した、と言われても、当初はクラムベリーもファヴからのそのような報告を信じていない節があった。

しかし、結果は結果だ。どのような経緯があったかなど、クラムベリーにとってはどうでもいい事だった。ただ、スノーホワイトがスイムスイムを殺した。その事実があれば、高揚感を底上げさせられる。『これなら、スノーホワイトを最終候補に残してあげてもいいかもしれないぼん。生かしておけば、もっともくつと刺激的なものが見れそうだぼん。てな訳でマスター』

「……欲しい」

『ぼん?』

不意に手のひらを挙げたクラムベリーを見て、首を傾げるような動作を見せるファヴ。

「ウィンタープリズンやオルタナティブと戦った時のような感覚、そしてラ・ピュセルの代わりにと出向いてきた九尾との死闘。特に九尾は、期待通りに随分と楽しませてくれました。ウィンタープリズンとオルタナティブの2人とやりあえなかったのは心残りですが、そろそろあの時のような手応えが欲しくなりましたね。誘われるまで待とうかと思いましたが……」

気が変わりました。

上に挙げた右手で拳を作り、口の両端をつりあげるクラムベリーの顔は、朝日に照らされていた。

「私は参加者であり、この試験におけるマスターでもある。やりたいようにやる権利はあります。……スノーホワイト。評価を改める必要がありますね。彼女と死力を尽くして戦う事が出来れば、……フーフ」

以前戦った時は、相手が弱腰だった事もあってワンサイドゲームになっていたが、今回は、失望する事もなさそうだ。候補生だか何だか知らないが、強者へのし上がろうとする彼女と戦い、血色がよく似合う花にしてみせよう。

『……』

そんな彼女をジッと見つめていたファヴは、音を立てる事無く、端末から姿を消した。

項島台ダムの一角にある広場は、普段から人が寄り付かない場所だ。円状に石畳が敷き詰められていたり、木製のベンチが数台設置されているだけで、見栄えの無い所である。

そんな場所に、多量の花束が供えられていた。菊の花以外には、小学生向けの筆記用具等が置かれている。デザインからして、女兒向けのものと考えられる。

その少女の両親や関係者と思しき人達が、肩を落とし、嗚咽を鳴らしながら立ち去っていく後ろ姿が見えなくなったのを確認した小雪は、近くの雑木林から出て、彼らが去っていった方を向いて立ち止まり、体を震わせながら、深々と頭を下げた。本当ならすぐにでも彼らの元に駆け寄り、謝罪したい気持ちだったが、どうにかして堪えた。

それから、花が置かれている場所の前に立ち、手に持っていた花束を備えた。線香の匂いが、僅かに鼻をくすぐる。その隣には、古びた絵本が置かれていた。『白雪姫』である。先ほど、母親と思しき人物が花と一緒に備えていたものだ。亡くなった少女の愛読書なのだろう。胸が締め付けられる気持ちで一杯だった。

花束を置き、一歩下がった小雪は、膝を曲げて、両手を合わせ、体を震わせながら、力強くその体勢を維持する。

「……………んなさい。ごめん、なさい……………！　ごめんなさい、ごめんなさい……………！」

震える声で、自分の手で少女にトドメを刺した時の事をフラッシュバックさせ、ひたすらその言葉をかけ続けた。こんなつもりじゃなかったはずなのに。ただ、殺されそうになったリップルを助けようとしただけなのに。今更謝っても、許してもらえないはずなのに。

それでも、ここに来る事しか、他に懺悔する方法が思いつかなかった。あの日から数日経ち、何を食べても味がせず、授業の内容が全く頭の中に入ってこず、友達と楽しく会話する気にもならない。何を想像しても、怖いとは思えなかった。あらゆる感覚が麻痺しているのだ

ろうか。

これが、魔法少女になるという事なのだろうか。生き残る為に、あらゆるものを犠牲にしなければならぬのが、正しい事なのだろうか。

ふと、何かに呼ばれたような気がした小雪が目線をあげる。

ピンク色のスク水と、ムツチリしたボディを兼ね備えた魔法少女が、無表情のまま、小雪を見下ろしていた。

「ヒッ……!?？」

反射的に立ち上がり、よろけながら後退する。実際には、そこには花束が置かれている以外、何も無いのだが、小雪には現実と幻の区別がつかない様子だ。意識が落ちかけ、目の前が真っ黒になりかけた時だった。背中に、ぶつかる感触があった。

「やつぱ、ここにいたか」

聞き覚えのある、低い声だった。背中を支えてもらいながら振り向くと、パートナーの姿が。

「だい、ちゃん……」

「相当やつれてるな。全然寝てない感じだ。……まあ、こんな状態じゃ、無理ないか」

そう呟く大地の目元も、薄っすらと隈が見えた。

それから小雪を地面に座らせ、先ほど小雪がいた地点に腰を下ろし、どこかで拾ったであろう、一輪の花をそつと地面に置き、両手を合わせた。

「坂風 綾名……か。どうやら本当にお姫様に憧れてたみたいだな。ルーラをあそこまで崇拜したのも、それが理由か」

備えられた絵本やネームプレートを見て、独り言のように呟く大地。それから、振り返る事無く小雪に問いかける。

「あの時の事、やつぱり気にしてるか」

「気に……するよ……！ 私の、私のせいで、泣いてる人達が、いるんだもん……！ みんなを、幸せにする魔法少女に、なりたかった……！ それなのに、こんな……！ 私はもう、魔法少女じゃない、人ごろ」

「お前は魔法少女だ」

返す刀で声を張り上げる大地。小雪は押し黙る。

「アリスから聞いたぞ。あの時、お前が手を出さなかったら、リップルが殺されていたかもしれないってよ。そうなれば、パートナーであるナイトはいざ知らず、トップスピードだって悲しむ。……勿論、俺やチームのみんなも例外じゃない。お前の行動が、結果としてリップルの『幸せ』を守った。だから、お前は何も悪くない」

「でも……」

「……結局さ。シスターナナの考えを否定するようになっちゃうけど、敵も味方も死なせずに、穏便に済ませるなんて、ハナから無理な話だったのかもな。事実、俺の目の前で、多くの魔法少女や仮面ライダーが死んでいった。それが戦いの本質なのかもしれない」

「……」

「きつと他の連中も、死ぬ覚悟は出来ていたのかもな。生き残りたいという願望も強かったはずだ。スイムスイムには、スノーホワイトと比べてその強さを持ち合わせていなかった。だから負けた。それだけだ。だから、お前が負い目を感じる必要なんてないはずだ」

小雪が黙っている間、ダムから流れ出る滝のような音が、静まり返った広場を支配している。

「その通りだ。お前が負い目を感じる必要などない。遅かれ早かれ、こうなる事は運命付けられていた」

不意に小雪の背後で声が。2人同時に振り返り、腕を組みながら佇んでいる黄金色のライダーの姿を確認する。

「オーデイン……」

「スノーホワイトがスイムスイムを倒した。確かに予想外の展開ではあるが、魔法少女や仮面ライダーの本質に目を向ければ、それほど珍しいものではない」

「どういう、事……」

「ファヴやシローと契約を結んだ時点で、異能の力を得て魔法少女や仮面ライダーに選ばれた時点で、『人間』ではなくなっている事にまだ気づいていないのか？ 力に選ばれた者が、より強くなる為に戦いの

渦中に呑まれるのは必然。スイムスイムはその一環で失格の烙印を押しされたに過ぎない。それでも本気で誰も傷つかず、争いを止められると思っていたのなら、能天気にも程がある」

「……っ」

「その事を、お前達はもう分かっているはずだ。力をぶつけ合い、勝ち残り、己の欲望を、願いを叶える。それが魔法少女であり、仮面ライダーである事に、もう気づいているはずだ。その理想を限りなく近づける為に何が必要なのか。だからその答えを確かめる為に、それを期待してここに来た。そうなのだろう？」

静かにそう問いかけるオーデイン。小雪は何も言い出せないのか、拳を固めて震えている。そんな中、大地が小雪の前に立ち、こう言い放つ。

「……勘違いするなよ」

「？」

「俺は、小雪は、そんな答えを見つげる為にここに来たんじゃない。俺達のあるべき姿をどう決めるか、それは、俺達で決める。お前の道案内は必要ない」

「ならばなぜここに来た」

オーデインの問いかけに答える前に一度、後方の花束に目を向ける大地。そして元に戻り、口を開いた。

「確かにスイムスイムは、俺達にとって敵だった。争いは避けられなかった。……けど、俺達と同じ『人間』だった事には、変わりない。そいつが生きていた証を、ここに刻む為に、俺達はやってきたんだ」

右の親指を左胸に立てる大地。そして次に、懐からカードデッキを取り出してオーデインに見せつける。

「そして今は、こいつの中にも引き継がれている」

「サバイブ……か」

「だから……！」

カードデッキを強く握りしめ、オーデインを精一杯睨みつける大地の後ろ姿は、とても大きなものだど、小雪は感じ取る。

「俺は、お前らのやり方を否定する。お前が何を企んでいようと、必ず

俺が止めてやる。小雪には、これ以上手出しさせない。人間として散っていった奴らの分まで戦う……！ 何ならこの場で……！」

そうして鏡のある場所を目線で確認しようとする大地だったが、不意にオーデインが待ったをかけた。

「やめておこう。お前とは、日を改めて決着をつけたい。戦いの舞台がこうも寂しげでは興に欠ける。せいぜい、その時が来るまで互いに傷を舐めあい、力をつけておく事だ」

『TIME VENT』

ゴルトバイザーを出現させると、カードをベントインし、その場から姿を消した。時間を逆流させて、元いた地点に戻ったようだ。気配がなくなった事を確認して、カードデッキを下ろす大地。

「だいちちゃん……」

「小雪。お前は、自分を見失うのが、怖いんだろ？」

「！」

「確かにお前は、魔法少女を殺した。それは事実だ。自分の理想を自分で否定してしまった事に恐れている。……でもお前は自分の分、他の魔法少女を守った。今回の事だけじゃない。お前の人助けで、助かった人達が大勢いる。中には亜子のように、命を救われた者だっている」

「それ、は……」

「その事に誇りを持って、生きる事を簡単に諦めるな。その力が誰かを傷つける事になったとしても、躊躇うな。お前には、守りたいものがあるはずだ。自分の信じた正義の為に戦うんだ。それを叶える為に戦えるのなら……」

不意に小雪の両肩を掴んだ大地は、そのまま自分の胸元に押し付けた。

「俺は、お前の分まで背負ってやる。哀しみだろうと、何だろうと」

力強くそう宣言する大地に抱かれて安心したのか、嗚咽と共に、パートナーの名前を呼び続ける小雪。ダムに吹き荒れる風が、多量の花束から発する匂いを運び、抱き合う2人を包み込んだ。

「……」

時刻は少し飛んで、その日の夕方。

人気のない鉄塔でただ1人、座禅のように目を閉じて、集中している女騎士の姿があつた。

思い起こされるのは、数日前に見た光景。スノーホワイトからの連絡を受けた後、出発に遅れてしまい、現場に駆けつけた時には、既に決着がついていた。雨に晒されながら泣き崩れるスノーホワイトには多量の返り血がついており、その側にはスイムスイムの変身者と思しき女兒が事切れており、薙刀が深々と突き刺さっていた。

もつと早くこの事態に気づいていれば、スノーホワイトはその手を汚さずに済んだかもしれない。彼女を守ると誓ったにもかかわらず、その誓いを何一つ果たせていない自分に憤りを感じていた。

もつと強い自分でなくては。魔法少女ラ・ピュセルの決意は固かつた。故にこうして1人で、イメージトレーニングに没頭しているのだ。

「……そろそろ時間か」

気がつけば、チームメイトと合流する刻限まで1時間を切っていた。そろそろ切り上げようと思つて立ち上がった時だった。

『ラ・ピュセル、ラ・ピュセル』

「ファヴ？ 何の用だ。僕は呼び出した覚えなど」

『わー、そう言わずに電源切る前に、ファヴの話も聞いてほしいぽん』
わざとらしく慌てふためくファヴに、冷めた目つきを浮かべるラ・ピュセル。そのまま本当に電源を切ろうかと思っていたが、ファヴの次の一言で、その指を止める事に。

『実はクラムベリーが、スノーホワイトに会いたがってるみたいで、でもスノーホワイトは気分が悪そうだからやめといた方が良くって言うてるのに、執拗に会おうとしてるぽん』

「……！」

スノーホワイトとクラムベリーの接触。前に、スノーホワイトがクラムベリーに絶命寸前まで追いやられた事をリップルから聞いている為、表情が強張るのも無理はない。

『それに……だけの話、クラムベリーはスノーホワイトを倒そうとしてるに違いないぽん』

「っ！」

『この前スイムスイムを倒したって知ってから、もう一度戦いたいだなんて言ってたぽん。ファヴとしては、こういう形で魔法少女を減らされるのは後味悪いぽん』

「散々僕らをたぶらかして、何を今更……！」

『じゃあスノーホワイトを見殺しにするぽん？』

ファヴにそう言われ、マジカルフォンを壊れる寸前まで強く握りしめるラ・ピュセル。

『んじゃ、特別に教えてあげるぽん。クラムベリーは君が魔法少女に選ばれるずっと前から魔法少女として居座っていたのは知ってるはずぽん。だからこの街の魔法少女の監督役を務めてきたんだけど、その地位を良い事に、悪い事をいっぱいしてるぽん。シザースを殺したのも、君やスノーホワイトを殺そうとしたのも、その一環に過ぎないぽん。ファヴもシローも、クラムベリーの性格には困り果てているぽん。それで、それに打ち勝つ魔法少女や仮面ライダーを探してて』

「……それが今回、僕らに巡り回ってきた、という事か」

『そういう事ぽん。言うなればこれは、君が望んできたドラゴン退治』

みたいなものぽん！ 今こそ悪い竜^{クラムベリー}を討伐して、君こそが主人公になる時だぽん！』

フアヴにそう言われて、考えるそぶりを見せるラ・ピュセル。決断に至るまでは、数秒もかからなかった。

「僕はお前の指示に従うつもりはない。主人公になるつもりなんてない。……けど、スノーホワイトが狙われているのなら、僕が戦うしかない。情報の提供には感謝する」

『ラ・ピュセルならきつと大丈夫ぽん。それじゃあ、頑張つてほしいぽん！（ふうん。こういうのにはノつてこないか。今回の試験に選ばれた連中はひと味もふた味も違う。面白いものが見れそうだ）』

「おやおや。あなた一人で私に会いに来るとは。歓迎したい所ではありませんが、私は強者を求める身。一度敗北を喫したあなたの底は知れています。そんなあなたにはもう興味なんてありませんよ」

「お前には無くても、私には大事な用だ。スノーホワイトには、手出しさせない」

船賀山の中腹で、月明かりに照らされながら向き合う、魔法騎士と

森の音楽家。拠点を出て、街に降りようした矢先、見覚えのある魔法少女が待ち構えており、眉をひそめるクラムベリー。

「どうしても彼女に会いに行くというのなら、私を倒してからにしてもらおうか」

「やれやれ。どこからその情報を……なんて、答えは一つしか考えられませんね。大方、ファヴに唆されたのでしょうか。随分と余計な立ち回りをしてくれたものです。……まあいいでしょう。軽く準備運動を済ませてからでも遅くはありません」

「なら、その準備運動が、お前の最期の決闘だ！」

「相変わらず威勢だけは良いですね。でも、それだけで勝てるほど、現実には甘くありません」

『SURVIVE』

マジカルフォンをタップし、その姿をラ・ピュセルサバイブに変えると、剣を鞘から引き抜き、魔法の力で肥大化させた。対するクラムベリーも、マジカルフォンをタップしてゴルトセイバーを召喚。

先手を打ったのは、ラ・ピュセルサバイブだった。地面を蹴り、大剣を突き出す。それをヒラリと飛んで回避するクラムベリー。空中に上がったのを確認したラ・ピュセルサバイブは、大剣を持ち上げ、そのまま剣をさらに肥大化させる。クラムベリーの背後から大剣が迫り、両断しようとする。が、クラムベリーは慌てる事なく両足の面を大剣につけて威力を殺す。更に力を込めて、クラムベリーを押し潰すように地面に叩きつけた。

土煙が晴れるのを待つて敵の姿を確認しようとするが、それよりも早く、クラムベリーがゴルトセイバーを突き出して迫ってきた。剣を元の大きさに戻し、いなす事だけに集中するラ・ピュセルサバイブ。隙を見て足払いでクラムベリーを転がし、踏みつけようとするが、すぐに横に転がった事で、地面にクレーターが出来ただけだった。一旦距離を置いたクラムベリーは、不敵な笑みを浮かべる。

「フフ。まるでデジャヴですね。そういえば以前も、こんな風に屋根の上で向かい合い、ミラーワールドで死闘を繰り返してましたね。でも、今度は時間切れなんて形で終わらせませんよ。それに九尾と

いった援軍もいないようですし、思う存分楽しめます」

「クラムベリー……！ 今日こそ決着をつける！」

再び間合いを詰めるラ・ピュセルサバイブ。対してクラムベリーは左手のゴルトセイバーで受け止めて、右手のゴルトセイバーでラ・ピュセルサバイブに斬りかかろうとする。咄嗟の判断で、左足を振り上げ、ゴルトセイバーを弾き飛ばす。しかしその事に意識を向けてしまった事で、大剣による攻撃を緩めてしまい、ゴルトセイバーで弾かれると同時に、距離を詰められ、右膝による蹴りを腹に受けてしまう。一気に酸素が吐き出され、意識が朦朧とする。そこへクラムベリーが追撃とばかりにラ・ピュセルサバイブの肩を握り、近くの岩壁に叩きつけた。口元を掴み、そのまま拳を振り上げ、顔や腹に強烈な一撃を与えていく。鼻や口から血が溢れ出てくるが、こんなところでやられるわけにはいかないと意地を見せ、次に来る拳を、僅かに動く足蹴りで弾き、カウンターとばかりにクラムベリーを吹き飛ばす。

「ハアッ！」

攻撃の手を緩める事なく、大剣をふるって飛びかかるが、クラムベリーはしゃがんで回避し、元に戻る反動で、カウンターとばかりに回し蹴りでラ・ピュセルサバイブを蹴り飛ばした。地面を転がり、土埃がラ・ピュセルサバイブを覆い隠した。

「さっきの威勢はどうしました？ これで終いですかね。ならば楽しんで……！」

クラムベリーの口が止まったのは、煙の中から出てきた、棘のついた鞭が彼女の全身に巻きついたからだ。煙が晴れると、いつのまにか召喚したエクソウィップを握るラ・ピュセルの姿が。両手両足を拘束したのを確認したラ・ピュセルサバイブは、一気に斬りかかろうと、前に出ようとするが、

「……………！ ダメだ！」

クラムベリーの余裕綽々な表情を確認したラ・ピュセルサバイブは立ち止まる。直感的にそれ以上踏み込むのは危険だと察知したのだ。そしてその勘は的中。

辛うじて動く右手を軽く動かしただけで、エクソウィップは刃物で

切られたように千切れ飛び、その余波がラ・ピュセルサバイブに襲いかかる。右頬を掠め取り、血が流れたが、幸いにもそれ以上のダメージはなかった。もし不用意に距離を詰めていたら、バラバラに千切れて地面に落ちたエクソウィップのように、ラ・ピュセルサバイブ自身もズタズタに引き裂かれていたに違いない。

「中々に良い機転を利かしてますが、お生憎様。私に切れないものはないのでね」

「それが、リップル達の言っていた、音を操る魔法か……！ 音が超音波カッターのように……！」

破壊力抜群の腕力に加えて、魔法を応用させた超火力攻撃、そしてパートナーシステムによる武器の運用。何れも、これまで戦ってきた魔法少女や仮面ライダーとは比べものにならないほどの威力を兼ね備えている。

「（強い……！ 単純に魔法能力が、というわけじゃない。それらを活かす為の運動力も兼ね備えている！ 最初から敵を殺し慣れているとしか思えない動作だ！）」

まさに、歴戦の魔法少女。幾多の屍を踏み越えて、頂点を極めようとする威厳が伝わってくる。ゴクリと息を呑むラ・ピュセルサバイブ。

「さあどうしました。先ほどまでの威勢が欠けてますよ。もつと私を楽しませてください」

「っ！ やるしか、ない！」

ここで引き下がれば、スノーホワイトが彼女と戦う事となる。背中を見せて逃げるなど、魔法少女の、竜騎士の恥だ。数や作戦だけで押し通せる相手でないとなれば、後は力比べだ。僅かな糸口でも突破口を見つけるしかない。

「エクソダイバー！」

ラ・ピュセルサバイブはパートナーの契約モンスターを呼び出し、挟み込む形でクラムベリーを追い込もうとする。

「（挟み撃ちですか。どうせどちらか片方が死角から攻め込むつもりなのでしようが、そもそも私には、相手がどこにいるかなど、音を辿

ればわかる事)」

ラ・ピュセルサバイブはクラムベリーの周囲を動き回りながら機を伺っているが、依然として正面に捉えている。となれば背後から仕掛けてくるのは……。

「(当然、契約モンスターしかいない。ですがモンスターの攻撃程度で私がやられると思って?)」

ならば先ずは、目の前に見えるラ・ピュセルサバイブの始末を。そう思って地面を蹴ろうとしたその時、爆発音と共に、クラムベリーがいた地点がせり上がった。エクソダイバーが放出した落雷が、クラムベリーの背後に落とされたのだ。

「(！ 地盤ごと、地面を巻き上げて……！)」

バランスを崩し、注意を周囲に逸らしてしまい、地面を弾き飛ばすクラムベリー。横手からラ・ピュセルサバイブが急接近してくる事に気づいて、素早くマジカルフォンをタップし、ゴルトシールドを召喚。大剣とぶつかり合う。強い衝撃が武器に伝わり、互いの武器が弾き飛ばされた。すぐさま切り替えて、2人は地面に足をつけ、回し蹴りを叩き込む。

結果として、それぞれの蹴りは相手の頬に当たり、2人は吹き飛ばされた。共に地面を滑り、距離が離れた。

「掠っただけか……！」

口元の血を腕で拭うラ・ピュセルサバイブ。一方、クラムベリーは頬から血が流れている事に気付いて、それを手で触って確認する。先ほどの回し蹴りを受けた時、後ろ足についていた、竜の爪が頬に傷をつけたのだろう。

「……血だ。蹴られた頬が熱い……」

そう呟くクラムベリーを見て、ラ・ピュセルサバイブは畏怖を覚えた。ダメージを負ったにもかかわらず、その表情は恍惚としているからだ。

「フフ……！ 良い、これですよ……！ この時を待ちわびていた……！」

「……何なんだ」

そう、思わず呟いてしまうほど、ラ・ピュセルサバイブは知らないうちに震え上がっていた。

「何故、そこまでして殺し合いを望むんだ！ 魔法少女は、こんな事をする為に生まれた存在じゃないはずだ！ 一体何があったら、そんな事に……！」

「……純粹ですね。まるで、幼い頃の私を見ているようです」

不敵な笑みを浮かべながら、両手をダラリと垂れ下げるクラムベリィ。余裕の表れだろうか。

「こんな事を言うとは可笑しい話かもしれませんが、私にもかつて、あなた達のように、理想を夢見ていた時期がありましたよ。人間であった私が魔法少女として魔法の国に抜擢され、未知の世界への第一歩を踏み出す。期待と興奮で夜も眠れなかつたと思いますよ。……でも、それ以上に私の本能を目覚めさせる事態が起きた。……一応は『事故』という形式でしたけど、私にはどうでも良い事です」

「事故……」

『魔法の国』の住人として認められるには、魔法の国が課した選抜試験を受け、基準を満たして合格する必要があります。やり方はその試験の試験官……つまりマスターによって様々ですが、私の場合は、地下室に集められて、試験用に召喚された悪魔を相手に、個々の能力を見定めるものでした。そこで、事故は起きました……」

人間『だった』頃の記憶は、とうの昔に薄れていた。

勿論、クラムベリーにも親はいたし、学校の友達もそれなりにいた。苗字は3文字で、名前は4文字。大して珍しい名前ではなかったはずだ。今となっては思い出す節もない。

ただ、魔法少女の候補生に選ばれたのが9歳頃だったのは覚えていた。喜びと期待に胸を膨らませていたに違いない。

その選抜試験には、自分以外にも候補生がいた。皆、自分よりも歳上であり、緊張していた自分を励ましてくれた。優しい人達ばかりで、試験が始まるまで、ずっと魔法少女になれた後の将来の事を語り合っていたような気がする。

力に選ばれたのは、魔法少女だけではない。仮面ライダーと呼ばれる者達も、その会場にいた。皆男の子だったらしいが、彼らも仮面で素顔を隠しつつも、やる気に満ち溢れていた。

そして待ちに待った選抜試験。召喚された悪魔を目の前にし、果敢に魔法を駆使して立ち向かう候補生達。クラムベリーも負けじとその背中を追いかける。

……少し暗めな雰囲気の下室が、天井いっぱいまで真っ赤に染まり、腐乱臭が漂うような、地獄の空間に彩られるまで、さほど時間はかかっていなかったような気がした。

その悪魔を召喚した魔法少女が未熟だった為か、早い段階で暴走

し、密室内で縦横無尽に暴れ始めたのだ。さつきまで仲良く試験を受けていたクラスメイト達が、1人また1人と潰され、溶かされ、捏ねられ、砕かれ、そして原型をとどめないほどに、グチャグチャにされ、気がつけば、周りにいた者達は、ほぼ全員肉塊と化していた。クラスメイトだけでなく、召喚した張本人や、それを止めようとした試験官も、既に事切れていた。

後ろに下がって、仲間達が次々と殺されていく姿を、震えながら立ち尽くすクラムベリー。当時9歳だった彼女にとって、気が触れんばかりの光景だ。

悪魔が、立ち尽くしているクラムベリーに目をつけた。新たな獲物を捕食するべく、炎を放つ。嗚呼、ここで死ぬのか。夢を叶える事なく全てが終わるのか。クラムベリーは受け入れる覚悟を決めた。

しかし、彼女に死は訪れなかった。ギリギリのタイミングで、横から彼女を抱き抱え、飛び退く人物がいた。

黄金色の仮面ライダー。しかしその上半身は、真つ赤に染まっていた。彼の体から流れたものなのか、誰かの血を浴びたものなのか、區別はつかなかった。そのライダーはクラムベリーを下ろすと、雄叫びをあげながら、2つの剣を持つて悪魔に斬りかかった。あれほどの強敵を前に何故逃げ出さないのか、困惑するクラムベリーだったが、そもそも逃げ場がない事を悟り、クラムベリーは震える自分を叱咤し、前へと躍り出た。

長い戦いの末、2人の一撃が悪魔を引き裂き、消滅させた。辺りが静かになる中、クラムベリーはただ1人、笑みを浮かべていた。感覚が麻痺している事もあるだろうが、それ以上に強敵を倒せたという事実に喜びを感じていた。殺戮の愉悦に涎を垂らす暴力の化身と拳を交え、魔法を打ち合い、お互いに死力を尽くした上で、相手を屈服させる。

彼女は理解した。これこそが、正義のヒーローとしてあるべき姿なのだ。強敵と戦い、勝つ事が、真の正義なのだ。

事態が終息した後も、後頭部からつま先まで血に浸りながら、恍惚に満ちた様子で立ち尽くすクラムベリー。背中越しのオーデインも、

だんまりとしている。

『いや、最高だったほん！』

それは、試験官が持っていた端末から、立体映像として浮かび上がった。白と黒の球体だった。人事部門を担当している、『ファヴ』と呼ばれる使い魔だ。この選抜試験では、事故を防ぐ為のチェック機能として働いていたはずだ。

『ここんところ、決まりきってて退屈な試験には、飽き飽きしてたぼん。ここにはいないけど、ファヴと同じ使い魔も後で呼んで、一緒に手を組んで、マスターとしてもっと刺激的に生きていくぼん！』

あの至高の瞬間を、もう一度味わえる。そう聞き取れたクラムベリーは、両手についた血を眺めながら、一も二もなく引き受けた。

「もっと、強い奴と、戦えるのなら……！」

127. 勝利を求めて

「ああ、蘇る……！ あの興奮が、喜びが……！ 私が、私らしくいられる……！ これほど嬉しい事はありませんよ……！ この試験は、『当たり前』ですね……！」

森の音楽家クラムベリーが見せるその瞳は、ラ・ピュセルサバイブには向けられていなかった。頬を朱色に染め、欲望の赴くままに、体を動かす。飽くなき欲求が、クラムベリーの原動力なのだ、相手は否が応でも思い知らされる。事実、クラムベリーの過去を端的に聞いたラ・ピュセルサバイブの全身は、側から見ても震えている。

「魔法騎士ラ・ピュセル。あなたは素晴らしい。スノーホワイト同様、改めて価値を見直す必要がありますね。生き残っている魔法少女と仮面ライダーは、間も無く10人を切ろうとしています。敬意を表して、手加減なしでやらせていただきます。……原形も留めないほどの死体に、変えて差し上げましょう」

「……っ！ やられて、たまるか……！」

気力だけで持ち直すラ・ピュセルサバイブ。死にたくない。生きてい。仲間を守りたい。理想を叶えたい。そんな感情が、言葉に出ずともヒシヒシと伝わってくる。

クラムベリーにはそれが滑稽に思えた。戦いに意味など求めてどうするのだろうか。どちらかが生き残り、どちらかが死ぬ。結局のところ、この戦いの行方は2つに1つだ。余計な思考は、戦いの勝敗を大きく左右する事に、彼女は気づいているのだろうか。

「名残惜しい所ではありますが、決着をつけましょうか」

「……そう、だな」

ラ・ピュセルサバイブは、大剣を片手に、呼吸を整える。先程のような、エクソダイバーとの連携による奇襲は先ず効かないと見て良いだろう。そう何度も偶然が続くはずもないし、向こうも対策は練っているはずだ。相手は本気でこちらを殺しにかかってくる。しかし力量の差は明らかだ。殺し慣れている相手に対し、どうにも良心は捨て切れない自分。だが、ここまで来て逃げる選択肢は選べない。ここで

パーツバイに装填する。弓を引いてチャージすれば威力が上がるが、この至近距離ならば、時間をかけずとも、絶大な威力をもって、敵を粉砕できる。

「(……なるほど)」

愚直に正面からしか仕掛けてこなかったのは、不意をついてこの状況を作り出し、背中を討つ為。高潔な騎士としてはあるまじき行為なのかもしれないが、それでも勝利を求めた結果、このような戦法に至ったのだろう。そこまでして勝利を得ようとする姿勢には、クラムベリーも評価していた。

「よせえラ・ピュセル！」

不意に、ラ・ピュセルサバイブの耳に、九尾の声が届いた。何故ここに彼が来ているのか？ 声のした場所を探ろうと、意識を目の前から逸らした。直後、それが間違いだと気づいた時には、クラムベリーの右肘が、みぞおちを直撃し、後退してしまう。

「(しまった……！ クラムベリーの魔法は音を自在に操る事！ さつきの九尾の声は、クラムベリーが僕を油断させる為に……！)」

だが体勢を整える間も無く、クラムベリーの右手がこちらに向けられている事に気付いた時には、すでにクラムベリーは笑っていた。鼓膜に響くほどの耳鳴りが、ラ・ピュセルサバイブの足を竦ませてしまう。

刹那、周囲の草が巻き上がり、後方の木々が軒並み吹き飛ばされた。轟音がラ・ピュセルサバイブの身を殴り、弾き飛ばされる。指向性の破壊音波である為、その分魔法の力を一点に集中させている為、威力は高い。地面に叩きつけられたラ・ピュセルサバイブの口と鼻から、生暖かい液体がドボドボと滴り落ちているのが確認できた。自分でも気づかないうちに、口の両端がつり上がっていた。

昔を思い出す。あの地下室で、この力でオーデインと共に悪魔を撃退したのだ。あの時の快感が忘れられない。忘れられないから、今でもこんな風に試験の中で、数多の魔法少女や仮面ライダーの候補生を吹き飛ばしてきた。ファヴに何度も殺してはならないと注意されても、本能のままに、魔法を行使してきた。

ラ・ピユセルサブアイブが立ち上がってきているのが、遠目で確認できる。いつもならこの一撃で相手の息の根が止まっているのだが、単純に狙いが逸れたのか、相手の耐久値が高かったのか、まだ立ち上がろうとしている。

まだ勝利を掴もうと、抗おうとしているのか。なるほど確かに、ここまで生き残るだけの事はある。根性だけなら、他の魔法少女や仮面ライダーと比べても、トップクラスに入る。

「……でも、勝てないんですけどね」

そう呟いた時には、かざした右手は射程圏内を捉えていた。ハツとなったラ・ピユセルの素顔が見えた時には、上空に吹き飛ばされ、無抵抗のまま、地面に叩きつけられ、バウンドして草むらの中に消えたのが確認できた。

「……少々勿体無かった気もしますね。動きも良いですし、発想力も勘も良い。魔法能力も決して悪くはありませんでした。後は……、経験値の乏しさと、戦いの意味を履き違えたまま私の前に現れた愚行が、この結果ですかね」

顎に手を当てて、そう考察するクラムベリー。

強い相手が足掻き苦しみ、それでもクラムベリーによって討ち滅ぼされる。そしてクラムベリーはギリギリで凌ぎ、勝利する。そうやって彼女は、戦いに悦を感じられるように立ち回ってきた。本来、試験監督であるクラムベリーが勝ち残っては、強者を選別するという目的に反しているのだが、力量差も見抜けず、自分に粉をかけてくる間抜けが悪い。強さの違いが把握できていないのだから、その間抜けは選ばれるべき強者ではない。それがクラムベリーの持論だった。

殺し合いという分野に関しては、クラムベリーに勝てる魔法少女や仮面ライダーなど、N市内には存在しない。例えそれがパートナーであるオーデインだとしても、自分にはそれを上回る力がある。候補生の1人であるラ・ピュセルなど論外だ。

「……おや？」

クラムベリーは首を傾げる。

森の音楽家は耳が良い。平均的な魔法少女よりも遥かに優れた聴力を持つ。当然ながら、ラ・ピュセルが全身を強く打ち、骨の折れる音も聞こえていた。仕留めたかと思っていたが、まだ鼓動も呼吸も止まっていないのが分かる。

「虫の息、ですか。2回も私の破壊音波をくらっっていながら、でもまだ生きていようとは」

なかなか打たれ強い。サバイブの力を得た事で、思った以上に耐久値が上がっていたのだろう。クラムベリーは苦笑する。ならば次に自分が取る一手はただ一つだ。

「フフフ……！ 良いでしょう。ぐちゃぐちゃに踏み潰して差し上げますよ」

完全に息の根を止める為に、草むらをかき分け、倒れているラ・ピュセルに向かって歩み寄り、踵を上げる。後頭部を踏み砕いて、今度こそ終わらせようとしている。

「やあ、これでお終いで……？」

直後、クラムベリーの表情が、恍惚から困惑へ。その原因は、目線の先に広がる光景にあった。

踵を向けた先に、ラ・ピュセルは、魔法少女はいなかった。人間の、それも中学生と思しき少年が、息も切れ切れに倒れているではないか。これがラ・ピュセルの変身前の姿である事にはすぐに気づいた。音波による攻撃で意識が途絶えて、変身が解除されたのだろう。

クラムベリーには、人間性が磨耗しているという自覚はあった。魔法少女だろうが、人間であろうが、必要があればどんな相手でも殺してきた。そこには、小学生だろうが大人だろうが赤ん坊だろうが老人だろうが、関係なかった。恩人恋人親兄弟、誰であつても抹殺する。年齢も関係性も度外視して。

しかし、ほんの一瞬だつた。コンマ一秒の、半分もいかないくらいの短い時間ではあるが、踵を下ろすのを躊躇してしまった。

クラムベリーには、試験監督という立場上、この試験に参加する魔法少女や仮面ライダーについて、オーティンと共にデータを閲覧する権利があつた。しかし戦闘狂である彼女にとって、個々の強さや能力には興味を持っていたが、正体に関しては全くの無頓着だつた。それが裏目に出たのだろう。対峙した魔法少女の正体が、幼女でも熟女でもなく、異性であるという事実が、クラムベリーを戸惑わせた。

「(これが、ラ・ピュセルの正体……?)」

動揺し、心が乱れるクラムベリー。

ここで思い出してもらいたい。戦いにおいて、余計な思考は勝敗を大きく左右する事になる、という言葉。

変身、と小さな呟きが聞こえてハツとなつた時には、光が解けて、男子中学生は魔法騎士へと姿を変え、右手に持っていた短剣が、クラムベリーの服を貫通した。貫通したとは言つても、実際に服を貫いて腹に食い込んでいるのは、剣先だけで、僅か数ミリほどしか傷が付いていない。咄嗟に放たれた一手は体力の疲弊によって、痛みですら換算できていなかった。当然ダメージなどない。笑みを浮かべるクラムベリーは、勝利を確信する。

不意に視界が歪み、その目線が上空に向けられている事に体が気づくまでは。

一瞬の事で、理解が追いついていない。下半身の感覚がない。血が、温もりが、腹の下から抜け落ちていく。

腹から上、つまり上半身だけが上空を舞い、腸が地面に零れ落ちていくのが理解できた。何がどうしてこうなったのか困惑するクラムベリーだったが、すぐにその原因が分かった。ラ・ピュセルの魔法は、剣の大きさを自在に変化させるもの。それが小さな剣であっても、一瞬にして大剣に変貌させる姿を何度も見てきた筈だ。

そして、体に突きつけられた短剣が魔法によって肥大化した場合、その体はどうなるのか。

巨大なギロチンと化した大剣が、クラムベリーの体を両断するなど容易い事だろう。力のこもった、懐に飛び込んだ明確な一撃だ。

相手を見て油断した事に対する後悔が頭に浮かんだが、それを掻き消すように、目の前に人影が。地面から飛び上がったラ・ピュセルだ。体を切断しただけでは足りないと思っただのか。徹底した攻めの姿勢に驚くクラムベリーだったが、不意に笑みが零れた。

眼前には振り下ろされる大剣が迫っているが、その奥に見える、魔法騎士の瞳は、死が近づいている森の音楽家の瞳にしっかりと刻まれていた。月明かりをバックに、突き刺すように鋭く、獣のように研ぎ澄まされており、明確な殺意を持ってぶつけている、その目線。

嗚呼、これだ。確信すると同時に、目の前は真紅に塗りつぶされ、

ラ・ピユセルの全体像は掻き消された。

息を荒げて地面に着地すると同時に、クラムベリーの上半身が音を立てて目の前に落ちてきた。その上半身には、大きく斜めに裂かれた傷跡がある。そこから流れ出る血がドクドクと地面の草を真っ赤に染め上げていく。ふと見れば、自分の体にも、クラムベリーの返り血が染み込んでいる。あれだけ至近距離で魔法を行使し、折れた左腕を庇いながらトドメを刺したのだから、こうなるのも無理はない。

「…………… はあっ……………」

膝をつくラ・ピユセル。視線が下降して、上半身から零れ落ちる腸や臓器が見えてしまい、吐き気を覚えるラ・ピユセル。そのきつかけを作ったのは自分だが、未だに実感が湧いてこない。

自分が、クラムベリーを殺した。この激しい命の奪い合い改めサバイバルゲームにおいて、重要とも言える役割を果たしたにも関わらず、満足感は微塵として受け入れられない。

「…………… フフフ。アハハ……………」

ハツとなつて視線を上げると、未だに笑みを崩さないクラムベリー

の顔が見えた。傷も深く、既に血が体内から流れ出て、いつ絶命してもおかしくない筈なのに。痛覚が麻痺しているのだろうか。

「……やっぱり戦いは、ゾクゾクする……！　なんて、心地良い……！」

それから目線が、こちらを唾然とした表情で見つめるラ・ピュセルに向けられる。

「ラ・ピュセル……！　ようやく、見つけましたよ……！　わたしの理想に、相応しい魔法少女……！」

「！」

「生かして育てて、私のように、強さだけを、生き甲斐にし、最強を常に、目指し続ける……。九尾ならそれが出来ると、確信していました……！　ここにも、いましたか……！」

段々と目線が外れかけている事に、本人は気づいているのだろうか。血を吐きながら、クラムベリーは笑みを崩さない。

「最後の最期で、造り上げた……！　私の、理想の、魔法……少女……！　勝利の、為なら……！　全てを捨てても、戦う……！　ラ・ピュセル……！　あなたは……！」

そこまで言い切った後、静寂が続いた。上半身に力が入っていない。今度こそ事切れたようだ。

月明かりに照らされながら、膝をつくラ・ピュセルは、呆然と静止している。体は、冬場なのに火照っている。体内に流れる血がそうさせているのか、はたまたこの返り血が、そうさせているのか。

しばらくして、轟音を聞きつけて駆けつけたであろう、同じチームの魔法少女と仮面ライダーが姿を見せた。目の前に広がる光景に、一同は息を呑む。

ナイト、リップル、ライアはラ・ピュセルが生存していた事に安堵し、龍騎とトップスピードは両断された状態で事切れているクラムベリーを目の当たりにして、唾然としている。スノーホワイトとハードゴア・アリスは、どう声をかけるべきか分からずとも、ラ・ピュセルに駆け寄り、無事を確認する。彼らの存在に気づいたラ・ピュセルは、一度彼らの方を向いて、そのまま倒れかかる。咄嗟に九尾が彼女の体

を支え、緊張から解放された反動からか、変身が解けると同時に、意識を手放した。

九尾は何も語る事なく、その体を抱き上げ、騒ぎにならないうちに、皆と共に撤退する事に。

一度だけ、九尾は顔だけを変わり果てた音楽家に向けたが、すぐに視線を外した。音楽家の、死して尚も恍惚な表情は、見るに耐えないものがあつたようだ。

《中間報告 その18》

【クラムベリー（本名不明）、死亡】

【残り、魔法少女5名、仮面ライダー6名、計11名】

128. 最後の平穩

「残ってるのは、11人……」

自分1人しかいない室内にて、ベッドの上でうつ伏せになりながら、大地は呆然と呟く。外では参拝客らしき声が飛び交っている。世間一般で言う所の冬期休暇に入り、神社に出入りする人も増えてきているが、ほとんど耳に入っていない。

先日のクラムベリー脱落から、早3日。この理不尽なデスゲームにも、いよいよ終わりが見えつつあった。生き残りの枠は8つ。現時点で残っている仮面ライダーと魔法少女の数は、計11人。数日の内には、3人がいなくなり、長きにわたる地獄から解放される。

しかし、それが何よりも怖かった。その3人の中に、同じ派閥として共に戦ってきた者が、最低でも1人は含まれてしまうのだ。仮に敵対勢力である王蛇とオーデインを倒せたとしても、まだゲームは終わらない。それに王蛇とオーデインは、共に仮面ライダーの中でもズバ抜けた戦闘力を兼ね備えている。強敵を前にして、勝てるビジョンが浮かばないのもまた事実。最悪の場合、同じチームの中から3人脱落する可能性を踏まえなくてはならない。

「どうすりゃいいんだよ……!」

頭を抱えて悩む大地。そんな彼の元に、今となっては嫌気が差すような声が聞こえてきた。

『ああ、やあつぱりここにあったのかほん!』

それは、机の上に放つてあった、マジカルフォンと見た目は同じだが、少しだけ装飾がある円形の端末から浮かび上がった、魔法少女育成計画のマスクットキャラクター、ファヴの声だった。

その端末は、元々はクラムベリーの持ち物だったが、先日、ラ・ピュセルがクラムベリーを倒した後、九尾達が駆けつけ彼女を介抱。その際、足元に転がっていた端末を拾い上げ、手掛かりになるかもしれないと考えてそのまま懐に入れていた。後にその端末が、自分達が住むN市にいる魔法少女及び仮面ライダーの監督役である事を示す、魔法の国特製のマジカルフォンである事を、折れた左腕が完治しつつある

颯太から聞かされた。監督役というのは、即ちクラムベリーである事は容易に想像できた。

やはり彼女は、このゲームの根本に関わっていた。できる事ならもっと情報を聞き出したい所だが、既に仲間の手で葬られた後だ。パートナーであるオーデインの足取りも掴めぬまま、行き詰まっていた所に、ファヴが姿を見せたのは、ある意味で好機だったのかもしれない。

だからこそ、ラ・ピュセルを唆し、同じ魔法少女を仕方なかったとはいえ殺害させるに至らせた元凶に怒りを覚えつつも、それを悟られぬように感情を押し殺しながら、起き上がって机の上に顔を向ける。『クラムベリーがやられて、この端末がどこにあるのかずっと気になってたけど、森の中に放置されてなくて良かったぽん！』

「……言いたいのはそれだけか？ だったら帰ってくれ。こっちは1人になりたい気分なんだよ」

『まあまあそう言わずに。仮面ライダーの中では新人でありながら、ここまで生き残っている功績者である九尾にこの端末を拾ってもらえるのは、こちらとしても有難い事なんだぽん』

「? どういう事だ」

『特別に教えてあげるぽん。実は後3名脱落しなくても、生き残れる方法があるんだぽん』

僅かに、ピクリと小さく跳ねる大地を目視したファヴは、意気揚々に語り始める。

『この試験を終わらせる方法。それは、マスターの脱落ぽん』

「マスター……。それってまさか、颯太が言っていた、この街を事実上牛耳っていたクラムベリーの事なのか……?」

『うーん、それじゃあ50点だぽん。確かにクラムベリーもマスターの1人である事に違いはないけれど……』

ここまで聞けば、大地もファヴが示そうとしている答えが見えてきた。

「マスターは他にもいると言う事か。だとしたら、パートナーのオーデインが……」

『大正解だぼん！この際だからネタバラシするけど、この試験はマスターの考案によって成り立っていると云っても過言じゃないぼん。選抜方法はマスターの采配によって幾らでもあるけど、クラムベリーとオーデインのそれは、明らかに異常をきたしている。これは九尾も嫌というほど味わったはずぼん？』

「……やはりこの戦いは、あいつらが」

『ぶっちゃけた話、ファヴもシローも、2人の言いなりになる事にうんざりしてたんだぼん。これまでも稀有な能力を持つ魔法少女や仮面ライダーは悉く2人の手で潰されてきちゃったし、そろそろ魔法の国としても人材確保の死活問題に関わってきそうだから、これを機に現状を打開しようと考え、こうして九尾をお願いしに来たんだぼん！』

「……それはつまり、残ったマスターであるオーデインを倒せ。そう言いたいんだな」

『そうだぼん。そうすれば、これ以上無駄な犠牲は無くせるぼん』

左右に小さく揺れながら、平然と答えるファヴ。最初からマスターを倒せばゲームが終わると分かっていたならば、何故もつと早く教えてくれなかったのか。鋭い視線を浴びせてくる大地を見て、ファヴはその質問に答える。

『や、あのね。本当はもつと早く教えてあげればなあとは思ってたんだけど、クラムベリーに口止めされちゃってて、中々言い出せなかつたんだぼん。それにクラムベリーもオーデインも、とつても強いのは知ってたから、正直脱落するとは思わなかつたんだぼん。そこへ来てマスターの片割れがやられたから、ひよつとしたらって思いで顔を見せたんだぼん』

「……」

『本当なら、クラムベリーを倒したラ・ピュセルに、新しいマスターになつてもらいたいなあとは思ってたんだけど、本人は全然乗り気じゃないみたいだし、何となくマスターには不向きな感じがするぼん。ただオーデインを倒すだけなら、シローを通じて王蛇にもお願いしてもいいかなうなんて思ってたけど、それはそれで後が困るぼん。彼は能力と殺人のセンスは天才的だけど、管理者としては全く向いてない』

し、頭の配線が何本か焼き切れているぽん。放って置いたら、今回以上に悲惨なゲームが開催される危険性があるぽん』

それは確かに、と同情しつつも、段々とファヴに肩入れしてしまっている自分に腹が立ってきている。

『とまあ以上の点を踏まえて、現状オーデインに勝てる可能性のある仮面ライダー、九尾に是非ともお願いしたいんだぽん。九尾がマスターになってくれたら、安心できるぽん。てなわけで期待してるぽん！』

そう告げると、要は済んだとばかりにそそくさと端末から消えるファヴ。それと入れ替わる形で、今度は仮面ライダー育成計画のマスコットキャラクターが、隣に置いてあった自身のマジカルフォンから浮かび上がる。

『……ファヴからある程度の要件は聞かされたようだな』

シローは隣に目をつけてそう呟く。

「次から次へと……。同じ事を言いに来たのか？」

『まあ、そんな所だ。取り越し苦労だったようだ。なら、早々に失礼させてもらう』

そう言っただけで消えるのかと思っていたが、何故かしばらくの間、そこに居座ってジツと大地を見ていた。

「……何だよ」

『少し忠告をな。オーデインが裏で何かをしている事は前にも話したが、いよいよそれが本格的に動き出しそうだ』

「！」

『後悔しないように心がける事だ』

そうして今度こそ姿を消したシロー。再び静寂が部屋の中を包み込む。ため息を一つついて、再び寝転がる大地。

オーデインの企みも気になるが、それ以上にファヴの話が脳裏から離れられない。オーデインを倒して、自分がマスターになる事で、このゲームを自身の権限で終わらせられる。当然、仲間を切り捨てる事なく、生き残れる。胡散臭い話ではあるが、状況証拠だけなら、辻褄があっているのもまた事実。

さけれど不安の方が全体を占めている。これまでに2回ほど対峙したオーデインだが、あれは他の仮面ライダーと比べても、異常な強さを兼ね備えている。最初に戦った時は、ラ・ピュセルと2人がかりでも圧倒された。その後、サバイブの力で戦った時も、苦戦する事は無かったが、それでも劣勢だった事には変わりない。そしてもう一つ、仮に今の自分の力がオーデインを上回ったとしても、完全に息の根を止めるだけの覚悟が、自分にあるのだろうか。以前、恩師であるオルタナティブをベルデに殺され、仇を取ろうとした事があった。しかし目前で躊躇った。故に今の自分に、自分の手を汚す事なんて無理だと思いは知らされ、それでも無念に散った者達の意志を継いで戦ってという、スノーホワイトとの一戦で覚悟を決め、新たな力を手に入れた。

大地は瞑想する。こんな時、彼女ならどうするのだろうか。少し前に、仲間を守る為にその手を血で染めたパートナーなら、どんな事を思うのか。彼女の傷心を抉るようで躊躇いもあったが、悩んだ末に、大地はマジカルフォンを取り、彼女に確認のメッセージを送った。

「……………なんか、久しぶり、だよね。こうやって、だいちゃんと並んで歩くの」

「……………そう、だな」

自分から誘ったにも関わらず、会話が長続きしない自分の不器用さに呆れを感じつつ、大地は小雪と共に住み慣れた街の商店街を歩いていた。特にプランはなかった。

冬休みに入り、すれ違う人の数もいつもと比べても多くなった。だが、いつもこの時期になるともつと人で溢れかえっていたような気がする。

「まあ、無理もないか」

大地が心の中でそう呟くように、心当たりはあった。この街で相次ぐ、若者を中心とした不審死。中宿で起きた、日本国初のテロ行為。脱獄犯とその仲間と思しき女性が起こした立てこもり事件。これらの要因が、外を出歩くのを躊躇わせる要因なのかもしれない。

改めて見ると、いつも通りだと思われていた日常が、こうした綻びで変わってしまう事に関心がいく大地。いつも通りで変わり映えがなく、どこか冷めた感じで毎日を過ごしていた自分にも、微量な変化に気づくだけの心はあったんだな、と思い知らされた。

それから大地は、小雪に顔を向ける。あの日以来、やつれたような雰囲気が目立っていた彼女だが、少しずつ元の姿を取り戻しつつあるようだ。その事に少し安堵する大地。

「?どうかした、だいちゃん?」

「っ。いや、何でも……。それより、少しいいか? 出来れば、ここじや話しくいから……」

それを聞いて、彼女の顔が僅かに強張ったように見受けられた。何かを悟ったような顔つきだ。小雪は小さく頷くと、大地と共に商店街から離れるように小道に入った。

しかし冬休みという事もあってか、思うように人目から遠ざかる事が出来ない。仕方なく、人がいなくなつたのを確認した2人が変身して、見つからないようにビルの上を飛び跳ね、人の気配がない場所へと向かっていった。

そうして2人が自然と足踏みを揃えて辿り着いた場所は、海水浴場前の鉄塔。まだ魔法少女や仮面ライダーになりたての頃、ライアとラ・ピュセルと共に待ち合わせ場所にしてた高台だ。依然として人

の気配はなく、ここでなら気兼ねなく話せると思った。ただ、夕方とはいえ肌寒い風が肌を撫でる。変身を解除した2人は自然と寄り添った状態で腰を下ろした。

「懐かしいね。あの時も、こうやってみんなで仲良く話したりしてたの、覚えてる？」

「……ああ」

「……ねえ、だいちゃん。今更だけど、どうして、私に会いたいって思っただの？」

「……」

さすがにこれ以上は黙ってられない。そう思った大地は、小雪に顔を向ける。その真剣な表情に背筋がピンと伸びる小雪。

「……なあ、小雪」

「う、うん」

「小雪は、さ。魔法少女になれて、後悔とか、してないか？」

それを聞いて、言葉が詰まる小雪。魔法少女に憧れていた彼女の、今の心境。明るく平和的なものだと思っていたものから裏切られた、暗くて残酷的な悲しみと絶望。この数ヶ月でどんな変化があったのだろうか。

「……キャンディーの数とかは、正直、どうでも良かったと思う。ただ、魔法の力で困ってる人を助けて、その人が笑顔になるのを見て、生きてるって自分に言い聞かせていたんだと思う。だから、魔法少女になれて、だいちゃんや色んな人達と出会えて、新しい世界に出会えたみたいで、凄く嬉しかった」

でも、魔法少女や仮面ライダーを笑顔には出来なかった。小雪は、スノーホワイトは、その部分を強調させる。

「みんな友達だと思ってたし、大切な人だと思ってた。ねむりんがいなくなった時も悲しかったけど、それ以上に、先生が死んじやった時から、段々魔法少女や仮面ライダーが殺されて、いなくなる度に、心が苦しかった。こんな苦しい思いをするなら、魔法少女にならなければ良かった。そんな事を思ってた時もあつた。スイムスイムを殺しちゃった時も、自分はもう、魔法少女じゃられない。自分が何の為

に生きてるのか、分からなくなった」

淡々と吐露する小雪を黙って見つめる大地。夕日は沈み、段々と街頭に灯りが入り始める。

「……でもね。だいちゃんが教えてくれたんだよ。大切な人を守る為に戦ったなら、それも魔法少女なんだって。あの一言があったから、私は立ち止まらなくて済むんだよ。スイムスイムを殺した罪は消えない。消えないから、今度は同じ過ちを犯さない為に、私は魔法少女として、今の日常を守っていききたいの。……なんて、変だよ。泣き虫で弱虫で、逃げてばかりだった私が、こんな事言えるなんて」

最後の方は苦笑いになりながら、己の生きる理由を語る小雪。その姿に、大地は自然と圧倒されていたのかもしれない。今まで、守るべき対象としか捉えていなかった彼女が、ここまで強くなっていたとは。

「……そうか。強いな、小雪は」

「えっ。そ、そんな事ないよ。だいちゃんの方こそ、みんなの為に一生懸命になつて、頑張ってきたんだよ。私は、そんなだいちゃんにいつしか憧れて、もつと強くなりたい。自分の意志を持って魔法を使いたい。そう思えるようになったきっかけを作ってくれただいちゃんに、感謝してるんだよ」

「小雪……」

「選ばなかった事を後悔するんじゃないよ、後悔する前に、自分で選ぶ。もう遅いかもしれないけど、これからは、そんな魔法少女で在りたい。だから、魔法少女になれた事を後悔は、してないよ」

後悔はしていない。その一言を聞いて、大地はどことなく安堵した表情を浮かべる。ここに至るまで色々な挫折があつたにも関わらず、最終的にはここまで強くなれたとは。

ならば、自分も後悔しない道を進んで行こう。これから先、スノーホワイトや仲間と共に。

「っと。そろそろ時間だな。みんなと合流しないとな」

決意を新たに、立ち上がろうとする大地だが、不意に小雪が彼の袖を握り、止まってしまう。

「ね、ねえだいちちゃん。その……。もうちよつとだけ、このまま一緒に、いてくれる、かな……。？」

「……そう、だな。お前がそれを望むなら、何なりと」

そう言ってお礼と言っては何だが、小雪のわがままに付き合う大地は腰を下ろす。肌と肌が触れ合う寸前まで近寄り、冬の寒さに負けぬように、暖め合う2人。間も無く、夜が訪れる。魔法少女として、仮面ライダーとして活動するにはうってつけの時間帯だ。

もしかしたら、こんな景色が見られるのも今日が最後になるかもしれない。でも、もう一度見たい。一緒に並んで座りたい。その為にも、生き残りたい。その為には、戦うしかない。もう躊躇わない。大地は、握ろうとしてきた小雪の手を逆に握り返した。

その頃、ミラーワールドのとある川原では……。

「もうすぐ、全てに決着がつく。この世界に、人間の悪意が蔓延する限り、真の安息は訪れない」

そう呟く、黄金色の仮面ライダーの目線の先には、繭に包まれた物体が、川を埋め尽くしていた。彼は腕を組みながら目線を上げ、ジツと虚空を見つめている。

「全てを終わらせよう。人智を超えた力を持って、この世界に、肅清をかけるでしょう」

129. 最後の戦いへ

冬休みに入り、N市には子供を含め、商店街を中心に多くの人で賑わう光景が、あちらこちらで見られるようになった。売り子の呼びかけや、家族連れ、カップル、友人同士が和気藹々と話しながら街を歩く姿は、平和そのものだ。

時計の長針と短針が共に上を向いた頃、街に12時を告げる音楽が響き渡る。

その異変は、何の前触れもなく訪れた。音楽に混じって、耳鳴りに近い音が、1人だけでなく、大勢の耳に聞こえてきた。周りの面々が訝しむ中、街中のガラス窓から湧くように現れた存在が、綺麗な青空を一瞬にして悍ましいものへと塗り潰した。

怪物だ。誰かがそう叫んだと同時に、その怪物は地上にいる人々へと向かってきた。怪物は押しつけるように逃げ惑っていた人々に襲いかかってその鋭い鉤爪で引つ掻いたり、噛み付いたり、殴り倒している。或いは車のフロントガラスにへばりつき、パニックになった運転手がハンドル操作を誤り、玉突き事故の連鎖を引き起こしている。

その大混乱は、以前繁華街で起きたテロに匹敵、或いはそれ以上の惨状となって、人々に『絶望』を撒き散らしていく。

「モンスターの大量発生。」

その一報は、N神社で掃除を手伝っていた榊原大地、自室に籠っていた姫河小雪、サツカーの小道具の手入れをしていた岸边颯太と、彼の手伝いをしに家に来ていた鳩田亜子、自宅で占いをしていた手塚海森、出産に備えて必要なベビー用品を買い出しに出かけていた城戸正史と室田つばめ、そしてバイト先の喫茶店に向かっていた秋山蓮二と細波華乃。彼ら9人が所有するマジカルフォンを通じて知らされた。

「『『『『『変身！』』』』』」

9人は魔法少女、仮面ライダーに変身し、現場から少し離れた位置で合流する事に。

「ど、どうなってるんだよこれ……!?？」

「白昼堂々、か。随分と派手な動きを見せてきたな」

トップスピードが呻き、ナイトが冷静に思考を処理するが、彼自身も、何故これほどまでの大量発生となったのか、理解できていない様子だ。

「……奴だ」

ただ1人、九尾は確信を持って呟く。

「オーデインが仕掛けてきたんだ。何か企んでいるとは思ったが、ここまで考えていやがったとはな……!」

「オーデインが……!」

「とにかく、まずは街に放たれたモンスターを倒すぞ」

「ああ！これ以上被害を拡大させる訳にはいかない！」

ライアとラ・ピュセルが同時に頷き、一同も街に足を向ける。

否、この男だけは別方向を向いていた。

「？九尾？」

「どう、しました」

スノーホワイトとアリスが、九尾に問いかける。問われた相手は、瞑想しているようにも見受けられる。やがて口を開いた彼の声色は、固く意を決したものであった。

「……俺は、オーデインの所に向かう。あいつは、俺が倒す」

「なっ……!?？」

「今回の一件の発端は、奴が元凶だ。あいつを倒さない限り、この戦いは終わらない。だから、俺の手で、終わらせるんだ……！これ以上、あいつの身勝手に誰かの命が奪われるのは、もう……！」

「でも……！」

「合理的だな。奴がモンスターを大量にばら撒いているのなら、どの道大元を倒さない限り、戦況は覆らない。……けど、本当にあなただけ、いいの？」

リップルは九尾の意見に賛同しつつ、彼一人でオーデインと戦う事に不安を感じているようだ。オーデインの強さは、この場にいる面々は十分理解しているつもりだ。一人で立ち向かって勝算はあるのだろうか。そんな目線での問いかけに、九尾は仮面の下で静かに笑った。

「正直、どこまでやれるか分からないけどな。全く勝ち目がないわけじゃねえけど、勝てる見込みもない。……けど、俺は戦う。生きる為に、戦わなくちゃならない。相手がどれだけ手強い奴だとしても、戦わなければ、生き残れないから。……なんて、それらしい理由なんて一つもないけどさ。今からじゃ遅すぎるかもしれないけど、俺に、託してくれないか？このゲームを終わらせる為に、みんなの命運を」

九尾の懇願に対し戸惑う一同だったが、最初に口を開いたのは、彼の教育係だったライアだった。

「……分かった。俺の占いで判断しようと思ったが、ここは一つ、お前に賭けてみよう。お前なら、運命を変えられる筈だ」

「オレも、お前を信じるぜ！オレも、こんな理不尽な戦いなんてさっさと終わらせたいんだ。もうすぐ産まれてくる子を、みんなに会わせていしー！それが今の、オレの夢だしな！」

「……ああ！俺も、絶対にトップスピードを守る！明日に、命を繋げる為に！」

トップスピードも照れ笑いしながら、今は膨れていない腹をさする。龍騎も確固たる意志を告げた。

「……本当なら、九尾に、無茶は、してほしく、ないです。……でも、これは、九尾の決めた事なら、私は、あなたを、信じます」

「僕としても、できる事なら九尾には、自分の手を汚してほしくはない。命の奪い合いなんて残酷な事は、してほしくない。けど、僕自身もクラムベリーに手をかけている。みんなを守る為に……。だから、九尾の決めた事には今更反対できない。でも、だからこそ、勝ってほしい。共に戦ってきた盟友として、そして何より親友の1人として、自分の正義を、貫いてほしいんだ」

ハードゴア・アリスとラ・ピュセルからのエールを受け、静かに頷く九尾。次に口を開いたナイトは、こんな事を暴露した。

「……今だから、正直に言わせてもらおう。俺には今まで、仮面ライダーに選ばれるまで、『友』と呼べる奴は、1人もいなかった。特別欲しいとも、思わなかったしな。……ただ、お前らだったら、呼んでも良いかもしれない」

「ナイトさん……!」

「!ああ、そうだな。友達だよ。俺達は」

この発言には、九尾のみならず他の面々も驚きを隠せない。その一方で龍騎は、ようやく聞けたナイトの素直な発言に、笑みをこぼしている。

「俺にも、生きる理由がある。戦う理由がある。どんなに可能性が少なくても、俺は、どうしても見つけたい『家族』がいる。そして今は、やっと手に入れた『仲間』を、失いたくない。……必ず勝てよ、九尾」
「……私とあなたには、それほど接点がある訳じゃない。けど、あなたがこれまで多くの人の助けになろうとしてきた事は、よく分かっている。その正義の心を、忘れないでほしい」

リップルは恥ずかしそうにそう呟く。そして最後に口を開いたのは、九尾のパートナー。

「九尾……ううん、だいちゃん。本当に、行くんだよね?」

「ああ。スノーホワイトの方も、大変かもしれないけど、頑張れよ。お前はもう、弱くない。立派な魔法少女だ。自信を持ってよ」

「……うん!私も、九尾を信じる!だから、頑張つて……!」

スノーホワイトは九尾の手を掴み、願掛けとばかりに、祈るよう
額を近づける。そして彼女の手が離れた所で、九尾は皆に背を向ける
ように、その場から離れようとする。

「いよいよ、最後の戦いが、幕を開ける。」

「……あ、ちよつと待って！最後に一つだけ！」

飛びあがろうとする直前、龍騎が待ったをかけた。何事かと首だけ
を向ける九尾に向かって、龍騎は伝え忘れた思いを、ただ一言だけ告
げる。

「……死ぬなよ、大地君」

死ぬなよ。その一言を聞いて、背を向けた九尾からの返事もただ一
つ。

「……貴方もな、城戸さん」

足に力を込めて飛び上がり、電柱の上に着地してから、更に遠くへ
と跳ねるように去っていく後ろ姿。中学生とは思えないような、堂々
とした姿勢だ。

それを見送った一同も、自分達の戦いを始めるべく、悲鳴が飛び交
う戦場へ向かって飛び上がった。

「挿入歌：Revolution」

つい数分前まで栄えていた繁華街は、突如として地獄絵図と化していた。辺りには逃げ遅れた人々が、歩道の至る所に倒れており、ぶつかった衝撃で燃えている車も数台ほど確認できる。そして徘徊している怪物……レイドラグーンやハイドラグーンが、今尚逃げ惑っている獲物を捕食しようと動き回っていた。

「た、助けてえー！」

お昼休みの外食に出ていたであろう社員が、背後から迫り来るレイドラグーンから逃げようと、必死に駆け抜けていた。途中で転がっていた男性に足を取られてしまい、倒れ込む社員。チャンスとばかりに、レイドラグーンが両手を広げて襲いかかる。

もうダメだ。そう自分に言い聞かせて脱力しかけたその時だった。

『!?!?』

突然、レイドラグーンが横に吹き飛んで倒れ込んだではないか。よく見ると、頭にクナイが突き刺さっている。困惑している社員の前に、何かが降り立った。忍者のようなコスプレをした、少女と思しき背中が見えた。

「早く行け……」

「えっ」

「何も考えるな！とにかく逃げのびろ！」

謎の少女の一喝を受けて、妙な安心感を覚えた社員は、足に力を込めて立ち上がり、再び駆け出す。心の中で、助けてくれた少女に礼を告げながら。

少女……リップルは社員が遠くに逃げたのを確認すると、後から湧くように現れたハイドラグーンを見据えて、短刀を構えた。

「ハアッ！」

「大丈夫ですか!?!?」

「これ以上……やらせるかあ！」

リップルから少し離れた場所では、他の魔法少女や仮面ライダーが、モンスターに襲われている人々を守るべく、蹴り飛ばしたり、安

全な場所まで誘導したりと、奮闘していた。

「逃げて、早く！」

レイドラグーンに襲われていた学生の無事を確認し、遠くへ逃げるように指示してから、周りに逃げ遅れている人がいないか確認する。

「！」

いた。車のドアの近くに身を潜め、怯えた表情を見せる幼い少女の姿が。親はどこかではぐれたのか、モンスターに襲われたのか、近場にはいないようだ。

他の仲間は、武器を駆使してモンスター達を薙ぎ払いながら人命救助に専念しており、誰も少女に気づいていない。

「大丈夫？？君一人なの？？お母さんは？？」

龍騎は少女に駆け寄り、周りの安全を確認する。少女は目の前に現れた、正体不明の仮面の人物に戸惑いを隠せない様子だ。

「ここにいたら危ない……早く逃げなきゃ」

少女を担いでその場を離れようと、前を見上げたその時、前方からレイドラグーンが鋭い腕を突き付けながら迫ってくるのが見えた。

「！」

龍騎は矛先が少女に向けられていると思い、咄嗟に背を向けて少女を庇う体勢に入る。

偶然にもその光景を、エビルウィップを振り回してハイドラグーンを倒していたライアが目撃する。脳裏によぎるのは、少し前に占った光景。今の状況と同じような背景に加え、少女を庇うように立っている龍騎。

同じだった。あの時占った光景と。そしてレイドラグーンの刃が向かう先は……。

「よせ……いやめろお！龍騎いいいいい！」

間に合わないかと悟りつつも、龍騎に向かって駆け出すライア。このままでは、占い通りに、龍騎は『死』の運命を辿ってしまう。

「(占いが、当たってしまう……！)」

「死

な

せ

る

！」

その声はライアの背後から聞こえてきたかと思うと、目にも止まらぬ速さで彼を追い抜き、今まさに龍騎を貫こうとしたレイドラグーンに追突した。

「えっ……」

いつまで経っても痛みを感じない事に戸惑う龍騎と、目の前にいたレイドラグリーンが消えた事に驚く少女。

ふと横に目を向けると、レイドラグリーンは壁に突き刺さっており、その傍らに降り立ったのは、箒に跨っている西洋の魔女……トツプスピードだった。

「危機一髪だったな！けど危なっかしいなあ龍騎！間に合わねえかと思っただぞ！」

「あ、ありがとうトツプスピード！」

「九尾と約束したばっかだろ？だから絶対に死なせねえよ。あんたがオレら2人を守ってくれるように、オレもお前を守ってやるからよ！」

「……！ああ！じゃあトツプスピード、この子を！」

「おう！安全な所に！っ飛びだ！」

そう言っつて少女をトツプスピードに預けると、アクセルを吹かして安全な場所まで飛び上がったのを確認して、ホッと一息つく。

確かにあの時トツプスピードが助けてくれなかったら、レイドラグリーンの一撃で装甲を貫いて致命傷を負っていたかもしれない。そうなったら、九尾との約束はおろか、トツプスピード……もとい室田つばめのご飯が食べられなくなる。

その選択肢の中には、ちゃんと自分も含めろ。リュウガとの一件で思い悩んでいた際にかけてくれた、大久保編集長の言葉が脳裏をよぎる。改めてその言葉の意味を再認識する正史であった。

「……ん？ライア？」

一つ気合を入れて目線を上げると、ライアが近くにいた事に気づいた。

「ひよっとして助けに来てくれたのか？ならありがとな。見ての通り、トツプスピードに助けてもらったから、平気だ」

「……なら良い。また一つ、運命を変えられたからな」

「へっ？」

「とにかく気をつけるんだな。まだ敵は相当数いるんだ。ここで倒れてもらっては困るしな」

「ああ、俺はもう大丈夫だ！絶対死なないって約束したしな！ツシヤア！」

気合いを入れ直した龍騎は、再び人々を襲っているレイドラグーンやハイドラグーンに立ち向かっていく。

彼は死の運命を回避した。もう大丈夫だ。

それを確認したライアは、龍騎を見送った後、近場のモンスターを退治に向かう。

「ハアツ！」

モンスターを薙ぎ払いつつ、近くに生存者がいないかを確認するライアだったが、不意に横の路地から唸り声にも似た声が。モンスターに襲われている人がいるのかと思って駆けつけ、瞬時に足を止めた。そこにレイドラグーンがいたのだが、人を襲ってはいなかった。その逆だ。レイドラグーンは男性に首を掴まれてグツタリしていた。その男性は蛇柄の服を着ており、その顔には嫌というほど見覚えがある。

「浅、倉……！」

「お前か……！丁度良い。うるさくて眠れなくてイライラしてたんだよお……！」

この路地で昼寝をしていたらしい浅倉はそう吐き散らすと、レイドラグーンを地面に叩きつけて踏みつけた。生身でミラーモンスターと対等に渡り歩いているその姿を見て、やはり浅倉を人間とは見れない。ライアは身構える。

「ライア！」

と、そこへ異変を感じて駆けつけたナイトの姿が。そんな彼も、浅倉の姿を確認して、仮面の下から睨みつける。

「今日は一段と機嫌が悪そうだな」

「ハツ……！ライダーが2人……！お前らとなら、良い戦いが出来そうだなあ……！」

狂気に満ちた表情を浮かべる浅倉は、懐からカードデッキを取り出

し、前に突き出すと、横にあったガラスを介して、腰にVバックルを装着する。

「変身！」

ポーズを取ってカードデッキをはめ込むと、鏡像が重なって、仮面ライダー『王蛇』に変身。首や肩を鳴らすと、早速ベノバイザーを取り出し、カードをベントインする。

『SWORD VENT』

同じタイミングでナイトもカードを使い、両者の手に、ウイングランサーとベノサーベルが行き渡る。

「構えろ、ライア。どの道こいつは救助の邪魔だ。ここで倒す」

「……やるしか、ないようだな」

ライダーとの交戦を避けてきたライアだが、やむなしとエビルウイツプを構える。

「クッククク……いさあ、俺を、楽しませろお！」

モンスターの大量発生によって大混乱となる中、モンスターと称された最恐の仮面ライダーが、路地の一角で牙を剥いた。

130. モンスターが選ぶ道

くイライラしたからく

浅倉 陸にとって、数多の悪事に手を染めた理由は、その一言に尽きる。もつとマシな言い訳はないのか、と呆れる者もいるかもしれないが、それが彼の本音なのだから、仕方ないのだ。

家庭環境は、決して良いとは言えないものだ。父からのDV、それを受けた母からの八つ当たり、ただ泣き喚くだけの弟。それらが複雑に絡み合い、浅倉の中は、得体の知れないもので毎日煮えくりかえっていた。

そんな中での、彼の唯一のストレス発散といえば、ケンカだった。相手は誰でも構わなかった。歳下の子供だろうが、ヤンキー上がりの高校生だろうが、拳を振るえる相手がいるだけで、満足していた。

自分の中に理由もなく溢れてくる、闘争心と憎悪、更には常に暴力の中で生きてきた事が積み重なった結果、ある時を境に、彼は頭のネジが外れたのか、自分以外の家族が寝静まっている間に、家に火を放ち、全焼させると同時に3人の親族を葬った。当時13歳の彼が警察に疑われなかったのは、彼がやったという明確な証拠が一切残っていない事や、まさか中学生が、自分の家族を手にかけるなどありえない、などといった配慮もあって、結果として当時の警察の調べでは、『両親が火の管理を怠り、偶々外に出ていた彼だけが助かった』という形で一旦幕を下ろす事に。その後は遠い親戚の援助もあり、高校に通いながらアルバイトを転々とするなど、人間らしい最低限の行動はしていたが、その間にも、彼の中で世間に対する苛つきが溜まり続けており、ある日を境に、彼は人間を辞めた。

それ以降は自分でも歯止めが効かなかったらしく、『イライラした』という理由だけで、常に標的を求めては襲撃し、強盗や暴行などの犯罪を、警察に追われながら続けていた。酷い時には殺人も犯しており、殺した数は、本人曰く『イライラし過ぎてて、殆ど記憶にない』との事。

長い逃走劇の末、若手の刑事だった『須藤 充』らを初め、多くの警察官の動員の成果もあり、遂に浅倉は逮捕。尚も暴れ続けるその凶暴性に危機感を覚えた一同は、即座に拘置所に放り込まれた。

捕まってもなお、外に出たい欲はあり、弁護士として悪名高い『北岡 賢治』に弁護を求めるが、その彼を持ってしても、あまりにも罪状が重いという事で、どれだけ手を尽くしても懲役10年が限界だと告げられた時には、『役立たず』と称して、生まれて初めて、明確な殺意を覚えた。

どうにかしてあの弁護士を殺したい。早く外に出て、このイライラを発散したい。そんな自分を夢見ていた時、それは轟音と共に、唐突に訪れた。

「あんたにチャンスを与えてやりに来たのさ」

後に開催されたデスゲームのパートナー、魔法少女『カラミティ・メアリ』が、牢屋を破壊したとされるバズーカーを片手に、笑いながらそう語っていた。最初は喧嘩の相手が増えただけだと思っていたが、彼女は自分の事を気に入ったのか、協力的な姿勢を見せ始めた。類は友を呼ぶ、とまではいかないかもしれないが、浅倉自身も、この魔法少女に対してはさほどイライラしなかった。似たような境遇にいたからなのかもしれないが、ともあれこれで再び自由を得られたのに変わりはない為、互いに狂気に満ちた笑い声を響かせながら、シャバの空気を満喫する事に。

拘置所を脱獄して最初にメアリに案内されたのは、人目につかない森の中。誰かと待ち合わせをしているようだ。しばらくして彼の前に姿を見せたのは、薔薇のエルフを彷彿とさせる魔法少女と、黄金色の不死鳥をモチーフとした仮面ライダーだった。

「こんばんは、浅倉 陸さん。私は森の音楽家クラムベリー。話は隣にいるオーデインから全て伺っております」

「ようやく会えたな」

「……アア？どういう意味だ」

ミステリアスな雰囲気醸し出す2人を前に、浅倉はイライラする以前に、理解が追いつかない様子だ。

「お前には、私と同じ仮面ライダーとしての資格がある。この力を手にすれば、人間を遥かに超越した、絶対的な力を手にする事が出来る。望みを果たす事も、造作もなくなる」

そう言つてオーデインが懐から取り出したのは、どこにでもあるようなスマホだった。浅倉自身は端末などの類は生まれた時から一度も手にした事がない為、興味津々だ。

「何だそれは」

「本来ならこの『仮面ライダー育成計画』をやり込む事で適合者を見出し、力を与えるのだが、お前は端末の操作を知らないだろうから、今回は特例だ。数を増やすのが目的である以上、時間をかけさせる訳にはいかないからな。既に準備は済ませてある。後は、その画面をお前自身の手でタップしろ。そうすれば、お前は力を得られる」

差し出された端末の画面には、鳥のようなマスケットキャラクターが、今か今かと待ち構えている。それをひったくった浅倉はしばらく画面を眺め続けていたが、次の瞬間には、狂気に満ちた笑みを浮かべる。

「……こいつを押せば、北岡を殺せるのか？」

「正確には、そうする事が出来る力を手にするのだがな。ただし注意しろ。下手に一般人に正体がバレてしまった場合は、その時点で資格を剥奪する。その力で暴れるのは自由だが、慎重に相手を選ぶ事だな」

「知るかそんなもん。俺は、戦えればそれでいいんだよお！」

そう叫んで画面をタップする浅倉。次の瞬間には、浅倉の姿はオーデインとシローの手で予め設定されていたアバターと同じ姿になり、仮面ライダー『王蛇』は、変貌し自身を見回しながら、歓喜に満ちた雄叫びを、森の中に轟かせた。

「ツラアアアアアアア！」

ベノサーベルが空を切り、壁から火花が散る。ナイトとライアを武器突き出し、王蛇を後方に吹き飛ばすが、さほどダメージは入っていない様子だ。狂ったように笑いながらベノサーベルを振り回し、壁に破壊の跡を刻んでいく。比較的狭い路地では、格好の的になりかねない。2人は一旦表通りに戦いの場所を移す。周りにはモンスターはおろか、人の姿もない為、巻き添えをくらう事はないだろうが、仲間からの援護も難しいはずだ。

「(それでも、やるしかない……!)」

これまでではどちらかといえば、シスターナナのような立ち位置で、争い……もとい殺し合いには極力関わろうとはしなかったライアだが、かつては教育係として育ててきたナイトが、最恐のライダーに立ち向かう姿勢。そしてパートナーであるラ・ピュセルを初めとした多くの仲間が、その手で運命を変えようと抗ってきた闘志。それが、ライアに戦う為の一步を踏み出させた。

「ウオオオオオオオオ！」

エビルウィップを振るい、王蛇に少量ながらもダメージを与えていく。

『SWING VENT』

「今度はお前が……!俺と遊んでくれるのかあ！」

「ライア！」

「心配するな!気が狂った訳じゃない！」

ナイトの呼びかけにそう反応し、ライアはエビルウィップを王蛇の

右腕に絡め取って、思いつきり引つ張る。眼前に来た王蛇に左手で殴り続けるライア。果敢な攻めの姿勢に、王蛇も足元がおぼつかない様子だ。

「フハハハハハハハハッ！」

『STRIKE VENT』

だが王蛇はそんな事などお構いなしにと、メタルホーンを装着して、ライアを攻撃する。鋭い突きを回避しつつ、ライアは王蛇の右腕を掴み、動きを封じると、そこでようやく口を開いた。

「ライダーや魔法少女同士の戦いが始まって、最初は遠ざけてきたお前とは、嫌というほど戦ってきた……！お前と手合わせする度に、お前の事が、少しずつ分かってきた……！確かにお前は、戦いに飢えた、モンスターだ……！戦う事が、お前にとつての、唯一の生き甲斐……！お前は生まれた時から、抗いようなない運命に縛られて、戦い続けてきた……！そうなんだから……！」

「知るかそんなもん……！グダグダ言わずに、戦ええ！」

ライアを振り解き、突き出したメタルホーンがライアの右肩を掠め取る。ライアは右肩を抑えながら、語り続ける。

「可哀想な奴だな……！戦う事を運命づけられているというのは……！だが、お前を知る事で、お前が本当に望んでいる運命も、分かってくる……！」

「何の事だ……！」

「……お前は、死ぬ事を望んでいるんじゃないのか？」

「!?？」

ライアの唐突な一言は、王蛇だけでなく、後方にいたナイトの手を止める事に。

「自分で気づいているかは分からないが、お前の度を越えた戦いぶりには、同時に自分の寿命を縮ませる。今にしたってそうだ。幾ら異常な精神力を持っているお前でも、人間の域を脱却する事は出来なかった。度重なる戦いの結果、お前の体は、既に限界に達している。その姿が、何よりの証拠だ」

ライアが指摘しているのは、王蛇の状態だ。ナイトも目視で確認し

引き抜く。

『UNITE VENT』

『SCYTHE VENT』

『STRENGTH VENT』

1枚目は、現在王蛇が従えている3体の契約モンスターを合体させ、ジェノサイダーを召喚させるカード。2枚目は、レアアイテムの1つで、アビスを倒した際に拝借した、極めて強力な武器。3枚目は、今は亡きパートナーの力を宿したパートナーカードで、手持ちの武器を強化。王蛇は、持ちうる戦力を最大限に引き出し、2人を殺そうとしているようだ。

『TRICK VENT』

ライアサバイブだけでは危険だと判断したナイトは、『シャドローリユージョン』を使って手数を増やす事に。

「モンスターは俺がやる！お前は王蛇を！」

「ああ！」

ライアサバイブは頷き、

『COPY VENT』

王蛇が持っている大鎌をコピーして、手元に構える。

「ウオオオオオオオオオ！」

「ハアッ！」

甲高い金属音が鳴り響き、激しく火花が散る。だが同じ武器であっても、王蛇の方はパートナーカードの効力で威力が上がっている為、実際にはライアサバイブが防戦一方のようだ。

「（今は、それでいい……！奴が力を使い果たした時が、勝負だ！）」

「ウオラア！」

王蛇は、足が震えているにもかかわらず、果敢に攻めてくる。ライアサバイブに指摘されてもなお、戦う事を止めない。側から見れば狂人の域に達した行動。しかしライアサバイブにとって見れば、虚勢を張っているようにも見えたのだ。

哀れな奴だ。ライアサバイブがそう思っていると、遂に戦局が動いた。

「グッ!?・ウオオ……!」

大鎌を振るい続けてきた王蛇の膝が曲がり、地面に触れる。足のバランスを崩したようだ。

「……」

『SHOOT VENT』

エビルバイザーツバイの先端に電気を溜めると、そこから雷を帯びた矢『ライトニングアロー』が放たれ、王蛇の右脇腹を貫く。血が流れ出て、呻く王蛇だが、その程度では、と言わんばかりにこちらへ駆け抜けてくる。

『THUNDER VENT』

だが手を緩めるつもりはない、と言わんばかりに、次なるカードをベントインし、上空にエクソダイバーを出現させると、腹の車輪が回転し、雷を落とす『ヴェイパースパーク』が炸裂。王蛇は回避する間もなく全身が痺れ、遂に大鎌が手元から離れる。手から離れた事でパートナーカードの効力が意味を成さなくなり、雷に打たれた大鎌は刃先が割れてしまう。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

『FINAL VENT』

あらん限りの雄叫びをあげて、王蛇はカードをベントイン。コピーを含めたナイトと戦っていたジェノサイダーの腹部が、ブラックホールのように漆黒の空間を作り上げる。ハツとなって後方を見ると、直線上にライアサバイブや王蛇の姿が。

『FINAL VENT』

「これで、終わらせる……!」

ライアサバイブも決着をつけるべく、カードをベントイン。上空を旋回していたエクソダイバーが急降下し、ライアサバイブは飛び上がって構える。王蛇は腹部を負傷しているにもかかわらず、気にも留めない様子で、ライアサバイブに向かって走ってくる。

「(雄)……。お前もさぞ無念だったろうな。こんな奴のせいで、運命を狂わされ、拳句死を選んだ。だから、ほんの少しだけ、お前の仇を討たせてもらう!だがこの一撃は、奴の運命を変える為のものだ!そ

はしていない。腹部から血が出ているのは、王蛇の、肥大化した大鎌の先端からだった。

『ALTER VENT』

「皮肉なものだな……。パートナーカードの力を借りて、お前にトドメを刺すとは」

「ウツ……！グアアアアアアアアアア……！」

王蛇はライアから離れ、よろけて、そして仰向けに倒れ込んだ。と同時に変身が解け、腹から血を流す浅倉の姿が露わとなる。ライアも起きあがろうとしているが、力を使い果たしてしまったのか、思うように動いていない。すかさずナイトが駆け寄り、肩を担いで浅倉から遠ざかる。

「一体何が起きた……？」

「簡単な事だ。パートナーカードで、こいつを肥大化させた。向こうの一手が届く前に突き刺すつもりだったが、そう都合良くはいかなかったか」

「それは分かる。それより、どうして奴の攻撃がお前を貫けなかった？メアリの魔法で強化されていた筈だ」

「それも単純明快だ。奴のパートナーカードの効力がたった今切れた。だからこの胸の怪我も、大した事にはならず済んだ。どうやら、俺の中の悪運が、奴に勝ったようだな」

フツと笑いながら、徐々に足に力を込めるライア。

「……ここだけの話。俺の占いが正しければ、俺はこいつに勝つ事は出来なかった筈だった」

「！」

「俺の占いは当たる。だが」

「運命は変えられる……。だろ？いい加減聞き飽きた」

「……よく分かってるじゃないか」

「とにかく、これ以上ここに長居する必要はない。こいつはどの道助からないだろうしな」

依然として腹部から出血している浅倉を見下ろしながら、ナイトはこの場からの離脱を提案する。ライアも、これ以上は無理だと判断し

たった。ここまでの乱闘で破壊された部品のようにだ。拾い上げると、狂気に満ちた表情で鉄パイプを握り、そのまま獣の咆哮と共に、変身する事なくシアゴーストに殴りかかる。鈍い音がぶつかり合い、鳴き声が響き、地面を赤く染め上げる。

それでもなお、浅倉は笑い続けた。戦い続けた。全身を赤く染め上げながらも、戦いに悦を感じ、本能のままに腕を回し続ける。地獄と化したN市の繁華街の一角で、狂ったような雄叫びが、しばらくの間、轟き続ける。

数時間後。

駆けつけた警察官の目についたのは、全身を噛みちぎられた痕を遺しながらも、狂ったような笑みを浮かべ、仰向けに倒れ込んでいる、脱獄犯の生き様だった……。

《中間報告 その19》

【王蛇（浅倉 陸）、死亡】

【残り、魔法少女5名、仮面ライダー5名、計10名】

131. Destinyを覆せ 九尾vsオーディン

飛び交う悲鳴、響き渡る怒号、砕けるガラス、轟く爆音。

それらを、現場から少し離れた高台から見下ろしているオーディンの耳には、まるで1つの曲のようにも聴こえていた。

「……俺も、随分とクラムベリーに毒されたのかな。だが、もうどうでも良い事だ。今更仮面ライダーや魔法少女が介入した所で、運命は変えられない。人類は、この街を起点とし、滅びの道を進む」

『随分と派手な行動に出たな』

懐にしまつてあつたマジカルフォンから出てきたシローは、オーディンが見下ろしている光景に目をやる。

『ミラーモンスターのサンプルを採取し、自分の駒として開発していたか。おまけにお前の魔力に反応して数を増殖させる。奴らからしてみれば、これほど厄介な事はないだろう』

「余計な口出しは無用だ。それでも、お前が望んでいた、人間の価値を確かめる事や、ファヴの言っていた刺激のある展開を考慮して進めていた事なのだよ」

『……成程。なら我々は、この件を魔法の国には「偶発的な事故」として報告しておけば良い、という事だな』

「……お前は話が早い。ファヴのように嫌味を言うわけでもないからな」

『褒め言葉として受け取っておこう。……だが、全てが思うようにいかないのが、人間の醍醐味だ。今しばらく経過を観察させてもらうぞ。まもなく私の知りたい答えが見えてくるはずだ。……そろそろ私は離れるよ。あの男との決着に、私がいては不都合だ。幸運を祈るよ』

そう告げると、マジカルフォンから姿を消すシロー。再び爆音等が耳にこびりつく。

が、ものの数秒もしないうちに、背後から足音が。誰かがこちらに

向かって来ている。オーデインには、それが誰のものなのか予測できていた。

「やはり来たか」

背中越しの相手は、まだ答えない。

「4ヶ月程前だったか。偶然とはいえ、お前はラ・ピュセルと共に私と戦った。力の差は歴然だった。お前をあの場合で殺さなかったのは、お前を真の仮面ライダーとして育てる為だ。多少計算は狂ったが、結果として、お前はここまで生き延びた。北欧の神の名を冠する私に臆する事なく、今こうして、私の背後に立っている。……おめでとう。君はまさに、私やクラムベリーが理想としている仮面ライダーに近づきつつある。人間からの逸脱だ。……さあ聞かせてもらおう。人ならざる者に近づきつつあるお前は、今は何を望む」

「お前を、殺しに来た」

間髪入れず、狐を横した仮面ライダー『九尾』が、仮面越しに鋭い視線をぶつける。オーデインは振り返り、落ち着いた様子で腕を組む。

「私を殺す、か。夢を見過ぎているのかもしれないが、サバイブの力を手に入れた如きで、私を倒せると？それが如何に高飛車な事であるのかは、以前にも実演してみせたはずだが？」

「……だとしても、俺は必ず成し遂げる。お前を倒し、可能な限り、人間を救う。あいつらの所には行かせない。ここで全てを、終わらせる！」

「……良いだろう。お前を殺すつもりはなかったが、お前がそれを望むのであれば、この試験の管理者として、手を差し伸べるのも一興だ。代わりの候補者を、次の試験で見つけるとしよう」

余裕綽々としたオーデインの態度に、思わず拳を握りしめる九尾だが、すぐに気を落ち着かせる。せつかく高めた集中力を、ここで途切らせるわけには行かない。

「ミラーワールドで決着をつけよう」

ついてくるが良い。

オーデインが足を動かし、向かった先は、電話ボックスのガラス戸。

そこへ吸い込まれていくのを確認した九尾も、それに続く。

あらゆるものが反転した世界。先ほどまで聞こえていた爆音も、この世界には届かない。否、数秒後には、それに劣らぬ程の轟音が響き渡る事だろう。

九尾は、やや距離を離れた状態でオーデインと対峙する。そしてカードデッキから1枚のカードを取り出し、突き出したフォクスバイザーを、フォクスバイザーツバイに変化させ、そのままベントインする。

『SURVIVE』

光が、九尾の背後から彼を包み込む。対するオーデインも、

『SWORD VENT』

ゴルトセイバーを構え、静かに剣先を九尾サバイブに向ける。無言のプレッシャーが、九尾サバイブに突き刺さる。

「……っ！」

それらを振り払うように、先んじて足を動かしたのは、九尾サバイブ。

『人間』を代表し、神に挑む『榊原大地』。

『人間ならざる者』を代表し、戯れに付き合う『オーデイン』。

さあ、戦え。

己の持つ力を遺憾なく発揮しろ。

戦わなければ、生き残れない。

「はあっ！」

獲物を求めて街を徘徊しているレイドラグーンに、スノーホワイトは先ほどマジカルフォンをタップして召喚したフォクセイバーは果敢に斬りかかっていた。その姿勢は、この試験が始まったばかりの、先の見えない恐怖に怯えてばかりいた頃の魔法少女の面影は、もう払拭されていたと言っても過言ではない。

「これ以上は……、やらせない！」

依然として敵の数は減らない。だが、やるべき事は変わらない。魔法を行使し、困っている人の声を辿って、人々に降りかかる脅威を退ける。

「スノーホワイト、後ろ！」

ハツとなつて振り返るスノーホワイトだが、すでに背後から向かつ

てきていたハイドラグーンは、斬り伏せられていた。代わりにリップルが背中合わせで降り立った。

「リップルさん！」

「まだ背後への配慮が疎かになってる。敵は広範囲にいる。前方だけに意識を向けないで」

「！はい！」

リップルに注意され、視線を周囲に向けるスノーホワイト。レイドラグーンの大群が、いつのまにか2人を囲んでいる。

「この数、切り抜けるには私1人では無理がある」

「……大丈夫です！私も、魔法少女だから！どんな困難が目の前にあっても、仲間と一緒に切り抜ける！私が理想としていた魔法少女だって、そうやって頑張ってきた！だから、負けない！」

「！言うようになったわね。なら、背中も任せよう！」

「はい！」

この数ヶ月で頼もしい背中を見せるようになった後輩の姿を見て、自然と安心するリップル。現状は不利だが、耐え抜くしかない。彼が、仮面ライダー九尾が、元凶を止めるまでは。

「（だいちゃん、私も頑張るから、だいちゃんも……！負けないで！）」

結局の所、だ。

勝負にならない事など、初めから心の片隅で、理解していたのかも
しれない。

「!?アア!?アアガア……!」

斬りかかったと同時に背後を取られ、ゴルトセイバーの一閃が九尾
サバイブの背中を斬り刻む。装甲を貫くような激痛が襲いかかる。

『SPIN VENT』

どうにか踏みとどまった九尾サバイブは、ガゼルススタッフを召喚
し、オーデインに突き刺そうとするが、受け止められると、そのまま
受け流すように引き寄せて、無防備な腹に一太刀を浴びせた。

「……っ!」

肉が裂けるような音が耳に響き、右の脇腹が熱くなる。肩膝をつき、地面に目を向けると、赤い斑点が落ちていた。自分の体から流れ出たものと認識するよりも早く、ゴルトセイバーが襲いかかる。

『GUARD VENT』

間一髪の所で、シエルデーフエンスが召喚され、一太刀を受け止める。少し下がって距離を置き、新たなカードを発動する。

『CLEAR VENT』

『STRIKE VENT』

メタルホーンを装備すると同時に、九尾サバイブは透明化。相手の見えない死角から、不意をついてダメージを与えにいくようだ。

「そんなものは無意味だ」

ただ一言、そう呟いたオーデインは両腕を広げ、周囲に黄金の羽根を撒き散らす。直後、爆発と共に何も無い空間から九尾サバイブが転がり出てきた。身体中から煙が噴き出て、メタルホーンもボロボロに砕け散る。

『STRIKE VENT』

だが奇襲に失敗した九尾サバイブも、すぐに気持ちを切り替え、アビスクローを装着し、アビスプラッシュをオーデインに浴びせる。が、オーデインは難なく回避。しかしそれも織り込み済みだったのだろう。

『BLAST VENT』

空いた片手で地面に刺していたフォクスバイザーツバイにカードをベントインし、現れたブランウイングが翼をはためかせ、突風を巻き起こす。回避した先に真正面から突風を受けるオーデイン。吹き飛ばされてはいないが、踏ん張っているのが確認できる。

『SHOOT VENT』

好機と見た九尾サバイブは、ギガランチャーを構えて、狙いを定める。照準を合わせると、迷う事なく引き金を引く。

『GUARD VENT』

対するオーデインは新たなカードを使って、ゴルトシールドを手に持ち、ギガランチャーの攻撃を受け止めた。突風が消えた所で、再び

オーデインは接近し、ゴルトセイバーの太刀を連続で打ち込む。

『SWORD VENT』

九尾サバイブはベノサーベルを構えて応戦。が、二刀流のオーデインを前に、全てを捌き切れない。ベノサーベルが弾き飛ばされ、無防備な九尾サバイブに、オーデインは容赦なく斬りつける。

「ッグ……！」

装甲の傷口から、血が飛散する。が、そんな事を気にする間も無く、叩きつけられた九尾サバイブの胸を踏みつけるオーデイン。空気が吐き出される。その喉元に向けて、ゴルトセイバーの刃先が光る。左腕で足を退かそうとするが、間に合わない。咄嗟に残った右腕でカードデッキに手を触れ、新たなカードをベントインする。

『TRANS VENT』

直後、九尾サバイブの姿は小さな鳩に変貌し、ゴルトセイバーは標的を外して地面にささる。鳩はそのままオーデインから距離をとった所で地面に降り、元の姿に戻る。危機一髪だった九尾サバイブはすぐに息を整え、次の体勢へ。

『ACCEL VENT』

「ハアッ！」

地面を蹴ると同時に、目にも止まらぬ速さでオーデインに接近戦を挑む。が、オーデインからしてみれば、相手は歩いているようにしか見えていないのか、子供相撲を取るかのように簡単にいなしている。

『HOLE VENT』

しかしそうなる事も読んでいたのか、新たなカードを使い、オーデインの背後に穴が形成され、そちらにオーデインが気を取られた隙に、タックルでその穴に突き落とした。

『BLAZE VENT』

そして右手に巨大な火球『フォクス・ウィルオ・ザ・ウィスプ』を宿し、逃げ場のなくなった穴の中に投げつけ

「だから言っただろう。そのような小細工は無意味だ」

る直前、背後から声が聞こえ、ハツとなった時には、既に移動していたオーデインの強烈な蹴りが炸裂し、九尾サバイブは吹き飛ばされ

る。火球が手元を離れて地面に触れて爆散。九尾サバイブの姿が一瞬見えなくなる。

『STRIKE VENT』

『STRENGTH VENT』

やがて炎の中から出てきた九尾サバイブの両手にデストクロウが装着される。更にそれと同時に聞こえてきたストレンジスベントの能力で、更に殺傷力を上げてきたようだ。こうなると、オーデインとて無防備に攻撃を受ければ無傷では済まない。

「それを受けるわけにはいかないか」

『ADVENT』

直後、上空からゴルトフェニックスが襲来し、九尾サバイブの両肩を掴むと、そのまま空に持ち上げる。両腕を必死に振り回す九尾サバイブだったが、届く事なく、急降下して地面に叩きつけられる。肺の中の空気が口から溢れ出た。咳き込む九尾サバイブに向かって、ゴルトフェニックスが襲いかかる。危険を察した九尾サバイブが、デストクロウをクロスして防御の体勢に入る。が、それを見越したのか、オーデインが新たなカードをベントインする。

『STEAL VENT』

「?？」

両腕に装着されたデストクロウが、オーデインの両腕に移行。ガードする術を失った九尾サバイブに、ゴルトフェニックスの突進攻撃が直撃。体をくの字に曲げ、背後の木に背中につけた。たまらず、口から赤い液体が飛散する。お腹から上の部分で何かが潰れたような感覚に陥る。体がフラフラする。どこかの器官が損傷したようだ。早く病院で治療しなければ、命に関わるかもしれない。

「……………けどー」

ここで撤退するわけにはいかない。逃げた所で、外の世界は大混乱に陥っている。病院にたどり着ける保証などない。

ならば、ここで取るべき選択は、ただ一つ。

「……………戦う、しかねえだろ……………」

「まだ抗うか。そろそろ力の差というものが理解できたかと思った

が。まだ足りぬか」

「知るかよ、んなもん……!」

『HOLD VENT』

そう叫んだ九尾サバイブはバイオワインダーを装着し、オーデインを拘束する。

『LIQUID VENT』

続けてカードをベントインした九尾サバイブは、自らを液状化し、オーデインに詰め寄る。このカードの能力の元となった魔法少女の力は、よく分かっていた。物理攻撃をすり抜け、相手の懐に入れば、向こうが素早く動いてもすぐに追いつく。ここで攻めの姿勢を崩すわけにはいかなかった。

『SONG VENT』

……が、九尾サバイブは知らなかった。無敵と思われていたスイムスイムの魔法にも弱点がある事を。彼は仲間達がスイムスイムと戦った現場を見ていた訳ではない。そしてその弱点を突く力が、辛うじて手を動かし、元パートナーだった魔法少女のアバター姿が描かれたカードを引き抜いているオーデインにはある事も。

「……ウグア……!?!」

胸の辺りで何かが爆ぜたと思った時には、爆音がかなり遅れて、耳よりも骨を伝って全身に叩き込まれる。理解が追いついた頃には、彼の体は打ち上げられたボールのように、宙を舞っていた。数秒間の浮遊の後、体は背中から地面に叩きつけられた。

耳鳴りと同時に、肋骨辺りが砕けるような音が響き、内臓から迫り上がるように、口元から先ほど以上の赤黒い液体が吐き出される。呼吸が詰まり、息を吸い込もうとしても、何かがつかえたように上手く体が動かない。反射的に四つん這いになって喉元を叩く。とにかく今は気道を確保するのが先決だ。喉を詰まらせている粘ついた鮮血を吐き出し、何とか息を吸って吐く。

「スイムスイムの魔法を使って攻撃をすり抜け、こちらの動きに干渉するつもりだったようだが、無意味だったな。弱点である音の力を前にしては、お前とてどうしようもない」

「！そう、か……！パートナー、カード……！」

「相手が悪かった、というべきか。使い勝手の悪いあいつの魔法も、こういう時には役立つ」

そう呟いたオーデインが、右手を突き出し、音波による破壊攻撃を繰り返そうとする。

「！！」

『WALL VENT』

咄嗟に右腕を地面に叩きつけ、そこから2人の間に巨大な壁を形成。音波が大きな音を立てて壁を削り取っていく。その間に、呼吸を整えて反撃の準備に取り掛かる。

「！」

不意に音が鳴り止んだと思った時には、半壊した壁を飛び越えて、オーデインがゴルトセイバーを振り下ろしているのが見えた。慌てて回避する九尾サバイブは、ゴルトセイバーが地面に突き刺さった衝撃波で地面を転がった。そこから体の激痛に耐えながら起き上がり、上空を旋回していたゴルトフェニックスが向かってくるのを見て、新たなカードをベントインする。

『FREEZE VENT』

刹那、ゴルトフェニックスが凍結。これで契約モンスターの方を気にする事なく、オーデインと戦える。そんなオーデインはというと……。

『FINAL VENT』

ゴルトバイザーを手元に呼び出し、オーデインを象徴する紋章が刻まれたカードをベントインする。あれを使わせるわけにはいかない。九尾サバイブの判断は早かった。

『CONFINE VENT』

フリーズベントの効力が切れて、オーデインの背後に回ろうとしたゴルトフェニックスがガラスが砕けるような音と共に消滅。どうにかして必殺技の発動を回避できたようだ。

……が、局面が変わる事はなかった。

『OBEY VENT』

錫杖を構えて相手の動きを封じようとしても……。

『FUTURE VENT』

未来の道具を召喚し、殺傷性の高い武器で攻撃を仕掛けても……。

『TRANS VENT』

飛び上がって巨大な岩となつて覆い被さろうとしても……。

「ふんっ！」

全ての攻撃がかわされ、強烈な回し蹴りで、巨大な岩を弾き飛ばす。

「グハッ……」

地面を転がり、元の姿に戻つた九尾サバイブは、立ち上がった瞬間、右足に激痛を感じた。先程の蹴りがアキレス腱に響いたようだ。これでは大きく動き回る事さえ難しい。

「サバイブの力をここまで引き出したのは賞賛に値するが、それでもやっと、私の動きについてこれる程度だ。これが、人間の限界というものだと、いい加減知るが良い！」

そう言つて瞬時に九尾サバイブの前に立ち、ゴルトセイバーが振り下ろされる。鮮血が地面に、そしてオーデインに降り注ぐ。悲鳴をあげる事さえままならない。

「最期に一つ教えてやろう。サバイブとは、私のDNAデータを基に、シローの手によつてカードにその力を宿し、書き換えたものだ。故にお前達が持つサバイブのカードは、私の一部と言つても、過言ではない」

斬り刻まれながらも懸命にフォクスバイザーツバイで弾き返していた九尾サバイブも、それを聞いた途端、ハツとなる。

「！じゃあ、お前の、その姿は……！」

「察しが良いな。そうとも。私の今のこの姿こそが、サバイブそのものなのだよ。お前達は進化した事で誰よりも最強の力を手に入れたと自惚れていたようだが、所詮は私と同じ領域に触れただけの、ただの模造品なのだよ」

そう言つてオーデインが、手元に呼び出したゴルトバイザーの、羽の部分が観音開きのように展開され、その中にあつたカードを見て、九尾サバイブは目を見開く。間違いなく、『SURVIVEく無限く』

と表記されており、思わず立ち止まってしまおう。

「つまり！私を倒す事など、最初から不可能に近かった。故に参加者の1人であった私を倒そうと試みた所で、所詮は御伽噺。……九尾よ、お前はこの戦いの果てに散った骸の力を束ねて私に挑んだようだが、全ては無駄に終わったようだな。最初からお前達の戦いなど、無駄だったのだよ」

「無駄、だと……！」

頭に血が昇るような感覚に陥る。

それじゃあ。

自分達を夢の中から密かに応援してくれた魔法少女の死も。

あの日、自分を庇って攻撃を受け、満足げに生き絶えた恩師の犠牲も。

激化していく争いを止めようと努力し続けてきた魔法少女や仮面ライダーの死も。

仲間を庇い、母子の命をつなげてくれた魔法少女の犠牲も。

「全部、無駄、だった、だとお……！」

ふぎけるな。そんな事、認めてたまるか。

あらん限りの咆哮を喉元から振り絞り、フォクスバイザーツバイを振り回す。対するオーデインは、背後を取るように移動し、ゴルトセイバーによる連撃を叩き込む。

満身創痍な九尾サバイブと、無傷で武器を振り回すオーデイン。力の差は側から見ても歴然だった。

「ガアアアアアアアアアアアア……！」

斬り刻まれる度に流血し、意識が遠のき始める。左腕の感覚がなくなり、脇腹の傷が開き始める。

「ふんっ！」

両手に持ったゴルトセイバーが突き出され、不快な音と共に、赤く染まった九尾サバイブの上半身を貫通する。吹き飛ばされ、血が噴き出る。肺に傷がついたのか、呼吸する事さえ苦しくなっている。

起き上がる事さえ困難な状態を見て、オーデインは足を止め、1枚のカードを取り出す。

『STRANGE VENT』

そうして一度装填したカードを引き抜き、書き換えられたカードを新たにベントインする。

『RETURN VENT』

リターンベント。一度使用したカードを、インターバルタイムを無視して再度使用する事の出来る効力を持つカード。そうして手に入れたカードを、ゆっくりと装填する。

「……！」

首だけを動かし、そのカードが何なのかを確認する。逆光でよく見えなかったが、発動する直前で、それが何なのかを目視した。

『FINAL VENT』

それは、先程コンファインベントで無力化したカード。防御札を使い切ってしまった九尾サブイブに、ましてや体がまともに動かない状態では、彼の必殺技を止める術はない。

「せめてもの情けだ。ここまで戦い抜いた戦士に敬意を評し、苦しむ事なく果てるが良い」

背後にゴルトフェニックスを出現させ、腕を組みながら、上空に浮かび上がる。

「……っ！」

もはや絶望的な状況。詰んだと言っても過言ではない。

……が、九尾サブイブは立ち上がる。途切れかけている気力を振り絞り、尚も運命に抗う。彼は、誓ったのだ。失われた命の分まで、その思いを背負い、戦う、と。

「ッ！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!

灼熱の閃光に狙いを定め、声を張り上げて大地を蹴り、そして……。

が善戦していた。アリスが黒いドラグクロードで周囲の敵を焼き払い、討ち洩らしをラ・ピュセルの一振りで薙ぎ払う。互いに息のあったコンビネーションでほとんど敵を寄せ付けていない。

とはいえ長引く連戦は、次第に彼女達の体力を消耗させていく。ようやく視界から敵の姿が見えなくなった頃には、互いに肩で息をしているように、体が上下に動いていた。

「あ、アリス、平気か……?」

「はい、大丈夫、です……。まだ、休む時では、ありません、から……」
「そう、だな。辛いかもしれないが、今は辛抱だ。大丈夫、きつと九尾が、何とかしてくれる……!」

「……はい。今は、堪える、時間です」

「このままスノーホワイトの所に向かおう!アリス、動けるか?」

「問題、ありません。私も、彼女を守りたい。今度こそ……!」

「……ああ!」

そうしてラ・ピュセルとアリスは、別場所で戦っているスノーホワイトの所へ、駆け足で急行する。幼馴染みで、命の恩人である彼女が、何よりも心配だった。何より、スイムスイムに手をかけたあの日以降、目立った戦闘をしていない為、剣を取って戦う事に支障をきたすのでは無いか。そうなっては彼女の命に関わってくる。だからこそ、彼女の支えになろうと、2人は決めたのだ。

「スノーホワイト!そのまま突っ込め!」

「はい!ヤアツ!」

そんなスノーホワイトだったが、隻眼のリップルから見ても、めぐるましい成長ぶりに、場違いながら安心感を覚えた。

一度は同胞との戦いから目を逸らし、逃げ出した彼女も、戦う理由を見つけた頃から、数週間程で見紛うほどに動きのキレが良くなった。特訓を重ねる度に、その吸収率の高さが見て取れた。

それでも、不安はあった。スイムスイムを殺した時だ。殺されそうになったリップルを助ける為とはいえ、彼女は自らの手で、『争わず、手を取り合い、世のため人のために頑張る』魔法少女像を壊してしまった。その原因を招いてしまったリップルも、自責の念に陥ってい

た。

それでも、彼女は立ち上がった。その間に何があつたかは分からないが、彼女にとつての真の理想。即ち『皆を幸せにする』魔法少女になるといふ夢は、諦めていないという事だ。その気持ちだが、こうしてスノーホワイトに戦う力を与えた。最初は平和を愛し、なるべくしてなつた魔法少女だと認識していたリップルも、今となつては評価を改める必要がある。

彼女はもう、弱くない。

「ハアアアアアアアアアア！」

スノーホワイトの目に、迷いはなかった。これ以上被害を拡大させない為にも、今は別場所で戦っている、最愛のパートナーが帰つて来られるように。迫り来る敵を冷静に斬り倒していく。

「私は……負けない！」

尚も襲ってくるモンスターに対し、自分にそう叱咤した後、足に力を込めて駆け出そうとする。

『ADVENT』

だがその直前、別方向からダークウイングとエビルダイバーが体当たりをかまし、レイドラグーンを吹き飛ばす。

「スノーホワイト！」

「！ライアさん、ナイトさん！」

「張り切つてはいるようだが、飛ばし過ぎだ。肩の力を抜け」

スノーホワイトにそう指摘したナイトは、周囲に目をやる。遠くから、ハイドラグーンの大群が押し寄せてきている。さすがのナイトも、パートナーを真似て舌打ちをする。

そこへ龍騎ら4人も、スノーホワイト達と合流する。ふと龍騎が、ライアの装甲の傷や、所々流れている血を見てギョツとする。

「！お、おい！それって……」

「気にするな。ここに来るまでに、浅倉と派手にやってな」

「！あいつも来てたのか……」

「それで、あいつは今どこに……」

「……既に奴の運命は変わった。もう俺達の前に姿を現す事はない」

「(だから、頑張るよ……! だいちゃんも、頑張つて……!)」

くもつと早く、気づくべきだった

先ず、そんな感情が朦朧とする頭の中を渦巻いた。

拳を握り、地面を殴りたくても、感情をぶつけたくても、体が反応しなかった。限界以上に動きすぎた反動だろうか。

狭まった視界に広がるのは、砂の地面にじわじわと広がる、生臭くて赤い液体。それが自分の腹部や口から流れ出ているものだど理解するのに、さほど時間は掛からなかった。片隅には、オーデインの黄金色の足も見える。上から目線で皮肉に満ちた事を語っているようだが、聴覚が麻痺していて、上手く聞き取れない。

背中に何か刺さっているような気がする。血にまみれた腕が見える。変身は解けてしまっているようだ。そもそも何故、自分がうつ

伏せになっているのか。

確か、オーデインのエターナルカオスを受けて、吹き飛ばされた所まではうろ覚えている。あまりにも差がありすぎた一撃だった。少しずつだが、体の体温が低くなっていく気がする。この感覚が、これまで散って行った魔法少女や仮面ライダーが間際に感じてきたものなのか。そして自分も、これからその仲間入りする事になるのだろうか。

「(もつと早く、気づくべきだった……)」

改めてそう考える大地。

スノーホワイトだったら、もつと頑なに否定してきた筈だ。魔法少女と仮面ライダーが、異能の力を手に入れた者同士が、争い奪い、そして殺し合う。そんなやり方で、選ばれた者が、本当に人を幸せに出来るのか、と。

今まではどちらかと言えば無頓着だった大地も、自らの死の間際に、思うように動かない体でどうしても考え込んでしまう。単純な事だったはずなのに、何故それをハッキリと否定してこなかったのか。もつと良い方法があった筈だった。皆が犠牲にならずして、自分らしく生きていられる方法が。

戦いの渦中、それが自分に出来なかった要因。もしかしたらそれは……。

「(本当は、俺が、弱かった、から……?)」

スノーホワイトのキャンディーを奪おうとし、結果として裏切られた『ルーラ』。

幸せを求めていたにも関わらず、信用できないからと切り捨てた『インペラー』。

助けに来たのに逆に助けられ、自分の身代わりとなった『オルタナティブ』。

恩師の仇を討つべく、率先して敵地に突っ込んだ『ヴェス・ウインダープリズン』。

そしてその後を追うように散った『ファミ』と『シスターナナ』。
仲間を求め、最期に弱気な自分から脱却した『たま』。

お姫様に、そしてリーダーになろうと夢見ていた『スイムスイム』坂 嵐 綾 名。そして自分とは一見関係なく死んだ魔法少女や仮面ライダー。もし、もっと早くからやめさせるように動いていれば、自分が今以上に強ければ、もっと多くの人の運命を変えられたかもしれない……。もし今の現状が、自分の弱さのせいで生まれた歪みの結果だとしたら……。

「(……何で、こんな事に、なっちまったんだ……)」

そもそも、最初からこんな人生を歩むつもりなどなかった。

優しい兄や両親に囲まれながら、神社の手伝いをし、学校に通い、勉強に苦勞し、友達と遊んで、温かいご飯を口にして……。

そんな『ありきたりな普通』を、心の片隅で、望んでいた。理想とまではいかないが、時代の流行に合わせた普通を謳歌したかった。それだけで幸せだった筈だ。

それでも現実はず違った。兄はいなくなり、友達と遊ぶ時間もなくなり、毎日が同じ流れである事を自覚し、次第にそれが当たり前だと決めつけ、やがて『不満』を覚え、退屈だと思い込み始めた。何の為に生きているのか、分からなくなってきた事もあった。

そう思っていた矢先に、選ばれたのだ。退屈を紛らわす為の力。人智を凌駕する力。本当の自分を見出す力。

最初は満足していた大地だが、やがてそれは、血を血で洗う、バトルロワイヤルへと発展するなど、思ってもみなかった。周りで命が奪われていく中、彼は考えた。人生を退屈だと思っていた筈なのに、どうして今なお生き延びようとしているのか。

『だいちゃん』

不意に過ぎる、彼女の声。

『私の夢はね。みんなを幸せにする魔法少女になりたいんだ』

デートの日、隣に座る彼女が、沈む夕日を見つめながら語った言葉が、蘇る。

『だから、もしそれを壊そうとするものがいたら、その時は、絶対に逃げたりしない。戦おうって、決めたの』

あの泣き虫な女の子からは、先日辛い経験をしたばかりの彼女から

は想像もつかなかったセリフだ。

『今はまだ弱虫な私だけど、いつか絶対、追いついてみせるから。だから、ね。だいちゃん。私は……』

不意に思い出す。自分のマジカルフォンに入れてあった、依然と自分が使った事のない、たった一つの戦利品の存在を。

震える手で、端末を握る大地。オーデインは、決着がついたと思っているのか、背を向けたままだ。チャンスは、今しかない。

取り出したアイテムは、瓶の中に一粒だけ残っていた。前の所有者が殆ど使ってしまったからだ。だが、一粒有ればそれで良い。全ては運命への叛逆の為。完全勝利に酔いしれている、あの仮面ライダーを倒す為。そして彼女達に、自分の中で見出した『答え』を、伝える為に。

「挿入歌：Revolution」

「む………？」

不意に、背後から気配を感じたオーデインは瞬時に振り向く。そして僅かに組んだ腕がピクリと動く。

その少年は、変身解除後に、トドメとばかりに背中に突き刺したゴルトセイバーを、震える手で抜き取り、地面に放った。傷口から地面に流れ落ちる血が、より大きな水滴を形成する。誰の目から見ても、瀕死寸前だ。

何故立ち上がれる。その疑問は、彼の右手に握られていた瓶を見て察した。自分の記憶が正しければ、あれは激レアアイテムの一つ『元気が出る薬』が入った瓶。データ上ではユナエルが購入し、彼女の死後はスイムスイムが所持していた。その後の経緯は分からなかったが、どういうわけか、九尾の手に渡っている。

心当たりはあった。スイムスイムが殺された現場には、九尾を含め、チーム全員が訪れていた。立ち去る間際に彼が戦利品として僅かに残っていたその薬を回収していたとしたら。その薬を服用した事で、傷による痛みが和らぎ、立ち上がれる程に活性化していたとしたら。

「まだ抗うか」

それでもなお、オーデインはすぐに冷静さを取り戻す。アイテムに救われたとはいえ、戦況は変わらない。薬の効力などたかが知れている。効果が切れれば、その後の結末はほぼ見えている。だからこそ、黄金のライダーは問う。何故そうまでして、戦おうとするのか。

「……薬でキメるなんて、らしくないのは、自分でも分かっているよ……」

虫の息だった彼の喉から発せられる声は、血の粘膜がへばりついていのか、掠れていた。彼は、笑っているのか笑っていないのか、判断し難い表情だった。

物語の主人公なら、気合一つで立ち上がる所だが、そんな主人公補正など皆無だと自覚していた。だからこそ、彼は薬に頼った。周りからどれだけ不恰好だと、これ以上は無理だと言われても、彼は立ち止まろうとはしなかった。

どんなやり方であっても、この勝負に勝ちたい。そして仲間の所に帰りたい。そう思えるだけの理由を、導き出す事が出来たのだから。

「でもな……!」

明日も明後日も、未来永劫、酷い憎しみだけが、人間を支配しようとして手を伸ばす！それがこの世界の、運命だ！」

大きな金属音が、ミラーワールドに響き渡る。オーデインのゴルトセイバーによる一太刀を、フォクセイバーで防いだのだ。

「だったら……！」

超えるべき嘆きの嵐さえ、許したくはないのが、人間の本性。そんなのは辛い、怖い、知らない、目を背ける。

だが、それでも、この少年だけは、逃げなかった。腕からは、先ほど負った傷が広がり、更に血が流れる。例えこの傷が塞がらずに痛みを伴い続けたとしても、守りたいものが彼にはある。

「決められた限界を……！今、壊して、超えるだけだ！」

ガツ！と不意に九尾の腕に力が入り、ゴルトセイバーが打ち上げられた。不意の一手に驚くオーデインに向かい、腕に握られたものを振り下ろす。が、オーデインは咄嗟に背後に回り込む事で回避する……はずだった。

「グア……！」

オーデインの体から、火花と血が散った。九尾の攻撃が、振り下ろされると同時に、体を捻らせて、その勢いでフォクセイバーを振り上げたのだ。否、その手に握られていたのは、フォクセイバーではなかった。

「(オルタナティブ……!??)」

オーデインは、初めて自分の見た光景を疑った。九尾の手に握られていたのは、スラッシュダガー。それだけなら驚きはしないが、彼の立ち振る舞いが、そのスラッシュダガーの持ち主と瓜二つだった。しかし目を凝らせば、目の前には息を荒げた九尾がいるだけ。

その九尾は剣を放ると、一気に距離を詰めた。その瞬発力に、さしものオーデインも、回避が間に合わない。

一発いっぱつが、致命傷に程近いダメージを負った体で、どこにそんな力があるのか説明がつかないほど、重い。その的確な拳の攻撃。オーデインには見覚えがあった。

「(ヴェス・ウインタープリズンの……！)」

そして右拳が胸に当てられた時に気づいた。その右手には、黒いドラグクローが付けられており、そこから放たれた黒炎が、オーデインを吹き飛ばした。

「(リュウガ……！こいつ、一体何を……！)」

九尾の急激な変化に戸惑いつつも、オーデインは再び九尾の背後を取り、背中に打撃を打ち込む。地面を転がる九尾は、勢いをつけて立ち上がり、首を回して骨から音を鳴らすと、獣の如く、オーデインに飛びかかり、その顔面を何度も殴りつけた。その姿勢は、さながら最恐の王蛇を彷彿とさせる荒々しさが垣間見えている。それでもつてスィムスィムのような、何を考えているかも分からないような動きで、オーデインの思考を遮る。

「(一体何が……！奴の動きは、まるで既に亡者となった奴らの動きを彷彿とさせる……！)」

そこまで考えが回った時、オーデインはハッと気づく事があった。「まさか……！今の奴のデツキには、消えていった者達の魂が宿り、その靈魂が、奴を本能のままに突き動かしているとでも言うのか!!？」

彼に与えられたサバイブの力が、自分達の思わぬ形で、想像以上の力を覚醒させてしまった。そう考えてしまった今のオーデインは、久方ぶりの恐怖を感じた。九尾が、これまで携わってきた試験の中で異質を放っていたのは承知していたが、彼の信念がサバイブにここまで変化を促すとは、予想していなかった。

「……(もう大分、体の感覚が消えかかっている……。でも、何でだろうな。最後の一滴まで戦える。そんな気がする)」

カードデツキから伝わる、叶わなかった夢を見上げる哀しみ。絆という不実を求める、衝動。それら全てを受け止めて、彼は戦うと誓った。命を捧げて、この幸せだけは、勝利だけは、掴み取ってみせる。進む未来の先に、惨い哀しみが覆い隠そうとしても、それを突き破って見せる。

「ッ、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

再び吠えた九尾は、狂ったように体を動かし、オーデインに殴りか

尾は目視した。

「……ユイ」

直後のその眩きだけは、声に出る事なく、オーデインは動けなくなった。

決着がついた。九尾は、霞んでいく視界の中でそう判断し、自らも地面に横たわった。

「……終わっ、た。本当に、倒した、んだ……」

今まで以上に鮮明な耳鳴りだけが、耳の中に入ってくる。

「(これが、人を殺す……感覚)」

それは、14歳の少年にとっての、初めての感触。最後の攻撃で、オーデインにその全てをぶつけた時の感触は、体に染み付いている。最悪な気分だった。

「(でも、終わったんだ。全部、終わらせたんだ……)」

やっとの思いで得られた、安堵感。自然と、仮面の奥で瞼が閉じようとしている。

「……ま、まだ、だ」

だが、瞼は最後まで閉じなかった。ようやく戻ってきた足の力を込めて、震えを止めて、腕を使って、起き上がる。

「帰らなきや、な……。あいつら、が、待ってるん、だ……」

横たわる亡骸に背を向け、片足を引き摺るようにして、ボヤける視界の先に見えた電話ボックスに向かって、歩み始める。途中でフラついて転ぶが、ゆっくりと息をしながら立ち上がり、倒れ込むように電話ボックスのガラスから、ミラーワールドを後にした。

それからすぐの事だった。九尾が元の世界に戻り、沈黙が包み込むミラーワールドの世界に、オーデインが倒れている所に、人影が現れた。その姿は、一般人に程近い身なりをした女性だったが、ミラーワールドに立ち入れる事を考えると、魔法少女なのだろう。オーデインよりも少し背の低い女性は、横たわるオーデインを見つめ、一雫の水滴が地面を濡らした。

「……」

その小さな呟きは、とても聞き取れるものではなかったが、膝を曲げてしゃがみ込むと、側に落ちていた、魔法の国特製の端末を手に取り、不思議と軽くなったオーデインを抱き抱えると、九尾が脱出した電話ボックスに向かって歩き始めた。

《中間報告 その20》

【オーデイン（本名不明）、死亡】

【残り、魔法少女5名、仮面ライダー4名、計9名】

【なお、両試験管死亡により、現時点をもって、B7026試験場での選抜試験を終了。合格者には、追って発表と同時に、諸連絡を通知する】

134. 退屈な事なんて、なかったんだ

目の前にいた敵が、突然ガラスが割れる音と共に、消滅していく。手持ちの武器をほぼガムシヤラに振り回すほど、疲弊していた龍騎は、ようやく足を止めた。自然と、肩で息をしているほどにまで戦い続けた事に気づき、隣に目をやる龍騎。パートナーもまた、足を震わせながら、額の汗を拭っている。

つい先程まで、悲鳴や轟音が飛び交っていた周囲に目を凝らす。既に不気味なほどにまで収まっており、火が出ている車や、逃げ遅れた人々があちこちに拡散している。

ふと、遠くに目をやった龍騎は、先程レイドラグーン達に襲われていた、母親と逸れてしまったであろう少女の姿を捉える。木陰から辺りをキョロキョロしていたが、不意に彼女の側に駆け寄る女性の姿が確認できた。そして彼女を抱きしめた辺り、少女の母親なのだろう。

安堵して泣きながらも母親に抱きつく姿を見て、龍騎はホツとした感覚に陥る。それは隣にいるトップスピードもまた然り。

「そっちも、片付いたか」

横手から、ナイトとリップルのペアが現れた。さすがのベテランも、それ相応の苦戦は強いられたようで、足取りがやや悪い。遅れて、スノーホワイト達も彼らと合流。

「なあ、モンスターが全部消えたって事は……」

「向こうも、決着がついたようだ。わざわざ占うまでも、無いな(だが、何だ……? 何かが、おかしい……?)」

大地が、仮面ライダー九尾が、全てを終わらせた。その事に気づいた面々が、胸を撫で下ろす。あれだけの激しい戦いの中で、こうして立っていられ、全員の無事を確認できたのだ。

……否、ここにはまだ1人足りない。その事に、手塚だけが異様な胸騒ぎを覚えた。

「……だいちちゃん……!」

それは彼女も同じだったのだろう。腕や足に切り傷を作りながらも、最前線で戦ってきた魔法少女が、パートナーの安否を確認するべ

く、彼が向かった方へ駆け出す。他の面々も、それに続く。

空は、曇天模様が広がりつつある。もうすぐ雨が降るかもしれない。

彼女達が足をピタリと止めたのは、大通り沿いの小さな公園が見えてきた時だった。公園の側には、燃えてはいないが、モンスターに襲われた衝撃でボンネットが大破した車が転がっているが、その脇に、煙に紛れて誰かが立っている。

「……！」

僅かに覗き見えた、狐の面のような顔。そこに立っている者の正体は、自ずと判断できた。

「九尾い！勝ったんだな！」

「やったな！」

ラ・ピュセルとトップスピードが、労いの言葉をかけながら歩み寄ろうとする。

「……やつと、やつとちよつとは、さき。……『答え』って、やつをさ。見つけられた、かもな」

不意に、仮面ライダーはそう呟く。

「……ちよつとぐらい、仮面ライダーになれて……、良かったって、思えるかもしれない」

でも……。

その直後、変身が解け、彼の全身が露わとなる。8人が息を呑むまで、さほど時間はかからなかった。

右腕がおかしな方向に折れ曲がり、左目は潰れたように閉じており、膝の部分が、皮が剥けて白い骨が見え隠れしている。全身の傷も、スノーホワイトの比ではない。口から尚も溢れ出る赤黒い液体を、地面に垂らしながら、唇を震わせる。

「もう、俺……。さす、がに、さ……。ダメ、かも、……。しんない」

そこで気力が限界を迎えたのだろう。膝が折れ曲がり、片腕を8人に向けながら、ゆっくりと後ろに倒れ込む姿を、彼らは確かに目撃した。

「大地君！」

「大地！」

「！おい！」

「だいちゃん！」

駆け寄りながら、変身を解除する面々。

車のドアに寄りかかるように倒れた大地に群がり、必死に彼の名を叫び続ける。ドアにも血がベツトリと付き、以前、颯太がトラックに足を挟まれた時とは比べ物にならないほど、痛々しい惨状を目の当たりにし、あの手塚ですら、動揺を隠せない。

段々と、呼吸が弱まっているのが明白だ。そんな中でも、大地は焦点をずらす事なく、一人ひとり、心底心配そうに見つめる者達の顔を見ながら、ポツポツと、語り始める。

「……ずっと、考えてた。退屈だとぼつか思ってた、日常の中で……、何で、生きようと、思ってたか。ずっと考えてても、それでも、まだ……。らしい答えが、見つからなくて……。考えて……。考えて……」

「大地、さん……！」

「……でも、さつき、見つけたんだ。それを、伝えたくて……。ここま
で、頑張れたんだ……」

「何だ、それは……！」

蓮二の問いに、大地は氣道を確保するように咳をしてから、ゆっくりと答えた。

「生きるって事はさ……。『戦う』事なんだって、気づいたんだ……。ただ、のんびりと寝そべる事でも、決まった事ばかり、繰り返す事でもない……。畑を耕す爺さんや、子供を産む母親や、それから……。困っている人の為に、手を差し伸ばす事……。それが、生きるって事だったんだよな……」

「……！」

「……情けねえ、よな。今の今まで、全然、そんな単純な事に気づかないで、さ……。いつも通りの事を、当たり前前の事を、退屈だと思って、大切な事、全部無視してさ……。ほんと、報われねえよな、俺って」
「そんなわけ……。無いだろう！」

不意に颯太の震える声が、大親友の言葉を遮る。

「大地だって……！今日まで僕や、小雪や、みんなの為に……！誰かの為に、必死に戦ってきたんだろ！？だったら……！もうお前は、その答えに気づいてた！それを口に出さなかっただけで、心の底では、気づいてて、それで、こうして戦ってきたんだ！答えは……もう出てたんだ！」

「颯太君の言う通りだぞ！大地君は、スゲエよ……！俺なんかよりもずっと賢くて……！だから、自分を褒めたって良いんだよ！」

「……そう、なのかな。辛い時も、苦しい時も、めちやくちやあつたけど、さ……。それでも、戦おうって、決めた……。それは、俺も、仮面ライダーの、1人として、みんなを、守りたいから……。退屈だと思いついでた日常から、俺を助けてくれた、から……。今度は、俺も……、差し伸ばし、たいんだ。みんながくれた、大切なものを、守れるように……。戦う事が、正しいか、どうかじゃない。それが、俺にできる、精一杯……。やりたい事、なんだ」

「……だったらー！」

大地の並々ならぬ意志を汲み取った華乃が、力の抜けた手を握る。異性の手を握るなんて、生まれて初めての感覚なのかもしれない。

「だったら生きて、その目標を……！叶え続けろよお！死んだら、それで、終わりなんだぞ……！」

こんなにも声を荒げた華乃は、初めて見る。誰しもが、そして自分自身も、そう思っているだろう。

「そう、なんだよな……。だから……みんなには、これから先、辛い事ばかり、かもしれないけど……。なるべく、長く、生きて、欲しいんだ」

「お前こそ生きろー！大地……、死ぬな……！死ぬなあ！」

「……ハハ。蓮二さんに、華乃さんに、そんな風に、言ってもらえるなんて、……。ちよつと、嬉しい、かも」

弱々しい笑みを浮かべながらも、己の意識が薄らぎ始めている事を悟った大地は、思い残す事のないように、蓮二の隣に目を向ける。

「手塚、さん……」

「大地……」

「手塚さんの、あの占いが、無かったら……。あの場所で、出会わなかったら……。きつと、仮面ライダーに、なれなかった……。運命は、変えられる……。今は難しくても、手塚さんなら、きつと……」

「……抗って見せるさー！（だから大地、お前も……！）」
そこから先は、喉がつかえたように続かなかった。手塚が黙り込んだ後、視線は小柄な少女へ。

「……亜子」

「大地さん！死なないで、ください……！」

「気づいてやれなくて、ゴメンな。あの時から、お前も生きる事を、諦めないで、いてくれた。ちよつとした、自慢なんだ」

「あ……」

「……鍵、もう失くすなよ。失くすのは、俺が最後に、してくれよ……」

僅かに動く手で、亜子の小さな手に触れながら、そう呟く。

そして次は、膨れた腹に手を置きながら、泣きじゃくる女性。

「つばめ、さん……」

「お、おいやめろつて！そんな今生の別れなんてやつ、聞きたくねえぞ！オレは……！」

「多分次は、つばめさんが、戦う番だから……。産まれる子を、立派に、育てて、ください……。俺のように、ならないように、ちゃんと……」

「……っ！んなもん、言われなくなつて、やつてみせらあ！」

目を覆い隠すように、腕をゴシゴシと擦り付けるつばめ。震える彼女の腹を、優しく撫でる大地。

「……正史、さん」

「大地君もういいから！これ以上喋ったら、本当に……！」

「正史さんの、強さは、俺が、1番、知ってるから……。つばめさんを、最後まで、守って、あげて、ください……」

「……！」

正史は、体の震えが止まらなかった。血を流し続ける彼の、背中を押す言葉に、何も言い返せなかった。

「颯太……」

「な、何だよ大地……！」

「お前が、俺の友達で……。本当に、良かった……。お前には、何度も、助けて、もらったよな……。ずっと一人だと思ってた俺を、外に、連れ出して、くれて……」

「そんな事言うなよ！俺だって、あの時お前が、助けに来てくれなかったら……。これからだって、俺達は、ずっと……。友達なんだろう！だったら、こんな所で眠るなよ！起きろよ！俺達で、まだやりたい事、たくさんあるんだぞ！」

「……。ありがとよ、颯太。サッカーの試合、頑張れよ。魔法少女の、事も、忘れずに、な」
そして。

最後に気力を振り絞って、今最も気持ちを伝えたい少女に、目線に向ける。哀しげな表情で目線を合わせている。涙は、まだ出ていないようだ。本当に打たれ強くなった。そう思うと、大地は少し嬉しくなった。

「……。こ、小雪」

「だい、ちゃん……。嫌だよ……。こんな……。こんなやつて……。……悪いな。最後の、最後に……。後味悪い感じに、しちまつて……。でも、この戦いだけは、終わらせた。これ以上の犠牲は、なくなった……。それに……。お前は、強くなった。だからもう……」

「違う、よ……。そうじゃ、ないよ……。私は、まだまだ、弱虫だから……。みんなみたいに、だいちゃんみたいに、強くなって、ないから……。だから、ずっと、追いかけてた……。だいちゃんみたいに、強くなりたくて……。ずっと……！」

頬に、冷たい感触が伝わった。左手が彼女の右頬に触れ、目尻に透明な液体が浮き上がる。

「お前は、弱くなんか、ない……。だってさ……。ずっと、誰にも負けねえ、強さを持つてたじゃ、ねえか。『優しさ』っていう、誰にも負けない、真の強さをよお……」

「！」

「俺は、お前のその強さに、惹かれたんだ……。苦しむ度に、相手を労って、自分の胸に、しっかりと刻む。その気持ちは、俺を本当の意

味で、救ってくれたんだ……！」

不意に息を詰まらせた大地は咳き込み、少量の血を口から垂らした。

「だいちゃん……！」

「お前が、俺の、パートナーで……、本当に、良かった……！」

「だいちゃんダメ！しつかりして！」

「……最後に」

全身の痛みを堪え、上半身を起こして、ぼんやりとなった視界に捉えた、大切な人に、顔を近づける。

「あの時の、答えを、お前に……」

ありがとう。

彼女にしか聞き取れなかった、その一言。言い返そうとしたその口を、相手の唇が、それを遮った。鉄臭い匂いが、相手の口の中から伝わってくる。初めての経験にも関わらず、動揺していない小雪は、唇を重ねながら、静かに目を閉じる。一筋の光るものが、頬を伝う。

沈黙の中、ほんの数秒の出来事にも関わらず、小雪にはそれが長く感じられた。出来る事なら、このまま時が止まってほしい。この時間を、永遠にしたい。それが叶ったら、これ以上に幸せな事なんて、無いのかもしれない。

「……っ！」

……それでも、現実是非情だ。唇が離れ、自然と握っていた手も離れ、そして、微かな笑みを見届けて……。

～これで、良かったんだ～

「大地い！」

　　～試験は、終わった。もうこれ以上、犠牲が出る事も、無くなった

～

「大地！」

　　～俺も、ここで終わりか～

「大地さあん！」

　　～散つて逝つた奴らにも、少しは顔向け出来るかな……？～

「おい、起きろ大地！」

　　～最期に、みんなに会えて、良かったなあ……～

「目え覚ませよ大地い！」

　　～……もし、次があるなら～

「大地君……！何で……！」

　　～その時は、そうだな……～

「大地……！大地い……！」

ポタポタと滴り落ちてきた水滴も、ザアザアとN市全域に降り注ぐまで、さほど時間はかからなかった。豪雨の影響で、辺りで燻っていた火も鎮火し、煙が晴れ始めた。

豪雨は、目を閉じて、仰向けに倒れている少年についていた、赤黒い液体を洗い流していく。胸は、上下に動いていない。

周りにいた8人にも雨が降り注ぐが、誰1人としては動かない。

虚空を見上げながら、目から溢れ出るものを止めない少女。

運命を変えられなかったと、地団駄を踏む青年。

目の前の現実にはショックを受け、脱力したように、車にもたれかかる青年。

体を震わせながら、拳を強く握る少女。

口元を押さええながら、顔を下に向けて泣き続ける妊婦と、彼女を抱き寄せて体を震わせる青年。

悔しさのあまり、地面を殴り続けている少年。

そして、虚な目を向けたまま、ただジツと、動かなくなった最愛の

パートナーを見つめている少女。

雨は一層激しくなり、9人の身体を、冷たい雫が叩きつけてくる。それは、息をしていない少年以外の面々の、心情を表すかのようにならずと、降り続いていたのである……。

135. 彼らはなぜ戦い続けたのか

その豪雨は、時間にすればほんの3分ほどだったが、唐突な別れの前に、感覚が麻痺していたようで、誰も気に留めなかった。事切れていると思われる少年の傷口から、赤い河のように流れ出た血も、雨に叩かれた影響で、少しずつ薄らいでいた。

『おめでとうぽんー！』

不意に静寂は破られた。

聞き覚えのあるファンファーレと共に、何度も神経を逆撫でした、某ハムスター系アニメの主人公とよく似た声色が、8人の耳に届く。ハツと顔を上げる……事もなく、誰も顔を、地面に転がっている、皆が所持している端末よりも二回り大きい、魔法の端末に向けてはいなかった。

大地の懐から転がり落ちた魔法の端末からは、白と黒の球体が鱗粉を撒き散らしながら、笑みを浮かべたような表情をしている。立体映像だ。

『ええ、只今をもちまして、めでたく目標の8人に到達したので、選抜試験は終了ぽん！改めて、生き残った優秀な魔法少女、仮面ライダーを発表していくぽん！まずは魔法少女から……スノーホワイト、リップル、ラ・ピュセル、トップスピード、ハードゴア・アリス。続いて仮面ライダーからは……龍騎、ナイト、ライア。以上8名が今回の正式な勝者だぽん！』

最初は32人いた、魔法少女と仮面ライダーの中で、壮絶な戦いの末、生き残った8人。その中に、彼の名はない。当然と言われればそれまでかもしれないが、ファヴの発表を聞いて、重い腰を上げる者が現れた。

『いや、オーティンが脱落した時点で試験は続行不可になったわけで、どの道その時点で終わりになったわけだけど、九尾も相打ちになったわけだから、結果オーライって事で。あれだけ激しい椅子取り合戦の中で生き残れたのは、本当にスゴい事なんだから、もつともおっと自分を褒めても良いと思う……って、みんなどうしたぽん？

そんな彼らの姿勢が滑稽に思えたのか、ファヴは更に追い討ちをかける。

『常識外れな力を得た自分なら、何でも無理を押し倒せると思っちゃうのが、人間を介して生まれた魔法少女や仮面ライダーの悪い癖ほん。オルタナティブだって、ファムだって、そういう所をきちーんと心得てさえいけば、あんな犬死にせずに済んだのに』

「っ！お前、よくも……！」

一瞬、ラ・ピュセルの手が止まったが、再び殴り始める。

ファヴの声に反応して、次にアクシオンを起こしたのは、龍を従えし仮面ライダーに変身する青年だった。

「……今やっと。こんなバカな俺でも、分かった事がある」

『はい？』

「お前らは、魔法少女として、仮面ライダーとして、その座をかけて、生き残りをかけた、戦いを仕向けた。その中で、勝者と敗者を、明確に打ち付けてきた。……もし、この戦いで、勝者と敗者を決めるとしたら。……それは！本当の敗者はファヴ、お前なんだよ！そして本当の勝者は……、俺達32人の、魔法少女と仮面ライダー！それが、この戦いの、真実なんだよ！」

これまでに幾度となく戦いの中で見せてきた、確信めいたような鋭い視線。その敵意が今、魔法の端末に住まう使い魔に向けられている。一方で、声をかけられた主は、首を傾げるかのように激しく左右に揺れる。

『……どこかで頭のネジが外れたぽん？』

「うす汚い嘘を使って、言葉巧みに俺達を戦いに誘導し、お前らは高みの見物とばかりに、笑って一人ひとり死んでいく、その経過を観察していた……！そうして俺達を殺戮マシンに仕立てようとしてたかは知らないけど、俺達は屈しなかった！俺達は、俺達のエゴを貫いて、ここまでやってきたんだ！それは、いなくなった奴らも同じ！みんな、生きる理由を胸に抱えて、戦ってきたんだ！そして今！お前の思惑を外れて、お前に敵意を剥き出している！それが、お前らが敗北したという、確かな証拠なんだよお！」

矢継ぎ早に捲し立てるように、口調を荒げる正史。その隣では、膨れた腹に手を当てながら、もう片方の手で彼の手を握るつばめもまた、鋭い眼差しをファヴに向けていた。

『……っーん』

が、ファヴの反応はそっけないものだったと言えよう。

『今更死んだ奴らの事なんて、気に留めてどーするつもりぽん。これでもファヴは褒めてるんだぽん。今回の試験は、予想を遥かに裏切るものだったわけだし、「弱い」つてのも一つの能力や武器になるんだつて、面白……ゲフンゲフン、思い知らされたんだぽん』

目線だけでなく、返す刀で響いた舌打ちも、ファヴには届かない。

『ま、そういう意味じゃ、スイムスイムも王蛇も、所詮はその程度の存在だったわけで、モブキャラがなるべくして死んだようなものだぽん。さつきも言ったけど、何でも無理を通せると思っちゃうのが君達の悪い癖ぽん。これからはそこを直していつてもらいたいぽん。そうすりゃ、九尾みたい事にならずに済むぽん。九尾は仮面ライダーとして中々にセンスあったんだけど、あれほど生き残りたいって決めたくせに、結局相打ちなんてあーんな間抜けな死に方を』

「黙ってよ」

ラ・ピュセルではない。正史でも、つばめでも、華乃でも、勿論ファヴの声でもない。

その少女は、横たわっていた少年から手を離し、音も立てずに立ち上がると、小さく何かを呟くと同時に、光に包まれて学生服風の魔法少女に変身。ゆっくりと端末に向かって歩み始めた。

『スノーホワイト？どうしたぽん？ひよつとしてマスターに』

「だいちゃんを、九尾を、笑わないで」

ファヴの質問に答える事なく、正史とつばめの横を通過する。長期にわたる戦いの過労で足は震えているが、真っ直ぐに向かっている。

「……私は、マスターにならない」

『まあまあそう言わずに。ファヴとしても、マスターがいないと色々不都合が』

「ファヴの声が聞こえるから……、マスターになつてくれないと困

るって」

『いやまあ、そりゃ困るっちゃ困るんだけど、それは君達の事を想って』

不意に、ファヴの声が途切れた。スノーホワイトが、マジカルフォンを操作して、杖を手に持ったからだ。否、杖ではない。

包丁と薙刀を足して2で割ったような武器。最初にたまが手に入れ、激レアアイテムの交換によってスイムスイムの手に渡り、魔法少女と仮面ライダーの命を刈り取ってきた武器。そして拾い上げたその武器でスイムスイムを一突きし、現在は自分の所有物となった武器。

立体映像がブレたのを、手塚は遠目で見逃さなかった。ファヴの羽ばたきが勢いを増し、鱗粉が激しく飛び散る。

『え、いや、あの、スノーホワイト？ちよ、ちよつと待つてほしいぽん。誤解してるぽん。ファヴは九尾をバカにしたりなんてしてないぽん。魔法少女も仮面ライダーも、みんなリスペクトしてるぽん。そりゃあファヴはみんなに意地悪してたように見えたかもしれないけど、それは本心じゃないぽん。全部、クラムベリーとオーデインに命令されたり、シローに無理矢理システムを弄られたりしたからだぽん。あいつらが手伝わないと酷い目に遭わせてやるって、脅して、何から何までファヴにやらせてたんだぽん。ファヴはね、本来は魔法少女や仮面ライダーが暴走した時の為の機能を使って、ルールに反した魔法少女や仮面ライダーを』

「そいつの言葉に、耳をかさないでえー！」

華乃の必死の叫び声が、背中越しに伝わってくる。無論、今のスノーホワイトはファヴの言葉に耳を傾けるほど、愚か者ではない。

「大丈夫。全部聞こえてるから」

『ぽん？』

「この管理者用端末が壊されると、困るって、聞こえたから」

『そ、それはそうだけど、さっきラ・ピュセルにも言った通り、この端末はスーパリーなやつだから、そんじよそこらの武器じゃ壊れないって』

そう呟いたのを最後に、今度こそ、静寂が訪れた。

力が抜けたように膝をついて座り込むスノーホワイト。今度こそ、本当に終わった。全てを終わらせる事が、できたのかもしれない。

「……ったよ。やったよ、だいちゃん。私……、ちゃんと、自分の意思で、悪いやつを、やつつけたよ。頑張ったよ……」

でも……。

体の向きを変えて、皆がいる方に向かって、地面を這うように、歩みを進める。その視線は、息を荒げた者達ではなく、息をしていない少年に向けられている。

「……何で、かな。全然、ちっとも、喜べない……！私の事、もつと、見てほしい人が、いない世界なんて……！そんなの……！」

再び目尻に、温かい液体が溜まり始める。堪えきれない。

「だいちゃん……！だい、ちゃん……！」

パートナーの名前を叫び続けるスノーホワイト。他の面々も、どう声をかけてあげれば良いのか、分からない。

ようやく、彼女の手が大地に届く

「まだ、終わりじゃないわ」

その手前の事だった。どこからともなく聞こえてきた声。スノーホワイトでも、ラ・ピュセル達でもない。声の主を探そうと顔を動かす面々。

スノーホワイトは目線を上げ、蓮二の背中越しに、誰かが歩み寄ってくるのが見えた。彼女の視線に気づいた正史達も、そちらに顔を向けて、目を見開いた。

そこにいたのは、魔法少女だった。そう思えた根拠は、彼女の手に握られているものだった。先ほど破壊したものと柄違いの、魔法の国特製の端末。オーデインが所持していたものと同じだ。シローもその端末にいる筈だ。

スノーホワイトがキツと表情を強張らせて、ルーラを握る手に力を込めて、立ちあがろうとするが、謎多き魔法少女は片手でそれを制した。

「まだ私達には、やるべき事がある。そうよね、スノーホワイト。……あなたの、大切な人を呼び戻すという、大事な使命が」

136. 培ってきた繋がり

「呼び戻す……だど？」

蓮二の眩きは、その場にいた8人の心情を代弁するものであった。突如として彼らの前に姿を現した魔法少女。彼女はこう言った。

まだ終わりではない。九尾を呼び戻す。つまりそれは……。

「大地は……、まだ、生きてるのか!?？」

つばめは藁にもすがるような勢いで、前のめり気味に声を張り上げた。意気消沈していた彼女にとって、その一言は鶴の一声にも等しいものだった筈だ。だが、華乃は冷静に彼女を止めた。

「待って。無条件に信じすぎだ。何を根拠に、そんな事が言える？」

「確かに、彼女の言う通りだ。素性が分からない相手に、過度な信用は危険だ。先ずは、君の事を明かしてもらいたい」

手塚の言葉を聞いて、魔法少女は無言で頷く。

「……私は、『ユイ』と言います。見ての通り、魔法少女であり、代々、魔法の国の繁栄に尽くしてきた一族の1人です」

「!つまり、ファヴやシローと同じ国の出身……!」

華乃が気力を振り絞ってマジカルフォンに手をかけようとするが、それを遮るように、彼女は会話を続けた。

「私がここに来た目的はただ一つ。兄の愚行を止める事、それが最初の目的でした」

「グコウ……?それに、お兄さんって……」

「この試験の管理者を担っていた仮面ライダーオーデインは、私の、実の兄にあたります」

ほぼ同時に、こちらに視線を向けていた者達の目が見開かれるのを、オーデインの妹は確認する。

「どういった経緯でこの試験を知ったかなど、詳細は後ほどお話しします。何にせよ、兄を止める事は出来なかった。これは、せめてもの、一族を代表しての償いです。兄を、憎しみの呪縛から解放してくれる彼の息を吹き返す為には、あなた方の力が必要です」

「どういう、事なの」

震える声でそう尋ねるスノーホワイト。ユイは目線を、倒れている少年に向けた。

「私には、その人が持つ魔力を敏感に感じ取る素質があります。彼の中には、ほんの僅かですが、魔力の残滓があります。つまり、彼はまだ死を迎えているわけではないという事です」

「！マジか！」

「とはいえ時間がないのもまた事実です。彼の中の魔力は枯渇しかけている。このままでは数分も経たないうちに、魔力は底を尽き、本当に助からなくなる。そうなる前に、魔力を供給し、生命線を繋ぎ止める必要があります」

「どうすれば……どうすれば、大地は助かるんだ！」

ここまで確信めいたような事を言われては、ラ・ピユセルも必死にならざるを得ないだろう。ユイが頷くと、足を動かして、すぐそばにあった公園に踏み入れると、何か呪文のようなものを唱え、懐から古びた本を取り出すと、地面に置いて、右手を表紙にかざす。再び詠唱すると、右手を離して数歩退がると同時に、本を中心に水が沸き始めたではないか。

一連の流れに呆然とする一同の目の前で、あつという間に、人一人が入れそうな池が形成された。亜子が尋ねるよりも先に、ユイが説明を始めた。

「これは『生命の泉』と呼ばれる、私達一族が代々守ってきた、魔法で出来た泉です。この水に含まれる魔力は特別で、この泉を巡っては、血が流れるほどに大規模な争いが起きたと言われているほど、その効力は確かなものがあります」

ですが……と、ここでユイの歯切れが悪くなる。

「長年、有事の際に使われ続けてきた事もあり、この泉の純度は低くなっています。怪我を治す程度なら問題ありませんが、瀕死の者の魔力を完全に回復させるには、魔力が圧倒的に足りない」

「じゃあ、どうすれば良いんだよ……？」

「足りないものを補う為に必要なもの。それが、あなた方が所持している魔力なのです」

「所持？」

「今回の試験では、人助けの度合いを数値化する為に、『マジカルキャンディー』が普及していましたよね？あれには魔力が含まれています。その魔力を全て泉に注ぎ込む事で、助かる確率が飛躍的に上がります。ただ、それだけではまだ足りません。彼を助ける為のアイテムは、もう一つあります」

「な、何が必要なんだ？」

『「兔の足」』

ユイの説明を受けて、ハツとなるスノーホワイトと亜子。

懐に手を入れたスノーホワイトが取り出したのは、白い毛の塊のアイテム。激レアアイテムと称して、寿命6年という対価と引き換えに、アリスが手に入れたものであり、直後にスノーホワイトの手に渡ったもの。

そこまで説明を受ければ、手塚もようやくユイの真意を理解できた。

「！そうか、兔の足は窮地に陥った際に、一定の確率で効力を発揮するアイテムだった筈……！」

「はい。このアイテムは魔法の国でも出回っていて、現実性がない事から、常に所持している者は少ないのも事実です。が、事今回においては、このアイテムの存在が大きな鍵となります。彼の息を吹き返すファクターとして、兔の足に魔力を注ぎ込みます。これでこのアイテムが効力を発揮する確率を上げます」

「け、けどどうやって、このアイテムに魔力を入れるんだ？」

「それは私の魔法が有れば造作もありません。マジカルキャンディーに培われている魔力を、兔の足の魔力に変換する。言うなれば私の魔法は、無機物を有機物に、水から火に変えるような事を可能にするものなのです」

理屈はよく分からなかったが、大地を助けてくれる事に必死になっている。そう感じとった一同は、僅かな望みに賭けてみる事に。スノーホワイトから兔の足を受け取ったユイは、皆にマジカルフオンを手にとってもらうように指示する。各々の端末には、ここまでの戦い

で敵味方問わず、生き残る為に手に入れてきたマジカルキャンディーが大量に蓄積されている。

そのマジカルキャンディーを、一旦彼女が持っていた魔法の国特製の端末に注ぎ込むと、彼女が魔法を行使して、大量の魔力を兎の足に注ぎ込んだ。兎の足から、段々と輝きが発せられている。

「後は、彼がこの魔力に反応して、適合できるかどうかにかかっています」

そう呟いたユイは、大地の体を抱き上げて、兎の足を彼の右手に握らせると、生命の泉の中に、その体を入れた。下ろし終えた彼の体は、自然な流れで泉の底に沈んでいく。一同は本当に大丈夫なのか、と不安が募る中、スノーホワイトはただ一人、彼の声がもう一度聞けるようになりたい、と刹那に願うばかりだった。

水の流れる音が、頭の中に響いてくる。

体は、動かない。ただ、潮流に身を任せながら、底知れぬ所へと、沈んでいくのが分かる。

これが『死』なのだろうか。それとも、まだ自分はその瀬戸際に立たされて、これからその地へ向かおうとしているのか。

考えたくもなかった。考えられなくなる。考えた所で、今の自分に、何ができる……？

もう、楽になりたい。自分が背負ってきたもの全てを、投げ出して、もしも、もう一度人間に生まれ変わるのなら、その時は……。

『どうした』

……？

何だ。誰かが、背中に、手を当てて……。

『まさか、もう全てを終わらせた気では……、諦めたわけではないだろうな。あの程度で、心が折れる奴ではない筈だ。仮にもお前は、この私が認めた、最強の仮面ライダーなのだからな』

その声……。ついさつき、聞いた事がある、ような……。

『大地君。確かに君は、本当によく頑張ってくれました。死に絶えた私達の事を、その想いを力に変えて、繋げてくれた。……ですが、あなたはまだこちらに来るべきではありません』

……ああ、その声。懐かしい。その手の感覚、小学生の時に撫でてくれたものだ。

『思い出してみてください。あなたは、私や、私の教え子達を再び繋げてくれただけではありません。頑なだった者達の心を、否、多くの者の心を、あなたは紡いでくれた筈です』

俺が、紡いだもの……。

『敵対していた者、この世界の理不尽さに嘆いていた者、幸せを望んでいた者、頂点を目指していた者、憎しみを抱いていた者、愛する人を守ろうとした者……。魔法少女や仮面ライダーという枠組みを越えて、あなたは、その覚悟を背負い、戦ってきた』

『そして愛を知り、守るべき者が出来た。それは素晴らしい事だ』

『だったら、あなたにはまだ、やるべき事が残っている筈よ』

『大丈夫です。いつだって、私達はあなたの力になってあげますよ。そして、あなたならきつと、私と雫が成し遂げられなかった境地に、たどり着く事が出来ますよ』

また3つの手が、俺の背中に……。

俺に……、こんな俺にも、まだ、あいつを、愛する事が、出来るの

か……。

『ん〜。多分大丈夫だよ〜』

『そうだ。お前の背には、多くの意志が集まっている。そして、俺や正史と同じ過ちを犯さない為にも、お前はあの女の愛を理解する義務がある』

『あなたはかつて、私のしてきた事を偽りの正義と称しました。ならば、本当の正義を貫いてもらい、見せてもらう必要がありますね』

？何だ……？背中越しに沢山の手が……。

『力が足りないってんなら、俺も手を貸すぜ！俺は幸せになれなかったけど、代わりにお前がなってくれよ！』

『君なら、真の英雄にも、なれるかもしれないね……』

『そーそー。ここまで生き残れたんだったら、それなりに頑張ってもらわないとねー』

『お姉ちゃんマジクール。でもま、とりあえずガンバ！』

お前ら……。

『ハンツ、こんな所で休んでもらうようじゃ、無様にも程があるつてもんだ。生き残ったんなら、それなりの責任つてやつをとってもらわねえとな』

『この私を差し置いて生き残ったのだからな。精々生き恥を晒し、カッコ悪く足掻いてみせなさい！』

相変わらず嫌味しか言わねえペアだな。言われなくたって……！

『人生つて、ゲームみたいなものなんだしき。これからもっと面白くなりそうだから、もうちよつと頑張つてみたら？』

『あ、あの……！きつと、あなたなら、大丈夫だと思う……！こんな弱い私の力を使ってくれて、嬉しかったから……！だから、頑張つて！』
『……私は、ルーラになれなかった。だから、あなたに、なってほしい。リーダーとして、みんなをまとめてくれる人に』

『あの方があそこまで着目した理由。今なら分かる気がする。これから先、どこまで成長するのか、地獄の果てで見させてもらおう』

どんどん、俺を支える手が増えていく……。

『ま、とりあえず足掻けるだけ足掻いてみたらどうよ？案外そういう

人生も悪くないと思うよ』

『面倒くさい事もたくさんあると思いますが、溜め込みすぎない程度に頑張ってみてはいかがでしょう？』

『戦えないのはイラつくが、俺の分まで、暴れてもらいたいもんだな』
『この世界はクソみたいな事で溢れ返ってやがる。なら、これからもこの理不尽な環境に揉まれるんだな。そうすりゃ、ちったあマシなものになれるだろ』

『さあ、最強の仮面ライダーさん。もう、やるべき事は一つじゃありませんか？』

！みんなの、手のひらから、何かが、流れ込んでくる……！

何だよこれ……！これって……！

『分かりますか？多くの同胞達の意志が、あなたに力を与えているのが。それこそが、これまでに培ってきた繋がり。力が足りないのなら、皆の手を借りれば良い。それこそが大地君。あなたに与えられた、死者の想いを束ねる力「魂魄」の本質なのですから』

……！

段々、目の前が明るくなってるのが分かる……！あの光は……！

『繋がりが消える事はない』

『だったら、もう一度立ち上がれ！』

『心に火を燃やし、手を伸ばし続けるんだ！』

『伸ばした先に、あなたの帰りを待ってる人がいますよ！』

……そうだ。

俺はもう、1人じゃない。

大切な人達が、待っている。

退屈な思いをする事なんて、もうない。

俺は、これからも……！

『さあ、前に向かって行くのです。あなたの為に、未来の為に、仲間の為に、……そして、愛する人の為に！』

「……やん、だいちゃんー！」

「……！」

ハツと目を開けると、小顔の少女が、眼前に広がっていた。その瞳からは、水滴が零れ落ち、自分の頬に滴り落ちていく。

最初は驚いたような表情をしていたが、次第に頬が緩み、瞳を潤わせ、自分の体と密着させるように抱き寄せると、一気に感情を爆発させた。

耳元で張り裂けるような大声を聞きながら、目線を小雪の背後に向ける大地。

乾いた笑みを浮かべながら目元を拭う颯太。

嬉しそうにこちらを見つめる亜子。

ホッと一息つく手塚。

「ツシャアー」とガッツポーズを取る正史とつばめ。

鼻を鳴らして、安堵の表情を浮かべる蓮二と華乃。

そして、手塚と同様に胸に手を当てて一息つく謎の魔法少女。

理由はよく分からないが、どうやら死にかけていた自分を心配してくれていたようだ。自然と、涙が零れ落ちる。

『SURVIVE』に込められていた力だけではない。ここにいる皆

が、死の淵に沈みかけていた自分に、光を灯したのだ。

「だいちゃん……！……！……！……！……！……！」

「小雪……。俺もお前も、隣にいなきや、まだまだ、半人前だからな。だから、これからも……！」

「……うんー！……これからも……！」

そこまで交わせば、最早語るものは何もない。

自然と互いの顔が近づき、そしてその唇が重なり合う。ほんの数十分前と同じ外見だが、唯一違う点を挙げるのであれば、小雪に伝わってくるその感触には、命の脈動を感じさせるほど、温かく、とろけそうな……。そんな思いの丈が積み重なったような、目の前の男の子が、確かに生きている事を実感させるような、温もりが、彼女の全身に伝わった。

137. 魔法少女とは 仮面ライダーとは

榊原大地が奇跡の復活を遂げて、しばらくの間、余韻に浸る一同。しかし、悠長に喜んでばかりもいられない。周辺からは、街の異常事態をかぎつけてサイレンが近づいているのが分かる。じきにこの辺りも警察らで溢れかえるに違いない。被害は甚大だが、ここから先は魔法少女や仮面ライダーが介入してしまったら、騒ぎが大きくなるのは間違いない。

後の事を警察達に任せるとして、一同は、魔法少女ユイから全てを聞き出すべく、場所を変える事に。

やって来たのは現場から遠く離れた、船賀山のとある一角。以前、クラムベリーとオーデインが隠れ蓑にしていた山小屋の事を思い出した龍騎の提案で、人目につかないその場所を、話し合いの場にしたのだ。

入ってみると、クラムベリーの死後、オーデインもほとんど使っていなかったのか、微かに埃が机の上に溜まっていた。とはいえこの場所で実の兄が生活していたとあっては、ユイも部屋の真ん中で立ち尽くし、瞳を閉じてしばらく黙り込んでいた。時折、涙を拭う素振りも見せており、よほど慕っていたのだと痛感させられる。

しばらくして、ナイトに声をかけられたユイは、トップスピードに手伝ってもらいながら、小屋の中にあつた菓子と温かい紅茶を勝手ながら拝借して、机の上に並べた。準備が整った所で、先ずは皆無言のまま、温かい飲み物を口につける。人間、命懸けの戦いが終わった後の一杯は心が癒されるのか、ホッと一息つく者がちらほら見えた。変身を解いた大地も、少し前まで冷たかった体が一気に温まるのを感じとった。

「……さて、何から話しましょうか」

「全部だ。それ以外に何がある」

一息ついた所で、蓮二が返す刀でそう発言する。

「なら先ずは、君とオーデインの関係性について、だな。改めて聞くが、君がオーデインの妹というのは間違いないのか？」

『事実だ。それは私が保証しよう』

手塚の問いに答えたのは、彼女ではなく、テーブルに置かれていた魔法の国特製の端末だった。そこから立体映像で浮かび上がった茶色の鳥を見るが早いのか、ピリピリした空気が部屋に広まった。

「シロー……。やはりお前も、最初から俺達をハメる為に、仮面ライダーに仕立て上げたようだな」

「シロー……。お前……」

「その点については、私が知り得る情報と照らし合わせて問い詰めましょう。私もシローとは少しながら縁がありますので」

蓮二と正史を遮るように、ユイは話を元に戻す。

「私の一族は、魔法の国と深い関わりがあり、生まれた時から特別な力……。皆さんに分かりやすく例えるなら、魔法を携えていました。私達一族は、魔法の国と人間界が共存できる架け橋を担い、才能を持つ人間をスカウトし、発展する為の役割をもって、尽くしてきました。私と兄も、その一人として、幼い時から英才教育を受けてきました」

お菓子に手をつける事なく、淡々とそう話すユイの口調は、次第に明るくなっているように思えた。

「……信じられないかもしれませんが、兄は本当は優しい人なんです。毎日お絵描きをして、友達を作る事もできない代わりに、他愛もない会話を交えながら、真つ白な画用紙に、外の世界がどんなものなのか、想像を膨らませて、それを色とりどりに描き出していく時間は、私達にはかけがいのないものだった。おやつも兄の方がいつも多かったのですが、それを察した兄がこつそり均等になるようにしてくれたり、私が泣いている時も、いつも励ましてくれて、喧嘩した時も、すぐに向こうから謝ってくれたり……。言い出せば、キリがないかもしれません」

それを聞いた大地は、どことなく行方不明になった自分の兄の事を思い浮かべていた。思い返せば、自分も小学校に上がるまで、颯太に出会うまで、友達と呼べる者はいなかった。そんな時、そばにいられたのは兄だった。優しさの塊のような人だった。

「でも、そんな人が、どうして……」

だからこそ疑問も当然浮かび上がるわけで。ハードゴア・アリスがそう尋ねると、ユイの表情が引き締まる。

「……兄が変わったきっかけは、やはり、あの選抜試験だったのでしょう」

「！」

「ラ・ピユセル？」

「……その様子ですと、あなたは既にご存知のようですね」

「……ああ。クラムベリーと戦った時、話してくれたよ。自分が本当の自分に目覚めた時だって、笑いながら話してた」

ラ・ピユセル以外の面々は、その事故の事など知る由もない。だが、彼女は全ての知っている。それを語る為にこの地にやってきたと言っても過言ではない。

「一定の年齢になると、魔法の国の住人に選ばれる為の試験を受け、それに合格した者が、晴れて本物の魔法少女、仮面ライダーになれる。兄もその習わしに従い、訓練を重ねた結果、ようやくその試験を受ける事ができた。……あの時、最後に見た兄の後ろ姿は、今でも忘れられません。嫌な予感がして、強引にでも兄を説得出来ていれば……」

「……一体、何があったの」

『そう難しい事ではない。その選抜試験で、他にもいた魔法少女が生み出した悪魔が暴走し、20人近くいた候補生が皆殺しにされた。それだけの事だ』

「……ッー」

淡々と言つてのけるシローだが、聞かされた側としては気分の悪くなる話だ。続けてユイが、事件後に独自に調べたと思われる内容を話し始めた。

「兄が受けた選抜試験の最中、地下室の中で候補生の1人が悪魔を召喚しました。しかし術者自身が未熟だった事もあってか、すぐに暴走を始めたそうです。……結果、召喚者や候補生、更には悪魔を止めようとした試験官は全て、原型を留めない状態で、遺体となって発見されたそうです。生き残ったのは、兄ともう1人、同じ試験に参加していたクラムベリーだけだった」

気がつけば、先ほどまで菓子に手を伸ばしていたトップスピードも、食欲が失せていた。紅茶から漂う湯気も、段々と消えかけている。更にシローから放たれた一言は、皆を驚かせるものだった。

『因みに、その試験の監督役を担っていたのがファヴだったのだ』
「!?何だと……!」

『ファヴは元々、万が一に備えて事故の発生を防ぐ為のチェック機能として働くはずだった。が、ファヴはその職務の一切を放棄した』
「その結果、オーデインとクラムベリーを除く全員が見殺しにされた……!つまりはそういう事なんだな」

そう呟く手塚の声は若干震えていた。冷静沈着な彼といえど、事の原因がああ白黒のマスコットキャラクターにあったと知って、怒りを隠しきれないのだろう。

『黒猫などの、従来の型に当てはまるような、オーソドックスな使い魔に比べ、私やファヴのような、足元にある管理者用端末を使ったデスクワークに定評のある電子妖精型の使い魔は、魔法の国では重宝されている。だからこそ、私が所属していた「監査部門」でも、そのシステムが採用されていた。とりわけ、事務仕事を嫌がる風潮のある、魔法の国の「人材発掘部」では、我々のようなタイプを使い魔として用いる職員が8割を占めている。ファヴは、その人材発掘部の中でも古参の使い魔だった。古参ではあったが、先ほども述べた通り、職務に対する情熱は皆無だ。元々は持ち合わせていたのか、最初から持っていなかったのか、それは私にも分からないが、言ってみれば、不良品のようなものだったのだろう』

試験に倦み、マスターに飽き、惰性だけで仕事を続ける。それがファヴの本性なのだ。シローはそう語った。

『奴にとってあの事故は、決まりきった試験を吹き飛ばすイレギュラーな事態として、一種の着火剤だったのだろう。興奮したあいつは、暴走した悪魔を倒した2人を……とりわけ魔法少女の方に興味を持ったのだろう。上層部には、「2人の体力、精神共に異常なし」とでっちあげる事で、彼女を次のパートナーに迎え入れた。私もファヴの紹介を受けて、晴れてオーデインのパートナーとなった。彼の理想

には、私も共感し得る所があつたからな』

「共感……？」

『……私は、人間に興味があつた。人間はこの地球上に生息する数多の生物の中でも、感情を持ち、自ら考え、行動する。その思考は時として我々のようなデー々生命体の予測を遥かに超える。その一方で、人間は長い歴史の中で、数多くの過ちを犯した。環境破壊に、人間同士の差別。それらを生み出す人間達に、魔法などといった非科学的な力を与えた時、魔法の国を始め、この世界にどれだけの害を成すのか、とても気になった。そこで新たにパートナーとなつたオーデインと話し合い、我々は決めたのだ』

「決めた……？」

『人間が本当に価値のある生物なのか。そして極限の領域に達した時、人間の内に秘めた本性を知りたい。そうして執り行われたのが、今回君達を選ばれた、魔法少女、仮面ライダーの「人材育成計画」なのだ』

人材育成計画。

初めて耳にした言葉に、息を呑む一同。

シロー曰く、新たな魔法少女や仮面ライダーを魔法の国に迎え入れるべく、使い魔であるファヴとシローのマスターとなつたクラムベリ、オーデインの監督の下、N市を舞台に、試験が執り行われる事が正式に受理された事が、全ての始まりだった。

便宜上、選抜試験を行い、成績の上位者が魔法の国に迎え入れられて、そこで本当の魔法少女、仮面ライダーと認定される。その裁定はマスターによって差異はあるが、基本的に選ばれるのは、何十人もいる候補生の中で、1人か2人しか出ないとされている。これは、人間が魔法の国に干渉しすぎないように、最低限の人員に、魔法の力を受け取り、非日常を歩むか否かを自由に選んでもらう為の措置だそう

だ。
「……ちょっと待てよ……！……じゃあ場合によっちゃ、お前らが8人まで絞つたとしても、そこから更にまた数を減らす事も出来たって事か？！」

『無論だ。最も、オーデインは街中にモンスターを解き放つ事で、候補生を疲弊させ、あわよくばそこで犠牲になってもらう形で数を減らすとしたようだが』

改めて、シロー達の企てた計画に憤りを覚える一同。

『選抜方法は、マスターによって異なる。ある者は、普通に良い事ばかりを行い、その業績に伴って合否を決める。またある者は、こちらが用意した敵キャラと戦ってもらい、成績優秀者を決める。何れにせよ、その采配は、マスターに決定権がある』

「じゃあ、今回の試験は……」

『現代社会では、ソーシャルゲームが普及している事を知った我々は、それを組み込む事で候補生を選抜した。巷では課金が一般的とされているが、それではごく僅かしか絞り込めない。多彩な人材を見つける為に、敢えて無課金を軸としたゲームとして、日本に普及させた。結果、人選にはさほど時間は掛からなかったし、中高生を中心に、小学生や弁護士、大学教授、更には犯罪者と、幅広いジャンルの候補生を見出す事に成功した。……王蛇のように、こちらから手を加える事もあったがな』

「！端末を所持しているとは思えないはずの浅倉がライダーになったのは、お前達の手引きがあったからなのか……！」

「くっ……！」

とりわけ、自分にとって親しい者に手をかけられた事のある手塚とトップスピードは、やるせない気持ちで一杯だった。

東の間、スノーホワイトがハツとなってシローに問い詰めた。

「！じゃあ、ねむりんは……！ルールもインペラーも、まさかあなた達が……！」

『通常の試験では、勇気、知恵、人格などと魔法に関係ないものなど、我々にとつては少しでも良い要素に重きを置いて選ばれた者達が本物となり、脱落となった者は記憶を書き換える形で元の生活に戻される』

「……は？」

さすがの正史も、シローの言葉に違和感を覚えたようだ。

当初はマジカルキャンディーが最も少ない者から順に脱落していく方式が運用されていた。シザースの遺体が見つかり、ラ・ピュセルが殺されかけ、オルタナティブがベルデに殺された辺りから、明確なサバイバルゲームが展開されたと思えば、彼らだが、シローの話が本当なら、シザースより前に脱落した3人は……。

「まさか、あいつらが死んだのも、全部……！」

『ルーラの場合は違うが、他の2人に関しては、おおよそ君達の見解で間違いない。命がかかっているとすれば、生き残る為に人間の本性が曝け出され、墮とし合いが始まる。現に、ガイもこのシステムを知った事で、本格的に試験に乗り気になったのだから、彼の発言は、我々としては予定調和そのものだった』

「何で……！何でそんな事を……！」

『候補者達が命をかけて戦い、最も強い者が生き残る。そのシステムを採用する事で、人間としての一線を越えた、新たなステージに到達する存在を創り上げる。それが、クラムベリーとオーデインが打ち出した方針だ』

最もあの2人の場合、興に乗り過ぎて生き残った者まで殺してしまう事が多々あったがな、とシローはため息をつくような動作を見せるが、聞かされている側は、納得のいかない事ばかりだ。

『ファヴもよく言っていたよ。性善説に則った「魔法の国」の方針はチョロい。勝者の記憶をいじって都合の良いものにし、不都合な事が露見しないように努力を惜しまず、その結果、我々の選抜試験では優秀な輩が輩出されたとして、かえって評判が良くなった、とな。有能な使い手は、即座に魔法の国の即戦力として扱われ、杓子定規の試験で無能を引き入れる試験官に比べれば、我々の方が立派な愛国主義者だと胸を張れる事にも繋がる』

「……チツ！胸糞悪い……！」

リップルは包み隠さず、舌打ちと共にありのままの心情を吐露する。裏でそんな事が行われているなど気づかなかったとはいえ、ここに至るまで幾多の犠牲が出たのだから、それに関わった者達からすれば、たまったものではない。

「……ちよつと待てよ。じゃあ……、キャンディー集めつてのは一体……」

『無論、今回の試験においては、殺伐とした展開に導くだけの、単なる数値に過ぎない。当然、この土地の魔力を介して作られたものではないのだよ。勿論魔法を素に作り上げたものだから、万に一つ魔法の国にこの試験が露見されかけたとしても、魔法の国で生成されたものを使っていると分かれば、我々の信頼が揺らぐ事もなくなる。……まさか、九尾復活の要因として使われる事になるとは、こちらも予想していなかったがな』

大地が反応に戸惑う中、トップスピードが拳をテーブルに打ち付け、水滴がポロポロと滴り落ち始めた。

「んだよそれ……じゃあオレのダチだった、ルーラは……！オレを庇ってくれた、たまは……！母親として、背負うべき背中を見せてくれた、メアリ姐さんは……！何だって、死ななきゃ、ならなかったんだよお……！」

嗚咽が激しくなるトップスピードの背中をさする正史。正史自身、元恋人であった美華や、旧友の銀斗が利用され、そして死んだ事を思うと、胸が痛くなる。

大地も、スノーホワイトも、ラ・ピュセルも拳を強く握っていた。恩師が殺された時、大切な事を教えてくれた人が突然いなくなった時の喪失感、何も知らずに遺された遺族が背負う悲しみ。それらを果たして、目の前にいるマスコットキャラクターは、理解できるのだろうか……？

手塚はゾツとした。もし雄一が自殺する事なく、あのゲームを続けていたら、彼が仮面ライダーとなり、自分の知らない所で彼はなぶり殺しにされていたのかもしれない、と。

『……しかし、私としては大変興味深い結果だった』
「黙れ……！それ以上私達を煽るようなら、この場で消す……！」

リップルがクナイを片手に立ちあがろうとする。が、シローは止めた。なかつた。

『正直に言うと、私は今回の結果は、互いに殺し合い、相討ちとなって

終わるものだとばかり思い込んでいた。人間の本質を考慮すれば、互いに自滅の道を歩むものだと考えていた。……だが、結果は違った。本来、戦闘欲に刺激を植え付ける為に導入したパートナーシステムを介して、仲間を守る事に使ったお前達を見て、自然と、私が予想していたものとは違う結果が見られるのではないかと期待するまでに至った。そして今日、お前達は運命に抗った結果を見せてくれた。あのオーデインが、最強と認める者が現れたのだからな。……やはり、人間とは計り知れないものを持ち合わせている。ファヴは刺激欲しさに戦いを加速させていたが、私は先程も述べたように、人間の本質を知る事を目的としていた。どうやら私も、まだまだ世の理を理解できていた訳ではなかったようだ』

皆の視線を一身に請け負った上で、その鳥はこう語った。

『この戦いに勝敗をつけるべきだとすれば……。……認めよう。我々の「負け」だ。極限の中で戦い抜いてきたお前達の生き様は、私の想像を遥かに超えていた。煮るなり焼くなり、好きにすれば良い。どの道私の役目はこれで終わりなのだからな』

『……』

シローの敗北宣言に面食らいつつも、複雑な心中の者達。そこへ、先ほどから黙り込んでいたユイが口を開いた。

「……シローの処遇については、今後、魔法の国と協議して、適切な罰を受けるべきだと思います。勿論、私の事も含めて」

「!??!? どういう事……!??!?」

「今回の件、本来なら一族を代表して、私が兄を止めていれば、ここまでの騒ぎにはならなかった。全ての責任は、私にあります。魔法の国もそう判断する筈です。ファヴの管理用端末が消された以上、魔法の国は間も無く特使を派遣して、調査に乗り出すでしょう。そうなれば、今回の事を皆さんに打ち明ける機会もなかった筈です。こうして面と向かいあい、真実を明かせるのも、これが最後になるでしょう」「そんな……。ユイさんは何も悪くないのに……」

スノーホワイトはそう言うが、ユイは首を横に振るばかり。彼女なりに責任を感じている事が伺える。そして同時に、オーデインやクラ

ムベリーもまた、魔法の国の使い魔の我儘によって、運命を翻弄された犠牲者の一人なのだ実感する。

「……それと、今後の事になりますか」

不意に話は変わり、ユイの口から語られたのは、生き残った者達の進路に関するものだった。

「今回の件は、魔法の国にとつてもイレギュラーな事態と見られると思います。謝罪は勿論の事、あなた方は正式な魔法少女、仮面ライダーに認定されるのは、まず間違いありません。その際、魔法少女や仮面ライダーを辞めるといふ選択肢も提示されるでしょう。勿論、今度には命ではなく、記憶から消される、という形で……。その上で、あなた方にお伺いします。人智を超えた力を得て、互いに殺し合い、生き残ったあなた方は……。それでもまだ……」

そこで一旦息を吸い、ひと段落置いてから、確認の言葉を投げかける。

「それでもまだ、あなた方は魔法少女を、仮面ライダーを、続けようと思えますか？」

数秒の沈黙。

結果、その場では決められないとなり、一同は一旦解散する事に。ユイとシローに見送られ、山小屋を後にする一同。

去り際、九尾に変身した大地が、シローに向けてこんな事を述べた。

「……言っておくが、俺はお前を赦したつもりはねえぞ、シロー」
「……」

「……けどまあ、退屈だった日常を変えるきっかけを作ってくれた事だけは、礼を言わせてもらおうぜ。……本当にそれだけだからな」

それだけ告げると、ユイに軽く手を振って、その場から跳び去った。

そして彼らは考えた。

両親と共に神社の経営を手伝いながら。

机に伏して、鞆にぶら下げてある魔法少女のキーホルダーを突きながら。

自室でコソコソと、魔法少女アニメを見返しながら。

刑務所に留置されている父親に会いに行く道中で。

N市で起きた大規模な事故の取材に追われながら。

自室で、膨れたお腹に気をつけながら、入院の準備をしつつ、遺影代わりの写真に写る男性を見つめながら。

路上で、立ち寄った通行人を占いながら。

バイト先の喫茶店で忙しく手を動かしながら。

そして後日。ユイの言った通り、魔法の国から特使が派遣された。彼らは9人に平謝りし、正式に魔法少女、仮面ライダーとして認め、「魔法の国」名誉住人という、異例の高待遇としての資格を与えられるか、魔法に関する一切の記憶を消去し、元の暮らしに戻るか。その選択肢が出された。

そして。

各々が出した答えとは……。

EX. スノーホワイト& a m p・九尾育成計画（前編）

魔法少女『ピティ・フレデリカ』が、その2人を自分のものにした
い、という欲望が生まれ始めたと自覚したのは、彼女の部下の1人、仮
面ライダーアビスが試験の中で脱落した頃だった。

無論今のままでも、部下や弟子の数は事足りていると言えば、足り
ているのだが、それとは別に、彼女には野望があった。

『理想の魔法少女、仮面ライダーを作り上げる』

かつて、森の音楽家クラムベリーと仮面ライダーオーデインが目指
した領域。フレデリカにとって憧れの存在だった2人が掲げていた
ものを、彼女も欲している。

当然ながら、崇拜していたその2人が執り行った試験に関心を持つ
たのは当然の事。とはいえ新人のスカウト兼試験官という立場にあ
る自分が、参加者として携われるわけがないので、2人に気づかれな
いように、有能な候補生を現地に派遣し、仮面ライダーに仕立て上げ
る事で、その試験の経過を観察する事にした。その人物こそが、とあ
る会社の副編集長を担当し、裏では残忍な思想を持ち合わせている
男、鎌田春水だった。

彼女の魔法を使い、鎌田を介して、試験の流れは誰にも悟られる事
なく観察する事に、フレデリカは悦を感じていた。尤も、アビスの死
でそれ以上の生き残った者達の動向は分からなくなって少々落胆し
たが……。

が、好機が訪れるまでさほど時間は掛からなかった。魔法の国が、
クラムベリーとオーデインの最期の試験での生き残りとなった者達
の指導役を求めてきたのだ。

事件が発覚してから暫くのうちは、告発した者として英雄視されたり、可哀想な被害者として同情されたりしていた。だが、そんな中でも、この2人だけは頑なで、崇めようとする視線も慰めようとする視線も一切払い除けてきた。クラムベリーとオーデインの試験が残酷、残酷な殺し合いだったという犯罪の告発者であり、被害者の名に挙がっていたにも関わらず、他の生き残りとは一線を越えていた。やがて末端の関係者で、2人と拘わろうとする者はいなくなった。結果的に、2人は自身の言動によって魔法の国の中で鼻つまみ者とされたのである。

とはいえ、個人としては拘わりたくなくても、魔法の国としては、そういうわけにはいかない。2人を含め、この試験に生き残った者達全員の処遇は明確にしておく必要があった。それはつまり、『我々魔法の国は、事件の被害者に対してこんなにも誠実なんですよ』とアピールし、他の面々に不満や不安が波及するのを防がなければならない、という事だ。その場しのぎ的なやり方をとるのが、今の魔法の国なのだ、とフレデリカは考えている。

そしてその考えは、後日生き残った者達に、魔法の国の『名誉住人』という異例の高待遇を提示した事で、正しさを物語らせている。誰がどう見ても、あからさまな飴ではないだろうか。

この待遇をもって魔法少女や仮面ライダーを続けるのか、それともそれらに関する記憶を全て消し去り、一般人として元の社会に戻るかを選ばせた結果、驚くべき事に、全員が異能の力を手放す事なく、活動を続けるという選択をした。

ここだけの話、魔法の国としては、できれば辞めて欲しかった筈だ。

その方が後腐れも面倒もないし、これ以上魔法の国の地位が揺らぐ事もない。試験の中で見せた彼らの性格ならば、全員とまではいかないにしても、後者を選んでもおかしくない筈だ。それでも、彼らは力を捨てる事はなかった。

そうになると、魔法の国としても、正当な試験を受けていない彼らが名誉住人になるのであれば、誰かが真つ当な魔法少女や仮面ライダーになるように教化する必要が出てきた。言ってみれば、これは花嫁修行のようなものだ。

これを知ったピティ・フレデリカは、すぐに手を挙げた。彼女は比較的まともな試験で選抜された魔法少女だ。居住地は、彼らの担当地域とはさほど離れていない。そこそこ良い立場にいて、割と暇を持って余しているベテランだ。魔法の国の覚えもまずまずで、指導役としての条件は満たしている。立候補さえすれば選ばれるに違いなかった。

そして、彼女は選ばれた。……というよりも、フレデリカ以外に、指導役に立候補する者がいなかった。前述の通り、彼女以外、近づくこととする者がいなかったからだ。この頃になると、フレデリカの興味は2人にしか向かなくなつた。幻滅するどころか絶望するような試験をした筈なのに、魔法少女で、仮面ライダーであり続けようとした不思議な子供。アビスの定例報告、彼の死後の独自調査を照らし合わせてみても、何故この2人は、という気しかない。気になつたからこそ、彼女は立候補した。

審査もなく選ばれた彼女は、早速連絡をとつた。最初に相手にしたのは、魔法少女『スノーホワイト』。丁寧な挨拶から、『あなたの指導役になりました』とメインの用件を簡潔に伝えて、『時間的な都合で直接会うのは難しい為、電話でのやりとりが主になります』と断りを入れてから、『困つた事があつたら何でも相談してほしい』という、自分でも心が全くこもっていない、型通りの言葉で締めた。スノーホワイトからは、気のない返事が聞けたぐらいだった。特別、あなたと親しくなりたくはないという感情が、電話越しにヒシヒシと伝わってくる。

「何でも良いんです。ちよつとした悩みとか、問題とか。私だつて駆

け出しの頃はつまらない問題で思い悩み、先輩に相談したらしましたから」

フレデリカ自身、親しくなりたいので、もう少し粘ってみたが、それも30秒が限界だった。スノーホワイトとのやり取りを終え、今度は仮面ライダー『九尾』に電話をかけた。彼女と違って、その返事には何かしらの凄みを感じさせる。

「遠慮なく相談してくださいよ。仮面ライダーの事だけでなく、学校や家の事だって構いませんよ。全てが上手くいつているわけじゃないでしょう?」

『……』

ここまででは、先ほどのスノーホワイトときとして変わらない反応だった。違ったのは、その後の九尾の発言だった。

『……一つ、聞かせてくれるか』

「はい。私が答えられる範囲で有れば」

『あんたなら、強くなろうとする時、どうする?』

それは、簡潔なようにも解釈できそうな言葉だった。首を捻り、脛骨を鳴らす。期待した通りの、面白い逸材だ、と率直な感想を浮かべるフレデリカ。

「それは、どういう意味の強さでしょうか?心の強さでしょうか?」

『戦ってどちらが強いか、って方だ』

「ここだけの話、魔法少女や仮面ライダーに必要なものは強さではないと思います。優しさや愛らしさ、思いやり、友情、ひたむきさ、そういうものが必要になるのではないのでしょうか」

『……まるで詭弁だな』

それだけ告げると、一方的に電話を切られてしまった。怒らせてしまったのだろうか。いやしかし、冷静に考えてみれば、九尾もスノーホワイトも、クラムベリーとオーディンの試験出身者だ。理想論を並べた所で、彼らが潜り抜けてきた生き地獄が理想郷に変化するわけではない。そこでフレデリカは、相手の非礼を咎めるよりも、もう半歩踏み込もうと、メールを打ち始めた。

『どうして強さが必要なのでしょう?』

『私がやろうとしている事に、強さが必要だからです』

と、これはスノーホワイトの返信。彼女もまた、九尾に似て強さを求めている事が伺える。

『何をやろうとしているのですか？』

ここで返信は途切れた。指導役に話せない事なのだろうか。フレデリカはもう半歩踏み込む事に。

『あなたはクラムベリーとオーデインの試験参加者です。注目されています。違反行為は勿論、今はグレーゾーンに足を入れるのもマズいでしょう。暴力沙汰にもなれば、たとえあなたが正しかったとしても皆が口を揃えていう筈です。やはり』

……と、ここまで打ってから、文面を全て消して、打ち直す。

『あなたはクラムベリーの試験参加者です。他の事ならともかく、戦いに関してあなたに教えたがるモノ好きがいるとは思えません。いとすれば、クラムベリーやオーデインに同調していた連中でしょうけど、そんな者達は魔法の国からそれなりの処置を受けています』

ここまで打ってから送信するフレデリカ。メールを打っただけでこの疲労感。心を休める必要がありそうだ。彼女は側にいた、とある魔法少女の魔法を利用して操っている青年に指示して、部屋の本棚から、バインダーを持つてこさせた。キツチンの椅子に腰掛け、ゆつくりとページをめくる。バインダーの中身は、今まで彼女が見てきてお気に入りと呼んだ者達のプロマイド写真。とりわけ彼女の興味をそそのめるのは、写真に写る人物の髪だ。美しいそれを眺めるだけで、ストレスを和らげてくれるのだ。

しばしの間、心を休めて程なくすると、端末に着信が入った。テーブルの上にバインダーを投げて、内容を確認する。

『それなりの処置を受けたという事ですが、全員捕まったのですか？』

『巧妙に司直の手を潜り抜けた者がいます』

途中まで消して、再度打ち直す。

『巧妙に司直の手を潜り抜けた者がいるという噂もあります。ですが、私としてはそれがあくまでも噂に過ぎないと信じています』
『信じられるだけの根拠はあるのですか？』

案の定、この話題に食いついてきた。彼らが求めんとする事も何となく分かってきた気がする。彼らに興味を抱いた自分の嗅覚に間違いはなかった、とフレデリカは自画自賛する。『根拠はありませんが仲間達を信じたいのです』と空々しい内容のメールを送信後、端末の電源を切って変身を解除。今度は雑誌を手を取った。クラムベリーもオーデインも、常時変身状態だったようだが、フレデリカとしては、真似できない領域だった。家賃や税金をしっかりと支払い、生業は持たずとも、人間としての生活は維持する。娯楽に関しては、魔法少女としてより、人間の感覚を通して味わう方が、より楽しめるような気がする。根拠はないが、フレデリカ自身はそう思っている。

ともあれ指導役となったフレデリカは、彼らに関する詳細な資料を、魔法の国了承のもと、閲覧する事ができた。その資料には、アビスから得た情報以上に、N市での凄惨な試験の内容が事細かく記されていた。

無料を謳い文句にしたソーシャルゲーム『魔法少女育成計画』と『仮面ライダー育成計画』を餌に、プレイヤーの中から魔法の才能を持つ者を探し、半ば強引に魔法少女や仮面ライダーに仕立て上げる。管理者用端末を住所とし、そこから広大なネットの世界に繋がり、魔法以

外のテクノロジ―も使いこなす電子妖精タイプのマスコットキャラクター、『ファヴ』や『シロー』と組む事で可能になる選抜法を駆使したものだ。動物の指で不器用に魔法の端末を操作する従来の小動物型マスコットキャラクターには出来ない芸当だ。

「(そういえば、あの一件の後、電子妖精タイプよりも旧来の小動物タイプが良い、なんて復権運動が起こってましたっけ)」

などどうでも良い事を思い出しながら、資料を目線を戻す。

才能を見出された候補生は、途中参加した者を含めると、魔法少女、仮面ライダー、共に15名。これに試験官である2人を加えて、総勢32名での椅子取りゲームが開始された。魔力の枯渇という、あからさまなでっち上げを引き金として。

ゲーム内通貨であるマジカルキャンディーの多寡により脱落者を決定するというルールは、キャンディーの奪い合いを認めた事から、明確な殺し合いへと転じた。裏切りや陥れ、殺し合い、加速していく争い。殺伐とした雰囲気の中で、終盤、試験官である2人が殺された事で、試験は中止となり、事実上終了。ファヴが住処としていた端末が破壊された事で異常を察した魔法の国が特使を派遣し、そこで事件の全てが明るみとなった。

全てに目を通したフレデリカは、そこで顔を上げて深く息を吐いた。大変に血生臭い内容ばかりだが、違和感は拭いきれなかった。1つは、スノーホワイトの人物像だ。彼女に限った話ではないが、生き残った者達は、それほど殺伐とした性格を持ち合わせていなかった。手にかけて事があつたにせよ、それもせいぜい1人ぐらいだ。中には間接的に関わっただけで、直接手を染めた者がいない程だ。スノーホワイトも、候補生の1人を殺害しているが、あれは不慮の事故と捉えられても仕方ないと思う。どうにも、電話やメールで話した魔法少女の人物像と一致しないのだ。もう一つは九尾が生き残った事だ。資料によれば、オーデインを殺害したのは彼のようだが、オーデインの実力を知っているフレデリカからしてみると、九尾が五体満足で生還したのは何か違和感を感じる。魔法の国が嘘をついているのか、この資料の内容が間違っているのかは定かではないが、彼の実力をこの目

で確かめてみたいという欲求が強まったのは確かだ。

スノーホワイトに九尾。この2人が力を求める理由。何が彼らをそうさせたのか。本人と話すだけでは足りない。入念な観察が必要だ。

計画はすぐさま実行された。先ず、人間世界での彼らの現住所を調べ、スノーホワイト……『姫河小雪』が学校に通っている時間を見計らい、彼女の家に侵入した。この種の任務は慣れたもので、髪を手に入れるだけのオーソドックスなやり方なら、造作もない。下の部屋から、掃除機の騒音がBGMのように聞こえて来る。彼女の母親が居間で掃除をしているのだろう。難なく小雪の自室に侵入できたフレデリカは、カーペットの上に落ちていた髪の毛を拾い上げる。キューティクルで匂いも良い。そのまま口の中に収めてしまいたい欲求を堪えて、次の標的の部屋に向かうべく、そつと薄紙に挟んで、彼女の自室を後にする。続いて彼女がやってきたのは、N市でも観光名所の一つとして知られる神社。九尾……『榊原大地』の両親が営んでいる所だ。姫河邸と違って人目を気にしつつ、無事に彼の自室に侵入。目的の品を手にとると、そそくさと退室した。退室する直前、部屋の机に置かれていた写真に注目するフレデリカ。大地の隣に立つ青年。彼の兄のようだ。世間体では行方不明となっており、彼は今でも兄を探し続けているのだろうか。必死になって探しまくる姿を想像したフレデリカはクスツと笑った。この先、彼を指導していけば、何れは彼も真実に辿り着くだろう。

誰かが言っていた。落とす物は、案外近くに転がっているものだ、みたいな。彼が兄のソレを知った時、どんな顔をするのか。怒るのか、それとも嬉しさが勝るのか。想像に耽っていた彼女だが、本来の目的を忘れるわけにもいかない為、一先ずこの件は保留にして、自室へと屋根を伝いながら戻っていった。

家に戻ると、従者の2人が何もせず、ジッと佇んでいた。相変わらず魔法の効力が効いているようだ。

彼女の手には、子供の頭部大もある大きな水晶玉がある。先程手に入れた髪の毛をそれぞれの手の指に結びつけると、水晶に、その髪の毛が映し出された。同時放送は出来ないが、チャンネルの切り替えは可能である。その数は最大10本、つまり指の数まで替えられる。とはいえ今の所は、チャンネルの切り替えは必要なかった。途中、大地が乗り込んだバスで小雪と会合したからだ。この魔法、髪の毛のなごい、或いは指に巻けない程短い相手には使えないという弱点はあるが、フレデリカはさほど気にしていない。

魔法を発動すると、手の届く距離に2人が映る。実際、手を伸ばせば届くのだ。水晶玉の中に手を差し込み、こちら側に引っ張り出すのが、本来の彼女の魔法の使い方だ。今はそんな事をしては全てぶち壊しになる為、やらない。シルバーブロンドに手を伸ばしたくなる欲求を抑え、観察に徹する。

事前のリサーチによれば、2人は制服のデザインの違いから見て分かる通り、別々の学校に通っている。小雪の親友らしき2人組と交えて、会話もしている。尤も盛り上がっているのは女子達だけで、大地は適当に相槌を打っているように見える。やがて小雪がバスを降りて、その数分後に大地が降り、それぞれ学校に向かって歩いていく。ここから暫くはチャンネルの切り替えをする必要がありそうだ。

榊原大地の客観的な印象として、あまり友達は多くなさそうな雰囲気だった。フレデリカがそう思っていると、彼に声をかける人物がいた。大地も軽く手を振って挨拶をする。同級生の少年のようだ。そ

の顔に見覚えがあった。あの事件の候補生のプロフィールの中に、同級生と同じ容姿の写真があった筈だ。フレデリカは早速資料を開いてみる。予想通りだった。この少年もまた、試験の生き残りだった。名は『岸边颯太』。その正体は、魔法少女改め、魔法騎士『ラ・ピュセル』。魔法の国でも極めてレアキャラとも言える、異性が変身した魔法少女だ。かなりの魔法少女愛好家で、表向きはサッカー好きな少年を装い、暇があれば誰にも見つからずに魔法少女関連の書籍等に手を出してきたらしい。中々に面白い少年だ。そういえばクラムベリーを殺したのも彼だったと報告に拳がっている。それ相応の実力はありそうだ。機会があれば彼の指導を試してみても良いかもしれない。そんなこんなで観察を続けるフレデリカ。クラスは違うようで、少し会話した後、それぞれの教室に入っていく。

その後はチャンネルを切り替えながらも、特に目立った動きはなかった。こうしてみると、小雪も大地も、どこにでもいそうな中学生、という印象が強い。放課後になり、大地は図書室で暇を持て余していると、部活終わりの颯太がやってきて、そのまま学校を出ると、丁度校門前で待っていた小雪と合流し、並んで歩き始めた。学校が違うとはいえ、普段からこうして帰っているのかと思うと、微笑ましい。ところがしばらくして進むと、通りかかった公園の前で立ち止まる3人。誰かと待ち合わせをしているようだ。様子を観察していると、1人の少女が駆け寄って来るのが見えた。小雪と同じくらいの背丈の少女はペコペコと頭を下げており、他の3人は手のひらを見せて落ち着かせている。再度資料を目をやるフレデリカ。今やってきた少女は『ハードゴア・アリス』の変身者、『鳩田亜子』。数年前、家庭内環境の悪化もあって、母親を殺した父親が刑務所に入れられて以降、親戚に引き取られた、ある意味不幸な魔法少女だ。試験には途中参加となり、生き残った猛者だ。何よりも注目すべきはその魔法だった。魔法少女でいる間は無敵なので、魔法の国が注目するのも無理はない。そうして合流した4人が向かった先は、N市の一角にある、産婦人科だった。何故この場所に訪れたのか、首を傾げるフレデリカだったが、その理由はすぐに判明した。受付を済ませた所で、1人の青年が

彼らを見かけて、声をかけてきた。スラツとしたスタイルの青年だ。名前は『手塚海森』。仮面ライダー『ライア』として試験で生き残った1人だ。彼の本業は占い師。彼の占いは恐ろしい程当たると評判で、今回の試験でも大きな影響を受けていたに違いない。何でも、今は亡き親友のデータを引き継ぐ事で仮面ライダーに選ばれたらしい。魔法の国にも、占いに精通している者はいるが、ライア程の手練れは、自分調べではない筈だ。普段は街角で占いをしているようだが、今日はもう店仕舞いのようだ。

そんな彼の案内で訪れた病室の扉を開けると、パイプ椅子に座る青年と、ベッドの上で上半身を起こしている女性の姿が。2人の間にあった小さなベッドには、産まれて間もない赤ん坊がスヤスヤと寝息を立てている。少年達はなるべく音を立たないように、挨拶もそこそこに、赤ん坊の頭を順番に撫でていた。病室にいた2人もまた、試験の生き残りだった。男性の方は、仮面ライダー『龍騎』の変身者、『城戸正史』。市内のOREジャーナルという会社で新聞記者として働いている青年だ。16人いた仮面ライダーの中では新参で、とにかく正義感の強い、おバカな印象の強い男、というのが資料に目を通したフレデリカの第一印象だった。水晶玉で確認してみても、概ねその見解は間違っていないようだ。隣で、赤ん坊の小さな手を握りながら口を開いているのは、赤ん坊の母親で、『室田つばめ』。魔法少女『トップスピード』の変身者だ。魔法少女になった当初は妊婦だったらしく、魔法少女姿になれば、お腹の事を気にせず自由に何でもやれると思ったのか、常にラピッドスワローを片手に、最速記録を作ろうとしていたようだ。そんな彼女も、戦いに一区切りついた事で、本格的に準備を始め、数日前に、ようやく新たな命を産み落とす事に成功したようだ。名前は、まだつけられていないようだ。当初は正史との間に産まれた子供なのかと思っただが、調べてみると、つばめの夫は既に他界しており、試験の中で知り合った龍騎と仲を深め、今に至っているようだ。何がともあれ一つの幸せが叶ったのは事実だ。水晶玉越しに、小さく手を鳴らして出生を祝うフレデリカであった。

そうして30分ほど会話した後、病室を出た4人の少年少女が向

かった先は、小さな喫茶店だった。『A T O R I』という名前の看板の横を通り、店内に入ると、店主と思しきお婆ちゃん他に、2人の店員と顔を合わせた。知り合いのようだ。フレデリカはすぐに資料に目を向けた。男性の方は仮面ライダー『ナイト』の変身者、『秋山蓮二』。少女の方は魔法少女『リップル』の変身者、『細波華乃』。どちらも似たような境遇の中で生まれ育ち、力を手に入れて、猛者との死闘を経て生き残った者達だ。2人は同じバイト仲間で、よく一緒にシフトになるらしい。恐らく店主の計らいだろう。温かい飲み物を注文して、他の客がいないのを良い事に、店員の少女と会話を交えていた。とはいえ店員の方は、他者と話すのが苦手らしく、その言動はぎこちない。何というか、そこが可愛い。

そんなこんなで気がつくと、夕陽も沈みかけていた事に気づいたのか、店を出た4人は解散し、家路についた。恐らく、いや確実に、また後で合流するような雰囲気だ。フレデリカの予想は正しかった。夜になると、2人は自室に入っすぐに変身し、家を出て活動を始めた。彼らの活動内容は魔法の国で推奨されているものと寸分変わらなかった。東から西へと忙しく動き、困っている人を的確に探して行動している。恐らくは、スノーホワイトの魔法を基にして動いていると見受けられる。目の前の相手に使う魔法だと思っていたが、思った以上に効果範囲が広い。読心系の魔法は魔法の国でも認知されているが、ここまで広範囲をカバーできる者は、先ずいない。それに加えて、今回はなかったが、鏡の中に潜むモンスターと戦える力を持っているのだから、この先の成長が恐ろしくも楽しみだ。

一通り仕事をこなしたスノーホワイトと九尾は、市内のとある児童公園に降り立った。同胞達と待ち合わせをしているようだ。30分後、待ち合わせ相手が姿を見せ始めた。言わずと知れた、龍騎達だ。ふとここで、リップルに視線を向けてみた。忍者を基調とした黒いコスチュームに、横へ流した長い黒髪が美しい彼女だが、何よりも特徴的なのが、顔面左側に鈍く重い刃物で抉られたような深く大きな傷跡が走り、左目を潰している点だ。報告によれば、魔法の国は彼女の左目を治療する事を提案したそうだが、自らの申し出で、治療を断った

との事。それは、この試験を絶対に忘れないよう、そして他の魔法少女や仮面ライダーがこの姿を見れば否が応でも思い出すよう、自らを戒めているのか、それとも他に理由があるのか。真意は定かではないが、試験後も隻眼の魔法少女として活躍しているようだ。

単なる報告だけで終わるのかと思っていたフレデリカだったが、少し開けた場所に移動したかと思うと、スノーホワイトはライアと、九尾は龍騎と拳を交え始めたではないか。どうやら模擬戦のようだ。あれもまた、あの2人が強くなる事に固執している表れだろう。

彼らが更なる高みへ昇ろうとしているのは明白だ。その為には、やはり教導役は欠かせない。彼らをより強くする事ができる人材に、心当たりはない。身近にいる龍騎達では限度があるし、彼らが2人を本当の強さに導けるとは到底思えない。適任役がいるとすれば、それは真つ当な魔法少女である自分以外、他にいない。フレデリカの評価としては、この2人、魔法のセンスや適応力はこの上なく素晴らしいが、傲慢さが圧倒的に足りない。自分のやりたい事なら、何だろうと踏みつけて、悪びれない太々しさが足りない。自分のしたい事の為に全てを踏みつけてきた頂点に、グラムベリーとオーディンの名が挙がる。2人にとっては不本意だろうが、今の2人が目指すべき存在だ。

あれこれ思考を巡らせた後、いつの間にか模擬戦を終えて解散する姿が確認された。水晶玉の映像をオフにして変身を解くと、コーヒーマルを取り出し、じつくりとコーヒーマルを挽く。従者にやらせても良いのだが、自分が飲むコーヒーマルは自分で淹れたいものだ。しゅんしゅんと鳴るヤカンの音を聞きながら、2人について思索する。

異能の力を手にした自分が更に強くなるにはどうすれば良いのか、と考えてきた先人は数多かった。グラムベリー等が遺した資料を紐解いてきたフレデリカは考察する。個人の魔法の力や身体能力、戦闘技術。その何れも、誕生した時から大きな差が生じていると考えている輩が多いようだが、フレデリカは違う。どうしようもない差があるのだと『思っている』事が問題なのだと考えている。人間なら強くなるには、徹底した現実主義が必要となる。一方で自分達は魔法少女や仮面ライダーである以上、完璧なスケジュールに基づいたトレーニング

なんて必要ない。必要なのは、志の高さ、目的意識、愛、愚かな行為に疑問を持たずに最後までやり抜く強い意志。つまり、『愚直さ』を伸ばす事に意味がある。魔法少女や仮面ライダーは、一人ひとりが主人公だ。それを忘れずに、側からみれば愚かでしかない行為に汗や涙を費やし、強さの向こうにある目的を目指し続けられれば、地平は開ける。フレデリカ自身は面倒だしかつたる位と思っっている為、試そうなどとしなが、他者がやるなら別だ。あの2人も強くなりたいのなら不満もないだろう。

あの試験の影響を受けて、とりわけ2人は変わった。同胞達が殺し殺され、その中には2人の恩師も含まれていた。他の面々もそうだ。己の無力さを噛み締めた筈だ。全能感に満ち、異能の力に酔っているよりは、無力だと知っている方が良い。高みを目指すには、先ずは自分が低い位置にいるという自覚を持つべきだ。

結論が出た以上、あと少しだけ背を押せば、自分が求める魔法少女、仮面ライダーになる、かもしれないのだ。

冒頭でも述べたが、フレデリカには、スカウト兼試験官として活動してきた経験がある。彼女なりの『良い人材』を見つけた事は数える程しかないが、それでも魔法の国から活動費をもらって口に糊して

いる数少ない職業魔法少女だ。自負があり、人材を探す時のコツも掴んでいる。ただし、魔法の国が推奨しているものとは程遠い、独自の条件を設定して。

その条件というものの第一候補が、低い位置から上を見ている事だ。その条件さえ有れば、年齢は気にしない。幼稚園児だろうが、小学生だろうが。もつといえ、集団からはみ出しているものも含まれる。鬱屈し、鬱積し、内に籠ったエネルギーを外に出したくても出せず、そうした現状を打破するべく、力が、手段が欲しい。その為ならどんな代償を払っても良い。そうやって一方向に向けられた意志は強く輝き、高みへと導いてくれる。歪み、淀んでいれば尚更だ。それでも、フレデリカが求めている最高の人材には程遠い者ばかりだった。結局のところ、魔法を手にした事で、そこで満足してしまい、そこから先に進もうとしない者がほとんどだからだ。対象を大人にまで広げようとも考えたが、それにしても良い線までいって、決め手に欠ける者ばかりだった。そういう点では、やはり子供の方が適性を持つ率は高い。

そこに来て、スノーホワイトと九尾の存在を知った事は、フレデリカにとって大きかった。彼らは試験に参加し、大きな影響を受け、力を欲している。強さを得た先の目的までは分からずじまいだが、その欲求に終わりはない筈だ。少年漫画の如く、相手が誰であろうと絶対に負けない無敵の存在になるべく、自分自身を強化していく。強力な意志の元、それを実行する。漠然とした強さへの憧憬ではなく、彼らは選んだ側として、際限のない力を求め続ける。クラムベリーやオーデイン、そして同じ試験の候補生がそうだったように、死ぬまで求め続ける筈だ。

とはいえ、直接会えないと先方に伝えてしまっている以上、今更それを直に伝えるのは難しいだろうし、ここで自分から強引に入り込んでしまつては、不審に思われる。この一世一代のチャンス逃したくない。そこで彼女は、仲介役を作る事に決めた。それも、2人と親しい間柄がベストだ。

その人物もまた、スノーホワイト達と同様に人助けに従事してお

り、さすがにスノーホワイトのような魔法がない為、決まった順路に従ってパトロールをこなしていた。予め、彼が住んでいるアパートに忍び込んで入手した髪を使って動向を確認する。一通り仕事を済ませたところで小休止するべく、人気のないデパートの屋上に降り立って背伸びを始めた所を見計らい、フレデリカは声をかけた。

「こんばんは、龍騎さん」

「オワツ!?」

振り返ると同時に小さく飛び上がった姿を見て、フレデリカは笑いを禁じ得なかった。これでクラムベリーやオーデインの末子と呼ばれるわけなのだから、世の中面白おかし。素質は高いようだが、決して強者という風情は見受けられない。それでも試験を勝ち抜いた1人なのだから、見かけによらないものがあるのだろう。一先ず両掌を相手に向けて微笑む事で、こちらに敵意も害意もない事を示す。もう少し賢い者なら武器を持つ手を緩めないだろうが、目の前の仮面ライダーはあっさり受け入れて立ち上がり、転げた事で頭に手を当てて恥ずかしそうに体を動かす。チョロいと片隅で思いつつも、先ずは名刺を手渡すフレデリカ。管理者端末を持つような立場の魔法少女は、名刺の一枚も持っているとかと動きやすいのだ。

「ど、どうも……。ピティ・フレデリカ……。試験官!?」

「ご存知かどうかは分かりませんが、現在はスノーホワイトと九尾の指導役をしています」

「えっ、あの2人の?」

龍騎の反応を見るに、どうやら仲間には打ち明かしていないようだ。それならば好都合、とフレデリカは更に踏み込む。

「実は2人から相談を受けてまして」

「相談?」

「強くなるにはどうすれば良いのか、というものです。2人が強くなるうとして理由はご存知ですか?」

「!それは、その……」

龍騎は躊躇う。あの事件の事を話題にして良いのか、悩んでいる様子だ。

「あなたもそうですが、スノーホワイトも九尾も、クラムベリーとオーディンが執り行った最期の試験の参加者です。故に周囲の目は厳しい。単に強くなるうとしていただけならともかく、あなた方にも知られたくないような、何らかの目的があるなら、あまり推奨できません」

「そ、それは……」

「言っておきますが、現段階で魔法の国に報告しようというつもりはありません。するつもりなら、こうしてあなたの前に姿を現す事もないでしょうし」

軽く笑って見せて、相手の警戒心を少しでも削ごうとする。昔からの癖だ。

「ただ、強さを求めている事が魔法の国に知られ、私がそれについて十分な説明が出来なければ、私は任を解かれてしまうでしょう。そうなるに次に任を与えられる者がどんな人になるのか分かりません。場合によっては、クラムベリーやオーディンのような思想の持ち主が指導役に選ばれる事も……」

「そ、そんな……!」

龍騎の動揺ぶりは、仮面に覆われていても、手に取るよりも分かっています。良い感じに振り回しているようだ。

「龍騎さん、あなたの腕を見込んでお願いします。あの2人の真意を問いただしてもらえませんか？私も聞いてみたのですが、はぐらかされてるばかりで、進展していません。その答えが『正しい』ものであれば、私も惜しみなく協力します。今の2人には、あなたの手助けが必要なんです」

「……わ、分かりました。俺で良ければ協力します!あ、でもその前に一つ……」

「?何でしょうか?」

「何で、あんたは……、そこまでして2人の事、気にかけるんだ?だって、会った事もない相手なんだろ?何でそこまで……」

「……心配、してるんですよ」

「心配?」

「ええ。このままだと、2人とも無茶な真似をしでかすんじゃないか

と。強くなりたいという思いを募らせるがあまり、自分の力量も把握できないまま、危険な行為を繰り返すのではないかと。実際、私が制止しても、聞く耳を持たないでしょう。龍騎、あなたならどうですか？もしあの2人が無茶をするなら、止められますか？」

その答えを、フレデリカは知っている。どんな言葉で弄そうと2人を止める事はできない。龍騎も何となくそれを感じている筈だ。

「要は、まずい事になる前に何とかしたい。それだけなのです」
そうしてアピールした事が功を奏したのか、龍騎はあっさりと答え
た。

「……分かった。少しでも無茶しないように、話をしてみる！」

「頼もしい限りです。では、よろしくお願いします」

『龍騎を唆したな』

翌日、九尾に連絡を入れると、開口一番、ドスの効いた声が入ってきた。こちらもこちらで実に好ましい。

「あなたの指導役として交友関係も把握しておきたかったので。良い仲間をお持ちのようで安心しました」

『余計な事をするんじゃないやねえよ』

声のトーンが若干大きくなった。こちらも高くならないように注意して口を開く。ここで挑発に乗ったらそれこそパーだ。

「余計な事ではありません。あなたもスノーホワイトも、側から見てもそれくらい気をつけてないと、と思わされるくらいに危なっかしいですよ。……それに、あなたの方がどうして強くなりたいのか、結局教えてもらっていませんから」

『教えるだけの信用が足りてない。それだけだ』

そう呟く九尾のトーンが僅かに下がったようだ。ここは畳み掛けるようにぶつかるのが最善だ。

「教えてもらえれば協力できるんですよ。あなたの方が何をしたいのか、それが反社会的な事だったり、魔法の国の意向に反する事だったりしても、私は他所に漏らしたりはしません。魔法少女としての自身に誓いましょう」

魔法少女である自分にそれだけの価値があるかは定かではないが、2人がどう思ってくれるかまでは、知るところではない。

「強くなりたいという考えは今も変わらないでしょう。自分を犠牲にしても強くなろうとしているようですが、逆に自分以外ならどうですか？お友達や家族。親しい人達を犠牲にしても、それでもあなたは強くなりたいですか？……失礼、犠牲という言葉は好ましくありません。……そう、『利用』です。利用してしまえば良いんですよ。あなたは何から何まで全部1人でやってのけようとしているようですが、それでは本当の強さにはたどり着けないと考えています」

相手は無言を貫いている。だが聞いてはいる。水晶玉に映さずとも、明白だ。

「練習相手がいなければ、龍騎達に更なる徹底した指導を要求すれば良い。私自身、クラムベリーなんかと比べたら、戦う事が得手とは言えないです。でもこれまで幾人もの魔法少女や仮面ライダーを育ててきた実績があります。その点はクラムベリーにも負けないという自負があります。強くなる為に利用する相手としては、私がこの上なく適役だと思いませんか？」

ここで一呼吸挟んで、そして告げる。

「私を利用しなさい。その為に先ず意志を示し、何故強くなりたいのか。それさえ知れば、私は適切な助言を入れる事ができます」

『……フン』

鼻息は荒いが、声の調子は落ち着いているようだ。極めて良い傾向だ。

『……なら、一つ聞きたい』

「何ですか？」

『あなたが俺達に利用されるメリットは何だ』

「指導役なんてそんなものですよ。人間世界の学校だって同じ事です。生徒は先生を利用して社会に出る。あなた方が私を利用して、目指すべき理想に近づけるのなら、私にとってそれほど嬉しい事は無い。利用されるだけの覚悟を持って、この仕事をしているのですから」

再び沈黙が訪れたが、程なくして、相手が口を開いた。

『……明日』

「？」

『スノーホワイトと話合って、そこで決める』

「そうですか。良い返事をお待ちします」

約束通り、九尾はスノーホワイトと話し合った。フレデリカの魔法では音まで拾う事は出来ない為、会話の内容までは把握できなかったが、それなりに真剣なやり取りをしている。

龍騎の方も、それなりに熱を入れて組み手に付き合うようになった印象がある。全てが計画通りだった。

そして……。

『私のやりたい事は、みんなを幸せにする魔法少女になる事、です』

翌日、向こうから扉を開けてくれた。スノーホワイトが語ったのは、己が強くなるうとする目的。そしてその目標を叶える為に、九尾も最後まで自分についていくと宣言した事をはっきり伝えた後、フレデリカを指導役として認める旨を示した。思わず頬が緩んでしまう。

スノーホワイトのそれは、フレデリカの予想範囲内で、一切の驚きは感じなかったりが、一応は驚いたフリをする。彼女らしい理想だ。やれるかやれないかで言えば、やれるだろうと思う。スノーホワイトや九尾という要注意人物達でさえ、魔法の国の監視体制はゆるゆるだ。悪く言えば、いい加減な放任主義だ。こういう部分は未来永劫変わらないと思っっている。『クラムベリーとオーデインの子供達』が表舞台に出れば色眼鏡で見られるだろうが、指導役兼監視役という名目で付いているフレデリカが協力してしまえば、幾らでもその肩書きは握りつぶせる。

決まりだ。スノーホワイトを、九尾を、最強の魔法少女、仮面ライダーに育成する。フレデリカ自身が掲げる、理想の存在に近づく事も可能になる。旧弊を改め、カビが生えた魔法の国を変革できるかもしれない。久しく見ない才能を感じた。アビスの目も間違っではないなかつたようだ。指導役として腕が鳴るものだ。当局に行方を知られても容易に手出しできなくなるくらい大きな存在になれたらベストだ。魔法の国の放任主義を糾弾し、異名を奉られて悪党から恐れられ、逆に魔法の国からは悪党退治の象徴として利用されるくらいが良い。

異名については今後考えるとして、先ずは相手に返事を出す事から

始めよう。

「……理解しました。私はあなた方の理想に協力します」

『ありがとうございます』

「いえいえ。気にしないでください。前に九尾にもお伝えしましたが、私を存分に利用してくれば良いんですよ。指導役にとってそれが本望なんですから」

水晶玉でスノーホワイトを確認すると、申し訳なさそうな顔の向こうに、海が見えた。漁船の光が水平線近くで輝いている所を見るに、海に近い鉄塔の上で電話しているようだ。九尾は元より、他に誰もいない。

「では、コツを教えます。覚えておいてください。先ず一つ目に、なるだけ魔法少女でいる時間を長くしてください。人間としての活動時間を最低限にして、1人でいる時は基本的に魔法少女でいる事です」

人間と、魔法少女や仮面ライダーでは、時間感覚が違う。何かを学習しようとするなら、魔法少女や仮面ライダーでいた方が都合が良い。フレデリカのような場合を除けば、基本的にはそれが1番だ。

「人間の生活はあくまで見せかけのものであり、自分の本分は魔法少女にあると信じてください。思うだけでは足りません。信じるのです。その上で、魔法少女でいる間も、人間でいる間も、頭の中で戦いのシミュレーションを繰り返す事が大切です。単に思うだけでなく、殺し、殺される渦中にと念じてください。願うだけでなく、信じる事です」

全く経験のない者には不可能だが、彼女も九尾も、少なからず戦術を得ている。後はそれをスキルアップしていくようなものだ。至難である事には変わりはないが、不可能ではない。その一大要素として挙げられるのが、『想像力』だ。プロフィールによれば、スノーホワイトには『妄想癖がある』と記されている。妄想も想像も同じようなものだ。思い考え祈り信じる事が、『決して折れる事のない、太くてしなやかな魔法少女としての背骨』を形作る。プリミティブだが、スノーホワイトにはしつくりくる育成方法だ。無論仮面ライダーとて例外ではない。

「とにかく、飽きない事、疑われない事、真剣である事。この3つが重要です。私達は、世間一般の基準でいえば、存在そのものが馬鹿げています。だからこそ真剣にやるんです」

その確固たる例がクラムベリーやオーデインだ。フレデリカはそう考えている。

「人間社会での生活は添え物です。あなた方は受験生かもしれませんが、まともに受験勉強をする事もない。正々堂々と不正をして合格するか、勉強しなくても合格できる高校を受験するか、中学卒業を最終学歴にするか、何れかを選んでください。九尾にもそう伝えておいてくださいね」

無茶を通そうとすれば、意外と通るものだ。強くなる為の術をスノーホワイトに語り、彼女は内容への疑問を口にする事なく、最後までもれなくメモに書き残しているのを確認する。直接戦闘訓練を見てやれない事を詫びると、龍騎達が相手をしてきている事を話してくれた。既に周知済みだが、敢えて黙っておく事に。その時の姿勢には可愛らしいものを感じさせた。案外、こういった部分が生き残る要因だったりするのかもしれない。魔法少女ならぬ魔性の女、といった所か。

ともあれ、ようやく第一段階をクリアした事を自覚し、ホッと一息つくフレデリカ。変身を解き、端末をテーブルの上に置いた後、キツチンを出て和室の引き戸に手をかける。和室の中では、空気を入れ替える為のファンが回転を続けている。引き戸を開いて足を踏み入れると、畳が僅かに沈む。去年辺りは漂っていた青畳の爽やかな香りも、ファンを回し続けていたからか、すぐに無くなった。この部屋は、左右を壁の代わりにスチール製の無骨な本棚が埋め尽くしており、ぎっしり並んでいたファイルの中の一冊を手にとって開く。そこには薄紙に挟まれた一本の髪の毛がある。暗い金髪で軽くウェーブがかかっている。コレクションの中でもお気に入りなのやつだ。一本の髪を見ているだけで、色々な思い出が甦ってくる。だが、それだけに、いつまでも未練がましく持っていては、前に進めないような気がする。今のフレデリカには、スノーホワイトと九尾という、新たな対象

ができたのなら尚更だ。

決断は早かった。その髪の毛を抜き取ると、キッチンのゴミ箱に捨てた。昨日、従者の少女が調理していたアボカドの皮の上に落とされた髪は、少し悲しそうに見えた。

恥ずかしい反面、新たに君臨するであろう、史上最強、絶対無敵の魔法少女、仮面ライダーの誕生を夢見るピティ・フレデリカなのであった。

EX. スノーホワイト& a m p・九尾育成計画（後編）

スノーホワイトも九尾も、着実に成長しているのが水晶玉越しに見てとれた。目的意識がしつかりと一方向に向かっているようだ。

スノーホワイトはフレデリカの言いつけを愚直に守っているらしく、今まで以上に瞑想に費やしているようだ。魔法少女のままですらの中で戦っているのだ。強くなる実感は、途上において最も楽しいものだ。フレデリカ自身、経験者の1人だから、気持ちは分かる。九尾の方は、慣れない事に若干戸惑っているようだが、多少無理してでも真似ようとしている様子だ。少し前まで庇護の対象だったパートナーが日に日に強くなっていく事に触発されているのかもしれない。

順調にシナリオ通りの展開が進んでいる事に安堵したフレデリカは、ファイルに新しくコレクションとして追加した写真に注釈を加えつつも、2人の『完成図』を思い浮かべ、そして描く。

美しく育っている。模擬戦で教えられた事以上のパフォーマンスを見せているスノーホワイトの姿勢を確認したフレデリカは、そこで水晶玉の映像をオフにして、魔法の端末に目を向けた。試験官という立場上、あの2人ばかりにかまけている訳にもいかなかったのだ。終わらせなければならぬ事が山積みなのだ。通常業務も滞っている。ちゃんとメリハリをつけてこなしていかななくてはならない。

現在の優先順位として取り組まなければならないのは、次の新人選抜試験だ。スカウト役として、指導役として、『理想とする優れた人材』を、候補生を集めて競わせ、選別する。悪を討ち、正義を掲げる正しいヒーロー、ヒロインを見出す為に。その為にも準備が必要だ。もうすぐ執り行われる事になっているが、フレデリカとしては、もうワンアクセント入れたくなかった。登録されている参加者の顔をざらっと眺めてみる。が、どうにも決め手に欠ける人材ばかりだ。要は、触りたくなるような髪の毛の者がいないのだ。こうなると、工夫が必要だ。そこで思いついたのは、試験の舞台を遊園地にする、というものだった。龍騎に初めて会った時のデパートの屋上のような、遊具や屋台に囲まれた夜の施設というのも、なかなか雰囲気がある。

フレデリカは早速その思いつきを形にするべく、ファイルを取り出した。

それから1ヶ月近くは、余さず、とはいかないにしても、概ね順調だった。選抜試験にかかりきりだったフレデリカは、2人の様子を観察できなかった訳だが、互いに切磋琢磨しつつ、御涙頂戴レベルの、この短期間での成長は、予想以上に素晴らしいものだと感じた。

このように、2人の育成に関しては上手くいったわけだが、その反面、本業の方は真逆だった。デパートの屋上にある種の感銘を受け、遊園地を舞台とした試験は、結論から言えば、無駄な徒労だった。スノーホワイト達のように、激しい特訓の中で遊具等が壊れると子供が悲しむという配慮のもとで稽古場を山に移した事と反比例して、参加者は血の気の多さからか、遊具や施設をいたずらに傷付けながらその椅子の座を争っていた。おまけに、十数人いた参加者は、誰一人としてその椅子に座る事はなかった。フレデリカは自分を慰めるように、自室でファイルを眺め、ペラペラとページを捲る。そこには、参加者全員の処理済みの髪の毛が収められている。新しい資料となつた事もあり、そういう意味では完全に無駄とはならなかったが、刺激剤とはならなかった。写真に注釈を書き添えながら、自分のやっている事が義務と惰性でやっているような気がして、思わずため息をつくフレデリカ。

とはいえ落ち込む必要は全くない。まだ、あの2人がいる。2人を最強の存在にさせる事が、魔法少女ピティ・フレデリカの最大の仕事なのだ。だから試験にちよつと失敗したぐらい、些細な問題だ。なんとなくテレビをつけると、原因不明のバスの事故で、十数人いた子供だけが全員死亡というニュースが流れていた。鎮痛な面持ちのニュースキャスターを見ているだけで、こちらも気が滅入る。すぐに電源をオフにして、魔法の国に提出すべき書類のでっち上げに取り掛かるフレデリカ。彼女が崇拜しているクラムベリーとオーデインを真似るようになった結果、試験内容は勿論の事、事故に見せかけるのは上手くなった。

筆を手に持ち、ふと顔を上げて、目線の先に見える、次の指示を待っているかのような男女2人の事を思い返す。この2人も、フレデリカが組んだ試験の合格者であり、複数の候補者同士の血で染まりあった環境の中で生き残った強者だ。試験にこそ合格したが、2人からの反感を買ってしまった。こんなやり方は間違っている、これが魔法少女、仮面ライダーのあるべき姿とは言えない、などと罵詈雑言を浴びせられたフレデリカだが、本人としては上出来だと自画自賛する。ここまで意志の強い者は滅多に現れない。この2人なら理想の存在になれるかもしれない。そんな期待を寄せたフレデリカは、敢えて2人を始末する事なく、魔法の国では『死の將軍』として恐れられている魔法少女が所有する武器の魔法を用いて、2人を洗脳する形で、事態の沈静化を計った。おまけにこの2人には兄や弟がいる事も独自の調査で分かり、それらが候補生に選ばれた事を知った際は、思わず笑みが溢れた。

……それはさておき、試験に関しては不慮の事故として上に報告すれば何ら問題ない。今書くべき内容は勿論、スノーホワイトと九尾は良い傾向にある、といったものだ。こういう時、ファヴのような相方がいれば、ずっと楽になるのかもしれない、と考えるフレデリカであった。

そんなこんなで報告も終わり、偽りの報告書が受理されたのを確認したフレデリカは、いよいよかかり切りでいられるようになると思うと、嬉しくてしょうがない。自分が見ていない間、あの2人はどうなったのだろうか。水晶玉で確認するのも良いが、先ずは第三者からの意見を聞くのもアリだ。フレデリカは早速端末を手に取り、連絡先を交換した仮面ライダーに声をかけ、深夜になってチームが帰路に着くタイミングで、彼と会合する事となった。

山というのは人気がないほど神秘的で、満月の夜ともなれば、格段深みと味わいが増す。木々の連なりを超え、左右を岩壁に挟まれた谷底の川を遡って上流を目指す。魔法少女によって強化された脚力を活かし、テンポ良く岩を蹴って跳んでいく。

呼び出し相手は、上流付近にかかっている、山の中にしては比較的大きめな橋の上で、フレデリカの到着を待っていた。

「あ。久しぶり、になるのかな？」

「そうですね。私もどうしても外せない用事がありましたので」

外せない用事、と口に出した際、一瞬ピクリと反応する龍騎だったが、フレデリカは特に気にする事なく橋の下に目を向けながら、会話を続けた。

「それで、スノーホワイトと九尾の方は滞りなく？」

「う、うん。2人とも強いからね。最近じゃ、俺でも敵わなくなっちゃってる気がして、ちよっと焦ってるんだ」

「それでも鍛えていただけたようで、こちらとしても有り難い限りです。自らの理想を叶えようとするあの2人も本望でしょう」

2人を褒め称えていくうちに、フレデリカも興奮しているのか、段々と口調が早くなる。

「何より2人は若い分、成長速度が早い。相手の癖を洗い出し、逆手に取って引き出す事で、そこに不意の一手を与える。あれほどにまで強くなれば、私も安心し」

「何で」

不意に、龍騎の一言が話のコシを折り、フレデリカは顔を上げる。

「どうしてスノーホワイトがそんな高度なテクニクを身につけたか、知ってるんだよ？あんな、自分の用事で全然連絡取り合っただけじゃあなかったはずだろ？だったらどうしてその事を……」

内心マズい、と焦り始めるフレデリカ。いくら警戒心の薄い話し相手とはいえ、言葉の矛盾に気づいている様子だ。気を緩めてしまった。こちらも警戒するべきだった。そう反省したフレデリカは、話を続ける。

「私は見守る立場です。彼らが本当に正しい道を歩んでいけるかを。だから何となくそれくらいの成長を予想しただけですが、どうやら当たったようです。それと、今後の事です……」

疑われているとはいえ、まだ交渉の余地はあるはずだ。龍騎レベルなら、誠意を一杯引き出して説得すれば、無理矢理にでも納得してくれる……筈だ。

「……なあ、フレデリカさん」

「何でしょうか？」

「……あの2人は、弱くないよ。きっと、あなたが無理にアドバイスしなくたって、もう、自分が何をすべきか、分かっている筈だ。だからあなたに、道案内をしてもらう事もない」

「それはあなたの解釈であって、私は」

その先は続かなかった。続けられる状況ではなかった、というべきか。反射的に横へ飛び退いた時には、白い毛並みのついた仮面の人物が刀を振り下ろしていたのだ。僅かに頬を掠め、少量の血が橋に染み

込む。我ながらよくそこまで反応できたものだ、と思いつつも、全
てが瓦解し始めている事も悟った。ギリギリまで殺気を隠し、こちら
に奇襲を仕掛けたその人物は、刀についた血を拭う動作をし、目線を
合わせた。仮面越しに、こちらを睨んでいるのは気配で分かる。

「ようやく会えたな、ピティ・フレデリカ」

「……っ！九尾……」

と、そこへ更にフレデリカにとって厄介な人物が。

「指導役なのに私と会おうとしなかったのは、私の魔法が関係してい
たから、だよな。私に知られたら絶対に困る事情があったから」

「スノーホワイトまで……」

白い学生服の魔法少女。凄惨な試験を経て、その表情は資料にあつ
たような穏やかな面影だけでなく、明確な敵意を剥き出しにするまで
に彼女を育てた。

彼女の言っている事は的を得ていた。頑なに2人との面会を断つ
ていたのは、スノーホワイトの魔法によって、自分の事が見透かさ
れてしまう事を恐れていたからに他ならない。彼女の魔法を知ってい
る以上、心の動きを止める術はない。相手の魔法を知る事で、逆に不
利になってしまう珍しいケースだ。それだけ、彼女の魔法は特別であ
り、彼女の魔法を行使できる九尾も要注意人物だった。

当然だ。あの2人が自分の行いを、本性を許すとは思えない。別に
許されるとも思っていないし、許して欲しいときさえ思っていない。
が、ここに来て龍騎を囮にしてまんまと誘き出されてしまった事に失
笑を禁じ得なかった。もう少しで理想の存在に作り上げられたはず
なのに。魔法の国にクーデターを起こす起爆剤になれた筈なのに。
願わくば、自分の太股に2人の頭を乗せて、髪を撫でさせてもらえた
筈なのに。

だからこそ、残念な気持ちになった。ここで彼らを始末し、一から
振り出しに戻らなければならぬ事が、心底残念だ。夢を実現するた
めに、必要な人材だったというのに。

「非常に残念です」

改めてそう呟いた後、懐から石ころのようなものを取り出して、地

面にばら撒いた。3人が警戒する中、石ころは次第に形を変えて、槍を携えた人型の怪人へと変貌した。知り合いから譲り受けた兵隊がこのような形で役立つとは。フレデリカは思わず笑みを浮かべた。が、その直後に表情が歪むフレデリカ。フレデリカと召喚した怪人を取り囲むかのように、新手が現れたのだ。何れも九尾とスノーホワイトを観察する上で見知った面々だ。どうやら総出でこの場所に来ていたようだ。

「ピティ・フレデリカ！お前の悪事は既に周知している。お前のような者を、魔法少女だなんて認めない！」

「そういう事だ。人の命を弄ぶお前には、ここで退場してもらおう」

ラ・ピュセルとナイトが何かを言っているが、フレデリカには興味のない話だ。それよりも、自身への慰めとして、2人の遺髪をどう保管するか、頭になかった。次の逸材に出会える事を夢見ながら。

張り詰めた空気は唐突に引き裂かれ、戦闘が始まった。龍騎が、ラ・ピュセルが、ライアが、ナイトが、リップルが、ハードゴア・アリスが怪人を相手にする中、スノーホワイトと九尾は、フレデリカと対峙する事に。

「本当に惜しいです。勿体無い事この上ありません。あの2人が死んでから、唯一興味を持てた相手なのに。このような形で終わらせる事になるとは」

「随分自信あげだな」

「ええ。勝つのは私です。私とあなた方とは、経験値に差があり過ぎますからね」

「……だとしても、ここであなたを、止める！」

スノーホワイトの言葉を皮切りに、同時に足を踏み出す2人。

場所を橋の上から川岸に移し、スノーホワイトが岩を割ってジャンプし、飛び蹴りを放つ。拳動が大きすぎる。この程度なら身体を少しズラせば当たる事もない。全力で攻撃しているのが分かる。自分が利用されていた事に怒りを感じているのか知らないが、首の骨を折れば皆黙る。スノーホワイトの攻撃を避け、その首に回し蹴りを

「！」

危なかった。回し蹴りの軌道上目掛けて、刀が振り下ろされるのに気づいたフレデリカは、その足で刀を弾く事に専念。その間にスノーホワイトは距離を置いて息を整える。それも僅か数秒の事で、九尾の斬撃に対処している間に、再び拳を握り向かってくるスノーホワイト。フレデリカは両者の攻撃に注意しつつ反撃を試みる。コンビネーションは悪くない。伊達にペアを組んでここまで生き残ってきた訳だ。

流れの中でスノーホワイトが足を引いた。前に出ようとする時にしてしまう、彼女の癖だ。が、彼女の足はそれ以上動かなかった。打撃が来る事を想定していただけに、九尾が振り下ろした攻撃を完璧には避けきれず、右腕から血がしぶいた。よろめきながらも距離を取ろうとするフレデリカに対し、2人は岩場を跳び交いながらついてきている。テリトリという事もあって、地の利も向こうに分がある。だが、それだけの理由で勝ちを譲る気など毛頭ない。

続いて九尾が、2本握られていたフォクセイバーの一つをフレデリカに向けて投げつけた。真っ直ぐ向かってくるフォクセイバーに、フレデリカは見向きもしなかった。あからさまな陽動だ。フェイントにもならない。回避した後、次いで振るわれた攻撃を打ち、更に蹴りを入れる振りをして、スカートをはためかせて九尾の視界を遮る。一瞬の隙について九尾の死角から抉るように、つま先を喉元にぶち当て「ついで。」

彼女の算段は、スノーホワイトが放った攻撃が鋭い痛みを伴っていた事で中断し、身を翻して上流の岩場に駆け登る。肩から血が垂れている。別に、スノーホワイトの攻撃を想定していなかったわけではない。ただ、彼女の間合いを承知していて、ギリギリ届かないだろうという所で九尾にトドメをさそうと動いていただけだ。ふと見ると、スノーホワイトの手には血のついたフォクセイバーが握られていた。躊躇う事なく刀を振り下ろしてきた辺り、本気でこちらの命を刈り取ろうとしているのか。

ああ、と気づいた。先程九尾が投げたフォクセイバーは、フレデリカへの攻撃ではなく、スノーホワイトへのパスだったのだ。彼女の攻

撃ならそこまで気にする必要はない、とタカを括つたのが間違いだったか。休む間も無く、2人の斬撃がフレデリカに襲い掛かる。攻撃のタイミングが早く、そして噛み合っている。もしかしたら、事前に打ち合わせを、連携を取れるように鍛錬していたのかもしれない。だとすると、これまで自分が水晶玉越しに見てきた、瞑想をしていた時も、常にこのような事態をシュミレートしていた可能性がある。

次第に追い込まれている事を実感するフレデリカ。力量は把握していたのに、全て見透かされ、息が合っていく。『実戦は時として戦士を大きく成長させる』というのを聞いた事がある。それに加えて『思いは人を強くさせる』事が上乘せされ、フレデリカが思案していた育成法の究極系が、目の前で繰り広げられているのかもしれない。水晶玉にも攻撃が当たり始め、追い込まれているにも関わらず、嬉しさが込み上げてくる。

その反面、勿体無さも湧き出ていた。2人の結びつきは固く、密に、そして一匹の獣の如く、尚も激しい攻撃をしてくる。これほどの素質を持つ逸材が、今日殺されてしまう事は本当に惜しい。せめて、2人の遺髪はセットにして飾ってあげよう。死後も仲良くさせてあげられるなら、それが1番だ。その髪を見つめながら、次の試験を思案する。なんて美しい未来図だろう。

舞台はいつの間にか、橋の上に戻っていた。龍騎達と怪人は、別の場所に戦いを移したようだ。

「ここまで私を追い詰めるとは、さすがと言うべきか。ですが、先程も申し上げた通り、私とあなた方では、経験値に差があり過ぎる」

故に、こんな事だつて出来るんですよ。

そう言つてフレデリカは水晶玉に手を突っ込んだ。彼女の指には、逃げながら巻きつけた髪の毛がある。やがて引き抜いた手には、襟を掴まれている少女が。魔法少女ではない、ただの人間だ。素質もなく、どこにでもいる、小学生が、寝ぼけ眼でキョトンとした表情で、目を擦っている。自分が今どんな状態なのかも分かっていないだろう。

2人の表情……九尾は仮面に覆われているが、それでもスノーホワイトと同じ筈だ。驚きに目を見開いている。100点満点の反応だ。

ピティ・フレデリカの魔法は『水晶玉に好きな相手の姿を映し出すよ』であり、その本質はピーピングにあるわけではない。水晶玉に映し出された対象をこちら側へ引っ張り出す事にあるのだ。対象がどこにいても、距離どころか世界の枠さえ問わず、電脳空間だろうと、引っ張り上げる事ができるのだ。

スノーホワイトも九尾も、真っ直ぐな面が強い。世の中にはフレデリカのような、救いようなないクズがいる事を、いかんせん想定し切れていないのだろう。良心が咎めないわけではないが、心の中で可愛く謝りながら、行動に移した。

「っ！お前……！」

九尾が舌打ち交じりに、スノーホワイトと並んで駆け出す。フレデリカは少女の身体を優しく放り、2人は橋の下に身を躍らせる。まず間違いなく間に合う。そうなるように投げる方向を計算していたのだから。あの2人なら、少女が叩きつけられる前に救えるだろう。

「（それこそが『隙』というやつなんですよ）」

目の前の命を救いたいなら、どうしても隙が生じる。2人の隙を突くためなら、無関係な命を投げ落とす事も躊躇わない。勝つ為に、弱者を踏みつけて勝利を手にする。相手が正義の味方を名乗るなら、それに見合う悪役として振る舞えば良い。それがフレデリカの考えだ。

水晶玉の映像を切り替えると、スノーホワイトが少女を抱き上げていた。続いて九尾の動向を確認。映像を切り替えると、橋の上に戻ろうと崖を伝って走っている。こちらに辿り着くまで多少の猶予はある。ならば狙うべきは……。

フレデリカは躊躇わなかった。先ほども述べたが、フレデリカはその魔法で、水晶玉に映った対象を引きずり出す事ができる。どのような状態で引きずり出すかは、本人の力加減による。首を掴んだ勢いで骨を折ってしまう事もある。

「（さよなら、私の愛した魔法少女）」

狙いを定め、そっと右手を差し込み、スノーホワイトの首に当て

「挿入歌：Revolution」

「え」

久方ぶりに、フレデリカは息を呑んだ。彼女が突き出した手は、スノーホワイトの首には当たらなかつた。そればかりか、身体を反転させて伸ばした手を逆に掴まれてしまう。

『SURVIVE』

『STRIKE VENT』

ハツと顔を上げると、こちらに辿り着いた九尾が、デストクローをつけた状態で引つ張られたままの腕を引つ掻いた。血飛沫が上がり、呻き声と共に水晶玉から手を引き戻し、後方によるめいた。その後も激しい攻撃を回避し続けていると、スノーホワイトが欄干に降り立つたのが見えた。

『SURVIVE』

そして懐にあつた端末を取り出し、その姿が光に包まれたかと思うと、昔人間界で流行つた魔法少女アニメに酷似した衣装を見に纏つたスノーホワイトが、フレデリカの眼前に現れた。何とも美しい。そこでふと我に返り、九尾も姿が変わつていた事に気づく。

サバイブ。試験に関する資料の中にあつた、魔法少女や仮面ライダーの魔力を底上げさせる為の、そして争いをより過激なものにさせる為に投与した激レアアイテム。2人ならどこかで使つてくるだろうとは想定していたが、それでもここまで不意をつかれるとは思つてもみなかつた。一体何故。そう思考している間にも、フレデリカは次の一手の為、水晶玉に手を伸ばすが、

『BUBBLE VENT』

九尾サバイブの一手が早かつた。手元に召喚されたバブルショットが、水晶玉を撃ち抜いて手元から離れ、橋の下に落下した。動揺するフレデリカに、スノーホワイトサバイブは接近戦を挑み、先ほどとは比べ物にならないほど俊敏な動きで、フレデリカに打撃を打ち込む。後ずさつていくフレデリカを見て、九尾サバイブは次のカードを引き抜いた。そしてスノーホワイトサバイブに目線で合図を送り、彼女も小さく頷く。

『WALL VENT』

刹那、フレデリカの足元の地面が勢いよく突き上げられ、彼女の身

体は宙を舞った。如何に経験値の高い魔法少女といえど、空中では身動きが取れない。

『FINAL VENT』

並び立ったスノーホワイトサバイブと九尾サバイブは、同時に跳び上がり、一回転してから、右足を突き出す。九尾サバイブの右足に契約モンスターであるフォクスローダーが絡みつき、音を上げながらフレデリカめがけて『ブレイズバーストキック』が直撃。スノーホワイトサバイブとのダブルキックは、フレデリカの口から空気と共に、黒い液体を吐き出させ、身体をくの字に曲げながら、橋の下に落下し、大きな水飛沫が響き渡った。

緩く流れる川から這い上がったフレデリカは、息も絶え絶えに大きな岩に身体を預けて、座り込んだ。湿っぽい地面から尻の方に、冷たさが滲みてくる。刻まれた傷は骨の半ばにまで達しているものもある。腹の激痛もあり、歩こうにも歩けない。荒い息で血中に酸素を送り、山の冷たい空気を吸う度に肺が痛くなる。

分からなかった。スノーホワイトはどうしてあの攻撃を読み切ったのだろうか。気配を殺すのは勿論の事、心を読まれるはずもない。

あの状況で困っている事など微塵もない為、それで先手を讀まれたとも考えられない。

バシヤリと水音が響き渡る。サバイブを解除した、スノーホワイトと九尾が降り立って、こちらに向かつて来ていた。フレデリカは動けない。そこで顔を上げた事で、フレデリカは2人の後方の、柔らかい地面に横たわって寝ている少女の姿を確認した。水晶玉越しの手を退けた後に、安全な場所に安置させておいたのだろう。

「なるほど……」

フレデリカは理解した。気配を殺し、ゆつくりとスノーホワイトの背後から忍び寄る右手は、彼女の死角にあった。だが見ている者はいない。そう、スノーホワイトに抱かれていた、囚役の少女だ。彼女は混乱の渦中であつたが、寝ぼけ眼でも見ていた。辺りは月の光程度しかなかったが、あの距離なら、『何かが飛んできて』ぐらいの認知はできる。その何かが少女にとって『困った』事態を運び込むものだと感じたのだろう。そうしてスノーホワイトのフルオート魔法が反応したのだ。結果、スノーホワイトはフレデリカの奇襲に気づいて、手を掴み返す事に成功したのだ。

「この私を利用して、ここまで……。嗚呼、素晴らしい逸材だ」

この2人の未来の事を考えると楽しい分、その未来を見る事ができないのが残念だ。理想の存在を作り上げるといふ目的を半ばまで叶えたのに、最後まで拘る事なく途中退場してしまうとは、なんたる事か。フレデリカにはなれなかったものに、この2人はなれる。魔法少女を、仮面ライダーを、実験動物程度にしか考えていない魔法の国を内から破壊する、希望の存在。誰にもできなかった事をやってのけるかもしれない存在だったのに。隣に立ち、腐りきった魔法の国に立ち向かう最高の仲間になる魔法少女や仮面ライダーを作り上げたかったのに。あと少し、ほんの少し時間があれば……。

「どこで、間違つて、しまったのでしょうか……」

「……ピティ・フレデリカ。前に話した、私が強さを求める目的。あれには続きがあるの。信用していなかったから、話す事もなかったけど」

スノーホワイトは深く息を吐いて、そして鋭い眼差しを、悪しき魔法少女に向けられる。

「私の夢は、みんなを幸せにする魔法少女になる事。その夢を叶えるのを妨げる……魔法少女を、仮面ライダーを不幸にするような存在がいるなら、その行為を止めたい。次に出てこない為に予防する。人間世界の大きな揉め事だって、止めに入る。……だから私は、力を求め続ける。その為に、私は魔法少女であり続ける。戦い続けるって、決めたから」

見誤っていた。スノーホワイトの目的は、予想を少しばかり超えて来ていた。ますます成長が楽しみだ。それを見届ける事が叶わないのが非常に残念だが。

「……殺しはしない。お前には、まだ生きてもらう必要がある。魔法の国の牢獄にぶち込んで、罪を償ってもらおう」

九尾の周りに、怪人と戦っていた面々が降り立つ。やはりあの怪人では相手にならなかったようだ。殺意は感じられない為、少なくともこの場で死ぬ事はなさそうだ。何とも甘い考えだ。まだこちらには従者もいる。いざとなれば、異変を感じた彼らが、知り合いの魔法少女や仮面ライダーが脱獄に手を貸してくれる。そうなれば、指導役には選ばれなくても、違う手口で2人を理想像に染め上げられるかもしれない。

乾いた笑みを浮かべているフレデリカの手の甲に、フォクスバイザーが差し貫かれた。苦痛に顔を歪めながら、眼前に狐の仮面が迫る。

「何で生かされるのか、まだ分かってねえようだな。なら教えてやる。……お前には、魔法の国の奴ら全員に、伝えてもらわなきゃならねえからだよ。俺達の事をよ」

そして。安堵と共に薄れていく意識の中、仮面ライダー九尾は、断固たる意志を露わに、こう告げる。

「この街には、この国には、この世界には、俺達仮面ライダーが、魔法少女がいる事を忘れるな……！」

エピローグ・俺達は戦い続ける

く死にたいく

屈強で、酒やタバコの匂いにまみれた軍服の男達が、何がそんなに楽しいのか、ワイワイガヤガヤ騒ぐ室内でただ1人、ゴージャスなその部屋とは不釣り合いな、ボロボロの服に身を包んだ焦茶色の肌の少女の、切なる願いだった。

どうしてこんな所に監禁されてしまったのかは分からない。ただ、貧しい家族の為に、お金を稼ぐ為に山を降り、街へ入ってすぐに、装甲車から降りてきた軍人に罵倒され、痛めつけられ、気がつけばこんな所に連れてこられた。

中東に位置するこの国は異常だ。国を代表する大統領が貧困層の大量虐殺を軒並み支持しており、ロシアや中国を初めとした、国連所属国も手が出せなくなつた今、この国は無法地帯そのものだった。こうして少女が捕まっているのも、公開処刑と称して、反政府派に対して見せしめに利用する為だろう。

最早取り残された弟や妹、そして病に苦しんでいる母の心配事など、とうの昔に消え失せていた。全てがどうでも良くなつたのだ。しかしどうやって死のうか。舌を噛みちぎるか。でもそれを実行できる筋力がない。ならばテーブルの上……その少女が一生をかけてもありつけられないような豚の丸焼きを切る為のナイフ。隙を見てあれを手に取り、首元を搔つ切れば。

そんなこんなで、今死ぬ方法を模索していると、不意にある異変に気づいた。先ほどまで酒やトランプに興じていた軍人達がシンと静まり返り、辺りを訝しげに見回している。そこで少女は、耳鳴りのような音が部屋に響き渡っている事に気づいた。

誰かが悲鳴を上げた。部屋の隅に飾られていた、大きな鏡の中から何かあれば飛び出してきた。それも2つ。そしてその2つは人間だった。……否、人間のような姿をしていたというのが正しいだろう。

1人は、見ているだけで心臓が高鳴るような、アレンジの効いた学生服に程近い、アニメや漫画のキャラクターのコスプレに近いような、美しい少女。スカートはフリルで縁取られ、プリーツスカートには白い花飾り、腕章、白いブーツ、輝くプラチナブロンド。全てが可憐だった。

もう片方は、狐の面をつけていた。白銀の袴のような装甲に覆われ、白い毛並みはその存在感を引き立たせている。左腕には狐を模したものが付けられており、腰には変わった形のベルトが。

その狐が、足元にあつた豚の丸焼きを皿ごと蹴り上げ、近くにいた軍人にぶつけた事で均衡が崩れた。軍人が喚きながら指を指しているが、言葉を習う暇もなかった少女には何を言っているのか分からなかった。ただ、その声と共に軍人が銃火器を構え始めたのを見て、突然現れた2人を殺そうとしているのが分かった。

しかし、侵入者の方が早かった。素早く身を翻すと、1人、また1人と、近くにいた軍人から片っ端に地面に横たわらせていた。銃弾を乱射する音が少女の鼓膜に直撃する。弾は一つも当たらず、標的を外した攻撃が飾られていた模造品や窓ガラスに当たって割れる。そうして数が減っていくのを、少女は目を離せずにした。まるで夢のような光景だ。他国からの救援が禁止されていたにも関わらず、2人は敵の勢力を削っていったのだ。

そんな中、少女は気づいた。物陰に隠れて、弾をリロードしつつ、銃口を学生服の少女に向けられているのを。このままでは、彼女が危ない。少女の行動は自分が思う以上に早かった。直前でその行動に目がいったのだろう。ハッと学生服の少女が振り向いた時には、銃火器が火を吹き、少女は横に飛んだ。銃弾が肩を掠めるが、血は出ていない。少女はその軍人の腕に掴みかかる形で阻止しようとしたが、力の差は圧倒的だった。すぐに引き剥がされ、地面に叩きつけられると、その額に銃口が向けられる。死を望んでいたにも関わらず、迫り来る死に恐怖する中、

『ADVENT』

どこからか電子音が鳴り響いたと思うと、軍人に向かって鏡から姿

を現した新手が飛びかかった。その新手は、狐の姿をした怪物だった。先程の仮面の男のペットなのだろうか。銃弾は少女に向かわず、天井にばら撒かれ、やがて悲鳴と共に軍人の手が地面に垂れ下がった。

「大丈夫？」

先ほどまでの騒動が嘘のように静まり返った後、茫然としていた少女に声をかける者が。先程の学生服の少女だ。膝を曲げて、目線を合わせて、頭を撫でられた。初めての行為だ。

「さつきはありがとう。お陰で助かったよ」

そう少女は呟くが、聞き慣れない言語の為、理解はできない。ただ雰囲気的にお礼を言われているような気はした。

「とりあえずこいつを連中の所に置いといてやるか。こいつが位も高そうだし」

一方で、狐の仮面は、攻撃指示を出していた軍人の1人を担いでいた。気絶している。ふと見ると、周りで倒れていた軍人達も、微妙にうめき声が聴こえてくる。誰も殺していないようだ。信じられなかった。あれだけ非道な連中を殺さずに全て仕留めたのだろうか。まるで強者の余裕だ。

「じゃあ、もうすぐ迎えが来ると思うから。もう、安心していいよ。だから、生きるのを諦めないで」

そう少女が呟くと、仮面の男と、狐のモンスターを引き連れて、再び鏡の中へと吸い込まれるように入ってしまった。そして静寂。

少女は呆然と座り込んでいた。夢と現実の区別がつかないのかもしれない。お礼を言われたからか、気分が高ぶる感じはした。心臓の辺りが温かくなる。

一体どこの革命軍の所属なのだろうか。軍人を圧倒したあの力は一体どこで出たのだろうか。こんな私でも、もしかしたらあの2人みたいに強くなれるのだろうか。そうすれば、家族も誰も、苦しまずに済むのだろうか。

外が騒がしくなる中、ふと、今の自分から『死にたい』という気持ちに綺麗さっぱり消え失せている事に気づいた。

「挿入歌：i n o r y」

「編集長！只今戻りました！」

「戻りました、じゃねえよ！どこほつつき歩いてたんだよ！すぐそこにできた新しい店の調査を頼んだだけなのに、こんなに時間かかるかよ!?？」

「す、すみません！ちよつと帰り道で不良の喧嘩の仲裁してたらこんな事に……」

　昼真つ盛りの、N市の一角に佇む会社『OREジャーナル』では、今日も新聞記者の1人、城戸正史が2年経った今もペコペコと頭を下げる様子が。その頬には湿布が貼られており、毎度の事というのもあって、大久保編集長も呆れ気味だ。

「つたくしうがねえ後輩だな。さつきもクレームの電話が来てよ。お前の書いた記事、表現が曖昧すぎてとても紹介出来ねえとよ」

「ま、マジですか!?？」

「マジだよ。つーわけで今からその会社に謝りに行ってこい。んでもってついでに、こいつの情報でも掴んできな」

そう言つて大久保はメモ用紙を正史に渡すが、途端に表情を一変させる。

「隻眼の黒忍者の目撃情報……つて、編集長これ……！」

「文句は受け付けねーぞ。遅れた罰として、それに関する記事を明日までに書いて俺の所に持つてこい」

「いや、ですけどこのネタは……」

「バカヤロー！口ばっか動かさないで、足動かせてんだ！それに今日は大事な用があるんだろ？だったらさっさと済ませてきな」

「は、はい編集長！行つてきます！」

そうして踵を返すように、再びドアを勢いよく開けて、ドタドタを足音を立てて階段を降りていく正史。いつになく忙しない様子を見て、大久保や、隣で記事をまとめていた令子は肩を竦めるばかり。

「2年経つても、ああいう所は相変わらずなんですよね」

「やれやれだぜ。あいつと絡むと、何か肩が疲れるつつうか」

そうボヤきながら孫の手を使って肩を揉んでいると、令子の隣に座っていた女性が、子供を抱えながらケタケタと笑い出した。

「あいつはああいう所で可愛げがあるんだよ。騒がしいぐらいが似合ってるんだろうよ」

「呑気に言つてくれるなよ『つばめ』……。お前もお前で、よくあんな奴と籍入れようと思つたよな」

「オレはあいつの真っ直ぐな所に惚れたんだよ。それに、仕事はあんただけど、家事とか息子の世話とか、あいつなりに頑張つてやつてくれてるしな。なー、『隼助』」

「ねー」

産後、現在の夫である正史と同じ会社に勤める事となった旧性『室田つばめ』改め、『城戸つばめ』は、前の夫との間にできた一人息子『隼助』にそう話しかける。その溺愛ぶりに苦笑する他ない大久保であった。

「それじゃあ編集長。私も取材に出かけます。以前、北岡弁護士を雇った商事会社が使用していたとされる不正資金の出所が掴めそうなので、早速調査してきます」

「お、そっちは順調みたいだな」

「それと、明後日の職場体験についてですが、応募したのは亜子ちゃん
の他にも何人かいるみたいなので、良さげなネタを幾つか仕入れてお
きます」

「おう、気をつけてな！」

「いつてらしゃーい！」

つばめと隼助に手を振りながら見送られ、令子も笑顔で手を振り替
えして部屋を後にする。

「……そういや、令子も北岡弁護士とデキてるって噂だったけど、そこ
ん所ハッキリしてなかったな。ま、今度暇な時に真相を聞いてみる
か」

「……そういえば、さつき城戸君が調べようとしてるやつ。確か、魔法
少女の事でしたよね」

不意に、パソコンと向かい合ってホームページのレイアウトをして
いた島田が、手を止めて思い出したように呟く。

「ああ。ここしばらくは音沙汰なしって感じだったが、西洋の魔女風
の奴の目撃情報が出回り始めてから、また姿を見るようになったって
話だ。ま、2年前もそんな感じで追いかけて回してたからな。あのバカ
にはもってこいの取材だと思ってるな。……ってどうしたつばめ。顔
赤くねえか？」

「ひえ!? だ、大丈夫だ心配すんな！ちよつと笑いすぎただけだ、ナハ
ハ……」

何故か照れ笑いをするつばめ。そんな彼女も机の上を片付け終え
たらしく、子供を抱えたまま席を立つ。

「んじや、お先失礼させてもらうから」

「おっと。そういやお前さんも今日は早退するって話だったな。何か
用事でもあるのか？」

「まあね。急な話だったけど、もうすぐ帰ってくる奴らがいてさ。そ
いつらもてなす為に、今のうちに下拵えを、ね」

そう呟いたつばめは、窓の外の景色に目をやる。清々しい青空が広
がっていた。

放課後の学生で混雑を極めるファーストフード店の中、高校生の少女が4人用の席で、隣並んで座っていた。頬杖をついていた少女が、もう片方の、慣れた手つきでスマホを操作している少女に話しかける。

「……で、さつきから何やってんの？」

「魔法少女とか、仮面ライダーとかの目撃情報をね」

「スウーミー……、あんたまだ魔法少女とか仮面ライダーとかがどうこう言ってるの？あたしらもう高校生だよ？てか懐かしー」

「いや確かに目撃情報は減ったけどさ。でもちらほらと情報は入ってきてるしさ。小雪も魔法少女好きだったじゃん。だから今のうちに情報纏めとこうって思ってたね」

「思ってたね、じゃねーよ。何か、『魔法少女育成計画』と、『仮面ライダー育成計画』だっけ？あれも酷いバグあったとかで再開未定の休止中でしょ？あつこの会社の株価、スゲー下がったって、OREジャーナルの城戸さんって人が書いた記事にも載ってたし」

「でもほら、ここに載ってるでしょ？ドラゴン風の仮面ライダーとか、

不思議な国のアリスの黒バージョンとか、片目の黒い魔法少女とか「魔法少女っていうか、死神みたいなルックスだな……」

愚痴りながらもまとめサイトに目を通す中、スミが思い出したようにこんな話題を。

「あ、そうそう！こないだニュースでやってたじゃん、中東の革命が成功したってやつ！」

「ああ、あれ？ロシアとか中国が反対したから、他の国も直接手が出せなくなつて、国内の虐殺止められないで、どーしょーってバカ騒ぎしてたやつ？」

「そうそれ！虐殺を指揮してた大統領を筆頭に、政府の要人や軍人らが軒並み反政府派に取っ捕まったっていうあれ。あれき、噂じゃ白い服きた少女と、狐のお面をつけた人が、風のように颯爽と現れて、全部やったって話らしいよ。それって、うちの街にいた魔法少女と仮面ライダーじゃないかって、一部のコアなファンの中じゃ騒がれてるらしいよ」

遂にトップの座を勝ち取つて、世界レベルに……、などと目を輝かせるスミに対し、芳子は肩を竦める。

「想像力豊かなのは結構な事だけど、勝手に人様の国に行つて勝手に助けるってそれ、下手したらテロリストと変わらないでしょ？」

「うっ……、それは……」

「それにさあ、魔法少女とか仮面ライダーとか、所詮は虚構なんだしさ。いい歳こいて本物になれるかもってバカみたいに騒ぐのもアレでしょ？」

「まあ、ね……」

「それは違うぞ2人とも」

不意に、芳子の発言に物申す者が。

2人の少女と向かい合う形で座つた2人は、店員に呼ばれて頼んだバーガーセットを持って、どこか真剣な表情で見つめた。

「魔法少女も、仮面ライダーも、確かに存在する。僕はそう信じてる。こうしてハンバーガーを食べてる今だって、僕達の知らない世界で、彼らは人知れず悪と戦つてる。中東の件が、何よりの証拠だよ」

「……それに、魔法少女も、仮面ライダーも、テロリストだと言ってきたけど、そうだったとしても、あの人達は、自分の正義を信じて、戦ってると思います。大統領が捕まって、救われた人達からしたら、魔法少女も仮面ライダーも、正義の味方なんですから」

芳子と同じ高校に通う男子学生、岸辺颯太の意見に同調するかのようになり、1つ歳下の少女、鳩田亜子は、以前のオドオドした性格からかけ離れたかのように、ハッキリと自分の意見を述べている。その2人の剣幕に圧倒されかける2人だったが、すぐにイヤイヤと苦笑する。「またまた夢のあるご意見をいただきありがとうございます」

「さすが小雪の幼馴染みっていうか、あの子もそれなりに妄想ぶっ飛んでたけど、影響受けすぎでしょ。高校生男子が魔法少女とか口にして、恥ずかしくないの?」

「別に良いだろ。サッカーはサッカー、魔法少女は魔法少女だ。好きなものとはことん好きになるって、もう割り切ったからさ。な、亜子」

「はい」
2年前まで魔法少女愛好家である事をひた隠しにしてきた少年も、堂々とした姿勢で胸を張っている。そんな彼と親睦の深い亜子も、騎士に相応しい態度に惚れ惚れしている様子だ。

「ま、まあとりあえずさ。魔法少女も仮面ライダーもまだ終わってないみたいだし、早いとこ小雪に紹介できるようにまとめとかないかね」

そう早口に結論つけたスミは、一度スマホに目を通すが、ふと思いついたように呟く。

「魔法少女って言えばさ……。小雪、どうしたんだろう」

「ああ、確か明日だっけ? だいちゃんと一緒に帰ってくるの。メールで届いてたよ。2人のところにも来てたでしょ?」

「あ、ああ」

「書き置き一枚でフラリと居なくなっただけ、もう半月……。中学の頃はまさか家出するようなキャラとは思わなかったわ。ホント、帰って来てくれてありがとうって感じ」

「そこはよっちゃんにマジ同感。高校デビューで悪になった……って

わけじゃないけどさ。なんか、ワイルドになったって言うか……」

「やっぱだいちやんの影響もあったんじゃない？初めて会った時から一匹狼って感じがあって、あたしらとも全然会話してくれなかったじゃん。小雪が居なくなっただって聞いた時は、2人で駆け落ちしたんじゃないかって思っちゃった」

「親御さん、心配してたからねえ……。うちの家にも来てたし。あの子のせいで、キャラ変したのは間違いないかも」

2人の女子高生の話を聞いて、向かい合っている2人は思わず苦笑する。事情を知っているが故に、どうしても表情を隠しきれない。

本当は、自分達もあの2人についていこうとも提案したのだが、大親友に「俺達が留守にしている間、この街を守ってほしい」と言われては、大人しく引き下がる他なかった。

そんな2人とも、間もなく会える。それだけでも安心する2人はテーブルの下で手を繋ぎながら、窓の外に目をやる。清々しい青空が広がっていた。

「……それで、断つたのか？お前への取材」

「当たり前だ。魔法少女の事は秘匿なのは、お前が1番分かっている立場だろう？」

「相変わらずキレのある性格だ」

「あのバカに絡まれたら、ろくな事にならない」

喫茶『ATORI』にて、店自慢の紅茶を堪能していた手塚は、ようやく休憩に入った華乃と蓮二の2人と会話をしていた。元々客足はそれほど多くない喫茶店ではあったが、この2年で環境も随分と変わった。その大きな理由として挙げられるのは……。

「この街も、随分と有名になったもんだねえ。行方不明事件に、中宿のテロ、それに商店街の怪物騒ぎ。それに巷じゃ、魔法少女や仮面ライダーとかも流行ってたって聞いたけど、結局単なる噂話だったってオチだったし。最初のうちは観光客も減って、どこの企業も大変だったそうだけど、2年も経つと、また活気が戻ってきたわけだし、世の中分からないわねえ……」

そうボヤきながら厨房に戻っていく店長の話聞きながら、華乃は小さく舌打ちする。

「増えたのは隣町のヤクザや暴力団絡みの連中だけだな」

「世間でいうテロの主犯格であるカラムיתי・メアリも行方知れずとなり、王蛇……浅倉も死んだ今、この街はそういった連中にとつて、格好の狩場に見えるんだろうな。それに釣られて、無法者のゴロツキも自分をアピールする為にこの街にやってくる」

その結果、街では暴力団絡みの事件が2年前と比べて横行している印象がある。そうなった時、力づくで事態を沈静化するのが大抵の場合、N市の魔法少女や仮面ライダーであり、それ故に、目撃情報も増えてしまっているのだ。

「占いにも出てたよ。城戸の運勢は割と最悪だな。ガス欠で動けなくなったバイクを引っ張っていると、自転車とぶつかり、更には通りかかったヤクザに蹴飛ばされ、サイドミラーが破損。……まあ、死なないから大丈夫だろ。それはそうと、今日は9時頃に帰国しそうだ」

「相変わらず占いか。さぞ儲かってるんだろうな、魔法の国では」

「まあな。俺の占いは当たる。絶対だ。だが、運命は変えられない」
いつものように自信ありげな表情を見せる手塚は、窓の外に目をやる。清々しい青空が広がっていた。

そして、子供達が眠りにつく頃。午後9時になる少し前。

海岸沿いにそびえ立つ、修復済みの鉄塔に、7人の人影が。西洋の魔女風の魔法少女は、黒いアリスと、ドラゴン風の仮面ライダーと共にレジャーシートを広げたり、手作りの料理を取り出したりしていた。エイ風の仮面ライダーとコウモリ風の仮面ライダーは座り込んでジツとしており、隻眼の忍者風の魔法少女は魔法騎士と共に端末に記載されていた内容に目を通していった。

そこに載っていたのは、何れも市外で、特定の人物達ばかり指している目撃情報だった。大統領の身柄拘束、マフィアの壊滅、通り魔の犯罪阻止 e t c ……。どれも彼ららしい、と苦笑いする。

不意に風の流れが変わった、と感じた時には、その人物達は鉄塔に

降り立っていた。開口一番、魔法騎士ラ・ピュセルが振り返る事なく
呟く。

「来る頃だと思ってたよ。2人とも、お帰り」

「……うん、ただいま。そうちゃん、みんな」

「お、戻ってきたか!」

「お帰りなさい……!」

「来たきたあ!」

他の面々も、学生服風の魔法少女スノーホワイトと、狐風の仮面ライダー九尾の帰還に湧き始める。スノーホワイトの首には、ウィンタープリズンが身につけていたマフラーが巻かれている。特別なアプリーケーションのお陰で空の旅は快適なのだが、念の為に、九尾が貸してくれたのだろう。

「しかし、随分と派手にやったものだな。中東の大統領の身柄拘束だけで済むんじゃないのか。ニュースで大騒ぎだったぞ」

「その道中で色々絡まれてな。お陰で帰りが遅くなっちゃったんですよ」

「誰も、信じないよね。私達魔法少女や仮面ライダーが関わってるなんて」

「魔法の国からメール来た?」

「……ああ、あれか」

九尾がふと思いついたように立ち止まり、とある事件を経て手に入れた管理者用端末を手に取り、すぐに肩を竦める。

「ゴミに捨てたよ。どうせ見なくても分かるし」

「だと思った。君達らしい」

ラ・ピュセルもつられて肩を竦める。

「ひよつとしてみんなの所に……?」

「ああ。担当地区外での勝手な行動は控えるように説得しろ、という内容だ」

魔法の国の名誉住人であるスノーホワイトが、新聞を読んで腹が立ち、自分の価値観だけを頼りに、生涯のパートナーである九尾と共に他国へ出向くような行為を、魔法の国が持て余しているに違いない。

ナイトはそう呟くが、本人としては、それに従う気は最初からないようだ。そしてそれは、当事者を含めてこの場にいる全員が、共通している認識だ。

スノーホワイトは、九尾は、ここにいる者達は知っている。小さな親切だけでは何も変わらない事。見ているだけでは、事は動かないこと。他人任せでは何一つ解決しない事。その全てが、2年前の試験で嫌というほど味合わされた。皆が傷つき、大切なものを失ってきた。だからこそ、変わろうと思った。変わりたいと思った。変わらなければならぬと思った。

「きつとあいつらも、同じ選択をしていたはずだ。死ぬまで……いや、死んでもそのエゴを貫くだろうからな」

そう呟く九尾の右手は、自然とカードデッキに当てられていた。そこには、多くの魂が刻まれている。その思いを背負って、これからも戦い続ける。そう、決めたのだ。

「じゃありップル、ラ・ピュセル。早速だけど、ご飯の前に、お願い」
「おいおい。帰ってきたばかりなのに、大丈夫なのかい？」

「銃弾3発当てられた。助けがなかったら、もっと危なかったかも。今のままじゃまだまだ弱いから」

「……そう」

説得は無駄のようだ。

そう思ったリップルは、サツと身を翻すと、スノーホワイトの足元に滑るように急接近。スノーホワイトはスライディングを回避するが、隻眼のリップルはそれを予測して、飛び上がった足を掴んで叩きつけようとするが、スノーホワイトは受け身を取り、リップルに反撃する。互いに跳び上がり、鉄塔から離れた。

「じゃあ九尾。君の相手は僕だ」

「ああ、遠慮はするなよ」

「そっちこそ、時差ボケで不調なんて言い訳は通用しないよ」

「強くなる為には、こうやって地道に鍛錬積むしかないからな。付き合ってくれてありがとよ、ラ・ピュセル」

「九尾にとって、それが自分らしい仮面ライダーになる為の一歩だと

「こののなら、僕には止められないからね」

そうして互いに拳を固めて、ファイティングポーズを決めると、地面を駆けて拳と脚がぶつかる、瞬時に鉄塔下へ。鉄塔の上では狭すぎるし、折角準備してくれたもてなしの品に被害が及ぶかもしれない。そういった配慮のもと、4人は静まり返った街中で模擬戦を始める。その様子を、他の5人は鉄塔の上から見守っていた。

10分後。軽めの組み手を終えた4人は鉄塔に戻ってきた。結果はリップル、そして九尾に軍配が上がったようだ。互いに健闘を讃えながら、一同は変身を解き、トップスピードお手製の、いつもよりちょっと豪華な料理を囲んで腰を下ろした。小雪と大地にとっては、久方ぶりとなる、暖かい料理だった。

「……それで、ライア。俺達がない間、何か変わった事は？」

中東での2人の活躍に関する話題も底をつきかけた頃、九尾はこの2年間で魔法の国の住民とコネを築いてきたライアに、自分達が留守の間の事を問いかける。

「ああ。先ずもって、B7098試験場と、B7243試験場で、記録の改竄があったとの報告だ。どちらも事故扱いによる死亡者が多数。試験官はどちらも同じ。近々、同一試験官がB7511試験場で執行う予定があるらしい」

「なら、手遅れにならないうちに、こっちからしかけるよ。みんなもそのつもりで」

スノーホワイトの決断は早かった。たださえ中東の一件で、魔法の国から監視の目が強化されようとしている中、彼女は躊躇わなかった。その理由はただ一つ。

「次は、選ばなかった事を後悔するんじゃない。後悔する前に、自分で選ぶ。そう決めたんだ」

「……そうだな」

そしてその想いは、九尾もまた然り。彼の今ある命は、スノーホワイトの願いが成就した事で吹き返したものである。それを聞かされた時から、九尾は決めていた。彼女が魔法少女として正義の為にしようとしている事を、全力で支援する、と。

「……それと、先日脱獄したとされるピティ・フレデリカの件だが、魔法の国の調査団も依然として捜索を続けているようだが、まだ足取りを掴めていない。ただ……、その脱獄を手引きしたとして、2人の存在が確認された」

そこでライアは口を閉じ、改まった口調で残酷な真実を告げる。

「エージェントの報告が正しければ、その2人の人相と……、大地の兄、そして、蓮二の妹が、一致したそうだ」

「……」

知らぬ間に拳を握る2人。

ずっと探していた2人が生きていた事は喜ばしいが、よりにもよって敵対している魔法少女の配下に収まっていたとは。数ヶ月前にとある事件を経て顔を見た時、電流が走ったような感覚に見舞われたのは、今でも鮮明に覚えている。

何れは、戦わなくてはならない。その上で手を差し伸べる。そうやって救うしかない。だからこそ、魔法少女を、仮面ライダーを続けよう、と心に誓ったのだ。

そうして重苦しい空気が払拭しかけていたその時、9人の端末から、耳鳴りのような音が鳴り響いた。スノーホワイトや九尾にとっては半月ぶりとなる警報だ。

『南西の繁華街でモンスターの反応を感知したぽん。どうやら鉄輪会の連中が狙われてるみたいだぽん』

九尾が持つ管理者用端末から飛び出してきたのは、2年前に魔法少女達を唆し、殺し合いへと発展させた元凶のマスコットキャラクター……ファヴに酷似した、電子妖精『ファル』。1年前のとある事件を解決した際、行動を共にするようになったわけだが、ここではその多くを語らない事とする。

「やれやれ、今日ぐらいは静かに過ごせると思ってたのに」

「んじゃ、腹ごなしにもう一運動しますか！隼助もイヤイヤ期卒業して大人しくなったから、遅くなくても安心だけどなー！」

「でも、心配させちゃマズいからな。さっさと終わらせるー！」

つばめと正史が奮起する中、他の面々も立ち上がり、9人全員が並

び立つ。

「(自分の価値観に従って力を振るう。それはきつと、正義とは程遠いかもしれない。それでも私は……、私達は、誰かの望みのためではなく、自分の望みの為に、魔法少女で、仮面ライダーである事を選ぶ。どんな未来でも逃げたりしない。魔法少女として、仮面ライダーとして、これからも立ち向かっていくんだ)」

そうして、小雪を中心に、マジカルフォンを、カードデッキを掲げて、腰にVバックルを展開する。

「変身！」

マジカルフォンをタップした細波華乃は、腕と脚を忍装束に覆われ、口元をマスクで覆われ、下駄から草履に履き変わった、魔法少女『リップル』サバイブに。

「変身！」

秋山蓮二は、拳を固めた右腕を左に勢いよく持っていく、その反動でカードデッキを装填し、青と金で装飾された、西洋の鎧のようなものを纏い、背中にマントを靡かせている仮面ライダー『ナイト』サバイブに。

「変身！」

マジカルフォンをタップした岸辺颯太は、両手首にガントレットが付けられ、胸元を初め、腰回りにも鎧が付けられ、脚が龍そのものと化した魔法少女『ラ・ピュセル』サバイブに。

「変身！」

マジカルフォンをタップした鳩田亜子は、2年前と変わらず、両眼の下に隈を付け、黒い『不思議の国のアリス』を彷彿とした魔法少女『ハードゴア・アリス』に。

「変身！」

手塚海森は、右手の親指、人差し指、中指を立ててから、カードデッキをバックルに装填し、仮面や弁髪が金色になり、頭部にはマンタの口ひれ、腕や膝には金色のエイの装飾品がある仮面ライダー『ライア』サバイブに。

「変身！」

マジカルフォンをタップした城戸つばめは、上腕と腹にアーマーが装着され、ブーツには膝当て、下半身はカボチャパンツ姿となり、首からお守り袋を提げてある魔法少女『トップスピード』サバイブに。
「変身！」

城戸正史は、右腕を左に突き出し、戻る反動でカードデッキを装填し、炎を現すかのような肩の鎧部分、仮面には龍の髭を模した触覚がある仮面ライダー『龍騎』サバイブに。

「変身！」

マジカルフォンをタップした姫河小雪は、強さを象徴する黒と、優しさを象徴する白を基調とした、彼女が最も影響を受けた魔法少女アニメのキャラクターを彷彿とさせる魔法少女『スノーホワイト』サバイブに。

「変身！」

そして、榊原大地は、右腕を後ろに引いてからカードデッキを装填し、白い毛並みの袴と、前の開いた裾、荒縄のように金色の太い腰帯。類に限取りが描かれた仮面ライダー『九尾』サバイブに。

彼らの周囲に、契約モンスターであるフォクスローダー、ドラグラザー、ダークレイダー、エクソダイバーが集まると、

「ツシヤア！」

という龍騎サバイブの掛け声と共に、一同は各々の契約モンスターの上に乗る、目的地目掛けて前進する。尚、アリスはラ・ピュセルサバイブ、ライアサバイブと共にエクソダイバーに搭乗する。

向かい風などものともせず、彼らは今宵も、人助けの為に、人類の脅威が待つ戦場へと進んでいく。

魔法少女。

仮面ライダー。

それは、子供達にとって、憧れの存在。

本気でなりたいと思う子達も、少なからずいたであろう。

時が経ち、社会のルールに揉まれていくうちに、彼らは気づいてしまっただろう。魔法少女など、仮面ライダーなど、虚構の存在であり、本当になれるものではない、と。

昔見たアニメや特撮の事を語り合う友達も、周りから消えてしまっただろう。魔法少女なんて、仮面ライダーなんて、それらを今でもいると信じるなんて幼稚だ、と嘲笑うに違いない。

それでも、私達は、夢見ている。

この世に、本当の意味で平和が訪れるその時まで、魔法少女は、仮面ライダーは、戦い続ける。

例え目に見えなくても、きつと、そばにいてくれる。支えてくれる。そう、願うばかりである。

く以上が、N市という架空の街で起こった事件の結末であり、『魔法少女』、『仮面ライダー』と呼ばれた人間達の、戦いの軌跡であるく

くこの戦いに、正義など、ないく
くそこにあるのは、純粹な、『生きる』という願いだけであるく

くその是非を問える者は、果たして……く

f
M i l l e r R i d e r
魔法少女&仮面ライダー育成計画
E p i s o d e
o

）
完
（